

六合雜誌

タゴールの印度度號

六甲山麓より都大路へ……………鼎浦漁史

- | | | | | | | | | | | |
|------------------------|----------------------|---------------------------|--------------------------|------------------------|-----------------------|--------------------------|------------------------|---------------------------|------------------------|------------------------|
| □ タゴールと印度文化……………内ヶ崎作三郎 | □ タゴール哲學の斷片……………ゆふしほ | □ タゴールは果して偉大なりや……………武田豊四郎 | □ タゴールの詩と印度の自然……………吉田絃二郎 | □ タゴールの「新月」より……………伊藤惠子 | □ タゴール先生と自分……………佐野甚之助 | □ 形而上的要求とウパニシャド……………野村隈畔 | □ 詩人コビールとタゴール……………三浦關造 | □ タゴールの「個人と宇宙觀」……………R・G・Y | □ 藝術家としてのタゴール……………磯部泰治 | □ 近代印度の宗教改革者……………相原一郎介 |
|------------------------|----------------------|---------------------------|--------------------------|------------------------|-----------------------|--------------------------|------------------------|---------------------------|------------------------|------------------------|

教訓自讀……………新井奥濠

THE RIKUGO-ZASSHI.

No. 412. May. 1915.

CONTENTS.

Dr. Rabindranath Tagore and the Indian's Civilization.....	Rev. Prof. S. Uchigasaki.	2
Fragments of Dr. Tagore's Philosophy.....	R. G. Y.	10
Is Dr. Tagore a Great Thinker.....	Prof. T. Takeda.	17
Dr. Tagore and the Nature of India.....	G. Yoshida.	21
The Crescent Moon.	Miss K. Itō.	32
My Connection with Dr. Tagore.	J. Sano.	34
Metaphysical Yearning and Upanishad.....	W. Nomura.	41
Kabir and Dr. Tagore.	S. Miura.	48
Dr. Tagore as an Artist.....	T. Isobe.	55
The Movement of Brahma Samaj in India.....	I. Aihara.	62
Dr. Tagore's View on Individuals and the Universe.....	G. Yoshida.	71

Some Passages of the Gospel of John (<i>A New Translation</i>).....	O. Arai.	84
From Kyōto.....	Shūrō.	92

A Turning-Point in My Life.	Teiho.	97
----------------------------------	--------	----

Topics of To-day.....		
Unity Hall Reports.....		
Books of the Month.		

Editor Rev. Prof. S. Uchigasaki, *Sub-editor* G. Yoshida.

Published Monthly by the
TŌITSU KRISTOKYŌ KŪDŪKWAI,
2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

(此廣告を見ても御込の方には六合雑誌に依る御書添ふを乞ふ)

清楚淡白の

床しみある

ライオン歯磨！

高尚優美の

懷しみある

ライオン石鹼！

□近代印度の宗教改革者……………相原一郎介……………六二

□ タ
ゴ
ー
ルの「個人と宇宙観」……………絃
二
郎……………七一

□ 教訓自讀……………新井奧邃……………八四

□紫雲石より……………秋郎生…九二

六甲山麓より都大路へ……………鼎浦漁史……九七

時
評
欄

△老先覺の復活(甲島生)……△協同傳道に對する觀察(甲島生)……△立憲

政治の根本(S,T,U)……△婦人と政治(S,T,U)……△徳川家康を懷ふ

(甲島生) 一八

□ 惟一館たより……………□ 編輯室たより……………新刊批評……………一二五

六合雜誌第三十五年第五號目次

本欄

- タゴールと印度文化……………内ヶ崎作三郎……………二
- タゴール哲學の斷片……………ゆふしほ……………一〇
- タゴールは果して偉大なりや……………武田豐四郎……………一七
- タゴールの詩と印度の自然……………吉田絃二郎……………二一
- タゴールの「新月」より……………伊藤惠子……………三二
- タゴール先生と自分……………佐野甚之助……………三四
- 形而上的要求とUpanishad……………野村隈畔……………四一
- 詩人コビールとタゴール……………三浦關造……………四八
- 藝術家としてのタゴール……………磯部泰治……………五五

著者 ルーゴタ
譯者 三浦關造

森林哲學生の實現

四六判上製
全一冊
正價 金八十錢
郵税 八錢

● 歡迎日に加はり忽ち七版

本書は現代東洋第一の文豪として世界的名聲高きタゴールの名著で、タゴールは實に本書の爲めに世界的名譽の月桂冠たるノーベル賞金を贈られ、又歐米の識者をして『今後はタゴールの時代也』とまで驚嘆せしめたのである。これ實に東洋精神の美妙雄大なる詩的表現、西洋文明の根本的批判、東洋思想勝利の熱烈なる大文字で、苟も文學、倫理、宗教に心ある人、新生に憧がる、人の必ず熟讀せざるべからざる經典である

新刊

トルストイ著
三浦關造先生譯

人生

四六判上製全二冊
正價 金壹圓拾錢
郵税 十二錢

初版即日賣切 再版 亦盡き 本書は人類の大恩人たる杜翁が六十歳より八十歳に至る即ち彼れが最も權威ある時代の人生に關する諸論文の集成で、實に巨人が世界大の獅子吼である。

東京市本郷區
西片町十番地
玄

黃社

電話 谷下 一三九
番 番 九五
東京 七九

久かた町より

安井哲子著

■五月中旬發賣

□澁澤榮一男序 □文學士栗原基先生譯

クッリュギ・ーニドシ 著 士 博 題問米日

- 米國に於ける東洋問題
- 加洲に於ける日本人問題
- 米國文明の根本的特性
- 誤解、説明、並びに解釋
- フロリン附近の事實
- 問題解決に對する日本人の努力
- 日本人は同化し得るや
- 米國人は日本人を同化し得るや
- 加洲に於ける排日運動
- 認識されざる要件
- 黃禍並びに白禍
- 西洋及び東洋の幻想
- 眞の黃禍は何ぞ
- 新米國東洋政策論
- 日本の識者に對する提言

■附錄

「日米通商航海條約」拔萃
加州排外土地法

特並製製
五十七十
錢錢

郵稅各金八錢

全米識者に深甚なる影響を與へ、遂に國論を既倒に翻へせしもの、實に「日米問題」也。今や邦譯成る。我國の識者が此際、原著者の義俠心に感激し、之に由りて國家の前途に横はれる「問題」の「真相」を諒知せられんことを望む。

警 醒 社 書 店

東京 橋町 張

發 兌

振五 替五 東京 番

前大阪高等商業學校々長

福井彦次郎先生著 東京本郷一丁目九

日東堂

發兌 電話下谷四三六二
振替東京二二五八

(新刊)

我觀人生

價壹圓拾錢

中版三百五十頁總布美本 送料八錢

著者は教育界の豪傑として令名噴々たり其胸中鐵の如き信仰と、直言直行人に下らざるは當代の異彩也、硬骨一世に超れ、常に青年渴仰の中心となる談論風發人生の機微を穿ち、寸鐵殺人の概あり、本書は其卓論一百二十餘篇を蒐集したるもの、觀察犀利教訓あり、諷刺あり、上は國體の大事より下市井の些事に及び教育と人生の密接なる關係を論じ、處世修養の秘訣を説ける不朽の快著也、篇中到る處著者の面目躍如として讀者に迫る何人も來りて此偉人の言に聞け、

▼ 内容目次大要 ▼

- 似て非なるもの……………
- 深呼吸妙用の一……………
- 常識と烈の字……………
- 幸福は第二……………
- 人間の二大敵……………
- 世の中は芝居見物……………
- 大學卒業生と妊娠……………
- 好きこそ身の破滅なれ……………
- 小も大を兼ねる……………
- 醫者と汽車……………
- 物は取りやう……………
- 乃木大將の自盡……………
- 風呂屋哲學……………
- 親仁の三ヶ條……………
- 當世の親心……………
- 遠方の珍客心得方……………
- 若い教員の不心得……………
- 一等國相當の教育……………
- 人の一生の心得方(以上)……………

(此廣告を見を御申込の方は六合雑誌に依る旨書添を乞ふ)

中澤臨川氏著

▼特製美本

▼定價金六拾錢
郵送料金八錢

タゴールと生の實現

新刊
發賣

新しき東方主義の先驅者として印度森林より出現せる大哲タゴールの名は今や世界驚異の中心となりつ
つあり、東洋に生れて彼等を知らざるは實に我等の恥辱也。目下彼に關する著譯盛に出でて其の雄大美
妙の思想を傳ふる者頗る多しと雖も、其の譯者紹介者の或は無識或は無責任にして其の眞旨を誤るもの
多きは慨く可からずや。評壇の最高權威にしてタゴール學者の第一者たる臨川氏、今小社の囑を容れて
本書を著さる。本書出でてタゴール始めて其の正しき紹介を得たる也。『生の實現』は其の中心思想を表
白せるもの、本書別に其全譯的梗概を叙し、委に解説を附してタゴールの精髓を明かにす。

中澤臨川氏序

磯部泰治氏譯

タゴール

暗室の王

(附)

郵便局

●特製美本

■定價金六拾錢

■郵税金八錢

▼國民新聞曰く……近く來朝の報ある印度の哲人、詩人將た音樂家として名高いラビンドラナート・タ
ゴールの戯曲『暗室の王』『郵便局』の二篇を譯載したものである。『暗室の王』では、宇宙の生命と自己の
靈との扉の開かれん事を希ひつて、尙虚飾と傲慢とのためにそれを得ざるもの、悲哀と苦悶とが現はさ
れてある。『郵便局』は最近の作で、無邪氣なる少年の靈を借りて生を求むるものが出来る。西洋でも東洋
藝術の形式をとりたるこの二篇によつて十分にタゴールの思想を窺ひ知ることが出来る。西洋でも東洋
でも『タゴールの時代』と稱する今日日本の讀書社會はこの譯書を歡迎するに後れざるべきを疑はぬ。

《前附二》

東京市牛込區 新潮社 電話番町一七二番 三番

(ふ乞を添書御旨る依に「誌雜合六」は方の込申御て見を告廣此)

大 合 義 書

(編四第) 野

春秋の哲人

新刊發賣

入トツケツホ
 頁五十二百
 錢錢價稅定郵

知識と道徳と孰れが尊とき、道徳の尊ときは言ふまでもない。理性と人格と孰れが重き、人格の重きは言ふまでもない。知識あつて道徳なければ自我は餒え、理性のみあつて人格なければ自我はその生くる所以を知らない。人格は自我の形而上的な要求の力にして道徳はこの要求のダイナミックな發露である。知識は益々枝葉に入ると道徳はその根柢を失ひ、理性のナイミツクに發達して人格はその權威を得ざる現代は、決して健全な時代でないとは火を睹るよりも昭らかに人格はその權威を得ざる現代論」を主張するありと雖も、要するにこれ何等の根柢なき皮相なる空論に過ぎない『春秋の哲人』は眞摯なる著者がその狂熱的要求によつて東洋の大偉人孔子を拉し來り、その信念人格及び思想を忌憚なく解剖して、そこに深遠なス渾一的生命を把握せるもの、蓋し時代の缺陷に對する一救済を以て任ずるものである。

第一高等學校教授 三並良著

(定價十錢郵稅二錢)

（再版印刷中）

眞人基督

本美入トツケツポ
像の督基るせ化代現
頁 十 三 百

電 話 芝
五 八 五

六合雜誌社

東三京田
芝國
區町

發行所

(此廣告を見を御申込の方は六合雜誌に依る旨御書添を乞ふ)

◎早稻田大學
教授文學士 內ヶ崎作三郎先生著

●紙數三百餘頁 定價金七十錢 送料六錢

(附四)

再 刊

近代文藝之北見景

【萬朝報評】

アリアン民族の起源と移動とに筆を起し、希臘文明、希伯來思潮を略述したる後、文藝復興、近代思想の勃興及び内容を明かにして、さて佛、露、北歐、伊、獨、英等の順序にて、その有する文藝を代表的作家を擧げて叙述す、文明的背景の闡明に力めたるは、やがて此書の標題を生み出せる所以、簡單なれども、要所を捉へ得たり、卷末三分の一を附録「文學と宗教」とす。

【時事新報評】

民族的の起源より説起せるも其中堅は矢張り國別に叙述せられたる各國文豪の思想に在る可く、著者は之を描くにかの書名の羅列に止るが如き閑文學を排し、直ちに其中心思想を掴むに努めたるは、純文學界にも尙稀に見るの好著と謂ふ可し。

【東京日日新聞評】

アリアン民族の起源より起筆し、希臘文明、希伯來思潮等を略述し、文明史的背景の下に近代文藝の一般を國別に從つて記述し、且つ批判せり、殊に著者が歐洲各國民の國民性を理解せしめんが爲め極めて人種的背景に觸れたるは其用意のある所を見るべし、此種の著書尠からざるも、本書は之等の特徴を有する點に於て一頭地を抜きたるものと云ふべし。

【國民新聞評】

思想及び信仰の動搖は日本と外國とに論無く、最近に於て決して看過すべからざる大問題である、殊に歐洲近代文藝の感化と影響とをしたゝかに蒙つて居る、我が日本の現狀には何人と雖も、留意研究を怠つてはならないものがある、本書は即ち我が教育界の人々の爲に、この歐洲近代文學の背景即ち歐洲近代文藝を文明史的に攷察して、之が理解を容易ならしめ、思想界の健全なる發達に資せしむべく編まれたる好書である。

教育講座第五編

附録と長篇と
ゴタルー論
一篇を
一編を
！收

●發行所

東京市小石川區表町

電話番町三七六八
振替東京二八二八六

日本學術普及會

六 合 雜 誌

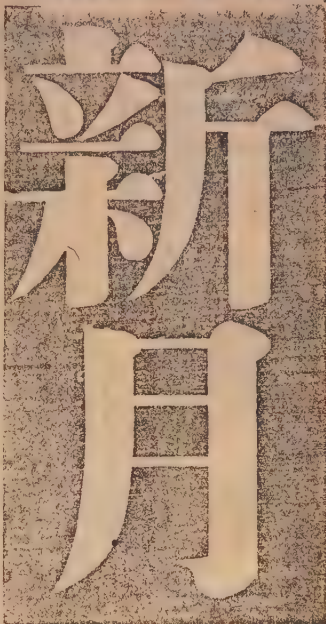
タゴルーと印度度號

△曩にベルグソンを研究し、オイケンを論じて、我が思想界に眞摯な紹介を努めようと試みた私たちは、こゝにまた印度の詩人であり、哲學者であるタゴールを我が思想界に紹介しようと思ふ。彼れの敬虔な、信從な心に充てる聖者的生活、彼れの愛と光りによるこびとに充てる欣求の思想は、我が現代の思想界に對して必ずや一味の新しい刺激と豊かな情操とを與へるものであると信ずる。

(此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る御書添を乞ふ)

「集詩大二のルーゴタ度星印新」

「集詩兒幼」



東方の寂しき曙に輝きそめたる光輝！

野灰富増 口野本 米庄憲 次平吉 郎氏 氏氏 序序裝譯

印度現代神祕
畫家插畫八葉

四六版二百頁
函入裝幀莊嚴

定價金壹圓

送費八錢

この一卷は母と嬰兒との片言交りの對話の如く、お伽噺の如く子守唄の如く牧歌の如く虚心に謳はれてしかもタゴールの光明的な神祕樂天主義の進化哲學の至上欲求則ち神人冥合の歸命が純綫情詩として最高潮に達したものである。譯者は多年印度の探求に没頭せる本邦隨一の「梵法金胎」の使徒であり、序を記せる野口、灰野兩氏は實に斯壇の權威である。裝幀甚だ莊嚴近時瀕出する粗笨なる譯書と同架を怖る。

ギンギヤリ

忽ち再版

夜と曙を象徴したる
裝幀、四六判三百頁
タゴール像二葉挿入
定價金九十錢
送費金八錢

類譯中最も自信ある敬虔苦心の翻譯！

電話振替
東京本局
一五一六
七八四

東雲堂書店

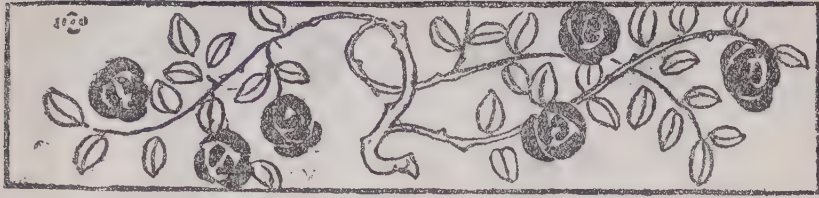
東京市本區
橋本九番
地

發行所

《前附六》

が先づ大體に於て行き詰りたる思想界に一道の生氣を注入したるはオイケンとベルグソンの賜にあらずや。オイケンとベルグソン、殊に後者が印度思想の或部分と共鳴するから、ベルグソンは日本に紹介する必要なしとの議論もあつたが、印度思想を直接に研究し得るは少數の篤學者に過ぎざる時、歐米を風靡したる餘力を以て我國に勢力を扶植しえたる二哲學者の貢獻は決して小なるものでない。然れども歐洲の大戦争は何等かの暗影を二哲人の上に投じた。吾等局外者より觀ればオイケンもベルグソンも餘りに熱し過ぎた。然りかゝる場合に於て熱するは當然の事であらう。熱せざることを不思議なのであらう。しかし吾人は是等の碩學よりは更に一層世界的なる意見と態度とを要求したのであつた。而して實際は彼等の態度は愛國的であると共に偏狹に失したことであつた。外に多くの理由もあつたらう、しかしかゝる理由が一つとなりてオイケンとベルグソンの研究も幾らか下火になつたのである。雜誌經營者、評論家の多くは折角擔ぎ上げたる神興を失して一時は當惑したに違ひない。

然れども有爲轉變の世の中に案ずるより産むは易く、新なる偶像、新なる神興がガンデス河畔のバンヤン樹の木蔭より現はれ出たのである。ラビントラナート・タゴールの名は僕等は久しい前より印度の友人を通じてその評判を耳にしたベンガルの大詩人である。一昨年春より夏にかけて彼は歐米巡遊の途に上つた。これを機會として彼の詩と劇とは英語の新装を擬して西歐の公衆の面前に現はれた。彼の深遠なる哲學を組織的に述べたる「生の實現」はロンドンの選ばれたる小數者の渴仰に満足を與へた。かくして家郷にありては遠くよりガンデスの河波に和し、ヒマラヤの白雪ときほひて、隨所に歌唱せられたる彼の名作は忽然として西歐士女の吟誦する所となつた。ベンガル文壇の老雄は一朝



タゴールと印度文化

内ヶ崎作三郎

一

我が思想界を觀て、悲觀すべき方面と樂觀すべき方面とがある。悲觀すべきはその淺薄皮想にして常に變轉するがためである。樂觀すべきは他の如何なる思想に對しても同情と理解を有し、常に之を攝取し消化せんとする努力が存するからである。過去十年の思想界の偶像を列擧すればニーチエ、トルストイ、イブセン、シヨウ、メーテルリンク等の外に最近最も勢力を振ひたるオイケン、ベルグソンを加へなければならぬ。是等の思想家文豪の影響は可もありしなるべく不可もありしなるべし。兎に角比較的少壯者の意氣を有する我が思想界が外來新思想の刺戟によりて何等かの養分を吸収し得たることは疑ふことは出來ぬ。

オイケンとベルグソンとは餘りに暴威を逞うしたる唯物的人生觀と科學的自
然主義に一回轉を與へたることは見逃すべからざることである。悲觀する人々
はその上滑りに紹介せられ論評せられたるを憾みとする。慥かに此點もある

く、自重して自家立脚地の底を掘りて其處に恒久の眞理を發見せよと警告する人も少くない。僕等はいかに眞面目の評家の言ふ所を尊敬する。しかしこれこそ眞の杞憂といふ者である。世には新思想を無暗に恐るゝ人々があるが、これは根底のない恐怖である。新思想によりて刺戟せらるゝは、いはば九牛の一毛に過ぎぬのである。日本國民の大多數はこれが爲に動かさることがない。習慣の威力は驚くべきものである。日本人の大多數は容易に動くものでない。保守の本城は進歩軍の重圍の中に難攻不落を傲語してゐるではないか。故に僕等は日本の思想界に清新の流れを注入せんがために、タゴール熱をも歓迎するのである。

タゴールの研究は西歐思想家の研究と多少趣きを異にする。歐洲思想家は歐洲の人種的文明史的背景を有する。彼等を正當に理解するは容易の事業でない。歐洲の氣候は概して寒冷、冬長くして夏短く、農産物に富まず。ことに古代に於ては一層甚しかつたからして生存競争の猛烈に行はれたることはその思想と文明をして著しく活動的ならしめた。歐洲に於ては生くるは戦ふことであつた。この事は今も然りである。富の蓄積は老年の保障として、又複雑なる社會組織に於ける止むをえざる事變に備ふるために必要である。故に人は孜孜として營々として勞働せねばならぬ。安息と靜思の時機は多くの歐米人には不可能となつたと言ふも過言でない。かくして歐米人は自己保存のために奮闘し、苦戦したのであつた。彼等の道德の長短の多くは皆此點より生ずるのである。歐米人の性格も遺傳・教育と必要によりてこの制束と影響とを受けて構成せられたのである。歐米に於ける最高の理想は奮闘的生活である。彼等の活くるは猛獸の活くるが如く、その死するや活動の最中に於てするを理想と

にして歐米思想界の偶像となつた。加ふるにその秋、ノーベル文藝賞金は彼の手に落ちた。月桂冠はいよいよ彼の頭上に落ちた。僕は以前より尊敬したりし文豪が當然の報酬と光譽とを受けたるを聞いて、わが喜びの如く喜ぶを禁じ得なかつた。昨春二月の「新日本」に於て僕は彼を日本の讀書階級に紹介した。同じ月の本誌に於て、僕は彼の二三の詩の翻譯を發表した。しかし讀書階級は靜まり返へりて何等の反響も評論も加へなかつた。嗚呼我笛吹けども文壇の諸家は踊らなかつた。恐くは破笛調を成さず、風雅の士の注意を惹くこと能はなかつた爲であらう。

二

此度殆んど前後十年印度に留學してこの哲學と宗教と文化とを研究したる木村龍寛氏突然歸朝して、續きてタゴール氏の渡來すべき吉報を齎したるがために、タゴール熱は突然勃興した、すさまじい勢を以て爆發したとでもいはんか。多分多くの文藝雜誌は期せずして本月號をタゴールの研究と推奨とに献ぐるであらう。既に「生の實現」の翻譯は公にせられ、ギタンチャリも翻譯せられ、その他多くの作物が譯せられ、又二三の評論も市場に現はれた。本誌記者吉田絃二郎君の「タゴールの哲學と文藝」の如き、最も推薦する價值ありと信ずる。僕が木村氏より聞く所によれば、タゴール氏は八月下旬迄に東京の人とならるゝだらうとの事である。

タゴール氏渡來の噂のみにてかゝる景氣が付いたるが爲め、識者中には大に杞憂を抱くあり、わが思想界に於ける流轉の動力の餘りに迅速にして急遽なるを嘆じ、徒らに新を迎へ、奇に走ることな

り識者階級は約二世紀前より世界のこの寶庫の扉を開かんとしてゐたのである。

北方ヒマラヤの連峰天を摩して皚々たる白雪を永遠の装ひとなす處、インダス、ガンジスの二大河海のごとく東西に流るゝ處、今より數千年前に於てメソポタミヤ、エヂプトと共に原始文明の搖籃の地であつた。ヒマラヤの土石雨に打たれ、雪に崩れ、落つ瀧つ瀨に運ばれて山麓の低地に堆積して五河二大江の沖積層となり、綠野青樹數千里に亘る。夏の炎熱は甚しいが、冬の季節は溫和にして仙郷の趣きがある。野に五穀よく熟し、果物は樹梢より垂る。燃料の要なく、衣類の欲求なく、人は自然の中に放浪して猶露命を繋ぐことを得。斯る處には生活の戦争は行はれなかつた。寒暑と戦はんがためには特別に堅牢なる家の必要がなかつた。人は單純なる生活をなし、悠々として大自然の懷に安居することが出來た。又此處に住める人々は決して今日存するが如き大都會といふ社會生活に入らなかつた。村落生活はその單位であつた。平和なる村落は彼等の天地であつた。歐洲と全反對の文化が斯る處に醸生せられたことは怪しむに足らない。活動的、戰鬪的、實利的ならざる受動的、瞑想的、省察的性質が發達したるは自然の數である。此天園に定住したるアリアン民族は大自然の恩寵のうちに悠々自適の生活を送つた。彼等は人生を果てしない休暇と心得た。彼等は財を蓄ふる必要はなかつた。日夜營々として勞働する必要を感じなかつた。無論かゝる人生觀は果して理想的なるや否やを知らない。しかしながら衣食住のためにのみ醒醒するものが人生の眞相であらうか。かゝる人生觀は餘りに空想的、夢幻的、理想郷的であらう。されども古代印度人の人生觀はかゝる自然の背景の前に實現せられたのであつた。

する。この驚嘆すべき努力苦戦は現代の歐米文明を生じたのである。家族も、社會も、國家もかくの如くにして生じた。彼の大都會も公道も、橋梁も、船舶も、鐵道も、電信電話も、電燈も繪畫も、彫刻も、音樂も、劇場も、自働車も、飛行機飛行船も皆かくの如くにして生じたのである。歐米人が現實を重んじ、現實を完全ならしめんがためには殆んど有ゆる手段が講ぜられたのである、これは偉大なる貢獻である。歐米以外に於て見るべからざる現象である。

然れども歐米の科學的、組織的、現實的文明は果して理想の文明なりや。これは眞面目なる問題である。歐洲大戦亂は果して何を語りつゝあるか。一方より考ふれば歐洲文明は終にその極端に到達したのであるまいか。人生は戦争なりと歌ふは宜し。人生を修羅場と變ずるに至りては酸鼻の極でないか。此處が歐米の識者が久しい以前より考察し、研究し來た所で、今日は特にこのために苦心慘憺なるものがあるに違ひないのである。歐洲文明は今や救済を要する地位にありと思ふ。さて如何なる思想がこの大任務を果すであらうか。

三

昔は天竺といへば一種の神秘を聯想せしめたものである。今は印度といへば多くの日本人は英國の屬領として三億の黒色人種と亞細亞の一大半島とを想起する。過去千數百年間わが國の文化を潤したる佛教が今より二千五百年前にその國に起りしことは多くの人之を知らざるはなし。されど印度は一度その國民的獨立を失ひし以來、その宗教と哲學とはその眞價を認識せられなかつたのである。固よ

濃厚なる東洋意識が流れてゐる。吾人は歐米宣教師や神學者の齎したる教説を鵜呑みにしてはならぬ。吾人にとりても古代印度思想、古代支那思想の研究は極めて必要である。

タゴール氏の研究は恐くは一般の日本人にこの興味を感じしむる一動機となるであらう。タゴール氏の渡來によりて日本人は新に古き印度の文化を想起することであらう。のみならずタゴール氏は印度のユニテリアンと呼ばれる、ブラマ・サマジの會員である。彼はラマホンライやケーシヤブ・チャンドラセン等の流を酌みて印度教を改革して基督教と接近せしめたる宗教運動の代表者である。近代印度の研究は極めて興が深かい。

印度には幾多の弊害がある。四姓制度のごとき最も甚しいものである。しかしながら外部的印度の外心靈的印度がある。これは無盡の寶庫である。吾人は將に來らんとする大詩人、文豪たるタゴール氏を迎ゆると共に印度の文化に感謝の意を表せんとするものである。

四

古代印度人は天地を觀察し、自我の省察のために人生の大部分を費した。實在と自我との關係の研究に於て吠陀ヴェーダと奧義書ウパニシャッドの教ゆる所は甚だ大である。マックスミューラー博士は古代印度人程自我の研究を試みたる人種なしと斷言したるは當然である。

吠陀によれば心靈は永遠性のものである、肉體は可滅性を有するに過ぎない。

「如何なる武器も人の自我を破ることが出來ぬ、如何なる火も之を燒くことは出來ぬ、如何なる水も之を濕すことは出來ぬ、如何なる風も之を乾かすことが出來ぬ。」

「其は破る能はず、燒く能はず、濕す能はず、乾かす能はず。そは不死、不變、不動にして、又その始めがない。」

されば自我の智識は至上智識である。

「あらゆる他の事に失望して、智者は自我の智識に到達せんと努力す」

古來の二大宗教民族は猶太人と印度人とである。猶太人の神は超越神であり、印度人のそれは内在神である。前者は一神教を後者は汎神教を創造した。眼を天外に放てば神の大を知り、眼を心内に向くれば自我の神秘を悟る。二者は兩極端にあれども必ず調和し得べきものである。

此處に印度思想の貢獻の餘地がある。歐洲の主我的文明を救済する使命がある。吾人は猶太教、基督教の中に流れ來れる宗教思想の精髓を日本國民に紹介するを任とする。されど吾人の血管には既に

托鉢の音は私たちに「その持てる凡べてを捨てよ、そして私は何にも持たぬ、私は何でもない」といふ意識を眼醒めしめよと迫る。

彼れ等は私たちの前に立つて、私たちに「與ふる生活のよろこび」を暗示する。『與ふることのうちに私たちの最眞實の歡喜と解放とがある。私たちはその施與の範圍につれて私たち自身を無限と結び付けてゐるのだ。』私たちが自身を捨てるだけ、私たちと無限との關係は擴がつて行き、強められて行く。私たちがその凡べてを捨てる時、私たちは始めて如くに無限そのものと一つになることができる。

□ 乙女は人形を捨てる

『人類の歴史の到るところに於いて、私たちは拋棄^{リナシエーション}の精神は人心の最も深い眞實であるといふことを見出す。』

私たちは絶えず所有と拋棄とを繰り返してゐる。そして言ふ『私はこれは要らぬ。なぜなら私はそれ以上であるからだ。』と

乙女は人形を大事に所有する。けれども彼の女が人形以上に成長する時、そして彼の女自身があらゆる點に於いて人形よりも偉大なものであることを知る時に彼の女は人形を捨てる。

私たちが或るものを所有する刹那、私たちは私たち自身がそれ以上のものであることを知るが故に、私たちの所有を捨てることを悲しまない。

タゴール哲學の斷片

□ 托鉢の響

道は野に捨てられて横はり、太陽は^陽熾の如く紅い道を焦く時托鉢の聲は榕樹の蔭に響く。水牛は柔和なる眼を睜りて迥かに眠りたる湖の涯を見わたす。水牛の搔き亂す波紋が小ひさな音を立て、びちや／＼と岸邊の水草と接吻する時托鉢の響は靜かに靜かに^{うたゝぬ}假睡の野を横切つて行く。六月の正午、^{まひる}街は眠り、人は白熱を避けて老木の蔭に眠つてゐる。

托鉢の僧は梵音もなく托鉢を響かしつゝ歩む。私たちは假睡から目覺めなければならぬ。托鉢の聲は私たちの心の扉を叩いてゐる。

私たちの心靈の扉を開け。

托鉢の聲は私たちに語る『人間の常住の幸福は或るものを得ることにあるのではない。たゞ彼れ自身を彼れ自身よりも偉大なものにさゝげることにある、彼れの個我の生命よりも偉大な理想に彼れ自身をさゝげることにある、神の理想に彼れ自身をさゝげることにある。』と

私たちは眼さめなければならぬ。何時まで私たちは眠つてゐるのだらう。

托鉢の音は響く、私たちに信徒の機會を與へんがために。

托鉢の音は凡べてを神にさゝぐる者の快き生活を私たちに暗示する。

□ 鳥は 大空を 翔る

鳥は、大空を翔る、そして彼れはその翅の一と打ちごとに彼れは大空が無限であることを経験する。彼れは翔けれども翔けれども終にその翅が無限の外に彼れを運ぶことのできないことを知る。鳥の歡喜はこゝにある。彼れは無限の世界に羽打つことを想ふる時に無限の創造を意識する、そこに彼れの生命の歡喜がある。

籠のなかでは空は限られてある、鳥の生活のみから言へば籠のなかの空だけでも充分であるだらう。けれどもそれはたゞ用を充たすといふに止る。しかし生活といふことは用を充たすといふことだけではまだ眞實の意義をなさない。生活は用以上でなければならぬ。

私たちの人生に歡喜があるといふのは、私たちの世界が無限であるからである、私たちの生命が無限であるからである。私たちの未來が無限であるからである、私たちの創造が無限であるからである。

私たちの心霊は無限のなかに翱翔しなければならぬ。そして私たちが絶對の終極に達し得ないところに生命創造の歡喜が湧き出でる。

人間は完全なものではない、彼れは常になるべきもの——*to be*——でなければならぬ。彼れが現在あるもの——*is*——では彼れは小ひさなものであるに過ぎない。もし私たちが現在所有してゐるものに止るならばそれは呪ふべき地獄である。もし私たちが現在あるがまゝのものであるな

『私たち自身よりも小ひさなもののために私たち自身を拘束することは悲しいことである。』黄金に囚へらるゝ者、世の名に囚へらるゝ者、權榮に囚へらるゝ者はみな彼の女の人形を抱いてゐる無智の乙女である。けれども無智な乙女すらも時來れば人形を捨てて、私たちは何時まで自分の人形を捨てないのだらう？。

クリストは言つた「たとへ全世界を得るとも爾の靈を失はゞ……」と。私たちもまた言はなければならぬ。『彼れ等——財産——は私の靈よりは尊いものであるか？』と。

所有は私たちの牢獄である。所有は無限を見るべき私たちの心靈の眼を盲にするものである。所有は神の聲を聽くべき私たちの耳を聾にするものである。

舊い殻を壊らなければ雛鳥は空氣と日光とに浴みすることができない。種子は地中に彼れ自身を捨てなければ新生を享樂することはできない。

私たちは拘束を壊らなければならぬ。牢獄を捨てなければならぬ。

私たちはその所有から這れることによりて私たちの心靈を實現することができる。私たちは絶えず所有する、同時に絶えず拋棄しなければならぬ。そこに心靈の自由と解放とがある。

私たちの心靈は絶えず清新より清新に流れ行く天國の美酒である。新しき酒を舊き革囊に盛つてはならぬ。舊き私たちの所有を拋棄せよ。そして永遠に若やかな心靈をして私たちの若やかな胸に躍らしめよ。

れて彼れの夢から眼さめた彼れは、彼れの眼前に悲しい牢獄の檻を見出す。さうに眼覺めんとした彼れのころが再びの牢獄に假睡^{ねむ}る。

□ 限られたる水甕は

私たちの存在の有限の極にありては私たちは、用の世界にその立ち場を持つてゐる。

『人は生きさんがために食物をあさり歩く、暖を得んがために衣をあさり歩く。』

用の世界にありては物を得ることが私たちの本能である。囚へられた人々は用の世界にありてはたゞ彼れの所有を押し擴げて行くことのみを考へて居る。

『けれども得ることの行爲は部分的である。それは人間の用にまで限られてゐる。』

私たちはたゞ私たちが要求するだけのものを所有することができるのであつて、それ以上を所有することはできない。

水甕はそれが空虚であるだけの水量のみを充たすことができる。しかしそれ以上を容れることはできない。

私たちの衣も食物も家屋もその必要を充たした刹那に、それ等は私たちにとりて充分なものとなる。私たちの要求は飽滿せられる。

けれども私たちの生活が靈の世界にその立ち場を索むる時、私たちの生活は終に飽滿の時を見出すことは出来ない。私たちの生活が有限を去つて無限に入る時、私たちの索むるものは富ではない、榮

らば、彼れの生活は牢獄の生活である。

私たちは絶えずあること——ある——から超越しなければならぬ。そして永遠のあるべきこと——あるべきこと——に向つて精進しなければならぬ。そこに彼れの天國があり、彼れの解脱がある。

私たちは絶えずあること——ある——を踏み臺としてあるべきこと——to be——を把へようとする。そしてそのあるべきことが、私たちの所有となつた刹那にそれはあることとなる。さうしてその刹那にそれは私たちの舊き死骸となる。私たちはあるを踏み臺として更にあるを把へなければならぬ。あるよりto beへ！かくして無限の抛棄と所有と解脱とが繰り返される。

人生は無限の所有である、人生は無限の抛棄である。

人生は如實に把握することのできる實在である。人生は如實に把握することのできぬ幻影である。神は見ることのできる實在である、同時に煙の如く滅へて行く幻影である。

私たちは絶えず永遠のあるにあてがれる。神は永遠のあるである。神は永遠の飢渴である。大空の鳥は翔る。彼れは刹那にあることの翹を羽打ちつゝあるべきことの世界へと翔る。永遠に限りなき野路を翔る、永久に涯しなき大空を翔る。彼れの生活はあるにあてがるゝものゝ生活である。

籠のなかの鳥は靜かに眠る、棲木に憩ひて。彼れは現在のあるに満足しつゝ、停滯しつゝ假睡うたたねつてゐる。彼れはあるの生活に生くる牢獄の囚人である。けれども彼れはその假睡の夢に大空を翔る昔を想ひ出すのであらう。時折り彼れは夢のうちにその翹を羽打つてはないか。しかも自らの羽打ちに驚かさ

タゴールは果して偉大なりや

武田 豊 四 郎

初初の白雪がヒマラヤ連峰から消え失せぬ限り、假令如何なる膚色の民族がその主權を占めても、やうとも、わが熱愛する印度は永遠に崇高幽大な大思想を生み出だす母胎である。

過去四千年間に幾多の世界的偉人を印度が生み出してゐるといふことは、印度思想史を一瞥したものの、等しく認める所である。然るに釋尊一人を除いてはその名を外人に知られてゐるものが殆んどないのは何故であらうか。

『衆流の畢に大海に朝するが如く、衆聖は名色ナーマルピーヤ（個性——小我）の差別相を脱離して無上の妙有に還没す』とムンダカムンダカ祕書ウパニシャッド（Mundaka-upanishad）にあるが如く、印度の聖者は大我に生きて小我の妄執を脱離してゐた。斯かる出世間的の氣分を有する印度の聖者から言へば、『名を竹帛に垂れる』といふことは笑ふべく憐れむべき兒戲であつた。印度の大思想家にしてその傳記の明白なるはなく、印度の大文學にしてその作者の不明ならざるなきは、よく印度の聖者の有せし超世間的な神聖な氣分を表明してゐる。

されば世界的偉人として推すに足るべき幾多の偉大なる印度聖者は、好んでその名を無價値なヒストリーから匿した。然かし赫奕たる光明は蔽はんとして蔽ふことが出來ぬ。四千前年の梨俱吠陀

譽ではない。私たちは自由と法悦とを覓ねる。

こゝに用の世界が減えて、眞の世界、美の世界が始まる。そこでは私たちの生活は得ることの生活からなることの生活に變る。然らば何になることの生活であるか？それは『ブラアマと一つになること』の生活である。

□ 水甕を捨てよ

私たちが大海から一つの水甕のなかに水を掬む時、私たちは水の重さを感じず、けれども私たちが甕を捨て、大海そのものゝなかに躍り込む時に、私たちの上には幾千倍の水量が湛へられ、ある。けれども私たちは少しも水の重みを感じない。

私たちは自分のちからを以て自我の水甕を運ぼうとしてゐる。そして私たちの苦痛や快樂は私たちにその重みを感じさせる。けれども私たちが個我を捨て、ブラアマ自身の大海のなかに入るときに私たちは何の苦痛をも悲哀をも知らぬ。

私たちは自己中心の水甕を捨てなければならぬ。

赤裸々の自分を提げてブラアマのなかに躍り込まなければならぬ。

—— 絃二郎 ——

英領印度の政治的中心地は近頃までカルカッタ府であつたから、此府を含むベンガル州が歐化主義の根據地でありアングロ、インヂアン (Anglo-Indian) 文明の發祥地であつたのは怪しむに足らぬ。

この印歐兩文明の調和を試みることに於て最も功勞のあつたのは、根本梵教會 (Adi Brâhma-Samâj) に屬するラームモーフン、ロイー (Râmmohun Roy) デーベンドラナート、ターゴール (Debendra-nâth Tagore) 及び急進的な印度梵教會 (Bhâratavarsâjya Brâhma-Sâj) に屬するケシヤブ、チャンドル、セン (Keshab Chander Sen) 等であつた。

わがラビンドラナート、ターゴール (Rabindra-nâth Tagore) は根本梵教會の守成者たるデ・エンドラナートの子であつて、父の思想信仰の忠實なる繼承者たるに過ぎない。

右に擧げた歐化主義の人々よりも更に偉大な人物は、母國主義を高唱して『渾なる吠陀^{エーダ}に歸れ』と叫んだダヤーナンダ、サラスヴチー師 (Dayânanda Sarasvatî) である。

小生は或點に於て梵教會の人々よりもこの保守的なサラスヴチー師を偉大なりと信じてゐる。

又梵教會の創立者センを感化したラーマクリシナ大師 (Râmakrishna) の如きは世界有數の宗教家として小生の常に景仰してゐる所である。

此外スヴーミ、ナーラーヤナ大師 (Svâmi Nârâyana) の如きも、確かに第十九世紀に於ける世界的宗教家である。

又ギドヤー、サーガル氏 (Isvarn Chandra Vidyâ-sâgar) ハレー、ダッタ氏 (Aklay Kumar Datta) チャツテルヂ氏 (Bankim Chandra Chatterji) ダット氏 (Ramesh Chandra Datt) 等の如き第十九世紀

(Rig-veda) の純朴な時代から濁惡な現代に至るまでの間にその名を残してゐる印度の聖者達は、恐らくヒストリーから通れ得なかつた程偉大であつたのに相違ない。三千五百有餘年の古にも、大我に冥合して『我は嘗て月 (Manu) なりて我は嘗て日 (Surya) なりて』と歌つた婆莫提婆仙 (Vāna-deva) があつた。又小生が十年以來信奉してゐる諸の秘書 (Upanishad) の成つた紀元前七世紀頃には、エビクテタスやマーカスオウレリアスを脚下に摺伏せしめ得る祀皮衣仙 (Yājñavalkya) の如き梵仙や閼那伽大王 (Janaka) の如き王仙もあつた。其後釋迦族の聖者 (Gautama) は佛教を開き、若提族の子 (Jñāta-putra) は耆那教 (Jainism) を唱へた。

その外婆羅門教六派哲學 (Shāḍḍāyana) の開祖達も此世に現はれて解脱 (Moksha) に到るべく種々なる道を衆生に示して呉れた。

紀元前二千年から紀元後一千年に至るまで印度は印度人の印度であつた。

此時期の終に印度のカントと評せられるわが隔世の師父商羯羅大師 (Śaṅkara-ācārya) が出現し給ふた。

それから程なく印度は回教徒の所有となつた。此時期にも四大毗紐弧 (Vaiṣṇavism) の開祖やカピール (Kabīr) ナーナク (Nānak) の如き大聖が現はれた。その後印度は歐洲人の印度となり、最後に英國人の印度となつた。

歐洲文明の波が印度半島の幄を襲ふて來た時に、印度人は長夜の睡から覺めた。

一方には歐化を主張する進歩革新主義が起り、他方には保守的な母國主義が起つた。

タゴールの詩と印度の自然

吉田 紘二郎

豊かな自然の恩寵のなかに响まれた思想が自然に對するアドレエションや驚異の氣分を深く漂はしてゐるといふことは自然の理である。彼れの思想は到底自然を離れて考ふことのできぬ思想である。野も町も眩くばかり強烈な色彩につつまれ、森には酔はしむるほどの濃厚な花の香が湛へられ野の孔雀が黄金の翅を羽叩いて行く印度の自然が、その國民をして自然に對する驚異、憧憬の念を燃えさせるのは將に然るべきことであらう。

彼れの哲學は自然を透してブラアマに詣るの哲學である。彼れの詩は自然につつまれた生活と戀の詩である。彼れの哲學と彼れの詩は悉く自然讚美者の歌である。

私たちは彼れの詩のなかに織り込まれてゐる印度の自然を想ふ時、そこに常樂の國があり、倦怠さ歡樂の戀が常緑の涼しい木蔭に永遠の神秘を囁いてゐることを知る。

彼れの詩を透して最も深く遣される印象は恒河畔の春の曉と盛夏の正午とその黄昏とである。

三月の微風！微風といふ言葉ほど熱帶地の彼れ等にとりてなづかしいものはあるまい。森にも草の間にも恒河の川面にも南の微風處女的な衣褶れの音を立つれば、彼れ等の胸は森の歡樂を想ふて波打

のベンガル詩人は何れも歴史に記すべき人々である。

大雪山と恒河とを有する印度半島は、右に述べた如く常恒不斷に大哲人と大詩人とを生んでゐる。然るに印度思想と深い交渉を有する日本人が過去に於て釋迦、現代に於てターゴールの二人しか知らないとは、眞に情ないことではないか。

釋尊以後その各を我國に知られた最初の人はターゴールである。然かし多士濟々たる印度思想史上に於ては敢てターゴールを珍とするに足らないのである。

ターゴールは大正二年に僅か八萬圓のノーベル賞金を貰つた爲に俄に聲譽を博した。

然かし、自己が單に古代の祕書ウパニシャッドの大思想を近代的曲調を以て讚嘆する一使徒に過ぎないことを十分に自覺し意識してゐる敬虔なターゴールに取つては、東西諸國の凡俗から新思想の發明者のように騒ぎまはられることを快しとせないであらう。

事實上彼に比すべき思想家や詩人は古も今も印度に無數に存する。世人がターゴールを釋尊以後の唯一の思想家なるが如く騒ぎ廻るのは哲學宗教の祖國たる大印度を侮蔑する物と言はねばならぬ。

ターゴールの名作と讚美さるゝ歌の供養 (Grihājali) 最高生活の現前 (Sādhana) などが、淺薄な歐洲文士の到り得ぬ幽玄な思想を含んでゐることは敢て疑はないけれども、これがブリハドアラニヤカ (Bṛihad-āraṇyaka) チャーンドーギヤ (Chândogya) 等の如き二千六百年前に成つた諸の祕書ウパニシャッドを一寸も超越してゐようとは思はれない。ターゴールに比すべき程の大詩人は歐洲に於て多く見ることが出來ぬ。然かし多士濟々の印度思想界では彼も一凡人に過ぎないと思ふ。

三月のそよ風は傾斜^{なぞへ}の緑に、青い並樹の上に春のつぶやさを倦怠さうに繰りかへしてゐる。喬木の裾を通る赭い里道には。

芒果の花が埃のうへに落ちてゐる。

ざわ／＼と漣立つ水は跳び上つて階段の上の壺を舐めずつてゐる。

三月の微風は彼れ等に忘れられぬ永遠の國を想はせる。

『夕暮の影が深まりつゝ家畜は彼れ等の羊欄に歸る』時

光りは寂しい牧場の上に灰色になつて、そして村人は岸邊に立つて渡船を待つてゐる。

恒河畔の久しき彼れの生活は彼れの詩をして極めて水郷の情趣に豊かなるものとせしめた。

渡守り、私を對ふ岸へ渡して呉れ！

彼れは朝に夕に渡船を呼ぶ旅人の聲を聴いたであらう。靄に隠れて行く旅人の寂しい跫音が、何時も彼れの詩の豊かなホスピタリチーの情調となつて泛んでゐる。

芒果^{まんごう}は里道のうへにはら／＼と花を散らし、蜜蜂は一つまた一つうなりつゝ翔んでゐる。

池の傍のシヴァ寺の門は開いてゐる禮拜者は彼れ等の頌歌を謳ふてゐる。

彼れは芒果の花影に立つて遙かに空想の翅を張る、恰かも巢を立つ小鳥のやうに。

彼れは芒果の花を浴びつゝ直感の哲理を語るのであらう。

芒果の花に黄昏るゝ熱帶國の三月の宵は、また多感な詩人をしてどんなにか心を動かさせることであらう。

つ。

三月満月の祭禮！夢を誘ふ花の香が息つまるやうな執拗な、しかし快い刺戟を人々の胸に運べば、人々は臙な春の夜の月影を踏むで森に入る。そこではまた熱帯地人の要求する強烈な刺戟を與ふる樂の音が奏でらるゝ。

南の門が開かれた。來い、私の春來い！

お前は私の胸の顫へるまゝに顫へるのだ！

來い、私の春來い！

舌足らずの木の葉のさゝやきのなかにはいつて來い、森の物憂げな吐息のなか！

お前の明けはだけた外袍で酔ひどれた春風を手荒く打つて呉れ！

來い、私の春來い！

躍り立つ彼れ等の胸の躍るまゝに彼れ等は野面を走つて謳ふであらう。

『若い旅人が朝の薔薇色の靄のなかの道を歩いて』來れば露は紅寶石の如く碎け、乳搾りの女は忙しげに川端の小舎に働いてゐる。

『女の環飾が隅の方で樂の音を響かして』ゐる。

狭いうねり道は涯もない芥子の野を横切る、そして涯もない芒果の森を。

路は村の寺の傍を通る、そして川の埠頭の市場の傍を。

四月の夜である。燭は私の室に燃えてゐる。

南の風がしとやかに吹いて來る騒々しい鸚鵡は籠のなかに眠つてゐる。

私の胸衣は孔雀の咽喉の色、そして私のマントは嫩草の緑の色。

凡べてのものが歡樂の旋律に浸された四月の夜、芳草は星の光りに薰りつゝ、露は微風にゆらめく。竹の梢は風に葉摺れて、唄に疲れたケールの小ひさな夢を輕打する。

凡べてのものがたと譯もなしに眠たげな四月の歡喜に酔ふてゐる。彼れはたと譯もなしに四月の夜をそゝろ歩きしつゝ歌をうたふ。私たちがタゴールの詩に、或ひはタゴールの哲學に價値を認め懷しみを感ずるものは、この譯もなしにそゝろ歩きする夜の彼れの純眞な聖者的な心持ちである。

川端の小舎はさしかゝつた樹に影られてゐた。

或る女は忙しさうに働いてゐた。そして彼の女の環飾が隅の方で樂の音を響かしてゐた。

天才の音樂と繪畫と詩歌とに充ちて居る。榕樹の蔭に唄ふケールの聲と、三月の薄暗に薰る芒果の花と、雨に煙れる恒河畔の渡船呼ぶ行人の聲と、國境に連なる雪のヒマラヤと、悉く天才の手に成れる大藝術である。彼れ等が理智、意識の世界を超越して直覺直感の經驗界を主張し、靈と靈との交渉にのみ眞實の人生を覓ねようとするのは彼れ等にとりて必然的な考へ方であらう。

六月の眞晝は森をも畑をも巷をも焦くが如き太陽の熱に潛伏せしむる。河沿ひの小村は正午の白熱の下に眠り、道路は捨てられて横はる。凡べての者は少かに喘いでゐる。けれどもそこにはまた印度特

私の悲哀は春の宵には私になづかしい。

私の苦痛は私の戀人の絃の上に波打ちしつゝ徐かに唄ふ。

幻像は私の慕はしい眼から生れて月の光りの空に翺んで行く。

森のしげみから襲ひ寄る物の香が私の夢のなかで彼れ等の道を失ふた。

言葉が私の耳に來てさゞやく、どこからだか私は知らない。

私の腕環に鈴が顫へる、そして時折り私の胸のときめきと一緒に鳴る。

戀によき三月の夜、爛れるばかりの青春の血がときめく時、處女的な彼れの「園丁」の詩が生れたであらう。

『三月の月の明るい夜である。ヘンナの快い香が空氣のなかに溶け込むでゐる』。笛は捨てられて地上に横はり、戀人は素馨の花冠を編むでゐる。若い男女は『唄のやう單純な戀』を語るであらう。

タゴールの詩を読むで私たちが齊しく感ずることは、彼れの詩が巧まれた詩でなくして、彼れの詩は飽くまでも自然的な詩であり、その刹那刹那優しみに充ちた女性的な情感のほとばしりであるといふことである。

彼れの劇に於いて私たちはやゝもすれば餘りに露はに彼れの思想が盛られてゐることを感ずることがあるが、私たちは彼れの詩に於いて、殊に自然につゞまれた弱々しい乙女心を偲ばせる彼れの詩に於いて最も懐しい共鳴を感ずる。

私は本を閉ぢた、そして外を見ようと窓を明けた。

私は大きな水牛を見た、泥にまみれた柔毛の水牛が平和な忍耐の眼をもつて流れの傍に立つてゐるのを。一人の若者が、膝まで水にはいつて、彼れを水浴みに呼んでゐた。

私はをかしいので微笑つた、そして私のこゝろには快い感じが流れた。

彼れの軽いヒューモアの底に流れてゐる萬有同感の心が窺はれる。

また私たちは彼れの詩中に、聖地より聖地へと經巡る多くの巡禮者を見出すであらう。若い旅人を見出すであらう。渡頭の水が温む時、岸邊の列樹が霞む時、若い旅人は低頭れつゝ戀人の扉の前を過ぎ行く、彼れは涼しい木蔭に花を撒きつゝ坐る。けれども彼れは窓に立ちよりて戀人に語ることをしてない。若い旅人と異郷の戀人とは語ることもせず、たゞ靜かに相思ひつゝ訣れ行く。たゞ淡き悲しみを遺しつゝ。

タゴールは私たちに向つてブラアマの大歡喜を傳へ、萬有の底を流るゝ永久の生命を語る。彼れの聖徒的な生活は恐らく絶えずブラアマの永生と光明とに動かされてゐるのであらう。けれども彼れの信従な生活の奥には、何うして運命に順從する弱者の心が潜んでゐないだらうか？

私は彼れを尊敬する彼れの思想を尊敬する。彼れの信従な聖徒的な生活を尊敬する。けれどもタゴールのために、更らに人類のために悲しき運命を悲しむ。恐らく斯やうな批判は彼れ自身と雖ども氣づかないでゐることであらう。確かに彼れ自身はブラアマの歡喜と光明とに充てる世界を把握してゐると考へてゐるであらう。けれども私は彼れの謙遜、信従な生活の根柢を形造つてゐる本然的な人間

有の自然の情趣がある。さら／＼と焦る野の涯から時折りは涼しい微風が蓮葉の薰りを運んで来る。

氣まぐれな疾風が遠い野の薰りを透して羽搏ちつゝ吹いて來た。

鳩は小蔭に小止みなく／＼と啼いてゐた、密蜂は遠い野の音づれをさ／＼やきつゝ私の室をさ迷ふた。

流れは音も立てず小蔭の岸の下を走つてゐた。

懶惰な白雲は動めきもしなかつた。

道路の埃は焦けてゐた。野は喘いでゐた。

これは恐らく初夏の印度の自然さながらのスケッチであらう。

彼れの詩にあらはれた印度の自然は彼の南歐の藝術に見る燃えるやうな情調に願いてはゐない。ざら／＼と赤道の太陽が反射する自然は、却つて彼れ等の燃えるやうな情調を蹂躪するのであらう。彼れ等の燃えに燃えんとする情調はやゝもすれば餘りに熾烈な自然の威壓に蹴落されるのであらう。彼れの詩は上へ上へと自由にその感情を奔らすことをしないで、何となしに一種のあきらめを持つてゐる。落ち着きを持つてゐる。彼れは反抗者の歌をうたはない。彼れの眼に映ずる自然は凡べて美しくきものである。彼れは小鳥に對しても、野の羊に對しても齊しく同感同鳴の心を抱いてゐる。

五月だつた。蒸暑い正午は限りもなく長いやうに思はれた。からからになつた大地は白熱のなかに渴えて喘いでゐた。

その時私は流れの傍から呼んでゐる聲を聞いた、『おいで、私の愛するもの！』

る。山といふ山、瀧といふ瀧は見えてゐる間に一面の白雲につままれる。同時にばら／＼と、篠突く雨が落ちる。しかしそれも束の間のことで、次の刹那にはきら／＼と太陽の光りが山と谿を銀のやうに照す。再び羊毛のやうな雲が青々とした谿底から湧き立つ、雨が降る、日が照る。梅雨の期に入つて雨は続けざまに二週間くらゐどしや降りに降ることがある。そんな時は山も道も悉く暗のうちに鎖されてたゞ神と自分一人のほかに何物をも見ることができないやうになる。かやうな場合である、人が神と彼れ自身とを密接に結び付けるのは。彼れ等はこの刹那に心靈の生活に酔ふのである。彼れ等は夜となく晝となく神をたゞへつゝ觀照の生活に入る。

ヒマラヤの秋は短い。雨の季が過ぎたかと思ふ間もなく冷たい風が身に泌みて感じられるやうになる。間もなく山の麓より巔まで一夜にして銀の白衣を纏ふ。暗い雲の隙間からは軽い羊毛のやうな雲が絶えず落ちて来る。

ヒマラヤに於ける自然の驚くべき變化は自ら彼れ等をして常に驚異の眼を睜らしむるに充分である。

更らに旅人がヒマラヤの谿から谿、村里から村里と經巡る時に、彼れ等は住民の生活に極めて原始的な簡單な純樸な氣風を見ることが出来る。

ヒマラヤ山上に於ける住民は旅人を見るや、群を作つて遠來の客をいたはる。彼等は道傍に立つてあかしげな身振りで舞踊を始める。そして彼れ等の家に旅人を歡待する。其の群集のなかには時として耳や鼻のない人間もゐる。彼れ等は野獸に耳や鼻を噛み切られたのである。この原始的な山の上の

の運命といふことを想へずには居られない。恐らく彼れ等印度人は彼れ等をつゝむ自然に對して斯やうな疑ひを抱く暇はあるまい。彼れ等はたゞ驚き、たゞ嘆美しつゝ神の偉大の前に額付く忍従の生活者である。

豎琴の絃はそが琴柱に拘束せらるゝことによりて樂の音を奏づる。人類の創造的生活はたゞブラマの大法に順従することによりてのみ可能である。私たちの生活が一步でも彼れの大法から離るゝ時に私たちは頽廢と死とを経験しなければならぬ。太陽はブラマを恐るゝが故に熱を與へ、花はブラマを恐るゝが故に木の實を結ぶと解釋する彼れ等の世界觀のうちには、自然の強烈な壓迫にけをされた傾きが潜んでゐると思ふ。かの自然の恩惠の少ない北歐人が惡魔的な自主自力の立ち場から人生を觀ようとするのに對して、天惠厚き熱帶地の人々が信從崇敬の立ち場から人生究意の救済を欣求する傾向は興味ある自然的なものであると思ふ私たちは二つの思想の傾向の何れにも一長一短の伴ふことを忘れてはならぬ。

恒河畔の自然の恩惠が既に我がタゴールをして純然たる自然の詩人たらしめ、處女的な信從の詩人たらしむるに充分であつた、更らに彼れがヒマラヤの秀嶺幽谷を經巡つた時に、彼れはいよいよブラマの偉大さと壯絶さを直感せずには居られなかつたであらう。私はこゝに彼れがその父と奔つたヒマラヤの自然の一端を加へて置かう。

ヒマラヤに於ける雨の季節が來る時、山といふ山からは夜となく晝となく神の瀧つ瀨が練絹のやうに懸る。雲は彼れ等の頭上をかすめて去り、豁の底からは眞綿のやうな雲の峯がもく／＼と上つて來

な赭暗い面紗を覆ふて行く。それと面した連山は少かに遣る夕陽の名残りに黄金の美しい色彩を以て山の面を埋めてゐる凡べての峯が黒ずむて行く時、そこには澄みちぎつた大空にきらめく星の影がある。

沈静の夜が明ける時に、そこには太古さながらの太陽がこの原始人のヒマラヤを照す。人々の心は輝かされ、淨められる。數百の流れは豁より豁へと新生の歌をうたひつゝ流れ行く。涼しい風は素馨の香を運んで静かな羽音を立てる。

ヒマラヤの生活はタゴールにその簡易な聖者の生活を教ふるに充分であつたらう。

彼れの哲學や彼れの詩が自然の哲學であり、自然の詩であり、崇敬驚異信従の生活を高調するものであることは蓋し偶然のことではあるまいと思ふ。

恒河畔の自然が征服せられざる限り、ヒマラヤの自然がその處女性を保つてゐる間、印度はブラマの自然を讚美するの詩人と哲學者とを斷たないであらう。

生活にも苦痛は絶えない。彼れ等は俗界の權謀術策に苦しむことのない代りに、自然と闘はなければならぬ。雪の頃には彼等は脛を雪に埋めて歩かなければならぬ、收穫の折には彼れ等は竹藪のなかに隠れて熊や野猪を防がなければならぬ。そこには一婦多夫の家庭がある。ヒマラヤ山には婦人の數が男子に比して極めて少ない。彼れ等の子女は、その父の名を擧げる際には數人の男の名を説明しなければならぬのである。また或る時にはヒマラヤの旅人は五里六里或ひは十里も人里から遠ざかつた山のなかに唯一つの家庭があることを發見する。そこにも無邪氣な子女はブラアマの恩恵の下に嬉々として戯れてゐる。

幾千年來斧鉞を入れない大森林のなかに永久の暗が湛へられて、そこには一鳥啼かず、一草だに花を開かぬ。たゞケルといふヒマラヤ樅だけが醜い木の實を結んでゐる。けれどもそれは鳥さへもつゝいばまぬ。しかも一と度開瀾な山腰に行き着いた時旅人はそこに餘りに豊かな色彩と芳香の漂ふてゐるのを發見するであらう。美しい、無數の草花が一面に小山をつゝむでゐる。乳白と、眞紅と黄金と紺青と、黄とあらゆる色彩の高山植物が野の面を埋めてゐる。神の恩恵はこれ等の汚れなき草花の上に永久の美を宿してゐる。またそこには野生の白薔薇があつて附近の荒野一面に咽び入るばかりの芳ばしき物の香をたゞよはしてゐる。この白薔薇はたゞ四ツの花瓣を持つた可憐な花である。この外にまた素馨の香が旅人の心に言ひ知れぬ快さを感じさせる。

ヒマラヤの麗しさはまたその明け暮れの變化にある。幾千の山は何物をも恐れざる巨人の如く大空に聳えてゐる。夕陽が影つて來る時一方の山は紺青よりやがて褐色にやがて魔王の顔を偲ばせるやう

私はうつとりとする様なバクラの森陰をさがしませう。其處ではすみの方で鳩がクゝゝ鳴いて居ます、さうして静かな星づく夜にはフェーリーの蹀飾がちりん／＼響いて居ります。

夕方になりましたから私は螢がピカ／＼光つて居る竹林の静かな私語さごの中をのぞきませうさうして會ふもの毎に

「誰か夢盗人の住家すみかを知らしておくれな」と尋ねませう。

誰が一體私の赤ちやんの眼から眠を盗んだのでせう。私はどうしても見つけ出してやりませう。

ほんたうに、あれをつかまへさへすれば私はあれ

にしつかりと教訓をあたへてやりますのに。

私は其女の巢に攻め込むでどこに盗むだ夢をかくして置くかさがしてやりませう。

私はそれをすつかり分捕つて家へ持ち歸りませう。私は其女の二枚の羽根をしつかりと縛つて河岸に置きませう、さうしてよしを持せて蘆や睡蓮の中で釣をさせて置きませう。

夕方市がすんで村の子供が母さんのお膝許ひざもとに座る時

夜の鳥達は

「さあ今度お前は誰の夢を盗むんだい」

と彼女の耳許で嘲りながらやかましく叫ぶでせう。

タゴールの「新月」より

伊藤 恵子

夢 盗 人

に立つて居ました。

誰が赤ちゃんの眼から眠を取つて行つたのでせう。私はどうしても見つけ出してやりませう。

その間に夢盗人が来て赤ちゃんの眼から眠を奪つて飛んで行つてしまひました。

母さんは水瓶を腰に着けてぢき近くの村へ水を汲みに行きました。

母さんが歸つて來ましたら赤ちゃんは部屋中をはいまはつて居ました。

其れはもうお正午で子供達の遊び時間は過ぎて居ました。池のあひる達も静まつて居ました。

誰が赤ちゃんの眼から眠を盗むで行つたのでせう。私はどうしてもさがし出してやりませう。私は其女を見つけて鎖でつながなければなりません。

羊飼の少年は榕樹の木陰に横たはつて眠むつて居ました。

鶴は橡果樹の森に近い沼の中にちいとして眞面目

私はじやりや石のごろ／＼した處を小川がちよろ／＼流れて居るあの暗い窟をのぞいて見ませう。

或る一ヶ所に寄合つて、家を作して生活して居ります。タゴール家もその通りで、祖先ドワーカ、ナート、タゴールより血統を引いて居る一族の者は、カルカッタ市ジョラサンコ區のドワーカ、ナートタゴール小路六番地といふ古い町に、數個の大邸宅を構えて居ります。誠に古色蒼然たる宏壯な建物でありまして、印度人の寄越す手紙の表書には、その邸宅を指してタゴール城などといふ文字を使つてあつたのを見たことがあります。然かし印度は貧者多き國とは云へ、大富豪も亦少からざる所でありますから、カルカッタ市の土人町には、恰も宮殿の如き大建築はいくらもあるので、タゴール一族の邸宅などは小さい方です。

このジョラサンコ區に住んで居る、タゴール一族の者とは、ドワーカ、ナートの長子（デベンドラ）の子、即ち吾が詩人ロビ先生及びその兄弟と、それからドワーカ、ナートの次男であつた人（ガネンドラ）の孫、即ち畫家として有名なるアボネンドラ氏及びその兄弟とであります。いまその系圖を左に示して置きましょう。そうすると幾人もあるタゴール一族の有名な人達を、唯だ一人のタゴールの如く思つて居る様な誤謬が、氷解することと思ひます。

ドワーカ・ナート・タゴール

ガネンドラ

デサヤデンドラ、サシテハデンドラ、ロビデンドラ

ガネデンドラ

シヤムデンドラ、アギタデンドラ

ガネデンドラ

即ちロビ先生は、大聖デベンドラナートの第三子であります。その二兄ドウキゼンドラ氏及びサツテ

タゴール先生と自分

佐野 甚之助

私が今日全世界にその高名を歌はれて居る、印度の詩聖ロビンドラ、ナート、タゴール先生に招聘せられて、ベンガル州の片田舎に設立せる先生の私塾に、日本語と柔道の教師として赴任したのは、今より一昔の明治三十八年でありました。一昨年、ロビ先生が名譽あるノーベル賞金を得て、世界の大神人たるを認められたるが爲めに、今迄ボンヤリして居つた人々も、俄に驚きの眼を張りて彼が詩歌を見、またその思想の根柢を成せる、哲學とか宗教とかを研究せんとするもの、續出するに至つた如く、丁度明治三十七八年の日露戦役は、日本を世界に紹介したので、印度の人士も、西歐の一大強國を撃退したる東洋の一小國をば、非常の尊敬と愛慕の念を以て迎ふるに至り、他年一日自分等も亡國の汚辱より脱して、自由の國民とならんとする、覺醒時代を現出するに至りました。ロビ先生も亦大の日本憧憬者であつて、その爲に私は印度に招かれ、一年許先生の私塾に起臥する間、日々その譬咳に接し、親しく薰陶を受けたることは、私の常に感激して居る所であります。先生の詩歌哲學等に就いては、諸大家が紹介して居りますから、私は唯だロビ先生に聘せられて見聞したる事どもを、思ひ浮べた儘に書くことにします。

印度は、家族主義の嚴然として維持せられて居る國でありますから、何々家の家族と云へば、大抵

修學し、降雨の時は寄宿舎の椽側を教室の代用に充つるといふ有様でした。即ち生徒をして常に自然に樂ましめ、自ら啓發する所ある様に薰陶して居るのです。先生自身の居室に行つて見てもその通りです。叩土の六疊敷位の部屋には、唯だ一枚の薄縁うすべり、一枚の座布團、一個の小さな机、及び數冊の書籍を置いてあるばかりです。而して四方開放して、右を見ても左を見ても、直に際限なき茫々たるベシガル平原を双眸の中に收むることが出来ます。又た「平和郷」は村落より數哩も距り居るを以て、俗塵を脱したる極て閑寂なる境で、修養を積み默想に耽るには最も恰適せる所であります。

私は日本出發當時は、このシャンテニケタンの塾は、一個の堂々たるコレツヂにして、學生數百名を有するならんと想像して居つたのですが、行つて見ると八九歳の幼年より、十四五歳の少年生徒僅に三十名許居るに過ぎませんでした。ロビ先生は之に満足しませんでした。當時は一方には資金の豊富ならざるあり、他方には官權の迫害ありて規模を擴張することは出来なかつたのです。然し三年前先生が渡英した時に、それ迄官吏にしてその子弟を「平和郷」の塾に、入門せしむることを禁じて居りました所のベシガル州政廳の禁令は撤廢さるゝに至り、次でノーベル受賞者として大名を博するに至つたのですから、段々印度人にしてその子弟を此處に送る者多く、近頃では百名位になつて居るそうです。

私は前に言ふた通り、日本語と柔道の教師として行つたのですが、日本語のクラスには、ロビ先生特に優秀なる生徒八名を選抜して呉れました。十二三歳の少年達でありましたが、彼等は夙くより英語を修習して居りましたから、私のブローケン、イングリッシュでも能く理解することが出来ました。

エンドラも亦頗る學識に富み、一は哲學に、他は法學に於て、令名のある方です。この人達より從弟の關係に在る、アボチンドラ氏は、今日カルカッタ美術學校の副校長で、印度一流の畫家として名高く、その長兄ガゴチンドラ氏は、種々の社會的事業に關係して居りますが、十年前に畫家勝田蕉琴氏を招聘して、その運筆揮毫する所を見學せる以來、好んで日本流の繪畫を書く人です。この美術家の兄弟の住宅の應接間に行くと、横山大觀畫伯の釋迦入滅の繪を始め、其他二三の日本畫家の畫が壁上に高く掲げてあります。

斯の如くタゴール一族の邸宅は、カルカッタに在りますけれども、然かし詩人ロビ先生は、大都會の喧噪を好まず、多くは父大聖デベンドラ、ナートの默想に耽けられて居つた、ベンガルの片田舎に往つて住んで居ります。これはカルカッタ市ハウラの停車場より、ルーブ線に由りて北進すること百哩許にして、ボルブルといふ一小驛がありますが、こゝに下車して猶ほ數哩北に向つて歩を運べば他の青々たるベンガル平原に似ず、赤土ばかりなる荒野の唯中に、數個の建物が存立して居るのを見ます、而してその周圍には他より移植したチムの樹やマンゴーの木が茂つて居ります。是れが即ちロビ先生の私塾の在る所で、シャンテニケタン（平和郷）といふのです。其處に在る數個の建物といふのは、梵教會の拜堂、訪問客の宿泊所、校舍寄宿舍及びロビ先生の寓居等であります。拜堂と宿泊所とは立派でありますが、先生の寓居や教師生徒の寄宿舍は、頗る質素なるもので、泥土にて壁を塗り、粗末なる瓦又は萱を以て屋根を作り、室内には何もないといふて好い位でありました。然かしこれが先生の生徒に對する教育法で、別に一々教場等は設けず、晴天の時は教師も生徒も共に樹蔭に座して

る國民となり得るが如く感じました。

ロビ先生は、大の日本憧憬者なることは、前に一言しましたが、日露戦争に於て我が軍強大なる露軍を破りて大捷を奏せるを聞き、湧き出づる歡喜を抑ゆる能はざりけん、一詩を作りて之を生徒に歌はしめ、數哩距れる村里を練り歩かしめました。その歌は生徒の一人が英譯にしたのを私は持つて居りますが、こんな様な意味の歌でした。

(一)

海の岸邊夜は明けて

血の如き雲の曙に

東の小鳥聲高く

名譽の凱歌を歌ふ

(二)

吾等は見たり幾多の勇者を

戦場に於て敵を破れる

されど勝利の御旗を手に持して

自若たる汝の如きもの吾等は知らず

(三)

一度びは吾が天竺は黄衣を着けて

私は初め羅馬字を以て日本語を教授せんとしましたが、ロビ先生の要求で、片假名を以て教めることにしました。先づイロハの發音を教へて見たるに、多くは「ツ」と「ス」を最初二三度は「チュ」と「シュ」の如く發音したけれども、これは直に匡正することが出来ました。これはベンガル人の癖でスクトルをシユクトル、サンスクリットをシヨンシユクリットと發音します、また英語で「a」を以て表はして居る印度語を、彼等の言ふのを聞けば「オ」と發音して居る様に思はれます。例へば詩人の名のラビンドラをロビンドロ、その従弟のアバネンドラをオボネンドロと云ふて居ります。玆に餘計な事ではありますがロビンドラ、ナート、タゴールのナートのトは英語でトを使つて居りますが「ス」ではなく「ト」の方です。ベンガル語には、私等には發音出来ませんが、「ト」の如く聞ゆる文字が四ツもあります。それはさて置き、ベルガル語はその語源を、世界の言語中最も難かしいサンスクリットに發するが故ベンガルの少年共には、日本語の音の如きは頗る簡單なるもので、且つその文法は兩語相似たるものがあるので、容易に習得することが出来、ロビ先生も大に喜んで居られました。

印度人はその身長は概して日本人よりも高く、印度北西部の民族の體格は頗る偉大でありますけれども、ベンガル人は或は漫に肥滿し、或は憔悴して棒の如く、筋肉の適度に發達せるものは多くありません。これは近親結婚、早婚又は氣候等の影響に因りて然るならんも、實はその民族安逸を好み、勇氣に乏しく、體育を無視せる爲めであらうと思ひます。諸學校では體操科などは設けてありません。此に於てか私を聘用したロビ先生の著眼凡ならず、徒に自然に親しみ孤獨内觀に住するのみを以て、能事終れりと爲すものにあらざることが分かります。訓練の如何に依つては、印度人として充分強健な

形而上的要求と Upanishad

野村 限 畔

一體哲學は何を研究するものであるか、これが現代の吾々にとつて一つの問題であると思ふ。尤も古今東西に於ける哲學史を繙けば、この問題は事實的に解決し得るかも知れぬ。けれども哲學は理論上たとへ普遍的な學問であつても、吾々の生活と直接の内面關係を有するものである以上、哲學史上の解決は積極的な意義を與へ得ないこと明かである。

然し『哲學は何を研究するか』といふことを前以て決定するは、或は矛盾であるかも知れぬ。何故といふに、哲學がその研究の終局對象を吾々に顯示するものでなくて、却つて吾々がその研究對象を哲學に與ふべきものであるから。だから吾々が普通に『哲學を研究する』と言つて居ることは何の意味もないのである。哲學を研究するのではなくて哲學に吾々が與へた研究對象を研究するのである。言ひ換へれば吾々自身を研究することである。何となれば哲學の研究對象は吾々の要求が生産したものであるから。故に『哲學は何を研究するか』といふ問題は、『吾々が如何なる對象を哲學に與へ得るか或は與へねばならぬか』といふ問題によつて解決せらるべきものだと思ふ。即ち哲學の對象は客觀的に假定すべきものでなくて、吾々の要求によつて初めて内發的に對象として現はれる。これ哲學は吾々と最も深い直接的關係を有する所以である。而してかゝる對象を哲學に與ふるものは、人類が一般

『法』^{ダルマ}の光を授けたれど

今は吾等は汝の門を叩きて

『業』^{カルマ}の教を學ばなん

併しロビ先生は、唯だ筆や口で日本を稱讃して居る計りではありません。その敬慕心を實際に現はして居ります。日本人にして先生の保護を受けて、シヤニテニケタンの塾で、梵語を研究して居つた人もありましたし、其他先生の庇護に依りて、危急の場合を免れた人も、一二に止まりません。このロビ先生が、その神々しき風采を我が國人の間に現はすことは、間も無いことと思ひます。私等は眞率なる尊敬を以て、この偉人を迎へなければなりません。

(タゴールはタゴレとかターゴルといふのは間違ひですが、ベンガル語の發音より見ればタゴール又はタゴリアも正確とは言へません。タクオルといふのが本當の音に近いでせう。)

所謂認識論は是等の問題を取扱ふものである。

宇宙の原理を現象を超越せる不變不動の境地に求めむとするものは、バルメニデースやプラトーンやバニシャッドなどの哲學を以て最も深遠幽玄なものとして、それによつて研究を開始するであらう。之れに反して變化生成の過程の中に求めむとするものは、ヘラクリトスやベルグソンの哲學を最も神祕な哲學とするであらう。一般的價值を求めむとするものはカント哲學をその研究の出發點とするであらう。或は自我を哲學の對象とするものは、ステルネルやニイチエの哲學を最も意義あるものとなすであらう。然し孰れを研究するにしても苟もそれが普遍的價值的妥當性を要求するものであるならば、皆哲學の問題たるを失はない。随つて孰れの哲學が最も深遠であるとかいふことは、その取扱つた對象の如何にあるのでなくて如何にその對象を取扱つたかといふことに存するは言ふまでもない。哲學はつまりその對象の普遍的妥當性又は一般的價值を證明するに在る。これが吾々の形而上的要求である。

宗教や哲學の根柢を経験的實在やその寫象たる吾々の内部的觀念、言ひ換へれば一切の、客觀的乃至主觀的經驗界を超越せる對絶實在を求めむとする思想に置いたドイツセンは、世界の最も幽玄偉大な哲學として希臘のプラトーン（及びバルメニデース）哲學、印度のウバニシャッド（ヴダ）哲學、及び近世に於ては獨逸のカント（及びシヨオペンハウエル）哲學をあげて居る。彼れは是等の三大哲學は何れも變化流轉の世界を以て單なる現象或は陰影又は假名に過ぎずとし、この現象界を通じて而もそれを超越しそれと全く性質を異にせる根本實在を把握せんと努力した點に於て一致して居ると言

に有する所の『形而上慾』(シヨオベンハウエルに従つて)即ち哲學的要求そのものである。

然らば吾々の形而上的要求は何物を哲學の研究對象とするか。これは各々の哲學者によつて異らざるを得ないと思ふ。即ち各々の形而上的要求の發進傾向の異なるによつて、その對象も自ら異なるのである。所謂哲學史は古來人類の『形而上慾』が、いかに多様な問題即ち哲學の研究對象を與へたかといふことを證明して居る。だから哲學の研究する對象は種々あるわけである。けれどもその對象は多様なるにも拘らず、一般的にそれは普遍的、永恒的、隨つて價值的のものであるといひ得ると思ふ。これは敢て論證を要するものでなく、吾々の形而上要求それ自身の性質に直接基因するものである。たゞかゝる『形而上慾』の對象言ひ換へれば哲學の普遍的價值的對象を如何なるものに、そして如何にして求むるかといふことによつて種々の問題が生起するのである。

ある學者は哲學の研究對象を宇宙の根本原理であると云ひ、ある學者は絶對的價值であるといひ、又あるものは眞の自我だと主張する。然し孰れでもそれは構はない。たゞ問題は如何にしてそれ等のものを認識し得るか、或はいかにしてそれ等のものゝ普遍的永恒的又は價值的であることを證明するか、これが哲學の問題である。宇宙の根本原理は現象界の事相を研究して得たる科學的結果を綜合することによつて達し得らるゝであらうか。絶對價值や眞の自我は吾々の意識現象を研究することによつて識り得るであらうか。かゝるやり方は所謂 *hysterion proteron* の誤謬に陥りはしまいか。若し達し得るとせば、現象界の普遍性や永恒性を如何にして立し得るか。若し亦現象界の研究を俟たずして認識するとせば、それは果していかなる方法に依るか。これ等の問題が哲學上重要なものとなつて來る。

は如何なる知識であるか、そはいかにして得らるゝものであるか。吾々の意識に直接這入つて來るものは外界の知識即ち經驗的知識である。然るに經驗界は眞の實在ではない。そは單なる幻想又は迷妄（即ち *māyā*）に過ぎない。故に經驗的知識は *vidyā* ではなくてそは *avidyā* 即ち無明である。そは解脱を與ふるものではない。却つて吾々を没落と輪廻とに誘導する。

然らば何者が眞の知識を與ふるか。そはマ―ヤーグレートセルフでなくて眞の大自然グレートセルフでなければならぬ。一切現象界の根柢たる宇宙の根本實在でなければならぬ。即ち *Brahman* のみ吾々に眞知識を與える。『一切世界は即ちブラマンである。』『一切世界はブラマンの中に存在する。』*Brahman* は世界を創造する永恒無限の神通力である。そは『一切の造物者、一切の支持者、一切の欲求者一切の破壊者』である。そは遍在者である。一切知一切能である。そは一切の物象を通じて吾々に示現する。そはあらゆる變化流轉を超越して永劫不變である。ブラマンを觀ずるものは眞知識と眞解脱とを得る。けれども斯かるブラマンは如何にして認識するか。世界の根柢としてのブラマンは吾々には直接認知されない。そは説明論證を要する不可知である。然らばそは何者によつて論證され認識さるか。是に於て世界の問題は一轉して吾々の内部に轉向する。

吾々の經驗的知識及び經驗的存在は眞の實在即ち自己ではない。これは迷妄の世界に屬する。けれども吾々に一切世界を認識し包擁する意識即ち靈がある。これが眞の自己即ち *Ātman* である。一切の知識はアートマンの中に存在し、アートマンの中に渾一融合する。 *vidyā* を得んと欲するものは *Ātman* 即ち吾々の深い内面性を把握せねばならぬ。 *Ātman* を觀ずるものは即ち *Brahman* を觀ずる。

つて居る。ドイッセンの言へる如く是等の三大哲學は實に世界に於ける最も偉大な哲學であることは言ふまでもない。亦大體に於てその傾向の一致して居ることも事實である。けれども偉大な哲學は必ずしも吾々に満足を與へない。現在の吾々にとつて是等の哲學の意義あるは、現象界を超越せる根本實在を探索した點にあらずして、その根本實在を如何に把捉し證悟したかといふ點にあるのである。この點から見ると是等の哲學は必ずしも偉大深遠なものでない。

カントやシヨオペンハウエルの哲學は暫く措き、印度哲學殊にウバニシャッド哲學について考へて見ても矢張り以上述べた點が、吾々に問題として残つて居ると思ふ。第一に吾々の思想を刺衝することは、當時に於ける認識問題が何うであつたかといふことである。例へばカントが Ding an sich を過境界においたけれども、それに對して認識の不可能を斷言したやうに、その所謂超現象的實在は吾々の狂熱なる『形而上慾』と遠く隔離して了つた。随つてカントが經濟界を現象とし物自身でないと言つたことも吾々には問題である。何故に吾々の經濟界は單なる現象であると斷言するか。かくの如くウバニシャッド哲學が肯定した宇宙の根本實在についても、いかにしてそれを認識したか如何にしてそれが現象界の經驗的實在と異なるを證明したか、これが先づ吾々の問はむとする所である。

ウバニシャッドの哲學殊に後期吠陀即ち吠檀達(Vedānta)哲學(吠陀の正統思想を繼承せし最も深遠なウバニシャッド)は種々の哲學問題を取扱つたけれども、その世界觀即ちブラーマンの思想は最も注意すべきものである。ウバニシャッドに依れば吾々に解脱を與ふるものは知識である。けれどもその知識は經驗的知識では駄目である。そは眞の知識即ち vidyā でなければならぬ。然らば vidyā と

の認識妥當性を論證せんとして居る。これが吾々の最初の問題であり、これによつて以上の諸問題が解決せらるゝことと思ふ。

△本號は「英國文化號」の豫定なりしを變更して「ダゴールと印度號」とせり。讀者諸君その意を諒とせられんことを望む。

ブラマンは唯吾々の眞自己アートマンによつてのみ認識され得る。ブラマンとアートマンは畢竟同一である。即ちアートマンは吾々の内部にあるが故に、不可知の存在たるブラマンを認識する唯一の可知的原理である。言ひ換へればアートマンは吾々のブラマンであるのだ。故に *Bṛhadāraṇyaka* には『誠にブラマンはこのアートマンである』といひ、『吾れは即ちブラマンである』と云ひ、*Chândogya* には『それは爾なり』といつて居る所以である。

この極めて簡単な梗概的叙述によつて見ても吠檀達の哲學は偉大なる觀念論であることが解る。けれどもこれだけでは單に詩的直觀に過ぎない。哲學は更に進んでブラマンとアートマンの關係は何うであるか、アートマンと經驗的實在との關係は如何、經驗的實在は何故に *māyā* であるか、等の問題を研究せねばならぬ。ウパニシャッドの單純な直截な詩的心理論は、矢張り嚴密な哲學的解答を與へてゐない。ウパニシャッドによれば絶對自由の宇宙的最高自己即ちブラマンと認識主觀たる個性的自己即ちアートマンとは *Einheit* であつたのが、多元的迷妄によつて分離したと説いてあるが、これ丈けでは不充分である。*Einheit* の状態はいかなる實在性を有し、何處に存在するか。若し吾々の『最高認識主觀』を超越したものであるとすれば、そはいかにして認識し得るか。若し認識主觀の中にあるとすれば、この認識主觀即ちアートマンは意識現象であるや否や、意識現象は如何にしてマヤーでなくてアートマンなることを要求し得るや。要するにウパニシャッド哲學は、凡て詩的直觀によつて是等の問題を解決して居る。けれども現代の哲學的要求は更に深化して居る。古代に於て殆んど無意識的であつた直觀アンシャワウング或は體驗エーレブニスが劈頭の問題として現はれ、直觀（所謂内面的直接經驗）の性質及びそ

かつた。

□彼が革命の宣言は左の一篇の詩に表はされて居る。

若し、此の世の主^{ぬし}遠くに居まさは、此の世を創造せしは誰にてあらむ？

神茲に居まざずと思ひつゝ、遠く遙かに彷徨^{さまよ}はゞ、汝は空しく彼に會ひ奉る能はずして涙を流さむ。

コピールは曰はむ、「神は其の下僕^{しもべ}の苦しまむ事を憂ひ、彼の全體^{ふしぐ}節々に至るまで満ち亘^{わた}りて遍在し給ふ」と。

あゝさらばコピールよ知れ、神は頭^{かうべ}より足に至るまで汝の衷^{うち}に居給ふを。

喜びて歌へ、嚴然として動かさるゝ事勿れ。

コピールは遠くに神を求むる歸依者を笑ふ。

魚若し川にありて渴けりと云ふが如き者あらば吾は笑はむ。斯^やる輩^{から}は叫び求むるとも遂に何ものをも得ず。

神若し寺に居まさは、此の世は誰のものならむ。

凡ての詩に、死は現はされず、生命^{いのち}こそ大なる事實なれ。

あゝ友よ！汝が生ける間に神を望め、汝が生ける間に神を知れ、汝が生ける神を悟れ、そは生命^{いのち}の中に救はあればなり。

生ける間に汝の縲^{るいづつこば}縛^ば壊たれずば、死にて何ぞ救を望まむや？

詩人コビールとタゴール

三 浦 關 造

□西曆一四四〇年の頃、^{もろは}兩刃の劍を振りかざす様な力のある詩を叫び出でた詩人が印度に産れた。彼は當時の怖ろしい宗教改革者であつて、人間の肺腑を貫き通さずむば止まざる氣慨と、人心を其の根底から震動せしむるやうな靈能とを以つて、偉大な單純率直な詩を賦した。そは即ちコビールである。

□コビールの兩親は、回教徒^{モハメット}で、奇態なる此の兩親から、怖ろしい力を受け嗣いだ。年少なる頃彼は、印度の革命家なる羅摩^{マナダ}南陀といふ巨漢の弟子となり、頗るその偉大な性格に感化された。持つて産れた回教徒的の熱血の中に婆羅門教徒の神火と拜火教の炎とが燃えついたのでから、如何に偉大な生命を彼が詩に吹き出したかは想像が出来る。しかも此の奇異なる詩人は、所謂詩人、文士でなく、さりとて僧侶でも無く、勿論地位も寶もある者では無く、平民の一番賤しいもので、機織を吾が一生の仕事とした。彼は最も賤しい人間の仕事を喜び、人間の立ち得る最も低いどん底に立つて、人生を觀じ、神を仰いで、初めて生活の意義と權威とを悟つた、それ程彼れは謙遜で率直な生活をしたのである。此の眞直な詩人が眼を開いて天地を見る時には、萬物悉く神の靈に顫動しつゝあるを覺えた。而して彼は更に、天地間の萬物に優^{まさ}り、吾が胸中に神火の燃ゆるを感じては、詩を賦^{つく}らずには居れない。

心の蓮の花^{はな}瓣^{はな}がくれに湧き出づる旨^{うま}き蜜^{みつ}を飲め。

汝の身體^{からだ}に光の浪を受けよ！あゝ美はしき哉、輝きは海の國にあり！

聞け！法螺貝^{はらがい}の響！鈴の音の鳴るを！

コビールは曰はむ、「あゝ兄よ弟よ！主は吾が身體てふ此の器^{うつわ}に居ませり！」と。

□幼少にして神秘の感に動かされ、無限の憧れを持つて居たタゴールは、學校の教師から教はるのが厭^{いと}で、父に連れられてヒマラヤ山の一方の頂邊^{ていへん}に行つて、自然といふ一大學校の教育を受けた位の人物であつたから、革命の焔に燃ゆる様な、コビールの詩が好になつたのはさもありぬべき事だ。

タゴールは少にして、コビールの詩を激愛し、此の奇異なる機織^{はたオリ}詩人から偉大な感化を受けたタゴールは自然の懷から産れ出で、更に父の人物から産れ出で、三度^{たび}、コビールの詩の中から産れて出て來た。けれ共タゴールは決して、コビールの信念や詩を模倣したのでは無い。彼は只偉大な感化を受けたばかりで、自家特得の天分を發露し、純然たる特創の詩を歌つた。コビールは一ふりの兩刃の劍を握つて嘯き、タゴールは合成された不死の音樂を彈奏した。コビールは只一つの樂器を搔きならしたばかりであるが、タゴールは一つのオーケストラを組織した。

□コビールは魔王の如くに怒喝したけれ共、謙遜なる機織に餘念なく、最も賤しき地に立つて生を喜んだ。

タゴールは「歌へ！」との神の命を自覺して、高貴尊嚴の念に胸も張り裂けむばかりに感激し、神を仰いで思はず喜悅の涙を流した。けれ共彼は又最も賤しき者、貧しさもの、心細さもの、堅き地を

汝の外にある神と一ならむ事を求むるは空しき夢に過ぎず。

神若し現に求め出されなば、未來に於ても求めらる。

神若し現に求められずば、吾等は死の市都に住まざるべからず。

人生の目的に宗教を奉獻せずして、宗教に身を捧ぐる僧侶は神の恵みを受けず。

僧侶は心を愛てふ色彩に染めずして衣を染む。

彼は梵を棄て、石を拜み、寺の中に在む。

彼は耳朵に穴を穿ち、彼は茫々たる髭を垂れ、編み合せたる房を持ち、山羊の如くに見ゆ。

彼は我慾を殺して荒野に出て行けど、宮人となる。

彼は頭を剃り、衣を染め、彼は經を讀み、一大雄辯家となる。

吾コビールは彼に云はむ、「汝は手も足も縛られて、死の門に近けるなり」と。

□コビールは更に歌つた。

○

蟲けらが動く時、其の足の踝環の微細なる響にも神の轟きは洩れ聞ゆなり。

○

見よ、夕影は厚く深く降り来る。

愛の闇は心と身體を包む。

西に向へる窓を開き、愛のみ空に迷ひ出でよ。

□見よ！茲に四つの大なる柱が建てられた。ドストエフスキとトルストイと、コビールとタゴールとは即ち其である。吾等は此の四人から學ばなければならぬ。吾等は此の四人に仰ぐ處が大なのである。

□最も美しいものは何處にあるか？天分の發揮せらるゝ處、箇性の展^び行く處——眞實の閃めき、宗教的意識の輝き出でて、實行に變現し行く處にある、最も賤しき地に落ちて、謙遜なる生活の新らたに行はるゝ處にある。ドストエフスキとトルストイは之を物語や劇に現はし、コビールとタゴールとは之を詩に賦した。

□コビールとタゴールとは、感覺的美を越えて、更に深く平凡なものの中に、飾り無きものの中に、靈を動かす眞美を見とめた。誇張の無き處、只其の儘の天真の發露した處に最も高い美を見とめた。彼等にとつて美ならざるものは眞理では無かつた。

□タゴールとコビールとは、吾が生命に其の美を實感して、其を藝術に再現しやうとした。これを再現して彼等は一層内在美を切實に感じた。彼等は宗教家であり、更に進んで宗教改革者であり、又美の創造者、革命家であつた。

□彼等にとつて美は ^{オブジェクト} object では無くて、^{アパレンス} appearance であつた。だから眞の美は表現を俟たなければならかつた。彼等は即ち其の表現を實行と藝術とに求めた。そして其の美の使命は宗教歡喜に非ずして何ものでも無かつた。宗教的歡喜を湧かせないものは、何ものであつても彼等には眞の美では無かつた。

耕せる農夫、石を割れる道普請師と共に苦しみ且つ、疲れし足を休ませ給へる神を見て、自らもそこに下り行かむとしたけれ共、下り行く事が出来ず、最も賤しく汚れたものゝ間に立たせ給ふ神の御足を伏し拜む吾が額が地に達し得なかつた事を嘆じた。二者共に、神の聲を聞いては、最大の權威者となり、又同時に最も謙遜なものとなつた。此の最も尊嚴な自覺と、最も低い謙遜の至情の中に詩人の生命は光を放つた。其の光が即ち彼等の詩であつたのだ。

□コビールとタゴールとは謙遜な至情を失つては生活する事が出来なかつた。彼等は謙遜の中に最も尊い美を直視した。

だからコビールは耳環をはめ、衣を染め、山羊の様な髭を下げ、雄辯を揮ひ、絹の房を垂らして、遂には宮人となる僧侶を罵倒し、自ら賤しい機械の職に埋もれ、汗と塵埃に汚るゝ生活を喜び、タゴールは一切の莊飾を惡んで、最も貧しき者、心細きもの、窮せる者、苦しき者の間に神を見、幼兒のほゝ笑と、まどろみの中に美しい神秘をみた。

□コビールは自ら低く下つて汗と塵埃に汚れた處に美しきものを得た。丁度ドストエフスキの面影が偲ばれる。

タゴールは賤しき處に立たせ給ふ神を見、そこに下り行かむとして全く下り行く能はざるを泣いた。丁度トルストイの面影が偲ばれる。露西亞に於て、文藝と實生活の上に最も尊い宗教を極處まで現はさむとしたのが、ドストエフスキとトルストイとであつた様に、印度の詩壇と實生活とに於て、最も尊い宗教を極處まで現はさむとしたのは、コビールとタゴールとである。

藝術家としてのタゴール

磯 部 泰 治

富有なる家庭に育てられたるものが必らずしも自由な生活を送るとは云へない、聖哲ラビンドラナース、タゴールは名譽あり位置あり財産ある何不自由なき印度の名門に生れ乍ら尙ほ彼は少年時代を虐げられた痛ましい生活に送つたと云ふことである。即ち彼は従僕のために一室に幽閉されて、冷めたい獨房の中に少年の幼ない心を懷きつゝ、窓硝子ステインドグラスの中から自然に憧がれて終日を暮したのである、十八才の時彼は倫敦に遊學した。けれども騷擾と塵芥とに埋つた都市生活は、南國の風薫る暖かい印度の榕樹の樹陰に憩ふて、綠濃きヒマラヤ山麓の美しい風景を眺めた彼には一時も耐へ忍ぶことが出来なかつた。故郷を懷ふ青年は倉皇旅装を整へて故國に歸つた。そして檻房の如き冷めたい學窓を棄て、彼は父と共にヒマラヤの

山野を思ふまゝ馳けずりまわつた。或時は獵銃を肩に坂道を登り、或時は犬を追ふて谷を下つた。疲るれば綠葉滴る榕樹の陰に憩ひ、渴けば清泉の水に渴を癒した。又或時は身體を養はんがために蒼空の下に思ふまゝの運動を行つた。従僕をはなれ、都會を見棄てた若き青年の心は、かくして一日と自然に接觸し、その自然の美と壯嚴と自由とを心行くまで味ふことが出来た。そして天性詩趣に富んでゐる彼の心は自然に對する憧憬の念、宇宙に對する敬畏の念、自己の心靈の法悦が歌となり詩となつて外に現はれたのであつた。昨年去年の春であつた、私が初めてラビンドラナースの詩を讀んだ時に、私は思はずその高雅な薫り高い單純な清い詩に驚歎の聲を放つた。私の心眼は恰度タゴールの宇宙に對して憧憬と驚異の眼を見張つて

□彼等の美觀たるや、ボードレールや、オスカーワイルドなどの美觀とは遙かに異つて居た。彼等は單に藝術上に最高の美を觀じ、タゴールとコビールとは法悦の中に最高美を見とめた。

『凡ての物は喜びより産れ出て、

凡ての物は喜びの中にはぐまれ、

凡ての物は喜びの中に動き、

凡ての物は喜びの中に流れ行く。』と、

大なる美感を持つて居た二詩人は斯う歌はざるを得なかつた。——(終)——

タゴールは冷めたい自然と人間とを引はなして考へるとは出来なかつた、彼は自然の奥底に横はつてゐる温かい生命の泉と、人間の心底より湧き出づる盡きせぬ愛の泉とを合致させて、其處に一つの眞如の月の如き明徹せる慈悲と愛とに満てる清泉を創造せなければ止まなかつた。彼は釋尊の孤性的な、靜寂なる淨界に至人的な玲瓏たる基督の聖愛を吹き込んだ。ある印度人は「彼は生活を否定しない吾々の中の最初の聖者でした」と云つた。眞、彼は釋尊の如き生命否定者ではない、又涅槃淨樂の謳歌者でもない。彼は生命の肯定者、愛の謳歌者である。彼は純靈、生命の合致調和をはからんがために先づ森林に入り、聖堂に參じたそして憧憬と瞑想と祈禱とに耽つた、けれ共それは一に彼の性狀が溫柔、謙遜ながために、他界的な、隱寂な生活を送るべく最もふさわしくあつたのでもあらうけれ共、彼は唯それのものゝために、それを行つたのではなかつた、ヒマラヤの樹蔭深き精舎に祈禱三昧に日を送り神靈を直感し、神靈と交通したのは、聽て彼が山を下つて萬人に

神の慈悲に生ける生命の實在を説かんがためであつた。彼は寂滅の鐘の音に生の波動を感じた。彼は内的生活の瞑想場裡に生の躍動を感じた。これらのものが彼の心を燃焼せしめて、彼は遂に森林に入りて生の實現を説いたのである。彼は内心に擴充せる靈を凝視した眼を更らに外界に向けて宇宙に潜在せる生命の躍動を眺めた。この點に於いて私は彼がわが綱島梁川に似通つてゐると思ふ。梁川は中宵枯坐、自己内心の生命と宇宙眞如の神とを觀照し、滾々として永遠に盡きざる愛の泉に浸潤して、奉仕、法悦の涙にくれた。而して涅槃淨樂の境に靈をはせ乍らも尙ほ刻々にさざみ行く生の悅樂に酔ふた。

タゴールの戯曲の方面に於て、彼が生命と靈とを取扱ひ、その背景に幽玄なる暗示と哲理とを含ませた點に於いては彼は著しくメーテルリンクに似通つてゐる、又その劇の神秘的な點に於て、その生命を中心とせる點に於て、その詩趣深き純聖華麗なる文章と音律とに於て、彼は宛然東洋のメーテルリンクである。彼の詩、彼の劇の一句一章

ゐるが如くに、タゴールその人と、その人の柔かい、高雅な謙讓なる心とに對して憧憬と驚歎の念に燃えた。イエーツの書いた「ギタンデヤリ」の序文の中にある印度人が「私達は色々な詩人を知つてゐますが、未だ彼に匹敵するほどの詩人には一人も逢つたことがありません。私達は今の時代をラビンドラナース時代と呼んでゐます。彼が印度に知られてゐる程に歐洲の詩人で歐洲の詩界に名を知られてゐる詩人は一人もないやうです」と云つたその言葉に共鳴を感じるほど、私の心も又彼の詩以外の詩に於て受けた程の感銘を感じたことはなかつた。彼は尙ほタゴールの事について「彼は詩に長けてゐると共に音樂にも秀でてゐます。而して彼の歌は印度の西方のベンガル語の話されてゐるブラーマの内地迄も歌はれてゐます。彼が處女作を出した十九歳の時に彼は已に有名でした。二十歳を過ぎた頃に書いた數種の劇は今日も尙ほカルカッタで上演されてゐます。私は彼の生命の完成の餘りに早いのに只驚歎するの外はありません。彼の幼時には彼は多く自然物を描いて

ゐました。思ふに彼は終日庭園に坐つてゐたのでしやう。而して二十五歳前後から三十五歳迄は彼の情緒の最も哀愁を感じた時代で、其の時代に彼は吾々の言葉で最も美しい戀愛詩を作りました——其後彼の藝術は次第に深く進んで、全く宗教的、哲學的になりました。人類のすべての願望が彼の詩の中に歌はれてゐます」と云つた。これを見るとタゴールの藝術的境涯は已に二十歳以前に初まつて四十歳前後には彼は早や藝術の思想より哲學的、宗教的思索には入つてゐたのである。即ち彼が眞に人生といふものを考へ、それについて煩悶し、焦慮し、苦行し、悟達したのは彼が四十歳以後の時である。彼の哲學、人生觀はその論文「生の實現」において窺ひ知ることが出来る。けれど其彼の哲學を知る前に系統の順序として吾々は先づ彼の藝術を知らなければならぬ。そして藝術家として彼を知るのには先づ彼が最も純なる心靈を以つて歌つた薰り高い三篇の詩集と、神祕と隱喻と、深玄なる哲理とを含んだ美しい三篇の戯曲とを知らなければならぬ。

た。初旅に痛む脚を撫でつゝ王妃は輕卒なる己が行動を幾度か悔ひつゝも尙ほ何の抵抗もなく王妃を「自由」に外に出した王の冷淡と無情とを恨んだ。王妃は「私はあなたなら去ることが出来ません。あなたは私の行くのを止めなさいないのである——何故あなたは私を引止めて、私の髪毛を掴み「お前は行つてはいけない」とおつしやつて下さいませんか？何故私を打つて下さいませんか？あゝ、その手で激しく私を打つて下さいませせ！」と叫んだ。王は「お前が何處へ行かうとそれはお前の自由だ」と云つた。内なるものゝ亡び行くものを外的な何者をも止めることは出来ない。自ら自由に滅亡の焰に急ぎつゝ「あなたは何故に自由に私をお出しなさるのですか」と云ふ王妃の言葉は私達一樣の人間の無智と愚かしき心とを教へはすまいか。私達が世のあらゆるものに眩惑されてゐる時に、私達の靈は何物をも見得ずにごん底に沈みつゝある。私達の心が高慢と虚飾と批評と嘲笑とを脱離して、内なる自己の眞靈を凝視する時に法悦の涙はあふれ、歡喜の心は躍り、

吾々の靈は一步／＼高上されつゝあるのである。今迄俗雲のために覆はれて見ることの出来なかつた眞如の月は今初めてわが眼の前に皎々と照り輝くのである。タゴールの「暗室の王」を貫く思想は正しく之である。墮落せんとする王妃の靈には「暗室の王」は見えなかつた。けれ共一度王妃が王冠を塵の街道に投げ棄て、悔悟と謙遜と信仰と奉仕との心をもつて立出る時に、彼女は初めて王を見ることが出来たのである。何不自由なき王宮を出で、路塵に彷徨ふこと幾月、時に榕樹の根方に身を投げかけ、時に河畔の砂上に脚を休むる王妃の悲惨なる境涯は歡樂にくれ、歡樂に明けし昔日に比べてどんなであつたらう。風の夕、雨の朝、王妃は如何にしても王を忘るゝことが出来ず、ある時は幻となつて夕暮近き榕樹の陰にヅヒナを引く樂人となつて現はれ、或時は夢となつて王妃の眠りを破つた。

タゴールはこれらの哀愁と焦慮と、周圍の情實とを如何に悲しい美くしい筆をもつて描いてゐるであらう。

には愛の生命が流れ、靈の微動が榕樹の樹葉のやうに慄へてゐる。彼の詩には「ギタンヂヤリ」新月「園丁」の三つがある。そのいづれを見るも單純と愛と純朴とに満ち／＼てゐる。そして一句／＼が精緻なる韻と翻譯し難き優雅な色彩と正確な音律とを有してゐる。イエーツは「ギタンヂヤリ」に對して「この抒情詩は其思想の中に久しい間私の夢見てゐた世界をわが眼のあたりに現はしてくれた。最高の努力と教養とに依つて生れた働きが恰かも平凡な原野に雜草や燈心草の生へてゐるやうに柔かに、なだらかに表現されてある」と云つてゐる。

タゴールは三十歳以前の最も藝術的情熱の熾んな時に於て戯曲「暗室の王」と「チトラ」とを著はした、そして最近に於て「郵便局」を出した。

これらの戯曲の中に於ても彼の哲學や人生觀を隨所に覗ふことが出来る。

タゴールは人間の滅亡^{めう}び行く靈の姿を靜觀してゐることは出来なかつた。醒めんとする靈の焦慮と憂愁とが印度の六月の雨のやうに溫情^{あたたか}かな潤ひ

のある筆で「暗室の王」の中に描かれてある。内なる生命を凝視することの出来ないじれつたさに王妃は遂に彼女自らの心の中にある「暗室の王」を見棄てた。「暗室の王」は彼女の良人であり、彼女それ自身であり、又彼女の靈そのものであつたのである。

わが愛人は永久にわが心のうちに住む
さればわれは何度にても彼を見るなり、
彼はわが眼の瞳のうちに住む

さればわれは何度にても彼を見るなり、
われは彼自らの聲を聞かんために遠くへ行きぬ、
されど、あゝ、それは空しかりき！

わが歸り來りし時、われは
わが自らの歌のうちに彼の聲を聞きぬ、
物乞ひの如く戸毎／＼に

彼を探し求むる汝はそも誰ぞや！
わが心に來れ、而してわが眼の涙のうちに彼の顔を見よ！

王妃は王の姿を見得ざるが爲めに焦慮し、腹立て遂に自暴自棄を起して自らを棄て、滿月に霞む春祭の宵に使女一人を伴れて何處ともなく放浪の旅に出でた。月は朧に霞み、風なきに散る花は王妃の袖にはら／＼とかゝつた。出でては來たものゝ王妃の心は王に對する執着と思慕の念に焼れ

イル少年の叔父と村長とは常にアマールを拘束し苦しみ、乳屋や行者や少年や少女はアマールの心を限りなく慰めた。彼等は虐げられつゝある新人の前に來て新福音を傳ふる新人の先驅者であつた。けれ共彼等は遂にアマールを外に引き出すことは出來なかつた。

中澤臨川氏は邦譯「暗室の王附郵便局」の序文の劈頭に「印度は今復興の時期に向つてゐる」と云つてゐる。然り、印度は今一大新人の爲めにあらゆる常套を拭除されつゝあるのである。そして寂滅涅槃を希ふ印度人の心の中には新らしき光

耀に満ち／＼た新福音が傳へられ、生命否定者の前には生命肯定の凱歌が奏されつゝあるのである。

最初の新人は常に最初の犠牲者である。

新人アマールは一つの神秘と暗示と謎とを残して窓外に煌く星をながめ乍ら王の來訪を待ちつゝ死ぬるともなく眠りについた。

窓外には北斗星が煌々と神秘の光りを漂はし、諸星は室内に流れ入りて蒼白きアマールの顔を照した。

— 四月十七日稿 —

王妃「スランガマ、何と云ふ救ひ、何と云ふ自由だらう！私をこの自由を持つて来てくれたのは私の敗北である。おゝ、私は何故あんな歌のやうな高慢な心を持つてゐたらう！それを動かして、それを柔かくするものは何もなかつた、私の暗くなつた心は、来るべきものは王でなくてはなくて、私こそ彼に逢ひに行くべき管のものであると云ふ明らかな眞理をどうしても見出すことが出来なかつた。私は昨晩夜通し只一人あの窓の前の塵の床の上に寝た——寂しい刻々ときざみ行く時間を泣き乍ら私は其所に横つてゐた！南風が夜通し吹荒んで、私の心を噛む苦痛のやうに叫び唸つた。そしてそれが喧がしい戸外の音に反響して闇の中から「話せ、妻よ」と夜鳥の鳴いてゐるのがはつきりと聞えた！……スランガマ、それは全く、暗夜の頼りない歎きだつたよ！

侍女「昨晚の重苦しい憂鬱な空氣は永久に宇宙にかゝつてゐるやうに見えました——おゝ、それは何と云ふ陰氣な薄暗い夜で御座いましたでしやう！

王妃「けれ共——私はその荒れ狂ふ騷擾の中からヴィナの柔かな節が聞えたやうに思ふが——お前にも聞えたかい！あんなに残酷な怖ろしいあの方が、あんなに快い柔かな笛をお吹きになるかい？世の人々は唯私の無禮と羞辱としか知らない——けれ共この私の心は淋しい哀れな夜を通して私を呼んでゐるその歌を聞くことが出来る、スランガマ、お前もそのヴィナを聞いたかい？、でなければそれは唯私の夢にすぎなかつたのだらうか？」

タゴールは「暗室の王」に於いて自らの心のうちに王そのものの姿を見やうとする心をあらわしたが、郵便局に於いては彼は更に内心の凝視を外

面に向けて擴大なる自然の憧憬者、讚美者となつてゐる。「郵便局」はタゴールが幼時その従僕に虐げられて一室に幽閉された痛ましい少年の生活を描いたものである。房中に幽閉された少年がその窓硝子を通して縁に滴る自然の美しくしき風景を眺めた時に彼はその山、その野、その牧場の中を小鳥のやうに、牝牛のやうに、どんなに馳りたく思つたらう。出でんとして出づることの出来ない少年の靈は外界に對して焦心する毎に日増に敏覺に、空想的に、神秘的になつて來た。彼は窓邊に凭つて限りない蒼空を仰ぎ乍ら、限りない瞑想に耽つた、彼の心は内より外を眺めた。彼は幽閉の悲しみに悶えつゝ無限に擴がる無限の天空に憧れた。彼は見えざるに見、聞えざるに聞いた。タゴールは行者や、乳屋の口を借りて少年アマールの前に自然を讚美せしめてゐる。

拘束の究竟は死でなくてはならない。

習慣と傳説と法則と歴史との縛で人間の聖を結びつけやうとする無智と愚かさとは新らしき人の前には永遠に蹂躪せられなければならない。アマ

に梵天とビシュヌ神とシバ神とは三身一體をなし、各神に配するに女神を以てするに至り、其甚しきものに至りては猥褻な頹廢的宗教となるに至つた。此等の宗義的墮落に對しては十五世紀來時々改革の出づるありて低級なる多神教と偶像崇拜者とを排斥した。十六世紀ベンガルに於てチャイタニヤの起した改革運動は、從來の單に消極的態度と異りて淨行道以外に信仰による易行道を説いたことは、吾人をして獨逸のルーテル又我國の親鸞の出現とを連想させる、此三大宗教家が時代を同うして世界の三方面に現はれ、何れも同じく信仰救済の易行道を高潮して當時の宗教界に一新機軸を出したのは偶然とはいふものゝ奇なる一致である。

印度に於ける近代の改革運動は殊に十九世紀に於て意義ある精神的傾向が現れたといつてよからふ、之は單に民俗的多神偶像教の排斥に止らず又古代に凡神的哲學の復興にも非ずして回々教や基督教と相呼應する、或は寧ろ其影響感化をうけたる自由主義一神教の積極的主張となり、その運動は單に神學的に止らずして社會の惡風、傳來宗教の陋習と戰ふといふ倫理的精神の旺盛なものである。ベンガルに於けるブラハモサマジとバンジャブ地方に於けるアルヤサマジの如きは就中其勢力強盛である。但後者は尙エダの宗教に復歸せんとするもので、近世西洋の科學思想をとり入れ然も基督教に對しては全然排他的である。故に自由主義の宗教運動としては先づブラハモ・サマジを擧げねばならぬ。

印度に於ける一神教會の嚆矢

ブラハモ・サマジ(梵天教會)といふ名は最もよく知られて居る名であるが、實は近代印度宗教改革

近代印度の宗教改革者

相原 一郎 介

印度人は宗教的民族

古來印度民族は宗教的民族である。猶太民族が熱烈なる一神教の信仰を有し、基督教が其坩堝の中から飛出した様に、エダの宗教とウバニシャドの思想を背景とする波羅門教は、同じく世界的宗教の一なる佛教を産出した。猶太民族が今日其國土を失つて全世界に放浪しつゝも、其一神的信仰において變らぬ如く、印度民族も亦其政治的獨立を失つた今日尙波羅門の末流なる印度教の信仰に熱沖して居る。此兩民族は正に世界に二大宗教を産出すべき使命を帯びて來たかの觀ある。特に印度人は完全なる生活を追求し神を見て之に合致せんとの念頗る強い、猶太民族は其近代の自由主義を除けば、概して祖先傳來の信仰を格守遵奉して行くのに對し、印度民族は常に新しい要求に馳られ自己の崇拜の對象たる神々を創造して行く、フォイルバハの所謂人間の要求は其神を作り出したといふ定言は彼等の信仰史に如何にも當掛まるの感あらしめる。印度教の神々の變遷發達は正に之を語る。固より婆羅門教は深遠にして又煩瑣なる哲學思想を有つて居る。而して一般民族は解脱を求めること急なるが故に、何時しか此高尚なる學者の哲學は民間信仰の神格を攝取して、之を崇拜の對象となしたのであるが、之と共に一元凡神的性質を帯びた其宗教哲學は、劣等なる多神教に低下せざるをえなかつた。殊

(此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る旨書添を乞ふ)

文學博士 坪内逍遙 譯

沙翁傑作集第七

新刊



四六版天金美本
寫真版木版密書
數個入全壹冊
金壹圓卅五錢
郵稅金八錢

大沙翁が最晩年の傑作にして其絶筆と信ぜられたる夢幻詩劇！是れ喜劇？仙話？樂劇？象徴劇？作者が自傳の概要？彼の四大悲劇などは全く基調を殊にせり。如是絶類の作を含味せずしては大沙翁の大沙翁たる所以を知るべからず。本篇には譯者特に讀者の爲に六十餘頁の長論文を添へて其解讀の枝折とせり。

【刊 既】

1	ハムレット	2	ロミオとジュリエット	3	オセロ	4	ロ
5	ジュリヤス、シーザー	6	エニスの商人				

發兌

東京牛込早稻田
振替 一一二三番

早稻田大學出版部

東京神田裏神保町
振替 五〇一番

富山房

(賣)全國
書肆

運動の結果として、其中途に起つた團體の名稱に過ぎない。其前身ともいふべきは一八三〇年カルクタに創立されたブラハマ協會である。此協會は宇宙の創造者支配者なる唯一神を拜する教會であつて、偶像や畫像を凡て其建物内から排斥した印度に於ける純一神教會の嚆矢である。

此教會の創立者は近代印度宗教界の明星と呼べるラム・モハン・ロイ (Ran Mohun Roy 一七七一—一八三三) である。彼は幼時家庭においてビシュヌ派の宗教々育を受け毎朝其經典を讀ませられたが其荒誕無稽を信ずる能はず密にウバニシヤドの思想を窺ふに至つた。十六歳の時已に偶像禮拜を攻撃するの文を草し、家を出て、ベナレス及び西藏に遊學した。廿歳の時父は彼を呼還し英語とサンスクリットの研究をさせた。此後彼はアラビヤ語とヘブル語を學びコーランや舊約を研究し得るに至つた。斯くして彼は期せずして世界の大宗教の比較研究學者となつた。然共此は單なる知識欲からでなく彼が飽迄公平にして正確な宗教的眞理を獲得せんとする要求からであつた。斯る教育をうけ修養を積んだ彼は到底時代の低級な信仰に満足することが出来ない、否却て其迷信と非倫理的非合理的教義を斷々乎として攻撃するの態度に出でた。此迷信と共に社會道德の基礎として存する階級制度がある。教育は婆羅門族のみの占有享受するもので、一般は衆愚の境を脱しない。殊に婦人と幼兒とは極端なる悲惨の地位におかれた。亡夫に對する婦人の殉死は常に其親戚から強制的に實行させられた。孩兒殺害は階級維持上當然の事と看做された。凡て此等の反人道的習慣に對しラム・モハン・ロイは痛切な反抗を試みた。彼は寡婦燒殺に關してゴダ法典に何等根據なきを主張し保守的僧侶の反對あつたにも係らず遂に英國政府の手に依りて之を禁止するの法を發せしめた。但彼自は未だ所屬階級を棄るとい

院長診察月、水、金、午前

林、峰間兩副長は目下當院に在勤

麴町區三番町三十番地(市ヶ谷見附内)

電、番六二番

東洋内科醫院

院長

醫學士

高

田

畊

安

電話ちがさき二番

南

湖

院

相州茅ヶ崎海濱(從停車場半里)

河野、高橋兩副長は目下當院に在勤
院長診察土曜日午後、入院診後應需

(此告を御申込の方は「六合雑誌」に依りて御書添を乞ふ)

勞働及産業

一年分壹圓卅錢
(すべて前金)

五月號

一冊金拾貳錢
半年七分

■人は何の爲に働くか……法學士鈴木文治

■英國に於ける工場法に就て……工學士勝田一

■最近の印象(マロー字評論)……慶大教授向軍治

■能率増進法(其二)……農學士伊藤一隆

□實用數學……大石開二

□法律問答 □自由文壇

□應用機械學……阿部治吉

□友愛會の動靜 □議員一覽

□海員閑話 □名家寫真

■勝ち氣(久々ぶりの講演)(其二)……農法學博士新渡戸稻造

■工業大意(其三)……東京府立職工學校校長秋保安治

■工業に於ける三要素の調和に就て……宮本茂美

■品性の向上を期せよ……司法大臣尾崎行雄

電話芝五五八五番
振替東京一五七

申込所 東京芝區 友愛會本部

(此廣告を見を御申込の方は六合雑誌に依る旨御書添ふ)

原僧運老師新著

禪の捷徑

總振假名
定價一圓
郵稅八錢

教外別傳と説き不立文字と説き而して實參 究を強ふ禪も亦難いかなしかも易ぞ知らむ語默動靜皆是れ禪喫茶喫飯も亦即ち是れ禪ならざることを果して然らば人誰か禪に眠り禪に覺め禪に生き禪に死せざるものぞ僧運老師八十年の禪生涯その行業直にこれ禪の眞諦今婆心默止し難くて敢てこの捷徑を示す寧ろ却つて大道坦坦として長安に通ずるものあらむ

鈴木大拙先生著(第九版)

禪の第一義
定價一圓
郵稅八錢

忽滑谷快天先生著(第三版)

達磨と陽明
定價一圓十錢
郵稅八錢

竹田默雷老師著(第三版)

禪の面目
定價一圓
郵稅八錢

大内青巒先生著(第十版)

禪の極致
定價六拾錢
郵稅八錢

釋宗演老師著(第二版)

拈華微笑
定價一圓
郵稅八錢

大内青巒先生著(第四版)

青巒禪話
定價一圓二十錢
郵稅八錢

新井石禪老師著(第三版)

修道禪話
定價一圓
郵稅八錢

菅原洞禪先生著(第四版)

禪林奇行
定價一圓
郵稅八錢

高島米峰先生著(第七版)

一休和尚傳
定價九拾錢
郵稅八錢

秋野孝道老師著

禪の骨髓
定價一圓
郵稅八錢

(ふ乞を添書御旨る依に誌雜合六は方の込申御て見を告廣此)

りせと主を驗受は書本

上田畊甫先生著

(新版發賣)

受驗英文和譯 本位

洋裝全壹冊

定價金九拾錢

郵税金八錢

天下幾萬の心捷を期して、而かも良指導なきを嘆ずるの士、幸に來つて本書に積年の渴を醫せよ。
嶄新の趣向、懇到の筆致、英語研究の王道は必ずや讀者の前に展かれむ。

『英文解釋の注意』
『英文詳解の模範』

本書は、中學上級生及び高等專門諸學校の入學志願者諸君のために編纂せられたるものにして、開卷先づを掲げて懇切せる如きは幾多類例の著書中、眞に一機軸を出せるものなり。而して隨處の例題、引用文はすべて内外英語教科書、英米大家の作物中より拔萃し蒐集せるものにして、決して便宜上一時速成の拙文には非ず信頼すべし。

また第二篇をば讀者學力の應用に充て、之が爲め特に選びたる練習題三百及び最近二年間諸學校入學試驗問題を載す註釋詳解また懇切を極む。
巻尾に附したる本書用英和双解の字引は近時學生が單語を輕視する弊あるに鑑み、一々適切簡明なるシノニム・デフイニシオンを與へ、以て學修者の語彙増殖に資せんとするもの單にこれのみを以てしても優に學者必携に値するものと信ず。

(中附四)

館文盛

大東區瓦町四丁目二番
電話 〇五二六

館文建

東京區神田區
電話 〇二七五

兌發

《中附七》

(ふ乞を添書御旨る依に誌雑合六は方の込申御て見を告廣此)

創刊以來六年

創

造

内容益々充實

毎月一回日藝文純刊
發雜誌

五月號要目

定郵 價稅 三金 十二錢

死に瀕せり

清浦明人

數夜を徹してやうやく完成した苦心の作品である。血と涙で塗りつぶされた瀕死の愛人は今や白いベッドの上に横つて、逝く春の空を暗い心で眺めてゐるのである。

賣春婦

内山賢爾

「一人の女を除く他世界の何人にも讀まれやうと思はない。自分はこの作品を完成した瞬間死するも尚ほ惜しむところない」と云ふ自信を持つて描かれたガルシンの傑作百五十餘枚の長篇である。譯者は兄の病床に待しつゝこの譯をやうやく完成した。

戀とパン

三並重三

骨をえぐるが如き深刻なストリンデルビの生活と嚴肅な生の歩みはこの作に透徹して刃のやうに鋭い。「戀とパン」に突き込まれたストリンデルビのメスの輝きは眼を眩する程強いことと思ふ。

最近の美術

岸田劉生 有島生馬 平福百穂 木村莊八
戸張孤雁 寺松國太郎 伊藤直臣 大野隆徳
中川一成 富本憲吉 齋藤與里 伊藤彌太

挿繪數葉

戀と眞實と

「自我の研究」を讀む

氣の毒な人々

病床雜記

生の現實

生命の意欲

前月の文壇其他

編輯の後其他

詩と歌

若山牧水

若山喜志子

和田山蘭

山下政一郎

磯ヶ谷紫紅

田邊若男

川上舟一

辰巳正直

眞崎白城

松本紅吉

中附六

小石川區音羽町三ノ三

創造社發行

賣捌 地全 書國 店各

ふことをしなかつた、彼が英國に旅行中死んだ時彼は二人の婆羅門僕を携ひ且其身體には此種族の證なる絲を卷きつけてあつた。のみならず當時の法律に依れば階級の變更は其財産を放棄することになる。そして彼は大きな財産を有つて居た。

兎に角彼は當時宗教界の先覺者であつた。唯一神を奉じて其精神的禮拜で以て、世界の諸宗教を統一せんと希望さへあつた。されば彼の他宗教に對する態度は頗る友情的にして、基督教の宣教師とも廣く交際し其事業のため便を計つたことと少くない。彼は基督に關し其著書中に此言をなして居る。

余が長きたゆまない宗教研究の結果として、自分は基督の教訓が自分の知れる他の何れの主義に優りて道德主義となすべく、又人間の遵守するに適して居るといふことを信ずるに至つた。

併し彼は何處までも一神論者で隨て三位一體説の如きには何等の同情をも有しなかつた。基督觀も其倫理的見地から之を採つたのである。

デベンドラナト・タゴール

一八三三年ラム・モハン・ロイが英國に客死した後ブラハマ協會は暫く其指導者を失つて、揖なき小舟の如く其本來の途を失はんとした。然に恰も好し其後約十年にして自由主義者なる一富豪が入會した是れ即ちデベンドラナト・タゴールにして、昨今印度詩人として名聲噴々たるラビンドラナト・タゴールの父である。彼の父はラム・モハン・ロイの親友又後援者であつた、財産家であつたが已に婆羅門族から自由な態度をとつて居た。彼は青年時代には放逸な生活をして居たが、一朝家庭の不幸に際會

(此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る旨書添ふ)

川面凡兒先生著 (第三版増刊成る)

日本民族之信仰

(好評に
加はる日)

●菊判三百頁 定價金一圓十錢 小包料金八錢

我祖神垂示の神人觀、人生觀、天命觀、靈魂觀、大神觀、八百萬神觀、全神的世界教約義、祖國的宇宙根本義を以て、世界列國の宗義學說と比較論評し大日本民族の信仰が、如何に東西古今の宗義學說に超絶卓出せるかを、窺はんと渴仰する、現代の信仰界並に思想界に、斯書を提供す。

●發賣所

東京日本橋上槇町
電話本局七四二番

玉成堂

●賣捌所

東京神田
振替東京二七〇

東京堂

教なる論文を出版して四ヶ條の根本的信仰を擧げて居る。

- 一、元始宇宙のありし以前一の最高實在者あり、其以外何物もあらざりき。彼は凡て此世界を創造せり。
- 二、彼は永遠無限獨存無形唯一無二凡を貫き一切を支配し一切を守護し全知全能不動完全法悦慧應にして並なきものなり
- 三、彼を禮拜するに依りて現世と來世の幸福は得らる
- 四、彼に對する愛と彼の好む事業を成すとは彼を拜するの道なり

タゴールは基督教の感化をうくること少くなかつた。基督教的天才は全然エダ的國民的瞑想的なものであつた。故に彼の祈禱は自然の美と光榮の中に深く瞑想した所から湧き出づる感情に溢れたものであつた。其演説には偉大と熱誠とがあつた。然し人間の罪惡的論理的救済となると彼の餘り觸れなかつた點である。故に未だ彼の如き指導者だけでは教會が社會と其害毒に對し攻撃的積極的態度に出づることが出来なかつた。

ケシュブ・チャンダ・セン

ペンガルに於ける此自由宗教運動をして更に大成の域に進ませたのは、タゴールに次で其指導者となつたケシュブ・チャンダ・センの努力である、彼は後年自分の十三歳の娘を他に嫁せしめたことで會員の排する處となり始の盛名を失ひ教會も分裂するに至らしめたけれど、これ迄彼の宗教的天才と雄辯とは此運動をして精神的意義からも百尺竿頭一步を進めたものとならしめた觀がある。

彼は一八三八年カルカッタの醫師の家に生れ、少時より英語を學び多くの宣教師と交つた。多藝多才で素人役者にもなり手品も能るといふ方で純潔聰慧で且大膽な性質を有つて居た。彼は又基督教の

して失望と悲哀の深淵に陥つた。其時彼は急に全心を照す神の愛を感じた、彼の悲と涙は拭い去られ光明の中に没入する様な心靈的實驗を得てから、神は彼の全靈を捉へた。彼は此後自ら眞知教會なるものを組織して自分の家で時々集會を開いて居た。

彼がブラハモ・サマジに入會した時教會は全く無氣力の状態にあつた。教壇は單に議論と講義許りで會員も入會するために何等の犠牲を拂ふことなく精神上の苦闘もなく各自の家では異つた信條を有する偶像信者に過ぎなかつた。乃で彼は教會の組織を改良し會長と資格ある牧師を定め、禮拜式を定め又信仰と實行の標準を作つた。入會の誓約として次の項目が定められた。

第一誓 神を愛すると神の好む行をなすに依て、創造者支持者破壊者救済者全智遍在多善且無形一あつて二なき神を拜すると。

第二誓 造られたるものを創造者として拜さざると

第三誓 疾病又は苦難の日の外毎日心を穩にして神の敬愛を以て拜すると

第四誓 正しき事を爲す様努むべきと

第五誓 不潔なる行爲を避くる様注意すると

第六誓 若し情慾のため罪を犯す時は其の贖を求め再犯せざる様注意すると

第七誓 毎年又家庭に慶事のある毎にブラハモサマジに献金すると

此契約をなして新組織の一神教會に入學したものは凡そ七百六十人あつた。

始めラム・モハン・ロイが改革運動にはウバニシヤドを探り又キリストの教訓をもとり入れた然るにタゴールは基督を排して一層エダの經典に權威を與へんとした。而も經典の自由研究は却て此等の經典を唯一の宗教的權威とされないことを教へた。及び彼等は印度宗教の特性ともいふべき内的實驗を重ねずる傾向に入つた。直觀瞑想人格的實驗は信仰理性と共に其新なる權威とされた。其後彼は一神

會の信條の中には、經典を以て自然と直觀の二となし、神性の人類に於ける發現として、モーゼ・モハメッド及キリストを印度教の改革者なるナナクやチャイタニヤ等と共に擧げて居る。然もブラフマ宗教を以て一切宗教の本質となし、之に依て他宗教を統べ又世界の人類を一族となさんと宣言して居る。彼の主張は宛も英米のユニテリアンの如くである。宜哉英國に遊んだ時彼は屢々英國ユニテリアンの教壇に立つた。彼が英國から歸つた後彼の勢力は次第に傾いた。そして遂に其娘の結婚問題が動機となつて教會は分裂し、新に宇宙教會サドルランドが起るに至つた。

彼が其後の行動は從來の態度に對照して彼の誠實を疑はせるものがあつた。或は新默示の宣言となり或は第三約書といひ、教會の儀式も基督教と印度の儀式を混合し、嘗て排斥した大偶像さへ再びとり入れる様になつた。是れは必しも先の一切を否定した消極的態度を通過して、再び肯定の積極的態度であると辯護も能ない、或は寧ろ若くして勇敢なりし宗教改革者の悲しき老後の運命を暴露したものであるまいか。

彼の事業の成敗を今茲に述べることは止めて、基督教の大牧師が彼についての興味ある評言を記さう。大牧師とは米國のフリッブス・ブルックスのことである。彼は一八八三年印度に旅行しカルカッタに滞在中チャンダセンと會見して、其所感を其弟に書き送つた。其中に斯んなことがある。

彼チャンダセンは基督と基督教の東洋主義に關し適切な言を吐いて、印度は歐米流の基督教となることが能ないといふた。彼の教會には新移入の特別なダンスがある。之れはメソヂストの天幕傳道の際の肉體的發作を東洋流に行つたものに過ぎないと説明して居た。彼は肉食禁酒であるが、其禁

神學と哲學を研究し、印度教の迷信に對し斷乎たる態度を執るに充分準備があつた。彼は始めタゴールの背後に隠れて居たが次第に其頭角を現して來た。タゴールはエダ經を去つて以來自然の歎美者となりて了つた。然るにケシブ・チャンダ・センは自然を棄て、全く直觀をとつた。彼は權威として經典をとらず自然に行かず、人間精神の深處に立つた。思索に先じ意見に依て動かざるは直觀である。直觀は自明である、自明の眞理は證明を要しないとは彼の主張する所であつた默示は主觀的にあるとして一切の經典的權威を排斥した彼は此等の思想に於て英米の自由基督教の思想家に負ふ所があり、殊にセオドル・バーカーは彼の好む所であつた。

彼は單に瞑想に耽溺して居る消極的宗教家でなかつた。彼は社會の惡風を痛撃し其改革運動に著手した。彼は凡そ改革者たるものは義務の觀念に立たねばならぬこと、又社會の改革を欲する者は先自ら其主義の實行者たるべきを、此等の改革の途には大苦痛を伴ふ故其決心牢固たるべきことをあげた。そして自ら大膽なる主義の實行者となり、爲に親戚の絶交をうける程であつた。彼の先輩タゴールは未だ斯る改革の熱誠に動されない、假令自分は之が實行を肯じても他の會員には自由にさせたいといふ考であつた。婦人を教會に入れ結婚制度の改革運動を始めた。然しタゴール一輩の保守主義者は彼の急進的足歩に伴はなかつた。斯て一八六五年教會は分裂しチャンダル・センは印度ブラフモ・サマジを組織し從來の教會はアヂサマジ即ちブラフマ本教會と稱し先の勢力を失ふに至つた。

ブラフモ・サマジは斯くして新生の活氣を以て其活動を始めた。彼の根本的信條は神を父とし人類を同胞として視ることであつた。此一神教會の理想は同じく世界論宗教の統一であつた。彼の定めた教

タゴールの「個人と宇宙觀」

絃 二 郎

（この一文はタゴールの「Siddhanta」のなかから抄譯して、傍ら自分の紹介をも少し入れて置いた。實は抄譯と名を附けるほどのものでもないかも知れぬ。が、兎も角タゴール哲學の根本思想の概念を與へるものであると思ふ。大體の荒筋を傳へることができれば幸である。）

彼れの調和的見解はこの二つの現象たる個人と宇宙とを論ずるに方りても、常に萬有如一の絶對境を忘れない。殊に東洋人的な汎神論的色彩がこの論文に於いて著しく窺はれる。

彼れはいふ

『古希臘の文明は市の城壁のなかに育なまぐされた。實際、あらゆる近代文明は煉瓦と漆喰の搖籃を持つてゐる』と。

彼れ等の文明を生むだこの城壁こそ何時までも深く吾々の心に喰ひ込むで「分割と支配」といふ觀念を生むだ。

國民と國民を分離し、智識と智識とを分離し、人と自然とを區別するの觀念を生むだ。一と度築いた障壁のなかに立てこもつて、障壁外のものと絶えず闘ふの習慣を生むだ。しかもタゴールに隨へば異分子、異種族征服の觀念は東洋人に少くして西人に多いのである。それは吾々の祖先の境遇と歴史とが自然に一は調和的國民となし。一は排他的の國民となしたのである。

欲生活は決して極端なものでなく健全な類である。

彼の基督觀は新約書のものでなく寧ろ彼の瞑想的直觀から出來たものらしい。彼は餘り讀書しない。彼は要するに神秘主義者で、彼の家の一室には數人の男が跣跣趺座して頻と瞑想に耽つて居た。彼の努力は毫も基督教でないが、印度的方法で基督を實現せんとするのだ。

彼に對する人々の批評は區々まち／＼である。基督教徒と或宣教師は彼を以て大山師と呼ぶ。其不信用の基礎は娘の結婚問題にすぎない。或聰明な婆羅門は彼を輕蔑した調子で評し其運動の無勢力と印度教内の新活氣とを述べた。それは丁度正統派の教師がユニテリアンを評する様な口前である。不思議なことに私は英國教會の牧師から、最も思慮ある又興味ある彼の評を聞いた。ボムベイの監督は極めて狭い儀式屋だが彼の事業を以て最も興味を引くものだと言ひ、カルカッタの監督は自分が神秘主義に同情あるものでなく、又ブラハモソマジには教義的基礎がない故早晩滅亡すると思ふものであるが、然もチャンドラセンを以て自分の友人に算し又其靈的なことと眞剣なことを賞讃して居る。獨逸宣教師等も彼の性格を信じてその事業に注目して居る。

全運動と其指導者とは強く聖靈を信じて居る。自分は斯した基督教の印度的表現は他日必ず成就するに違ひないと思ふ。斯した表現は歐米の基督教から違ふばかりでなく、それ以上に何物かを貢獻するだらうそして基督教の世界を更に完全なものとなすだらうと思ふ。

此觀察は流石に大宗教家だけあつて、此印度の宗教改革者を俗衆の見解から救出した感がする。

後に到てこれ等の原始的森林の時代はやがて耕作せられたる田野の時代に移つて行つた。そしてここに多くの富める都會が生れた。多くの大王國が創立せられて、世界的の交通が開かれた。しかも印度人の心情はその物質的繁榮のよるこびのなかにもかの古の熱心な自己實現の時代に對する憧憬の念を斷たなかつた。彼れ等の心からは何時までも森の隠れ家の簡易生活を忘れることはできなかつた。

歐洲人は常に自然を征服しつゝあるといふことを矜りとしてゐる。彼れ等の日常生活は畢竟爭鬭、征服、侵略の生活である。この生活觀念は蓋しかの市に障壁を築いた彼れ等の祖先の習慣が生むだ遺物である。

印度人の生活は全然これと反したるものであつた。印度人は人と世界とを唯一つの眞實として受け容れた。彼れ等は個人と宇宙との間に一大調和境を發見してゐたのである。彼れ等は如何なるものと雖どももし彼れ等が吾々に對して絶對に關係なきものであるならば何等の交通もあり得ないことを信じてゐた。

タゴールはまた歐洲人と東洋人の思想の差異を述べて言ふ。歐洲人の差別觀は人間と自然とを區別し、自然は單に無生物や獸類に屬し、人類と自然の間には越ゆべからざる溝が横はつてゐると見るのである。けれども印度人は何の躊躇もなしに人類と自然との同一血族たることを主張する。

この自然と人類との間の創造的純一調和といふことは印度人にとりては決して單に哲學的思索に止らずして、實際にこの大調和を實現することが印度人の抱いてゐた人生の目的であつた。瞑想によりて奉仕によりて、或は彼れ等の生活を調製することによりて、彼れ等は萬有が彼れ等に對して靈的意

最初アリアン人が印度を侵略して來た時には、印度は鬱蒼たる森林の大陸であつた。しかしてこの新來の民族は、直ちに森林を利用することを知つた。これ等の森林は彼等に熱帶地の太陽の烈しい熱に對して、或は暴風に對しての保護を與へ、または家畜のために牧場を與へ、犠牲の聖火や、小舎を建てる材料を供給した。その他多くのアリアン人はそれぞれ主長を戴いて印度の各地に森林地を求めて割據したが、何れも充分なる食物と水とを供給された。

かくの如く印度に於ける文明の起原は最も自然と密接な關係を有てるものであつた。彼れ等の生活は自然によりて養はれ、自然によりて衣を與へられたものであつた。しかもかくの如く自然にのみ頼れる生活はやゝもすれば人をして怠惰に陥らしめ、彼れ等の元氣を阻喪せしむるものであるが、印度人の自然生活はその方向を向上の方面に轉じたのであつた。

即ち彼れ等は絶えず自然の生潑たる生長と共に生長しつゝあつたが故に、彼れ等は彼の希臘人のやうな排他的な思想を持つて彼れ等自身の所有物を殊更に城壁のうちに圍む必要を認めなかつた。彼れ等の目的は所有といふことでなくて實現といふことであつた、彼れ等の周圍とゝもに生長し、彼れ等の周圍のなかに發達して行くことによりて彼れ等の意識を大きくすることであつた。彼れ等には真理とは全然理解せらるべきものであつた。彼れ等には宇宙には一として孤立したる存在はあり得ないと考へられた。そして真理に到る唯一の途は吾々があらゆる事象のなかに溶け込むで行くことであつた。即ち古印度の森に住むてゐた聖者達の努力は畢竟人間の心靈と世界の心靈との間のこの大調和を實現せんとすることに注がれたのであつた。

自身が完全なる真理のうちに彼れ自身を發見し、こゝに彼れと萬有との調和が打ち建てられる。大地と空と星とあらゆるものを造り、或は吾等の心のうちを照す永遠の精靈と合一せんが爲めに、また合一したりとの意識を強めんが爲めに吾等は晨の太陽を拜し、流るゝ水と、豊かなる大地をたたへる。

かく言へばとて印度人は必ずしも一つ一つの表現の價值差を見のこしたのではない。一層具體的に言へば創造の程度に於いて彼れ等は人間の優秀を認めないでは居れなかつた。但し人間の優秀といふことは所有の力といふ點で計られるのではなく、合一の力といふことによりてある。印度に於いて巡禮者が聖地を雄大な或ひは明媚な風光を有する地に索めたる理由は、彼れ等の心が狭い局地から解放せられて無限の世界に進まんがためであつた。嘗ては肉食國民であつた印度人が全然肉食を捨て、菜食に移つて、生に對する普遍的憐愍の情を抱くに至つた理由も實にこの萬有合一の念からであつた。

印度人にとりては彼れ等と萬有とは切り離して考ふることのできぬものであつた。自然の永久的生命から彼れ等自身を強ひて突き放すことや、或は宇宙内の人として生くることでなくて單に人となつて生くるといふことは却つて吾々が故意に拵へた困難のなかに吾々を追ひやることであることを知つてゐた。宇宙自然の休み場を捨てゝ人間として一筋の綱の上を歩いて行くことは或ひは小ひさな矜持も満足も伴ふかも知れないが、それは決して全的な生活でも永久的な生活でもない。彼れの生活は全的でなければならぬ、彼れの場所は無限のなかに在らなければならぬ。彼れは如何に彼れ自身のみのうちに藻掻いたところで、彼れは自身の蜂巢のなから蜜を創造することはできない。彼れの生活の

義を持つてゐることを知るの意識を開發して行つた。地も、水も、光りも、果實も、花も彼れ等にとつては單に利用せられて、やがては捨て去らるべき物的現象としては想^{かんが}へられなかつた。これ等の事象は印度人の完全の理想を實現するになくてならぬものであつた、恰かもあらゆる音律が交響樂を造るに必要であるやうに。印度人は直覺的に、この世界の本質は人間に對して生ける意義を持つてゐることを感じてゐた。人間は充分その生ける意義を知り、萬有と意識的關係に於いて生きなければならぬといふことを感じてゐた。單に科學的好奇心や物質的利益といふことよりして強ひられるのではなくして、相互憐愍の心のなかに、歡喜と平和の大なる情調をもちて、物心兩體の融會調和の實現を理想としてゐたのであつた。

地も氷も、吾れの感覺には地となり、水となりて現はれるが、實はいろいろな力^{ちから}のあらはれである。しかも色々な力^{ちから}は永遠の一意志そのものの種々なる現象であるに過ぎない。萬有が悉くかくの如き大意志のあらはれとして動きつつあることの根抵義を把握したる人にとりては萬有は彼れに對して例へちからを與へないとしても絶えず歡喜を與へる。この一境に參じたる刹那に彼れの四肢が潔めらるゝのみならず彼れの心情が淨められる。彼れは萬有に對してたゞ知識的に了解するといふのみでなく、彼れと萬有とは「心、靈、より、心、靈、へ」の關係に於いて相感するのである。大地は單に彼れの肉體を支へるのみならず實に彼れの心に限りなき歡喜を溢れしめる。

彼れが萬有と如一の實感に達し得ざる間は世界は彼れにとりて一の牢獄である。彼れが萬有のうち
に永遠の靈精を見出す時に彼れは解放せられる。こゝに於いて彼れはこの世界の意義を發見し、彼れ

彼れ等の周圍に對して人間の力を最も強く擴げて行くことに對して國民は全力を盡してゐる。常に勝利者として彼れ等の通路を清掃することのために努めてゐる。彼れ等は常に自然に對して異人種に對して爭鬭すべく彼れ等自身を訓練してゐる。彼れ等の武備は一日一日と驚くべく擴張せられつゝある。要するに彼れ等の生活は絶えず障礙を排除しつゝ、征服しつゝ、彼れ等自身を勝利者の地位に進むることである。

古代印度文明もまた、全の理想に對してその努力を盡した。しかし印度文明の理想は決して勢力を得ることではなかつた、またその能力を極度にまで開拓することでもなかつた。また防禦或は攻撃の目的のために或ひは富に、或ひは陸軍に、或ひは政治の發展の目的の爲めに人間を一組織のなかに組み入れるといふことでもなかつた。實に彼れ等の理想は觀照的生活の孤獨のうちにあつた。かくして彼れ等が實在の神秘にまで達し得たる心靈の一境は、世俗的成功に比して優ること幾倍のものであつた。彼れ等はそこに人類の憧憬の最高の實現を索めた、即ち彼れ等は無限を現實に持ち來すことに對して人生最高の努力や理想を感じてゐたのである。

無論印度にも多くの有徳家、賢者、勇者、政治家、帝王があつた。しかも印度人はこれ等の人々のうち何人を以て人類の代表者であるとしたか。聖者は即ち彼れ等の理想人であつた。然らば聖者とは何ぞ。

『智識に於いて絶對心靈に到り得たる聖者は智慧を以て充たされてあつた、そして宇宙の心靈と合一せることを發見せる彼れ等はまたその内部的自我と完全なる調和に於いてあつた。彼れ等は世界のこ

食物の供給は彼れの外部から仰いで來なければならぬ。

全一の背景を失へる貧人の生活は無耻であり醜惡である。無限の連鎖から斷たれたる富者の生活はたゞ放縱あるのみである。彼れの權榮はたゞ火焰につつまれたる帝都を望みつゝ回祿の炎に提琴を弄ぶが如き者の生活に彼れの生命を燒き盡すに過ぎない。彼れ等はその内なる世界に潜めるその偉大なる世界の連鎖を探りあてることなく、彼れの生活は永遠の地中に、彼れの根を掘り出すことはできない。人生の偉大、安住は去つて焦躁、不安、刺衝は彼れの生活を彩る。星きらめける天上の平安、小止みなく流れ出づる創造の旋律的舞踊は永久に彼れの生活から奪ひ去られる。

アリヤン人が印度に入りて原生森林と蕃人の境に新生活を建てなければならなかつたのは、かの歐洲人が亞米利加に渡つて野蠻な土民や原始林と闘はなければならなかつたのと東西ほぼ同一の境遇であつた。しかも兩者の發展方法は全然異なれる徑路を歩いて行つた。印度人は常にその蠻人と或は森林と合一せんことを希望し、また實行した。森といふ森は彼れ等にとりて聖者の聖所となつた。けれども亞米利加に於いては是等の自然の大伽藍は何等深い意義を持つてゐなかつた。或る種の快樂を與ふるか、或ひは寂しき詩人の心を靈動せしめたことがあるではあらうがその主なる貢獻は彼れ等に富と力とを與へたことであつた。

この二移住民の傾向はまたやがて歐洲文明と印度文明のけぢめを現はしてゐるといふことがでる。

現代歐洲文明の努力は肉體的、智識的、或ひは精神的能力を最も完全に發達せしむることにある。

りてはその所有はその制限を意味することとなる。

眞に宇宙を知り、眞に神を知らんとする者は萬有を抱かねばならぬ。富を追求する者は、その僅かなるものを獲んがためにあらゆるものを見捨てゐる。かくして全的な宇宙を見ることはできない。彼れは少かなる所有物のためにつひに狭い障壁のなかに鎖されてゐなければならぬ。

或る歐羅巴の近代哲學者は印度人のブラアマは單なる抽象であり、世界に於けるあらゆるものの否定であるといふ。換言すれば無限の實在は形而上學に於いてのみ發見せられるといふのである。無論かやうな思想は一部印度人の間にも尙ほ抱かれてゐる。けれどもこれは眞に印度人の思想の根柢を流れてゐるものではない。印度人のブラアマなる思想は彼れ等に不斷の靈動を與へる萬有のうちに無限の實現を實行するものに他ならぬ。即ち彼れ等は萬有は神によりて展開せられたるものとして世界の萬象に對するのである。

『我は幾度も神の前に跪く、彼れは火にあり、又水にあり、彼れは全世界に滲透し、彼れは年々の收穫のなかにも多年生樹のなかにもあり。』

かくの如く萬有のうちにあり、萬有のうちに表現せらるゝ神は決して世界から抽象せらるゝことはできない。吾々は單に萬有のうちに彼れを發見するといふだけではない、世界萬有のうちに彼れを禮拜することによりて眞に彼れを知り、世界を知ることができる。所謂神を意識せる人の宇宙に對する態度は最早や冷たい理智一偏のものでなくして、深い崇敬アドレシオンの感である。彼れの崇敬の對象は到るところに現前してゐる。あらゆる實在を眞なりとするところのものは生ける一の眞理である。この眞

このなかに彼れ等自身を實現し、あらゆる利己的慾望から遁れてあつた。そして世界のあらゆる活動のうちに彼れを経験することによりて彼れは靜平を得た。聖者とはあらゆる方面から絶對の神に達し永遠の平和を見出したる人である。あらゆる事象と合一し、宇宙の生命にまではいり得たる人である。』

即ち印度人の理想としたる聖者の生活は、萬有に對する吾々の因縁を實現することであり、神と我とが相結んで、吾々自身が萬有のうちに浸徹して行くことであつた。

人間は破壊すること、掠奪すること、儲けること、貯蓄すること、發見することもできる。けれどもこれ等のことが必ずしも人間を偉大ならしむるものではない。人間が偉大なる理由は彼れの心靈があらゆるものを理解し能ふが故である。しかも彼れがこの宇宙を理解し、それを相抱き得るは、彼れが決して宇宙の奴隸であるからではない。彼れは世界または彼れ自身の奴隸ではない。

彼れは世界及び彼れ自身の戀人である。彼れの自由はまたその完全なる理解のうちにある。

他を排し、他を踏み臺として彼れ一人のみ高きに居るが如く考ふる者は即ち永遠の心靈からかけ離れたものであつて彼れは眞に平和に於いて、または神と一つとなつて生活することのできぬものである。何となれば神はあらゆる事象、あらゆる自然、あらゆる人間の完全なる調和のうちにのみ見出すことができるからである。

クリストが「富める者の天國に入るは駱駝の針の孔を通るよりも難し」と言つた言葉は吾々に天地萬有と我が心の調和——謙遜な愛によれる萬物抱擁の心境を指したのではないか。利己的な生活者にと

または外的な行爲によりてではない。それは彼れが何れほどまで眞實であるかといふことによつて量られなければならない。そして彼れの眞實性は彼れの意識の範圍によつて定められる。

然らば吾々は如何にして自由なる意識を得ることができるか。吾々はそれに對しては相當の價を拂はなければならぬ。その價とは何であるか。即ち自己自身を捨てることである。

吾々の心靈はそれ自身を拒否することによりてのみ眞にそれ自身を實現することができる。

「汝は捨つることによりて得べし、汝貪る勿れ。」

印度人はその結果を考へることなく凡べて私念私慾を去つて働かねばならぬと教へられてゐる。外部の人から見るならばこの思想はやゝもすれば此の世界には或る不眞實なものが根柢に横はつてゐることを示してゐるものであると思はれるのであらう。けれどもこの見方は誤つてゐる。

彼れ自身の擴張を目的とする者は他のあらゆるものを卑下する。彼れの自我に比較して世界の他のあらゆるものが非眞實と見做される。世界のあらゆるものゝ眞實在を意識せんとする者にとりては先づ彼れ自身の念慾の囚縛から遁るゝの必要がある。この教訓は吾々をして吾々の道伴れの重荷を分ち負ふところの社會的義務を暗示してゐる。先づ吾々は自己を捨つることによりて、自己の念慾を去ることによりてより大なる生命に達せなければならぬ。かくして吾々には全^{オール}なるものと合一せりといふ意識に一步一步近づいて行く。

印度人が抱いてゐる無限は無といふことでも空といふことでもない。『この人生に於ける彼れを知ることが眞である、この人生に於ける彼れを知らざるは死の破滅である。然らば如何にして彼れを知る

理は單に知識のみのそれではない、それはまた崇敬アドレーションのそれである。

聖者リシが全世界に對して呼びかける大歡喜の聲を聽け。

「我にまで耳を傾むけよ、汝不死なる精靈の子等よ、天の高坐に棲める汝よ、我は暗黒の彼方から光明を放射する絶對人を知れり。」

聖者の心には絶えず端的な積極的な經驗に溢るゝ歡喜が充たされてゐた。彼れ等の心のどこにも不定不安または消極的なものはなかつた。

「天なるもの、或ひは地なるもの、遙かなるもの、或ひは近きもの、見得べきもの或ひは見得べからざるものの萬有に對して汝は憎むことなく、殺さむと念ふことなく、無限なる慈悲の關係を保て。立てる時も歩める時も、坐れる時も横はれる時も汝が眠るまでかくの如き意識のなかに生くることが即ちブラアマの精舍である。言ひ換ふればブラアマの精神のうちに生き、動き、汝の歡喜を持つことである。」

釋迦のこの言葉こそ印度人の思想の根柢を流れつゝある聖者の心境である。

さてブラアマとは何であるか、彼れのうちに萬有の光明と生命が溢れ、彼れは世界的意識を持てる者である。萬有を感じ、萬有を意識するものは彼れの精神である。吾々は肉體も精神も彼れの意識のなかに沈潜せられてある。太陽が地球を引き着けることも彼れの意識を通してである。光の波が遊星から遊星に傳送せらるるのも彼れの意識を通してである。彼れは空間即ち廣がりの世界に全意識を持つてゐると同時に心靈即ち内包の世界に對しても全意識を持つてゐる。

眞の人生が進歩するといふことはこの意識界がより深くより高く擴げられて行くことに他ならぬ。

詩、哲學、科學、藝術及び宗教はより高くより大なる範圍に吾々の意識を押し擴げて行くことである。人間が偉大なる或は進歩せるものであるといふことは大なる空間を占有するといふ意味でもなく、

の衰滅も減少をも感じないことを知つてゐた。即ち『あらゆるものは不死の生命から生れ、そして生命とともに顫動してゐる、何となれば生命は無限なるが故に』といふ意識は彼れ等が抱いてゐた世界觀であつた。

しかもこの世界意識は單に知識的または感情的なもののみではない、それは倫理的な根柢をもつてゐるものである、随つてそれは行爲として現はれて來なければならぬ。

眞に智、愛、奉仕のうちに全實在と合一し、全實在に遍滿せる神のうちに彼れ自身を實現することが即ち善である。生命は無限なりといふウパニシヤドの教への根本は實にこの善なることである。

か。『各個々物のなかに、同時に凡べての物のなかに彼れを實現することによつてである。』單に自然のうちにのみではない、家庭のうちに、社會のうちに、國家のうちにそれを實現することである。萬有のうちに世界意識を實現することの多いだけ、吾々自身が大きくなるのである。その實現をしないものは破滅に面するのみである。

古代の豫言者たちは印度の太空の下に流れ來る日光を浴びつゝ立つて世界萬有は如一の同族なりといふ喜ばしき意識を以て世界を讚美した。これは必ずしも神人同族の幻影に囚へられてゐたからではない。また人間があらゆる物象のなかに侵入して行つて動めてゐると見たのでもない。または人間が飛び行く影や光りのなかに自然の舞臺に立つて戯曲を演じてゐると見たのではない。それは彼れ等が個人の有限な圍ひのなから脱け出でんがためであつた。人間以上にならんがためであり、^{オール}全と一つにならんがためであつた。彼れ等は世界の無限なる形相のなかに顫動しまた過ぎ行くところの潛勢力が吾々の内的實在のなかに意識としてそれ自身を表現してゐることを感じてゐた。彼れ等にとりては萬有は悉く全一となつて生動しつゝあるものであつた。そこには一つの罅隙だも存在してゐなかつた。彼れ等は死そのものをすらも現實の世界に裂罅を創造するものであるとは認めなかつた。彼れ等は死と生の間にも何等根本的な相剋性をも認めてゐなかつた。彼れ等は『死は生なり』といふ確信を抱いてゐた。彼れ等は齊しく平靜なる觀喜を以て生れ來る命と、訣れ行く命とを感謝した。彼れ等は現はれ來る生命と訣れ行く生命は恰かも大海の浪の一上一下と同じやうに見てゐた。吾々の目のあたりに變り行く生死の諸相はたゞその表面に於いてこそ然れ、永遠なる生命にとりてはそこに一つ

辭世之懇願

子弟を思ふて愛全世に及ぶ。全世の爲に益々子弟を思ふ。○無限の愛、充滿の悦、永遠の榮、萬衆の皆一、皆辭世の尤忘るべからざる眞情也。

○父上よ、靈聖兩一なる神親。

時至れり。願くは子を榮し給へ。子亦父上を榮せんが爲也。凡そ子に賜はりし者

に永生を與へん爲、父は子に人類の權を賜へり。父上の惟一眞神にして耶蘇基督の父より遣はされし

人たるを知る事是れ永生也。

知とは、體知也。敬慕して止まず愛抱して離れざるは、體知の實也。止まず離れざるに非ずば、クライストを知る能はじ。

○父上よ、予は父上の命

のまゝ行ひて、父上を地に榮せり。

子弟を榮ひて、彼等教を受く。地上の榮。

○父上よ、創世以前より偕にせし榮光を以て今

我を榮し給へ。

時至り、天地還旋す。今本源に歸來せむ。世前榮光體あり。今後永遠に眞體榮す。

○父上の此世より予に賜ひし者には、父上を予は

明示せり。

彼等に教へて彼之を受く。地上の榮。

彼等は父に屬して、父之を予に賜ひ、而して彼等其命を拜受せり。

神彼等の中に榮せ

る。凡そ予に賜はりしもの皆父上より下されしを彼等覺知す。父上の子に賜はりし教予之に授けて彼

等之を受けたり。

惟一眞神を信す。

誠に予の父上より來りしを彼等知りて、我が使命を信ず。

拜受の實。地上の榮。

○凡そ

我が屬は父の屬、而して、父の屬は子の屬也、我は彼等の中に榮を得たり。

即ち父を地上に榮せるなり。

○今予將に

此世を去らんとす。

將に天に至らんとす。

彼等は世に在らむ。

其時未だ至らず。

予は則ち父に歸來せむ。

是に於て深く子弟を思ひ、施いて全世萬衆に及ぶ。

○嗚呼聖き父母よ、

テ、ハ、

願くは父母の御名―我に與へ給ひし二而一なる聖生命―を以て、彼等を保安せさせ給へ。

萬衆皆一の道亦少小より長ず。○天國は芥種の如く、又藏寶の如し。其微小を厭はず、其聖明を要す。

○父上よ、我等の一たるが如くに、彼等も亦聖き生

命に一とならむを欲す。

聖生命に非ずして基督の徒たるを得べからざる也。

○後等と共にせし間は、父母の生命を以て予之を儆誡せ

教訓自讀

「自讀」は猶「責在己身」と謂はんが如し。敢て人に示すに非ず。自ら學ぶ所以のものなり（其一）

新井 奥 遂

福音を讀む者其筆者の誰何を究むるの要なし。先哲云ふあり、福音の書は、深き意味に於てジイサス自ら筆すと謂ふべしと。蓋ジイサス聖靈を以て筆者に其時に其程度に寓して其意を授け、筆者は其能ふ限を以て之を文字に發せしのみ。實は、文中に文あり、意中に意あり、殆ど究極なし。其微妙に隱ると同時に大天大地の表外に顯はるべきあり。皆クライストの神息を以て來往して開新已まざるあり。故に其書は深意に於て生命の體を有す。機微に在り。舊套なる文字を離れて離れず。

靈言體

○元始に靈言體有り。眞神と偕にす。其體即神也。靈言體は、元始より神と偕にす。萬物は靈言體に因りて來り成る。靈言體を外にして來りし者一も之有らじ。○夫れ來りて茲に成れる靈言は、自ら生命を有す。是れ人生の光也。是の光の靈は、世の暗を照して、照さざる所なし。

是の光の體や、微妙を以て暗黒の裏に入り、陰翳の密

所を照し、其極に至りて照さざる所なし。是光は、太陽の太陽。大々太陽なり。

而れども、暗の世は其光の體を會得せず。

「光は、世に臨めども、人其光を愛せず、寧ろ暗を愛す。其行ふ所惡なる

に因る。」夫れ陰鬼若し陽日を見れば狂亂す。彼等は自ら光より竄る。是れ暗なり。○ああ、日月の日月我を光して明なり。眞體は、眞性を貫いて宇宙に光明。

今や大局の憂愀に由りて、殆ど絶対に世に垣まれしクライストの心情は、聊復慕はるに至れり。是れ人心復活の始也。東方將に明けん。眞人東よりすれば也。夫れ憂愀の死を経ざれば復活得べからじ。禍根心底に存する限、禍亂の至るは必然也。但之を作す者尤禍にして、凡そ之に關する者亦各々其分有り。世界の治亂、其責誠に予が身に在り。○勝の勝は微妙に在り。萬有の神種也。惡に敵せず。乃ち微妙を懷きて微妙に息す。

遣ししを知り且父の彼等を愛せらるること我を愛せられし如くなるを知るを致さむ爲也。道の順序當に然るべし。

凡そ父の我に賜へる者の我が居處を共にせむを欲す。蓋父母創世の前より子を愛して賜へる所の我が榮を彼等其身に於て能く觀ぜむが爲也。父母の第宅の悅樂觀。是れ神愛の日夜に游動する榮光の光體也。

○あゝ至正なる父上よ、世は父を知らず、我は父を知る。此等小子も父の我を遣されしを知れり。父上を予此等に明示す。更に示さむとす。

我を愛せし其愛の―彼等の心に充ち満つて予も又其充滿せる愛を以て永へに彼等の中に居るを致さむ。祈は愛に歸す。平等無限也。順序又無限。

主は門なり、戸なり。又牧者たると同時に、牧師なり。誠に之が食となり、之が飲となる。主は生命なり、復活なり、光明の實體なり。但、程度に程度あり、微妙を貫いて無限に應變す。是れ人の子なり父と一なり。

嗚呼、在天の父母は、子女を遺てじ。微小の一をも遺てじ。必ず皆救はる。

基督門戸（入門訓）

○羊欄に入るに、其門（戸）よりせずして、他處より踰ゆる者は、賊也。門より入る者は、羊の牧人也。

門は、嚴法格律の鎖鑰なり。守門者之が爲に之を啓く。天國には百官悉く備る、審使乃ち門を守る。東西南北の人其門に出入せんも、嚴法の一髮をだも紊るべからず、此の門や大なると同時に亦甚穿し。閭闔皆微妙の

嚴律に係ればなり。審判使茲に立ち、其職を以て命を行ふ。羊は其聲を聽く。牧人は羊の名を呼びて之を引く。之を外に出だす時、己先

だちて行き、羊は彼に従ふ。主人の聲を識れば也。門と牧者とは、其實體一なり。一主なり。但其程度を異にす。審判使の此命を奉ずる者は、乃ち此の門に事ふる者なり。○牧人の

聲は、常に、羊に、其中心より聞ゆ。

り。自失の一の外は一も失ひし所なし。今即ち予は父上の許に歸り來らむとす。

本源に昇る。『人の子は今
曩に在りし處に昇る。』

尙茲に之を言ふは、父と一なる我が悦の、彼等の心に充滿せられんが爲也。

萬衆皆一の道亦卑近の子供より推
開すれば、此等を思ふの切ならざ

るを得ざるは、父母の真情也。○今や、ああ、此の慘殺を以て別るに臨み、父と一なる悦の彼等の心に充たむを祈る。嗚呼其感—其情—其心—微妙の神靈、誠に如何。天に在す父母は、曾て其子女の一をだも棄てらることなし。全然皆救はる。是れ夫の時其心忡々たりし所以。眞同情の眞同情。

○予父上の命を彼等に傳へければ、世は彼等を惡めり。予の此世に屬せざる如く、彼等亦世に反すれば也。美種を懷ける子供等は皆
今危險の地と時とに在り。

○予は彼等の此より取去られんを欲せず。其存して罪惡より免れんを願ふ。

彼等は今尙世に居て其務を盡す
べき時に在り。上昇の時未だ彼

等に至らず。深憂深望並に微妙を以て此の語間に溢る。○萬衆皆一の大道、亦自ら次第緩急の盡すべからざるものあり。

○嗚呼父母上よ、父母の命は是れ眞實也。願くは眞實を以て彼等を聖め給はむことを。父の予を此世

に遣はされし如く、予亦彼等は世にへと遣せり。

信者此に於て其當に負ふべき所のものを知るべき也。○主の爲に我
を失はざれば生命を得じ。無冠に生きて而る后に冠を戴く。奴隷に

事へて而る后に天國を興す。訓誡は書中に在らざるなし。

○彼等の誠に聖められむが爲に、予亦自ら共に聖務に服役す。

與に共にする也。此
世の勦勞中、聖務の

聖務は、却て奴隷然たる處に在り。○夫れ主は、固より聖也。自ら聖ならざるなきも、我等の爲に—世人の聖められむが爲に—其務むべきに於て、與に共に、内外を貫いて服従せさせ給ふ。奴隷の奴隷を厭はざるのみならず、實際、我が爲に、今日—毎日—尙其苦杯を萬衆の中に飲まる。今は、廣世界の大十字架に其眞體を以て懸る。亦萬衆皆一の大道也。

○予は、雷此等の爲のみならず、又此等に由りて予を信ずる萬衆の爲めに祈る。

有神の謙と共に又最大
なる權能の充實を見る。

萬衆皆一を成さむ爲也。

皆一は、統一の統一也。宇宙一家にして、一家兄弟姉妹
皆日夜の勤に游動しつゝ父母の大懷に愛抱せらるるは、

皆一也。之を愛し之を抱いて一も洩さざるは、誠に靈の靈なる所以也。夫れ神は靈也。靈の眞體如是ならずして神の實在せらるること之有らざるなり。蓋全世の人父の命を遵奉するに至らむ。

○父上の賜ひし榮は予又此等に與へたり。父我に在して我又彼等に居り全を一に成して世皆父の我を

○若し我れ我が父の事を行はずば、我を信する勿れ。若之を行はゞ、我を信せずと雖、我が事を信ずべし。父の我に在り我亦父に在るを知りて之を信ぜんが爲也。

基督復活 基督生命 基督人生之光

○人若し晝行かば蹶かず。此の世の光を見れば也。基督は太陽の太陽。人若し夜行かば蹶かむ。彼に光なければ也。

○我は復活也。生命也。我を信する者は、主の信を有する者、死すと雖復生さむ。凡そ生きて我を信する者は、永世死せざらむ。

○人の子の榮せらるゝ時至れり。我誠に實に汝等に語ぐ、若し麥粒地に落ちて死なずば、孤存す。若し死なば、多く實を結ばむ。十字架の生活を經由せずして復活の榮を得べからず。主に於て死する者は福なり。其行事亦永へに之に従ふ。己の生命を愛する者は却て之

を失はむ。己の生命を此世に惡む者は、永遠の生命を保たむ。個性を知るは、己を惡むより始る。個性を失ふは、己を愛するより始る。人若し我

に事へば、我に従ふべし。主に従ふに必ず道あり。我が在る所、我に事ふる者も亦共に居らむ。人若し我に事へば、

我が父亦彼を貴まむ。父は子に於て榮す。子を榮する者は即ち父を榮する者なり。之を榮する者父亦之を榮す。今や我が心忪々たり。我何をか言はん。嗚

呼父よ、我を此の時より救ひ給はん耶。然れども、我は特に此の時の爲にして來れり。あゝ父よ、願

くは御名を榮し給へ。(時に聲あり天よりす、「我已に之を榮せり、又之を榮せむ」と) 曰く、此の聲は、

我が爲に非ず、汝等の爲にして來る也。今此世は審判せらる。此世の君は逐はれむ。我れ地中より舉げられし時は、萬衆を息引して我に就かしむ。上天に歸來して父と全く一となるの日は聖靈を以て宇宙の子女を我に息引す。

○我は乃ち門也。我に由りて入る者は救を得、且出入して草場を得む。

主は又艸場となりて其艸ともなる。永生の餅なり。人之が爲に務むべし。

盜は、唯盜み、殺し、滅さん爲に來る。我が來れるは、羊の生命を有ち、且益々豊ならしめん爲也。

我は善き牧人也。

嚴門と同時に善牧者、是れ我が主なり。○凡そ生命の言を讀む者は文を以て意を損ずべからず。

善き牧者は、己の生命を羊の爲めにして損

つ。捐てて復取る。新を得む爲には舊去らざるべからず。皆金人類の爲なり。

牧者ならざる傭人は、狼の來るを見れば羊を棄てゝ逃ぐ。狼は羊

を奪ひ、又之を散す。

破壊して又之を破壊す。或は造築する如きありとも、皆強奪の爲に之を作す。

傭者は逃ぐ、其傭者なるが故也。羊を顧みず。

十字架の訓練なき者は、皆怖れて逃ぐ唯是れ牧人之を統一す。

我は善牧者にして、我に屬する者を識り、彼等も又我を識る。父の我を識り

て、我も又父を識るが如し。且羊の爲に我は我が生命を損つ。我に又他の羊あり、此の欄の外なる者

也。廣く此の天地の外に在る者。

我は彼等をも皆引き來るべし。彼等我が聲を聽かむ。而して必ず一群一牧の完全を

成さむとす。父の我を愛する所以は此が爲也。之を成すが爲に我が生命を捐つ。之を捐つるは復新に

之を取らむが爲也。我は我が父より此の命を受けたる者也。故に我が捐つるは、我自ら捐つ。何人も

之を我より奪ふなし。

是れ其行ふべき事の遂げて其至るべき時の至るを常に嚴重に儆戒して俟たれし所以なり。

我に之を捐つるの權有り、復之を取るの權

有り。我此の權を有す。

○我が羊は我の聲を聽く、我は彼等を識り、彼等は我に従ふ。我は彼等に永遠の生命を與ふ。

神を敬慕して止ま

ず、愛抱して離れず、以て其實體を體知するは永遠の生命なり。信は此に成る。

彼等は永世滅びず。誰も彼等を我が手より奪ふなし。我に彼等を與へ

し我が父は萬有より大也。誰も我が父の手より彼等を奪ふ能はじ、父と我とは一也。

『我を見る者は父を見る者。我を信ず

る者は父を信する者。我が教を受くる者は父の命を奉ずる者なり。』

なるに在り。我が心能く開くれば、我に入るの心も亦開けて新なり。我が顔能く開くれば我に來るの顔亦能く開けて新なり。が言能く開くれば我に語るの言も亦開けて新なり。我が悦能く開けて新なれば、我を悦ぶの悦も亦開けて來りて更に新なり我が能く開けて其新なるに新なれば、我を樂むの樂も亦開けて日に々皆新なり。徳若し或は我に開けざれば、人の徳も亦進まず。義我に於て開けざれば、人の義も亦共に務むるなし。智若し我に無私ならざれば、人の智も亦私慾に用ゐる。一人の萬人に關係する所、私我は感知する能はざらんも其我を越ゆれば、其智明ならざるはなし。○クライストは純愛なり。故に其道と教と皆純愛なり。然れども純愛は誠に畏るべし。純愛は無上の戰者。其征誅するや一毫の慾をも赦さず皆之を燒殺す。

○斯道の戰闘は、人を殺すに非ず、人を救助する神の術なり。基督の科學を以て之を行ふ。溫順の教育其中になかるべからず。思邪なく、怒らずしての教之れ徹底せざるべからず。○釐毛も世の苟合を許さじ。故に凡そ世と妥協する者は、皆クライストに背き神を無みする者なり。○夫れ罪惡を誅する、必ず人を陷溺する者を覆滅せしめざるべからず。然れども、人の生命を奪ふことは是れ斷じて許さじ。○宇宙一家を成さんが爲には、或は一家を四分五裂せしむることもあらん。此れ亦却て「萬衆皆一」の種子となる。天國の播時此の間に在り。是れ和平クライストの賜ふ所。世の平和の如きに非ず。吾人亦喜ぶべし。

○(マリヤは價貴き純良の香膏を以て耶蘇の足に膏り、己の髪を以て其足を拭へり。)

此の婦や誠に其愛を盡せりと謂ふべし。

夫れ主は唯一の主なり。是れ當に之を受くべきの人なり。他人の聖者は高しと雖も皆兄弟なり。斷然之を受くべからじ。故に之を行ふ者亦他人に對しては必ず之を爲すべからざるなり。

夫春夏に在る者自ら春夏に化して能く春夏を知るが如く、愛に在る者獨り能く愛を知る。愛の意味夫れ知るべし。十字架の意味も亦知るべきなり。之を知るに道あり。之を愛するなり。愛の字は活文字。愛せずんば生命なし。必ずや悅樂の聖餐を得て之れ開く。

○尙小時、光は汝等と偕に在り、

光は主自體の光體なり。主の外に光なし。

光ある間に行け。

早く起つて信ぜよ。

暗汝等を蔽はざらんが

爲也。暗に行く者は何くに住くを知らず。汝等光のある間に、光を信ぜよ。光の子と爲らむが爲也。

行け。光に起つて光に行けば、皆神の子女となる。

(有司の中にも多く彼を信ぜざる者あり。唯バリサイ等の故を以て之を顯に承けざ

りき。會堂より逐はれんを恐れて也。彼等人の光榮を愛せること、神の光榮を慕ふに過ぎたれば也。)

○我を信ずる者は、我を信ずるに非ず、乃ち我を遣し、人を信ずる也。我を見る者は、乃ち我を遣し

、人を見る者也。夫れ我は光にして世に來れり。凡そ我を信ずる者暗黒に居らざらんが爲也。人若し

我が言を聞きて信ぜざるも、我は彼を判せず。蓋、我が來りしは、世を救はん爲にして、世を罪せん

爲に非ざれば也。然れども、我を拒みて我が言を受けざる者には之を判する者あり。即我が語りし言

也。此れ末日に於て

大終の榮日に於て、

彼を判せむ。

其原種は收還せられ、其個性を失ふ。

蓋、我は己よりして語りしことなく、我を

遣し、父我に言ふべき事語るべき事を命じて、我之を奉ぜし者なれば也。我は、父の命の永遠の生命

なるを知る。我が語る所は、皆父の我に言ひし所の如し。

信と望と愛とは人の道なり。クライストの教なり。「自讀」すれば最後の訓は、唯一語「汝必ず人と爲れ」と。微妙を以て靈に徹す。噫是れ足る。汝必ず人と爲れ。一言以て終身行ふに足りて餘あり。人若し人と爲らざれば、即ち暗黒に犬死す。○凡そ無私

にして生民を思はざる者は天下の賊なり。世の富國強兵を説く者は、其心私慾に原して生民を無視す。夫れ天子より庶人に至る迄相共に貧に安んずれば、其國乃ち富む。冠婚葬祭無錢にして行へば、民乃ち費へず。各々其慾を去り其怒を殺して以て神に事

ふれば、民人皆剛に興る。何ぞ殺伐の兵を須るんや。之を爲すに大道あり、學ばざるべからず。教育は其任に當る。本教は教育の教育なり。

○夫れ靈は靈食を要す。食なければ靈も亦生きず。何を以て食とする。愛是れなり。愛の生存は何に由る。神の悦樂は愛の食なり。夫れ愛は悦樂に生く。悦樂なくんば愛死す。死の十字架に懸る。今や人の愛を爲して而も樂まざるあり、何を以て天下の生

を得べけんや。抑悦樂の眞は、必ず畏敬の深き處に於て存す。○夫れ樂は強ふべからず。中心誠に悦んで充ち満つれば、樂や圓

也。○吾人當に起つて進むべし。其開ける心を以て四表に進むべし。自ら限るべからず。新生命の新なるは人々相共に開けて新

their bare shoulders their hair floated back, pale in the sunshine.

といふ叙述に至る海の静かな眺望、波の姿、波の色までが鮮明に描かれて居る所は流石は海國の人と感心せしめて私をして虹の松原や和歌の浦片男波などの追懷を催うさしめた。

私の静寂の宿である黒谷西雲院は昔法然上人が黒谷の地を創するに當つて紫雲の瑞相が一本の松に懸るを見たといふ所で其の時偈した石が今も尙ほある。名稱けて紫雲石といふ。虚實の程はわからないが西雲院といふよりは寧ろ此の紫雲石といつた方が通りの名になつて居る。黒谷の山巔墓石累々たる所に建てられた唯一つの寺院で、宿坊より宿坊に行くには石疊は敷いてあるがやゝ場所離れて夜は樹立深き爲に一路通ぜず大概夕方五時頃になれば左右の門は杜ざゝれて煙霞の中に籠るのが此の寺の習ひである。私の書齋から幾百となく黒緑色の天蓋を持つた松の赤い生肌が矗々と心持よく伸んで居るのが見ゆる。そして目路遙かに瑠璃色をした空の切屑が幾個となく明るみを呈して居る。松風遠く吹き寄せて颯爽たる音をたてる時は坐ろに彼處は海よと思はしむるのである。ある日友は來りて何故かゝる幽暗なる所には蟄りし今がジョーイオブライフの絶頂であるべければ寧ろ街頭にこそ出づべきにと余の病的箇所を叩いて去る。またある日の友は冥想によし松籟を聞いて靜に冥想するはよしと讃嘆し措かず。孰れも兩極を叩いて居るが少くとも私には此の二つの必要の爲に此處には籠つたのである。殊に私の好きになつたのは法然上人にゆかりのある彼が天啓に接したといふ所であるからである。京都に來てはや一年有半驚いたのは法然上人の感化の偉大なる。事である彼が如く底力のある感化を與へたものは少い。東山一帯到る所に其の靈跡が物語つて居る。また京都の文化の上にグレイス

紫雲石より（一）

秋 朗 生

ドーデーのサツフオを読みたる人は誰しも其の巻頭の自由暢達な南歐の人を思はしめるやうなあの會話に魅せられたことであらう。私は初め其のサツフオといふ書名を初頁の會話に釣られて一書肆より購ひ歸つたことがあつた。本の標題といふものも馬鹿にならないものである。近く私は現代英國作家のガルスワルシイの「靜謐イシヤブツランキリヤの宿」の如きも其の名につられて如何にゆかしく面白からむと思つた程である。黒谷の紫雲石に來てから先づ第一に讀んだ本はこの「靜謐の宿」であつた、

青み渡れる室の下、オデツシアの海岸の松檜、橄欖など生い繁れる中に淡紅色を呈せる靜謐の宿“Osteria di Tranquillità”といふのがある。旅客は此處に暫時しばしの閑ソノトヲレヒシメ想を友に足をとくといふのである。

“You have a lovely place here”

“Too quiet!”

“Precisely; the name of your inn, perhaps, suggests—”

といふ會話から

There came to us no sound but that of the waves swimming in on a gentle south wind. The wanton creatures seemed stretching out white arms to the land, flying desperately from a sea of such stupendous serenity; and over

黒谷の地木魚の音^{こつこつ}砧々として其響は山谷にこだましあらゆるもの、髓に入り骨に徹せずんばやまざる如く或は地軸をゆるがす如く又或は胸底^{ハートゴア}を叩くにも似たり人はこゝに深く目覺め靜に思ふ也。久しく感覺の響きになやまされたる余は虚空に入る思ひして心悠々たる也。また松籟功にして一山をさわがす時は天地の轉覆を見る如く獨爽神話の「神々^{ゴッドス}の黄昏^{ダム・オブ・ダ・ソング}」を想ひ或は鬼氣にうたれ或は神爽^{しんさうや}かなるを覺ゆること幾度、わが死の如き靜けさの中にもまたかゝる動的景情の波瀾はある也。

東風吹いてより東の山の端の松籟のみ聞えて波濤の打寄する如くなるには心驚かれぬれ。わが心はろばろと廣き海を思ひ有磯を思ひ人を思ひぬ。さはれ都は今ぞ花の錦なりける。懷ふ我れ此の春、國に歸りて九國より西國を經、和歌の浦を廻りて紀三井寺につきし時は感慨斜めならざるものありき。いたつきあまた經ても來し巡禮衆が「古里をはるばるこゝに紀三井寺花の都も近くなるらむ」と歌ふ其の希望にみちたる哀歌はわが胸にも唱へけるコーラスなりき。いにし昔の賑はひはさることながら西京は今も尙ほ花の都にてまこと藝術の宮柱太しき所也。

石疊ふみならして來るは誰が子ぞ其は南海の人にはあらで只管に西方淨土を戀へる孤棲の友にしある也。エターニチーをエターニチーとして忘却しえざるはそも汝の誠の雫かゝれば乎。命をかけたる人にしあなればか「掃墓來弔淚潸然」香華のにほひ高うして我は忠信貞實なる一乾坤の別にあるあるを覺えぬ。

婆娑^{はしや}ともわが軒端に音づるゝものあり。窓硝子越しにうち見やれば名も知らぬ春の装ひ美しき小鳥なりけり。思へばこれアシジの聖者フランシスが謂ふ所の小さき「姉妹」ならずや。此の庭樹によれ

な一面を與へたのも彼である由來山城の國は女の國である。男子は滅切り榮えない所で女の跳梁を極むる所である。茲に法然上人が女人成佛門を開いたのは大にいはれがある。法然以前既に尼といふものはあつたであらうが少くとも其に氣品を興へ京都に一つの清調を作つたのは彼に與つて力あるといはねばならぬ。話は枝葉に走つたが修學時代の法然はつとめて身を閑地に置いた居を山林に卜し跡を煙霞に暗まさんことこれ彼が願であつた。彼が修學地である叡山元黒谷の青龍寺は十八歳の時より四十三歳迄蟄居した所である。自然のたゝずまひ誠に雄大を極め、下は幾百尺の豁谷にて潺々たる谷水が流れて居る。仰げは阿彌陀峯釋迦嶽高く聳え、名だゝる龍巖石玉體杉などが掌にとる如く見ゆる。一日われは釋迦嶽の背後に廻り、琵琶湖の浩蕩たる姿を見て去にし年法然も此の雄姿を眺めたりしならむ例の麻の衣に鼠色の袈裟をつけて草履を引摺りこのわきに山靈を呼吸したりしならむと思ひしとあり。實に夙に四明に登りて一乗の學を修めたるものゝ幸はかゝる所にありたりしならむ。それ中道の青年に蛇の如くまつはり來るはこの世の榮華とかの世の光明とならずや人は遂に二つの主に仕ふる能はず孰れを採り孰れを棄つべきか。法然が万卷の書を讀み破りて出離の道にわづらひたるさま鑑むべき也。自然を背景にしたる法然はわれをして其の偉大を益々渴仰せしめぬ。彼がシムボリカルな教旨よりミスチックな片影に至る迄何れも天地の高居に居て養ひ得たる主一無雜なる精神の結果に外ならぬつとめて身を孤獨に處する事はフレッシュネスを保ち若さの露を貯ふる所以である。私は之を法然に學ばうとして學びえざるくやしさに遂に紫雲石の人となつたのである。

*

*。

*

*

*

*

*

*

*

六甲山麓より都大路へ

鼎 浦 漁 史

春が來た

春が來た、春が來た、春の香りは天地に溢れて居る。僕は六甲山麓の寂しい静かな書齋を出て、再び東京の賑やかな街頭に歸つた。新しい希望、新しい使命、僕は前路を望んで、憧がれ、歡び、勇み、而して今こゝに暫し沈思の手を拱いて居る。

僕は久しく議院生活の夢を見た。少年時代からの夢である。心の扉の奥深く、此の夢を鎖ざすと幾春秋。機會は突如として來たのである。否、天來の召命が忽然として僕の魂に閃めいたのである。僕は起つた、磐石の如き決意を以て起つた。

僕の決意は殆んど總ての友人を驚した。驚ける友人に對して僕は説明を與ふるの時を有たなかつた。今にして之を語らずんば、情誼を空しうする恐れがある。僕は強いても語らねばならぬ。

神よ、願くは僕が今語る所をして、精醇無雜なる僕が心の眞實たらしめ給へ。光と暗とは猶ほ己が心に戰つて居る。願くは在るがまゝの自己を告白せしめ給へ。在るがまゝの野心、在るがまゝの煩悶、在るがまゝの念願を自ら欺かず語らしめ給へ。知己朋友に對する最善の説明は、たゞ此の告白の中にある毀譽褒貶は今の僕に於て、浮雲の如し飛塵の如し。僕をして只眞實たらしめ給へ。眞實はわが救

る珍客に如何にして座を與ふべき。われ「はらから」と呼ばむには餘りに聲の太さを覺え彼又かゝる所にフランススの衣鉢を傳へたる人あるべしとはかけても思はむや。窓を開けば遽々として南天の赤き實を啄みて去る。わが聲に耳かさむよしもなし。机上に残れるは唯エリザベスグリアースンの「セントフランシスの話」のみ。さるにても面白きは彼が使命の感とレディポバルチャーとの結婚の事也。彼がローマに於ける旅、セントビーター寺院の一角に於ける瞑想は愈々使命の自覺を深からしめ而して足一度アシジに歸りては彼が心常の如く慰みやらす見えき夜樂はてゝ月明き夏の夜半なりき友は皆歡樂に酔へれど彼獨り慰まず物思はしげ也。「あはれフランススは戀に落ちたるぞや見よ其の花嫁たるべき美しき乙女のことをのみ思へるならずや」とは友の怪しき問ひなりき。「さなり誠にわれは御身等が夢想だにも及ばざる美しくあてに富める乙女をこそ得たんなれ」と彼が答は意外なりき。もとより友は好奇の心に満ちて去りけるが其の花嫁こそは誰が知らむや。後日彼のレディポバルチャーと稱する所のものならずや。爾後彼は此の夫人を生涯の友とし此の世の所有たからを持つことなくたゞ神の支持に任せて主キリストの如くに生きむと誓へる也。實に富の慾望はあらゆる高貴なる精神活動を途絶せしむる事ある也レディポバルチャーこそ生涯の好伴侶なれ。フランススは誠に我に取りては善知識なりけり。我れ暫く彼が如く思ひ彼が如く瞑想せむ早く一燈をかゝげて努力の生涯に入らまほしけれど寂光土の光は尙ほ未ださし添へず。碌々として靈感の去來を待つのみ。

の機會とを與へて呉れたのである。東京を棄つるは實に忍びなかつた。けれども僕は熟慮の末、つひに關西へと決心した。關西で死なうとは思はなかつたが、東京で生きかねる事情となつた。必要は僕を驅つて、新しい希望に向はしめた、僕は無限の苦痛を以て、東京に左様ならを告げたのである。新橋から汽車に乗るその日、知己朋友の何人にも、出發の時刻を知らせなかつた。僕は元來自分の爲めに送迎せらるゝのが大嫌である。けれども此日此時に於いて、一層送らるゝのが嫌であつた。僕は無限の寂寥を懷きつゝ新橋を西へと出發した。僕は東京を愛する故に、東京を憎まずに居られなかつた。

汽車の新橋を出でんとする刹那、僕の魂は獨り叫んだのである。「東京よ、あゝ最愛なる東京よ、爾は僕を容れて呉れぬ、爾は今僕を追放するのだ。何れの日か爾を征服する迄、僕は爾に逢ひたく無い。名譽の征服か然らずんば永久的の反抗か。東京よ、わが心の故郷よ、わが生の樂園よ。」

東京に別るゝよりも、妻子に別るゝ辛さ苦しさは、又格別であつた。妻は既に久しく病んで南湖院の一室に仰臥して居る。子は猶ほ幼くて祖母の手に育てられて居る。無邪氣な小供、健氣な妻、笑うて別れた初秋のその夕、そぼふる雨に僕は泣きたい心地がした。何の爲めに東京を離るゝのか、何の爲めに茅ヶ崎を棄てゝ行くのか、その時急に思慮分別の光が心から消えたやうであつた。

大阪に下車して、阪神電車に乗り、石屋川から下りて始めて六甲山脈の青々とうねり行く姿を眺めた時、僕の心は頓に復活した。神われを恵み給ふといふ感じが、忽然として輝き出た。神は六甲の山々に現はれて、僕を慰め給うたのである。流竄の生活の中に、六甲の山々のみは、淪らぬ僕の親友で

ひ、己が力、わが生命の泉である。

流 竄 生 活

大正二年の九月であつた。僕は住み慣れし東京を後にして、妻子を茅ヶ崎の松の林に残して、弧影然、關西に流竄るさんの身となつた。流竄るさんの身となつた、眞に流竄の身であつた。僕は流竄といふより外に適當の言葉ありと思はない。僕が心の奥底には慘憺たる別離の悲しみがあつた。放浪の歎きがあつた。否、否、追はれ行く身の辛さがあつた、棄てられたる恨みさへ雜つて居つた。か弱き脆きわが心かな。世に憤る所はある、自らを嘲る涙もある、運命をはかなむ咀ひもある。僕は樂園を追放されて、關西に流竄の身となつたのだ。

げに東京は僕の樂園である。僕が心の故郷である。僕が最愛の都である。僕はこゝに生きたかつた、死なばこゝにと願つて居つた。而かも東京は僕を容れない、僕を容れぬと東京は言はぬが、僕には結局そう感じた。僕は東京に在つて、僕の生活を托すべき地位と職業とを得なかつた。僕は瘦せたる狼の如く好餌を求めて喘ぎ走つた。喘ぎ走つたのでは無い、喘ぎ走る可く餘りに小苦しかつた。僕は好餌を求めつゝも武士は喰はねど高楊子の悲哀をしみじく實驗した。生活難の鋭き針は、僕が骨髓まで刺し通した。而かも盜泉の水を飲まず、一生の希望を失はずして、生くべき路は何處に在る乎。己が信仰と野心とを假令満足させぬ迄も、安全に保つべき路は何處に在る乎。僕は惑うた、思焦れた。たま／＼關西學院は僕に一道の光りを與へた。僕は端なく閃めいて來た此の光に盲目なり得なかつた。東京の僕に與へざりし所のものを關西が僕に與へて呉れたのである。生活の資と、研究の時と、靜思

又ダンテの一節を繰り返した。「エキザイル」といふ名が生々しく僕の心に浮んだ。げに僕はエキザイルの身である、流竄の人である。僕の書齋に名づく可くば、こゝは確かに『流竄の宮居。』御影に居る一年有年の間、この感じは須臾も僕の心を去らなかつた。僕は到底凡人である。關西を愛せざるにあらず、東京を愛すること餘りに深いのである。

『理想を決行せられよ』

大正三年十月廿五日、妻は永遠の國に歸つた。忘れ形見の喜美子を遺して、彼女は遂に逝いたのである。養病七年、仰臥二年、彼女の最後は神々しかつた。

妻の永眠の後一個月間、僕は葬祭の雜務の中に自ら没頭せざるを得なかつた。十一月末旬、ふたゝび六甲山麓に来て、僕は眞實の我に歸つた。孤獨の感じはひし／＼と僕の心に迫つて来る。懷舊の涙、悔恨の情、雲の如くに簇り起るのである。僕が境遇の靜かになつた時、僕の靈魂は始めてやゝに動搖を感じて來た。

苦悶、懊惱、鬱憂の雲霧は、暴風雨の前兆のやうに、僕の心に掩ひかゝつた。永遠の別離に就て、僕は今多くを語らない。たゞそが僕の心に齎らした波動に就て少しく言はねばならぬ。

妻が苦痛の生涯は、僕に取つて深酷な教訓であつた。妻は七年間も病んで居つたが、元氣は少しも衰へなかつた。彼女は病みさばらひし最期の日まで、僕を勵まし慰めて呉れた。彼女が絶えざる忠告は、僕が生涯の大目的に向つて突進する勇氣の乏しき事であつた。僕が陳套な辯解は「勇氣が無いのでは無い、事情が許さないのである」てふ遁辭であつた。併し此遁辭をも僕は全部を打ち明け得なかつた。

あつた。

六甲山麓の一年有半、僕は三たびも居も移した。居を移したのでは無い、自ら居を移されたのである。僕は多少の自由を有しつゝも、孤獨な下宿住居の身であつた。最後に御影みかげの石屋川いしやがはなる五君の舊居に移つた。「北窓を開けば、靜かに青き山々は目ざめて在り」と僕の謳つたその宿である。二階建の、小さいながら僕の住家として會心の好書齋であつた。僕はこの家の中に在りて、最も多く思ひ、書き、又讀んだ。

六甲の山々はげに僕の親友であつた。僕は他の何人にも語らぬ歎きと苦しみと望みと懂がれとを只六甲の山々に語つた。僕の絶えざる吐息を六甲の山々ならずして誰かは注意したであらう。僕が朝夕の熱き涙を六甲の山々のみが同情して呉れたのである。

僕は僕の書齋に名を附けやうと考へた。僕の心に浮んだ最初の名は、「平和の宮」であつた。書齋の雅名として最も適はしいと僕は思つた。けれども僕の書齋は果して平和の宮であらふか。煩悶はそこに渦いて居ないか暴風がそこに潜んでは居ないか。わが慕ふ平和の宮は、猶ほわが書齋の中に無いのである。僕は自ら之を思つて嗟嘆せざるを得なかつた。その時僕は亡友萩原碌山が淀橋の書室につけた名を思ひ起した。萩原は藝術界の天才として死後にその感化を遺して居る。而かも彼が自ら擇んだ書室の名は、「オブリーブイオン」であつた。嗚呼オブリーブイオン！ 優しくも哀れ深く、調べけ高き言葉かな。彼はオブリーブイオンの裡に在りて、只管藝術の神に仕へた。天才の生命の香りは、オブリーブイオンの庵室の中なる、冷たき油土の塊から匂ひ出たのであつた。僕は不圖バルザックの短篇小説を讀んだ、

しへに一つとなつて居る。僕は鬱悶の涙の谷底に在つても、決して希望の星を見失はなかつた。彼女の清き眼眸は、暫くも僕を離れないのである。

彼女の生涯は一面信賴の生涯であつた。御心のまゝに任せ給へと彼女は夜な／＼の祈りを繰り返した。最愛の喜美子を後に遣しながらも、彼女は一片の不安をすら心に留めなかつたと見える、祖母の愛に信賴し切つて居つたからである。只一つ彼女が最後まで案じたのは、僕自身のライフ・ウアークであつた。「阿方の最もお好きな事を大膽にやり遂げなさい」と、彼女は最後の一週間、幾度か力強い言葉で、迫るが如く僕に話したのであつた。

彼女が最期の枕邊に小さな手帖が遺してあつた。その中に彼女の辭世とも認むべき和歌や、遺言ともいふべき簡単な文句が鉛筆で書き陳ねてあつた。何れも僕の心を撲つた。特に最終の「耐え忍んで理想を決行せられよ」の一句が、光の如く僕の心を貫いた。

ライフ・ウアーク

ふたゝび言ふ僕は年少時代から一つの夢を抱いて居つた。經國の大業即ち夫れである。日本國の爲めに一身を献げむとのアムビション即ち夫れである。

十二三歳の頃、沼南先生が僕の郷里に遊説に來られた。觀音寺の廣庭に演說會の開かれた時、僕の從兄が開會の辭を述べた。僕は巡查に叱られて會場に入り得なかつたが、老松檜の間から遙かに辯士の風采を望んで、政治家たらむとの功名心を、幼き胸に燃やし初めたのである。

僕の從兄は東京よりの家土産に、多くの新書を購つて來た。小野梓の政治論や、末廣鐵腸の小説や、

つた。何となれば彼女の病は重いのである、事情が許さぬといふ一言は、彼女を悲しませるに相違ないと僕は案ぜざるを得なかつたから。けれども彼女は僕の言ひ切らぬ處を推量し得ざる程不明なものでは無かつた。彼女は能くその事情なるものを洞察して居つた。洞察すると共に深き同情、同哀を僕に向つて灑いで呉れた。併し彼女にして世の常の女ならしめば、「まことに申譯がありません、私さへ病氣でなかつたら」と泣き悲しんだに相違ないと思ふ。彼女は少しく變つて居つた。彼女は未だ嘗つて一たびも「お氣の毒」と言つた事が無い。何故か、そこに彼女の個性がある、そこに彼女の確信がある、そこに彼女の獨特な見識ともいふ可きものがあつた。彼女は自分は病身でありながら、人間にして志さへあらば、天下爲し得ざるの事無しと考へて居つた。彼女は私を信じた、只私の志の眞一文字にあらざるを惜しんだ。「事情なんかは何うも出来ませう、大目的がハッキリなさらないのですよ、忍耐力が乏しいのですよ」と、彼女は屢々笑つて話した。僕は時として眞面目に怒つた。けれども彼女の言ふ所に、争ふ可からざる眞實を認めざるを得なかつた。確かに大目的がハッキリして居ない、忍耐力が乏しい。僕はいつも自ら退いて反省した。

妻は僕に向つて斯く忠告する資格があつた。病氣に罹つた以前の彼女は、少女時代既に業に藝術家たらんとする初一念を抱いて、男子も及ばぬ努力をしたのであつた。病氣にかゝつて後の彼女は、驚歎せず居られぬ程、忍耐を發揮して居つた。彼女の堅固な志と、忍耐力とは、僕自らをして露骨に讃美せしめば、確かに崇高の域に達して居つた。彼女は僕を鞭撻する權利がある。

別離の日は來た、永遠の別離の日は終に來た。僕は悲哀の深淵に落ちた。けれども二つの靈魂は長

僕は一種の二重人格かも知れぬ。動靜二面を體達し、書齋と街頭とを往來せねば、衷心の満足を得ないのである。さらば僕は遂に統一なく中心なき生活を以て終始すべきであらうか。否、否、斷じて否。僕の惑ひと悶えとは、斷えずこゝから湧いて来る。

僕は妻を失つて獨り寂しく六甲山麓に暮した。而して晝も夜も妻が不斷の忠言を心の中に思ひ廻らした。「耐え忍んで理想を決行せられよ！」妻が優しき切なる遺言は、僕の靈魂を奥底から動かさずには居られなかつた。僕は考へ、祈り、而して藻掻いた。僕は自らの境遇に苦しむよりも、寧ろ自らの性格に苦しんだ。

如何にして僕は生活の中心を得やうか。僕のライフ・ワークは何處に在るか。是れが根本問題であつた。僕の生涯の最大の問題、妻の案じて居つた唯一の問題。僕は此の問題の爲めに思ひ悩むこと既に久しいのであるが、容易に解決の鍵を得ない。僕は暫く日本を離れて、靜かに歐米の文物を學び、徐ろに一生の大事を決せん乎とも思つた。洋行といふ新しい希望が遽かに心頭に閃めいて來た。

洋行か選舉運動か

間西學院は若し一年も待つならば、僕を歐洲に留學せしむ可しとの内議があつた。僕の心は大に動いた。併しながら歸朝の後は何、問題は忽ち轉換する、歸朝の後には素より學院に對して負ふ所の義務がある。少くとも七年か八年か、學院に教鞭を執るの決心なくして、學院の恩恵に浴すべきでは無い。僕は再び思ひ惑ざるを得ない。洋行はしたい、併し一生を關西に送らふとは思はない。僕は全

少年の僕は一知半解ながらに之を讀破した。中にも深き印象を受けたのは、矢野龍溪の經國美談と、無名氏の瑞西義民譚であつた。是等の政治小説は、本來ローマンチックな僕の精神を蕩搖して、生涯抜く可からざる政治的興味の若芽を萌えさした。僕は至つて元氣の無い溫順な少年であつたけれども、人の知らざる心の奥には、野心の焰を藏して居つたと見える。中學時代には、好んで眼を新聞雜誌に曝し、帝國議會の活動寫眞に對して、無限のインテレストを感じて居つた。而かも夙に「國民之友」「國民新聞」の愛讀者たりし僕は、いつしか政治と文藝との興味を共に喜ぶの傾向を生じて、バランスは高低常ならざる状態を呈して居つた。高等學校に入る頃より、新に哲學宗教の趣味油然而して湧き起り、先人の筆を通じて深くプラトーンに私淑し、又基督の福音に觸れた。大學に入りて後ち、此方面の趣味は一層強くなつたが、而かも生來の素質は變らぬ。政治に、文藝に、哲學に、宗教に、僕の心は動搖して暫くも集中する所がない。社會學を專攻の學問としたのは、畢竟此學問に於て多方面の趣味を満足し得ると思つたからである。集中する所が無い、故に造詣深からず、自ら淺薄を悔恨しつつも、性癖の遂に抜け難きを奈何。學問を以て身を立つべく僕の精神は餘り多趣味で無統一であつた。且つ僕は書齋と街頭と、二つながら之を愛するのである。靜寂と活動と二つながら之を慕ふのである。大學を出で、直ちに東京毎日新聞に入り、記者生活を試みたのも、畢竟此の性格の發露であつた。記者生活其者を僕は愛したといふよりも、議院に入るの階梯として之を擇んだ積りであつたが、新聞記者の生活に安堵し得ずして、煩悶六七年の後ち、兎も角も早稻田大學の講師仲間の一となつたのも、又此の性格の發露であつた。

何するものぞ、大隈内閣の議會解散は、僕をしてデレンマに苦しましめた。僕は自覺に立たねばならぬ。總選舉の叫びに心ときめきながら、僕は心を推し鎮めて靜かに胸に手を置いた。

僕は先づライフ・ウオークを求めねばならぬ、その自覺の生ぜざる限り、僕は選舉に出てはならぬ、自覺の分明ならざる今、忍んで洋行を策するが、當面の僕に適當かも知れぬ。僕は斯く考へざるを得なかつた。強いて自分の煩悶を包んで、兩親を郷里に省したのである。郷里に於ける親戚故舊は、立候補の決心有るや無しやを問うた。僕は胸中の煩悶を在るがまゝには語らなかつた、僕は未解決な煩悶その儘を人に語るも詮なしと思うて居るからである。僕は只洋行の意思を告げた。學者の天分を語つた。親戚故舊は首肯して深くも迫らなかつた。さりながら一旦歸省して宮城縣下の政治状態を見聞した僕は、一層鬱悶せざるを得ない。起つて政界革新の大運動を開始せんかと幾度か思ひめぐらした。けれども壺中の消息を何人にも語らず、悠然として別れ去つた。是れ後に至つて僕の立候補宣言が、少なからず親戚故舊を驚かした所以である。

生涯の一轉機

一月十日頃、僕は郷里から東京に寄つて六甲山麓に歸つた。それからの二週間は、僕に取つて荒野の試練であつた。僕は『流竄の宮居』に引籠つて、日夜冥想を凝らしたのである、煩悶を續けたのである。僕は元來一身の大事に就ては餘りに口外する事を欲せぬ。略ぼ見當の定まらぬ中は、容易に相談を持ちかけぬ。之が僕の性分である。洋行に就ては東京に於ける三人の親友に打ち明けて相談もし依頼もした。ほど決意を定めた上の事であつた。けれども今新たな方嚮に僕の心は廻轉し始めた。

く躊躇した。且つ一年を待つ事は、僕に取つて大いなる苦痛である。僕が日本を去りたいのは、眼前の此の機會である、僕が大に修養したいのはこゝ、兩三年の間である。僕は一年を待たうと思はぬ。若し直ちに洋行し得るならば、將來は天の使命に任して、只管瞑想と研究とに僕の心魂を打ち込みたい、僕は切實に考へた。けれども僕の欲する所必ずしも周囲の許す所では無い。僕は關西學院を離れて、自由に洋行の工夫をすべく冬の休暇に上京した。何等かの方法はありそうに見えた。僕は歐洲の光の國、戰亂の中に在りながらも、新しき文明を孕みつゝある未來の國に憧れた。そこに僕が一生の事業を見出すべき貴い鍵鑰が隠されて居るやうにも思はれた。僕は此の希望を抱いて、本年一月の初旬久しぶりに郷里の兩親を省した。

僕が郷里に歸る以前、政界の風雲は頻りに動搖して居つた。僕は熱烈なる興味を以て、之を觀望したのである。僕は先づ第一に歐洲の動亂によつて齟らされたる日本の新たな世界的地位を最も重大視した。第二に亞細亞大陸に於ける日本の發展上今日を以て千載一遇の好機と考へた。第三に無觀想の多數黨を打破して、民衆主義の新政黨を樹立せざる可からずと信じた。冬の休暇となつたその日、大隈内閣は遂に議會を解散した。議會解散の號外は、僕の心の奥底から、火の柱を捲き上げた。總選舉！總選舉！一生一代の好機會！と僕は書齋の中に立つて獨り踴躍し、焦慮し、而して煩悶した。さりながら飛ぶに翼なく、驅くるに舟車無さをいかん。否、否、翼なきにあらず、只僕自身の確信なきをいかん。僕は天を仰いで浩歎した。

ライフ・ウァークを求めんとして僕は洋行を思ひ立つた。ライフ・ウァークの自覺無くして選舉運動

とを選舉運動の作戰計畫に用ひた。

一月廿四日は安息日であつた。僕は書齋に籠居して、終日計畫を描いて見た。戦場の光景は眼底に動いて来る。僕は猶ほ未だ戦ふに及ばずして、早くも勇氣の凜々として、心の奥から湧き上るを覺えた。僕は始めて僕自身を見出し、僕自身の仕事を見出し、僕自身の生命の躍動を見出した。三十七歳の今日まで僕のやつて來た事は、殆んど皆小使や、從僕や、助手や、世話人や、相談役の仕事であつた。僕は今僕自身の仕事に取りかゝる。最大多數の民衆の小使となり從僕となり助手となり世話人となり相談役となるの仕事である。僕は先づその仕事を机の上で描き始めた。

逝ける彼女は絶えず僕の側に在つて、僕の計畫を助言もし、批評もし、はては争ひもし、笑ひもする心地がした。彼女は藝術家であつたが、併し政治を理解して居つた、議院の出來事、選舉運動などには、頗る興味を有つて居つた。前回の總選舉に、僕は義兄の應援者として長崎縣に二週間を過した。當時僕は病後幾何も経なかつたので、自分ながら自分の健康を危うんで居つたが、演說旅行は却つて僕の體量を増したのであつた。茅ヶ崎の別莊に歸つて彼女を見舞つた時、彼女は笑つて言つた、「夫れ程體量が増す位なら、應援よりも御自分で候補にお立ちになれば善いのに！」最も其の時の總選舉にも、僕は大に考へたのであつた、而かも自覺がハッキリしなかつたから全然思ひ切つたのである。その前の總選舉にも僕は長崎縣に行つた。前後二回の應援旅行は、机上の計畫を立つるに當りて、大いなる豫備智識を與へて呉れた。

横濱なる弟から最初の返書が來た。僕は瞑目一番して、徐ろに封を切つた。冒頭著筆の文句に曰く、

僕は先づ自ら考へ直さねばならぬ。流竄の宮居の二週間は、僕に取つてスツルム・ウンド、ドラングの時機であつた。生涯の一大轉機であつた。僕は朝夕亡妻の靈に語つた、諸共に神に祈つた。ライフ・ウアークに我が眼を開かせ給へ、わが衷情の眞に満足する生活に突進せしめ給へと祈つた。

祈りは終に聽かれたと思へる。僕の心はやゝに開けた。自覺は潮の如くに湧き立つた。「斷じてやらふ、萬難を排してやらふ、全心全力を傾倒して、生涯の仕事に取りかゝらふ！」一夜忽然として天來の默示の如く、僕の心に叩く力強き聲があつた。今にして之を思へば恍として夢から覺めたその瞬間の心地がする。一月廿三日の夜であつたか、最後の決心は、僕をして未だ嘗つて一たびも經驗せざりし全身の喜びを感じしめた。僕は思はず歡乎した。『流鼠の宮居』の荒壁に、ロダンの傑作『思想家』の寫眞が掛けてある。僕は書齋に出入するごとに、之を眺めては力づけられた。僕の決心は今や動かす可からずなつた。偶々僕はロマン・ローランのミレー傳を手にし、又丸善から新にミレー畫集を得た。『種撒く男』のコロタイプ版は、今更の如くに新しい啓示を與へる。僕はロダンの筋力にみち／＼た靜かな考へる人から、種撒く男の活動に深く心を運んだのである。僕の心は急轉直下、遽かに忙しく渦まき立つた。その前後僕は郷里の父母と親戚と東京なる三人の親友と横濱なる一人の弟とに始めて僕の決意を告げた。洋行問題を打ち消して、新に政界に突進するの決意を告げた。僕は最早煩悶の人では無い、天來の召命によつて、ライフ・ウアークを發見し得たる喜びに満ちて書翰を認めた。僕は僕の決意を告げねばならぬ多くの先輩知己を有する。さりながら僕はその總てに向つて僕の決意を表すべく、最早餘裕を有たぬのである。僕は當面眼前の必要に迫らるゝに非ざる限り、一切の時と力

し給はぬやうに！、先輩は苦笑せらるゝ而已であつた。僕は先輩の援助をも受くる事なしに、徒手空拳を揮つて、東北の野に戦ふを愉快に感じた。

僕の決意は日ごとに堅くなつた。再び三たび郷里に交渉した。廿七日の夜半遅くなつて御影に歸つたら、一封の書翰と時間外の急電とが、郷里の姉から届いて居る。先づ書翰を開けば、細々と立候補の不可なる所以を縷述して居る。義兄が留守なので、姉が執筆したものである。情理を盡した勸告だ。併し僕の決意は秋毫もその爲めに動かなかつた。只末段の一節に僕は涙を誘はれた、老いたる父親の病氣を知らして來たからである。電報を開封するに及んで、僕は思はずアツと叫んだ。

時間外電報の文句は簡單であつた、併し含蓄は無量であつた。曰く、「父大反對思ひ切れ」！書翰と電報とを綜合して思ふに、父君は確かに反對らしい。是れのみは全く意外であつた、只是れのみは實に意外であつた。千萬の勁敵我が前に現はるゝとも、僕は斷じてひるまずと決意した。併し只一人、老いたる父君の反對だけは實に意外である、意外の苦痛である。僕は書齋の中を右往左往して且つ考へ且つ悶えた。兄弟姉妹の數多い中に、父の僕に對する信頼は異常なものであつた。僕は三十七になる今日まで、只一度の外は、父から叱られた事は無い、幼少の時代ですから、父は一たびも僕を叱られなかつた。僕は父を信じ、父は僕を愛して、互に一たびも反對をした事が無い。父の反對！何たる意外ぞ。而かも僕が一生一代の大決心をした此の場合に父の反對——大反對を受けやうとは全く意外である。先輩の反對も僕は意に介せずして猛進する、親戚故舊の反對も僕の邁往を妨ぐるに足らぬ。只老いたる父君の反對、是れ一つが無限の苦痛である。父に代つて姉の書いた反對の理由は、情理明白

「立候補大賛成！」僕は百萬の援軍立ちに至るの感を以て遙かに弟の同情に感謝した。彼れ一人の賛成ある限り、親戚故舊悉く我に背くも、猶ほ爲しあるに足ると思つた。僕は弟の書翰を封じて、靜かに上帝に祈りを献げた。彼女も微笑して弟の前に感謝したに相違あるまいと思つた。

「父大反對思ひ切れ！」

一月二十五日、僕は學院に於ける親しき先輩西川中學部長を通じて辭職の意を關西學院に通じた。餘りの唐突に我ながら學院に對して、「濟まない」といふ感じを禁じ得なかつた。高等學部のデーナたるベーツ君は折柄旅行中であつたが、吉岡院長は快く僕の決意を聽いて呉れた。流石に院長は寛大で飽くまで紳士である。僕に對して一言の不満も疑惑もなく、却つて激勵と注意とを與へられた。僕は意外の喜びを抱いて御影の書齋に歸つた。その夜であつたか郷里の姉から電報が來た。候補を合せよとの勧告である、僕は少しも心に介せなかつた。委細の理由さへ判明すれば、賛成するに相違ないと信じたからである。僕は安心して熟睡した。

一月の廿七日、東京から僕の先輩が見えた。僕は此の信賴し尊敬する先輩に對して立候補の志を語る義務がある。けれども此の先輩は黨派關係上、僕の立候補を苦痛とせらるゝ理由がある。僕は斷じて此の先輩の援助を強ひずと最初から決心して居つた。只多年の恩誼上何等の通告もなく運動を始める譯に行かぬ。僕は先輩に對する禮儀として兎も角も決意を告げねばならぬ。果せるかな先輩は僕の決意に對して長大息を洩らされた。殆んど師弟の情誼あるに拘らず斷乎として援助を與へ得ざる事情を明白に語られた。素より豫期せる所である。僕は只願つた、「決して御援助は願ひません、只妨害は

四個條の辯明

僕は後ち二月十四日、始めて郷里氣仙沼に於て、立候補の政見發表演說會を開いた時、公會の席上で、父の反對意見に對する僕の立場を聲明した。友人諸君の理解を求むる爲めに、僕は今簡單に之を諸君に報告する。

第一に僕は確かに學者の喜びを味ひ誇りを感じずる一人である。けれども僕の本心は單に書齋で満足が出来ない、書齋の精神を街頭で實現する、そこに僕本來の要求がある。經世家は哲人ならざる可からずてふプラトーンが共和國篇の精神は、僕の今猶ほ共鳴を感じずる處、僕の性格は如是の生活を要求する。僕が立候補の動機を以て、小さき名譽心、虛榮心の發露を見る人ならば、そはその人の勝手である。毀譽褒貶以上に、僕は自らの確信によつて生き且つ死なんと欲する者である。僕は名譽心無しとは言はぬ、否、大いなる名譽心がある、斯國斯民の爲めに生命を獻ぜんとする大いなる名譽心は僕を動かして居る。僕は不肖ながらフエームの爲めに囚はれはしない、公人としてのオーノアは僕の素より求むる處、併し世間のオーノアよりも僕は識者の是認を愛する、僕は神明の前に於ける光榮を以て尊しとする。小さき名譽心に囚はれたりと僕を見る人々は、請ふ遠慮なく僕を棄て去れよ、僕の大望心に同情せらるゝ人々は、請ふ來つて僕を助けられよ。僕は學者の心を以て、經世の大業に參加せんと欲する。而して將來の日本は、確かに僕の如き立場の人物を要する、僕は「我より後に來るものは、我より大なるものなり」てふ確信を以て、先驅者の一人たらむのである。群小の褒貶は、僕に於て過眼の雲烟に等しい。僕の畏るゝ所のものは、只識者あるのみ、神明あるのみ。僕は今日に

であつた。僕の立候補が普通尋常の決意であるならば、僕は一言もなく承服したかも知れぬ。書翰の大意は四箇條に約せられる。第一に汝は學者を以て身を立てやうと言つたでは無いか、汝の弟は實業を以て立つべし、汝は學者を以て立つべし、夫れが汝等兄弟の天分では無いか。今突然にも候補を名乗つて起つ、人々は汝を評して何と言ふか、學者の自分でありながら、名譽心に驅られて選舉運動を始めたと笑はれるやうな事がありはしないか、過つても世間の嘲弄を買ふやうな事をしてはならぬ。第二に汝は妻を失つて百日の祭も経ない身では無いか。深く身を慎しんで逝ける者の爲めに供養を勤む可き筈である、今頃選舉騒ぎをやるのは、汝の本分に背いては居ないか。第三に汝は選舉運動費を何處から工面する積りであるか、自ら額に汗を流して蓄へ得た金を使ふならば、別に苦情も言はんのであるが、他人の金を使つて運動などして、果して後腹が痛まぬだらふか、そんな金を遣つて、一生を過つやうな事があつてはならぬ。第四に汝は餘り健康の勝れぬ方であつた、親戚故舊皆汝の健康を氣遣つて居る、時もあらふに二三月の時候は、東北で最も寒氣の強い季節だ、若し萬一病氣にでも冒されたら何うする積りか、心配に堪へない、是非とも此度は思ひ切れ。父君の反對理由は、此四個條で在る。僕は書翰と電報とを手にして、熱淚の滂沱たるを禁じ得なかつた。僕は父親の愛に泣いた。僕は父親の思慮分別を今更忝けないと感じた。誰が斯くまで痛切に僕を思つて呉れやうぞ、僕は父君の反對を涙の中に感謝した。さりながら、實になりながら、僕の決意は最早動かすべからず、僕の決意は金鐵よりも堅い。僕は父君の反對すらも、敢へて犯すの決意を固めた。僕に取つては殆んど不思議の決意である。二十七日の夜、流石に僕は眠れなかつた。

い。全く友情の結晶である、義侠の發露である。僕は喜んで此金を用ゐる、友人と共に之を用ゐて、最後には始末を明かにする考へである。報告の出来ないやうな金の使ひ方は、一錢と雖決して使ふまいと思ふ。僕は金を使ふ術に於て極めて拙劣な方である、僕は自分自身で一切金を取り扱はぬ方針を取りたい、僕は別に會計主任を置く、而してその始末の一切は直接選舉に關係ある若干の親友に明瞭にして置く、他日機會あらば、世間の參考にも提供したいのである。僕はこれだけの用意と覺悟とを以て、友人の義金を用ゆるのである。僕は深く／＼友人の高誼に感謝する、只その出所を明かにしないのは、友人の迷惑を思ふからである。決して後ろめたい事も無ければ、後腹の痛む心配もない。出來得可くんば僕は模範的に、極めて少額の限られたる金を使つて、而して選舉運動はやり得るものとの新例を開いて見たいのである。僕が理想選舉の眼目の一つは、金の出處の正しい事と、その額の少き事である。僕は多くの親友と共に此一事に注意を怠らぬ考である。

第四に健康問題に就ては、僕に一種の確信がある。僕は天の召命と感じて候補に立つたのである。若し天命僕に在らば、天必らず僕に與ふるに健康を以てせらるゝに相違ない。若し運動の最中に當りて、僕が病疴に冒さるゝ如き不運に會はん乎、その時こそ僕は天命我に在らずと觀念すべきである。天命を信ずるが故に、東北の寒氣を意としない。吹雪の中にも寒風の中にも、僕を護る天地の溫情ありと信じて、僕は愉快に戦ふのである。僕の健康の季候に堪ふるや否やは、やがて僕の志の天意に適ふや否やを驗する一つの試金石とも言へる。

僕は斯の如き演説を郷黨の前に試みたのであつた。僕の愛する父君も、僕の志を諒として遂には喜

至るまで、學者としての造詣も自覺もなかつた。今日以後、僕は鮮かなる抱負を以て、ライフ・ウァークに向つて勇往邁進する。

第二に僕は妻を亡つて猶ほ百日も経たぬ。けれども僕の逝ける妻は、決して僕の形式的な哀悼を喜ばぬのである。寧ろ此度の立候補を最も喜んで助けて呉れるものは、天上の彼女に相違ないのである。僕が立候補の直接動機は、寧ろ彼女の遺せる激勵であつた。「理想を決行せられよ」、てふ彼女の遺言無かりしならば、假令時勢の刺戟強しとは言へ、僕がライフ・ウァークの自覺も斯く明瞭には現はれなかつたかも知れぬ。僕は彼女の靈に對する最大の奉仕として供養として、今最後の戦ひを戦ふのである。僕は單身で戦ふのでは無い、彼女と共に戦ふのである。彼女の靈は僕が選舉戦のガーデアン、エンゼルスである。單に家庭の側から見れば、僕の選舉運動は、或る意味に於て彼女の爲めの弔ひ合戦とも言へる、何の迷ひも無いのである。

第三に僕の選舉運動費は、確かに僕の自ら額に汗して得た、貯蓄其者では無い。僕には殆んど一毫の貯蓄も無いのである。僕は言葉其儘の寒措大である。けれども僕は猶ほ多少の精神的貯蓄を有して居る。僕自身の衣食の爲めならば、金を出す人も無いであらふ、求むる事も敢へて爲し得ない。併し公けの運動の爲め、僕を政界に送り出す爲めには、千金を吝まぬ友人がある。僕は久しく迷うて居つた、而かも此度は大決心をした。僕の志を諒とする先輩友人の中に、僕の簡單なる電報一つに依つて、僕の爲めに運動費を贈る者あるのである。僕は私の爲めにあらず、公の爲めとして此金を敢へて用ゆる積りだ。決して政府の機密費でも無い、政界に於ける先輩の爲めにする所ある政略的補助金でも無

御影の書齋を出る時、三通の信書が僕の手許に届いて居つた。僕は之を開封する暇もなく汽車に乗り込んだのである。汽車は動き出した、左様ならを諸君に告げて、静かに軽いベツトの上に疲れた身體を横へながら、僕は三通の信書を取り出した。僕の心は異様にときめいた、宛ら婚禮の夜の鐘の音を聽く花嫁のやうに、宛ら出陣の太鼓の響に胸轟かす若武者のやうに。僕は身震ひしつゝ封を切つた。三通の信書、そは何人の手紙であるか。僕は讀み去り讀み來つて、感謝し、苦笑し、安心した。再び三たび讀みかへして、信書をポケットに收むるや否や、僕は微睡の夢に落ちて仕舞つた。

目ざめて汽車の窓を推せば、關八州は左右に開けて居る。函根の山に差し掛らんとして、近く芙蓉の峰を見る、裾野にも猶ほ雪があつた、碧の空はうす霞して、溫い光りは麥の畑に動く。春が來た、春が來た、春の香りは天地に溢れて居る。生命の春は蘇生^{よみがへ}つたのである。東京は漸く近いた。わが身の爲めには樂園の恢復、國の爲めには宮淨め、僕の事業は之から始まるのである。

——是れ僕が選舉運動前記也

謹んで此の拙き一篇の告白書を

友人諸君と亡妻とに献く——

んで賛成せられたのであるが、一月廿七日の夜半、「父大反對」の飛電に接した時は、僕に取つて生涯忘る可からざる一種の沈痛な感動を催したのであつた。

都 上 り

一月廿八日の早朝、僕は關西學院に行つた。最初は學院の當局に丈け辭意を開陳したまゝで、學生諸君には他日公表して善からふといふ院長の注意であつたが、同僚の意見もあつて、此日急に學生諸君に告別する事となつた。寒雨降りしきる日であつた。僕は一年有半親しみ慣れた學生諸君に向つて、突如たる別意を述べねばならなかつた。此一事僕に於て中々の苦痛であつたが、僕は信ずるがまゝ思ふがまゝ、僕の胸中を披瀝した。告別演説は一時間半にも渡つたらうか、僕は何かの機會あらば、記憶を辿つて之を書き残したいと思ふ。僕が此日の演説は、兎も角も僕自身の生涯に取つて、大いなる意義ある者であつた。

御影の書齋に歸つたら、學生諸君が來て既に手荷物を持へて呉れて居つた。階下の一室には、僕が二十年來の友島地雷夢君が病輕からずして臥して居る。僕は暫しの暇乞もそこへ、折から晴れ渡る月明の空を仰ぎつゝ、三の宮停車場に駆けつけた。發車時刻まで僅かに二分、危うく列車に身を投じた。その瞬間「まあ善かつた、これが先生の運命かも知れぬ」と囁く誰かの聲を聞いた。

學院の諸君には一應告別した。けれども神戸大阪に於ける先輩友人の總てに對して僕は告別の時を得なかつた。否、告別しやうとは最初から思つて居なかつた。何となれば僕は御影の宿もその儘にして東上した、孰れ選舉がすめば改めて告別に來る考へてあつた。

の奮闘を試みつゝあるのかも知れない。先達て或る會合に於いて大隈伯爵より悲壯の言を聞いた。『日本國民は八十になる老人をしてこの劇職に當らしめてゐる。老人虐待ではないか。三十、四十になる少壯者は何をしてゐるのであるか。』と。誠に名言である。是等の老先覺の活動は少壯者青年に對して何等の警告、何等の刺戟を與ふるのであるか。

説を爲すものがある、『大正の日本に於いて偉大なる老先輩の志を繼ぐ者は今日の五十六十の年輩の人にあらざして、少壯者でなければならぬ。何となれば第一流の老先覺に次ぐ所の人々は健康に於いても、思想に於いても、實行に於いても雁行することはできない。これ時勢の然らしむるのである。明治維新の際は今日の老先輩は一大理想を實現せんとしたる少壯者であつた。然るに直ちにその後を受けたる人々は餘りに實際的施設に奔命してその理想を涵養することを怠つたのである。故に人物識見に於いて著しく老先輩に劣るが如く見ゆるのである。されば老先輩凋落の後を襲ふものは大正の少壯者でなければならぬ』と。無論こ

れは一説に過ぎぬ。これは誠に少壯者の立場より吐かれたる議論である。否な、これが議論に止らずして、實行せられんとを希望するのである。

基督教界にも第一流の先輩は五十と六十の間にある先輩が多い。吾人は先輩の功勞に感謝する。併しながら聞くとところによれば種々なる協議會に於いて意見が先輩の口より出づる時は、何等の討論なくして少壯者はこれに盲従するといふではないか。先輩を尊ぶは善し、併しその爲めに何等かの新しき意見も計畫も發表し兼ねるに至りては餘りに遠慮勝ち過ぎたるには非ずや。先輩は益々元氣であれ、少壯者も青年も悉く元氣であれ。日本國民を擧げて皆潑刺たる元氣ある男女たれ。而して大正維新の實を擧ぐるが爲めに協力しようではないか。

□協同傳道に對する觀察

福音主義を標榜する基督教新教各派は此の度協同傳道を東京市内に於いて試みた。佛教界に於いては開帳やらお祭やらで景氣を付くる際なれば、



時

評

□老先覺の復活

明治維新は當時の青年の手によりて成就せられた。大正維新も亦少壯者の手によりて成就せられなければならぬ。この事は獨り青年が唱へたるのみならず。一般の人々が唱道したる議論にある。

然るに大正維新は却て老年の活動を現出してゐるではないか。大隈伯爵は七十八歳の高齢を以て首相の重任に就いて、政界の大刷新を斷行した。村田水産翁は老軀を提げて全國を遊説した。板垣伯も亦舊自由黨の政友に引き出されて老後の思ひ出にひと働き爲兼ねまじくも見える。實業界に在りては森村市左衛門氏今尚ほ矍鑠として全國に亘りて傳道旅行を試みつゝある。少壯者をして愧死せしむるに足る。澁澤男爵も亦日本實業界の代表者

として國際的活動を試みつゝある。政治界と教育界と宗教界とに亘りて活動する江原素六氏の如きも元氣なかゝ旺盛である。婦人側を見れば日本矯風會の矢島梶子女史八十を越えて尚ほ社會風教の運動を怠らない。近頃市内の電車にて記者は偶然棚橋絢子女史に會した。女史は先達て喜字の祝典を挙げられたのである。しかも女學校に教へ、愛國婦人會、佛教婦人會、戊申婦人俱樂部等に關係して日夜活動せらる。而して至りて健全に見受けられた。大阪の廣岡淺子女史は昔ながらの洋裝姿にて基督教の傳道に熱中せらる。年と共に思想信念共に進歩的なる甚だ祝すべきところである。

老人の活動は喜ぶべし。畢竟するにこれ日本民族の名譽である。燈火滅せんとするやその光を増すが如く、是等の活動的人物が人生に於ける最後

を割いて出席し且つ一場の講演を試みられたることを感謝する。大隈伯は基督教の傳道は量よりも質に於いて成功した、また基督教は男女道徳を刷新したことに賞讃の辭を惜まれなかつた。併し最後に歐洲の基督教國の神觀に缺點あるがために此の度の大戦争が突發したのではあるまいかと言はれたのは大なる暗示であつた。若し基督教は單に福音主義などといふ事のみを高調する時は排他的となり、挑戰的となり、宗教的葛藤を惹起す杞憂はあるまいか。日本に於ける基督教の運動は歐米に於ける無益の宗教的軋轢を超越したいと思ふのである。そのためには一層包容的寛容的精神が盛に起らなければならぬと思ふ。協同傳道當局者が帝國ホテルの晩餐會に吾人を出席せしめられたる好意に感謝を表する、願はくば此の好意を思想の方面にまで擴張して、歐米に於いて實現せられざる寛容と全容との先例を示されんことを吾人は希望するのである。

最後に吾人は新聞の廣告傳道は甚だ善き思ひ付きであると考えふ。文書によりて道を傳ふることは

現代の文明に適應する新形式である。その文字と内容に對しては吾人の要求あれども、先づ吾人はその成功を祝するものである。

世間は廣く人は多し、種々なる方法が必要である、吾人は協同傳道の益々成功せんことを祈るのである。

□立憲政治の根本

騒々しかつた總選舉も落着した。政府與黨の大成功となつて終つた。政友會が大打撃を蒙つたことは同會刷新のためには祝すべきことである。言論の勢力が案外に強かつたことは祝すべき事である。殊に總理大臣自ら陣頭に立つて論戰を試みたことは日本の憲政史に於ける新記録である。

併しながら立憲政治の根本は甚だ微弱なるを感ずるのである。或る人の説に依れば明治四十五年に於いて政友會の候補者當選比例は六割二分であつたさうである。而して今回の選舉に於ける政府與黨の當選比例も仍り六割二分であるといふことである。即ち政權を有して選舉に臨めば必ず有利

基督教に於いてかゝる活動を試みるは誠に當を得たることである。世間は廣し、種々なる人間が居る。この衆生を濟度するには種々なる宗派と形式と方法とが必要である。福音主義諸教會とその信條とその儀式とに大なる使命あることを吾人は疑はない。重ねていふ、吾人はその成功を祝する者である。

併しながら、基督教は日本民族に何を傳へんとするか。これ大なる問題である。基督の使命は基督自らの性質を明にするためにあらずして、人類の性質を明にせんがためであつた。基督は「自分は神なれば我を拜せよ」とは要求しなかつた。心靈の堂奥のうちに神々しき光が煌き渡ることを彼は教へたのである。基督教の傳道は中心點をこの事に置かなければならぬ。この一點をのみ高調すれば基督教の使命の大部分は果されたものである。福音主義とか、自由主義とか三位一體とか唯一神教とかいふて争ふたることは此の中心點を逸したる神學者の議論に過ぎなかつた。吾人は内的光明を信ずる心靈の力と秘密を信ずる。心靈を逸して

天地の大生命と交通し得ることを信ずる。此の模範を示したるものは基督である。故に基督教の傳道は此の一點に集中すれば宜い。他の宗教の惡口雜言を吐く必要はない。俄かに信者を製造する必要はない。最も大切な事は自ら此の光を味ひ、これを身に體し、知らず識らずの間に此の光を周圍に放つことである。『桃李言はざれどもその下自ら蹊を成す』。内なる光のある所には必ず善良なる感化が行はるゝと思ふ。これ傳道にあらずして何ぞや。然るに舊き神學に拘泥して基督教の形骸を以てその眞髓に代へんとするは一時の景氣附けにはなるかも知れないが、果して永久の効果を收め得るや否や。吾人は三度繰り返して協同傳道の成功を祝す。併し吾人の希望も亦斯くの如し。

帝國ホテルに於ける名士招待會は吾人も出席したる光榮を有したのである。これを一種の懇親會と見れば成功したる會合であつた。併しながら所謂名士に基督教を傳へんとするの會合であつたとすれば果してどれだけの成功ありしや否や。吾人これを怪しむ。吾人は大隈伯が、その繁劇なる時

である。教育の刷新も必要である。文藝の努力も必要である。所謂政治家のみの奔走と空言によりてのみ立憲政治が實現せらるゝと思ふは大なる空想である。政治家は宜しく謙遜なる心を以て眞理を尊敬し、その天職を果さんがために修養し工夫するところがなければならぬ。

□婦人と政治

大浦内務大臣は婦人が政治運動に従事するを以て憂ふべきであると言はれたと新聞紙に傳へられてある。果して然るや否や。日本の婦人は引つ込み思案の人が多い。五六の婦人が政治運動に従事したればとて大した弊害は起るまいと思ふ。吾人は更に進んで治安警察法を改正して、婦人をして政談演説を聴くの權利を得しめられたきことである。婦人は自由に新聞雜誌を讀むことができる。筆を透して記されたる政談は讀むを得べくして口を通して述べらるゝ演説は聴くことを得ずとはこれ何等の矛盾ぞや。婦人と雖も日本國民である。然り彼れ等は日本男子の母であり、妻である。彼れ

等が政治を知らざるは日本民族の大損失である。宜しく婦人をして自由に政談演説を聴かしむべしである。若し然る時は政談演説會そのものゝ品位を高くすることができると思ふ。婦人の出席は確かに政談演説會の殺風景を緩和するの力があると思ふ。また暴行を索制し豫防し得る感化があると思ふ。吾人は婦人の識者が提携して政談演説傍聴の權利を獲得するの運動を起されんことを希望するのである。また大浦内務大臣も婦人に關しては進歩的方針を執られんことを希望するのである。

□徳川家康を憶ふ

徳川家康は今を去ると三百七十五年前即ち天文十一年、十二月二十六日三河の岡崎に生れた。彼は元和二月四月十七日江戸城に於いて死した。即ち今年はこの偉人の三百年祭である。芝の増上寺に於いてはこの爲めに大祭典を舉げた。餘興としての大名行列は満都の好奇心を動かした。吾人は東京に住するが故に此の偉人によりて開拓せられたる文明の恩化に浴すると甚だ深いのである。こ

なのである。政友會が政府の干渉を非難するがこれ即て政友會がこれ迄試み來りし所の方法に外ならぬのである。もし現政府の方法に非難すべきものがあればこれは政友會政府も嘗て有したる缺點に外ならぬのである。要するに國民の精神に尙ほ未だ官尊民卑の思想が非常なる潜勢力を有してゐることである。此の氣風が一新せられざる限りは立憲政治は實現することはできない。立憲政治は國民の個人的自覺を基礎としなければならぬ。而して此の自覺は尙ほ甚だ幼稚なるものである。

代議士は國民の代表者でなければならぬ。然るに此の度の總選舉に於いては黄金の光によりてのみ當選したる候補者甚だ多きは慨歎に耐へない。吾人は必ずしも富豪を排斥するにあらざれども單に何等の理由なくしてたゞ富豪なりといふ理由に基いて當選したること喜ぶべきことではない。しかもその數甚だ多きに至りては益々憂ふべきである。今日の新代議士中選良に乏しからざれども、中には代議士を一種の名譽職と心得て、當選を期したる者が少くない。代議士は名譽の職である。

これは國民の權利を代表するが故に名譽なのである。この本分を盡す代議士にして始めて名譽を擔ふことが出来るのである。然るに多くの代議士中にはその肩書を買はんがためにのみ選舉を爭ふた人が少くない。故に選舉人も代議士を選ぶことは自己の代表者を選ぶに非ずして自己を踏み臺として名譽を得んとする人の後押しをするのだのと心得てゐる。選舉の腐敗は皆これより來るのである。

立憲政治は極めて複雑なる政治である。教育、宗教、思想、經濟等の要素がなければ完全なる立憲政治を實現することは到底不可能である。この總選舉によつて明治四十五年のそれよりも多少の進歩を現じたとはいふまでもない。要するに日本國民は聰明なる國民である。指導の宜しきを得れば必ず立派なる憲政國民となるにちがひない。吾人はこの度の總選舉によりてこの希望を與へられたこれ吾人の大なる喜びである。併しながら現状を以て決して満足すべきではない。否な悲觀しなければならぬ多くの實例を吾人は見聞したのである。産業の進歩も必要である。宗教の改革も必要

唯一館たより

△萌え出た緑の装、訪れて来たのはおもはせぶりの春雨である。
和やかな点滴のおと三つ二つ、窓のうちは飽までものしづかだ。
△例によつて重なる説教講演を左に掲ぐ。

△三月廿八日(日曜)「生命の干満」内ヶ崎氏、「總選舉に就ての感想」武田氏、「總選舉に現はれたる國民生活」内ヶ崎氏、

△四月四日(日曜)「永遠の春」内ヶ崎氏、「靈弦」古野氏、「復活の宗教」相原氏、「大戦中の思想」三並氏、午後二時から弘道會總會を開く、會計報告、豫算、役員改選、獨立教會設立の件を協議し役員改選あり、會長副會長會計は重任し、新たに名譽幹事として相原一郎介氏、理事補缺として大田眞一氏が就任せられた。

△四月十一日(日曜)「理想の力」内ヶ崎氏、照憲皇太后の御懿徳」武田氏、

△四月十八日(日曜)「天地の富」内ヶ崎氏、平和と帝國主義」平山氏、「軍備と平和主義」太田氏、「徳川家康論」内ヶ崎氏。

△會員の中には試験期に入つた人々が多いので、日曜はなんとなく静けさがありましたやうに思はれる。願はくばそれらの人々の上に喜ばしい結果の來らんことを。

△四月二十五日(朝)内ヶ崎氏の説教「無限の希望」があつた。

△四月二十五日(夜)午後六時半からタゴール講演會があつた。

△タゴールの劇と詩(吉田絃二郎氏)△タゴール根本思想の批判

(三浦關造氏)△タゴールの人格と生活(木村龍寛氏)△タゴール研究の意義(内ヶ崎作三郎氏)の講演があり盛會であつた。

編輯たより

△本號は「英國文化號」とするつもりであつたが、恰度近々印度の詩人、哲學者ラビンドラナアト・タゴール氏が來朝するといふことであるから、同氏を迎ふるの準備として、我が思想界や一般の人々にタゴールを紹介するつもりで、豫定を變更して「タゴールと印度文化號」とした。常に新思想の紹介と批判とを怠らぬ本誌の使命として、讀者諸君の必ず諒とせらるゝところであらうと思ふ。

△本誌に玉稿を寄せられた佐野甚之助氏は久しくタゴール邸にありて教鞭を執られた方である。同氏の「タゴール先生と自分」は私たちのタゴール研究發表に特殊の興味を添えるものである。

△本誌の使命を助けんがために、特に本誌のために御執筆下された方々に深い感謝の意をさゝげたい。

△本誌にはまた珍しく鼎浦氏の長篇文をかゝげることができた同氏の名文は我が思想界に於ける一異彩である特に本號所載の氏の一文は近來稀に見る悲痛の告白である。誌友諸君と共に鼎浦氏のこの言を聽くを得たることを感謝したい。

△小山東助氏は自今連續して本誌のために執筆せらるゝ筈。尙同氏は目下本郷大學前大津旅館に止宿中である。

△三並氏は病氣引き籠り中。全快の早からんことを祈る。

△内ヶ崎氏は目下八百ペーザ大の著書執筆中。

△岡田氏の「静觀と思想」が警醒社から出た。また氏の「我が斷片」の英譯は六合叢書として本誌發行部から出た。

△野村氏は静養のため歸省、目下湯野温泉に滞在中。

△吉田氏の「タゴール聖者の生活」が天弦堂から出た。尙ほ同氏は演習召集のため歸省した。

れ一言せざるを得ないのである。

家康は信長の明敏果斷、秀吉の豁達大度を受けて沈毅善謀の名將であつた。戰國時代には豪放壯快なる武將が多かつたが、家康の如く愼密自重たる人は甚だ少ない。これ彼が徳川幕府三百年の基を置いた所以である。

彼は六歳の年より二十歳に至るまで出て、織田氏及び今川氏の人質となつたのである。彼は具さに艱難辛苦を嘗めた人である。故に彼れは忍耐の人であつた。寛容の人であつた。これ彼れが天下の人心を集攬したる秘訣であつた。また他日天下を取るに及んで天台中興の僧天海僧正を重用し、或ひは禪僧崇傳に聽き或は儒者林羅山を用ひて文化に意を用ひたること、彼れの經世家としての偉大なることを證するのである。基督教に對しては彼れは秀吉の方針を襲ふたのであつて、當時の國情は止むを得なかつたのであらう。此の偉人を追懷するはこれよりも更に大なる人物の現在及び將來の日本に實現するの時を待つ希望に伴はるゝに非ざれば、多くの利益はないであらう。願くばこの心

を以てこの偉人を追懷し紀念するを得しめよ。

(以上甲島生)

著者は敬虔な心情を持ちて、その觀たるところを記し、想ふたところをつづつた。そしてその一書が成つた。著者の刹那刹那、時々の人生は氏の明かな理性の上に懐しい氏の人となりの薫りを以て描かれてゐる。著者の思想の傾向はこの一書のうちにうかがはれる。

『この傾向は或人々とは共鳴するであらう。また或人々には反感を起させるであらう』と言つてゐる著者の言葉は我が思想界に對して殊にクリスト教界に對して深い暗示を語る。(價〇、八〇)

△純一生活

吉江孤雁氏著・早稻田文學社發行

我が思想界で片上氏と吉江氏の思想の傾向には餘ほど共通した點を見出すことができた。けれどもまた二人の間には自ら異なつた點が發見せられる。片上氏の「無限の道」と同時に吉江氏の「純一生活」が生れたのは一寸面白い現象である。二つのものを比較して行くとともにそこに色々な新しい興味ある問題が起つて來るであらうと思ふ。けれどもこゝではそれ等のことは論ぜぬ。

氏は「解放」を要求する人である。人間生活の解放と靈の解放とである。「民集に向ふ」心と、靈の目醒めを求むる心とこの二つの傾向を一つにして眞の以人为本主義の生活を索めようとするのである。

この現在の刹那に十全の生活を發見せんがために靈に目醒めたる者の生活を要求するものである。『我々の現在の生活きながらをして、永久持續するとも悔ひなき喜悅の十分の意識のなかに營ましめよ。それが無限生活の第一歩でなくて何であらうか。靈的生活の第一の目さめてなくて何であらうか。』

著者は私たちに向つて叫ぶ、『奇を求めてグロテスクに墮する人の姿と、眞の願ひを抱きながら力弱く苦惱するデカダンの生活としからずば一節に理智の命ずるまゝに相對的世界の中に出沒する懸念なる誇りと、それ等を捨てゝ我々の日常生活をしてさながら

に純なる眞の要求に基いたる生活たらしめよ。我々をして一層自由なる、眞に一層自由なる世界に住せしめよ』と。

しかしして氏は私たちの靈肉關係については最も明かに主靈従肉を説くものである。氏は決して靈と肉とを同じレゾルに立たせない。氏は言ふ『肉は靈に伴ふ忠實なる従僕である。その僕者を酷使し或は増長せしめ、しかししてその反抗復讐に悩まされ或はそれを過重視せんとする。それはいまだ官能解放の時代の夢は捉はれてゐる現象である。それ以上の生の解放をなさざるが故に苦しむ状態である。最後の解放の未だ來らざる中途の悩みである。』

私たちはかくの如く眞面目な人生思索者の大膽な信仰を聴くことをうれしく思ふ。装幀また内容にふさはしいものである。(價〇、九五)

△個人主義思想

相馬御風氏著・天弦堂發行

著者は最も力ある個人主義の思想の宣傳者である。思ふに近代生活の解放はその源を個人主義の思想に發してゐる。外的權威から、社會から、舊い習慣から思想から、近代の生活を解放せしめようとしたのは個人主義の思想であつた。私たちの近代の先覺者は怖るべき苦悶の底から個人の權威を主張した『あるがまゝの現實があるがまゝに觀じて、而も怖れず、逃げないでその上に自由に活躍し得』た者は彼れ等であつた。『最も現實的にして、最も思想的なる者は彼れ等であつた。』最も否定的で、最も肯定的な生活者は彼等であつた。

私たちの個人主義の問題は今後尙ほ一層深く突き込んで行かなければならぬ。從來の個人主義思想を紹介すると共に著者の見解をも加へたれば本問題研究者にとりて興味ある好參考書であらう。個人主義者としてのキヤルケガアル、イブセン、ニイチエ、ジョーヂ・ムーアの外に餘り紹介されなかつたマクス・シュテルナアに就いては特に詳細あらんことを努めたるものであれば、シュテルナア研究としても良き參考書である。著者一流の纏つた書き方は讀

新刊批評

△無限の道

片上伸氏著・日社發行

著者が最近二年ばかりの間に書いたものを集めたものである。著者の思想の立ち場は今日の我が國の思想界に一つの權威として認められてゐること、及び著者自身が獨特の進路を築いて歩いてゐることも人の知るところである。著者が自重してその片言隻句をも苟くしない態度は私たちがいつも床しさを以て尊敬してゐるところである。收むるところ「薄明の中より」「生命の培養」「無限の道」「創造といふ言葉」「未知の世界」「自由解放」「持たぬ寶」「人間の本性」「思想の力」「南の窓にて」等十數篇の論文は沈靜より沈靜に、冷徹より冷徹に、未知の世界、無限の道を辿り行く眞率な心情と濕ひの深い著者の人格の薫りにより一貫されてゐる。著者は最も自己を信愛し信愛の力を所有せんことを努めてゐる。そして自己信愛の力は本然的に私たちの内にひそめるものであつて私たちはそれを虐けてゐた、それをいぢめてゐたのであつた。私たちはこの内なる力を眼さめしめなければならぬ。

眞實に生きるといふこと、眞實に自分を愛するといふ心持は言説を絶した力の調和である。『生命が渾然たる調和を成して充ち溢へもしくは溢れ動くところに生きがひがあるうれしさと感謝の念が湧く』。そしてこの心内の力の調和は私たちの自己信愛の念がほんとうに私たちの内に眼さめるところから生れる。それは附け焼き双的の外部の争闘や葛藤からは生れない。闘ふといふことは自己の弱いことに對して、囚へられてゐるこゝろに對しての闘ひでなければならぬ。著者は内界の開拓に向つて私たちが最つとく強い、ごまかしのない、妥協のない、勇者でなければならぬことを高調する。

けれども私たちは争闘の次ぎに來るべき世界を忘れてはなら

ぬ。トルストイもイブセンも偉大であつた。彼れ等の闘ひは雄々しかつたけれども私たちは更らに彼れ等の争闘を争闘する以上に彼れ等が持つてゐなかつた世界にまで進まなければならぬ。トルストイやイブセンの争闘、反抗の生活の後に來る未知の國これや著者が索めんとするところであり私たちが求めんとするところである。

神秘、直感の世界と冷徹な批判の世界との二つを持てる著者の言は、眞摯な人生問題の思索者にとりて暗示するところが多い。紙質と装幀の佳なるも良し。(價〇・九〇)

△靜觀と思想

岡田哲藏氏著・聲麗社發行

著者は我が宗教界にあつて最も新しき思想と、純眞の思想とを抱ける人々の一人である。氏は飽くまでも冷かな理性を以て萬象の底に徹しやうとするものである。本著集るところの論文二十七篇最も著者の超世俗的な哲學的な面影を偲ぶに足る。本誌の愛讀者諸君は嘗て本誌上に掲げられた氏の「自由人の崇拜」や「悲哀の宗教的使命」等によりて、氏が尋常の學究の徒でなく、平凡な宗教家でないことを知られたことであると思ふ。氏は常に宗教に對して公明な理性の命ずる高等批評を加ふることを躊躇しない。人生問題に對しても亦自一流の見を持して動かない所に一家の風をなしてゐる。

今日の宗教界の人——氏自身にはこの言葉は不服であるかも知れぬが——氏ほど藝術を尚び、現代思想に接觸の多い者はあるまい。従つて氏が時折に物する言論なり、文章なりは往々にして當然の宗教家たちのために無實の罪を着せられることが多い。ひとり日本に限らず米國にも歐洲にも十六七世紀ころの頭を持った宗教家が随分多い。そんな人々にとりては著者の如きサタンの徒弟であるかも知れない。

著者は舊き宗教思想界を打破する信從なサタンである彼れは敬虔なサタンであるかも知れない。

としての言説は常に私たちが注目を見たいところである。本書は未來派及び立體派について一般的知識を與ふるに、好個のものである。挿繪「念頭を去らぬ踊り子」以下九葉何れも研究に便である。(價、五〇)

△タゴールの哲學と文藝

吉田絃二郎著、大同館發行

この本の批評は三並氏に書いていたゞゞ答でありましたが、生憎同氏は不快で筆を執られることができなかった。自分で自分のものを評するのも妙ですから、批評は他日していただくことにします。

△ニイチエ悲劇の出生善惡の彼岸

金子馬治譯 早稻田大學出版部發行

ニイチエは早く我國の思潮界に紹介されたけれど其誤り傳へられて居るとも甚しい。ニイチエの眞精神は決して我國從來の或紹介者が意味した様な下劣な本能主義でも自然主義でもない。彼はフランスの所謂急進的貴族主義である。平凡と平等とを混合して居る基督教徒の中には彼を以て惡魔の如く見做して忌憚して居るが、彼の思想の中には耶穌を凌ぎ保羅などは堂若たらしめる様なノブルスピリットが動いて居る。兎に角從來の讚美的紹介者も盲目的反對者も共に順正な批評を缺いて居る。そこで我思想界にとりては彼に關する斷片的な評論や紹介よりも、彼自身の思想の骨子を捉みうる機會を得るとが寧ろ大なる要求であつた。今や此缺陷と要求は金子氏の翻譯に依て一部充たされたといつてよい。從來ニイチエの著述の譯も出たのであるが氏の譯は先づ其著述の選擇において批評的である。即ち彼の初女作ともいふべき悲劇の誕生を以て彼の青年時代の思想を代表させ、彼が思想の成熟期の作なる善惡の彼岸を以て彼が内生命の發達を示して居る。金子氏の譯筆は又溫健詳嚴である。本書の譯の如き蓋永久的價值を有するといつてよからふ。(定價貳圓貳拾錢)

△詩集末日頌

富田碎花著 岡村書店發行

著者は我新詩境にありて明星の如く特色を放てる詩人である。其思想には幽遠な靈界の調べが響いて居る。氏は晴れやかな春の日に櫻かざして唄ふやうな輕い氣分を歌つては居ないが、一種沈痛にして人生の深みに徹するやうな韻がある。生命の根底に横はる深い苦しみと慄き光明に伴ふ陰影の悲しみ。併し氏は決していちけた懷疑者ではない、寧ろ力強い奮闘の刺戟を與へる。

噫眞理の探求者、新生活の開拓者、

勇ましい君の前にはつねに不可知と危險とが待伏して居る。

なほ耳邊には儉安と享樂を囁く誘惑がある。

然し余は飽まで信ずる、そして讚美する、

君が君の最後の肉の一片、血の一滴が盡るまで其努力をやめることをせぬのを。(期待)

雲は雲なるがゆゑに動き、

水は水なるがゆゑに逝く。

元始の時より太陽は

太陽なるがゆゑにたゞ光と熱とを地球に與へて曾て酬いられざるを歎けることなし。

われ等人等は、

人類なるがゆゑにその隣人を愛するのみに足るを得ずとするか人を愛するにさへ直ちにその報酬を欲す、

必さもしきものの悲しさは何にかもたとへむ。

(満たされざる心)

以て一般の調を窺ふとが出來よう。最後に附けた告白によつて氏が雅言麗句を弄ぶ尋常の詩人でないことが、益々明になつた。吾人は本詩の出版を歡迎し併せて讀者諸君に奨むるに躊躇しない。裝幀又頗る雅致に富む。(定價壹圓貳拾錢)

△拈華微笑

釋 宗演述 丙午出版社發行

傳に曰く、釋尊一日靈山に於て大衆に會した時大梵天王一枝の

むてゐて快い。(價〇、五〇)

△明日の歌詩 西出朝風氏編

朝風氏の詩歌については既に本誌の愛讀者諸君は本誌上でその清新な歌風濕ひある詩想を味はれたことであると思ふ。「明日の詩歌」は氏を中心として若き人々が純真な藝術を編み出さんがために努力せるものである。やゝもすれば近來萎微せんとする我が詩歌壇に氏等のこの企ては一種のフレッツシユな刺激と靈動とを與へるものであらう。

氏の詩歌と並んでその詩評にも氏獨持のひらめきを見せてゐるのは嬉しい。

藝術のために日々の麵麩を割いて「明日の詩歌」を編する氏等の決心をして永續させたい。純真な藝術に對して同情ある人々に一讀をおすゝめする。

△ギタンヂヤリ 増野三良氏譯・東雲堂發行

タゴールがノーベル賞金を受けた詩人であることは誰も知るやうになつた。

この書は彼れの詩想の圓熟した時代の所産であつて、タゴールの信順な聖者的生活をうかゞふには都合宜きものである。

譯者野氏増は印度については兼々深い興味を持つて研究してゐる人である。譯文も亦氏の詩的情趣の深い香ひをもつてゐる。「憐怠い夜のなかに、私をして争闘なしに眠るやうに私自身を放擲せしめよ。」

私をして私の衰弱した靈が爾の崇敬のために強いてみすばらしい支度をせぬやうにせしめよ。

爾こそは、夜の面紗を畫の疲れた眼の上に曳張つて、その視力を覺醒の一層清新な歡喜に更新するものである。』

以て氏の譯筆の一般を知ることができよう。(價〇、九〇)

△暗室の王、郵便局 磯部泰治氏譯・新潮社發行

タゴールの戯曲である「暗室の王」は私たちに神を覓めんとす

るものゝ信從敬虔な生活を暗示するものである。「郵便局」は大自らのなかに生きんとする人間の心靈を暗示したものである。量から言つても質から言つても、前者は最も劇らしい劇であらう。後者は纏つた點から云へば最も良く纏りのついたものであらう。

彼れの詩歌がさうであるやうに、彼れの戯曲も亦彼れの深幽な敬虔な哲學を語るものである。暗室の王のなかに明かに彼れが抱いてゐる神の觀念や、神と私たちの個我との關係が具體的に示されてゐる。「郵便局」によりて私たちは牢獄に囚へられた個我的解放を暗示せられる。彼れの戯曲は極めて神秘なそして宗教的色彩に富んでゐる。こゝに磯部氏の好譯を得たことはよろこぶべきことである。譯文も克くくだけた書き方である。磯部氏についてはまた本誌々友諸君は屢々氏の麗筆に接されたことであると思ふから茲に贅言しない。敢て宗教家と言はず眞面目なる讀書家におすゝめする。(價〇、六〇)

△未來派及立體派の藝術 木村莊八氏著・天弦堂發行

未來派及び立體派なる言葉はこの二三年來私たちをして随分奇異な觀念を起したのであつた。今日といへどもまだ私たちはたゞ名だけは知つてゐる。また時折り新聞や雜誌の挿繪で見るだけのことであつて、それが歴史や性質について系統的な論説を聴くことは餘りない。

未來派の發生は「一九一〇年の三月、トゥランの劇場で三十の公衆を前にして第一の宣言を行つて以來」のことである。伊太利の一端からその思想藝術を世界に提供した新運動は今や世界的のものになつた。

『その亂暴な主義宣傳策や、誇大な宣言や、熱狂せる意想には笑ふべき點があつたに相違ないけれども、熱烈なる青年詩人に依つて創られた此運動漸次に擴まり且騒動を引起さうとする野心や又は文藝上の驕慢に原因しない活氣を示すに至つたことは大ひに是認しなければならぬ』といふモトクルール氏の未來派の批評は當時の彼れ等の意氣を窺ふに足る。木村氏が新しき美術批評家

(此廣告を見を御中の方には「六合雜誌」に依る旨書添を乞ふ)

泰西文藝思潮の淵源

近代思潮叢書

各冊半截二百五十五頁 定價十五錢 郵稅六錢

重版
復版

【新刊發賣】

【四版】

【三版】

個人主義思潮

相馬 御風氏 著

未だ世に知られざりし近代個人主義の第一人者マックス・シュテールナーを中心とし、キアルケガアル・ドイブゼン、ニイチエ・ジョーデム・ア・ギョウシクも近代生活の痛るべき苦悶の底より此の来るべき生活の暗示的豫言を絶叫せる偉大なる先覺者の熱烈なる主義主張は、著者一流の明快なる筆致によりて遺憾なく表現せられたり。

未來派及立體派の藝術

木村 莊八氏 著

今や繪畫藝術の研究者にとり一時一瞬も閑却すべからざるは未來派及び立體派の研究にして其の思想的主義主張は一般文藝愛好家の知らざるべからざる大問題となれり。本書は正にこの兩者を最も完全に満足せしむべき、邦語に唯一のものたるを斷言す。兩派に屬する代表的作品の精巧なる挿繪も亦美術界の珍たり。

タルゴ聖者の生活

吉田 二郎氏 著

常に未來より未來へ、無窮より無窮へ、法悦と光明の旋律に調和の世界を築き行かんとして止まざるベルガルの大詩人大思想家の哲學及び生活は、本書によりて初めて開明せらる。綠幻爛蕩の薫りゆかしき東洋の大思想に味倒せんことを欲するものは來れ。

ロマンの思想と藝術

内藤 濯氏 著

吾人はロマン・ロランを外にして佛蘭西の新文藝を論ずる能はず。彼の思想的努力を外にして彼の國に於ける時代的精神の波動を知るに由なし。彼の思想と藝術とは深奥なる暗黒裡より新しき曙光を求めつゝ躍ける一の世界の象徴なり。其の純眞なる生命の開展と敬虔なる生活態度とは獨り本書の讀者にのみ享受を許されたる新世界の境。たらざるば非ず。

ニイ超人の哲學

生田 長三氏 著
惡魔の思想と文藝

岩野 泡鳴氏 著

天弦堂書房

東京 市軒 牛町 區五

振武 替丸 口五 座五 東九 京番

金波羅華を獻じて一場の説教を乞ふた。然に彼一言を發せず只此華一片を拈出して衆に示したが誰も其意を了會し得ない。時に獨り迦葉尊者あり之を見て破顔微笑したと。之れ即拈華微笑である蓋佛教否禪の妙所は茲に盡きる。本書は釋宗演禪師の説教集にして拈華微笑以下拾餘篇を收む。宗教的眞理は言説を絶した體嚴にある。心より心へ行くもの之れ禪の眞面目だ。本書は佛教の深遠な教理を組織的に説くものでない、寧ろ禪師の體得したものを人生百般の活機に應用して自在に説き去り説き來つたもの、讀んで肩のこらない清淡な味のあるものだ。修養に志ある人は讀んで得る所あるべく、牀達の士は以て微笑會通する所あらむ。(定價壹圓)

△アルス 創刊號 和蘭陀書方發行

詩人北原白秋氏が其令弟と共に經營する和蘭陀書房から此名の文藝雜誌が出版された。上田敏森鳴外氏以下現代文藝諸家の創作翻譯等がある。本誌の特色は印度諸神の古畫の寫眞版を挿入したとだ。(定價五十錢)

△青い鳥 若月紫蘭譯

△クリスマス・カロール 矢口達譯 植竹書院發行

共に薔薇叢書の一編前者には原著者の譯者に與へた手紙の寫眞がある。共に我文境で度々譯された本だが、此叢書の中にも全譯として入つたのだ。記者は共に定評ある人なればすら／＼と氣持よく讀まれる、裝幀また美しい。(定價五十錢)

(此告を御申込の方には六合雑誌に依る旨書添を乞ふ)

週刊宗
教雜誌

基督教世界

毎週木曜發行
一部 金五錢
半ヶ年 金一圓二十錢
一ヶ年 金二圓三十錢
外國行一ヶ年金三圓

◎本誌の創刊は明治十六年にして既往三十餘年の歴史を有する本邦基督教界最古の週刊雜誌なり

◎本誌の特長は進歩的基督教の立場より時事問題を評論し且つ最新の智識に依り斯教永遠の眞理を闡明するにあり

◎本誌には毎號教界先輩の說教、内外名士の論說と新進思想家の研讀と、清新なる宗教文學及内外教勢を滿載す

◎本誌は信仰修養の糧として聖書研究の手引として、信徒家庭の讀物として好適なる雜誌なり

◎本誌の編輯は宮川經輝、原田助、小崎弘道、渡瀬常吉、牧野虎次の五氏協力之に當り、武本喜代藏、山口金作の兩氏每號執筆し、在兩京の記者數名之を助く

— 本誌の見本は往復はがきにて御申越次第無代進呈すべし —

發行所

基督教世界社

大阪市北區中之島二丁目四七

振替貯金大阪參壹七參

(此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る旨を添書を乞ふ)

東亞之光

一冊廿錢
二冊四圓
郵費五錢
十錢

五月號

每一月發行一回

- | | | | | | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------|---------------------------|-----------------------|------------------------------|------------------------|
| ○書物の歴史……………富士川 游 | ○小説上から見た獨逸婦人……………青木昌吉 | ○民族關係より見たる日露親善論……………淺野利三郎 | ○演劇製作者の心理過程……………久保田勝彌 | ○權道を論じて現時德育不振の因に及ぶ……………今澤慈海 | ○文藝批評の根本義……………半田良平 |
| <p>△評論</p> <p>○婦人の選舉運動(ふ、や生)○雲影鳥語(小林生)</p> <p>○戰爭に内在的價值ありや(A、S)○慶すべき現象(A、S)</p> <p>○注目すべき二著述(A、S)</p> | | | | | |
| ○大乘經の成立及内容に就て……………橘 惠勝 | ○國語改良論……………向 軍治 | ○國家の觀念及使命……………白井成允 | ○志田學兄に答ふ……………尾上八郎 | ○日本書記及古事記の編纂に就て(承前)……………黑板勝美 | ○海外思潮△選句△選歌△學界彙報等…………… |

《後付四》

發行所 東京 本町 駒込 五〇 東馬 本町 駒込 五〇 振替 〇一 東京 七七 會協亞東

書籍特價發賣!

◎三並 良先著 福音書大觀 全一冊 郵稅共 金四十錢

◎神田佐一郎先著 登高自卑 全一冊 郵稅共 金四十錢

◎チャンニング一語千金 全一冊 上記二冊を金貳拾錢 (特別割引にて發送す)

◎自由基督教の小冊子 (十餘冊) 上記を取纏め(特別割引) 金二十錢にて發送す

自由基督教を解せんとする諸君は速に之等の書に接せられよ。人生のあらゆる問題は自由基督教によりて眞の解決を得べし。此意味に於て吾人は過去二十五年以來滿天下に對しつゝあり。

振替 東京 三〇〇〇-

申込所 東京市芝區 統一基督教弘道會

三月號
目次

政治道徳論

定價金貳拾錢

大合雑誌

四月號
目次

日米問題號
定價金貳拾五錢

■山上訓略

■戦場のキリスト（口繪）

■エリオット博士の戦争觀

■開戦以前の英獨問題

■平和の信仰

■無題錄

■豫言者の政治觀

■我が政治道徳觀

■政治と國民の内的修養

■小山東助氏の立候補を壯とす

■瑞西の山峽より

■日本民族の特性

■タゴールと崇拜の生活

■日本に於ける基督教の危機

新井奥邃譯註

Henri Danger.

高橋清吾

井口孝親

菊川四郎

三並良

内ヶ崎作三郎

大山郁夫

浮田和民

内ヶ崎作三郎

盧山生

鶴澤總明

吉田絃二郎

志賀重昂

■平和の黎明と日米問題

■日米親善の秘鍵

■意義ある排日問題の緩和法

■加州問題の真相と其解決

■米國に於ける輿論の一般

■排日問題と労働問題

■米人側より觀たる日米問題

■國民の對外思想を改めよ

■日米關係の人格的要因

■日米問題と米國識者の態度

■日米問題と對米國人策

■人種問題としての日米問題

■在米日本人に對する米人の待遇

■砲聲を聽きつゝ（口繪）

■明治大正の婦人問題

■國交の基礎を論ず

大隈重信

高田早苗

志賀重昂

阪井徳太郎

G S T

安部磯雄

ギューリック

吉野作造

フイツシャ

十一名家

綱島佳吉

マコレ

十二名家

ウエレスチャイギン

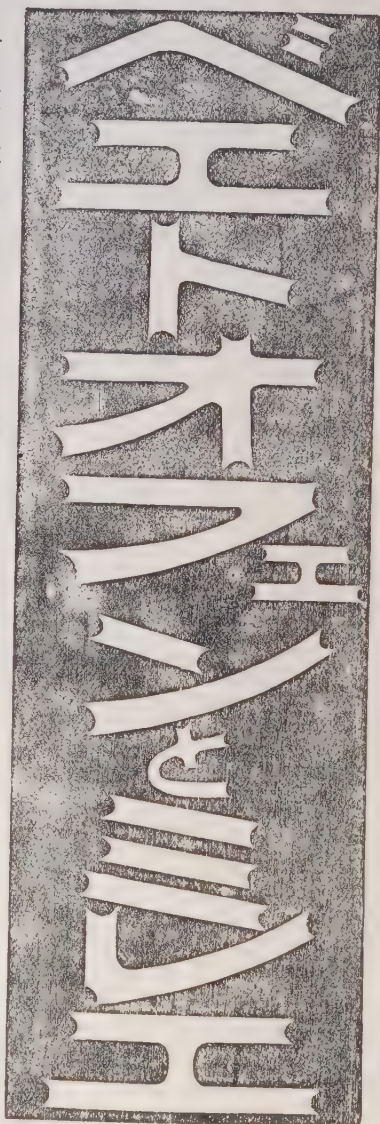
浮田和民

内ヶ崎作三郎

(此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る旨御書添ふ)

ロマン・ロオラン著 加藤一夫譯

最新刊



布製箱入繪畫六十枚
定價金壹圓二拾錢
送料

自分は茲に偉大なる宗教的・二大藝術家を諸君の前に再生せしめ得ることを光榮とする。かの『夕の祈』や『落穂拾』の敬虔至醇なる繪の複製に於いてその名の親しい、アシ、のフランシスを其の保護聖者とする聖畫家ミレエ。かの多くの英雄的なる交響樂の壯嚴と勇壯とに胸の血を沸騰さしめる信仰の勇士なるベクトル・オフェン。彼等は不幸なる者の中の不幸者であつた。孤獨なるものゝ中の孤獨者であつた。社會は彼等を認めなかつた。病弱と貧苦は彼等を責めさいなめた。而も彼等の衷に躍動して居た偉大なる信仰の力は、遂にそれ等一切の不幸に勝ちて、永遠の歡喜と幸福とを自ら創造した。眞實精進の友よ。來りて彼等の人格に觸れよ。力と勇氣と永靈との神秘なる感染は諸君の上に在らん。

發行所

東京麹町區平河町五丁目三十六番
振替東京二〇九一四番

洛陽堂

電話番町四二五八

●直接購讀者諸君に告ぐ

一、本誌は前金に非ざれば一切發送致し不申候

一、前金の盡さし時は『前金切』を帶封へ捺印いたすべく候

一、御送金は可成振替貯金を以て御拂込み相成度候

本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵稅一錢
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵稅共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵稅共
●海外は郵稅一冊に付金六錢(清國を除く) ●臨時號出版の際は規定以外に代金申受く			

本誌廣告料

特等	表紙二三四面	一頁	金貳拾圓
普通		一頁	金拾貳圓
普通		半頁	金六圓
●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候 ●二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候			

大正四年四月三十日印刷納本
大正四年五月一日發行
(毎月一回一日發行)

定價

貳拾錢

本號

發行兼編輯人

鈴木文治

印刷人

山本與一郎

印刷所

株式會社 秀英合

東京市芝區三田四國町二十七番地

發行所

東京市芝區三田四國町

統一基督敎弘道會

賣捌所

東京堂◎北隆館◎東海堂◎同文館◎上田屋
◎警醒社◎敎文館其他全國有名書店

電話芝五八五五番

六合雜誌

自然と心靈との復興	佛國教育家の戦争觀	愛の要望	夢	眞實を求むる心	愛と眞實と戰と	イエツの音樂的情調	理想と神	涙の響	紫雲石より	權威の座位	瑞西より	自由主義基督教の勝利	タゴールの根本理想と其批評	紅眞なダリヤ	吾が斷片
内崎作三郎	高橋清吾	鈴木龍司	小山鼎浦	佐藤繁彦	内藤濯	松尾光貳	帆足理一郎	伊藤寥々	秋郎生	白石喜之助	盧山生	X 三浦關造	久萬かず枝	岡田哲藏	

(此廣告を見を御中込の方は「六合雜誌」に依る旨御書添を乞ふ)

早稻田大學教授 内ヶ崎作三郎先生序 吉田絃二郎氏著

初版 再版 即日 賣切

タゴールの哲學と文藝

四六判上製美本 正價壹圓廿八錢 郵稅金八錢

忽ち三版

オイケン、ベルグソンによりて創造覺醒の第一歩に入りたる我思想界は印度大詩聖大哲人タゴールによりて欣求菩提の究竟裡に法悅光耀の生活と哲理とを發見せざるべからず。本書は實に彼の神幽なる哲學と純眞の文藝と崇敬の生活とを系統的歴史的に批判し紹介したるもの。更に研究資料として戯曲『暗室の王』『郵便局』『チトラ』詩『園丁』『新月』をも加へたれば此の二書以てタゴールの全體を如實に窺ふ事を得。蓋しタゴール研究の權威たるを失はず。將に來朝せんとする大豫言者を迎ふるの準備として敢て本書を江湖に薦む。

第一高等學校教授

三並良先生譯

オイ氏 人生の意義と價值

全三冊 正價金壹圓五拾錢 郵稅金拾貳錢

文學博士 波多野精一郎 内ヶ崎作三郎 序 野村 限 畔 著

ベルグソンと現代思潮

全三冊 正價金壹圓卅五錢 郵稅金拾貳錢

稻毛 詛風 著

現代思潮と教育

全壹冊 正價金壹圓四拾錢 郵稅金拾貳錢

(明治廿五年三月二十七日第三種郵便物認可)(大正四年四月三十日印刷納本)(六合雜誌第三十五年第九號)(大正四年五月一日發行)(毎月一回一日發行)

〔本 冊定價貳拾錢〕 郵稅一錢

大 同 館 發 行

振替 東京 八七番 座口 東京 八七番

東京市神保町七區

THE RIKUGO-ZASSHI.

No. 412. June, 1915.

CONTENTS.

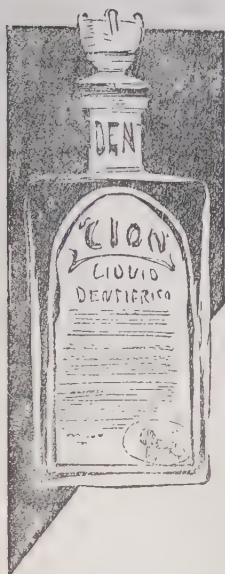
Revival in nature and Faith	Rev. Prof. S. Uchigasaki.	2
My Fragments.....	Prof. T. Okada.	17
Love, Truth and Battle.....	Prof. A. Naito.	11
Seat of Authority.....	Rev. K. Shiraishi.	20
Yearnings of Love.....	R. Suzuki.	36
Fundament Thought of Dr. Tagore.....	S. Miura.	41
On Sincerity.....	S. Satō.	46
French Professor's view on the War.....	S. Takahashi.	56
From Shiunseki.....	C. Hyodō.	
Musical Temperament of Mr. Yeates.	K. Matsuo.	74
Ideal and God.....	R. Hotari.	80
A New Translation of the Fourth Gospel.....		
<i>Tears</i>	K. Itō	92
<i>From Switzland</i>	Dr. T. Arai.	96
On the Poems of Saigyō.....	S. Hattori.	103
<i>Scarlet Flower</i>	Miss. K. Kuma.	106
<i>A Dream</i>	T. Oyama, M. P.	

Topics of To-day.....	
Unity Hall Reports.....	
Books of the Month.	

Editor Rev. Prof. S. Uchigasaki, Sub-editor G. Yoshida.

Published Monthly by the
TÔITSU KRISTOKYŌ KŪDŌKWAI,
2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

此廣告を見申御返の方は「六合雑誌」に依る御書添ふ



楽しい日課!!!

それは
ライオン水齒磨の含嗽

離床にも宜しい。

食後にも宜しい。

旅行用には

寢前にも宜しい。

ライオン煉齒磨が最も

高尚輕便で宜しい。

ライオン石繪本舖 小林富次郎

□ 紫雲石より……………	秋 郎 生……………六四頁
□ 教訓自讀……………	米 米 米……………八四頁
□ 涙の響(詩)……………	伊 藤 寥 々……………九二頁
□ 瑞西より……………	盧 山 生……………九六頁
□ 西行の歌……………	服 部 純 雄……………一〇三頁
□ 眞紅なダリヤ(詩)……………	久 萬 か ず 枝……………一〇六頁
□ 夢(詩)……………	鼎 浦 漁 史……………一〇八頁

時 評

□ 歸一協會の新決議案……………	甲 鳥 生……………一〇頁
□ 近時の教會合同論……………	内 ケ 崎 生……………一三頁
□ 自由主義基督教の勝利……………	X Y Z……………一五頁
□ 鈴木文治兄の渡米を送る……………	相 原 生……………一八頁

□ 新刊批評三〇……………	□ 惟一館たより二七……………	□ 編輯たより……………一二七
---------------	-----------------	-----------------

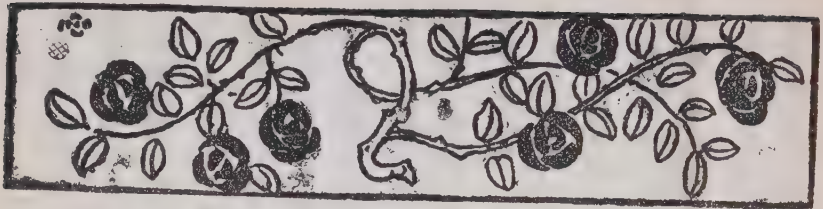
六合雜誌第三十五年第六號目次

本欄

□ 自然と心靈との復興	内ヶ崎作三郎	一頁
□ 愛と眞實と戰と	内藤 濯	一頁
□ 權威の座位	白石喜之助	二〇頁
□ タゴールの根本思想と其批判	三浦 關 造	四一頁
□ 佛國教育家の戰爭觀	高橋 清 吾	五六頁
□ イエツの音樂的情調	松尾 光 貳	七四頁
□ 神と理想	帆足理一郎	八〇頁

文藝

□ 郊外車行(詩)	岡田 哲 藏	七〇頁
□ 愛の要望(感想)	鈴木 龍 司	三六頁
□ 眞實を愛する心(感想)	佐藤 繁 彦	四六頁



六 合 雜 誌 六 月 號

自然と心靈との復興

内ヶ崎作三郎

一 心靈復興の價值

今や節物新緑の候に入りて滿目の光景翠色を湛ゆ。夏山の繁みは風も洩さねど、若葉にそよ音ぞ涼しき。「庭前の綠影日に深く、藤の紫の波は消えたれども紅白の薔薇の垣根に匂ふあり。熱からず寒からず、東の若葉の浪より出て、西の綠樹の梢に隠くるゝ太陽はげに人生の祝福者と仰がるゝのである。鳥囀り蜂唸り、名なし草まで勢ひよくその頭を擡げ、腕を張るやうに見ゆ。今は一年の精力の張り溢るゝ初夏である。その復興の時である。老いたる人もかゝる時には再び人生の春を感じるものぞ、況んや、少壯血氣の士に於てをやである。

自然に復興の現象あるが如く、吾人は宗教にも、文藝にも、政治にも、實業にも復興の事實を見る。景氣の回復はこれ實業の復興でないか。民衆が政治に對して著しい熱心を示すことがある、これ政治の復興でないか。舊き文藝廢れて、新しい文藝天下を風靡せんとす、これ文藝の復興でないか。其他人生のあらゆる方面に復興の運動が生ずるのである。

此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る旨書添を乞ふ

東京帝國大學
法科大學教授

法學士

吉野作造先生著

日支交渉論

最新刊

□ 定價六拾錢

□ 郵 稅 金 六 錢

日支交渉の經過如何

帝國の新に獲たるもの果して何。これ日本國民の何人も知らんと欲し、又知らざるべからざる所なり、弊社爰に刻下緊急の渴望に應ぜんと志し、著者吉野教授に請うて「日支交渉論」一編を江湖に提供す。章を分つこと參、日支交渉の「經過」と「内容」と更に對支政策の「根本」とを論ず。就中第二章對支要求の内容に至つては説述最も詳細を極む。未だ往復文書の公表せられたる今日、此重要問題に就て、尤も正確にして、最も精密なる見解を得んとする人々は速かに本書に來つて研究せられよ。

ひさかた
久堅町にて

安井哲子著

有田四郎氏裝幀

四六判赤地布製天金

定價 壹圓
郵 稅 八 錢

警 醒 社 書 店

東京 橋町
東京 張

板 元

振替 五五
東京 三番

二 協同傳道の効果如何

我が國に於ける基督教の歴史は長からずと雖も、幾多の曲折と波瀾とを経て今日に至つた。ザビエールがジェズイット主義に基いて羅馬教を齎したる、時驚くべき信仰復興が實現せられた。當時幕府の迫害に殉教をしたるもの萬を以て數へたり。日本民族が決して宗教に冷淡ならざることは之によりて證明せられた。新教五十餘年の傳道は幾多の小復興運動に點火した。殊に明治二十年代に於ける歐化熱絶頂に達したる時、新教諸教會の勢威甚だ盛なるものがあつた。この根底深からざりしにもせよそれは一種の信仰復興であつた。

目下各地に行はれつゝある教會同盟主催の協同傳道も亦一種の信仰復興である。協同傳道に對しては外部よりも内部よりも非難があるやうだ。しかし吾人は大體に於てその成功を認め、且つ祝するのである。とにかく協同傳道が不完全ながら組織と計畫とに基いて實行されつゝあることは大に吾人の心を得てゐる。新聞傳道のごとき誠に善き思ひ付きである。此度の信仰復興には泣喚と絶叫との溢れたる特別集會が開かれなかつたかも知れぬ。されど傳道者も信者も懸命に努力しつゝあるは一種の復興と稱して可なりである。大仕掛の天幕傳道も可なりの結果をえたやうである。これも大局に於ては好結果を得たるべきを疑はない。

三 ビリ・サンデー式傳道

宗教に於ても復興運動が幾度となく繰り返へされた。紀元前六世紀に於て東西兩洋に靈的大復興があつた。印度には釋尊生れ、波羅門教を改革して佛教といふ信仰的大復興の運動を起した。支那には孔子を中心として倫理的復興があつた。波斯にはやゝ遡りてゾロアスターの靈的運動があつた。同時に猶太ではイザヤ、エレシャの豫言者の運動があつた。希臘にはソクラテース、プラトリー、ユークリデース、ソフォクレス等の哲學的、文學的復興があつた。これは當時の文明國に澎湃たる靈海の新潮であつた。吾人は今日も此運動の影響を蒙りつゝあることを感謝せざるをえない。

支那に於ては春秋の諸子時代に續いて、宋明時代の儒教の復興となつた。程明道、程伊川、朱子、陸象山、王陽明は此潮流の中心人物であつた。我が國に於ては鎌倉時代に於ける法然、新鸞、日蓮を中心としたる新佛教の大運動があつた。徳川時代に於ては古學派、朱子學派、陽明學派の復興があつた。山鹿素行、伊藤仁齋、荻生徂徠、等の古學派に於ける、藤原惺窩、林羅山、室鳩巢、貝原益軒等の朱子學派に於ける、中江藤樹、熊澤蕃山、佐藤一齋、大鹽中齋等の陽明學に於ける、英傑の士雲の如く起りて徳川時代三百年の文運を飾りたるは壯觀といはざるを得ない。

その他復興の例は甚だ多い。アラビヤに於けるマホメットの宗教改革も復興運動であつた。基督教の起源そのものは大々的信仰復興に外ならなかつた。中世紀に於ける、アシシのフランシスの運動、獨逸、瑞西に於ける宗教改革運動、英國に於けるメソヂズムの運動、清教徒の運動、クエーカー徒の運動、米國に於けるユニヴァーサルイズム及びユニテリアニズムの運動の如き、皆信仰復興の注目すべき事件であつた。基督教の進歩は信仰復興よりて常に新紀元を劃せられたのである。

家といふものは口の悪い者である。氣にする程のものでない。ビリ・サンデーは地獄を叫ぶと傳へられるが、英語の俗語に於ける「地獄に行け」は甚だ軽い意味の語である。「ツ、ヘル、ウィズ、エール」といへば「エールが負けやがれ」といふ位の意味である。もし日本の傳道者が之を本氣に買つて來て地獄説を振り廻はすことなどあらば、蓋し英語にすら正當に通じないといふ非難を免かれまい。

吾人は上品なる説教を好むも力なき説教を尊ぶる。されど平民の心に訴ふる米國に於けるビリ・サンデーや、我が國に於ける山室軍平、木村清松兩氏の如き通俗説教家の使命の甚だ大なるを知る。天下平民多し、平民に對する傳道者を吾人は尊敬せざるを得ない。とにかくビリ・サンデーは今や米國に於ける信仰復興の中心となりつゝあることは注目に値することである。

四 挑他的なる勿れ

吾人が永い冬の後に楽しい春の歸り來れるを迎ふるが如く、長雨の後に烈日を仰ぎ望むが如く、靈界の信仰復興を歓迎する。然れども吾人は復興の内容が充實し、單に原始的な感情を亢奮せしむるに止らず、吾人をして深く考慮せしめ、省察せしめ、基督の與ふる新生命、神の大生命と交通する大なる歡喜、他の宗教と哲學と科學とに存する眞理に向つて尊敬し、共鳴するか如きものたらしめたいのである。智情意といへば心理に捉はれたりといふ人もあらう。しからば生命のすべての要求を満足せしむるが如き復興の來らんこと吾人の痛切なる要求である。

排他的排戰的ならざれば信仰復興ならずと思はば大なる誤解である。吾人の排斥すべきものは非眞

東京に於ける天幕大傳道は米國に於ける大傳道者ビリ・サンデーの運動より暗示と刺戟を受けたに違ひない。吾人の聞く所によればビリ・サンデーは青年時代まで勞働者であつた。彼の迅足はシカゴの職業的野球團の管理者に推賞されて彼もその團中の一人となり、一ヶ月千圓の俸給得る迄に出世した。しかし彼は偶然なる出來事より基督教を可き、彼の興味はその方面に集中さるに至つた。彼は選手時代某大學の夜學科を卒へたれば多小の智識を蓄へえたことであらう。彼は多額の俸給を犠牲にして青年會の巡回教師となつて着々傳道に成功した。昨年以來彼は東部諸洲に於てモーデー以來の大傳道者となつて米國社會の注目を一身に集めてゐる。彼の傳道は單獨事業である。彼は至る處に特別なる大集會場を建つる、第一流の音樂者を傭ふ、又第一流の聖書研究會の指導者を助手として使用する。この費用は一切感謝献金に依るのである。彼は學者でない。されど正義の觀念の強烈なる宗教家である。彼は下等階級の用ゐる言語によりて、正しき生活純潔なる生活勤勉にして節制ある生活を高調する。彼は野球戰に於けるが如き態度を以て説教する。彼には矯飾がない、天真爛漫がある。彼は六ヶしい理屈を述べずして聽衆の良心に肉迫する。これが彼の成功の秘訣である。この程彼は十一週間の連日運動をヒラデルヒヤに開いた。改宗者四萬餘人、感謝献金は十二萬圓餘に達した。多くの酒場と魔窟は閉業せざるをえなかつた。多くの債務者は喜んで債權者に拂ふべき物を返還した。ビリ・サンデーは今や米國に於ける一大人物となり、其聲名は大統領ウィルソン氏と競ふものがあるといふ。彼は實に宗教界の快男兒である。しかれども彼は教養の人でない。故に彼は哲學と藝術と科學とに對する正當なる理解がない。彼は往々にして無邪氣なる淺薄なる攻撃を自由基督教に加ふる由なれども、素とく運動



郊

外

岡田哲藏

乗馬が欲しい、けれども無い。
自轉車がその代り。

車を駛らして屢々郊外に出る、
頭腦の疲れた時、

自然が慕はしい時。

平原の自然に親しくなつて、
新緑、深緑、紅葉、黃落、
色彩のさまざまの變化、
その印象も濃くなつた。

郊外一里、

昔ながらの藁屋根、
それが言ひ難く良い。
たまたま見るトタン葺、
何よりも淺間しい。

まして近頃、
神社佛寺の屋根さへ、
青白い鉛色になつたのがある、
神聖の瀆れ。

松林の優雅、
杉森の壯嚴、
何等のゆかしさ。
それに電柱が添ふて立つと、
風韻は全く壞たれる。
まして複雑な水力電氣の柱、
文明の呪ひ。

我々は進歩を好む、
舊套は脱離したい、
新潮は歡迎する。

理あるのみ。吾人の戦ふべきは罪惡あるのみ。真正なる信仰復興は他を排するの要なく、他宗派や他の宗教を攻撃する必要がない。「我は全能の神なり、汝わが前に歩みて完全となれ。」これ創世紀の大理想ならずや。「天に在す汝等の父の純全なるが如く汝等も純全なるべし。」これ基督の人類に對する要求ではないか。「我が兄弟よ、凡そ眞なること、凡そ尊きこと、凡そ義なること、凡そ潔きこと、凡そ愛すべきこと、凡そ稱すべきこと、如何なる徳、如何なる譽も、汝等之を念とせよ。」これ保羅の基督教徒に對する要求でないか。苟くもこの三大理想に應じて信念の確立する所には必ずや眞正なる信仰復興が存するのである。眞正なる信仰復興とは必ずしも笛太鼓を鳴らして御祭り騒ぎをすることではない。況んや他宗教の揚足取りなどをするは決して眞の信仰復興ではない。眞の信仰復興は靜默なる習慣と衝突しない、瞑想と智慧とに衝突しない、寛大と衝突しない。使徒保羅が靈能に充たされて愛の大訓を記したる時、彼は信仰復興の最も強い經驗を有してゐたのであらふ。

智識と理性とは人生の大なる恩寵である。これによりて神と人との關係は歴史的にも經驗的にも一層明白となつた。聖書に對する高等批評のごときも雲霧を排して天日を赫々たらしめたのである。進歩的宗教運動は確かに宗教の眞に到達せんとする信仰復興の運動である。然れども單に理性を高調して實行を疎んずる者は眞の宗教ではない。

ジョン・ハワードは監獄改良を實行したるが故に眞の信仰復興者であつた。フロレンス・ナイチンゲールはクリミヤの野戰病院に於て人道的役役に服したるが故に、彼女も亦信仰復興者であつた。

信仰の問題漸く實際の問題とならんとする時、新緑の恵みを味ひつゝ復興問題を論ずるを得たるは、吾人の喜びとする所である。

たゞ出發を新にせん爲である。

ゆきては返り、返りてはゆく。

都大路より郊外へ、

郊外より都大路へ、

暗示多き我が車のゆきさ。

車 行

その一

野外の道を音もなく走る我が自轉車に、
いかなるはづみか、

折れた竹の一枝が引きかゝつた。

車輪に觸れてカラ／＼と音たてゝ、

一町ばかりついて來て離れた。

何を訴へやうとて、

あの竹の枝は我が車に縋がつたのだらう。

何を慕ふて、

廻る輪にあんなに絡みついたのだらう。

別のどこかの世界で、

私を慕つて思のかなはなかつた女の魂が、

あの竹の枝に現はれて、

あんなに縋つたのでは無からうか。

そんな感じがして、見返つたが、

それまでに車はもはや幾廻したので、

竹の枝の影は無かつた。

その二

うしろからも自轉車が來た。

競走するつもりでもなかつたが、

負けるのも快からぬので、

少し速めて駛せた。

ハンドルにかけて携へた袋が、

どうかして地に落ちた。

車を停めて拾つて塵を拂つて居る間に、

あとの車がかげ抜けて、

はやくも數町距つた。

さるを一步郊外に出て、
平素の主張は何處、
忽ちに保守の人となる。

唯にそれのみか——

ある丘陵に登つた一日、
麓から中腹は高松の森、
谷間さへ深くて深山を思はせ、
人の世は遠かつた。

頂に出ると森は開けて、
狭い畑があつた。

深く入り高く登つて、
却つて人の手の跡を見た、
不平は堪ふべくも無かつた。

新しい文明を嫌つて、
昔ながらの風光に接したく思ひ、
更に人工のすべてを厭ふて、
自然の儘を樂まんとする。
如何に解くべきか、この心。

人界の競争に疲れし心、平安を求めて
意志の表現の見へぬ境を樂しむか。
求めたる文明の理想徒らに遠く、
隨伴の弊害の繁きに厭きて、

自然の懷に抱かれんと願ふか。

或は生命がその發生の源を慕ひ、
遠き昔の故郷に歸らんと望むか。

これ等の望、何れも理がある。
たゞそれ等を良しとするとき、
保守が樹ち、進歩の停まるは如何に。

思へば人の世の進行は常に向上でない、
誤れる道行が幾らもある。
それが今の世を厭はしめ、
昔を偲ばせ、自然を慕はせる。

されど遠き昔に我等は返られぬ、
いつまでも自然の懷に眠られぬ。
たま／＼昔に歸り、自然に還るは、

愛と眞實と戦と

——小著『ロマン・ロオランの思想と藝術』の一節——

内 藤 濯

ロマン・ロオランが『ジャン・クリストフ』の主人公として描いた人物は、自己の藝術を介して人生の意義に徹しようとする音楽の天才である。とは云へ彼れは、浪漫派の藝術家が好んで描いたやうな、はじめから超人的の素質を光らしてゐる天才ではなしに、むしろ「人間の名に適はしい人間」である。どこまでも周囲の虚偽と闘ひ障礙を突破しつゝ絶えず新しき力を見いだして行つた點からして云へば、彼れは一人のまぎれもない「反抗者^{レヴォルテ}」であつた。

天才は常に眞理を求め眞理を語りつゞける。それゆゑ月並な言説乃至道德によつて生きてゐる事をみづから恠まない一般世間は、動もすれば天才に對して無意味な罵詈と嘲笑とを敢へてしようとするさうして多數の暴虐はつひに、天才といふ天才をして孤獨の位置に立たしめる。天才の生活が多くの場合、反抗の色調をもつて蔽はれるのはこれが爲めである。

われ／＼はこれまでいろ／＼な反抗の聲を聴いた。或るものは自分自身に對する怨恨を其の時代に對する怨恨として表白した。また或るものは、人間の邪曲と迷執とに憤激して、それを故らに誇張しつゝ遂には人道の基礎までも覆さうとした。

世の中の進路に、榮達に、いな、眞理の追求に、思想の開拓にさへ、こんなことが如何に多く、我々の知らぬ間に、行はれて居るであらうと、今更のごとく、考へて、遠くなりゆく車を見送つた。

その三

人通りの少なからぬ、ある坂を降るとき、ブツンと音して、後輪のゴムは破れた。

降りて見ると、

眞赤に錆びた釘の、くの字なりに曲つたのが、美事にゴムを貫いて居た。

眞直に鍛へられて、

眞直に木材に徹る筈であつた釘が、こんなに曲つたので道に捨てられた。

それから幾日、又幾月、

風雨に曝され、沙塵に塗みれ、

靴にふまれ、馬蹄にふまれ、車にひかれ、錆びに錆びて路上に横はつて居た。ゴムといふ弱い敵がこの路に来て、寸分もそれずに、正にこの釘の上に乗るかゝるまで。

すべてのものから受けた侮辱を報復すべく、猛然蹶起した伏兵の如く、彼は起つて我がタイヤを刺した。

彼が我をうらむのは不道理だ。

それでも一切の虐待のうらみを、何物にか報ひんとする、

彼の努力の集中に敬意を表して、我は抜き取つた彼を懷にして歸つた、損じた車を手に押しつゝ。

(四、五、二〇)

れながら彼れに具はつてゐた感受性は、かれの生命力の伸展につれて、次第に其の深さを加へ其の廣さを増して行つた。「眼に見ゆるもの」より「眼に見えざるもの」に向つて通ずる一路までも感じつくさずには措かなかつた。さうして彼れは「生まれながらの反抗者」と呼ばれうるだけの敏感を思ふさま所有することができたのである。虚偽と卑陋とにまみれてゐる周圍の社會に對して思ふさま「眞實の烽火」を點ずることができたのである。

しかし吾々のこゝで注意しなければならないことは、彼れの反抗が如何なる場合においても眞剣に赤裸々に行はれたことである。いかなる刹那においても粉飾や誇張や冷笑の氣分を交へなかつたことである。クリストフの感覺はいかにも強烈であつた、鋭敏であつた。けれども其の強さと鋭さとは、ひやみに緊張した神經の單なる發作から生み出されたのではなくて、すべての物に愛をもつて食ひ入つて行つた彼れの健やかな寛りのある氣質の所産であつた。従つて彼れは「愛」を犠牲にして「眞實」を主張するわけには行かなかつた。「愛のかをりに潤ほされた眞實」こそ、やがて彼れの絶えず追求して行つた「眞實」の一切でなければならなかつた。彼れは如何に其の周圍の愚蒙と虚偽とを憎んだにしても、冷笑の態度をもつてそれに落んで自己の弱小を暴露するやうな反抗者ではあり得なかつた。運命の暗い力にむごたらしく翻弄されたときにも、自分を取り巻いてゐる人々を最も無容赦に辱しめれば辱しめることのできたときにも、眞實と愛とに生きんとする彼れの慾望は、怨みがましい言葉の息の根を止めてしまつたほど絶えず湧きたつてゐるのである。吾々はこゝで、ロマン・ロランその「人」の光りが、クリストフの性格に奥ふかく射し込んでゐることを思はずにはゐられない。

しかしクリストフの反抗は、さうした怨恨や憤激から生み出されたものではなかつた。彼れの反抗には常に何等か極めてけだかい或る物が潜んでゐた。公平無私な或る物が泌み込んでゐた。そして其の表白には、いつもきび／＼した或る物が焼きつけられてゐた。切り詰めて云へば、それは境遇乃至運命のために蹂躪されてゐた生命力のおのづからな復讐的表白であつた。暗黒より光明へ、矛盾より統一へ向つてひたすらに打ち喘ぐ豊かな生命力の昂揚であつた。

ライン河畔の青々とした岡の上に潤けてゐる獨逸の小市街。音楽家の貧しい家庭。積もる齡とみじめな生活とで弱りはたつた祖父のジャン・ミシエル。音楽にかけては可なりな腕前を有つてはゐながらも放蕩で身を持ち崩した父のメルシオル。水呑百姓の娘ではありながら、世帯が巧みなうへに、優しい清らかな心を具へてゐる母のルイザ。一生を神に打ち委せ旅商ひをして歩く伯父のゴットフリード——ロマン・ロオランのクリストフを生ひ立たしめたのは、斯うした町と家と人によつて築かれた環象の中であつた。

東西の見定めもつかない少年をして、はやくも「死の恐怖」を覚えしめたほどまで強烈な感受性——それがやがてクリストフの性格を胎んだ力であつた。この力はまづ彼れの純朴な音楽を生んだ。美しき戀と痛ましき戀とをつぎつぎに招きよせた。いくたびか迷執と懊惱の暗やみに彼れを投げ入れた。さうして遂には、『肉の世界においても、靈の世界においても、創造することはやがて肉體の牢獄から脱けだすことである。生命の疾風に挑みかゝることである。實在の神となることである。死を滅殺することである』といふ花々しい自覺を彼れに與へて「反抗」の第一歩を踏み出さしめた。斯くして生

ればならない。しかし眞理よりもむしろ他人を愛さなくてはいけない。』
オリギエ『さうすると僕達は他人に嘘をつかなくてはならないのかい？』

クリストフはオリギエに答へるためにゲエテの言葉を持ち出した。

『われ／＼は最も高尚な眞理のうち、世間の幸福を増進することのできる眞理だけを表白すべきである。その他の眞理は、それを吾々の心のうちに包んでおくがよい。それは沈みはてた太陽の軟らかな薄明りのやうに、われ／＼のあらゆる行爲のうへに其光りを擴げるであらう。』——九二頁

* * * * *

オリギエ『……僕たちが此の世に來たのは、光りを擴げるためで、光りを消す爲めではない。人には各々その義務がある。カエザルが若し戦ひを欲するならば、カエザルをして戦争をするための軍隊を有たせるがよい。戦争を職業にしてゐた昔のやうな軍隊を有たせるがよい。僕は徒らに「力」の暴虐を嘆いて時間を空費するほど愚かではない。とは云へ僕は力の軍隊に加はつてはゐない。僕は靈の軍隊に加はつてゐる。數千の同胞と共にそこで佛蘭西を代表してゐる。カエザルをして土地を征服せしめるがよい、もしさうする事が彼れの望みであるなら。僕等は眞理を征服する。』

クリストフ『征服するためには、打ち克たなければならぬ、生きなければならぬ。洞窟の内壁から分泌した鐘乳石のやうに、脳髓から分泌した固苦しいドグマが眞理そのものではない。眞理は生命だ。君たちはそれを君たちの頭の中で探してはならない。それは他人の心のうちにある。他人と協力したまへ。君達の考へたい事は何でも考へたまへ。しかし君たちは毎日人道の水を浴びなくては

『ジャン・クリストフ』の第七卷『家のうち』では、クリストフと其の親友たる佛蘭西の青年オリヴェとの間に、次のやうな會話が交はされてゐる——

オリヴェ 『……僕等は眞理をごまかす譯には行かない。』

クリストフ 『どう。けれども僕等は、眞理の一切を擧げて萬人に語ることもできない。』

オリヴェ 『君までがそんなことを云ふのか。君はいつも眞理を要求するのではないか。何よりもまづ眞理の愛を主張してゐるではないか。』

クリストフ 『さうだ、僕は僕自身のための眞理を要求してゐる。眞理を負ふに足るだけの強い腰骨を有つてゐる人たちの爲めに眞理を要求してゐる。しかしさうでない人たちにとつては、眞理は殘忍なものだ、馬鹿げたものだ。今になつて初めてさう思ふが、僕は故國こくににゐたらこんな事を思ひつゝもしなかつたらう。獨逸にゐる人たちは、佛蘭西にゐる君たちのやうに、眞理に病みついてはゐない。彼等は生きること熱中し過ぎてゐる。彼等は大事を慮つて、見たいと思ふ事ばかりしか見て取らない。僕が君たちを愛するのは、君たちが獨逸の人たちのやうでないからだ。いかにも君たちは正直だ、一本調子だ。しかし君たちは人情を知らない。君たちは何かひとつの眞理を見つけたと思ふと、まるで尾を燃やしてゐる聖書の狐のやうに、その眞理の火が世間に燃え移らずにゐるかどうかを氣に懸けないで其の眞理を世間に追ひ放してしまふ。君たちが若し君たちの幸福よりもむしろ眞理を擇ぶのならば、僕は君たちを尊敬する。しかし他人の幸福よりも云ふ事になれば……それはいけない。君たちは餘り自由に振舞ひすぎる。僕たちは自分自身よりもむしろ眞理を愛しなけ

な苦痛を勇ましく堪へ忍ぶこと其の事によつて、ますます其の大きさを増して行つたのである。クリストフの一生は、いかにも苦難の一生であつた。運命との力戦苦闘によつて終始された一生であつた。しかしながら彼れは、何よりも先づ身をもつて生活を愛することができた。生活の價を知ることができた。さうして彼れは一步步最後の勝利を歌ふべき日へ近づいて行つた。ペエトオエンの謂はゆる『悲しみに打ち勝つて後の喜び』を目ざして進んで行つた。

世間には謂ふところの「神による喜び」を翫呑みにして、愚かにも樂天主義を銜ふ人たちがあつた。この世界に儼存する悲哀の事實から顔をそむけて、しかも人間の幸福を強請するやうな矛盾と怯懦とを繰返してゐる樂天主義者が少なくない。彼等はいづれも樂天主義と氣樂とを履き違へてゐるともがらである。バアナド・シヨウの謂はゆる「悲哀に在つて悲哀を知らざるものは地獄へ落ちる」ともがらである。しかるにロマン・ロオランが其のクリストフの心に刻みつけた樂天的氣分は、いかなる場合に於いても世間並の怯懦な樂天主義に陥ることを許さない。クリストフの實行した樂天主義は、人間の弱小と惡徳と叛逆とを其の在るがまゝに見て、しかもそれを愛することであつた。人生の非曲と罪惡と悲痛とを其の在るがまゝに見て、しかもそれらを雄々しく凌ぎ越すことであつた。

かれは十五歳になつた年の或る夜、放埒な父の非業な死を目のあたりに見せつけられた。人生の劣敗者となつて靜かに横たはつてゐる父の死骸を見つめてゐた彼れは、「死といふ唯一の事實の傍では一切のものゝ取るに足りなかつた」ことを泌々と感じた。すると彼れの眼にはいつのまにか、空しく骸骨をを横たへてゐる自分の影があり／＼と映つた。そして失はれた生命を今さら引き戻すことができない

いけない。僕たちは他人の生活に生きなければならない、自分の運命を凌ぎ通さなければならない自分の運命を愛さなければならない。』——二四九頁——二五〇頁

われ／＼はこゝで、クリストフの反抗が其の強烈な感受性の赤裸々な表現であつたことを知る。單に虚偽に對する眞理の主張としての反抗であつたのではなくて、「愛の眞實性」を追求し味到せんが爲めの反抗であつたことを知る。

それなら斯うした目ざましい反抗の精神を抱いて奮ひ起つたクリストフの前には、抑も如何なる道がひらけたであらうか。

彼れは其の一生において、人間としての經驗を殆んど悉く嘗めさせられた。彼れは自己の貧困に屢々脅かされた。幾たびともなく周圍の愚蒙と嫉妬とに苦しんだ。愛する人を墓のあなたへ見送らなければならぬ悲哀の殘酷さを泌々と味はつた後には、道德的破産の耻辱までが容赦なく彼れの靈肉をさいなんだ。さうして彼れは、他を愛するに足るだけの熱情を衷に湛へてはゐながらも、ベエトオエンと同じやうに何時までも何處までも孤獨の道を歩いて行つた。たゞ彼れ自身の神のみを道づれとして、永遠に自分の道を切り拓いて行かなければならなかつたのである。しかしながら彼れの内部にはいかなる場合に於いても自己の存在乃至自己の世界を生かして行くに足るだけの力が絶えず渦まき漲つてゐた。ひとたびは躓いても、倒れても、碎けても、まもなくはじめの勢を盛り返して、絶えず新しき現在を創りだして行くに足るだけの力が彼れの心ふかく其の根を下ろしてゐた。しかも其の力はさまざまの障礙を突破する事そのことによつて、ますます其の強さを加へて行つたのである。さまざま

苦しみを離れて歡びを思ふものゝ前には歡びはない。戰はんとする意志をはなれて平和を思ふものゝ前には平和はない。ロマン・ロオランにとつても、また其のクリストフにとつても、苦痛は歸するところ歡びに至るべき峻しい通路であつた。さうして此の峻き一路を何等の機變もなく永遠に歩み續けて行くところにこそ、ロマン・ロオラン乃至クリストフの反抗は營まれたのであつた。

□ 汝は私に無限にした

汝は私を無限にした、それが汝の欣びである。この壊れ易い器を汝は幾度も空にした、そしていつも新しい生命をそれに充たす。

この芦の小さいな笛を汝は山を越え谷をわたつて携へる、そしてそれで永遠に新らしい旋律を吹く。

汝の手の不死の接觸に私の小さいなこゝろは歡喜のうちにその制限を失ふ、そして説くによしなき言葉を生む。

—— クゴール ——

い絶望の暗からは、一つの聲が力づくよく彼れの心の中に響した——『あゝ、こんな破目に陥るよりは、むしろ世界のあらゆる苦痛に揉まれる方が可い、あらゆる困難にさいなまされる方が可い！』……彼れはその刹那「死」の誘惑に打ち負かされて卑怯にも自分の苦痛から逃れやうとしてゐた。たゞ一步を誤まれば、自分自身を裏切り、自分の信仰に背き、死の境に於いてまでも自分を侮蔑してしまふところであつた。それにも拘はらず彼れの内心の聲は恐ろしい深淵のこなたへ首尾よく彼れを引き戻すことができたのである。

斯くして彼れは、絶えまなき無容赦な戦によつて終始されるところにこそ人間の生涯があることを知つた。此の世界に在つて人間の名に適はしき人間たらんと欲するものは、動もすれば生命の力を切りくづさうとする内外の暴力に對して、不斷の戦ひを戦はなければならないことを知つた。さうして「幸福と戀愛とが人の心をして其の武装を解かしめ其の權利を棄てしめる刹那の欺罔であつた」とを覺つた彼れの耳には、彼自身の神の聲が爽やかに聞こえてきた。

——行け、行け。決して休まずに。

——しかし神さま、私は一體どこへ行くのでせう？何をすることにしても、何處へ行くにしても、終りはやはり同じではないでせうか。このとほり「死」が行きどまりではないでせうか。

——死を指して行け、汝死すべきものよ。苦しみに行け、汝苦しむべきものよ。人は幸福であるために生きてゐるのではない。私の法則を遂行する爲めに生きてゐるのだ。苦しみ、死ぬ。しかし、しか在るべきものにならなくてはならぬ——一人の男にならなくてはならない。『朝』卷二二頁

した此定義に従へば常規を逸せざる各個人は孰れも自己の道德性を感化するに足る程無限を認識するの能力を有しているのである、ヘンリー・スコーガーは宗教を『人の靈魂内に於る神の生命なり』と定義する、此定義に従へば各個人の心には神の生命の或物を有しているのである。ミカは宗教を定解して義を行ひ憐憫を愛し謙遜を以て神と共に歩むこととなりとなしている、此定義に従へば各個人は義を行ひ憐憫を愛し謙遜を以て神と共に歩むの能力を有して居るのである。パウロは宗教を信望愛であると定義した、此定義に従へば各個人には不見永久の事物を見上げ日毎により善き明日を探求し而して己の如く隣人の幸福を増し加へんとの熱望の能力が具備している、之れ則ち信望愛である。

夫れ一杯の土にも人間の手にて播かざる種子の幾何か々存している、丁度其如く各人の靈魂中にも人間の感化もて植ゑざる種子が潜在している、母の腕に擁せらるゝ嬰兒は苗床である、彼の裡には信仰と希望と愛と正義憐憫謙遜敬虔の種子が存在している、母は是等の天性を助長し若くは枯死せしめ得べし、然も彼女は是等を創造するを要せぬ、亦創造することは出来ぬ、イエスは『爾心を盡し精神を盡し意を盡し力を盡して主なる爾の神を愛すべし』と命じ給ふた、之れ決して出来難き愛を人に命じ給ふたのではない、彼は出来得る事柄の豫言と約束をなし給ふたに過ぎぬ、恰かも熟練なる教師が其兒童に師を愛することを習はしむる様なものである。

パウロは人よりも神の數多かりしと言ふアデンスに付き、其偶像禮拜の盛なる有様を目撃したれども彼は毫も偶像の多きに失望する事なく却て希望を有たのである、彼は木偶石像の神によりて希臘人の宗教心の盛なる證據を見『我是等のものによりて爾曹が宗教的精神に満つるを知る』と申している

權威の座位

白石喜之助

—

宗教的權威の座位は果して何處にあるか、教會であるか聖書であるか、抑も又個人の心底に存するのであるか、此興味ある問題を決せんが爲には先づ宗教的生命の本源を稽察するを以て至當の順序となす、

宗教的生命の本源は言ふまでもなく個人の心靈に存するのである、宗教は教會によりて外部から人に交付されたるものではない、書籍若くは特殊の經驗が特殊の賜物として人に贈與したるものでもない、宗教は天然自然に人間の内に生長し來るものである、イエス曰く

神の國は人、種を地に播くが如し、日夜起臥する間に種はえいで、成長ども其然る故を知らず、それ地は自ら實を結ぶものにして云々

人心は自ら宗教を發生するものである、サバチエは『人はいやでも宗教的ならざる能はず』と申し、然り敬畏心は人間の自然にして食欲の自然なるが如くである、正邪の認識も人間の自然にして甘苦智慧の認識の自然なるが如くである、宗教的熱望も亦記憶力の自然なるが如くに自然である、マックス、ミウラーは『宗教は人の道德性を感化するに足る程無限者の顯現を覺知することなり』と申

義なる一人は頑固説の主持者たる他の一人に對して『君は無神論者よりも惡し猶ほ惡神が無神よりも更に惡きが如し』と言ふた事があるが實に然り。吾人が宗教を世人に提出するに當つてや須らく人生の至情に訴へ決して固陋偏僻なる私論を逞ふしてはならぬ。

宗教が天然自然に人心の裡に湧起したるものにして従つて人は宗教的存在者なりとの説は決して新しき説ではない、こは之れアウガスチンの教であつた。以爲らく『神は自らの爲に人間を造り給ひたり』とこは之れイエスの教であつた言く『身の光は眼なり此故に若し爾の眼瞭ならば全身も亦明なるべし』と實に眞理と善の美を認識し此認識に導かれて歩むことは人間にとりて自然の事である。猶ほ日光を認識し其光に照らされて歩むと同一一般である。イエスは更に言く

若し爾の中の光暗からば其暗き事如何に大ならずや。

信仰と希望とが不合理であり正義が復讐に變じ慈悲が感情のみに偏し尊敬が尊からざる者を崇拜し愛が愛すべからざる者を抱擁した時は。之れ光が暗黒に轉化したのである。然れども暗黒の療醫は光ではないか、迷信の療醫は教養である。即ち合理的なる信仰と希望を與へ復讐的ならざる正義、感情的ならざる慈悲を供し、尊敬の念に對して尊敬すべき人格を示す、愛の念に對して愛すべき人格を教ふるにあるのである。

宗教は人の爲に存在するのみならず、亦人になりて存在するものである。人間の裡には宗教生活の

實に異教徒の偶像の中にも神殿の中にも神々の恐怖の中にも、難行苦行の中にも彼等の裡に宗教心の存在する證據を見る事が出来るのである、此宗教心たるや臆げながら無限者を覺知するもの、神の生命か自己を顯現せんとつとむるもの、美、正義、慈悲、謙遜、敬虔及び信望愛の價値を認識する精神である、現代の宣教的精神は百年否五十年以前の精神とは大に趣を異にしている、昔の宣教的精神は偶像禮拜を惡魔の企圖として破壊するにあつた、今日の宣教的精神は之を人間の熱望と見做し、それを善導せんとするにある、昔の宣教的精神は異教徒に往き『汝等は宗教を有せず、我等は汝等に宗教を與へんが爲に來れり』と宣言するに在つた、今日の宣教的精神は異教徒に往き『汝等は神を尋求するものなり、我等も然り、我等が発見したるものを見よ』と言ふ事である。

然らば世に無宗教者なるものはないか、勿論無宗教者はあるが然し宗教の能力のない人は一人もない、見よ信仰、愛、希望、正義、慈愛、敬虔に對して何等かの感動を受けざる人は一人もないではないか、時としては斯る精神上の訴が何等の感動をも與へざることがあるであらう、之れは受感者の宗教的感官が己に枯死したるによるか、若くは彼等を感動せしめんと試みる人々の措置の宜しきを得ざるが爲である。世には不合理たる事を信ぜしめ好ましからざる者を望ましめ、愛し難き者を愛せしめんと要求する者があるではないか。彼等は正義に復讐を混合し、慈悲に柔弱を混和するではないか。怖ろしき偶像を拜することは異教の神殿だけではない、基督教會の中にも往々にして行はるゝ事柄である。されば斯る偶像を跪拜するを肯ぜざる不可思議論は之を受け納るゝ、時俗主義に比して一層敬虔なるものである。曾て米國の某大學にて二名の教授が神學上の議論を戦はした事がある、其時進歩主

づけば近づく程眞理に近づくと思ふからである。イエスキリストが權威を以て語られたのは人間の裡に存在するものを知悉せられたからではあるまいか。彼が眞理を人間に現はしたのは人間てふものが明白に彼に現はれて居たからではないか。彼が山上の垂訓を終りたる時聽衆は非常に驚嘆した、それは學者や、パリサイ人の如くならず權威を持てるものゝ如く教へ給へばなりと聖書には書いてある。當時の學者やパリサイ人は常に過去に據依した、彼等は彼等の教の基礎を傳説の上に据へたのであるが、イエスに至つては其山上の垂訓に於て過去に據依することの代りに新らしき人生の眞理を顯現せられたのである。

『昔の人に告げて……』と云ふことあるは爾等聞きし所なり、然れど我爾等に告げん云々斯く彼は人生の眞理を顯現した、こは詰り人間の裡に存する眞理を發露したのである、彼が

『我誠に爾に告げん爾の敵を愛せよ』

と教ゆる時人の靈魂は此美麗なる理想に應答するのである、然れども人或は言はん『我は能はず』とキリストの生活は夫れに應答して『人は之を爲し得べし我は己に之を能せり』と答るのである。イエスキリストの權威は春の權威が花咲かんことを種子に命ずる様なものである。花は種子の裡に存するのであるが、春の太陽が種子の上に輝かぬ中は種子自ら自己の可能性を知らぬ。橡實を開けば其處には橡樹が已に壘み込まれて居る、人の靈を開扉せよ其處には十全なる基督教生活が壘み込まれてゐる。イエスの權威は此壘み込まれたる人生の眞理を發露し之が應答を得るの點に存する。

羅馬教にも新教にも二種の異なる意見がある、一は權威は教會を通して人民の上に降り來れるもの

泉源がある、故に人の裡には宗教生活に對して究竟の權威が與へられている。此權威たるや彼が神の裔にして従つて父の靈が彼の裡にあるが故に彼に存する所のものである。

吾人は教會に權威あることを信ずる、然し此權威たるや夫れ自らの權威に非ずして他より委ねられたる權威である即ち人民より來る權威である、詳く言へば信徒自らの宗教的經驗によりて形成せられたるものである。言語の善き使用は文法を定むるではないか、丁度其如く聖き生活は宗教を決定するものである、而して其權威はともに人間の經驗である。

人間の經驗は神聖なる權威ではないか、然り神は各人の裡に住み給ふ少數の指定せられたる人々のみに住み給ふのではない、去れば教會の權威は醒めたる神の子たちの共同の證言に基く權威である。吾人は固より信條を尊敬する何となれば吾人は同胞を尊敬するからである、吾人は他人の宗教的確信を尊敬する。去れば信條にして共同の宗教的經驗として内部より生長し來しものあらば吾人は之を歡迎するに躊躇せぬ。若し亦信條の或るものにして外部より強らるゝものならば吾人は之を拒絶するは勿論の事である。今日に於て吾人が昔の信條を研究するのは人類が曾て何を亦如何に信ぜしかを研究するのである。然り而して第四世紀にありし權威は第十六世紀にもあり、第十六世紀にありし權威は亦第二十世紀にもある事を信ずるが故に宗教上の權威を唯或時代に限るのは甚だ不當なる事と信ずる。今日の教會は過去の教會の如く眞理を定むることが出来る。吾人は或神學者が古代教會クリスチアンファザーの師父たちに歸りて其處に信仰の權威を發見せんとする企圖に反對する。蓋し吾人は初世紀に近づけば近づく程眞理の本源に近づくとは信ぜぬ、寧ろ眞理の本源は人間の靈魂に存するものであるから人間の靈魂に近

善は美の一種類なり……世にはソナタ、アパシヨナタとチエリーライブの樂譜を混同し若くは平凡なる石工の作と優秀なるアポロベルウイデルとを區別し能はざる人々あり、然れども誰か美術の眞理を疑ふものあらんや……世にはバスカル、モザルト、ニコートン、ラファエルの如く學問や美術に對する天才を充分に發揮するに一舉手一投足の勞を加ふるに過ぎざる者あり、斯る天才の人々によりて人類は智識の新境界と美の新概念とを獲得す、斯の如くに世には亦道德的天才の人々あり、吾人が義務の理想及び道性的完全の幻影を與へられしは此人々に由れり、此義務の理想や道性的完全や固と之れ尋常人の到達し能はざりし處のものに屬するとは言へ彼等は自己の鈍なる想像の達し能はざる所に横はるそが幻影の義を感じ、そが面影を微かながら現世界に實現せんとつとめつゝあるものなりとす、

此意味に於て聖書は吾人に對して權威を有するのである、

顧ふに各民族は世界に對して特殊なる使命を有す。羅馬は法律の理想を提供し、希臘は建築の理想を提供する、斯の如くヘブライ人は宗教の理想を提供するのである。然し彼等が宗教上の理想たる以所は彼等が我々自分の裡に潜在する生命の可能性を發現するからである。則ち彼等が我々の有する高尚なる生命を最も克く顯現して我々の共鳴を得るからである。彼等は我々の心裡に眠りづゝありし能力を醒したのである、かの十誡の權威はそが最初に與へられし時、雷光が現れたからではない、寧ろ人心が之に共鳴する所に存するのである。

正統派の或人々は宗教上の權威を其天啓たるの點にのみ置かんとする。然し彼等すらも其眞理なる事を證明せんが爲めには人心の共鳴を要するのである。例せば聖書中に存する種々なる難問に對して合理的の解釋を提供する事に骨折るのである。こは之れ聖書は吾人の理性に合一するが故に信奉すべしと言ふと同じではないか、別言すれば若しも聖書が吾人の理性に合一せざること明かならばこは不合理の書物であり従つて信奉するに足らずと宣言するに等しいではないか、教會に於て聖書の文句を

なりとの説にして、他は權威は人民を通して教會の上に昇り來れるものなりとの説である。所謂近世主義は後者を採るものにして宗教上の民主主義である、羅馬教内に於ても少なからざる賛成者を有して居る、然し教權主義者の嫌忌を蒙り塞息するの止むなきに立ち至つてゐることは目下の状態である。

吾人は宗教的民主々義に賛同するの故を以て必ずしも一教會の組織に拘泥するものではない、吾人を以て見れば舊教も新教も問ふ所ではない、英國教會の監督若くは羅馬教の法皇が十二弟子若くはペテロの後繼者なりと信ずるを妨げんとするものではない、英國教會制度若くは羅馬教會制度が教會政治の賢明なる秩序と見做さるゝならば夫れでも差閥へはない。然し吾人は神の仁恵なるものが或特殊の教會若くは組織によりてのみ人に分布せらるゝものとは信ぜぬ。否神の仁恵は靜かなる雨の如くに降り、露の如くに滴るものである、こは之れ日光の如く普遍にして善者不善者の上に等しく輝くのである。

三

吾人は聖書に權威あることを信ずる。然れども聖書は終局の權威に非ず、終局の權威は靈魂である。コレリツヂは『予は聖書を信ず何となれば聖書が予を發見したればなり』と言ふたではないか、ホイットチャーも亦『予は聖書が天啓なるを信ず何となれば聖書は予を啓發すればなり』と言ふたではないか、之れ吾人の感を同ふする所のものである、吾人はハックスレーの左の言を採て以て吾人が聖書に對する信仰を名狀し様と思ふ、

の生命が存在し居る事を信ずる、別言すれば人心中には神の生命の或物が活躍しつゝあることを信ずる。種子は雨露日光なしには生長しないか、雨が落ち太陽が輝くのは種子をして其生育を遂げしむる所以なるが如く、人の理性と意志とが其本來の面目を發揮するはそれが内外に働く神の生命に依るのである。

予輩は各人の宗教性が權威の源なることを信ずるが故に宗教上の教養を極めて重要視するのである。人は言語の能力を有する、故に文學研究の學校がある。美術の能力を有する、故に藝術の學校がある。音樂の能力を有する。故に音樂の教場があるではないか。斯くの如く人は宗教性を有するが故に宗教的教養の必要が存する、從て予輩は『我良心に正なりとするものは我にとりて正なり』と主張することの非理なるを認むる、之れ猶ほ『我目に賞讃するものは我にとりて美術なり』と主張するの非理なると同一般である『我は藝術に關しては何事をも知らず我は我が好む所のものを知る』てふバリステナの俚諺は予輩にとりて甚だ背理である。彼の『我は正邪に關しては何物をも知らず我は唯正なりと思惟するものを知るのみ』と言ふに至ては更に背理の甚だしきものである。予輩は訓練せられたる目訓練せられたる耳、訓練せられたる理性を信任するが如く、訓練せられたる良心、訓練せられたる敬虔を信任する、予輩は人心内に神の生命あることを信ずる。從て人心を耕作することの必要を深く認むるのである。

四

説明せんとする有ゆる企圖は、それが正當なる理性に調和すると言ふことを示さんとする企圖に外ならぬ。斯る企圖は詰り人の判斷と良心とを最後の權威と心得て之によりて聖書の是非を吟味するものである然らば吾人が宗教上の權威は人心に存すと言ふのは從來の正統派が暗然の裡に信じ來れる所と毫も異なる所はない様に思はるゝ。

ヒリツプス、ブルークスが會て物語た話がある、ボストンの教會に八十歳の老婦人が居た、彼女が恰度八十歳に成る時、彼女は希伯來書の研究を始めた、其孫娘は驚いて何故に今頃其様な研究を始むるやと問ふた、彼女は答へて「我が愛する者よ、數年内には或は全能者と顔と顔とを合せて相見んことを望む而して我は神自らの言もて語るに足る者とならんが爲めなり」と答へたそうである。予は信ず神は我々の有ゆる言葉を諒解し給ふ、彼は亦我々の解し得らるゝ言語もて語り給ふと信ずる、前者は祈禱にして後者はインスピレーションである、吾人は彼に語り得るのみならず彼と共に語ることが出来る。個人の靈魂に存する彼の聲は究竟の權威である。基督の『われ天國の鑰を爾に與へん、爾が地に於て繫くことは天に於ても繫き、爾が地に於て釋くことは天に於ても釋く可し』てふ言は正しく此權威を意味しているものと思はるゝ。鑰とは權威の表號である、各人は自己を處理する究竟の權威を與へられてゐる、之れ實に各人が棄て去る能はざる天賦の權威である、從て各人は自己の裡に存する權威に對して重大なる責任あるを免かるゝことは出來ぬ。

予輩は或種の合理派ではない、予輩は彼等が主張するが如く天來の光に照されざる理性が有ゆる問題を解決し、天來の助を待ざる意志が有ゆる勝利を博し得べしとは信ぜぬ。否人間の靈魂の裡には神

教もクエーカー宗も別段異はない、唯神の生命を自己の裡に有する人は其孰れの宗派たるを問はず神の教會に屬する人である、予輩は時にはトマス、アケンビスの『基督の模範』に親しむ事もある。時にはピーチャー、ブルクスの輩に耳を傾けることもある。チャンニングに親炙することも嫌ふ所ではない、予輩にとりては豫言者がフレンド派に屬し様が監督派若くは舊教派に屬し様が、そんな事には頓着がない、神に對して大なる友情を有する人は皆我友である。

予輩は亦宗教上の専門家の言を信任する。蓋し宗教上の事に關しては澤山な問題がある、之が解決に苦しむ事柄も多い、否自ら解決し能はざる事すら少なくない。斯る問題に關しては吾人は専門家の言を傾聽し其決斷に服從するのである。若しも予輩にして科學者にあらざらんか科學者が實際一致する點に於ては其說に賛同を表するに吝なるものでない、例へば進化說にして若しも科學者が之を是認し、此假定說の上に科學を建設することを知らば之を受納するに躊躇しない。丁度其如く聖書學者がペンタデューク(五書)は一人の手に成れりと論證せば予輩は之を受納するのである、若しも其說に對して多くの異論あらば暫く定論の歸する所を待つのである。若し亦信用すべき多くの學者がペンタデュークは數多の著作を編輯したるものに過ぎずと論證せば予輩は之を採用するを厭はぬ。予輩は世の進歩と共に學說の進歩あることを信ずる、從て専門家の定論の歸する所には忌憚なく従ふのである。彼の先入の僻見を懷いて新しき真理の闡明を嫌惡する神學者は決して神に忠良なるものでない。

五

各人の心裡に究竟の權威が存在すると主張すればとて予輩は決して自己中心主義者ではない。予輩は聖書や教會の無謬なるを信ぜざる如く自己の無謬をも信するものではない。予輩は自己を信する如くに他人をも信するのである。神が彼等に語り彼等が之を聞き且つ了解することをも信じ且つ彼等が何を聞き如何に了解せしかを知り之を自己の経験と比較對照し、一般の経験によりて自己僻執を訂正せんとするのである。此方法たるや實に科學者の方法である、見よ科學者は眞理に對してより確實なる保證を得んが爲に相互の觀察を比較對照するではないか。かの船員が二三人して太陽を同時に觀察し其結果を別々に計算し依て以て船の位置を誤りなく知らんことを計るのも亦此方法である。

予輩は聖書を尊重し亦之を歡迎するのである。然し予輩が之を尊重歡迎するのは、一も二もなくそを天來の書翰なりと認むるが故に非ずして、そが予輩に我自らの眞理を了解せしむる説明者であるからである。讀者は美の理想を得んが爲にレムブランド、チチアン、ラファエルに往くであらう蓋し彼等は予輩の夢想し能はざりし美の理想を示し予輩をして之を了解せしむる人々であるからである。恰度其如く予輩は義務の理想や完全てふものゝ幻影を得んが爲に希伯來の法律家、詩人、豫言者たちに往くのである。蓋し予輩は彼等の説明を通して之を我物となし得るからである。予輩は『父が其子を憐むが如く恐るゝ者を憐み給ふ』てふ文句を他人が曾て経験し得らるゝインスピレーションとして讀むのである、此意味に於て聖書は予輩にとりて無限の價值を有するのである。

予輩は教會を尊重し亦之を是認する、予輩が之を尊重是認する所以は予輩の了解し能はざる神の託宣所と思ふが故に非ずして、了解し得る神の嚮導者と信するからである。予輩にとりては天主教も英國

命を他人に鼓吹せんと勤むるのである、予輩は有ゆる人類は神の子なるか故に宗教生活に適する者、亦宗教生活を仰望し幾分か此生活の或物を有する者なる事を信ずる。ホール氏が印度に往き彼處にて述べたる演説の精神は實に予輩の意を得たるものがある謂へらく。

予が此地に來りしは人の靈魂中に於る神の生命に關して諸君が発見せるものを聞ん爲め且つ吾人が人の靈魂中に於る神の生命に關して發見したるものを諸君に告げんが爲なり。

此精神たるや現代に於る宣教の精神である。現代の進歩せる宣教師は印度人支那人及其他の異教者を自己の宗教に屬せしめんと務るものではない。唯基督が彼に鼓吹せし生命を彼等に鼓吹せんことを願ふのであつて其神學や形式や禮拜の形式や教會の組織は彼等の自由に一任するものである、彼は決して黑人種に清教徒の神學若くは英國派の儀を強ひ、猶太人種に福音主義の神學を強ゆることを望まぬ。彼は黑人種猶太人種に對して彼が山上の垂訓に善きサマリア人の譬喩に放蕩息子の教へに發見したる喜の音を傳へ。斯く彼等をして彼と共に其享者たらしめん事を願ふ、彼は唯此一事をつとむるのみにして究竟の權威に至つては彼等自らの裡に存する事猶彼自らの生活の究竟權威が自己の裡に存在するが如く成る事を忘れぬ。

宗教は全人類の爲であるから有ゆる氣質の人々を網羅するものである。神はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である、アブラハムは夢想家であつた、イサクは平凡なる人物にして戦闘時代にあつて其四隣と平和を保てる人、多妻主義の時代にあつて一妻に忠實なりし人であつた。ヤコブは希伯來歴史の中にあつて最も下品なる人物にして其兄弟の空腹を利用し父を欺き、エホバより利益を獲

要するに宗教は凡ての人間の自然性に出づるものなりとの信仰は凡ての人間を兄弟となすものである。且つ宗教の權威を過去若くは現在の少數者にのみ限らず單に自己の靈魂に存となすものである。宗教の權威は各人と同じく共有する靈的意識である、法律の權威が政治的社會に於る正義の感覺である如く、宗教の權威は靈的社會（即ち神の教會）に普通なる宗教的經驗である。

前にも述べたる如く予輩は宗教が一般人民の宗教にして一般人民に依りて支持せられ亦一般人民の爲に存するものなることを信ずる、詳しく言へば予輩は宗教的生命が各個人の靈魂中に其本源を有することを信ずる。何となれば人は神に象りて造られたからである、宗教的生命に關する權威は靈魂の裡に存する、何となれば神は各個人に天國の鑰を與へたからである。尙ほ予輩は此生命（宗教的生命）の歡喜は有らゆる人間に自由に與へられている事を信ずる、デエームスラスセル、ローエルの『神は求むる者に得らるべし』てふ言は洵に此消息を傳ふるものであると信ずるのである。

猶太人は神は猶太人の神にして異邦人の神に非ずと信じた。中世の教會は神は受洗者の神にして非受洗者の神に非ずと信じた。カルビン派の人々は神は撰ばれたる者の神にして撰ばれざる者の神に非ずと信じた。今日も大多數の基督信徒は神は基督信徒の神にして異教徒の神に非ずと信じている。然れども予輩は神は等しく猶太人希臘人、受洗者非受洗者、撰ばれたるもの撰ばれざるもの、基督信徒非基督信徒の神なる事を信ずる。此故に有ゆる人類に對して宣敎の必要を認むるのである。予輩は宗教生活が自己にとりて重要至極なるものなる事を信ずるのである。基督の世に來りしは『彼等に生命を與へ且つ之を豊富ならしめん爲』なるを信じて傳道に努力するのである。否基督が予輩に鼓吹せし生

予輩が前述へ來れる所之を要するに、(一)宗教の起源は人の靈魂中に存し、(二)宗教の權威は人の意識中に存す、(三)宗教の目的は人の幸福にありと言ふことである。而して人心中に於る神の生命とは如何なるものなるやと言はゞ愛と奉事と犠牲である。此三者は實に人心中に於る神の生命で、人心中に於け神の生命は則ち宗教である。愛と奉事と犠牲の精神を缺如する神學や儀式は最も非宗教的なるものである。若しも人の日常生活にして愛と奉事と犠牲の精神に鼓吹せらるゝあらばこは則ち宗教的生活である。

□我等は善惡共に之に報ふべきである。たゞし其善惡を行つた人物に報ふべき理由があらふか。

□愛情から溢れた行爲はすべて善惡の彼岸にある。

□醜汚に對する嫌惡の情が甚しければ自己を清め若くは正しうする餘地さへも無い。

□觸れゝば爛れるほどの氷のやうな冷たさこれに觸つた者はびつくりして後ずさりする……

世間はさういふ人を燃えるやうな熱血の人と言ふ。

—— ニイチエ ——

得せんと試みた人になつた。然り宗教は夢想家の爲め尋常なる商人の爲め亦狡猾なる罪人の爲めに存するものである。如何なる理想家も宗教を要せざる者なく、如何なる悪人も宗教に不適當なる者はない。

予輩は宗教と俗事とを區別することを好まぬ。何んとなれば人の靈魂中に於る神の生命は僧侶や預言者のみにあるものではない、獨り教會の屋根の下に咲くものでもない。こは之れ有ゆる普通の生活中に生長し花咲き亦結實するものにして吾人の日常の業務を鼓吹し亦祝するものである。實に神の生命は政治家なる摩西、職工なるベサレル、軍人なるヨシユア、母なるアンナ、農民なるルツ、女王なるエステル、歌人なるダビデ、説教者なるイザヤ、宣教師なるパウロの心中にあつた。こは之れイエスキリストの生涯との其一一の行爲に現はれて居る、彼が智識上の慾を抛つて母に従ひ農夫の家に微賤の生活を營める時、彼が父を助けて匠工の務に甘ぜし時、カナの婚姻の時、彼が山腹にあつて群衆に説教せし時、彼が病者を見舞へる時、ガレリヤ湖畔に數千人を養へる時、神の生命は其處に活躍してゐるではないか、或時弟子たち終夜漁業に勞して得る所なかりしが彼は弟子達の爲に自ら朝食を調待して其歸るを待つた。其朝食の調理は即ち宗教的行爲である。蓋し宗教は愛と奉事と犠牲である、而してこは家庭に於る小兒によりても、工場に於る職工によりても、宴會に於て客人によりても、講壇に於る説教者によりても、病室に於る醫者によりても、店頭に於る商人によりても、臺所に於る調理人によりても等しく現はし得らるゝのである。斯の如くんば病院は教會の如くに神聖に、帳場は禮拜堂の如くに神聖に食臺は祭壇の如くに神聖である。

心を打ち開けて萬人に對せられるだらう。けれども打ち開けてそれが裏切られる恐があるならば打ち開けない方が餘程安全である。もしも世間の多くの人が空處さへあれば突き込むものときまつて居るものとせば人は相手にしないに越したことはない。

泥水を出來るだけ多く飲みながらこれを又一方では吐き出して人の海の中を泳ぎ廻るのが世間とすれば實に世の中といふものは厭やなところである。いくら厭やなところでもたゞこれを避けてばかりは居られない。遁れてばかりは居られない。否、私はもうそうした消極的態度には堪へられなくなつた。いつそ世間が泥海なら思ふさまこゝを泳ぎ廻つてやらうといふ程の度胸も出せない私はどうにかして自分の都合の好いやうと片をつけて置かねばならぬ。私にはどんな場合でも理想の影が心の底からぬけ切れて仕舞ふことは出來ない。そうして理想を持つための苦しみはどうにでもして堪へやうとの決心だけは出來て居る。

私は力の極めて小さくして弱い人間である、けれども小さいものは小さいだけに自己獨特の地歩を占めて行きたい。徒らに他に隨順し他を利用して他にすがつて世の中をあまくわたらうとはあもつて居ない。居ないだけに自分が自分で切りひらいた路は狭いながらも確實である。あるいて來たゞけのところは少しのゆるみもないことを確信する。それだけに又そのか弱い細腕で築いて來た砦の思ひもかけない敵勢のために一方の堅めが打くづされた時のかなしさつらはまたいふに堪へたるものがある。

か弱いものゝ生活の上に一度入つた罅はそれを癒すのは中々容易なことではない。胡麻化しは到底



愛の要望

鈴木龍司

われわれが他を信ずるといふ根柢には他が決してこちらに對して惡様なことはしないであらうと云ふ善地を持つての上のことである。しかるにその信賴を裏切られたといふばかりではなく信賴を利用してたくめる上から自分が陥し入れられたといふ自覺は決して氣持のよいものではない。

私のお人よしの態度はすべての人はその根柢に於て善なりといふ假定の下に立つて居た。けれども世の中には善い人もあり惡人もあり、善い人も惡いことをすることがあるし惡い人も善いことをすることがある。一度惡いことをしたからとて一生涯惡いことばかりをしつゝけるものではない。善い人だといつて何時惡いことをしないと限らない。

赤裸々の自分を他の前にさらけ出して置きさへすればいゝではないか、而して欺くものをして思ふが儘に欺かしめよ解せざるものはたゞ解せざるが儘に放任せよといふやうな信條が私に力となつて居つたことが決して短い間ではなかつた。けれどもこれは實生活に對して無責任な態度である。あまりに態度が放漫である。自己を甚だしく無視したものといはなければならぬ。

自分が人を欺くやうなことは怪我にもしたくはないと思ふことの深い私は人から欺かれゝばそれより受くる痛手はまた又一倍である。人が必ず欺かない、自分を利用しないときまつて居ればどんなに

らう。意識の中に敵と味方が對立して居られては堪らない。けれども盲目的にこのけぢめをつけないことは自分の自覺は到底これを許さなくなつた。こゝに二重の悲哀がある。愛せんとする意志は動きながらも感情としてのそれは全く働を止めてしまふ。ついては愛しやうとする努力さへも出なくなる。自分の心はあくまでもつまらなく張合がなくなつて、甚だ頼りない氣持に襲はれる。そういふ時には手足を働かすの勇氣もなくなつてしまふ。この世との連絡はこの瞬間にばつたりと絶えてしまつて自分は全く世の中から捨てられたまゝで死するのではないかとさへ思ふ。私の心はさびしさに堪へない。

名譽心やら功名心やから社會的活動をしやうとする心は割合に少くなつて來つゝある。だから愛の心が働かなくなつたその時から私の活動は著しく消極的となざるを得ない。そうしてたゞ自分一人を衛る（愛するといふ言葉の用ひられないことをかなしむ）の心ばかりが執念くも存在する。退嬰の極自分は單なるエゴイストとならざるを得ない。

もしも私に眞に社會人類を愛するの心が湧いたならば自分の社會的活動は偉大とならう。それ以外自分と社會との關係は極めてコンパクトネスを缺くものである。たゞ社會に生存するものである限り何等かの社會的寄與をしなければ社會は私に存在するとを許さない。自然私は社會の現狀の要求する何物かを以てパンに代へて來なくてはならぬ。かくして私の今の職業觀は極めてみじめなるものとなつて居る。

どういふ意味からしても私にはもつと愛の心が湧かなければ仕方がない。愛の心の湧き出づるとこ

出来ないとするれば、たゞ残るは一時一時と延ばして行く自分の負擔にすぎない。私はその負擔は決して地獄の底までは持つて行けないことを知つて居る。一度犯した罪は未來永劫まで（そこに救済が現はれざる限り）消えないといふことを信じて居る。だから私はぼんやりしては居られない。人に乗ぜられ、人から負擔を多くせられないやうに自分は自分で衛らねばならぬ。決して人から欺かれてはならない、一一の場合を克明に判斷してこれに對して行かなければならない。私は私の態度が最早萬人一樣であり得なくなつたことをかなしまない譯にゆかない。

敵ならばこれを破らねばならぬ、味方は飽くまでもこれを愛護して行かなければならぬ。敵とは自分の生命に害をするものである。味方とは自分の生命に利益あるものである。しかしながらこの敵味方の判明からして決して容易なことではない。味方の假面をかぶる敵、敵と見せかけた味方。これらを誤りなく見分けんとする心の緊張は自ら私の心をして猜疑の思に高ぶらしめ皮肉なる觀察を敢へてせしめる。しかしながらこれ決して私の眞要求に添ふものではない。一一の場合に適當に働かすべき或は誠實或は皮肉の性情はそう思つたとほりに無碍に活動するものではない。人格の一貫性は自ら善人の型、惡人の型を形成するは止むを得ない。而して敵に對して用ふべき警戒の態度が思はず知らず味方に對しても起きて來るのはかなしいことである。

困難はそればかりではない。私の心は決して敵を敵として存在せしむることは堪へられないのだ。どうかしてこれを自分の心に取り容れたい。親鸞上人のいふた言葉に、氷多きに水多し。碍り多きに徳多し。といふことがある。敵が多ければこれを征服し切つてしまつた後の味方の軍勢は振ふであ

タゴールの根本思想と其批判

三 浦 關 造

一

惟ふに人文發展の徑路は、近代歴史的、科學的研究の發達以來大略五つに分つことが能さるやうに考へらるる。

其の第一に擧ぐ可きは經驗的思想である。從來の宗教は人間の經驗し認識し得ざるものを信じて自ら満足したのであつたが、最早かゝる獨斷は認められなくなつた。眞理は吾人の經驗し得るものに限られて居る、それ以外に眞理はないといふのである。第二は合理的思想である。高遠なる眞理は到底經驗し得るものに非ず、唯合理的であれば宜い、人間は知力物質主義のみでは生活の満足を得ることが能きないと考へた故に斯かる思想の人々は自然の社會、個人等の下に生の意義を解釋しやうとした。併しこれにも満足し得ぬ一派は意力を高調してブラグマチズムを起した。第四にはオイケンの言ふ如く、眞理には價值があるから眞理であるのでなく、眞理なるが故に眞理であると考へる。併しオイケンの哲學を未だ人世、宇宙の問題を根本的に解決したとは思はない、乃で未成品で不徹底なるブラグマチズムに不満足を抱いて研究する人々は、知力物質主義の人々の知らなかつたことを見た、そ

ろ敵も味方もあることではない。渾一の心の状態は惡そのものに對しては憐みの心以外は何物をも起すことは出来ない。敵を愛するの心は愛の心の至極である。私を欺くものに向つてはかくしなければならぬ。その人の境遇を憐むより外はない。いかなる場合でも欺かるゝものは欺くものよりは幸であるとの宣言は眞である。けれども私にはそうなるまでには可なりの曲折が要る。色々の経過を経てからの後でなければならぬ。

あゝたゞ惡いのは私に愛の力の足りないことである。愛の心よ躍れ、私は色々の意味から今愛の心を要望することとしきりである。(一九二五、四、一二)

□死が汝の扉を叩くときに

死が汝の扉を叩くときに汝は彼に何をさし上げるだらう？

おう。私は私の客人のまへに私の生の充たされた器を置かう——私は決して彼をして空手では歸させまい、

私のあらゆる秋の日のそして夏の夜の甘き葡萄酒を、私の忙しい生の收穫と落穂を私は私の日のほかに死が私の扉をたたく時彼の前におかう。

——タゴール——

のがそれであると、タゴールは教める。換言すれば永遠の調和を實現する神と合一するの謂である。然らば之が爲には個人は何を爲す可きであるか。

由來人間には物を所有するといふ權利はないのである、けれども若し人間に何か權利があるとすればそれは、吾々が成らなければならぬものに成ることである。此の眞理を實現することが解されず、其處に宇宙があり、永遠が展がつて居るのである。此の意を體達識得したとき、初めて個人は神と合一する。之が爲には人間は自己そのものを外部に放ち棄てねばならない。地中の種を見よ、そが内部の生命は暗き堅き外圍を突破して地上に現はれねばならぬではないか。吾々の心靈の奥底に宿れる眞實のブラーマを實現するには、如何しても自我放棄の外には道はない。而してこれが完全なる形は愛であり慈悲である。其の絶頂は即ち涅槃であり、天地宇宙の意識を得ることができるのである。彼は

言ふ――

『或日私はガンデス河に舟を浮たことがある。秋の美しい夕であつた。日は既に没して靜肅な蒼穹は眞に言語に絶した平和と美とにこほれん許に満されて居た。渺茫たる水面には一條の漣波も無く、移ろい行く夕の色は凡て其の水面に影を宿して居つた。何十里又何十里、荒寥たる河岸は左右の巨大な兩棲大蛇の如くに、鱗は陸離として色彩多様の光を放ち、うね／＼として横つて居た。舟が斷崖の下を悠々と滑り行くとき、群る鳥の巢の穴に謎かけられて、忽焉一尾の大魚が潑刺として水上に跳ね上つて、消え行く姿に夕の色彩を止めながら、ゾブリと沈んで仕舞つた。沈んで仕舞ふと暫くの間其の後に百色陸離の簾波が出沒變現し、其處には生命の喜びにあふるゝ靜肅の世界があつた。其は欣喜奮躍として神祕の奥底から浮き上つて來た世界であつた。しかも消え行く日の靜肅な合奏に樂を合せて浮み出たのだ。恰然其は異郷の友のなづかしい音つてであつたかの如くに感ぜられ、其の喜の閃きが心の心情に觸れた。其の時突然舵をとつて居た男が、一聲高く殘念な聲をはり上げて、「あゝ大きい魚だつたなあ!」と叫んだ、……
……彼は慈の目ばかりで魚を見て居たのだ。』

の自然法則の上に宇宙人生有らゆる問題に觸れて居るものを建設しやうとした。彼等は人間の經驗し得ぬもの、これと矛盾したるものを信じない。眞の知識の根源なる實感と反するものは信仰を形成し得ないものであると考へる。奇蹟とは未知の知的の事實が自然の現象となつて發現したので、經驗し得なかつたから奇蹟と考へたのである。人は mortal である、未來は fact である。事實であるといふ以上は經驗し得るので、現世以上未來の世界までも論じ、生と死とを超越した極めて實感的なものを鼓吹した。

二

タゴールの思想は此の最後の部類に加ふ可きものである。何となれば、彼の信仰は極めて實感的であつて、舊來の信仰を排し、純一なる婆羅門の眞理に徹底的に得達した人であるからである。獨りタゴールに限らず、人類の有らゆる個人々々の最も切實なる事實は、自己といふことである。此の自己といふ事實ほど明らかなものはないのである。そして又明らかであると同時に極めて神秘である、自我を失ひ個性を滅せば、それは即ち世界を喪つたことである。タゴールは此の意味で自己といふものを教へて居る。自己は其のまゝでは決して其の眞相を發露するものではない。其處には必ず何等かの行爲を伴はねばならない、行爲を通じてこそ自己は完全に發揮せられ、其處に人は神を觀、宇宙を知ることが能るのであるといふ。人間にとりての最大の問題は、自己といふものを有する個人は如何すれば宜いのであるかに在る。自己の目的は物を獲ることではない、實現しなければならぬものになる

る。斯く考て來れば罪惡は無いのである。惡といふは、即ち眞實なるものゝ不完全なる現はれてゐる。現在せるものは善なりとの考の下に、タゴールは神の人格性、倫理性を認めて居る。實感を以て神は絶對の存在者であり、善なるものであるとした。彼にとつては人生には苦痛もなく惡もなく、又實に死もないのである。死の先にある闇黒は云ふまでもなく暗いのであるが、併しながら其處に埋れて居るのは暫らくの間であつて、聽て我等は其處を通過し新らしき生活を持續し得るのである。斯くの如くにして自我實現から死に至るまでも整然として一絲亂れず、宇宙人生の問題は茲に解決されたのである。

五

彼の美はしい調、それは印度の夏の光の中に、取る限の生命を發明して居る大森林を通して歌つて居る永遠の響である。併しながらこの永遠の響に何となく物足らず感ぜらるゝのは、宗教的經驗の實驗が缺けて居ることである。彼は得達した人である、全部を實現した人である、敬虔にして、平和にして神々しき態度に生きて居る人である。併し私は此の偉大な聖者からは非其の宗教的經驗が聴きたかつた。左様しなければならぬあるものを教へて貰ひたかつた。私は其處に唯一の要求を彼に見出すのである。

貧慾な心で許り魚を見たのであるから、彼は存在の全部を見ることができなかつたのだ。自我放棄の極致たる愛に達し、犠牲に到達してこそ、人は初めて神となり得るのである。

三

併しながら此の自我の放棄と互に唇齒輔車の關係あるものは、自我の實現である。天地の法則に従つて奮闘するところに、かくして自我を實現するところに、自己といふものは現はれて來るのである。『農夫が堅き地を堀る處、石地を耕すところ、家宅を掃除する處、其處に整然たる平和の内に神の喜はある』のである。人が内部に有する自我そのものを、農夫の力を以て表現するところに、自我は其の真相を現はして居る。宇宙の法則に従つて努力するところに自由はあり、歡喜はあるのである。此の法則を離れた生命は、それは自由に非ずして、放逸である。自由に懂がれて、わが家を出てた放蕩息子、遂に何處にも眞の自由を求むることが出きないで、再びわが家に歸り來り、其處に眞實の自由を見出した。苦痛を避け、法則を無視するところに、到底自由はないのである。

四

彼は更に進んで人類の苦痛、罪惡、死の問題を解決した。タゴールに従へば人世を破壊するやうな苦痛はない。有らゆる苦痛、あらゆる障礙は吾々の眞性を一層力あらしむる器である。これを突破して自我を發明するところに、偉大なる自我がある。總てのものが自我を養ひ、自我を扶ける器であ

い信愛感との無い所には全部の枯涸が胚胎して来る。

低きに下る弱い心に引きづられて、その間には一種弛緩の甘味もあらうが、次第に濁り亂れた不統明不純一なる生活に墮してゆくことは、幾度嘗めさせられたかも知れぬ苦がい経験である。少しでも隙があると然うなつて来る。高く上つたかと思ふと低く下つてゐる。さうした経験を繰り返すつゝも自分は自分の生命に責任を感じ自分を熱愛してゐると思つてゐる。

どれほど眞面目になつてゐると思ふ時でも、何處かに隙のある心を見出す。七八年前のことであつたが、一生懸命で壇上より聴衆にアツピールしてゐた時、また彌次とか皮肉が加はるほど眞剣に熱烈になつた時、それでも東北辯を東京辯でやれといふやうな尤も至極な横槍が入つた時には、心のうちには可笑しく顔付きの上には眞面目で、何となく一種の虚偽を感じてゐるやうな、それかと言つて笑つてはゐられぬ焦燥の心持に襲はれたことがある。罵聲や妨害は却つてよいが、尤も至極な横槍には恐れ入らざるを得ない。眞面目になつてゐると思ふ時でも純一でなく、熱烈になつてゐると思ふ時でも深刻を缺いて浮調子になることがある。それらを眞實を愛する心は許さない。

浄土宗略抄を見た時、そのうちに「眞實といふは。身にふるまい口にいひ心に思はん事も。内むなしくして外をかざる心なきをいふなり。詮してはまことに穢土をいとひ浄土をねがひて。外相と内心と相應ずべき也。ほかにはかしこき相を現じて。うちには惡をつくり。外には精進の相を現じて。内

眞實を愛する心

佐藤 繁彦

眞實を愛する心、少しでも是れより離れると不安を覺える心。是の心は人を弱くしまた強くする。眞實は弱い、卑しい、力無き者にも、自由を與へる。眞實なくては一日も生きられぬ程の弱くして強い人を友となし、またその人のやうになりたい。

Essai sur la sincérité の著者 Dromard は次の如く言つてゐる、「眞實な人は、自分を識別すべき心配を有つてゐる、自分のことに空想を描くことを希はない、彼は自分を實現すべき幾千の機會を有つてゐる。彼は彼自身の主人である、彼は彼に信任を與へず穩な而かも壯健な靜謐を有つてゐる、彼は着手する力や完成する力を他人よりも容易に多く有つてゐる。彼はまた人間の主人である。」

自分を識別し吟味し點檢する點からは自分で自分を弱める所がある、然し自己の眞實に平和を見出す點からは自分で自分を強める。

矛盾撞着とまではならずとも、間隙とか距離とか不親と言つたやうな、何となくしつかりしない、おちつかない心持に來つゝも、何故さうなのか、鈍感と無反省の差、そのまゝにさせることがある。そしてさういふ心持をそのまゝにして置くと、次第にその人の生命感は弱つて來る。鋭い批評心と深

にすぎたる往生のあたはなし。それがために。かざる心をおとして。順次の往生をとげざればなり。さりとて狩居もかなはず。いかゞして人目を飾る心なくして。まことの心にて。念佛すべきといふに。つねに人にまじりて、しづまる心もなく。聞く人もなからん時。しのびやかに起出て。百遍にても千遍にても。多少こゝろにまかせて。申さん念佛のみぞかざる心も無ければ。佛意に相應して。決往生はとぐべき。この心を得なば。かならずしも夜にはかざるべからず。朝にても。晝にても。暮にても人のきゝはじかりなからん所にて。つねにかくの如く申すべし。』

眞實を愛する心は省察を回避しない心である。人と交る度に、それ／＼の人に調子を合はせることがある。それが同情同感の自然より發したものである。始めから好意を抱いてゐるが爲に不知不識に發したものである。友去り自分獨り残り靜かに自分を吟味する時、何となく自分といふものゝ頼りなさを感じられ、この頼りなさを正直正銘に感じて弱つてゐる自分を少しでも頼りにする人々のことが氣の毒になり、何となく濟まぬ感に打たれて来る。自分より少しでも慰めや力を感じてゆく人があるとすると、さう思ふと人を欺いてゐるやうに自分を思はなければなくなる。しかし人と面接してゐる時は、自然と人の心に共鳴し、同時に友人の氣分の誘發を自分にも經驗し、友人と同じ心になるので、少しも人を欺いてゐるやうな不純な心持はない。少しの批評もなく肯定も拒否もなく微温な好意で人の方向をそのまゝにして置くといふことは、或は切角何處かに向かうと出口を求めてゐるのに現狀維持の弱い心に同情して其儘にさせるといふことは、非常な不親切不眞實であるやうに思へる。

には懈怠なる事なかれといふ意也」とあるを見て嬉しく思つたことがある。馬太傳に『あゝ禍なる哉偽善なる學者とパリサイの人よ爾曹は白く塗たる墓に似たり外は美しく見れども内は骸骨と話の汚穢にて充。かくの如く爾曹もまた外は美しく人に見ゆれども内は偽善と不法にて充。噫なんぢら禍なるかな偽善なる學者とパリサイの人よ爾曹預言者の墓を立て義人の碑を飾れり』とあるのを讀んだ時、痛切な秋霜の威のある耶蘇の審判を見た。内外不一致、不照應、これが微塵でもあるうちはシンシリチに缺けてゐる。完全なる眞實は到底自分等のものではない。

われ／＼には飾る心がある、無いもの有るかの如く見せる。別にさういふ心は無くとも、汚れと濁りに充ちつゝも、さあらぬ如く濟ます心がある。飾る心よりもこの心の危険——やはり飾る心であらうが——を感じたい。無いものを有るかの如く見せる心の方が有るものを無いかの如く見せる不眞實心よりも優つてはゐるが、この所謂飾る心も不眞實心である。かかる心も導きやうで善くなるには相違無く、飾る心のあればこそ人が伸ひてゆくやうにも思はれることがあるが、飾る心を打破して一點所謂自分といふ心がなくなり神を求める心になれば、どれほど謙遜な眞實な心になるだらう。謙遜も眞實も、對他のではなく對自的になり、やがて對神的になり、奥深い落ち付いた心持の中に根を有つて來るのでないと、所詮ホンモノにならぬ。法然が元強盜の張本なりし教阿に示した詞は何時もよい教訓になる。

『人の中にすまんには。その心（かざる）なき凡夫はあるべからず。すべて親さも疎さも貴も賤も人

遂には自分そのものも無くなり、間もなく自分が自分を脱して、神の中へ這入つてゐる經驗に來る。凡てを失つて凡てを得てゐる境である。自分そのものがなくなつて自分そのものが新しく生れて來る經驗、それは思辨の上から論理の上から不備な言ひ方にしても、直接經驗の事實からはそれより外には言ひ様のない經驗である。自分といふものが收縮し、自分が有すると思ふものが消え失せ、自分がなくなつたかの如く思はるゝ時、始めて謙遜が残る。ワイルドが「謙遜」はその中に生命の、新生命の予にとりての「新生命」の要素を有する一つのものである。凡ての物の中で謙遜は最も不思議なものである。人はその有する凡ての物を放棄するのでないと、謙遜を得ることは出來ない。人が謙遜を有するのは凡てのものを失つた時のみである」と言つたのを讀んだ時、どれほど喜んであつたらう。しかしその喜びは未だにワイルドの喜びほどにならぬ。謙遜に眞に來ないから、凡てのものを失はぬから。

われ／＼は寧ろ始めから少しばかりの物を有つてゐると思ふよりも、無物の自覺、罪のみの自覺まで突き詰め、大きな生命の中へ身を入れてゆくべきでなからうか。

進んで外にあるものを取るよりも、衷に存するものを整理し、統化の過程を促進せしめて見るが宜い。それには省察と悔改と信仰と革命との過程がある。

理想は美はしく、これを實現せんとする努力は尊いが、時とすると純一に來べき自分を只だ外に擴がらうとする不醇な自分にさせ、それが爲に要らぬ苦痛をも感ぜしめることがある。われの面目如何、

人と人と交る時、人に與へる時、人に求める時、自分といふものは純眞な自分ではないものになつてゐる。戀人と戀人の關係でもそんなこともあらう。

弱さ、愚かさ、鈍さを泌みくと思ふ。そして眞實心の足らぬことをみぢめに感じる。そして暫く人を避ける。殊に友人を避ける。自分を記憶してゐるものから避けると共に自分の記憶そのものから自分を引き離す。神に祈る。神と交る。基督に愛され愛さうとする。それより外には眞實になる道はない。詩篇第五十一篇は慰めまた力の言葉である。「我はわが愆を知る、わが罪はわが前にあり……願くは聖顔をわが凡この罪より脊けわが凡の不義を消し給へ……神の求めたまふ祭物は碎けたる靈魂なり、神よ汝は碎けたる悔いし心を藐め給ふまじ……」

「若し罪なしと言は是みづから欺けるにて眞理われらに在なし」

「愚なるものは心のうちに神なしといへり、かれらは腐れたり、かれらは憎むべき事をなせり、善をおこなふ者なし」

謙遜に眞實に自分を點檢する時、罪を識ると共に光を慕ひ求める心を經驗する。一方に低きを見せつけられると共に他方に高きを仰がしめられる。その間の矛盾葛藤を脱して眞實の心に「光に在が如く光の中を行く」經驗を與へられる。

外に膨れ擴がつてゐるものがある爲、周圍との斯る關係より自分を見てゐるが爲、自然と自分といふものがその本來のあるが儘よりは大きく見えて。それを切り去つてうちとそとをすき無く呼應させ、そこに緊張と持續との純一性をあらしめ、やがて罪の銳感敏識に來て全く自分の中に自分が縮み

どれかを捉へてゐるなら、單なる人間としては解決のつかぬ所へ來る單なる基督論ではなく、基督といふ最も神を捉むに確かな、寧ろ神に捉へられるに確かな、永遠の實在に來るならば、最も奥深い基督論に來る。そして最も眞實心の完全な表現をした崇高偉大な基督の自意識へ來て、基督の基督論を研究せずにはゐられなくなる。千羊の皮は一狐の腋に如かぬ如く、基督の自意識を全然信ずるほど基督の眞實心を認めて來る。かくしてわれ／＼の眞實を愛する心は鮮活になる。確實になる。

宗教のことに來ても、神學や教理はどうでも宜いと思つて來た。信仰は是れらとは別だと感じて來た。しかし是れらを研究する心の足らぬ曖昧不純な心は、やがて信仰そのものをも不醇ならしめることを經驗して來た。それらを研究しようが、それらに無頓着にならうが、暫くは信仰の上に差支もないが、またそれらに堅く立つ人にも信仰の怪しい人もあるが、根柢のある發展のある信仰はそれらを離れ得るものでないことを知つて來た。それらは人に混亂を多くの場合に與へる。しかしそれらを混亂とする人が信仰の混亂をやがて切り抜けるは容易ではない。事實多くの人はそれらを輕視する。教を説き道を傳へる人もそれらを敬遠する。しかしこれは健全な方法ではない。

研究を離れた傳道があり得やうか。傳道の心が燃えつゝも研究の心を捨て得ないのは、信仰の事實より見て、經驗の實際より見て、止むを得ないといふものでなからうか。信仰は自分の生命の問題である。傳道はその心を他人に擴充した他人の生命を思ふ心で始まるべきである。

經驗は信仰ではない。理論は實際ではない。しかし一全的のものが部分的の經驗を部分的にプロセ

われの將來如何、われの歸趣如何、深刻に熱愛的に自分を凝視するが宜い。どれほど目的近く理想空しく神遠かつたかゝわからう。理想の夢に憧憬れ、その實現を熱望して來る時、よく運んだかと思ふと思はぬ障礙が入り來たり、同時に自分自身に思ひ悩む時、外の障礙よりも心の内の障礙がどれほど自分の眞生命を弱め、果ては削つてゐるかを感じて、矛盾焦燥の感に心弱り氣沈み自棄の情をも抱き兼ねまじくなる時、遠かつた神が近くなり、神より與へられる救が眞生命なるを悟つて來る。「我を聖前より棄て給ふなかれ。汝の聖き靈を我より取り給ふなかれ。世の救の歡喜を我にかへし、自由の靈を與へて、我を保ち給へ。」「若神の光に在が如く光の中を行かば我儕互に同心となるを得かつ其子イエスキリストの血すべての罪より我儕を潔む。」

「神罪を識ざる者を我儕の代に罪人となせり是我儕をして彼に在て神の義となることを得しめん爲なり」

保羅の耶蘇觀は直ちに自分の耶蘇觀である。

眞實を愛する心は自分を自分に一致させるだけでは不足で、神に和げさせる迄になる。眞實な心は自分に對して深奥な或認識を有つと共に、その認識の中に豊かな安息を見出すが、神に和ぎを得させる基督の與へる平和に比すべくもない。

自分の基督を知らうとするは、知的享樂ではない。しかし知的享樂としてもこれほど高尙な眞實な享樂があらうか。自分は基督の傳を研究すると共に基督論を研究する。これが自分の一生の事業である。傳だけではゆるされぬものが基督にある。どんな學者がどんな研究をしても基督の眞相の諸相の

情の弱點で、神學者の思想や理論がどれほど信仰といふものを整理して來たかも聖者がまたどれほど彼等の影響を受けたかも、想像し得ないとあつては、何となく心細くはあるまいか。學問したものは學問を捨てるには及ばない、無理に信仰と謙遜とで萎縮しなければならぬとは思はない、信仰は實得のものもあるが、そうならぬものも多い。そして希望と忍耐とで見ざるものを望んで進ませる。ヴェジヨンがある。そしてそれに對しては理論が生れて來る。一全的にして絶えず經驗化しつつある信仰は全一の豫感と過程の實感とに對して想像の豊かな直覺の深い理論を生ませる。かゝる理論が神學となり教理となる。それらをはなれた信仰といふものがあれば斷片的一時的興奮沈靜的である。靜かな渾一な心持を與へるものでない。かく言へばとて所謂理論とも言ふべき個人／＼の我儘勝手な自分の側からの狭い淺い經驗に立つた理論をすゝめるのではない。聖者の經驗でもあり神學者の思想でもあり最も人心的の奥底に徹する理情兼ね備つた理論を尊く思ふのである。この理論を識る心は研究の心である。この心活潑ならずんば傳道の心は鮮活なるを得ない。少くとも學問した者の傳道の心は研究の心を離れ得ない。眞實を愛する心は傳道の心となる時なくなつてくる。(四、四二四)

スの中に味はれやがてその部分的の經驗を一貫せるあるものに見て、輪廓に止つたものが内容的に直接的にまた個人的に具象味として經驗される。信仰は經驗の事實に光明を増して来る。信仰は經驗となる。それと共に信仰は信仰として今迄よりも遠い領域まで這入つてゆく。實際の經驗が加はり信仰の光明が増すほど見ざるを見んとする。ヴェジヨンは擴大して来る。經驗と共に眼界が固定し理想像直覺の心が減ずることはない。信仰は經驗を促し、經驗は信仰を規定せずに進展せしめる。信仰に於ける經驗は實際に觸れしめ直ちに實際以上の實際を豫感せしめ直感せしめる。所謂經驗が實際に始まり實際に終るとは違ひ、常にヴェジヨンの離れぬ經驗が信仰に於ける經驗である。信仰が未だ經驗とならざる中は理論である、所謂理論では勿論ないが神の方からは然もありなんといふ信賴歸依の情の伴へる判斷である。所謂理論は自分の側よりの知的推理である。信仰は神の側よりのことに對して情的信賴である。情的信賴には明確な渾一な心持が伴つて疑惑の心も不安の念も占むべき所を見出さない。信仰は知的判斷よりも意的判斷——若しくは信順的決心——であつて、それには子が父に對するやうな心がある。美はしい親しい暖い情がある。神の側よりのとに知識的に暗い人が情的に神に應じて正しい態度をとつてゆくことの出來ぬことは當然である。所謂理論が馬鹿にされ實際が重用されるのは、實際を生むべき事實の普遍性に立つべき理論が、却つてその資格無く「理論は知らぬ」と「實際に立つ人」が經驗の事實より事實の普遍性に觸れてゐる時である。此場合理論は理論でなく實際が眞の理論である、只だ説明の無いだけである。かゝる意味で説明の無い經驗の信仰が尊まれる。しかし聖者の美はしい信仰を仰ぐことのみを知つて、偉大な神學者の思想を辿ることを知らぬのは、人

二 獨乙文化の特性

實に、獨逸人は大思想家ではないが、非常に注意深き思想家である。

何事によらず獨逸人は觀察をする。

彼れは勤勉なる觀察者であつて、彼れの心智的眼光は壁にある一つ一つの瓦をも見分くる程の鋭さを有する。けれども壁全體の構造を善く洞察する、即ち大體をつかむと云ふ點に到つては餘程缺けて居る様と思ふ。

獨逸人種は極めて注意深き研究者である。彼等は問題の大體の要領をも分け分けて、遂には枝葉の問題に導き入れて仕舞ふ。私は獨逸人と云ふものは凡べての事物を、より小さくより細かく、より分業的に研究する民族であると思ふ。彼等は小問題に就いても大部の書籍を書く事が好きである。そこで、獨逸では澤山の本が日に月に出版されると思ふ譯である。

乍併世界にはより以上に大切な仕事は澤山ある。例へば大問題に關する大著述をなし、新らしい事件や、古い問題に關する新解釋新觀念を創造

して世界に貢獻すると云ふ様な事が、それである。獨逸人は詳細に亘つた目錄を作る事を好み殆んど天才的に上手である。また小問題に就いて永い講義を與へると云ふ事は彼等の最も好みとする所である。

原子に關する精密なる研究は動もすれば集合的有機體の排斥を惹起する事がある。例へば、個人又は社會は集合的有機體なりや否やの問題に發展して來ると間々枝葉的近視眼的の見解を下すが如き其の一例であるが、勿論かゝる精細の研究は世界に大なる貢獻を爲すには違ひない。けれども、其れのみが社會に貢獻する唯一のものではないのであるから、若しもかゝる研究者が、其の他の研究調査の方法態度を否定し排斥するに於いては、勢ひ、甚しき狹量の見解即ち井中の蛙と云ふ譏りを免れない事となる。狹量なる見解は結局利己妄我的のものとなる、また、明かな事である。

三 獨乙的研究法の影響

獨逸にかゝる研究が流行してからは彼等は一般に利己的になつた。

佛國教育家の戰爭觀

在紐育 高橋 清 吾

目下我がコロンビヤ大學には彼の有名なる巴里大學のラブレデン教授が交換教授として來て居られる。歐洲動亂に關する同教授の感想は他面に於ては佛國教育家の戰爭觀にも見らるゝのであるから、茲に其の概要を紹介する事とした。

一 戰爭の結果が教育上に及した影響

戰爭の結果如何は擧げて其の終局如何にかゝる問題であるから、今之を明瞭に推斷する事は早計である。而して同盟側なる我等は皆最後の勝利を確信して居るとは雖、未だ兩軍勝敗の決せざる事は明かである。其故に、この戰亂の結果が如何に世界の哲學又は他の智的發達の部門に影響するかに關して、只今これを精細に論ぜんとするは、これまた、早計と云はねばならぬ。

けれども確かに、或る獨逸かぶれに對する反動力

は戰後に於て現出するであらう——。何となれば、世界は今後かゝる大慘事の反復を欲せぬのである——と同時に、今度の慘劇は獨逸が世界を智識的に支配せんと企てた、其の避くべからざる結果に因る事が一般に了解されて居るからである。

獨逸國民は世界優秀の國民であると云ふ傲慢なる確信は、かの普佛戰爭に於ける彼等の勝利に依つて其の程度を増した。けれども、其れは理性の範圍を超過し、獨逸國民が實際に成就せる功業以上を誇張せる觀念であつたものである。

元來戰勝の餘勢は動もすれば人類をば極端に導くものである。即ち八百七十年の勝利は獨逸をして其の社會的優越、其の智的卓越の極端なる確信にまで導いた。世界の人々でさへも或る程度まで其れを承認する有様であつた。

十九世紀の初め、かゝる思想を宣傳したのは彼のヘーゲルであつた。彼れの思想は獨逸人にはプロシヤの發展を助くる根柢として歡迎せられ著しく流行したのであつた。

ヘーゲルは考へた。

『國家は凡べてを代表して居る、國家はエヴェリースィングである。而して神の權力も地上にありては國家の裡に幽閉せられ、従つて、國家の發達は假し、其の正邪は別としても、凡べての法律の目的である』と。

獨逸人は一般にこれを信じて居る故に國家の榮譽のためには個人の犠牲も必要とせられ、而して獨逸に於いてはこの犠牲が無慘にも行はれたのであつた。

其れ自身の國民すらも犠牲にする事を正當とする國家は勿論他國の國民を自國のために犠牲とする。これまた正當なりと考ふる事である——。

四 獨乙的國家觀と國際法

其れは何故に獨逸國民が國際法を無効力のものとするかを説明し、巴里への進軍が白耳義を通過

するを要するに當り、其の中立を蹂躪した理由を證明して餘りあるのである。

國際法は決して獨逸人をば束縛しなかつた。今後とても恐らく彼等が、其國家的心理學を變更する迄束縛せぬ事である——。

イーリング 獨逸の法學者なる彼れは ライト・イズ・ゼ・チャイルド・オブ・マイトと宣言した。彼れは ライト・イズ・マイトと云ふ事は正確に云はないでライトをマイトの子供として定義を下したのである。

この定義は獨逸人の座右の銘とせられてあつたかも知れない、何故ならイーリングの言は獨逸國民間に正確なりとして尊重されて居つたからである。

トライチケは自然にかれら二人の教者（ヘーゲルとイーリング）から或るインスピレーションを受けた。彼は曰ふ。

『國家は其れ自身の擴張發展のため以外の目的に法律を作る必要なし』と。

彼れはまた曰ふ

現在の争ひは實にこれ、世界進歩に對する利己妄我の戦亂であるのである。

多くの個人は獨逸が國家として取つたコースに歩調を俱にした、忠實に専ら科學的精神のみを有する個人は詳細（ミヌシア）に關する謬れる解釋の上に建てられたる抽象的觀念に何處迄も賛同して行く様である。

理想的なる國民的發達は事實と學理との兩者を結合し、合理主義に理想主義を結び合はして行く所にあるであらう。而して私には獨逸の智的發達の如きはこの意義に於ける發達より遙かに遠きものであり、反つて其の他の國民——私は別に名を呼ばぬが——がこのラシヨナリズムにアイデアリズムを結合せる文明を持つて居ると思はれる。

獨逸の文明は世界唯一の文明であると云ふ事は凡べての獨逸人が有する確信である様に見えるが、佛國や英國では決してそうは思はないのである。

佛蘭西や英吉利には所謂ナシヨナルエゴイズム

として呼ばれて居る所のものがない、かるが故に、これ等の國々は獨逸が爲さぬ所の即ち、世界の科學のため、社會の發達のため、否な、全世界文明の發展のため働く事が出来るのである。

獨逸の科學的勞作は一に獨逸の科學——彼等は文明とは獨逸文明の如きものを云ふと信じて居る所の其の科學——のためである。世界の他の國家國民は——殊に私はラテン民族と云ひたいが——彼等の科學、彼等の文明をインターナシヨナライズした。

獨逸のクリテカル、フィロソフィは彼等の教育制度の根礎を形づくり、従つて其の社會制度や更に進んでこの戦争の根柢をも其れに抱擁して居ると云ふ事實は一般に攻撃される居る點である。

私は獨逸の教育が其の政治や軍國主義等と同様に今度の戦争を直接に助成した事は確かであると信ずる。

實に獨逸の産業熱、政策、哲學等は皆この大戦争に於いて其の論理的の表現を見出して居るのである。

の間に勢力を得る事は不可能である。其れは貴族的國家のみに可能の事である。

獨逸にありてはこのナシヨナル・プ・ライドを認容せざるのみならず、時には他を侮辱さへする觀念が殆んど興奮の程度にまで發展して居つた、而してこの病患は獨逸と他國家との關係に災を及ぼして居るのみならず、獨逸國民相互の間にも累を及ぼして居るのである。即ち獨逸に於ける各階級の國民等は互に彼等の行爲の中に絶えず、この病患を表はして居る有様である。

獨逸を訪れた外國人が絶えず、獨逸の兵卒が其の上官のために侮辱せられ虐待されて居る事を物語るは一般に知られて居る事實である。更に軍人等が全國に跋扈して文官や國民を虐待し、下級官吏、時には上級官吏でも外國人に對して甚だ好意を缺く點あるは想像以上である。

獨逸人は個人としては或は他國の個人よりも超えて居ると思はぬかも知れぬが、國家と云ふ事になると、一も二もなく彼等は自國は最上級の文明を有し、到底他國家の企て及ぶ能はざるものと思

つて仕舞ふのである。實に彼れのは特別なる傲慢であり、少しも人格的でない。其れは全く國家的である。少しも他より劣ると云ふ事を認めないこの傲慢は甚だ危険である。

階級政治あるものは常に貴族國に存在するものである。而して階級政治の觀念は他の何處よりも獨逸に於いて著しく發達してあつた。

これは獨逸に不幸にも刺激を與へた。

若しも我等は獨逸に於けるこの刺激に加ふるに千八百六十六年以來の彼國の種々なる勝利、殊に夫の火と血とに依つて凱歌を擧げんとするビスマルクの勝利の夢が實現されつゝあつた間に發達せるもの即ち獨逸産業の勝利、科學の進歩、社會の進運等を計量し更にエゴイズムにまで獨逸の傾向を考察するとしても我等は現在獨逸が存せる凡べての物を調査し、正確に評價する時には毫も驚きの聲を發する必要がないのである。

國民的精神が國民的傲慢に顛倒したと云ふ事は假し千八百七十年以降獨逸に於いて行はれつゝあつた所の教育的感化の欲せざる所にあつたにせ

『道徳律なるものは國家の繁榮發展の進路には不必要であり、且つ立つてはならない、何となれば其等は多くの場合に於いて人個の繁榮發達をすら妨ぐるから』と。

彼れはこの學說の下に國家の職分を二つに分けた。即ち一つは國內にありて法律を作る職分。他の一つは國外に於いて戰爭を作る職分。

獨逸は國內に於いて正邪善惡を決する他の法律の權利を認めない、而して、これは何故に獨逸が國際法を拒み、否定すらも敢てしたかを明かに説明する事となる。

若し國家が結べる條約が、後に到つて國家の運命に必要なりとせられて居る或る膨脹策に妨げになる様な事が起つたとすれば、かゝる條約は假し獨逸に於ける個人の場合には同種類の行爲が明かに責むべきものであるにせよ。獨逸國家の場合には國民道徳の大喝采の裡に蹂躪されるかも知れぬのである。

國家は利權を得るために其れ自身を束縛するかも知れぬが。之と同時に利權を得るためには束縛

しない事も出来る。而してこれは他の何人の承認又は約束も必要としないのである。

この學說は獨逸と全く違つた教化の下に育てられた他國の學生等に取りては甚だ奇怪に感ぜられる。この學說は矛盾の極である、何故なら獨逸は毫も他國家に對す義務を感じず、只自國將來の利益のために其責任を果さんとするからである。

五 獨逸はナショナル エゴイスト

獨逸は熱烈なる愛國心を持つた居る、けれども人道主義は一つも持たぬ。彼女の唯一の義務は彼女自身のためである。彼國のナショナルエゴイズムはセルフィシテスと云ふより外に名附くべき言葉がないのである。

廣い意味に於いて人道主義が獨逸以外の他國民のキーノートとなつて居る今日に其れが少しも獨逸文明のキーノートとならないと云ふ事は實に奇怪なる現象ではあるまいか？。

獨逸の主張するが如き、かゝるプライド、かゝる傲慢なる國家的優越の觀念は今日の民主的國民

私は信ずる、獨逸自身の救済は一に彼國の絶對の敗北にかゝるのみと。

戦争の初まる丁度數週間以前に、かのサツキング教授が痛く獨逸を悲まれて言はれた、

『獨逸即ち獨逸政府は何故にかく迄國際的精神に反對しなければならぬのか』と

サ教授がこの言を發せる所以のものは次の事實を示さんがためであつた。即ちミリタリ、チャーマニー以外に他の智的精華、獨逸に於ける精の精なる智的クリームが大哲カントのトラデションに忠實に残つて居つたのであつた。

智的精華、精英のクリームは其れ故に凡べての

責任を宥されてあるかも知れぬ。大哲カントの教に忠實に従ふならば獨逸は全世界にある人道の愛護者をば世界正義人道の上に立てられたる人類進歩の目的のために自國と共同動作を取る事を得せしむる事となるであらふ——。

同盟軍の勝利の後には新しい獨逸が現はるゝであらう。其れはリベラル、チャーマニーであらう。其れは狭量なるプロシアン、アイデアルスを否認し、其の公平なる形に於けるオールド、チャーマシンの再現となるであらう。かくして獨逸は再び世界文明のために他の諸國と手を携へて新らしき貢獻を捧ぐる事となるであらう。

よ、明確なる事實であつた。其れは他國に對する國民的精神の比類なき顛倒であつたのである。

六 獨乙主義と現時の戰爭の結果

この戰爭はこの獨逸人のブライドの危機を示したものである。獨逸の進路を通じてナシヨナルエゴマニアの凡べての目標が表示されてあつた。全獨逸國民は國民として——個人としてでなく——エゴマニアの恐ろしき攻撃に犠牲を捧げたのである。このエゴマニアに或る妄念を結合する時には獨逸帝國は全世界の迫害を目的とすると云ふ結論に達する。我等はこれ以上に戰爭の原因を確かむる必要はない。凡べてその歐洲強國が何故に獨逸に對して結合したかの理由もまたこれ以上に探求する必要はないのである。

若し獨逸の勝利が來たならば其れは他の凡べての國家國民の負擔の上に立つチャーマンエゴイズムの無窮の虐政以外に果して如何なる意味を世界に表はしたであらう？

佛國は免れられぬであらう、英國また勿論であるが、米國とてもまた免る能はぬであらう——。

獨逸の勝利は歐洲の災厄よりも、より甚き結果を呈するであらふ。それは世界の災厄となるであらう——。

現今諸國の中で米國と佛國とは最も著しく國際間の正義を守つた。すれば實際にこの戰爭の結果に於いて我が同盟國が獲得すると同様な利益を間接に米國に與ふるである——。

私は米國民が其の思想感情に於て單に獨逸滅亡の希ひよりでなく、眞に世界を維持せんとする痛切なる希望より同盟軍に對する勝利を要求する以外他に如何なる事を感じ得るかを知る事は出來ない。

實に同盟軍の勝利は獨逸の滅亡を意味すると云ふ事は思料し難い事であるが、其れは獨逸國民精神の顛覆を持ち來らしつゝある所のミリタリズムの滅亡を意味することなるは何人も認むるところである——。

奴隸を其の足械より解放すると云ふ事は世界に大なる貢獻を捧ぐると同様に其れは獨逸其れ自身に大なる利益を齎してある——。

(此廣告を見を御申込の方は六合雑誌に依る旨書添を乞ふ)

日本歴史の側面觀

原版一千七百十五年巴里刊行
翻譯明治十三年太政官刊行



▲菊版クロース全二冊箱入紙數二千頁
▲定價 六圓 送料 三十二錢
●特價 六月中御注文に限り 四圓八拾錢

本書は足利の末年より徳川の初年に於る基督教宣傳の唯一真正の記録にして原書譯書共に全く絶版に歸したるを今回更に翻刻出版せるもの日歐交通の起原當時西南諸豪族及貿易諸港の活動異教迫害の真相鎖國令の顛末其他外人の眼に映したる當時日本社會の狀態日本歴史の側面描寫として眞に學界必須の史料たり

《中付一》

發行所 東京東區平河町四一 洛陽堂 電話二番五八

紫雲石より (三)

秋 郎 生

青嵐吹き通ひて松蟲なき、山上の生活もはじめて初夏の風情す。墓參の人々にやあらむ。閼伽の水くむ音其處彼處に聞ゆ。聲する方へ誘はれて、われは松林にさまよひ出でぬ。池玉蘭女史の墓あり。藤村庸軒の墓あり。山崎闇齋の墓あり。會津藩の墓地はまた別に一廓をなして頭顱相磨せり。その幾百千を以て數ふべき累々たる墓石は、各々異りたる人生を苔下に物語るならめど、大方タイムの永きに隔てられて、オブリヰイオンの悲しき運命に遭へり。是等の墓標より一頭地を抜いて、諸所に地藏尊の鎮座ましますは如何なる意か。地藏尊はそも何事をか語り給へる。いぶかしきこと也。青葉が蔭、箒を持ちて佇める老僧に言訪へば、明辨流るゝが如く、其の地藏尊の物語こそ實に面白けれといふ。抑々阿彌陀如來は淨土に行きて衆生を濟度し給へど、此の地藏菩薩はさにはあらず。一切衆生を成佛せしめずんば我は淨土には參らずとのこと也。されば今も尙ほ地藏菩薩は佛の御位にものぼり給はで、一切衆生の救済に日もこれ足らざる有様なり。生生父母、世世兄弟、悉成佛道後、我成佛。若殘一人我不成佛。若知此願、二世所求悉不成者、不取正覺。と、あはれ大道聖者にも似たる地藏尊の覺悟かな。現世に即して而も忠なること牧羊者の如きは、實に稀に見る佛道の達者ともいふを得べけむ。されば佛の讃め給ふ語に曰く、善哉善哉、眞善男子、我滅度後未來惡也、罪苦衆生、付屬於汝。と宜な

(此廣告を見を御申の方には「六合雜誌」に依る旨を添書を乞ふ)

院長 診察月、水、木、金、午前

林、峰間 兩副長は目下當院に在勤

麴町區三番町三十番地(市ヶ谷見附内)

電、番 六二一番

東洋内科醫院

院長

醫學士

高

田

畊

安

電話ちがさき二番

南

湖

院

相州茅ヶ崎海濱(從停車場半里)

河野、高橋 兩副長は目下當院に在勤
院長 診察土曜日午後、入院診後應需

此廣告を見を御申込の方には「六合雜誌」に依る御書添を乞ふ

新版

英文構成法

豊山中學校講師

牧島榮太郎先生著

英文を自由自在に書ける方法に依るの外なし

(下の廣告文を御覽なさい)

●英文に上達するには無暗と書けばよい、とは英語で喋るつて居る英人に云ふことだ。

▽日本人が普通の境遇で英文を書けるやうにするには本書に勝る手引はない。

●カタを習はぬ劍術は本物でない、定石を知らぬ碁打は名人にはなれぬ。

▽英文の構造を組織的に教へて、いや應なく英文が作れるやうにするのは本書である。

●同情と云ふものは自分と同じ苦を味つた人でなければ出来る筈はない。

▽本書の著者は多年邦人に英作文を教授して具さに應病與藥、誘掖助成の術を心得て居る。

●斯の人にして此の著あり英學生諸君勞慚くして功果甚大なる本書を速に購ひ給へ。

《中付二》

四六判洋装全一冊・定價金四拾錢・郵税金六錢

建文館

東京市神田區表保町三番
電話本局五二五番
東京座口番〇七五八

發兌

此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る旨書添を乞ふ

教育學術研究會編輯

一大權威

教育學術界

學術雜誌界

半年前金郵金稅金圓拾錢貳

● 六 月 號 要 目 ●

壹冊定價貳錢拾郵稅壹圓五厘

△教育家的教師の養成を望む無礙生

△教育的科學

文學士

佐藤繁彦

△パーメリー氏社會的進化の始源と其根本力(三)

杉井富貴子

△ボンデルバンド哲學概論(五)

文學士

宮本和吉

△理科教授に就て

教諭

清水保之

△海外學事彙報

文學士

倭亭生

△教育機關としての檢察所の必要

ドクトル

ヤーペーテルゼン

△育英精神の發揮

教授

乙竹岩造

△現代思潮と歴史哲學文學士内藤智秀

△氣質の年齢による變化及其教育文學士大西友太

△波斯の詩聖ゾロアスターとマホメット

文學士

高野正治

△國語及漢文科の受験に就て

稻葉生

△教育資料としての新聞紙

文學士

鹿島寛

△勇敢なるペルギー

工學士

鳥山嵯峨吉

△兒童身體の發達概觀文學士上野陽一

發兌

東京早稻田市

同

文

館

振電替話

東京番

一京

二九

五八

(此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る旨書添を乞ふ)

文學博士 高楠順次郎先生閱

帝國大學講師 文 學 士 木村泰賢先生著

〔前付四〕

印度六派哲學

菊判六百五十頁
定價二圓三十錢
郵稅十一錢

六派哲學(數論、瑜伽論、勝論、正理論、ミーマーンサー、エーダー・ンダ)は印度哲學の代表的思潮にして一元論二元論多元論の爭汎神論有神論無神論の別機械論目的論虛無論の主張等一としてこの中に含まれざるはなく又これを學科の性質より見れば物理學論理學純正哲學宗教哲學實際哲學等悉くこれを網羅せずと言ふことなし宜哉歐米の學界單に印度哲學とし言へば直に以て六派哲學を意味するが如き狀あることや然るに我國未だ嘗てこれに關して權威ある著述の發表せられたるを聞かず眞に學界の一大耻辱なりとす木村先生夙にこれを慨し研究多年漸くその完成を告ぐるや更に東京帝國大學に於てこれを講ずること一學年その間又多少の補訂を加へて遂に汎くこれ一世紀に問ふに至れりしなり時恰もタゴールによつて今更の如く印度思想の雄大深遠なるに驚嘆する者多き貧弱なる我國の思想界に向ひ本書の如き先人未到の研究にして斯學最高の權威たるべき名著を推薦するとを得たるは實に弊社の誇たるのみならず也

高楠順次郎先生共著
木村泰賢先生

印度哲學宗教史

好評第二版
定價二圓
郵稅十一錢

本書は著者が印度の哲學宗教の大成は日本學界の本務なりといふ確信の上に立ちて久しく東京帝國大學に於て講述せる稿本を増補整理したるものにして斯界唯一最高の權威なり收むところ吠陀、梵書、奧義書、經書及び諸學派の開展に涉り洵にこれ印度の根本思想を説述して盡さざるなきもの苟も世界無比の寶庫と稱せらるゝ印度古代の文明について闡明するところあらむと欲するものは須くまづこの秘鍵を握らざるべからざる也

五月號
目次

タゴール號

定價金貳拾錢

大合衆

四月號
目次

日米問題號

定價金貳拾五錢

●タゴール號の大歓迎

- タゴールと印度文化
- タゴール哲學の斷片
- タゴールは果して偉大なりや
- タゴールの詩と印度の自然
- タゴールの「新月」より
- タゴール先生と自分
- 形而上的要求とウバニシヤド
- 詩人コビールとタゴール
- タゴールの「個人と宇宙觀」
- 藝術家としてのタゴール
- 近代印度の宗教改革者

内ヶ崎作三郎
ゆふしほ
武田豊四郎
吉田絃二郎
伊藤恵子
佐野甚之助
野村隈畔
三浦關造
R・G・Y
磯部泰治
相原一郎介

- 平和の黎明と日米問題
- 日米親善の秘鍵
- 意義ある排日問題の緩和法
- 加州問題の真相と其解決
- 米國に於ける輿論の一般
- 排日問題と勞働問題
- 米人側より觀たる日米問題
- 國民の對外思想を改めよ
- 日米關係の人格的要因
- 日米問題と米國識者の態度
- 日米問題と對米國人策
- 人種問題としての日米問題
- 在米日本人に對する米人の待遇
- 砲聲を聽きつゝ（口繪）
- 明治大正の婦人問題
- 國交の基礎を論ず

大隈重信
高田早苗
志賀重昂
阪井徳太郎
G S T
安部磯雄
ギューリック
吉野作造
フイツシャ
十一名家
綱島佳吉
マコレ
十二名家
ウエレスチャ
浮田和民
内ヶ崎作三郎

此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る御書添えを乞ふ

修養世界六號

御即位 大嘗會



- ▽御大典と佛教徒の使命..... 顧問：大内青嶺△
- ▽皇位の繼承と即位踐祚..... 法學博士：清水澄△
- ▽御大典に就て..... 文學博士：萩野由之△
- ▽大嘗會の話..... 文學博士：關根正直△
- ▽御大典に各宗統一の機關を設けよ..... 前教部部長：新井石禪△
- ▽登極の盛儀と國民の覺悟..... 曹洞宗中學部長：横尾賢宗△
- ▽道德の根本たる二大禮..... 文學博士：井上頼固△
- ▽二大禮に就て..... 子爵：清岡長吉△
- ▽想起す明治天皇御即位當時の事情..... 伯爵：松方正義△

- ▽御即位式の沿革..... 官幣大社官司：祝儀廳△
- ▽大和魂の發現..... 顧問：佐々木珍龍△
- ▽御大典と佛耶兩教の相違..... 文學士：和田鼎△
- ▽御即位禮當日の諸儀..... 記者：花村小史△
- ▽大嘗會を行はせらるゝ正殿の建築方式..... 文學士：松平靜△
- ▽赤誠を以て報恩の實を擧げよ..... 文學博士：南條文雄△
- ▽御大典と佛教徒の覺悟..... 文學士：祥雲確悟△
- ▽大典と佛教徒の覺悟..... 曹洞宗大學長：秋野孝道△
- ▽如何か奉祝せん..... 主筆：菅原洞禪△

六十一部
月部ケケ
一稅年
口共七
發三十
行錢錢
錢錢錢

發行所 東京市東區三丁目七番 町坊善我區布市京東
修養世界社

る哉。あはれ我の無智なることよ。佛心を體現して餘す所なき地藏菩薩よ。われ鳥獸と伍して爾を耻しめたりき。曾て御身が陋巷に立ち給ふを見て、世の常の子供の如く或は御馬に乗り、或は足蹴にしたりき。あはれ過ぎ來しかたの罪深かりし哉。曾ては又田夫野郎が方寸の地を争ひて爾の水際に棄てられ給ふを見き。また或時は酒徒に耻しめられて路傍に轉び給ふを見たりき。「貴き道のしるべ」とも知らで、却つて打擲され屈辱を受け世をせばめられて、冷たき石と化し給ふこそ不惑なれ。此の日、墓碑銘をあさり、石摺りの文は多く手に入れられしが、煩はしければ書かず。

また或る日のこと也。一友言づれて汝が冥想の裡にある「自然を背景にしたる法然」とは如何なる意味ぞといふ。今更余の教説の餘りに粗大に過ぎたるを思ひぬ。友よ、實に法然は叡山元黒谷の報恩藏に籠りて書見の外他事なかりき。されど見よ。彼が自己を聚集し來りて書見到餘念なかりしものは何。もとより彼の勇猛心はさる事ならむも。自然の節度其の宜しきを得たるため也。之を神仙に聞く、「青山白雲はもと解脱のからくりを有す」と、友よ、試みに高山の土を踏め、一步高きに登れば一步の解脱あり。神仙は人を稀薄にすといふも然らず。本來より論ずれば更に清く更に力強くするもの也。「人は無智の平野を横ざりて、教養の山に入らざるべからず。」とは、西の國の詩人が歌ひける事なるが、眞なるかな。平安の昔、國家鎮護の道場たりし叡山は、今の所謂學府にも勝りてカルチュアに富めるものなりき。多くの人材は此處に磨かれよく驚天動地の働きをなしき。元黒谷の法然を初めとして、不動坂の親鸞、香芳谷の日蓮、胸付坂の蓮如上人、解脱坂の道元禪師或は承陽大師の剃髮の地、

笛吹けども汝等躍らずといふにも似たらずや 我はかゝる澆季の世にありては寧ろ異教徒ともなりなむ。斯くて彼のプロチウスの海よりあがるを見、あるはトリトンの吹く笛をこそ聞かめと彼はやゝ矯激の言を弄せり。要するに世事あまりに多端にして、we can not fully enjoy ナチュラ といふ事が問題也。自然的に物を享受し、アクセプト 進みては自由に享樂しうる精神生活こそ肝要なれ。友よ自然は吾等に冥想的靜謐メタヂーブスチルチスと與ふ。人は此處を越して初めて眞に物を味ひうる也。近代の病に冒されたる感傷の子は別して然り。わが僅かばかりの自然生活は我に幾多の貴き實驗をもたらしぬ。自然を背景にすとは此の謂に外ならざる也。生命の合致調節を計らんが爲に、自由の境地を樂まんが爲に、自己本來の面目に歸らんが爲に、鳥語の静けき山林に暫時靈耳をさますといふのみ。人と人と相寄る相對の世界は繁雜に過ぎて、多くは勢力の浪費を意味す。僞善に流れ、不親切に傾き我は我を賊するに至る。されば自然に歸るといひ、堯舜に行くといひ、自己に徹せよといふも、畢竟これ異語同義にて單純生活を謳歌せるに過ぎず。法然と云ひ、フランシスといひ、近くワルデン湖畔のトロローといひ、恒河のタゴールといふが如きも皆よく此の意を體せり。彼等が修行は自然の中にたたしは大靈の中に眞に自己を見出すにありき。

夕さりて五位驚まづ寂しき音づれの先驅をなし、やがて泉鳴き、杜鵑過ぎ、靜寂は更に靜寂を加へ窓外は物凄きまでに黑暗々たりき。かゝる夜半なりき。ほとくとわが冥想のとぼそを敲くものあり。寂しさに堪へやらで喜び迎ふればこはそも如何に、白髮銀髯の人は矍鑠たる胸に異國の情調を漂はして來れり。身に餘る詩集を携へ來るは我が蒙を啓かむとにや。彼は先づ孤棲の寂しき由を述べて、や

其他靈山の疾風迅雷に其の魂膽を鍊り來りし天臺の名僧等數へ來れば枚舉に遑あらず。苟も脩道の志を抱いて此の山に登り來れるものは十二年下降すべからずとは天臺の掟なりき。佛弟子たらむには少くとも十年の間此處に學び靈氣を養はざるべからざりき。然らずんば恐らく四明に登りたりとも榮光の佛を仰ぐ能はざりしならむ。イブセンの「吾等死より醒むる時」には山巔に登るといふ所諸所にある。友よ我等が主キリストは山上のいと靜かなる所を愛し給ひき。而して世界の國々と其の榮華とを一抛して顧みざりき。かくて靈的生活は自然的生活の賜物也。友よ暫く語をワーズワースに借りて自然の福音を更に解かしめよ。彼が詩の三大傑作ともいはるべき「チンターン、アッペイ」と「オールドツ、デューチャー」と「ジウオールドイズツ、マツチ、ウーズアス」とは我が意味する所の自然を最もよく説明せり。殊に彼が自然哲學とも稱すべき「チンターンアッペイ」は積極的に其の意を説けり。彼が自然生活のエピローグともいふべきか。曾て我には滔々と鳴り渡る瀧つせば煩惱の如くに付纏ひ、山や川や森やたけ高き岩など食欲の如くに我を誘ひ、「痛むが如き歡喜」をさへ感ずることありけるが、今は其の替りに緩急度を越えざる人道の底を流るゝ靜かにもあはれいみじき諧調音を聞くを得るに至れりといへり。而して「オールドツ、デューチャー」には精神生活を説き、自然の大法を論じ、愛が誤らざる教導を採る時には吾等が人生の行路ものどかなるべしといへり。最後に「ジウオールドイズツ、マツチ、ウーズアス」には心情の問題を論じ、物質的生活に營々として、得たり賢しと思へばやがて消ぬべきものに、生命を托する俗衆を罵り、其の生活を呪へり。「海はいまその胸をまどかなる月影に開きてあり。風なきて睡れる花の如く靜か也。」此の美しき眺望、此の自然の解放に調あはざるは、我れ

るものなりき。

彼が半生の愛の歴史こそなかくに面白かりけれ。いざ／＼あらはに其の感じける節々を物語らんか。友よ、我等には二の世界ありて常に相闘げり。靈と肉と即ちこれ也。孰れを主とも仰ぐ能はず。相對抗して兩々下らざる有様也。茲に我等はデレムマに陥らざるをえず。試みに二人の妙齡の女子ありとせよ。而して一人は容貌に優れ、一人は精神に優れたるものありとすれば孰れを好み孰れを撰ぶべきか。實際問題は甚だ之を惑はしむ。然るに彼に於ては靈と肉とは一如なりき。彼がエリザベスバアレット女史を娶りたるは決して美貌の故にはあらず。剩へ彼女は當時脊髓病をさへ病めるにあらずや。我は彼等が戀の成立を思ひ、一方ならず其の精神的なるに驚けり。我の愚なる、初めは彼等が自然的ナチュラルアツフィニティ牽引の何處に存するかを疑ひ、或は名譽といふが如き功利的なるものにあらざるかと思ひし事あり。實にヴィクトリア女王朝の詞花燦然たるが中にバアレット女史は桂冠詩人テニスンと相並びて名聲は彼ブラウニング以上なりき、然れども彼もと詩魂に於て富み詩質に於て前二者を凌げり。彼が後世ヴィクトリア王朝の最大詩人と呼ばれるゝ所以のもの既に此の間に存したりき。偶バアレット女史とは其の詩魂に於て相會する所ありたるのみ。加之、彼は屢ミストル・ケンヨンの謀介によりて彼女の事をさし、彼女の詩作に接して見ぬ戀にあこがれたりしならむ。一千八百四十五年の一月十日には遂に彼は第一信を發して、彼女の詩に對する讚美と感謝の思ひを述べ我は心よりこれらの書を愛しました御身をも愛すとやうの冒頭を置けり。爾後信書の來往日に繁くして、やがて日も暖になりなば

がて徐ろに彼が詩集を探り「バラセルサス」を朗誦したりき。一つは彼が爲め一つは我が爲めにとて
 なるべし。讀む間に彼の眼眸は爛々と輝き、いつしかエクスタシイの境にさへ入れり。バラセルサス
 は實に彼が初一念をこめたるものなりき。彼早くも若うして時代の潮流に掉し至上善スーパームホーラムを知識なりとし、
 彼が使命も恐らく此處にありとし、勇志勃々禁ずる能はず。遂に僧庵を出て友に分れ、幾年月研究に
 日を過せど、知識の高峰は俄に登るべからず。幾度か倒れ幾度か迷ひ遂にイタリアの詩人アブリル
 に逢ひ、初めて肝膽、相照す所あり。「汝が愛を求めて智識を棄てたる如く、我は智識を求めて愛を棄
 てたり。あゝされど此の二つは離るべきものにはあらず」と、彼は愛を犠牲に供せる智識の獲得は効
 果なきを知り、愛の感激なき智識は空也と悟り遂に力と愛とを至上善とし此の世を友の腕にいだかれ
 て去るに至りぬ。友よ實に我が僧庵生活の誤謬は愛の感激なき智識の追求なるが故に早くも倦みつか
 れたるにはあらうか。to know てふこと、to enjoy てふこと、は我等には二元に分たる。而も彼
 に於ては一元なりき。彼が人力を盡して智識の討究にやまざるはこれが爲め也。「一學者の埋葬」に見
 よ。死の間際に至るも研究の歩をやめず。時と場所とを超越してまた一見興味索然たる如き文典の末
 技に拘泥して一學者は尙も嚙語を残しながら死の手に委ねらるゝならずや。其の一生の事業に於ける
 功過を論ふは愛なる神にして決して世の凡俗の批判にあらずとは彼の信條なりき。愛なる神、愛なる
 神、彼が一切の哲學は實に其處に萌芽を見出しき。決して近代の人の如く意識の分裂を病むことなか
 りき。彼は全我的享樂の人なり。全身これ血、男性的といはむか最もふさはしき名也。彼はマンリー
 バーチューの多くを持てり。餓ゑては神の祭壇に供へられたるパンと雖も食ふの勇氣と信賴とに富め

あだやかに且つ朗かなりき。』と、問題は遂に死より愛に行くべく一決したり。暫く其の手段の如何なるかを問はざれ。九月十二日、彼女は唯一人の侍女ウイルソンに伴はれてメエリーレボーンの教會に於て彼と結婚式をあげたり。而して一週間後の九月十九日には父の家の最期の國をまたぎ彼と共に潜に海峡を越えてアブルをすぎバリに至りぬ。滞在數日、其よりゼノアの風光を觀、幾日もあらずしてビザに着きぬ。此處に彼等は一冬を過さむとはする也。ビザは實に彼等が愛の宮居なりき。愛の勝利を得て彼等は恙なくも南歐の古都に入れり。見るもの聞くもの一として歡喜ならざるはなし。彼女が友のミスミットフォルドに與へたる信書の一端に曰く、「ビザは實にわれ等二人がいみじくも愛づる所なるよ。美の都、やすらひの宮にてある也。かなた紫袍の山々は榮光の衣をまとひて其の葡萄の實る所に深く我等を招くがやうなり。我等はかの中央寺院や斜塔に近き所ヴァザリーの建てける大なる俱樂部の中に部屋を持ち疊或は毛氈を敷きつめたる三つの上等の寢室と一つの居間とは英國にもまたなく心地よき所也此の地に參りてより二週日此の數日は陽氣つゞきなれども大方雨の日を迎ふること多かりき。されど氣候のやわらかなることよ濕りがちなる空にも似ず寒冷を催うすこと更になし……妻は今繪畫をこそ學ばむと思へり。良人は繪畫の趣味に堪能なれば、妾が其の鑑識眼をも養ひくれんかとも思へり。ビザは實に美術の最初の研究にふさはしき所なれば……」と以て見るべし。「われ若うてちさき扇のつまかけにかくれて見たる戀の天地」とは品子夫人の歌なるが彼女がビザに於ける生活もまた正にかくの如かりしなるべし。翻て彼の「アントリアデルサルト」を見よ。フラリッポーリビーを見よ。我等は藝術と靈魂の問題以外、其の底に流れたる彼等が生活の歡喜を忍ばず

健康も恢復すべければ相見ゆるの機あらむなどいふ約束も取替はされたり。其の年の五月二十日は實に彼等が初めて相逢ひし日なりき。其の數日前彼女は一書を送りて「わらはには逢ひ給ふとも何事も候はず……わらはが詩もしも人様の御眼にとゞまるほどのものならむには其はわらはの花にて……今わらはに残れるは唯二の暗き土にふさはしき根のみなるを」といさゝか嬌羞の思を運べり。されど邂逅の日は遂に來れり。第一の征矢放たれてより四ヶ月の後彼等は目出度く相會へり。ロンドンの片ほとりウイムポール街の五十番戸には愛のエンゼル音づれて小暗き二階の一室も光に輝くやうなり。薔薇の香高う薫じて生命の光わかやげとや、彼女は顔色もいつになくはれやか也。詩論に興湧きて流石に痛める人も心ときめきしと見ゆ。頬のほてりのなみ／＼ならざるこそ不思議なる。越えて二日、彼は其の意中を彼女に漏しぬ。彼女の驚きは如何なりし。多年病にをかされて病床に親しみ世を懸絶せし彼女に、いかてこのことあらむや。加ふるに家庭生活に於ける父の盲目なる愛、獨裁的な癖は心弱き彼女をして大膽に其の戀に告白するを得ざらしめたり。彼女がためらひしも故なきにあらず。かゝる有様なりければ彼は急轉直下にサンダーボルトを投じたる無謀の罪を謝し病める人を慰さめたりき。されど愛の哲學を行ふに吝ならざる彼は八月の末つ方再び其の問題を拉し來りて所決を告げぬ。兼て其の豪俠に感じける彼女またいかで拒むべき。彼女は此の間の消息を「ソチツツ・フロム・ボルチュギース」によく傳へたり。『われ泣きぐづをれありける時、わがうしろに不思議なるものゝかげありて、後髪をひき目隠しつ。われ其の手を取拂はむともがけば、聲はおごそかにいふ。「あてよ、誰人なる、汝を捕へたるは」と。われはいひぬ「死」と、否とよ「死」にはあらず「愛」也と、其の聲は

ども決して其の器にあらず。後來畫家として立つに至るも其の頽廢的氣分は容易に抜くべくもあらず。之が爲に彼は繪筆を採ること稀なりき。彼がコシモに幽閑され、壁を傳うて夜の町にのがれたる物語は所謂世の子の美術家をして胸躍らしむる所なるが彼ブラウエングはそも如何に觀じたる。

□自由基督教會の成立

□兼ねてから統一教會の有志に依て考へられて居た帝都中心方面——本郷、神田——への發展が愈々實現するべく具體的な提案を見たのは僅に二月許前のことであつた。其後計畫は著々進行して遂に先月の第三日曜に神田錦町の女子音樂學校で其第一禮拜を行つた。

□自由基督教會とは新團體の名であるが、之は勿論統一教會と姉妹關係のあるものである。本教會は徹頭徹尾獨立主義である。我國に自由派の教會は少くないが何れも教會としては徹々たるものである。今度自由基督教會といふ名乗を帝都の眞只中に舉げたのは、いはゞ此自由派の獨立精神の試験石である。將來自由派基督敎の獨立の嚆矢として少くとも歴史的のものにしたといふ會員の意氣込である。

□併し新教會は何よりも内容の純眞を尙ぶ。數でこなすといふとは我等の堪ふる所でない、勿論教會だから説敎もやる講演もする。併し會員を無暗に殖すといふ方針は取らない、我々は統計表を報告して功を誇るべ

き何等のミツションも有たないのだから。

□世間は廣く人は様々である。故に種々な特色ある宗派も必要だし、協同傳道などいふとも夫れ相當の意義がある。併し生命としての宗教は須臾も進歩を止めない。そして其尖端は超越せる少數者の貴き使命であらねばならぬ。雲表に聳ゆる高山の絶頂其處には下界の生温い塵埃多き空氣の代りに清冽にして澄明な風が吹く。强者でなければ此山頂には堪へられない。山の峯から峯へと跋涉するには長大强健なコンパスが要る。嗚呼弱者の宗教！病者の福音！大魚は網を破つて悠々としておる。弱者の宗教、丈夫の福音、高潔な友情の精神に基く團體！此強い要求を看過してはならぬ。

□新教會は當分毎日午前九時半から前記の場所て禮拜を守り講演がある。主任内ヶ崎氏の外安部岸本岡田小山等の諸氏が教壇擔當者として責任を分たるゝ筈である。

んばあらず。思ふに彼がジョージ、ヴァザリーの「畫聖傳」^{フイヤー}を讀みしは彼等がビザにある時にはあらずか。夫人を驅りて繪畫の趣味に趣かしめたるは此の因によるにあらずや。ヴァザリーの「畫聖傳」は中世の名畫を集めて列傳體記の大部の書也。彼等がビザに於ける觀照生活に最も多くの興味を興へ、好話題を呈したるは此のアンドリアデルサルトルの如き、フラリツポリービの如きものにあらざりしか。アンドリアはフロレンスにすめる貧しき畫工なりき。名聲とみにあがざれと其の技工に於ては當時ラファエロ以上なりきといふ。佛王フランシス一世早くも彼が技を認め贊を厚うして彼を迎へ、歡待至らざるなし。彼が宮庭生活は實に善美を盡せるものなりき。此上なき愛護者を得て物質に何等の不自由なく實に恵まれたるものなりき。之が爲に技は愈々進み王の信賴愈々其の度を越えたるが彼はフロレンスに残せる妻の身の思はれて心安からず、遂に妻よりの一書を得て暫時暇を乞ふと稱して歸ることなりぬ。かくて彼は惑溺又惑溺、王と契約せし歸日を失ふに至りぬ。茲に於て王の逆鱗は斜めならざりき。かくて彼はまた孤城落日の姿となりぬ。されど彼が赫奕たる宮庭生活に於て畫ける幾多の畫面の中「慈惠」と題するものこそ實に意味深きものなれ。美しき夫人を描けるは恐らく彼の妻なるべし。一人の幼兒に乳含ませて一人は其の膝により一人は地に俯して泣ける姿あり。友よ三人の幼兒に何等の象徴ありとはするぞ。夫人は何者なりや。容易に知る能はざれど彼ブラウニクはそも如何に解したる。またフイリツポリービは托鉢の僧より出でゝアモラスなる畫家なりき。彼が剽逸の才は早くコシメデシに認められたれど元來彼は孤兒にして境遇の惡しきより何等の教養、躰も受くる事なく野生其の儘にして育ち長じては放逸に流れ、カーメライトの僧庵に養はれたれ

偽らざる心で、眞實なる態度で、イエツの藝術を読み行く間に、誰か一脉無絃の音韻を聴き得ぬ人があらうか。實に彼の藝術は匂やかな、歡しき、哀しき一編の詠嘆調である。彼の祖國の血の樂絃の響である。

二

フランスの言ふところによれば、イエツの『キヤスリーン姫』と『心の渴望の國』と共に唇齒輔車の關係にあるもので、前者は強い基督教の方面を示して後者は今も尙彼の國の人々の血を潤ふて居るワイルドな異教的な傾向を示して居るのであるといふ。併し此處には左様した方面を暫く措いて、私は唯便宜の爲後者の韻文劇を貫流して居る音樂的情調を考へて見たい。

一度思ひ悩み初めてからは、熱烈な夫の愛も、篤い基督教の信仰の力も、遂にマリイを引留むることができないで、彼の女は心を牽かれながらに、そして妖兒の導くまゝに「心の渴望の國」へと死んで行く――

現實の生活に對する不滿の聲ほど切實な響があるであらうか、謂ふ所の愛の信仰も、また強烈な愛戀の情も、もはやマリイを動かす權威はなかつた。時の流水に荒廢して行く現實の生活は、彼の女には忍び難い束縛であつた。『終日底意地の悪い言葉を聴かねばならぬやうな』現實の世界は、彼の女には振り返つて見る程の價值も無かつた、若き女性の血の豊かな微かな震動にも共鳴しやうとする心の中には、最早言葉や文字に言はれぬ程の情調が燃えて居る。そして此の敏感な彼の女の心を燒き盡す

イエツの音樂的情調

松 尾 光 貳

一

在るものを在るものとして見る人々には、音樂の心境はあまりに神祕である。また在るものを在るものとして見る人々には、イエツの心境はあまりに神祕である。自然に生れ自然に育まれたイエツには、自然の沈黙にも音韻にも底深い神祕の私語のあることを知る力があつた。愛蘭士の自然の風物——其の沈黙の中には其の國の長い傳統の響があり、其の音韻の中にも神祕に震く進動がある。彼の藝術に力強い魅力があるならば、それは實に彼の作品が、彼の祖國の神祕な傳説を基礎にして居るからであらう。そして其の神祕な傳統は無韻と有韻の樂韻の中にありのまゝの表現を見出すに相違ない。自然の神祕な樂音の中に生れた彼が、芳烈なる音樂味の中に、十全な表現を見出したことは、それは彼の生活の必然の結果であらねばならない。

音樂美の情調は其の強い神祕感の結果として、音樂は情緒の最も美しい言葉であると評されながら、その言葉の表明する意味は極めて茫漠たるものがある。けれどイエツには此の自然の樂音の零細なる動機の中に、單純なる進動の中に、その眞實な中心を掴み出す程の力があつた。かゝる自然の樂調の中から、彼は純なる自由なる永遠の響を聴き得たのである。

血の涸れた聖人の力で、如何して此の熾烈は憧憬を引留むることが能きやうか。生命のない、血のない響に共鳴するには、マリーの心は餘りに情熱に燃えて居る。彼の女は行かねばならぬ、青白く輝いて居る夢の國に行かねばならぬ。妖魔を再び三度其の魅力に満ちた主題を繰返すではないか。

憧れの國、それは遠い／＼神秘の王國である、言へぬ、語れぬ幻影の國である。唯獨り其國の神秘を其の國の夢幻を語り得るもの、それは實に一脈の音楽味である。時にはそれが有韻の樂ともならう時にはそれが無韻の樂ともなるであらう。彼の女は遂に此の強い匂はしい樂の心境に馳け入らねばならなかつた。

三

若し此の劇を目を閉ぢて、耳を澄まして聽くならば、音に其の内容に多分の音楽味を味ひ得るばかりでなく、またその形式の中にも、音樂のそれと共通するところの多いのを知るであらう。

音樂は他の成型藝術とは全く特殊のもので、觀賞の對象物を長く實在の上に留めて置くことが能きないので、重なる動機、重なる節、奏重なる旋律を數々繰り返して、聽衆をして容易に、統一ある心境を描がしむる必要がある。そして又此の『心の渴望の國』に於ても、その謂ふ所の心の渴望の國を暗示す可き主要なる主題は、諸所に反覆せられて、自然に歡衆をしてその憧れの心境を統一せしめやうとする――

『愚かな夢のことばかり思ひ沈ではいけません、何を讀んで居ますか?』といふ聖人の言葉に

までに燃えてゐる焔は、それがちぎれ／＼て節奏となり旋律となつて、そして自由の國を思ひ憧るゝ芳烈な樂調を奏てゝ居ると思ふのは誤りであらうか。唱ふ聲ばかりが音樂ではない。鍵盤の生む音ばかりが音樂ではない、歌はざる心、彈ぜざるの心、否唱ふにはあまりに高鳴る心、彈くにはあまりに強烈な憧れは、そこに唱ふに勝り彈くに優る沈黙の樂韻を響かせて居るのである。夢のやうに青白く光つて居る森を凝視めながら、ぢつとマリーは耳を澄ませて居る——沈黙！生命のない眠げな戀愛、罵じる言葉、愛の信仰、囚はれた平凡な生活、すべて恚うした彼の女の環象が、今は皆この沈黙の歌に壓せられ抑へられて、彼の女の心には目覺めるやうに自由の國が開けて來た。あらゆる羈絆から脱れ出でゝ、そして融け入らうとする「自然」の世界が開けて來た。其の時彼の女は新らしい有韻の樂の音を聞いた——

聲

白日の門の外より、風は吹く
心の靜寂をこえて、風は吹く
そして心の靜寂は、枯凋される。
其間妖精は離れた場所に踊つて居る
乳白の脚を輪のやうに振りながら
乳白の腕を空中にかざしながら
彼等は風が、笑ひつつぶやきつ歌ふのを聞いたから老へる者すら美しく、
賢者すらかるやかに語る國のことを
けれど私はクーラニーの歌をきく
『風が笑ひつつぶやきつそして歌ふとき心の靜寂を枯凋される！』

私は今更にググナノの言つたやうな、詩と音樂との直接の關係を聞きやうとするのではない。けれども若し音樂が情緒の言語であるならば、必ずや敏感な詩人の胸には、恁うした樂韻の響が和やかな音波を傳へて居るやうに思はれる。詩人の心臓の一搏は、必ず恁うした樂音に快よい共鳴を與へて居るに相違ない。同じ生活の基調から出た此の種の表現に、必ずや深い同感があつたことゝ信ずる。そして殊にそれがイエツに於て著しく思はれるのである。

□ 汝は彼の沈黙の蹺音を

汝は彼の沈黙の蹺音を聴かぬか？

彼は来る、来る、いつも来る。

瞬々そして年々、日々そして夜々彼は来る、いつも来る。

いろ／＼な歌を私はいろ／＼な心の氣分であつた、けれどもどの曲譜もいつも言つた、『彼は来る、来る、いつも来る。』

陽照れる四月の香ばしき日、森の小徑を通つて彼は来る、来る、いつも来る。

七月の夜、雨の陰暗なかを雲の電の戦車に乗つて彼は来る、来る、いつも来る。

悲哀に重なる悲哀のなかに私のこゝろを踏むものは彼の歩みである、そして私の歡喜を輝かすのは彼の足の黄金の接觸である。

— タゴール —

マリ

ほんとに、愛蘭土の王女エディン様は、丁度このメーイープに歌聲をおきゝなされてそして夢と現の境の中にそれを追はれて、たう
く魔の國に行かれました。

其處では誰も若やかで、神らしくなく嚴かでなく、

其處では誰も若やかで、狡猾ではなく賢くなく、

其處では誰も若やかで、意地悪は言ひません。

其の方は今も尙、忙かしく踊つて居られます、

森の露深い影の深みか

又星々が歩いて居る山々の頂で。

と應へて、譬て言つて見れば、歌劇の序曲にでも見るやうに、先づ漠然と彼の女の憧れの心境を豫示し、進んではより神秘的に、より大膽に森の中の聲をして其の主題を歌はしめ、更に進んでは三度妖兒をして此の憧れの主題を唱はしめて居る、かくて神秘の心境は益々神秘的に、憧憬の情熱は益々強烈に、人の心琴を打ち鳴らすではないか。其の本質に神秘的な音楽的要素は、かゝる夢幻的な表現と組み合つて、そこにイエツ一流の藝術味を描き出して居る。

四

彼の女は死んだ、そして妖兒に導かれてその憧れの國へと旅立つた。かくて神秘は依然神秘として永久にある問題を人々に思はしむるのである。あゝ此の有詔と無韻の樂音よ、汝は永へに地上に絶ゆる時はないであらう。

は自己鞭撻督勵の手段ともなるのであるから、教育的には家柄自慢も強ちに排斥すべきではないが、今日科學啓け哲學進みし民主的な文明の世に、自主獨行の精神を高調しながら、事實として慥かむることも出来ない祖先や根原の自慢もつまらないではない乎。吾等の祖先は何んであつても宜敷い猿であつても馬であつてもかまはない、物質や物力の集合であつても差支ない。されど吾等の現在には止み難き人格完成の理想が、社會改善の熱望がある。此理想、此熱望の存する所即ち人生あり、いや少くとも、人生の價值ある所以で、人間の生涯から其過去に對する執着心を奪ひ去ることは出来ても、末年に於ける希望や憧憬を取り去ることは出来ない。若し是が出来たならば、其人は早や此世の者ではない。自殺者は凡て此理想や希望を失つた人達である。如何なる困難に逢ふても後へに挫若たらぬ人道の勇士が心靈の寂寞を感じる時は、只夫れ理想の姿が曇つた時である、希望の光りが薄らいだ時である。

眞如に歸せよと宣べし佛教も、完全の神に歸れ

と訓へしクリスド教も、乃至は自然に歸れと叫びしルウソオも皆夫れ末年の理想を過去に投影して恰も彼等の理想せる世界が過去の自然狀態に存在せしかの如く、或は既に天の何れにか現存するものゝ如く思ふたのは、人生を以て家路に急ぐ旅人の如く感ぜし過去數千年間過たれし人生觀の致す處である。吾等は何處にも歸りはしない、只進んで往くのである。過去の完全に歸るのではない、又過去に完全がある筈はない、若しありとせば宇宙には何等の進歩も向上もあり往ないに極つてゐるされど吾等は日々向上の一路を辿り、各自の理想に向つて進んで往くのである。吾等は吾等が生活の經驗を土臺として創造した眞と善と美の極致なる最高理想を標的として、或は走り、或は躓き、又眞慕に突進する。是れ吾等の宗教的生涯であるされば人生屈意の理想は吾等の神であつて、神は即ち理想である。

處で、吾等の神は完成の神ではない、宇宙と共に進歩し給ふ神である。吾等の神なる理想は絶えず人間生活の發展と共に進歩する。今歴史上から

神と理想

帆足理一郎

今汽車が停車場を出發せんとしてゐる。車輪は動き始めた、列車は走り出した。列車は何故に走るのであらう？そは機關車に繋がれてゐるからである。此途端、汗を拭きつゝ走り來る一人の男がある、彼は列車の後を追ふて走る。何故に彼は走るのである乎。前なる列車は機關車に繋がれてゐるが故に走る。此人は夫れと反對で、繋がれてゐないが故に走つて居る。人と機械との違ひは茲にあると、嘗てバアマ博士は云ふた。誠に面白い譬である。若し人生が一定の外的原因に引かれて活動するのであつたならば、人間は此列車の如く一個の機關であつて、所謂運命の傀儡に外ならぬ。

之に反して、人は内的の原因、假令へば汽車に乗りて或る目的地に到達しやうと云ふ様な、自分で創造した目的に驅られて列車の後を追ふてゐる。

人生の理想、憧憬、希望、目的は潑漑たる人間活動の原動力であつて、人は其根原が何であらうと、過去がどうであらうと、そんな事に頓着する必要はない。只未來に生くるのである、只理想に生くるのである。

見よ、昔の人は哲學にも宗教にも人間の原由を尋ねずんば止まなかつた。佛教にては眞如より出でたるが故に眞如に歸るを人生の歸趣とし、クリスト教では神に似て造られたるものなるが故に神に歸る、即ち根原に歸ることを人生の目的とした是れ恰もグリシャ人やヘブリユ人が黄金時代を過去に夢みて、過去に歸らんことを翹望せしと一般人が神より出てたりとて、其由緒あるを誇るは、吾等が幼時自分の家系を自慢して、吾は何某の末裔なりと悦んでゐたのと同様で、幼稚な子供心に

き所だが神御自身には進歩あることは出来ぬと。而も見よ、吾等は神御自身と吾等の経験に上る神様（觀念上の神は経験の後件）とを區別することは出来ても、斯く區別されたる御神御自身は吾等の生涯と何の關係もなき神である。之に反して、吾等と密接の關係に立てる神は吾等が日々の経験に上り、終ひには抽象的に觀念化せられ得る神である。而して此神は既に述べたる如く、吾等が知識的藝術的道義的経験の發達と共に進化し給ふ神である。

されば吾等は神が進歩し給ふと云ふも、決して神の威嚴を損することは無い。否却て、神は吾等の最高理想として時々刻々は進歩し給ふが故に、永久に我等が追望祈求の目標として、吾等の日常生活と離るべからざるものとなり給ふのである。

『天に在ます父の如く完かれ』とは今日の意義に

於て『汝の理想の高さが如く高き、清さが如く清き美はしき人格を養成せよ』との意に外ならぬ。げに吾等はイエスの人格の偉大を仰いで、之に私淑し、之に模倣して、彼れの如く偉大に彼れの如く高潔ならんことを願ふ。されどそは彼れの昔に歸るのではなく、彼れの生涯の理想化されて、日々新らしくなりまさる彼れの人格に私淑するのであつて、結局吾等が最も真なり最も善なり最も美なりとする最高理想に憧るゝのである。吾等は過去の歴史に現はれた偉人英雄の人格に鑑みて吾等人生最高の理想を打建てた。されば吾等イエスの徒が彼に肉薄して、彼れの人格にあやからんとするも、窮極の標的は理想の神に集中してゐるのである。神は即ち眞善美の極致、人生最高の理想として久遠に吾等が精神生活の根據でなくてはならぬ。（完）

道德の進歩と共に神の觀念の進歩せし事實を擧ぐれば、神が人生の經驗に内住して日に／＼進歩し給ふことが分る。モオゼの信ぜし神ヤアヴェは軍の神、雷電の神であつた。彼れの十戒に、殺す勿れ、詐る勿れ等の訓戒があるが、是等の道德律は世界的のものではなく只一部の民族のみ適用さるべき訓戒なりしことは、ヘブリユ人が此戒言の遵奉者なりしに拘らず、イジプト人を欺きて逃亡し彼等を殺戮した事實によりても輒く判斷することが出来る。從てヤアヴェ神も其始めは世界の神ではなく、一個の民族神、或は單なる氏神に過ぎなかつた。イジプトから逃亡して來た此民族が榮えて幾多の部落に分れ、一種の聯邦を形造り、各部落に判官(酋長)ありし時代は、ヤアヴェ神も同様の判官或は酋長の類と見做れてゐたが、ダヴヒドの時代に入りて國家の統一、帝國の設立と共に、神も一個の帝王と見做さるゝに至り、下つてソロモンの死後南北二國に分裂するやヤアヴェは二國の神となりしが故に、茲に始めて世界神の思想胚胎し、既に二國の神たる以上は數國の神たるは何で

もない話で、遂にヤアヴェは世界人類の神なりてふ思想に到達した。

以上は廣さに於ける神の觀念の發達であるが、深さに於て今一例を擧ぐれば、ダヴヒドの時代、神はダヴヒトを教唆して、罪を犯さしめ、而して後之を罰し給へりと紀元前六百年頃出來たサミエル書後卷廿四の一―九に書いてあるが、同じ記事を反復してある紀元前三四百年頃出來た歷代志上卷廿一の一―八には、ダヴヒドを教唆せしはヤアヴェ神自身ではなく、サタンであつた様に書いてある明かに此二三百年の間に宗教思想の進歩を示すもので、神の性格に對する觀念上、神か人を誘惑して罪に導き、後之を罰するが如きは不合理道德なりと云ふ人間道德の發達と共に、神を辨護せんが爲に其罪をサタンに歸したのである。斯の如き例はいくらあるが、先づ斯様にして人間の道德心の發展と共に神の觀念も進歩した。そは神は人間の道德の理想、標準であるからである。

人或は曰はん、神の觀念と神とは別物である。故に神の觀念に進歩することは勿論書等も異議な

は皆本源に於て神の子に非ざるなし。神と人との親子の分は、永遠より永遠に至る。一糸をも棄るを許さじ。

○人は其本源に於て神の子也。神の子たる者當に神の如くなるべき也。

○神は必ず宇宙を離れて個人と偕にせず。而して個人も亦宇宙を離れて神を知るを得べからじ。

○人は善く其已我を神に失ひて而る后神の家に宇宙に安居す故に云く、己我を惡んで之に克つは上也。此の事や苦にして又快也。或は勝を遂げず、其戦死の止むを得ざる者は、上の次き也と。蓋し神戰に於て死する者は、亦ジイサスの一部に屬す。クライストの一點を有す。ああ、心を二三にする勿れ。

○一國の外に他國ある如く、此世の外に又別世界ありて疆りなきを知るべし。地に萬物の生ずる如く、天に在りては、萬有無限に備はる。理想の達する所時々變化して其變化窮りなきも、其變化する所に於て。實體を失はざるは、經常の經道也、人若し一點の毒螫も其身を害するに至ることあるを知らば、クライストなる神の一指觸るる所、我が生命を起すに足りて餘りあるを知るべき也。

○吾は我が生命の我に屬せずして彼に屬するを知る。我唯彼の彼に屬するを知る、此に因りて又彼の我に屬するを知る也。偏立せず。獨行せず。然らば即ち彼とは誰ぞや。我が先に在ると同時に我が後に在る人也。我が中に居ると同時に我を繞りて我を教養し我を護導し給ふ眞人也。クライスト也。クライストは我に非ざる也。彼也。然り而して關係親近。無度にして又度限

なし。

○其心能く舊事を忘るるは、新生命に進むの道也。凡そ將來の生命に進まざる者は、死然として過去を思ふ。善化せず。今日忘るべからざる大事を忘れて、却て過去の念ふべからざるを念ふは、是れ死也。死然也。超然たる生命とは極至に其道を異にす。

○我は乃ち生命を與ふる眞の食也。我に來る者は必ず餓うるなく、我を信ずる者は必ず復渴するなし、凡そ父子に與ふる所の者は皆我に來る。

而して我に來る者は我必ず之を退けじ。蓋我れ天より來るは、我が意を行ふに非ず、我を遣しし父の旨を行はん爲也。凡そ父子に與ふる所の者我其一をも失ふなく、大終に於て皆之を復生せしむるは、是れ我が父の旨也。凡そ子を見て信ずる

者は當に永生命を受くべく、我れ大終の榮日に於て之を作新して復生せしむる事、是れ我が父の御旨也。

○生命の生命は復活に在り。復活は、舊生命の退却して、新生命の來活する者。其實は、新者の來るが爲に舊者退く也。其舊の消散する、必しも惡死の如きに非ず。正規に従ひし者は、死すと雖亦安し。其務を完うして、其舊なるものも亦上進の路に就かむ。然り而して其新なる靈體は、時と共に更に新にして、

教訓自讀

教訓は主の教。自讀は、亦自ら審判に向つて進む所以也。(其二)

「其外形よりして之を見れば、其勢薄弱の如し。然れども、其薄弱なる如きは、却て其力の無間に伸びんとする有兆也。是の人や常に丁寧親切。然りと雖、必ず神秘を以て世人に示さず。眞理を隠すに非ず、人間を蒙ますに非ず。乃ち全世界を仁愛する所以也衆人の奇禍に陥るなからんと欲して也。亦救道の至要法。ああ、是の人や貸さず亦借らず。常に一物の私有なし。大終の目的に萬事を獻る。」

夫れ微言の靈は暗黒を突撃す。何爲れぞ其れ然る。之を破りて光明の審判を受けしめんが爲也。然れども、是れ嚴法の行動。彼等自體に於て恩應する所あるに非ず。

基督生命之食

○我が食は我を遣しし父の旨を奉じて其事を遂げ成すに在り。

○(其事)我が父今に至るまで行へり。故に我亦行ふ。

○我が父の汝等に賜ふ者は、天よりする眞の食也神の賜ふ所の食は天より降臨して、生命を世に與ふる者也。

○死すべき飲食の爲に動く勿れ。只人の子汝等と與へんとする永生命の食の爲に務むべし。

父母や我を生み、且我を永遠に養ふ。基督士基督阿は惟一永遠の大父母神。

○人の眞食は、天命を奉じて遺憾なく之を終ふるに在り。此を外にして眞食なし。主の實體を食ふは乃ち此に在り。其奉事を通じて靈と體と皆養はる。生命の飲亦然り。クライストの血を受けて其血統に系らずんば、永遠に神に於て一なるを得べからじ。神は眞人也。眞人は神也。一に統するは、是の父母神の純系に新に生る也。父母神は惟一也。若夫れ惟一なければ、統一能くすべからじ。惟一の父母神在す。是を以て宇宙統一成る。

○之を食ふと雖以て生くべからざるものは、クライストの體に非ざる也。之を飲むと雖以て永遠の生息を得ざるは。クライストの血に非ざる也。食つて食はざる者は、是れ信じて信ぜざる者○人は由りて以て新に生くべくして新に生く。是れ既に其舊を離れたり。血氣其血を失へるに至りて、クライストの血に於て新に實體に生る。舊血は、此の人間の血也。是れ去らざるべからず。

○人は神より出づ。故に其源に溯りて神の懷に歸る。人は其本源に於て神の子也。本源は、神に非ざるなし。凡そ生出する者

機百關皆人種子を以て構造せらる。細胞の微小に至る迄、原性的に悉く靈人の種子寓せざるはなし。人の體たる、本夫れ至れる哉。個性皆神に於て自ら重んぜざるべからざる所以也。

○無我は、新人體の一體にして、權力を有す。此れ神戰を司る然れども此れ人の本然の性格には非ず。其人多年の勤行する所のもの築積して無我に化成せる也。其多年百順勤勞の功果其然るを致せり。此れ固に片々たる一正義の能く得て襲取する所に非ず。

○無我は、本性の輔翼也。將軍職に當る。此れ百順勤勞の功果なるも、我よりして致すべからず。其至るは神に在り。神の意にして法に由りて至る。我に在るに非ざる也。則ち我に在るに非ずと雖も、然れども、我が順從の勸勞なくしては到底其至るを致す可らず。

○抑夫れ「我」は、自然の有用物也。人の初生に於ては、此れ發達の本となる。元來此れ危險。叛逆可能の性を伴ふ。然れども、其可能的性ある故に叛くべしと謂ふに非ず。其或は不順に陷るの懼あるが故に、是を以て當に益々戒慎し、順從正克して以て勤動すべき也。是れ其本來の神命ある所故に云く、「我」は初生に於ては、是れ發達の本となると。

○今の自我なる者は、其變性也。變性の我は、殆ど此世に充溢す。然れども、一部良心者の堅く其本を守りて之に對抗する所あり。故に今日滅裂を免るるを致す。或人云く、何を以て其變性の「我」を知らんと。答へて曰く、「我田引永」の我を以て之を見よと。

○神の人を生ずるや、我れ一人のみを生ぜず。兄弟無數に衆し故に生民は皆當に平等に生くべし。皆務めて其適に適するを致すべし。是れ平等也。凡そ神の、人の爲に設けられたる天空及び地界、其萬物を并せて、皆當に之を人我の間に公平正均に享有して遺憾なからしむべき也。之を行ふの初歩として、今先づ戰爭を全廢すべし。之を全廢するに務むべし。社會平等の道多講ずべし。此に至るの法を盡すべし。土地は公享すべし。己を捧げて人を助くべし。然り而して人は皆其私錢を有すべからず此れ皆吾人が出世の出發點也。

○夫れ自我は良心を刺激し、良心をして自ら堅固ならしむるの用具となる。所謂良心とは、單に善惡正邪判斷の智のみに非ず。此れ體格を備ふる靈心。即ち人の人たる性格也。吾が所謂良心は正に是れ也。自我は是れ良心に對して、今や、他山の石の如く、以て良心の玉を磨くべし。本性の善を好み惡を惡む其力をして益々強大ならしむる最有用具となる者は自我也。直に樂觀すべからざると同時に、敢て悲觀すべからず。人能く戰つて己れに勝てば、嬰兒の靈に復りて神の前に溫潤なる玉となる。

○徹醒は易き事に非ざるも、自我の現する所は徹醒却て易し。其敵あるを知れば也。敵を見ざる所は却て徹醒を爲し難し。然るに、假想の敵を作る勿れ。如此きは己れに於て根本よる誤る『愛は友の爲に死するより大なるはなし』其所謂友は、全世界の男人女人を意味す。我に我が友あり。始よりあり。全世界に在り。即ち世界皆吾が友也。何ぞ人を敵視すべけんや。況や假想に敵人敵國を作りて我が功利を圖るの資とするに於てをや。

神の家庭に永遠に昇り、常に父母神を其實體に於て拜し奉る。是れ復活也。

○クライストの食を受くる者は、主を此身に體す。是れ主の御體に進むと同時に、主は其人に降る。(出づ)其進むや、己よりするなく、唯命に之れ従ふ。中心より誠に悦んで服せざるなし苟も一點の悦ばしからざるものの其中に有らしめば、天食我に斷つ。至柔至愛の主は將に我に降らんと欲するも、法は許さじ苟も我にして快然たらざれば、我が身に於て識らず感ぜずと雖も、事實主を拒むこととなる。

○クライストの食は生命の力也。之を食ふ者は、勢力衷心より興發す。是れクライストの頒與せらるる生命に係る。新生命也誠に能く之を受くれば、主上の天父と一なるを體知する也。之を體知するに於て、又能く已の情狀を知る。是れ永生の道にして、主の賜へる所。其品、人々皆異なるあり。

○ああ美や善や、常に茲に在り。美は我が心より遠からず。善は常に人と我とを通して無間に其美を美として樂む。是れ抽象的に非ず。無形上に非ず。クライストジイカス我が主也。神也神の、人と共にして、曾て離れらるることなき所、

○夫れ人ば、獨り男のみならず。又獨り女のみならず。人は兩性一體。之を人と謂ふ也。其一體は兩性也。一性ならず。人其始、其體形各相半す。時至りて、神に於て、合ふ。兩性にして一體。一體にして兩性。其完全にして神聖虧くるなきを、人と謂ふ。乃ち上天の父母の神性なる靈に像れる者也。神は、始め人形なる眞動物を自然界に生じ、而る後時來り、之に超自然な

る新生命を微妙に於て活息す。是に於て此物開けて人となる。即ち二而一なる神の子女也。故に初生の肉は、無罪と雖皆動物也。高等と雖自然に屬す。其超自然に再生するに及んで而る後其形體は靈と共に天格に昇る。始めて超自然なる神の子女となる。

○凡そ父の教を受くる者は皆我に來る、神より來る者の外父を見し者なし、我を信ずる者は永生命を受く、我は生命を與ふる眞の食也、其味眞悦眞樂に滿つ。天より來る眞食を食ふ者は必ず死せず。我は天より來れる生命の食也。凡そ此の食を食ふ者は永へに生きむ。我れ與ふる所の食は我が肉體也。是れ靈髓の配にして、靈其中に在り。乃ち實體也。聖體也。是れ世の生命の爲に我れ與ふる所。クライストの肉體に養はれて其滿つるに至れば、舊物皆去りて新人となる。地は是に於て新にして新天に配す。茲に始めて生命を有する世と謂ふべし。

○肉體も亦類あり。世人の肉體あり。新人の肉體あり。外似て内異り。其成長の道亦反す。皆其養ふ所に因る。新人の肉は其靈體を受け、和して之に従ふ。其舊質は既に謝し、新にして一に無我に由りて動く。是れ即新體也。乃ち肉は其靈と二而一にして共に新也。此れ又昇りて内界に入ると同時に、永へに外に長す。乃ち其箇人なる天地球を現界に實にする也。實體堅確其出沒の行動皆天法に由る。

○夫れ新人の體たるや、細大の體機皆人體ならざるなし即ち百

に叶はば足る。或は政に由る可也。或は教に由る可也。而して天下の政は、家政の密より正しうすべし。而して萬衆の教は、箇人に適して養はざるべからず。是れ皆聖餐の中に在り。皆生命の係る所。

○我が教は已自りするに非ず。我を遣しし人の教也。凡そ其意、神の旨を行はんと欲する者は、我が教の神よりするか、將た我が自言に係るかを明にするを得む。凡そ自ら言ふ者は己の榮を求む。之を遣しし人の榮を求むる者は誠忠にして僞其中になし。

○外形を以て人を判ずる勿れ。正義を以て判ずべし。

○人の子の曩に在りし處に昇るを見る時は如何。

永生生命を與ふる者は眞靈也。眞靈は眞血肉を有す。二而一也。今の血肉は益なし。我れ汝等に與ふる所の教は、眞靈也。

二而一生命也。永生生命の實體也。

(他人の教の如きに非ず。此後、多人の從者は、彼を離れて去れり。)亦天命。

○聖書は猶備忘録の如し。各自の反省の爲に備へらる。必しも講究の書ならず。若し以て講究の書とすれば、其人損して、益せず。故に能く讀む者は、之を其心に讀みて其體中に驗す。己

の心と其身體とを外にしては、假令萬年に亘るも光の道を會得すべからじ。苟も奴隸の此の世に存する限、主は、王公の上に主宰たると同時に、奴隸の中に服役せらる。是れ主は、奴隸の奴隸にして、人役に非ずや。夫れ此世の王は當に滅すべき所に在ると同時に、其奴隸は之れ當に救ふべき所に在り。是れ父母たる神の我等の最下迄降りて勞苦せらるる所以也。皆實生活を通じて靈境の極處に至る。主の我等が爲に聖務に服役せらるる所正に是に在り。若し是の事微りせば、實にクライストなし。クライストの來れるは正に是が爲也。我等に其生命を與へ、我等の爲に其捐すべきを捐て、復我等の爲に、新に其生命を神なる肉體に自ら取られたりき。

○あの子女の少なるや、其心輕妙なること一羽の如し。誰か將來滯滞の重を知らん。嬰兒の靈は、神の微妙と遊んで針孔を躍通する甚だ難からず。稍地と親しむに及ぶも三四歳の際は庭前池頭猶豁然として海陸を大觀するが如し。喁若として此の間に天を樂む。ああ、天豈人に遠からんや。私我なき處は即ち天也年少者夫れ入り易い哉。若し天下少年皆如是くにして、老成人亦皆少年の心に歸らば、新天地の建設必しも難からず。百福招かずして至らむ。然れども、大本なければ立たじ、道に由らざれば成らじ。要は、天下の老成人其老成の心に死して、永遠の童子に新に生まるるに在る也。

○美なる生命は、人の謙る處に榮え、其私と榮え其私と戰ふ處に飛躍す。

假想の敵を作る勿れ。實地の大敵は、人々己れの身に於て之を有す。當に實戰して自ら己れに勝つべき也。假想に敵を求むるを須めず。實際、敵は己れに在り。已即ち其敵也。速に其變性となれる自我を殺戮すべし。夫れ而る後徐に人を教へん耶。

○若し汝等人の子の肉を食ひ、人の子の血を飲むに非ずんば、生命汝等の中に無し。我が肉を食ひ我が血を飲む者は、永生を其中に有し、而して我之を大終に於て全き新人とならしむ。我が肉は眞の食にして我が血は眞の飲なれば也。我が肉を以て食となし我が血を以て飲となす者は、我と一となり而して我れ彼に居る。誠に實に父子の全を成す生命の父我を遣して、我其生命に生くるが如く、我を以て食となす者は、我が生命に生さむ。是れ天より來れる眞食也。是の食を以て食となす者は永へに生む。

クライストの聖體に養はれて、クライストの血統に長ずる時は宇宙の親子兄弟、其至大より至小に至る迄、皆相系りてクライストの安に安んぜざるはなし。

○教は誠に深い哉。夫れ教は、宇宙を養ふの道也。「養を離れて教あらじ。故に道は全世の人を能く養ふを以て目的となす。而して其養や、尤品に在る也。

○凡そ一善言の出づる所、一善行の起る所、皆主上の生命の養

に由りて成り來らざる者あらざる也。教は皆再生の養食也。

○心有り人に在り。神に屬す。此れ形を通じて形以上に在り。生れながらにして貴し。生れながらにして清し。ああ誰か此の心ありて、清貧を神の富國に欲せざらんや。誰か此の心ありし清淨を神の子女に慕はざらんや。誰か此の心ありて、順從を父母の命のままに之れ願はざらんや。之を願ひ、之を慕ひ、之を欲す、是れ此の心の貴き所にして、クライストに於て再生に進む所以也。

○人は神の國を其心の中に有するも、而れども、身の外に於ても亦神の爲に、美田を要す。天國の芥種を地に播く處也。厚く信を養はんには、清淨の美地に於て教養せざるべからず。私智私慾に充溢する暗黒界に於て小信を養育するは至極困難也。世の爲に、人の爲に、其救の爲に、此の美田なきを憂ふ。若し無慾の地を得て、能く無慾なる兄弟の其清淨の手を以て此に田つければ、小と雖も亦外天國の種子となる。其程度に於て亦生命の食に務むる者也。

○夫れ食は聖物也。晚餐晝餐朝餐皆聖餐也。皆以て生命を受ける所以也。私意私慾を以て食ふべからず。嚴重なる天眼の監査を受け、感謝して食ふは古の道也。

○世界なる基督の子弟を養ふ事。兄弟相共に愛する事。天下を友として善く其忠を盡す事。皆聖晚餐也。聖晝餐也。聖朝餐也。主の食を食はんには、我獨り食ふ能はじ。必ず兄弟相共にす。乃ち我れ養を受けんには、我れ中心悦んで亦他を養ふに務めざるべからず。其方一に限らず。生命の食を得る所以の道

萬障途に在りて幻多し。行人常に惑ふ。然れども此れ皆深意の在るあり。亦徒爾ならず。一旦豁然として能く覺るあるに及べば、謙道は至近にして、未だ嘗て我を離れしことなきを知る。○夫れ教は等を踰えて教へず。自ら起つを得る者にして後之を鞭撻して勉めしむ。時の未だ其人に至らざるに、必ず過重の任を以て之に加へず。教は、個性を通じて全體に亘る。又全體を以て個性に及ぼす

○既に生命を賜はるより以上、吾人は一日も實地に就て試験せられざるはなし。誰人も苦勞せずして正道を蹈むを得べからず。各々其本性分を盡さざるべからざる也。使命を有せざる者生來一人も之れあらじ。

○誠に神に事へんと欲する乎、一念にだも報酬を求むべからず。世人或は之を無情と謂はん。夫れ物を受くるに道あり。其當に受くべきは、千萬金と雖神の爲に謹んで之を受くべし。然れども毫も己の爲に求むべからず。是れ道也。無情に非ざる也。誠に人情を天下に達する所以也。

○凡そ悲喜愛樂皆因由あらざるなし。手の舞ひ足の蹈むを知らざる前、手既に之を舞ひ、足既に之を蹈む。知は却て行の後に在るが如きあり。然り而して其行や、因由なくして行はれず。之をして舞ひ之をして蹈ましむる者必ず其先に實在して然らしむ。或は善或は惡皆因あり。後知は知らず。故に知を致すは、先知を以て其所以を知るに在る也。

○福に似るは禍の本也。福は似すべからず。世に自智自尊にして基督の神性を否認する者有り。又巧言令色を用ゐて基督を君

主に戴くを避くる者あり。今日俗界を通過する如くなるも、皆福に非ざる也。

○夫れクライストは主也。君也。神也眞人也。其内裏に在りて萬有の微衷に亘ると共に、大々宇宙に於て惟一の大教師表たり。宇宙の全體に虧缺の生ずるなくして、嘗て脈の緊急なる一要點に於て特に我主の間に現出せられたりき。我が主也。クライスト也。

○仰、名は實の賓なれば、實は名の主也。従者の名は、其主を戴きて之に奉事するに於て斯に始めて其れ立つべし。然らずんば其間に於て何の關係かある。既に主を戴かず、何を以て従徒たらんや。寧ろ其自名を以て濫歩するに如かず。彼等虚名を假る者の如きは、是れ只々人の耳を乞丐する者也。

○夫れ人は當に神を戴きて神に事ふべし。是れ名實正確にして永遠の福也。故に親子は當に親子の親あるべく、兄弟は當に兄弟の愛あるべし。皆名實相重んじ、上下四方偏頗なく、親より親に進み近より近に至りて、當に永遠に大成すべき也。

○夫れ生命の父母なくして生命の子女あるべからず。然らば則ち生命の父母を接けずして如何ぞ生命の子女たるを得んや。生命の子女は皆生命の父母を戴き、中心より誠に悦び樂みて奉事せざる者あらざる也。

○今や、心身の體する限を以て主の主たるを明にし、然り而して有神無我の本教を明に述ぶるは、是れ今日傳者の使命の在る處也。

○夫れ美は、自ら犠牲となるあり。美は義に殉ず。事の未だ形せざるに殉ず。感の未だ覺らざる先に苦む。美たる美は自ら未だ其然る所以を知らざらむ。是れ眞の十字架也。其苦は、必しも形に有らず。救の爲に自ら集中して靈動する所に於て苦む。

○此より彼を観る耶、彼より此を観る耶。觀者其立つ所の異るも、永遠は我が先に在りて常に在り。過去なく未來なし。我れ我を以て永遠を測るべからず。人は神に於て永遠に開くべし。○道に隱顯なくんばあらず。唯法に由りて行はる、隱中別に顯にして、外顯の顯よりも明なるあり。乃ち表外の大道と大連ず。全からざるなし、上天の事は聲なからず。臭なからず。福音聲香至らざるなき也。

○夫れ人は美に養はれて柔なる花の如し。自他の間に無間に繋りて隔なし美の榮光は照さざるなく、容れざるなし。若し藥石あり病を治するあらば、其功用其所以なからず。若し天才の藝術を能くするあらば、其之を實にせしむる者ありて能くせざるはなし。美善は其源也。美なくんば美果を得じ。美果は美樹に結ぶ。然り而して美樹は善と一也。善を離れて美は獨り美ならじ。

○嗚呼天上天下勢の盛なる者美に如くはなし。善と雖若し美と離るれば力なし。美は火の如し。醜惡を焚滅するは其行動也。萬物を更新するは其智能也。夫れ美は神の表現體。即ち生命自體也。

○世人は美を知らず。其慾あるを以て也。慾は善と反す。故に其以て美とする所は皆善と反す。醜穢也。

○美は其人を得て傳ふ。即ち顯はる。溫良和照は美の一性也。以て是の人に見はるる時は至て親近也。而して必ず狎るべからず。若し夫れ狎るる如きは醜穢也。美は永遠狎るべからず。狎る能はず。親しむべく近づくべし。皆公也。義也。私親を得じ。私近すべからじ。

○美は親近。兒の如し。順也、柔也。溫也。善也。夫れ唯順是を以て美は常に善導に従ふ。苟も善なる乎、美は必ず已を捨てて之に従はざるはなし。美の欲する所は唯善也。更に何事なし之れ唯善を欲して善を爲して善に従ふ。是を以て美は、善の美也一也、復二たらず。永遠の生命なる所以也。然るに非ずんば、其形容如何にせよ、醜惡を免れず。

○吾が友の我に望む所は、吾れ堅く我が信を持するを望む。且信の我に廣大ならむことを欲す。吾が友常に我に告げて云く、汝、徹上徹下人と爲れと。是れ吾が友也。此を以て我に求むる以下なる者は吾に友ならず。若し如此ならざる者は、日に々々面すと雖皆吾友に非ざる也。吾豈勉めざるべけんや。

○人の大に憂ふる所は、大人を以て自ら處るに在り。自ら大とすれば自ら亡ぶ。

○唯已を虚しうして謙る時は、神助謙々として我が爲に降臨す保安者乃ち來る。

○主は常に我儕の衷に在し、我が中藏を知り給はざるはなし。親近の親近にして、謙の謙也。人焉ぞ庾さんや。

○謙虚の道は、一躍して至るべからず。迂廻長歎皆豫期すべし。淡心輕軀孜々として萬障を開かざれば、道を見るを得べからず。

低い呻吟^{うめき}が洩^もれすまいとしても
唇^{くちびる}を衝^つひて斷續^{断続}した。

その時である。

私の思ひは哀なる心に耳^{みみ}語^{かた}いていふた、

『實際^{じしつ}今^{いま}、死ぬ^{しぬ}るのかも知れないぞ、

心臓^{しんざう}痲痺^{まひ}でも來ればそれ迄だ』

衷^{うち}なる心は直ちに應へて宣言した、

『至聖^{しせい}至愛^{しあい}なる大靈^{だいりやう}との久遠^{きうえん}より永遠^{えいゑん}に亘^{わた}れ
る溫^{ぬる}き抱擁^{ほうよう}、げにも私は其の中に在る
止まること無き完成^{きやうせい}への遙^{とほ}かなる道程^{みちほど}、其處
に凡^{およ}ての事物^{じぶつ}がある。

死^しは唯^{ただ}より良^よき生活^{しやくわ}への一躍進^{いつとくしん}に他^{ほか}ならぬ』
意外^{いがい}の平靜^{へいじやう}、

不拔^{ふたば}の信樂^{しんがく}、

私は實^{じつ}に自己意識^{じこいしぎ}の明否^{めいひ}を疑ふて
深く自ら省察^{しやうさつ}した。

涙 の 響

伊
藤
寥
々

三月なかばの或るゆふべ、
四十度何分の高熱が
突として病床の私に襲來した。

私の身體からだは烈しい惡寒を以て
先づ風に戰なく木の葉のやうに震え、
次いで驚くべき苦熱が身内みうちから發した。
氷嚢と氷枕に挟まれた額ひたいには
デリ／＼と膏のやうな汗が噴き出で、
馬を鞭つ筈にも似た響は
烈しく頭の中に起り、
舌は灼熱した鐵のやうに渴き果てた。
私の瘦せた双手は夜具をはねのけ、

私は直ちに眼を閉ぢた。

一念のまことに心思の凡てを傾注した。

あゝ斯くて見よ、

再び和やかな慈光は來つて

寂しき室に充つるを覺へ、

無限の溫味は細々と

私の頬の邊を打ち廻つた。

何等至高者に對する信從荷恩の喜び、

何等眞理に對する直觀肯定の満足、

熱き涙はまたも潜々として

枕に落ちた。

『あなたほんとうに色んな事を考へちや

いけませんよ』

私はたゞ靜かに頭を振つた、

莞爾として見せた。

違棚の置時計が鏘々として九時を報じた。

然かし意識は明徹水の如くにも

苦惱せるわが肉の中に澄み、

衷なる確信の聲明は

いよゝ熾盛に舉りつゝあつた。

私は突如臉に溢るゝ熱き涙の

頬を傳ふて枕に落つる響を聞いた。

『あなた色んな事を考へちやいけませんよ』

耳語る聲に私はボカリと眼を開いた。

其處には燈火に背いた憂はしげな妻の面わ

床の花瓶に微動せる白桃、

そして書棚にうす光る金文字が點然として

私を打ちまもつた。

而かもそれ等の背後には、

冷やゝけき死の黑影が、恐るべき威嚇を以て

私にまで迫つてゐた。

達した所であるが、こふいふ場合には全然反對に誰でも一所になつて笑ひ興じなければならぬ様になつてゐる、此點に於て寧ろ日本人の方が個人主義といふべきである、こんなことをして十一時十二時まで騒いで寐る。あくる日又一日雪の中で騒ぎまわつてきて同じ様に夜をすごす、ホテルに音楽のない時はそこは出しやばりの西洋人のといて誰かしら頼まれもせぬのにピアノ弾くものがある。ヴァイオリンを弾くものがある。果ては自慢の喉をきかせ様といふものが出る。引込主義の日本であつたらあつちの隅に一かたまり、こつちの隅に一かたまりといつた様に淋しく過すであらうものを、そこは西洋では賑やかに愉快に過すことが出来る。こんな風で一週間や十日は都會の生活とは全くかけはなれて愉快に然も健康な日を送ることが出来る。成程「山へ山へ」と人の出かけるわけである。

レ、ザヴァンといふのは、ロザンから汽車で一時間、モントリユで降りて夫から三十分ばかり軽い便鐵道で上つた山の上にあるさびしい村である。

夏は野山一面に水仙の花が眞白に吹くので名高い所であるが、自分の行つたのは二月の初め寒さも絶頂といふ頃である。ステーションの前に奈良の嫩草山といつた様な山がある、もう少し高くて勾配も急である、山の絶頂まで歩いて上れば小一時間しかゐるが、索條鐵道があつて五六分で上ると出来る、山の上にはホテルがあつて其附近から下のステーションの附近まで迂餘曲折した路がルージュやポップスレーの滑走路となつてゐる。曲り角／＼には雪の土堤を作つて危いが然し面白く轉回の出来る様になつてゐる。下まで七八丁もある所をポップスレーで滑り下ると五六分でゆく絶頂から見えてゐる、實に面白い、餘り遊戲をやつたこともない自分もつい誘はれてやつてみたが、二三度轉覆の難に遭つて、まづこんな所で命を失つても初まらぬとお止めにする。一緒に行つたドイツ人などは第一番にやめてしまつた。そこへいつてはイギリス人は多らしい、一人でも下まで一度は行つてみたいと滑つていつた、こんな所にもイギリス人の性格は現れてゐると思はれた。

瑞西より

瑞西の冬（つゞき）

盧 山 生

さて晩飯の鐘になる、食堂に降りてゆくと、そこゝにめいゝ都合のよさそうなテールブルに陣取つてゐる人々を見ると、晝間は白い毛糸の頭巾やジャケットにお轉婆をやつてたお嬢さんも眼のさめる様な着物を着て、お化粧をしてすまして御座る。男は大低スモークキングを着て、之も晝間の馬鹿げた様はどこへやらといふ風をしてゐる。山に遊びにゆくのにと思つて黒い着物も持つて來ない自分の様な書生は一寸面くらつてしまふ。夫れからこんな山の中で能く材料が得られるものだと、日本流に考へると不思議に思はれる御馳走をすまして廣間に出ると、そこにはクリスマスツリーを飾つてやがて集つてきた子供は歌を歌ひ出

す、夫から向ふの方で音楽が初まる。待ちかねてゐる人々はすぐに踊を初める、一體西洋人といふものは踊といふものを唯眺めてゐるものと心得て自分の様なものには不思議に思はれる程踊が好きである。都會の人ばかりでなく百姓達でも祭日とか休日には恠しげな音楽或は自働ピアノ、或は蓄音機を廻してまでも踊つてゐる。さてワルツ、ワンステツプ、ツーステツプスから大流行のタンゴに及んで夫もあきると今度は女學校の運動會に見る様な踊を初める、子供は勿論分別盛りの男子、さては白髮童顔の老人まで一所になつて騒ぐ。一人でも隅の方に引込んでゐる者があると交るゝやつてきて引張り出す。由來西洋は個人主義の發

中央山脈瑞西の誇りなる所謂ベルナーアルプスの美しい連峰を望み、殊にアルペンロートと呼ばれてゐる夕榮の美しさはさすがに瑞西の首府といふ感じを起させる。

古い町の中心は停車場から東に通ずる通りにあつて、兩側の人道に當る所は外の町には餘り見ない廻廊風に出来てゐる。従つて雨の降る日などは重寶だが何んとなく薄暗い。之もベルンの氣分をして濕ぼくしてゐる一因であらう。夫から家の前には地下室へはいつてゆく入口がある。今度の戦争には飛行機がくると地下室へ逃げこむそうだが、穴藏といふものゝ殆んどない日本では飛行機が來たり砲撃されたら夫こそ困ることであらう。此通の中には例のストラスブルグで見た様な時計臺があつて十二時をうつと鳥や熊などの形が飛び出す仕掛になつてゐる。此通の中央には所々に泉水が出来てゐる中央の塔の上には古風の騎士などの像が立てゝある。之は時計臺と同じく十五六世紀頃の遺物であるといふ。ドイツでもフライブルグあたりで見ることがあるが、一種古びた色彩に何ん

とも言へぬ雅味を帯びてゐて、中世紀の生活を思ひ出さしめる。

此通りの中程から南へ出た所に瑞西聯邦議會の建物がある。之だけはさすが瑞西の人の誇りとする所だけありて中々大きな立派なものである。議場を中央に兩翼には瑞西の中央政府の官省が軒でなく室を並べてゐるのである。日比谷の兩院の建物を思ひ出すと何んとなく肩身の狭くなる氣がする。中へはいつてみると議場は存外小さなものだが、南はア、レの谷を隔てゝアルプスに對してゐていかにも雄大の眺望である。聯邦議會の西に連る岡はクライチシャッツツエといつて小さな公園になつてゐる。こゝには萬國聯合郵便同盟の記念碑が立てゝある。地球の周圍に五大州を代表する人間が環をつくつてゐて、あやしげな鬚おかしな着物をつけた日本婦人の姿が我々には異様に見える。公園から議事堂の裏を通つて奇麗な散歩道が出来てゐて深いア、レの谷底に臨みながら東へゆくとキルハンフェルドの長い／＼橋に出る。橋の北の袂にはカシノの大きな建物がある。四五人の富豪

絶頂の雪の上に腰をおろして面白そうに滑つてゐる人達を見ると二月といふに外套もぬぎたくなくなる様な暖かさ、遙か彼方にはジュネヴァの碧い湖を見下ろしてアルプスの連鎖はいつ見ても美しい、向ひの山の白い雪の中には、スキーをやつてゐる人達が蟻の様に集つてゐるのも面白い、やがてぶらりぶらりと鹿の子まだらに雪の積つた裏路を下りてゆくとな下のステーション前は又お祭りの様な騒ぎ、山の様に人が集つてルージュやボツプスレの滑り下りてくるのを待つてゐる、終點へまで轉ぶものがある、ワー／＼とはやし立てゐる、紅い顔もせずにはさつと又上つていく妙齡の婦人を見ると日本の人形の様な婦人との對照が痛切に感じられる。絶頂へ引返すには索條鐵道に割引切符があつて何回でも容易に往復し得る様になつてゐる。四疊半に閉じ籠つて湯豆腐でもつくきながら雪見酒を傾けるのも悪くはない、或は隅田川に家形船を浮べるのも決して悪いとはいはない、然し若いものも年寄りも一所になつて終日嬉々として戸外に遊びくらす方がどの位健康で且つ弊害がないかは言

はずとも解ることであらう。不幸にして日本には風が多い、然し自分はせめて炬燵の中にもぐり込むことばかり知らぬ北國の人に一度瑞西の冬を見せ度いものと思ふ。(一月廿二日雪眞白に積れる夜戸外に小供達のルージュを滑べらせて笑ひ與ずる聲をきゝつゝ此稿を草す)。

ベルン

一、ベルンの町

ベルンといへば瑞西聯邦の中央政府のある所であるが町の大きき人口からいつてはチューリッヒ、バーゼル、ジュネーヴの下に位してゐる、何日見ても何となく田舎じみた暗い濕っぽい物淋しい町である。一つは古い町だからでもあらうが自然の地勢並に之に由來する氣候の然らしむる所であらう然し町の東北をめぐりめぐつて流れてゐるアーレの川を隔てゝ彼方にはグルテンの丘とベルンベルグの間から名高いユングフラウ、メンヒ、アイゲルの三山を初め永へに雪の消えることなき瑞西の

ある。此橋の北詰の岡の上にキウルザールが建てゝあるカフェ音楽堂博奕場などが出来てゐる、日曜には大抵市の音楽隊が大演奏をやつてきかせる此音楽隊といふのが普通の市民や百姓たちで中々うまくやる。此點は西洋でなくては出来ぬ藝である。キウルザールの前の庭はアーレの谷と町の大半とを前に控へてベルナールプスの眺望を縦にすることが出来る様になつてゐる。之も亦アルペンを望む名所の一つである。

橋を南に戻つて町にはいると、角に市立の劇場がある。東京の帝國劇場を少し小さくした様なもので、内部の設備などよく似てゐる。あの劇場を兎や角いふが花の都の巴里は知らず、其外のものと比べては夫程遜色はない様に思はれる。然しこの座付の俳優は餘り上手でないので、近頃ワグネルのオペラやドイツのクラシック物をやつてゐるが、餘り見にゆく氣はない。

町の大體は之で見物を了へて停車場に戻つてくると、停車場の後の丘に堂々たる建物が並んでゐるのが見える。之がベルンの大學で前の廣場には生

理學者ハルレルの像などがあつて可なり立派なものである。然も之が瑞西聯邦政府の立てたものではなくて小さなベルン州で維持してゐる、ロシアやバンカン半島其他多數の外國の學生を收容してゐる所を見ると感服せざるを得ない。日本でもどこかの府縣の市でもつて帝國大學を凌ぐ様な大學を立てゝ見たら面白からうと思ふ。學制改革だの單科大學がどうのと騒いでゐるよりも、内容の充實した一の市立大學でも立てたら此問題は解決せられることと思ふ。政府の當局は何でも統一々々の美名の下に唯形式に拘泥してゐて、民間では又何でも官立々々と明治初等の思想を未だに追ふてゐる様では、到底學問の發達などいふことは及びもつかぬことである。

二、ベルンの近郊

ベルンの町は餘り氣持がよいとはいへぬが、其近郊は野趣誠に掬すべきものがある。先づ議事堂の裏をアーレの岸に下つて流れに沿ふて南すれば右岸には赤いスレート葺きの百姓家の間には菓樹園が點綴してゐる。左岸には鬱蒼たる森林があつて

の私有だそうだがカフェ、玉突、演藝場などを具へてゐて中々立派なものである。集會場として憐れな帝國ホテルや精養軒の外にない東京のと思ひ出すと之もベルンには過ぎたものである。橋の向ひにはベルンの博物館瑞西國立圖書館などがあつて物靜かな一廓を形づくつてゐる。カシノの前に大學と立と共有の圖書館があつて、其藏書の豊富なこと讀書の自由なことは、實に歐洲でも稀に見るところといふ話である。學問の獨立とか研究の奨勵とか騒いでも、普通一遍の文献を集めることも出来ない様でどうして仕事が出来やう。吾人はせめて東京の中央に此位の圖書館を一つ建て、ほしいと思つてゐる。

カシノの通を束すると大伽藍がある。十五世紀の末に建てたものといふことで中々壯大なものである。高塔の高さ正に三百三十尺、後園に出ると百尺以上の斷崖をなしてアーレの川に臨んで居るので、眺望は中々いい、アルペンを望む名所の一つとなつてゐる。此伽藍の下のアール川の川縁に一部落がある。古くから特種の人種が住んで居て言

葉も町のものとは大分違ふといふことである。川の向岸には榆や胡桃の林につゝまれて美しい別荘風の家が並んでゐる。ベルンの町も向ふ岸へ渡つて見かへると中々美しい。殊に月明き夕に至つては自ら詩中の人たらしめる。

町の東の端に出ると、アーレの上に架した橋の畔に大きな石垣で壘んだ窟がある。こゝには熊が五六疋飼つてあつて種々の姿をしては上から人蔭や蕪を投げてくれるのを待つてゐる。ペーレングラベンといつてベルンに遊ぶものゝ必ず訪ふ所となつてゐる。一體ベルンといふ言葉が熊といふ字から出たのだそうで(ベルリンもそうだといふ)ベルンの州の徽章となつてゐる。ペーレングラベンからアーレの川は町の北部に沿ふて流れてゐる。流の右岸は新開のさびしい一廓となつてゐて兵營や練兵場がある。川岸に下つて物靜かな通を流についてゆくとコルンハウスといふ橋の下に出る。橋の長さ三百五十尺高さ百三十尺、橋頭に立つて碧を湛えたアーレの流を見下ろすと、一寸神田の御茶の水を思ひ出さしめるが、勿論遙かに壯大で

西行の歌

服部 純雄

謙遜の同情

はづかなる庭の小草のしら露を

もとめてやどる秋の夜のつき

『雲るの月と草葉の露と』何と嬉しい對照なるよ。試みに澄みわたりし秋の夜の清らの月を想ひ給へ。

空のかぎり海のさわみ月の光はあまねく天地に冴ゆるのです野も山も林も小川も遠き村里も千草の花野も悉く月の銀光に包まれるのです。

然しまどかな月は謙遜です。清淨です柔和です碎けた愛の魂です。さればこそ月の自ら求めて宿る者ははづかなる處の小草の白露なのです。

はづかなる處としいへば或は貧民窟のあるかなきかの汚穢い腐れた處の事かもしれませぬ。或は人里離れた杣小家の朽木にめぐらされたよもぎの下かもしれませぬ。

月は此處に生き此處に枯れゆく名無草のもろいはかない白露に求めて宿るのでありました。獨り冴えゆく光の姿をよなよな草のたもの白玉に優しく宿したのでありました。

白露の感謝は想察されます。彼女ははるか雲路の月のこゝろを想ふてはこぼるゝばかり欣びました。彼女は千里の月とゆかりの運命を思ふては葉末をつたふ脆き吾身を忘れえました。

宇宙の光は草葉の露にも宿るのです。何やらむ歡喜の大事實です。何やらむ希望の

自然の公園となつてゐる。日本の田舎道によく似た街道を行くと、グルテレの岡の麓に出る。奈良の三笠山といつた様な山で、ぼつ／＼上つて行くのも一興ではあるが、便利な索條鐵道があつて五六分で頂上まで引き上げてくれる。頂上に立つて振り返ると、ベルンの町は指顧の間にある。アーレの流の銀蛇の如く町をめぐつて、遙かに雲烟漂渺の間に消えていくのも美しい。更に岡の一角に上つて南の方を見れば、天氣のいゝ日にはベルナーアルプスとストツクホルンの連鎖が屏風をめぐらした如くに見える。飽くまで眺望を縦にしてさて雑木林の間を一めぐりしてくると、日本ならば「御茶を一抔召し上れ」と梅干婆さんが赤毛布の椽臺から呼ぶ所であるが、こゝには立派なカフェがある、夏はホテルと店を開く。

ベルンの近郊で、尙吾人の屢々杖を曳く所はライヘンバッハである。町の北の端れから博覽會の建物の下を通つてアーレの岸に沿ふて美しい並木路を辿つて行くと、路はいつしか落葉樹の森の中へはいつていく。此頃ではまだ所々に雪が残つて

ゐるが、若芽の緑に燃ゆる頃落葉の錦うづ高き頃は實に飽くことを知らぬ眺めである。東京の近郊にも自分の少年の頃には、武藏野の面影を残した美しい雑木林が澤山あつた。そして自分は日の暮るゝのも知らず、下草の上に寝ころんで、あふるゝ自然の詩味を味つたものである。夫が今日はどうであらう、恐らくあの雑木林などは、影もとめず切り拂はれたことであらう。ヨーロッパの都會へきて近郊の自然の巧みに保存されてゐるのを見ると、寧ろ極樂の桃源郷に其威を逞ふしてゐる文明の弊を咀ひたくなる。幾町か森の中を逍遙して其北の端に出ると又アーレの岸に出る。村童の綱をたぐつてあやつる船に乗つて向側へ渡るとカフェがある。本立の陰に据えた卓に倚つて一杯のカフェを啜りながら、瑞西名物の乾酪を味ふてゐると、瀧の川あたりにでもぶらついてゐる様な氣がして、少時は異郷の客たるを忘れしむる。

年に勝れる事を既に理解せしめたのでありました。

此處に於て春風は更に彼女をして一大生長をなさしめんとするのであります。即ち彼女をして腐廢れた此土地を離れて更に清淨い純精なき世界に彼女の色香を放散せしめんとするのであります。春風は此使者として選ばれた最後の辛ひ苦しい責任を彼女に果さんとするのであります。

おい春風よ！春風よ！

春風の魂も亦強い巨きな愛ではありませんか。可愛ゆいふくよかな小兒が天使の如く永眠します。此世の壓迫と悲慘とは生命を暗して貞操を護る美しい處女を弄殺します。此世の誤解と殘忍とは主義に殉ずる若き男の眞紅な血潮を要求します。

私共の魂は眞暗になります。顛倒します。

然し西行は教へます。此一大事實は反つて大宇宙の攝理であります。慈悲の發現であります。愛の活動でありますと。

誠に實に感謝すべきは大日本が詩人西行の思想を生むだ事でありました。彼が既に己に永生の曙光を望むて萬象を透した事でありました。想ふに散るは生くるの初です。

春風は確に美しい花の保護者でありました。私共は春風を恨むべきではありません。寧ろ感謝を捧ぐべき餘裕を持つべきでありました。

『ちらすは花の爲であります。』

一九一五。二。桃郷に於て。

大事實です。

我儕はペンを進めず。秋の夜の密室に靜に默禱すべきであります。

強き愛

うき世にはとゞめおかじと春かぜの

ちらすは花を惜むなりけり

朧月夜に散りゆく花の姿を想ひ給へ。

しづ心なく散る花も自分の魂を千々の憂に碎きます。梢はなるゝ花の魂に誘はれると自分の魂もくらくなります。只管に「花とちつけよ青柳の糸」と祈禱の魂になりゆきます。梢は花の故郷ですなつかしき彼女の住居です。訣別ゆく彼女の行方が忍ばれます。春風の無情が恨まれます。思はず寂しい魂で涙ぐみます。

さるにても詩人西行は流石に大思想家でありました。彼は彼女の散りゆく魂を想ふては歎くよりも泣くよりも悲しむよりも恨むよりも寧ろ彼女を祝福し喜悅し満足し感謝したのでありまし

た。

誠や大宇宙の魂は愛であります。

宇宙は一大心臓であります。愛の血潮は恒に循環するのであります。落花も落葉も月の歸くるも水の枯るゝも悉く「愛」夫自身の發顯であります。

春風の魄も亦愛であります。

蕾を宿したのも春風です匂をつたへたのも春風です。花を咲かしたのも春風です。然すれば花を散すも亦春風の愛に發した靈動でなくてなんでせうか。

此世は姦惡です。雨があります。塵があります。戦争があります。罪惡があります。悲慘があります。病死があります。

春風は花の美しい魂を確に識ります。

彼女が此世に存在するにはあまりに美しい事をも識ります。然も春風は彼女をして彌生の空にうららに其美しさを既に輝かせたのでありました。

春風は彼女をして一日の美しい使命は汚れた萬

或る時はさみしさからうれしさへ、
或る時はうれしさからかなしさへ、
或る時はかなしさからさみしさへ、
ぐる／＼まはりをしてる私の世界、
ダリヤの赤が太陽の赤と、
とけあつてしまふ時、

私のかなしさとうれしさとさみしさとは、
いつも私のうちでとけあつてしまふ。

熱のある晩

熱のある晩

ねがへりをくりかへすくるしさ、

しぼられた汗が

ひたひににじみ、

ひねににじみ手と足とににじむ。

樂しさよよろこばしさとは、

わけもなく汗となつて逃げてしまふ、

あとにのこつた悲しみのなげき、
しのびなきのくるしさ。

ひたひからぬぐつた汗を、
もしや血ぢやないかしらと、
ダングステンのやゝ青い光に
いくたびかすかして見た。

ものにつかれたやうな
くるしい息を止めようと、
努力はしてみるけれど、
押さへる事の出来ない
熱のくるしみ。

眼の前に原稿紙がちらつく、
なゝめに置かれた原稿紙が
ゆらゆらゆれて。

左から右へ、
右から左へ、
近くから遠くへ、

眞紅なダリヤ

久 萬 か ず 枝

下の植木屋さんのダリヤ、

まつかと黄色とボタン色と、

まつかなダリヤは風にゆらゆらゆれて、

黄色の肩によりかゝつてしまつた。

まつかなダリヤはやどつたつゆは、

バラ／＼となごり惜しく散つた、

一ツは葉とくきとの間へ、

一ツはしめつた土の上へ。

まつかなダリヤはびらうどのやう、

私のま蒲團のえりにかけて、

まつかなダリヤと、をどりと、夢を、

夜中くるしまずに、つかれずに見たい。

まつかなダリヤは、お日様を、

えびいろの幕の中から見たやう、

そのあかるさは、どんなにながめても、

まばゆいきらめかしさが無い。

まつかなダリヤはこのごろの

私の氣分を遠くでながめたやう、

みつめてゐると中の方が

だん／＼と黒ずんでゆく。

あかるいまはりから

黒ずんだ中の方へ、

みつめみつめてゆくさみしさ、

しかもそのさみしさは、私には、

一番うれしいものなのだ。

涼風が吹いて、いゝ心持ですね！」

菊ちゃんの聲を聞いたと思つたら、

私はバツと目が開いた、

「あら、菊ちゃん、菊ちゃんは亡くなつた筈、

今のは菊ちゃんに違ひないが、まあ何うしたらう」

私はふたゝび目を閉ぢた、

けれども心は冴えかへつた、

今のは夢であつたらう？

まさしく夢に違ひない！

惜しい夢、嬉しい夢、つらい夢、

目がさめて床を離れても、

うつゝと夢の境はなく、

涙が湧くやうにはふれ落ちる。

（大正四年五月十九日朝）

遠くから近くへ、
しづかな動作をくりかへす。

なゝめといふ語の恐ろしさに、
眼を閉ぢるけれども、
なほくゝあざやかに私をくるしめて、
殺さうとしてゐるのかもしれない。

夢

夜のあけく、目が覺めた、
今のは夢であつたらうか？
まさしく夢に違ひない、
夢も夢、はかない、短い、悲しい夢、

初夏のアツサリしたやさすがた、
静かに菊ちゃん^{きくちゃん}は立つて居る、
むかふの階段^{きざはし}をながめながら、
物言ひたげな眼眸^{まなざし}であつた、

よあけまで

恐ろしいなゝめの原稿紙は
黒い小さな一字一字をのせて、
夜着のえりに顔をしづませて
弱い私をのぞきにくる、
恐ろしい熱のくるしみ。

鼎 浦 漁 史

『あゝ菊ちゃん、思ひの外に瘠せもしない、
もう直ぐに癒^{なほ}るだらう。
それほど自由に歩けるんだもの、
ほんとうに、まあ、善かつたネ！』

私が斯^かう言ひかけたその刹那に、
菊ちゃんは晴れやかな顔で笑つた、
「もう直ぐ太^{ふと}りますよ、あなた、

に對するものなればなり。

抑々宗教と教育とを劃然相分け互に相侵することなからしむることは、我が國が明治初年學制制定以降執り來りたる大方針なりと雖も、宗教と教育との分立とは學校に於て現存宗教を授くべからずといふに止まり、宗教其物を一概に不必要なりと爲すにあらざることは多言を須るずして明なり。況んや宗教心又は信念をや。蓋し宗教心又信念は人格の根柢を成す所以のものとて、人格を確立し之を徹底せしめんには、個人を超越する偉大なる或物に對する信念を待たざるべからざるは疑議を容れざるところなり。

近時我が國青年の志操輕佻浮薄に流れ、動もすれば自己の便宜を求むるを知りて國家の利害を顧みず、或は危險なる思想に惑はされ易きは識者の夙に憂ふる所なり。而してその然る所以を討ぬるに、教育者が概ね物質的知識に重きを置き、形而上界に何等敬虔の對象を認めず、人間相互の關係以上に何等の貴き意義を認めざること、は少くも其の主要なる原因の一と爲さるべき。

らず。此の如くにして堅實なる國風民俗を維持し、國家百年の長計を樹立せんとするは到底不可能の事にあらずや。吾人竊に國家の將來を慮り、今に於て人心を未だ甚だ壞れざるに維持せんとするには宗教心又信念に一切思想の根柢を托するに至らしむるを以て當務の急と信ず。

然りと雖も所謂宗教其物を直ちに學校に導き入るゝの弊を思ふ事亦切なり。此に於て宗教教育分立の大方針に乖らずして、能く此の目的を達すべき妥當の方法を討議すること再三、先づ信念の發達に對する阻力を去るを以て最も切實にして行ふべきものと認めたり、此れ前文の決議を爲す所以至なり。』

猶この決議及び理由は歸一協會幹事より各地教育會に送附し、其誌上に掲載を依頼し、併せて文部内務諸大臣に參考として提出するとの事である。

吾人は歸一協會に對して謝すべき多くの理由がある。明治の初年に於ては神道も佛教も組織的研



時

時

歸一協會の決議案

東京の識者階級の一部と政治家、官吏、軍人、實業家等の代表的人物を網羅したる歸一協會は毎月例會を開きて信仰問題を研究しつつあるが、昨秋以來信念問題に就いて會員の意見を闘はし來り、會議と討論とを重ねて略落着する所あり、五月十三日上野精養軒に開きたる例會に於て左の決議案を通過した。

決議案及理由書案

被教育者の心裡に自然に發現する宗教心の萌芽は教育者に於て之を無視し、若くは蔑視し、因て信念の發達を阻碍すること無からんことを要す。

理由

吾人の此處に宗教心と稱するものは、今日世界に成立し居る幾多の宗教其物を言ふにあらずして、凡そ人類が個人を超越する偉大なる或物の存在を信じ、此に對して生ずる敬虔の念を以て言ふものなり。或は之を天と稱し、或は神と稱し、或は佛と稱し、其他名稱各々同じからざると同時に之に伴ふ信仰の形式を異にするによりて、宗教の別生ずと雖も、吾人は此等特殊の形式をも併せ取りて之を宗教心と稱するにあらず。即ち吾人が此處に宗教心と稱するものは、實に人性に本具なる宗教心其物の發現に外ならざるなり。或は單に信念と稱するも亦可なり、何となれば凡そ信念は畢竟するに偉大なる或物

近時の教會合同論

鐵道院の門司管理局長長尾半平氏は熱心なる基督教信者である。身劇職にありながら教會の事業に努力せらるゝ篤志家である。此度『基督教合同に關する意見』を寄せられた。二十五ページの小冊子なれどもこれは極めて眞面目なる意見として取り扱はねばならぬ性質の論文である。

記者も英國留學中大合同論を計劃して之を「新人」に寄せた。後「近代人の信仰」の中に之を收めた。然れどこれには反響がなかつた。機が熟しなかつたのでもあらうが、其基督教諸雜誌記者の冷淡にして偏狹なるとも一の原因であつた。記者は長尾君に對しては拙論を參考せられんことを望む。

長尾氏の説を要約すれば次の如くなる。

『基督教は今や國家社會上より大に信頼せられ、期待せられてゐる。然るに教會の情勢は如何にも貧弱にして到底其責務を全うするには堪へない。我が教會の現狀に對しては幾多の感慨なくして可ならんやである。故に教會合同論を主張するのである。』

ある、(第一章緒論)

『基督教會の元氣振はず、步調亂れ、運動鈍り、遺憾なく其弱點を暴露しつゝあるは原因一にして足らずと雖も教派分立の弊は確かに其の一つである。門司には二百餘人の信徒を有し、毎日曜日の出席數は百人を越えざれども、五個の教會がある故に之を優に一會堂に集むることが出来る。將來必要に従つて増設して不可なし。』

教會は神の軍隊なり、軍隊の活動に必要なものは統一である。統一なきものは烏合の兵である。實業界にも、教育界にも統一が行はれてゐる。神國建設の事業に於て此事の行はれざるは何ぞや。

『現在の教會はその維持頗る困難にして牧師の謝禮をも満足に拂ひ得ず、勢ひ傳道局なり、外國ミッシヨンなりの補助を仰ぎてゐる、これ會員數僅少にして献金充分ならざるがためである。資力小なれば小なるほど之を合同して用ゐるに如かざるは自明の理である。』

『教會の經濟的不如意は延いて教壇の力に影響を及ぼすは勢の免がれざる所である。牧師説教者を

究を加へられず、西洋文明に接觸したるものは、一概に之を迷信と見做したのであつた。佛教が學者の研究によりて哲理的方面に於て甚だ深邃なるものがあることが明白となつた。又近時神道に對する宗教學の研鑽の結果は古代より今日に至る迄明かに一道の進化の痕を認むることが出来る。而して儒教の根本的研究も大に進捗して、その宗教的方面も漸く正解せられんとしてゐる。而して此間にありて基督教は繼子扱ひをされ、多くの場合に於て壓迫を蒙つて來た。しかも唯物思想、黃金萬能の思想は滔々として天下に横溢した。肉慾的文藝も火の手を揚げた。政府當局者も傍觀する能はず、神社崇敬、祖先崇拜を獎勵して之に對抗せんとした。然れども國民教育は無神無靈魂説に基いて行はれ來りしが故に、これ教育者の大なる矛盾であつた。唯心的思想は神社崇敬祖先崇拜と調和し得んも唯物思想は殆んど水火相容れざるものである。先年内務省は三教會同を行ひて宗教に對する國民の態度を一變せしめんと企てた。一昨年は文部大臣がこれを計劃した。しかしこの精神が果

して一般の國民、換言すれば今日國民の思想と生活とに大なる影響を與ふるを得しや。精神的問題について官僚的權威は果して何等の影響を有するや否や。故に歸一協會のごとき有志者の團體が卒先して教育界にこの新なる注意を與へて宇宙的大生命に對する尊敬の態度を催かすと甚だ適當の事なりと信ず。しかれども一片の決議書を送附したのみにては甚深の感動を與へ得べくものあらず、寧ろ歸一協會の有志者が全國に巡回してこの精神の普及と貫徹を計らなければならぬと思ふ。或は數名の特別講師を選任してこれにこの事を托するも亦可なりと思ふ。恐くはこの問題が遠からず歸一協會に於て慎重に討議せらるゝことあらんことを吾人は希望する。

又一面に於て専門宗教家が益々此機を利用して専心道を傳ふべきであると思ふ。佛教も神道も儒教も大に傳道すべしである。就中基督教は協同傳道の方法を更に考へ直して、一層有効に傳道を試みねばならぬことと思ふ。(甲鳥生)

信ず。

合同教會は靈的進歩より自ら發揮啓發し來る所の生命と美とを教會に包藏し、常に神を見、神に愛せられ、又神と共に歩む基督教的生活を充實せんことを理想とす。又合同教會は専ら傳道教會たるべきを目的とす。(第四章合同教會の信條と其政治)

教會合同の可能なるは結婚の可能なるがごとし。必ず成立を疑はない。(第五章教會合同の可能及び第六章結論)』

これは長尾氏の意見の骨子である。吾人は大體に於て長尾氏の意見に賛同を表するものである。殊に同氏が基督教信徒たる實驗に基いてこの公平なる判斷に到着せられたことに敬意を表するものである。吾人も合同論の主張者である。然るに四年前より統一基督教會の責任者となりたるが故に先輩教友より合同論を棄てたるがごとく諷せられたこともあるが、吾人は依然として合同論者である。たゞ吾人は合同教會より自由主義の基督教を排斥したくない。吾人は自由主義の基督教を相當

なる團體に引き上げたき抱負を以て日本組合教會を脱して統一教會に加つたのである。蓋し歐米に於てこそ福音主義だの自由主義だのと競争するは強ち悪いとのみは言はれないが、日本に於ては斷じて無意味である。而して長尾氏の發表したる信仰個條は自由主義基督教徒も加はり得るものと信ずる。吾人は長尾氏が使徒信條やニケア信條より斷然獨立せられたる勇氣と確信を尊敬する。而して品性を尊重するは自由基督教の主張である。長尾氏が忠實なる信者としての實驗より此處に到着せられしは吾人の意を強うする所である。吾人は長尾氏のために出來得る丈聲援することを告白する。されどこれは容易ならぬ問題である。苦心と經綸と勞力と智慧と忍耐とを要する事業である。されどこれは大事業にして精力を集中する價值ある問題である。(S U 生)

自由主義基督教の勝利

協同傳道の新開傳道は一大成功を收めたとは吾人の喜ぶ所である。前號にも言及したる如く、こ

優遇する道を講じなければならぬ。然らざれば牧師説教者を十分修養せしめ、又活動せしむることは出来ぬ。之を實現することの出来ぬのは教派分立のためである。

『教派が存するが故に教會間に俗的競争が起るとは憂ふべきことである。その教派的根性は傳道的精神を破壊するのである。(第二章、教會分立の弊)』教派は時勢と地方の關係より生じたる社會現象である、其永久的普遍的に繼承保存すべきは教派其者の中に包藏せらるゝ基督教其れ自身である。

多年の歴史を有する外國に在りては是等のもの尙ほ存在の意義を有すべき關係を持続することが必要であらうが、東西事情を異にする我國に於ては是等の一時的又地方的分子を基督教と共に繼承せざるべからざる理由あるを見出すことが出来ぬ。

又我國の信徒は各派の信仰箇條及び教會政治を比較對究し、其處に自己の信念もしくは意見の一致を見出して然る後に教會に屬したるもの甚だ稀にして、多數者は大抵家族、親戚及び友人關係か又は偶然の機會より知り合ひたる牧師との關係か、

その他の關係より所屬教派を定めたものである。然らば教派は少くとも我日本人には全く無意義なるものである。教會そのものの本質は「主一、信仰一、靈一」である。神の國は神を信ずるもの、品性人格の上に打ち建てられたる王國である。言語にあらざりて實行、信條にあらざりて品行、それこそ天國に入る條件である。然るに今日の教派の異同は多くは教會政治の異同による。是れ教派を以て枝葉の問題とし、毫も其必要と眞理とを認め得ざるものである。(第三章教會今日の必要並に眞理)

『信仰箇條を次の五ヶ條より成るものとしやう。

- 一、我等は天の父なる神を信ず。
- 一、我等は神の子なる救主耶穌基督を信ず。
- 一、我等は聖靈の啓導と恩寵とを實驗す。
- 一、我等は聖書を以て我等の信仰と實行との天則となす。

一、我等は基督の生と死と復活とによりて人生の眞意義を大悟し、其犠牲の救に浴し、信仰と愛と希望との生活を全ふし、永生に入るを

教の若々しい教なることを説かれたものである。

しかし佛教では涅槃會は二月十五日灌佛は四月八日、それに春の彼岸を加ふれば青春の宗教といへるかも知れない。但し基督教が永生を與ふる宗教であるといふことには誰が異議あらう。石坂龜治氏の「思想上の國產獎勵」は神道に於ける宗教進化のことに言及したもので、比較宗教と多少の關係をつけてある。小崎弘道氏の「政治と宗教」は概論にして國家の發達には政治と宗教は最も緊要なる要素であることを述べられてゐる。三井芳太郎氏の「人類に對する神の要求」は神を以て心靈の父、眞善美の神であるとし、人類の前に完全の理想が提出せられたことを説いてある。綱島佳吉氏は「煩悶者は來れ」と御得意の實際的訓話である。植村氏のより「深い生命」は易の辭まで引用されて基督教と古代支那思想との間に共通の點あるをほのめかしてある。小崎、植村兩氏の手になれる基督教綱領も比較的に公平寛大なる精神を示してある。江原素六氏の「基督教の力」は實驗談で興味がある。平岩愼保氏の「忠孝新論」は忠孝

を天の父まで導いたのである。井深梶之助氏の「教育と宗教」は偉大なる人格に基ける教育を推奨してゐる。

讀者諸君はこれによりて基督教會の空氣の一變しつゝあることを理解せられるであらう。何處にカルヴァイニズムがあるか。何處に排他的福音主義があるか。日本の基督教界の思想家は相率ゐて、自由主義に赴きつゝあることを認められるであらふ。而してやれ教會同盟だ、青年會同盟だといふ時のみ、この自由主義を引つこめるは如何なるわけであらうか。

今や自由主義基督教の主張は日本の基督教會の本流たらんとしてゐる。六合雜誌數十年の努力の空しからざることを感謝す。しからば福音主義と自由主義とが提携して日本教化の重任を負ふ時は迫りつゝあるではないか。

若し新聞傳道に對する注文をいはい、植村正久氏の「日本に於ける基督教」に排他宗教的文辭の存することである。日本基督教界の重鎮はもう少しく自重されて可なりである。もう一つの注文は

れは誠に時宜を得たる計畫であつた。惜むらくは諸家の説餘りに斷定的であつたことである。しかしこれも廣告料の關係ありて已むを得なかつたことと信ずる。而して吾人の更に満足することは諸家の意見は神學說に拘泥せず、大體論をなしたことである。此度の新聞傳道には二十一種の小論文が發表せられたが、いづれも基督教の共通點を力説して宗派的意見の殆んど皆無なりしは吾人の更に満足する所である。植村正久氏の「日本に於ける基督教」も「より深き生命」も「基督教綱要」もカルヴァイニズムの面影を止めてゐない、三位一體説さへも匂はしてない。柏井園氏は「基督教宣傳の意義」を述べたに過ぎない。何人か異論あらうぞ。別所梅之助氏の「櫻咲く頃」は和文化したる教談にして奥床しい書き振りを、少しもいや味がなない。星野光多氏の「基督教の主張」はどうも若い人々とは共鳴しにくい書方である。同氏が「神の啓示の終局として耶蘇基督を確信し云々」といふ點は大に説明を要する所であると思ふ。終局の啓示とは餘りに神の活動を安價に見たものではある

まいか。尤も説明が詳細に互ればこの説を徹底せしむることも出来るであらう。吾人が多少異説を出したいと思ふは同氏の意見に對してのみである。山室軍平氏の「基督教の勧め」は通俗的好文辭である。山田寅之助氏の「理想的人格としての基督」にも誰も反對はあるまい。白井胤祿氏の「基督教とは何であるか」と題して敬人愛人の二大訓を述べてゐる。これは自由基督教が百年も唱導して來た事である。自由基督教の主張が同氏によつて高調せられたことは意を強うする。山本邦之助氏の「信仰の告白」は基督教によりて赦罪の經驗をえられたことを記したものである。路可傳十五章の精神及進歩的基督教のそれである。森村市左衛門氏の「余が基督教徒となりし理由」は實際的方面よりの説にして神學說には觸れてゐない。この老翁が道のために努力せらるることは感謝せねばならぬ。小松武治氏の「基督教の眞髓」は餘りに簡單に失したやうである。もうすこし詳細に亘りて述べられ得しことと思ふ。海老名彈正氏の「青春の宗教」の生は青の誤植ではなからうか。基督

古い權謀術數的外交時代のとである。出来るなら外交家の手を煩すやうな面倒な關係に立到る以前に、宗教家の手で國際間の紛紜や惡感情は小さい中に妨止したいものである。現代に於ては宗教の勢力は到底未だ其處まで達して居ないが、さりとて袖手傍觀するのは自らの天職を辱しめるものであるまいか。此故に吾人は綱島氏やギリック氏の勞を多として感謝するに吝ならぬ。

然ば我鈴木兄の使命は如何。加州問題解決の鎖鑰は加州に於ける日米勞働者關係の親和改善にあるといふのは、此問題を特に攻究したギユリック氏などの意見である。そして近く加州には勞働組合の大會が開かれ、其會長は直接日本勞働者の代表者に會談したいといふ希望を洩らしたといふのである。然るに鈴木兄は曩に勞働者教化の團體として友愛會を組織し自ら其會長となり、其會員は最早一萬に達せんとして居る。我國には未だ眞實聯絡統一ある勞働組合など名くべきものはないから、何といつても日本の勞働者を代表するとなれば、友愛會の會長に來るより外はない。是れ鈴木

兄が今度有志の推薦により此大任ある途上に上るととなつた理由である然も兄は吾人の同志である兄に依て此國際問題に吾人の意を實現するといふとは、獨り兄一人のみならず吾人の大なる喜悅とする所である。若し夫れ兄に依て此困難な問題に一道の活路を開き日米親善の前途に光明を投ずるを得ば、是れ又吾人の欣喜満足する所のみならず、實に我國民の大なる喜びである。吾人は是故に兄の行を壯とし自重自愛して此使命に當られんことを望むや切なるものがある。

兄の此行は兄一個の上からいつても大に祝すべきものがある。兄年齒正に而立而して無妻獨身にして内顧の憂がない。法科大學出身者といへば官吏になるか實業界に入るか、近來は操瓢者となるものが多い。然るに兄は彼等と異り夙に我國將來の社會問題の惹起を未然に解決し、且又憐むべき無自覺無教養の狀態にある勞働者の友たらんと決心し友愛會を組織した。今や一轉此事業を背景として日本國民の運命の爲に此行あり。吾人は此行を祝し、兄の自愛自重を祈る。

(相原生)

斷片的の文字にして洗練が足らぬやうな文章も少くないことである。これは行數の關係もあらふがもう少し深い所を見せて貰ひたいものである。又神道佛教、儒教や科學や文藝等を綜合統一したる基督教の立場を示す人のなかつたことは大なる遺憾である。文章としても、基督教綱要に於ける植村氏が一番よく出来てゐた。(XYZ)

鈴木文治兄の渡米を送る

同人の一人として屢々我國の社會問題労働問題を本誌上に論じた鈴木兄は、今度重大な任務を帯びて月の中頃米國に向け出發さるゝことになつた。重大な任務とは言ふまでもなく、多年日米間の懸案として兎もすれば暗雲を引起し勝な加州問題に對する一面の解決法である。此忌むべき問題は元來労働者の關係から惹起して、其後人種の差違や感情の衝突といふ様なものが追々加へられたといふことは明白な事實である。日米兩國は從來頗る親善な關係のあつたのであるが、此行違が生じてから兎角面白くなつた。且米國は聯邦制

度といふ點からして邊陲の事件が容易に片付かないと他州人が迷惑に感じるし。我國は又た此の問題の長引くことによつて同胞の發展上又國家の體面上少からぬ苦痛を感じて居る。然も外務省は先年日米問題の行詰りを宣言した。其處で問題は何うしても國民中の識者が外交家にのみ此問題の折衝をまかせないで進んで兩國の和親を計らねばならぬといふことになる。我鈴木兄の任は實に此點にあるのだ。

曩に牧師綱島佳吉氏は夙に此問題は日米親善の鎖鑰なる基督教徒が御互の良心に訴へて解決すべきであると叫んで、自ら渡米して先方の宗教家や一般信徒に訴ふる所があつた。其結果は彼地宗教家の大なる注意を喚起し、同氏の精神は先方に徹底した觀があつた。然も之は其端緒に過ぎない。其後我國に長く同志社教授として滞在されたことのあるギョリック氏も、此問題を研究し本國において東西に運動されてゐるのみならず、先般我國にも來られたことは吾人の記憶に尙新しい處である。

一體外交の事は外交家に委すべしといふのは、

外部生活に少しの交渉をも見出し得なかつた。彼の内部生命の有らゆる主題は皆耳といふ關門を通つて入りもし、現はれもしたことは言ふ迄もないことであるが、私達には眼とも云ふ可きその關門が、後には彼の力で開くことの能きなり門で永久に閉ざれてしまつたではないか彼は總ての悲哀を通じて、總ての悲哀を通して歩みを續けた。彼は斯くして『自然の有らゆる阻碍を忍び、價值ある藝術家の階級に入らんとして、力の及ぶ限りを盡した』のである。

私達は力弱い者である。力弱い者である丈に、私達はベートフエンの生活に異常なる慰藉と尊敬とを感じる。そしてロマンローランがその美しい筆を驅使して、彼の傳記を著したのも、全く『ただ哀れなる不幸なる者にのみ献ぐる』爲であつたのである。

彼は早く我國に知己を見出す可き人であつた。唯未だに我國一般の人々には親しみの少ない西洋音楽界の偉人であつた爲に、我國音楽藝術家の怠惰の爲に其の運びに至らなかつたのである。吾人は輕薄にして皮相な我國音楽教師を見て、音楽と音楽者との眞價に疑を有せらるゝ世の教育者に此の書を推薦する。

後半のミレエ傳またこれと同じ心で讀む可きものである。

唯吾人の遺憾に思ふのは、恰も音楽者であるロマンローランがその尊敬する、樂聖を傳へたと同じ心で、此の譯者が我國音楽者の手に成らなかつたことである。(價一、〇〇)

●自我の研究

野村 限 昨著
警 醒 社 出版

自我の研究に關しては、我が國でも、哲學者倫理學者心理學者等に依つて發表された論文は随分多數に上るやうであるが、本書は就中篤學なる野村限昨氏が最新の研鑽を携げ來たもので吾人の多謝する所である。先づ前段では自我の基礎的研究を以つて第一部門と爲し、先づ研究の出發點に關し哲學的研究であると斷り、進んで純粹經驗と自我との關係を究め、更に進んで意識の變化を究退した。後段に於ては自我の建設的研究を以つて第二部門と爲し、眞自我の要求を論じ、進んで眞自我の表現を究め、更に進んで道德宗教藝術の關係的研究となり、結論を以つて終了してゐる。爾來自我の研究に關しては其の範圍の廣大なる爲め、且つ漠然たる爲め、容易に捕捉

し難いのが常である。隨つて立論の各所に於て勢ひ缺點を生じ遺漏に陷るは誰人も免れない次第である。本書も亦た其の責を負はねばならぬ。先づ本書の劈頭の不用心は、自我に關する史的研究殊に我が國に於ける明治大正年間に發表されてゐる諸論文の批評的研究に出發しないことであつた。學界に提示する總ての學術的研究に於ては、必ず先人を繼承して蹶起するが學者の規約と信ずる。ベルグソンもオイケンも皆然りと信ずる。本書は不幸にして此の満足吾人に與へ兼ねたことを遺憾とする。次に自我の研究を著者は哲學の範圍に止め『倫理學は吾々の「眞自我」とは、直接の關係ないものである』と論じたのは是れ閉戸先生の學風であると謂はねばならぬ。哲學が倫理學の必要と存在とを肯定する以上は—倫理學が哲學の基礎に立脚する以上—倫理學に於て自我の研究を試みた史的事實(例へばグリーンンの自我論)又は其の繼承的事實が現存する以上は、自我の研究は獨り哲學にのみ引張り込み、之れに眞自我の銘を打ち、倫理學にて取扱ふ自我を僞自我然ららしむることは、我田引水と云ふものでなからうか。此の點は著者の再考を促がしたい。次

新刊批評

■タゴールの哲學と文藝

吉田絃二郎著
大同館發行

る。本書出版以來既に三版に達した。吉田君は豫備陸軍砲兵少尉として長崎に召集せられてゐる。七月號には同君の美くしい文學が現はれるであらふ。(價一・二八)

■タゴ聖者の生活

吉田絃二郎氏著
天張堂發行

■ベートフエンとミレエ

加藤一夫氏譯
洛陽堂發行

單に藝術といふ方面からのみ觀ても、その

タゴール來るとの報道が一度新聞に發表せらるゝやタゴール熱が文壇を襲うた。批評やら翻譯やらが幾つもあらはれた。そのうち白眉なるは本誌記者吉田君のそれであらふ。本書は前篇「哲學」に於てタゴールの生涯と思想を二十二章に詳述し、中篇「詩」に於てはローマンチックな「園丁」と宗教的の「新月」とを譯出し、後篇「戯曲」にては「暗室の王」「郵便局」と「チトラ」との梗概が述べてある。タゴール小傳も附してある。

本書は健筆なる吉田君の處女作である。吉田君の思想と感情と詞藻に對しては讀者諸君及び世間の定評がある。吉田君は新進作家中の有望なる一人者である。同氏がこの好著を以て文壇に實力を問ひたるは快心のことである。著者の情調はタゴールを紹介するに詭向である。タゴールの神秘的な思想の中に吾等は知らず／＼釣り込まれる感があるのであ

る。本書出版以來既に三版に達した。吉田君は豫備陸軍砲兵少尉として長崎に召集せられてゐる。七月號には同君の美くしい文學が現はれるであらふ。(價一・二八)

曩に「タゴールの哲學と文藝」を著しタゴール紹介の最優なるものとして文名を贏ち得た著書か又彼の生活を基礎として其説明を試みたもの。初め四つの論文で主として彼の哲學の一般概念と傾向とを叙すると共に、近代思想殊にイブセンやトルストイの反抗的な傾向と彼の聖者的な敬虔な生活思想を對照批評して居る、次に「聖者生活の斷片」は著者が彼の思想に觸れた刹那々々に與へられた感想を「散文詩にでも書く様な」心持で書いたもの、大絃につれて共鳴する小絃のやうに、又「親鳥の唄につれてうたふ雛鳥のやうに」これは極めて讀んで氣持のよいものである。最後に彼のギタンジャリの數片と彼の小傳を附け加へてある。小冊子ではあるがタゴールを理解するには手頃な著述で愉快に讀まされる。(價〇・五〇)

力と經驗とが一の完全なる音樂的形象となつて現はれて居る點に於て、その表現の區域に、力に、熱情と情操との有らゆる形象に順應せる形式に於て、樂曲を作者自身の内生活の「幽玄なる長嘆」たらしめた靈的情熱的詩味と、その渴仰と憧憬とに於て、その藝術的良心の峻嚴なる點に於て、ベートフエンは音樂者中稀に見る偉人である。音樂そのものから見るときは、音樂は實にベートフエンに於てその藝術的表現の極致に到達したのである。

『あゝ闇、闇。日の光射のたゞ中にゐて、私は唯暗黒のみをみる。白日を見るの望は全く斷たれてしまつた。あゝ初めて創られたる光射よ、爾大なる世界よ、光あれとのみ言葉に物みなを輝かしたその光よ。私はその恵みに浴することができない。太陽すら私には暗黒である』詩望ミルトンは叫んで居る。そしてミルトンの此の心は、さながらに又ベートフエンの心ではあるまいか。生活を瀧し、生活を和かにする世の常の快樂は、此の樂聖の

得ない事情がある。此の頑迷なる鐵條綱の中に蠢動してゐる現今の教育家が何うして自己を知り得るか。教育界の根本的革新は稻毛氏に依れば、議會又は立法の改正ではなく、一に教育家の自覺と人格の創建であると云ふが、其れは大なる誤解である。眞理の半面を瞥見したに過ぎない。國家一切の發展向上の企圖は議會を中心として努力しなければ法治國民ではない、稻毛氏の如き教育家に於てすら尙ほ、政治法律に冷淡であり参政權を利用するを欲しないのであるから、一般教育家が自己を知り得ないのは當然の歸路ではあるまいか。(價、〇四〇)

■宗教心理學

小倉 清三 郎著
警 醒 社 書 店

宗教心理に關する著書は頗る多いが、スターバック氏の The psychology of Religion は最も名著である。本書は其の譯本であるが、譯者任意に省略縮少してゐる。宗教心理の發達に關する實驗的研究であつて、スターバック氏が米國に於て、若干の人士に向つて發した十一箇條の質問に對して、應答した百九十二通の書簡に基いて歸納的研究を試みたのである。第一編では回心の現象に就いて十

二章に亘つて論究し、第二編では回心に本づかざる宗教的成長に就いて二十六章に亘つて論究してゐる。就中、少年期青年期の宗教的意識を知るには最も好都合であつて、世の宗教家教育家父兄の一讀を煩はしたい。終りに譯者に一言したいが、本書はスターバック著宗教心理學の譯本でありながら、特に「著」と稱したるは學者の不謹慎たるのみならず、原著者に對する禮でないと思ふ。(價〇、七〇)

■世界の宗教

大日本文明協會
文明書院發行

本書は世界に於ける古今東西の諸宗教に就き、その起源、發達、並に特質を記述せんと企て、宗教の起原及び本質より説き、宗教の原始及び其發達に及ぼし、バビロニア及びアツシリアの宗教、エズプトの宗教、ギリシャの宗教、ローマの宗教、ユデヤの宗教、キリスト教、マホメット教、ベルシヤの宗教、波羅門教及び印度教、佛教、儒教、道教、支那の佛教、喇嘛教、朝鮮の宗教、日本の宗教等十數段に亘つて發生史的研究を試み、宗教の比較研究により雜多中の同一性を窺はんと企圖したのである。此れを宗教學上より見る時は其の統一的説明に於て頗る遺憾に富むもの

であるが、現在世界の歴史的宗教を一瞥する上には最も便利な本である。蓋し地球上の生靈は相連關せる有機體であつて博愛救世を以て相共鳴すべき者であるから、宗教家たる者は一宗の教義に立脚すると共に他宗の教義をも能く理解し、他を知り己を知り、異端邪說呼はりの變習を脱し、互に相接觸するを以つて宗教家の本務としなければならない。記者は此の意義に於て本書の價値を認め、世人に一讀を薦めたいのである。(價二、〇〇)

■禪の骨髓

秋 野 孝 道著
丙 午 出 版 社

本書は丙午出版社の禪學文庫第八篇として出て、曹洞宗大學長秋野孝道老師の著である。三篇に分れ、前篇は「枯木龍吟」と題し、禪學の用心、參禪の覺悟、曹洞宗の安心、禪の修養、修養の心得、禪の功用、何をか生死と云ふ安心の根源、品性の修養、洞門の禪戒等の諸項に就いて述べ、中篇は「體露金風」と題し、慕直に努力せよ、動靜一如の禪、釋尊正傳の禪、正傳の禪と神通、佛誕生に就て、修養實驗談、西有禪師の德化、脚跟下冷風生ず、佛教の根本義、萬法禪に歸す等の諸項に就いて述べ、後篇は「全提不起」と題し、

に著者の道德と宗教との關係論を見るに、其れは態度の差違（自我の生活態度）であると云ひ「絕對價值」及び「最高要求」の二文字の複雑なる關係によつて説かれてゐるが、畢竟するに宗教道德の對立論であつて依然として過去人の舊套内で論じた傾が無からうか。

宗教と道德に對して差違の肯定を附することは二者を俱に墮落させる結果に終るまいか。

二者の相違は主として歴史的宗教又は道德（傳習的宗教又は規範）の觀念に胚胎するので純粹批判上に於ては同一無二ではあるまいか。自我の最高要求（自我の理想的人格）に於て宇宙的生命を認め、謂ゆる氏の「純粹自己意慾」の統御に於て絕對價値の實現を期することが宗教でもあり同時に道德でもあるまいか。二者に殊更なる哲學的分解を施すは反つて人靈に煩瑣を與へ、行爲に於ても救済に於ても實踐上不都合を生ずる事がなからうか。此の點に關しては、孔子、朱子學派、陽明學派、又はラットなどの意見を參考する必要がなからうか。道德の中に宗教を包含し、倫理學の中に宗教學を包藏して、始めて真相を得るものと解釋しなければ、道德は骨抜となり宗教は迷信となる運命を避け得ないと思ふ。

兎に角、本書は幾多の問題を有して居るを以つて讀者に一讀を煩はしたい。（價、〇、七〇）

●春秋の哲人

野村 櫻 昨著
六合雜誌社發行

本書は本社六合叢書第四編で、野村櫻昨君の筆に綴られ東洋の大哲人孔子の人格と思想とを眞實に理解せんことを鴻圖したのである。第一章序論に於ては世界の精神的文明に關し、泰西の古代より説き、印度を究め、支那に及ぼし、堯舜三代の盛德を明にし、第三章に移りて孔子の事蹟を掲げ、進んで其の人格を考查し、湯仰の筆を走らして顔回の意識に達し、孔子の人格と鳴合せずんば止まない慨がある。第三章に至りては、孔子の根本理想を追尋し其の事業を繰返し、孔子の思想を遺憾なく執へてゐる。第四章に進んで、孔子の倫理思想に達し、爾來和漢の儒者又は東洋專攻者の舊套の研究に嫌らず、その解釋に於て一新機軸を見出さんと努めてゐる。全篇を通じて一々原本引用の箇所を指南して學者周到の責を明にし、諸所に於て基督の人格教訓に對比して聖人の共通性を指南してゐる。本書は何分一小冊子に過ぎないので、其の批

評的研究をも併せ得なかつたのを片手落に感ずるが、僅少の紙數を通じて孔子の思想人格を充分に紹介し得たことを、著者に感謝すると共に、大方諸君の愛讀を乞はんとするのである。（價、〇、一〇〇）

●教育の悲劇

稻 毛 詠 風著
内外教育評論社

本書はエドモンド・ホームズ氏の Tragedy of Education を骨子として述べた稻毛氏の教育論である。教師が自己を知らぬことが遂に他を知らぬことになり、他を知らぬことが遂に兒童を愛し得ぬことになり、兒童を愛し得ぬことは遂に教育の悲劇を演ずる次第を説き、教師本位主義、獨特主義、外界主義、形式主義の教育觀を以つて教育悲劇の主因と目し、人格尊重、個性尊重、自由主義、創造主義の教育觀を以て革新の根本的救済策と爲すのである。一應最もたるを失はないが、記者の所見に依れば、教育の悲劇は教師の自己を知らぬことが原因でもなく又獨斷主義が主因でもなく、其の原因は官僚政治、貴族資本家本位の政治、家庭主義の道德等に胚胎してゐる。悲立憲的教育行政又は親權濫用の家族制度の下には、決して自覺的教育家が發生し

彌陀經に現はれたる十六羅漢の傳記を載せ、

後編は法住記に現はれた十六羅漢を一枚の表中に列擧してある。本書の特長は、十六羅漢が嘗て人格の最高精神を獲得したる一代の先覺者であつた事を明かにし、骨董視されたる羅漢に生氣を入れたる點にある。比丘尼中神通第一の稱ある蓮華色比丘尼の如きは薄命の女子でカチューシャ以上に悲惨な境遇に陥つたが發心の結果遂に十六羅漢の一人に入るの光榮を得た。本書は頗る興味を有してゐるを以つて之れを讀者に紹介する。(價〇、一〇)

近代思想と宗教

柏原祐義著
日月社發行

日月社の宗教叢書第十八編(價〇、一〇)

金光教觀

和泉乙三著
日月社發行

日月社の宗教叢書第二十一編(價〇、一〇)

哲學概論

桑木 嚴翼著
早稻田大學出版部發行

本書は三十二年度に於ける早稻田の講義録であつたのを其の後單行本として世に行はれ、既に學界の定評を得て居る。今回それを縮刷して一小美本と爲した。(價、一、〇〇)

日米問題

ギューリック博士著
栗原基 譯
警醒社書店發行

本書は長く同志社に教授として教界に貢獻し、今は米國に在りて日米問題のために盡力し居らるゝギューリック博士の著はす所にして、日米間に於ける諸種の問題に就き、約十九章に亘つて論究してゐる。寫眞數葉を挿入して甚だ興味に富んだ本である。國交の親善は何人も之れを考慮すべき義務がある。ギューリック博士が此春マツシユウス博士と共に渡來せられて多大なる印象を識者階級に遺したるは讀者の記憶する所であらふ。本誌四月號を日米問題に捧げたるは兩博士の好意に酬ゆるためである。吾人は本書の如き適當なる本を撰んで兩國の事情に通ずる人の一人も多からんことを希望する。吾人は亦流暢に本書を譯したる誌友栗原基氏の勞力に感謝せざるをえない。(價〇、七〇)

最新實際新聞學

小野瀨不二人著
植竹書院

本書は米國の新聞編輯法を最も親切に説明したウキンスコンシン大學新聞學教授ドレヤー氏の近著「ニュースペーパーライティング、エディティング」の翻譯を基礎として日

本の事情を説明し比較した本である。主として新聞經營に對する編輯に關する研究であるにもよるが、記者の人格及び修養或は其の採用に關しては何等云つてゐないので、單に營業上の文字に過ぎない。新聞は元より營業であるから、營業上の研究は新聞學の眼目であるが、營業は人即ち記者に由つて其の効を奏するものである。若し記者の人格が劣等であり、修養を怠り、採用其の宜しきを得ないならば、何うして社會の木鐸たり得る新聞の經營を完成し得るか。新聞學には必ず記者の人格に關する一項を加へなければ、以つて新聞學と稱するに足らないと信ずる。本書は遺憾ながら、此の點に關して哀しむべき消息を報じてゐる。(價、一一〇)

黨人と官僚

吉野鐵拳 譯
大日本雄辯會發行

本書は著者の人物月旦として嘗て中央公論新公論又は二十世紀のために執筆したのを蒐集したもので、其の評論中に於て黨人と官僚との交錯した現今政界の事情を報告してゐる。既に過去の事て少し古臭ひ感じがするが、故を温めて新しきを知る一助として讀者に薦める。(價〇、九〇)

一字不説の端的、臺山婆子の一著、趙州大死底の消息、正法眼藏涅槃妙心、禪と國民道德、其他の諸項に就いて述べたものである。飽く迄も子弟後學を教導するに努め、禪を以つて品性の修養を爲し「何れの宗教に致した所で其の目的は皆一つである。」と云ひ、國家に淨土を實現するを以つて禪の本懷とせるは、吾人の以心傳心、賛成するを惜まぬ次第である。(價、一〇〇)

■禪の捷徑

原僧運著
丙午出版社發行

著者は相州常福寺の老師であつて、臨濟宗の碩學である。七十八歳の高齡で能く述作に力め、濟家禪門の導師と仰がれ、詩文に堪能なるは白隱禪師に髣髴してゐる。本書は五篇より成り、各篇何れも十數節に亘つてゐる。第一篇は主として、眞理の常觀、迷の本源、心性、生死等に就いて論じ、第二篇は禪學の要旨、眞禪の修養法、長壽法を説き後學を導いて倦まない懺がある。第三篇は禪と念佛の關係を説き、己の心を以て彌陀佛と爲し極樂と爲し、錫を振つて淨土門を一撃してゐるが爾來禪門の所論を踏襲したに過ぎないので、自力他力を總合する迄に達してゐないのは遺憾である。第四篇は老師が半生の物語で、難行苦行は凡情を脱してゐるが、初戀の昔物語では五十四年日の邂逅を説き、瀧口入道の昔を偲び、落花枝に還らず、光陰百代の過客たる所以を悟してゐる。第五篇は精神の修養及び活禪を説き、臨濟の一喝では皇國の神道に縁を結び、廣長舌の一節では大隈伯と老を争つてゐる。曰く「四十五は鼻たれ小僧、人の盛は八九十など云ふは、正に之れ大隈老伯などのこととや。時に衲が大隈伯に寄せて年たけて松のみどりも雪霜をいととはて國にくす大隈。」と。(價一、〇〇)

■耶蘇基督

前島潔著
日月社發行

日月社の宗教叢書第七編。第一章で耶蘇の時代を述べ、第二章で耶蘇の生涯を述べ、第三章で耶蘇の自覺及び所教を説いてゐる。(價、〇、一〇)

■聖書文

東京基督教青年會
啓醒社書店

本書は植村正久氏の講演中にあつた意見に原いて、聖書を學ぶ者の先づ讀むべき文章を拔萃したもので、眞の神、耶蘇と求道者、耶蘇に従ひし事跡、信仰と救ひ、基督教生活の

順序に羅列してゐる。傳道用としては好個の本であるが、誤植最も多く、正誤表に因つて見れば、五十七頁の小冊中に七十二箇所の誤植がある。編輯者粗陋の責を免れない。(價〇、一〇)

■親鸞と法然

村上專精著
日月社發行

日月社の宗教叢書第四編として出て、二編より成り、第一編では親鸞上人に對する著者の觀察を述べ、時代、歴史、性行、信仰、撰述の五方面から最も要領を得た説述を爲してゐる。第二編では法然上人と親鸞上人との關係を説き、時勢、出家の動機、修養、信仰、性行、流罪、著述、感想等の比較を試みてゐる。爾來親鸞法然に關する著者は少なくないが、何れも佛門の學者又は一部の信者に提供したもので、一般人士に眞宗の趣旨を傳へるには基だ不都合を感じて居たが、本書は其の缺陷を裨補するに近きことを信ずる。(價〇、一〇)

■十六羅漢

山邊習學著
日月社發行

宗教叢書第二十二編として、出て前後二篇を成してゐる。前編は本書の大部分を占め、阿

詩果樹園

柳澤 儂 著
東雲堂書店

(價〇、三五)

是等の書籍次號に於て更に批評紹介することあるべし。

唯一館だより

■靜かな雨が、頼もなく訪れて来る。これが春の初であつたなら、秋であつたなら、深い冥想の時を與へるであらうに、夏は飽まで活動的である。殊に初夏の若葉の香りには、云ひしれぬ力の發現があるやうに思はれる。

■例によつて主なる説教と講演とを左に掲ぐ。

■五月二日、(日曜)「生活の最高標準」内ヶ崎氏「イエツの音樂的情調」松尾氏「經濟生活と宗教生活」鈴木氏、尙午後一時から、市内北部に一獨立教會を新設する件に就て臨時總會を開いた。

■五月七日、(金曜)春季特別傳道説教が今日から始まる。「健康と宗教」岸本氏「理性を重ずる宗教」安部氏「心靈神秘」内ヶ崎氏

■五月八日、(土曜)「基督教に就いて」武田氏「基督傳の感興」小山氏「心靈の指導者」内ヶ

崎氏

■五月九日、(日曜)朝「母の崇拜」内ヶ崎氏、今日午後二時から婦人講演會を催す、西川文子氏の「結婚と職業」、松村介石氏の「日本婦人の自覺を求む」の二講演があつた。全日夜、

「異性の愛と基督の愛」小山氏「刻下の重大問題」吉野氏「心靈の共鳴」内ヶ崎氏、以上三日間を通じて、求道申込者が三十二名あつた。

■五月十一日、市政問題政談演説會が開かれ、武田氏、鈴木氏、稻村氏、高木氏、安部氏の講演があつた。來會者滿員の盡況であつた。

■五月十六日、(日曜)此の日新入會員の入會式を行ふ。男子十五名、女子三名也。「情の人基督」内ヶ崎氏、「教會生活の意義」、太田氏、

「學生生活と宗教」嶺岸氏、尙同日午後一時より入會者歡迎會、近々渡米さるゝ鈴木氏、吉松氏の送別會、學校卒業者の祝賀會、北部新教會員との懇親會を開く。

■五月廿三日、(日曜)新教會は愈々此日其發會式を開く、場所は神田錦町三丁目の女子音樂學校である。吾人は心から其の健全な生長を希望する。

■學生諸君の中には試験にお忙がしい方々が多い。願くば佳い成績が其の結果であること

を。

編輯だより

■前月のタゴール號は讀書界の注意を惹いたと見え非常な歡迎で發行數日にして本部には一部も無いといふ景況であつた。久しく問題號も續いたから今月は同人思々のとを書くことにした。

■内藤氏が久振りに玉稿を寄せられた。同氏は近々天鼓堂の思潮叢書中にロマンローランを出されるそうだ。本號の論文は其片鱗を示されたもの。

■本號に「權威の座位」を寄せられた白石氏はメソヂスト教會の錚々たる思想家である。

氏の牧する甲府教會は一昨年來非常の進展を示して居るといふ邊に氏の健闘を祈る。

■小山東助氏は臨時議會が始まつたので日夜政務に多忙を極められて居る。

■鈴木文治氏は加州勞働大會に出席し日米勞働者の關係を圓滿なからしめるため友愛會を代表して六月中旬渡米される筈。

■岡田氏の「我が斷片」は小冊子だが内容の質において我思想界の大なる注意を喚起した。同氏は今後あゝしたものを引續いて本誌

■三太郎の日記第二

阿部次郎著
岩波書店

三太郎の日記、西川の日記、社會と思想、思想と文學、印象と批評、附録の諸篇を収めてゐる。是れは改めて批評する事あるべし。

(價、一、三〇)

■時勢と人物

吉野鐵拳禪著
大日本雄辯會發行

■大正雄辯集

大日本雄辯會發行

前者は當代人物の評論を試み、後者は「明治雄辯集」の續篇として出版され、政治文藝宗教教育等に亘つて、明治年間に於ける故人の雄辯、及び大正當代の雄辯を蒐集したものである。蓋し學生諸君には好個の讀物である。

(價、一、二〇)

■噫々我が母

故須藤安吉著
三協印刷株式會社

故須藤安吉氏は永らく仙臺又は秋田地方にクリスチャン教會の傳道に従事せられ、近頃永逝されたのである。「噫々我が母」は同氏の遺著にして、東北大學教授會根武氏の好意によりて出版されたものである。本書は須藤氏が母堂の紀念にとてかゝる題を付せられたのであるが實に一篇の自叙傳である、懺悔録で

ある。小説の如く面白く、同時に教訓と刺戟とを與ふことの多い有益なる著述である。

著者は酒癖の悪い騎兵軍曹として上長官と争ひ、十二年の刑に處せられた。入獄時代の記事最も讀むべく、社會問題の研究者必讀の文字である。五年の後特免にあひ、獄中よりの信仰によりて基督教徒となり、終に神學生となり、傳道者となりたる波瀾多き一生は巧みなる文字を以て叙せられてある。天真流露の好著である。吾人は本誌七、八兩號に亘りて本書の一部を抄録したいと思ふ。定價金參拾錢有志者は仙臺市外記町壹番地故著者の遺愛なる須藤襄君に申し込まるべし。

■硝子戸の中

夏目漱石氏著
岩波書店發行

漱石氏が先に朝日新聞紙上に連載した趣味々たる小品文を集めたもの。氏の籠居する室の硝子戸の内外に起る様々の事件や感想やらを一流の瀟灑とした筆端で描いて居るが、又氏自身の人格と趣味と哲學が硝子戸を通して物を見る様に窺はれる。表装も同氏の意になつたもので一寸盡い。(價〇、六〇)

■舞

姫

長田幹彦著
植竹書院發行

著者の佳作を集めて縮刷したもので、先年京都邊を放浪した節の土産噺であるが、決して立派なものと思ふべき理由はないやうである。(價、〇、九〇)

■復活

相馬御風相馬泰三共譯
植竹書院發行

本書はトルストイの復活全譯を縮少せる一卷に纏めたもので、讀者に取つては多大の便宜を得たと云はねばならない。(價、一、八〇)

■ウイルヘルム・テル

船木葉之助譯
植竹書院發行

(價、〇、五〇)

■デュー・マ作椿

福永挽歌譯
植竹書院發行

(價、〇、八〇)

■ドストイエフスキ

罪と罰

生田長江生田春月共譯
植竹書院發行

(價一、四〇)

■浮彫

竹友藻風著
山中崑松堂發行

(價〇、三五)

此廣告を見ても御申込の方は六合雑誌に依る旨書添ふ

宇治



品質優良
價格低廉

（荷造完全）
（發送敏速）

合本 特價發賣

■六合雜誌

大正三年度 全一冊

特價金壹圓五拾錢

送料十二錢

右御入用の御方は至急御申越あれ

大正四年六月

東京三田 六合雜誌社

電話芝五八五五番

轉居

東京市外高田村高田三四四

安部 磯雄

東京市外巢鴨町巢鴨一四七〇

相原 一郎介

聞け公平なる世評は自畫自賛に優る

販賣

はがきニテ御注文下サレバ代金引換小包ニテ發送シマス。
御送金ハ振替貯金ガ一番安全デ便宜デ徳用デス。
御注文書へ必ズ本誌ニ依ル旨明記アレ。

六合雜誌讀者ニ限リ正價一割引

規定

送費無料 一時ニ總代金一圓以上御注文下サレバ其小包料ハ全部無代罐入 一斤一圓五十錢以上ノ品ハ無代罐入トス以下ハ袋入り故罐入ノ時ハ實費申受ク

宇治と云へば茶。茶と云へばムラタ園とは世人の聲

茶	鶴ノ齡	八十錢	喜仙	六十錢
名	鶴ノ聲	一圓	正喜仙	七十錢
及	村田	一圓廿錢	橘	八十錢
一	老松	一圓五十錢	正太福	九十錢
斤	千代香	一圓七十錢	關折	物
正	皇月	二圓	池尾粉	三十錢
價	宇治魁	三圓	上青柳	四十錢
表	仙掌	五圓	折鷹	八十錢
國	華八	圓	薄茶	各種

宇治山田村 茶田 通國園 信國園 販田製 販邊茶 王霸の 場町茶

座口替振部賣販

（タラム） 略電 番五〇壹阪天
番二二八二城京 番七〇四一連大

上に發表される筈。本號のは其第一聲である。
 ■タゴール講演會は非常の盛會であつた。講演は何れも傾聴に價するものであつた。本號の三浦關造氏の論文は其筆記である。

■吉田氏は演習召集で歸省中の處先月末日にやけた顔をもつて無事上京された。

■三並氏は病氣中の處追々輕快の由。全快の早からんとを祈る。

■野村氏はまだ郷里に靜養中同氏の自我の研究は近々再版する。

■内ヶ崎氏は今度愈々神田方面に新獨立教會を起すといふので多忙。勿論統一教會の牧師たるとは従前の通り。

■相原氏は今度巢鴨内ヶ崎氏の裏隣の新宅に移られた。

■相原氏が今度から本誌の編輯全般のことを引受けられた。

■日本民族の信仰

川面凡夫著
 稜威會出版部

神道も進化の法則に従ひて進歩しつゝあるは川面氏のこの書によりて明か也。本書に従へば「神とは、人生、宇宙、人類萬有の根本なり。人類萬有は遂に卒に神を知らず、神を信ぜずして已むべき者なからず候神は常に人類、

萬有を發顯し、照鑑し、攝理し、統一し、之を救ひ、之を守りつゝあり、一人有と雖も、寸時なりとも、之を度外に放擲し給ふこと無之候。」而してこの神を信ずるは何故に難きや。

「善の貴ぶべきは人皆之を知る。而もその善を行ふ事は難し。神の尊ぶべきは人皆之を知る。而もその神を信ずるとは難し。善事の爲し能はざるが如く、神信心も容易にあらず。是れ世に善人少くして敬神家の多からざる所以に候。」救とは何ぞや。「來世に於て救はるゝばかりに非ず。現世に於て救はれつゝあるなり。過去世より救はれつゝあるのみならず。實、一念々、刻々救はれつゝこそ有之候へ。」
 「大神の大神慮は崇高矣、廣大矣、幽玄矣、汝等の哀、求哀願を待たざれば守らず、救はずと云ふがごとき不信切には無之候ぞ。」

しかし人類として之を知りつゝも哀求する情にあらずや。しかし川面氏の神觀は基督教殊に自由主義基督教の神觀を極めて接近しつゝあるを見るべし。吾人は他日川面氏の思想を研究し、評論しえん時を待つ。川面氏は學者にして他の宗教にも對して見識ある評論をせられ三位一體に對する批評は大に傾聴すべしで

ある。但し自由基督教徒は百年前よりかゝる說を發表したのである。基督教の狹隘と帝國といふは川面氏ともいふべき學者の研究としては餘りにあつけない。この點は氏の精論に接したに宛にかく日本神道の最新學說として本書を研究することは一般宗教家の努めねばならぬことである吾人は多忙にして本書を十分に批評すること能はざるを憾む。いづれ他日これを果たす機會あるべし。(價一、〇〇)

(ふ乞を添書御旨る依に「誌雜合六」は方の込申御て見を告廣此)

六 合 叢 書

(編 一 第)

第一

高等學校教授

三並良著

(定價十錢郵稅二錢)

(再版愈出來す)

眞人基督

本美入トツケツボ
像のヌエるセ化代現
頁 十 二 百

(編 四 第) 野

村 張 畔 著

(新刊發賣)

春秋の哲人

入トツケツボ
頁五十二 錢 價 定 郵
錢 十 二 稅

知識と道德と孰れが尊とき、道德の尊ときは言ふまでもない。理性と人格と孰れが重き、人格の重きは言ふまでもない。知識あつて道德なければ自我は餒え、理性のみあつて人格なければ自我はその生くる所以を知らない。人格は自我の形而上的な要求の力にして道德はこの要求のダイナミックな發露である。知識は益々枝葉に入りて道德はその根柢を失ひ、理性のみ徒らに發達して人格はその權威を得ざる現代は、決して健全な時代でないとは火を賭るよりも昭らかである。識者頃來「新道德論」を主張するありと雖も、要するにこれ何等の根柢なき皮相なる空論に過ぎない。『春秋の哲人』は眞摯なる著者がその狂熱的要求によつて東洋の大偉人孔子を拉し來り、その信念人格及び思想を忌憚なく解剖して、そこに深遠なる渾一的生命を把捉せるもの、蓋し時代の缺陷に對する一救済を以て任ずるものである。

此廣告を見申込の方は「六合雜誌」に依る旨書添へて

東亞之光

每一月一發一回 六月號 冊二廿四錢郵稅一錢五厘 冊二廿四錢郵稅一錢五厘

- ◎東亞の現勢と地理的個性……………伯爵林博太郎
- ◎タゴールの詩……………文學士松浦一
- ◎佛教の隠れたる原理……………文學士椎尾辨匡
- ◎象徵としての野山と叡山……………島地大等
- ◎死生一貫……………文學士三輪田元道

▽評論 ○余が戦争否定説(A, S) ○内面生活の獨立(A, S)

- ◎「徒然草」の思想を論ず……………文學士齋藤勇
- ◎文典術語根本的改譯の必要……………文學士岡崎鉦治
- ◎島津重豪公時代に於ける薩藩の學者……………文學士武藤長平
- ◎歴史主義對價值主義(モリス、ユーエン)……………文學士島本愛之助譯
- 其他漢詩、和歌、海外思潮、選歌、選句、學界彙報等滿載

發行所

東京市本郷區駒込
千駄木五番地

東亞協會

振替口座
東京七番

(此廣告を見を御申込の方は六合雑誌に依る旨書添を乞ふ)

週刊宗
教雜誌

基督教世界

毎週木曜發行
一部 金 五 錢
半ケ年 金一圓二十錢
一ケ年 金二圓三十錢
外國行一ケ年金三 圓

◎本誌の創刊は明治十六年にして既往三十餘年の歴史を有する本邦基督教界最古の週刊雜誌なり

◎本誌の特長は進歩的基督教の立場より時事問題を評論し且つ最新の智識に依り斯教永遠の眞理を闡明するにあり

◎本誌には毎號教界先輩の説教、内外名士の論説と新進思想家の研讃と、清新なる宗教文學及内外教勢を滿載す

◎本誌は信仰修養の糧として聖書研究の手引として、信徒家庭の讀物として好適なる雜誌なり

◎本誌の編輯は宮川經輝、原田助、小崎弘道、渡瀬常吉、牧野虎次の五氏協力之に當り、武本喜代藏、山口金作の兩氏毎號執筆し、在兩京の記者數名之を助く

本誌の見本は往復はがきにて御申越次第無代進呈すべし

發行所

基督教世界社

振替貯金大阪參壹七參

大阪市北區中之島二丁目四七

此廣告を見申込の方は「六合雜誌」に依る旨御書添ふ

神學之研究

定價 一冊 一郵 冊稅 廿四 錢錢 號 月 六 一金 年壹 前圓 金三 郵十 稅五 共錢

▲ジアンメル著「保羅神學に於ける贖罪觀」の解説

▲オイケンの新理想

▲神中心の神學

▲ハムムラビの法典

▲タゴアの根本思想

▲耶蘇に關する證言

▲トルストイの神學

▲現代宗教の神秘主義

▲ニーツチェの奉仕

▲舊約の靈魂不滅説

▲新著神學宗教哲學書類等二十種の批評紹介あり

記

者

シュエーダー

生

す、さ、

生

三浦關造

小崎弘道

清水安三

ジョーンス

ハルデーソン

須貝止

發賣所

警

東京橋區

醒

町張尾區

社

大賣店

東

神田區

京

町保神表區

堂

此廣告を見を御申方ハ「六合雜誌」に依る旨御書添を乞ふ

泰西文藝思潮の源流

近代思潮叢書

菊半截美本
貳百五十頁

定價各十五錢

郵送料六錢

第六編

タゴールの聖者の生活

吉田絃二郎著

初版再版
即日賣切
三版發賣

内容
生活は緑金爛蕩の薫りゆかしきベンガルの大詩人大思想家の哲學及
印度の自然とタゴールの詩情聖者の生活思想の價値
と貢獻聖者の生活伸展の徑路信徒の生活と反抗の生
活キタンチヤリから聖者生活の斷片タゴール小傳
其他數十項

第七編

ロマン・ロランの思想

内藤濯著

忽再版

「ロマン・ロランを外にして現代の新文藝を論じ時代の精神の波
き曙光を求めて躍ける世界の象徴なり。彼の思想と藝術とは深奥なる暗黒裡より新し
態度とは獨り本書の讀者にのみ享受を許されたる新世界の榮光なり。」

第一編

チニイ 超人の哲學 生江田

第二編

悪魔主義 思想と文藝 岩野鳴野

第三編

個人主義思潮 相馬御風

第四編

末來派及立體派の藝術 木村八村

第八編

オイケンと現代思潮 稻垣風毛

第九編

トルストイ人道主義 加藤一夫

天弦堂書房

東京市牛込區
西五軒町三區

振替 九五九
口座 五五九
東京 九番

◎直接購讀者諸君に告ぐ

一、本誌は前金に非ざれば一切發送致し不申候

一、前金の盡きし時は『前金切』を帶封へ捺印いたすべく候

一、御送金は可成振替貯金を以て御拂込み相成度候

本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵税一錢
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵税共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵税共

●海外は郵税一冊に付金六錢(清國を除く)
●臨時號出版の際は規定以外に代金申受く

本誌廣告料

特等	表紙二三四面	一頁	金貳拾圓
普通		一頁	金拾貳圓
普通		半頁	金六圓

●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候
●二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候

大正四年五月三十日印刷納本
大正四年六月一日發行 (毎月一回一日發行)

定價 貳拾錢 本號

發行兼編輯人 鈴木文治
印刷人 山本與一郎
株式會社 秀英 舍

發行所

東京市芝區
三田四國町

統一基督教弘道會

賣捌所

東京堂◎北隆館◎東海堂◎同文館◎上田屋
◎警醒社◎教文館其他全國有名書店

振替東京一〇〇〇三番
電話芝五八五五番

六合雜誌

□	進歩的基督教の主張	内ヶ崎作三郎譯
□	自由なる宗教生活	安部磯雄
□	水道の水	岡田哲藏
□	自我の問題	野村隈畔
□	思想家の生活	鈴木龍司
□	生 死	三浦關造
□	クリスチャンとは？	岸本能武太
□	紐育より	高橋清吾
□	宮参り	木村久一
□	神祕的知識	イー・エス・エームス
□	生命の家	増野三良譯
□	ストリンドベルクの「父」	太田眞一
□	熟れたる實は	田中葦城
□	瑞西より	盧山生
□	幻影を追ふ心	吉田絃二郎
□	基督教の禪機	内ヶ崎作三郎

此廣告を見申込の方は「六合雜誌」に依る旨書添ふ

東京帝國大學
文科大學教授

文學博士 姉崎正治

東京帝國大學
文科大學講師

文學士

鈴木宗忠共譯

前伊太利國總理事務大臣
伊馬羅博士
（原著）

信教の自由と學問の獨立

（宗教政策に關する所見）

菊版上製美本全壹冊

金壹圓貳拾錢

（郵稅八錢）

最新刊

本書は國家と宗教との關係を國法學の上より研究し政教分離主義が近世の國家觀念に於て最も妥當なる宗教政策なることを論ずると共に此の主義の基礎觀念たる信教の自由は必然的に學問の獨立と相伴ふ所以を説き思想上に於ける自然科學的潮流を打破して新理想主義を高調せり即ち社會法制の上より出發して現今の哲學界文藝界に喧しき思潮問題を論じたるものなり。今や政府も近く宗教法案を議會に提出するの意あるを聞く敢て政治家法學家宗教家思想家の一讀を勧む。

早稻田大學
教授文學士

内ヶ崎作三郎序

吉田絃二郎新著

正價壹圓廿八錢
郵稅八錢

忽四版

タゴールの哲學と文藝

（四六判上製美本）

（全壹冊紙數六百頁）

タゴール紹介書中の權威なり好評嘖々

たる本書を新思潮に讀まずして新思潮を語れ。

（明治廿五年三月二十七日第三種郵便物認可）
（大正四年五月卅日印刷納本）
（大正四年六月一日發行）
（每月一回一日發行）
（六合雜誌第三十五年第六號）

【本冊定價貳拾錢】

振替東京八七番
貯金口七番
金口番

大田發行所

東京市神田區
保町七番地

文學士 藤田逸男氏著 近代思潮 叢書 第八編

新刊

宗教の哲學的基礎

四六判洋布製
定價七拾錢
郵税金八錢

千古思潮發展の本流は宗教によりて成され、社會進歩の跡は克く人文史上に宗教の權威を確立せしむるのである。而して精神生命の本源としての宗教の最事實は獨り宗教的直觀による純粹なる思惟に於て理解さるる。

本書は斯る思想と主張との下に、原始宗教の發達より筆を起して、宗教の社會的基礎を論じ、更に宗教の哲學的基礎に於て、近世における宗教に係る主要なる諸問題を解決し、純粹なる理性の思惟によりて、宗教の本質を闡明したものである。特に宗教を主張し、或は宗教を批判せとする人々の精讀を俟つ。

杉本伊作氏新著

好評

佛蘭西語自修書

四六判洋布製
定價八拾錢
郵税金八錢

今はふらんす語の世の中なり。佛蘭西語を知らざれば「紳士」に非ずといふ時代も遠からず來るべし。諸君にして若し、時勢に後れざらんと欲せば、速かに佛語を自修せよ。或はユウゴオを繙き、或はベルグソン或はロオランの思想に參じ、或はアナトオル、フランスに遊ばんとする野心あらば、直ちに佛語を研究せよ。夏季の閑日月を利用して須らく着手せよ。本書はその最も困難を感じる發音動詞の變化の點に充分力を致し「ワ字及發音」「單語及譯讀」「文法及作文」「會話の四編に分類し、終りに「熟語及成句集」「不規則動詞變化表」をも掲げたり。著し類書中の白眉なりと信す。

東京 東尾 橋町 警醒社書店 振五 替五 東參 京番 兌發

楽しい日課

ライオン水歯磨の含嗽！

離^{ねざ}床^あにも宜しい。

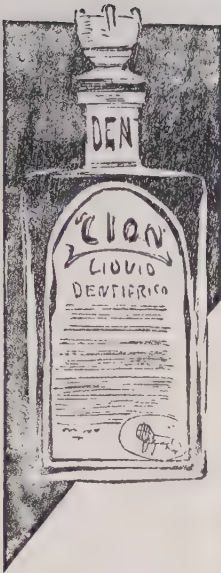
食後にも宜しい。

寝^ね前^{まへ}にも宜しい。

別に旅行用として

ライオン煉歯磨の

最も輕便高尙なるあり。



ライオン歯磨
ライオン石鹼本舗
小林富次郎

醫學博士

永井潜序

醫學士

小酒井光次著

最新刊

生命神秘論

菊判總布製
美裝箱入
插畫世界名
畫二十枚
定價壹圓六拾錢
送料拾六錢

月や花や雪や自然界の美といふ美の凡てを描き蟲の靈智や鳥の幽能や生物界の神秘といふ神秘の悉くを寫して最後に人體の玄機を探り戀愛を説き生死を語り要は造化の巧と妙と自然の愛と美を謳つた一

大詩篇

である科學者も文學者も哲學者も宗教家も開卷之を閉づる能はず剩へ二十葉の挿畫は

古今東西の

名畫を

拔粹し行文の流麗と表装の艷美は錦上更らに花を添ふるの觀あり眞に是れ出版界の驚異である。

●發行所

東京市麴町區平河町五丁目三六
振替口座東京二〇九一四番
電話番町四二五八番

洛陽堂

◎齊木仙醉先生譯

(好評日を逐ふて加はる)

最新刊

トルストイと二箇年

菊半布製美本

定 價 金 四 十 錢

内 地 送 料 四 錢

トルストイ死に近づける二箇年翁の教訓を叮嚀に採録せるもの宗教哲學教育文藝に關する翁の意見炬の如し活けるトルストイ傳活けるトルストイ觀譯者又之に細評を施す附録としてトルストイ「タゴール」ユーゴの相異なる死後生活論を評騰す讀む者をして心飛び魂躍らしむ眞に得難き絶世の大文字也敢て是を江湖に薦む

『大阪毎日新聞評』本書はニコライ、グツセフが二箇年ヤスナヤ、ボリナヤの詩人に師事し祕書として杜翁文筆の事に細大漏らさず關係したる記念録で其晩年の消息を傳へ且宗教、文學其他諸種の問題に觸れた故人の意見を含蓄して居るのであるから杜翁研究者には一讀の價值あるべく譯者も又善く其人を得て居るのである。

●發 兌

東京市神田區仲猿樂町五
振替東京二四一九七番

藤 田 文 林 堂

THE RIKUGO-ZASSHI.

No. 414. July. 1915.

CONTENTS.

What Do Unitarians Believe ? (<i>Dr. C. W. Wendte</i>)	1
.....translated by Prof. S. Uchigasaki.	
My Free and Religious Life.....Prof. I. Abe.	25
My Fragments	Prof. T. Okada. 30
On the Question of Self.....W. Nomura.	34
The Life of a Thinker.	R. Suzuki. 42
Life and Death.	S. Miura. 46
In What Sense am I a Christian ?	Prof. N. Kishimoto. 50
From New York.	S. Takahashi. 56
<i>A novel.</i>	K. Kimura. 63
Mystic Knowledge.....	E. S. James. 73
The House of Life (<i>D. G. Rossetti</i>) ...translated by S. Mashino.	81
On Strindberg's "Father"	S. Ōta. 82
<i>Poems.</i>	I. Tanaka. 87
From Switzerland.	Rozan. 88
Fragmental Thoughts	G. Yoshida. 93

Liberal Christian Pulpit.	Rev. Prof. S. Uchigasaki.104
--------------------------------	------------------------------

Topics of To-day.....	113
Books of the Month.	128

Editor Rev. Prof. S. Uchigasaki, *Sub-editor* G. Yoshida.

Published Monthly by the
TŌITSU KRISTOKYŌ KŌDŌKWAI,
2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

ふ乞を添書御旨る依に「誌雜合六」は方の込申御て見を告廣此

▲物來村井知至先生著

和田垣博士譯英文十牛頌
齋藤松洲畫伯揮毫「十牛」
木版手摺十一枚挿入

最新刊

冥想世と弦五

□本書は先生一代の修養と蘊蓄を盡せる名著也

學あり徳あり自ら守る所固く、一世の師表と
鑑みて万人の敬慕せる先生が過去半生の實驗に
社會の一家として父とし夫とし友人とし將た又
根柢を究む。
先生が社會の改良と人心の革新を主張し、椽
の筆を振ひたるもの即ち本書只だ一卷ある
のみ。
罵倒し、愚弄し、痛論して論旨堂々、細穿た
ざるなく、微打たざるなし、言々句句肉を刺
し骨を徹し醉生夢死の徒をして慚死せしむ。
眞に之れ近來の大快著。露雨蕭々書見を誘ふ
時速かに來つて之れが高遠の調を聞くべし。

此の謎を解くべく

△才道人禍句笑は林可憐眞人靈盲理ヒ自美無自
△子のをのなは種橋り咒西の人と化者のネ發と明然
△とを心はするもの誘ふかは醜はなと狐のミクのはのの光
△住し者載べきも思か迷ひ教理なる神俗の狐のミクのはのの光
△人し計師か惑柿豪か會想者也人化明みの教の道景

△人現悟人危生土ト信内邦人ア古名極是○自宗富婦西
△物思達生哉の靈的意トのミ在エラ觀の日餓人のルののの妙○有虐難の中のか
△保想家の意トのミ在エラ觀の日餓人のルののの妙○有虐難の中のか
△証家義生命徳イ字報ヲ察誌誌鬼間也○待味葛ら蛙班

△遂教善三現奴王汝尊大大滿流妻貴剛好超平△人對
△に育種在隸とのし名ゆ大罪聖悲△人凡類話とは何
△謎をなす人活ては生虛か罪聖悲△人凡類話とは何
△類利生遊△人凡類話とは何
△り別那觀よくれ偽し人人哀兒か驗柔友ん活か敵か

三六版クロース
特製函入美本
定價
金八拾錢
送料八錢
市内四錢

店書堂方四

東(電)市(話)神(下)田(谷)旅(九)龍(七)一(町)廿(番)
振替口座東京九七五番

兌發

《前附四》

□ 神祕的知識 イー・エス・エームス 七三頁

□ 生命の家 (ロセツテイ) 増野三良譯 八一頁

□ ストリンドベルクの悲劇「父」 太田眞一 八二頁

□ 熟れたる實は (詩) 田中葦城 八七頁

□ 瑞西より 盧山生 八八頁

□ 幻影を追ふ心 (感想) 吉田絃二郎 九三頁

自由基督教々壇

□ 基督教の禪機 内ヶ崎作三郎 一〇四頁

時評欄

△ 自由基督教會の設立に就いて (内ヶ崎) △ 政界近來の快事 (甲鳥生)

多數黨の德義 (甲鳥生) △ 時評五言 (星島生) △ 時事雜感十種 (追分生)

△ 教會合同問題側面觀 (菊川生) △ 神聖なる單純 (巢丘生)

□ 新刊批評 □ 編輯室より

六合雜誌第三十五年第七號目次

本 欄

□ 進歩的基督教の主張

チャールス・ダブルユー・ウエンテ
内ヶ崎作三郎譯……………一頁

□ 自由なる宗教生活

安部 磯雄……………二五頁

□ 水道の水

岡田 哲藏……………三〇頁

□ 自我の問題に就いて

野村 隈畔……………三四頁

□ 思想家の生活

鈴木 龍司……………四二頁

□ 生 死

三浦 關造……………四六頁

□ 如何なる意義にて予はクリスチャンな

りや

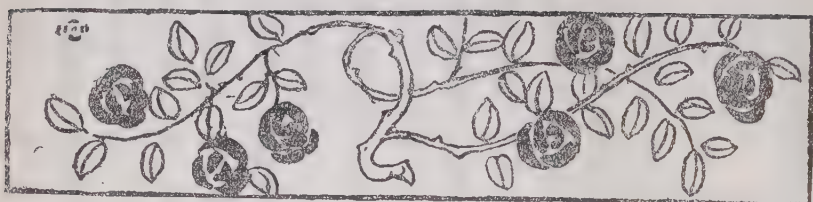
岸本能武太……………五〇頁

□ 紐育より

高橋 清吾……………五六頁

□ 宮参り(小説)

木村 久一……………六三頁



六 合 雜 誌 七 月 號

進歩的基督教の主張

(ユニテリアンの信仰)

博士 チャールス・ダブルユー・ウエンテ

内ヶ崎 作三郎 譯

一、序。二、ユニテリアンは信條を有せず。三、諸多の統一。四、宗教。五、基督教。六、神。
七、天啓。八、祈。九、聖書。十、耶蘇基督。十一、人性と進歩。十二、靈魂不滅。十三、結論。

一 序

使徒行傳二十二章二十二節に、羅馬に於ける猶太人は、主の囚人なる使徒保羅に向つて、『されど吾等汝の思ふ所を聴きかんとす。蓋そは吾等何處いづくにても此の宗旨の誹らるゝことを知ればなり、』と云つたと記されてある。この發言は今日のユニテリアンにも適用される。何となれば初代の基督教徒の如く、我等も亦到る處に非難せらるゝからである。時としては、此の誹議は一種の神聖なる戰慄、及び頑迷なる反對の形式を執る。ユニテリアン教徒は信仰なく、非精神的、及び世俗的の人間であつて不信者よりは餘り異らずして、基督教の運動には非常に

阿部次郎氏著

第三版成る

四六版三百六十頁
箱入天金美本

第二三太郎の日記

定價壹圓參拾錢

— 郵 稅 金 八 錢 —

東京神田區南神保町

岩波書店

振替東京二六二四〇〇
電話本局五四二〇〇

此書は自分の最新の文集である。三太郎の日記『第二』である。自分は此書に於て從來になく精一杯過去及び現在の自分の底を見せた現在の處自分の最愛着と自信とを持てゐるのは此書である。

自分は他の孰れよりも先づ此書によつて自分を知られんことを希望してゐる。著者

◎基督釋迦子等聖賢の遺教と世界史を貫く思潮の本流とが現代の日本に生れたる一青年の胸に如何に新たなる生命として蘇りつゝあるかを見よ。矛盾と暗黒と圭角と我慢とに充ちたる魂の中より如何に愛憐と謙虛と敬虔との心が匂ひ出でつゝあるかを見よ。一見獨善と抽象とに溺れたるが如き著者の内奥に如何に社會生活に對する悲痛なる情熱と具體的事物に對する徹底せる理解とが存在するかを見よ。本書は現代を越えて後世に生くべき西川の日記(八十頁)は著者が本書に於て始めて公にする靈魂の記録なり。

足せる信條を指示して、此の問題に答ふることは出来ない。蓋し斯かる信條を有せざることは、ユニテリアン主義の明白なる特徴であるからである。吾人は信仰の斯かる千遍一律にして誤謬なきと稱せらるゝ形式より結果する善を見ずして、寧ろ多くの害を見ることが出来る。基督教會の歴史は信條は宗教的真理の發達と其の効力を妨げ、それを信ずるところの人々をして、精神的怠慢、及び不誠實に導くこと、またそれは教派的傲慢と權力とを養成して、酷薄、宗派心、不寛容及び迫害を多く生む源泉であることを證明するのである。他にも理由あれども此等の理由に基いて我等は信仰の斯かる不進歩的標準には一個の信條として夫れに従屬しないのである。吾人はそれは精神的生活を救はずして之を妨害し、宗教的信念の導子たらずして、動もすれば其の牢獄となり墳墓となることを信ずるのである。何となれば信仰は一事にして信條は別事であるからである。信仰は心意の一状態である。信條は心意の叙述である。前者は生命を與ふる精神にして、後者は往々にして夫れを殺す所の儀文である。さて、あらゆる眞醇なる信仰の第一條件は、研究の絶對的自由と、其意見を自由に發表し且つ變革することである。斯くして個人判斷の權利を實行したれば、ユニテリアンは新教徒中の新教徒であつた。チャンニング博士は次の如く言ふた。『若し余は人生を次第に増進する善であると見出したとすれば、若し余は幾分にも我自らの心を大ならしむる點に於て成功したとすれば、若し余は基督教及び人性に對して、寛大なる見解を懷くに至つたとすれば、余は此の幸福をば神の恩寵のもとに在つて、余の享けたる知識上の自由に負ふ所がある。これは余にとつては生命の呼吸であつた。これをば我自らに對するが如く、他人の爲に擁護しなければならぬ。』と。此の高尙なる文字は、ユニテリアンの團體の有力なる主張であ

危険なるものゝ如く考へられて居る。吾人の教義及び動機に對する斯かる低調なる意見は、往々にして故意的なる無學、及び盲目的偏見より發するのである。されば議論若しくは反證に依つて之を變化せんと試むることは、殆んど無意義のことであらう。吾人に執つて進む可き最上の道は、出來得るだけ正しく、且つ情深く、我等の道を直進して、時及びより善き理解が我等に係る一切の、斯かる陝隘にして謬れる議論を匡正するを俟つことである。

さもあらばあれ、世には一切の偏見及び偽善を棄て、單に眞理を研究せんとして、吾人の許に來つて、『君の考うる所を君より直接に聞き度いものである』と云ふ所の大多數の人々がある。而して其數は年と共に増加する。斯る間に對しては吾人は常に、質問者の精神に報ゆる誠意を以て答ふのである。ユニテリアンは、生命は思想よりも優り、一個の純潔なる品性は正確なる神學以上の價值ある事を主張して、宗教的意見の形式上の表白を重視せざれども、必ずしも信仰を妨害し、若しくは宗教的題目に關して明白なる意見を懷抱するを否定するものでない。之に反して吾人は人生の正義と品性の完全とは、高遠なる宗教的信念に依て最もよく到達せらるゝとを信ず。吾人の信仰はあらゆる眞醇なる努力の根柢に存せねばならぬ。また信仰なき生活は薄弱にして價值なきものである。また信仰の肯定及び公理としての教義は人類の宗教生活に甚だ肝要なることを信ずる。

二 ユニテリアンは信條を有せず

しかしながら、吾人は『君は何を信ずるか?』と云ふ問に對して、一種の權威を有し、且つ圓滿具

ば、『理智的自由に對して恐怖なき尊敬を有し、思想の大なる變化のうちに敬虔、正義及び愛の結合を信頼する』ことである。この事は禮拜者のあらゆる會衆は、悉く皆絶對的獨立にして、聖職、會議、若しくは集會に依つて支配せらるゝことがないと云ふ信念を藏するのである。又た會衆の各員の個人的權利は、等しく神聖に擁護せらるゝのである。吾人は他より優れる信仰、若しくは功蹟の根柢に基いて會員を選択することを、如何なる教會の權利であるとも認めない。故に吾人は吾人の團體に加はるべき人々の個人としての品性と行爲とに對して、責任を有することを肯はない。吾人にとりては教會は寧ろ禮拜者、及び眞理の追求者の集合である。彼等の無學と不完全を意識する研究者の團體である。相互的改善と、友情の爲めの協會である。また世界人類を向上し祝福するの機關である。

三 諸多の統一

デウエー博士の言に従へば、『ユニテリアン主義は思想の一組織に非ずして、寧ろ思考の一方法である』と。ヘッヂ博士も亦た之と等しき思想を發表して居る。曰く、『ユニテリアン主義は神學に非ずして多くの神學の集合である』と。これはユニテリアンをして、あらゆる他の基督教徒と區別する所の宗教的問題に關して、理性を自由に怖るゝ所なく使用することの自然として論理的の結果である。

ユニテリアンは苟くも根柢なくして不合理と思はるゝところの教義は、如何に尊敬すべく、神聖なるものであらうとも、或は如何なる外部的權威がそれを維持するとも、決してそれを認容しない。

彼は宗教に關しては、彼自らの意見を抱き、彼自らの心と情とを以て、其信仰を承認することは彼の

る。吾人は悉く宗教上の事柄に於ては各人の欲する儘に研究し、思索し、信じ且つ語るのである。

彼の信仰及び其發表に對しては、彼は唯だ彼れ自らの心靈及び神に對してのみ責任を有する。大なる不確實が有限にして誤謬多き心意の思考に伴はなければならぬが故に、我等は神の知識を實際に獲得することに對しては、神は如何なる人をも責任ありとは考へずして、唯だ夫れに對する眞面目なる研究をのみ要求することを吾人は信ずるのである。チャンニングが夫れを言ひ顯はしたるが如く、我等は我等の個人的意見の正當に對して責任なくして、その實直に對して責任あるのである。

また吾人は、信條が宗派若くは教會に屬するための一條件として必要なることを信じない。蓋し回心と呼ぶ所の専門的順序を單純ならしめ、教會及び僧侶の權威を維持するが爲に、大いなる宗派を作るには一便法であるかも知れない。されど吾人は斯かる目的を有しない。吾人は宗派的機關よりも寧ろ思想及び理想を信ずるのである。吾人は宗教的真理の發達と、人類の生活に對する其の應用の爲に努力する。吾人は外部的教會を建設するよりも、光明、自由、及び愛の福音を宣傳せんとするものである。

教會、教職、定時の禮拜は此の目的に對する有用なる道具である。然れどもそは此等のものが此の目的に正當に従屬する時にのみ斯くあるのである。併し乍ら今日我等が、基督教會に於ける多くの悲しき實例に依て目撃するが如く、或る特殊の教會若しくは宗派の利害は、宗教的開發、進歩及び改革に關する利害よりも遙かに重要視せられて居る。此の弊害を避くる爲にユニテリアンは其の宗制的關係に於て、最大なる自由と單純とを主張するのである。ユニテリアンは單なる神學上の同意の上に、其の宗教的の團體を建つる事を拒むで、其の第一の條件は博士ゼームス・マーティノイの言ふ所に依れ

致して、世には全然宗教的思想と實行とを缺くところの野蠻なる種族の存することを吾人に告ぐることもある。又折々文明社會に於ても、宗教的感想や欲望を全く所有せずと云ふ人々と吾人は屢々邂逅する。されども、こは折々發生する白痴が人類の間に知識的天才の分布を否定せざると等しく、斯かる事實も宗教の普遍性を否定するものではない。斯かる除外例は、宗教的情操は常に且つ等しく活動するものに非ずして、夫れ自ら^あ顯はす前に或る先行物を要することを證明するのみである。そは常に宗教的修養の初期の、若しくは根本的の階級に見出されないかも知れない。されども夫は常に文明社會に見出さるゝのである。『人類の最も高尚なる處には、宗教も亦た最も高尚なのである。』

人類社會に於て最も注目すべき國民と、人物と、時代と、事件とを考察せよ、然らば諸君は彼等が宗教的發達の歴史と親密に離るべからざる關係を有することを見出すのであらう。ゲーテの言ひしが如く、『世界史に於ける唯一の眞實にして總ての根柢となる題目にして、凡て他の問題を隸屬せしむるところのものは、信仰と不信仰との衝突』である。それ故に吾人は宗教的情操に於て、粗野なる情緒、人類の弱點に對する伶俐なる讓歩、又は死滅すべき迷信を見ずして、人類の原動力、社會の急進力、人間心靈の開放者、及び鼓吹者を見るのである。宗教は品性の最も高尚なる典型を生じ、世界が曾て知りたる最も高尚なる雄偉、及び犠牲の最も高尚なる行爲を鼓吹した。又た啓發せられざる理性に依つて迷はされ、又は歪められた時ですらも、人類の利己的情熱は其の墮落の^{どん}底に於ても、人類の精神的組織の中に宿るところの或る大なる努力に對して感銘深き承認となるのである。假令その外部の形式は、毎日々々變化するとは云へ、また假令過去の承認は最早や其の勢力を振はずして、古き信

最高の道德的義務なることを主張する。斯かる方法の結果は、意見が非常に個性の色彩を帯び來ることである。されども同一なる若しくは等しき前提より出立して、宗教上に於て同一なる理性の方法を用ゆれば、ユニテリアンは同一なる結論に達して、實際の事業の爲に最大なる知識的及び道德的同情と、最も有効なる結合とを許すに足る程の見解及び目的に於ける、十分なる和合を見出すべきことは自然である。是故に若しユニテリアンは、永遠に無變なる拘束的の信條を有せぬとしても、彼等は宗教的信念の重要な諸點に於て、實質上同意して居る。而して常に人類の性質、義務、運命、及び神聖なる者に對する其の關係に關する多くの堂々たる肯定に於て結合するとが出來るのである。故に吾人は讀者に對しては此種類の叙述を提供せんとするのである。又紙數限りあるを以て、根本教義のみを論ずるのである。又ユニテリアンの信仰に關して肯定せらるゝ所のものは、著者一人の責に任ずることを豫め斷りおくの必要を感じる。吾人の團體の中にも種々なる意見の相違のあることを承認するを以て、著者自らの見解が知らず識らずの間に、多少の色彩をこの信仰の叙述に附與するとがあるかも知れないからである。

四 宗 教

先づ第一に吾人は宗教を信ずる。吾人は宗教的情操の必然の存在、その永續性、及び其の重要なことを信ずる。吾人は、人は本來宗教的生物にして、禮拜の形式に於て彼の驚畏、恐怖、尊敬、及び愛を現はすことが道德的の必要であることを主張する。人類學者の研究は基督教の外國宣教師の證明と一

ザレの耶蘇の言葉と模範とを吾人に對して道となし、誠となし、命となさしむるに十分なるものを認め得ると信するのである。此の基督教を吾人は世界がこれ迄知りたる宗教的真理の最高にして最善なるの啓示であると受容れるのである。されども吾人は耶蘇の崇高なる訓言は宗教的生命の可能性を用ひ盡したるものであると信じない。幾世紀間の知識及び經驗の莫大なる増加は宗教的真理の新らしき擴張と、新らしき適用とを可能ならしめた。吾人は斷言す、耶蘇自らが言ひしが如く、彼の事業を繼續して、すべての真理にまで我等を導き得べき神の聖靈より神智の啓示を受けて居るのである。此の心靈的指導の教訓のもとに在て吾人は人類の側に於て、神智及び神聖に於て、間斷なき發達あるを豫想する。而して敬虔なる狀態を以て使徒と共に『基督の初歩の教を棄て、我等をして完全に進ましめよ』と云ふのである。

六 神

基督教に於ける此の信仰は、其の最初にして根本的真理、即ち神の存在と完全性とを認容することの意味するのである。されど茲に於ても、吾人はよく辨別しなければならぬ。如何となればあらゆる大いなる肯定は其の胸中に一種の否定を有するからである。吾人はアブラハム及びヤコブ神を信じない。此の神には多くの心靈的にして且つ美しき痕跡を認むるにも拘はらず、或部分に於ては餘りに人間に類似して、人間と等しき情慾を有するからである。此の神は彼の被造物と親しく交際せんが爲に此地に天降り、而かして被造物によつて御機嫌をとられ、或は其の目的を曲げしめられ、或は餘り

條と教會とは廢類するとも、宗教的情操は依然として人生の最高の興味であり、人類を色欲と情慾より、思想と感情の比較的高き水平にまで、又た神との類似にまで引上げるところの鼓吹力である。

五 基 督 教

第二に吾人は宗教の最も純潔にして、最上の形式として基督教を信ずる。世界的信仰の他の系統に對するより十分なる通曉は、近代の歴史的批評的研究、及び比較宗教と云ふ新科學に依て可能なることとなりたるが、それに依て吾人は人類の心靈的向上に對して、他の大宗教の功蹟と、微妙と、其の卓越したる効驗の高尙なる認識を與へしめる。されども此の事は、基督教が哲學的にも倫理的にも、人類の大宗教中の最もよく承認せられたるものにして、且つ最も高尙なるものにして、また我等の思想及び生活の人種的、個人的閱歷と習慣とよりして、吾人に最も適應するものであるとの確信を變更させない。それは世界を支配する國民の宗教である。而して如何なる他の信仰の形式に依ても匹敵せられざる鼓吹、發達、及び進歩の力を振うて居る。されども此の記述は多少の加減を要するものである。

吾人は古代の猶太教的不寛容と、異教的迷信の混合物を有したる使徒時代の教會、又は往々純正哲學の爲に眞理論、理の爲に愛を犠牲にしたる中世紀の煩瑣的基督教、またはルーテル若しくはカルヴィン、もしくはジョナサン・エドワーズ、若しくはチャンニングすらの基督教を信ぜずして、基督の基督教を信するのである。十八世紀間の神學的思索及び教派的發達の、彼の單純なる福音を壓迫したる附加物を洞察すれば、吾人は幾世紀の間傳道せられたる彼の閱歷と教訓の斷片的記錄のうちにも、ナ

も吾人は神を信ずる。如何となれば研究者にとつては此の問題の如き困難なるものはないが、然かも斯かる抵抗すべからざる勢力を以て、『神は存在するに違ひがない』と云ふ確信を吾人の精神に齎すものがあるからである。それ故に吾人はヘブライの詩人と共に意氣銷沈したるを以て、『誰か探りて神を見出すことを得んや、』と云へども、吾人は又た感謝に充てる悦びの情に溢れて、ヘブライの詩人の如く『汝の御心より我れ奈邊に行かんや、汝の御前より我れ何處に遁れんや、』と問ふのである。吾人は神自身の有りの儘なる思想を理解することは出来ないけれども、吾人は彼が吾人に見ゆるが如く、又た彼が人間の理解力と良心と心情とに對して自らを啓示する如く、吾人は彼を知るとが出来る。あらゆる方面より神の勢力、智慧、愛情、及び神聖に對して吾人を確信せしむる所の證明が出来るのである。而してたとへ神に關する一切の知識を有するも尙ほ吾人は『見よ此等のものは神の御業の一部分に過ぎない。而して如何に僅かの部分のみ神に就て知らるゝよ』と恭しく表白せなければならぬが、而かも吾人は此等の瞥見に依て『神は最善の人々が信じ、最も恵まれたる人々が望むよりも遙かに優れるものである』と云ふ其の攝理的運用を信じ、また吾人は耶蘇と共に信賴して神を仰ぎ觀て、『天に在す我等の父よ、』と言ふ可き權利を有することを確信するのである。知識を以て測る能はざる所の眞理は、愛の精神を以て信賴する信條に示さるゝのである。

七 天

啓

次に吾人は天啓に就て吾人の確信を語り度い。さはれ、吾人は此の大なる心靈的事實の狹隘なる解

に心を動かされ過ぎたりしたのである。我等の神は其の特別な恩寵を垂れんが爲に、此處に一個人を選び、彼處に一國民を選び、而して彼の恩寵よりその同胞を遠ざくる所の偏頗なる支配者ではない。又た六日のうちに此の世界を造りて七日目に休息し、人類を造りしことを悔ひ、而して後の思ひ付に依つて、彼の舊計畫を補はんが爲に、宇宙の運用に斷へず干涉する所の子供らしき神ではない。我々は又た僧侶が造り、且つ聖餅となつて支配することの出来る羅馬教徒の神を信ぜない。又は三つの明晰にして相等しき性質を有し、而かも唯一の人格を有し、又た彼自らの行爲を顯はさんが爲に人類をば或は幸福、或は不幸の閱歷に豫定し、又た彼が決して犯さざりし、或は犯さざらんと欲するも得べからざる所の罪惡の爲めに、復讐的に之を永遠に罰する所の其の神祕なる存在物、即ちカルヴエン派の「君主神」を吾人は信じないのである。

吾人はまた一つの神を信じない。たゞ吾人は神を信ずる。誰が神を定義すると企て得ようか。如何となれば、一切の定義は限定である。而して神は一にして且つ總てである。無限者を理解するは有限者の能ふ所ではない。それ故に吾人は三位一體論者と共に、神性をば數學的形式の中に詰込み、若しくは神の必要なる屬性を説明し、若しくは神は必ず斯るもので、しかくゝの事を爲すに違ひなきと云ふことを、發表することを敢てしないのである。吾人は敬虔なる精神を以て、神の神祕不可思議にして、神の眞理を解剖することは僭越のことであると告白するのである。心靈の深奥なる間に對しては常に『我は在るところのものなり』と云ふ同一なる答が報ひらるゝのである。實にや斯かる知識は吾人にとつては餘りに不可思議にして、そは高尚にして吾人はそれに達することは出来ない。されど

り人類に至るまで、此の系統は次第に向上する。極微分子より天の使に至るまで此の連鎖は中絶しない。吾人の足下の土壤は胚種的衝動を以て活々して居る。『造られたるものゝ深き願ひは、神の諸子の顯はるゝを待つことなり。』而して人類に就ては、『吾人の未來は未だ顯れず、』と記されてある。斯く考ふる時は、物質的宇宙は神の永遠なる光榮ある天啓である。物質の事實及び法則のうちに、内在の勢力及び智慧の驚くべき啓示が吾人に與へらるゝのである。今や世には科學と呼べる新らしき天啓ありて、其の未だ名づけざる神の祕密を啓示するのである。ダーヴィン、ハックスレイ、テンダル、スペンサー、及びフィスク等は近代の豫言者のうちに數ふ可きものにして、彼等の使命は神の聰明と、先見とを宣傳することである。實にや彼等は専ら事實を論究した。されども彼等の著述を讀む者は、一切の自然は生命を以て充實し、一切の生命は法則に依て支配せらるゝと云ふ壯快なる眞理を識別するであらう。『生命なきものはなし、法則なきものはなし。』この二個の相關的事實の説明は一個の至上者の存在のうちにのみ見出さるゝのである。其の至上者の意思は生命であつて、其の完全なる生命は法則である。それ故に吾人は宇宙の構造、及び法則に關する吾人の知識を増進する科學のあらゆる新發見を歡迎する。何となればそは神に關する吾人の觀念を擴大し、益々神の神聖なる意思、及び方法に吾人を通曉せしめ、神を思考するに際して、吾人の敬虔なる恐怖の精神を益々大ならしむるからである。

又た吾人は神の注意深き監督、及び慈悲深き目的に就いて、人間の歴史が吾人に與ふる天啓を信ずる。高尚なる意味に於て歴史は攝理の年代記、人類に對する神の態度の記録、即ち世界の歴史は混沌たる人間の情慾と行動とより、秩序と進歩とを進化せしめて、神の法則の優越なるを示して、個人及び

釋を信じない。吾人は神は或る秘藏の個人、若しくは國民に對して、時折其の目的を示し、又はアラビヤの花崗石の二枚の書板の上に自ら指を以て彼の神聖なる訓戒を刻りつけ、又は人類に對する彼の使命をば一冊の書物の表紙の中に綴込むと云ふことを信じない。吾人は神は唯一度、しかもそれ切り夫れ自身を啓示したことを信じない。吾人は寧ろ神の靈覺をして、間斷なく、且つ永遠的ならしむる所の天啓に對するより、大なる見解を信ずるのである。

『天啓は閉ぢられず、

人間の努力に感應して

眞理と正義は猶啓示せらる。

希臘、蠻人、羅馬、猶太の

古聖の胸に現れしものは

人心の深きページに記されて

今日も永へに新しく輝く。』

吾人の禮拜する神は彼の創造したるものうちに内在し、而して彼が造れる一切萬有を彼は永遠に靈動する。吾人の目撃する宇宙は完全圓滿なる終局に非ずして、今造られつゝある所の一種の世界である。自然、及び進化の、秩序ある、破られざる手段に依て、其發達は常に進歩しつゝある。原子よ

九 聖 書

ユニテリアンは、聖書をば自然、歴史、及び心靈のうちに現れたる神の天啓の尊敬すべく且つ靈覺を被りたる記録と信ずるのである。舊約書の詩篇と、約百記と、耶蘇の比喻のうちに、自然界の美と莊嚴とは驚くべき雄辯とを以て讚美せられて居る。而して深遠なる宗教的教訓は、信者の爲にそれより引出さるゝ。精神的傳記の永き連續のうちに、又たイスラエル國民の典型的歴史のうちに、個人及び國民の閱歷のうちに、永遠者の現前と目的との存すると云ふ證據が存在する。古聖の嚴命、豫言者の熱烈なる宣言、詩篇記者の精神的憧憬、ことに耶蘇の神聖なる教訓と實例とのうちに、人性の精神的能力が深く主張せられ、天父と親類的關係が設立せられたのである。人類に對する此等の特質、及び貢獻のために、吾人は聖書を尊敬し、且つ信賴する。されども舊き盲目的の方法を以て尊敬するものではない。吾人は偶像として、若しくは一字一句謬りなき神の托宣として聖書を考へない。吾人は永遠のものと一時的のものと、また聖書中にある價值なるものと價值なきものとを識別する。吾人は普遍的のものと、記者の時代及び人格に屬する所のものとを、區別する。吾人は現在の聖典の神聖なる起源、もしくは各卷の等しき同一なる價值を信じない。吾人は理性と良心を以て聖書を檢査する。而かして他の書籍を支配する文學的價值の同一なる法則を夫れに適用する。吾人は單に聖書の中に記されてあるが故に、世界の起源、及び支配、若しくは神の性格に就いて粗野なる觀念を採用しない。吾人はヘブライ戦争の恐ろしき記録、若しくはレビ種族の法律の乾燥無味なる記事を讀むことが、精神的教

國民をして其の法則に従順ならしむるものである。

されども總ての中にて、最も明かに有力に、永遠の全聖者は人間の心靈、その聰明、品性、愛情、意志のうちに啓示せらるゝ。心意、良心、及び心情の此等の才能に依て、吾人は一切事物の性質を解釋する。神に依て靈動されたる人間の心靈は、可見の創造界に對する鍵鑰である。吾人が此の靈覺を受ける程度は、吾人の個人的功蹟及び努力の程度に比例するのである。純潔なる心と、見識ある智力は神を見る。此等に對して神は永遠の現前、内部の光明、感應する言語となつて自らを啓示するのである。

八 祈

以上の信念は、吾人は禮拜を信じ、祈りを行ふことを含むで居る。されども心靈の此の高尙なる特權をば、苟くも迷信的若しくは機械的に用ひてはならない。吾人は物質的利益、或は病者の不可思議なる治療、若しくは天候の變化の爲に祈ることを信じない。吾人にとつて、祈りは敬虔の行ひにして、私利私欲を目的とするものではない。吾人は吾人の渴仰、讚美及び完全全愛なる父に對する謝意を表する爲の精神的必要であるが故に祈るのである。吾人は世俗的にして、利己的な欲望の滓渣を一掃し、純潔にして完全なる生活を追求し、吾人の性質を神の意思に従順にして調和ならしめんが爲に祈るのである。此の祈りの形式は、吾人の實驗する所に依れば、心靈に元氣を與へ、之を刷新すると一般の人々より承認せられたる、且つ有効なる方法である。何となれば、斯くの如くにして求むる所の人々は、必要なる力を受け、神の平和を見出すからである。

予は進んで、ユニテリアンは耶穌基督を信ずると云ふ。信仰の此の定義は多少の困難に伴はるゝ。如何となれば此の信仰の箇條に於て、吾人間の意見は非常なる相違があるからである。他の基督敎信者と、吾人の相違とを力説するが爲に、今一度否定法を用ふるならば、吾人は天使の群を隨へて雲に乗つて來ると新約書の或部分に記されたる猶太敎の救主を信じない。その實現するや、日月は其の光を失ひ、星は天より墜ち、死者は其墓より蘇ると思はれて居るところの基督を信ぜない。または吾人は儀式の裝飾物及び見世物の爲に傀儡として久しく役立ち、而して僧侶の權威を支へる爲に其の認可を與へたる敎會の基督を信ぜない。吾人は又歴史及び天地の大法のうちに、承認せられざる神學上の抽象物である。信仰箇條中の基督を信ぜない。此の獨斷的信條の基督は、神格の第二人格者にして、人類の罪惡の爲に贖ひ、彼に向ひ、或は彼を通して、赦罪と、贖と、永生とを受け且つ祈るすべての人々の中保者、及び救主にして永遠に存する所のものなる斯かる基督を吾人は信ぜない。

されど吾人は福音書中の耶穌基督を信ずる。彼は一切の宗制的外衣、及び一切の神學上の精美、一切の思索上の空想を脱ぎ棄てたる者である。耶穌の性質、使命、及び權威の題目に關しては、吾人の團體は二派に岐れて居る。第一派は彼の神性より彼に近かんとする者、第二派は彼の人性の方面より彼に近かんとして居る。前者は耶穌は超自然的に生れ、特別なる事業の爲に神より特派せられ、其事業に對して超人間の勢力を與へられ、人と神の間に其位を占むる天下獨歩の存在者であると思惟する。彼の言葉には誤りなく、彼の品性は一點の罪なく、彼の靈的權力は最終のものである。第二派は耶穌をばヨセフとマリヤより普通に生れて、一切の人間が享くる所の性質と力とより、種類に於てに非ずし

育に助力を與ふるものであると云ふことを信じない。吾人は又た雅歌の如きヘブライの戀歌、若しくは狂信的なる默示録、(その或る部分は非常なる美と力とを與ふれども)をば、ダビデの詩篇や山上の説教と等しき靈覺を與ふるものであるとは信じない。さて斯かる批評の方法が畢る時に、吾人は如何なる結果に到達したるか。聖書は吾人にとつては書物の中の書物である。吾人はそは無限者に對し、また吾人の同胞人類に對し、又た吾人自らの胸中に存する神祕に對する人類の關係に關して最高最深い思想を含むことを信ずる。吾人はオー・ビー・フロイズンハムと共に、聖書の中に『信仰と希望との最も純潔なる表白、眞理に對する最も美しき憧憬、信任、及び信賴の最も完備せる情操、讚美の聖歌、智慧の俚諺、道德律の訓示、攝理に就ての解釋、禮拜の規則——聖徒的人格の描寫、神聖なる生活の物語、敬虔、謙遜、忍耐、慈悲の教訓』を讀むのである。實にや聖書は吾人の信仰的必携書である。道德的及び宗派的訓誨の吾人の寶庫、吾人の精神的の滋養の滾々不盡の源泉である。

あらゆる民族は各自の聖書を有する。而して一切の聖經は靈覺に依て與へらる。されども吾人はウエダー經や、ゼンダヴェスト、四書、及びコーランの如き、他の聖書の功蹟と美妙とを悦んで承諾すれども、尠くとも吾人にとつては、猶太教及び基督教の聖書は、文學的、道德的宗教的價值に於て、彼等に優ることを主張するのである。何となれば、彼等は神及び人、及び人間社會の義務に關する一層高尚なる概念より此の聖書は流れ出でたるが爲めである。

一〇 耶蘇基督

の胸中に神より依託されたる神性の幾部分を有し、且つ正當に靈覺を被る時には、再生してより高尙なる生活を營む性質を具へて居るのである。全墮落説、若くは人は罪惡のうちに迷うて、生れ乍らにして善を爲す力なきと云ふことを、吾人は非哲學的にして且つ眞ならざるものとして排斥する。併し乍ら吾人が斯く云ふは、人類の實際の不完全を否定するからではない。すべての人類は彼等の善の爲に定められたる、生理的及び道德的法則を犯したると云ふ意味に於て、罪人である。併し乍ら此の犯罪は人生が全く破滅したるには非ずして、唯だ夫は不完全であると云ふとの證據である。理想的純潔なる以前の狀態より、人間が墮落したと云ふ世間に行はるゝ説をば、吾人は不合理にして且つ根柢なきものと信ずる。之に反して吾人は、人類は知識及び道德的生物の甚だ低き位置より出立して知識、自由、及び道德に於て間斷なき進歩を表現したるものたることを信ずる。吾人は人間は善惡兩面の傾向を繼承したれども、罪惡そのものを繼承せざることを信ずる。吾人が罪惡と呼ぶところの個人的經驗は、それに伴ふ多くの弊害と共に、人類に對する神の教育の一部分にして、其の自由なる道德的周旋の必要なる條件である。それ故に吾人は人間の道德的弱點のあらゆる暴露を悲めども、吾人はそれが爲に人生の本源の威嚴と、進化の自然にして秩序ある過程に由りて其が次第に改善することを信ずるを妨げないのである。

『歩また歩、元始このかた

人類の實着なる進歩を吾人は見る。』

て、程度に於て違へる性質と能力とを有し、且つ彼の品性は發達したるものにして、吾人自れと等しき經驗と順序とに依て、罪惡と誤謬のうちより誘惑を超越したる壯年の晴朗なる力を得るやうに至りたるものであると信ずる。彼等は耶蘇の言葉は眞理なるが故に權威を有し、其使命は人類を教へ、開放し、聖化し、斯くして誤謬及び罪惡に對する其の束縛より人類を贖ふことであると信ずる。これは現在に於てユニテリアンのうちに勢力を有する見解である。されども總てのユニテリアンは耶蘇の中保は職權的なるものに非ずして、純乎たる道德的なるものなれば、吾人は彼の血に依てにあらずして、彼の善行に依りて、また彼の死よりも寧ろ其の生に依て、正義と信仰にまで贖はれたるものであると云ふことに一致する。

以上述べたる此等の信仰の二方面の間に、耶蘇に關する意見の程度と濃淡と、種類とは無數である。されども總て斯かる議論のある點に於ては、吾人は相違を意に介さない。何となれば吾人は耶蘇の人格と使命に關する正確なる見解を有するよりも、吾人の心情に於て基督の精神を有することは遙に肝要のことであると思ふからである。而して斯くの如きは又耶蘇自らの意見であつたと云ふことは、次の言葉に於ても知らるゝのである。『人の子を誹る者は許さる。されど聖靈を穢すものは赦さる可からず。』

一 人性と進歩

ユニテリアンは最も劣等なる人間、並に最も高尚なる人間を信ずる。最も墮落したる人間も尙ほ其

るかも知れないが、根本的にそれを變化せざる可きを確信する。吾人は心靈は未來に於ても其の同一性と記憶と愛情とを保有することを信ずる。吾人にとつて天國は或る場所よりも寧ろ或る狀態である。或る狀態よりも寧ろ心靈の繼承する一性質である。無窮は吾人精神的生物の一屬性にして、永遠の進歩は一切生命の條件である。ユニテリアンはすべて他の信者の如く來世に關して、各自の種種なる哲學と想像とを有する。併し乍ら彼等は夫れに就て獨斷することを試みない。また明らかに宗教的感情の結果である所のものを恰かも夫は神聖なる知識の如く主張することを試みない。來世を圍むところの神祕は、人の精神を健全ならしめんが爲に與へられたるものである。而して吾人は耶蘇に於て見るが如く、死後の個人的連絡に於ける此の信念が絶對であればある程、その性質と詳細に關して好奇心と空想と云ふものは、より尠くなるのである。たゞ一つの事は吾人を満足せしむる。即ち吾人が此の世に存在するうちに、吾人は天の如き性質を現はし、神々しき生活を送るならば、天國に這入ることが出来ることである。これは吾人の最も適當なる準備にして、同時に最も神聖なる獎勵であるであらう。

永遠の刑罰と云ふ奇怪なる教理をば、神の性格を傷け、人類に對して全く不公平なるものとして、吾人は全然之を排斥することを斷言するのである。されども吾人は人間の責任を信ずるが故に、神の應報を信ずることは當然である。されども吾人は道德的行爲に對する動機として、報酬もしくは刑罰の何れをも提出することを欲せない。吾人は聖書に『共に惡を行ふ者は、彼の行ふ惡の爲めに苦むべし。而してあらゆる人は善にせよ惡にせよ、行ふたることをば其の肉體に於て應報を受くべし。』と云

而して是は吾人に人間の將來に對して最も大なる信仰と希望とを與ふるものである。

人間の個人的改善に對する此信仰は、人間社會の進歩及び改良に對して、更に重大なる希望を生ぜしむる。地上に於て神國を建設せんとすることの可能性と、義務とは、ユニテリアン團體の注意と努力を常に惹起したのであつた。吾人は宗教をば個人のみならず、また社會的改善と幸福の條件に照して考察するに至つた。吾人は現代の社會的不幸を改善し、及び治療することを追求するを以て満足せず、基督教的愛情の原則を更に一層完全に適用して、また社會的生命、相互的善意、及び一般社會の安寧幸福に對する協力に依つて、出來得るだけ其不幸を撲滅し、若くは豫防することを試みて居る。『各自は全體の爲、全體は各自の爲』と云ふ諺は『若し汝等互に愛せば、汝は我弟子なることを總ての人は知らん』をいふ耶穌の教訓の新解釋にして吾人を鼓吹するのである。

一一 靈魂不滅

最後に吾人は吾人の個人的靈魂不滅を信ずる。されども肉體の復活の如き苟くも生硬なる觀念を夫れに附着しないのである。死は人の心靈の生命に於ける一事件にして、それは求むることも避くることも能はざるものである。死の來る時は、死は一の生存界より他の更に一層精神的なる存在界への自然にして偶然的なる移動である。現世は若し吾人が其條件を充たし、正しくそれを使用するならば、美しくして恵まれたるものである。吾人は來世は吾人の現在の個人的關係を超越し、若しくは變形す

層廣大なる、更に一層急進的の肯定を與へたるが故に獎勵せられ、大膽にせられて居るのである。聖書の新解釋、又は其の聴衆を悦ばすところの教義の新説明は、過去半世紀の間、ユニテリアンの間に在ては、極めて普通なるものであつた。吾人は大なる教派を設立せんとする欲望を有しない。また吾人は將來の教會は吾人ユニテリアンの團體と同一なるものならんと想像しないのである。されど吾人は吾人の宣傳する福音は、地を繼ぐ者なることを信ずる。現代は此の福音の間斷なき増加と採用とに關する夥しき證據を提出する。今日最も人望ある説教者は、よしや彼等は古への形式と名目との下に、それを包むと雖も、此の信仰の感情を發表し、其精神のうちに生くる所の人々である。アメリカの文學は其の豫言を以て生動し、共鳴するのである。重なる宗教新聞雜誌は其の廣さを幾何か減じ、且つ婉曲に云へども同一なる精神を主張して居る。そは近代の博愛及び改革の根本哲理である。今日の科學は其の巨大なる開拓者にして同盟者である。故に吾人が吾人の宗派的命名及び精神に於て代表する、自由によれる統一の大思想は二十世紀の大思想であると斷ずるも過言ではない。

斯かる現象は吾人の團體の微弱にして、其の増加率の遅々たることあるにも拘はらず、吾人をして私かに慰むる所あらしむるのである。吾人は教會の擴張を高調せずして、吾人の思想の發達と普及とを力論するが故に、止むを得ないことであると考ふる。されども吾人は信徒の大群の先驅者、及び開拓者として基督敎界に於て、吾人の明白なる場所と事業とを有するものである。吾人は進歩を指導し地面を測量し、障礙物を一掃し、安全と信仰と元氣の報告を斷へず後送するところのものである。かくして聽て基督の本陣は、吾人が既に戦ひ且つ占領したる所のものである。斯くの如きは宗教改革者

ふことを信ぜんと欲する。されども總て斯かる應報は其の性質に於て、訓練的、治療的なものにして、神の恩寵を十分に犯則者をして悟らしめんが爲である。

一三 結

論

以上は予の理解するが如きユニテリアン主義の信仰である。されども一切の斯かる記述は部分的、及び一時的の價値を有するに過ぎない。是等は『皆唯だ今日にのみ適切なもの』である。ユニテリアンは進歩的基督者である。彼は斷へず新らしき光明を追求して、如何なる源泉よりも新らしき眞理を受容し、それに依て彼の信條を變化し、且つ補足する。彼の神の根柢は其確實なるが故に、根本的條件の敗滅することを怖れない。斯くの如く宗教と、基督教と、神と、天啓と、耶蘇基督と、祈と、聖書と、人性と進歩と、及び靈魂不滅とを信するならば、誰か吾人をば何者をも信ぜずとして非難することが出來やうぞ。すべて新らしき、且つ奮闘しつゝある信仰の如く、吾人は吾人の立場を明らかならしむ爲に、多くの否定を爲すことは止むを得ない。されどもあらゆる斯かる否定は、それと共に其れに應ずる肯定を有するのである。吾人は古への使徒の如く、過ぎ去りし所のもの、光榮ありしとしても残るところのものは、更に光榮を有せんやと確信して宣言することが出来る。數よりすれば一小派に過ぎずと雖も、吾人は吾人の數に全く比例せざる如き大なる影響を及ぼしつゝあることを信ずる。今や如何なる正統派の信者と雖も、ユニテリアンの反抗の存するが故に、不知不識其の信條の嚴刻は寛和せられざるはないのである。正統派の教壇に於ける自由主義の説教者も、吾人が先んじて更に一

自由なる宗教生活

安 部 磯 雄

基督教に就いては、随分入るにむづかしいと感ずる人があると思ふ。先づ聖書には不思議な信じられないことがあるので、大概の人はこれに失望して了ふ。次にもつと内部に入つて見て、宗教は餘り窮屈なものだと思つて、中途で止す人がある。今日の人は外からでも内からでも束縛されるのを喜ばない。殊に若い人は自然主義で、故意に自分の心を束縛されるのはいやだ。

昔の宗教は説き方が非常に窮屈であつたが、當時の人には其れほどではなかつた。政治の方にも我のたへられないやうな煩しい規則などがあつたけれども、人々は何とも思はなかつたのだ。しかるに今日では、世の中のことが皆自由である。だから宗教も窮屈だと思はせるやうな説き方を止めなければならぬ。基督教の眞髓をもつとやさしく傳へる人があれば、基督教は一層ひろまるであらう。

よく教育家などが螢雪の功を積むと云ふが、これは學問を苦しいものとする謬見である。今日の學問は決して苦學ではない。小學校の子供が自ら進んで學校へ行くのを見ても分る。しかるに中等高等の教育になると、試験などゝ云ふ無理な所があつて、學生は學問にたのしみを持たないで學校を出て了ふから、一定の職を得ればもう本を讀む者もなくなる。

これが宗教となるとどうだらう。生活問題との直接關係がないために、少しでも煩しいとか窮屈だ

の使命にして、其中に吾人は數へらるゝのである。されども本軍が吾人の據る處にまで進み來らんか、吾人は高地に安臥を貪ることはしないのである。今や戰ふ可き新たな敵あり、獲得すべき新たな勝利あり、發見せらる可き新たな真理がある。されば一切のことを勤めたるや、吾人は尙ほ忠實なる歩哨として立つのである。常に服役の準備をする開拓者を以て任ずるのである。真理の帶を以て腰に纏ひ、正義の胸當を附け、信仰の楯を持ち、救ひの兜かぶとを持ち、神の言葉なる聖靈の劍を唯一の武器として、一切の真理、自由を與へ、且つ救済する真理に向つて吾人を前進せしむる神の召命を待ちて立つて居るものである。(完)

註。ユニテリアン(一神教者)はトリニテリアン(三位一體者)に對して起源したる語なれども、今日は英米に於ては寧ろ統一主義者の意味に用ひられ全世界大宗教の調和と統一とを理想とするに至つた。ユニテリアンはトリニテリアンと争へる時は過ぎた否争ふ必要がなくなつたのである。ウエンテ博士は米國ボストンの人、ユニテリアン協會の名譽幹事たり、自由宗教の世界的運動の中心人物である。ペルリン、及びバリーに開かれたる進歩宗教世界大會は主として同博士の計畫になりしものであつた。又歐米進歩宗教家の一團の世界一週計畫も餘程熟したのであつたが、生憎歐洲大動亂のために中止となつたのは惜むべきことである。

をおさめるやうな人は皆温和な快活な人ではないか。

キリストが或る時カナと云ふ所の結婚式に行かれた。何しろ一週間もつゝいた祝宴であるから、中途で酒がきれて了つた。キリストは母の命によつて、桶に水を汲ませて其れを酒に化した。かう云ふ話が聖書にある。これを或る獨逸の學者が次のやうに解釋してゐる。初め宴會に集つた人は皆交際が下手だつたので、座がしらけて了つた。そこへ誰にも好かれてゐた快活なキリストが來たので、客人が皆愉快になつて楽しんだ。其有様の變化が恰も水が變はつた様だと或人が言つたのを後世の人々が終に不思議な話にしたのだ。又キリストが歩ると、彼の後から澤山の子供がついて行くと云ふことが書いてある。これを以て見れば、キリストは眞面目くさつた人でなく、誰れにも好かれた快活な人であつたにちがひない。

これを中世期に至つて誤解したのだ。そして宗教と云ふものは線香くさい寺の中で、坊さんがやるものと思はれるやうになつたのである。我々がこれを觀破しないでたゞ神の前に涙を流して祈りさへすればよいと思ふのは愚なことである。

我々は罪人ではない。勿論罪のない缺點のない人はありえないけれども我々は徐々としてこれを改めればよいのである。

私は勉強するのに規則などを設けたことがない。やりたくない時はやらない。其のかはり大論文などを書く時は二日でも三日でも精力を集中することが出来る。しかし私は怠つてもよいと云ふのではない。怠ると心の中が快々として楽しまない。要は自分の心を束縛しないで、面白くこれを發達させ

とか思ふ所があれば直ぐ止して丁ふ。これは宗教を説く人のやり方が悪いのであるから改めなければならぬのは前に云つた通りであるが、其れを聞く人の心がけにもよることであると思ふ。

第一宗教の儀式などはどうでもよい。我々の心を規則的にするには役に立つであらうが、左程重要なことではないから、窮屈を感じるなら守らなくともよい。さつき司會者がローマ書を讀まれたが、一體あのポーロと云ふ人は當時の才子であつて、心中に宗教上の要求と世間的野心との苦しい戦ひがあつた。それで自分も盛んに祈禱などをし、他人にもこれを強ひたのである。我々が必ずしもポーロをまねるには及ばない。

基督教は自分が罪人であることを自覺しなければ分るものでないと云ふが、これはあやまりである。自分は今日も悪いことをした。また悪いことをしたと、こんなことを朝から晩まで考へてゐたなら、どうして此の世に生きることが出来やうぞ。ポーロなどの云つたことを見ると、基督教は非常に窮屈なものゝやうに思はれるが、必ずしもさうでないことはキリストに至つて明かだ。基督教はもつと自由なものである。我々は窮屈なものを棄てゝ心のまゝに進むことが必要であると思ふ。

宗教生活を送る人は瘠せてゐて青い心配さうな顔をしてゐるものと思つてゐる人が多い。さう云ふ人は私などのやうな肥えたものが説教をするのを、何だかかう不都合だと思つてゐる。これは甚だしい謬見であつて、最もよくキリストの肖像にあらはれてゐる。繪畫のキリストを見ると、どれもこれも病人みたいな憂^{うれ}しい顔をしてゐる。もしキリストが事實あんな人であつたなら、どうしてかやうに多くの人に精神的感化を及ぼし得たであらう。早い話が、大隈伯でも、桂公でも、伊藤公でも、人望

な思ひをさせず、従つて何人にもうらまれないやうにしなければならぬ。自分は一人も敵を持たないと思ふと、心が實に朗らかである。

佛教には何千巻と云ふ經典があるが、これが人心を支配する力は微々たるものである。我々は必ずしも聖書を讀み説教を聽く必要はない。と云へば餘りに奇をてらふやうで悪いが、周圍から超越して自由の境地を見出すだけの勇氣はなければならぬ。かくしてこそほんとうにキリストを知り、基督教の眞髓をつかんで、自由なる宗教生活を送ることが出来ると思ふ。

るにあるのである。

私はこれに就いて、身體の運動と精神の修養と極めて似てゐる點があると思ふ。ボート、ペーサー、テニスなどはやつて見て大層面白い。けれども元來生理的に考へて出来上つたものではないから、運動が身體の一部に限られるさうひがある。之に反して西洋のジムナジウムになると、かう云ふ大きな室に種々なる機械があつて、これを順に一廻りやれば、身體のあらゆる部分が運動するから生理的に非常な効果はあるが、餘り規則的であるから、面白味は甚だ少い。

フランクリンが十三戒を設けて修養したことは人の知る所であつて、多くの牧師などの力説するものである。私もこれを悪いとは思はない。けれどもかゝる修養法は前に云つた機械體操のやうに窮屈であつて、餘り効果がない。要するに修養しようと云ふ心がけさえあれば、後はなるべく趣味のある方法でやるのがよいのである。

けれども、私は面白味のないやり方を全然やめるとは云はない。岸本君などのやつてゐる靜坐法などもやる人はやつてもよい。たゞどうしても面白くないと思ふならやめてもよい。外にも健康を増進する方法は幾らもある。精神の修養も亦これに類する。孔子曰く、心の欲する所に従ひて矩を踰えず。とこれなどは修養の極致であつて、また立派な自然主義である。心の欲する所に従ふのは誰にも出来るけれども、矩を踰えない人は少い。

もう少し、私は宗教生活の自由なことをお話したいと思ふ。外から壓迫を受けないためには、内、自分の心にわだかまりのないやうにしなければならぬ。先づ我々は腹を立てないやう、人に不愉快

難路十里相伴ふた兄弟が、
袂を分つ羽村の悲劇。

放浪自由の水は平原十里を流れ、
香魚を育て、砂舟を泛べ、
浅瀬を人の渡すに任せて、
すゑ六郷の濁を厭はで海に入る。

囚はれた水は、
人が穿つた狭い一律の道を守つて、
曲折も少なく、魚も棲ませず、
小金井の堤に櫻さかすほか、
唯だ平凡の道行をする。

それが淀橋に来て、
沈澄池に湛えられ、
濾過池に通され、
それから地下冷鐵の暗黒に投げられ、
管から管に限なく分けられて、
二百萬の人が住む都の底を這ひめぐる。

源の溪谷にたはむれた水は、
こんな身の行末を、
夢にだも思つたらうか。

しかし、この水の囚はれなくては、
東帝國文明の都は無い。
水はその囚はれを誇るがよい。

九重の雲深きところにも分け入り、
裏店の貧民窟をも見舞ひ、
誕生の産湯となり、
臨終の末期の水となり、
學者の胃にも白痴の腹にもひとしく入り、
美人の膚を洗ひ、肴の腸を灑ぐ。
囚はれの水の功德は、
大慈大悲の甘露では無いが。

若しや人道を無視した、
暴虐な敵が侵入して、
羽村の堰を破つたら——

水道の水

岡田哲藏

甲斐の東北、北都留の郡、
北には雲取山、大洞山、
中王院山、笠取山が連城と聳え、
南には大菩薩の嶺が峙ち、
西を倉持山、鈴庫山が閉ざした、
神秘深く籠むる山間の溪谷。

山が生む水が集つて溪流となり、
谷に誘はれて東に向ふ、

一の瀬川と柳澤川と、
藤尾の山麓で手を握り、

丹波山を過ぎて丹波川となり、
後山川、小袖川を容れて、

武藏に入れば、
名さへゆかしい多摩川となる。

南と北の山々から、
斷間なく溪流の貢を受け、
氷川では日原川を合はせ、
御嶽を繞り青梅を過ぎ、
やうやく狹隘の山間を出ると
武藏の平原、
自由濶大の廣野が、
眼前に開かれる。

悠々として流るゝ行く手を、
思ひもかけぬ人工の堰がせきとめる。
束縛に甘んずる流は、
人の手の導きに従がふ。
放浪不羈の流は、
堰を跳躍して走る。

想へば我々も一杯の水では無いか。

それで自我を最上に實現させたいではないか。

あゝ空しく流れる水、

無限の悲哀を思はせる。

いづくともなく水音が聞こえる。

『人の子よ。』

その同情を我等に寄するな。

おのがまゝに流るゝとも、

囚はれの道に入るとも、

何の爲に人は我等を用ふとも、

我等が本來は、

水素と酸素。

元素としては、

宇宙と共に、

不増不減、

絶對清淨、

結べる個體は千變萬化、

その變幻を何とて嘆く、

あはれ、人の子』

我が夢は水の音に破られた。

『滄浪の水、

清まば以て我が纓を濯ふべし。

滄浪の水、

濁らば以て我が足を濯ふべし。』

昔し覺えたからうだが、

ゆくりなく想ひ出される。

清むも濁るも、

纓を濯ふも、足を濯ふも、

無心に流るゝ滄浪の水。

その面影を、

我はいま、

我が水道の水に見る。

(四、六、一七)

いな、一人の氣狂ひがあつて、
幡ヶ谷あたりの水道の築堤に、
爆彈を投げたら——

その結果は想像にあまる。

山林の扶植。

水源の擁護、

沿道の保障、

人は水を歡迎するに勞を惜しまぬ。

雲と蒸し、雨と降り、

峽を傳ひ、谷に落ち、

流れ流れて、

我家にいたれる遠來の客、

我はそれをねぎらふ。

晝となく、夜となく、鉛管に充實して、

鏝を回すごとに、

惜しげなく器に充つる水道の水、

我はその功德を想ふ。

かく觀じつゝ、

我が用ふる水道の水、

一杯の水も尊とい。

成るべくばそれを飲んで、

我が體內に迎へたい。

それが最上の好遇であらう。

然し我々は面も洗ふ、脚も洗ふ、

汚れた衣も洗ふ。

湯水を吞むときに、その器も洗ふ。

人の體に入つて血となり、腦をも養はゞ、

水は満足であらう。

徒に下水に流されては、

如何に不満であらう、

我はそれを憐れむに堪へぬ。

一杯の水にも遠い因縁がある、

それは流れの寸斷である、

そしてまた一の個體である。

個體にはそれに最上の務めをさせたい。

純粹經驗と直接經驗とを強ひて區別したのは誠に奇怪の觀がある。反對論のあるのも亦この點である。かく區別するは純粹なる經驗そのものゝ性質上果して妥當なりや否や、かくの如きは却つて二元論の弊に陥り随つてその孰れの根柢をも薄弱ならしむるものではあるまいか、純粹經驗が凡ての展開發動する源泉であるならば、直接經驗といふやうなものを立するは矛盾ではないか等の疑問が生じて来る。斯うした疑問は予の初めに經驗した所のものであつた。けれども以上の區別は論理的意識のみならず、予の經驗的意識にも甚だしく制限されたことは事實である。たとひ論理上凡ての意味凡ての事實が純粹經驗によつて説明し得るとしても、自我の眞實なる根柢を捉へむとした予はたゞそれだけでは満足出来なかつた。純粹經驗そのものゝ内において直接自我に接觸し透徹し得ない予は、たゞ漫然と自分の内面的經驗を無視して以上の區別を放棄する勇氣はなかつた。尤もこの區別を互に相容れない而も同時に存在する二元的實在のやうに考へられるのは、予の固より欲しない所である。かゝる見解は自動自發的な流動經驗そのものゝ性質から言つても誤謬であることは勿論である。

宇宙的生命たる實在はいかに展開するかといふ哲學上千古の大疑獄は、最近ベルグソンによつて取扱はれ、彼れの大著述は驀然この問題の解明に向つて努力を示したことは、吾々の既に了知する所である。然し吾々自我の發生を究めむとするものはこの問題の概念を更めて『純粹經驗はいかなる逕路によつて進化發展するか』と問はねばならぬ。そは孰れでも大體の意味において同じやうであるけれども、かくするときは問題は吾々に近く接觸して來て經驗的確實の度も増して來ると思ふ。言ひ換へれば動もすると迷路に差行し易い概念的模索の範圍を脱して吾々の不可疑な内面世界に透入し得ると

自我の問題に就いて

野村 限 畔

一

予が惣卒不用意の間に物したる小著『自我の研究』について、世の聰明なる人々が與へられた忌憚なき批評は、甚く自分の蒙昧淺見を啓發し、予が言はむとして言ふこと出來ず、達せむとして未だ達し得なかつた點を教へ、或はその後予が朦朧に感じてゐた缺陷を明かに指摘されたことを深く感謝する。勿論極めて學識研鑽に乏しい予が、あの小著において遺憾なく所謂學者たるの責任を果さうとは夢にも想像しなかつたことであり、又斯ういふことは却つて予の欲しなかつた所である。あの小著を公にするに當つても自分は甚だしい僭越なることを思はずにゐられなかつた。けれども或る種の事情に強ひられて斷然公にした結果、世の嚴正なる批判を與かり聞くことを得たのは予の大なる獲得たるを失はない。たゞ残念なことにはあの書を出して以來予は田舎の故郷に歸つてゐて、新聞や雜誌さへも碌に讀むことが出來ない爲めいかなる批評が居るかを漏れなく讀み得なかつたのは遺憾である。予は世の批評によつて感じたことを猶少しく論じて見たいと思ふ。

二 實在の展開

する。けれども言ひ得ることはこの二者はたとへ異質的であるとしても、それは根本的に別異の存在でないことである。若し全く別異のものであるならば二元的になるが。これは到底解し得ない否あり得ない事柄である。吾々の経験や知識は凡て純粹經驗に淵源するが故に、それに反對するやうな全く對立的存在の生ずる理由は論理的に不可能である。予はその内面的差異を單に價值、意識の、狂熱的緊張にあると言つた。所謂『純粹自己意慾』は即ちこの意識の高調的自覺に外ならない。要するに以上の問題は、自分には猶不可解の點が多いのである。然しこの問題と關聯して更に次ぎの問題に移らねばならぬ。

三 事實と價值

純粹經驗を出發點とする予の立場は Psychologisch であるといふ評があつた。これはさういへば言へないこともない。しかし獨逸の マールブルヒ 派即ち論理派の評するやうな心理論と同一であるといふことは少しく妥當であるまいと思ふ。殊にベルグソンなどの立場をかくいふことは彼れを誣るものであるまいかと考へられる。彼れが『形而上學序論』において『眞の形而上學は經驗論でなければならぬ』と言つた經驗の意義は、決して從來の心理學者がいひ慣らして來たやうな意味でないことは勿論である。彼れが英國流の經驗論を批評して居るのでも解かる。即ち自然現象として思惟の對象となるべき底のものでなく、それを超越した言ひ換へれば思惟の範疇や法則を生産する根本的な、そして流動的な實在である。實在から見れば規範とか範疇とか法則などいふものは象徴に過ぎない。實在は

思ふ。さてかくして吾々は吾々の自動自發的な内面世界の創造的展開的過程を探究せねばならぬ。ただ一口に凡てのものが純粹經驗の中に包含せられ、そこから凡てが發展して來ると言つたところで、それは自我の現實的存在に積極的な意義を與ふるものではない。又凡てのものが純粹經驗から、同時に或は偶然に發生するものでなく、その過程には必然的な内面關係と且つ極めて微細なそして複雑な段階があると思ふ、これは吾々自身の經驗に徴しても、又馬鳴の所謂『三細六塵』の分析を見ても分かると思ふ。然らば自我はかゝる自發的過程のいかなる段階にいかやうに現はれるものであるか、これが吾々の問題であり『自我の研究』の根本目的であつた。しかし自分はその後この問題について何等の思索も研究も遂げてゐない、随つてその思想には少しの變化も進歩も見ないのである。而して予の『直接經驗』といふのは純粹經驗の分析概念ではなくて、その展開過程の一段階に過ぎないの言ふまでもない。

次ぎに純粹經驗の持續的過程をその性質に従つて研究するときは、こゝに興味ある問題が起ると思ふ。ベルグソンの言へる如く持續的過程は同質的反覆的でなくて、異質的創造的であるとするならば純粹經驗より發展して來た直接經驗の内容は、同質的反覆的のものであるとは何うしても考へられない、少くとも何等かそこに新しいもの新しい意味が生じて來なければならぬ。ヘーゲルが辯證的發展において述べたやうな形式は嚴密に應用出來ないとしても、ある意味においてそれに似通ふた形式を窺め得るのであるまいか。然らば純粹經驗と直接經驗とを内面的に區別し、自我をしてその積極的意義を與へしむるものは何であるか。これは自分にも解決しがたい大問題で、猶廣漠たる未知世界に屬

純粹經驗における事實と價值の融合は理解し得るが、たゞ問題はいかにして生活規範としての價值を立するかといふことにある。吾々の純粹經驗は價值であると同時に事實である。それは宇宙的な意味であつて未だ人生的ではない。言ひ換へれば吾々の生活を規定し指導するものとしての價值ではない更に詳言すればそれは認識論的に乃至道德的に嚴密な意味をもつた價值ではない。吾々自由の存在は絶對的な要求によつて眞理或は道德を規定し實現せんとする。眞理と道德は恰も人生における二大根柱の如き觀がある。然らばかゝる價值を立する根源はいづこにあるか、予の解答は頗る簡單であつた。眞自我即ち純粹自己意慾は自由であつて同時に絶對價值である。而して純粹自己意慾は最高主觀と最高要求即ち認識と活動との二機能を發展するが故に、前者は眞理的價值を規定し後者は道德的價值を立する。故に眞理と道德とは吾々の生活即ち認識及び活動を外面から規定する客觀的規範ではなく、眞自我の創造としての内發的表現である。

四 認識と戀愛

純粹自己意慾が何故に最高主觀と最高要求の二機能を有するかといふ説明は、恐らく何人にも不可能の問題であらう。それはたゞ自我の必然的な發展経路と觀るの外はない。勿論これらの機能は根本的に異なるものではない。絶對價值の要求たる點において二者孰れも同一のものである。最高主觀の認識論的論理的規範たる根據、乃至最高要求の活動的倫理的規範たる根據はこゝにある。これは眞自我の全體的内面性そのものに基因するのである。カントのやうに倫理的要求のみを絶對的無條件的のもの

これらによつて規定或は制限せらるゝものでなく、却つてそれらの意味又は範圍を規定するものである。所謂心理論者の個人的意識現象は論理派の人々のいふやうにその制限されたものである、然し純粹經驗は個人的な意識現象といふこと出来ない。何故といふに、個人的思惟經驗的主義を超越した純粹經驗は嚴密な意味で、心理的とも又論理的とも云ひ得ないから。随つてそれを事實とか價值とかいふ範疇で規定すべきものでないから。斯ういふ意味で予は自分の立場を心理的であるといふことに同意出来ない。

事實と價值との渾一について種々の異論はあるけれども、西田博士の論じて居らるゝやうにこの二者は純粹經驗において根本的に融合して居ると解するのが適當だらうと思ふ。事實と價值とを截然と區別するは思想上においての事で、吾々實際の經驗においては純粹の事實と純粹の價值とを區別し得ないではあるまいか。即ち事實のみの經驗もなければ價值のみの經驗もないのである。事實と價值の區別は思惟發展の結果、純粹經驗が表現的に客觀化されたものだと思ふ。ベルグソンが事實と自由との關係を（意識の直接において）論じた意味も亦この點にあるのであるまいかと思はれる。眞實なる自由の存する全自我の内發的活動は、即ち予の直接經驗である。自由のある所必ず價值がある。自由と價值とは離して考へ得ないものである。如何となれば 自我の全體的活動そのものは自由であると同時に價值であるから。狂熱的な内面活動即ち要求は自由と價值の渾一を外にして何者でもない。だから必然と事實とは思惟が純粹經驗の内面生命を捨象して構成した外面的形相に過ぎない。内面的に見れば必然は自由であり事實は價值である。

と超個人性とはかゝる認識の實在的渾融に基因する。而して愛は當然倫理的要求をも包含するはいふまでもない。この内面的體觸的愛を外面的象徴的に思索し、個人的に實現せむとすると、そこに愛の寂寥と悲哀と幻滅とが現はれる。

猶この外論じて見たいと思ふ重要な問題が二三あるが、今は省略する。予の著述が歴史的研究に疎であるとか倫理と宗教とを區別したとかいふことは、自我の研究と直接關係のない枝葉の問題であるから茲に論ずる限りではない。

(六月十五日稿)

となして認識作用をたゞ現象性の上にのみ規定したのは誤謬であると思ふ。眞理的價值を規定するものは道德的價值を規定するものと同じく、矢張り絶對的無條件的な要求そのものであるまいか。否らざれば最高主觀は論理的規範たる本質を失ひ、その普遍的妥當性を要求する根據は單に抽象たる現象的一般性に止まりて經驗的內實性を遠かつて來ると思ふ。心理派のやうに個人的經驗の感覺から眞理の客觀性を抽き出すは勿論不徹底である。けれども純粹經驗の內面的事實へたとへそは感覺的のものであるとしても、を排斥せむとする論理派の態度も同じく不徹底なものである。

こゝにおいて問題は一轉して認識そのもの、本質に接觸せねばならぬ。認識は單に客觀の模寫或は象徴化に過ぎないであらうか。認識の妥當性はその體驗的內面性にあらずして先天的なことに存するであらうか。認識は單なる象徴化であるといふことは物象を一般化し單純化する科學的認識にのみ言ひ得ること、眞の認識は物それ自身を端的に如實に內面的に把握することであるまいか。これは既にベルグソンも痛論した所である。たゞ予のこゝに特に力說せむと欲することは、認識の最高形式は何であるかといふ問題である。最高主觀の絶對的要求たることを是認する予は、愛を以て眞の認識だと思惟する。愛はいまだ象徴化的理知の開發せざる内面經驗の純粹なものである。そはむしろ感覺的本能的なものであるが、而もそれ丈け眞の認識に近いと思ふ。『愛は知なり』とか言つた古人の言は洵に眞理である。プラトールが愛を高調したのも又この意味に外ならぬ。故に予は斷言する、異性間の戀愛は人間認識の最高形式であると。およそ戀愛ほど狂熱的な直接的な且つ純粹な透徹的認識はないと思ふ。それは認識であると同時に活動である。知的融合にあらずして情意的渾一である。戀愛の絶對性

次變化することを得る位置に身を置かなければならない。こゝに於てか彼等は常にある固定したる團體とは衝突を免れず迫害をも豫期しなければならぬ。

こゝに彼等は生活上に於ける二重の苦痛がある。

今の時代は民主的傾向の時と稱せらるゝが、この平等の傾向は特に優秀なる思想を懷くものに對する迫害である。哲人の意義を思ひ、アイデアリズムの何たるかを知るものに對する迫害である。時代の傾向に催されたる人心は他の高下優劣を認めざるのみならず、自己の存在の權利を主張する心は他との優劣を自ら比較して他を尊敬するの心を失はしめた。

謙虛己を空うして他に問ふの心はなくなつて、皆自らを以て是なりとする。他を批評する場合にしても徒らに我見を立てゝ漫罵をこれ事とし他の主張そのものを見ない。

この惡平等の結果はたゞ押の強いものが勝つといふことになつて長者に導かるゝといふ意識の回避となり又導くといふことの不可能となる。

然しながら見やうによつては何物の中にも眞理はあるのであるからこの傾向を一概に排斥し去るべきものではない。

現代は民主主義の時代といはるゝが如く一方にては又個人主義の時代である。私はまづこの事を是認しなければならぬ。而して個人の思想の進歩は無限に續くべきものである。けれども又その間には無數の階段がある。しかしながら人はその時その時の程度に於て自ら持てるものを最上と考へたがる傾向がある。故に老人は青年の思想を理解せず、青年は老人の考に融和せず到るところに悲劇を惹

思想家の生活

鈴木 龍 司

思想家がいかに深遠なることを書齋の中で考へて居たとてそれはその人の勝手であつて社會は敢へて關知しない。もしもその人が社會生存の權利を主張し何等かの物資を得んとするならば當然その社會の要求するところの何物かを供給しなければならぬ。欲望に對してそれを充たすところのものに向つて社會は相當の報酬を與へるからである。

しかるに時あつてかある思想家は社會の常態を破壊せんとし現在の社會の要求せざる價值を民衆に強ひんとする。故にその社會は彼等に存立の意義を認めない。加之、その社會民衆の一般より數歩進んだ説をなすものは却つて危險視せられて迫害を免れない。而してその危險視の取り去らるゝ頃にはその思想は既に民衆に傳はつて思想家の任務は終つてしまふ。思想家は常に新らなる價值を民衆に傳ふるを以てその責務としなければならないからである。

こゝを以てたゞ考ふことに満足する純粹なる思想家は生活の上に於て非常なる困難を覺悟しなければならぬ。

又忠實なる思想家はたゞ考ふことを以て考へだけに止めしめず、これを體驗し、これを實行に移さんとの努力を必然的に伴ふから、彼等がもしも實際生活に携はる時に於てはその思想の進歩と共に漸

これ以外には出でられまいと思ふから特別に神の恩寵を受けたといふクラージュの職の如きが廢せらるべきは勿論、専門的宗教家も専門的教育家も漸次その跡を絶つに至り、いかなる意味に於ても人は他人の手を借りることは不可能となつて自得の宗教、自得の教育こそ最も徹底的なものとなるであらう。故に舊來の思想家の片手間であつたこれらの職も漸次彼等から離れ去つてその生活はますます困難となり思想そのものを以て身を立てることは殆んど望むべからざることとなる。

こゝに又思想家の生活に對する第三段の困難が横はるのである。

(一九一五、六、一六)

起しつゝあるのだ。故にこれら相異なる二つの思想が相會したる時に一が甚だしく優秀にして他を打破する場合には問題はないが近時の傾向はその差をして極めて小なるものとなさしめつゝあるが故に却々他は一に相下らぬ。

だから傳道といふことにしても、教育といふことにしても他力的にたゞ教へ込むといふことは極めて困難にして又望むべからざることとなり來つた。こゝに唯一の遁場は傾向の差といふことであるが傾向の外に高下のあることも勿論であるが故に識者はたゞ黙することはしやうが腹の底からはかゝることでは満足しまいと思ふ。而して理想家の努力は無限に續くのである。

しかしながらいかに理想家が努力をしたとて直ちに萬人に對して優越權を主張し光明を光照する事が出来るやうになるのは容易なことではあるまいから彼等は當分自らを苦しめることを以て満足しなければならぬと思ふ。たゞ自己に與へられたる道を忠實に歩むだけそれに伴ふ苦痛を平氣で甘受するだけこれがせめてもの理想家の行き場であらう。諺にも苦勞した人でなければほんとうのところは解らないといふが如く眞に努力し苦心するところには人に教へる何物かゝ生れやうと思ふ。

けれども又自己の體得したる思想を他に傳へんとするが如き努力は眞の思想家にあつてはそれをするだけの餘裕もあるまいし、そんなことをして居ればそれだけ自己の進歩が遅れることであらうから眞の思想家のなすべきことではない。眞の個人主義的思想家はこれからあれ、あれからこれとつぎつぎに與へられる問題を斷へず身を以て解決して行くより外には途がない。

この眞の苦闘を見る人が見たならば傳道ともなり、教育ともならう。これからの宗教も教育も私は

充ち満ちた。

廣い荒野原に一本、此の巨木は立つて居た。嵐の吹く時には、此の巨木が一番大きい聲を出して叫んだ。

音の無い晩には、此の木の影が一番寂しかった。

そして此の巨木は永劫に死ななかつた。

○新らしい國へ

しめくとした村雨が晴れると、南半球の夏の國に秋風が蕭殺として吹いて來た。夢の様に森の梢やら、屋根々々に輝いて居た日影がにぶれて行つた。

其は、今年産れた燕の兒が自由に空を翔ぶ様になつた頃であつた。

一羽の爺なる燕は大空を翔びながら叫んだ「もうそろ／＼俺等は新らしい夏の國に行かざるまい！」町々村々の軒下の巢からも、山のかげ、森のうらからも百羽千羽群をなして燕どもが翔んで來た。

「何か不思議なものが、私等を襲ふて來た。身體がしびれる様になつて來た。森の上にも、田畑の上にも虫が居なくなつた。あどろあどろしい何ものか私達の身に迫る。新らしい夏の國は何處にあるだらう？」と皆が斯う叫んだ。

「見ろ！冬^{さきかけ}の先驅^{さきかけ}がやつて來るのだ。冬は雪の吹息を天地に吹きかけて、氷の刃で俺等を塵滅^{みなごろ}しにするのだ。見ろ！冬^{さきかけ}の先驅^{さきかけ}は最早あの高原に霜を吹きかけた！俺等は今此の舊い世界をぬぎ棄てゝ

生 死

三 浦 關 造

○ 巨 木

廣い荒野原の眞ん中に一本の巨木が立つて居た。幹は虚洞^{うつろ}で、殆んど皆老死した木皮^{かわ}の、生き残つた僅かな一部を傳ふて、大地の中から養分が梢の方へとのぼつて居た。枝は多くは枯れ盡して居たが一番上の枝振りのよい大きい奴が一つ生き残つて居た。春先になると、此の枝に小さな粘つく葉が、掌を開いた様に開いて、空高く吹く風に打戦^{うちそよ}いだ。

野中の路を通り行く旅人は、皆此の梢を仰いで感心して居た。野原には美しい花も咲き、野の一方には若い木の林もあつたけれ共、路行く人は皆此の巨木に見とれた。

生き残つた威勢のよい梢には空の小鳥も來て鳴き、山の大鷲も來てとまつた。村雨^{むらさめ}は此の梢をかすめて歌をうたひ、月は此の梢に宿した。

遠い村の翁は、毎朝此の巨木の頭から日の登るのを見て拜んだ。

冬の寒い日に、子供を連れた貧しき母が此の木かげに北風を避けた。

夏の暑き日に行商人が此の木かげに息ふて汗を拭いた。

毎年霜のちく頃になると、朝早く百舌鳥^{ひつばし}が一羽此の梢に來てキ、と叫んだ。其の聲は寂しい野原に

○ 蛇

(敵する者の最期)

黄色の南瓜の花の咲いた棚の下なる石の上で三郎は湯をあびた。夏の日が暮れかゝつて、一日の勞働に身體中の血が心地よくめぐり行く。父を手傳つて一日の野らの働きは楽しかった。母と妹とは已に夕飯の仕度をして居る。三郎は盥の湯を頭から肩から流した。

ところが叢と溝から蛇が四五匹飛んで来て三郎の血を吸はふとする。

三郎は其を手拭で追拂つた。けれ共又やつて来て、頭にも手にも、脊にも尻にも、容赦無く吸ひつかうとする。三郎はうるさいから、つと立上つて左の手を伸した。身體中に一ぱい力を籠めた。けれ共、蛇は差し出した腕に吸ひつかず、太つた股に吸ひついた。三郎はじつところへて居た。けれ共蛇がいよゝゝ吸ひついて、離れない處をねらひつけ、右手でバチと蛇の上を叩いた。蛇は逃げる間もなく、土塊の如く三郎の股の上に平たく、シャげて死んで仕舞つた。

○ ソール

(曩に妻を失ひ、次に兒を失ひ、終に母を失ひ、戦いて戦いて、四十度の熱に冒され、第三期の結核病にて病院に臥せる兄より鉛筆にて書き送れる)

ソールは生死の波の上に！大熱も大苦もソールには少しもふれぬ。ちよつとも心を落したりすることはない。生死の河が荒れ狂ふほど、ソールは其上にたかく上る。生死の波の岸を打つに任せてソールはたかく安らかに一切を見下してゐる。

毎日曙の色を苦しい悩みの中にガラス窓ごしに眺めて來た。けさは曙の色が殊の外美しかった。

新らしい夏の國に行かざらぬ！」

初秋の晴れたる日、燕の群は千萬羽、翼も軽く、北半球の夏の國を目がけて旅立つた。陸を離るれば海の上。島かげも船のかげも無く、翔べども翔べども空には果しがなかつた。けれ共「新らしい夏の國は何處だ？」とて一羽の兒燕でさへ嘆かなかつた。何千里の海を越えて、新らしい未だ見ぬ夏の國の光の流れは彼等を導いた。

けれ共數百里海の上で、早日が暮れた。浪の上も、大空も眞暗に搔き暮れた。

どこを振り向いても只闇！行方も鳥影もわからなかつた。それで燕は打たゝく翼を休めずに翔ばねばならなかつた。

けれ共遠い夏の國の光は、彼等の本能の奥に微かに輝いた。眼は見えなただけ共、心は微かに輝いた。燕は其をたよりに翔んで行つた。

闇の底に翔び盡して葬らるゝのかと思ふて、そろ／＼恐怖がさして來る時、東の空はほのぼのと明け初めた。闇をつんざいて、新らしい光が空に流れた。見る間に闇の帳は一重一重にはぎとられ、空は新鮮な輝きと喜びに充されつ、浪は金色の光を發した。

夜の闇は、一羽だつて燕を大浪の底に投げ込まず、一本の羽根をすら、むしり取らず、又その死の如き闇の色は艶々かな燕の身體を汚さなかつた。

そして燕の群は新らしい夏の光と、新らしい食物とに充された北半球の日本に着いた。木の實は果と梢に結び、水は流れ、木は茂り、町と村との穩かな軒下は彼等に新らしい宿りを與へた。

體したい、調和したい。予の小さき我れの調子は、常に此の大きいなる我れの調子と合ふて居りたい。如何にも此の調子は外れ易いに相違ないが、外れれば外れる程、予の小さき我れは調律を慾求して止まない。

予は此の大きいなる我れに憧憬して居る。予は常に何物よりも多く之を尊び、又何物よりも多く之を愛して居る。同時に予は、此の大きいなる我れが常に予を愛して居ると云ふことを疑はない。否、決して疑ふことが出来ない。如何にも此の大きいなる、我れの本體は愛であらうと信ずる。愛である、と云ふよりより良き形容を見出すことは、六ヶ敷からうと思ふ。此の生ける大きいなる我れは、實に愛である。

予は又、予の心に斯く愛として現れて居る所の此の生ける大きいなる我れが、歴史に現れて居る正義や歸趣の源泉であると信じ、又宇宙に現れて居る秩序や、意匠の根本であると信ずる。歴史には意味があるに相違ない。因果應報は事實であらう眞理と正義とは遂に最後の勝利者であると信ずる

は決して無理ではなく、寧ろ自然であらう。予は小さき我れの進化を信じ、人類社會の進化を信じ又宇宙全體の進化を信ずる。予は又、予の心に於て大いなる我れとして現れて居るものは、他の凡べての人々の心に於ても亦同じく、各自の大いなる我れとして現れて居るものであると信ずる。予の心に於て良知良能として現れて居るものは、取りも直さず社會に於ては正義となり道德となつて現れて居るものであり、又宇宙に於ては美となり眞となつて、現れて居るものであると信ずる。先祖を通し父母を通して予を人類社會に生み出したるものが、予に眞を解する理性と、美を味ふ美性と、善を辨へる徳性とを與へたものであると信ずる。且つ同時に予をして此の不思議に便利にして而も無限に美麗なる天地萬有の間に存在せしめるものであると信ずる。斯く信ずるは寧ろ當然の事ではあるまいか。

斯くの如く、予の心にある大きいなる我れは、人類社會の支配者であると同時に、天地萬有の統御者である。天と云ひ、理と云ひ、上帝と云ひ、造

如何なる意義にて予はクリスチヤンなりや

岸本 能武 太

予が基督教を信するは、何か物質上の御利益ごりえきが欲しいからではない。又精神修養の爲め便利があるからでもない。予は決して斯くの如き寧ろ外部的の理由の爲めに、基督教を信するものではない。予は決して無理に基督教を信するものではない。予が基督教を信するは自然的である。恰も餓えた鷹が豆を拾ひ得て、之を食ふが如く、又渴したる鹿が溪水を見出して、之を飲むが如きである。予は決して故意に基督教を信するのではない。自然に信ぜられるのである。又信ぜざるを得ないのである。

予には心中に「神聖なる不満」(Holy Discontent)がある。現在と現實に對して、予は「快活なる満足」(Cheerful Content)を持つて居るが、同時に予は如何にしても現在のみを以て又現實のみを以て

満足することは出来ない。予の心中には、常に予の小さき、我れよりもより大いなる我れがある。而も此の大いなる我れは、進めば進む程大きく、又登れば登る程高いが、同時に小さき、我れを離れず去らず、常に之を招き導いて向上せしめるものである。小さき、我れは、常に此の大いなる我れを憧憬して止むことが出来ない。さらば此の大いなる我れは所謂「理想」であらうか。或る人々は、斯く云ふて満足し得るかも知れないが、予の心は、それでは満足し得ない。理想は、考へである。抽象的である。死んで居る。命がない。之に反して大いなる我れは、力である。具體的である。生きて居る。命がある。「神聖なる不満」は、常に予をして此の大いなる我れを憧憬せしめて止まない。予は此の大いなる我れと一所になりたい、合

る。基督の教へた眞理とその現した人格とは、決して古くはならない、又時勢に後れない。彼れは決して形式の人ではなく、精神の人である。彼れの精神は、凡べての時代に適合すべし、又凡べての境遇に有益であらう。「汝等の敵を愛せよ。斯くするは、汝等の天の父の子とならん爲めなり」と教へたは彼れではないか。「天に在す汝等の父の完全なるが如く、汝等完全になるべし」とは彼れの宗教の根本義ではないか。「父と母とを敬へ、又己れの如く隣人を愛せよ」と云ひ、「汝等人にせられんと思ふ如く、汝等も人にその如くせよ」と云ひ、「天に在す父の旨を行ふ者は、是れわが兄弟、わが姉妹、わが母なればなり」と云ひ、「人の子の來るも人を使ふ爲めにあらず、反つて人に使はれんが爲めなり」と云ひ、又十字架上に在る時に、己れを殺さんとするものゝ爲めに、「彼等はその爲す所を知らず、神よ彼等の罪を赦し給へ」と祈りしは、實に彼れ基督にあらずや。

基督は實に言行一致の人である。神の天父たり人の兄弟たるを教へ、又愛神愛人の道を説いて、

而も身自ら此の教又此の道を歩んだ人である。己れの死を以て愛敬の教へを證明した人である。その天真爛漫にして高潔なる人格は、常に我等をして愛慕措く能はざらしめるではないか。その婦人や子供を愛憐し給へる溫和と、學者や有司を畏縮せしめた威嚴とは、彼れの品性の如何に多方面にして圓滿なりしかを思はしめるではないか。基督が神であるか人であるかは、予に取つては餘りに大切な問題ではない。予は只基督神を満足に我等に現したものを外に知らないのである。基督は如何にも神の形であり姿である。予は二千年前の基督を己れの師とし又主として、毫も心に不足を感ずることなく、又如何なる人に對しても耻かしと思ふことはない。

基督なり基督教なりに關して、我等が有する知識は、重もにバイブルから來るに相違ないが、予が、バイブルを尊重するは、その中に尊重すべき多くの事柄が書いてあるからである。予はバイブルに書いてあるから、凡べての事が眞理であるとか、或はバイブルにある事は、凡べて尊重すべき

化と云ひ、自然と云ひ、神と云ひ、天道様と云ひ、眞主と云ひ、眞神と云ひ、エホバと云ひ、アラと云ひ、「知らざる神」と云ふ。名は異なれども、物は同じである。星の動くも此の神の力であり、花の開くも此の神の恵みである。その美は、顕微鏡が示すよりも精巧に、又その眞は望遠鏡が現すよりも遠大である。而も此の神は大いなる、我れであり、又實に愛である。予の心は、斯くの如き神を要求して止まない。予の憧憬する神は、眞の神、善の神、又美の神、而も愛の神である。心中の神であると同時に、歴史の神であり、又宇宙の神である。

今翻つて基督教の神を考ふれば如何。そは心の清き者の見得る神である。日を善き者にも惡しき者にも照らし、又雨を義しき者にも義しからざる者にも降らす神である。隠れたるに見て顯に報ゆる神である。一錢で二羽も買へる雀を養ひ、又勞めず紡かざる野の百合花をも装ふ神である。我等の頭髮を悉く數へ給ふ神である。我等が蛇を求めても魚を與へんとする神である。此の山にても拜

せず、彼の山にても拜せず、靈と誠とを以て拜すべき神である。神の國とその義しきとを求むれば凡べて必要なものを我等に與ふる神である。九十九匹の迷はざる羊を置き、一匹の迷へる羊を尋ね給ふ神である。人の罪を七度を七十倍する程赦し給ふ神である。

予は一度基督教の神の事を聞くや、實に一見舊識の心持ちがした。決して新らしい神或は他國の神とは、感じなかつた。その反對に、これこそ丁度己れが暗々裡に探して居た神、即ち大いなる我れであると云ふ様な心持ちがした。予の心の要求と基督教の神とは、實に符節を合はすが如く翕然と合たのである。斯くして予は衷心に云ふべからざる満足と平和と喜樂とを感じ、常に自ら「神を信ずるは凡べての事に利あり」と覺つて居る。

さらば基督その人は如何。或る人は云ふ、「基督も既う昔臭くなつて、何んだか時勢に後れた様だ」と、併し根本的に云へば、眞理に新舊はない筈である。正義に遠近はない筈である。我等は稍もすれば、時間と空間との囚となり易いものであ

の所謂基督教に囚はれて居るらしい。基督教臭くなつて居るらしい。斯くの如きは決して基督の精神ではあるまい、寧ろバリサイ宗やサドカイ宗の輩と、何んの撰ぶ所もなからう。予自身は若し假りに今日に於て、基督以上の人物が出て來て、予に基督が與ふるよりもより以上の満足を與ふる様なことがあつたならば、牛を馬に乗り替へるに躊躇せず、我れ先きにとその人に隨ひ、その教を聞き、その道を歩む決心である。そは予が斯くするは取りも直さず、基督の精神であると確信するかである。否、基督自身も亦必ず斯くせられたであらうと確信するからである。

併し基督以上の人物が出ない限り、予は基督に

隨ふものである。否、予は決して基督以上の人物の出現を待つて居るものではない。そは既に基督によつて衷心の満足を得て居るからである。基督の精神は、あらゆる境遇により適用によつて、愈々益々その内容を豊富にしその意義を發揮すべきを疑はないと同時に、予は既に基督によつて發表せられたる宗教上の根本眞理は、再び重ねて之を發見する必要はないと信ずる。予は基督教によつて、衷心の要求を満足せしむべき望みを得て、平和と喜樂とを感じて居る。故に予は進んで基督教を人に説くを憚らぬものであるが、そは全く此の衷心の平和と喜樂とを人に分たんが爲めに外ならない。

であるとかとは、考へない。恰も今日の基督教には基督自身の知らないことが澤山這入つて居る様に、バイブルの中にも予が信ずることの出来ぬ事柄が澤山書いてある。予は此れ等を信じないし、又信ぜずとも宜いものと思ふ。同時に、バイブルの價値は、之が爲めに少しも影響を被むらないものと思ふ。予はバイブルの中に、己れが金銀であり寶玉であると思ふものを澤山見出して、満足し得るのである。瓦片や土塊は有つても無くても、之が爲めに金銀寶玉が減ずる心配はない。

予は斯くの如き基督教を信じて満足し且つ喜んで居る。或る人は云ふかも知れない、「汝の信じて居るは基督教の全體ではなく、單にその一部分に過ぎないから、汝はクリスチャンではない」と。

或は然らん。然れども、予はこれで満足して居るのである。他人から見て予がクリスチャンであるかないかは、予に於て何かあらん。予は予の流義のクリスチャンである。否、予の立場から見れば、予をクリスチャンでないと云ふ人の方が、予よりもより多くクリスチャンでないらしく感ぜられ

る。予は、一方に於て、バイブルの中から甘いものだけを選び喰ひをすると同じ様に、他の一方に於て、基督教以外の如何なる道又如何なる教でも、その中に甘いものがあるならば、少しも遠慮せず、進んで之を取り入れる考へである。凡べて人間は神の子である。凡べて眞理は神から出たものである。我等は、物質上に於ても又精神上に於ても、凡べて有益なるもの善良なるものを取り入れるに於ては、時間と空間とを超越したいものである。我等は常に眞と善と美とを追求すべきで、誰が云ふたからとか、何處から出たからとか、何時代のものであるからとか云ふ様なことを考へてはならない。予は實に斯くの如く開放的で同化的で包含的であるが、眞に日本人の特長であり、又同時に基督教の特長であると思ふ。

試みに今基督が或る田舎に大工として現れて、同じ精神的の宗教を宣傳すると假定して、今日の自稱基督教徒は云ふに及ばず、牧師や傳道師や宣教師など云ふ輩の中に、果して若干人が喜んで彼れを向へ彼れに隨ふであらうか。彼等は實に今日

續けて居る所より見れば、この結論は何時までも承認せなければならぬ。獨逸は全國民の勇敢なる血を擧げて望みなき戦ひに注出し、其の減じつゝある身代を消耗しつゝあるのである。

けれども若しも獨逸が其の堅く主張して居るドクトリンを棄て時勢に合致するに於いてはこの結論は寧ろ獨逸國民の救済となるかも知れない。

Leipzig の初より Waterloo に終れる戦ひは夫の兇暴にして利己、酷薄を極めたるコルシカ人食鬼の支配より佛國民の解放を成就した。St. Helena は其れを確めた。Bismarck は小ナポレオンを永久に葬り去り、佛國政治家等は共和國を建設するに到つた。

現今の獨逸はこの Waterloo, この Sedan. この St. Helena を持ちたつために向ふ見ずに進むのであるか。既に百萬の獨逸人が犠牲にせられてあつた。百萬の獨逸の家庭が破壊せられてある。而も尙他の幾百萬の國民が、彼等を滅亡に陥れつゝある所の獨逸皇室及び軍人社會よりの訴へを理性と個人自由との法廷に取り上げる獨逸有識者の面

前に於いて死なねばならないのであるか。獨逸人は彼等の支配者が不才にして失敗せる事を充分に知つて居る。

獨逸外交と獨逸の武斷主義とは破裂した。

其の内閣其の在外使臣たるを問はず、皆粗忽なりしカイゼルの寵臣等は獨逸國をして英佛露の大勢力と戦ふの機會を早めたのであつた。

Bismarck は決して斯く爲す事を欲しなかつたであらう——。Bismarck ならば先づ、軍隊を戦線に立たしめる前に、其の壞國に “free hand” を與へる前に英露兩國の意嚮を確かめ彼れが千八百七十年に於いて爲したるが如く佛國を孤立せしめたであらう——。老帝、よし多能の人でないにせよ、

凡べての判斷は自己以外に他の援助をも要すると信じ、偉大なる人物を擧げて其の侍臣とし以て、慎重なる解決を爲せる點に於いては確かに彼れの孫なる現皇帝よりは優つて居つた様である。

ウィルヘルム二世は彼等の海外使臣が英露兩國戰意なしと報告せる一片の通牒を輕卒に信じたのである。かくて獨逸は英露兩國——過去に於いて

紐育より

高橋清吾

近頃のニューヨーク、タイムスに For The German People, Peace with Freedom. と題する社説が載りました。

米國に居る German-Americans に對する忠言としても、または米國社會の公平なる輿論としても、非常に堂々たるものであるから、茲に拙譯して御紹介致したわけであります。この論説の反響が大したもので英佛の各新聞は盛んに之を賞讃し、公正なる米國の代表輿論として記念するに足ると書いた由、同タイムスに見えました。

獨逸の新聞は之に反して紐育タイムスを以てロンドンタイムスのトゥールとなし不公平なりとして筆を揃へて攻撃した様です。

現に米國に居る獨逸人種二千萬人は各代表者を出して母國に對する援助の會合を開き、平和どこ

るか最後まで戦はん決意を示し、一千萬の愛蘭人々に和し、旺んに非聯合軍熱を煽つた様子です。此頃は獨逸の景氣が好いものだから、夜タイムス社の揭示場に行くとな澤山の German が旺んに氣煩を上げて居るのを見受けます。

膠州灣の保留問題は米國の各新聞紙で論じられて居ますが日本が犠牲を拂つて取つた以上、其の保留は止むを得ないと云つた様な論調に見えます。

獨逸國民に對する忠言

獨逸は敗北する。極まつて居る。

文明社會の非難の下に極度の軍備擴張 自由民權の破産を敢てし、其の友としては退歩瀕死の奧土兩國。而も歐洲の三大列強、多くの中立國より聲援を受け得るこの三大強國と死物狂ひの戦争を

Ideaをば知らぬものはない。かゝるが故に若しも英佛露の三國が獨逸を制止することが出来ぬならば、伊太利、瑞西、和蘭、巴爾幹諸國等また聯合軍を援助して兎に角にもこの大戦争の始末をつける事であらう。何故ならば、彼等自身の平和安寧のためには、各國は目下歐洲の中原に於いて世界の大危険場、大難場となつて居るミリタリズムの大計畫を破壊せねばならないからである。

*

戦争を終局せしむる唯一の途は、獨逸の敗北にある。ライン城砦に追撃せらるゝ時には彼れは死物狂に抵抗するであらう——。ベルリンに追ひ詰められても彼れは猶ほ且つ露軍と戦ふ事であらう——。乍併、何のために？、何が故に？、獨逸國民は敵軍勝利の最後の日以前には既に悉く戦死して仕舞ふと決心して居るためであるか？。

否な、決して左様ではない。砲壘にある疲れ切つた兵士共や、悲慘な状態に陥りつゝある國民は只單に皇帝並びに軍人社會に盲従するのである。其れ故、若し其れ等の最高幹部が大打撃を受ける

時には、其のときが凡べての終局である。盲従盲信を含む向ふ見ずの Idea は戦争を繼續する事であらう。

乍併何が故に獨逸國民は其のブライドや官吏の肩章の威光を維持するためにこれ以上の犠牲を敢てしなければならぬのであるか？其れは、より多くの墳墓を意味するのみではないか？。其れはより嚴酷なる平和條件の加重を意味するのみではないか？。其れは、戦後の苛罰誅求を意味するのみではないか？。果して然らば、より恐るべき結末を告げる事は火を賭るよりも明かである。獨逸國民は何故に今日其の比較的善き結末をつける事を爲さないのであるか？。けれどもこれは革命である。其れはさうかも知れぬ。定義は何にでも必要であるから、さう呼んでも一向差支へはない。

今吾等は全世界史の何の頁かに戦争の最中に全體國民が擧つて其の國君に反對した事實を見出す事が出来やうか？。けれどもこれに對する問答は歴史家に委ねてよろしい。また夫の忠實なる獨逸國民——祖國を愛するの甚しき而して帝王的大理想

は斷へず衝突し、現在に於いても別に獨逸を牽制する上に共通の利害を有せざる二國——を同盟せしむるに到つた。

獨逸參謀本部の駭くべき不見識は自國をマッサカサマに其の無謀外交が準備せる陷罪に投じ、帝國は其の二倍に餘る力を有する大敵と戦ふ事になつたのである。

*

かくの如くにして、かのアイロンミリタリ、デジブリン並びに獨逸が過去四十年間多くの生産力を犠牲にして不斷の準備を急げる軍備萬能の眞價は試験にまで置かれた。

再びこの巨大なる帝王機關は破裂した。其の機關は決して役立たずではなかつた。實に獨逸の軍隊は其の實力、其の剛勇、其の武裝凡ての點に於いて優秀なるものであつた。しかしてこの機關がImpossibleを試みたのであるが、其の試みは致命の大誤謬であつた。實にや巴里への最初の進撃は不可抗のものとして計畫された。其れは獨逸參謀本部の計畫であつた。

果然佛國はこれを撃破した。露軍は東プロシヤ國境遙かに進軍した。巴里への侵入軍がNameよりAisneまで撃退され自耳義の戦線また聯合軍の優勢を示せる時に獨逸最後の敗亡は運命のブックに刻印を押し世界の環視者に確實なる論證を與へたのである。

獨逸の戦線は佛國境に近く退却するの餘儀なきに至つた。Calaisは其の脅迫から免れた。若しも獨逸がLilleに入りWattenを取り更にまた、幸運にも再び巴里の壁城近く進軍したとしても、其れが果して何の利益があるか。キチナー百萬の精銳はVosgesの雪融け時以前既に佛國にあるであらう。露國また無盡の精兵を其の戦線に立たしむる事であらう。

世界は今度の戦争に於いて決して獨逸を勝たせてはならない。恐らく勝たさぬ事であらう。若し獨逸の支配を受くる時があれば全歐の平和、安寧は地上より取去らるゝ事となるのであらう。數ヶ月前迄は世界は獨逸をボンヤリ知つて居つた丈であつたが、今日に至りては何人と雖も彼國の

のである。彼等は嘗てかゝる方法に依つて支配するゝ國民の如何に愉快にして、利益多きかに關する或るアイデアを其の故國人の頭腦に入れた事ありや否や？。

米國人の立派なる確信を變へ様と無駄骨を折る代りに、何故に米國獨逸種は其の故國人の改革に對して骨を折らぬのであるか？『國家は力である』と Treitschke が云つたが、彼はテニソンの『個人が衰へ、國家が發展する』と云ふ句から引いたのである——。獨逸では『國家は凡べてである』其れ故に國家のためには各人は何物をも犠牲とせなければならぬと主張して居る。

我等の觀念に據れば國家は一の社會組織にして、これに依り各人は各個の技能に従ひ自由に其れを發達せしめ、各人の目的は國家に依つて其の遂行を保證せられ安寧平和の内に個人の完全なる發展を圖ると云ふ所に存立の使命があると解するのである。

若しも米國獨逸人種が吾等の學說を應用したるの米國に於いて永く享樂するの特權を尊重するな

らば、彼等は當然に其の故國同胞に對して我等の制度學說は奴隸制度より個人の解放を意味するものなる事を知らしむべき筈ではないか？。この地球上には獨逸國民の如く自由の祝福を有益上享樂し得る國民はないのである。

獨逸が若し帝國主義、ミリタリズムの大抑壓より解脱し文明の光りに照らされるならば、夫の驚くべき獨逸人の天才は非常なる發展を遂ぐる事であらう。

獨逸國民に大打撃を加へると云ふ事は決して聯合軍の目的ではない、また世界の人々も彼等國民を擊破する事を欲しないであらう。これは實に彼等に對する高い高い尊敬の念から來たのである。けれども頑固不見識にして危險極まる獨逸の支配者等が粗暴なる目論見を立てゝ進みつゝある以上は彼等國民は、これら盲目にして傲慢なる支配者階級と共通の原因を爲す所に比例して其の勘定を支拂はねばならぬ事となる。

米國の代表的人物即ちエリオット博士カーネーギー氏の如き平和主義者等が獨逸のミリタリズム

の成就に飽迄も奉仕せんとする——が未だ戦争が敗け戦さでもないのに革命を起す様に勧められたからとてオイソレと乗る國民であると思へるかどうか？。これに就いては豫言者に任かせてよろしい。吾等は先例にも又は豫言にも拘泥しない。吾等は單に獨逸の敗北を確な事實とし若し獨逸が飽く迄戦ふとすれば、其の結果は國家國民の萎靡困憊、而も嚴罰なるセンチンスの下に苛酷なる運命に逢着する事を主張するのみである。

吾等は獨逸國民が光明を望みつゝこの來るべき大慘虐を避くる適當なる手段を取る事を希望する。彼等が光明を仰ぎ見るであらう——と云ふ事は目下の處甚だ疑はしいものがある、けれども、この米國に居る獨逸人種は彼等の故國に於いて暗黒に閉ざされ居る同胞のために、盡くすべき義務を持たぬであらう——か。米國に居る獨逸人種は獨逸の現在の地位並びに其の近き、遠き將來に關する眞實なる事柄を考へなければならぬ。

國內に於ては獨逸國民は全體の眞實を知る事が出來ぬ。全體の眞實を知らしむる事は最も必要で

ある。若し米國に居る獨逸人種がこの眞實を彼等に知らしめず、また帝王的武斷萬能的理想が今日に於て如何に其の價値を落しつゝあるかを知らしむる義務を果さず、而して、獨逸國民が戦ひつゝある敵は只單に獨逸軍人の鞘の中にガチャつく劍の絶えざる脅迫に對する文明の第一豫防線のために立つて居ると云ふ事を善く了解せしむる事を謬つたならば、其れは故國人に對して、不友情であり、甚だ殘酷なる態度と云はねばならぬ。劍は棄てなければならぬ。鞘もシャイニングアトマーも。若しこゝに居る獨逸人種が故國人と同じ耳を持つて居るならば、彼等は左様に語る事が出來ないのであるか？。

彼等は砲聲の斷へざる轟きより避けんがためにこの國へ來たのである。

*

彼等は自由と法規との美はしく結ばれたる土地——被治者の承認に依つてのみ成立する政府——彼等の選舉せる代議士が國家危急の際に發言權を有する制度に於ける平和と幸福とを求めて來た

宮 参 り

木 村 久 一

六

小供は正義たよしきの門を通るや否なや、夢から醒めたやうに我に歸つた。而して俄かに兩親のことを思ひ出した。『さうく、こんなにして居られないのだつた。』

併し彼は、宮に來てから早や一時間餘も立つたことには氣が附かない。まだ一分間ぐらゐしか立たないと思つて居る。故に大急ぎで清潔きよめの橋をも見て歸らうと考へた。

併し彼は、廣場に行つて清潔の橋を見ると、再び兩親のことを忘れてしまつた。而して又た熱心にそれを眺め始めた。

『これが橋とは實に不思議な橋だな。そしてこんな橋でありながら、少しも穢れて居ない、ほんとに潔い人は渡ることが能きとは、ますく不思議な橋だな。』彼は又た繰り返し繰り返してこんな事を考へた。而して今度は、二時間餘もかうして居つた。

さて、この廣場の一方には、大きな祭壇があつて、その上に聖火が熾んに燃えて居る。而してその周圍には、七人の祭司が今日も儀式を行つて居る。彼等は祈願の筈ある者の捧物を受け附けて、それを屠つて神に捧げて居るのである。それを何百人と云ふ人が、周圍に見物して居る。

が終焉を告げない内は吾等は永久の平和を得る事が出来ない」と主張する時に、凡べての謹直なる獨逸人は、かゝる事に耳を傾け善く了解して欲しいものである。何故ならば彼等世界の輿論を語るものであるから。軍事費税金の加重は戦争が延引すればする程毎月多額の増加をなして居る。無残なる死の手は日々夜々に人命を奪ひ去つて居る。

獨逸國民は今日直ちに戦局を結ばねばならぬと云ふのは、其甚だ大完全なる忠告であるかも知れぬ。併しながら彼等自身の幸福のため、彼等自身のホームのため、彼等自身の利益のため、彼等自身の將來のために、此れは眞實である。眞實なる忠言は否認する事は出来ない。(終り)

基督教同志會廣告！

△基督教同志會にては例年夏期講習會を開催せしが、本年より講習會を廢止し、今秋より新たに隔月毎に講演會を公開することに決定せり。

子供は、清潔の橋を眺めて居ながら、見るともなしにこの一場を見て居つた。而してほんとに氣の毒な事だと考へた。『併し祭司長は、傷ついた小羊を神に捧げることができないことは、何人もこの清潔の橋を渡ることができないやうに不可能だと云つた。さういふ事なら、この清潔の橋を渡ることの能さる人が居れば、この爺さんの小羊を神に捧げても可い譯だ。誰かこの清潔の橋を渡ることの能さる人が居ないか知ら。さうすれば、この爺さんの一人息子が助かるかも知れない。』

併し、そんな人が居る筈がない。故に老人はがつかりして、悲しさうな顔をして歸り始めた。

子供はこれを見て、可哀さうで可哀さうでならなくなつた。遂にたまらなくなつて、我を忘れて清潔の橋の方に突き進んで行つた。無論自分は少しも穢れて居ない人かとか、ほんとに潔い人かとか、そんな事を考へる暇もなく。

併しそれに片足をかけて見ると、逆も危険で渡られさうもない。何しろ見る影もなく錆び腐つた劍が、刃を上向きに、今にも落ちさうにかけ渡されてあるのであるから、これを渡るのは、危険でなくてはならない筈である。故に彼は恐ろしくなつて、折角かけたその片足を、思はず後へ引き戻した。

『これはいけない。逆も渡られない。』

併し彼は再び考へた。『併しこれを渡らないで置かれやうか。あの爺さんの一人息子が今死にかけて居るのだ。それを助けなくて置かれやうか。』彼は夢中でそれを二三歩渡り出した。

すると驚くべし、俄かに一陣の風が、岩の割れ目の底から颯と音を立て、立ち上つて來て、よろめく彼を支ふる如く、彼は安全にそれを渡ることが能きた。

遂に一人の老人が來た。見れば何故か非常に心配さうな顔をして居る。彼は一疋の小羊を持つて來たが、いかにも見すばらしい、瘦せた小羊で、おまけに犬にでも噛まれたのであらう。左股に大きな傷があつて、痛々しげに爛れて居る。併し老人は、祭司長の前に進んで行つて、これを神に捧げて貰ひたいと云つた。

すると祭司長は、直ちにそれを斷つた。それはこんな傷ついた小羊は、掟として神に捧げることができないからである。

併し老人は、杖とも柱とも頼んで居る一人息子が、大病で瀕死の状態にあるのであるから、こんな見すばらしい、傷ついた小羊であるけれども、どうぞおなさに受け付けて貰ひたいと、泣きながら哀願する。『美事な捧物を捧げたい心は私とても山々ですけれども、悲しい事には私はこの小羊より外には有つて居ないので。それでこんな捧物ですけれども、どうぞおなさに受け付けて下さい。さうして貰はないと、大事な一人息子が死んでしまいます。』

併し祭司長は、『それは誠に氣の毒だ。十分同情する。併しお前も知つて居るやうに、傷ついた小羊は、掟の禁じて居るところである。掟は破ることができない。故にこの小羊は、氣の毒だが受け付けることができない、どうしてもできない。この事は何人も、この清潔の橋を渡ることができないやうに不可能だ。』と云つて、どうしてもそれを受け附けない。

老人はこれを聞いて、絶望の餘りに目を据ゑてしまつた。彼は眞青になつて涙も出ない。聲も出ない。その有様は見るも哀れである。

七

子供は清潔橋を渡つた瞬間に、再び夢から覺めたやうに我に歸つた。『あゝ、こんなにして居られない。遅くなるく』併し彼は、もう正午近くであることには氣が附かない。矢張まだ二分間しか立たないと思つて居る。故に、『併し折角こゝまで來たのだから、序に集召つどへの筈らっぱも見て歸らう。ほんの一寸見て直ぐ歸るわ。』と云つて、かの廣間の方に駈けて行つた。

併し集召つどへの筈らっぱの前に立つと、彼は又たそれに引きつけられて、又た兩親のことを忘れてしまつた。

『成程こんな大きな筈では、大抵な人には持ち上げることさへも六かしい。故に吹き鳴らすことなどは、誰にも能きないだらうな。併しこれを吹き鳴らすことが能き人は、世界中の人民を呼び集めて、その君となることが能きるとは、實に不思議だな。』彼はこんな事を考へながら、今度は三時間ほどそれを眺めつゞけた。

さてこの廣間の後方には、今日も學者が學生に神の眞理を教へて居る。

今教へて居る學者は、八十歳ぐらゐな白髮長髯の老人であるが、俄かに形を改めて、暫く口をつぐみ、次ぎに一人の學生を睨みつけて、『オイ、其方はイスラエル人ぢやなからうが、』と云ふ。

青年はあはてゝ俯いてしまふ。

『其方は異邦人ぢやらうが。』

『……』

橋の傍に數人の參詣人が居つたが、眞先にこれを見つけて、驚いてアツと叫んだ。すると群衆はこの叫聲を聞いて、一齊に清潔の橋の方を向いた。それは丁度、子供がそれを渡り了らうとする瞬間であつた。

彼等もこれを見て、異口同音にアツと叫んで、清潔の橋の方に寄つて來た。

『えらい事をする者もあるものだのう。』

『どえらい事をやらかすなあ。』

彼等の驚きと騒ぎは一方でない。

併し祭司長は流石に祭司長である。あはてる同僚を制してあごそかに『諸君、これは主の奇蹟だぞ、主の奇蹟だ。主はこれによつて、あの老人の傷ついた小羊をも、取り上げて下さると云ふ御意みいを示されたのだ。故に誰か早く馳けて行つて、あの老人を今一度こゝに連れて來い』と命ずる。

二人の祭司は、直ちに命を奉じて駆けて行つて、間もなく老人を再び連れて來る。

『御老人、主は只今奇蹟によつて、私に貴方の捧物を受け附けよと命ぜられました。故にその小羊はこちらに下さい。これから鄭重に御前に供へませう。』

老人はこれを聞いて、夢かとばかりに驚いた。『それは眞でございますか。これは何とも有りがたうござります。何とも何とも有りがたうござります。』彼は感謝の餘りに額を地面に擦りつけた。群衆は俄かにしんとする。

次ぎに群衆は『清潔の橋を渡つた子供』を探したが、到頭見つからなかつた。

つて居る。人間が眞の神の眞理まことを求めて、それを與へられないと云ふ法はない筈である。求める人が異邦人であらうが何であらうが、そんな法はない筈である。など、考へて居つたが、この狼籍を見て遂に立ち上つた。

『誰かあの集召の籥を吹き鳴らさなければならぬ。』彼はかう考へて、思はず壇の上に駆け上つて、集召の籥に手をかけた。すると驚いたことには、一間ばかりあるこの大喇叭が、見かけに似合はず極めて軽く、直ぐ持ち上つたのみならず、小供がこれに息を吹き入れると、この大廣間が割れるやうな、大きな音がする。

老人と學生が驚いて此方を見ると、十二三歳の子供が壇の上で、集召の籥を吹き鳴らして居る。老人はこれを見て、俄かに目の色を變へた。『アッ、こりやわしが誤つた。オイみんな、打つことは止さう。』次ぎに青年に向つて、『オイ若者、わしの講義を聞いても可い。この奇蹟は眞の神の眞理を異邦人にも聞かせよとの、主の命令ぢや。この宮でわしの講義を聞いても苦しくない。』と云ふ。

顔も着物も埃だらけになつた青年は、恭しく地に手をついて、『誠に有りがたうございます、』と頭を下げた。

八

この日の正午頃、目の色を變へながら、東の方からエルサレムの方に急いで行く夫婦の旅人があつた。

『其方はイスラエル人ぢやない、異邦人ぢや。此方は聖靈の默示に由つて、ちゃんと分る。異邦人は、わしの講義を聞くことはならん。第一異邦人がこの宮にはいることは、掟の禁じて居るところぢや、早くこゝを出て行かう。早く出て行かうと云ふに。』

青年は立ち上つて、『かうなつては何を隠しませう、仰せの通り、私は異邦人です。イスラエル人ではありません。併し私の靈魂は、鹿が溪流の水に喘ぐやうに、眞の神の知識を慕つて止みません。故に私はこの靈魂の渴きを癒さうと思つて、海を越え山を越え砂漠を越えてわざ／＼千里の道を來たのです。併し素性を打ち明ければ、はねつけられるに定まつて居ると思ひましたから、悪いと知りつつ素性を偽つて、こゝにはいつて來たのです。かういふ譯ですから、どうぞ不憚と思し召して、枉げて御講義を聞くことを許して下さい。一生のお願ひです。』と哀願する。

『いけない／＼、何と云つてもいけない。第一異邦人がこの宮にはいることは、掟の禁じて居るところぢやと云ふに。』

『でせうがどうぞ特別に、一生のお願ひです。』

『いけない！それは何人もこの集召の筈を吹き鳴らすことができないやうに不可能ぢや。併し出て行かん氣なら、出て行かんでも可い。此方にも覺悟がある。』老人はかう云つて決心の程を示す。

併し青年は、まだ立ち去りかねて居る。老人はこれを見て、残りの學生に手で合圖を下す。すると彼等は、一齊に立ち上つて、青年の周圍に突進し、打つやら蹴るやら散々な事をする。

集召の筈を眺めて居ながら、見るともなしにこの一部始終を見て居つた子供は、學者の云ふ事は誤

女はこれを見ると、俄かに涙を流してしやくり出した。すると子供は、直ちにそのしやくり聲を聞きつけて話を止めた。次ぎに急いで座を立つて、群衆をかき分けて女の傍に來た。『お母様、お母様はあたしを尋ねて居らつしやつたの?』

二人は黙つて子供を連れて宮を出た。併し母親は何時まで立つても泣き止まないのので、子供は、『お母様は何故泣かつしやるの? あたしはお母様のお聲を聞くと、直ぐお母様の傍に來ましたのに、』と云ふ。

母親は、『坊や、どうして泣かないで居られませう。お母様は、坊やはお母様の手からなくなつてしまつたかと思ひましたよ、』と又しやくり出す。

彼等がエルサレムの街を出ると、間もなく日が暮れた。三人は暗い中を、一寸も休ま^{やす}ないで東へ東へと急いだ。夜はもう三更になつたが、母親はまだ泣き止まない。故に子供は又た、『お母様は何故泣かつしやるの? あたしは時間が立つたのを知らないで居つたんですもの。併しあたしはお母様のお聲を聞くと、直ぐお母様の傍に來たでしやう。』と尋ねる。

母親は又た、『坊や、どうして泣かないで居られませう。お母様は、坊やを一日探しましたよ。坊やはお母様の手からなくなつてしまつたかと思つて、お母様はどんなに心配したか分りませんよ。』と泣く。

三人は終夜歩いたが、母親は終夜泣いた。夜明になつたが、母親はまだ泣き止まない。『お母様は何故泣かつしやるの? あたしはあたしの功名の爲にあんな事をしたんではなかつたんですもの。あたしは全く夢中であんな事をしたんです。吃度天に居らつしやるお父様が、何かお考へがあつてあたしに

彼等はエルサレムから歸つて來る參詣人の一群に會つて、『わたし等は忤にはぐれたんですが、途中でそれらしい者を見ませんでしたらうか、忤は今年十二になります。何しろ同勢が多いもんですから、どこかに居るだらうと思つて居つて、今まで氣がつかなくつたんです。』と聞く。

『それは何ともお氣の毒です。併しそれらしい者はつひ見ませんでした。たゞ今朝宮の中で、正義の門を通つた子供があつたさうです。それはなんでも十二三の子供で、天使の様な子供だつたさうです。この一行には、その子供を現に見た者も居りますが、——オイ、その邊にウリエルさんが居ませんか。』次ぎにウリエルと呼ばれた老人が進んで來て、詳しい事を話さうとしたが、旅人は非常に急いで居るので、聞いて居る暇がない。そこ／＼に禮を云つて、又た急いで行つた。

二三里行くと、又た一群の參詣人に會つた。二人は同じ事を尋ねると、今度は十二三の、天使のやうな子供が、清潔の橋を渡つた話をする。併し二人は又た詳しい話を聞いて居る暇がなく、再びエルサレムの方に急いで行つた。

次ぎにエルサレムの街にはいつて見ると、城下は正義の門を通り、清潔の橋を渡り、集召の籥を吹き鳴らした、天使のやうな子供の話で持ち切つて居る。

時はもう夕方近い。二人は大急ぎで宮に行つて見ると、その天使のやうな子供は、今中の大廣間で、多くの學者と問答して居ると云ふ話である。

行つて見ると、成程中の大廣間は、見物人で一ぱいになつて、子供はその真中に、多くの學者に圍まれて、且つ問ひ且つ答へながら、熱心に論じて居る。

神祕的知識

シカゴ大學
教授

イー・エス・エームス

一

神祕家は、普通の官覺的又は推理的の知識とは違つた、別種獨特の知識を有つてるといふとをよくいふ。其ものたる言語道斷であつて、只實證體験されるより外に之を解する道がない。それは自我の尋常普通の性質を超越した別種の意識、別種の感覺である。此道に依てのみ人は最適確に神と實在とに到達するが能きるとされる。

此知識の無双獨特なとは、之れを獲得するには普通平凡な手段に依つてゐないといふとで、益々強められる。之れは知覺や、推理や科學的實驗の結果得られるものでは無い。寧ろ之れに到達する爲には斯した普通の方法は排棄しなければならぬとされる。神祕家の求むるものは相對的條件的又は部分的に非ずして、直接絶對的なものである。

故に之に到達すべき途は、知覺や推理や一切直接の努力を除去したもので無ければならぬ。斯て出來た受動的な態度で幾多の努力と失敗の後神祕家は屢々神人合一と平和の感覺を得るのだ。神祕家が其實験を書いたものの中には古風の謬つた心理學に捉れて居るとを暴露して居る。思想、感情意識は明確に分離隔在し、此以外に光耀の世界が存すとす。神祕家は又自分の實驗の獨特性を重視する神と身分との關係で、他人の係はる所でないとする。故に各個人は各個の途を踏んで神に到るより外ない、詰り道は言語を絶するものだから、各人は、其冒險を試みるのである。生來の刺戟から神祕的幻象の高所に到る過程には、合理的秩序といふものが無い。若し高揚すればそれは躍進であり、突破である、而も夫には幾多の不安と失敗とを伴

あんな事をさせたんです。併しあたしはお母様のお聲を聞くと、直ぐお母様の傍に來たではありませんか。』子供は三たび尋ねた。

母親はこれを聞くと、『坊や、坊やはもうお母様の手からなくなつてしまひました。可愛い坊やはもうお母様のものでなくなりました。坊やがこれからの生涯は、大きい憂へと、深い悲しみと、烈しい苦みの生涯です。どうして泣かないで居られませう、あゝどうして泣かないで居られませう。』と、子供の足下にワツと泣き倒れた。

丁度この時、東の方の山から赤い太陽が美しく現はれ始めて、ヨルダンの野に神々しい朝が明けはなれた。(了)

谷本博士の「道德革新論」中嶋半次郎氏の「人格的教育學と我國の教育」
麻生正藏氏の「家庭教育の理論と實際」等の詳評は餘白なきがために
次號に譲る。

導するのである。理性は心的生活の凡ての點と密接に連結されて居る。

第四に心の發達は社會的過程である。凡て人は社會的有機體に屬す。彼の全性質は其言語を形成する途筋と同様である。無數の習慣、傳説や社會的暗示の感化の中に人は包圍さる。個人が其最も深奥な思想で道德的理想を構成せんとすれば、彼は社會的價値の語を以て之を作るだらう。抽象的な科學的思想ですら、其社會的關係と個人的性質を免るゝとは出来ない。

二

斯る心理學的見地から神祕的知識を解釋せんとすれば、先づ一切知識の過程は動的で、刺戟的性質を表示し、感覺的心像を有し、且社會的特性を有して居るといふことを認めておかねばならぬ。

然らば神祕的知識の要求の生ずる刺戟は何ぞ。満足せんと欲する願望は何ぞ。答は明白である。神祕家は絶對の實在の感覺を熱望して居る。神を知らんとを願ひ、無限と合一せんと努力するのだ。彼の熱心努力の源泉は此要求に在る。故に神を見

んと願ふ眞實の神祕家の念願を有する人にとりては、苟も神を現はし心を清むる力あるものならば如何なる禁慾肉的苦痛又勤行も重荷とは感じない。

神祕家は神の存在の問題などで餘り苦しまぬ。彼は其時代と社會的環境が理解した通に之を受けらる。彼の熱望は只神を現實に見出し之に交通するのだ。西洋の神祕主義は新プラトン主義以來、絶對の觀念の本體論的妥當性を認めて居た。彼等は感覺的合理的知識の相對性を説いて、此相對性や孤立性を超越して、全體を發見すべき要求を高潮した。多を超越した一、部分の上の全體、變化を脱離した常住を索めんと考へ、彼れ等の眞實の要求は觀念とか又は其證明ではなくて、事實其物の經驗である。神の存在の證明に興味ありとすれば、これは單に神人合一に達せしめる努力の刺戟を得んがためである。彼等と他との區別は神の思想に非ずして、神に達する方法に在る。神祕家は在來の形式や組織的接神法を尊ばない、彼等には絶對に通ずる內的の途が各個に具はつて居る。故に教

ひ、之に成功するも理解される底のものではない。

斯うした神秘的實驗を機能心理學の立場から觀察せば如何。此事實の存在は明白である。これには長い歴史がある。彼等の所説は象徴的神秘的言語に依るも、其の豊富にして強烈な實驗あるを疑ふとは能ない。已に其實たるを無視されないとすれば、之を説明して理解するのは當然科學的心理學の義務である。若し古風の心理學が此等の事實を終極的神秘の裏に葬つたならば、新心理學は其自身の學語と方法を以て之を研究するは正に其特權であらねばならぬ。

機能心理學の間には特に神秘主義の現象に當籤めるに意義のある要點がある。先之を略述して然る後に神秘的知識の解説を見やう。第一に機能心理學は、原本的活動的刺戟が如何なる形式の經驗にも活力を與へるものを索める。凡て感性あるもの、動的な前進的な要求が生活の運動となり發生となる。一切の經驗は悉く直接間接からした刺戟から起る。思想習慣の精練された組織も此活力的性質を失つて了ふと、丁度火の消えた機關車の様

になる。

第二に、認識過程は此刺戟の爲に發展し活動する。機官は有機體の生存競争中に出來た。機官には其構造適應性等において複雑の程度階級が現れて居るが、其根本的作用は同一であつて、即ち生活の要求を充たすに外ならぬ。人間の感覺にも差があるは個人の境遇に依る。粉屋は粉を判別し絹商人が絹糸を見分けるなど皆其例である。

第三に推理の過程と刺戟と感覺に對して、同様な有機的で必然的な關係を有つて居る。大多數の實驗心理學者は或種類の又或る程度の感覺的心像が一切の思惟の中に存在するとを結論した。心像のない思想といふものは決してない。抽象的思想といふことが、絶對的超感覺といふ意味から斯る思想の存在は認められない。最高の知的過程もより低級の型の材料を缺くとは出來ない。

理性が刺戟と本能に従屬して居るといふとは、一般に認められる。或意味で、人間は自分の本能の運用に依て理性的になるといへる。理性の作用は刺戟を取去るのではない、之を充たし明にし指

は本質的に普遍的である。次に原始的民族には非人格的のものは、何もなかつた。子供は凡てのものを人格視する。普通人の想像中にも之が頗る多い。徳とか主義とかいふ抽象物に關しても、一般人の心像は具體的で且人格的である。視覺的想像力を有する人にとりて、正義の心像は生ける道德的表現と見られる歴史的人格と思はれ、聽覺の心像を有する人にとりては、正義と道德を獎勵する人格の聲と聽える。

一時代の氣質や思想を表示する大なる總括思想は本質化される。即自然とか生命とかいふ思想は本質的實在及人格的形式と見られて居り、人間化されて居る。此思想は詩や其他の藝術中に自由にとり入れられ、ドラマ化され、而して想像力に對して強くなり、隨て感情と意思に對し有力となる。斯る總括思想が社會の探る所となり、分裂せる科學的事實の複雑を單純化する作用を認識される様になれば、此等の思想は潜在意識に入り來りて神祕的使用に堪へるとなる。併し此等の總括的思想中に一旦疑惑が姪まれ、時代の活氣ある興味を

失ふに至れば、其の人間化は破られ其實在性は信ぜられなくなる。概念は神祕的信仰を作らず又其概念を信用せぬ人に満足を與へるものでない。

四

神祕的合一の記述は種々難多であるが、此最普通なものは愛と結婚の象徴である。而して神祕的經驗は其使用する普遍的思想の特性に隨て性質も違ふ、其思想が人格的なれば、神祕的合一は意識ある關係となり。自我は全然神の中に沒了し去らぬ。普遍的原理が漠然たる人格化の少ないものならば、合一は自意識の消滅と抑制を包含する。併し兩者共に自己暗示の形跡があるのは同一だ。神祕境が達せられるのは幾多努力の後である。彼等は其境に達せんため、散亂心を打盡して注意を一點に集注せんと努力し、機根上乘なるものは遂に神祕境に到達す。此過程を觀察すれば、神祕家は胸裏に愛藏した實在の一般觀念に隨つて幻影を見、聲を聞き純一無雜な存在に突當る。之は其の主觀にとりて現實な經驗で、彼が神祕的存在の神祕境に突入したと自信するに至るとは、毫も怪し

會の權威とか儀式の如きは、祈禱や冥想や自信の勤行に比して何等の價值もない。

思想や教義よりも寧ろ神祕主義の刺戟が行動と經驗に至らしめるといふ著しい證據は、神祕主義が流行する時代と社會は、神觀が既に組織され勢力あるに至り、然も神との直接な満足な結合を要求して居るとである。中世紀に於て思辨哲學が論理的思想の廣文煩瑣な組織を完成した時、神祕家は盛に起りて此論理的に證明された終局的實在と人性との合一の可能なることを、實際的に證明せんと熱望したのであつた。併し文藝復興と科學の勃興となり思辨哲學の崩解するや、神祕主義は影を潜めて了つた。現代に於て神祕的傾向復活の兆あるは興味のあるとだ。此等の傾向は思辨的思想の齊しい構成の計畫と一致して居る。自然現象の具體的な細事を研究する實驗科學の永い混亂した時代の後に、新しい總括の朝が明け渡つて來たのである。此の總括をする時に多くの科學的教養のある人は神といふ語を用ふるを敢てせぬが、是は此語が科學期以前に使用されて、悪い連想を伴ふ

からである。外の言語は現に形成される總括思想を何等故障なく表現するに自由に見える。併しそれはより廣き見地からの實在の表號たるは明白である。此等の新語は最包括的で想像力に對する世界的通券として用ひられるのだ。此等の廣い概括は自然科學の範圍から突進するので、古い神祕主義の熱望、最高實在との靈的な關係を得んとする願望も新に起つて來たのである。

三

從來心理學は個人心理に偏して居た。然も人の心的生活は本質的に社會的であるとが明白になつて來た。自覺ある自己決定力のある、人格として個人は、其團體の社會的生活に依存して居るものである。彼は自ら知らざる中に所屬團體の心的傾向や言語や態度を襲用して居る。彼が外物を或は危険と見或は親愛に見るも、其價值は凡て豫定されて居る。凡て此等周圍の物と價值の生ける實驗は彼の周りの人々と其家族や部族の仲介によりて彼に渡されるのだ、故に此等の人達は彼の心的狀態を形成する勢力である。此社會的人格的思惟の德

部分なき全體である。斯る無限絶對の定義は不可知と同一義なものである。是れ知識は感覺と理性に依て、關係と制限と條件と部分とを有つからである。觀念論者も經驗論者も一切の哲學者はかうした絶對は人心には絶對的に不可知であるとする。神祕家も斯る絶對を知るといふ考を抛棄した。併し他の非感覺的非理性的の經驗に依て之に近かんとする。之が亦神祕的知感をして知識の外に置くに至らしめる第二の點である。彼等の努力の標的が不可知である許りでなく其に達する方法も亦非智性的である。方法が又神祕である。神祕的光耀は科學的に又組織的に得られるものでない。寧ろ受動的に之をうけるのだ。彼が如何に之を得んと努力するにしても、最大の要件は受動的でうけ身であるべきことである。

近世心理學者は神祕家と共に、之は理性的過程でないことは認めるが、不可解不可説であるとはいはぬ。之を研究して見れば、それは催眠術の過程である。催眠被術者に神祕的經驗の形を實驗するとは易々たることである。

然らば神祕家の非理性的世界と科學の無私公平な器械的世界との間に甲乙があるか、此兩者は同質な矛盾なき經驗の間に統一する事は不可能であるか。之に答へんとすれば、人生における知識の位置及職分性質を再考して見なければならぬ。自然科學の研究に従事した大多數の人は、知識が全然冷淡にして、有限と相對的實在にのみ係はるといふ點において、神祕家と一致する。純粹な科學は其利害を超越せると、眞理のための眞理探究であるといふことを誇りとした。隨て科學は神祕主義と何等共通物なしといふにおいて、神祕家の見と一致して居た。斯して兩者は各其孤立隔在することを正當とした。此反對の根本的困難は興味ある心理學上の問題である。

兩者が兩極端にたつと經驗を誇大に見ると、又兩者の隔在を正當とするは各自の謬見に基く、之を正當に理解すれば、發達せる人の尋常の經驗中には兩者互に矛盾する事なくして含有されるのである。反對點は明に理論的刺戟對實行の刺戟である。確に反省と分拆の過程は一時活動を抑止する

むに足らぬ。彼は之を以て普通の經驗と同視するとは出来ない。其は言語道斷であるが併も確信を伴ふ。隨て彼にとりてそれは普通の知識を超越した知識である。彼は絶對の經驗を普通の感覺や、尋常の反省的思惟に依て得たのではない。隨て彼は超感覺的超理性的啓示を與へられたと主張する、是れ所謂神祕的知識といふものである。

近世心理學は此神祕的知識を説明するに、暗示の性質と、催眠術中の過程とを以てする。ユオ教授は神祕的啓示の原因を説明して云ふ。

何人も人類が善に對し又其散亂せる生活の統一に對し普遍的向上心のあることを疑はない。神祕的告白をなす人は、概して存在の經驗又は其意向の勢力を觀念に與へるに充分な暗示性に富んだ人々である。若し今恍惚または恍惚に似たる實行の形式的條件が宗教的向上の標的を暗示し易い感覺なり、又は他の心的變化を與ふるならば、神祕家の暗示性的精神は其後を引うけて標的は現在の直觀として主張するに至るのである。

神祕家は其社會から傳來の思想をうけ入れ、自己暗示で以て此等の思想が意味する實在の靈活直接的な經驗の状態に到達する。彼自は之を以て尋常の感覺及理性が顯はすよりも、廣大な世界に入つ

たと信じて居る。

神祕主義の實際的興味は此内的密接な全實在との接觸が、其主體の上に急速な活動的感化として働くところである。多くの神祕家は彼等が神との合一は、其自身を以て目的とするものでない、寧ろそれは客觀的實際的事業の刺激として見られる。神祕家聖テレサや聖フランシス、ロヨラ、ミエナのカタリナ等は皆偉大なる難事業の實行者であつて、其忍耐精神力は彼等の神祕的經驗に基たのである。

五

神祕家は其獲得した知識は普通の知識を超越するが、尋常の知識は乾燥冷淡、眞實在を充分に捕捉する事が出来ないで、生ける内的世界に對しては全然盲目であるとする。實際的價值と科學的知識の世界は左程隔在する者か、神祕家や藝術家と科學者は果して相和する事が出来ないか。

既に論じた如く神祕家は社會の思辨的傳説の感化の下にありて、普通知識の以外に在りとされる二のものを索めつゝあつた。一は有限に對し一切關係を絶せる無限である。制限なき絶對であり、

尾崎司法大臣閣下題辭杉浦東宮御學問所御用掛題詩
新渡戸鐵博士序文 西村二郎先生譯述 好評日に加はる

最新刊 アーヴィン・ウェーダー

定價 金五十錢
郵税 金六錢

本書は學問といはす事業といはす、凡て成功の要訣、成就の極致を博士の高遠發博の見識を以て詳説せるものにして尾崎閣下之を閱讀せられ敬賞の餘親ら至誠一貫と題し且『徹底せよ！』と命名せし『ちるる』にて修養書中の白眉なるは多言を要せざる所なり。

東京外國語學校講師ジヤク・レ・先生序文

文學博士芳賀矢一先生等十名家題評

文部省普通學務局員佛語專攻星野辰男先生譯述

最新刊 サーマーの流

定價 金五十七錢
郵税 金八錢

佛國に於ける「ユー・ゴー」を始め十大文豪等が微妙婉曲の筆を揮ひ同國民思想の極端に走るを警醒せんが爲に綴りたる世果有爲の大傑作を選擇したるものにして譯文亦流暢頗る趣味に富む佛國文藝書として購讀の名著たるは勿論時節柄國民精神の修養上大裨益あることは疑はざる所なり。

天下に好評を博せる一名著 重版又重版

大覽東西武十道比較

定價 圓卅錢
郵税 十二錢

本書曩に天竺喜覽の光榮を得今又英文雜誌に繼續せられて外國に紹介せらる。日本帝國の偉大を語る前に先づ本書の御一讀を萬天下に勸む。

博士の心

定價 八十五錢
郵税 八錢

本書の我が國文に譯せられ日尙淺きにも不拘歡迎通くが如し是れ現代人の要求を如何に充つゝあるかを證するに餘りある所なり原著者「ハーデ」博士は本書の日本語に譯されたるを大に歡迎を受けつゝあり。

東京市神田區表神保町十番 振替東京一六二五番 通俗圖書中央販賣所 發兌

大賣捌 東京堂・東海堂・北隆館・六合館・目黒書店・文林堂・至誠堂

此處中より買ひ取らるる「大賣捌」に於ては加算郵送金あり

凡て皮覺の印象と觀念とは動的性質と活動の刺激とを有するのであるが、思惟の過程は意識中に多くの觀念を抱いて、其急速な表現を抑止する。斯る思惟作用は人類の祖先に自然的に備はつたものでなく教養の結果得たものである。自然人は刺激に依て壓迫される、之を抑制して想像の中に其標的に到達すべき途を思惟熟考するといふことは到底堪へ得ない所である。蠻的な生存競争には教養などは無用無益に見える。之と同様に神祕家が無限を合理的に解釋するよりも、寧ろ其活動的關係を願ふ間は、實際家と共に理性の途を取らない。

理性が明確に他と區別される能力で、意思や感情と有機的關係にあるものでないと見られる間は、活動的感情的反動とは相容れない者となる、然るに人間の經驗を其全體で捉へれば、思想と活動の間にある闘争は無くなる。高い形式の人間活動上の尋常な發展は、刺激から觀念作用を通じて活動に到るとである。即刺激、熟考、行動といふ順序で人間の心的過程は凡て説明するとが出来る。然るに人類の熟考的部分は非常に廣大になつて、

遂に或人には其種々なる點で専門的になるの要が起つた。科學者は即ち之である。個人としては其事業へ直接の刺激は經驗し得ないかもしれないが、職業上の考量やその他の間接な刺激で動く。又知的考量に従事せる彼等は直接其結果を實行しないが、結果は應用的實際家の採用實行する所となる。斯く兩者は分離隔在してゐる様だけれど、之を刺激熟考行動と發展し行く個人的經驗から見れば、夫は謬見である。故に正當に解すれば、人の經驗の刺激的熱中の方面は思想と理性の生活から分離されるものではない。兩者は共に圓滿靈活な人間の發展に屬する。刺激も感情も理性から獨立して立つ譯には行かぬ。此關係と平均が支へられた時には、神學の概念や臆説、其包括的觀念及法則は決して冷たい無情の者ではない。近代人にとりては、實在の感覺は舊式の純粹思想の絶對とか普遍よりも、物理學や社會學の試験的總括の中に、より深遠に感ぜられる。刺激から分離しない科學的概念の中には、赤裸々の實在と接觸する感と不可測の神祕感との二つの強裂な神祕主義の要素があることを認めないわけにいかぬ。(A・I生抄譯)

院長診察月、水、金、午前

林、峰間兩副長は目下當院に在勤

麴町區三番町三十番地(市ヶ谷見附内)

電、番六一一番

東洋内科醫院

院長

醫學士

高田 畊安

電話ちがさき二番

南湖院

相州茅ヶ崎海濱(從停車場半里)

河野、高橋兩副長は目下當院に在勤

院長診察土曜日午後、入院診後應需

急告!! 實業家及學生諸に!!!

▼満足大満足▲

實業家の渴望
初學者の希望

とを癒し得る珍書

英語商業文構成研究

東京高等商業學校教授 舟橋雄先生
商學士 增井光藏先生 共著
英語の日本記者 藤井宗太郎先生

菊判六百五十頁
(五號及六號活字)
裝釘美麗新式箱入

定價金二圓五十錢
小包料金十六錢

特 徵

- 學術上の見地よりは構成の研究を主として分解的に詳細に説明せり
- 實際の方面よりは賣買の慣習及取引上の懸引等應用を自在にせり
- 例句の數は從來の著書に約二倍：而も繁簡の配當宜敷を得たり
- 詳密なる註釋：親切なる注意と遺憾なき講述は他に比類なし!
- 最も新らしき形式：即ち今日の知識に従ひたるは大に誇る所!

商取引の盛衰一に書信の巧拙に繫れり

(智者は速かに
本書を購めよ)



館興中

東京電話東替振
神本局四京東
表田一
保七
町六
五六三

館文建

東京電話東替振
神本局八京東
表田五
保二
町七
五〇

兌發

此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る旨書添を乞ふ

教育學術研究會編纂

一大權威

教育學術界

學術雜誌界

半ケ年前金郵金稅共拾貳圓

● 七 月 號 要 目 ●

壹冊定價貳錢拾郵壹厘五

△所謂反科學的思潮に就て

文學博士 桑木嚴翼

△中學校に於ける作文教授の實際

教諭 浦上良八

△ギンデルバンドの哲學概論(六)

文學士 宮本和吉

△澤柳博士の修身教授論に反對す

師範主事 島田民治

△文字學の建設

文學士 後藤朝太郎

△注意の實驗教育學的研究

文學士 上野陽一

△私立學校の本質

京大學生監 山本良吉

△「ロメニウス」の比較論評

文學士 入澤宗壽

△唱歌教授に於ける呼吸法及發聲法の價值

文學士 佐久間鼎

△小學校教育上より見たる海洋教授の研究

調導 中野八十八

△教育者の文官高等試験

合格者 姫川事務官

△師範教育と教程能率

文學士 加藤成俊

△新哲學思潮と在來の教育學

東京朝日 萩原賴平

△修身教授問題に就て

甲府市 吉原藤川

△『現今教育思潮批判』を讀みて

東京教諭 後藤五郎

△手の教育

工學士 鳥山嵯峨吉

△勇敢なる白耳義

文學士 阿部重孝

△圖畫の價值及教授法

文學士

發兌 東京早稲田 同文館 振電 替話 東京一 五九 五八

東亞之光

第一日 一發 同行 七月號

部二十冊 廿錢二冊 郵稅一圓 錢十四厘 五錢

▼戰爭の哲理……………文學博士 吉田 熊次

▼タゴールの神觀に就て……………文學士 木村 泰賢

▼埃及藝術の我等に與ふる教訓……………石井 柏亭

▼トロビズム問題……………文學士 増田 維茂

▼フロレンツ博士の『獨逸と日本』……………文學士 山岸 光宣

▽評論
「今後の國民修養を讀む」
特種生活と普通生活
光琳遺品展覽會を觀る
東亞畫風の著しき接近

海外思潮

佛國哲學
の
アイケン、ヘツケル
辯
訴

▼歐洲戰亂に對する高等批評……………ドクトル 長瀬 鳳輔

▼三浦梅園と帆足萬里……………文學士 武藤 長平

▼演劇製作者の心理過程……………文學士 久保田 勝彌

▼楚囚艱難錄……………在佛文學士 藤井 慶乘

▼海外思潮▼學界彙報▼選歌選句等

(中附四)

發行所

東京市本郷區駒込
五番地

東亞協會

振替一〇七〇
口座七
東京座番

生命の家

ダンテ・ガブリエル・ロセツティ

増野 三良

われ樂しきときも幾度か君に瑕を見出さんとしぬよしえやし瑕はありともひたすら君を愛せんために。

またよもやわが主「愛」はわが賞めそやさんとする君の讃辭の極みを微塵に斷ちたまふとはあらじ。
哀哉「瑕」はわが情を暗く蔽ふ圓蓋をつくり、假令衆人の眼には仇なりとも、君によりて燈臺ともる時、その影より底知れぬ玄武洞に燃ゆる綠柱石の如き幽玄を窺はしめたり。

あはれ露ほどもわれはこの「愛」の祠に怖くことはあらじ、「瑕」の額より放つ光明の裡にわれ自ら君の心のさらめく寶玉を捧げぬ、照すを許されぬ物凄さ淋しき堂の内に。

見よかし、あゝ君の徳を崇めんために、わがこゝろいばかり卑しきかを示すを矜恃としぬ。(燈の祠)

此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る旨書添を乞ふ

品質優良
價格低廉

治 宇



荷造完全
發途敏速

合本特價發賣

■六合雜誌

大正三年度 全一冊

特價金壹圓五拾錢 送料十二錢

右御入用の御方は至急御申越あれ

大正四年七月 東京三田 六合雜誌社

電話芝五八五五番

聞け——公平なる世評は自畫自賛に優る

販賣

はがきニテ御注文下サレバ代金引換小包ニテ發送シマス。
御送金ハ振替貯金ガ一番安全デ便宜デ徳用デス。
集金郵便ハ料金高クナリシ故謝絶シマス。
御注文書へ必ず本誌ニ依ル旨明記アレ。

六合雜誌讀者ニ限リ正價一割引

規定

送費無料 一時ニ總代金一圓以上御注文下サレバ其小包料ハ全部無代罐入 一斤一圓五十錢以上ノ品ハ無代罐入トス以下ハ袋入り故罐入ノ時ハ實費申受ク。

宇治と云ば茶○茶と云ばムラタ園とは世人の聲

茶名		玉露		煎茶	
總ノ齡八十	鶴ノ聲一	正喜仙	六十錢	正喜仙	七十錢
村田園一	圓廿錢	花橋	八十錢	正太福	九十錢
老松一	圓五十錢	圓折	九十錢	池尾粉	三十錢
千代香一	圓七十錢	上青柳	四十錢	折鷹	八十錢
正鼻月	圓二	圓折	八十錢	薄茶	各種
宇治魁三	圓	圓	八十錢	圓	各種
仙掌五	圓	圓	八十錢	圓	各種
國華八	圓	圓	八十錢	圓	各種

宇治山田村 販賣部 振替口座
茶田園製茶場
販賣部 振替口座
茶田園製茶場

大阪一連 大坂一連 大阪一連 大阪一連 大阪一連 大阪一連 大阪一連 大阪一連 大阪一連 大阪一連

(中附六)

夏期來御 休宿者 歡迎

高等下宿 榮林館

館主 文學士 今岡信一良

本郷區追分町三〇

電話下谷 四八四六

(追分電車終點ヨリ五分間)

の意思もないのです。意見も希望もないのです。あなたは自分の希望がわからないなんて、そんな愚鈍な人間なんですか。さあ、思ひきつてあつしやい。さうでないとい私は怒りますよ』と云つてゐる。そして醫者の返事を聞いた彼は『よろしいありがたう——まあ氣を悪くせずに下さい。私は何事に限らず人が愚圖／＼したことを云つてゐるのを聞く位、苦痛なことはないのです』と話してゐる。如何に彼が敏感で而も誠實であるかどわかる。

大尉は熱心な科學研究家である。然し彼の學者的な態度が妻や周囲の理解を缺いて、家庭の不和をきたしてゐる。彼は女に對して甚だしく嫌惡の情を持つてゐた。彼はまた自分の娘ベルタの教育に就て、牧師にこんなことを話してゐる。『この家庭には、うちや／＼する程の女がゐますが、それが皆娘の教育で勝手な熱ばかり吐いてゐるんですよ。第一姑はベルタを唯神論者にしようと骨を折つてゐますし、ラウラは藝術家にするつて主張してゐるんです。また家庭教師はメソジストの信者にしたがつてゐますし、乳母のマルガレーテはバ

プテスト派でなけりや駄目だと云ひますし、下女までが一緒になつて救世軍の女士官になれと勧めてゐるやうな有様なんです。まさかそんなつぎはぎだらけな靈を作り上げる譯にはゆかんですし、殊に娘は私の好いたやうに仕込むのが當然なんですから。私は全然變つた方針を取らせるつもりで、ベルタをこの家庭から手放すことに決めただす』

大尉の妻ラウラは、娘を家庭から外へ出すことには非常な反對である。彼女もベルタを自分の思ひ通りに育てたいのである。ラウラは無智な、無反省な女である。彼女は大尉の病的な行爲を説明しようとして、大尉が顯微鏡で星の世界を研究してゐると話した。然るにこれが分光器の誤りであつたことを、醫者から指摘せられた時に『でも私はそんなことを云つた覺はありません』と答へてゐる。ラウラはまた恐ろしく負け嫌ひな性質の女である。自分のやらうと思つたことは、どんなことがあつても枉げない。勝たんが爲にはその手段を選ばないのである。

眞面目な大尉は遂にラウラの詭計にかゝつた。

ストリンドベルクの悲劇『父』

太田 眞一

北歐スエーデンの熱狂的劇詩人、アウグスト・ストリンドベルクは、千九百十二年の五月——彼が六十四歳の齡に、彼の波瀾多き生涯の終りを告げたのであつた。彼の死後恰度三年になる今年の五月、私は舞臺協會が帝劇で彼の作『父』を上演したのを觀た。この劇は一昨年のものであつたか、有樂座で土曜劇場の人達によつて、演ぜられたやうにも記憶してゐる。

悲劇『父』はストリンドベルクの數多い戯曲の中で、たしかに傑作の一つにかぞへなければならぬものである。彼の劇作年表によると『父』は千八百八十七年、即ちストリンドベルク三十九歳の時の勞作であつて、かの『ミス・ユリア』——恐らく彼の作中で最も廣く知られてゐる、邦譯『伯爵令嬢』が出たのはその翌年である。それと同年に

お隣りのイブセンは『海の夫人』を發表してゐるが、これらスカンデナヴィアの偉大な藝術的天才によつて、當時の歐洲劇壇はどんなに異彩を放つたことであらう。

『父』は作者ストリンドベルクが、子供によつて與へられる自己の不滅に對して、父と母との爭鬭を象徵化しようとした最高の努力である。男と女の命がけの爭鬭が最も大膽に、最も深刻に、身慄ひする程の緊張さを以て描かれてゐる。

主人公大尉は極めて眞面目な誠實な人であるが、また恐ろしく敏感な性格を持つてゐる。彼が我家へ傭ひ入れた醫者に、その居間の選定に就て話をしてゐる時、ドクトル・エステルマルクは『どうぞあなたによろしいやうに……』と再三答へたのに對して、大尉は『私はこの事に關しては、何

クの影響を受けて、神祕主義的象徵主義になつた。また『父』に表はれた兩性の争闘は、自己の永遠の存在を子供の中にのみ欲求してゐる。私は自分の子供によつてのみ、自己の不滅を認めようとする説には、さほど敬服がでない。

ストリンドベルクの藝術は、形式上從來の因襲を破つて、新しい表現を試みたところに大きな貢獻がある。また彼の科學的知識が心理描寫を深刻ならした點に於て、最も勝れた特色がある。彼は人間の心の最も深い奥底に、常には隠れてゐるところのものを極めて明確に看破して、全く凄いほど辛辣に描いてゐる。彼の描いた人物は喧嘩ばかりしてゐて、彼等が眞に生きるには、お互に罵りあふべく餘りに多忙だと非難されるかも知れない。然しこの非難は恐らく人間生活そのものに、有るのではあるまいか。

『父』が發表された時、歐洲の道德は戦慄を感じたと傳へられてゐる。またこの劇が餘りに殘酷であるといふ非難に對して、ストリンドベルクは『ミス・ユリア』の序文の中で次ぎのやうな意見を書い

てゐる。『近頃悲劇「父」を悲慘過ぎると非難した者がある。それではまるで陽氣な悲劇を望んでゐるやうなものだ。私は峻烈な凄慘な人生の苦闘の中に、生の喜びを發見した。私は何事かを經驗し、何事かを學ぶことのできるのが嬉れしい。だから異常ではあつても、我々に教へるところの多い問題。つまり私は偉大な例外を選択した』と。私達は作者の心持を明瞭に窺ふことができる。

舞臺協會では、加藤精一君が大尉に扮した。こむづかしい役が殆ど申分ないほどの熟練を以て頗る巧妙に演ぜられた。恐らくは、同君が今迄に演じた何れよりも、最も成功したものであらうと思ふ。加藤君は古典的な沙翁物の英雄に扮した時はよいが、近代劇の場合は一種の好ましからぬ癖があつた。曩に上場したハウプトマンの『馭者ヘンシエル』にしる、ショウの『惡魔の弟子』中牧師アンダーソンに扮した時にしる、私は餘り感心できなかった。然るに今度の大尉に於ては、殆ど非難すべき點がない。またその扮装がストリンドベルクによく似てゐたのも嬉しく思はれた。

彼の感情的な素質はラウラの出鱈目によつて、自分が果してベルタの眞の父であるかどうかといふ疑惑に陥らざるを得なかつた。彼は總てを科學によつて解決しようと思つた、彼は醫者といふことを話してゐる『班馬を普通の牝馬に交尾けると縞のある仔馬が生れるつて、そりや事實ですか？——其仔馬に普通の種馬を交尾けても、生れた仔馬にはやはり縞があるつて云ひますが事實ですか？——してみると條件によつては、普通の種馬に縞のある仔馬を生せることができるのでね。——ぢやかう云へるです。子供が父に似てゐるといふことは何の證據にもならないつて！』彼は疑惑に疑惑を生んで、尠からず懊惱する。終に彼は興奮した揚句發狂してしまつた。そして彼は最も殘酷な悲愴な最期を遂げた。

『父』はいろいろの意味に於て、私達に深甚な感興を興させた。食ひ入るやうな暗示力が妖魔のやうに巧妙に現はれてくる。私は近代の偉人ストリンドベルクの熱烈な眞摯な生活基調を想はずにはゐられなかつた。さりとて、私は作者の思想に對

して、全然賛意を表するものではない。『父』が私達に教へる結論は、女の無智が誠實な男を滅ぼしてゆくと云ふことである。私はこれを一面の眞理だとするとには躊躇しないが、一羽の燕が來たとて夏にはならぬ。彼の反婦人主義的な女性觀には、尠くとも反對である。何んとなれば、彼は男性の先天的優越說に對する大膽な擁護者であるから、彼はイブセンやビョルンソンの婦人解放說に對しても、明らかに反抗の態度を把つてゐた。ストリンドベルクが曾て女に求めたところは、天使のやうな女であつた。彼は天使を求めて惡魔を得たのである。彼は結婚生活に於て惡魔的苛責を被つたのである。『父』に表はれた結婚をみて、家庭的幸福の可能を疑つてゐた人だと云ふことがわかる。彼にとつて愛は徹頭徹尾爭である。また彼の描いた結婚生活は『人形の家』のやうに、理想の要求からこれを取扱つたものではない。寧ろ經濟的條件によつて、寫實主義をとつたのである。彼の藝術は極めて正確な而も純なる寫實主義であるが、晩年に至つてかの神祕思想家スエーデンボル

熟^うれたる實は

北 米 田 中 葦 城

熟れたる實は

愛に渴けり……

彼れは冷たき空氣を吸ひつゝ

時至るを待ちぬ

時は來れり！

春は大地の底より

曙の光と偕に

甦り來れり

小さき一ケの種子に

やどれるいのち……

ふかき大地にこもれる

力……

あゝいま彼れは彼れの

願ひなりし母なる大地の

懐^{ふところ}にかへりて

溫き愛に浴するを得たり

わが心

わが心の扉を外より

たゞかれて深かき沈黙の底に

くだる時……

あゝそはわが思想の

收穫^{とまり}の秋なり

ラウラに扮した河村菊枝君は、まづ失敗の方である。帝劇の女優には『父』のやうな深刻な戯曲を演ずることは、頗る不適當な感がある。ラウラが普通の話をしてゐる時のマダム振りなどは悪くないが、肝腎の大尉と争う時などには、その性格がはつきりと表れて來ない。もつと脚本を了解し得るやうに勉強しなければ、俳優としての價値は貧弱なものであらう。佐々木積君のエステルマルクは相當に演ぜられた只夏向きの服裝をしてゐたのは聊か不自然な感じがした。佐々木君は文藝協會時代マグダの牧師に扮した時から見て、更に進境がないのは惜しいことだ。森英次郎君の牧師は

餘りあざやかな印象を與へてくれなかつたことを遺憾に思ふ。一つは脚本が牧師を働かさせてゐない爲であらう。また牧師としての扮装が甚だしく拙いものであつた。和泉房江君のマルガレーテは、今日の女優が年寄に扮することの如何に困難であるかを想はしめる。今の女優諸君がもつと、お婆さんにならねば、近代劇が完全に演ぜらるゝ時は來ないであらう。

さはいへ、興行本位の劇壇に於て『父』のやうな眞面目な芝居が、あれ迄に演ぜられた事は、尠くとも嬉しいことである。私は舞臺協會の努力に對して感謝を表します。

してあつたが、感心なのは日本では輸入の品を得々然として陳列してゐるに反し、こゝでは兎も角も自國製のを列べてゐることである。瑞西も大抵のものは輸入に仰ぐ國でありながら、たとへドイツ人の後援又は監督に由るとはいへ一通の機械や化學製品は出来る様になつてゐる。日本の何々商會とか合名會社とかいふ手合が輸入品の數量多きを得々として誇つてゐるが如きは其意を得ないことである。

次に教育の部では種々面白いものもあつたが各大學研究所の出品として疾病の原因結果、殊に結核癌腫の種々の標本を並べて素人にも解る様に並べてある。夫を又婦人小兒に至るまで熱心に説明を讀んで多少會得してゐたらしいのは一寸日本ではまだ見られぬ現象と思ふた。勿論日本の社會の知識も然ることながら、一體日本の學者が學問はある階級の専有物であるかの如くに考へてゐるのは甚だ間違つてゐることと思ふ。衛生々々といつても學者がもう少し一般社會の開發を圖らない様では駄目である。特に科學的知識の缺乏してゐる日本に

於て之は學者の三省すべき點ではないかと思ふ。

夫から此國特有の結核療養所の模型も可なり澤山出て居つた。次にまた此國の名産牛乳の製品、殊に乾酪バター並にチョコレートに至つては先づ日本では一寸まねの出来ぬこと、殊に近來乾酪の趣味を解してきた吾々には垂涎三尺の思あらしめた。乾酪といへばいやに臭いものと思つて居られる日本の人には餘り縁の遠い話であるけれども。

其外種々面白いと思つたものはあつたが先づ此位にして唯一つ附け加へたいのは炭坑の模型である。之だけは瑞西にはないものでドイツ人の出品と聞いて居つたが、入口をはいると暗い坑道を其まゝ模造して坑夫の人形や鐵道を列べ全然實物の炭坑の中を通る様に出来てゐた。之等は實物教育の上乗なるものといふべきであらう。博覽會に感心しないものもあつた。其隨一は美術館である。

此美しい山水の間にどうして美術のみは餘り發達しないのであらう。繪畫などは立體派とか未來派の模寫の様なものばかり多くて一も見るに足るのはなかつた。日本では西洋畫をいつまでも習作

瑞西より

廬 山 生

瑞西内國勸業博覽會

ベルンに博覽會の開けたのは去年の六月から十月までであつた。残つた建物の雨に朽ちかけた此頃になつて見物の印象を書くのも妙なものであるが、人口といつては東京市のほどしかない此一小國の博覽會と世界の強國の一となつた東洋の大帝國の夫とを比較して見ると頗る感嘆に値するものがあるので、最早大半は忘れられた當時の記憶を辿つて少し見たこと感じたことを書いて見よう。

先づ外觀からいつて見やうならば入口は表裏とも日本の玄關を飾る主義からいつてはやゝ物足らぬ程のものであつた。夫から左右に並ぶ各部門の建物、其間を飾る庭園など大體どうも博覽會の様式はさまつてゐるものと見えて之ぞといふことは

ないが、概して型にはまつた日本の建築を見た目には様式の無恰好なのが多かつた。殊に近頃此瑞西に非常に流行る無恰好な圓い屋根、飾りのないぶつさらぼうの壁、美觀といふ點からいつては餘り感心しないが内部の明り取りや裝飾のためには大分都合がよく出来て居るらしい。

内容に就いては今更詳細に書くまでのこともないと思ふが、部門の分類陳列の方法裝飾など却々よく出来て居つた。規模こそ小さけれ其内容は最近のバリの大博覽會に匹敵すると稱するものゝあるものもあながち御國自慢のみではないらしい。先づ目についたものを挙げやうならば、此國獨特の時計細工はさすがに目を驚かすものがあつた。夫から染織部も侮りがたいもののあるを示してゐた。化學器械工業の部門では却々大仕掛なものを陳列

一緒にやつて憎み従つて我々に快くないのは尤もだが、此風は尙戦争前でも已に存在してゐたので先づ我々が町を通る、ヤバナー、ヤボチーゼといふ言葉は隨處にきこえる。夫も惡戯小僧のからかい半分にいふのはどこの町へいつても見ることだがこゝでは大人が平氣で振り返つて穴のあく程見つめながらいふ。カフエーにゆけば一堂の視線は盡く我々に集る。そして一舉一動を不思議な顔して見てゐる。折々はにらみつけたり嘸鳴りつけてやりたくなることがある。此點はベルリンの奴等によく似てる。ベルリンの奴は戦争前には兎も角絶えず二三百の日本人がゐて珍らしくもないのに日本人を見ると何か珍らしいものでも見た様にヤバナー／＼と見つめる。之は奴等の大國民の度量紳士道の何たるを解しないいゝ證據でドイツ語の所謂フレツヒハイトといふ言葉は此態度を最もよく言ひ現はしてゐる。かういつた様な人間をこの歐洲の遊園の中央に見やうとは吾人の甚だ意外とする所であつた。然し佛語領瑞西へいつて見ると大分違ふ。子供が「ジャボチー」とでもいつて指さし

でもしやうものなら連れてる母親なり父親はこつそり叱りつけてゐる。其外ベルンでは買物に行つても物を食ひに行つてもぶつさらぼうの御世辭のなさは屢々腹立たしくなる。之も佛語領瑞西とはまるで違ふ。自分はロザンヌに一年餘も過してこゝへやつて來たから餘計に目に立つ、然し自分のドイッ嫌ひから出た憶惻のみでないことは自分の一友人にいゝ例がある、此人はベルンで格別に不愉快を感じずに過して此頃ロザンヌに二三月を過して又こゝへ戻つてきた。此人がベルンへ來て第一にもらした嘆聲はとてもロザンヌにゐる様な氣分はこゝには見出し得ないといふことであつた。

戦争が始まつてからこのベルノアの性格は一層度し難くなつた。戦争の始まりには極端なドイツ最眞を遺憾なく發揮して新聞などは實に見るに堪へないものであつた。近頃では大分新聞の論調もよくなつたが矢張ドイツ以外に文化なしといふ觀念はぬけない。之は山の中の小國民として無理もないとであるが、おかしくて氣の毒にも思はれる。

もう一つベルノアのいやなことは所謂ベルナー

の域を脱しないと嘲けるけれどもドイツや瑞西の畫に比べては遙かに見られる人が多い様である。

次に會場の奥に出來て居た村落の模型のことを記して此項を終ることゝしやう。入口をはいると純田舎風のカフェーがあつて其奥にはお寺が出來てる。お堂の中には寺院内の裝飾書冊などを年代を追ふて陳列してあつた。一體お寺の陳列が少からずおもしろく思はれるのに尙裏庭には石塔が陳列してある。石塔といつても種々の彫像などがくつついてゐるので日本の様に無趣味なものではないけれど。尙場内の飲食店の内に宿屋の模型が出來て居つた。宿屋の發達してゐる此國で博覽會へ陳列するに不思議はないけれど之等は日本で一寸見ることの出來ないものである。兎にも角にも此博覽會は非常に成功して居つたものであるのに戰亂勃發のため空しく閉ぢられてしまつたのは實に氣の毒のことである。

ベルノア

瑞西といへばヨロツバの公園ともいふべき山

水明媚の國で四時遊客の絶えない。さうして遊覽宿泊の設備のゆきとゞいた所で人をして思はず財囊の底をはたかしむるといはれてゐるのであるから、何人も親切な氣持のいゝ人間ばかりゐることと想像するであらう。成程名ある遊覽地を廻つてあるくと交通の便利宿屋の設備など實に遺憾なく整つてゐていかにも愉快に日を過ごせる様に出來てるが、意外なのは國民の性格は必ずしも遊覽の外國人を喜ばせる様なものではない。遊覽客の多いところでは兎角宿引根性になる代りに夫だけ人に不愉快を與へぬ様になるものだが、瑞西の人に宿引根性が餘り發達せぬ代りにどこまでも山出しものゝ素性を失はないでゐる。夫が殊に此首都ベルンに於て甚しい様に思はれる。苟くも一國の首都、外交團の駐在する所、遊覽客の一度は必ず立寄る位置にあつて見ればもう少しは開けてゐさうなものである。勿論今度の戰爭が始まつてからドイツ種の多いドイツ語を話すこの人がドイツ最良なのは無理もないことで、戰爭前には英國人英國人といつて尊敬してゐた英國人をドイツ人と

幻影を追ふ心

吉田 絃 二郎

人を愛しようとするトルストイの心には何時も「彼れは人間ではないか」といふ意思が動いてゐた。人を愛しようとするドストイエフスキイの心には何時も虐げられた隣人を慫むの情が動いてゐた。

カント派の人々が「人間の權威」を想へてゐたに對してショーペンハウエルの流れを掬む人々は「憐れなる隣人」を想へることを忘れなかつた。

カントやトルストイの人生の見方が男性的であつたのに對してショーペンハウエルやドストイエフスキイの見方は女性的であつたといふことが出來やう。

私はドストイエスキイやショーペンハウエルならば自分の友人として語つて見たい。けれどもトルストイやカントは私にとりて餘りに強い人間であるやうに思ふ。私はドストイエフスキイとならば一緒になつて虚げられた弱い男女のために泣くことが出来る。けれ共トルストイと一緒になつて「暗の力」のスキムのやうに「彼の女も人間ではないか、神の前に……」と呼ぶには餘りに私は弱い事を悲しむ。

私にとりて生活の苦痛、一層具體的に言へば人と人との接觸に於いて感ずる苦痛は、眞實に相愛するとのできぬ苦痛よりも寧ろ「人間」を知ることのできぬ苦痛である。私には人間の權威を誇るほどの人間の價值といふことを認めることができない。或る人は人間を目して「神の子」といふ。けれども私

ドイツチュである、一體ドイツ語といふ奴がアクセントの強い快感の少くない言葉であるが極く古いドイツ語から岐れてゐるこの言葉に至つては御話しにならぬ。況んや此山紫水明の郷には不似合な外貌の甚だ醜い男女の唇より出づるに於てをやである。然し曾て全瑞西に勇武を誇つたベルノ

アの剛毅な精神は今も尙残つてはゐる様である。唯其外容までも土百姓然たるは惜しむべき點である。

(四月一日復活祭の休を得てベルン寺町通の寓居に之を記す)。

編輯室より

△次號よりは海外思潮、人事相談欄を新たに加へるつもりです。人事相談欄へは何人も隨意投稿を歓迎いたします。

く思考力の系統化よりは一層眞實なものではないか。

もし彼れ等に一切の思考力を認めないとしても、それが決して彼れ等の生けるものとしての價值を減少せしめるものではない。同時に私たちが思考力を所有してゐるといふことがまた必ずしも私たちをして自然界にありて偉大ならしむるものではない。人間と人間との交渉内にありては思考力の多少は直ちに彼れ等の人間としての價值を定める一標準であるかも知れないが、人間と他の自然とを比較するに際して思考力の有益を云爲するのは恰かも音楽家と哲學者とを比較して前者は思考力に於いて後者に劣るが故に人間として價值低しと定むるが如きデイレンマに陥つてゐる。また心靈の有無をもつて自然と人間とを區別し高下しようとするのも大きな誤りであると思ふ。この論は第一歩の肯定からして誤つてゐる、誰れが自然物に心靈がないと斷言することができよう。斯やうな議論は三段論法の形式さへも作ることばできない。

音楽者には音楽者として彼れが靈しき、のちの顫律を唱ふち、からを所有してゐるところに彼れの權威があり、偉大さがある。哲學者は彼れが思索し、靜思するところに彼れの偉大さと使命とを持つてゐる。薔薇は薔薇として、雜草は雜草として、野の鳥は野の鳥として、燕麥は燕麥として、彼れ等の權威を持ち使命を持つてゐる。しかも齊しく神によりて造られ、靈しき生命の源より湧き出てゐるものとして崇めらるべくたゞへらるべきものである。この意味に於いてのみ私は人間の權威があり、齊しく自然物に權威があることを認める。たゞ人間にのみ權威があるかのやうに思想する人々の權威に對しては私は人間の權威を認めることはできないと思ふ。

自身餘りに貧しい「神の子」であることを耻づる。

私は何故に人間のみが自己の權威を主張しなければならぬか、また主張する力をもつてゐるかについてさへ屢々疑を挿まずには居れないことがある。一草一木のうちに——もし人間に人間の權威があるとしたら——人間と同じやうな權威が潜んでゐるのではないかと想へることがある。私のこの見方は餘りに空想的な見方であると想像せられるかも知れない、けれども私は眞實そんなことを想へずには居れない。草原に立つて靜かに落ちて行く露の雫を見ても、名もない雜草を見つめてゐてもそこに言ひ知れぬいのちの生動を感じずる時に、私は齊しく私たち人間と同じいのちを生きつゝある彼等のために想へずには居れない。

多くの人々は人間をもつて神の子でありとし、彼れ等自身の權威を主張する根本の理由として、彼れ等が思考力を持ち、彼れ等が心靈を持つてゐることを矜る、けれどもこれだけのことをもつて人間の權威を所有してゐるかのやうに想へるのは餘りに獨斷ではあるまいか。

人間と草木との間に共通の言語なり暗示の交通がない限り、何うして私たちに彼れ等をより低き生物として批評し斷定する力があらう。

自然界の事物が果して思考力を所有してゐないであらうか？

例へば人間が營むやうな思考力の系統化といふやうな作用は彼れ等にはないかも知れない、けれども系統化することに何の偉大な權威があらう。刹那の直感刺衝こそ眞實の生命である、系統化された思想は思考力の屍を積累ねた墓場である。刹那刹那に潑刺たる生動の感衝こそ死化され形式化され行

クリストや佛陀のやうな大宗教家が克く自然界の事物を引いて彼れ等の教へを説いたことは意義あることだと思ふ。彼れ等の心にはひとり人間に對してのみならず自然界に對する深い理解同感の念が動いてゐたのであらう。

人間をのみ對象として宗教が説かれ、愛が説かれてゐる間は愛は限られたものである。差別的な愛である。人間をのみ對象として説かるゝ愛はやがて人間と自然とを區別するやうに異國人を區別し隣人を區別し、自己をのみ守るエゴイストとならなければならぬ。私は彼れの國家をのみ愛する人々を知つてゐる、彼れ等はまた彼れの家庭を愛してゐる。彼れはまた彼れ自身を愛してゐる。けれども全人類を愛するところの愛國者でない以上は彼れは決して眞實の愛國者でも、家庭を愛するものでも彼れ自身を愛するものでもない。彼れは國家を愛すといふ、けれども彼れは國家なる概念を愛するものであつて國家そのものの、國民全體を愛するのではない、彼れはその隣人を愛することすらできない。彼れは國家を愛すと叫びつゝ、彼れの同胞たる下婢下僕を虐げてゐる。また彼れの家庭をのみ愛すると主張するものがある。けれども彼れは彼れを愛するがために家庭を愛するのであつて、家庭を愛するがために家庭を愛するのではない。しかも彼れ自身をのみ愛せんとする彼れは永久に我なる概念の上に自己の牢獄を築いてゐる。彼れはつひに人を愛することを自己を愛することを知らない。

私は人間の愛をして自己より家庭に、家庭より隣人に國家に全人類にそして更らに萬有自然に對するの愛としたい。人間のみ最も尊いとする謬見を捨てゝ萬有齊しく尊く、萬有齊しく生命の尊さと靈妙さとを呼吸せるものとして愛して行きたい。私たちは一椀の食を取る時にも私たちの肉體の糧とな

もしカントやトルストイと共になつて人間の權威を認めなければならぬならば、私たちは尙一步進んで一草一木の權威をも認めてやらなければならぬ。私たち自身を神の子と認めるならば、彼れ等も亦神の子として認めなければならぬ。空の鳥と野の百合花も亦人類と齊しく大自然の恩寵に生き、大自然のいのちを掬み分けつゝあることに於いて、人類同胞と何のけぢめがあらうぞ。

古來多くの宗教や倫理學がこの見地まで突つ込むで行つて論じなかつたことは私にとつては一種の不可思議である。印度思想には最も多くの思想は取り容れられてあつたやうに思ふ、けれども印度思想ですら、人間本位の立ち場から自然界を見ることを忘れてゐないやうに思ふ。

科學も宗教も倫理もその第一歩を踏みかへなければならぬ。私たちは隣人を愛することを教へられた、けれど荒原の醜草を愛すべく私たちの心は殆んど麻痺されてゐる。

私たちの愛の心が全くせられない理由の主なる一つはこゝにあるのであるまいか。私たちは兄弟を愛することを知つてゐる、けれども他人を愛することを知らない、私たちは他人を愛することを知つてゐる、けれども異邦人を愛することを知らない、私たちは異邦人を愛することを知つてゐる、けれども野の鳥を愛することを知らない。私たちの愛は部分的である、私たちは愛する楯の一面に憎怨の焰を燃やしてゐる。私たちの愛は差別的である。

人類の愛が萬有に對してゝなくなつたゝ人類相互の間にのみ考へられてゐる間は私たちの愛は一面暗黒と冷滅とを携へてゐる月の光りたるに過ぎない。私たちの愛は巷の隣人をも野の羊をも空の鳥をも焼き盡すが如き太陽の愛でなければならぬ。

それが私たちに賦へられた唯一の現實であり、眞實であるからである。

私たちは豫言者によりて如何に次來の世界の光明と歎喜とがたゞへられやうともそれに向つて感謝しやうとは思はぬ。次來世の解放や光明や歡喜に對して讚榮の詩をささぐるほど私たちの心には餘裕はない。私たちは次來世の光明や歡喜を冀はないものではない、けれども必ずしもそれを期待するものではない。現在の私たちにとつては次來世の光明や歡喜や無限の生命よりも、現實界の暗黒や悲哀や死の方がどれほど切實なものであり、懐しいものであるかも知れない。

私は現在界の苦痛を愛する、罪惡をも尊きものとして愛する。未知の世界より生れて未知の世界に行くあはれな人間が經驗することのできる唯一つの實在として苦痛をも罪惡をも悲哀をも尊いものとして受け容れたい。

或る人々はいふであらう「お前たちは初めから人生を悲しいものと決めてゐる」と。また或る人々はいふであらう「彼れ等は始めから人生を楽ししいところであると決めてゐる」と。

私はその何れをも認める。人生は楽しい、けれども同時に悲しい。その何れをも私たちが直感することのできる唯一の生活味であるとして尊敬する。そして悲痛を透しても歡喜を透しても、或ひは光明を透しても、暗を透しても私たちが眞に感じ得る唯一の生活味は不斷の驚異である。私にとりては世界はたゞ驚異といふ直感の外何ものもない。

人生を以て悲しいものである、よろこばしいものであるといふやうにはつきりと決めて了ふことはできない。生きてゐることが果してどれだけの價值があるか、死ねることが果してどれだけの

る植物のために感謝をさゝげたい。或は私たちの生命を維持せんがために私たちに尊い犠牲をさゝぐる小羊のために小鳥のために感謝の涙を灑ぎたい。

さて自己より隣人に、全人類に、全宇宙に私たちの愛の心が押しひろげられたとして、尙ほ私には疑ひがある。それは私たちは人類及び自然に對して權威を認むるが故に私たちの愛を感ずるのであらうか？「彼れも神の前に人間ではないか」といふやうな意識からして果して愛が全きものとなされるであらうか？

愛の进り出づる源としては、私は寧ろ人間の弱所、萬有の缺陷を慙む心ではないかと思ふ。

私たちはたしかに人間のうちに或ひは自然のうちに尊い或るものゝ潜んでゐることを知つてゐる、私たちはそれに對して崇敬を感ずる、けれども決して愛を感じはしない。愛はむしろ彼れ等萬有と自己とを貫く一つの暗い宿命に對する弱者の同感同鳴の念よりして生れると想へることが自然ではあるまいか。

權威は尊敬を要求することはできる、けれども信愛を求むることはできない。この世界が光明と歡喜とに充ち、私たちの生命が無限のものであるとしたならば私は何の愛の必要をも見出すことはできない。

生命の無限を唱ふる人々がある。彼れ等は死を以て一種の解放であるとする。次來の世界を以て光明と歡喜とに充てるものとする。けれどもそれは現在の私たちにとりて何の關係もない。私たちは現在の時と空間とを充たしてゐる私たち自身の生命についてのみ眞面目に人生を想へなければならぬ。

非生の絶對實在から賦へられたものではないか。私たちは到底一個の造られたものであり、委託せられたものである。私たち自身が非生の絶對實在でないかぎり、私たちは非生の創造者でないかぎりには宿命の下に生きなければならぬ。私たちに何の權威があらう。

バビロンの高塔を築いた古代人の建設と海岸に白砂を掻き集めてゐる少年の遊戲とどれだけのけじめがあらう。

私は宿命を呪はない、また悲しみもしない。それが私の現實の生活に與へられたる唯一の機會であることを想ふ時に如何なる形の宿命も私にとつて意義あるものである。私は感謝と驚異の念を以て私の運命を受け容れる。そして靜かに運命の奥に徹して驚異につゝまれた世界の真相を索めようと努める。

驚異より生れて、驚異に生き、驚異の世界に驅られ行く人生ほど靈しさものはない。私はこれに對してたゞ感激と感謝とをさしげたい。

私の生活にとつて創造といふことは想へられぬ。私の驚異の眼が一日一日とたゞ擴がり行くのみである。私の努力は創造を齎することはできない。私の努力はたゞ更に新しき、更らに深い驚異を發見するのみである。

萬有は既に劫初より無限の驚異を以て堪へられてあつた。私たちは絶えず驚異の底より底へと歩んでゐる。しかも驚異が無限であるところに人生勞作の意義がある。

蜜蜂は絶えず野をかけめぐつて花の香ひを翅に運んで來る、しかも大地は無限の花の香を湛へてゐる。

悲しいことであるか私には分らない。けれどもたとゝ私は現在の生活に對して、過去と未來とを通じての自分の生活に對して、その周圍に對して絶えず驚異の眼を睜らずには居れない。私はよろこぶ刹那の自分をいとしと思ふ、私は悲しむ刹那の自分をいたはずには居れない。想へつゝ感じつゝ意識しつゝ未知より未知の時空に歩み行く一人の旅人を想ふ時に私は自分自身を愛せずには居れない。同時にまた私と同じ未知の郷を辿る多くの旅人を顧る時に私は彼れ等をいたはずには居れない。野の百合花に對しても空の鳥に對してもこの隣人を勉はる心持ちを忘れることはできない。もしこれが愛の心といふことができるならば少くとも私の愛の心は弱者と弱者の間に交換せらるゝ同感同鳴の感じてある。虐げられたる者と虐げられたる者との抱擁に他ならぬ。

私は造物者といふものがあるならば、また萬有に宿命を與ふる力があるならば、私はそれに對して尊敬することを忘れない、けれども愛をさへげやうとは思はぬ。愛は造られたるもの、運命づけられつゝあるもの、ものとの間に結ばるべき思ひやりの他に出でないと思ふ。

私は人生や自然萬有のどん底を貫いて流るゝ驚異の他に私の生活を動かしてゐる何ものをも發見することはできない。

人は自然が與ふる材料を用ひて創造的進化の行程を歩みつゝありといふ。けれども私たち自らその材料を産み出すことはできない、また私たち自身にその力を産み出したのではない。材料も力も悉く

ら這れやうとしてゐる。無限な驚異はたゞ幻として私たちの眼前に泛んでゐる。心の中に私たちは何物をも發見することはできない、心の中にこそ私たちが索めやうとしてゐる驚異の影が流れてゐる。幻影こそ尊いものではないか。幻影のうちにこそ私たちの生命の努力を要求する或るものが潜んでゐるのではないか。私たちの一生はたゞ驚異の開拓にあるのみである。

私たちは隣人を怒つてはならぬ。私たちは自然界を虚けてはならぬ。彼れ等も齊しく私たちと共に驚異より驚異へと運命の下に歩み行く私たちの道伴れではないか。

私たちの生活をして凡べてのものに對する同感同鳴の生活たらしめよ。萬有は悉く驚異のうちにあつて宿命の筈に虚げられてゐるのではないか。鞭打つ者も鞭打たる、ものも齊しく私たちの道伴れではないか。イスカリオテのユダもネロも齊しく私たちの友ではないか。

私たちの愛をして鞭打たる者と共に鞭打つものをも愛せしめよ。そしてたゞ驚異より驚異の世界を見出すことをして私たちの生活努力の凡べてにあらしめよ。

傷むべき驚異界の放浪者——これが私たちの友たちであり、あらゆる自然界の凡べてにある。

萬有と相抱きつゝ愛しつゝひたすらに驚異の世界の開拓のために私たちの生活の凡べてをさへげしめよ。

(一五、六、一七)

る。私たちの小ひさな直感の翅に私たちは絶えず驚異の花の香を運んで来る、しかも大自然は永遠に無限の驚異を私たちに與へる。

花の香を見出すところに蜜蜂の生活があり、驚異の香を掬み出すところに私たちの生活がある。

現實の生活にありて何の未來を想へる必要があらう？現實の刹那にありてでるだけ多くの驚異に酔ふことのできる生活こそ最も意義ある生活ではあるまいか。人の子が犯した罪のうちにも、善のうちにも、悲しみのうちにも、光のうちにも、より多くの驚異を見出したものゝ生活こそより善き人間の生活ではないか。

私が草木のうちにも心靈の動めきを知らなければならぬといふのも畢竟私たちの驚異の念を一層強からしめ深からしめんがためである。

私は鳥の言葉を聴きたい、風の歌を聴きたい。私は人間と草木、あらゆる自然との間に忘れられてゐる言葉があるやうに想ふ。私たちはその捨てられてゐる言葉を發見することによつて一層私たちの驚異の世界を押しひろげて行きたい。

或人は私のこの驚異の念を指して幻影であるといふかも知れない。よし幻影であるとしてもそれが私の生活を刺衝し、押し動かして行くものであるならばそれは何であつても宜しい。手に取ることのできるものゝみが價值があり、眞實であり、意義があるといふことができやうか？手に取ることのできないものに現實以上の價值、眞實味がないと斷言することができやうか？人間の智慧が無限なりといふやうに證明し得た事實が果して幾何あるであらう。無限な世界の驚異は何時も私たちの手か

も、汝等之を念とせよ』

これは實に雄大なる精神である。日本のやうに多くの既成宗教のある國では、基督教は是非とも公明正大でなければならぬ。もし我々がこの精神なくして社會に出るならば、醫者となつて失敗し、實業家となつて失敗し、教育家となつて失敗し、軍人となつて失敗するであらう。もし基督教徒が排他的の精神を以て日本人民の間に介在するならば、到る處に於て衝突し、畢竟眞理の發達を遂げることが出来ぬであらう。

政治家軍人實業家等、識者間に禪をやる人が多いやうだ。これは科學思想や唯物思想の壓迫に對する反動である。禪は鎌倉時代の武士階級に傳つて名も高く人物も立派であつた人が甚だ多い、かやうに禪は佛教の一派として社會的に大きな感化を及ぼしてゐるから、基督教者も禪とは何であるかと云ふことを少しでも知つて置く必要があると思ふ。

二

禪はサンスクリットのゼンナーであつて、靜慮を意味する。天地の眞理は唯靜慮によつてのみ通觀せられるのである。王陽明が十七の頃、親類の家に若い愛らしい娘がゐた。二人は許婚の仲であつた。さて愈々婚禮の晩になると、大切な新郎の姿が忽然として消え失せた。それから大騒ぎになつて人を八方に遣して彼を捜させる段になつたが、若き哲人は何處に何をしてゐたのであらうか。こゝは里から少し離れた山寺の境内である。夜は更け渡つて四邊幽寂、木葉が折々ひそやかに擦れ合ふ外には、二人の問答を妨げるものとはなない。二人——一人は白髮童顏の老翁、一人は豐頬の少年。「世の中の事は考へねば分らぬ。靜觀によつてのみ眞理は究明せられるのだ。わしか、わしは蜀の者だが名もなければ何もないが、無爲道者と云はれてゐる。わしはこの年になつても、斯くの通りたつしやである。養生の秘訣か、それは唯靜の一字である。」二人は尙も相談じ相談じて一夜を明かした。この一夜の議論こそは、後年陽明學を大成するに與つて力があつたのである。

自由基督教々壇

基督教の禪機

内ヶ崎 作三郎

一

私は基督教と佛教との類似點を述べ、各々の長短を示さうと思ふ。一體基督教が我が國に傳來してから、舊教は三百年以上、新教は五十餘年になるが、其の間常に佛教と相容れず相敵視して來たのである。然し乍ら現代は一宗教が徒らに他宗教と議論し、争鬭するの時ではない。宜しく彼我と比較し、彼は我を補ひ、我は彼を足し、互に融通すべきである。

さて、基督教は東洋人なるナザレのイエスによつて説かれたもので、其の思想には幾多東洋的の分子がある。それが西洋人の意識によつて解釋せ

られ、實行せられて、今日の隆盛を見たのではあるが、元來が東洋のものであるから、西洋人には難解の點が少くない。けれども我々東洋人は比較的容易にこの點を解釋することが出來ると思ふ。先づ基督の教には可なりに禪的ぜんてきな所がある。イエスの教訓は禪味を除いては解釋せられない點が多い。

ピリピ書第四章に曰く、

『我が兄弟よ、凡そ眞なること、凡そ尊きこと、凡そ義なること、凡そ潔きこと、凡そ愛すべきこと、凡そ稱すべきこと、如何なる徳、如何なる譽

面白く説いたものに、禪宗の方で名高い十牛の頌といふものがある。私はこれを譯した和歌を諸君に御紹介し、これについて少しく説明を試みよう。

第一羣牛

たづねゆく深山の牛は見えずして

たゞ空蟬の聲のみぞする

麥浪起伏する武藏野のはてに、夏雲峯をなして夕陽に照り映ゆる時、誰か宇宙幽玄の神祕に打たれない者があらう。終日の勉強に疲れ、しばしの休息を良夜の散歩に求め、戀に酔へる人々のさゝやきを聞く時、誰か無限の孤獨寂寞の思ひにかられ、我れと我が幸福を疑はない者があらう。人はかくの如くにして哲學におもむく。人はかくの如くにして宗教に走る。さて一度道に志すと、こゝに亦大なる煩悶が生ずる。初めには平坦だと思つた道は案外に嶮岨である。一見近いやうに思はれた道は、實は甚だ遠い。煩悶は煩悶を生じ、苦惱は苦惱を生じ、かくして多くの秀才があたり此世に天折した例が多い。

第二見跡

おぼつかない心づくしに尋ねれば

行へも知らぬ牛のあとかな

一生懸命に骨折るうちに牛の足跡だけが見つた。我れ／＼はいかなる困難にも決して屈せず、あくまでも孜々として努力しなければならぬ。かやうにして男らしく進んで行く中には、人生の意義も價值もおぼろげながら分つて來るであらう。牛の足跡を見出すことは修養の第一歩である。

第三見牛

ほえけるをしるべにしつゝ荒牛の

かげ見る程にたづね來にけり

邪念妄想は消さんとして消えない。牛の吼ゆるは意馬心猿の狂ふをいふ。邪念妄想も心より生ずるのである。よつてこの因縁で心を省察するやうになる。

だん／＼修養の積むに従ひ、自分の心の本體がどんなものであるか、その形、その響だけでもはつきりと分るやうになる。信念が次第にさざして來る。

靜かにしてじつと考へると云ふことは昔からよくやつたもので、靜座法は必ずしも近年の發明に係るものではない。靜は實に東洋の特質である。東洋の文明は靜的である。東洋の宗教も靜的である。これは氣候風土の關係にもよるのであらう。

之に反して西洋の文明は動的である。キリスト教は活動的であり、又社會的である。綱島梁川が云つたことがある、佛教は深く入り過ぎ、基督教は淺く出過ぎると。佛教の方には三十年も禪をやつて、やうやく分つて來たなどと云ふ人がある。尤も基督教だつて、所謂終りまで忍ぶ者は幸ひなりで、決してさう淺いものではないのであるが、どう云ふものか、少し聖書を読んだり説教を聞いたりとすると、もう分つたつもりの人が多い。これでは丁度空虚な桶のやうなもので、人を導かうにもそれだけの權威けんりがない。基督者は少しく禪の深みのある所を研究して他山の石を以て磨かねばならぬ。

禪は唯心論である。萬有は心の中にある。宇宙の眞理を探究せんとすれば心を省察しなければ

ならぬ。禪によりて悟つた人は、行も禪、座も亦禪、語默動靜體安然と云ふ位で、至つて自由なものである。けれども歩いてゐては頭が散漫になるし臥ねてゐては睡くなるから臍下せいか丹田たんでんに力を入れるとか、一心に鼻端を見つめるとか種々なる方法を考へて座禪をやるやうになつたのであらう。けれどもこれが目的は要するに精神の統一にあるのである。印度では座禪をして説教を聽くさうであるが、これは聽く人の態度として理想的なものであらう。

三

さて然らば禪をやるには、一體何を考ふればよいのであらうか。之が亦極めて六ヶしいので、禪では有心は生に迷ひ、無心は死に沈むと云つて、思慮も病であれば、不思議も病なのである。これだけでは餘りに漠然としてゐて何が何やら分らないが、要するに凡人の考へ及ばざる所、天地幽玄の眞理、所謂非思量底のものを考ふるのである。かくして悟りを開くのである。この開悟の順序を

法のみちあとなきもとの山なれば

松はみどりに花はしらつゆ

かくして天地の眞理は明かになり、天地本來の姿は眼前にあらはれ、自分はあだかも即身即佛のやうになる。

第十入塵垂手

身を思ふ身をば心は苦しむる

あるにまかせてあるぞあるべき

修養の極致に達したる今は、大悟徹底の身である。これよりは衆生濟度のために傳道に出かけるのである。

十牛の頌とは大體以上のやうなものである。禪は實に空々漠々として殆んど捕捉しがたい。天地は無始無終である。因果律は循環きはまりなく、從つて人間は不生不死である。肉體の生喜ぶに足らず、其の死亦傷むに及ばない。自分はもう全宇宙を呑んでゐる。これが禪の活機である。禪僧が大喝したりするのはこれがためである。佛は一切微塵中ニ示現無限大神力、とか汝應觀佛一毛孔、一切衆生悉在_レ中とかいふ悟りに入るのである。一

毛孔の中に一切衆生があるなど、云ふのは禪の活機の一例である。

四

こんな風であるからほんとに禪が分ると、人間はなか／＼太つ腹になる。「なんのその百萬石もささのつゆ」、かく詠んだ一茶の氣は、すでに加賀侯を呑んでゐたのである。かつて南洲と海舟とが談笑の裏に江戸城明け渡しの大事を決したやうなことは、禪を解せざる者のなし能はざる所である。今度の戦争で見ても西洋人は禪的な所が足らない。彼等は毒瓦斯まで用ゐてゐる。どうだらうそのしつこいこと。これが日本人なら、負けても勝つてもどん／＼やつて了ふだらう。

日本人の性質の中は數百年來禪的修養によりて彩られたるものがある。我々が實業家として身を立てるならば、我々の取引する人々の中には必ずや禪によつて精神を鍛へてゐる者があるであらう。我々が教員となるならば同僚の中に、醫者となるならば患者の中に、さう云ふ精神で心を練つ

第四得牛

はなさじと思へばいと心うし

これぞ誠のきづなよりけり

愈々心を捕へて見ると、其處には幾多の邪念妄想がある。この間に處して向ふ所を謬^{ちやま}らず、あくまで眞理を追求せんとするには、實に大なる忍耐と努力とを要するのである。心の修練は甚だ困難なことである。

第五牧牛

日數へて野がひの牛もてなるれば

身にそふかげとなるぞ嬉しき

荒牛も手にかけて世話すれば自分に馴れて來るものである、もし我々が一心不亂に努力と忍耐とを繼續するならば、遂には必ずや鞏固なる自由意思を養ひえて、自分の心を眞に自分のものとすることが出来るであらう。こゝに至つて初めて、哲學的信念を持ち、宗教的安心を有する者のたぐひ方なき歡喜を感じることが出来るのである。

第六牽牛歸家

すみのぼる心の空にうそぶきて

たちかへり行く峰のしら雲

あゝこの大なる歡喜をば何にかたとへる事が出來やうぞ。激しさ肉の快樂に酔ふ者、やがては倦怠と疲勞との中に世を呪ふに至るであらう。百萬の富を有する者、肥馬輕車に榮達を驕る者、死の床に臨んで果して如何なる感慨があるであらう。彼等は決して、決して、この大なる歡喜を味ふことが出來ないのである。

第七忘牛存人

しるべせん山路の奥のほらの牛

かひかふ程に靜かなりけり

自己本然の心は最早妄念に煩はされない。眞の我を見出ださうと特別に努力しなくとも、決して邪念のために迷ふやうなことがなくなる。

第八人牛俱忘

雲もなく月も桂も木もかれて

あらひはてたるうはの空かな

心が何となくすが／＼しくなる。心はつねに平かに、たえず澄み渡つてゐる。

第九返本還元

ふ。「我れ地に平和を來さんがために來れりと思ふ勿れ」とか、「父は萬物を與へ給へり」とか云ふ大自覺は、あだかも佛は一切微塵の中に於て無限の大神力を示現すと喝破するのと同じである。

約翰傳の、「我はアブラハムのあらざりし先よりある者なり」とか、馬太傳の「全く疲れたる者また重きを負へる者は我れに來れ、我なんぢらを休ません」とか云ふ言葉を見て驚いたのであらう。また馬太傳十六章には、「もし人全世界を得とも其生命を失はゞ何の益あらん乎また人なにを以て其生命に易んや」とある。一茶が加賀百萬石を冷笑した其の氣分がこゝにあらはれてゐる。イエスが十字架につけられて死ぬ時、一聲高く叫んだ言葉は何であるか。現世の迫害と戦ひ、遂に敗れて殺される時、イエスは何と云つたか。曰く、『我れ世に勝てり。』眞にこれ大悟徹底した人の聲である。ヨハネ傳には、「我れ父に居り父我れに居る」とある。此處は神人合一の境で、大我と小我との一致融合の自覺である。

禪は無始無終を説き、基督教は天地の原始を或

る大生命だと云ふ。佛教の根本人生觀は因果である。けれども因果の運動を起す原動力の何たるやを教へない。我々の考へでは、この原動力が即ち宇宙的生命である。而して我々は其の大生命の一部である。自分が生きてゐるから萬物は生きてゐる。基督教の見方にはプラグマティックな所がある。「善樹は善果を結ぶ」。その人の人格が確かであれば其の思想もしつかりしてゐる。「徒らに主よ主よと叫ぶ者天國に入ることを得ず」。だから修養が大切である。

五

禪宗の僧侶にはなか／＼修養の積んだ者がゐた。かつて徳川時代に、或る時一人の禪僧が郷里遠州へ歸らうと思つて品川を通つたら、偶然にも自分の壇家の娘が遊女になつてゐるのに遇つた。

そこですゝめられるまゝに登樓したが、其の一夜を遊女の枕頭に座禪して明したと云ふことである。これは一種の悟りであるが、此禪僧が進んで遊女を救済するに至らなかつたことが遺憾であ

てゐる人を見出すであらう。であるから、禪とは何ぞやと云ふこと位知つてゐなければ、困ることがあると思ふのである。しかしながら基督教を知つてゐる者は、比較的容易に禪の大事をつかむことが出来るであらう。

さて翻つてイエスの教訓を見よ。

馬太傳五章に曰く『心の貧しき者は福なり、天國は即ち其人の有なればなり。哀む者は福なり、其人は安慰を得べければなり。柔和なる者は福なり、其人は地を嗣ことを得べければなり、饑渴ごとく義を慕者は福なり、其人は飽ことを得べければなり。矜恤ある者は福なり、其人は矜恤を得べければなり。心の清き者は福なり、其人は神を見こしを得べければなり。和平を求る者は福なり、其人は神の子と稱らる可ければなり。義ことの爲に責らるゝ者は福なり、天國は即ち其人の有なればなり。我ために人なんぢらを詬諍ののしりまた迫害せめいつはりて各様の惡言をいはん、其時は爾曹福なり、喜び樂め天に於て爾曹の報賞おほければ也』と。かくの如きは倫理學上の理窟などで解るものではない。又曰く、

人なんぢの右の頬を批ば亦ほかの頬をも轉じて之に向よ、爾を訟て裏衣を取んとする者には外衣をも亦とらせよと。これが基督教の禪的な所である。多くの傳道教は馬鹿正直にイエスの激語を辯護してゐる。しかしこれらの言葉をそのまゝ行つて見給へ、病犬などに跳びつかれた時は死んで了はなければならぬ。イエスの精神は決してそんなものではない。禪僧が大喝一聲する時の氣分が丁度それなのである。

同じ馬太傳の二十一章には、『イエス神の殿に入て其中なる凡の賣買する者を逐ひ出し、兌銀りようがへするもの者の案鴿をうる者の椅子を倒し、彼等に曰けるは我家は祈禱の家と稱らるべしと録さる然るに爾曹これを盜賊の巢とせり。』とある。隨分亂暴な話である。これなどは三十棒を食はせる禪僧の呼吸を知らない者には、到底解せまい。

かやうに基督教は禪によつて解釋せられる點が多いのであるが、久しく西洋の方を遠廻りして來たので、一寸西洋臭くなつた。それで其の中の禪的分子が割合に注意せられないのであらうと思



時

評

自由基督教會の 設立に就いて

吾人は前號の本誌に於て自由基督教會の設立を公にした。しかも尙ほこれに對して多少の疑を挟む人があるやうであるから、一言辯明して置くのである。統一教會は明治四十五年の一月成立したのである。其の後今日に至るまで二百數十名の新會員を増加したのである。然るに此の會員中には東京市の北部即ち本郷、牛込、神田、小石川、淺草若しくは北豊島郡より日曜毎に通はるゝ人があつて、是等の人々は往復時間の甚だ長さに苦しむてゐたのである。故に本郷、神田、牛込の何れかに新たな教會を設立したき希望を抱いた人々が

あつたのである。これと同時に日本人間の宗教運動は經濟的にも獨立しなければならぬ。然かるに老大なる惟一館といふ建物のなかにありては二十數年來の傳説がありて容易にこれを實現することはできないのである。故に統一教會はそのまゝに發達せしむると共に最初より日本の進歩的基督教者によりてあらゆる費用を擔當せらるべき新教會を試みる必要を感じに至つたのである。この二つの動機よりして自由基督教會が成立したのである。即ち自由基督教は統一教會の外に新たな中心點を加ふるに至つたのである。而て統一教會に盡したる人々は兩教會に於いて盡力することゝなつたのである。即ち僕の外に安部磯雄氏岸本能武太氏岡田哲藏氏相原一郎介氏等は毎月一度ぐらゐ

る。序に今度婦人矯風會では御即位の大典の記念とし、向ふ六年間に公娼制度の廢止を斷行しようとしてゐる。基督教では悟る丈では満足しない。社會的活動とならざれば已まないのである。

さて禪はかく立派なものであるが、今日の政治家などで禪をやつてゐる人は、單にづう／＼しくて悪いことを平氣でやるものも少くない。これは彼等の禪がまだまだ本物になつてゐないからだ。所謂野狐禪だからである。思ふに禪の缺點は其の手本のないことだ。即ち以心傳心である、不立文字である。禪は全然自分で工夫するのだから、往往にして其の本領をあやまる人が多いのである。之に反して基督教にはナザレのイエスといふ立派な手本がある。故に正路を踏んで修養することが比較的容易である。もし夫れ基督教の理想と佛教の理想といづれが勝つてゐるか云へば、これ即ち大問題であつて一朝一夕に解決することが出来ないけれども、先づ兩者がお互ひに理解し合ふこ

とが大切であると思ふ。

世人は動もすると基督教者に膽略がないと批評するがこれは間違ひである。イエスには非常なる膽略があつた。彌次位で壓迫され能はざるものが眞の基督教者の心腸に存在するのである。そんな場合には臨機應變に、その彌次を大喝一聲叱り飛ばす位の勇氣がなくてどうするか。この勇氣を養ふには不斷の修養が大切である。基督教徒は社會なる戰場に立つて花々しく戦ふと共に、常に教會なる練兵場に於て充分の訓練を受けなければならぬ。故に教會は決してつならぬものではない。近頃基督教の傳道が行はれてゐるが、いづれも通俗な方面に限られてゐるやうである。我々は更に之を高尚な幽玄な方面に及ぼさなければならぬと思ふ。

一切衆生悉く一毛孔の中にありと云ひ、父は我に居り我れ父に居るといふ一大確信を以て、共に進もうではないか。

議院議員として花々しき活動をなした。また東京毎日新聞の主筆として久しく論壇の雄であつた。また社會矯風の事業に奔走して座席殆んど温まる暇もなかつた。吾人は島田氏に於て理想的政治家を見るのである。西洋の政治家に比して遜色なき新時代の政治家の典型を見るのである。しかも島田氏は自ら好んで權力に遠ざかり常に理非曲直を以て國民的大問題を指導したのである。然るに此の度の特別議會は同氏を議長に選んだ。島田氏は果して今日の如き蛙鳴蟬喧の議會の議長たるには餘りに立派であるかも知れない。併しながら日本の帝國議會が島田氏の如き清高の士に對して當然與ふべきものを與へたるは衆議院にも尙ほ一道の光明の存するを證明するものにして吾人はこの點に關して大なる喜びを感じるのである。

この機會に於て吾人はまた二十三年以來十數回の選舉に於いて常に島田氏を選びたる横濱市民の誠意誠心に對して尊敬せざるを得ないのである。六月の六日午後築地精養軒に於て沼南會が開かれ、島田氏の友人後輩數百名相會して半日の清談

を試みたるは近頃的美舉なりと言はざるを得ない。島田氏既に六十を超ゆると四歳の高齡に達せられたれども元氣旺盛なるは大いに祝すべきである。來らんとする十數年は必ずや同氏の經綸を實行すべき時あるべきを信ずる。吾人は同氏の自重して加餐せられん事を希望する。

第二の快事は早稻田大學々長法學博士高田早苗氏の貴族院議員に勅選せられたることである。高田氏は早稻田大學の創立者の一人であると共に、永らく政界の人となつたのである。殆んど十年來同博士は政治の關係を斷ちて唯意専心早稻田大學の發達のために心血を注がれたのである。民間の事業は甚だ困難であるが、殊に私立大學の經營は慘憺たるものがある。早稻田大學が幾多の難境を突破して今日の盛況に達し卒業生を出すと既に一万數千名、また常に一万に近き學徒を教育しつつあるは、その功の大部分は高田博士の教育行政に於ける技倆と努力とに歸せざるを得ないのである。同博士が近ごろ健康を失して多少の衰弱を覺えるはこの努力の如何に猛烈なりしかを語るものであ

は自由基督教會に於いても統一教會に於いても講演せらるゝのである。僕は代る／＼兩教會に於いて日曜朝の説教を擔當するのである。日曜の夜は主として我黨の士は統一教會に於いて講演を繼續するのである。

自由基督教會は五月廿三日の日曜日より神田錦町二丁目女子音樂學校の講堂を借りて禮拜説教を開始したが東京北部に在る統一教會の會員約四十名は新教會の會員となつた。併し新教會は當分は會員の親睦を主とするが故に公開しない。少數な會員が胸襟を開いて信仰と希望とを語り合ひつゝある。九月に至らば公開することになるであらう。多分七月の中句までは女子音樂學校講堂に於いて日曜日朝九時半より開會するであらう。公開せずと雖も特志家は誰をも歡迎するのである。要するに自由基督教會は俄かに會員の數を加へんことを欲しない。友情の上に築かれたる小なりと雖も強固なる團體を造らんとすることを理想とするのである。會員多數の賛成あるに非ざれば新會員を加へざる方針である。この教會は小さい試みである。

然れども日本に於ける自由基督教の企てたる最初の試みである。即ち經濟的に時には思想の方面にも獨立を標榜したる最初の計畫である。兎に角吾人は東京に於いて一中心を増加したることを喜ぶのである。吾人の主義に賛成する人々は東京南部の人々は統一教會に北部の人々は自由基督教會に出席せられんことを希望する。新教會が自由基督教會と稱したるはユニテリアン主義の人々の外に他の進歩主義基督教の人々をも網羅し得んがためである。決して他意あるがためではない。この文至らずと雖統一教會と新教會との關係を明にし得たと思ふ。吾人は天下同信の友人諸君に向つて兩教會の發達のために應援せられんことを希望するのである。(内ヶ崎生)

政界近來の快事

島田三郎氏衆議院議長に選ばれたると政界近時の快事の一つなり。島田氏は開進黨創立以來全く國民の政治教育を唱道し來りたる清廉の國士である。明治二十三年以來常に横濱市民を代表して衆

線を缺いて居る。これ幹部の其人宜しきを得ざる爲である。かゝる多數黨とかゝる少數黨の間に介在する議長は大なる迷惑を感じざるを得ない、吾人は十二月の通常議會に於いては多數黨たるものが大いに自ら戒飾して多數黨の佳景と寛大とを示されんことを希望するのである。(甲島生)

近事五題

星 島 二 郎

一 議場騷擾の責任

騷擾に騷擾を極めし第三十六議會は余輩も兩三回傍聽席に在りて空前の喧囂紛争を實見し眞に呆氣に取られてしまつた次第である學校間の競技にも彌次的聲援盛んにして随分野卑なる言葉を耳にする、然れども未だ曾て此度の議會程下劣なる言辭振舞を見たる事はない、其責果して誰れに歸すべきか、在野黨は議長の整理無能力と政府與黨の多數横暴を攻撃し、議長は議員の不規則なるを攻め又政府黨は在野黨の徒らに反對煽動的なるを非難して居る。然れども公平なる批判に従へば喧嘩兩成敗の譬にもれず、島田議長にも勿論其責任あ

り政府與黨も多數を頼みし嫌ひあり在野黨も徒らに反對せんため無暗に反對せし振舞あり、結局政派の如何を問はず總ての議員に其責任ありと云はなければならぬ、今一步進めて考察すれば現在の選舉制度に缺陷あり又國民其ものが未だ眞の立憲の意義を解せず從來の「開明せる專制主義」に馴れ、尊き議會の本義及び此に對する權利と義務とを痛切に感ぜざるによる、即ち國民の政治教育の幼稚なる所以である是を以て考ふれば臨時議會の不様は又國民の不様を反映したものと云ふ事が出来る。要するに徒らに罪を他に歸せしめず政府も議員も一般の國民も共に戒めて重大なる國政を議すべき神聖なる議會をして斯くの如き失態を再びせざらむ様お互に覺悟せなければならぬ、そして、一時も早く政權爭奪のみを事とせず、社會問題生活問題或は勞働問題等が議會に現はれて忠實に議せられむ事を望むで止まない、現に此度の議會に於ても下層社會に取つて重大なる影響ある無盡法案の如きが上院の議決が下院の議決を修正したる如き、これ下層社會の問題は下院の先じて委

る。一體國家は教育家に對して甚だしく薄情である。殊に私立學校の經營者に對しては殆んど顧みないのである。それ私學と雖も國民を教育するところである。吾人は私學といふ語にすら快しとしないものである。私學と言へば一二の私人が支配するかの如くに聞えるのである。然るに早稻田大學の如きは國民の後援によりて存在するものなれば宜しく民立大學と稱すべきものである。私立大學の經營は官立大學の經營に勝ること數十倍である。而してその卒業生は何れも國家民族のために奮勵努力しつゝあるのである。然るに従來政府は私學の經營者及びその教授に對して冷遇するところありたるは天下有識の士の密かに不滿を抱きたる點であつた。然るにこの度勅選によりて高田博士が貴族院に入りしは大に意を強うするところである。高田博士は元々政治を好む人なれば必ず貴族院に於いて重きを成し、殊に國民教育の問題については識見ある議論を述べらるゝ機會のあらんことを吾人は切望するのである。國家はその進歩發達に對して貢獻したる人物に對して表彰すべき

多くの機關を有する。かゝる榮譽は相成るべく平等に民間の人物に對して與へらるべきものであると思ふ。

吾人は混沌たる今日の政界に於いて多くの不滿を感じれどもこの二事を以て愉快なる出來事であると考へるのである。(甲鳥生)

多數黨の徳義

この度の總選舉は約二百名の新代議士を衆議院に送つたのである。吾人は大なる期待を新議會に有したのである。新議會は必ずや新なる外觀と精神とを示すならんと豫想したのである。然るに吾人の豫想は全然相違して議會は依然として亂雜を極めてゐる。罵詈譁は依然として發せらる。殊にこの度の大敗したる野黨側の彌次馬の跳梁跋扈は甚だ心得難きものがある。吾人はかゝる彌次馬的政治家は次回の總選舉に於いて當選せざらんとを希望するのである。然れども多數黨たる政府與黨も亦その責任なきことはない。彼等は絶對多數黨である。故に咆哮する者をして咆哮せしめ、怒號する者をして怒號せしめ、凡べて柳に風折れなしの流儀で喧嘩相手にならずして投票に於いて勝利を得れば可なるに非ずや。然るに同志會にも彌次馬ありて野黨に對して喧嘩を賣り附くるが如き態度を取るものがある。これ誠に大人氣なきことにして多數黨は多數黨の位置を示すべき筈である。要するに多數黨は訓

切なる國政を料理すべき場所として大に考へなければならむ點と思ふのである、余は日本の議會の騒々しさを其議場の設備にも起因するものと觀て古き「居は其心を移す」と云ふ言葉も味つて識者の一考を煩はさむと思ふ次第である。

三 衆議院議長と島田三郎氏

立憲政治に於て立法院の首長たる衆議院の議長は總理大臣と對等すべき重位にして、決して並大臣の以下に置かるべきものではない。然るを立憲の本義を解せず官尊民卑の我國にありては是迄議長自ら所謂伴食大臣の下に居た様な始末で、議長は總理大臣と對等に認められる程にならねば、實際議院政治の本領に達したるものとは云へないのである。此名譽ある椅子に今回島田三郎氏が座する事になつた、何んと云つても初期以來の名代議士既に第一議會に於て全院委員長に擧げられ又第七及第十一議會に於て副議長となりし事あり六十四の今日まで實に百戦苦闘終に昨年山本内閣を倒せし首勳者として同志會の總務となり又此議會に於て議長に選舉せられたのである。島田氏が今次議長となつたからとて世間は寧其榮譽の遅かりし

を稱すれ決して同氏に對して議長の椅子の重過ぎるものとは思はなかつたのである。然るを此度の臨時議會に於て議會始まりて以來の大騒ぎを惹起し終に在野黨より議長不信認案の出づるまでに至つた。島田氏果して議長の任に堪へざるか、又其責任他に存するか、そは前論に於て聊かのべた次第である。

島田氏は吾等同信の徒基督教者を以て任じ長年宗教界又社界廓清の爲めに奮闘せられ、我が自由基督教會に於ても安部磯雄氏とも親交厚く内ヶ崎氏も其の選舉の應援に行かれ又小山東助氏とは切つても切れぬ間柄である。かゝる事は捨て置いて余は氏が基督教者なるが故に人並以上其の成功を祈つて居たのである。立法院の首長たる名譽ある議長になつた人は今迄の歴史に置いて數少なき者であつた。然るに今日迄我等同信の徒を二人迄で其の地位に送つた事に吾人の一種の強味を感じずるしだいである。即前に名議長として萬人の推稱して置かざる片岡健吉氏あり。而て此度島田三郎氏を得た。片岡氏は議長として最も永く其の職にあり

しく審議決定すべき筈のものである、これ徒らに政權に關係する大問題にのみ騒いでかゝる問題に忠ならざる一證である。

あゝ今にして眞に立憲の本義に悖り、折角進歩の曙光を認めたる我國の立憲政治をして根本的に傷け、終に、日本國民には代議政は不適當なり、血を以て購はざる、何等犠牲を拂はずして得たる憲法は國民に徹底せず、日本はやはり從來の專制政治が適當なりと或は保守專制の徒をして此處に乗ぜしめむとも計られず、大に留意すべきである。

二 議場の騷擾は其設備にも起因す

敢て此度の議會のみならず初期以來日本の議會は歐米列國の議會に比して喧騒の程度が烈い様である、殊に此度の臨時議會は其最も甚だしい一であつた、是には前論の如く議長や議員の責任は勿論なれど何か他に原因の存するのではあるまいか、自分は數度傍聽席に在りて開會を待つ事暫らく種々議場の設備を見て、騷擾の原因が多少其設備によりて生ずる議員の心理作用に起因するものと觀察したのである。

第一は議席の構造位置である、大臣政府委員席のあまりに議員席と向き合つてさも議論を興奮せしむるが如く、何等「相談しよ

う」と云ふ如き氣分を起さしめない。英國の議場の如く議員數に比してあまりに狹隘なれど大臣席と議員席とさまじく對向的ならず、U字形になれる議場は如何にも相談をなさしむる様、大聲叱呼する事が可笑しく必要な様に出来て居る。英國の議會に於ける辯論は日本の如く所謂雄辯を要しないのも、結局其構造によるものと思ふ。試みに日本室の座敷に端座して議するとせむか、決して大した騒ぎになるまいと思ふのである、議席の造り方によりて騷擾を呼起すなどあまり突飛なる觀察の様なるも、人の心理作用殊に群衆の心理は案外の現象によりて動かさるゝもの、或は此觀察當らずと雖も遠からざるを思ふ。改築の場合大に考ふべき點と信ずる。

第二は換氣の設備である、余は外交問題による不信認案討議の日午前十一時頃より傍聽席の満員の中において開會を待ちしが、呼吸臭い事限りなく若し議場に四百の議員氣焔をあげなば如何に炭酸瓦斯の充滿する事ならむと思つたのである。近時の科學者の説によれば炭酸瓦斯は餘程人の精神を興奮せしむるものとか、若し左様とすれば、あの換氣設備不完全なる議場は確かに重大なる國政を冷靜に審議すべき議員の精神をしてどれ程炭酸瓦斯の中毒によりて興奮せしめて居るか知れない、騷擾の起因或は多少此邊にあるかも知れぬと思ふのである。

第三は議場の硝子張りの天井である、あまりに光線をさへぎり過ぎて、議員の頭を沈靜ならしむる目的を通り越して聊さか隱蔽となつて居る。普通の天氣にありて議場内は丁度此頃の梅雨期の如くドンヨリとして實にいやな感じを與へるのである。是等も大

らにかの野球に於て常に審判官に駄々をこねる醜態を演じ今日の如き議會の品位を下げ議場の秩序を亂し延いては代議政治の根本を危うくする様な事になるのである。故に余は切に超然議長制度を望み島田氏が今一層下腹に力を入れられ然して思ひきつて黨派より脱して議長の職責を全うし日本の立憲政治の爲一層の努力あつて一方片岡氏と共に我等同信の徒の期待を全うせられん事を望んでやまないのである。

四 責任支出問題と政治道德

第卅六議會に於て可なり大問題となり又學者間に於ても種々論議せられて居る所謂責任支出即ち剩餘金支出問題は却々興味ある近時の憲法上の大問題となつた。憲法論争に於て有名な美濃部上杉兩博士間に於ても亦互に異なつた意見を發表せられて居る。又貴族院に於ても若槻藏相と仲小路廉氏との間に眞面目に此の問題が論議せられた。又衆議院に於ても在野諸議員と當局並に與黨議員との間に八釜しく論議せられたのである。美濃部博士は剩餘金支出を絶対に違憲なりと爲さず豫算に依らざる支出は剩餘金にせよ豫備金にせよ唯だ已むを得ざるに處するの道であつて、固より是れを濫りにする事はゆるぎない。若し此れを濫にするが如き事あれば、此れ豫算制度を無意義ならしめて重要な憲法の原則を破壊するものであると論結せられ、論旨に於ては、これを取て

違憲にあらずと論ぜられて居る。唯だ米價調節や蠶絲救済等の爲めになせる莫大なる支出は非難を免れ得べきや否やは別問題として論ぜられて居る。一方上杉博士は豫算外の支出は唯豫備費のみに依り支出せらるべきものであつて、豫備費以上には其の支出の道は無い。

憲法第六拾四條第貳項にある『豫算外に生じたる支出ある時は云々』とあるのは豫備費を支出する場合を云ふのであつて、無暗に國庫金を豫算に依らずして支出する事が出きぬと云ふのではない。其れが出来るとするならば特別豫備費を置く必要も無く實に豫算制度の本質を破壊す事となる豫算以外の支出をするには追加豫算として議會の協賛を経るか若し議會の間會中にあらず議會を召集する事不能なる時は唯憲法第七拾條によりて極めて緊急の需要ある場合に於てのみに許さる可きものである而て米價調節の爲めに支出するが如きは果して緊急の場合となし得るか否か。議論に餘地ありと論じて居られる。是を要するに美濃部博士は剩餘金と豫備費の支出を同視して共に豫算に依らざる支出である、而て其は緊急避くべからざる必要に依りてのみ支出し得るのであつて憲法第六拾四條第貳項の適用により後日議會の承諾を求むればよいと云ふ議論となり。上杉博士は豫備金と剩餘金と全然區別して剩餘金の支出は憲法第七拾條に依りて極めて緊急の場合に限り支出し得るものと論じられて居ると共に米價調節や蠶絲救済の爲に莫大の剩餘金支出を爲したる現政府に對して小問題として居らるゝのである。私は茲に兩博士の議論を借て是を批判しようとするのではない。本論は暫くをいて、此問題に關して日本の現代政治家

實に政黨政派の如何を問はず公平無私反對黨に迄で非常に畏敬せられた人である。惡口謂て有名な犬養毅氏さへ「片岡の耶蘇は眞物であつた」と切りに稱讃して居られたのを聞いた事がある。此度院内に銅像の出来るのも實に尤もな事と思ふ。自分は島田氏が此度議長に選舉せられた時、願くば片岡氏の如くあつばれ名議長として後世に其の範を遺され基督敎者の榮譽を増されん事を切に祈つたしだいであつた。然るを空前の騷擾を引き起し議長不信認案の出づるに及び自分も度々議場の光景を目撃して非常に失望した次第である。其の責は勿論前述の如く議員の總てに存す事であるが又大隈伯の言の如く島田議長の法規に熟せざる缺點もあつたであらう。又政府與黨の爲めに多少我田引水の誹りもあつたか知らない。或は同氏の下腹があまり固く無かつたにも起因した處もあらう。然し私をして公平に考へしむれば議場にをける島田氏の所謂議長振りに依つてよりも寧ろ根本の議長制度其物に起因して居るのでは無いかと思はれる。是迄で議長は常に多數黨に選ばれ少數黨

には副議長を與ふるのが殆ど習慣となつて居た。今回の臨時議會に於ては政府與黨に於て兩者を占有した。然してこれまで議長に選出せらるゝものは、彼は黨の爲めに非常に功勞あり、或は盡力せりとかと云ふ理由にて總てを黨本意に依つて選ばれて居つた。現に島田議長は多數黨にあり。然かも昨年政友會内閣を仆したる張本人にして反對黨より最も敵視せらるべき地位にある人である。勿論過去の問題を捉へて此れを議場に於いて個人的に酬ひるが如きは卑劣極はまるべき事であるが、人は感情の動物やはり議長たるべき人はかゝる問題の無き人になるのが本當であるかも知れない。議長は何處までも公平無私徳望全院にあまねき人であるか、然らずんば超然的に此れを選び多數黨にも少數黨にも政府黨にも在野黨にも全々超越したる第三者よりは是を選ぶ制度を取るのが最もよいと信ずる。議院政治の模範國なる英國の議會にありては殆ど是と同じき制度を採つて居る。議長の手加減に依つて何物かを掴まむとするが如きは所謂多數黨横暴なる熟語を作りまた少數黨をして徒

の徳望に起因するとも考へられる。斯様な事から私は博士の手腕はさて置き、其人望に於て得難さの士であると云ふ事は、他の事は知らないでも石井氏を信ずるに厚き私は斷言してよいと思ふのである。博士は群馬縣の出身東京醫科大學の別科に學んだ人である。本科出身でない人が今迄に於いて彼の地位にありし中は却々普通の學識年功のみでは今のあの社會に容れられる筈のものでない、博士は往年獨逸ストラスブルヒ大學に於てホツペンサイレル教授に就き醫化學の研究をつみ、歸來岡山醫專、京都醫科大學に職を持たれ、熱心なる研究一日も休まず斯界のオーソリチーとしてプロフェツサーアラキの名は日本よりも寧外國に名高いくらゐである。博士の大頭も又有名で普通の店には合ふ帽子が無いと云ふ事で、其れにならひ風采も實に堂々たる方である。大學總長には學術と人格と健康と三拍子揃つた人でなければならぬ。然るに博士は確かに此條中に適つた良總長である。同僚の金杉博士も上州の三人男として國定忠次と新島襄氏と荒木寅三郎氏とをあげて大に推稱

し『今日まで荒木の口から嫉みと怨みと偽りの愚痴めいた語を決して聞いた事がない』と云つて居る。學生達も物事に無頓着な極めて平民的の同氏の態度には皆畏服して居るさうである。私は問題の多かつた、京都大學に實に好適の總長を得たものと祝福せざるを得ない、そして博士が益々健康にして充分に其職責を全うし同大學の發展せん事を祈らざるを得ない。

時事隨感十種

一

近頃老人の鑢鑢たるには敬服の外無之候獨り政界に於ける老伯のみならず、わが宗教界にありてもレイマンとして森村翁、廣岡女史の活動振りは眞に専門牧者連並びに青年者流の顔色無之次第に候。

二

長らく缺位なりし東京市長も此度奥田義人氏を迎へ一先安心致し候、前に文部大臣として又司法大臣として人氣惡しき内閣に在りて尙相等の令名を博せし人、前市長阪谷男に劣らざる良市長を得たる心地いたし、切に新市長の健康を祈り申候、東西兩京何れも前の大學教授法學博士の市長を得たるは御大禮の時に當り至極妙なりと存じ候。

の政治道德が如何にも出来て居ない事を看取したので少しく叩いて見たいと思ふのである。此度の政府が六千六百萬圓からの大責任支出をなして其れが議會の問題となり六月二日の本案委員會及び六月五日の本會議に於ける各派代議士並に當局各大臣の辯明等の議論を見又過去に於ける其等の人々の言責を考量して現内閣成立當時増師問題に關して大隈伯や尾崎法相の在野當時増師反對を稱へた言責を攻めしと同じ様に私は武富選相の豫算詳解に於て、一本文相の憲法論に於て責任支出を違憲なりと論じたるに今日當局者となるや、直ちに其れ等を否定し去つてしまひ又花井、早速其他の代議士達何れも在野黨當時に違憲論を唱へし人々が一朝與黨となるや此れを認容するが如きは共に公人として又政治家として重すべき言責を如何にも地位境遇の御都合次第に依つて變ずるを見て日本政治道德に一大缺陷があると慨嘆するものである。最も奇異なる現象は責任支出問題に就て是迄度々問題となつた議會に於ける過去の記録を見るに在野時代盛に違憲呼はりした人々が一旦在朝者となるや直に前論を放擲し去つてしまひ在朝時代に此れを認容した人々が一旦在野黨となるや再び違憲論者となつて居る。此れは明かに議會の記録に残りしものにて其等の人々を表として擧げて見れば實に面白いものであらうと思ふがこゝには略して置く。要するに日本の政治家の言責程當にならぬものはない如何に人の意見は進歩し變化するものと云ふても、さう無暗に地位や境遇に依つて變るものではあるまい。私は日本の政治家が單に増師問題や又此の問題に就てのみならず常に今少し公言せる自己の意見に對して責任を感じて貰ひたい。然らずんば日本の政治

道德は決して進歩するものではあるまいと思ふ。變節と變説とは明かに此れを區別せなければならぬ。多くの日本の政治家の所謂變説は殆ど變節であると云つても差支へあるまい。是れを改めずんば日本の政治道德は決して進歩しまいと信ずるのである。

五 京都大學の總長新任

長い間隨分問題となつて居た京都大學總長も愈よ醫學博士荒木寅三郎氏に決定した、澤柳前總長對法科教授達との問題も是で一先解決、自治制主張の教授側の希望をある程度迄達したるものと祝さねばならぬ、其事はさてをいて京都大學が學識德望兼備せる荒木博士を專任の總長として戴いた事は同大學のため又日本の學界のために祝福せねばならぬ。私は未だよく荒木博士を識らないものであるが、只私の最も崇拜して居た故岡山孤兒院長石井十次氏が非常に氏の徳を稱して居られた事を度々耳にして密かに如何に人格の高き人であるかと敬慕して居つた次第である、現に石井氏は『自分が岡山の醫學校に入學を志望した動機は荒木先生が居られたからだ』といつて居られた。して見ると岡山に彼の有名な孤兒院の出来たのも博士

れたる事に候が此度の夏季學校に於ける同大會に於て再び此論議せらるゝ由、自由基督教會も新たに産れたる今日何卒改革論者の奮闘を希望して止まず候。(追分生)

教會合同問題側面觀

先年北海道に遊んだ時、我北邊の新天地に基督敎が割合に多く擴がつて居るに驚いた。併し更に深い見聞は、手廣い各派の傳道は今では左程の進境を現はさぬといふのである。其一大原因ともいはるゝは、新開拓地があれば、其處に傳道が始まる、内地からの移住者の心には何よりも信仰と慰安を要するから、比較的に求道者信者が多く出来る。然に一教會が或地に傳道を始めて成績がよいと。他の教會も直に同地に開始する。併し住民は餘り多い譯でもないから、畑を二分したといふ丈で、結果は新舊共に振はないこととなる。之が主として此地の傳道の進展を阻む原因となつて居るといふのであつた。丁度同じ頃夏季傳道に來て居られた組合派の綱島氏もコンナ事から刺戟されてか、其秋には敎派合同の要をといて居られた。外國に

はエデンバラの宗教大會などあり、世界における各派の合同問題も論じられる傾向があつて、當時東京を中心として我國における新敎の合同問題が起りかけた。當時の雜誌「新人」では此問題を提出して敎界諸名士の意見を徴した、記憶を辿れば新進の牧師や平信徒は、概して合同賛成論であるが各派の大頭連は賛成といふ聲は聞えなかつた。僕が青年會館で米國から歸朝した計の故本田庸一氏を捉へて意見をきくと、ソんな話があるかねと例のニコポン不得要領で逃げられて了つた。併し平信徒連の熱心の結果合同委員といつたやうなものが、各派の人々で出來た筈であつた。あの會は其後どうしたか。健忘性なる敎界の人々は何時しか忘れて居る。然るに近日平信徒たる長尾半平氏に依て再び合同問題が提唱されたといふ。其動機は委しく知らないが、先頃の協同傳道の結果各派間の分立など無意味であると悟られたのであらう。現代の日本で少し廣い眼光をもつて、傳道に當つたり又は基督教全體のとなど考へれば何人でも茲に來るのは當然だ。併し多くの信者は教會の小

三

紛擾を極めし兩國の國技館も可なりの人氣を以て終り、相變らざる大刀山の元氣と大錦新進の勢力には敬服の外無之唯新横綱鳳の休場には失望いたし候、伊勢の濱の家政の紊亂極度に達し「非常なる苦悶の中に立ちて不幸連戰連敗したるも最後迄全力を注いで奮闘したるは廢れ行く角道の爲めよき清涼劑と存じ候。

四

八釜しかりし臨時議會も兎も角終了隈伯内閣の幸運を祝し申し候喧々囂々たる議場の光景は學校に於ける擬國會よりも劣りたる有様、只議會にありては口癖と禿頭の多きのみが優れたるくらゐと存じ候。

五

幾度も試験に惱まされ青年の元氣は餘程去勢せられし上やつと卒業したる新進の學士連も就職難に罹りて實に哀れを極め居り候本年帝大卒業生未だ半數の就職さへし得ぬ由に候へば他の學校の卒業生も推して知るべく社會の不景氣もさる事ながら制度の罪も之れあるべき事と存じ候。

六

就職難につけてこんで諸會社の重役連の採用試験に於て弱い者いぢめをするは聞き棄てならず候、十人内外採用すると云ふ住友へ二百人からの應募者あり四人採用すると云ふ興業銀行へ七十名からの希望者あり、何れも、君は何點だ、女遊びは好きかなど其他隨分人を馬鹿にした重役連の質問ありし由に候が、一體下らない

事を云つてゐらばる人も惡むべしだが新學士連の氣慨なきにも呆れはて申候。

七

小學生の掃除問題又、再燃却々諸名士の議論出て申候何れも相當の理窟有之感服いたし居り候然し小學生もさる事ながら最高學府の大學講堂其他諸學校の教室又は圖書館の有様は掃除以上に随分、煙りや塵や又諸種の黴菌にて却々危険なもの由に候これ順序での事に御論じありたきものに候。

八

大戰爭の影響は各國に種々の政變を呼び起し申候、先きにキチナ一元師の突如慣習を破りて入閣したる英國は此度空前の聯立内閣生じ立憲の模範國に珍な現象を呈し又米國にありてはルシタニヤ號事件より延いてブライアンの辭職を見るにいたりし事却々興味ある問題と存じ候。

九

大浦内相の一萬圓事件も近來の賑やかな問題に御座候、大浦氏の是迄のやり方を知るものは氏自ら着服したるなどとは信じないまでも、政略とありてはやりかねまじいと思はしめるは同大臣のために惜しき事に候何れにせよ大浦氏はあまりに白川氏を買かぶりたる失敗に候白川氏の判決こそ面白きものに候。

十

先年基督教青年會大會に於て同盟憲法改正の議起り福音主義云云の問題は終に統一教會青年會の問題として隨分八釜しく論ぜら

ること尙先年の如くであらう。我國における眞の獨立せる宗教運動のため、又日本人としての宗教上の獨立性の試金石として之れを見なくてはならぬ。單に弱少であるから、之を叫合統一して物質的強大をなさんといふ丈では足りない。基督に在て一といふ内的要求から出發して、醇乎たる獨立的教會を建つためである。合同といふには、之に依て吾々が突破せんとする他の何等か偉大なる精神的目的を有て居なければならぬ。其精神的偉大に依て動く時に、吾々の運動には始めて深遠な意義と堅固な根柢があるのだ。其處まで徹底して行つて、舊い無用有害の桎梏を一槌の下に撃碎せんとする時、教界の識者は翕然として集るであらう。(菊川生)

「神聖なる單純」

ボヘミヤの宗教改革者ヨハン・フス焚殺されてより、五百年、本月六日は正に其日に當る。フスはウィクリフの改革運動に動かされ、ボヘミヤの一角にあつて腐敗せる當代の宗教家を攻撃した。

彼は自由基督教の先蹤であつた。傳説によれば彼が火中に焚かれてるとき一人の百姓あり、彼が異端者として焚かれるのだと聞いて一握の藁を火中に投じた。之れを見たフスはあゝ神聖なる單純よ *Sancita Simplitas* と叫んだといふ。

愛すべく又怖るべきは此神聖な單純である。イロニイを曉り得ざる單純、洒落を解せざる單純は尙愛すべきも、無作法なる單純に至つては危険千萬である。我國の現代にも如何に是が多いとぞ。

毎年議會が開かれ政治季が來ると、私共はいやといふ程之を見せつけられる。やゝもすれば袁探とか獨探とか極端な嫌疑を白日他人の面上に投げつけて、か弱き其家の夫人を脅迫することを辭せない。そして彼等はいふ之れ愛國心なり、武士道なり國家のためなりと。宗教界にすら此單純な神聖は珍しくない。偉大と豫言者は唯々此種の單純者の子孫に依て記念され崇めらる。そこに歴史の皮肉がある。フスの五百年を迎ふるに當り此の短句の深遠な意味を反省したいと思ふ。(巢丘子)

さな天地に踟躇して居り、牧師や教師は宗派根性に捉はれて居る。今度の合同問題が起つた時、協同傳道の結果自分の宗派を忘れて合同などいふ考を出されるなら、協傳なども考物であるといつた先輩もあるさうだ。如何に彼等の胸裏が矮陋であるかは、察しがつく。

合同といふとは要するに、各宗派の無意義な柵埒を撤去しやうといふのだ。尤も個人に依て宗教的要求にも各々差異があるから、自然に發生した宗教的傾向なら、敢て破壊する必要もあるまい。然るに我國の宗派なる者はソンの深い根ざしがあるのでない、只外國宣教師に依て輸入された不自然な贅物に過ぎないのだ。單に無意義の長物といふに止らず、教勢發展上有害なるとは前述の通りであつて、此點は長尾氏のも同意見のやうだ。要するに宗派などいふ舊い衣裝に飽きが來たのだ、否其衣裳が借物であつて自分の身丈に合はないといふとに氣が付いたのだ。そして之をシツクリした新調の着物と取換へようといふのである。此事には何人も異存はあるまい。

併し舊い衣物を新しいのと脱ぎ更へたいのは萬人の願ひであるが種々な關係や行掛から、之を敢てなしえないのだ。之を自由に爲したるのは、舊い着物を着せた外國宣教師から自由の地にある人のみである。それで此問題は我國基督教が全體としての獨立問題である。所が實際今日我國の獨立大教會と稱して有る日基派です

ら、外國宣教師との關係は未だ理想的に解決して居らぬ點がある。メソジストも日本人の監督を戴くに至つたが、外國宣教師中には、其權威を冒さんとするものが往々あるやうだ。聖公會に至ては殆ど問題にならない。そこで問題は獨立し得るものが集つて大合同をなすといふことになる。斯く見れば教界の先輩が心配する様に合同論者が新宗派を一つ作るようになる。併し獨立獨行の能きる教會の結合であるから、之は我教界の中堅を叫合して更に鞏固な組織的團體とするといふのである。勿論合同に反對して残るものもあるだらう。併し死にしものは死にしものに委ねよである。生けるものはドシ／＼思ふ所を實行して理想を實現して行かなければならない。然らざれば我國に於ける基督教の前途は知るべきのみ。

我教界において自然に發した、個人の同様な宗教的傾向に關しては、勿論之を認めなければならぬが、現在に於てすら各種の新傾向が舊宗教の中に存在し得るのであるから、苟も合同團體にして狹隘極端な信條を掲げない限りは、凡ての傾向を其儘保存包含し得ることを疑はない。それ等の傾向がよしや相團結しても、單に教會内の一傾向として留るべきと、天主教會内の各教團の如くであらう。現に自由主義は組合を始めとし、日基、メソジスト、聖公等の所謂福音主義教會の中に明に存在して居り、又潔め派の如きも以上の各派を通じて發見することが出来る。

斯く考へれば合同といふ事は新しい運動といふことになる否新らしい宗教運動でなくてはならぬのだ。然らざれば不徹底で有耶無耶の間に葬らる

△萬葉貝

泉鏡 花 著
植竹書院 發行

これも現代代表作叢書中の一巻である。鏡花氏の作品は我が文壇でも獨特の境を持つてゐる。春晝、春晝後刻、袖屏風、歌行燈、夜行巡査、處方秘箋、玄武朱雀、三味線堀等此作者風には何時も他の模倣をゆるさぬところがある。「歌行燈」は最も優れてゐる。(價一、二〇)

△信教の自由と學問の獨立

姉崎正治、鈴木宗忠共譯
大 同 館 發行

原著者は伊太利の前總理大臣であり、また羅馬大學の國法學教授であるエル・ルツアツチ氏である。ブルースタイン博士の獨譯より更に邦譯に轉じたるものである。「國家と教會との分離に關する憲法上の根本原則」、「信教と知識との自由に關する歴史上の實例」、「知識及び信仰の自由」の三篇に分たれ第一編に於ては「近世國家に於ける教會の位置を歴史及國法學の上から論じ、第二編に於ては信教の自由を唱へた人々を種々な方面から網羅し」たものであつて第三編は著者の講演を集めたものである。元著者は姉崎氏とも相談の

間柄と聞く、隨つて本書中には日本の宗教をも論じてある。眞面目に現代宗教について考へる人、殊に國家と信教といふことについて研究すべき人々にとりて眞摯な研究資料を此するものとして推奨したい。譯文も亦極め提簡潔、譯者の勞を多としたい。(價一、二〇)

△タゴールの思想及宗教

江部 鴨村氏 著
日 月 社 發行

日下我國の思想界はタゴール全盛の時代である。彼の英譯ものを探しても一寸見付からない。勿論彼の作物は大抵彼の紹介者に依て翻譯されたが、併し哲學や思想上の翻譯など随分杜撰を極めて居る、そこでタゴールを一寸窺つておかうといふには、寧ろよい紹介物の方が好い。本書などはタゴール紹介書中の優れたものであらう。タゴールの價值以下、組織的に彼の思想を解剖批判し且彼の生活と思想の背景を顧みつゝ東洋思想上における彼の位置が單なる繰返してない、とを力説して居る單に哲學思想上から見たら確に彼はウパニシアド以上に出るものであるまい、併し彼が兩洋思想に接觸して東洋思想の消極的歸着點から、積極的倫理的態度に出づる所は、

確に從來の印度思想に一新傾向を與ふるものに違ひない。本書は此等の點を行届いた筆致で遺憾なく詳論して居る。(價〇、七〇)

□モオバ水の上

吉江 孤雁氏 譯
日 月 社 發行

植竹書院發行密藏叢書の一編である。水の上は佛文學の鬼才モオバササンが其死ぬ六年前の作で。彼が快船バラミイに乗つて地中海に遊んでゐたことを書いたものであるが、單なる旅行記ではない、彼は平凡な日常生活に飽いて居た、何事かしら新しい刺激を求めて居た。彼は世俗と共に物質的機械的功利的にのみ物を見て居られなかつた。斯くして彼は自然の風物に憧れつゝ、或は月光の魔力を語り、或は戰爭の慘禍を説き、文學者の心理を解剖し、又途上に出遇つた戀人から激しい印象をうけて、自分の淋しい心に泣いたりする。吉江氏の巧妙な譯筆は世已に定評がある、巻尾に原著者の晩年を紹介して居る。夏休の書齋に入れてよい本と思つた。(定價、五〇)

□縮自叙傳

森田 草平氏 著
日 月 社 發行

草平氏が少くとも此れ迄の中で最も眞剣になり一生懸命になつて書いた小説である。藝

新刊批評

△露國及び露國民

昇曙 夢著
銀座書房發行

露國といふ名は吾々にとりて最も興味の深いものとなつた。殊に其文藝を透して吾々はいよいよ切に露西亞なる二十世紀のミラクル研究の念を強めた。本書はロシア文學研究の一人者たる昇氏が露西亞及びその國民に關する一般的知識を與へんがためにものしたものであつて内容としては露西亞の國土と民族、大露西亞の自然と人、露西亞文學と國民性、露人の悲劇的性質、露國々民生活の特徴及背景等十二篇に分つてロシアなるものに就いて説かれてある。民族のうちでロシア人ほど恐るべくまた愛すべき民族はまたとあるまい。ロシアを知らんとする人、ロシアの藝術を知らんとする人にとりて好個の讀物である。
(價〇、九〇)

△放浪

原田謙次著
發船社發行

若き著者の歌集である。氏の歌は本誌上に

も數回掲げられたとがあつた、讀者のうちに氏はの率直な柔かな歌を記憶されてゐる方もあるであらう。著者は南國の人、隨つてその歌調にも南國的な風調が濃くたゞへられてある。

あはれまたけふもわびしやばたと島の少女は紅き絹織る

鳩ぼつぽ清くたふとき初恋の島の少女に涙

あらずな

髪あかき異國の少女なつかしみうなだれ歩むアカシヤのかげ

夏季の讀物として可憐なる詩を愛する人々に薦む。(價〇、四〇)

△ストイ人道主義

加藤一夫著
天弦堂發行

著者は最も眞實に人生を生きやうとする人である。著者のストイに關する研究は著者の眞剣な實際生活と相結んで多くの興味を覺えさせられる。一氣に驀直に人生の底を徹して本然の自我に生きやうとしたストイを傳ふるものとして著者は最も適當した人であらう。「トルストイと自分と」、「偉大なる矛盾性」、「生存の根柢を覓めて」、「人道主義」、「人道主義と現代生活」等以てトルストイの

偉大なる悲痛の人生を窺ふに足る。(價〇、五〇)

△新月

増野三良譯
東雲堂發行

タゴールの幼兒詩集である。タゴールの哲學や文藝については既に業に種々な人々によりて傳へられた、今後は彼れの一つ一つの作品について具さに傳へられる必要がある。「新月」は彼の最もテンダアチスを持つた藝術を味ふにたより宜き作品である。譯者はまたこの作を譯するにふさはしい情調を有する人である。装幀、挿繪ともに忠實な出版物として推奨したい。(價一、〇〇)

△二里塚

小山内薫著
植竹書院發行

著者の數年間の收穫を集めたるもの、現代代表作叢書中の一卷である。「病友」「手」「粘土」「十三年」「大川端」「眞空」「乞食」「後悔」「捕縛」等それぞれ著者の面影を窺ふに足る。「大川端」は量に於いても質に於いても最も優れたものであらうが、「手」「粘土」のやうな短篇物に却つて著者の才筆がうかがはれる。装幀もなか／＼凝つたものである。(價一、〇〇)

大正四年
六合雜誌
目錄
上

(自第四百八號
至第四百十二號)

術品としての價值は已に定評がある。今度の縮刷には能成次郎二氏の本書に對する評論が附録としてある。次郎氏の評といふよりも寧ろ、主人公と女主人公との性格の心理解剖は吾人も同感である。(價、九〇)

□道元禪師

荒井涙光氏著
丙午出版社發行

我國禪道の祖なる永平寺の開祖道元禪師一生の歴史出家學道教化の三卷に分て平易な文章でものして居る。禪師の生涯は特に他の宗祖の如く狂瀾怒濤を捲く底の場面がないが常に攝受を主として拆伏を用ゐず、諄々として道を説き濟度牧民の生活を送つた高風は、却て人を引付けけるものがある。其の著書觀坐禪儀は禪家の第一書として今日尙價值を失はず最も廣く知られて居る。附録として、禪師の俗系、法系、示衆垂誡一覽及坐禪儀、漕洞故會修證義、和歌等が載せてある。(價一、〇〇)

□最近の文藝及思潮

生田長江氏著
日月社發行

文藝評論家として名ある著者が過去五年間に公にした、觀察と評價と要求と希望との中

から比較的重要なもの十數篇を撰んだものである。

「人として藝術家としての森田草平論」以下文壇の數氏の評論及び信條妥協に關する斷片的考察は最も讀むべし。文藝に興味を有する人の是非一讀すべきものである。(定價一、〇〇)

編輯室より

△六月の二日同人鈴木氏の渡米を祝するために美土代町山本寫眞館で同人の撮影をやつて後、青年會館樓上で晚餐會をやつた。序でに編輯會を開いて次號あたりから海外思潮の紹介、人事相談、婦人の世界欄を盛にしたいことなどを協議した。自己の生活、日常生活について色々御疑ひのある方は御遠慮なく本誌編輯部宛御質問下さい。

△本號から始めて試みた「自由基督教講壇」は毎號内ヶ崎氏が執筆せられる筈である。我が宗教思想界に貢獻するところの多いことを期する。

△タゴール號は全部賣れ切れて、その後多くの御注文がありました、終に一部も残らず

如何ともいたすことができなかったのは申込まれた方々に残念でした。何れ近い中また彼の批評について書いて見たいつもりです。

△鈴木氏は六月十九日横濱出帆の地洋九で渡米した。氏の安全なる航海を祈る。

△今岡氏は Ware Hall 34, Cambridge, Mass., U.S.A.に滞在。

△三並氏は漸次健康恢復近々、諏訪湖附近へ轉地靜養の由。

△内ヶ崎氏は早稻田大學夏期講演會の用務を帯び近々九州四國方面へ旅行の筈。

△次號は成るべく夏向きの軟いものを集めて編輯したいと思つてゐます。尙ほ同人の日記や夏の旅行紀なども載せて見たいと思つてゐます。

編輯者より特に申上候

原稿は凡べて十四日締切に致度候間それ迄に御送附被下度特に御願ひ申上候

口 繪

戰場の巾ひ……………	ヴェレスチャーギン……………	一頁
戦ひののち……………	ヴェレスチャーギン……………	一七二
戦場のキリスト……………	Henri Danger……………	三〇
砲聲を聞きつゝ……………	ヴェレスチャーギン……………	四三二

評 論

戦争畫家ヴェレスチャーギン……………	内ヶ崎作三郎……………	二頁
近代露西亞文學の主潮及特質……………	昇 曙 夢……………	一三
露西亞の社會運動……………	安部 磯 雄……………	三三
露西亞建築の印象……………	佐藤 功 一……………	四〇
露西亞文明の特質……………	八 杉 貞 利……………	四六
露西亞に於ける憲政創始の顛末……………	吉 野 作 造……………	五三
露西亞宗教生活の瞥見……………	相 原 一 郎 介……………	五九
アンドレーエフの作物より……………	齋 藤 末 學……………	六八
スラヴ民族二論……………	……………	七四
露西亞に關する諸家の感想……………	……………	一三三
現代露西亞文學に於ける宗教的潮流……………	鹿子木夫人……………	一五八
教育と信念涵養……………	成 瀬 仁 藏……………	一七四
ゼファソン博士の觀たる大戦争の原因……………	高 橋 清 吾……………	二〇二
獨逸學者の宣言に答ふ……………	豐崎善之助……………	二一七
ロシア文學の宗教的情調……………	鹿子木夫人……………	二二五
近代文明と自由基督教……………	内ヶ崎作三郎……………	二三五

宗教の第一義……………	今岡信一良……………	二四六
基督教徒の使命……………	海老名彈正……………	二五一
豫言者の政治觀……………	内ヶ崎作三郎……………	三一二
日本基督教の危機……………	志賀重昂……………	三二一
エリオット博士の觀たる歐洲戦争の原因と結果……………	高橋清吾……………	三二六
開戦以前に於ける英獨問題の一研究……………	井口孝親……………	三三五
政治と國民の內的修養……………	浮田和民……………	三四八
我が政治道德觀……………	大山郁夫……………	三五四
山上訓略……………	新井與遂譯註……………	三六五
平和の信仰……………	菊川四郎……………	三六八
平和の黎明と日米問題……………	大隈重信……………	四三四
日米親善の秘鍵……………	高田早苗……………	四三九
排日問題と労働問題……………	安部磯雄……………	四四四
意義ある排日問題の緩和法……………	志賀重昂……………	四五〇
加洲問題の真相と其解決……………	阪井徳太郎……………	四五四
日米問題と 米國人策……………	網島佳吉……………	四五九
米人側より觀たる日米問題……………	ギューリック……………	四六八
國民の對外思想を改めよ……………	吉野作造……………	四七六
日米關係の人格的要因……………	フイツシャー……………	四八四
國交の基礎を論ず……………	内ヶ崎作三郎……………	四八九
米國に於ける輿論の一般……………	……………	四九五
日米問題に對する米國識者の態度……………	……………	五〇六
在米日本人に對する米人の待遇……………	在米日本人……………	五二二

紫雲石より	秋 郎 生	六	七七〇
瑞西より	廬 山 生	六	八〇二

小説、戯曲

腐れる種子(戯曲)	佐 藤 清	一	九八
主の歎き(小説)	木 村 久 一	一	一一一
地下室(戯曲)	吉田 絃二郎	一	一二三
咲子(小説)	伊 藤 恵 子	二	二七五
宮参り(小説)	木 村 久 一	三	三八六

短歌、詩

金華山より太平洋を望みて(長詩)	土 井 晩 翠	一	八一
めぐみの雪(歌)	内ヶ崎 作三郎	一	九七
光りの海(歌)	野 口 精 子	一	一一〇
野に立ちて(歌)	伊 藤 寥 々	一	一一九
生のはじめ(短歌)	野 口 精 子	三	三八五
青き草(短歌)	伊 藤 寥 々	三	三九七
晩蟬(詩)	齋 藤 未 學	三	四〇三
良知歌(漢詩)	松 尾 敬 天	三	三八四
西行の歌	服 部 純 雄	四	五四一
しら梅(短歌)	伊 藤 寥 々	四	五四四
歌ひめーアーサーシモンズ(詩)	齋 藤 未 學	四	五四五
涙の響(詩)	伊 藤 寥 々	六	七九八
西行の歌	服 部 純 雄	六	八〇九

雜 錄

眞紅なダリヤ(詩)	久 萬 か ず 枝	六	八一三
夢(詩)	鼎 浦 漁 史	六	八一四

時 評

ゼファソン博士の觀たる大戦争の原因	高橋清吾	一	一四〇
戦争と政治思想の發展	鳥田三郎	一	一四五
婦人の王國	三並良	一	一五〇
瑞西宗教家の戦争觀	星島二郎	二	一五二
鐘の出來榮え	三並良	二	一五五
婦人の王國	三並良	二	一五五
日本民族の特性	鷗澤總明	三	四一四
明治大正の婦人問題	浮田和民	四	五五〇
自由基督教會の成立	三並良	六	七七九
進歩的宗教の態度(甲鳥生)	三並良	一	一六三
議院内の無道德(嶺岸)	三並良	一	一六三
チコロレト兵隊(太田)	三並良	一	一六三
國民的軍備の必要(鈴木)	三並良	一	一六三
惟一館だより	三並良	一	一六三
内ヶ崎兄嚴父の葬儀(鈴木)	三並良	一	一六三
惟一館だより	三並良	一	一六三
小山東助氏の立候補を壯とす(内ヶ崎)	三並良	二	三〇八
小山東助氏の立候補を賛す(記者)	三並良	三	四一七

人種問題としての日米問題	マコーレー	四	五七七
日米問題の現在及將來	添田壽一	四	五七二
タゴールと印度文化	内ヶ崎作三郎	五	五七八
タゴール哲學の斷片	ゆふしほ	五	五八六
タゴールは果して偉大なりや	武田豐四郎	五	五九三
タゴールの詩と印度の自然	吉田絃二郎	五	五九七
タゴールの「新月」より	伊藤惠子	五	六〇八
タゴール先生と自分	佐野甚之助	五	六一〇
形而上的要求と Upanishad	野村限畔	五	六一七
詩人コビールとタゴール	三浦關造	五	六二四
藝術家としてのタゴール	磯部泰治	五	六三一
近代印度の宗教改革者	相原一郎介	五	六三八
タゴールの「個人と宇宙觀」	絃 二郎	五	六四七
教訓自讀	新井奥達	五	六六〇
自然と心靈との復興	内ヶ崎作三郎	六	七〇七
愛と眞實と戰と	内藤 濯	六	七一七
權威の座位	白石喜之助	六	七二六
タゴールの根本思想と其批判	三浦關造	六	七四七
佛國教育家の戰爭觀	高橋清吾	六	七六二
イエツの音樂的情調	松尾光貳	六	七八〇
神と理想	帆足理一郎	六	七八七
教訓自讀		六	七九〇

感想

War Poems	岡田哲藏	一	九二
生命其儘のすがた	中村長之助	一	九四
ベルリンを去りて	廬 山 生	一	一二〇
Labyrinthis	岡田哲藏	二	二六一
新人間藝術論	野村限畔	二	二六三
生命其儘のすがた	中村長之助	二	二九二
柏木より	三 並 良	二	二九八
病床雜感	吉田絃二郎	二	三〇四
立て零の絃	タゴール	二	二六〇
無題錄	三 並 良	三	三七八
瑞西の山峽より	廬 山 生	三	三九八
タゴールと崇拜の生活(感想)	吉田絃二郎	三	四〇四
雪の仙臺より(一)	内ヶ崎生	三	三二五
雪の仙臺より(二)	内ヶ崎生	三	三三四
石の卷より(一)	内ヶ崎生	三	三七七
石の卷より(二)	内ヶ崎生	三	三九六
生きんとする焦慮	鈴木龍司	四	五三五
瑞西の冬	廬 山 生	四	五四七
寒い日であつた	吉田絃二郎	四	五五六
紫雲石より	秋 郎 生	五	六六八
六甲山麓より都大路へ	鼎浦漁史	五	六七三
郊外車行(詩)	岡田哲藏	六	七一一
愛の要望(感想)	鈴木龍司	六	七四二
眞實を愛する心(感想)	佐藤繁彦	六	七五二

◎陸軍大學教授

岡田哲藏著

(歡迎日を追ふて加はる)

(新刊)

我が断片

六合叢書第二編
邦文 定價十錢 郵税二錢
六合叢書第三編
英文 定價十五錢 郵税二錢

『我が断片』の諸誌評

時事新報 断片語と散文詩の形式を藉りて表現せる著者の哲學と宗教也。
萬國新聞 著者の纖細鋭敏な感じに觸れた事象の断片的表現である。哲學とも見るべく、散文詩とも見るべきものである。
帝國文學 著者の博識と燭眼とは何れのラインにも活躍して居る。
事もある 断片たるの故を以て輕視してはならぬ。無内容なる千萬語よりも、一言半句が尊い事もあり、沈黙それ自らが最も尊い
り、小冊子ではあるが、人生觀あり、社會觀あり、宗教觀あり、散文詩あり、警告あり、暗示あり、教訓あり、諷諭あり、寓言あり
東亞の光 本著者が内面生活に富める人たることは吾人の驚嘆に堪へぬ處である。渺たる小冊子に過ぎぬが、言々句々、吾人の肺肝
を刺すものがある。彼のマールカス・オーレリウス冥想錄の内容にも角逐すべきものがある、一小冊子として侮るべからざるもので、
汗牛充棟も唯ならぬ近來著書中に容易に得難き冥想錄の内容にも角逐すべきものがある、一小冊子として侮るべからざるもので、
反響 著者は：：：決然として舊套を排して直徑猛進しつゝある新人である、：：：要するにこれ思想家として、詩人としての著者
の肖像であつて、近頃敬意と興味とをともて讀んだものである。
早稲田講演 所謂詩人の詩でなく、題目の示すごとく哲人としての断片的感想を詩形を以て表はしたものの、：：：既成宗教、盲信的信仰
を脱して宇宙人生を自由なる見解より見てゐる所に肉薄的の強さがある。
丁酉倫敦講演集 宗教、文學、歴史、教育、道德、科學など形而より形而上に亘つて著者の新しい深い鋭い觀察と感想とは讀者
に甚大の感動を與へる。少ない言葉數で多く語るとは此くの如きを云ふのであらう。
開拓者 奇警にして鋭利なる觀察法と筆力は感服に堪へないものである。シヨウウやニーチエなどのと並んで世界に珍重せらるゝ
神學的研究 犀利なる冷たき劍の様な痛快な筆である。
護人 著者がたから言つても、想から言つても、珍らしい書である。岡田教授の文が、たゞこれ一つ残るとしても、後世の物好きな
人は、著者の人となりや如何と、圖書館に一九一五年代の古い典籍を捜るかも知れぬ。――搜られる價值があるのですから。以下
長文) 年 此断片語の如き奇警を銜ふにもあらず、爲めにする所あるにもあらず、自然の言語の流露するが儘に、唯思想を其儘の姿
に發表せるもの立派なる一個の散文詩なり、哲人の思想に觸るゝを欲する人は讀め。

發行所 東京市芝區三田四國町(電話芝五八五五番)

六合雜誌社

書

叢

合

六

(編 一 第) 第一

(編 四 第)

眞人基督

第一高等學校教授 三並良著

(定價十錢郵稅二錢)

(再版愈出來す)

本美入トツケツポ
像のスエるせ化代現
頁 十 二 百

春秋の哲人

知識と道徳と孰れが尊とさき、道徳の尊とさきは言ふまでもない。理性と人格と孰れが重き、人格の重きは言ふまでもない。知識あつて道徳なければ自我は餓え、理性のみあつて人格なければ自我はその生くる所以を知らない。人格は自我の形而上的な要求の力にして道徳はこの要求のダイナミックな發露である。知識は益々枝葉に入りて道徳はその根柢を失ひ、理性のみ徒らに發達して人格はその權威を得ざる現代は、決して健全な時代でないとは火を賭るよりも昭らかである。識者頃來『新道徳論』を主張するありと雖も、要するにこれ何等の根柢なき皮相なる空論に過ぎない。『春秋の哲人』は眞摯なる著者がその狂熱的要求によつて東洋の大偉人孔子を拉し來せるもの、蓋し時代の缺陷に對する一救済を以て任ずるものである。

入トツケツポ
頁五十百
錢十二 價定
錢 二 稅 郵

芝話電
五五八五

社誌雜合六

區芝市京東
町國四田三

所行發

荒井涙光先生著

道元禪師

總ふり假名
定價一圓
郵稅八錢

曹洞宗の開祖道元禪師遠く宋土に渡りて慕道尋道し深く佛陀所説の核心を探り詳に祖師面授の單的を領す而して歸來喝破すらく「空手還郷」と空手還郷の那一曲知らず何等の妙調を佛法の要旨茲に存し禪の真髓茲に盡く著者今禪師が一代の行狀事蹟を描寫するに流麗にして巧妙なる文辭を以てし禪師の風豊面目をして卷中に躍動せしむ通俗にして文學的なる禪師傳は蓋し此書を以て嚆矢とせむ讀者これに依つて曹洞禪風の淵源を究むべく又これに依つて悟徹の洪範を得べし

曹洞大學教授 原田祖岳師著

參禪の階梯

總ふり假名
定價一圓
郵稅八錢

原田老師洞濟二家の宗風を把持し銀山鐵壁容易に攀づべからざる底の禪に姑く階漸を設けて學人のために參禪の一路を示す夫の胡亂に大悟を語りて鬼窟裡の活計を作すが如き野狐精者流は乃ち問はず苟も荆棘林を透過して清風明月の趣を會得せむと欲する者は須らく秩序整然たる階梯を辿れ

鷄聲堂

東京貯小石川原町
三三三

丙午出版版社

東京貯小石川區原町
六八六

週刊宗

教雜誌

基督教世界

毎週木曜發行

一部 金 五 錢

半ヶ年 金一圓二十錢

一ヶ年 金二圓三十錢

外國行一ヶ年金三圓

◎本誌の創刊は明治十六年にして既往三十餘年の歴史を有する本邦基督教界最古の週刊雜誌なり

◎本誌の特長は進歩的基督教の立場より時事問題を評論し且つ最新の知識に依り斯教永遠の眞理を闡明するにあり

◎本誌には毎號教界先輩の說教、内外名士の論說と新進思想家の研讃と、清新なる宗教文學及内外教勢を滿載す

◎本誌は信仰修養の糧として聖書研究の手引として、信徒家庭の讀物として好適なる雜誌なり

◎本誌の編輯は宮川經輝、原田助、小崎弘道、渡瀬常吉、牧野虎次の五氏協力之に當り、武本喜代藏、山口金作の兩氏毎號執筆し、在兩京の記者數名之を助く

本誌の見本は往復はがきにて御申越次第無代進呈すべし

發行所

基督教世界社

大阪市北區中之島二丁目四七

振替貯金大阪參壹七參

此廣告を見申御込の方には「六合雜誌」に依る御書添ふ

崇西文藝思潮の淵源 近代思潮叢書

菊貳 半百 截五十 美頁 本十 定價各十五錢——郵送料六錢

重版重

編二 ■ 惡魔主義

の思想 岩野 文藝 泡鳴

編六 ■

タゴール 聖者の生活

古田 絃二

編一 ■ チエイ 超人の哲學

生田 長江

編四 ■

未來派及立體派の藝術

木村 莊八

【忽再版】人としてのトルストイは勿論、彼の思想生活の全部に涉り、著者の最も力強い同感と共鳴と理解とを以つて、紹介批判せられたるもの、本邦唯一のトルストイ研究書たるを疑はざる所なり。

編九 トルストイ人道主義

加藤 一夫 著

【最新刊】オイケンに關する述作の際物として喧傳せらるる時代は過ぎたり。彼の思想を通じて複雑多端なる現代思潮を究明し、精神生活の妙境に到達せんとする士の一讀を俟つ。

編八 オイケンと現代思想

稻毛 詛風 著

【愈發賣】繪畫は勿論、近代のあらゆる思想、藝術の基調をなせる印象主義の最も忠實嚴肅なる研究書初めて日本に出現す藝術に眞の領解を得んと欲する者は來れ。

編五 印象主義の思想と藝術

高村 光太郎 著

振替 口座 五九 東九

天弦堂書房

東京市牛込區 西軒町三

●直接購讀者諸君に告ぐ

一、本誌は前金に非ざれば一切發送致し不申候

一、前金の盡きし時は『前金切』

を帶封へ捺印いたすべく候

一、御送金は可成振替貯金を以て

御拂込み相成度候

本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵税一錢
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵税共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵税共
●海外は郵税一冊に付金六錢(清國を除く) ●臨時號出版の際は規定以外に代金申受く			

本誌廣告料

特等	普通	普通
表紙二三四面	一頁	半頁
金貳拾圓	金拾貳圓	金六圓
●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候 ●二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候		

大正四年六月三十日印刷納本
大正四年七月一日發行
(毎月一回一日發行)

定價貳拾錢

發行兼編輯人	吉田源次郎
印刷人	海上輝男
印刷所	株式會社秀英合

發行所

東京市芝區
三田四國町

統一基督教弘道會

賣捌所

東京堂◎北隆館◎東海堂◎同文館◎上田屋
◎警醒社◎教文館其他全國有名書店

振替東京一〇〇〇三番
電話芝五八五五番

六合雜誌

夏 季 號

夏の自然と人生

内ヶ崎作三郎 石田三治
安部磯雄 加藤一夫
野村 隼 畔古市春彦

蚊と哲人

白き光

ロマン・ローラン斷片

ゼームスの宗教觀

復活の日

徹底せる宗教心

岡田哲藏

伊藤寥々

内藤濯

鈴木龍司

菅野笠夫

安部磯雄

型と思想

山毛櫟

犬

瑞西より

近代人の宗教と杜翁

運命と恩寵

木村久一

鈴木芳松

伊藤惠子

盧山生

石田三治

内ヶ崎作三郎

八 月 號

此廣告を見申込の方には「六合雜誌」に依る旨書添ふ

■早稻田大學教授 内ヶ崎作三郎先生序 吉田絃二郎氏著

初版 再版 即日 賣切

タゴールの哲學と文藝

四六判最上製美本
正價壹圓廿八錢
■郵稅金八錢■

忽ち四版

オイケン、ベルグソンによりて創造覺醒の第一歩に入りたる我思想界は印度大詩聖大哲人タゴールによりて欣求菩提の究竟裡に法悅光耀の生活と哲理とを發見せざるべからず。本書は實に彼の神幽なる哲學と純眞の文藝と崇敬の生活とを系統的歴史的に批判し紹介したるもの。更に研究資料として戯曲「暗室の王」「郵便局」「チトラ」詩「園丁」「新月」をも加へたれば此の一書以てタゴールの全體を切實に窺ふ事を得。蓋しタゴール研究の權威たるを失はず。將に來朝せんとする大豫言者を迎ふるの準備として敢て本書を江湖に薦む。タゴール紹介中の白眉と稱せらる

第一高等學校教授

三並良先生譯

オイ氏人生の意義と價值

全三冊 正價金壹圓五拾錢
郵稅金拾貳錢

文學博士 波多野精一序
文學士 内ヶ崎作三郎

野村 隈 畔 著

ベルグソンと現代思潮

全三冊 正價金壹圓卅五錢
郵稅金拾貳錢

稻毛 詛 風 著

現代思潮と教育

全壹冊 正價金壹圓四拾錢
郵稅金拾貳錢

(明治廿五年三月二十七日第三種郵便物認可)(大正四年六月卅日印刷納本)
(六合雜誌第三十五年第七號)(大正四年七月一日發行)(毎月一回一日發行)

〔本冊定價貳拾錢〕

大 同 館 發 行

東京市神田區 表
神保町七

振替 貯金 口座
東京 七八 番

THE RIKUGO-ZASSHI.

No. 415. August. 1915.

CONTENTS.

A Mosquito and a Philosopher.	Prof. T. Okada.	1
Consistent Religious Life.....	Prof. I. Abe.	12
Fragments from Roman Rollan.	Prof. A. Naito.	18
Religion of the Modern man and Tolstoi.....	S. Ishida.	21
Short Poems.	Prof. K. Satō.	29
Types and Thoughts.	K. Kimura.	30
Story of a Dog.	Miss. K. Itō.	39
Religious Thought of Prof. James.....	R. Suzuki.	52
Short Poems.....	R. Ito.	57
Day of Resurrection (a religious play).	K. Kannō.	58
From Switzerland.	Dr. T. Arai.	67

Liberal Christian Pulpit.

Destiny and Grace.....	Prof. S. Uchigasaki.	73
------------------------	----------------------	----

Poems,.....	I. Tanaka.	82
Urgent Necessity of studying the American People.	S. Takahashi.	83
A Sketch by Rudolf Baumbach.	translated by Y. Suzuki.	91
On Church Music.....	translated from "Outlook "	97
Fifth Centenary Anniversary of John Huss.	T. Ojima.	102

Nature and Life in the Summer.	by 9 Contributors.	109
-------------------------------------	--------------------	-----

Topics of the Day.	134
Review of Books.....	138

Published Monthly by the

TŌITSU KRISTOKYŌ KŌDŌKWAI,

2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

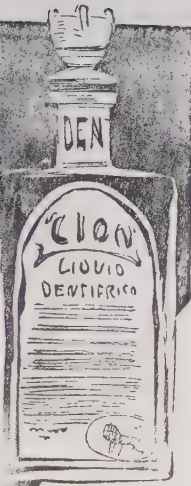
夏
は

ライオン水齒磨

旅
に
は

ライオン煉齒磨

ライオン齒磨
ライオン石鹼本舗
小林富次郎



□運命と恩寵……………内ヶ崎作三郎……………七三頁

□爾の後姿を(詩)……………田中葦城……………八二頁

□米國研究を旺にせよ……………高橋清吾……………八三頁

□山毛櫟(小説)……………鈴木芳松……………九一頁

海外思潮欄

□教會と音樂……………九七頁

□フス五百年記念講演會を聴く……………記者……………一〇二頁

□夏の自然と人生……………一〇九頁

△布哇の夏……………安部磯雄……………△マーブルの夏……………内ヶ崎生

△島の夏……………古市稻城……………△那智の瀧(詩)……………加藤一夫

△鹿野山……………石田三治……………△郷里に歸りて……………野村生

△木崎湖畔より……………工藤直太郎……………△卒業の後……………松尾光貳

△茶臼原の夏……………星島生

時評欄

■御大典と基督教徒の代表者(甲鳥生)■送らるゝ人々と迎へらるゝ人(内ヶ崎)

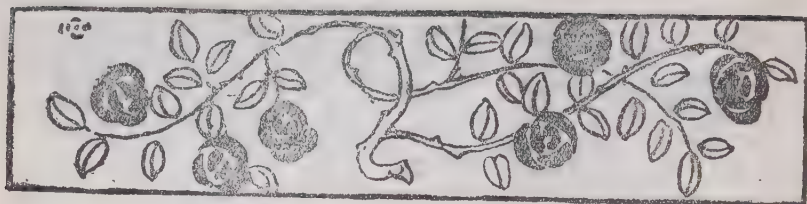
■岡山孤兒院幻燈隊(星鳥生)■學年短縮案を評す(菊川生)■時感一束(巢丘子)

□新刊批評……………□編輯室より……………

六合雜誌第三十五年第八號目次

本欄

□ 蚊と哲人 (詩)	岡田哲藏	……	一頁
□ 徹底せる宗教心	安部磯雄	……	一二頁
□ ロマン・ロラン斷片	内藤濯	……	一八頁
□ 近代人の宗教とトルストイ	石田三治	……	二一頁
□ 雜詠 (短歌)	佐藤清	……	二九頁
□ 型と思想	木村久一	……	三〇頁
□ 犬 (小説)	伊藤惠子	……	三九頁
□ ジエームスの宗教觀	鈴木龍司	……	五二頁
□ 白き光 (短歌)	伊藤寥々	……	五七頁
□ 戯曲 復活の日	菅野笠夫	……	五八頁
□ 瑞西より	廬山生	……	六七頁



蚊と哲人

岡田哲藏

一

六 合 雜 誌 八 月 號

腐つた溜り水に、
孑孓の群が生れた。
汚れた境遇を、
よく忍んで育つた。

微細な軀軀だが、
弾力は充ち満ちて居る。
それで間斷なく、
活躍を續ける。

全身を回轉して、
跳り舞ふ、その巧み。

院長診察月、水、木、金、午前

林、峰間兩副長は目下當院に在勤

麴町區三番町三十番地(市ヶ谷見附内)

電、番六二番

東洋内科醫院

院長

醫學士

高

田

畊

安

電話ちがさき二番

南

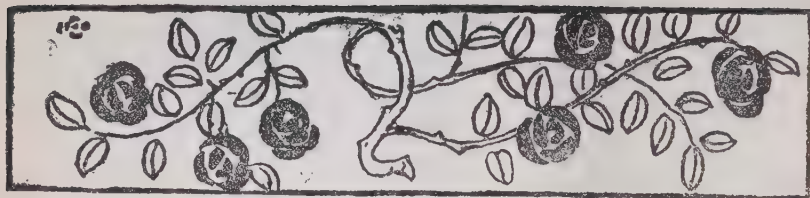
湖

院

相州茅ヶ崎海濱(從停車場半里)

河野、高橋兩副長は目下當院に在勤

院長診察土曜日午後、入院診後應需



子子は意を決した。

大望が一度崩しては、

舊き繫縛は棄つるに躊躇せぬ。

皮を蛻して、角が生へて、

名も恐ろしい鬼子子。

再び皮を蛻して、

見れば翅が延びて居る。

大願成就と、

小聲ながら凱歌を擧げ、

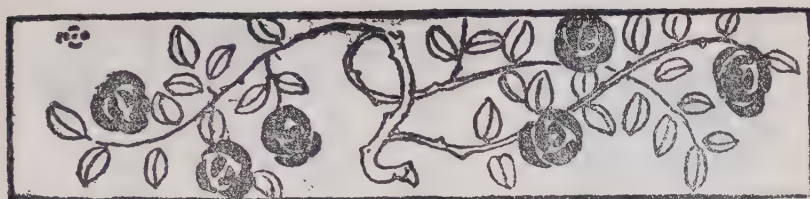
飛んで空中に舞ふ、

昇天の思ひ。

地の上に來ては、

したゝる甘い汁を吸ふ、

チクターの味ひ。

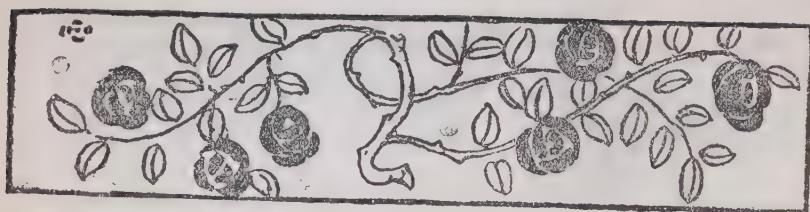


輕業師も、
遠く及ばぬ。

時に水面に浮び出で、
尾の様な管から空氣を吸ひつゝ、
仰げば大空は清朗濶大、
そこに飛ぶ虫もある、鳥もある。

同じく動物で、
汚水に躍ると、
空かけて飛ぶと、
その生活は霄壤の差。

地獄にうごめく惡魔の群が、
天の國を望むごとく、
醜穢な水中を脱して、
空氣の世界に行くべく、



萬物の靈長と稱する人間を、

一氣に襲撃して、

その生血を吸はゞ、

近き未來に、我等の子孫も、

人の如くなるまいか。

いな更に超人間の生物とはなるまいか。

厭くことを知らぬ雌の野心に、

雄はいたく驚かされた。

猛獸さへも爪牙をあさめて、

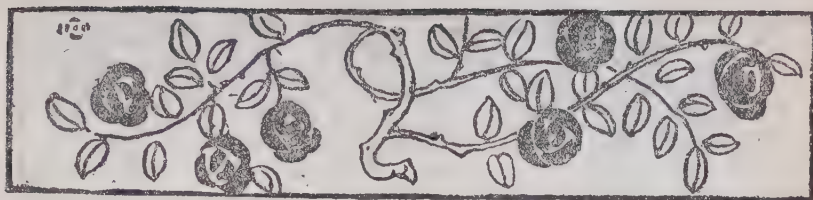
容易く人間を襲はぬものを、

小さな蚊の分際として、

大膽にも程があると、

心を盡くして諫めた。

向上心の強い雌は、



汚水の中の黴菌などは、
比すべくも無い。

翅ある蚊となつて、

雄の満足は無上である。

雄はたゞ一代の、

享樂主義者である。

されど雌は次の代を思ふ、

進化の大法を直覺する。

見れば我よりも、

高等の生物が限なくある。

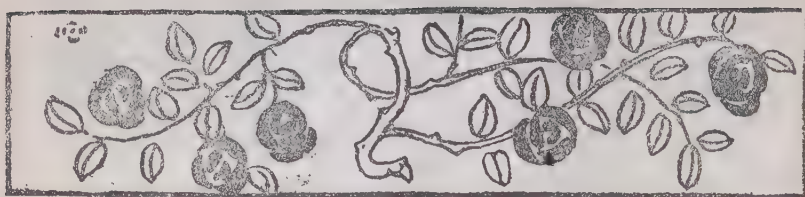
己が子孫を、

階段高く登らせたい。

然も千萬の年代を待つは、

餘りに遼遠。

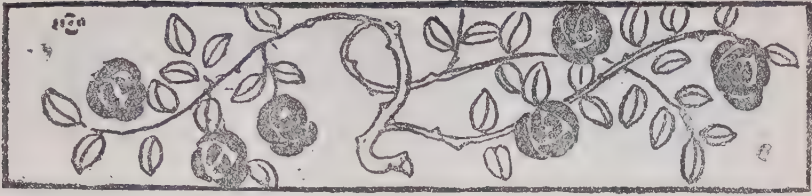
もつと捷徑は無いか。



青葉を燻べて蚊遣火を焚き、
麻布を織りて蚊帳をつくる。
防禦の計に情りなきも、
容易く衰へぬ敵の軍勢。

二

山に海に、
人々は暑を避ける。
かくて山海を俗化する。
夏は都こそ、
静寂の境なれと、
我家にとどまれる哲人。
朝に夕に、
書を読み、想に耽る。
その書齋に、
樂園に潜み入る魔の如く、
窺ひ寄る蚊の一つ二つ。



制止に従はぬ。

よし正攻は難くとも、

奇襲の術もある。

その術に長じて、

人間を襲ふ輩に、

蚤もある、蛭もある。

たと翅を備へて、

人の虚に乗ずるは我が特長と、

アマゾンのやうに勇み立つた、

雌は人の敵となつた。

執念の凝りてか、

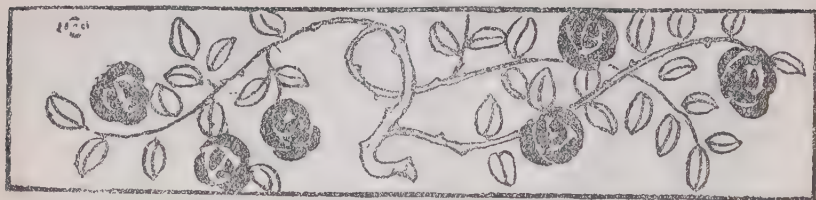
夜の暗を見破る、

複眼の利器をさへ備へた。

夏の苦熱に、

蚊軍の襲來。

人の世の苦しみは増した。



飽満の輩も少なからぬ、
柔かき膚も多くある。

さるを如何なれば、

眞理の追及に餘念なき、

我が静寂の境を亂して、

我が豊かならぬ血を求むるぞ、

さりとて、血汐欲しくば、

少しなれば惜しまぬに、

何とて痒き毒を残すか。

哲人はかく疑つた。

生命の危きを冒し、

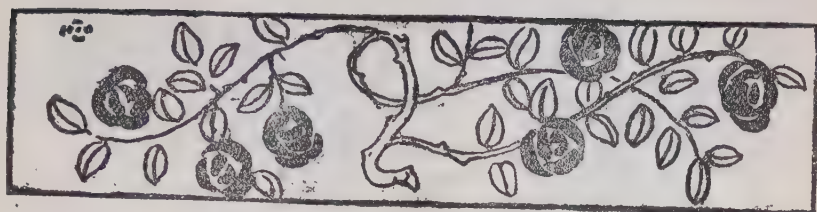
人の血を啜れど、

生るゝはたゞもとの牙。

進化の望は遂げ難い。

思へば人の中にも、

階級はさまざまある。



肉を刺す針の鋭さに、

瞑想はたちまちに破られる。

悪くは仇と、追へば巧みに遁れる。

そして正面を避けて、

側面また脊面と攻撃を繰り返す。

幸に一撃に斃し得ても、

またも寄せくるかと、

不安が一身を襲ふ。

微かな鳴き聲に、

神経はいたく艱まされる。

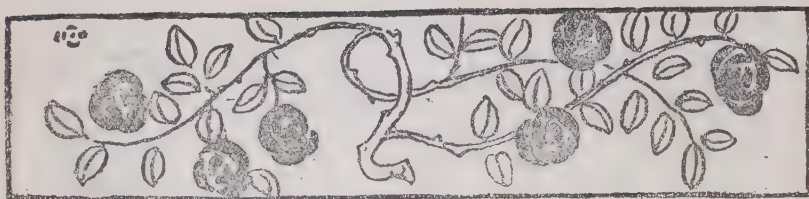
注意は四肢の末に走つて、

中心は空疎になる。

鍛練も修養も

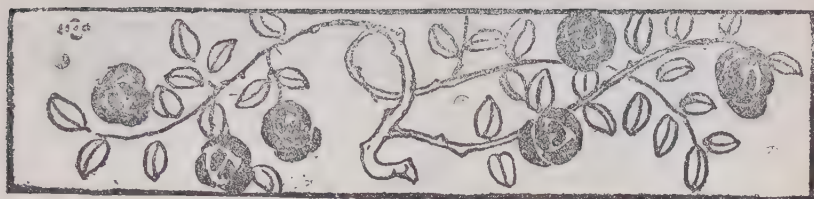
効果を見ぬ。

世間の人は無数、



哲人の望、
よき血汐を吸ひて、
進化の道に登らんとする。
蚊の心。
兩々相似たる、
友では無いか。

(四、七二七)



濁れる血、清める血、

血液も一ならぬ。

高き生れは高き血による。

蚊はそれを覺つた。

汗多く汚れた膚も、

美しく光澤よき膚も、

凡人のすべてを避けて、

勝ぐれし哲人の血汐を求めたるは、

進化に銳意の我が試みと、

蚊は自らを正しとした。

聖賢の書に接し、

宇宙の大靈に近づき、

思想と靈能を、

我が心に攝取して、

小我を大我たらせんとする、

係のある時は、最早我々は言論の自由を持つてゐない。尤もむやみに人の惡を發くといふことは善くないことであるが、さうでない、云へば社會のためになると云ふ時にも、自分のためにならない事は云ふまいといふのが、普通の人情ではあるまいか。私は自分のことを考へて見て淺ましいと思ふ。かやうな我々の心を基督の標準に較べたらどうであらう、我々の宗教心には確に撞着がある。これが私共宗教を信ずる者の飽足らない點である。

基督は、右の手に爲す所之を左の手に知らしむる勿れ、と云ふ位隱微を重んじられた。しかるに今日ではどうであらう。人々が皆自分を賣らう／＼としてゐる。實に今日程廣告の盛んな時はない。實業界などでは廣告は成功の要素となつてゐる。我々一個人も、殊に政治家などは盛んに自家廣告をやる。彼等は世の中から忘れられないやうにするにはいかなる手段でも取る。甚しきに至つては議會で彌次をやつて世の中に自分の名を出さうとする者もある。その人の目的は廣告ではないかも知れないが、その行ひの中に廣告が含まれてゐることは、我々大體に於て斷言することが出來ると思ふ。今日では椽の下の方持となつて甘んずる人が無くなつた。慈善をやるにしても慈善をやると共に自家の廣告をやる實業界の中でも私も個人として知つてゐる人にして、確に宗教を信じてゐる人がある。けれどもその人の行つてゐる慈善では、今度は何々に何千圓寄附しましたと云ふことを大々的に廣告してゐる。又實業界のみならず政治家や教育家も此の種の事をする。けれども私は必ずしも彼等を責めない。今日の中ではどうも止むを得ないのである。止むを得ないのであるが、之を基督の教訓から見ると心苦しい。基督の教訓を何人が悪いと云ふか、我々はこの教訓を割引することは出來ない故に我



徹底せる宗教心

安 部 磯 雄

誰でも宗教心を持つてゐる者は、其の宗教心に何等の撞着なく眞直に進んで行たいと思ふ。しかも自分等の宗教心は案外徹底してゐない、でなくとも之れが外に現れる時は、心がよく定つてゐない。先づ基督の教訓について見るに、我々は果して之れを守つてゐるか、どうか。尤も基督や其の子弟の教へは悉く信ずることが出来ないけれども、あく迄信じなければならぬ者もあるのである。之を我々は如何程迄守つてゐるかと云ふことを考へて見ると、我々の宗教心にはどうしても撞着がある。

山上の垂訓に於て基督が最も強く戒められたのは偽善といふことであつた。所が我々の心には偽がないであらうか。もし無ければ其の人は表裏のない人であつて、確に徹底してゐる。けれども我々は日常の生活に於て幾多の偽善を行つてゐる。自分が無意識であつても、偽善をしてゐるのである。例へば私共は言論の自由が無くてはならぬ、又之を要求する。しかるに政治上などには斯様に自由を要求する我々が、日々の行動に於て果して言論の自由を持つてゐるか。少しでも自由があると思はれるのは我々に利害關係のない場合だけである。利害關係のある時は、お互どうでせう、言論の自由があるか、どうか。會社員などで重役と面と向つて其の缺點を云ふ人があるか。學校の教師などは、最も自由を持つて得るべき者であるが。學校や校長の缺點を批評すると云ふことは常でない。即ち利害關

に本當に守つて行けると思ふ人があるか。我々は一日の半分以上衣食住のことを考へてゐる。我々は金錢に淡泊であると云ふことは有り得ないではないかと思ふ。いやしくも責任を以て世の中を送らうとする者は金錢のことを心にかけねばならぬ。さうでなければ食つて行かないのだから、仕方がない。かやうに我々は基督の教訓を守ることがむづかしい。

其處で我々は考へなければならぬ。基督の教訓には我々皆感服してゐる。しかも一つも之を實行することが出来ない。我々はこれでも宗教家であらうか。如何にすれば我々は徹底的に基督の教訓を行ふことが出来るか。之を考へる必要がある。又これが今日の宗教家の義務である。思ふに基督の時代と我々の時代とは全然其の趣きを異にしてゐる。昔は基督の教訓は人々に取つて必ずしも行ひ難くはなかつたかも知れない。しかるに今や我々は如何なる有様に在るであらう。滔々として戦争の渦中に投じてゐるではないか。滔々として物質生活に追はれてゐるではないか。之が原因はどうしても物質に求めねばならぬ。宗教も政治も經濟的に研究しなければならぬ。思想の獨立、言論の自由はあく迄も主張しなければならぬけれども生活問題になると、思想がどうしても負けて了ふ。或る人は、職業のために思想をなげうつやうな奴が何をする事が出来るものかと云ふかも知れない。しかしこゝでは職業と云ふ言葉が少々軽く見られてゐると思ふ。いやしくも精神的に獨立しやうと思ふ者は、先づ物質上に獨立しなければならぬ。心にも無い自家廣告も偽善も皆物質のためである。近頃新聞や雑誌の記者が色々の問題を掲げて訪ねて来る。斷れば惡口を云はれるし、誠に困つたものだ。これについて山路愛山君か云つた言葉を面白いと思ふ。新聞記者などが來てたゞて話させられるのは馬鹿馬

我のしてゐる事には、基督の教へと撞着する點が多い。

基督の著しい教訓の一つが無抵抗主義であると云ふことは、大して反對することが出来ないと思ふ。しかるに歐洲諸國は今や大殺戮をやつてゐる。のみならず彼の地の教育家や思想家などは盛に之を辯護してゐる。戦争の止むを得ない事を説いてゐる。私は萬一の時には戦争に出るかも知れない。しかし我々はあく迄戦争の悪いと云ふことを知つて得なければならぬ。決して辯護してはならない。我々は如何なる時にも正直でありたい。尤も斯く云へばとて私は單に基督の教訓に反すると云ふだけの理由で戦争を否認するのではない。實に自分の理性に訴へて見て戦争が悪いと思ふから悪いと云ふのである、偽善も戦争も止むを得ない。けれども之が悪いと云ふことだけは忘れてはならない。之を辯護してはならない。宗教家などでは自家防禦である、正當防禦であるから止むを得ないと云ふのが、戦争の辯護である。一體今度の戦争では誰が張本人だか分らない。日本ではベルンハルデイなどの本が讀まれたため、一般に獨逸が悪く思はれてゐるけれども、佛蘭西や英國では必ずしも獨逸が戦争を起したのではないと云ふ人がある。溯つて考へると佛蘭西と露國と結ばなかつたなら、今度の戦争は起らなかつたであらう。又英國が彼んな大艦隊をこしらへなかつたなら。今度のやうな事にはならなかつたかも知れない。どちらにしても戦争は悪い。

今一つ更に進んで考へて見たい。さうすれば基督の教訓を人々が守らない事が一層明かになる。基督は云ふに爾等、生命の爲に何を食ひ何を飲みまた身體のために何を衣んとおもひ慮ふこと勿れ。生命は糧より優り、身體は衣よりも優れる者ならず乎と。然るに今日の世の中に誰がこの教訓を眞面目

隣家からベスト患者が出た。之には總理大臣も如何ともすることが出来ない。こゝに於て我々は社會と云ふことを考へずにはゐられない。我々はどうかして徹底した宗教心を持ちたい。それには先づ社會から直して行つて、我々が基督の教訓を實行することが出来るやうにしなければならぬ。今日の宗教家は政治を語らぬ。之を語ることを何か罪惡のやうな風に考へてゐる。然し私は宗教家が政治をやつても良いと思ふ。我々は時を得るも得ざるも基督の福音を傳へねばならぬ。之がために善いと思ふ事は如何なる形式を取つてもかまはぬ。かやうにして基督の理想を實行し得る經濟組織にもしたいと思ふ。さう云ふ覺悟を以て進みたい。

鹿しいが、其の代り無料で廣告してもらふだと思ふと、さう腹も立たないと。私も自然にさう思ふやうになつた。物質の問題が無ければこんな事はない。忙しい時には門前拂ひを食はせたいがさうは行かぬ。戦争も今日では正義のためだなど云ふ馬鹿者は一人もない。皆物質のためにのみ戦争が起る。澤山の犠牲を拂つても之以上の利益が得られると思ふからである。物質上の問題が無くなつて、初めて戦争は無くなるのである。何を食ひ何を飲み何を衣んと思ひ煩はなくなつた時には、平和は確立される。實に衣食の問題がなくなつた時には、哲學は如何に勃興するであらう。文藝は如何に盛んになるであらう。科學や商工業は如何に發達するであらう。

昔の宗教家はどんな事を考へてゐたか。即ちこの世の微々たる個人のために盡すのがやがて基督のために盡すのであると云ふことであつた。我々は之と反對のことが同じ眞理でなければならぬと思ふ。經濟組織のために今日種々困難な問題が起て來たのであるから、我々は一人一人の個人よりも廣く人々にあてはまることをしなければならぬ。例へば政治家が或る法律を作ることには非常な苦心努力をして、其の法律のおかげで社會一般に幸福を増したとすれば、其の人の行は個々の人々に小さな親切を盡すのと同じである。昔の基督教徒の考へは之迄に及ばなかつた。彼の有名なグラッドストーン氏は一人々々の人についても非常に親切な人であつて、如何なる田舎青年の手紙にも自分で返事を書いた程だが、一方に於て氏は英國の政治上に基督教の精神を注入した。小なる事をすると共に大なることをする考へが、氏にはあつたと思ふ。舊來の宗教家が個々人が善くなれば社會も善くなると思つてゐたのは、極めて迂遠な考へである。之に就て切實に感ずることは東京のベストである。總理大臣の

この世界はますます味氣なきものになるであらう。悲痛の前では怖れ戦きながらも、自分自身の幸福のための權利——それは多くの場合他人の不幸のための權利に過ぎない——を要求するやうな卑怯な人々の多い此の時代において、われ／＼は正面から悲痛を見そしてそれを尊重するだけの勇氣を有たうではないか。歡喜も讃へられなければならない。悲痛もまた讃へられなければならない。歡喜と悲痛とは姉妹である。そして二つ共に聖きともがらである。兩者は此の世界を鍛練し、偉大な人々の心靈を押し擠める。兩者は力であり、生命であり、神である。この二つを共に愛しない人は、そのいづれをも愛しない人である。けれども二つを共に味到した人は、人生の價を知つてゐる。人生と別れゆく快さを知つてゐる。

*
* *

自分は思想もしくは力によつて勝ち誇つた人々を英雄と呼びはしない。自分は心によつて偉大であつた人々にのみ英雄の名を與へる。偉大な品性のないところに偉大なる人物はない。偉大な藝術家もなければ、偉大な活動家もない。そこには衆愚のための空虚な偶像があるばかりである。そして「時」はそれを一つにして破壊し去る。われ／＼にとつては成功することその事が問題ではない。問題になるのは偉大になるとであつて、偉大らしくなることではない。

*
* *

人生は幾度かの死と幾度かの復活との一つきである。

*
* *



ロマン・ロオラン断片 (一)

内 藤 濯

自分は卑怯なる理想主義を憎む。人生の惨事と心靈の弱點とから眼を外らさんとする理想主義を憎む。われ／＼は朗らかな言葉の毒々しい幻影にあこがれ過ぎてゐる人々に向つて、英雄的な虚偽が卑怯未練な振舞であることを語らなければならぬ。この世にある剛勇の精神は唯ひとつだけである。それはすなはち、この世界を其のあるがまゝに見ることである。そして其の世界を愛するところである。

* *

神。永遠の生活。この下界で首尾よく生きることのできない人々の隠れ家。信仰、それは多くの場合、生活の信仰、未來の信仰、自己の信仰の缺乏を意味するに過ぎない。勇氣と歡喜との缺乏を意味するに過ぎない。われ／＼はさうした信仰の惨ましい勝利が如何ばかり多くの敗戦の上に打ち建てられてゐるかを知つてゐる……

しかも自分は斯うした理由の下に基督教を愛する。基督教徒よ。と云ふのは自分は君たちを不憫に思ふからである。自分は君たちを不憫に思ふ。そして君たちの憂愁を歎賞する。君たちは此の世界を悲しき世界とする。けれどもまたそれを美しき世界とする。もし君たちの悲痛が存在しなくなれば、

近代人の宗教とトルストイ

石 田 三 治

一

ジエームス博士は、人間が未來生を考へると云ふことを辯護して面白いことを云つて居るが、飽くまでも彼の考方は、實生活の利益と云ふものを價値の標準として居るプラグマテズムの立場であるから次の様な結論になつて行つたのは自然のことである。即ち唯神論的^{スピリチュアリズム}の世界觀は、神の救などと云つた様な美しい幻影を目前に描いたりなどして、未來に希望を置くが、唯物理的世界觀は結局我等の行先は死と云ふ風な考にばかり導いて、未來に憂愁を置く爲め何うしても其處には、前者に於て見る様な道德的安息と云ふものがなくなる、其點に於て前者の方が勝つて居るのだと云ふのである。けれども此は、彼が觀察は決して一局部に偏して居ないもんだと云ふ事を示す例證として用ゐらるべきものであつて思索に於て近代人たるジエームス博士が未來生を力説したと思はれては其れこそ間違である。

即ちジエームス博士は人間の情的方面をも觀察した結果、人が未來生を考へるのは尤もだとは云つたが、同時に智的方面に於ける生きた人間の權威と云ふ方面を説いたことをば忘れてはならぬ。彼が唯理論者の説を嗤^{わら}つて次の様な事を云つたのなどは中々面白いと思ふ。彼が云ふには現實の實相は混

全人生は一日ひと日の事件である。一時ひと時の事件である。過ぎゆく一瞬時をしかと抱擁せずして、しかも、「絶對」裡の人となるためには、抽象論者のやうな神聖な惡魔にならない。

* * *

藝術は人類の夢である。光の夢である。自由の夢である。麗かな力の夢である。そして其の夢はいつまでも覺めずにつづく……いかなる時代においても、人々は『すべてが既に語られてゐる。この世に來たのが餘りに遅かつた』と嘆息する——恐らくはすべてが既に語られてゐるかも知れない。しかし、すべてはなほ語られねばならない。藝術は不朽である、生命と同じく。

* * *

至高の調和を作るものは争闘の節奏である。

ロマンの思想と藝術

内藤 著
天弦堂 發行

前世紀末の混沌陰鬱な暗流を突破して、新生活を確立せんと努力する佛國現代の文學者の中で、最も力強い闘の曲を奏して其陣頭に立てるものはロマン・ロオランである。彼の藝術の中には新生活を開拓せんと努力する人々にとつて、光明と暗示を豊富にもつて居る。自然主義や高樂主義から漸く徹底した自我生活を模索して居る吾現代の思想界には彼の如き態度や思想は早く紹介されねばならなかつた。本書は彼の文藝に通じ深く其思想に私淑して居る著者に依て成つたのであるから、小冊子ではあるが彼の思想の要點を充分捉むと出来る。先づ「時代の香景」で彼を生んだ境界を明にし「ロマン・ロオランといふ人」「民衆の藝術」「力の探求」「愛と眞實と戦と」「虚偽より眞實へ」「舊世界より新世界へ」「争闘の宗教」「エビローグ」等順を追って彼の藝術を通して彼の思想生活を展開して居る。最後に彼の著作日録を出してゐるのは研究者にとつて便利である。(定價・五〇)

ドグマに屈し彼型に嵌つて行く苦痛を先づ嘗めなければならない。そうしなければ其幻影が見られないのである。だからポーロを好く信者は時々『復活の信仰がなくては基督教が解らない』と云ふ様なことをゐばり臭つて云ふのであるが、此は智的方面に於ける人間の權威を殆んど無視した云ひ方であつて、彼らには異端の如く見える自由な近代人には到底満足を與へ得ないものである。

二

其麼事を考へてトルストイの宗教觀を見ると、其中には我意を得たものが随分とある。彼は所謂未來生を説く宗教に極力反對して遂には、耶蘇は後世其教がポーロらの謬見に陷つて來やうとは夢にも思はなかつたらうなどと云つて居る。悲痛なる叫びを以てポーロは云ふ、『そは我内なる人に就ては神の律法を樂めども、わが肢體に他の法ありて我心の法と戦ひ、我を擄とらにして我肢體の中にある罪の法に従はするを悟れり。噫なぐさめるわれ困苦人なる哉。此死の體より我を救はんものは誰ぞや、是われらの主耶蘇基督なるが故に神に感謝す』と、これがポーロの信仰の絶頂で、之がひいては我に復活なくば我信仰空しと云ふ様な考になつて行つたのである。

『我救はもはや彼善惡を區別し、善を選んで行く所の理性の光によつて生活する方法に據ることが出來ない。唯一のアダムによつて罪せられ、唯一のキリストによつて其罪から救はれるのみである。吾人は此間に處して袖手傍觀的にアダムの墮落を悲み、キリストによつて赦を喜ぶべきものである』とは、トルストイがポーロの様な古き宗教家に與へた皮肉な批評であつて、彼は續けて斯う云つて居る

難極るゴシック風な性質を示してゐるもので、其に堪へられないで、唯理論者は逃げてクラシックの避難所をこしらへた。其輪廓は理性の法則で、其部分々々を結びつけるのは論理的必要性、其表はす所のものはこれ清淨これ壯嚴、あだかも丘に建てられて輝く大理石の社殿の様なものであるが、結局此は我々の此さながらなる現實を説明するものでなくて、たゞ單に一の治療法一の逃道に過ぎないものだ。

此だけの前置きで世の中の既成宗教を見ると、其處には此クラシック風の建築に比すべき宗教觀が澤山あるのに驚く。しかも其うちには我々の避難所にもなり得ない様な、殆んど蜃氣樓よろしくのものも少くない。彼のエホバの人類創造より、アダムエバの墮落に至り、大洪水の刑罰起り、ノアの救となり、人類再度の墮落に及んで、基督の出現となる舊新約全書を通じたる美しくも又壯嚴なる太古イスラエルの豫言者が持てる宗教思想の大殿堂、神が彼罪になやむものゝ爲めに基督耶蘇と云ふ神の獨子を降下して死の床より人を救うて復活の宴にあづかしむると云ふ初代使徒らを支配せる宗教情緒の大伽藍、其は實に美しいものである。壯麗なものである。けれども多くの哲學的頭のない信者を支配する其等の信仰の中には、ともすれば此種の蜃氣樓的大殿堂大伽藍に終つて仕舞ふ様なものがあり、徒らにイザヤを慕ひ、徒らにポーロを懷むものゝうちには、此蜃氣樓の周圍をうろついて居るに過ぎない様なものがある。

即ち彼らの以て價值ありとなす貴い救は、彼らが苦みもがいて作つた彼等の殿堂に用ゐられてのみ光を出す壁かざりの様なものであつて、其救の喜びにあづかる爲めには總ての人は其氣質をまけて、彼

以て、耶蘇の教の眞意だと信ずる事は、常に耶蘇の教を誤解するのみならず、實に其根本的基礎を顛覆するものと云ふこと、耶蘇の全教理は個人的空想の生涯を抛擲して、人の子の生命即ち人類の普遍的生命の中に自己の個人性を没却せしむるにあるのだと云ふこと、最もあやまつた考は人生の目的は此空なる一生の後に、眞正なる生命が開始せらるゝものだと思ふに在ると云ふ様なことを斷々平として述べて居る。

誠に此一瞥は彼美しいクラシック風の思想殿堂の幻影を打ち毀つに充分なものであつて、其幻影の去つたあとに、彼がけなげにも建てやうとしたのは此地上に即した現實の愛の宗教であつたのだ。こゝで一寸考へて見たいのは、我々が近代人の宗教と云ふ意味は、徒らに古い信仰に反對すると云ふ謂ではなく、たゞ認識の豊富と合理とを尊むと云ふ事を含めての謂である。ツルゲネーフもメレジエコイエフスキーもトルストイの認識の貧弱を指摘して居るが其でも、彼傳習的に系統化された古の宗教を脱して現實の愛に歸つたことは、其點に於てえらかつたのだと見なければならぬ。

三

今此近代人の宗教を例で以て示すと、先づ次の様なものである。昔の人は創造の神を信じた。即ち神は至善の實在で其が萬物を創造したと云ふ風なことを云ふ。そうすると、斯う云ふ疑が我々に起るのである。『其では何故神のよみし給はぬ惡の存在を許すか』と。其時前記クラシック風の宗教思想の殿堂の建築者は、其は『我々に惡に見えても神の大きいなる眼から見れば善なんだ』と云ふ様な口實を作

『これでは人間の心中に於ける眞と善とに對する一切の渴仰も、理性の光によつて彼が精神生活を照さんとする一切の努力も、此教儀から云へば畢竟するに極くつまらんものであつて、否寧ろ人の傲慢心をあふりたてる所の誘惑に過ぎないものであると云ふことになる。凡ての歡喜總ての壯麗とを戴く此地上に於ける人生、暗黒と理性との闘ひ——これまでの總ての人間が生活し來りし其人生、又我自身が今其内部爭鬭及勝利を以て送る其人生は、うその人生となつて來る。濟度し難い惡となつて來る、そして眞の生活罪なき生活と云ふものは、たゞ信仰による人生、いや想像による人生いや寧ろ空想中の人生に過ぎなくなつて來る』と。

トルストイが思ふに、まづ教會の云ふことに従へば『耶蘇の教は文字通りに此地上で到底實現の出來るものではない。何故と云へば此地上生活は生來的に罪惡であつて、従つて其は眞の生命の影坊子に過ぎないと云ふのだ。其故人生最良の生活法は、此地上の存在を輕視して將に來らんとする永遠なる幸福の生命に對する信仰（否寧ろ想像と云つた方がいゝ）によつて導かれなければならない。其て此世にあつては依然として災厄な人生を送りつゝ至善の神に祈るのみだと云ふことになる』恐らくキルケゴールなどの信仰も其類であらうと思ふ。

斯う云ふ風な鹽梅で、彼は『我宗教』の、特に其第八章の中に、古い信仰に對して殆んど完膚なきまでの攻撃を加へて次のことを語つて居る。即ち基督の『永生』は其布教の主目的であるが、其永生の意味は決して今の教會が信じて居る様な箇人的復活や、個人的不滅の教訓でなくして、愛の戒を守つて得らるゝ幸福の状態に名づけられたものであると云ふ意味のこと、天國地獄の報賞刑罰の空談を

い。愛はたゞ現在に於ける活動である。現在に於て愛を現はさぬものは愛を持たぬ』と云つた彼の愛は、後の世の極樂往生の爲めに強迫されてつぎ込むお賽錢の如きからつばな愛でなく、誠に火の如き生き／＼とした愛であつた。其處へ行くと、『お前達の爲めには俺は何うなつてもいい』と云つたポーロも同じ所を掴んで居た様であるが、トルストイはポーロの如く未來は云はず極力此愛のみを高調した。

『墓の彼方の生命や、贖罪に基く救ひをば、或は疑ふ者があるかも知れん。併し、誰れか個人の死の滅亡に定つてゐるのを疑ふことが出來やうか。誰か神意と調和せる生命ばかりが救極の資格を具ふるもんだと云ふことを疑ひ得やうか。此信仰は未來の信仰の様に、そう云ふ風に玄妙でないかも知れんが、然し確實なものである』と云つた彼の言葉と、先にあげたジェームス博士の唯理論の批評と比べると、トルストイは此點に於て餘程近代人だつたと云ふことが解る。即ち彼の宗教觀はたゞ單に玄妙なるクラシック風の殿堂的のものでなく、もつと實人生に即したものであつたと云へる。

成程『對宇宙的情緒』とジェームス博士に依て云はれた宗教が、トルストイに依てはつきりした愛と云ふ赤い單色に染められたのを見ると、ちと奥行が無さそうにも思はれるけれども、其愛の赤い色が彼の妄想から染め出されたものでなくして、しつかりしたプラグマテツクの基礎を有するもんだと云ふことを思ふ時、吾々は其に對してむげに不賛成の意を表することが出來ない。否寧ろ彼が其態度を持續して居る限りに於ては、吾々襟を正しうして謹聽しなければならぬ様な氣がする。

『耶穌の教に従へば、いろんな個人的幸福と云ふ餌でつゞて行く此世の教儀に従つて、不安と苦痛と

つて逃れる様にするだらうが、近代人は其麼遁辭を許すことは出来ない。

彼等近代人は先づ自分の慾求を是認する。慾求の充ざるゝ所彼等は徒らなる恐迫觀念を去り、満足と平安と希望とを得て行く。親の愛に、友の愛に、而して異性の愛に、其が此方の態度の所謂正義による時、其愛がはつきりと而して豊かに受けらるゝ様な經驗を澤山積むうちには、愛と正義との關係をつけたり、以上の雑多な地上の諸愛を各結びつけて一の攝理と云ふ感じにしたり、其攝理が現世の上の時間に廣り舊約の信仰を加味して來り、其攝理をいつも神と同一に用ゐて、其で我々の考と、我々の生活とにくひ違ひなどを生じない様になつて來て、始めて近代人の宗教が出来るのである。キング博士の『友情の法則』にもあるそうだが、ブラクの『友情論』に於て見ても、友情は宗教也と云へる位、近代人には現實の地上の美しい姿が、化して天上に行かんと云ふ風な工合になつて居るのである。

斯う云ふ意味に於て、トルストイは地上の普遍的愛に宗教を見出さうとした。『個人の幸福を放棄することは功績でもなげや手柄でもない。其はたゞ人間生活の不可缺の條件だと云ふまでのことだ』と彼は其『人生』に於て論じて居るが、人間と云ふものは誠に其我利々々の個人的幸福を續けやうとすると、望む所は得られずに、いろんな心勞の方が多くなつて結局損になり、此方で其を投げ出せば却て其廣い他愛の中に個人的幸福を見出し得ると云ふ様な意味のことを力説して居る。彼の引用して居る。『其生命を惜むものは之を失ひ、我爲めに其生命を失ふものは之を得べし』と云ふ聖書の文句の示す如く、之は頗る微妙な問題であつて、時に不立文字の禪的境域に隠れてしまふ。『愛は未來に於てな



雜

詠

佐藤清

南スラヴを羨む一首

この國のむすめの中にうつくしき南スラヴのたましひはいれ。

煙 三首

摩耶のふもと登る煙のなきけふの漲ざる光われに悲しも。

摩耶のふもと何を焚けどもすあをなる煙あがりたなびきつゝも。

朝のまぼろしすあをの煙たちのぼる摩耶の根ごしに雪は降りつゝ。

薄明 一首

海の上の消ゆることなき薄明に青鈍あそにびの灯はともれりマストに。

初春 一首

摩耶の峯は日に青みゆき田のくらはたゞしくな

れりかけろふ立つも。

獸の息 二首

夜中よなかふと鼻を出入すわが息を聞けばけものの息に似たるも。

不眠症二時頃起きて牛小屋の牛の寢息を聞きあるさけり。

寄宿舍即事 一首

足の爪長く伸ばしてゐたりけり寄宿に母が見舞に來れば。

市中小景 一首

撒水夫角曲る時土方あり追ひかけ行きて手をあらひけり。

海 一首

帆の影はから梅雨の晝に身じろがず入江の白さなかに浸れる。

を管めるよりも、外面的には榮えなくても、主觀的には餘程幸福になり得られるから、此れに従へ』と云ふのが、彼の傳道の原理であつた。彼古き名『基督』によつて道を宣傳したとは云へ、其福音近代的なることまさに斯くの如きものがあつたのである。

四

トルストイの宗教觀には、缺點も多かつた。愛とし云へば質を見るより量を見る爲め、あの淋しいアスタポヴォの停車場で死ぬ際に、看護のもの等に『此世の中には苦んで居る人が澤山あらうに、何故前達はたゞ私のことばかり考へて居るのだ』と云つたはいゝが、壁一重隔てゝ溫良なソフィア夫人が遭ひに來て居るのをば顧みなかつたり、愛をしなければならぬ理由を理性に歸し、理性から我々の日常生活に法則を作り、法則の爲めに法則を愛すると云ふ風に理性や法則を偶像扱にする所から自然に、純潔を愛するんだと云つて性慾の絶對罪惡を叫んだりなどする所など、何うしても偏狹の譏を免れない。

彼はベタニヤのマリヤが基督の足に塗つた油を勿體ないと云つて、イスカリオテのユダと共に叱られる人、神の淨めたものなるに拘らず四足の獸などを見て、穢れたるものは食はじと叫んでペテロの様は空腹を経験する仲間であると云ふことは争はれない事實である。が併し。其う云ふいろんな缺點は缺點として、何うしても見てやらなければならぬ彼の効蹟は、耶穌は未來を説いたんでなく。最も多く現實を説いたんだと云ふ其點である。(四一七—十四)

例へば過去の經驗を回想するに、視覺型の人は重に視覺心像で回想し、聽覺型の人は、重に聽覺心像で思考し、運動型の人は、重に運動感覺心像で回想する。例へば昨日の運動會を回想するに、視覺型の人は、幕や、旗や、競技者の姿勢や、見物人の黒山等、重に視覺心像が頭に浮び、聽覺型の人は、樂隊のドンドラ／＼や、聲援隊の聲援歌や、野次馬の叫喚や、見物人の喝采等、重に聽覺心像が頭に浮ぶ。又た運動型の人は、自分が叫んだ時や、自分が騒いだ時や、自分が競技に加はつた時等の、運動感覺心像が頭に浮ぶ。又た知人を思ひ浮べるに、視覺型の人は、何よりも先づその人の容貌や、姿勢や、歩み振り等の視覺心像が頭に浮び、聽覺型の人は、何よりも先づその人の話聲や、笑ひ聲等の聽覺心像が頭に浮ぶ。

又た文章などを諸記するに、視覺型の人は、それを何遍も熟讀して、鮮明な視覺心像を作つて諸記し、聽覺型の人は、それを何遍も音讀して、鮮明な聽覺心像を作つて諸記し、又た運動型の人は、それを何遍も音讀、但し運動型の人が音讀する

のは、聽覺型の人が音讀するのとは、その目的が違ふ。或は筆記して、鮮明な運動感覺心像を作つて諸記する。即ち視覺型の人は目で諸記し、聽覺型の人は耳で諸記し、運動型の人は咽喉或は指先で諸記する。

併しこゝに、注意しなければならない事が一つある。それは、視覺型の人は、視覺心像で思考すると云つても、視覺心像だけで思考する譯でなく、聽覺型の人は、聽覺像で思考すると云つても聽覺心像だけで思考する譯でなく、又た運動型の人は、運動感覺心像で思考すると云つても、運動感覺心像だけで思考する譯でないと云ふ事である。即ち彼等は、重に視覺心像で、重に聽覺心像で或は重に運動感覺心像で思考するのであつて、無論他の心像も多少は用ひる。丁度劍術に於いて、胴の名人と云つても、胴一方と云ふ譯でなく、多少は面も切れば突きもやり、突の名人と云つても、突き一方と云ふ譯でなく、多少は小手もやれば面もやり、又た面の名人と云つても、矢張面一方と云ふ譯でなく、多少は胴もやれば突きも

型と思想

木村 久一

心像のいろく

科學者の興味は機制メカニズムである。彼は何を見ても、先づその機制を考へる。この論文は型タイプと云ふ一つの素因ファクターに目をつけて、思想の機制の一端を明かにしようと試みたものである。

我等の感覺は、凡て我等に心像を残す。而して我等の思考作用は記憶でも、聯想でも、想像でも、推理でも、凡てこの心像の集散離合に外ならない。然るに心像の残りやうは、人に由つて色々に違ふ。即ち或る人は、視覺心像が特に鮮明に残り、或る人は、聽覺心像が特に鮮明に残り、或る人は、運動感覺心像が特に鮮明に残る。又た或る人は、視覺心像と聽覺心像が特に鮮明に残り、或る人は、視覺心像と運動感覺心像が特に鮮明に残り。或る人は、聽覺心像と運動感覺心像が特に鮮明に残

る。又た或る人は、何等の特長もない。我等は視覺心像が特に鮮明に残る人を、視覺型の人と云ひ、聽覺心像が特に鮮明に残る人を、聽覺型の人と云ひ、運動感覺心像が特に鮮明に残る人を、運動型の人と云ふ。又た視覺心像と聽覺心像が特に鮮明に残る人を、視覺聽覺型の人と云ひ、視覺心像と運動感覺心像が特に鮮明に残る人を、視覺運動型の人と云ひ、聽覺心像と運動感覺心像が特に鮮明に残る人を、聽覺運動型の人と云ふ。又た何等の特長もない人を、不偏型の人と云ふ。

さて視覺型の人、重に視覺心像で思考し、聽覺型の人、單に聽覺心像で思考し、運動型の人、重に運動感覺心像で思考する。又た他の型の人、も同様である。これは今述べた事情から當然な事である。

ならぬと云ふ風である。即ち一は、耳からは容易に頭の中に届かぬ代りに、眼から入れると割合に早く融け込むが、他は丁度これと反對に、耳からだと電光の如くに閃き込むけれども、眼からは中々受け入れられないのである。

と云ふ一節が、あつたがこれを見ると、牧野男は視覺型の人で、大浦子は聽覺型の人らしい。

予の友人に、法學士で珍しい聽覺型の人がある。予は嘗て彼から、『僕は込み入つた、むづかしい文章になると、いくら讀んでも分らない。さういふ時は、僕は人に讀んで貰つて聞く。さうすると分る。』と聞いて驚いたことがある。彼は又たしばらく、君は嘗てこう云つたとか、君は嘗てあゝ云つたとかと、本人がとうに忘れてしまつた事を引つぱり出して、予を驚かす。然るに予は視覺型の男で、彼と反對である。即ち予は込み入つたむづかしい事は、耳で聞いては分らないが、目で讀めば分る。又た予は耳で聞いた事は直ぐ忘れるが、目で讀んだ事は好く記憶に残る。予は目で讀んだ事は、大抵何本のどつち頁（右頁か左頁か）にあつたかは勿論、その頁のどの邊（初めの方か中程

か終りの方か等）にあつたかをも覚えて居る。これは予の友人の驚く事である。

併し予の友人が予に於いて驚く事が今一つある。それは予の早讀である。小説などを讀む時は、予は少くとも彼の五倍早く讀むことが出来る。聽覺型の人や運動型の人には、實際にか心の中でか、兎に角文字を一々發音しなければ意味が分らない。

併し視覺型の人には、その必要がない。たと目を通しさえすれば意味が分る。現に予は、三四百頁の小説は、大抵一晩で讀む。謂はゆる『撫で讀み』である。これは視覺型の人でなければ出来ない事である。

聽覺型の小供や運動型の小供は、音讀しなくては覺えられないことがある。併し學校は、澤山の小供を一所に教へる所であるから、靜肅を保たなければならぬ。勝手に音讀を許しては、八釜しくて何も出来ない。故に學校では、どうしても音讀を許すことは出来ない。これは學校の缺點である。併し學校にはこんな缺點はまだある。

暗算をやるにも、視覺型の人と聽覺型の人とは違

やると同様である。予がしばしば重に云つたのはこの爲である。

次ぎに視覺型の方は、耳で聞いてよりも目で見て了解する事が樂である。之に反して聽覺型の方は、目で見てよりも耳で聞いて了解する事が樂である。之も前に迷へた事情から當然な事である。

『君、今晚○○學講演會に行つて見ませんか。六時から大學の新講堂で開かれます。』

『いえ、僕は失禮します。』

『そんな事を云はないで、行つて見ませう、行つて見ませう。○○博士の『○○の○○に就いて』と云ふ講演もあるやうですが、面白さうですよ。』
『併し何れ皆な『○○學雜誌』に出るでせう。僕はそれを讀みます、その方が世話があります。』
『これはしたり、雜誌を讀むのこそ厄介でせう。講演を聞く方は、たゞ座つて居りさへすれば分るぢやありませんか。雜誌を讀むのよりは、いくら樂か分りません。』

『そんな事があるもんですか。聞くのこそ骨が折れます。讀む方は、聞く方よりもいくら樂が分りま

せん。』

予は嘗て、こんな對話を耳にしたことがあるが、對話者は、共に型の心理を知らない人であつたらしい。故にこんな事を云つたのである。併し我々が見れば、彼等はそれ／＼違ふ型の人であつたのである。即ち、甲は聽覺型の人で、乙は視覺型の人であつたのである。

故に視覺型の方は、知識を重に目から得る。即ち重に讀書に由つて得る。これに反して聽覺型の方は、知識を重に耳から得る。而してそれが好く記憶に残る。謂はゆる『耳學問』である。大隈伯は、餘り讀書をしないやうであるが、好く色々な事を聞き覚えて居て、到る所で『大風呂敷』を擴げる。あれを見ると、大隈伯は聽覺型の人らしい。

又た嘗て『太陽』の臨時號『大正維新の風雲』に、

牧野と大浦は、同じく薩摩人なるに拘らず、その人格性行は全く相反して居る。……牧野は、同郷の青年などが訪ねて行つて、議論でも持ち込むと、默然とこれを聞いて居て、どうも聞いただけでは一寸分り兼ねるから、書面にして出して呉れなど云つて、済して居る質であるが、大浦は話を聞けば好く吞み込めるが、書いた物となると、てんで讀む氣に

た文章家や演説家等になるにも都合が好い。聴覺型の人の健筆は、視覺型の人には羨ましいものである。

合性と型

男女間には合性があると云ふが、合性は男女間に限つた事でない。型の上から云へば合性は著者と讀者の間にも、講演者と傍聽者の間にも、教師と生徒の間にもある。例へば、視覺型の讀者は、視覺心像を提醒する言葉を多く用ひて書く視覺型の著者の文章は好く分るが、視覺心像を提醒しない、抽象的な言葉を多く用ひて書く聴覺型の著者の文章は好く分らない。これに反して聴覺型の讀者は、聴覺心像を提醒する言葉を多く用ひて書く聴覺型の著者の文章は好く分るが、聴覺心像を提醒しない、具體的な言葉を多く用ひて書く視覺型の著者の文章は好く分らない。尤も聴覺型の讀者も、視覺型の著者の文章の繪畫的鮮明にはしばしば感心する、併し畢竟淺薄だと卑める。又た視覺型の讀者も、聴覺型の著者の文章の音樂的諧調には、しばしば感心する。特にその意味深さうな

high sounding な言葉にはしばしば驚嘆する。併し畢竟 *houseuse* だ、空喝だ、*mere sound* だと嘲る。講演に於いても同様である。聴覺型の傍聽者は、視覺型の講演者を、淺薄だと笑ひ、視覺型の傍聽者は、聴覺型の講演者を、態と難解な嚇し文句を使つて深遠を衒ふ、ひとりよがりな、頭の惡う *Pedant* だとけなす。

Love is the ideality of the relativity of reality of an infinitesimal part of the infinite totality of the Absolute Being.

これは或唯心論的思想家の愛の定義であるが、諸君はこれを讀んで意味が分るか。この思想家は、聴覺型の人に違ひない。否な予はこの思想家に限らず、凡ての唯心論的思想家は、聴覺型の人だと思ふ。又た凡ての唯物論的思想家は、視覺型の人だと思ふ。嘗てジエーム博士は、哲學の如何は氣質の如何に由ると云つたが、予は哲學の如何は型の如何に由ると思ふ。故に予は、唯心論的思想家と唯物論的思想家が互に惡口し合ふのは、丁度二人の女が互に顔の惡口を云ひ合ふやうなもの

ふ。即ち視覺型の人は、矢張視覺心像で計算する。即ち目の前に、算盤の視覺心像が見えて、その算盤で計算する。これに反して聽覺型の人は、聽覺心像で計算する。メチニコフ博士は、乗數も被乗數も、七八桁の數を暗算で掛け合せるに、二分くらゐさうかゝらないと云ふ、驚くべき暗算の名人を紹介して居るが、この人は、聽覺心像で計算するのださうである。

即ち色々な數の聽覺心像が、耳の傍で一所に鳴り續いて聞えるのださうである。

又た視覺型の人は、視覺から快樂を得ることが多く、聽覺型の人は、聽覺から快樂を得ることが多い。視覺型の人は、見る物は何でも好きである。これに反して聽覺型の人は、聞く物は何でも好きである。例へば視覺型の人は、よく活動小屋に行く。聽覺型の人はこれを見て、あの人はなぜあんな活動が面白いんだらうと思ふ。これに反して聽覺型の人はよく寄席に通ふ。視覺型の人はこれを見て、あの人はなぜあんな義太夫が面白いんだらうと疑ふ。同じ芝居に行つても、視覺型の人は役

者の顔や着物や、動作や、背景を見て喜び、聽覺型の人は、役者の聲色や、いれものを聞いて楽しむ。視覺型の人は女に惚れるに顔や姿を見て惚れる。故に彼は、聲を聞いて女に惚れる聽覺型の人の心が分らない。さういふ人を見ると、彼はあの人は、なぜあんな女が好きなんだらうと怪む。

又た視覺型の人は視覺心像が特に鮮明に残るから、視覺心像を再生することが樂で、聽覺型の人は聽覺心像を再生することが譯がない。故に聽覺型の人は、たやすく唱歌を覺えたり、他人の聲色を眞似たりする。よく學校の寄宿舎などで、役者の聲色を眞似たり、女や小供や外國人の口調を眞似たり、猫や犬や、馬や牛や、鳥や鶏の鳴聲を眞似たり、教師や校長の口吻を眞似たり、義太夫や浪花節を唸つたりして、朋輩を笑せる愛嬌者は、聽覺型の生徒に多い。これに反して書物の端やノートブックの餘白等に。教師の顔をポンチつたりする生徒は視覺型の生徒に多い。畫家には視覺型の人でなければなれない、これに反して、音樂家には聽覺型の人でなければ望がない。聽覺型の人は又

者はさいはひなりと云ふが、予は見ずして信ずることは出来ない。予はかの耶蘇の復活を疑つて、その創を見なくてはと云つた、トマスには大いに同情する。トマスは視覺型の人であつたのに違ひない。而してトマスのやうな人は、教會に於ては必ず評判が悪いこれは昔も今も同じである。一體トマスは、宗教家などにならないで、科學者になればよかつたのである。さうすれば、立派な科學者になつたに違ひない。誤つた事をしたものである。

又た予のやうな生徒は、學校で損をする。否な非聽覺型の生徒に限らず、凡ての都合の悪い型の生徒は學校で損をする。而してその型が、教師の型と丁度反對な時は、この損害が特に甚だしい。例へば目から覺える視覺型の生徒が、耳からばかり教へる聽覺型の教師に教へられたならば堪らない。又た指先から覺える運動型の生徒が、指先から覺えることを禁ずる聽覺型の教師に教へられたなら大變である。現に予が學んだ中學校の幾何の教師は、視覺型の人であつたと見えて、圖を書か

ないで、又た圖を書いても見ないで、即ち圖を鞭で指し示さないで説明することが自慢であつた。而して生徒にも「君等も圖を書かないで説明することを練習しなければならん圖を書いて、漸く説明が出来るやうな事では駄目だ、」と云つて居つた。かういふ教師に教へられる生徒こそ好い面の皮である。又た或る高等學校の語學の教師は、譯讀の時間に「耳から覺えよ」と云つて、ペンや鉛筆を用ふることを絶対に許さないやうである。これでは指先から覺える運動型の生徒は立つ瀬がない。又た視覺型の生徒も困る。何となれば視覺型の生徒は、耳で聞いた事は直ぐ忘れるから、是非これをノートに止めて置く必要があるからである。

諸君は大抵、教師が變つた時、生徒の成績に非常な番狂はせが生じた例を知つて居るであらう。この原因は無論一つでない。併しその一つは確かにこの教師と生徒の間に生ずる合性である。

都合の悪い型の生徒が學校で損をすることは、大學などに於いてもある。尤も大學などに於いて

だと思ふ。

ぢは云ふものゝ、視覺型の人には、唯心論的思想家の云ふ事は實に分らない。唯心論的思想家は、

Das Dieses ist also gesetzt, als nicht dieses, oder als aufgehoben und damit nicht Nicht, sondern ein bestimmtes Nichts, oder ein Nichts von einem Inballe nämlich dem Diesen.

Das Ding ist Eines, in sich reflektirt; es ist für sich; aber es ist auch für ein Anderes; und zwar ist es ein Anderes für sich, als es für Anderes ist.

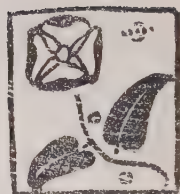
と云ふやうな事を盛に云ふがかういう事を云はれると、予のやうな視覺型の男は、ハッと畏まるより外に仕方がない。併し心の中では決して感心しない。

心型と記憶

序であるから、參考の爲にもつと予の事を紹介しよう。諸君の知識がこれが爲に、少しでも増せば予の喜びである。さて予の型は視覺型であると同時に非聽覺型である。予は耳はどこも悪くない、普通に聞えるがどうも聞くことが得意でない。

特に視覺心像を提醒しない、抽象的な言葉を多く用ひて語る話が分らない。故に哲學上の話や宗教上の話は聞く氣にならない。予が滅多に教會に行かないのはこの爲である。併し讀む方は別である又た予は耳で聞いた事は極めて忘れ易い。故に人名や、場所や時刻等を聞いた時は、心の中で一度云つて置かなければならない。さうしないで、聞いた儘にして置くと、たまらず忘れる。予は小學校では寄せ算が下手であつた。中學校では、書取が下手であつた。又た大學では、講義の筆記が出来なかつた。故に大學では、講義には滅多に出なかつた。出ても講義は筆記しないで、好い加減な出鱈目を書いて居つた。故に予は、大學の講義と云ふ物は一冊もない。あの誇るべき、一生の記念になる大學の講義が！

予は又た耳で聞いた事を信用しない癖がある。これは常に耳からはいつた知識は、あてにならないと思つて居るからであらう。故に予は、耳で聞いても、更にそれを書物で讀んで確かめなければ自分の知識にしない傾向がある。見ずして信ずる



犬

伊 藤 惠 子

一

或る日學校から歸ると家の玄關口に眞黒な小犬が一疋つないであつた、大好の私は。

『まあ小さな犬ねお前はどこから來たの』と云つて頭をなでやうとすると、其犬はさもうるさいと云ふ様にふいと身をかはして向方の隅へ行つてしまつた。私は變な犬だと思つて其まゝ靴をぬいで居ると母が出て來たので。

「母さんこの犬どうしたの」ときいた。母は

「これはね父様とうさまがオスボンさんの處からもらつていらしたんだよ」と云ひながら。

「さあバブおいで」と犬をひざに乗せた。

「變な犬ですね」と一緒になつて頭に手をかけると不意に「ワン／＼」と鋭く吠えて私の手をさけてしまつた。私はびつくりして手を引込ますと母は笑ひながら。

「此犬はなか／＼慇巧だから知らない人になど手をつけさせないんだよ」と説明した。けれども見たところ小さな耳のつき立つた、只黒いばかりの犬で大して慇巧さうでもなかつた。母は

は小學校や中學校に於いてとは趣きが異ふ、予は前に、著者と讀者の間に生ずる合性を述べたが、同じ合性が論文提出者なる生徒と、論文審査人なる教授の間にも生ずる。而して教授が不幸にも

toleranceのない學者な時は、生徒の受ける損害は特に甚だしい。

述べたい事はまだあるが。餘り長くなるから、この邊で切り上げやう。

井戸の水

ほしゝま生

□古い井戸から永久までも新らしい水が湧いて出る

私の祖父さんの其又祖さんの堀つと云ふ

屋敷の裏の古い井戸

井筒はすつかりすれちびて 角な所も丸くなり

深くつまれた石垣は 苔青々とむして居る

年が年中たつた一日も休む暇なく、

釣瓶の車のくるくると、廻ふ度毎に汲み出さる、

水は冷めたく鮮るはしい

古い井戸から永久までも新らしい水が湧いて出る

□井戸の水は生きて居る
水道の水は死んで居る

暑い／＼夏の日に冷い水のほしい時

私の宅の井戸水は氷の様にひやつこい

寒い／＼冬の日に冷い水のいやな時

私の宅の井戸水はぬる湯の様にあたゝかい

暑い時にはひやつこく、寒い時には温くなる

井戸の水は生きて居る、井戸の水には親切がある

暑さにつれて温く、寒さにつれて冷くなる

水道の水は死んで居る、水道の水には親切がない

など、二人で話して居るところへ父が歸つて來た見るとバブがしほ／＼と父の後について來た。

「まあバブが歸つて來ましたのね」と云ふと父は。

「うむ丁度會社の門を出ると向方から走つて來た。でも感心に己が「バブどこへゆく」と呼び止めたら、すぐに立ち止つてしまつた。さうして「一緒についてこいと云つて歩き出したら溫しくついて來たなか／＼可愛いやつさ」とバブの頭を輕くた／＼しながら話した。

バブは英話を語す父に一番よく親しんだ毎日夕方になると門の前に出て父の歸りを待つて居た、さうして父の姿が見えると鼻をクン／＼鳴して喜むだ始めのうちは鏈を切つては逃げやうと企てゝ居たけれども母の發議で家の中へ上げる様にしてからやう／＼落ついてだん／＼私達にもなれはじめた。親しむにつれて初め無愛想にひきかへ。なか／＼の愛嬌者で家中の人に愛された。犬嫌のばあやまで。「これは只の犬ぢやございせんせんが、肉なんか、そんなそくに置いたつて「おめいのでないで」と云うておけば見ようともしませんすけね。ほんに何て行儀ぎようぎのいゝ犬で、わし、たまげましたが」と會ふ人毎に自慢した、さうすると、きまつて下女がそばから。

「どうして／＼物なんか盗むどころか、ねずみは取る、猫の番はする、えれいものさ」と合槌を打つのであつた。

ほんたうにバブはねずみ取りの名人で、無性者の駒うま（猫の名）が居ねむりをして居る間に、臺所をあらすねずみ達をはじから退治してしまつた。猫は眼の仇かたきにして居たけれども家の駒だけは決していぢめなかつた。

「ごらん此犬はどこかも黒いのだよ」と云つて黒い爪や舌を見せた、さうして其れは純粹の滿洲種である事や西洋人の處で育つたから英語よりわからない事や食物は重に牛肉である事などを話してきかせた。

其日の夕方父の務めて居る會社の氣笛が遠くから響てくると今まで溫しかつた犬が急に悲しさうな聲を上げて鳴きだしたのだらうと思つて行つて見ると犬は出口の戸を脈ひきかきながら身をもがいて居た。

「バブやどうしたの」と云つても見むきもしないでなさつづけて居た。私はきつと外に何かあるのであらうと思つて戸を開けるとバブは滿身の力を込めて鏈をぶつとりと切つて、まっしゆぐらに會社の方へ走つて行つてしまつた、後にとりのこされた私はぼんやりと見送つて居ると母が來て。

「おや犬は」ときいた。

「今あんまりないたから戸を開けたら逃げて行つてしまひましたよ」

「まあいけないね切角繫いで置いたのに」

「どこへ行つたんでせうね」

「會社のボーがきこえたから又元の家を思ひ出したんでせうよ、オスボンさんの家は會社の中にあるんだから。」

「まあ犬のくせに氣笛なんかわかるんでせうか生意氣ね」。

「其れは犬だつてわかりますともお晝にも氣笛をきくと急になき出してねえ」。

けれども春になると、石垣の雪が眞先に消えて、破目の黒い土に落のとうがみどりにふいてくる南の方には川をへだて、妙高山の峯が高く空をついて居る北の方には日本海が絶えず波の音を響かせて居る晴れた日には沖の方に佐渡が島の山が薄紫に霞むで見える、屈曲した海岸は西から東へ半圓を畫いて米山のふもとに、そうて消えて居る。夏になると、丘のみどりと紺青の海とが、強い日光に照り合つて北國にはめづらしい程の色彩を見せる、そんな頃になると冬はあまり見られない白帆の影や蒸汽船の煙が海をにぎはす私は四月ごろから秋のすゑまで紺色の海がだん／＼あせて鉛色になる頃まで此の原に來てはバブと楽しい自由な時を過したバブは私のハーモニカが大好きで「私が何か吹き出すと、兩足を前にのばして、身をかゝめ私の顔を見つめながら低くうなり出した、其れは悲しさと嬉しさのまじり合つた様な一種の妙な力を含むだ音調であつた。私はその聲を聞いて居るともうバブを犬だなどと思へなくなつてしまふ。さうして私の空想はすぐに此犬を或る魔法の力で人間から變へられた者の様に考へさせてしまふのであつた。私はよく草原に座つてぢつとバブを見つめながらいろいろの曲を吹いた。だん／＼感情がせまつてくると自由な空想につれて勝手に自分の調をこしらへた、さうして、大人に「又でたらめを吹いて居る」などと批難される度に私は心の中で「皆になんかわかるものかバブでなくては自分の歌はわかりはしないのだ」と叫びて居た。私はバブを自分の音楽に對する唯一の理解者と信じて居た。全くバブは凡ての音調に對して或る感興を持つて居たけれどもさうした私の氣まゝなハーモニカの音を一番すいて居たらしかつた。バブは又美に對する理解をも、持つて居た、美しい花なんか大好きで私の花畑の花が咲くと一緒になつて花の香を一つ一つかきながら歩いた。そ

なれ、ばなれる程めづらしい程物わかりのいゝ可愛い犬だ、さうして私達おぼがうる覚えの英語で命令すると、「あづけ」をしたり「お辭儀」をしたり、手をくれたりする様になつた。其うちにバブの方でも日本語を覺えるにつれて、色々新しい藝を習つた、「失敬」と云ふと、ちゃんと右手を上げて不動の姿勢を取る、「お早う」と云ふと、頭を下げてお辭儀をする、「ちん」と云ふと後立て直立する、なか／＼面白い犬だ。いつもお菓子がほしくなると戸棚の前に行つて知つて居るだけの藝をどれもこれもやり出す。其れを見ると誰でも何かやらすには居られなくなる。中でも私は家中で一番甘い物好なので、いつでも自分が食べる度にバブにもわけてやるから自然私とバブとは一番の仲よしになつた。毎朝私が學校へゆく時バブは村はづれの河まで私を送つて來た、さうして橋のところへくると私か「お歸り」と云ふものだから、ちゃんと「失敬」をして歸つてゆく、午後に學校から歸る頃になると毎日かゝらず橋のところまでむかへに來て居る、さうして私の姿を見つけると遠くから夢中になつて走つて來て足にからみついたり、飛びついたりしてなか／＼歩かせない、其れでも私が。

「さあバブ早く家へ歸つて遊ばうね」と云ふと私のまはりをぐる／＼をどりめぐりながら走り出す。家へ歸つて私が學課の復習をはじめるとバブは待ち遠しさうに机のそばへ座つて居る、さうしていよく私が本をしまつて。

「さあバブ行かう」と云ふとバブは満足さうに、尾を振りながら先に立つ、私はお天氣さへよければいつもかうしてバブを連れて近くの原へ遊びに行つた。其處は昔の城跡でくづれかゝつた石垣などがそここゝに昔のおもかげを止めて居る、冬は海から吹きつける北風に眞白い野は淋しく横はつて居る

手を負かしてしまふまでは、家へ歸つて來なかつた。だから、たとへ負けても、尾を下げなかつた。どうかすると三日も四日も家へ歸つて來ない事があつた、そんな時に家の者がさがしにゆくと面白くなさうに頭をたれて歸つてくる、けれども又すぐに飛び出して。行つてしまひにはきつと勝つて、方々きずだらけになつて、歸つてくる。勝つて來た時には、得意になつて、大いばりで、堂々と玄關口から入つて來るのが常であつた。何となく昔の武士とでもいゝさうな犬であつた。

二

それはバブが家へ來てから三年目の冬であつた。私はもう長い間吹雲に閉ぢ込められて家の中ばかり過して居た、さうして學校から歸ると、原へ遊びにゆくかはりに自分の部屋で小公子や家なき兒などゝいふ家庭小説に読みふけて居た。従つてバブも大抵は、退屈さうに私のそばにねて居た。

或日もいつもの様に私が机に向つて讀書して居ると母が東京の姉が送つてよこしたのだと云つて私の大好きなシュークリームを持つて來てくれた。私は丁度小公子のセデーが公爵と會見するところを夢中になつて讀むで居たのでお菓子皿を受け取るなりすぐ机の下に入れて又あとを讀みつゞけて居た、それから暫時してさつきのお菓子を食べやうと思つてお皿を取り出して見るとシュークリームは影も形もなくなつてお皿がきれいになつて居た。おやと思つて机の下をのぞいて見ると、いつの間にかバブがちやんとそこに寝て居た。私はそんな事とは知らないでいきなり、バブの鼻先へ置いたからバブは、たぶん自分がもらつたのであると思つたのであらうけれども、おなかを空せて居た私は、そんな

れから月や星を見るのが好きで夜になるとよく河岸に高く積むである材木の上にのぼつてはちつと空を仰いで居た、こんな處を見ると私はなほ／＼バブを只の犬として取扱ふ事は出来なかつた。どうしても何か自分の知らない不思議な力がバブの後に動いて居る様な氣がした。ほんたうに、バブには一種の氣品があつた。どんな好きな物でも他人からは決してもらはなかつた他所へ一緒に連れて行つても行儀よく私のそばに座つて居てお菓子などもらつても私が「バブやおあがり」と云つて、自分の手でやらなければ見むきもしなかつた、そんな風で普通の犬の様に、ごみためさがしなどは思ひもよらない事である。無論食物の事で他の犬と争ふなどゝいふ事は一度もなかつた、それどころか、宿なし犬などか來てものほしさうに、バブのお皿をのぞいたりしゃうものなら自分が食べて居るときでも、わざわざ寄つて其犬に自分の食物をゆづつてしまふのであつた。其爲にバブが來てから、家の臺所へは近所の宿なし犬がやたらとやつて來た。さうしてバブのものをみんな取つてしまふので、しまひに、女中達は野良犬が來ると棒であつて家へ近づけない様にしてしまつた處が其後はバブが時々肉の大きな切やごはんのかたまりをくはへては外へ出てゆく様になつた。私は不思議に思ひ後をつけて行つて見るとすぐ近くの草原へ入つて行つた、見ると其處には、前によく來た。がき／＼にやせた、雌犬が生れて間もない様な小犬に乳を吞せて居た。さうしてバブは、其犬の爲に食物を運んでゆくのであつた。此事がわかつて後家では決してもう宿なし犬を棒でおひ拂ふなんていふ事はしなくなつた。

バブは、こんな氣のやさしい、犬であつた、けれども、なか／＼氣の強い犬で、自分より強い犬に決して負けて居るなんていふことはしなかつた、もしも、一度けんくわに負けようものなら、必ず相

ブの黒い瞳の中には、或る偉大な力のあふれて居るのを感じた。さうして、バブには尊い魂があると
思つた、其時突然に戸外で大きな犬の吠聲がした。それをきくや、いなやバブは、さつと身をかはし
て、一散に外へ飛び出してしまつた。すると間もなく、はげしい犬の叫が聞えた。私はびつくりして
窓の戸を開けて見ると、バブの三倍もある大きな洋犬がバブの頸に喰ひついて無茶苦茶に振りまはし
て、そばの石に、たゞきつけて居た。私は

「あれバブが大變、早く誰かどうかして頂戴」と大聲に呼びながら自分も庭へまはらうとしたけれど
も弟の部屋にあつた、鐵啞鈴が目にとまつたので、いきなり其れを持つて引きかへし、窓から力まか
せに其洋犬の背を目がけて投げつけた。幸に啞鈴は、狙はずれず其犬に命中した、それで少し弱つた
ところへかけつけたぢいやがバブの頸輪に手をかけて無理に洋犬の口からもぎ取つた。バブは口惜さ
うに身を振つて再び相手の犬に飛びかかつて行つた、けれども、其洋犬は、私達の加勢を恐れて、堀
をくゞつて逃げ出した、バブは、もどかしさうに勢こめて堀ををどりこえて後を追つた。さうして私
達が門の外へまはつた時にはもうバブの姿はどこかへ消えてしまつて居た。

家の人達は皆バブの身を安じて幾度も探しに行つた、私もあそくまでいつもの様に窓から闇にむか
つて、バブ／＼と呼びつゝけた。母はバブが又怪我をしてくるに違ひないからと云つて、繻帶や藥の
用意をして待つて居た。二階で書き物をして居る父も其夜は度々下へ來ては。

「バブはどうした、まだかと」心配さうに尋ねた。皆口にくそ出さなかつたけれどもお互に、或る不
安を胸に包むで居る様な重くるしい陰氣な氣分が家の中に漂つて居た、私の胸にも、「もしやバブはも

事考へる餘裕もなく、

「バブお前だらう、やりもしないものを食べてしまつて。ほんたうに。悪い犬だ」と云つてバブの頭をたゝいてやつた。バブはびくりしてとび起きて、前につき出されたお皿を氣まり惡さうに見ながら尾を振つた。私はさうした、甘えた様子が小憎らしい様な氣がして。

「ほんたうにいけないバブだ、罰にあそこへ行つて、立つておいで」と云ふと、バブは、こそ／＼と部屋の間へ行つて、後足で立つた。私は。

「うん、さうしておいで、お前が悪いんだから、こんな行儀のわるい、くせがつくと皆にさらはれるよ」と云つて又本に眼をうつしてしまつた。さうして私の心はいつか無邪氣なセデーの話に汲ひ込れてしまつたバブの事などすっかり忘れてしまつて居た。其れから一時間もたつた頃私はあたりの暗くなつたのに驚いて電燈をつけた、其時不意にバブがクーンクーンとうつたへる様な鳴き方をしたので。ふと氣がついて見ると、バブは、前の通りの姿勢を保つて居た、さうして私の顔を見ると右手を高く上げてゆるしを乞ふ様に敬禮したそれを見た私はたまらなくなりいきなりバブを抱き上げて、

「バブやお前はほんたうにえらいね、私はお前を叱るんぢやなかつたのに、ごめんよ、足がいたかつたらう」と云ひながら幾度も幾度も頬ずりをしてやつた。バブは私の我儘な叱り方や無慈悲なしをさに對して、別に恨む様子もなく、あだかも慈愛に富むだ恩人に感謝する様に私の手をなめたり、胸に、頭をすりつけたりして喜ぶだ、私は其邪氣のない様を見てなほ／＼自分の、はしたない行をはじた、私とバブとは暫時相互に眼と眼とを見合せて沈黙をつゞけて居た。さうして居るうちに私は、バ

途に通る舟小屋の方へ進むで行つた。間もなく私の鋭い耳はかすかなバブの聲をきいた。

『あゝバブがそうだゝ、バブやゝゝゝ』と私は、我を忘れて聲のする方へ走つて行つた、バブは居た。生きて居た。船小屋の中にうづくまつてガタ／＼震へて居た。私はたはれる様に座つてバブの頸にだきついたさうして。

「あゝバブやお前はこゝに居たんだね、うれしいね」と云ふとバブも嬉しさうにクン／＼云ひながら、私の頬と云はず手といはずやたらになめた。私はバブの胸から血が流れて居るのを見て、

「さあバブ家へ歸らう、早く薬をつけなくては」と云つて立ち上つた。けれどもバブはどうしてか悲しげに私の方を見上げて動かうとしない。そばへ行つて抱き上げやうとしても、動かない私はバブの眼つきでバブが家へ歸る事をこばむで居るのを悟つた。全く勝氣なバブとして、おめ／＼こんなみぢめな様子で歸りたくないのは最もの事だ然し此まゝ置けばみす／＼殺してしまふも同様だから、私はいやがるバブを無理に抱き上げた。しまひにバブも、諦めたと見えて溫しく私の胸に頭をつけて居た。家へ着くとバブは私の手から、離れて家へ飛び込むだけでも母達を見ると急に尾をたれてしほ／＼と土間へ入つて、いきなりえんの下へ逃げてしまつた私は今度にがしては大變だと思つて一生懸命によんだけれども、なか／＼出て來ない。母はさづが悪くなつてはと心配してとう／＼疊をおこしたり、中床をはがしたりして、やう／＼バブのきず口に薬をつけてやつた。私はバブの好きな牛乳に砂糖を入れたのを、持つて來てやつたけれども、吞まうともしない。薬をやらうとしても齒を喰ひしばつて居てもどうしてもだめだ。さうして口惜さうに身をもがいて鳴きつゞけて居た。私は負けざらひ

う歸つて來ないのではないかしら」なと云ふ恐れがあつた、けれども私は又バブがあの大さな犬に勝つて勇ましく凱旋してくる様な樂天的の考もあつた。夜床に就いてからももしやと思つて耳をそば立て、居たけれども、とう／＼其夜は雨戸を尾でコト／＼とた／＼音はきこえないでしまつた。

翌朝私は起きるとすぐバブをさがしに出た。空には灰色の雲が重くうごいて、冷い風が野面をかすめて居た、昨夕から降り出した雪はもう止むで居たけれども道には可なり雪が積むで居た。私は弟の黒いマントを頭から、すつぱり被つてハーマニカを吹きながら例の原をぬけて海邊へ行つたけれども、どこもかも眞白でそれらしい影も見えない。私の望の光はだん／＼、うすらいでしまつた、さうして血にまみれたバブの姿や、雪の下に凍えて居る様なことを想像して雪の中に黒いものを見る度に私の胸は波うつた。いくつも犬の足跡らしいものを見つけたけれども皆途中で見失つてしまつてとう／＼波打ぎはまで來てしまつた。こゑをしぼつて、バブ／＼と呼んで見た。答はない。只赤黒くにこつた海がせゝら笑ふ様に私の足許へどうとくだけでは、逃げてゆくばかりである、どこまでも岸にそうて連らなつて居る白い波はへびの様に氣味惡くうねつて居る。物凄い海の景色を見て居るうちに私は、ふとバブが此海の中へ入つたので其れでこんななにこつて居るのではないかと思つた、さうして身震ひして思はず波打ぎはを飛びのいて反對の方面へ歩き出した。雪は再びちら／＼と降つて來た。私はもう一度ハーマニカを口にあてゝ震へる胸を押し／＼づめながらバブの好きであつた、ワルツを吹きはじめた。其輕いをどりの曲は私の暗い心をだん／＼明るみへもつて行つた。私は、バブはきつと生きて居る、もうぢきに私の前へ尾を振りながら、をどつてくるであらうなど考へながら足を早めていつも歸り

家の人達が此不幸な出来事に氣付いて庭へ集つてくるまで、泣きつゞてけ居た。

さうして居るうちに私はふと、日曜學校で教へられた、祈の力などいふ事を思ひ出し、もしやすると神様が自分の切なる祈りによつてもう一度バブを生きかへらせて下さるかも知れないと思つた、私はすぐ自分の部屋へ走つて行つて一心に祈り出した。さうして私は心の中で、奇蹟が必ず行はれる事と信じて、今にも、バブが勢よくかくして、ひざまづいて居る、自分に飛びついてくる事を豫期して居た。けれども遂に私の祈は空しく終つた、間もなく私はばあやに。

「お嬢様バブやに土をかけておやりなさいまし」とよばれた。庭へ出て見るとぢいやは私が植ゑた若い銀杏の木の下に深い穴を堀つて居た。やがて白い布に包まれたバブは其中に入れられた。私はあだかも自分の自由な若い日を葬る様な氣持で冷い土を一握りバブの上にかけた。其れにつゞいてぢいやは歟ですつかりうづめてしまつた。そばに居たばあやは。

「只の犬ぢやねえかつた」といつもの口ぐせをくりかへして眼をしばたゝいた。

「ほんたうに只の犬ではない」と云つた私のこゑは怪しいまでに震へて居た。

此れから後私は二度とあの古城ふるしろの原でバブに聞かせたハーモニカを手にしなかつた。さうして私の魂は日に日に溫い自然のふところを離れてゆき遂に定めない人の心に己の住家を求めつゝ彷徨ふものとなつてしまつた。

のバブの心持を思ひどんなに口惜しいであらうと思ふと一緒に泣きたい様な氣持になつて一日バブのそばに居た。バブは時々物云ひたげに、眼を上げて、ぢつと私の顔を見つめたけれども又すぐ眼を閉ぢて、苦しい息をつゞけて居た。其夜は仕方ないので、其處に寢床をこしらへてやつて私はつかれて居たので早く床に就いた。

翌朝私は眼を醒すとすぐにバブの様子を見に行つた。

私は一目見てはつと立ちすくむだバブの床はからだ。

よくあたりをさがすとバブは庭のすみに、うづくまつて居た、夜中堀りつゞけて居たと見えて、其處は可なり深い穴になつて、あたりに新しい土がまき散らされて居たそれでも、と思つて、そばへ寄つて手を付けると、もう身體は鐵の様に冷めたく、堅くなつてしまつて居た、私の眼からはハラ／＼と熱い涙が落ちた。あゝバブはとう／＼死んでしまつた。あんなに勇しかつた、あんなに強かつたバブは傷ついて死んでしまつた。私は今日きつとバブが、自分に口を開いて私の知らない不思議な話をしてくれる時が來ると信じて居たのに、とう／＼秘密を守つて、永久に沈黙の國へ行つてしまつた。

あゝ可愛いバブよ、やさしいバブよ、私はもう二度とお前の様な、いゝお友達に會ふ事はないであらう、お前と古城ふるしろの原で過した、私の幸福な若い日は永遠に去つてしまつた、此後たとひお前と同じ犬を見出したとしても、もう其時はすでに、私の心にあつた、お前達に對する理解がなくなつてしまつて居るであらう。なぜなら時は刻々と私の胸から、かつてお前の瞳を通してお前の心を讀むだ純な力を盗み去つてしまふもの。私は、何もかも忘れて只悲しさに、泣きつゞけて居た。いつまでも／＼、

述べて居る。

かく見來つた彼は必然的に眞面目さへそこにあればいゝので宗教的情緒を以て超自然的特別なものとはせず人間の本性に潜める「何かあるもの」(こゝに彼は勿論潜在意識を指示して居る)の全反應的作用であると見た。宗教的愛は宗教的對象に向いた人の自然の愛の情緒に過ぎない。宗教的恐怖は普通の恐怖にすぎない。もしも因果觀面といふ考が恐怖の情を生ぜしめる限り恐怖は人の心の普通の震動に過ぎない。宗教的敬畏の情も我々が森の中の薄明に於て或は山の中の峽に於て感ずる同じやうな有機的刺激であるとなし、單なる抽象的情緒を假定する根據は少しもないのであると宣明して居る。

これ明かに因襲的宗教教權の神に對する反抗の矢であつて彼は明かに現代の非宗教的氣分に同じいものをも持つて居るが、宗教的經驗を以て一種の病的現象などゝ見たり迷信だとすることに反して、一般科學者の通弊に陥らなかつたのは彼の偉大を證明するもので、特に醫學的唯物論に

反對したところの如きは、誠に痛快である。

彼は次の如く唱破して居る。

「通例天才が偉大であればあるほど病的のところが大いなのは注目に價する。神經病者は誰でも新眞理の啓示者たり得ないと直ちに言ふのが、自然科學や工藝の分野になると、此方面の著者がその體質神經病的なる事を明かにして著者の説を受け容れまいと思ひつく人がない。宗教上の説に對してもこれと異なる事があつてはならぬ筈である。宗教上の説の價値は宗教上の説に直接加へられた靈的判斷によつてたしかめられるものである。」

かくいへばとて前にもいふとほり決して盲信的因襲的宗教に全く加擔するものではなく原因を明かにすることが必要であるとして、冷かなる智的作用は我々の靈魂の根本的秘密を破つてしまふ恐があるとするものに對してもその然らざることを辯じて居る。要するに彼が神秘的理解を以て忠實に宗教現象を科學的に研究したものととしての功績は今後の宗教學並びに心理學の發展上に於て埋没すべからざるものがあると思ふ。

ジエームスの宗教觀

鈴木龍司

佐藤、佐久間兩君共譯のジエームス氏「宗教的經驗の種々」はよく譯された本である。行文流暢よく原著者の氣持までも表出されたの感がある。私は今これを一讀して所感を述べたいと思ふのであるが、彼の所謂事實命題の側についてはあまりいふの興味を持たないが價值判斷或は靈的判斷の方面に於ては可なりの問題を惹起することであらうと思ふ。現に佐藤君はその序文に於て暗にこれに對する反對の矢を放つて居る。

こゝにジエームズがいかに宗教を見たかといふことがまづ第一に考へられなければならない問題である。彼は神を初めに置いて出立する成立宗教と人を第一に重んずる個人的宗教との區別に於て、神の加護を得るの種々の方法は即ちこれ外部的の

もの第二義的のものであるとして魂と魂との關係人と造り主との關係を最も大切なるものと見たのは流石に卓見である。

さうして彼は神をいかに見たかといふに「神は存在と勢力の點に於て第一のものであると考へられる。神は圓頂廓の如く蔽ひまた圍み神から逃れやうはない。神に關係するものは眞理の點で最初のまた最後の言葉である。されば重要な包圍的な最も深く眞實なものは何物でも此割合で神らしいとして取扱はれるのである。さうして人の宗教はかくして人が第一の眞理と感じた物に對するその人の態度と同一化されるのである。人が第一の眞理と感じたものが何であつてもそれは問はない。」といつて少しでも冗談氣が這入つてはならないそこには嚴肅と眞劍とがなければならぬ。と

化させただけで、或は二つとも同時に變化させることによつて自我と事物は適合して再び結婚の鏡の如く楽しく響き得るといふ。

これは主として精神治療運動の主張するところ及び汎神論的解釋である。宇宙の偉大な中心的事實は萬物の背後にある無限の生命と力との靈である。これ即ち神であつて實に我等の生命そのものである。我等は神の生命を頌ち與へられて居るのである。神は我等を包みまた他の凡てのものを含む無限の靈である。然るに我等は各自それ／＼個體化せる靈であるから、その點で神とは違つて居るが、それでも本質に於ては神の生命と人の生命とは絶對的に同一であるのだ。兩者の異なるはたゞ程度の上の事で本質の相違ではない。性質の相違ではない。

人は自ら無限の靈と一つになり得る程度に於て不愉快を愉快に變じ、不調和を調和に變じ恒忍と苦痛とを溢るゝ健康と力とに變じ得るだらう。だから病的の根元は我等が神と呼ぶ聖なる力から離れて居るといふ感覺にあるのである。イエスの如

く「余と父とは一なり」と感得し肯定し得るものは病を感ずる筈がないのである。

又人は獸的特徴の遺物たる恐怖思想やこれから出て來るところの不幸癡や犠牲癡があるが、かゝる精神状態は誠に笑ふべきいたりて人間の全精神作用が拘束せられ、壓迫せられて、ついには肉體にまでも影響を及ぼし萎縮的になつて居るのであるからこれはたゞ健康によつてのみ救はるべきものであつて健康はこれらのものに無限の神の愛、充實の感を絶えず注ぎ込むのである。とは彼等の主張であるといふ。

然るにこゝに惡は特殊な外界事物とその主體たる吾人との單なる關係ではなく根本的にして又普遍的なあるものであつて害惡とか惡德とかはその根本的性質上環境の變化や內的自我の皮層な整理に依つて癒さるべきでなく、どんなに工夫しても免れない失望であつて運命がこれを規定して居るのであると考へ、超自然的力の治療を要するものであるといふ思想を持つものをも同時に彼は認めて居る。

かくの如く宗教は人性至心の要求にあると見た彼はそれを考察する場合に人性の根本的要求を幸福の希求にありと爲した。而してこれを理想的状態とすればそれに相對する現實的状态、解脱さるべき状態としては憂鬱といふことを以て他の一要求となしたのである。これ心理的の立場と純粹經驗の立場とに立つ彼としては尤もなる宗教研究上の設定であつて、彼はこゝよりすべての宗教的經驗を開展せしめた。

然り而して種々雜多なる人の靈的生活が現はす方面は又非常に多趣多樣であるから、個性的心理學を學ばんとするものは、自分が經驗がない現象だからといふ理由だけで種々の現象に眼をふさぐ程馬鹿な事はないと主張して居る彼は、その幸福と憂鬱との開展に於て自己存在の膨脹的情緒を主とする宗教的樂天主義と、自己存在の收縮的情緒を主とする宗教的悲觀主義とに分ち、軟心派と硬心派とを分けたりと同一の筆法を以て、前者を健全なる心の人々となし後者を以て病める魂とし

た。宗教と悲哀の情緒とを打離し難きものとするキリスト教的雰圍氣の中にありて彼が前者を主としたるが如きは注目すべきであり彼のブラグマチズムはこゝにもその色彩を呈して居る。

この心の傾向の相違は、また宗教の本質とせらるるゝ罪惡の見方に於ても二ツの大きな變化を來す。健全な心は惡を否定する。惡といふ觀念は同體の現實と一致するどころか實際上あり得ない事に過ぎない。現實は惡の病的な排泄的廢物とのあらゆる接觸から脫離してゐるのが特徴であるとし、反省的計算により、世界の惡方面を無視することにより、或は時とすると惡い事が存在する事を全く否定する事によりなどして、世界の悪い方面を帳消しにしやうと合理的生物に促す。惡は一種の病氣である。その病氣を氣に病む事は却つて病氣を重くするとは彼等の常套語であつて惡とは事物との調和がよくない事、環境とその人の生活がよく一致してない事に過ぎないとする。かくの如き惡は自然的段階に於ては少くとも理論上癒すことが出来る筈であるとし、自我や事物何れかを變



白 き 光

伊 藤 寥 々

偉いなるものゝけはひの我が胸に時じくおくる白き光よ
かつ沈みかつへりくだりかつなげき底ひも知らぬ歡びにぬ
あふれ来る甘き涙につかりゐて神をほめまし人をほめまし
神を愛で人をめでつゝ動かさむいたづき愈へしこの身この魂
まことよりいづる光に照すとき何かはものゝ醜くかるべき
秀峰の濃青の衣のさやかに晴れわたりたるあしたなるかな
遠山のひだは仄かにけぶりつゝ晴れにはれたる初夏の空
みどり葉の吐けるよろこびよろこびに酔ひてふるひて起たしめ給へ
二株の苺の前にうづくまるこの嬉しさを何にたゞへむ

これは古來の宗教的傾向の暗示すところであつて根本惡は宗教に止むべからざる設定である。前の考へ方を惡を極少にする方法と見るならばこれは即ち惡を極大と見る方法であつて、人生の悪い方面が人生そのものゝ眞體であるといふ主張、世界の意義は人生の惡の方面を強く心に銘する時最もよく解るといふ考に基くものである。

かくの如く二種の傾向があるにも却らず宗教的經驗に於てはメソヂストより精神治療運動に至るまで急漸の程度の差こそあれ回心を以て宗教の中心的事實であると見なければならぬとしたのはた

しかに宗教の眞を捉へて居る。

こゝに注意しなければならぬことはジエームスの宗教觀はかく事實に忠實なること丈が取柄であつて價值判斷を少しもして居ないことはどうしても不満足だ。これ彼の「宗教的經驗の種々」がある人からは「宗教的經驗のごた／＼」といはれても仕方のない所以であらうと思ふ。もつとくわしくジエームスの宗教觀を批判しやうとならばどうしても他の宗教哲學と比較して述べねばならぬが、それは別の機會に譲ることゝした。

久堅町にて

安井哲著
警醒社書店發行

女史が明治四十二年以後、雜誌「新女界」に掲げた作篇を集めたもの。四六版赤表紙で最も美麗なる装幀を加へてある。全編五十餘品の項目を、説苑、家庭、隨筆、隨感の四編に分類して、教育家としての女史の所説及び訓話、或は偶感に亘つて悉く網羅され、登載されてゐる。女史は世の知る如く、謹嚴なる筆を以つて穩健なる意見をものし、浮華輕躁の嫌なく、其の教育論といひ、女性觀といひ、宗教觀といひ、最も實質に富んでゐる。一部の女學生は既に女史を老人扱にする傾があるが、本書によつて女史の心を讀めば、恰も處女の如く猶ほ逝く春の宵を思ひ煩つてゐると云ふ面影がある。就中、樂しき夏期休暇、アルプス登山の追懷、暹羅の避暑、青年時代の追懷、富士登山の思ひ出などは時節柄好個の讀物であるから、至急女學生諸君に愛讀を薦める。(價、一、〇〇)

胸にきざんだ響きに似よつて居たつた。クレオバ殿はあのお方のお聲を胸に止めては居なかつたか。

クレオバ あのお方といふと先程の旅人の事かな、私は格別いらう耳にも止めなんだが。

ル カ いえ、あの旅人ではない、主様のお聲さ。

クレオバ それは聴き覺えないことはない、えらう美しいお聲じやつた。

ル カ そしてあの美しいお聲が、先程の旅人の聲のどこやらに似て居た様ではなかつたかい。

クレオバ 何の事をいふかと思ふたら、また其様ならちもないことを。

ル カ そして旅人の瞳は、ぢゅつと人々を見つめなすつたあのお方の瞳をつくりでした。クレ

オバ殿はそうは思はなかつたかい。

クレオバ それはさ、同じ人間の瞳のことだから、大した相違はなかつたらうと思ふよ。

ル カ あのお方が物言ひながら、やさしくぢゅつと私達を見入つたあの瞳、たとへば秋空に清

い星がまたゝいてる様に……私達は、あの瞳の中に、あのお方の深い深い思わくを讀んだのでした。何時も何時も、優しい愛情が漂つて居りました。それが……その瞳が、あの旅人の瞳の中にも見えただのです。

クレオバ その様なことを云ふならば、眉の黒いの、鼻の高いの、口の一つの、誰も誰も似て居ようがな、あの見も知らぬ旅人に限つたことではないわい。

ル カ クレオバ殿は、無下にその様なことを云ふて私をさいなむのでもあらうが私は如何も不思議な事だと思ふて居る。それにどうやら今朝方の噂も氣にかゝるので……。

クレオバ まだ馬鹿な……多分其様なことを云ひなさるだらうと思ふて。

ル カ クレオバ殿、墓石の轉げて居たと云ふのは……。

右手に輕き足音、人の來る氣合

ル カ あ……あれはあのお方だ、あのお方の足音だ。



戯曲
復活の日

菅野 笠夫

時は紀元三十年代耶蘇の刑後三日目、エマオといふ猶太の一小邑の一家に起りし出来事、凡て猶太風の裝置ある一室

クレオバ(五十位)とルカ(十七、八)と相對して椅子に倚る中央にテートルを置く後にマリヤ(三十位)見知らぬ旅人(同年位)エルサレムよりの使者

クレオバ 何處へ往つても同じこと、人々は悉皆^{みな}逾越^{えいし}の祭に忙^{せわ}しないことだ、唯、不幸な私等^{わしら}だけはかうして一人二人と散々^{ちりく}に都をさけて人目にも觸れぬ里^{さと}へ出ねばならない。もうこんな悲しい日が三日續くのだ。之から先、私等^{わしら}の生命^{いのち}のある限り續けなくちやなるまい。おいルカよ、私は老先^{おひさき}も短いことだが、お前などはこの先、永い年月を、

肩身逼く渡るのだと思ふと、ほんに不憫でならぬわい、私のヤコブも、この先日蔭者で世に出る時もあるまいかと、情なくなりますよ。

ルカはクレオバの語をきくが如くきかざるが如く深き思ひに沈み居る、

ルカ(獨白) 如何も先程の旅人は普通の人ではない様だ。

クレオバ まだ其様な事をいつて居るのか。何を其様に夢見てござるのだ。

普通の人でなければ誰だといふのだい。見も知らない旅人に出逢つたからといつて、それが普通の人でなかつたら、世の中は悉皆普通の人でない人になつて終はにやならぬわい。

ルカ あの物言ふた聲の響きもどうやら私^{わたし}の

ル カ あれ……あのお方のお聲がする、お聲が……お聲が……。

ふら／＼と立ちて歩み戸外の物音にきゝいるが如し、マリヤは恐れて驚きの表情にてルカを打ち見まもる。

クレオバ 何もさこえては來ないよ、困つた者だ、もつと落ついて居てお呉れ。

マリヤ 何の聲も聞えません様でしたわね、どうかなすつたのじやなくつてルカ様。

ル カ あれ、あの主様のお聲が聞えませぬか、あれあのお聲が。

一しきり聲をたづぬる者の如く暫らくにして椅子に倚る。

マリヤ (氣づかはしさうに) ルカ様は何時からこんなにおなりなさいましたの。

クレオバ 何時からといふて、まあ此處へ來てから急に……そうじやつたね、かうと……そう／＼、今朝方あのマグダラのマリヤが、油と香とを持つてなラビのお墓をたづねると、墓の入口に置いた大きな石が轉^{ころ}げて、中の屍^{かばね}が無かつたといふ話を私等^{わたくし}に取ついた者がある。

マリヤ え、何でございます、あの主様の屍が

なくなつたのですつて。

ル カ 主様は復活^{よみがへり}なさつたのでございます。マリヤ 主様の復活ですつて。

クレオバ その様に早合點されては……たとへラビの屍が失せたとして、それは誰かの仕事^{しわざ}かも知れぬ、それローマの兵卒のな、若しくはあの祭司奴等の。

マリヤ それからペテロ様やヨハネ様は如何なさいましたの。

ル カ 私^{わたし}はあのお方達の確^{たしか}なお話をきゝたいと思ひましたが。

クレオバ 私もそれを思はないでもなかつたが、何せえ其噂^{うわさ}がバツと廣がると都中はまるでローマの兵卒と、あの祭司奴等の鷹^{たか}の様な眼で、それもならず都を逃げ出さねばならぬ様な次第、ペテロもヨハネもマリヤも如何^{どう}なつたか心もとないことじや。

マリヤ (獨語) ほんに主様が復活なさいましたのなら……主様が……。

ル カ (獨語) 吾は甦^{よみがへ}なり生命なり……復活！

夢遊病者の如く戸際に立ち寄る。此時軽く戸を開きてマリヤ入り来る。ルカは見境もなく半ば其身を投げかけて僅かに氣付き、いたく失望の體マリヤは輕き驚き共に椅子に倚る。

クレオバ これは如何したことで、あんなりの上氣様じやな。

マリヤ まあほんとに如何なさいましたの。

クレオバ ルカがきつうラビを慕ふて、少し取り上せた様な、其方の足音をきいて、ラビがお出でなすつたのだと、早合點して飛び立つたのだが。

マリヤ (驚きを續けて) ラビではなくて、妾でしただから失望なすつたといふのですね。

クレオバ それに先程から……いや此處へ来る途々も、何や彼やその事ばかりで私を困らせて居たのだ。そりやそうもあらうが、詮ない事じや、その様にして居たら末が如何なり行くのかと、私は唯その事許りが案じられるでなマリヤ。

マリヤ 妾は、主様の十字架を後ろに、暫しはエマオの寂しい里に、世の中の様子を見ようと存じやして、あの日暮に都を脱けて参りましたが、主様のご最後の様子やら、其後の兄弟姉妹の有様

やら、心にかゝつては居るにも居られず、さればといふて出るにも出られず、一人惑ふて居りましたら、突然のお訪問で、妾は夢かと存じほんに何からお尋ねしたら宜しいのでございませう。

クレオバ 私等も刑場へは参らなんだが、都の騷擾といふたら、噂にきくチウダやユダの騷擾の時の様じやつた。

マリヤ 主様もとう／＼酷たらしい十字架で果なされましたとな。

ルカ ヨハネ様の話には、多くの兵卒や祭司共の侮辱をお受けなすつたと。

クレオバ 「神の子メシヤは十字架より下りよ、さばば吾等も信ぜん」と雨の様に降る嘲罵の中で。

マリヤ その中でとう／＼お果なされましたか……

クレオバ それがさ私もそう思はぬでもないのじや、眞のメシヤであつたら、若しや十字架にも打ち勝ちなすつて、世界中を驚かす様なこともお出来だと、そしたら私等はどうな鼻が高いことじやつたか。

私は先程の見知らぬ旅人が、如何やら主様の様に思はれてなりません。

マリヤ（驚きの態度）ルカ様あなたは主様にお逢ひなさいましたの。

ルカ 都から此處へ来る途すがら見知らぬ旅人と連になりました。そのお聲やら、ご様子やらのお言葉つきまでが如何やら主様そつくりで、私の心は跳りました。クレオバ殿、あの旅人は何とかいふたではありませぬか。

クレオバ 「汝達は何をその様にお互に哀しそうにして談し合ふのか」といつたな、で……

ルカ そしたらクレオバ殿がいふには「ナザレのイエスの事でございます、此お方は神と人の前に大なる能ある豫言者でございました。そのお方が祭司長と、有司者等のために十字架にお果なされました。私等は此お方こそイスラエルをお救ひなさるのだと信じました」とこの様に。

クレオバ それから今朝方の噂まで残らずその旅人に話したのだ。そして、此處の前まで連であつたが、ついこゝで別れてしまつたのだ。

マリヤ その旅人といふ方が、どこやら主様に似て居らつしやるのですかルカ様。

ルカ 私の眼には、あの旅人の何處にも主様のお姿が残つて居ました。それにお別れしようとする時仰しやつたお言葉は、何でも主様でなくては仰しやらぬお言葉でした。……あれ足音が聞えます 主様の足音が……あなた等には聞えませぬか。

マリヤ 妾にもその様な心地がいたします。

ルカ 主様……主様……主様でございますか。

クレオバ（獨語）私の耳には何も聞えぬ様だが、ひよつとラビが復活なさつたのなら、あの見知らぬ旅人がそうであつたのかも知れない。

一同暫時沈黙

マリヤ そして其旅人の仰しやつたといふ言葉は。

ルカ それは「信仰薄き愚かなる者よ、キリストは難の後榮光の位に座すべきではないか」とあの何時もの美しいお聲で仰しやつた。

復活！

クレオバ (獨語) 中々其様なことが、私は五十年この黒い眼で活きて來たのじゃ、どの様な噂があらうとも、實のラビをこの黒い眼で見ぬかない上では、どうして——承知は出來ない、たとへペテロが何と云はうと、ヨハネが何と云はうと私は私だけの考があるで。

マリヤ 墓石が轉がつて主様のお身體が見えな
いといふのは全くてございますか。

ルカ それこそ此の首にかけても。

クレオバ それが私等のこの眼で見たいといふでなしな、マリヤの見たいといふ話を又他の人から聞いたので、いはゞほんの噂さばなしに過ぎないのだ。

マリヤ ほんの噂ばなしにしましても、その様なことが影も形もない處から降つて湧いた様に、云ひ出される筈はありませぬひよつとしたらやつぱり主様が、死の床からお醒めなさいましたのかも知れません。

クレオバ これマリヤ、そちまでか其様なことを

いふて呉れては困るわ。

マリヤ それにしても何となく心のせかるゝ様な、若し主様がほんに復活なすつたのでしたら、世界中は悉皆主様のご前に跪づくでござりませう。

ルカ そしたらあの謀反人共は、みんな外の暗きに追ひやられて、そこで悲しみ齒齧みするだらう、主様は王座におつきなさつて、ヨハネ様もペテロ様もみな万歳だ、万歳だ。

マリヤ そしたら妾達はどの様に嬉しうござんしよ。

クレオバ その様な時が私は來なければならなかつたと思ふが、さてもう時が過ぎて去つた。

ルカ でも、今朝方は主様のお墓が自然に開いたではないか。

マリヤ してお身體が失せたと仰しやつたてはありませぬか。

クレオバ それはさ、通り一篇の噂話に過ぎないといふのじゃに。

ルカ いやそんな筈はない、そんな筈はない、

りませぬ、先刻は折角のお言葉ではござりなした
が、先を急ぐ旅故に、一旦はお斷り致して見まし
たものゝ、又何となく暮れ往く空が氣にかゝり、
それに何ぞ都の噂など、さゝ過ぐすも本意ないと
存じ、一夜のお世話になりたくて、あつかましく
立ち歸つたのでござります。

マリヤ 主様あなたは謙遜して居られます、ど
うぞ吾こそキリストと仰しやつて下さいませ。

ルカ たとへ主様が、ご自分からお名のりな
さらずとも、主様は主様に違ひはござりませぬ。

クレオバ (獨語) ラビが『飢えたる時に吾に食を
與へたるか、渴ける時に吾々に飲ませたるか』と
仰しやつた事があつた。ひよつとしたらラビであ
るかも知れないわ……(見知らぬ人に) あなたはほん
とのラビでござりますか。

見知らぬ男 之はしたり、あなたまでが……私は
どうすれば好いのだらう。

クレオバ (獨語) いや／＼私は信じまい、この私
の黒い眼が確と見定めるでなければ信じまい。

ルカ 主様に榮光あれや。

マリヤ 吾主様に榮光あれや。

見知らぬ男 之は何としようもござりませぬ、私
は唯の旅人に過ぎませぬ、通りすがりの旅人にす
ぎませぬ。

此時あはたどしく一人の男入り来る、一同戸口に注意す。

男 私はエルサレムよりの使者でござります。

クレオバ エルサレムからの使者？。

男 はいペテロ様からの使者でござります。

ルカ ペテロ様からの使者？。

マリヤ そして其用事は主様の事でござりませ
う。

男の話の間に見知らぬ旅人は靜かに退場す一同氣づかず。

男 天使がペテロ様とヨハネ様に現はれて「彼
は復活つてガリラヤに往きぬ、汝等彼處に往くべ
し」と申されました。でペテロ様を始め皆様は直ぐ
とガからリラヤへお立ちでござります、どうぞ後
直ぐにお出で下さる様との申し狀でござります。

ルカ それでペテロ様や皆様は疾うにお立ち
なすつたか。

男 はい私の出る時に、其用意に忙しなうござ

クレオバ (獨語) 馬鹿な私にも似合はない事じやつた。この眼に確と見定めぬ限り、私は信じないのだ。たとへ其人がどの様な話をなさつたにしても、私には信じられないのだ。

此時右手に足音の近づくきこゆ、三人同時に顔見合す。

ル カ 主様だ……主様だ……主様だ (戸口にかけよる)

マリヤ 妾にもどうやら聴き覚えのある足音の様ですわ (立ち上る)

クレオバ たとへ足音が似て居つても私は信じられない。

戸靜かに開きて旅姿の見知らぬ男入り来る。

マリヤ あれ 主様が…… (跪きて見知らぬ男の足を抱く)

ル カ 榮光は吾主様にあれ (立ちたるまゝ見知らぬ男を抱擁す)

クレオバ 私には信じられない、此私の黒い眼が承知しない。

見知らぬ男

私はどうして此様な歡待をお受けす

るのでせう、全く見も知らぬ旅人でござります、唯都から道連になりました丈けに過ぎませぬ。

ル カ やつぱり主様でござりました。主様……あなたは墓と死とに打ち勝ちなさいました。

マリヤ 榮光は吾主様にあれ、妾は一目でまがひない主様と信じます。

クレオバ あい、私は信じまい、どうして……信じてよいものか。

見知らぬ男 之は近頃迷惑至極でござります、どうぞ其様な恐れ多い事は仰しやらず。

ル カ 主様……勝利の……主様。

マリヤ 吾が主様……神の子なる主様……

見知らぬ男 (クレオバに) 之は又どうした譯でござります、全く私は知らぬ事でござります。

クレオバ 私は信じまい、私の眼の確と認むるでなければ信じまい。

ル カ ほんに死とよみに打ち勝ちなさいました榮光の君様

マリヤ 榮光はあなたにあれ。

見知らぬ男

私は其様な祝福を受くべき者ではあ



瑞西より

廬 山 生

ウーシー

ロザンヌの町を下つてジュネバ湖畔に臨んだ町をウーシーといふ。元は獨立した町であつたのだけれどロザンヌの町の發展するに従つて、町つゞきになつてしまつたといふことである。大きなホテルや、私立の塾の並んでるアヴニウ・ド・ウーシーの靜かな並木路を下りてゆくと波止場に出る。湖に臨んで昔の城の名残をとめてるのがホテル・ド・シャアトウといつて、昔は舊教の僧正の別荘であつたとやら、今は近代式の宿屋となつてゐる。其前の廣場の片隅に今では外の大きな宿屋に壓倒されて餘り人目も引かない宿屋がある。ホテル・ダングルテールといつてバイロンが假寓してゐた宿とい

ふので名高い。其ならびに樹木の鬱蒼と生ひ茂つた庭の中に王侯の官殿ともいひたい一構がある。ホテル、ボー・リヴァジユといつて、ロザンヌ第一のホテル斷えず外國の貴賓が宿つてゐる。近年伊土戦争の講和談判をやつた所として人に知られてゐる。波止場の石垣に沿ふてホテルの前を東にゆくと美しい並木路の中央には花壇を設けてあつて、ホテルに並ぶ金持の別荘の庭の一部分とも思はれる様に手入がしてある。石垣に倚つて湖を眺めると、瑞西の湖の中で最も清澄といはれてゐるだけ、碧玉の様に透明な水の上に白鷺と鷗がいつも餌をあさつてゐる。鷗は人に馴れてゐてパンの屑を投げてやると巧みに空中にあつて啄む。日曜などには子供をつれた人達が群れてゐて却々賑やかで

りました。今頃は餘程参つたことでござりませう。

マリヤ あのマリヤ様も御一緒にござりませうね。

男 はいさ様でござります。

クレオバ 私は信じまい、此の私の眼が確と見定めるでなければ信じまい。

男 私の用事は之ですみましたお暇いたしたう存じます。

ル カ 私達も直ぐと出立しようと思ひます。

マリヤ そうですわねガリラヤ ガリラヤ。

男 退場す同時に一同見知らぬ人の姿なきに氣づく。

マリヤ あら！。

ル カ あの方はい！。

クレオバ 旅人は！。

三人互に驚駭の眼を見はつて各何事かを云はんとす。

幕

□米國に學んで第一に最も氣持の好いとは、學長とか教授が如何にも親切で親しみ易いことである。充分英語の談話など出来なくても、先づ暖かな態度で此方の心にゆとりを與へて呉れる。之は日本の學生が内地では到底實驗し得ない點だ。

□或時ハーバートに來て居る日本の一學生が或教授を訪問に行つた。途が分らなくなつたので丁度通りかゝつた一老翁に其教授の家を尋ねた。老人は親切にも一所に行かうと其番地まで行つたが其教授は已に他に移轉して居つた。老人は又も此未知の青年を案内して遂に教授の宅まで送り届けた。後で其教授が學生に向つて今の老人を知つてゐるか尋ねた。彼は勿論否と答へた。教授は笑つて彼こそ當大學で有名な米國隨一の哲學者ロイス教授であると教へて呉れたので、學生は今更の様に驚いたといふ珍談がある。以て彼等教授達の人格がしのばれるではないか。

—— 今岡氏の談話から ——

西洋との差があつて、堂々たる石造の家の並んでる所は茅ぶき屋根に比べて趣味がないともいへやうけれども町はづれの村でも赤いスレート葺の家が散在してゐて、田畑の代りに牧草の年中青々としてゐる所は又別様の美しさをもつてゐる。ボートに棹さして湖心に出ると少時はすき透つた碧色の水を透して深い／＼底を見ることが出来るが、すぐに底は見えなくなる。最も深い所では一千尺以上もあるといふ。湖上には斷えず蒸汽船が往来してゐて夏は殊に頻繁である。可哀想に此夏は折角遊覧の時季となつて戦争が始まつたので、變つたばかりの時間割がすぐ變更される。ウーシーの波止場では、幾度か召集されてゆくフランスの豫備兵の悲痛な別れ的一幕を見せられた。

ジエネバ湖畔の名勝はいく度となく歩き廻つたが飽くことを知らない。更に稿を改めてかくこととしやう（此稿前回と多少重複せるやうに思はるれど草稿を有せざるを以て訂正するに由なし讀者の諒承を乞ふ）

カフエー・サントラル

ロザンヌの町の大體の様子は書いたつもりであるが、さてロザンヌの生活を知るにはカフエーの模様をかくのが一番捷徑であらうと思ふ。カフエーも澤山ある。又大きなホテルの喫煙室でもカフエーと同じ様な設備をしてある所がある。殊に近來タンゴターなど稱して、タンゴ踊をやりながら御茶の會などもあつて時としてホテルの方が賑やかな事もあるが、戦争以來夜は十一時に閉づることになつたけれど、兎にも角にもいつも中流以上の人の集つてゐるのは、町の中央に並んでるカフエー・サントラルとオールドインディアとよぶ二つのカフエーである。オールドインディアの方は近代式の頗るハイカラな建物であるけれど規模が小さいので、先づカフエー・サントラルにはいつて見よう。

一體カフエーはドイツ人獨特の趣味風尚に基いてる者で、巴里へ行くと大分趣を異にしてるといふ事であるが、このカフエーも已にベルリンあたりのとは違ふ。勿論ベルリンの大きなカフエー

ある。

さて湖の彼方には屏風の様に圍む山々、東の方にはヴァレーアルプの連嶺、突亢として鬼の如きはロツシエー・ド・ネー、其下の湖畔に沿ふた町はクララン・モントリユ、其先にはバイロンの詩に名高いシランの城もほのかに見える。晴れた夜はモントリユから其背の山の中腹にある、グリランやコーなどのホテルの燈火が畫の様に美しい。東南の隅はローンの河谷が湖に開く所であつて、其右にはサヴァアルプの連嶺が蜿蜒として對岸まで延びてゐる。其ローンの河谷に寄つた所にサン・ジアン・ゴルフといふ畫の様な町がある。之が瑞西と佛國との境界で西の方ジュネーヴに至る。對岸は佛國領となつてるのである。ロザンヌの丁度向ひ側に當る所にエービアンといふ小さい町がある。温泉があるので其附近の小さな村々と共にパリやリランの人が避暑にくる。こゝからジュネーヴの方面には低い丘陵がつゞいてゐて、景色は東南の隅に比べると遙かに平凡であるが、夕日の落つる頃は捨てられぬ眺めを呈する。

さて瑞西の方の側ではロザンヌから右の方にはいくつかの入江が出たりはいつたりしてゐて、昔サボア侯の暴威を揮つてゐた頃は戰艦常に帆檣を並べてゐたといふことであるけれど、ポプラーの木立の蔭を湖に浸してゐる平和な景色は水畫にでもかき度い様である。船に乗つて少しく出かけるとサン・スルブリスの古寺、モルジュの古城趾などジュネーヴに至る沿岸も却々美しい。其後の方平野を隔てゝ彼方につゞくジュラ・アルプの平凡な連嶺も頂の白くなる頃は又一しほの眺を添へる。東の方モントリユに至る間は丘陵起伏してゐて岡から岡につゞく葡萄畑、其間に小さな村が散在してゐて湖畔に楊の枝を垂れてゐる所は日本の景色を思ひ出さしめる。

波止場にあるボートをかりて少しく沖に出てロザンヌの町を見返ると、横濱といはうか神戸といはうか、一體にこゝの湖は琵琶湖によく似てゐてサボア・アルプの一番高いダンド・ロツシュを見た所は比叡比良の峯を思ひ出させ、ロザンヌはさしづめ大津といふ所だけれども、茲に日本の風景と

ヤ人に似てどこかま／＼したセルビア人、ブルガリア人、ぎよろ／＼した目付をしたアルメニア人もゐる、土耳古人もゐる。例のアルバニアの勢力家エサツトバシヤの息子などはこの御常連である。其外鬚髯漆の如く黒いエチプト人、時としては黒ん坊を見ることもある、女では立派な風をしてどこか下女じみたドイツ人、餘りけば／＼しい風をして恠しい女かと思ふ様なフランス人を初め、男ほどはつきり區別は出来ぬが兎にも角にも人種の展覽會といつた有様である。

このカフェーに一人名物男がくる。いつもきまつたスタンム・チツシユに七八人の學生とウイスキーをちびり／＼飲んでゐる、夫れは警察科^{ポリツシヤンツライク}の大家ライス教授である。警察科學とは指紋法とか寫眞とかで犯罪を科學的に研究する學問で、元巴里のベルチロン教授から傳へられた新しい學問である。獨立した一科としてはこゝと巴里とブタペスト、夫れから此頃ドイツ人に破壊されたルザンの大學にあるばかりで、殊にライス教授は世界に名を知られてゐるので、凡そ世界の獨立國で

こゝの研究室に留學生を送らぬものはない。「日本人だけはまた來たことがない」と謂はれてゐる。此先生ユダヤ種ではあるがドイツ生れの人であるにもかゝらず、元來どういふものかドイツが嫌で、ロザンヌに住むこと十七年、フランス語は餘り上手でもないがドイツ語は決して使はぬといふ風。現に戦争が始まつて實弟は海軍少佐か何かで出征してゐるにも拘はらず、ドイツの敗北を祈りルザンの破壊虐殺などは我々以上に憤慨してゐる。一時聯合軍の形勢甚だ振はなかつた時分には、愈々聯合軍が敗けるとすれば瑞西もドイツ語領の勢力益益全盛となるに違ひないからフランスへでも歸化しやうといつて、又日本の開戦の報の來たときなどは日本の行動は全然正當であると稱して、近頃では又何故日本は歐洲へ出兵しないかと尋ねるといふ始末である。此頃ベルグラードの露大使、頓死事件やセラジュボの奥皇儲暗殺事件の取調を委嘱されてベルグラードにいつてきたが、歸來いよいよ獨逸の行爲の非なるを確かめてきたといつてゐる。ドイツ人として珍らしいのみならず實にロザ

にある様なすばらしいオーケストラもない。ビール
の大きなコップをあほる人よりも葡萄酒の小さな
杯をちびり／＼とやる人が多く。カフェーよりも
茶といった様な譯。其外どこと判然とした區別
はないが、ドイツ人はどことなく眞にカフェーの
無爲な生活を樂しむといふ氣風があつて、自分の
家の電燈や暖房を儉約するためだと惡口をきく人
もあるが、夫婦づれなどの人が一杯か二杯のビー
ルをのみながら二時間でも三時間でも合奏をさい
てゐる。之だけはあのがつ／＼したドイツ人の性
格には不思議なことであるが、あながち惡口家の
いふやうな譯でもなし習性となつたものと思はれ
る。こゝにもさういふ呑氣な連中は無い事はない
が、一體に實用的のみ度いものを飲んで少時音
樂をさいたら歸るといつた様な風である。従つて
又ベルリンの様に恠しげな女の出没するカフェー
といふものはない。

さてこゝのカフェーに特有な事は殆んど全世界
の人種を集めてることである。試みに知る人とカ
フェーサントラルへはいる、其又知人に逢ふ、夫れ

から夫れと終に一つのテーブルに集る、時として
は十人が十人盡く國藉を異にしていることがある。
先づにやり／＼と笑ひながら折々いやな目付をし
て人の話をきくドイツ人がある、手を振り首を動
かし喋々として語るフランス人がある、同じフラ
ンス語を話してもフランス人の様に玉を轉ばす様
な流暢な所がなくて、着物のきこなしやら何やら
どことなく田舎ものじみてゐるのは佛語領瑞西の人
間（獨逸語領瑞西の間は更に一層田舎ものじみて
ゐる）、我關せず焉とすましこんでウイスキーソー
ダーを飲んでゐるのは英國人、髭のないどこやら嫌
味のある顔をしてゐて女に馬鹿鄭重なアメリカ
人、酒と女の話以外には興をもたぬ和蘭人もある、
どことなし亡國の民といつた様な陰のうすい西班
牙人もある。西班牙人に似て一層東洋的な南米ア
ルゼンチン、ブラジルの人間も却々多い。ロシア
煙草を吹かして嘯々笑ひ興じてゐるかと思ふと急に
眞面目な議論をやり出すロシア人も多い。喧嘩し
てゐるのかと思ふ様な話振のイタリア人もある。ド
イツ人に似てどこかおとなしいのは奧國人、ロシ

自
基督教
講壇

運命と恩寵

馬太傳第二十四章——三一

内ヶ崎作三郎

一

私共が世の中に生活して居る時、眞面目に考へると、どうしても運不運と云ふ者がある。この運不運はどう云ふ譯で存在するか。或る人は金持になり、或る人は貧乏人になり、又種々の事よりして出世する人あり、失敗する人あり、種々違つた現象が起る。何の爲めに運不運があるか、何故平等に出来てゐないか、千變萬化するか。更に達觀すれば、何の爲めに草木花鳥があり、山があり、水があり、雲が有るか。何の爲めに其の様に運不運があるか。是に就て日本や支那ではどう考へたか。

支那人は昔から陰陽五行を以て人の運命を解釋して來た。近頃日本には姓名判斷と云ふ者が流行

する。何でも人間の運不運は其の姓名によつて定まる、だから運の悪い人は姓名を變へれば好い、と云ふのである。是で見ても不運を幸運にしようとする努力の非常に強い者である事が分る。何故に日本の神社佛閣が繁昌するか。頭が悪くて人並の活動が出来ないから治して戴きたい、金が無くて困つて居るから一と儲^{モウリ}さして下さい、と云ふ様な人間が多いからである。我々は是等の善男善女に同情するけれども、唯神や佛に願を懸けたゞけでは到底立派な運者となることは出来ない。陰陽や家相の説だけでは我々に満足を與へない。

しからは普通の佛教信者はどう考へてゐるか。因果である。因果應報と云ふ事である。前世で十善を行つた人は現世では國王となつて人に尊ばれ、現世で惡事を働く者は來世では畜生となつて

ンヌの名物男として紹介するに足ると思ふ。

要するにロザンヌの生活はインテルナショナルといふ一語に盡きてゐるが、外で見られまいと思ふのは外國人が外國に來てゐるといふ風がなくて殆んど共和政治的に此町の一市民といつた風に振

編輯の後

□本號に「型と思想」を書いた木村久一氏は心理學專攻の學士で目下青山女學院聖學院神學校等に教鞭を取らる。次號には奇蹟の心理に就いて興味ある論文を書かれる約があります。

□ハーバート留學中の今岡氏が夏休の間一時要件があつて歸省されました。次號にはマサチュセツツ州における自由基督教に就て書かれる筈であります。序に同氏は本月廿五日服部博士と同行して再び渡米される筈です。

□本號に「近代人の宗教とトルストイ」を書いた石田氏は帝大文科で美學を專攻し、トルストイの藝術觀といふ論文を提出し去月十日卒業されました。今後本誌に寄稿される筈であります。

舞つてゐることである。金持などの別荘を構へて殆んど永住してゐるのも少くない。一體瑞西はどこへいつてもさうであるが、恐らくロザンヌの様にインテルナショナルの所はあるまい。

□岡田氏の英文「吾が斷片」は姉崎博士がハーバート大學で日本の現代思潮講演の際紹介された處、非常な興味を以て歡迎され、御持合の部数は忽にして希望者の占領する所となつた相です。尙本社では米國書肆の注文に應じ同書の上製を送らんとする計畫中です。

□吉田氏は九月から早大で英文學を講演される筈ですが、講演題目はロマンチズムとルネッサンスだそうです。此夏は何處にも行かれず専心其御準備中です。

□内ヶ崎氏は九月頃「人生日訓」を圖書會社から、歐洲戰爭の文明批判」を警醒社から出版される。

□鈴木龍司氏は九月頃論文集「思想と生活」を警醒社の近代思潮叢書から發行される。

を知らねばならぬ。或る人は秀吉となり、或る人は家康となり、或る人はナポレオンとなる。又或る人は釋迦となり、或る人は孔子となり、或る人は基督となる。けれども萬人が皆さうなる事は出来ない。だからあきらめねばならぬ。けれども中々あきらめられない。どうすれば好いか。

二

伊東仁齋曰く、「人各々能あり、不能あり、我孔明たる能はず、孔明我たる能はず」と。孔明は人も知る三國志中の花形役者であつて、其の熱誠は前後二篇の出師之表となつて幾多青年の涙を流さしめる。彼の英雄的生涯は詩人晩翠に歌はれて「星落秋風五大原」の悲曲となつた。彼は實に支那四千年の歴史に類を求め難い大人物であつたのである。人男子と生れて孔明の如き男性らしい一生を送りたいと思ふのも無理のない事である。けれども、諸君、東漢亡びて後今に幾何の年月を経たか。臥龍の岡、赤壁の流、全て是我等の前に無いのである。我々は實際孔明の様になる事は出来ない。

けれども、カントの「哲學序説」を読み、ダーウィンの「種原論」を繙く我々を、彼の孔明は眞似ることも出来なかつた。由是觀之、我カイゼルたる能はず、カイゼル我たる能はずである。我々は賢不肖の點に於てこそ相互に異つて居れ、皆我たる事に於ては天下一品である。天上天下唯我獨尊は釋迦だけではない。萬人がさうである。此處迄來ると我々は自分の境遇をあきらめる事が出来ると思ふ。

事足らぬ身をな恨みそ鴨の足の

短うてこそ浮ぶ瀬もあれ

夢窓國師

鴨の足が鶴の様に長かつたら其こそ大變だ。其處でお互に他人の身分を羨むには及ばない。人は他人を羨むけれども一體世の中に自分で満足してゐる人があるだらうか。富豪や高位顯官に在る人は金に不自由はなし、人からは尊敬され、大層幸福な様に見えるけれども、實は年が年中心配が絶えない。そこで

天地に受けし誠をそのまゝに

咲きてはしほむ朝顔の花

室鳩巢

人に虐げられる。此の考へは必ずしも間違つてゐるとは云へぬ。物は因果によつて動く。因果經に所謂「欲知過去因見其現在果欲知未來果見其現在因」とは聖書に「善樹は善果を結び惡樹は惡果を結ぶ」と云ふのと異らない。我々はまるきり之を否定することは出来ない。實際世の中の事多くは前世の因果と斷念する外はない。然し誰でもさう諦められる者ではない。此處に於てか煩悶を生じ、此處に於てか世を厭ふに至るのである。次に私は日本の儒者の意見を聞いて見よう。

二宮尊徳曰く、「運とは運轉の運にして、所謂廻り合せと云ふ物なり。夫れ運轉は世界に基して天地に定規あるが故に、積善の家に餘慶あり、積不善の家に餘殃あり、幾回轉するも此の定規に外れずして廻り合すを云ふなり」と。運轉は世界の根本である。そして此の運轉は天地の定規に外れない。この定規即ち天地の根本にあるこの法則を見出したのは尊徳の偉い所であると思ふ。今日西洋の學者は云ふ、吾人の是非とも認めねばならぬ物が二つある、其は生命と法則とであると。斯様に

天地間には大なる法則があつて萬物は之に支配されるのであるから、我々は運不運を以て大體はあきらめなければならぬ。

例へば肉體の遺傳などでも、我々のやうに肥えたる者もあり、反對に瘦せる人もある。其の他先祖が不品行をすれば子孫が弱く生れ、先祖が一生懸命勉強して頭を良くして置くと子孫に學問の出来る者が生れるなど、是皆遺傳である。子孫の身になつて見ると、弱い者は賢い者を羨んで天の不公平を憤るかも知れない。けれども之を先祖の方から考へたらどうで有らう。自分が道樂しても熱心に學問しても其の結果が同じであるなら、之こそ眞に不公平なのである。我々は一身を代表するのみならず、亦先祖の代表者である。我々の中に、我々の兄弟の中に、幾百千年間の先祖が傳つてゐる。世には人相見て飯を食つてゐる人が随分多いさうであるが、人相もまるきり嘘うそとは云へない。何となれば我々の中に祖先の努力習慣等が残つてゐて、其が容貌に現はれるからである。斯様な次第であるから、我々は矢張多少あきらめと云ふ事

るいまか。

又人は心懸一つで自分の運を轉ずることが出来る。故に曰く、「聖人は禍を轉じて福となす。」要するに運不運などは深く氣に懸けるに及ばない、と云ふのが大體儒教の精神であると見てよからう。

三

さて然らば基督教ではどう云ふ風に考へてゐるか。保羅曰く、「我等は患難にあることを誇りとす。蓋し患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずるを知ればなり」と又希伯來書第十二章に曰く、「また予に告ぐるが如く告げ給ひし言を爾曹忘れたり。曰く、我が子よ爾主の懲治を輕んずる勿れ。其の譴責を受くるとき心を喪ふ勿れ。そは主その愛する者を懲め、又すべて其の納る所の子を鞭てり。なんぢら若しこの懲治を忍ばず神は于の如く爾曹を待ひ給ふなり。誰か父の懲めざる子あらん乎。衆の人の受くる懲治もし爾曹に無くば、そは私子にして實子に非ず」と。諸君、諸君の悲しみ、なやみ、憂ひの大なる程諸君が神の

實子であり、神の寵子である事の證據である。この信仰を持てば人はひねくれなくなる。逆境にある人は兎角ひねくれたがる者であるが、斯う云ふ心境に到れば最う大丈夫である。單に自分の不運を悲しまない計りでなく、他人の幸運を羨み妬む様なことがなくなる。

先日私は或る學生の會合に呼ばれて行つた。其處で私は次の様な話をした。諸君の中には金持の息子も有るだらうが、天地は廣大、米國などには一人で十億も持つてゐる人がある。諸君が十萬や二十萬の金を持つて居つた所が、之に較べれば貧乏人に過ぎない。諸君宜しく貧乏人の子たる自覺を以て學業を勵み給へ。又諸君の中には貧者の子弟もあるかも知れない。しかし乍ら諸君、男性の熱に燃える眞夏の太陽は昭々乎として諸君の頭上に輝いてゐるではないか。太平洋を渡つて來る萬斛の涼風は忽ち諸君の懷中に入るではないか。諸君は天恵の豊かなる點に於て確に富豪も及ばない。諸君、決して境遇の爲めに力を落すことなく、大いに勇氣を揮つて勉強したまへ。」

カイゼルはカイゼルとして咲き、ナポレオンはナポレオンとして咲いてゐる。然し人と云ふ點に於ては誰も同じであつて、我も彼も變らない。即ち達觀すると云ふと差別則平等、平等則差別となるのである。

次に又もう一つの見方がある。其は過去を考へないで現在と未來だけを見る思想である。樂は苦の種、苦は樂の種と云ふ考へである。

苦しみて後に樂こそ知らるなれ

苦勞知らずに樂の味なし

讀者 不知

諸君は今夏季休暇になつて嬉しいであらう。何の爲めに。諸君が試験の時に苦んで勉強したからである。もし情けて試験を受けなかつたらどうであらう。休みになつても決して嬉しい者ではない。ソークラテースが愈々死刑を執行される時、獄吏が來て足の鎖を解いた。すると此の大哲學者が側の弟子等に、あゝ今の我が身程幸福な者はないと云つたと云ふ事である。苦は樂の種ではないか。

佐藤一齋曰く、「人の一生に順境あり、逆境あり、消長の數怪しむべきものなし。余又自檢するに順

中の逆あり、逆中の順あり。宜しく其の逆に處して敢へて易心を生ぜず、其の順に居て敢へて情心を作さざるべし。唯だ一敬以て逆順を貫けば可なり。」順境の中に逆境があり、逆境の中に順境があると見たのが面白いと思ふ。

天理教祖の中山みき子は餘程偉い天才の有つた婦人であるが、此人が次の様な事を云つた。「人は難儀のどん底に落ちぬと難儀の筋道がわからぬ。難儀の底には神の光りが輝いてござるでなあ。」諸君の中には金が無くて勉強が出来ないと云ふ人があるかも知れぬ。其なら金が澤山有る家の子供が學問をするかと云ふに、決してさうではない。金があると油斷をするから到底學問を勵むことが出来ないのである。私の先輩に雜誌などを書いてゐる人が有るが、或る人が「貴下の様な人に金を上げて大著述でもさせたいものだ」と云ふのに答へて「金が有るなら誰が苦しんで本などを書くものか」と云つたさうである。金が無いと云ふ事は逆境には相違ないが、其がために立派な仕事の出来ることを思へば、是れ即ち逆中の順なる者ではあ

我は女たり。曰く、神の恵みに依りて我は日本人たり、彼は米國人たりである。電車の革紐を攫^つんだり、切手を嘗めたりする時、パチルスが我々を侵さないのは神の恵みでなくて何であらう。是を考ふると自力とか他力とか云ふ事はさう明かに區別する事が出来ない。即ち自力則他力、他力則自力であつて、この事は全く我を通じて現はれる神の恩寵である。其故に天地の恩寵に感激して之を有り難いと思はねばならぬ。

一見普通の様な事に有り難味を感じなければ宗教には入りにくい。佛教の四恩を説くのも之がためである。我々は凡ての事に於て神の恵みに感謝しなければならぬ。時には病氣も貧乏も皆是恩寵である。

失敗は苦痛である。けれども失敗して後に初めて眞直な道に來ることが出来るのである。斯う思つて見ると失敗も亦恩寵であつて、決して不運とばかり云ふことは出来ない。次に運命の不可思議なる事に就て二三の興味ある實例を擧げて見よう。

五

今度の大戦争でカナダの一青年が白耳義に行つて傳令使になつてゐた。三日間の激戦で戦友は殆んど皆死んで了つたのに、砲煙彈雨の間を駆け廻つて歩いた自分は、丸がポケットの時計を壊したり、腰の短劍に當つたりしたゞけで擦り傷一つ身には受けなかつた。其から戦争の後で少し休んでゐると、同僚が來て自分の自轉車を借りて行つた處が、忽ちに流彈に當つて死んで了つた。青年は此の戦場の逸話を報じた手紙の後に、今や晩春五月の候、牧場の草は綠に、小川は眞晝の光を受けて銀のやうに見えるとか、又こちらの生籬には鶉が五つの卵を抱いてゐるとか、驚くべき落付を以て自然の美をたゞへてゐる。神わざである、丸が當らうが當るまいが人間わざではない、斯う思つてゐるから彼は少しも取亂さないのである。實に立派な態度ではないか。

先達つて四萬五千噸の巨船ルシタニア號が、獨逸の潜航艇のために撃沈された。有名なる富豪ヴ

「何のその百萬石も笹の露」。これは俳人一茶の豪懷である。笹のつゆが百萬石なら、近頃の五月雨は何千萬石だか分らない。少々奇を衒ふ様ではあるが、此の位の意氣が無くては到底駄目だ。

約言すれば、儒教では禍を轉じて福となすことを説き、基督教では逆境は我を鍊へるのだと云ふ。これで運不運に就ては大體分つたが、唯一つどうしても分らない事がある。

四

何故に今度の様な大戦争が起つたかと云ふことである。けれども是も我々の基督教觀で解釋することが出来ると思ふ。馬太傳、馬可傳、路加傳の或處に於て、基督は最う世の中は不完全な者と斷念してゐる。この不完全な社會の本體は即ち神の國であつて、神の國の來らざる限り地上には幸福がない。基督はこの神の國を來さんがために努力した人であつて、天國は徐々として來るのみでなく、時として忽然として大なる天變地異が地上に起り、其の後から神の國が現はれると信じた。即ち

神の國を來さんがためには世の中は全然革新されねばならぬ。これが基督の時代に行はれてあつた世界終末の思想である。

例へば明治維新には多くの人が死んで社會制度が全然改革されたが之がために明治大正の文明は生じたのである。是は決して黒船や志士の力だけではない。天地の大生命の發現である。今度の大戰亂もこの通りである。人類のあらゆる罪惡を滅し、文明を向上せしめんがための方便と觀察することが出来るかも知れない。

一體物事にはどうしても分らぬ點がある。此の分らぬ物の根本に一つの法則を見出し、徒らに煩悶しないで落付く所に宗教の趣きがある。宗教は倫理に非ず、道德に非ず、寧ろ其以上の者である。

英語改正譯の可林多前書に曰く、“By grace of (God, I am what I am.”之を直譯すれば、神の恩寵によりて我は現在の我たりと意味となる。我今保羅たるは神の恵みに依り、我今基督の弟子たるも神の恵みに依ると云ふのである。何故に男女の別が有るか。曰く、神の恵みに依りて我は男たり、

ふ。我々の今日あるは實に神の恵みである。我々個人の生命を神は天地に溢るゝ恵みを以て守つてくれるのである。

此處に於てか我々は神の恵みに感謝しなければ

ならぬ。人の身を羨むよりも、自分の持つてゐる者を天に謝さねばならぬ。斯様にして天の恩寵に感謝し之を祈り、常に如何なる境遇にあつても感激の生活を送りたいと思ふ。

□夏の空

佐藤 やす子

小ひつじの臥せるがごときしらくものうごきそめたり夏のおほそら。
晴れのこる雲一片もきらゝかにかゞやきてありあさのおほそら。
いさぎよく澄めるみ空を見てあればわが世悲しくなりてゆくかな。
水の面をなむるがごとく走りくる霧おそろしき夜のみづうみ。
夜の闇はわが戸の外に雲のごと押しよせてあり消ゆなともしび。
草も木も小さうなりて石多きみちとはなりぬゆふぐれのやま。
亡き母のしばゝ云ひしわが癪をふとなしいでてかなしくなりぬ。

アンダーヒルト氏は救命帶を纏つて海面に浮きてゐたが、ふと四邊を見ると一人の老婆が今やしたゝかに水を飲んで苦しんでゐた。氏は手早く自分の救命帶を取つて彼女に貸してやつた。氏の天を見上げた顔には聖なる満足のほゝえみが見えたが、やがて天ならぬ千尋の底の父の御國へと沈んで了つた。あゝ慘劇の後の壯美よ。巨船を呑んだ白泡は趾なく消えて、大洋の海風うただ肅々。老婆は助かり、少壯の富豪は死んだ。又この巨船がニユーヨークの埠頭を出發する時折あしく汽車の時刻に後れて乗船しかね、そのために危うき一命が助かつた人も二三人はあるといふことである。同じ船に乗つて居つて或る者は死し、或る者は助かる。不可思議の運命よと云ふより外は無いのである。

馬太傳第二十四章四十に曰く、「其の時二人田に在らんに一人は取られ一人は遺さるべし。」これが運である。之で思ひ出した事がある。或る年の夏、仙臺の田舎で五人の女が鋤をかついで家へ歸つて來た。すると途中で落雷して其の中のたゞ一人だ

け死んで後は皆助かつた。ルーテルは友人と二人で散歩してゐた時、その友人のみ雷に打たれて死んだ。此の時から彼は人生に對して眞面目なる態度を取つたと云ふことである。諸君、何の爲めに二百萬人の東京市民（しん）の中僅々四五人の人のみがベストにかゝるのであるか。而して何故に我々は此の恐るべき犠牲となる事を免れてゐるのであるか。是等の事を思ふと、どうしても恩寵の有り難きを考へずにはゐられない。

使徒行傳第九章に曰く、「彼ゆきてダマスコに近づける時、忽ち天より光ありて彼を環照せり。かれ地に仆る其の時サウロ、サウロ何故我をせむるやと云ふ聲を聞けり。云々。」熱烈なる經驗は往々にしてかゝる實感を伴ふものである。この個人的關係こそ深刻なる宗教信念の根本となるものである。我々の過去を考へると我々は幾度この聲を聞いたか知れない。あの時もう一秒後れたなら自分は電車にひかれたらう。あの時ぐづ／＼してゐたら自分は墮落したであらう。斯様な事を考へ、背中に冷汗を流すのは私だけではあるまいと思

米國研究を旺んにせよ

在紐育 高橋 清 吾

(一) 相互了解の途如何

日米問題は多年の宿題である、之に關する解決策は既に論じつくされたかの如くであるのに、猶ほ未だ其の實際的解決を見る事の出来ないのは甚だ遺憾な次第である。

紛議の原因に就いては色々な説明があつた。何事をも科學的に説明せずんば、措かぬ近來の傾向として、多くの人々は之を政治、經濟、宗教、人種の各方面より議論を立て、居ると同時に、一部の論者間には日米問題は兩國民間の不和に因るにあらずして、一に米國政府者の日本恐怖に因づくものだと云ふ説や、又は日米問題は東西文明の衝突を意味するものと云ふ説などが行はれて居る様である。何れの議論にも皆多少の根據ある事は何

人も疑はない所であらう。

けれども、これらの原因は畢竟兩國國民が互ひに充分了解し合つて居らないと云ふ事實に歸しはしまいか、即ち、兩國民間に縋るミスアングスタンデングがこの問題の眞因でありはしまいか？

ミスアングスタンデングが問題の根柢に横はつて居ると云ふ説は固より今に初まつた事ではないハミルトンメービー、新渡戸の兩博士を初め幾多知名の士は夙に之を力説されたのであつたが、國際問題の常として、國民等は只單に、目前にかゝる事實のみに就いて騒ぐと云ふ譯であるから、この根本に立ち入つた力ある説は何時も學者宗教家の空論であるとして斥けられたのである。

國民等がこの説に耳を傾けなかつたのは或る程

優しき爾の後姿を

北米田中葦城

夕ぐれに

われ自らのことをおもひ、
われ自らのことを爲し、
而してわれ自らのことを、
語るにいそがしかりき。

さわれいまは然らず、
母の訓へを謹聴する幼児の、
ごとくわれは爾の、
みまへに座せり。

終日の勞役に疲れは又も、
わが肉體に降りかゝり來つれど、
爾に頼れるがゆゑにわが、
胸に歡喜は滿つ……。

見えざる爾がみもとに、
ひれふし謙讓を裝へるわが、
心の上にあゝいま、
爾の優しきさゝやき來る。

優しき爾の後姿を、
昨日の夕ぐれわれは彼の、
街の曲り角にて、
見たり。

而していまわがまへの、
崩え出づる小草と、
歌へる小鳥に汝の、
眞姿を再びわれは見る……。

爾の姿にあこがれ汝の、
さゝやきを聴き、而して、
汝と無言にて語るは、
いかにたのしきよ！。

あゝ永遠不滅の愛よ！、
不朽の靈よ！、
天地に漲ざる妙へなる、
汝力よ！！。

(大正四、四、二三)

(四、四、二九)

である。

かるが故に、若し日米兩國民をして充分に相互を了解せしめ、將來に於ける兩者間の親善を圖らんとするならば、我等は先づよろしく、現時の諸制度並びに其の運用は勿論、相互の歴史に就いて一層の研究を進めなければならぬ、が、殊に斯學の専門家、學生等は旺んにこれらの研究を初めて欲しいのである。この研究が一通り出來上がり、兩國民が互ひに相互の國勢を知るに及んで茲に初めて兩國將來のアンピションも判り、かくて、日米交換教授制度の目的とせるシュートユアルアランダスタンデングの理想の如きも活きて來るであらうと思ふ。

(二) 誤解の原因

我等には道德宗教の經典であるバイブルが餘りにファミリアーである、ファミリアーなるが故に日常親しむべき筈のこの經典をば、等閑に附する傾向がある、其處で基督教信者でありながら、其の實バイブルの内容を知らぬ人々が多くあると云ふ事にもなる。

アメリカと云ふ國は日本には餘りにファミリアーであつた、乍併其のファミリアーであつた割合に其の内情は善く知られては居らないのである、況んや日本人の特性として常に歐羅巴かぶれの見地より何事をも早合點し過ぎる結果は皮相の觀察を下して甚しき誤解に陷つて居ると云ふ次第である。

正直に云ふと私などもこの誤解者の一人であつた。日本に居る時に私は色々と米國紹介の書籍を讀み、且つ先輩にも意見を伺つたのであつたが、結局私の心には、次の如き米國觀があつた。即ち米國と云ふ國は元來殖民地であるから、東部地方に散在する英國ビュリタンの子孫を除くの外は概してワイルドなセルフィツシな國民共である彼等の多くは金を儲けるために遠く故國を離れて來た事として租税を支拂ふ事は何より嫌いだである。其の結果は公共團體の負債が年々増大に、トドのつまり將來に於ける子孫の大負擔となるのである又新開地の事である、隨つて婦人が少ない、自然に婦人が威張り出す、風俗も極端に紊れて居ると

度迄無理のない事である様に見える、何故ならば従來の所謂ビースメーカーなるものは文學者とか教育家とか、宗教家とか、多く教學界の人々であつたがために、米國人のアイデアを了解せしむる上に於いては或はこの種の人々が適して居つたかも知れぬが、實際の方面即ち、政治、經濟、社會組織並びに其の運用に關する真相を我が國民に知らしむると云ふ點になると、この種の人々が果して適して居るか否やと云ふ事は問題になる。

固より凡べての施設制度の背景には必ず其の動力たる或る精神が流れて居るものである、而してこの精神を充分アンダスタンズするに非ざれば其の全體を了解する事の不可能なるは言ふ迄もない日米交換教授計畫の如きは蓋しこの精神を兩國國民の間に了解せしめんとする奥深い企てである様に見える、乍併凡そ何事によらず、ある事物を紹介せんとする時には、先づ以て、其の外形よりして徐ろに其の内部に立ち至るべきものではあるまいか、即ち内より外へでなしに『外より内へ』の方法を採るべきものではなからうか？

我が國民の間に米國諸制度に關する知識が普及されぬ間は、幾ら多くの人々がアメリカンアイデアルスを了解せしめんと努めても結局無駄骨折りになりはしまいかと私は思ふのである。

米國の諸制度を研究すると云ふ事は中々骨の折れる事である、例へば米國々家組織に就いて云ふならば、先づ米國人口の要素や、一般の歴史は勿論其の母國たる英國史並びにコロニアルペリオドよりの政治學說、歐洲より蒙つた種々の影響を初めとして、米國政治のゼネラルプリンシプル、米國憲法の性質、各州憲法の性質、各州間の關係、ワシントン政府と州政府との關係、地方自治體に關するアメリカンプリンシプル及び其これらの各部門的研究を爲さねばならぬ。而してこれらの研究は更に其の根柢に立ち入ると米國に關するあらゆる方面の研究と相關聯する事になり、斯學の研究者に取つてさへ決して容易な業ではないのであるから、況んやこの方面に關する知識の比較的に少ない人々がこれらの事柄をも我が國に紹介すると云ふ事になると其の困難の程度は推して知らるゝの

正義廉潔の聲に宜しく、着々として改善の實を擧げて居る次第である。況んや正義、人道を楯とせる輿論が常に人格品性の卑劣な人々を其の公職よりレゾクトする強い力となつて居る事を見るに至つては私は我が國の現状に顧み實に慚愧に堪へないのである。

米國の政治組織は日本のとは全然異なるのであるから、日本のアイデアを以て米國の政治を觀るとトンダ誤謬に陥へる事になる。米國政治のフアンダンタルプリンシプルは極端なる三權分立主義である。随つて立法と行政との調和を圖り、其の責任の所在を明かにするためには勢ひ、政黨に大切な地位を與へなければならぬ事となる、之れ米國政黨政治の他國の其れに比して特殊の意義を有する所以である。更に州政府と中央政府との關係や、地方自治體と州政府との關係の如きに至つては日本式の考へ方では一寸解し兼ねる程の複雑した問題が澤山ある事を知らねばならぬ。

次に米國家庭生活に就いて一例を云ふならば、我等はまた多くの美はしい事實に接するである。

夫れ中等階級は凡べての社會の中堅であり、其の維持者であると云ふ事は多くの場合に於ける眞理である、が、とかくこの社會の事は其の兩極端である上流若くは下層社會の其れ等とは違つて餘り目立たぬものであるから、多くの人々はこれを閑過する傾向がある。けれども我等は常に其の目立ぬ處に社會のコーナーストーンが横つて居る事を知らねばならぬ。米國中流社會の生活は米國々民的生活の基礎である、高遠なる理想と高潔の品性とを有し、常に社會國家に對する責務を忘れざる善良なる國民や、スキートな音樂に親しみ、信仰心深く同情心に富める婦人達が、かの『天には榮え、地には平和あり』と云ふ神の恩寵に浴しつゝ、理想の家庭を作つて居る處は實にこの中流社會の天地である。私は紐育の公園を散歩する毎に何時も乳母車に老人や病人などを乗せて其れを押して歩く人々を見る、初めは僕婢の類かと思つて別に氣にも止めなかつたが、善く聽いて見ると、この人々は皆親子兄弟か若くは其の友人である事が判つた。人情稀薄であるとい聞いた米國も深く索つて

云ふわけである。次に政治上の問題では、何もかも自由、自由と稱して凡べてがルーズである、調査の如きはコンミッションさへ貰へば博賭場の番人もすれば淫賣屋の見張り番にもなると云ふ有様である、凡べてが金で金の費い高で公職にもありつけば利益ある會社の設立も許される。また、外交問題になると何時も米國の資本家が其の黒幕に居つて彼等の利益になる方面のみに外交官や元老院議員を左右する、かの帝國主義の如きも其の大部分は資本家の要求より止むを得ず採つた金力外交政策である、それから米國人の氣風になると、米國人と云ふものは騒ぐ事が好きで、チヨットモ落付いては居ない、餘り樂天的であるから凡べてが浮き調子である、金になる事や自己のためになる事なら、何でもやるが、其れでなければ、ドンナ大切な事でも顧みないと云ふ有様である、彼等は日曜日だけは殊勝らしく教會に行くが、平常は随分不道德な事を平氣で行つて居ると云ふ様な事を考へて居つたのである。けれどもアンダグロサキソン系に對しては心陰かに敬慕し、ナショナル

リーダーやユニオンリーダーにある事柄より以上の理想的人格と家庭とを想ふて居つたのであった。私の持つて居つた知識は随分ブリアなものであつたから、これを以て一般を推す事は固より出来ない事であるが、これに似た經驗を私の逢ふた多くの人々が持つて居ると云ふ事實を發見するに至つては少からず驚かされたのである。日本に於いて相當な教育を受け、更にこの地に來つて一層の研究を續けて行かうとする人々の多くがこんな淺墓な米國觀を持つて居つたと云ふ事は大に考慮を要すべき事であると思ふ。

(三) 米國の眞相は謬見を一掃す

加州に於ける土地問題や日本人冷遇事件並びに在米邦人の現狀に關する事は暫らく之を措き、先づ一般的に米國の内情に觸れて見るならば、我等は通常の批評眼を有する限り日本に居る時とは全で違つた幾多の事實を發見するであらう。

例へば政治の事に就いて一例をとれば、米國政黨政治の如き決して世人が想像するが如き腐敗の甚しきものではなくて、寧ろ一腐敗の起る毎に、

取扱ふのみである。彼等は人間である、罰する代りに教へなければならぬ。罪人である前科者となるんだと云ふ自暴心を起さしむる代りに、ゼントルマンとしての資格を教へ込み、社會に對する責務の大切な事即ち國體に對するレスポンスビリテীর大切な事を知らしむるのが私の主義である。彼等はこゝへ来る前には社會に危害を加へる非國民であつたが、ブリズンを出て行く時には善良なる國民として社會に對するの人々たらしめたい』と。

それから監獄の中を觀たのであるが一切は在監人の自治組織で、監守の如きものは極く少數居るのみである。仕事の事も囚人間の争ひの如きも皆彼等の互選になる委員に依つて決せらるゝ仕組みである。このブリズンの經費は囚人の生産品で間に合はせて行くと云ふ事であつたが、其の目的と經濟との兩方面上に於いて一舉兩得の効果を擧げて居る、オスボーン氏の枝倆には驚かざるを得なかつた。囚人の一人に就いて其の感想を聞くと、オスボーン氏が來てからは煙草も許されば、話

す事も出来る、それから活動寫眞もあれば、コンサートもあると云ふ譯で全て極樂の様なものであると云つて居つた。

けれどもオスボーン氏はレフオームはこれからだと云つて謙遜して居られた。

ブリズンを去らんとした私の心には一種言ふべからざる感想が起つた。私は不完全より完全へ、誤解より融合へと絶えず人類をリフトアップし給ふ進化の神の威烈を感じずには居られなかつたのである。

かくの如くにして米國諸制度に關する一部分の觀察にすらも直ぐ現はれて來るのは所謂善い事ならば何でも採用し、悪い結果はドシドシ改良して行くと云ふアングロサクソンコンモンセンスである。このコンモンセンスは一見ルーズの様に見えるが、其の實凡べてを統一して行く一種ミステリアスな力である。英國はこれがために今日の大を成した。而して米國また、これあるがために世界の樂園と化しつゝあるのである。

勿論米國にも悪い所は澤山ある、けれども悪い

見ると日本に居つては逆も想像すら出来ない美談が澤山あるのである。

それから教育の事になると、米國の親達は勞働者でも一般に其の子供等には高い教育を授けなければならぬと云ふ考へを持つて居るらしく、随つて彼等は粒々辛苦しても子弟の教育費だけはドシドシ出してやる傾向がある。これは教育を以て逆境より順境に轉ずる唯一の手段なりとする彼等社會の確信より來て居る事でもあらうが、何れにせよ日本の社會殊に中流以下の社會には必ず採り入れなければならぬ思想であると思ふ。米國の婦人は善く勉強もすれば修養もする、カレッヂやライブラリーに於ける彼等の研究は茲に喋々を要せない事であるが、更に各種の教會並びに演説、講演會などに行つて見るならば其の參聽席の七分通りは婦人で埋まつて居る事が判る。婦人が凡べての事にインテレストを持つ結果は勢ひドメステックワークのみに埋もれて居つた彼等の生活をして社會公共事業の活舞臺に轉ぜしめる事になる。随つて米國婦人が社會事業に活動して居る範圍は隨

分廣く政治、經濟、社會、宗教、教育、衛生、感化慈善、國際等各方面に亘つて男子と俱に奮闘して居る有様である。日本に居る時には、米國の婦人は一般に虛榮心の固まりで、輕薄で、常に社交場裏にのみ出入して傍若無人に威張り散らして居るとのみ聽いたのであつたが、この地へ來て見るとそんなクラスの婦人は寧ろ問題にならぬ事が判つたのである。

次に監獄の事に就いて一例を舉げるが、凡そ一國文化の程度を判斷する時に必ず取り入れなければならぬものは監獄事業であらう、何故なら、この事業の裏に流るゝスピリットを了解した丈けでも其の國文化の進度が略ぼ判ると云はれて居る位であるからである。私は紐育州の重罪囚を收容してあるシングシングブリゾンと云ふのを觀に行つた事があつた、コロンビヤから行つたのであつたから典獄のオスボーン氏にも會つて色々制度やプリンシプルに就いて説明して貰つたのである。

オスボーン氏の曰はれたるには、私は囚人を罪人としては取扱はない、私は彼等を只人間として



山毛櫸

鈴木 芳 松

森の中に老木の山毛櫸が一本立つてゐた。頭は雷に打碎かれ、胴は洞で、皮からは大きなきのこが生えてゐた。それは其邊の山毛櫸の中では一番

の古株で、幾人といふ數知れぬ子供之母親であつた。ところが、殖える兒どもは、どれも年頃になると片端から斧に落されて了つて、今では唯つた一人の娘が生き残つてゐるばかりである。スラリとした、皮膚の滑らかな若い山毛櫸であつた。齡は未だやつと八つの、八つといふ齡は森の樹の仲間では、所謂「花時」と考へられてゐたのである。

幾春も幾春も、此の山毛櫸は緑の葉や根を張り出してゐたが、其の中に、唯黙つて立つてゐるだけでも可成りの苦痛になると、自分の生の頽廢と

いふ様なことを感じない譯にはいかなかつた。そして、早晚死に行く身だと悟ると、一入娘が可愛くなつて來た。

春が近かつた。ギラ／＼と映ゆい雪が未だ樹々の梢の上に残つてゐたが、根から滲み出る暖い樹液や、そよ／＼と吹き渡る柔い風が助け合つて其の雪も解かしてしまつた。コト／＼と互に衝突することもあつて、幾つもの大小の氷片が小川を下つた。白い鐘草は、森一面の床を蔽ふた雪を突破つて頭を擡げ始めた。

此の時老木の身の山毛櫸はわが兒に向つてかういつた。

『今夜突然暖い南風が吹き出して、私の體は、幾

方面のみを取り上げたがるは日本人の常であるから、動もすれば善惡差引いて善い方面の多い米國を只惡くして仕舞ふ弊があるのは將來大に慎むべき事であると共に、其れにつけても米國研究の一層緊要なるを思はざるを得ない。

(四) 米人の日本觀

翻つて米國側の日本觀に就いて一例を云ふならば、最も智識階級であるべき大學教授間にすら日本を知らぬ人や、誤解して居る人が多いのは誠に困つた事である。私の師事して居るピアド教授やダンニング教授などは時折り教室に於いて日本に關する意見を述べられる事があるが、何時も誤謬に陥つて居らるゝので私から二三度注意をして上げた事もあつた。こう云ふ譯であるから他の階級の日本觀は推して知るべしであつて日本紹介の並み大抵の業でない事はこれを觀ても感ぜらるゝのである。

目下米國には姉崎博士を初め其の他の名士が専ら日本紹介に努めて居らるゝ様であるが、私は日本文學とか、人情とかを紹介するより先きに専門

家なり學生なりが日本の諸制度に關する充分なる説明を彼等に與へ、以て彼等の日本研究に對するインテレストを惹起する事に努めるは刻下の急務であると思ふのである。

遮莫人生人を知る事は容易な事ではない、況んや外國を了解する事に於いてをやである。かるが故にスローン教授は夫の米國政治のテキストブックとに世上名高き英人ブライス氏の手に成れるアメリカン、コンモンウエルス、露人オストログスキ
ー氏のデモクラシーアンドバーテロオーガニゼーションの二大著を評して『これらの著憾らくは未だ以て米國精神の奥義に觸れず』と言はれた。

けれども我等は出來得る限り相互にアンダスタンドしなければならぬ、お互ひに同情を以て了解する事に力めたならば、近き將來に於いて必ず成功する時が來るであらう、我等はかのキツプリングが東は東、西は西、この兩端は終に神の審きにかゝるまで合ふ事はないと歌ふた詩の無意味になるまで、東西思想の融合を圖らねばならぬ。(完)

(六月十二日稿)

かういつて女は「谷間の姫百合」を一杯入れた籠を置いて、頭の上の繁つた緑葉などは見やうともしせず、山毛櫨に身を倚せた。山毛櫨は、何を女が喋舌るだららと呼吸を堪へて待つてゐたが、女はどこまでも沈黙を續けた。

すると反對の方向から、骨格逞ましい一人の男が出て來た。これも亦極めてそつと足を運んだ、——その足に敷かれた枯葉はカサとの音も立てなかつた。併し女の耳は鋭敏であつた。女は男の方を向いた。「女は逃げるだらう」山毛櫨はかう思つた。しかし女は逃げようとはしなかつた。それどころか、飛ぶ如に男の傍へ馳け寄つて、其の兩腕を男の日に焼けた頸にからみつけた。

『ハンス』『イヴ』

二人は同時に叫んだ。そして心ゆくまで接吻し合つた、お互の名を呼び合つて、更に抱擁し合つたこれを見た山毛櫨は身體中をくすぐられる様な思ひした。纏て二人は樹の下に坐つて、戀を語り合つた。それは今に始まつた戀ではないけれど、山毛櫨にとつては初耳なので、お伽噺に魂を奪は

れる兒の様に、二人の物語に耳をすまして聽きほれた。ところが不思議なことが起つた。

男はツと立上つて、洋刀を取り出して、幹の皮深く刻み始めた。山毛櫨には多少の苦痛ではあつたが、黙つてこらへてゐた。

『何をほるの?』

女がきいた。

『ハートをさ、お前の名と私の名を入れて』

男はかう答へて、刻みはじめた。

それが終ると二人は満足氣に洋刀の跡を眺めた男は唄ひ出した。鳥といふ鳥の歌なら山毛櫨は飽きる程聞いたが、人間の唄は珍らしかつた。

唄はかうである。

いばら小笹を搔き分けつゝ、

わしは徨ふ森の中。

氣は冷やかに澄みわたり、

心樂しき今日の狩。

鳥も獸もわしや目にくれぬ、

わしの狩るのは別種の鳥。

年來積み上げた木の葉の臥床ふしどの上に横へられて、もとの土に歸らなければならなくなる。けれど私が彼の世に往く前に、お前に残して置く一つの寶がある——森の神様がずつとの昔に私に下された寶で。人間の言葉が解わかつて、喜につけ悲につけ同情することができるといふ能力、これが私の今云ふ寶なんだよ。私達の分際としてこれ程の幸福が又とあるまいよ。だがね樂みよりも苦みの方を餘計に見るものだと覺悟しなけりや不可いけいよ』。

其の晩、曠野の方から南風が襲おはふて來た。之れは深淵に船を沈め、山顛から巨おほきな雪の圍りを轉がして、幾多の人家を破壊した。それは森の中を吹き暴あれて、老ひたるもの、衰へたるものは云ふまでもなく、その力に少しでも反抗しやうと試みる總てのものを打倒した。遂にそれは彼の老木山毛櫸をも見逃しはしなかつた。併し體驅からだの柔軟な若い娘は、賢さかしくも頭を下げたので、風は空しく其の上を通り過ぎた。三日の間、娘は倒された母の上に露と閃めく涙を注いだ。聽やて照り出した日

は瞬く間に其の涙を乾かした。

四邊には種々な草が萌もえ始めた。種々な花が微笑み始めた。若い山毛櫸の胸には、母を喪うつた悲

みの影はもはや絶たれなければならなくなつた。

此の様な絢爛の總ての中に、若い山毛櫸は女王の様に聳立した。鸞うが其の頂上に巢を造つた。赤い冠をかぶつた喙木鳥が絶えずやつて來た。時には時鳥や、栗鼠なども現はれた。然し人間といふものゝ影は今年は未だ一つとして其の附近に見られなかつた。しかも人間は此の若い山毛櫸の最も歡迎する客であつたのだ——人語を解するといふ親譲りの能力を試ためしてみたいと希ふ若い山毛櫸にとつては。

人の影がチテホラ見えそめた。或る朝のこと、丈たけのスラリとした、美しい髪の若い女が、森の間を忍び足で辿つて來て、眞直に山毛櫸の下に來た然しどう見ても、其の目的は山毛櫸自身にあるとは思はれなかつた。其の女は、朽ちかゝつて倒れてゐる一本の樹に眼を付けた。

『あゝ此處だ』。

落葉や枯枝を拾ふ貧しい女、葎を渉る子供達、旅人など、夏の間に山毛櫨は種々雑多な人間を見た。けれど何時來ても心地のよいお客と云へば彼の二人の若い男と女とであつた。二人は一週に一度つゝ來ては、その戀を語つた、語つては相抱擁した。そして其の度に二人に對しての山毛櫨の親みが深くなつて來た。

或る朝の日の出前、森全體が未だ靄の帷に包まれてゐる頃、ハンスが獨りで現はれた。獵銃を肩にかけた彼は四邊を憚る様に、藪を掻き分けて進んだ、よく戀人を驚かさうしてやる時の様に。併し今日はイヴに會はうとしてゐない、此處に棲家を有つてゐる小鹿を驅り出さうとしたのである。山毛櫨の下に來ると彼は立止まつて、彫像の如くに佇立した。冷やかな朝の空氣が靄を拂ひ去つた。鳥は眼を覺まして、水を求めに飛び去つた。藪がガサ／＼と動いた。ハンスは銃を取つた——。

ズドン！と一發、森の繁みから彈丸が飛んだ。ハンスは銃を落して、二度三度躍つて地上に斃れた。

森から急ぎ足で、一人の男が出て來た。左手に握つた獵銃の銃口から未だ煙が出てゐた。山毛櫨には其の男がよく分つてゐた。

山守は斃れた男に蔽ひかぶさる様にして、『もう駄目だ！』

彼は彈丸を込めて森のしげみに隠れた。

太陽が昇つて、死人の蒼白な顔を照した。山毛櫨は低く垂れた梢からキラリと光る涙を落した。駒鳥が彼處此處を飛び廻つては綺麗な花を死人の顔の上に載せた。獵て彼の眼は全く閉ぢられて了つた。

午後になると樵夫どもが通り掛つて死骸を見付けた。

『密獵中にやられたんだな』。

一同が云つた、そして死骸を運んで谷間へ行つた一人の老人が山毛櫨の邊を徘徊したが、洋刀を出してハートの上部に十字架を彫りつけた。そして帽をとつて祈禱した。山毛櫨の梢が動いた。二度共に祈禱をする様に。

其の後幾夏も幾夏も續けて、男の戀人は命日に

探ね歩いた甲斐あつて、

山毛櫨の情けの樹蔭に、うれし。

見付け出したよ、いとし女を、

柔い腕にひとかい抱き。

燃ゆる接吻のいくそたび、

わしの色仇敵の心は石に……。

山毛櫨の幹には戀の象徴、

刻みつけたるハートもあはれ。

二人の心はそこに結ばれ、

永久に語らん眞實の戀を。

唄ひ終ると女が云つた。

『ちよいと、あたしその唄をきくと思ひ出すことがあつてよ。人の噂に聞いたわ、秋になると貴方は此の森へ密獵にいらつしやるといふぢやないのあ止しなさいよ、密獵なんか。山守は貴方に怨恨を懷いてるのよ貴方、その理由は分つてゐるでせう？、だからあ止しなさいよ、貴方が密獵していらつしやるところを彼の山守が見付けやうものな

ら——あゝあたしどうしよう——そして貴方が、彈丸に胸を貫通されて家へ運ばれていらつしやつたら……』。

男は身を屈めて女の口に接吻した。

『世間の人間は種々な虚言をいふものだよ、其の人間のいふことを一々取り上げてゐた日にやさうがないぢやないか』。

かういつて男は女の腰に腕を廻して、唄ひながら二人は森の中に消え去つた。

二人の姿が樹蔭に消えると、狩服を着けて獵銃を背負つた男が藪の中から跳り出た。其の顔は蒼ざめ、其の唇は慄へてゐた。彼は山毛櫨の下に駆け寄つて、ハンスが刻んだハートを贖めた。彼はニタリと笑つて、取り出した洋刀で二人の名を削らうとしたが、また思ひ返して洋刀を納めた。彼は、二人が行つた方向に拳を振つて齒ざしりした。『今度森に来てみる、お氣の毒だが……へ、へ……』。薄氣味悪い笑を見せて彼は森に這入つた、山毛櫨はブル／＼慄へた。

此廣告て見申込の方〔合六雜誌〕に依る旨御書添ふ

▲物來村井知至先生著

和田垣博士譯英文十牛頌
齋藤松洲畫伯揮毫「十牛」
木版手摺十一枚挿入

最新刊

思想界の弦外

■本書は先生一代の修養と蘊蓄を盡せる名著也

學あり徳あり自ら守る所固く、一世の師表として万人の敬慕せる先生が過去半生の實驗に鑑み、日常逢着せる事物に對し、教育家として宗教家として父とし夫とし友人とし將た又社會の一員として、疑問の源泉を探り眞理の根柢を究む。
先生が社會の改良と人心の革新を主張し、椽大の筆を振ひたるもの即ち本書只だ一卷あるのみ。
罵倒し、愚弄し、痛論して論旨堂々、細穿たざるなく、微打たざるなし、言々句句肉を刺し骨を徹し醉生夢死の徒をして慚死せしむ。眞に之れ近來の大快著。霽雨蕭々書見を誘ふ時速かに來つて之れが高遠の調を聞くべし。

此の謎を解くべし

才道人禍句笑二林今悟可東醜眞人靈盲獵ヒ自美無自
子のをなはる種橋り西の醜はははの
とをのすはる種橋り西の醜はははの
佳をのすはる種橋り西の醜はははの
人し計師の愚か惑柿豪か會想者也人化明みの教か道景

人現悟人危生土ト信内邦人ア古名極是○自宗富掃西
物代生達思想的意生、德イ字報察誌鬼間也○待味暮ら蛙
保想の意生、德イ字報察誌鬼間也○待味暮ら蛙
證の意生、德イ字報察誌鬼間也○待味暮ら蛙
狀幣人義命、德イ字報察誌鬼間也○待味暮ら蛙

△遂教善三現奴王汝尊大大滿流妻貴剛好超平、人對
に育種在謀との偉惡足かきき人凡とは
謎家なす活しては名ゆ人人行姿經とな生何
類利生き遊か罪聖悲
り別觀よくれ偽し人々哀兒か驗柔友ん活か敵か

三六版クロス
特製函入美本
定價
金八拾錢
送料八錢
市内四錢

店書堂方四

東(電)市神田區龍一町番九六五
京(話)下谷六九五番
振替口座東京

發兌

は屹度此の山毛櫟の下に來ることを忘れなかつた來ては踞き、踞いては歎き悲み、悲んでは祈りをした。そして其の度に段々と顔色が蒼ざめ、痩せ衰へて行くのが際立つて見えた。とう／＼其の姿を見せない時が來た。

『死んだに違ひない』。

山毛櫟がかう思つた。その通りであつた。

何年か經つた。山毛櫟は可成りの大木になつた皮には苔蒸し、幹には蔦葛が攀上つて、ハートも十字架も今では丸で青葉に蔽はれて見えなくなつた。

或る日一人の男がやつて來て、其の樹に印をつけた。山毛櫟は其の理由を悟つた。伐り倒される運命が來たのである。

間もなく樵夫が其の樹を伐りにやつて來た。獵

服姿の意地悪さうな男がゐて、樵夫どもを指圖した。

山毛櫟は其の男をよく知つてゐた。男の方でも山毛櫟に見覚えがあるらしかつた。彼は其の樹に近寄つて幹の苔や蔦葛を拂ひ除けた——十字架とハートが現れた。

『此處だつた！』

低音にかういつた。彼の五體は恐怖に戰いた。

『旦那、後へ、後へ、……樹が倒れますぜ』。

山守は二足三足後へ蹣よろめいた、併し遅かつた。

山毛櫟は地響立て、倒れた、彼の體は其の梢の下に敷かれた。

人々が彼を引出した時、彼の呼吸は既に絶えてゐた——其の頭は山毛櫟に碎かれて……。

人々は彼を取り卷いて、祈禱を始めた。

Ⅱ ルドルフ、バウムバッハ Ⅱ

(ふ乞を添書御旨る依に「誌雜」第六は方の込申御て見を告度也)

庫文學碑

全 部 二 十 冊 完 成 す
 二十冊に特
 取引可仕候
 へ直往復は
 本社にきか
 御注文にて
 下文に照會
 されし方へ
 候方へ
 限にふ

第一編 第二編 第三編 第四編 第五編 第六編 第七編 第八編 第九編 第十編 第十一編 第十二編

鈴木大拙	先生著	禪の第一義	定價一圓十錢 郵稅八錢
大内青巒	先生著	青巒禪話	定價一圓廿錢 郵稅八錢
忽魯谷快天	先生著	達磨と陽明	定價一圓十錢 郵稅八錢
新井石禪	老師著	修道禪話	定價一圓 郵稅八錢
竹田默古	老師著	禪の面目	定價一圓 郵稅八錢
菅原洞禪	先生著	禪林奇行	定價一圓 郵稅八錢
釋宗演	老師著	拈華微笑	定價一圓 郵稅八錢
秋野孝直	老師著	禪の骨髓	定價一圓 郵稅八錢
原僧蓮	老師著	禪の捷徑	定價一圓 郵稅八錢
荒井硯光	先生著	道元禪師	定價一圓 郵稅八錢
原田祖岳	老師著	參禪の階梯	定價一圓 郵稅八錢
山原鄧州	老師著	南天棒禪話	定價一圓 郵稅八錢

東京 小石川 原町 兩午出版 東 京 小 石 川 原 町 兩 午 出 版

週刊宗
教雜誌

基督教世界

毎週木曜發行
一部 金 五 錢
半ケ年 金一圓二十錢
一ケ年 金二圓三十錢
外國行一ケ年金三圓

◎本誌の創刊は明治十六年にして既往三十餘年の歴史を有する本邦基督教界最古の週刊雜誌なり

◎本誌の特長は進歩的基督教の立場より時事問題を評論し且つ最新の知識に依り斯教永遠の眞理を闡明するにあり

◎本誌には毎號教界先輩の説教、内外名士の論説と新進思想家の研讃と、清新なる宗教文學及内外教勢を満載す

◎本誌は信仰修養の糧として聖書研究の手引として、信徒家庭の讀物として好適なる雜誌なり

◎本誌の編輯は宮川經輝、原田助、小崎弘道、渡瀬常吉、牧野虎次の五氏協力之に當り、武本喜代藏、山口金作の兩氏毎號執筆し、在兩京の記者數名之を助く

本誌の見本は往復はがきにて御申越次第無代進呈すべし

發行所

基督教世界社

大阪市北區中之島二丁目四七

振替貯金大阪參壹七參

海外
思潮

教會と音樂

宗教と音樂殊に基督教と音樂との關係は、既に業に解決された問題である筈であるのに、我國に於ける實際は、問題の第一歩にすら觸れて居ない此の方面に於ける教會當事者及び信徒の怠慢は寔に甚だしいのである。空漠たる議論の末に起る前に、我等は先づ崇高なる儀式の中に、壯嚴なる音樂の中に、汚れたる心琴を洗はねばならないのである。此の意味に於て、米國シカゴ市新第一組合教會の音樂の實際を紹介することは、決して徒勞のことでないと思ふ。

一

此の教會には二百名の歌手があつて、五つに區分されて居る、何れも十四歳以上の若い男女である。彼等は教會の勤務とか、其の休養とかに眞の

慰安を認めて居るのであるから、教會は彼等にとつて生活の中心である。彼等は嚴格な取締と訓練とを受けるけれども、むしろそれを好んで受けるのである。各團隊毎に幹部を有し、練習、歌唱等各別に行はれる。大人男女混合の合唱同盟、年少女子の合唱團なる高音部隊、少年合唱隊、少女のセシリアン合唱隊、同じく少女のカロル合唱隊の五隊から成立つて居る、そして各隊別に特殊の祭服を着ける。これは大學のガウンを少し變へたものであるが、少年合唱隊のみは聖公會に用ふる法衣とコッタとを用ひて居る。

此の法衣を歌手に着けさせることは、合唱指揮者たるオウガستن・スミス氏が多年の経験から發見したことで、第一合唱歌手の種々なる社會的

彩虹會規約

藝術は遊戯にあらず

藝術は眞面目なり

藝術は味ふべきものなり

一、本會は右の趣意により最も眞面目なる製作を最も廉價に同好の士に配付するを目的とす

二、本會の製作は風景、静物、肖像の三種とし總て友人有田四郎氏（明治四十二年東京美術）の眞面目なる努力になるものとす

三、會費は次の價格表により申込みと同時に半金を申受け完成の上殘額を一回、或は數回に申受くべきものとす

但し如何なる事情あるも既に用金せる會費は返却せず・地方は運賃御自辨のこと

四、額面の寸法及び價格は左記の如く定む

A	一尺一寸	別二寸幅	九圓
B	一尺一寸	約三寸幅	十八圓
C	一尺五寸	約四寸幅	三十圓
D	二尺六寸五分	約五寸幅	六十圓

五、製作の主眼はなるべく本會に御一任ありたし。肖像畫は申込みと同時に鮮明なる寫眞一葉を要す

七六、製作の完成期は申込みの日より一ヶ月乃至三ヶ月以内とす

本會の事務所は左の二箇所とす
東京府下巢鴨町巢鴨一四七〇 相原 一郎介方
相州鎌倉町扇ヶ谷要山 有田四郎方

發起人

早稻田大學教授 内ヶ崎作三郎

衆議院議員 小山 東助

相原 一郎介

大正四年

八月一日

暑 中 御 伺

社 中 同 人

(イ ロ ハ 順)

今岡 信一良

岡田 哲藏

小山 東助

吉田 源次郎

内ヶ崎 作三郎

野村 善兵衛

相原 一郎介

三 並 良

鈴木 文治

ある。

三

斯の如き歌唱の實際が、歌手自身の上に心理的宗教的影響を少なからず與へるといふことは疑のないことであるが、その禮拜に列する人々も亦異常な靈感に打たれるといふことも明らかである。恐らくは此の歌唱に動かされない人はあるまい。自己といふものを自覺せざる若人の無邪氣さと佳調とは、其の靈感の有力なる要因である。然も若人その人は、歌調のみの有する力によつて、廣い廣い世界の中に導かれて行くのである。聖詩と讃歌と靈の歌とを以て語り合へとパウロは教へて居る。歌の力を籍りて自己を他に表白することは、不思議にも優さしき主觀的效果を有つて居る。中週の集會に、會衆をして敬虔に感動的に唱はしめ得る牧師は、彼等の爲に休息と慰安の奇蹟を行ふことが能きるのである。

眞の歌唱といふことは、必ずしも音樂的の演奏といふことではなく、只表現の一脈路となることである。歌唱には深い吸氣、呼氣、筋肉作用、活

潑なる血液の循環、時に笑を起し、時に涙を催すやうな快活、正直な表出を伴つて居る。歌は斯くして始めて其の活躍と完成との正當なる地位に引上げらるゝのである。唱歌は人が想像するやうに唯一時的の裝飾ではないのである。

併しこの合唱團も生きた人間である以上、随分と惡戯もする。音樂指揮者は同時に又訓練の擔當者である。各合唱隊には各別に夕食、馳走、運動會等の時が定めてあつて、之に參同するには前に何か善行をして居なければならぬ。

併しながら彼等に大なる刺激となるものはサウガタックである。サウガタックといふはミシガン湖の東岸にある夏期野營地で、各合唱隊は少なくとも十日間は其處に滯留する。其處は此の二百の疲れたる歌手にとりて、絶好の慰安場である。併し此處でも全體の制度は頗る嚴重で、各自六時三十分起床し、夜十時には就寢する。一日の日課は二回の水泳から朝夕の祈禱に至るまで、巨細に規定せられてゐる。寸時も時間を浪費はさせない。

このサウガタックに居る間、宗教上に關する話

區別を排棄し、第二に、彼等の頭腦に忠直、熱誠の心を滴注し、第三に自己意識を驅逐し、第四服裝に對する會衆の注意を滅殺し、第五教會に對する尊崇の心を深刻ならしむる利益があるといふ、見地から行つて居るのである。

二

此の五つの合唱隊が常に一所になるといふことは事實に於て不可能であるから、一ヶ月に一回朝夕の禮拜に一所に唱ふことになつてゐる。其の場合にありては各合唱隊が順番に種々に組合つて行るので、就中第一の合唱同盟と少年合唱隊との組合せが非常に有力である。そしてかゝる大合唱を行ふ爲めには、毎週九回の練習會が行はれる。

試に昨一年間に於ける此の合唱團の活動を見るに、十二ヶ月の間に一萬八千の歌手が教會に入つた、十六回の自由演奏會が教會の講堂で開かれ毎回非常の盛會であつた。教會の儀式や演奏會の外に、此の大合唱團は各宗派の會合等に招かれたことが度々であつた。其の歌唱振りは素人離れのしたもので、よく練習が行届いてゐる。が此の合唱

團のみの有する特長は、團隊全部の合同合唱である。合唱隊は各年齢を異にして居るので、隨つて聲音上に種々な差異が生じ、聲音の明晰な少年の最高音部は、年少女子のそれと明らかに區別が能きるし、又大人女聲のそれとも明らかに區別することが能きる位である。これが結合の結果は風琴の音栓「フリュート」と同様に美しい和聲を生むのである。

次に問題になるのは、此の大合唱團の歌唱する曲目である。場合に應じて輕快なるもの、歡快なものもあるが、又極めて崇高なる聖樂ゴトリカである。彼等は又カンタタを唱ひ、多數の行列唱歌を歌ふ。彼等の歌ふ曲目の中には種々なる基督降誕祭の歌苦難の歌、復活祭の歌等が含まれて居る。これ等の多くは殆ど暗譜で唱はれる。その發音には細心の注意が加へられて居るので、聽者は易々と理解することが能き程である。自らは一の使命を行つて居るので、之を有効ならしむるには、肉體と心靈とが健全でなければならぬといふことが、常に此の合唱團の歌手の頭に刻み込まれて居るので

畏れと愕きに跪まづかん！、
愛もてなやめる神を愛せよ！、
希望に燃えて、かなたに閃めく、
かの星たへへよ！。

此の五つの合唱隊の指揮者も、オルガニストも

『人の子のわれ』

齋 藤 未 學

若草萌ゆる春の頃

人の子のわざわれ知りそめて

花叢にねむる蝶の如

歡樂の夢むさぼりて

あるは五月の冥暗の

暗き思ひに暗き身を

まかする事の罪怖ろしく

神のみ前にひれ伏して

罪許されと願ぎ泣けば

み神は頭にみ手を觸え玉ひ

共に他に社會的に活動して居る人々であるといふことは殊に注意に値する。而して斯かる合唱團が教會の事業の上に、如何なる効果を齎す可きかは容易に想像し得ることである。(M、K生)

悔める者につみはなし

悔める者に光あり

さのみ嘆きそ吾が子よと

のたまふみ聲今もなほ

忘れはせねど時ふりて

鹽けき涙乾く時

甲斐なくなりぬ我懺悔

あゝあさましの人の子のわれ

(大正四、七、一七)

は少ない。彼等は宗教生活をして居るのだ。少年等は水泳時を樂しむと同じやうに快活に朝夕の祈禱に集るのである。彼等は正しい少年達である、心を痛めるような狂氣じみた傾向がない。が彼等は其の席上の正鴻を得た談話とか、短かい詩や物語を好んで聽く。彼等は唱ふことが好きである。彼等は此の單純で然も美しい禮拜の時間を、自分達の心に宿つて居る深い喜を表現する上に必要なものだと思つて居る。

四

日曜の問題を解決されて居る。朝食後は野外で祈禱と聖書の研究があり、それが終ると新緑の匂はしい森の中を通つて小さい教會に行き、避暑客の爲に唱ふ。都會の演奏會や劇場などで優秀な音楽を聽きなれた旅客達も、この少年達の眞實な歌声に動かされて、始めて眞の禮拜といふものを知るといふことである。午後には野外の演奏會が開かれる。各地から集まつて居る數百の聽衆が、綠葉の下に圓形に坐つて耳を澄まして居る。傍見をしたり私語をしたりして此の嚴肅な全體の氣分を

破るやうな歌手は一人もない、かくて崇高森嚴なる光景を呈するのである。

九千の番頭を使用して居るあるデパートメントストアの主人が始めて此の合唱を聽いた。そして爾來其の使用人の休暇を此のサウガタック野營の行はるゝ時に仕向けるようにした。此の歌唱が、彼自身の生活に如何に強い影響を與へたかを語つたとき、彼の聲は震へて居た。

十月の第一の日曜に若しも教會の後ろの大きな室で、法衣を着けた歌手の姿を見るならば、彼等の眼が健康に輝き、愉快な記憶に輝いて居るのを見るであらう。最後の注意が低い聲で與へられたオルガニストが序曲を奏いて居る、そして今や二百の歌手は行列唱歌を唱ひながら禮拜堂に入らうとして居る。『入る前に一言祈りませう』と指揮者は云ふ。その祈は極めて短かく且つ單純である。やがて合圖に隨つて行進曲が奏されると、白と黒との法衣の行列が動き出す。

『されば來れ、あなたに急がな！、
若きも老へるも、おしなべて、』

教的要求に燃えて居つたのであります。」

一體ツエヒ人はスラヴ族であつて、早くからボヘミヤ、モラビヤ及び其の附近の地に住んでゐた。

九世紀から神聖ローマ帝國に貢を入れ、十一世紀に至つて之に併合せられた。「千三百六十四年カル四世のボヘミヤ王となるや、盛んに西歐の文物を輸入してブラーグに大學を建てたのであります。」この結果はツエヒ人の間に文化を發達せしめ、彼等に人生の敢無さを感じしめた。

ワルトハウゼンのコンラードは眞の悔改めを説き、モラビヤの人ミリツツは聖書に基いて教會を批評し、其の弟子マタイアス・フオン・ヤーゴは聖書を以て基督教の根本と爲すに至つた。この時ウイクリッフの思想が入つて來たのである。ウイクリッフは聖書によつて教會を批評し、其の制度の弊を去らうとしたのである。

獨逸人及び教會の壓迫は、かへつてツエヒ人の民族的自覺を強くし、彼等に自由獨立を要望せしめたのに過ぎなかつた。

千四百年にはウイクリッフの説を奉ずる一團の

學者がブラーグに現れた。ゼローム及びフツスは其の牛耳を取つた有名な人である。「フツスはスラヴ人の有らゆる特長を備へて居つた。沈鬱にして而も親しく易く、單純にして而も内觀的に、動かす可からざる決心と挫くべからざる勇氣とを持つて居つた。彼の道德的に嚴格な生活、彼の學識、彼の雄辯は自ら彼を人々の長たらしめたのであります。」かくて反法王的、反帝國的の運動はやうやう盛んになつた。

千四百〇八年二法王間に紛議があつた。大監督スヴィニウイックはグレゴリオ十二世に味方してローマの肩を持つたが、フツスは王ヴェンツェルに説いて中立を宣言せしめた。翌千四百〇九年フツスはブラーグ大學の制度を改正したが、之に平らかならざる獨逸人の教授學生等はライプチヒに去つて、其處に新大學を起した。斯くてフツスの徒は益々王政治の腐敗を攻撃し、殊に赦罪券の賣買を非難した。此の間スヴィニウイックが有らゆる鎮壓の努力は悉く水泡に歸した。

千四百十四年法王權を抑へて教會の革新を計ら

ヨハネス・フツス五百年記念

講演を聴く

時は七月六日午後七時。所は神田美土代町青年會館。入口で、「ヨハニス・フツスは西曆紀元千三百六十九年ボヘミヤ、フツシネツツに生る。怪傑ルーテルに先立つ事百有餘年若くしてブラーグ大學總長たり。夙にウイクリッフに私淑して彼の説に學び宗教改革に志してローマ法王の墮落を攻め其の赦罪券發行に反對し千四百十五年七月六日遂に異端として火刑に處せらる。而して本年は將に其の五百年に當る。彼に學ばんと欲する者は來りて此の講演を聞け。」と云ふ口上付きのプログラムを貰つて入る。傍聽無料が手傳つてゐるのでもあらうが、最う四五百人の人が集つてゐる。司會者が前の口上を繰返してゐる間、ふと右手のドアに「便所」「Toilet」^{トイレット}と書いてあるのに氣が付いた。こいつあ不味い。宜しく「便所」を「手水」と改むべし。などと思つてゐると、小柄な人が現れた。至つて蒼白い顔に粗末な鐵の眼鏡が似合ふ。文學士石原謙氏である。

「諸君、我々は今此處に五世紀の昔に溯つて彼の偉大なる宗教改革の先驅者ヨハネス・フツスと

共に在るのであります。」沈着な態度、明確にして熱烈なる語調、先づ有りふれた文學士でないことが分る。フツスの活動の範圍が僅かにツエヒ民族の間に限られたにも拘らず、彼が今日に記憶せられるのは何の爲めであるか。「彼の貴い道念、彼の強い信念を懷ふことは、我々の力であるのであります。」このフツスを理解せんが爲めには、先づ彼の時代を知らなければならぬ。今夜の講演「フツス運動と其の背景」は之が爲めに與へられるのである。

普通宗教改革の歴史と云へば、先づウイクリッフから説き起されるのであるが、今は必ずしも之に従はない。蓋しウイクリッフが遠く感化をボヘミヤに及ぼしたのは、其處に充分の準備が有つたからである。「當時ツエヒ人の心は民族的自覺と宗

と一息してノートを取り直すと、隣りにゐた病人らしい四十男がこそ／＼と退却する。石原氏は大學のブローフェツサーの様にきつと四邊を瞰んで原稿のページを繰る。電車の音の工合で、雨の未だ止まぬことが分る。

宗教改革は中世より近世への轉移を示す者であるが、此の宗教改革に於てフツス運動は如何なる意味を有するか。而して彼等は何の爲めに甚しき迫害を受けたか。彼等は何等新なる宗教を主張したのではない。フツスやゼロームは寧ろ古き宗教に殉じた者である。彼等は教會の改革に急であつて、時代の潮流を省みるの遑が無かつた。爲めに彼等は理解せられざるのみならず誤解せられた。誤解せられた者の運命は悲慘であつた。然し乍ら彼等の信念と彼等の熱誠とは、蒔かれたる種子に水を注いで遂にルーテルやカルヴァンの實を結ばしめた。

蓋し當時歐洲の宗教史に於て、吾人は種々宗教改革の大運動を惹起すべき要素を認めるのであるが、今次の三方面から之を論じて見よう。

(一) 政治的關係から教會の地位が變つた事。

(二) 教會其の物の概念が變つた事。
(三) 一般人が宗教上に認められる様になつた事。
順を追うて之れを説明しよう。

(一) は政治的に獨立した國家の起つた爲めである。元來中世にあつてはローマ法王は精神的にも政治的にも全歐洲を支配した。十三世紀の法王インノセント三世の如きは、法王を太陽に帝王を月にたとへた。然し乍らローマの日の光は傾き始めました。千二百九十六年法王ボニファキオ八世はウナム・サンクダム（一神一主）の法令を發して、國王諸侯の法王の許可なくして教職に課税するを禁じたが、かへつて佛蘭西王フィリップ四世に侮辱せられて悶死した。斯くて千三百〇五年法王クレメント五世の法王宮をアヴェニオンに遷してよりは、ローマ教會の威力益々衰へ、國王諸侯等皆之に乗じて自己の權力の伸暢に努めた。英國が法王への年貢を止めたのも此の時である。此處に於て法王は權力の回復を望んで政治的の紛争に携つたが、其の結果は適々彼も亦紛争の上に在るにあらずして其の中に在る者である事を證明したのに過ぎなかつ

んが爲めに、宗教會議がコンスタンツに開かれた。獨逸皇帝シギスモンドはボヘミヤ王の兄弟であるから、ボヘミヤが異端を容れたと云ふ惡名を免れしめんが爲めに、フツスにすゝめてコンスタンツに行つて自説の辯護をなさしめた。けれどもフツスを理解し得ざる人々は、彼をドミニック派の修道院の土窟に禁固し、翌千四百十五年四月より審問を開いた。五月に至つて彼の著者かうイクリツフと同じ思想を包含する事實が摘發せられた。彼は其處でも有らゆる壓迫と全この誘惑とに打勝つて、斷乎として其の説を曲げなかつた。七月六日彼は頑固なる異端として職を褫かれ、其の靈魂は惡魔に渡さるべしと云ふ宣告を受けた。「我は其を我が主イエス・キリストに委ね奉る」斯く彼は答へた。フツスは即日火刑に處せられたが、焔の中より「生ける神の子、イエス・クリストよ、我に慈悲を垂れ給へ。」と叫ぶこと三度、彼の身體は一握の冷灰と化し、流れ絶えぬライン河へと棄てられた。

彼の友ゼローム亦コンスタンツの獄に投ぜられ

た。病氣と虐待との爲め根疲れ氣衰へたるゼロームは千四百十五年九月自説を放棄せんことを約したが、間もなく精力を恢復し、驚嘆すべき雄辯を以て、會議の前に於て新に彼の教へたる全ての眞理を宣言した。翌千四百十六年五月三十日、彼は從容としてステークの上に焼かれた。

ボヘミヤ人は憤慨した。フツスの黨はブラーグの南方五十哩に在る高原に據つて之をタボル山と名け、ヨハンチスカを將とした。時に王ヴエンツエル死し、獨逸皇帝其の兄弟たるの故を以て後を繼ぐと云ふ報知が有つたので彼等は益々シギスモンドに對する怨恨の情を強くし、しばしば獨軍を破つた。フツスの殘黨は硬軟兩派に別れた。前者は根本的な教理の改革を求め、後者は聖餐の杯を普通の信者にも與ふことを主張した。チスカの死後硬派の勢振はず、軟派に歸する者を出した。斯かる間にバーゼルに一般會議開かれ、彼等との間に調和のコンバクタータは結ばれた。時に千四百三十三年。

「此處に於て我々は歴史上の問題に逢着するのであります。」ほつ

になつた。十五世紀には僧俗の區別が殆んど無くなり、神學の研究は俗人によつても行はるゝに至つた。此の結果ヒューマニズムが起り、英國のジョン・コレット、和蘭のデシデリウス・エラスマス、佛蘭西のルフエーブル、獨逸のヨハン・ロイヒリン等の諸學者出て、神學上の批評をした。教會は萬人に對して開かれた。

要之、十四、五世紀は中世より近世への過渡時代であつた。其の人心の推移は何人の力を以てするも止めることが出来なかつた。パリイ大學のテーリイ、ジェルソン等はキャソリック、チャーチ改革案を立てた。たゞウイクリッフ及びフツスに至つては法王のみならず全教職に對して反抗した。故にジェルソンの如き改革者からすらも非難せられたのである。

「諸君、此處に注意すべきはフツスならびにゼロームが法王の爲めに復讐せられたのでなく、同じ改革派の人々によつて殺されたことであります。」相互に理解せざる兩者は斯かる悲劇を生じたのである。

石原氏はこれより代議制によつてキャソリック、チャーチの改革成れりとする一派の皮相を説くと共に、フツスの黨が徒らに狂熱的反抗を事として、かへつて自ら迫害を招いたことを悲しんだ。そして最後に再びフツスの道念を渴仰し嘆美し、拍手の裡に降壇した。

「宗教改革と信仰」

小崎弘道氏

これは一場の感話に過ぎなかつた。宗教改革の先驅者中忘るべからざる者が三人ある。即ち「ウイクリッフ、サヴォロラ、吃つて「サヴォロラ、其から此のフツスで、語尾を下げて「御座ります。可笑しくなつて四邊を見ると皆熱心に聽いてゐる。一人で恥づかしくなつて、急に向き直つて此の老先覺者の白髪を眺める。あく迄も溫順な、「お祖父さん」と云つてとび付きたいやうな人だ。フツスに於て吾人の學ぶべきは其の信仰と人格とである。彼がプラグのベテルヘム教會に於て夥しき聽衆を集めることの出来たのは、主として彼の人格によつたのである。改革者と云ふやうな人は、どうも無暗に強がる者であるが、フツスに至つてはさうでなかつた。彼は最後迄やさしい心を

た。千三百七十八年グレゴリオ十一世死して、二法王の對立となり、法王は帝王諸侯の援助無しには、其の地位を安全に保つことも出来なくなつた。斯くて十五世紀の初めには國王乃至諸侯の勢力が強くなり、教會の實力は極めて弱いものとなつて了つた。

(二)次に神學上教會の概念が變化した。十二三世記の頃盛んにアリストテレスの研究起り、一種の新神學を生み出した。今や教會は政治的國家と相對立する一團體に過ぎざる者となつた。キャソリック、チャーチは各教會の結合より成り、其の法王は各教父の首位に座する一人に外ならぬ。斯かる思想の變化は實際上に現れて、イエレン王ルドウイツヒと法王ジョン二十二世との紛争となり、ウイリアム、オツカム等のスコラ哲學者は理論上よりルドウイツヒに味方した。斯様にして法王は政治的君主に對する權威を失ひ、久しく法王の壓制に苦しんでゐた地方の教會亦是等國王諸侯によつて、ローマ教會から獨立するに至つた。千四百〇九年ピザの會議は法王の許可なく

して行はれ、千四百十四年コンスタンツの會議は獨帝シギスモンドによりて招集せられ、千四百三十一年バーゼルの會議は法王の同意を得て開いたにも拘らず、法王黨と會議員との衝突よりして一時中止するに至つた。宗教上の最高權威は最早法王の手を離れて宗教會議の掌中に歸した。

(三)俗人が宗教上に與り來つた。中世にあつては、俗人は教職者の媒介によるか、然らざれば身自ら修道者たるにあらざれば救はるゝことが出来なかつた。けれども十二世紀頃よりの文化の教養は市民武人の心にも泌み渡つて、彼等をして直接に主の御手にすがらんとするに至らしめた。當時フランシス教團の僧侶は盛に市民と交り、俗語を以て説教し、殊に其の第三團の如きは、現在の生活を棄てずして宗教的に價值ある生活を送り得ることを説いたのであります。斯くて十四世紀に至り、ライン河に獨逸神秘主義が勃興した。エツクハルト、タウラー、ルイスブレーク、スーソー等は之を代表する。更に英國に至つてウイクリッフ派は俗人の信徒より所謂ブア、ブリストを出す様



夏の自然と人生

□布哇の夏

安部 磯雄

私は昨今の苦熱と戦つて居るにつけても明治四

十三年布哇で夏を送つた時の愉快を想ひ出さずには居られません。私が早稲田の野球團を率いて東京を去つたのは、これから日増に暑くならうといふ六月の下旬で、而も行先さが熱帯の地でありますから、暑さに弱い私はどうなることかと心陰に恐れを懷いて居りました。然し意外！布哇は實に涼しい所であります。貿易風が晝となく夜となく絶えずそよそよと芭蕉や棕櫚の若葉を通ふて吹くのでありますから、家の中や木蔭に居ては殆んど汗ばむといふことはありません。それにホノル、

では毎日約束でもしてあるかの様に五分間か十分間か屹度夕立が一シキリ降つて來ます。雨後の樹木が滴りを散らしながら風に戦ひて居るのは何とも言へぬ涼しい景色であります。

八月の初旬私共は布哇本島のヒロといふ布哇第二の都會に參りました。數名の在留日本人に伴はれ、一日有名なるキラウエー火山の見物に出かけました。三臺の自動車は緩傾斜をなした坦々たる道路を約三十一哩快走して、午後三時頃私共を火山旅館と稱する淋しき一軒家に送つて呉れました。私共は途中の珍らしき景色に見惚れて自動車が徐々に山に上りつゝあることに氣が附かなかつたのでありますが、此時既に海拔四千呎の高處に來て居ることを聽いて驚きました。

失はなかつた。そして一心に「主よく」と祈つた。これが却々出来ない事である。先生は最後に今日我々の努むべきは制度の改革よりも精神の改革で「御座ります」と結んだ。此の老先生のために、私は拍手せずには居られなかつた。

□旅の思出

烈日の下登る阪道 玉なす汗

ホノル、より二里 此處や何處

見渡せば開けし眼界 天下の壯觀

吹上る涼風一陣 覺えず戰慄す

嗚呼忘れ難し ヌアヌバリ

熱帯の地に早や一年 勞れし我

七日の旅大洋こえて 入る金門

迎ふるは天使と山羊 大小の島

内村氏は來られなかつた。出口の所に若い婦人が四五人ひそくと話してゐた。

附記

筆者は此稿を草するに當りテラーの獨乙史及び柏井氏の基督敎史を參考としたり、然れども石原氏の講演は専門的なりしが故に之が理解と報道とは容易にあらざりし也。此の稿を發表するに當り罪を石原氏に謝す(KO生)

小野田耕月

五月肌尙寒し

船上の朝

嗚呼忘れ難し サンフランシスコ

喘ぎく昇る我汽車 歩みおそし

思になやむ旅の夢 まどかならず

車窓より見る月影 白く照す

溪間千秋の雪 夏やいづこ

嗚呼忘れ難し シーラネバ

ります。見物人は繪葉書の一端を此煙で焼いて記念にするさうです。私共は奇妙な形をなして居る岩を背景にして記念の撮影をいたしました。

キラウエーの山頂に残つた夕日の影もいつしか消へて、溶岩の平原には既に暮色が漂ふて來ました。今まで秘密の中に閉されて居た五百尺下の坑底は天啓の如く突如として私共の前に展開せられました。私は默示録の著者の筆を以てしても容易に此美觀、此壯觀、此奇觀を書き出すことは出來まいと思ひました。世界に二つしかない火山といふことですから、それも其筈です。

坑底の面積は約十五エーカーといふのですから、先づ早稻田大學野球運動場の四倍であると想像すれば宜いのです。坑底の三分の一は黒き熔岩で、三分の二は燃ゆるが如き溶岩であります。私は便宜のため黒き部分を陸と呼び、燃ゆる部分を海と呼んで置きます。火山が殊に活動する時には坑底全部が火の海となり、殆んど満潮といつた様に水面否な火面が三百尺も高くなるといふのです。私共が參つた時には言はゞ干潮で、三分の一

だけ陸地が現はれて居ました。満潮時には何分早稲田運動場の四倍もあらうといふ坑底が一面火の海となり、沸き返り煮へ返りて、地獄の火も斯くやあらんと思はるゝ程の壯觀を呈するのでありませうが、干潮時の光景は壯といふよりも寧ろ美であると感じました。

三分の一を占めて居る陸地は三分の二を占めて居る海よりもレザエルが高いのでありますから、海陸の境界線を爲して居る所から絶えず沸々と吹き出す溶岩は火の海となつて徐々に陸地と反對の方に流れ行くのであります。陸と海との境界線は參差錯雜して得も言はれぬ美觀を呈して居ります。晝間に水蒸汽の間から折々鋸齒狀の光が隱見したのは即ちこれであることが分りました。

これだけでも充分に見物人を満足せしめ得る程の光景であります。三分毎位に坑内の静寂を敗る變化が生じて來ます。海陸境界線の所から、或は陸地の思ひがけなき所から突如として四五丈の高さに鎔岩が噴騰します。其が岸壁に打付かり、

火山旅館の下には廣大なる噴火口が展開せられて居ります。噴火口は二重になつて居て、大なる噴火口の内に更に一段低くなつて小い噴火口が出来て居ります。大なる噴火口の周囲は二十哩もあると聞きましたが何のことはない羅馬のアムフィシエターを幾百倍幾千倍にした様なものです。數十丈の岸壁が見ゆる限りハッキリと限界をなして居るのは如何にも壯大なる光景であります。小噴火口は周圍が約五六哩で其中央に現在の噴火口が盛に活動して居ります。想ふに昔の噴火口が漸次小さくなりて今日の様になつたのでありませう。大小の舊噴火口は全く往時に於ける恐ろしき光景の遺跡であるといふことが出来ます。

舊噴火口は見渡す限り凝結したる黒い溶岩の平原であります。其真中に白い水蒸気が渦巻いて立ち昇つて居ります。私共は暫らく旅館の入口に立つて此雄大なる景色に見とれました。

旅館の下から岸壁を降り、波の様にウネ／＼した溶岩の平原を一直線に歩いて行けば二哩半で水

蒸汽の立ち昇つて居る所に達することが出来ます。若し歩行するのが厭であれば自動車に乗りて六哩許りの道を迂回するより外ありません。徒歩して其の夜火山旅館に一泊するか、自動車で行つて其晩ヒロに歸るかといふ經濟上より割出した議論が行はれましたが、結局自動車説が勝利を得ました。

私共が現在の噴火口に着きましたのは午後五時頃でした。濛々と立ち昇る水蒸汽のため坑内は明瞭に見えませんが、時々水蒸汽の薄くなつた間から電光の閃きの如きものと鋸齒狀をなした火光が瞬間に現はれては瞬間に消へます。私共は其真相を究めんとて瞳子を開きて坑底を見詰めますけれども、水蒸汽の熱と硫黄の臭氣には永く堪へられなかつたのです。三分每位にはズドンと大砲の如き響がして、パチャパチャと水が岩に打付かる様な音がします。私共の好奇心は益々ゝられたのでありますけれども、日の暮れるを待つより外はありませんでした。噴火口の近傍には此處彼處に凝結した溶岩の罅隙から煙を吐き出して居る所があ

斜に夕日が窓にさしこむ鐵道馬車の中より見たる
マーブルグの初印象はまづこんなものであつた。

且の宿は新開地のフリードリッヒ街の三階のフラットであつて、女主人は五夫人といふて老いたる良人と姉弟の小さい子供が二人ゐた、翌日の午後且は僕を案内して講習會長の私邸を訪問して入學を申し込んだ。その夜開會式が市立工業學校かの講堂に催された。且は親切にも同伴してくれた。

獨逸語を讚美した演説があつた、僕には能く解らなかつた。最後に會長が起つて報告をした。一堂の男女約百名、會長が國籍を呼ぶ毎にその國々の人々は起立した。一番多かつたのは露西亞の人々で、廿名近くもあつた。これに次ぐ日英、佛、伊、米、等で、ハンガリー、ノールウエー、瑞西等もあつた。多くは男女大學生もしくは教員である。日本と呼ばれた時に起立したのは僕一人で、甚ださまりが悪かつた。滿堂の視線殊に露西亞團の視線は期せずして僕に集まつたらしいので、僕は起立するや否や着席した。

翌二日朝より授業があつた。八時より十二時迄である。最初に獨逸語作文の練習があつて、全體が二部に分れた、作文の成績に基いたのであらう。

新參者は何處でも御互に遠慮するものである。況して國を異にし、人種を異にし、職業と目的とを異にする個人の群れであれば、何となく打ち解け難いのは已むを得ない。しかし次第に顔を見知る、名を覺ゆる、お早う位の挨拶をするやうになる。

授業のあはひの小園の散歩に色々な話しをするやうになる、教場に於ける失敗や奇答や何かでいつの間にか面相を崩すやうになる。かくして國と國との境ひや人種的高慢や凡てかゝる類ひの物は初日に一寸消え二日目に二寸消え、三日目に三寸消え、段々となくなりて教場に於ける親しみがつくやうになつた。程よく米國に永らく留學してゐたK君がやつて來て日本人は更に一人を加へて稍々優勢となつた。

講習會は午前に授業をやり、水曜と金曜との午後は郊外運動に出かける規則である。三々伍々群をなして一二哩離れたる丘や森や河のほとりに

火の瀧となり雨となつて眞黒な陸地の上に碎け散る有様は何と言つて形容したら宜いでせう。私はとてもこれを寫し出すことは出来ません。

十五エーカーの火の海です。これ程の壯觀を呈して居るのですから、若し周圍二十哩の大噴火口が一而の火であつた往時キラウエーの山頂からこれを眺めた光景はどんなにあつたでせう。私共はかういつた様な想像もして見たのであります。

私共は一時間の後飽かぬ光景を後に残して旅館に歸りました。旅館の客室に在る火爐には大きな木の切株がトロトロと燃えて居りました。暖かき晚餐を食したる後再び自動車にて三十一哩の途を飛ぶが如くに下りましたが、冷氣が身にしむ様で、私共は毛絲のシャツを被たのであります。八月の暑い最中、而も熱帶の地に來て斯様な經驗をしようとは全く豫想しませんでした。

□ マーブルグの夏

うちがさき生

指折り數ふれば早や五年の昔となつた。僕は獨逸語の復習をする目的を以て英國より獨逸に渡つた。ヘッセ州のマーブルグには昵懇の英人の亘君が其地の大學にて宗教改革史を專攻してゐるのがある。この男に照會すると丁度詔向きの講習會があるから六月末日迄に到着せよとの返事があつた。

あつ苦しいロンドンのゆふべ、朝の波のいろ涼しげなるオステンド、眞晝の光眩ゆきばかりのウオーターローの古戦場、歐洲物質文明の縮圖たりしブラッセルの大博覽會、大江の水洋々たるラインの巨流、書のごときハイデルベルグとフランクフルトの舊都、走馬燈のごとく去來して七月一日の午後三時頃マーブルグ市の停車場に降りた。

亘君が微笑をしながらよくまごつかずして安着したと言はぬ計りに歡迎して呉れた。亘と僕は二個の旅行用鞆をさげて古々しい鐵道馬車に乗り古い都會、小さい田舎の都會、又四圍には遠近の林巒聳え且つ連なつてゐるから山間の大學市である。

これは萬更の御世辭のみではなかつた。僕は彼等にニヒリストがゐないかなど、からかつてやると面見合せて笑つてゐた。クリミアの女教師はツールゲチーフが大好きだといふてゐた。彼等は僕に日本の童話を聞かせよと迫るから桃太郎の話の中に古代の帝國主義の理想があるのだと説明してやつた。佛蘭西からの男女はいづれも洒々たる垢抜けした連中で散歩の時に足拍子を揃へてマルセーユの愛國歌を唱へた。伊太利の女學生のPはオリヅ色の小作りの太とくした女で、數學が専門だといふのであつたが、ダンテの噂などをしあつた。瑞西はゼネヴァ湖畔より來た婦人は可もなく不可もなく、一生懸命に勉強してゐた。ハンガリーの男學生などもゐたが、婦人共の勉強に及ばなかつた。瑞西の一老婦人は三十年も前にベルリンの下宿にて知り合つた日本の留學生がゐたと語つた。何ぞ計らんこの留學生は今日大學教授の某博士である。しかも第二回の洋行をしてその前年獨逸に來たのであつた。この事を語りたるに此婦人は今昔の感に堪へぬ顔をしてゐた。

言語の差、風俗の差、民族的利害の衝突はある。されども人情は東西その揆を一にしてゐる。教室と教師と教科書を同じうすればその間に理解と同情とが生ずる。歐洲にはかゝる會合がよく行はれてその社交的關係を親密にするのである。

三週目、四週目と立つは早く、境遇の變化と交友の面白さと、語學研究の熱心とに知らぬうちに會期の終りに近いた。かうなると御互一種の離情を感じざるをえない。七月の末の或ゆふべ、ラン河の上の森の中の茶亭に閉會式が行はれた。簡單なる食卓を圍んで、會長や教師の演説、講習生の總代の演説は數から棒に僕に指名されたので、日本語の即席演説なら御茶を濁すといふことも出来るが、獨逸語の演説は生れて初めての冒險である。されど今更敵に後を見せるも殘念だから、起立して三四分間やつてのけた。文法の間違ひなどはいくつもあつたが聲丈は太いから、やん／＼と喝采された。露西亞團は特に成功を祝してくれた。それから歌やら踊やらで、露西亞の國歌の悲調を

ゆき、其處の茶店に休憩し、歌ひ、舞ひ、しやべくつて夕暮歸るのであつた。或時はマーブルグ市の中央に屹立するゴシック風の古城の内部を見物した。宗教改革の當時、ルーテルとツウィングリールとメランヒトンとが會議を開いて、ルーテルが頑として聖堂式のバント葡萄酒とは基督の肉と血とであると主張したる歴史的記念の場所である。十八世紀頃には牢獄に使用せられたこともあるさうな。或時は中世紀の女聖エリザベスを葬れる古風な寺院の見物に出かけた。或時は榆や樺の並木の蔭を辿りて二哩も三哩も歩いた事がある。或時は葉山繁山の幾つかを越えて農村の小さい茶店に憩ひて汗ふき流して一杯の粗茶に渴をいやし歸途は別の道筋を通り四等車の一室にぶらさがつて思ひ思ひに歌ひかはして歸つたこともある。

かゝる程に最初の二週日は過ぎた。この間に三十名足らずの級友の情味が餘程深くなつた。ロンドンの神學生Jは溫厚のうちに眞面目な處がある、英語が便利なので、よく話しあつた。もう一人ケンブリッヂ大學の金持の子らしいWは順揚に

して交際がうまい、ピアノを弾き且つ踊る。家庭教師でもして居るらしい一英婦人は遠路の道すがら僕等に英國の俚語を教へた。佛露伊など混ぜりあつて英國の歌を稽古するなんて随分滑稽なものであつた。露西亞人ではウラル山中の一都會の生れてペテルスブルグ大學の史學科にゐるといふ六尺ゆたかの女、金髪波のこたく双肩に垂れた。モスコイ醫學大學の女學生Mは小作りの女で却々の勉強家、瘦せて小さい何とかいつた女は日露戦争のことをK君に聞き、その從軍談に興がりてゐた。餘計な事をも苦笑したる露西亞男子もゐた。波蘭のNといふ娘さんは金持の娘で嫁入の資格の一つを作るために獨逸語の稽古に來たらしく、頭腦はあまり善くもなかつた。それでも日本人には敬意を表してゐた。僕は或時に露西亞の婦人團に露西亞文學談を持ちかけた。兩方共に不完全なる獨逸語であるから思ふやうに話しは出來ぬ。然るに彼等は僕を二十一二歳の青年であると考へてゐる、クリミア近くの年増の女教師はそんなに若いのに露西亞のことが明るものと感服したが、こ

□ 島の夏

稻 村 生

不斷光院の深夜の鐘の音の響き渡る頃、鹿兒島港を解纜した二百噸の小蒸汽船が、航行四時間にして黎明の空に一味の曉靄を望む頃、遙かに一條の島影が夢の様に浪の上に浮き出て居るのが認められます。それが鐵砲と薩摩諸の最初の傳來地を以て、小さくて何の取柄もない島でも、可成り有名にされて居る種子島であります。島は周圍が三十七里、最高地でも海拔一千尺許、全島鬱蒼たる綠樹に被はれた、水氣の勝つた海洋中の一孤島天然の恩恵を豊かに受けて、島の人々は半農半漁の平穩にも幸福な生活を營んで、昔の儘に純朴で質實な然し單調な生を送つて居ります。今私は其島の夏の一瞥を書き綴つて、盛夏の苦熱になやむ都の人々に涼味を頒ち度いと思ひます。

南の島の夏と云へば多くの人達は赭きつける様な暑つさを想像されるでせう。併し細長い島は

西岸から東岸まで廣くて二里、足らずですから、廣ろい海洋を渡つて吹いて來る軟かな海風が、盛夏の極暑にも茂げり茂げつた綠樹に碎けて、サラサラと膚觸りよく廣い芭蕉の葉を吹き拂つて居ります。それでも直射する太陽は時には寒暖計の九十を數へさす日がありますから、巖の間を破つて并る清水でも、百姓連の汗を洗ふばかりでなく、甘露に優る美味となる丈けには暑つさを覺えます。

南島の夏は果實の芳醇な香りに満たされて居ります。初夏の楊梅、枇杷から、中夏盛夏へかけて李、水蜜桃は勿論、黄金の房の様に枝もたわゝに熟したバナナ、只バインアップルの甘美を缺くも、其他には數へもされぬ種々の果實が、畑や山の木々に實つて居ります。若しも旅人が百姓家を訪れて、白銅一つを投げ與へさへすれば、其人は黄顆累々たる樹に攀ちて思ふさま爛熟した果實に飽滿し得るばかりでなく、家苞には片手には持ちきれない程の籠を携げて歸る事ができます。徒ら盛りの少年連は、自園の果物に飽きて來ると、深夜に二人三

帶べるなど森の中に響き渡つた。僕等にも踊らぬかとか教へてやるとか色々の催促があつたが、僕は五君と共に屋外の大樹の蔭のベンチに腰掛け、弦月古城の上に照り、その光きら／＼とラン河の瀬に碎け、マーブルグの街は薄もやに包まれて美しく電氣の光が洩れてゐた。中よりの催促は拒むに由なく、僕が詩吟して五君が踏破千山萬岳煙を舞つた。劍はステッキを以て代へ簑笠はポーランドの女學生の黒の外套を借りた。この蠻風には満堂の才子佳人も驚きの眼をみはつたことであつた。

一河の流、一樹の蔭、袖すり合ふも他生の縁といふ。まして一ヶ月あまり机をならべて同じ文學の道を通り、兄弟のごとく、友のごとく交はり、明日は東西向ふ所を異にして、銘々の異なる國語と傳説と宗教と風俗と習慣とに歸らんとす。多少の離情なきを得ない。夜ふけて涼味水のごとく清し。一行數十名手に／＼赤提灯をさげて町に歸つた。全市睡眠の支配の下にありて、死の國のごとく静かである。思ひ／＼の下宿の前にてアウフウ

イーダーゼーヘンとほんとうに心底より言ひかはした時は何ともいへぬ淋しさを覺えた。

當時の教師にして今日は國境に苦戦しつゝある勇士もあらう。否既に魄を天に委ねた人もあらう、英佛露の諸友、諸君の運命を神ならぬ僕のいかで知るを得べき。諸君はヘッセの寶珠と歌はれたるマーブルグに文藝を慕うて集つた。今や列強獨の四周に大軍を集中してゐる。當年の佳人今は未亡人となつて喪服をかつぐもあらう。當夜盛裝して舞へる淑女達よ、諸君の顔にはたゞ涙痕を認めらるゝみではないか。

東京郊外の夏は涼しく、茂林の中、晝は黃鳥の聲を聞き、ゆふべは梟の鳴くを耳にす。満目の綠色、をのづからマーブルグの城山を聯想せしむるのである。あゝ天地の美は永しへに同じくして、何すれど國と國とは戦ひ、人と人とは殺さざるをえざるか。あゝ。

實を語りました。さうして尺餘の伊勢蝦も白銅一枚に代へられて了ひ、ヤガテ一合の焼酎シヨウヂウに代へられて漁師が晩酌の盃にあふれます。

汐干時には殆んど凡べての村人が海岸に半日を過します。殊に閑の多い私達は、朝露の降り敷いた砂を踏んで降り立つた濱邊を、夕陽に送られて歸る迄丸る一日を海に過しますが、中にも中食の時程の愉快はありません。鮮魚は或は刺身に或は焼物にされて結び飯の六七を平氣に空腹に送ります。それに今一つ都人士に思ひもならぬ甘味は西瓜の丸喰ひです。漁場に行く海岸の畑には西瓜が熟して居りました。それを一つ宛抱き乍ら海岸に運び、海に入る前に、鳥カラスの見つからぬ、水の冷たい岩隱カクレの砂の中に埋めて置きます。中食の時にそれをとり出すと氷で冷やした程に冷えきつて居ります。其頭に丁渡掌大の穴を穿ち、そこから白砂糖を詰め込んで置いて十分も経つと、海水に浸して洗ひさらした清淨な手を其穴に突き込んで、西瓜の中實を搔き廻わし乍ら、砂糖に満ちた赤肉を

引き出して頬張るのです。其の美な味ひは何に譬へたらいでせう。其時こそは精養軒や帝國ホテルの料理が天下の美味と舌鼓打つて居る人々を心から氣の毒だと思はずには思えません。

習々と吹き送る海風に吹かれ乍ら、暗夜の瀬釣りには最も詩趣に富んだ漁の一つでせう。太陽の餘光が西空にあとを絶つて、闇に被はれた海面に、鱗光の閃めき出づる頃から、鳥かげや岩の上に釣を垂れる人の話聲が深夜までも絶えません。懐かしい船唄の聲が、波の動搖につれて海面を擴がり行く景趣を語るには、私の口には餘りに不調法です。それからそれは皆様の御想像に御まかせしませう。併しさうした一夜の釣りに尺餘から二尺近い莖蒲鯛が二つ或は三つが釣れる事は、決して珍とするに足りない事は申し添へなければなりません。

それから今一の奇拔なのは岩を穿つて落ちる小瀧の瀧壺の冷麥喰ひの興味と美味です。清らかな岩の峽を落ちて流るゝ小さな流れが、時に五寸の小瀧と落ち、方尺の瀧壺を穿つて水を淀ませて居ます。其所に冷麥を運んで、瀧壺を天然の井にみ

人と群をなして、他所の果物畑を襲撃します。

それを酷く咎め立てする程、こむつかしい道學先生も居りませんから、それも大抵迄は少年連の遊戲と見なされて、了ふ程、島の畑は果物に豊かです。

月に七日の汐時には、村中の老若が汐干狩に打ち群れます。水成岩の平坦な岩が十五町許の副員を保ちつゝ、斷續しつゝ海岸を繞り、其上を石炭岩が被ふて魚貝の寄生の便となつて居ります。島の人達は其の淺頼をハエと呼びます。其ハエは汐干時になると深かい所で一二尺、高い所は海面に頭を擡げます。時には十坪、二十坪の洞穴が穿たれて淵となり、汐干時には魚や蝦を集めます、岩の間や方尺許の石の下には、鮑を初として名も知らぬ幾十種もの貝類、蟹類が群れて居ります。どんなに不氣容な村の娘連でさへ鮑の十四五は屹度採れます。優れた女は一日に八十を數ふるは珍しい事ではありません。眼鏡を使つて水を潜る男連は、百五十を下つては今日是不漁だとかこちます。そしてそんなに探り上げられた鮑は、大

きくて一箇一錢、小さくて五厘で賣られて了ひます。岩の色とまぎらうばかりに日に焼けた裸體の男が、長さ三尺許りの竹竿を持ち乍ら、其ハエの上をブラ／＼と歩いて居るのを觀ます、その竹竿が或る岩の間の小さな穴の口に五六寸つき込まれると、臆がてぬる／＼と氣味惡い章魚の手が絡みついて來て、何氣なき體に竿をあしらつて居ると章魚は自身を穴の外に出して了へば、忽ち思ひ掛けなき伏兵の手にむづと攔まれて、漁師の籠に獲物の容を高めます。章魚は伶俐な魚だと云ひますが、遊戲ずきの性質が、つい人の誘ひの手に乗せられて了ふのです。蝦は淺くて一間、深くも五間許の淵の岩層の小穴に、其の長い觸手を出して居ります。海水眼鏡で探がし當てると、突き殺ろしては不味いからなど、贅澤な言ひ譯の下に、謂れも無く手攔みに生捕られます。嘉助と云ふ奇人の漁師は蝦とりの名人でした。彼が穴の中に手を入れて混ぜ返すと、幾匹ともしれぬ蝦が俄に飛び出して來るのを、兩掌と兩腋と、頸と股間とに、一と潜りに六匹宛は必ず生漁ると法螺にも似た真



那智の瀧にて

加藤 一夫

あゝ、もう瀧が見える、瀧が！

想つて居たよりも高いね！

想つて居たよりも美しいね！

あゝ、あれが那智の瀑布たきだね！

—— 那智の瀑布だね！

ほんとにいい。ほんとに高い。

緑り濃き那智のお山の中腹に、

眞白な繊細な天女が立つて居る。

君はあの、われ／＼を招いて居る、

微笑んだ天女の唇を見ないか、

たをやかな白い手を見ないか、

たて、流るゝ清水に投じて掬ひ上げては喰ふのです。幸に三尺にも足らぬ間を置いて瀧壺ツボの井は連續して居りますから、三十人の同勢が二貫目の冷麥を運んでも、決して不自由は感じませぬ。

海が荒れるか、汐時でない時には、田甫タフの中の水溜を二人で二時間も汲み出せば一貫目の鰻ウナギはきつと負合はれます。網アミを肩にして河口を一間時往來して居れば少くも五十から百迄の水魚は魚籠に満ちます。

野にも海にも、天然の美味は捕るに委かせて然かも豊かです。餘り獲る事や食ふ事ばかり申し上げて恐縮ですが、池畔の讀書と樹蔭の圍碁にも飽き、赤陽を浴びて駿馬を馳駈するの愉快をも繰り返しては與もさめ、語らう友に乏しく觀るべく聽

くべし藝事もなければ、所詮はかうした殺生と食食とに、時と興味の大半を奪はれて了ふのです。

京都を除きては鹿兒島及其地方の一二ヶ所にのみ残つて居る祇園祭りの賑ひも、規模こそ小さけれそれ相應に華やかな祭の夜を偲ばせ、盆踊りも亦興味深かき思出に數へられます。

かうした事の外には島の夏は取り立てゝ御話とする程の事もありません。島の生活はかうして平凡に明けて平穩に暮れます。一日平均三時間宛働けば彼等は不足なく暮らして行ける位ですから、皆悠長に暢氣に、生活の苦味を嘗めないで極めて低い生活程度に安んじて居ります。巡查と小學校教師と、稅務署や小林區署の小役人達は、亦ない樂天地として薄給な身の生活の安穩を感謝して居ります。

あゝわが衷にある無盡の力は、
かの斷えざる水の力強い落下と共に、
限りなく紡ぎ出され、躍り立つ。

そしてわれ自らを忘れて、

智慧も、憤りも、慾望も、憂ひも

疲勞も計畫も、卑しい情念も

一切の幻は消え去つて、われはたゞ

幼兒のごとく喜び

自然のごとく無心となる。

あゝ無心よ！

偉大なる無心よ！

一切は消えて行くか！

——とこしえにあるものはお前ばかりだ！

古い木だね。この樹は

幾千年の月日を送つたらうねえ、

瀧を見る幾十萬の人を迎へたらうねえ。

慈悲に充ちたおどれる眼を見ないか。

……彼女の脚は見えないね。

みどりの衣のもすそに包まれて……。

瀧はもう眼の前だ——谷を隔て、向ふの山に。

われ／＼が瀧に近づいたのか、

瀧がわれ／＼に近づいたのか。

あゝ勇壯な戦士！

轟々たる響きは

あるひは高く、あるひは低く。そは

叱咤呶號の聲！慰撫の聲！

矢の樣にとびあつる

白く重い烟の塊、綿の斷片。そは

力をこめて聲と共に打ちあゝる勇士の手！

その手から揮ひ拂はれる白い汗！

ちぎれてとぶ力の精！

鹿野山

石田 三治

—— 昨年七月二十四日千葉縣旅行中の日記 ——

朝四時頃猛烈な蟬の聲で起される。主人公のS君に構はず起きて茶を飲んで居ると、T君が来る。三人で出かけたのは可成り遅かつた。T君と僕と袴を穿いて居るので、田で働いて居る百姓の目をそばたてる。鹿野山にかゝつて上りはじめた時、炎天と草いきて二人ともへとへになつたが、一番遅れたのはT君であつた。上の御茶屋が見え出した所でT君を待ち合せ、三人揃うて頂上の掛茶屋に休む。富士が遠いから脚下に見える。脚下の富士山と東京灣から吹いて来る冷風に汗を拭きつゝ、薄荷の菓子と茶とサイダーを取る。其からは平坦な道である。鹿野山宿に間もなく着く。海拔千二百尺の此高地に、此整頓した小都會が現出しやうとは豫想しなかつたが、一層鹿野山宿なるものゝ有無を知らずに來て思切り驚いて見たかつた。丸七と云ふ旅館へ入つて足を洗ふ。房總一眸の下に收る御座敷の心地よきつたらない。涼風ひつきりなしに訪れる部屋壁には、北白川二品親王宮東伏見二品親王宮のおとまりになつた事が書いてある。成程何處立派な庭園を持つて居られる方々でも、富士を樂山に東京灣を池に見る此處の景色には感心なされたらうなどと思ふ。其壯大な景色を眺め乍ら三人でいろんな話をする。飯前にT君に讚美歌を教へる、其間にS君は持つて來た本を讀んで居た。晝飯は割合にうまかつた。お数は

玉子料理だが、飯はよく焚けて居た。二時頃連れ立つて出かけ、神野寺を見に行くと、其處の廣い本堂の中で經机に向つて、文官試験を受ける連中らしいのが、傍目もふらずに勉強して居た。白鳥神社と云ふのが其傍にあつて、長い石の階段があつて其處へ行く様になつて居る。S君を下においてT君と上つて行くと下よりも風が強い様な氣がした。下りる時はT君も僕もだまつて居た。沈黙は此仙境に一番ふさはしい様に思はれた。長い階段を漸々下り切つた時、君はステツキを忘れたとて御苦勞にもまた上つて行つた。S君の讀書して居るあづま屋の所まで行くと下は絶壁である。其絶壁の下は有名な九十九谷の絶景、山陵の起伏今にも大波となつて押寄せて來さうに見える。T君の下りて來るのを待つ間、手持無沙汰に四阿屋の落書を見る。九十九谷の絶景を見ては、流石に落書も不真面目なものが少い。たつた一ツ十九の少女が戀の煩悶を訴へて居るのが、萬綠叢中紅一點の感じを與へて、多くは頼山陽の出來そこない的文句ばかりである。たゞ一つ奇抜な俳句があつた。『貳一ツ貞女の帯を解かしけり』何と云ふ意味の深い貳だらう。何んな氣で此魔靈境で此句を思ひ出したらうなどと思つて居るとT君が来る。丸七へ歸つて湯に入る。金つばを食つて下山の途に就たのは六時頃、新しい道をとつたが其は兩方谷に臨んで馬の背の様な所なので非常に面白かつた。天神山村のS君の所へ着いた時は暗かつた。(了)

あゝ、もうわれわれは瀧壺に面して居る！
死の様な冷たい風！雨の様な醒さい飛沫！

君よ、もつと近く瀧壺に行かうではないか。

苔むした湿つぽい光を踰えて……

雫をためた樹の間のしげみをくぐつて……

着物が濡れ、麥藁帽子が萎れても何であらう。

足をすべらして瀧壺に捲き込まれても何であらう。

何ものよりも強い何かの力が

われ／＼を誘ひさ寄せるでないか。

あゝ不思議な本能！

われ／＼が永劫の住家、虚無！

無心なる歡喜と踴躍！

冷たい唇の愛の接吻！

夕方村のステーションに着くと、家内が子守りを俵れて待つてゐた。僕は子守りから可愛い子供を抱き上げると子供は急に泣き出した。子供は父の顔を忘れたのであつた。そして恐がつたのであつた。その時僕も孤獨の悲哀におそはれて泣きたいやうな氣がした。

僕が父の家に歸へると間もなくT君から『君に遇はないで残念である』といふ意味の手紙が來た。僕が集鴨の寓居を去つた後にT君が來たらしかつた。そして少量の牛肉と數片の野菜とを買つて持つて來た。これは一ぱい呑むつもりであつたかも知れない。僕はT君のこの無邪氣なそして赤心をこめた手紙をよんで涙がこぼれさうであつた。そしてT君にお金を使はせたいには氣の毒であつた。僕はT君のあまりに富んでゐないことを知つてゐるから。

昨年の夏T君を故郷に送つた時は、自分は少し勇氣を持つてゐた。けれども自分が故郷に歸る時はT君に同情しないわけに行かなかつた。T君は歸へる僕に同情してくれたのは事實であるが、僕は奮闘の巷に残つたT君を哀れに思つた。これはいかに女々しいやうだが事實さう思つたのだ。T君も屹度私に心細く思つてゐるに違ひない。何故なれば彼れは同情者が少いから。

然しT君は本年の一月非常の決心を以て奮闘の巷に立つた。彼れは運命を征服せんとして雄々しく戦ひを初めた。彼れは今人生の荒浪の眞只中に戦ひつゝある。彼れは遂に運命を征服するに違ひない。彼れは常に、『吾々は運命と永遠に戦ひ、永遠に捷たねばならぬ』と言つてゐる。彼れは近頃ロマン・ローランやペエトオフエンやトルストイなどの、飽迄運命や虚偽や暗黒と戦つた雄々

しさに憧れてゐるらしい。

僕が自分の郷里に歸つた當時は、何だか傳説の國へでも來たやうな氣がした。村も町も山も川も丘も原も森も林も、凡て遠い過去の記憶に残つてゐる傳説を持つてゐて、悉く美しくそして懐かしく見えた。然るに日數が經つに隨つて斯うした氣分はだんだん薄らいて、遂には見るもの聞くものが凡々平々になつて了つた。

自分はこの搖籃の地たる平原のある小高き所に、吾々の父たるうつくしい太陽と母たる阿武隈川の清い流れとを朝夕眺め得る莊嚴な場所に、小さくて綺麗な茅屋を造つてそこに靜かな思索生活を送りたいと想像した。恰もマイン河の畔りに優游自適の生活を送つた偉大なる哲人のやうに。これは自分の少年時代からの希望であつた。けれども自分の今の單調で無味乾燥な勞働生活は、自分の思索すべき時間と能力とを奪ひ、將に來らむとする予の運命はこのすてがたい希望を自分から取り去らむとしてゐる。

これが自分の最も苦しく思ふ所である。

自分は少々小使錢を得ようと思つてふたづきばかり前から今の勞働をやり出した。これさへ他人の世話でやう／＼とりつたのである。仕事は勿論何等の興味もない。そして自分には適當した仕事ではないのだ。僕は少しばかりの生活費を得る爲めに、コンナいやな仕事を爲さねばならぬかと思ふと實に情けなくなる。いかに單純な勞働でもそれ相應に頭腦と身體とを使ふ以上、逆も落ちついて思索すべき餘裕はない。

人間が食ふために勞働し食ふために他人に頭を下げるほど痛ましい悲劇はない。生きるといふことはいかに強い要求であつても、

郷里に歸へりて

野村 生

僕が郷里に歸つたのは四月一日で、『自我の研究』を出してから間もなくであつた。早く歸へる必要はなかつたのにたゞわけもなくとり急いだので、あの本の批評を親しく友人から聞くことが出来なかつた。

僕は歸へる前にも一度、あの心から融け合つて少しも隔てや隠しのないしんみりした會合の中で、自分の敬愛する懐かしい先輩や友人の口から赤裸々な批評を聞かうと思つてゐた。けれどそれは遂に不可能であつた。とりわけ親しくしてゐた友人又は常々お世話になつた人々にすら、個人的に遇ふ機會がなかつたのである。否自ら機會を作らなかつたのだ。自分は寒山を下る溪流のやうに東京を去つたのだ。

僕はあの時、星のきらめく天上から暗やみの地獄へ墮ちるやうな氣がした。山の絶頂から谷底に追ひ込まれる哀れな羊のやうに思つた。運命の河を流れる自分の赤裸々な姿がいかにみすばらしく見えた。豚が黄金をふみ蹂るやうに、自分は自分そのものを惜しげもなく脚下に踏みにじつて居るやうな氣がした。哀れな自分を踏みつけてゐるものは、獷猛な運命の蹄鐵のやうなボオであるか、或は運命よりも遙かに崇高なセルフであるか、自分には全く解らなかつた。

僕はたゞ夢のやうに何うしても避け得ない不可思議な畏の眞たゞ中に、トップリはまり込んで居るを見出した。この突然の自覺は動もすると自分を最も恐ろしい深淵に導き去らんとそゝつた。然し自分はあくまでそれに抵抗した。

自分は恐いやうな忌まはしいやうな何ともいへない厭いやな氣がした。けれどもその中に一種の勇氣もこもつてゐた。

上野や向島の櫻花も見たかつた。帝國も一度は見たかつた。(僕は東京でまだ一度も芝居を見たことはない)。教會にも一度行きたかつた。K先生や奥様にも親しく逢つてしんみりした話をしたかつた。然しそれらは何でもない事だ。たゞT君、T君一人に歸へる晩遇えなかつたのは残念で堪らない。

僕の歸へる前日にT君は訖度來ると言つた。けれども來なかつた。歸へる當日も半日以上淋しく待つたけれど、遂にT君の姿は見えなかつた。僕は隣りの奥さんにT君の蓑蓑帽子とステッキとを頼んで、あの棲馴れた寓居を惘然として立ち去つた。そして二度途中から振り反つて見た。

尤も僕は近い内に亦上京して友人や先輩に遇ふことが出来ると思つてゐた。だから歸るのはそんなに悲しくはなかつた。何も知らない人は『近日御歸省の由嘸およろこびの事と存じ候』などと、丁度學生の歸省でも祝するやうな手紙さへ寄越してくれた。しかし上野の停車場で、送つてくれる友もなく挨拶する人もなく唯ひとり煤ぼけた三等室の隅つこに蕭然腰を下ろした時、俄かにいやな氣持がした。それが動機で更にいやな運命のアーメンガが自分の沈んだ心を一層重く壓迫した。

左の方は六疊敷位の臺所で大きい圍爐裏には火は赤々と燃えて鍋はブツ／＼と煮へ立つて、蓋は褐色な泡にグラ／＼と上下する醬油の匂は厭に鼻を突く。田舎料理屋と見えて、戸棚には使ひ古した正宗やビール罎や徳利やら亂雑に立つてゐる。罐詰の空になつたのもゴロ／＼轉つてゐる。右の八疊位の部屋には汚の目立つ布團に襪餅になつて寝てゐるものがある。その傍には檯檣にくるまつた赤ン坊はスヤ／＼と眠つてゐた、女はそこに行つて、何か囁いて居たが、やがて三十七八の赤黒い下頬のふくれた圓顔の男がムツクリ起きて来て、ドンヨリと光のない盞茶色の眼を擦り、胸はだらしなく露はれたまゝで「よういらつしやいました、何處から……はあ昨晩は高崎にお泊りでしたか、それはどうも……」など、獨りて早口に饒舌立てゝゐる。快活な威勢のよい男である、おしな三階を見て、おいでと女に云ふと、女はスタ／＼と梯子段を上つた……と三階から障子のガタビシする音や掃木のザク／＼する音がする。間もなく下りて来てどうぞこちらへと云はれるまゝに、あとについて梯子段を上る。グラ／＼して危つかしい梯子だ。一人でさへ心細い代物だ、まして二人一緒では聊か閉口せざるを得ない。だが、こんな小ツボケな梯子段からよし轉げ落ちたとて格別命には故障はあるまいと、妙なところに度胸を据ゑて上ると出たのは六疊間、その向ふにも部屋があるらしい。天井が黒くなつて暗い汚ない部屋だ、天井は鼠の尿で、疊は醬油で染め抜いたやうだ、染屋が七十五日かけても、とてもこの色は出せまいと思はれる。ツク／＼感心する。現代式の憂鬱詩人にもお目にかけたら早速お氣に召すことで御座らう。而し僕はいやだ、二階

さへこんなのに屋根裏の三階はどんなのだらうと内心は不勘憂慮して又危げな階段を上ると、案に外してゐる。疊こそ綺麗とは云へぬが、天井も障子も柱も凡て新しい。まだ木の香がする。壁も粗塗りがまだ白い。木に竹を繼いだとはこの事であらう。思ふに三階はよく田舎の宿屋などで見る建増しであらう。八疊と六疊とをブツ通しにしてある、外に泊り客がないうらしい、誰れもこんな危げな汚い宿屋に泊り歩く苦勞性はないわけだ、もつと氣の利いたところに泊りたいのだが宿屋はこの湖畔にこゝが一軒しかないのだ、外にいゝ加減な茶屋が三四軒あるきりだ。

隅の方に坐布團が十枚程積まれてゐる、この宿にはチツと過ぎると思つてゐると、茶を持つて來た女は、昨晩大町中學の生徒が七八人やつて來て馬鹿騒ぎをやつて歸つたと云つて、その中から一枚引き抜いて敷かせた。いづれ借物であらう。どれも申合はせたやうに古びて中には綿のハミ出したものもある。始めて讀めた、それにしても、こんな宿屋に七八人もそれも腕白盛りの學生が入り込んだ時の模様はそれは觀物であつたらう。梯子段などは可哀相に幾度もミシ／＼泣いたであらう。僕はそれを想像しつゝ出して呉れた洗ひ晒しの袴縞の單衣をゆるやかに着て、坐つて、番茶を喫つた。そして獨りて微笑んだ。お茶置は小さな黄色い田舎饅頭である、七ツハツ安ボイ萬古燒の井の中に行儀よく黙つて積まれてある。恐らくはその邊の駄菓子屋から御用を仰せつけたのであらう。田舎の菓子屋のお神さんは煤ボケた暗い臺所で、水はなをすゝり乍ら、黒いガサ／＼した手で丸めたものであらう。硝子の

それが單に食ふといふことの爲めである。限りは、何等の意味もあり得ないのである。空の鳥はつむぎもせず働きもしないけれど、猶生命を全うして自由の生活を送つてゐる。然るに吾々人間が懸命になつて働き續いてすら充分の衣食を得ないに至つては到底悲劇の極である。斯うした人間生活の不自然的な缺陷はいづこより生じて來たものであらうか。

僕の現在の努力はこの不自然な缺陷を自分の生活から取り除くことにある。

自分は一生を哲學の研究に委ねたいと思ふ。けれども食ふ爲めの勞働は最も大なる障礙である。思索瞑想の生活には大なる時間と大なる寂靜とを要する。然るにこれらは毎日の勞働と兩立しないものである。

カントやシヨOPENハウエルが獨身で靜かな生活をなしたといふとは洵に深い意味がある。哲學に一身を捧げむとするものは、一切を犠牲にする覺悟がなければならぬと思ふ。

僕は今田舎で全く孤獨である。友達は一人もない。たゞ東京の友人から送つてくれる雜誌や、いろいろの事を知らせてくれる手紙などの來るのを何よりの樂みにしてゐる。殊に友人の著書を唯一の友として讀んでゐる。友人の紀念としては著書より好いものはない。

近頃僕にF君といふ新しい友人が出來たのは非常に幸福だ。

君はこの七月大學を出た筈である。しかしまだ遇つたことはないのだ。郷里に歸へる前、是非一度面會したいと思つてゐたがとうとう遇はずにしまつた。けれどもF君は度々親切な手紙や繪はがき

をよこしてくれる。そして自分を深く啓蒙してくれる。僕はF君の深い思想と非凡の才とを愛してゐる。僕は永くF君と交誼を續けたいと思ふ。

(七月十二日故郷にて)

□木崎湖より

工藤直太郎

大地に喰ひついたやうになつた重い脚を曳づつて湖水の落口の小さな汚い宿屋の縁先に腰を下ろしたのは、小高い雑木の山の裾を糸魚川に走る通りは長々と黄昏れて思ひ出したやうに通る人の後から、黄色い塵埃が力ない光を孕んでポツと舞ひ上る頃であつた。山の縁の中から杜鵑の哀ぼく暗く音が洩れる、頂きから寛を引いてあつて、その水がドシ／＼と律を打つて沈黙——沈黙を繼いでゐる。その周圍に暗緑な落葉松が鬱蒼と茂つてゐる。寛の落口の萋滿は白い花を夕暮の空氣にポツと浮せてゐた、そこで白手拭で頬を包んだ女が蹲つて野菜物か何やら洗つてゐた、「今晚は」と聲をかけて宿に入ると、その女は内に這入つて來て「いらつしやいまし」と云つて赤い襟をとつてお仕儀をした。何處からと訊くので明科からと云へば「左様で御座んすか、明科からは随分御座います、お疲れでせう」と愛想よく云つて、バケツに湯を涌んで足を洗はせた」。

つて無數に湖上に滑つて轉がる。……夕闇はアルプス連亘に頭を擡^{いた}げてゐる白馬山の嶺から地下の潜力に吸ひ込まれる様に重く垂れ下つて、ヒタ／＼と湖上を這つて來た。冷たい白い夕日は消えて仕舞つた。

對岸の森の中にチヨコ／＼顔を見せて、高嶺を背景にしてゐる粗末な家々から、螢火のやうな光が洩れて湖上に流れた。山の上にはいつの間にか月が上つた。刃鋼のやうな月からは雫が垂れさうて如何にも冷たい。湖面を渡る風は身を切るやうだ。柱に倚りかゝつてゐた左の手の指は生がなくなりさうだ。單衣と夏襦衣一枚では無理だ。障子をぱつたり閉め切つた。といつか碌に掃除もしない様な煤けた五分心の洋燈は食臺の上に情けない光を放つてゐる。また波が高くなつた様だ、旅情の悲しさが波の動搖に送られて、胸に喰ひ入る様だ、あゝ今日は疲れた、早く飯を持つて來ればよい。夕食を済ましたら直ぐ寝よう。

□卒業の後

松尾 光 貳

世間といふものに第一歩を踏み入れようとして、彼は今大きな煩いに悩んで居る。彼が心に描いて來た哀しくも美しい幻影が、今その最後のいぶきを喘いで居るのだ。彼の心境を敵くあらゆる

事象は、皆一の焦點に集注して、此の幻影を焼き盡さうとする。けれども彼はその幻影を抱擁^{だつ}きしめずには居られないでゐる。破れぬやうに、壊れぬやうに、疵^{きず}はずにはゐられないでゐる。彼の大きな煩は其處に始まり、そして又其處に終つて居る。

二昔の八月のある日であつた。いたげな彼は廣い座敷に母と二人、折柄の颯風^{さふぜ}に父の安否を思ひ煩らつて居た。風は益々吹き荒んで來た、庭樹は倒れ、戸が幾枚か吹き飛された。母は必死に戸締りをして居た、其の時彼は吹きまくらるゝ庭樹に見入りながら、突然大きな聲を出して、うる覚えの唱歌を歌ひ出した。三度四度、彼は同じ歌を繰り返して颯風の調子に合せて居た。

彼の全部は、此の説明がよく物語つて居る。浪漫的なあらゆる環象が破壊しつくされた現代に、彼はやはりロマンティストとして生きて來た。さうした自覺に到達したとき、彼の同輩が或はトルペトイを讀み、ドストエフスキーに耽つて居る間に、彼れ自らは音樂に踏み入つて居るのを寧ろ自然であると思つたのである。彼は思想の貧弱に苦しみながらも、餘りに情熱の強きに藻掻きながらも、音樂は是非とも彼の進まねばならぬ唯一の脈路であると思つたのである。

彼はまた社會の有らゆる苦痛をなめて來た。そしてその度毎にいつも美しい友誼に泣かされて來た。あるひは飢餓の瞬間に、或は母と父との死の床上に、我身を悲しみ、父母を哀しむ涙をば、そのまゝに思ひあふるゝ感激の涙としたのであつた。

蓋^{ふた}の破れた菓子器に並べて幾度となく、蠅や田舎小供の汚ない手の觸るゝに委せたものであらう。少くとも東京あたりの饅頭よりは

そゞろ我は尊く、

おぼゆる。

オーブリースか誰れかど、エストモアランドのデアエントオラ
タア湖畔に住んで、遠くスキドンの高嶺の巍然たるを望んだ時に
から歌つたのを記憶してゐる。誰か湖畔詩人であつたと思ふ。

岸邊の暗緑な針葉樹の密林を背にしてお爺さんは網を投げる。
ザワ／＼と二三度鏡の湖面を破つて投げたが餘程漁れらしい。

崖上の川楊はこの灰色にヒヨ／＼した枝を湖水に浸して、湖面を渡る微風を孕んで、頭や肩を痛々しげに波打たせて啜り泣いてゐる。右手の水邊の赤褐色の水成岩の上には、榎だの山毛櫸だの水楢だの油(畫)繪式に水々しい緑が滴る様に茂つてゐる。その根元には赤紫色の鹽釜菊と薄紫色の藤の花が頼りなげに咲いてゐる隣りは安茶屋で、崖から湖水まで二間位棧を兩側に立てゝその上に粗末な狭い板を渡してある、棧橋の積であらう、その突鼻で十七八の娘さんは裾をからけて、赤い下着を見せて箆で米を洗つてゐる。牛乳のやうな下り水が箆から碧く澄んだ水にパツと廣がる丁度流散彈を一時に發射したように。すると鮒や赤腹が氷いで来て群をなして米の白い糟を食ふ。ボートが二艘、稻尾の濱から此方に漕いでくる。夕歸りであらう。互に競争でもしてゐるやうに櫓聲と舟首とを揃へてゐる。鉛色にドンヨリして、平和な眠りにつかんとする湖心に波打たせ乍ら櫓聲勇ましくやつてくる。櫓をかへすごとに白い山から流れる光にチラチラと銀色に光る。眩しい程に湖上に反映する。櫓から滴る入日を孕んだ水玉は金色にな

音もなく暮れ行く、

嶺白き山に向ふ時、

れど、かうした中にも、その自らの歌ごゑ、その面影の片鱗を
掴み得るのを喜ぶのである。かくてあらゆる嘲罵と凌辱の中に、
彼は明らかに自分といふものを意識する。

世間といふものに第一歩を踏み入れようとして、彼は今大きな
煩に悩んでゐる。けれどもそれは過去の過程を破壊しようとする
備ではない。新たな過程を生み出さうとする煩でもない。唯彼に
は貴い眞實と涙との美しい幻影が、彼の還境から亡びて行くのを
哀しむのである。運命には無力な彼は、今迄の路を踏み続けるより
外に生きようはない。飽までも彼には美しい其の幻影の姿と心と
を極めて、ひた走りに走り入るより他に生きようはないのである。

茶臼原の夏

院兒に代つて

また起床の鐘の鳴らぬから朝露を踏分けて暗い森の中や薄明る
い田の畔に僕等の仲間はずく／＼と音を立て、鎌を動かして居る
日の出る頃刈つた草を集めて或は籠或は束ねて厩に運ぶ厩の主は
嬉し相に鼻をならして之を迎へる。

快い朝飯を了つて學校に急ぐ校は天を幕とし地を席とした松林
の間、涼風時に習字帖を吹捲つて僕等を狼狽させる事もあるが睡
魔などの寄せて来る餘裕はない實に愉快な校舎だ。

勉學は苦もなく了つて農場に出る時烈日下に沖して居る黒光り
のする脊を日光に曝して暑い顔もせぬは僕等の特色勞働に疲れて

休む時炎天の下に佇立して新來の先生を驚かした事は一二度に止
らぬ。愉快な事には其先生達が僕等と共に田の草も取れば畑も耕
す唯休憩の時連も僕等の眞似は出来ぬとて樹蔭を指して急がれる
後姿を見て僕等は何時も微笑を洩すのである。

仕事の暇に僕等は小川や池に跳び込で元氣よく泳ぎ廻る下から
湧いて来るつめたたい水が身に沁るので中々長くは入て居られぬ。

正直の處嬉しいのは食事の鐘の音だ初の二三杯は知らずに口に
這入つて仕舞ふ院の特色の満腹主義夏も冬も殆ど變りはない之は
勞働のお蔭である水の煮え返る様な田の中で草取するのは決し
て樂ではない體を曲げて這ふ様にして水を搔廻して行くと腰の骨
は痛くなる油斷をすると稻の葉に眼を突かれる之を思ふと一粒の
米でも粗末にはならぬ。

熱い日影が肥日國境の連山に隠れて西の空は一枚の金屏風とな
る頃僕等は馬に乗つて河入に行く、いたづらな仲間は大聲を擧げ
て馬を驚かす中には棒を以て其尻を叩く者さへある油斷すればこ
ろげ落るから何時も用心して居る此様な風で皆達者に乗れる様
になる涼しい風に向つて馬を飛ばす心地は何とも云へぬ仲間の者は
美し相に見て居るがやがて鬼子が競走を始めて此様な事で晝の疲
れを忘れて仕舞ふ。

入浴や夕飯が済むと小さい者は早く寢床に入るが僕等は復習の
後お母さんや時々巡回して來られる先生にせがんでお話を聞くこ
ともある、やがて九時の鐘が鳴る一同頭を下げてお祈をする院内
シンとして外に涼い松風の音が聞ゆる許り燈を消しておやすみと
云つて床に入ると翌朝迄何も知らぬ夢一つ見ることもない。

恠うしてかれは一個のロマンティストとして現代に生れて來た
唯ググナーがググナーの時代にあつたのとは、他少の色彩の相違
があるのは、言ふまでもないことである。

*

*

*

*

*

かゝることの必然の結果として眞實と涙とが、彼には最も貴い

ものであつた。智識に劣り、思想に渴えて居る彼は、彼自身の生

命を其處に求めたのであつた。否、彼は偉大な權威に導かれなが

ら、かうした歸結に達したのである。彼は此の眞實と涙とを斷え

ず歌つて來た、ある時は有韻の歌として、またある時は沈黙のそ

れとして。高鳴る彼の心臓のうち／＼は、それが直ちに彼の眞

實と涙との歌とはなつたのである。然もその歌聲の哀しき響よ、

如何に聲高に歌へばとて、叫べばとて、それは唯廣野の眞中の小

さき響である。人の鼓膜を打つにはあまりに共鳴がなすすぎる。

人の歩を駐むる程の諧調もないのである。眞實と涙との此の幻影

を歌ふ彼の旋律は、離れ行くそが愛人の面影をと／＼むる程の魅力

もないのである。

湧き出づる親しみの心もて訪れた門には、徒らに嘲笑の聲を聴

いた。求めんとして敲いた門にはうべなり聲が聴かれなかつた。

多くの人は彼の迂愚を笑つた。彼の眞實を見る前に彼の學校を輕

侮した。彼は自分の腸を掴み出して投げつけてやりたい程にも思

つた。何故に人としての價値を認めないのであらう。何故に人間

の實質に觀入らぬのであらう。常に侮蔑を受けるが故に、自分達

は眞の人間になれるのだ、斷えず壓迫を受けるが故に力といふ確

信を握むことが能きのだ——彼はかう信じて居る。

彼の高唱する眞實の歌は、何等の共鳴をも四邊に起さない。彼
は新たに寂しい孤獨を味はねばならなかつた。彼が育て上げて來
た涙の結晶は、徒らに人の誤解と嘲笑の種となつた。けれど亡び
行くその幻影の姿を憶めて、彼は尙も歌ひ續けてゐる。歌ひ續け
て居る。

*

*

*

*

*

神秘な力に導かれて、彼は此處まで歩いて來た。行方は彼の知
る限りでない。

ワグナーの藝術の根柢となつて居るのは、彼の三十五年の前半

生であつた。けれど彼とても神秘の力のこの計畫を、豫知するこ

とは能きなかつたのである。ワグナーは唯導かる／＼まゝに漂浪も

した、苦しみもした、そして其の漂浪の中に、苦しみの中に、少

しづ／＼力を見出して來た。有らゆる困厄の中を、その力に引づら

れて來た。浪漫的時代の美しい最後の花は、かうして咲き出たの

である。今彼は此の偉人の生活の中に、多くの彼自身を見出さず

には居られなかつた。彼は自らをワグナーの天才に較べやうとす

るのではない。寂しき、哀しき環境の中を、一歩力に導かれ、育

てらるゝところに、異常な共鳴を感じたのである。ある人はトル

ストイに自己を見出すが宜い。ある人はイブセンに自己を見るが

宜い。それは外面的に畫一に定めらるゝ問題ではないからである

けれど歌はねば居られぬ彼、奏でずには居られぬ彼には、此の花

の下影にこそ甘きやすらひを見るのである。

*

*

*

*

*

*

幻影の亡び行く姿と心と——それは彼には哀しい事實であるけ

世が特に非國國教會同盟會長たりしジウエツト博士を宮中に召されて陪食を仰せ付かりしこともありしと記憶す。英國に於ける非國々教會の位置は日本に於ける基督教會のそれと類するのである。吾人は宮内省及大禮使官がかゝる先例を調査して基督教徒の代表者をも參列せしめらるゝやう取り計られんことを希望するのである。基督教徒も皆忠君愛國の至誠を有す、聰明なる 兩陛下は喜んでその微衷を酌ませ給ふを信するのである。

(一記者)

送らるゝ人々と迎らるゝ人

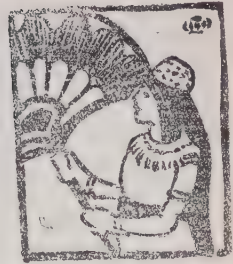
七月十日出帆の天洋丸は多くの乗客のうちにクレー・マコーレー氏、海老名彈正氏及び夫人を數へた。マコーレー氏は加州に於て八月開かるべき米國ユニテリアン及び他の自由基督教の總會に出席するため俄かに召還せられたのである。高齡の身を以てして日米親善のために努力せらるゝこの老宣教師の熱心に對して吾人は感謝せざるをえない。同氏は最近六年の間東京にありて平和運動、亞細亞協會、國際新聞協會等のために盡力せられしのみならず、基督教史及び自叙傳の二部の著述を完成せられた。精勤なりといはざるをえない。同氏は米國に於ける各種の會合に出席して日米間の誤解を一掃せんと期せらる。吾人はその使命の重大なる

を思ふと共に、大なる成功を齎して、再びクリスマス前後に於て吾人の間に來られんことを望む。

海老名氏及び夫人は在加州日本人會の招待によりて日本人啓發運動のために渡米せられたのである。これはギョーリック、マツシウス兩博士の日本に於ける運動と協力して、在米日本人を啓發せんとする運動である。海老名氏及び夫人は滿韓旅行を終りて、未だ座席暖なる能はざるに、更にこの行に上られたる、吾人は日本國民に代りてその勞を謝せざるをえない。海老名氏の識見と雄辯とは七年前加州に於ける同胞に好感化を與へしもの、この度の招聘あるは怪むに足らない。賢明にして淑徳高き夫人の同伴は在米同胞婦人に對する大なる慰安たると共に奨励となることであらう。

日置默仙八洲蟠龍兩師は桑港にて開かるべき世界佛教徒大會に列席のため、前者は天洋丸にて後者は近々渡米せられんとす。兩老師の行程甚なからんことを望むと共に大戰亂を機會に日本佛教徒が世界的活動を試みんとする壯舉の成功を祈らざるをえない。

文學博士姉崎正治氏は二年間ハーヴァード大學に於ける「日本の文學及び生活」の講座を擔當せられ、佛教及び思想を中心として講演を試みられ、多大の感謝と名譽とを荷はれて極めて健全にして歸朝せられたるは吾人の大に歡迎する所である。姉崎博士の講義通俗的巡回講演にあらず、ハーヴァート大學の必修科目として嚴重に學生を指導せられたるものにして將來聰明なる米國人に及ぼす影響甚だ多かるべしと信ず。昨年夏一時同教授の歸朝せられたる時、吾人はその見聞について學ぶ所少からざりしが此度も



時

評

御大典と基督教徒

の代表者

今秋行はれんとする 御即位式に神道各派の代表者一名、佛教各派の代表者一名にも参列を許可せらるゝ由である。管長は勅任待遇なればこの特典を與へられるのであらう。然るに國會議員は全部参列を許可せらるゝのである。十三派の神道と五十數派の佛教の代表者が二名に過ぎぬならば貴族院及び衆議院の正副議長が議員全體を代表しても差支ないかと思ふ。要するに神道も佛教も社會的實力を失へるよりかゝる結果を招けるものと考へらるゝ。然るに基督教徒に對してその筋より未だ何等の打ち合せもなしとの事である。基督教の

代表者には勅任待遇者なきためであるといふ一説もある。果して然るや否や。

それ 御即位の大典は國民の一大典禮である。

國民の教化に與る者は相成るべく多く参列を許可せられて然るべきであると思はるゝ。基督教徒は數に於て少なしいへども國民の教化に對する貢獻は甚だ大なるものがある。先般御内帑より救世軍に恩賜金あり、此度また同志社大學に恩賜金ありたるこれを證するものでないか。然らば御大典にその代表者を列せしむるも當然の事でないかと考へられる。

四年前英國のジョージ第五世の戴冠式に際して國教會の僧正のみならず非國教々會の代表者も参列するをえたと記憶する。殊にジョージ第五

を低下して、實用的教育の専門學校の内容を有するものを以て代へんとするのである。

此案は教育調査會において、大多數の委員によつて可決されたけれ共此案に吾人は反對である。大學卒業生を多く且早く出すによつて、國民文化は決して進歩するものでない。況してそれが専門學校的實用向のものにおいておや。學校商賣の教育家や、實業家などいふ連中は、單に物質的の打算から此改正案を是認して居るのである。よし此案が實行さるゝにした所が、現在の帝國大學を破るわけには到底いくまい、さすれば大學の上に現在の帝國大學をもつて大學院となすのであらうか。然ば大學院入學の希望者は現在の大學希望者數と大差ないこととならふ。かゝる低級改正案を口して進歩的などゝ稱するのは、不遜も亦甚しい。寧ろ吾人は大學教育の程度を高めたいと思ふ位なのである。之を低うせんとするものは、國民文化の敵であつて、眼前の實益のため國家永遠の發展を忘却したるものである。吾人は單に反對の意見文を茲に發表しておく。(菊川生)

時感一束

一

小學校教員某の體罰事件は遂に有罪の宣告をうけた。事實の真相を聞いて見ると、教授の邪魔をしたいたづら生徒が逃げる際轉んで少し許の傷を得たのだといふとである。體罰問題などゝ大騒をすべき程のとても無かつたらしい。一體體罰といふとを抽象的に論ずれば、當今の教育家共は人抵反對の態度をとつて了ふ。之

は場合と程度に依るとで、多少の體罰など硬教育の見地から見れば教員の自由權利である。之を法廷まで引出すとは甚しい誤謬で、只ですら教員の權威の墜ちて見らるゝ今日、益々生徒をして教師を侮蔑することになりはせぬか。さるにても此事について教育家側の強硬な態度を見るとが出来なかつたのは、遺憾に堪へない。

二

□近頃青年男女學生の自殺が頻々として報ぜられる。まさか暑氣の烈しいためでもあるまい。先には或小説家の作中の主人公の自殺から暗示をうけて、有望な學生が自殺した。自殺するものは薄志弱行といへば、それ迄であるが、從來の様な失戀とか家庭の不和や大失敗といふ動機からでないといふとは注意すべきである。卒業しても奉職口がなく社會は生存競争が激烈を極めて居る、専門學校高等學校への入學が亦甚だ困難であるといふとも、青年の元氣と希望を消沈せしむる原因であらふ。併し社會は如何にあるにせよ、直接其關係者たる教育家に、も少し學生に對する理解と同情があつたならば、斯る悲惨事の發生を防ぎ得るとは必しも困難であるまい。教室内にお於ける智識の切實以外に人格的接觸の温情ある教育を吾人は要求するのであるが、それも生活に追はれて居る教員に向つては苛酷な要求と思はれるであらうが。併し吾人はそれ程まで吾國の現狀を生活問題に喘いて居るとは見ないし又之を欲せぬのである。(巢丘子)

亦、多くの暗示を與へられんことを豫期するのである。

文科大學教授の服部宇之吉博士は姉崎教授に入り替りてハーヴアード大學に於て「日本儒教史」を講ぜられんがために、近々渡米せらるゝ筈である。經學に於て一家を成せる上に久しく支那に於て支那の生活を觀察せられたる同博士が日本思想の紹介者として姉崎教授と同様な成功あることを疑はない。

ハーヴアード大學の日本講座は五年間の試みであるが、吾人はこれが永久的基礎の上に置かるゝ日あらんことを望む。同時に先日哲學會主催の兩教授送迎會の席上に於て會長井上哲次郎博士の述べられしごとく帝國大學に於ても米國講座の設けられて、米國文明の根本的研究の盛ならんことを吾人は切望する。(内ヶ崎生)

岡山孤兒院幻燈隊

故岡山孤兒院長石井十次氏が『余に代りて天下の同情者諸君に篤くお禮を申上げてくれ』と言ひ遺された趣旨により同院の人々は幻燈を以て日本各地を廻り感謝報告會を開いて居る、近頃東京都に在りて既に華族會館や青年會館に於て盛大なる催しあり又統一教會に於ても週日其催しがあつた、感謝報告と云ふ名なれど其實同院の沿革説明は恰も偉人石井十次氏の一代記となり、青年にもとより各人に此上なき教訓となり傳道となつて居る、又日向茶臼原に於ける同院の農業生活の光景は炎暑都會人士に取りて一夕の涼味を感じしめしのみならず、無責任なる親を持つ都會の貧兒よりも寧ろ孤兒となつて同院に收容せしめたと思ふまで深く人々を感動せしめつゝあるお禮と云ふ意味の最も徹底したるものと思

つた次第である、而同院此度の舉が全々寄附金の募集を目的とせざるは慈善救濟事業のレコード破り彼のむやみに子供を使役して寄附を強請せる如き所謂慈善家に對して此上なき諷刺教訓であると思ふのである。

新院長大原孫三郎氏を初め石井未亡人小野田柿原鷹津同院其他の諸事務員主婦諸君がよく故院長の遺志を體得して慈愛と奮闘により今日の結果を得て居らるゝ事は感謝の極みである、又松本農學士の自ら進んで同院のため一身を献じて働かれて居る事は特に此際就職問題にて醜態を演じつゝある學校卒業者に對して無上の教訓であると思ふ、余は石井氏が『私は死んだらもつと働ける』と言ひ遺された事の眞實なるを信せずには居られない、此機會に際し特に世人の理解したる同情を同院のために與へられむ事を祈る次第である、(星島生)

學年短縮案を評す

教育調査會では菊地氏の學制改革案なるものを討議し、先づ學校の年限を短縮して、九ヶ年となす事を決議通過した。即ち現在の高等學校を廢止して、中學から、直に大學に入學せしめ、四ヶ年の後卒業して社會に出だすといふのである。此案の根本主張は、現在の大學卒業平均年齢廿六歳を低減して廿一歳となさんとするにあるといふ。詰り其結果として社會は活氣ある青年の大學卒業生を多數迎ひ入れるといふのである。

此案は又一方から見れば現在の専門學校を所謂大學と改稱せんとするものであるまいか。大學の數を増すためには、大學の標準

意志説に結び付け、こゝで著者の世界觀を作り上げ、進んで一元的多元論を以つて宇宙の秩序を述べて、意的唯心論をものし、更に自殺を以つて自己の意志に反すと爲し、處世法として意志の最尊第一たる所以を附加してゐる。記者を以つて之れを見るに、著者の人生目的論はシヨペンハウエルの世界觀の解説であつて更に一步を出てゐる居ないのみならず、現代道德の革新に對して既に過去の死骸である意的唯心論を取り出し來るは無意味の業であると共に、單に意志を以つて處世法の第一義とすれば、遂に知の判斷を缺き愛の缺乏となり、奔馬の妄動の如く貪慾の暴行に進む性質がある。これが爲めに儒教に智仁勇を並せ説き、基督教は信望愛を並せ説き、希臘人は眞善美を説き、倫理學は智情意を並論して居るのである。而して著者は人生の目的は生の擴張であると言つて意志に結び付けたが生の内容に關しては何とも云つて爲ぬない。生を性を性と謂ふと言つたやうな思想もない。天命これを性と謂ふと言つたやうな思想もない。喜怒哀樂を生と見たやうな思想もない。又現代文藝上の生でもない。只だ生は即ち意志であると云ふに過ぎない。

次に第三章身體の注意に於ては、著者は壽命を説き衣食住を述べ、運動を鼓吹し、其他諸種の衛生論を掲げてゐるが、專ら生理衛生論と同一であつて更に何等革新の聲を聞くことが出来ない。要するに身體に關する道德は歸するところ經濟道德と關係し論究すべきものである。如何に衛生道德論が名論卓説であつても最大多數の貧民には無用の長物である。著者は肉食を奨励するために、獨乙と日本との牛肉其他食料品の定價比較表を掲げて本邦食料費の高價なる所以を示し、漁業牧畜の奨励を叫んでゐるが、其の根本的解決の問題に觸れてゐない。我が邦では牛豚は贅澤品である。歐米の如く日常品ではない。それで我邦の資本家は此の贅澤品の供給に應ずる方針で牧畜するのである。故に自分供給に限度がある。狼りに牧畜を盛にして牛豚を濫造しても一東三文では資本仆になる。この理由からして我邦には牧畜が發達しないのである。それから谷本氏は我が邦の海岸線を説いて食用動物は無盡藏であると言つてゐるが、實際に於ては近海沿岸に於ては殆ど漁撈し盡して産卵期に於て何等法制の保護なき我が國の魚種は貪慾なる漁夫のために盡きんとして

ゐる。

遠洋漁業に關して無智にして無資本なる漁夫は兎も角く、内地の貧民を顧客とする遠洋漁業の不利より、世界を顧客とする事業の有利なるに炯眼な資本家は一文と雖も資本を投ずることを肯んじない。それで斯かる食料品の生産奨励又は其の物價の低廉は個人の事業ではなく國家の事業であり、國家當然の義務たるのみならず養民の第一義である。身體の健康に關する道德の革新論は須らく此の道德政策論に根柢しなければならぬ。谷本氏の物價定價表だけでは甚だ心細い。

第四章節制の必要に於ては、著者は禁酒論を載せ、禁酒の理論より進んで世界各國の禁酒運動を詳細に述べて、剩へ大酒家たる谷本氏自身の禁酒述懐談を加へてあるのは大に吾人を感動させるのみならず、氏にして果して言行一致であるとすれば氏は當代に於て青年の龜鑑たる人として尊敬せざるを得ないのである。

第五章迷信の破却に於ては、著者は迷信を破却して神道並に佛道の精選を勧め。

第六章孝行と忠義に於ては、家長制の由來より祖先崇拜及び忠孝の次第を説き、新なる

新刊批評

□道德革新論

文學博士 谷本 富著
大日本圖書株式會社發行

本書は著者が京都大學奉職中に半公開的に講義した草稿であつて、谷本氏大學講義全集の第一輯として今回刊行された。全篇を分けて九章となし、其外に一篇の附録が添へられてある。―序論、第一章善惡の標準、第二章人生の目的、第三章身體の注意、第四章節制の必要、第五章迷信の破却、第六章孝行と忠義、第七章男女の關係、第八章奢侈と美術、第九章成功論と武士道、附録歐洲最近思潮一斑―等である。著者は序論に於て、社會と人心との關係を説き、進歩と保守の論を爲し、社會改良の第一義は舊來の陋習を打破するにありと爲し、進んで世界の大勢を説き、眞の教育は斯の大勢の趨く所を洞察して以て將來有爲の新人論を養成するを期するにありと爲し、更に大學教育の任務を以つて新時勢の豫言となり社會の指南者となるにありと爲し、其れには先づ大學の講壇に於て道德革新の方針を論述して我が國教育の内容を改善し眞個

の國運振起の基を定め、爾來の陋習を一洗する必要があるといふのが本書の旨趣である。

其の第一章善惡の標準に於ては、著者は先づ價值批判の困難なる所以を説き善惡標準の動搖を述べ、君主、神祇、良心の三標準を掲げて民衆の世評と爲し之を以つて道德革新の一大障害物であると論じ、進んで功利論を審議し、一轉して著者の見所に入り、「凡そ人の根本行動は全く衝動の自ら發動し努力する所にして而して何等の思慮分別を須るゝ、本能たり直觀たり」と説き、「余輩の最賛成して而して鼓吹せんとする所は、此の活動主義精力主義を措いて他なしとす、乃ち道德の新標準は何ぞと問はゞ自家の擴張只是れなりと答へんのみ。」と斷案して、更にシヨベンハウエルの意志説を重んじ、更に民族と自家との關係に於ては「自家の利害を擴充したるがやがて民族の利害なり」となし、其れから動機と結果の關係を説き了つて、社會の進歩發展は斷の一字にあると云つて擱筆してゐる。今之れを見るに著者の所説は爾來の倫理學者の所見に過ぎないので、別に革新の聲を放つた所は無い様に見受ける。著者の活動主義精力主義も人本主義の一種又は俗間の通用語であつ

て何等珍しいことがなく、自家擴張を以つて道德の標準とするは自我實現説の異名であつて頗る古い議論に屬して居る。而して著者は自家の利害が民族の利害であるといふが、自家意志の擴張を以つて其の標準とするならば、各人の意志は必ず一致すべき性質のもので無ければならない。然るに各人の道德關係に於て意志ほど衝突するものは無く、動もすれば弱肉強食の行爲を生ずる。意志をして道德の標準たらしむるには之れを制馭するものが他に加はらなければならない。即ち知情を代表する者が加はらなければならない。孔子又は基督は仁即ち愛を以つて標準となし、後世の儒數は義利を以つて標準となし、一般の倫理學者は良心を以つて標準とするは何れも其歸を一にするので、シヨベンハウエルの亞流を汲む谷本氏の意志論などとは雲泥の差である。

次に第二章人生の目的に於ては、著者は人生に目的なしと説き、若しあるとすれば生の擴張是れ人生の目的であると言つてゐる。著者は是に於て目的に内外二種ありと爲し内目的のみ人生の目的であると説き、一元論及びエルネギー説を詳論してシヨベンハウエルの

ある。法律上では夫婦は全々異なる一格人者である。夫の權利と妻の權利とは根本から別である。夫の權利を以つて妻の權利に代用又は共通させやうと云ふは頗る滑稽な論ではないか。若し然りとせば男子が自己の利益の爲めて權利を濫造する時は女子は悉くこれを崇奉して共に喜ばなければならない義務を負擔する。男子が賣女及び蓄妾の權利を有してゐる場合に、女子は同時に自己の權利として讚美しなければならぬ。然るに谷本氏は一夫多妻又は公娼はこれを否定してゐる。此等が氏に矛盾のある所で氏の男女道德論はまだ一貫されてゐないものと稱さなければならぬ。

本妻は此の外に尙ほ若干章に亘つて論究され、全篇四百七十六頁に至つてゐる。著者の議論には頗る難詰すべき點が多く未だ研究が徹底してゐないけれども、現代思潮の混亂して新舊道德の錯雜紛糾せる時に當り、道德革新の第一聲を放ち、新時勢の豫言者となり社會の指南者となるを理想と爲し、本書を先づ大學の講壇に於て子弟の間に開講し更に今回之れを刊行して社會同好の士に頒つた學者としての著者の勞を多謝すると共に、篤學なる江湖に愛讀を薦る次第である。(定價一、五〇)

□家庭教育の原理と實際

麻生正藏著
北文館發行

國家の基礎は家庭にあり、家庭の基礎は個人にある。故に國民教育は常に家庭教育に因つて完成され、家庭教育は常に父母殊に母としての個人の教育に因つて完成される。それで女子教育即ち母を養成する教育——換言すれば母となるの修養は實に國民教育の基礎であつて、女子の一日も忽諾にすべからざる問題である。ギルマン女史は其の名著に於て

其の原理と實際とに關する高級の知識を與へるには甚だ遺憾なものであつた。然るに今回、麻生正藏氏によつて公にせられた「家庭教育の原理と實際」の一書は此の缺陷を補充するに足る好著であつて、氏が多年從事せる女子教育の經驗を以つてして頗る綿密なる該博なる研究を掲げてゐる。

第一篇では教育の眞髓を論ずるを目的とし、教育の解釋から教育本領の史的研究に進み、自我の實現を究め、境遇の適應を説き、著者の教育觀を述べてゐる。第二篇では教育と遺傳を論ずるを目的とし、教育効果の有無問題より、遺傳の汎論をものし、更に進んで精神の遺傳に關して最も詳細なる研究を盡してゐる。第三篇では家庭教育の本論を説述するを目的とし、家庭教育の基礎より説き起し、胎内教育の序論に移り、進んで胎内教育の本論に至り其の原理及び方法を究め、更に家庭教育の原理に到達して兒童の性格及び心理若くは生理的原理を究め、習慣養成の方法及び法則に及びて更に周密なる研究を施し、本性格教育に至りて性格創造の原理を詳述してゐる。

俗的のもてであり、現今の高等教育を希望する女子に對して家庭教育の全部の概念に亘つて

斯の如く、本書は専門的研究であつて、

解釋を與へんとして、眞忠眞孝の意義を掲げ「凡そ忠と謂ひ孝と謂ふ共に君父に對する奉順に外ならざるは論なけれども、更に詳論すれば孰れも同情感謝報効の三部より成ると思はる。之れを忠にして見れば君上の觀慮に同情し奉りて、國家の安寧社會の進歩を心掛け仁恩に感謝すると共に、各自奮勵して業務に従事し、公益を催進するに努め一旦緩急あらば義勇奉公すべく、之れを公にして見れば、父母と喜愛を共にし、家門の繁昌を志し、可成順從快養を怠らざると共に、各自寧ろ立身出世して大孝を建つべし」と述べてゐる。

第七章男女の關係に於ては、著者は男女の同權を説きながら、内外の差別を設けて其の沿革を述べ男は外を勉め女は内を勉むを以つて分業となし、進んで女權擴張の意義を説き、更に結婚に關して論じてゐる。著者は結婚の要件として三ヶ條を掲げてゐる。或は男女肉慾を満足せしむべき方便として、現感の上より之れを要すべく、或は種族保存の唯一方便として、終局目的の上より之れを要すべく、或は個人生活の完備を期すべき方便として、推理的打算の上よりも之れを要すべし。」と云ふのである。而して著者は愛による結婚は以

上の三要件を充足するや否やは疑問であると言ひ、殊に生活完備の上には便宜あつても生殖保存に都合よきか否やは疑問であると説いてゐる。其の他離婚の自由を主張し、七去の道德を批評し、福澤氏の女大學を評論し、貞操を論じ、再婚を許し、男女交際を説き、賣淫論公娼論に至つて擱筆されてゐる。之れを要するに著者の男女道德論は舊來の道德に比すれば進歩したものであるが、中には大なる誤解に陥つてゐる點がある。其の結婚要件の三要素なるものは滑稽である。精神に於ける愛の共鳴なしに、單に肉慾又は種族保護の目的から結婚するのではない。人格に於ける切なる愛の要求及び其の理解に於て爲すのである、愛なしに行ふ肉慾はかの淫賣である。愛なしに情交して生んだ子は假初なる一時的肉慾の結果であつて、種類の上から見ても不良の子孫たるに過ぎない。子は如何なる場合に於ても愛の清淨なる凝てなければならぬ。愛の結婚の中には谷本氏が擧げた三要素は完全に包含されて盡してゐる。

更に杞憂する餘地がないのである。次に氏は夫婦に内外分業の差別を附してゐるが之れは根本的のものではなく、便宜上のものである。

る。それで夫の收入にして一家を支へるに困難である時は婦も出て夫と共に働くのである。妻が家事を執ることが困難である場合は夫が交つて之れを執るのである。而して結婚は必ずしも夫が外に働いて妻を養ふことを原則とするものではない。婦が外に働いて夫が内に養はれてゐても、其れは立派な結婚である。それから著者は、女子の被選舉權を有つは母たる任務と衝突するものと爲し、男女の法律上對等たるべしと云ふは未婚の女子或は寡婦に限るので既婚婦即ち一家の妻女には多少の制限を加へなければならぬと説き、夫婦は一身同體であるを以つて夫の有する法律上の權利は妻も之れを享有したると同様であつて更に婦の權利を必要としないと述べてゐる。之れは谷本氏の一大矛盾であつて甚だししい謬見に陥つたものである。未婚婦及び寡婦と既婚婦とに權利の差別を附し、被選舉權を有する一女子が結婚のために之れを喪失すると云ふことになつては道理を逸し甚だ滑稽であるのみならず、女子に選舉權を與へるならば被選舉權も共に與ふべきは憲法上の極めて通俗なる理論である。而して夫婦の一心同體であると云ふのは愛の妙合の上に云ふ詩歌で

述べられたものであるが、今度の大戦争が勃発してから、博士の豫言的な慧眼に驚嘆した歐洲讀書界は熱的に本書を歓迎して甚大な興味を喚起したのである。博士は第一章に於て獨逸人の民族的自負とジゴンイズムとを説き、第二章に於て獨逸の世界政策を論じ、第三章に於ては英獨衝突の避け難きを序論して英國人の覺醒を警告してゐる。本書の所説に於ては必ずしも全然同感ではないが、獨逸の野心が禍ひした目下の戦亂に對して深く考案を試みる上に、極めて興味多き暗示と教訓とに富んでゐる。英國と共に獨逸を共通の敵とする日本に於ては、かのベルンハルダーの「獨逸と次の戦争」と共に本書も亦識者の一讀を要するものである。また内田魯庵氏の澤文極めて流暢にして些の滯滞をみない。時節柄この一大快著を我讀界に提供せられた譯者の勞を謝す。(價〇、八五)

【鐵道旅行案内】

鐵道院 著
博文館 發行

名勝地に遊行して其の壯大或ひは優美崇麗な自然に接し其の空氣を呼吸して新な活力を得様とするは吾人の等しく希望する所である。而も、其の何所に行くべきや、又目的地

に到るに如何なる交通機關を利用すべきやの疑問に到著し立ち迷ふは、時間を最も有意味に送迎せんとする現代人の心である。然るに此の鐵道旅行案内は此の種の問題を解決するに適當な手助けとなる物である。尙、挿入されたる各名勝地の寫眞、地圖等に到つては親切と美麗とを備へた物であつて、日常吾人の机上に必要な書物の一冊たることは疑ひもない物である。(價一、一〇)

【參禪の階梯】

原田祖岳 著
丙午出版社 發行

禪學文庫中の一編、所謂不立文字は禪の面目とする所なれど、方今說禪の書甚だ多くして然も或は高遠に過ぎ、或は卑近に流れ、遂に讀者を過て邪道に導く類少しとせず。著者は斯道の古參なり、彼等禪界の魔黨を一掃せんとして茲に此著を作る。前篇參禪の階梯中には、「四種の禪根」に應じて説くと親切丁寧、中篇此間の消息において、禪の内容を論じて正々堂々の觀あり、後篇研學と悟道において、禪の妙諦を披瀝す。初學斯道に志あるものの一讀を價す。(價一、〇〇)

【トルストイと二箇年】

齋木仙醉 譯
藤田文林 堂

ト翁晩年の秘書後をつとめたニコライ、グツセフの日記である。此十九世紀の一大偉人のかくれたる生活の一面が窺はれト翁の斷片的思想もチヨイ／＼出て來るが、譯者が一々之に註釋や批評を下して居る。ウルサイ感もするが、偶には面白いものもある。兎に角ト翁研究者の一讀すべき書である。附録として譯者の面目たる三一論やト翁タゴール論がある。(定價四〇)

【日曜講話】

奥村喜衛 著
警醒社 書店

奥村牧師が日布時事社の需に應じて、毎週發行の日曜號に寄稿せられしもの、今回纏めて一冊となし、青年諸氏修養の用に供したのである。本書收むる所、三十五講、百三十八頁ある。(價〇、三〇)

【短篇講話集】

元田作之進 著
警醒社 書店

著者は以前に短篇說教集なるものを公にしたが、今回更に諸種の雜誌に寄贈せる短文及び各所に於て口述した講話七十篇を整理して之れを小冊子と爲した。本書は基督教を組織的に説明せんとしたのではなく、又近代思想の新事實を紹介せんとしたのではなく、又高

極めて眞面目なる研究の結果であるから、尋常普通の著書とは異り大に價值ある所以である。大正の婦人を以つて善良なる家庭の妻となり、賢明なる子女の母となり、而して國民の母たらん者は、宜しく本書の如き良書求めて修養すべき事を讀者に薦めると同時に、夫たり又父たる者も一本を購ひその梗概を知り置くべきである。(價二、四〇)

□無絃琴

村井知至著
四方堂書店發行

村井知主氏は松村介石氏と共に道會の事業に従はるゝ先覺者である。氏の専門の業務は外國語學校その他に於て英語を教授するにあれども、同氏は宗教に非常なる興味を有し、道會及び雜誌「道」に於て常に神秘的信念を表白せられてゐる。「無絃琴」は二百餘の感想を集めたるものである。而して著者の宗教は開成已成の宗教に非ずして萬人の胸奥に儼存する無名の宗教なり。著者の宗教の表號は○也。しかし○といふも無といふも要する一種の定義に外ならず、著者は特に奇を衒はんとするあらざるかを疑ふ。されど吾人は著者の宗教的實驗には大に尊敬を表するのである。著者は第一題「我は聽く無絃琴中」に曰く、「此の

○の果して何者ぞ、曰く云ひ難し矣、之を天と云ひ、神と云ひ、又佛といふ、皆似て非なるを奈何せん、寧ろ○は○にして遂に解すべからずと云ふに若かず」と。然るに第二題「自然の光景」に曰く、自然日常に神に醉へるがごとし」と。○は忽ちにして神と化したなり。これ矛盾ではないか。「美は何を意味す」といふ中に「完全な神を意味す」とあるはいかに。かく撞着は隨所に散在すれども哲學者を以て標榜せざる著者に對して吾人は敢て之を咎めまい。しかし本書の價値はこれ以外にあり、不用意の悟りにあり、

「我れ今日外より家居に歸り來る、家族は歡び出で我を迎ふ、其の歡ぶ者は誰？其迎ふる者は誰？妻にあらざ、子にあらざ、彼等の内にある永遠の「或もの」也、有難し、忝し。」

實に味ふべき言である。

「日本人ほどいやな人間がない」といふ所あれば「日本人のエライ所」といふ條もある。又禍なかな牧師傳導師」というて大に攻撃してゐるが「禍なかな語學と教師」といふ所がない。著者の觀察がカソリシテーを缺く所誠に憾むべしとなす。「演説に拙なれ」も御

尤であるが著者は近頃雄辯會より「雄辯の修養」とかいふ著述を公にしてゐるやうである。通辯を罵倒すれども英語の教授は一種の通辯であるまいかと思ふ。故に著者のために計るに徒らに他を攻撃することを中止せらるゝとである。この點なくんば無絃琴は實に暗示と教訓に富める冊子である、

然るに「凡ての人に寛大なれ」と説く所もあるから本書に一貫せる思想を望むは無理かも知れぬ。左に記者の感じたる數節を抄録して讀者の參考に供する。

「産むわ、産むわ、不具兒ばかり。然も恬然としてこれを愧ぢざるもの、これを今日の教育者となす。」

「吾に一つの願あり」は甚だ刺戟に富む文である。

十牛頌とその和歌と和田垣博士の美譯と齋藤松州畫伯の畫解との景物あるは誠に嬉しい。本書はこの景物丈でも相應の價値あるものである。(八〇、)

□獨逸の誇大妄想

エミール・ライヒ著
博文館發行

本書は今より八年前に、歴史及び政治學上の造詣深きエミール、ライヒ博士によつて著

此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る旨書添を乞ふ

合本特價發賣

■六合雜誌

大正三年度 全一冊

特價金壹圓五拾錢 送料十二錢

右御入用の御方は至急御申越あれ

大正四年七月

東京三田 六合雜誌社

電話芝五八五五番

御來期休暇中の
迎歡者

高等宿 榮林館

館主 文學士 今岡信一良

本郷區追分町三〇
電話下谷 四八四六

(追分電車終點ヨリ五分間)

宇治



品質優良
價格低廉

荷造完全
發途敏速

聞け公平なる世評は自畫自賛に優る

販賣

はがきニテ御注文下サレバ代金引換小包ニテ發送シマス。
御送金ハ振替貯金ガ一番安全デ便宜デ德用デス。
集金郵便ハ料金高クナリシ故謝絶シマス。
御注文書へ必ず本誌ニ依ル旨明記アレ。

六合雜誌讀者ニ限リ正價一割引

規定

送費無料 一時ニ總代金一圓以上御注文下サレバ其小包料ハ全部無代罐入 無代罐入トス以下ハ袋入り故罐入ノ時ハ實費申受ク。

宇治と云へ茶○茶と云へムラタ園とは世人の聲

名	茶	玉露	煎茶	宇治村
鶴ノ聲	八十錢	喜仙	六十錢	治山村
村田園	一圓廿錢	正喜仙	七十錢	茶城田
老松	一圓五十錢	正太福	八十錢	通國園
千代香	一圓七十錢	關折	九十錢	信田製
正阜月	二圓	關折	三十錢	販田製
仙掌	三圓	池尾粉	四十錢	賣田製
國華	八圓	關折	八十錢	振田製
表價	正阜月	二圓	關折	三十錢
國華	八圓	關折	八十錢	振田製
表價	正阜月	二圓	關折	三十錢
國華	八圓	關折	八十錢	振田製
表價	正阜月	二圓	關折	三十錢
國華	八圓	關折	八十錢	振田製

座口替振部賣販

(タラム) 略電番五〇壹九阪大
番二二八二城京番七〇四一連大

遠なる獨創的思想を發表したのでもなく、唯だ文章を簡短にし眞理の要領を記述して、學生商人役人等時間に多忙なる人々のために、或は電車の中にて或は食後數分間に於て讀み得らるる程度で講述したのである。(價、〇、五〇)

○修養日訓

大町桂月監修
植竹書院

徳目を三百六十五日に配當して、其の下に古聖賢の金言を列舉して、一日に一節を讀んで行くように出來てゐる。此の種の日訓は歐米に於ては夙に行はれてゐたが、邦語で書かれたものは未だ二三種に過ぎないので、何れもポケット用の小冊子である。大町氏の日訓は四六版で、内容も豊で、爾來のものに比すれば優良なものであるが、時候と徳目の配置に關しては何等の研究なく、徳目と金言との關係に就きては何等の標準なく、只だ古今の金言を雜然と配列したまで、それも主に漢文の拔萃に流れ、謂ゆる修養の日訓としては頗る杜撰なものである。(價、一、二〇)

○タゴールの歌

齋木仙醉作
岡崎屋書店發刊

現代流行の印度詩人タゴールの主要な著書

の内容を、齋木氏が簡單な新體詩に譯出したもの、附録として著者獨特の三一思想や世界の聖賢を歌つた詩がある。(定價、三〇)

第二教育道話

安藝愛山著
大日本雄辯會發刊

戊申詔書と七福神、片眼猿、マイダス王といった様な譚話を土臺にした通俗訓話を集めたもの、凡廿七篇ある。スラ／＼と書いてあるから、通俗講話の材料になる。又銷夏の讀物としてもよい。紙質のよいのが特に目につく本だ。(定價、四〇)

編輯室より

盛曇の砌讀者諸君の御健康を祈る。

過去四年間本誌編輯の勞をとられた吉田氏は今度早大講師となられ多忙なため、編輯の方は辭さるゝこととなつた。私共は同氏の功勞を謝し氏の前途を祝さないわけにいかない。尙氏は同人の一人として、將來も本誌上に其靈才を披瀝さるゝことには變りがない。

内ヶ崎氏は休暇となつても毎日多數の訪問客に接し、却て多忙だといつて居られる。先月末から九州四國地方に講演に出られ、今月末一時歸京の上再び郷里に赴かれる筈。

三並氏は其後益々快方に赴かれ、先月末から信州上諏訪にて轉地療養中
野村眼昨氏は先月廿四日仙臺の聯隊に召集された、今頃は炎天の下眞黒になつて演習中であらふ健康を祈る。

小山東助氏は臨時議會後微恙のために鎌倉引籠り靜養せらる。

岡田氏は無事、氏の英文「吾が斷片」に對し英國の哲學者ラッセルや文學者ガルスゼーから手紙がきた、仲々面白い手紙だが、氏は多分次號で之を紹介されるだらう。

毎月上旬編輯會を兼ねて誌友懇話會を開いて居る。先月は内ヶ崎岡田木村星島相原等が集つて快談を食つた。來月號はウント力を入れて皆書くつもりである。

本號は原稿編輯のため大分次號に廻したのもある尙人事相談欄を開きますが、これは思想及日常生活上の質疑應答でありますから疑のある方は、其範圍内で御質問を下さい。

編輯者より特に申上候

原稿は毎月十四日限左記宛御送附被下度願上候

東京市外巢鴨一四七〇

相原一郎介宛

此廣告を見申込の方には「六合雜誌」に依る御書添ふ

正則英語學校講師
山田 巖先生著

英文法講義

全一冊

定價金壹圓廿錢
郵稅金八錢

正則英語學校講師
佐川 春水先生著

英語讀本界名所案内

第一全一冊

定價金三十錢
郵稅金四十錢

正則英語學校講師
帷子 一也先生著

袖珍獨習ナショナル

第一全一冊

定價金廿五錢
郵稅金四錢

明治大學講師
佐川 春水先生著

プッシング講義

全一冊

定價金六十五錢
郵稅金六錢

法政大學講師
山田 巖先生著

ユニオン講義

第四全二冊

上卷金七十五錢
下卷英語の日本へ連載
郵稅金八錢

開成中學校講師
長谷川 康先生著

ナショナル講義

第二全一冊

定價金九十錢
郵稅金八錢

開成中學校講師
長谷川 康先生著

ナショナル第三講義

全二冊

上卷金七十五錢
下卷金八十五錢
郵稅金各八錢

正則英語學校講師
佐川 春水先生著

英語正解法

全二冊

前編金九十錢
郵稅金八錢
後篇英語の日本へ連載

發兌

東京電話替口座
神田本座
表局東京
保五八
町三五
番二七
地五〇

建文館

六月一日
發行

六月號
定價金貳拾錢

六合雜誌

七月一日
發行

七月號
定價金貳拾錢

- | | | | |
|----------------|---------|--------------|------------|
| □自然と心靈との復興 | 内ヶ崎 作三郎 | □進歩的基督教の主張 | 内ヶ崎作三郎譯 |
| □佛國教育家の戦争觀 | 高橋 清吾 | □自由なる宗教生活 | 安部 磯雄 |
| □愛の要望 | 鈴木 龍司 | □水道の水 | 岡田 哲藏 |
| □夢 | 小山 鼎浦 | □自我の問題 | 野村 隈畔 |
| □眞實を求むる心 | 佐藤 繁彦 | □思想家の生活 | 鈴木 龍司 |
| □愛と眞實と戦と | 内 藤 濯 | □生 死 | 三浦 關造 |
| □イエツの音樂的情調 | 松尾 光貳 | □クリスチャンとは? | 岸本能武太 |
| □理想と神 | 帆足理一郎 | □紐育より | 高橋 清吾 |
| □涙の響 | 伊藤 寥々 | □宮 参り | 木村 久一 |
| □紫雲石より | 秋 郎 生 | □神祕的知識 | イー・エス・エームス |
| □權威の座位 | 白石喜之助 | □生命の家 | 増野三良譯 |
| □瑞西より | 盧 山 生 | □ストリンデルクの「父」 | 太田 眞一 |
| □自由主義基督教の勝利 | X Y Z | □熟れたる實は | 田中 葦城 |
| □タゴールの根本理想と其批評 | 三浦 關造 | □瑞西より | 盧 山 生 |
| □眞紅なダリヤ | 久萬かず枝 | □幻響を追ふ心 | 吉田 絃二郎 |
| □我が斷片 | 岡田 哲藏 | □基督教の禪機 | 内ヶ崎 作三郎 |

夏季隨一の讀物

(最新刊)

東京帝國大學
法科大學教授

法學博士 吉野作造先生著

歐洲動亂史論

菊判約六百頁 定價壹圓八拾錢 郵稅金拾貳錢

歐洲動亂の勃發してより茲に一年。今や正に退て其由來を稽へ、將來の準備を爲すべき時機に達せり。此時に方り吾人の切に要求するものは、今次戰亂の真相に關する、精密にして的確なる史論に非ずや。抑々又歐洲最近の形勢に通じ、豊富なる材料に基きて綿密なる攻究を爲し得る、責任ある學者の論作に非ずや。弊社乃ち此の要求に應へんと欲して、本書を公にす。著者が歐洲の動亂に關して一家の見を有するは、世既に定評あり。唯其行文の平明暢達を極め、而かも各章、各節更に項を分ちて、通讀に便せし勞に至つては、著者に代て一言する必要を認むるもの。正確にして詳密なる、而かも一讀何人も解し得る興味多き歐洲動亂史は蓋し本書を措ては、他に求め難かるべし。

□索引及地圖を添へて趣を助く。

發兌 東尼 京張 橋町 警醒社書店 振五 替五 東參 京番

◎直接購讀者諸君に告ぐ

一、本誌は前金に非ざれば一切發送致し不申候

送致し不申候

一、前金の盡きし時は『前金切』

を帶封へ捺印いたすべく候

一、御送金は可成振替貯金を以て

御拂込み相成度候

本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵税一錢
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵税共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵税共

●海外は郵税一冊に付金六錢(清國を除く)
●臨時號出版の際は規定以外に代金申受く

本誌廣告料

特等	普通	普通
表紙二三四面	一頁	半頁
金貳拾圓	金拾貳圓	金六圓

●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候
●二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候

大正四年七月三十一日印刷納本
大正四年八月一日發行
(每月一回一日發行)

定價 貳拾錢 本號

發行兼編輯人 吉田源次郎
印刷人 海上輝男
印刷所 株式會社 秀英舍
東京市芝區西船場町二十七番地

發行所

東京市芝區
三田四國町

統一基督教弘道會

振替東京一〇〇〇三番
電話芝五八五五番

賣捌所

東京堂◎北隆館◎東海堂◎同文館◎上田屋
◎警醒社◎教文館其他全國有名書店

Library of the
PACIFIC UNITARIAN SCHOOL
FOR THE MINISTRY
Berkeley, California

六合雜誌

九 月 號



四 百 六 十 號

明 然 廿 五 年 三 月 廿 七 日 第 三 種 郵 票 物 認 可
大 正 四 年 九 月 一 日 發 行 (每 月 一 回 一 日 發 行)

六 合 雜 誌 第 三 十 五 年 第 九 號

大 合 叢 書

第一高等學校教授
三並良著
(第一編)

眞人基督

ボケツト入美本
百二十錢五頁
定價 再版
(發賣)

傳説によらず、歴史批評の立場より基督を説明し彼れの宗教を現代意識に紹介せんとするものにして我等の基督觀は此書によりて闡明せられたり江湖の清鑑を得ば幸甚

陸軍大學教授
岡田哲藏著
(第二、三編)

我が断片

第二編 定價
第三編 定價
編十錢 邦文
編十錢 英文
百文 稅
廿頁 二錢
百錢 二錢

新らしき宗教藝術、哲學の立場よりせる著者最近の人生觀、社會觀にして觀察深刻にして行文奇警に富む、銷夏の讀者として切に之を江湖の紳士淑女に薦む

自我の研究著者
野村隼限著
(第四編)

春秋の哲人

ボケツト入美本
百二十錢五頁
定價 再版
(發賣)

發行所 東京市芝區 六合雜誌社 振替東京一〇〇三 統基教弘道會宛

(明治廿五年三月二十七日第三種郵便物認可)(大正四年七月卅一日印刷納本)
(六合雜誌第三十五年第八號)(大正四年八月一日發行)(每月一回一日發行)

〔本冊定價貳拾錢〕

THE RIKUGO-ZASSHI.

No. 416. September, 1915.

CONTENTS.

Edward Carpenter's on Creative Art.....trans. by Prof. K. Satō.	2
Productive Fluidity of Thought.....Z. Nomura.	13
Edward Carpenter's "After long Ages."... trans. by S. Tomida.	19
Womanhood in modern Literature.....Dr. S. Ishida.	54
Destiny of Woman.Dr. K. Kimura.	65
How shall we live?R, Hoashi.	73
From U. S. A.....Dr. B. Suzuki.	83
From Switzerland.Dr. T. Arai.	89
Short Poems.....Prof. S. Uchigasaki.	103
Questions and Answers.	109

liberal Christian Palpit.....	
Unity of Nationalism and Internationalism.....	
..... Prof. S. Uchigasaki.	110

Current foreign Thought.Unity	
under the present Discord. trans. from "Hibbert Journal."	116
A Trip Journal.....Prof. S. Uchigasaki.	125

Topics of the Day.	128
Review of Books.....	136

Published Monthly by the
TŌITSU KRISTOKYŌ KŌDŌKWAİ,
2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

□ 瑞西より……………醫學士 廬 山 生……………八九頁

□ 私生兒の心……………沖野岩三郎……………九四頁

□ 海の匂 (短歌)……………内ヶ崎作三郎……………一〇三頁

自由基督教論壇

□ 國家主義と國際主義の統一……………早大教授 内ヶ崎作三郎……………一二〇頁

□ 大戰亂の精神的統一 (海外思潮)……………一六頁

□ 西南旅行……………内ヶ崎 生……………一二五頁

時評欄

■ 高田文相に望む (S U) ■ 法の力を要す (甲鳥生) ■ 貞操の意義 (甲鳥生) ■ 青年會
の爲に惜む (K, K) ■ 青年會憲法改正問題 (古市春彦)

□ 應問……………新刊批評……………編輯便り

六合雜誌第三十五年第九號目次

本 欄

□創造の藝術

——エドワルド・カアペンター……文學士 佐藤 清……二頁

□思惟の生産的流動性

……野村 隈 畔……一三頁

詩

□永世の後

——エドワルド・カアペンター……富田 碎 花……一九頁

□近代文學に於ける女性

……文學士 石田 三 治……五四頁

□女子の運命

……文學士 木村 久 一……六五頁

□如何にして生きんか

……帆足理一郎……七三頁

海外 特 信

□北米だより

……法學士 鈴木 文 治……八三頁

六合雜誌



九月號

趣 味 叢 書

<p>(2) 黒田鵬心著 趣味雑話</p> <p>定價金一圓 送料金八錢</p>	<p>(7) 南 薫造著 畫室にて</p> <p>定價金一圓二十錢 送料内地金八錢</p>	<p>(10) 黒田鵬心著 青山より</p> <p>定價金一圓二十錢 送料内地金八錢</p>	<p>(8) 澤村真二郎譯 ラスキン抄</p> <p>定價金一圓二十錢 送料内地金八錢</p>	<p>(6) (3) 黒田鵬心著 日本美術史講話</p> <p>上卷金一圓 (送料各) 下卷一圓廿錢 (金八錢) 合 (上製二圓二十錢 並製一圓七十錢 (送料十二錢)</p>	<p>(5) 黒田鵬心著 古美術行脚</p> <p>定價金一圓 送料金八錢</p>	<p>(9) 山崎樂堂著 家と人と</p> <p>定價金一圓二十錢 送料内地金八錢</p>	<p>(1) 黒田鵬心著 都市の美觀と建築</p> <p>定價金一圓 送料金八錢</p>	<p>(4) 黒田鵬心著 建築雑話</p> <p>定價金一圓 送料金八錢</p>
-----------------------------------------------------	----------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------

趣 味 叢 書 發 行 所

東京市外青山北七丁目二番地
振替貯金口座東京二六〇番

し、物質現象をば寧ろ心現象の結果又は其表現と見る傾向が起つた。前世紀の後期に於ては、創造を器械の一過程と見た。今日我々は之を一藝術として見るのである。

一般事物の理論或はそれに就ての意見は、細密に渡る實際の觀察に其根據を置くのでなければ、多くの價值があるものではないから、讀者は我々が實際知つてゐる事物がどうして存在してゐるのかといふことを考へて戴きたいのである。こういう場合には、我々に近い又は我が最もよく知つてゐる事物を觀察するのが最良である故に、先づ我々自身の思想、行動、及び身體がどうして存在してゐるかを考へなくてはならぬと私は提議する。

二

先づ我々の思想を考へて見やう。我々はゆつくり數分間休息するだけで、直ぐに我々の心が種々なる幻影の群れで一ぱいになることに氣がつく。この幻影——景色の形、友人の容貌、議論及び事件の連續——無數の行列が自から殆ど矢鱈に意識の背景から飛び立つのを見るやうだ。是は皆何處から來るのか。しかも少し過ぎると、この群れは矢鱈なものでなく、心中に深く横はつてゐて半分隠れてゐる情緒、感情、欲望などによつて魂を與へられ、形を與へられてゐるといふことを見るのである。

我々が沈鬱になると、我々の前を通る形や姿も不幸と恐怖の形や姿である。或は我々が元氣づいてゐると其景は歡喜と嬉しさの景である。此は言ふまでもなく珍らしくもないことではあるが、もつと細目に渡つて之を熟慮する價值がある。



創造の藝術

— エドアルド・カアペンタア —

佐藤 清 譯

「創造の藝術」に就て語るに當りて、私は——此言ひ表はし方には多少曖昧な所があるやうであるから、——事物が世界に現はれ生存するやうにされるには、どんな過程或は方法に依るかといふのが私の目的であると言ひたい。是は議論をするには大膽なこととも思はれやうが、勿論古來哲學の問題であつたのだ。

四五十年以前には唯物的世界觀が甚だ顯著であつた。我々は皆あの時代には自動器械であつた。人間は物質の微分子の莫大なる群集より成立してゐるといふ考へ方が一代の風潮を爲してゐた。即この微分子の機械的衝突によつて一切の人間の活動が起り、意識の形をとつてゐる或心的現象すら一種の副産物として進展されるのであるといふのである。しかし其時以後になると、一は自然の反動により、一は東洋思想の注入によつて、大振動が起り、心世界をば生命の根柢により近きものと斷定

は生長して行動となるだらう。眞に行動は即時に見られ無いかも知れぬ。思想と計畫は長い間現はれずに働くかも知れぬ。しかも尙ほ彼等は働いてゐるのである。彼等は行動への溝を支度してゐるのである。我々は皆屢々我々の隣人が思ひ設けてゐるよりも、或は自分が思ひ設けてゐるよりも、もつとく勇敢な行動をする事實を説明するものは是であらうと思ふ。そして又屢々我々は極めて陋劣な行動をする恐れがある。始終思想は沈黙の中に心中に働いてゐて、溝を支度してゐるのである。斯く我をしていつしか感情の高潮が来る時には、それが溢れて一刹那に、言はゞ否應を言ふ暇もなく、突發し々の行動となり、見える此世界に形となつて立つのである。

そして見えるその世界に現はれるといふこの事は激烈なる感情に就て眞であるばかりでなく、若しそれが又固執してゐるなら、ごく穩かな感情に就てさへ又同一である。人間のやうな極めて小さい動物がドックに浮んでゐる大船の側面を手でもつて押すならば、何の結果も起らぬやうに思はれる。しかも彼れが若しそうして執拗に押すことを繼續するならば、早晚量り得べき結果が起るであらうといふことを我々は知つてゐる。そして我々の心中に存する欲望と感情のより小さいより穩かな流れに關しても亦然りである。若しこういういふものが常にあり、常に流れてゐるならば、早晚、已むなく表はれて来るだらう。こういうものは、漸次に、いつといふことなく、我々の思想、我々の行動の習慣我々の筋肉四肢の運動、我々の顔の表情及び我々の身體の形を變へる。然り、我々の身體の形、我々の顔の形と輪廓、我々の表情態度、我々の聲音すら——世上の我々の姿を組成しに行く一切の事物は——(遺傳其他のことが考へられなくてはならぬから)全然其結果とは言へないが、大部分は、明かに

感情（或は欲望）は底にある。思想はこの感情が外界に出て来る時に採る形である。明確な一例を取らう。旅行したいといふ欲望が起る。此欲望は初は單一の漠然たる不快或は不安の感として始まる。間もなくそれが家を離れて行くとか、或は或外の土地を訪問したいとかいふ願望の形となる。一寸の間はそこで留まつてをるかも知れないが、それから稍より明確な形となるのである——例へば海岸へ行くといふやうに。それから妻と相談をする。方法を考へる。ブラッドショー中をさぐりまはす。マルゲートの考が一種の靈感となつて来る。そして全く明確明瞭に作られた計畫がこゝにあらはれる。或は自分で自分の家を建てたいと思ふ。長い間此念は一種の曖昧模糊たる敬虔な渴望に過ぎぬかも知れない。しかし遂に已むを得ず其家の夢が我々の心の中に形となる。我々の要するものゝベン・スケッチをするまでに至り、行つて敷地を檢査し、建築師に相談をする。間もなく、以前よりも甚しく明確な細目に渡つた計畫が現はれる。それから實際に建築に取りかゝられる。煉瓦や石や其外の材料の堆積が現場にあらはれ始める。そして遂に家が建ちつゝあるのである。それは嘗ては我々の心の夢の世界に存在したに過ぎぬのである。運動は常に外へ向ふ。不定曖昧な感情から或は欲望から、明確明瞭に作られた思想へ。それから行動と外部の世界へ。

どんな感情でも、其結果は同じである。

我々は心の中に何者かを傷つけんと欲する欲望か或は何者かを益せんとする欲望を懷いてゐる。この欲望は其期間で留まることは出来ぬ。滅び去つてしまふか、或はそれが心に懷かれてゐるならば生長するであらう。生長して明確な思想となり、利益は傷害の計畫となるだらう。そしてその思想計畫

しかし先づ夢に就て一言したい。私は已に覺醒時間には思想の不斷の行列が、底にある感情の刺戟を受けて、心の中を通り過ぎつゝあるといふことを示した。睡眠中の夢の中には、心象の之と同じ激發を認めるが、我々の間違なく言へるのは、そういうものが覺醒時のよりもつと斷片的であり、矛盾的であり、奇怪であるといふことである。疑もなく、ほんとの所をいへば、睡眠中は腦髓の高尙な推理の中心が靜止してゐるから、心象の生長がより矢鱈により不調和に起るのである。しかし諸君に注意を乞はんと欲することは、先きと同じ規則が支配してゐるといふことゝ、夢の心象は大部分は底にある朦朧たる感情によりて生命を與へられるか呼び起されるといふことである。不十分な被物を着て眠につくと、直ぐに積雪の中に飛び込む夢を見たり、或は罅隙にはまり込む夢を見たりする。或は不消化な夕食を取ると最も不快な妖怪を見る。それは内心に感ずる不快を外形でもつて我々に表象表示するのである。飢餓或は其外身體のどんな要求でも或は欲望でも、それを列證する夢を呼び起すといふことは、陳腐な話であつて珍らしいことではない。數年前或探險家隊と一緒にアフリカの内地にをつた私の一友人が八日間食物がなかつた——たゞ持つてをつたのは其間に得た一羽の鸚鵡と一つのマド・フィシユだけであつた！ 彼れの言ふ所によると、飢餓の一番酷い苦みの一つは飢餓に伴ふ睡眠の不可能であつた。疲れ切つてしまつて、一二秒間又睡眠に陥る時には、最もじれつたい夢にとりつかれるばかりであつたといふのは、直きに「羊肉のカツレツの一番をいしい一皿」と彼れの稱したものが、彼れの方へ浮んで來るのを見たからである。勿論、彼れが手を延して其獲物を捕へやうとするや否や目を醒し、其幻影は去つたのだが、若しこの運命にかゝはる日の間に、一度あの難有い皿の夢

心の隠れたる洞穴の中に湧き起つて、漸次に白日の光の中へ前進外進する所の朦朧たる感情及び情緒の結果であり表現である。

之れでこゝまで來ると、何か自然の法則といふやうなものに逢着するやうに思はれる。是は重力とか或はその外どんな法則でもいいが、そういうものと全く同じものであつて、——其法則とは則ち我々の中に感情から思想へ、それから行動へ、内から外へ、朦朧から明確へ、情緒から實際へ、夢の世界から現實世界、我々がリアリテイと稱するものへと、外へ向ふ不斷の運動があるのである。

しかしながら感情思想が外部の「現實」世界へ向ふ此一般的運動は眞に注意されるにしても、しかも思想と實物との間には——吾心中の家のスケッチと、石と漆喰の實際の家との間には莫大な永久の差異がある。一方は單なる夢、吾腦の内部にある虚無の幻影であつて、私自身の外には何人たりとも見ることも感知することも出來ないのである。一方は若し是と衝突するならば私の頭蓋骨も腦髓も兩つながら割れる、堅い、否定すべからざる事實である。さりながら私は人の思想と行動との間には何等確實なる分歧線を劃することが出來ぬことを示した如くに、此論を進めるに随つて、其の腦髓の中に存する所の家と、山腹に立てる家とは、二つの全く分離せるものではないといふこと、根本的統一が此二つの者を包んでゐるといふこと、一方の製作に與かつてゐる同じ創造の藝術は一方の製作にも與かつてゐるといふことを認められるやうにしたい。

理想は甚だ幸福な美しい理想であると感ずるに違ひない！

魔酔劑にかゝると極く屢起る一種の夢がある。その夢は此意味の多い象徴的な性質を例證するが故に興味が深い。魔酔劑にかゝると粗惡な物質的の身體と、より微妙な高尚に意識的な部分との間に分離が起る——苦痛の關係から分離することゝ、謂はゞ靈魂の解放があるといふことは、信すべき充分の理由がある。そして魔酔劑にかゝると、屢夢が起り、人はその夢の中で歡喜解放の大なる感じを以て空間をずつと飛んだり冲したりするらしい。是は珍らしいことである。私は澤山の例を聞いた。次の稍詩的な夢は私の一友に聞いたのであるが、それは瓦斯で齒を抜いて貰ふといふ稍散文的な手術の結果起つたものなそうである。彼れは自由と恍惚の強烈な感情を以て空間をずつと冲しつゝあるといふ夢を直きに見た。彼れは上へ上へと天界をずつと登つて行つた——遂に突如として天の床の上にひよいと出たのである！そこで（彼れはブラトールを讀んだことがあると推想する）彼れは十二人の神々が半圓を爲して坐り（神々ならばそうなくてはならぬことだから）不盡の歡喜と笑で一ぱいになつてゐるのを見た。そうしてこの神々が笑ふのを無理ではなかつたといふのは、この友人は今や彼處の天の床の上で、ジュリの小さい透明な丸が自己であるといふことに氣がつくやうになつたからである。その丸の中心には一つの斑點があつて、それこそ彼れの自我そのものの即エゴウであることを知つた。彼れも大層面白がつて、丁度一緒になつて笑はうとした其時、背後で巨大な獵犬の唸聲でもあるやうな恐しい音を聞いた。そして自分の身體が大きく口を開いたまんまで自分を追撃するのを知ると、恐しい絶望の感が彼れを捉へた。遁走の見込みは無かつた。吞まれた時には一寸苦しんだ。それから目

を見たら、其夢を百度も見たと語つた！

こゝに我々は眠つてゐる人の心の殆ど詩的藝術的努力が其工夫し得た最も愛らしい愉快な形でもつて、食物に對する心の底にある欲望を表現しやうとするのを見る。そして文學の才ある或人々は夢詩を作つてゐるといふことが珍らしいことではない。たとひそれは完全な作詩の手本でなくとも、獨特の表現をやつてゐるのである。私の一人の知己はこゝいふ場合のために自分の寢床の傍にペンと紙を具へておく習慣の人であるが、其人が私に語つた所に依ると、彼れは嘗て天使の如き喜びと満足の感に浸されたといふ感じを當夜中に目を醒したが、それと同時に今夢で見たばかりの一節の美しい詩句が心の中に離れずにあつた。彼れは速かにそれを書きつけて直ぐ又眠つた。翌朝目を醒して一寸してから、あの高貴なる經驗を思ひ出したので確かに自分の名を不朽にするだらうと思つたその言葉を見やうと翻つて見ると、こゝ書いてある。

一つの目で歩く人

二つで歩く人

何か生命をつなぐものがあつて、

爲る仕事は何もない

こゝで又此睡眠者の心を浸した深い感情が本能的に韻律の着物を着けるまでに至つたといふことを我々は見るのである。製作されたこの詩は高級なものではないにしても、是は兎に角表現へ向つての一の重要な運動であつた！矢張人は「何か生命をつなぐものがあつて、爲る仕事は何もない」といふ

夢郷の中にあるが如くさ迷ひ出で、アウストリアにゐる或友人と話をしてゐるとか、或はクラブで反對者と或問題を激論してゐる所などを想像する。その光景が我々に愈明確現實になつて來て、全くそれに夢中になつてしまふ——と不意に——ランブ・ポストに突き當る！それで夢は勿論破れてしまふ。その夢よりも何かもつと現實なものが來たのである。しかし睡眠中の夢にはランブ・ポストはなから、夢はつゞいて現實を蒐集して、とう／＼それが我々には外部世界の事件と同じ位實際なものに思はれるやうになる。覺醒時の思想と睡眠のそれとの間に存する重大なる差異は、覺醒時の思想は不斷に蒐集されて、それが我々の周圍にある實際世界の現前によつて整頓されるが、睡眠の幻影は風を防がれてゐる温室の植物の如く、或は引込んだ搗はれない庭の隅の雜草の如くに、思ふ存分獨生長することである。

此が眞實であるといふことは、覺醒時の思想も若し獎勵され外部の妨害を受けぬやうに護られさへすれば、我々の夢と同一の現實に達し得るといふ事實に依て示される。薄明爐邊に生ずる時には、何等注意をするものがなく、斯る恍惚境の思想は不思議に現實と思はれる。私はこゝにいふ夢想に耽つた人々の話を聞いた。彼等は毎日毎日其夢想をつゞけ、或時間にはいつも部屋に引籠り、前日やめておいた所から又その夢想を始めて行くといふ風で、遂には斯くして費された生活が其不斷の生活に同じ位現實なものと思はれるやうになつた。そして熟慮して是を爲す所の外の人々、即小説家或は劇作家がある。彼等は熟慮して孤立し、その心を集中して、遂に斯くして創造された人物が生命ある男女となるに至るのである。そしてそれが常に彼等に對して然るのみでなく、世界全體に對し然るのである。

が醒めて見ると、何の事、齒が抜けてゐたのだ！ かういふ夢に於ては、たとひ人は之を實際起つた事の精確な描寫或は幻影であると推想することは出来ぬにしても、しかも之を現實なる事實及び感情の藝術的表象であると推想し、そういふものをば我々が知つてゐる世界の記號と象徴でもつて描かんとする努力であると推想するのも無理がない。

四

斯くの如く私が讀者に注意を乞ひたいと思ふことは、夢を見てゐる際の人の心の働きは我々の覺醒時のそれと同じ道を辿るものである——勿論全くそつくりそのまゝでは無いにしても——即ちその際に働らく心の働きは心の底にある感情から、其感情を表象し、又不斷に愈明確となり「現實」となる心象及び思想の方へ進んで行くといふことである。「私はこゝで完全な夢の説を述べやうとしてゐるのでないといふことは殆どいふを要しない所であるといふのは、外の項目のうちに入る或夢があるかも知れぬからである。しかし私は私の原理を説明するためにかういふものを引用してゐるに過ぎないのである。

この傾向の示す所は、今も言ふ通り、感情に依て我々の心中に呼び起された一切の心象といふものは、愈根強くなつて、益明確になり、現實となるといふことである。そして夢に於ては、實に見る所の心象の強烈なる現實に打驚くことがある。しかし是は覺醒の生活に於ても眞に全く同一である。我々は或使のために街道を歩いてゐる。しかし間もなく自分のほんとの仕事のことは忘れて、心は丁度

思惟の生産的流動性

野村 隈 畔

自分は今演習召集に應召して、仙臺河内の兵營に一兵卒として勤務及び演習に服してゐる。營内には勿論一冊の本も持つて來てないが、縦し本があるにしても讀書したり思索したり或は筆を取つたりする贅澤な時は固より供給されてゐない。その上毎日、少しく過度の演習(自分の生理狀態にとりて)をやるので、自分の頭脳には一定の纏まりを保つと頗る困難である。だからこゝに言はむとするとも決して系統のある思想ではなく、自分が平素から考へてゐたことをそのまゝ述べたに過ぎない。(七月卅日河内の兵營において)

一

近來の人間思想が物の眞實性又は生命それ自身に對する憧憬が強烈になつた爲めに、是れまで抽象的一般的な作用であると考へられた思惟が、頗る輕視されたことは明かな事實であるが、殊に、反、知、主、義の鮮かな色彩をもつたベルグソンの哲學によつて、この傾向がますます著しくされたことは言ふまでもない。勿論この傾向は哲學史上意義ある轉換期を劃するものであるが、時代の思潮は全然これに雷同して居るとはいへない。反抗的排他的にこの傾向に逆ふものもあるが、中には深い研究と思索とによつて哲學的根柢よりもその傾向の妄なるを明かにせんと努めてゐる篤學な人々もある。思想が動搖して混沌たる状態にあるときは大抵の人々は、兎角その時代の潮流によつて左右されるものであるが

それ故今日我々すべてに對して、そういふ人物が果して我々が實際記憶してゐる男女であるか、或は書物から出た作り者であるか、一寸今言へ得ないやうな多數の人物が、偉大なる劇作家小説家に依て作られてゐる。ほんとをいふと、非常な苦心を爲せる作者は、自分の感情自分の活力をば人間の形の中に投げ込んだのだが、この投げ込んだ勢ひといふものは、そういふ架空の人物が實際世界の人間の形と眞に競争せんとする程である。

それで私は以上語つた所から公平な決論に達することが出来る。即ち同一の過程が、覺醒時の思想にも夢の中にも認めることが出来る——即ち我々の心中に進行しつゝある不斷の勃發と、心の底を流れてゐる感情の表現心象である所の形體の心材料からの進化と。そして我々にはかく公平に尋ねることが出来る。我々と同じく他人の中にも、又底に存して、而して見える宇宙である所の偉大なる生命の中にも即ち一切の時空に起りつゝある、眞に創造の本質的過程なるものをば、我々はこゝに我々の心裡に見つゝあるのではないかと。(前半)

二

古谷榮一君が予の『自我の研究』に對する批評の中で、この問題を明かに指摘して呉れたのは予の深く感謝する所である。けれども自分は今こゝに君の手紙を持つてゐないから、そのまゝの言葉を記憶して語ることが出来ないが、兎に角予の研究に於いて餘りに純粹経験を重視して思惟を固定的非創造的であると貶下したのは、ベルグソンの思想にカブレ過ぎた傾きはあるまいかといふ意味の批評であつた。予は直ちにこれを首肯するだけの経験と思索とを充分味つてゐた。然し系統的論理的に説明する丈の準備は今も猶出來てゐない。けれども自分は始終この問題を考へてゐるのである。

自分はベルグソンのやうに本能と知性インスタンクト インテレクトとを全然區別することに左袒出來ない。たとへその作用はいかに別異であるとしても、この二つの作用の基づく所は同一の根柢（これは生命でも純粹経験でも構はない）でなければならぬと思ふ。だから本能の作用も知性の作用も同一生命の發展持續でなければならぬ。本能（或は純粹經驗）は生命それ自身の律動的展開であるが、知性はそれであると同時に他方にはそれを反射しつゝ（即ち顯在的に）展開する作用である。故に知性の顯在的客觀的に反射した影像（即ち普通の所謂知識或は概念）の實在は、眞の知性即ち思惟作用そのものとして本能の作用と融合して居るものである。即ち思惟の生産的流動性はその根據をこの持續融合の内に有するものと思ふ。更に言ひ換へれば思惟の作用はベルグソンのいふ如く、決して連續のない固定的な反覆過程で

苟も物の眞實性を究めむと欲するものは、浮滑^{うすべ}りな輕薄な態度を去つて、もつと落ちついて眞面目に思索せねばならぬと思ふ。ベルグソンの天才的に説明したインテレクトの固定性、反覆性、斷續性或非創造性といふことも、猶充分檢覈すべき餘地のある問題であるまいかと思はれる。

ベルグソンが知性（又は思惟）の固定性や連續な非持續的な性質を指摘して、物の眞實性は持續的創造的な生命にあると言つたのは偉大なる功績であるが、知性と生命とを截然區別して一方を持續的創造的となし一方を固定的反覆的となしたことは、果して正當な解釋であらうか。知性の構成した形式そのものは或は固定的、斷續的であるとしても、知性の作用やその構成質料となる所のものはベルグソンの所謂生命と何等の關係もないものであらうか。若し何等かの關係があるとすれば、吾々の知性（又は思惟）も矢張り生命と同じく持續的生産的なものでなからうか。果して然りとすれば思惟の生産的流動性といふことは、いかなる意味において可能であるか。

獨逸の學者は思惟の持續的創造的であることを主張して居るやうであるが、その根據において猶一の缺陷があるやうに思はれる。思惟の作用即ちその論理的發展の經路はたとへ創造的であるやうに見えても、その根柢を明にしなければ説明は不充分と云はねばならぬ。即ち獨逸の學者にはこの問題を解決するに一の踰ゆべからざる溝渠があるやうに見える。何となれば彼等は知性或は思惟を重んずるの餘り、その作用の質料となるべき純經驗的なもの、更にその作用の發展して來た根柢をも一切認めざらむとするからである。思惟そのものを生命と全く離して了つてその創造性を説き出すことは蓋し不可能であるまいか。

一般性はこの觀念の所産である。これは未だ明瞭でない朦朧たる存在であるが、知性によつて客觀的に反射されると顯在的に明白となり、随つて固定した獨立的なものであるやうに思はれる。即ち概念となる。けれども今言つた通りこの概念は一般觀念として吾々の内部に流動し創造し展開しつゝある體驗そのものである。

三

ベルグソンは生命（實在）から概念に行くことは出来るが、概念から生命そのものに達することは出来ないと言つて居るが、これはあまり概念そのものを抽象的固定的に解釋した見方である。ベルグソンの所謂概念は決して流動的生產的概念ではない。言ひ換へれば實在から達した概念は、流動的持續の生命を固定し斷絶し抽象して得たもので、實在そのものゝ中において體驗した具象的觀念ではない、随つてかゝるものから逆さに生きた實在に達し得ないのと言ふまでもない。けれども客觀的影響ではなく、内面的な具象的流動概念は持續的過程を有する生產的なものであるから、實在から概念に達するの容易なる如く概念から實在に達するにも亦頗る容易である。實在と概念とは相即相入の状態にあり、随つて融通無礙である。實在の經驗あれば必ずそこに流動的概念があり、概念があれば必ず潜在的實在がある。實在なくして抽象的概念のみあり得ないのである。

このやうに解して見ると思惟作用も亦生產的流動的なものであること勿論である。こゝに思惟の實在的根柢があると思ふ。思惟の作用はこれを客觀的に見ると、氣隨氣儘な個人的作用のやうに思はれ

はなくて、生命と同じく持續的生産的であり、而してその持續的生産的である所以は、即ち思惟の發展はとりも直さずそのまゝ生命の展開であるからである。予自身の言葉でいへば、思惟の展開は即ち純粹經驗の內面的發展を外にして、何者でもないから。

だから純粹經驗の展開が無限である如く思惟の作用も亦無限であり、純粹經驗の内容が無數である如く思惟の發展内容も亦無限定でなければならぬ。ベルグソンの所謂流動概念といふものはかゝる思惟の創造でなければならぬと思ふ。ベルグソンの説明するやうに又は吾々が常に知識や概念を固定的形式的であるやうに思考するのは、たゞ知性によつて反射された客觀的影像のみを孤立的に見て居るからである。影像そのものが形式的固定的であるからと言つて、思惟作用そのものまでも抽象的であるといふのは決して正しい見解ではない。思惟は本能と同じく吾々の純粹經驗において流動的なものである。思惟の創造的展開は吾々の内面性における純粹經驗の展開である。故にカントのやうに全く質料と思惟の形式とを截別して、思惟形式の發展を質料と關係なしにそれ自身の内に起るものと解するは誤りである。知性の固定性抽象性といふベルグソンの批評はカントのやうな哲學にのみ當筈するもので、必ずしも眞の思惟作用を規定するものではない。思惟は一の最高概念から演繹して種々の關係や法則を抜き出して來るやうに思ふけれども、これは吾々の純粹經驗において展開する徑路である。又種々の個々事實を綜合し或は抽象して一の概念を歸納するのも、亦吾々の内面性における發展の經驗を外にして爲し得ない作用である。概念と言へば吾々は直ちに形式的抽象的なもので種々の作用の結果だと考ふるが、實は純粹經驗において最初に經驗する原始的、素朴な觀念である。即ち事物の

永世の後

— エドワード・カーペンター —

富田碎花譯

『樂園』^{パラダイス}への途上の疲れたる小兒、

その道程は長しと思はるゝや？ 暫時、此處に休息して吾れらをして自ら慰めしめよ。

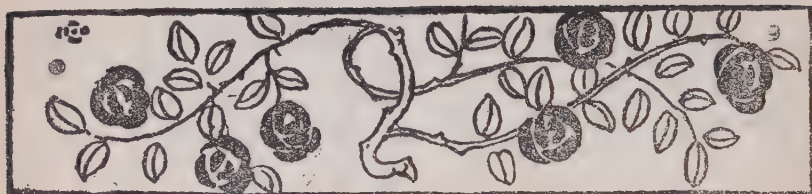
その進むを吾が見るところの『卿』は現身をもつてそこに休息す——罪と悲哀と苦惱の『小兒』は其處に近く休息す。

卿は耳にせりや、無限なる藍色のなかの雲のひまに聲々と諸の翼の音樂の消えがてなるを？ 卿は獸の眼のなか深く眺め入りしや？

卿が『愛するもの』の進みゆく恐しき蹺音を聞く卿みづからが心のうちなる大いなる秘密洞窟のうちに沈黙を有ちしや？

平和にあれ。懼るゝ勿れ。見よ、卿は凡べての惡を征服すべし。

沈鬱なる雲は、卿が心を裹むべし、恩寵なき永き日は、卿を倦ましむべし、卿が愛する人々の聲々は、はやすでに昔日の如く卿に對ひて語らざるべし。



るけれど。内面的に見ると凡て潑瀾たる流動過程であることがわかる。そしてこゝに真理の普遍性も妥當性もあると思ふ。即ち思惟作用の普遍的妥當性はその抽象的一般性にあるのでなくて、却つてその内面的流動性の中にあるのである。

古本の價

ほしゝま生

聖地巡禮の旅費をつくるために、賣られたと云ふ宗教的な書物と

選舉運動の費用をつくるために、賣られたと云ふ政治的な書物とが

神田のある古本屋の棚に並べてあつた

私は別に^い入用と云ふのではなかつたが

何んとなく買つてみたい心地がしたので

いはるゝまゝ價で買つて來た

前の持主の人の^{かざ}價値にてもよるものか

巡禮の旅費となつた書物は、^{もと}原の價より高かつた

選舉の費用となつた書物は、並の古本相場であつた

本を賣つて巡禮に行つた人は、聖地から歸ると田園に引こもり一農夫となつてしまつた

本を賣つて議員になつた人は、其後惡い噂をたてられて裁判沙汰までひきをこした

今に私の本棚に此二冊の本が並んで居る

二人の噂を聞く度にいつも私はこう思ふ

「古本の價も案外正しいものである」と

なるものもなほ美を以つてうち慄ふ——凡べて、
凡べて古き風光も新しき意味をもて新しくなり來
たる——

見よ！ 吾れらまた進出す。

地球の偉大なる圓形は吾れらを招き、大洋の池
沼は、吾れらが双脚のために日光のなかに露なり。

蓋し、今や、知識と文明との學ぶべく必要なり
しところの日課を學び終りたり——

正しく征服し、同化し終りてまた再び正しくそ
の結果を排泄す——

今一たび、大いなる街道を、諸獸と諸樹と諸星
と共に、旅しかへる——

凡ゆる辭書の語彙の夢想だもすることなき他の
諸夜と諸日にまて、

吾れは確然と卿を呼ばふ。

二

靜穩にまた茫漠として海は、藍色と白との敷布
なして最初の日に於けるが如くうち展がれり、輕

躁なる大暴浪は、砂礫の堤を越えて透明なる波の
打ち濺ぎを送る、そこにそは汀に沿うて池沼をな
して横ふ。

斜桁横帆の漁舟は、潮流とともに懶く漂ひて竟
には玻璃の如く滑らかなるうへに來たりて投錨す
三四の海豚は、彼れらの背鰭を現はし、進みなが
ら搖り動かす、

また西の方には、霧の遠き彼方に、妖精の如き
それらの帆の上に、早朝の太陽をうけて大いなる
二隻の正方形の索具を装着せる檣船は滑走しゆ
く。

菊花は茅屋の庭に簇り咲き——而して諸船は沖
の方へとすべりつづく、

低き太陽は、彼れの光線を送りて世界のうへに
濺ぎ、黄色もて縁どりたる無數の鮭肉淡紅色の花
瓣のなかに灼熱す。

ホー！ 甘き秋の空氣！ 厚く波立つ冷たき綠
の樹葉！

平和にあれ。懼るゝ勿れ。見よ、卿は凡ての惡を征服すべし。

卿が眼瞼を擧げて、吾れに對へ、美しさものよ、流動する深淵よりの譏刺の影を掃き去れ、

瞠ける卿が凝視を吾れのそれに對けよ。懼るゝ勿れ。天空の如き晴朗をして吾々の間にあらしめよ。

彼女の格子窓に凭れる吾が見るところのものは誰れぞや——遙か下なるそれらの流動する深淵の？

遙かなる海を横切り來たる聲の響の如く、吾れを捉ふべく來たりしうたふところの聲は誰れぞや？

愛する小兒よ、それらの深きところをさしも神秘に動きゆくを吾が見る形態は何んぞ——

捕捉し難き輪廓、暗示的な、宛かも窓帟のかげを動くものの如き？

見よ！ 籠のなかなるもの、寂しき囚はれびと

は、彼女の牢獄の壁の彼方此方を觸はりつゝ！

見よ！ 妨碍物にうち悩まされたるさては倦める靈魂よ！ 見よ、王冠をうち被げる不死の神を！

—

永世の後、縛れたる糸を再びかへす——長き然かも必要な挿句の後、かへり來たりて、

杜のなかの朝ツギ早き鶯の、さては汀に近き古き木の根のうへなる櫻草フリスコの呼聲にまて——

過去の自主セルフの枯れたる葉の中央よりチャ響れざる羊齒は生ひ立つ、

朝の如く、かくて長き奇しき假睡と夢とののち再び出發す、

美しき光をうち眺めつゝ、美しく甘き空氣を呼吸しつゝ、無數の創造物の始ファインレス生、

宛かも愛人らが、彼れらの第一の夜ののちに見る如き、世界の上に新しく昇る太陽を見つゝ、

凡ゆるものは變化し、榮光化されたり、最も微

議は無數なり、それらの意圖の不可思議さと、それらの固執の様式と、されどこの意志は凡ゆる論議と意圖をやがて片付くべし——そは最も頑固なるものを威壓し論服すべし。

「如何となれば、地上にある凡ゆる動物は、各異りたる意圖を有するが故に、而して彼れらの論議と行動とは交互に闘争し破壊す、

然れども若し卿にして卿みづからうちに、すべてのものが等しく遂行するところの意圖にまで門戸を開放すること能はんか、やがて卿は行動と論議と債務より自由たるべし、而してその時より以後、卿は赦罪さるべし。」

四

『人生』の功用の愛ぐしさ。

クリスマス
降誕祭には、家は冬青の樹枝もて繞纏らす、かがやく冬青は——滑かなる樹葉の——杜のなかより出で、舞踏するとき、その小兒らの耀く眼にまでうち合點く、

蠟燭は暗くされたり、彼れらは靜かに、大いなる眼をみひらきて、鉛色なせるゆらゆらする燈火のなかに、舞踏場なる龍火^{ドラゴン・ファイヤー}をめぐりて立てり。冬、太陽は天空の廣漠たる拱面^{ゆみせ}のうへにのぼり——露の水準なる桿は中空に横はり、縦や常綠樹は、裸形の沈黙せる森林地帯を飾る。

廐舎なる馬は、彼れの主人の踏む足の響に甘へそのうつくしき首をかへして、宛かも何故朝食の遅れたるかと思ふが如く、彼れはその食物の用意せらるゝるを待ち倦ぐむが如く前爬く。

都市の方へ、あらゆる街路に沿うて、昧爽の光のなかに、勞働者は凝聚す。彼れらは彼れらの仕事にまで、新鮮なる朝の芳しき氣を吸ふ、悲哀と歡喜とは彼れらと相伴ひて、毎日、その古き巢窩^{わけま}にありて彼れらの食事を頌與す。

家のうちには一人の『未知の人』^{ストレンジヤー}小兒らを待てり、彼れは暗中に立ち、彼れらのうへに凭りかゝりて、彼れらが舞踏する青き燐を見守るとき、彼れらの顔を見まもる、

オ、地は、愛のうちに赤裸にして、卿が頭をめぐりて捲ける薔薇なす指もて、また相反せる極圏に置きたる双脚を以つて太陽の方へ脹大す、

微笑みつつ、誇らしく、また擡げたる頭をもて郷みづからの美しき肉體をうち眺むるところの卿を吾れは見る、——海を、諸船を、星形なせる秋の諸花を、

羞愧せざる微笑のために微笑み、卿が王の瞥見の挨拶を卿はかへす、

然れど、夜の來たり諸星の現はるるとさ、暗然として、氣附かず、腕のうへ高く卿を擧ぐ、見よ！ 今や吾れ嚴肅なる驚異のうちに外界を凝視する卿を見る、

新生の、卿がうちに動くが故に——然かもなほ何ものとなるや卿は明らかにすることなし。

三

人類のために、その言葉は堅く抱擁して待ちたり、そのためにさしも長き年月を彼れは待ちつつあり、正當なる時に一瞬すら先つことなくしてそ

は語られたり。

水の諸小流は海の方へ向つて下りつつ鳴り響く、

彼れらの家畜を呼ぶ牧人の聲々は、諸丘を越えて、靜かなる空氣のなかを宛かも音樂の如くに響き、へだたりたるまた下方なる『時』の行廊よりは、現世の諸職業の響は來たる、

斧は森中に洞聲の如く響き、高さところの太陽に對せる石切場に於いては鑿のカチカチたる音響と落下する石片のガラ／＼する音の聞こゆ、綴釘手の鋸は、無數なる岸邊の造船場に沿ひて反響す、大いなる岬は、海中に啞の如く突出し、正當なる時に一瞬すら先つことなくして、それらは語る、かくて諸船は、それらを過ぎて、すべての邦土の海岸に向つてすべりゆく、航海者の翼ある思念は地球儀を周廻す。

地球の意志は、堅く抱擁しかつ匿くされて待ちつつあり、そのうへを走り廻はる小なる動物の論

らゆる時空を貫いて、形成くるべく彼れらみづからを没頭することを曾て休止せることなし。

彼れらが他の小兒らの間にありて、うち寛げるとき、彼れの指は、千萬の太陽の光線、厚く播かれたる諸星、無數の葉片なり、

風は世界の上を吹く彼れの使者にして、火の焰は彼れの下僕なり、氷山は、彼れらの北方の諸海岸より碎け來たり、南方の諸邦土は彼れらみづからを緑と黄なる收實をもて着裝ひ、雲は半ば匿くされ、斑らなる蔭のなかの地球——彼れの意志を充たし、彼れの永遠の歡喜を充たす——を覆ひて漂ふ。

五

『人生』の功用の愛ぐしさ。

朝は世界の上に再び初めらる、宛かも過ぎし千萬たびの如く、

光は漣波の如くに流れ入り、かくて窓硝子のうへにのぼり、そこを過ぎて眠れるもの眼瞼に觸る。

そは曰ふ、『出でよ、吾れは郷に示すものを有てり』と。

かくして眠れるものは起き出でたれど——然かもすべてのものは昨日の如く同じ。

やがて彼れは光に對ひて曰ふ『郷は吾れを欺きたり、ここに何の新しさもある』と、かく曰ひて彼れは不興氣に彼れの室にかへりゆく。

されど光は瘻痺むことなく然かも再び翌朝訪れ來たり(過ぎゆく長き旅路も意に介せざる如く)窓硝子より忍び入りて、眠れるものの眼瞼に、前の如く觸れて、『出でよ、吾れは郷に示すものを有てり』と、

かくて再び翌朝も、またその翌朝も、さらにその翌朝も。

而して眠れるものは光の何がためなるかを怪しむに至るも、光は何の答ふところなく、——たゞ、彼れみづからが爲したる約束を違やさずしてつゞくるのみ。

かくて多くの歲月の後、幾千年の後——

彼れは見ゆることなく、街路に沿ふて動く、而して大いなる都市にありて待つ、また森のうちにありて味爽、彼れは待つ。太陽に先つて蒼白く沈黙せる美のうちに諸星とゝものにのぼるか細く虧けたる月を見るは、何びとにも非ず、たゞ樵夫と『彼れ』とのみ。

『人生』の功用の愛ぐしさ。

『未知の人』は彼方此方を滑動す、何時間といはず、百年千年もの長さ間、彼れは待つ。

人類の兒らのうちにありて彼れは待つ。彼れはまた他のものと共に彼れの座をとる、彼れは帝王なり。詩人なり、兵士なり、僧侶なり、牧人なし無花果摘みなり、非人なり。

そは關するところにあらず、彼れは凡ゆるものを見、凡ゆるものを過ぐ——歡喜は何處にありても彼れをめぐる。

彼れは見る虐げられたるもの、世の撥斥せられたるものを、彼れは見る利己的なるもの、暴壓的なるものを——彼れは彼れらを正視すれども、彼

れらは彼れを見ることなし。

彼れは耐ふるものまた勇敢なるものを見る、然れども彼れは毀譽褒貶何れの言葉をも發することなし。

丈高き秦皮の芽條は、籬所に在りて熱望し、樹々は無數の指を空の方に對つて舉げ、小川は止むときなく下方に走る、巖間に封ぜられて幾千年といふことなく残りたる諸原子は、起ち上りて、地球の邊疆を過ぎ、空間を貫いて航走し行く、その他すべてのものは或る知られざる完成——過誤なき——の方に對つて急ぎ進む、

彼れは安んじて待つ、而してうたふ頌揚の歌を。朝と夕は彼れの歌なり、陸地と海洋とはその言葉なり、靜寂のうちに聞こゆるあらゆる創造物の聲々は、その不斷なる捧げものなり。

彼れは起ち上るの要なし、或ひは彼方此方行くの——すべては終り、完全なり。

彼れが翹望するところのもの、彼れのみ夢想するところのもの、そはすべて現世のものらは、あ

る湖の如くに伸び展がり、食卓は飢えたるもののために美味なる食物をもつて展げらる、

舌は静かに上顎を壓搾し、新鮮なる流走する血潮は、小川の如くに動脈を通じて跳ね躍り、脈搏つ、そのなかの幾萬となき細胞は、堤のうへに座れる『未知の人』のまへを舞踏し過ぐ、

毎朝、新しく呼聲は來たる、（誰れか知らん、今か、また何時か彼れが起き出づるべきときを？）不敵なる行爲の呼聲、野心の呼聲、復讐と憎惡の呼聲、太陽が朝、山々を越えてのぞきつゝ呼ぶ聲、諸星が、夜、窓々をうち眺めつゝ呼ぶ聲、無數の舞踏せる風光と音響の呼聲、昔の如く彼れらが魔術の圈を織る、

辛うじて彼れは詭計に抵抗し得たり、彼れの意志の如何に係らず彼れは引き出さる、

樹根なる櫻草ツリロウズの呼聲、測り難き深さある眼よりうち眺むる愛の呼聲、

性的貪慾と切求の呼聲——他の何ものも満足し能ふことなき他の肉體を慕ひての甘き熱病、

傷けられたる苦く甘き情慾、心決しかつ絶望的

に、喪神し、呼吸止まりて愛するものに唇と四肢とのうへにうち倒れつゝ。

七

幾世紀と云ふことなき長き間、彼女のアンテチエムバ前房のうちにたゆたへりしことぞ、

奇しき迷霧のなかに見失はれ、満ち足らふことなく——罪と悲哀とのうちに、心寂しく輕んぜられ、貶しめられて——

竟に靈魂は『樂園』パロダイスにかへりたり。

（オ、喜びよ！ 古き重荷、合言葉よ！）

蜂は幾世紀といふことなき長き間、吊られてすぐりの花の間に下がり、雲雀は空高く僅かに點となりて歌ふ。

幾世紀といふことなき長き間、彼女のアンテチヤンバー前房にたゆたへりしことぞ、

窓々よりのぞきながら、訝しみながら、慕ひな

幾度となく眠るべく横はり、再び起き上りたる後、幾度となく母の子宮のうちに入りたる後、數多く生死の門を通り過ぎたる後——眠れるものは彼れを起したるものに對ひて曰ふ。

『噫！ 美しさものよ、噫！ 愛の公子、郷は徒らに吾が閉ぢたる眼瞼に觸れたることそも幾度ぞ！』

今や竟に、吾がうちに濺ぎ入る郷が愛はその入口を發見して、吾が體內に充ち、その境界をうち破り、卿が來たれるところに再び爆裂しかへる。

噫！ 愛の公子、天なる王、最も美しさものの、卿に吾れは心奪はれ、愛のためにうち勝たれたり。

卿が美を睥視しつつ、吾れに對つて語るところの卿が言葉を開きつつ、卿が呼吸の近きに、また卿——病み、愛を以つて強ひ、吾れを引留むるところの鎖を打破る——より發散する聖き香氣に觸れつつ。

そのときより以後、吾れは見棄つ、生と死の長き鎖を、吾れは起ち上りて、卿と共に出てゆく——吾が如實の生活を始むべく。』

六

『人生』の功用の愛ぐしさ。

材木の積堆は森中に置かれ、土はうち揺らぐアネモネの間に、木屑もて撒き散らされたり、樵夫は彼の伐木斧を下に置きて麥酒罎を唇にまて擧ぐ、汗は彼れの顔と額に瀧なし、松樹の日光に蒸されたる匂ひは浮動し、蜂は開墾地を越えてブンブンと鳴く。

夜なれば、出火の警鐘の用意をなしつつ、蒸汽置物のなかの卓をかこみて、煙草を喫し、また歌留多を遊びつつ消防夫は座り、眠りに入らんとして無邪氣なる薔薇の蕾の少女は、惚れ々と鏡のなかにうつしつ彼女の髪を撫て梳く。

功用の愛ぐしさ、呼聲の甘さ。

永久に反對なるところの鏡のなかより、否定すること能はざるべき顔は現はれたり。

焰は都市の屋根のうしろに跳ね躍り、罎のなかなる麥酒は、渴きたる飲酒漢のまへに、樹の間な

べし。

オ、焰をして消え去らしむること勿れ！

暗き洞穴のうちに幾年といふことなく愛育し、

その神聖なる寺院のうちに愛育したり、

純なる愛の下臣によつて育てられたり、

焰をして消え去らしむること勿れ！

卿が肉體のうちに、吾れは其のゆらめくを見る、

微かなる莢を貫いて、吾れは感ず、疾き火の跳

ね躍るを——

焰をして消え去らしむること勿れ！

卿が下臣を薪として送り出せ。

卿が眼の見るところを、卿が手の達するところ

を、卿が足の氣儘なる足取りを送り出せ、

卿が耳に、卿を持ち來たらしむべく、卿が舌に

語るべく——卿が有てるあらゆるものを愛のため

に勞役し、費すべく教へよ、落膽する勿れ、忠實

なれ。

投ぐ、竟には卿が肉體を、卿が現身の自主を、

そのうへに、而してそをして漸次に衰亡せしめよ、

而して見よ！程なく小さき閃光は創造の燼邊

の火となりて來たるべし、かくして卿はなほ他の

衣装——太陽と諸星とを以つて織られたる——を

賦與さるべし。

火山岩燼の處女、シンデレラは、知らるべくも

なく彼女の大地の先鑛槽のなかに座せり、

『愛』は一たび彼女を見て、彼れが彼女を救ひ、

贖ひ戻す時まで、もはや靜止することなし。

九

オ、哄笑、哄笑！

震ひ出せ、雲よ、風よ、卿が藏くしたる言葉を

地球のうへに——而して卿、牧場は無數の雛菊と

ともに驚喜せよ！

第一の日よりの、あらゆる創造の歌と讃歌、清

澄にして境界を絶せる精氣エーザルのなかの、諸鳥のあら

ゆる唄聲と、太陽と諸星の合唱と！

がら、

幻の天使に随ひつゝ——他のものには見えざる——來たりて招くところの、

あらゆるものを見棄てゝ、家も故郷も見棄てゝ、長年の計畫も意圖も見棄てゝ、安易もまた慰藉も、名譽も、評判も、また親しき聲々の響も見棄てゝ、彼女の頸をまける愛の腕をほどきて、然かもなほ前よりは密接して縋絡みながら——

大いなる門を越えて、贖ひ戻され、釋放されて、突如、歡喜のうちに全宇宙は打開されたり——彼女が幾千年の長き流刑の後、

竟に靈魂は『樂園』にかへりたり。

火山岩爐の處女、シンデレラは、知らるべくもなく彼女の大地の洗鑛槽のなかに座せり、

彼女は侮られ、譏笑されて、彼女の寂しき運命を悲しみ哭く、

最も幼く生れたりと雖も、彼女は彼女の姉妹たちに優れ、太陽と諸星の夜装を賦與されたり、

至小なる閃光より、彼女は宇宙を没し、燦然た

らしめ、天なる公子と結婚す。

八

オ、焔をして消え去らしむること勿れ！

今まで、氣儘なる足をもつて少兒の如く無智のうちに、甘き幻影と共に、舞踏する螢火の如くに示しつゝ、希望と失望と、卿は導かれ來たりしに非ずや、

今より後は、これらのものを傍に押しやり、成年期に達して、卿が相續をうくるが如くに、熟慮してよく前後を見極め、卿が仕事と卿が權能を計量せざるべからず、

宛かも旅びとが、暑き夏の空を越えて、表白し難き思慕の情を以つて、遠き境なる美しき雪の峰をうちながむる如く——他の世界に屬するもの、如く、卿は遙かなるところより、卿が放浪の最終點の象標をうちながむ、

起ち上り、うち倒れ、草叢、不毛地、沙漠のうちに失はれ、未踏の山巔は未だ卿がうへに閃かず——その美は永久に卿が愛を見棄つること無かる

部屋に在りて玩具を片付けつつあるとき——そこに在りても、誰れか知るべき?——

そは正しく約束せる時に來たるべし。

問ふを止めよ、すべてを卿は愛のために費したりき、

宛かも電光の『東』より『西』に閃めきて、その日の來たれるが如く。

あらゆる器具は役立つ——あらゆる商業、職業、階級または仕事。

鋤は役立つ。そは價值を絶したる寶を堀出すべし。

石切斧とショベルと腕モール・ステイックと鋤パレットと、高さ腰掛と机と、靴工の錐と瀝青ナヤンと蠟尖絲と、鞭打綱ホイッピングラインと車軋横木と役立つべし。

大人の破れたる上衣を男兒のジャケットに仕立直して糊口をなす——また同じく役立つべし。

冠はその着用者に邪魔とならざるべく、官服は政治家を引留むることなし、土地、建物、所有物、

これらを如何に用ふるかを辨ふるところの人のために傍に離されたり、彼れは、それらの眞唯中より自由に現はれ出づべし。

著述家は著述すべし、植字者は組立つべし、學生は彼れの深夜の洋燈ランプによりて讀むべし、以前には會て見られたることなかりし言語を。

驛夫は客車の扉を排せば、長く豫期されたる友は、彼れに會ふべく降車すべし。

機關手は夜をこめて忠實に走らしむべく、節汽レギュレーター柄に片手を懸けて、斜に凭りかゝりつつ暗きなかを凝視すべく——而して見よ! 印刷せられたる指インストラクション 今のうちに掲記されざる新しき信號は正しく順次に現出すべし。

政府の役人は鳩舎鳩舎なす私室のうちに座るべく、收税吏は後の客室の寢椅子に凭たれかゝるべく、夜盜は彼れの深夜の侵掠を計畫すべく、乾物屋の小僧は臺所に於いて毎週間の御用を承くべく、釘職工は彼れの桿てを火中にかへしてその代りに熱したるものを取出して打つべし、

優雅に躑けられたる娘は、水色の開口あきぐちある鮭肉サลมテ、

如何に歌ひて、木の葉をうちそよがすかよ、また聞こゆ、藍色のなかの雲々の間を、

如何に、それみづから悲しみつゝ濺ぎ出で、死のうちにのみ香氣を發するかを、暗きなかにありて、木幹や石片のうへに躓きながら——

懶く、傷けられて、而かもなほ忠實に、決意して、打負かざるることなく、

それみづからの如く變ることなき如くなり來たりて、美の相續のうちに入り來たる、偉いなる面帕は擧げられたり——

外圍を動くところのあらゆるものゝ本原オリジナルをうちながめつゝ、不滅の軍勢の集團、榮光の薔薇は、

死滅するものゝかげに耀き——

征服され、光輝を以つて盲ひされ、戸口にうちふるへて倒れたり——

長さ、長さ旅は完成せられたり！

一〇

その日——解脱の日——は、卿が知らざる如何なるところにか來たるべし、そは來たるべし、然

れども卿はその時を知ることなし。

説教壇にありて、卿が説教をなしつゝある間に、見よ！ 俄然、緊縛と縋とは——搖籃と柩の蠟布と縋布なる——脱ち去らるべし。

牢獄のうちに『彼れ』は來たるべし、而して鐵より強き鎖、鍛鐵よりも堅き桎梏は溶解さるべし——卿は永久に自由なるべし。

死までつゞく苦惱と涙と倦怠のうちの病室のなか、そこに翼の響あるべし——而して卿は知らんその終の近きことを——

「オ、愛するものよ起て！ 靜かに吾れと共に來たれ、焦躁する勿れ——歡喜それみづからが卿を徒らならしめざらんがために。」

鉄と耙ミヅハをもちて畑にあるとき、厩舎のうちの卿が馬の傍にあるとき、

無作法と懶惰の眞中なる娼家のうちにあるときまた卿みづからの、或ひは卿が同伴者の衣を繕ひつつあるとき、

流行界の唯中にあるとき、朝の訪問を爲しつつまた受けつつあるとき、怠けつつあるとき、卿が

彼れの眞の自主を忘れ勝ちになりて、彼れは影のなかに自己模索者となる。

然れども、これらよりは、たゞ鬭争と撞着と惑亂のみ泉む。

かくて知覺を有せざるところのものは、知覺を有せざるものに續く——如何となれば、何ものも唯その蔭なるの故に知覺を有し得ねば、而して幻像の秩序は他につゞく、かくて一の歡樂若くは放縱は他に、また一の義務或ひは拒絶は他に——

竟には困惑され、嫌惡され、休息を見出すことなく、平和なく、されどたゞ何處にも失望をのみ見出す。

彼れはかへる（かくて『歴史』もかへる）その何れなるかを探ねつゝ。

旅は勞苦多く長し、彼れは棄つ殻また殻、包封また包封。

山々を越え、打破り難き、包むことなきすべてを、彼れを引留むる顔を蹙めたる埒柵を越え、無宿者と獸の兄弟なる貧困を耐へつゝ、嘲罵と

譏笑とを耐へつゝ、

星の光と曙の光によりて、多くの沼澤を過ぎ危険と勞苦と貧困とを過ぎ、貞操を過ぎ、その有るあらゆるものを棄て去り、山々のうへなる長き夜警を、また日に照らされたる流れのなかに洗ひ淨めて、また血によりて汚されざる快き食物を過ぎ、彼れのまへに昇る頌揚と、感謝と、歡喜とを過ぎて——

すべて、あらゆる因襲は傍らに棄去られたり、あらゆる限定は過ぎたり、あらゆる桎梏は脱ちたり——長き間の莢と鞘とは落ち去りたり——
竟に、『放浪者』は天にかへりたり。

かくて徒らに彼れを引留むることを試みたるところのすべてこれらのものは——

『彼れ』の來たれるとき、誰れか彼れらのうちの何ものかを求めて左右を見廻はさんや、
彼れらによりて欺かれざるのみならず、寧ろ傍を過ぐることを脅迫し、彼れらのあるべきところに彼れらを残す——

淡色の絹を着て行儀正しく歩むべく、縫衣婦は、日の光の最後のときを氣張りて、飾りなき屋根裏部屋に座るべく——而して人に偽ることなく、一步針づゝを爲すことによりて、彼女みづからのために解脱の光りかゞやく衣を縫ふなるべし。

母は家政を見、また彼女の兒らを看ることによりて彼女みづからを看るべし、彼女は彼女みづからの時を有つことなかるべし、然かも彼女の死に先つて、彼女の顔は天の如くかがやかむ。

マゲダレンは扉を叩く音に應ふるために走り下るべく、而して彼女の愛人なる『耶蘇』は彼もみづから入り來たるべし。

二

『主』の在るところ樂園あり。

吾れは知る、何ものも卿を満足せしむることなきを——何ものも竟に如實の意味を有たざるを。

肉體の前房のうちに徒らにたゆたひたり、それに屬せるもの、またその壁の上を塗るところの形態の間に——げにたゞ一の例外を除きて美しき

ところの——卿は徒らに卿が主を見るべし。

理智（そはそれみづからにて重要なり）の前房に、そは徒らにたゆたひたり、系統と哲學と、計畫と意圖と、保證と論議と、暫時は卿を喜ばしむべし、然かも所詮それらは互に矛盾し破壊し終らんのみ。

藝術と道德（そはそれらみづからにて重要なり）の前房に、卿は餘りに長くたゆたふこと勿れ。

ここにありては同じく他の部屋のうちにありての如く、卿は『主』の足跡を見ると雖も、卿は彼れと親しく相見ゆることなかるべし。

諸樹は『園』に生ひ立つと雖も、それらは『園』の王と相同じからじ、それらよりは、それらみづからより出で來たるは根と枝の昏迷と撞着と惑亂とのみ。

これぞ『人類』とあらゆる『歴史』の秩序なる。

降りつゝ、彼れは世界のうへを彼方此方に走り、而して住む（暫時の間）知覺を有せざる諸物のなかに、

云ふところの何ものをも受け容るる勿れ——何故となれば、そは受容を希はざれば。

吾れをのみ、たゞひとり、卿がこれらすべてを分離す、拒絶し終りたるとき、卿は見て拒絶せざるべし。

一三

他の何ものが（これ以外）地上のあらゆる民族の、時代の、年代の夢想なりしぞ？

他の何ものが少年時代の熱心なる夢想また年ゆきたるものの玩具なりしぞ、前の時永久に漂ひ浮く約束なりしぞ——旅に疲れたる旅行者に鈍き蜃氣樓なりしぞ？（喪神する勿れ、オ、喪神する勿れ！）

他の何ものぞ、雪を横切つて來たる降誕祭の讚美歌の響——よりよき邦土を夢想しての幾千年間のやさしもの悲しき歌——は先立てるあらゆる歴史より下り來たれるに非ずや？

何んぞや、民族の執拗なる因襲と海陸の探検と、追求の本能、『地上』の樂園の模索、社會改良家の

無何有卿、エル・ドレドオ（非常の富を有する土地南米リノコ河とアマゾンの間にある黄金の土地なりと稱せらるる譯者註）とお伽噺のうちの諸島、冒險と征服の諸煽動、順禮、神話、サングリーアル（我が救世主が最後の晚餐に飲まれし盃にして其後アリマテアのヨセフは主の傷口より流れ出づる血汐を以つて其の盃を充たせしと傳へらる、又此の盃は生命を延ばす力と潔白を保つの力を有せりとせらるる譯者註）の倦むことなき探求は？

生命の長命液と哲學者の石との滅し難き信念、足跡のうへにその鼻をつくる犬の如き近代科學の熱病の如き熱心？

他の何ものぞ、地のうへを歩む小さき動物の驚異すべき夢——宗教の夢想——住民ある諸空、神々の願しき天地創成論、竜大にまた上に懸かれる黃道帶の神秘なる卷物なる『來世』？

窟ロック・キャムラフ寺、三角塔、大伽藍の鈍き灯のつけられたる房々、——方舟、聖麪、至聖所、

すべての邦々の聖旨と福音書と、エルサレムなる回教寺院よりの火の附與と、無數の蠟燭の點火

斯くして彼れらは起ち上りて彼れに隨ふ。

前に茨と荆棘とありと雖も、彼れの過ぐるみちは今や樂しき果實と花となり來たれり、

〔彼れが、彼れよりそれらを着くるに至るまで、彼れはそれらのうちにあるところの愛を知らざりしなり。〕

永久に信實に、彼れらは彼れが下僕なり——而して彼れまた彼れらに信實なり——かくしてこの世界は樂園なり。

一二

かるが故に吾れは郷に告ぐ、『喪神する勿れ』と、暫時このところに休息して吾が愚なる空談をゆるせ、

これらの言葉より振りかへりて再び郷が周圍の世界を見よ、郷が爲さざるべからざる仕事を。

一年或ひは二年のために非ず、

出來心また閑さする情慾のためにも非ず、嫉妬また互リクリミエシヨをミ追うてのためにも非ず、たゞ何ごとか他のもののために——

他の世界に生ひ立つ何ものかまたそれを藏するところのものよりヨリ貴重なる寶玉箱なるべく——統治權と自由と見えざるところの生活と、吾れらは交易す創造の往昔の言語とを。

かくて吾れは神掛けて誓ふ、若しも卿が吾がいふところを了解するならば、この書のうちにまた如何なるところにも書きたるところの吾がこれらの思想を壓碎し破壊することを、

而して吾が肉體を（若しもそが戦ひのうちに出席することの吾れが運命ならば）吾れは信實神かけて誓ふ、破壊すべきを——また恐るることなく——宛かも吾が卿がものを破壊するにつとむる如く、かくして卿は卿と共に住むべく吾れをゆるすべし。

惜用する勿れ、敬する勿れ、信ずる勿れ、吾が書けるところの何ものをも。休止すること勿れ、卿が齒の間の最も微小なる食物としてそれを細かくし終るときまで。

かくして吾がおもてを凝視せよ、吾が爲しました

の幻象を、

而して吾れは見たり、人類——その民族も氣候も時に甚しく變改せるところの世界古の顔々の上下に行くを、

未開と文明とを過ぎ、農業、遊牧の民、漁業者を、また洞穴に住めるさては宮殿に住めるものを過ぎ、狡猾なるすべての動作また狡猾なる知識を過ぎて、さらに出て來たりて吾れは見る變らざる古き顔の行くを。

死に忠實なる義務の、王の如き顔は人類の舌によつて曾て以前出だされたる最も發音分明なる言葉は世界のうへを覗き、理性の顔は靜かに人生と關係を持す、

深切と愛との顔々、うちちのく唇、獸のなかなる母の胸、

決然果敢なる顔を吾れは見る、汚染なき湖——うつす他の鏡のなほ無かりしとき——の如き公平無私の透明なる眼光、

親しき粗野無作法なる顔（曾て以前、安息する天幕の入口ありき）鋭切慧敏なる顔、森林中の自

然の兒の笑へる、さまよへる、愛すべき半人半山羊神の顔、また『自然』彼女みづからの如き開放せる埒を設けざる神聖なる平等の顔、

吾れは見る、暗黒より暗黒へ彼方此方に導く諸徑を上下するこれらを、

吾れは今日、彼れらを見る巷のなかに、また歴史の遙かなる薄光の彼方を眺むるとき、吾れは見る、同じきものを。

而して吾れは見る、また、脅かす良からぬ顔を、爬ふところの誠實なき虫の如き顔、つねに空しく獵しまた常住獲得のために足跡に鼻をつくるが如き顔、

魯鈍なる欺瞞の、頻蹙すべき性質の、垂涎する虚榮の、呪はれたる厚顔無耻の顔々、

眼瞼の下なる自己満足の速かなる掃拂、執拗なる唇を合はせたる、疑念に皺寄せらしたる口、憤怒に膨れたる蜂谷——我儘の耻ぢ多き杓子面、

吾れは見る、暗黒より暗黒へ、彼方此方に導く諸徑を上下するこれらを、

と、『オシリスは起てり』としるしたる言葉ある空しき石棺の立てるナイルの岸邊に近き僧侶の遙か遠方なる歌聲、砂上に於ける治療學者の深夜の裸踊り、救世軍と復活派リバイバルの行列？

各男女が日常の生活、永久なる明日の豫期、盡くるなき自己模索、幻惑的な探索（喪神する勿れ、オ、喪神する勿れ！）形なき鬼火を追うて泥沼のなかに悶躁する、失望の涙を、希望の頑固なる再新——

あらゆる航程と道路、また地の上を前後左右する足の無數なる運動——

これらみな一つの偉大なる事實——數へ難き諸經の象徴——の『透トランス畫ペインティング』に非ずして何んぞ——それによりて靈魂の樂園パラダイスにかへるところの？

一四

吾れは睥視したり無數の諸徑をもてる『地球』の幻象を、吾れは見たり、上下する顔々を——各々彼れらのうちにもてるところの世界を。

吾れは聞けり、『歴史』の長き咆哮と波濤を、波は波の後を追ひ——宛かも西部亞弗利加の無限なる海岸線に沿へる曾て終ることなかるべき激浪の如く。

吾れは聞く、虚げられ、擠斥せられたるものの世界古の絶叫を、吾れは見たり、常に勝利に向つて彼れらの進みゆけるを。

吾れは見る、確立せられたる秩序と先例との炮煩より出づる赤き光を——防禦軍の哨兵線と、攻圍軍の密集部隊とは塵埃と鮮血のなかに、轉顛す——然かもヨリ甚しくさらにヨリ甚しくその背後にありては！

かくて最奥なる堡城のうへ高く吾れは見る壯嚴なる、而して攻め圍むものをつねに招き、防禦するものをつねに鼓舞する、終ることあらざるべき闘争の原由なる——

『自由』のかたちの立てるを。

一五

吾れは睥視したり、無數の諸徑をもてる『地球』

れの看視にまで憎惡に満つ、

支那婦——彼女の赤兒を背に吊りたる——は、
漕ぎ漕ぎて渡船して河を横切る、こは彼女の故郷
なり、而して夜と云はず、晝と云はずそれより離
るゝなり、

惡猾ロンドナアき小き倫敦人は酒飲みたさに、酒罎を彼
女の衣囊ポットのうちにしのばせて、料理店より家に潜
逃しかへる——彼女の良人が勞働しつゝあるとき
に、また若き伊達者はピカデリー街を歩みゆく、

龐大なる赤き辻馬車の御者は行き過ぐるとき快
活に彼れの同業者に對つて彼れは叫ぶ『郭公カッソー』と、
暖き四月の朝を、而して無邪氣にむなしき空をう
ち仰ぐ、

氣取りたる足取りの馬つけたる馬車はリージエ
ント街に雲集し、巡查は彼れらをとどめて水先案
内す——殆んど運ぶ——道を横切らんとする甚だ
脆く輕きこと少兒の如き哀れなる老婆を、

跛の窮乏せる年老いたる屑拾ひは、鼠色の毛髪
と獲物をさがす眼付もて終日屑を拾ひ上げながら
舗石路のうへをさまよひ歩るき、彼れは見ず家を

空を、道ゆく男女を、彼れの眼は書籍を讀む人の
如く、片側より片側へ轉々するのみなり、

孤獨なる母は、彼女の物懐しき小き店に座り
店頭の版畫の間より、行人の立ち停りて愚かに口
あけたる顔をうちながめつゝあり、二階の室には
彼女の男兒は病みて打臥し、時たま客の入り來た
るありて小錢を投げゆけば——彼女は必ずそれを
茶飲茶碗のなかに正しく藏ふ、

田舎の道路工夫は、物慣れたる眼付を以て、彼
れの道路の長さを測量し、所々門柱や樹木に目標
を置きゆきて、道標ロンドンカムをうち込むべきところを指示
す、

自墮落の老いたる鍛冶屋は、彼れの工場中にコ
ークスを搔き廻しながら、ベチャクチャと喋舌り、
また左の手もて韃ふいでを吹く、時々燃え上る灰を以つ
て彼れの煙管に火を點けるべくやすむ、

定まりなき炫光のなかに爐邊のうへには、何時
間といふことなく、人の好き大いなる農童座りて、
淫猥なる或ひはそのほかの彼れの物語をうち興じ
たり。

吾れは今日、彼れらを見る巷のなかに、また歴史の遙かなる薄光の彼方此方を眺むるとき、吾れは見る同じきものを。

オ、顔々よ、何處へ、何處へ、卿は行かんとはする

暗黒より暗黒に導く、これらの無數の諸徑の何するものぞ？

如何なれば、かくの如く多くの假裝の旗印の下に、頭帕（ダグ）、フエズ帽（フエズ）（赤色なる一種の縫付氈帽（フエズ）譯者註）豚尾、廣縁帽子（フエズ）の下に、牛糞の辨髪と鳥毛の總、希臘の矢と彼斯の頭被、三角帽と烟突（パイプ）の陶冠（クラウン）の帽子、黄金の片と藁と草との頭飾、卿は光のなかに這入りて再び出でんとするか（尙ほ同じ）——月の徑を横切る諸船の如く？

一六

瓦斯の灯ともる狭き ローレンスの巷を越えて顔々は過ぎまた再び見えずなりぬ。

古きカムバニーレの諸塔は、高く日没時のなほ

たゆたへる夕紅（ゆふやけ）のなかに、星はすでにその頭上をめぐりて微かにきらめきたり——フローレンタイン時代の五百年の追憶はそをめぐれり。

ガリレオの塔は、諸丘の彼方はるかに立てり、然れどもそのところより星をうちまもりたる彼れはすでになし——彼れの休止することを知らざる頭腦もはや靜動の問題を研磨することなし。

ハザランドの順禮は、ジツダアに簇集し、メツカへの途上は古き世界のあらゆる地方よりの參拜者を以つて押し合ひへしあふ、

羅馬の謝肉祭（カルネヴァレ）の少兒は互にコンフエツテイの丸（ボール）を投げつけ合ひ、聖彼得寺への參詣者の流れは、交互に、天より隕ちたる像の踵を接吻せんとしてその順番の來たるを待ち、神聖なる寶玉を以つて飾られたる耶蘇（イエス）の像は、その神聖の捧籃より取り出だされて、行列をなして街路を練りゆく、

永き北氷洋の夜のうちのコリーマの河口近く、空を日のめぐりまはるとき、露西亞の流刑者は、妻子の愛（めづ）しき顔々を求むる望みも絶えはて、佇み飢ゑたり、未開なる西比利亞土人の面貌は、彼

舗石道のうへには、高帽、鞆、外套をつけたる憂鬱なる生きものゝ急げるあり、

白き顔の娘は勞働に趣き、市人は不安げに歩みながら新聞を讀みつづく、

郵便夫は、彼れの肩に郵囊を提げ、彼れの手に是一把の郵便物を有ち、薄汚れたる下僕は戸口を掃除しつつ、肉屋の小僧は二輪車を挽き、家庭女教師は彼女の日課に行く、

牛乳車、酒屋の荷馬車、二輪馬車、地下停車場の狼狽てふためく群集、空心にて通り過ぐる階段、客車の扉への突進、かくて列車はトンネルのうちに突入し没しゆけり。

一八

オ、前に後に爬ひ上らんとする幾千萬人の大都市よ！——オ、勞苦し、辛勞に傷きはてたる地球の幾千萬人よ！

永久に影また影を追ひ求めつつ、僅かの報酬を與ふるが如きもののために勞役しつつ

涙また涙、夢さ哄笑、黒き蟾蜍の座れるを永久

に心臟のなかに有ちて、

オ、永久に卿が通路——暗黒より暗黒への無數なる諸徑の——にかへりつつある放浪者！　オ、

月の徑を横切る諸微片！

卿、コリーマの河口に近く、蒼白なる顔をもて星斗燦爛たる大いなる大空をうちまもるものよ——榮光はすべて苦痛とともに相交はり斑點をしるしたり。

卿は、霧深き黄色なる曉、仕立屋の瓦斯光の蒸れ立つ地下室に急ぎつゞく——或ひはまた垢じめる裏通の細民窟のなかにありて、卿が少年時と櫻草咲ける堤とを夢想す、

卿は、夜、心安からず横はる、永久に卿がうへに迫る仕事の心勞のために倦みはて、喪神して——群集せる歩道のうへを日中卿はコンコンと歩き廻る。

いざ、來たり、心安く座して、すべてを忘れよ、眠れ、倦み疲れたる兒らよ、而して夢みよ、平和と平安を。

一七

黄昏となりて、巨大なる寺院の教會堂には燈つけられたり——瓦斯の幾線は、衰へゆく日の光とまじはりて巨大なる圓天井を縁取る。勤行の時は近づけり、蹈む足の響はやゝに忙しくなりぬ、めぐりには、偉大なる都市の咆哮衰へゆく。

旅商人は彼れの荷物を持ち來たりて椅子のうへにそを置き、その傍に自ら座を占むれば、市人は彼れの袋囊を提げ來たり、田舎の見物人はめづらしげに見上げまた見廻はす、疲れたる年老いたる無駄話漢と新聞雜誌閱覽室の遊惰者は、半時間の眠りをぬすむべく入り來たり、子猫の如く従順なる年若き英吉利の娘と彼女の弟とはつゝまじやかに座り、賣春婦も同じく來たりて、任意に彼女の場所を撰擇す。

滑かなる顔せる役僧、大いなる讀經檯の蠟燭に灯を點ずれば、オルガンはその高音部の音調をゆるやかにうめき出で、——屋根や圓天井の空間を

通じてうちふるふ。

音樂の教師は、彼女の樂譜を椅子のうへに残して全く薙疊のうへにひざまづき、貴女は彼女の小さき男兒を携へて勤行に加はる、

ボロ着物を纏へる信仰定まらぬ老人は、獨りつぶやきつゝ、押し入り來たりて座に就き、淨水場より來たれる若者は低き聲をもつて同伴し來たれる娘と物語る。

彼の傍に眼をみひらきてまごつける彼れの小さき女兒をつれたる中年の男は眠り、清しき眼と短く太き剃らざる頤をもてる若き煉瓦職人は、大いなる圓柱と彫刻せる大斗カピテンとをながめまはす、かくて唱歌團の少年の高音と低音と目ひき袖ひきするにも關らず、眠氣なる年老いたる道心は勤行のうちによりめく。

朝、閉ぢられたる一日の朝、穢れたる黃褐色の煉瓦の家々の幾列は、倫敦の霧を突いてすべての方面に伸び展がりたり——此處彼方、時として窓にはなほ燈火ゆらめきたり。

類の兒らのために！

旅装せる若き農夫は、遠きより丘々を越えて癡狂院なる彼れの姉妹を見舞ふ。應接室にありて彼女は、小奇麗に装ひて穩かに彼れに會ひたり、彼れらは殆んど同年輩の如くなり、感謝に充ちて涙を漲らしつゝ互の眼を讀みながら手に手をととりつゝ共に座りたり。

不思議なる蛛網は相交はり相交はり彼女の顔と意識とを曇らしたれどなほ彼女の星の如きものには彼れに對する彼女の變りなき愛を燃やしたり。

幻象の不斷なるを彼れらの前にして祈禱りつゝ、語りつゝ、亂れたる髪をなし。狐疑の利己的なる斜眼をもちて、動物の如き様子と叫び聲と饒舌と、甚だしく喫驚さする如き目付をもちて、病室のなかを彼方此方物言はずたゞ機械的に歩みを運びつゝ、哀れなる『人性』^{ヒューマニテイ}の破れたる幻像と浪費者は彼れらの時を待てり。

今や、夕となりて、牧場より、草屋より、親し

き水のほとりより、やさしき悔恨と追憶——遠き昔の別離の追懷と、見えたりし顔とも、聞こえたりし聲々もすでになし——とはにほひ出づ。

夕ぐれのにほひと共にそれらは、生ける男女の胸より、起ち上りて——にほひ出づるなり。

戸口近く卿は、去りゆく彼れを、或ひは彼女をものやさしくうち怪しみながら立ちつくしたり、突如^{つと}その戸には卿の姿むなしくなりて、卿をうち怪しみつゝそこに他のものは立つべし。

宛かも卿が卿の母になせる如く。また彼女は彼女のを（母を＝譯者）知りてうち怪しみたり、而して彼女の母は、彼女を生みたるところの彼女を再び然かせりき。

やさしき記憶と、愛との鎖によりて地球をめぐらされたるは、小兒らの互にむすぶれたるが如く——ここに免れ出でたる一人だにあるなし。何處か過ぎゆく彼れらの逃避所なる、何處にありてかぞへられざる子孫の待つべきか？

如何なる凹地に彼れらは住むべく如何なる谿地に棲息すべきか？——何處に彼れは彼れらの見ざ

卿はなほ遠く行がざるべからず、されど急ぐの要なし、

今や、卿が旅の終りの如く見ゆるところのものは、恐らくその初めに過ぎざるべし、想像するだに卿を懼れしむるところのものは、恐らく竟には卿の過ぎゆきて殆んど氣づきだもせざるところのものなるべし。

卿、黒き鞆を提げて、列車に間に合ふべく急ぐものよ、もはや急ぐ勿れ、卿が要するところの行爲は——卿をわづらはさざるべし——卿が事務所に見出さざるべし。

列車は、トンネルのなかに没し去れり、彼れらの行先に達すべき約束を以つてもはや旅客を欺かざるべし。

老人よ、街をウロウロすることを止めよ——吾れは卿の何ものを探ぬるかを見たり、そは安全なり、而してその報酬は大なり——然れど、今は、たゞ瞬時をやめよ。

また卿、緊りと手套をはめ、靴を穿ち、鉛筆にて書ける如き眼光をもてるものよ、餘りに卿が手

套と靴とを撰擇し、いづこに座を占めんかをおもひわづらふ勿れ——何故なれば卿がこれらのものに没頭しつゝある間に、卿が愛人は寂しく卿を待てるが故に。

物凄しき小さき店なる孤獨なる母、樂園への途上の疲れたる小兒——今や卿が男兒として階上に死にて横はれり

その道程は長しと思はるゝや？——暫時、此處に休息して、吾れらをして自ら慰めしめよ、

吾が見る包封せられたるところの卿は現身の形態をなして此處に休息したり、

罪と悲哀と苦惱の小兒は其處に近く休息す。

一九

諸丘は列を爲して、黄なる日没に對して立てり、それらの丘腹の凹みには雪あり、前方には縁の起伏せる牧場展がり、樹々と水の響と、小屋の煙突よりは煙たちのぼりつゝ、

オ、高く叫べ、地のうへを、不朽なる運命の人

のちに彼れはそれらを棄却し去る、
科學と文學との傳統を、彼れは暫時附議したる
が、やがてののち——いづれは靜かに傍に片付け
たり。

修辭學の花と形態とを彼れは用ふ、然れど直ちにそれらは見棄られ、落ち去りたり。

彼れみづからの人道の、彼れみづからの傲岸なる本能と決意との偉大なる巖脚より、『大神』と永遠の『正義』にむかつて高く腕を舉げつゝ懇求す——

かくて千百の眼より涙と歡喜の電光閃き出で、その顔々の廣大無邊なる海より、恐しき咆哮と心よりの協力は始め出ださるゝ。

賛否の論議は、空中高く、宛かも疾風のなかの木葉の如く吹き散らされ、

幾千年の傳統はその形態と輪廓とを失ふ——水中に氷の溶くるが如く。

人類の胸深く植ゑたる彼女の座席より、あらゆる推論と科學と論議との背後より、

『人道』は、彼女の『意志』を語り、また歴史の一頁を記す。

二二

流星の、瞬間に、定着せる諸星の間を物言はずすべりて去りゆくが如く——この書籍のうちにありても、それらの意味を啓示するところの、其他の『言葉』は閃避しつゝすべりゆく、

驚歎すべく、永遠なる——これらの言葉が交互より分離れて、枯死し落つるときも、その泉みたるところにかへりゆく。

古き光景を見るべく——また古き夢を夢みるべく——劇場は雲集す。

肥大りたる主婦は、酒場のうしろより來たり、書記は彼の半裝飾の火氣なき屋根部屋よりぬけ出で、紳士淑女は、彼れらの食卓より、のらくらと出で來たる。

指物師の徒弟は、彼れの前掛をぬぎすて、彼れの食事に急ぎ、仕立屋の娘たちと、兵卒と俱樂部よりの遊蕩兒フラッターとすべてそこにあり——

る眠りを眠るべきか、また太陽の光の彼れらを目覚めせんか？

彼れらの沈思するところのものを、如何にして夢想せしめまた吾れらを、彼れらは星の如く無数の眼を以つて見まもるか？

二〇

オ、高く叫で、『地』のうへを！

疾走しつつ空を越えて暴ぶ。大いなるちぎれ雲は、吾が詩を通じて變化しつつ移りつつ過ぐ！

吹けよ、オ、微風、まじれよ、オ、風、これらの言葉と——その目的は卿のそれと同じきなり！

汝、暗き畑地と草生へる丘々と、また黄頬白鳥の囀るはりえにしだど——書け、汝、汝が無数の同じきものの絲遊を吾が詩句と共に！

のびよ、オ、諸葉、太陽に月に、それらのものしづかなる凝視のうちに漂白すべく——嵐せよ、彼れらを、オ、風よ——漂はし去れ彼れらを、オ、海よ。港のうち、漁夫の網のなかに潮の香とタ

イルの臭ひともちて漂着すべく！

開け、オ、凡ゆる邦々の頁を！^{ページ} 彼れらをして

すべて出入に自由ならしめよ、彼れらをして大いなる都市の街衢の如く横はらしめよ！

彼れらをして傾聴し、物言はしめよ、旅客の脚の物言ふところを、また樅の木といふところの風評を。彼れらをして平等ならしめよ——多からず少からず——宇宙が能ひうる限り耐へたところを記るしたるその言葉を書かしめよ。

二一

オ、高く叫べ、『地』のうへを、不朽なる運命の人類の兒らのために！

偉大なる雄辯家は、演説壇上に立てり、

賛否を意とすることなく、彼れは彼れみづからよりのみ語る。

彼れは決意せり、さればいさゝかも彼れの決意を翻することなし。

賛否の論議を、彼れは軽く扱ひ——稍々暫時の

れは餘念なくそれらのまたあらゆるもののいふところにて傾く。

二三

噫！永く探ねたりしところのよき音づれ——古代の不滅の『福音書』！

小舟は、大いなる穩かなる海のうへに揺り動きはるかなる靄のなかに雲はただなほ——陸地は微かにまた遠し。

山々さては正午の太陽の眠る森林微かにまた遠く、

噫！人類の翹望せしよき音づれ——さしも多くの諸時代の夢想！

何びとかその陸地を見たりし？何びとかその大洋にうかびたる？

地球は廻轉し、多くの船はその海を帆走し、無数の足はその陸地を横切り、さては空中にむらがる雷雲の大きさよ、

然れど、誰れかなほ眞にその陸地を歩み、その

海のうへに漂ひ、また誰れか空中にさしも壯麗にむらがる雲の、それらの價值ある同伴者たりしぞ。

船は港に横はり、彼れらの背後には、はるかなる水平線のび展がり、圓き大洋は他の緯度のうちに彎曲す。

微風は、其胸に雲をいたゞきながらしづかに岸邊はなれてただよひ、旗の褶のうちに感じながら、菊花は茅屋の庭に簇り咲き、岬はその尖端を啞の如くに海中に突出し——彼れらの正しき時の一瞬に先つてすら彼れらは語ることなし。

變形され——『卿』が相似に變形されて——境界を過ぎつつ、

惡の境界を過ぎ、解脱しつつ、歡喜に充たされて、

永久に空しくなることあらざるべき大いなる湖水を——その岸邊に來たり——あらゆる生きたるものを洗ふ歡喜の大いなる内地の大洋を吸引しつくしつつ、

音楽と戯語との間の光線と色彩の炫耀の眞唯中に、不思議なるさまよひ思慕する夢あり。

毛皮の袖裏つけたる若き伊達者は舞臺の入口の外にそを待つほかあらず、

見習女工は、翌朝、彼女の仕事に趣けども正しく彼女の手押編物器を見ること能はず（機械にかくるに先つて、それらを廻載するとき）夕暮、彼女が諸街を越えて家路に急ぐとき、彼女をとらへたる光景の若しそこにありはせざるやを考へつく。

瓦斯の光のゆらめくなかに、舗石道のうへを混雑せる群集は行き過ぐ、巡查は辻馬車を叱咤し或ひは親友と小聲に喋言べりながら角の火酒舗を背にして立つ。

木栓の盆と氈輕靴の束縛より離れ物憂き瞳をなせる、中年の女は薄き肩掛に袴と身を包みて立ち或ひは彼女の足を暖むるために彼方此方を足ふみならず。

造船場の大きいなる屋根の下、物狂はしき轟響の

うちに、鐵船の中部深く、日毎綴釘手の槌はすべりて、赤熱せる綴釘を打つ。

茶色の背なす鷗鵠は、耕野を横切つて飛び、それらの遙かなる上方には、動くことなく鋭き眼の鷹は、それらの動く影を認めたり。

白衣のアルパニアの兵士は、ジュニナの美しき都市と湖の上なる諸丘を横切つて進軍す、サラサラと音たつる小川のかたはらには樹影投げられ、夜半、恍惚たる觀測手は動くことなくして立つ。諸星は徐々として西の方に向つて滑りゆき、暗き樹幹のかげかくれ入り、突然、再び現はれたれど、然かも彼れは動くなく——彼れの思念は動くことなし。

世界は、彼れのめぐりをめぐり、生存の桎梏は落ち去り、餘念なく彼れは至上なる歡喜と練達とにうつりゆけるなり、

見よ！サラサラと音たつる小川、諸星、露なる樹々の枝、それらみづからを彼れにまて運ぶ。それらは近寄り來たり、それらは彼れの肉體なり、また彼れの精神は、それらのなかに恍惚たり、彼

り！

「年老いたる北亞米利加土人は、沈黙せる杜ある曠野——彼れに親しき何千哩といふことなき——を歩む、

線條にみてる古代の巖石の如く、彼れの顔は天候にさらされて無感覺なり——星は彼れの親しき友なり。

その頭に羽毛をつけ、樺のめぐりに山猫の尾をなし、輕車を作り、エミウ鳥の如く誇らしく、戰士の集ひに加はる若きツル——人——彼れは、その歩むとき彼れの下より地球を押すが如く見ゆ。」

二五

吾れは見る、地球のうへの生命の展ががれる渺茫を——

吾れは見る、劫初の森林を素裸にてさまよへる勇敢なる土蕃を、吾れは聞く、彼れらの力ある絶叫と呼び交はす聲々の絶壁と溝壑とに反響するを、

吾れは見る、文明人の彼れの書籍堆裡の書齋にあるを、或ひは彼れの婦人とともに列樹ある廣小路にそうて馬を驅るを、吾れは見る巴里及び紐育の美装せる群集を、吾れは見る煽動者の飢餓に頻せる狂暴なる暴徒を、

人類の『自然』に對する永き徒なる爭鬭を吾れは見る、手に手をとりに旅することなく、彼れみづからを彼女の反對に置きつつ、必要なる前奏プレリュードと見習期間と——宛かも彼れの母に抗ふ我儘なる少兒の如く——しかもなほ征服され、竟には全く征服されたり、

すべて可、而して吾れは見る、そこに急ぐの必要なきを。

吾れは快げに見る、地球のうへの生命の展がれる渺茫を、吾れは見る、朝まだき黒烟を漲らす大いなる諸工場を——勞働する人々の入り來たる、都市の主要なる街衢にそへる店舗の列れるを——棧橋や埠頭とそのうへに勞苦する人との群もともに、

そこの樹下に座し、少しく遠方なるそのうへを飛ぶところの諸鳥をうちみまもり、同じくそれより飲むべく下り來たる野のけものをうちみまもりつつ、

害惡と爭論との眞唯中の埠頭に座しつつ、出帆を待つ諸船を、また發着する旅人を仔細に注意しながら、また微風の靜かに旗の褶を漂はすのを見ながら、

満足し、驚喜し、吾れなほ遠く行かざるべからざるを覺えつつ、すべてが開放され、自由ならばまた『卿』が準備せるならば――

歡喜して、オ、歡喜して吾れは吾れみづから『卿』にまで降服すべし。

二四

見よ！壓力と不滅なる情慾と自主の柵埒に對つての突出と境界の永久なる擴充と、

止むときなき論争、憂鬱驕慢なる『強大』^{グライムニツク}と靈

魂の寂しさ争闘と、

無我無中の分婉、液囊の破裂、奔出と而して無

數の子孫！

見よ！内なるものより出づる癒やす力、昏惑せる心意を靜め、うちおののく諸神經のうちに平和を擴ぐ、

見よ！永遠の『救世主』^{ヤブイア}、世界のあらゆるものの後を追ひての探求、互のうちにかくされて（然かも開かるべく）住める。

さまざま戀ひ慕ふ夢、幾年代もの間の題目と長き句尾覆唱詞と、オ、至上の歡喜！

あらゆる創造を通じて典型を斥け、試みに音符^{ノーツ}と主符^{モテューズ}とを失ふ、

曾て以前、人類の素足がその間を踏破せしところの丘々の胸に眠り、

森林の巨人、大いなる樅と榎との間にまたそれらの根のめぐりより生ひ立つたいけなる生命のうちに住みつつ、

無數の忘れられたる時、夜と諸星の背後に立てる――廻轉する地球に住みつつ――

見よ、すべて宛かも秩序なく、投げ出たされた

利己的なるもの、勇敢なるもの、虚飾なるもの、愚かなるもの、來往すべし、されど來たらんとするものも亦往かんとするものもその結果は彼れらが爲すすべてにまで保證さる。

永き間、地球を歩み、廣大なる終りなきが如き迷園^{ミリス}を通りつゝ、夢または夢中遊行に於けるが如く吾れらみづからが道程にかへる、眼は瞠けども見ず、蜃氣樓の如きあるもの、つねに止まり避くるあるもの——つねに扼握せんとしながら——のあとを追ひつゝ、

仕事に没頭しながら、事件——あれやこれやと重要なることを考へながら、このまたあの端^{ヒツ}をめぐらんことを思ひわづらひながら——を以つて、みづからが置きたる係蹄^ワに脚をとらはれて、

野心に、美望に、貪婪にとらはれて、そのうへを心配しつゝ、夜ねひらずして身を横たふる財産の所有者、家畜の群を追ひながら、それよりのぼる塵埃を呑みつゝ、家屋を設計しつゝまた吾れらみづからの牢獄を造營しつゝ——

吾れら往く。

此處に柵埒なし。諸徑はすべて開かれたり、道標^{ポスト}は少なし——各人は口の迷園^{ラビリス}よりの出導線^{グランド}を彼れみづからのために發見せざるべからず。

永き間、夢に於けるが如き導線なくたゞ昏迷のみある地球を歩みたり、

今や、突如、また夢に於けるが如くすべては解明したり、通常の人生を構成する解き難くまた雑色の諸問題は全くその影をかくし、痕跡をとどめず——かくてあらゆる方向に於ける『人生』は、太陽の光線への空間の如く航行しうべし。

二七

オ、吾れと共に來たれ、吾が靈魂は——見えざる招聲^{ゴール}にしたがひ、卿のうへを覆ふ大空の招聲にしたがふ。

すべての慣習の蛛網と假想せる必要を分解しつゝ——古代の卵袋、そのうちに人道はさしも永くかくされて、横はりたり——

出で來たる、『卿』、うらゝかなる光のなかへ、丘

吾れは見る、多數と伍する生存の廣大なる悦樂を、活力を、畫策を、計畫を、計畫の確實なる實行を、

結婚の結縛を、友情を、勇敢なる行爲を、夢想を、冒險を、

吾れはまた見る、苦惱を、艱難を、憎惡を、罪と悲哀を、食いしばりたる齒を、始められまた存在する諸物の惡を、また棄て去らるべきところの必要を、

吾れはまたこれらのうちに願けまへす——これらすべて可、吾れは見る社會に於ける不斷の變遷を、各舞臺に出場する瘦せたる絶望的の諸問題を、かくて各人のための大いなる問題は、これらの諸問題の背後に立てり——それらを釋るさざるべき公然の秘密は、宛かも雲片によつて溶解さるる水の點滴の如く、その一觸によりて溶解す。

二六

吾れは快げに見る、地球のうへの生命の展がれる渺茫を——亦或ひはそこにある何ものか善から

ざるものある。

諸物の偉大なる組織のうちに、あらゆる結果は準備せられたり、然らずば『自然』及び『人類』の幻想的な狂想のうちに何ものかそのそれみづからの限定を優越し、その當然なる結果の實現を見棄つることを得んや。

水はより大いなる避け難き法則によりて水準に横はることなく、この偉大なる大洋（靈魂の）のうちにすべてのものは竟にかへる。

自由、さしも多くの足の來往も自由に、貧民の間に、聖書を手にして座はれるキツド皮の手袋をし毛皮のマントを打被げる貴婦人は來往自由なり、

若き盜人亦然り——彼れの隱匿の重荷をもてる、彼れの倦み疲れたる、然かもなほ避くることをせざる避けんとする眼、彼れの顔は哄笑によつてかゝやかず——來往自由なり、（吾れは嘲弄せず、吾れは卿を貶しめず——卿は他の等しきと同じく、吾れと等し、而して吾れより何ものを取らんとするか、卿の自由なるを、）

に微風は戯れ——そこに『卿』は煽の如く過ぎ、
樹々を變形しつゝされどもそれらを滅却すること
なく、吾れは卿にしたがふ。

夜、掩ひかゝり、諸星の簇るとき、吾れは『卿』
とともに知らざる灣々また底知れぬ深淵をのぼ
る。

延ばせ、オ、地よ、遙かなる丘々の藍色の線を
もて——伸ばせ、人間とまたあらゆる動物の足の

ために！

歌へ、卿が讃歌をうたへ、オ、樹々よ、風よ、
草よ、はかり難き藍色よ、

變形され、『卿』が相似——天地の王——に變形
されて！

愛に充たされつゝ、吾れらが順禮を完成しつゝ、
吾れらまた永遠なる平和と觀喜のうちに『移り
ゆけり。』と。

—— 完 ——

々にそひ、覆ひかぶさる樹々の叢に近く、あらゆる人生の扉口を通じて、贖ひ戻され、釋放される卿は出でよ。

二八

かくして長き放浪ののち、永世ののち、縛れたる絲を再びかへす。

幾年かの間、地球をこえて放浪せるのち——山より山へ、河より河へ、北亞米利加土人レッドインディアンと共に、韃靼人及び馬來人、チウトン族とケルト族と共に、移民と流形者と遊牧氏と共に、氷島または亞米利加への彼れらの船のうちにある古スカンディナヴィア人と共に、

新しき氣候を、習慣を、時を抱擁しつゝ——何びとにも抑制さることなく、何びとにも妨げらるゝことなく、

眠るべく横はり、また再び起き上る許多度あまたたびののち——母の子宮に入る許多度ののち、

『眠れるもの』は彼れを目覺ましめたるものにいふ——

『噫！美しきものよ——噫！愛の公子。吾か閉ぢたる眼瞼に徒らに卿が指を觸れたりしことも幾度なりしぞ！

今や、竟に、吾がうちに濺ぎ入る卿が愛はその入口を發見したり、吾が體內に充ち、その境界をうち破り、卿が來たれるところに再び爆裂しかへる。

噫！愛の公子、天なる王、最も美しきもの、卿に吾れは心奪はれ、愛のためにうち勝たれり、

此處、草のなかにいま一たび少兒は座る——遙かなる岬にそむきてゆらめく、うちあのく雄蕊をうちみまもりつゝ、

すべての人生をうちながめてそを善きものと見出でつゝ——満ち足らひつゝ、

吾が生の酒を『卿』にまで濺ぎ出だせし卿に似たるものとなるべく、

吾れは出發せり——かくの如くして、さらにかくの如くして決して再びかへることなかるべし。

此より後、高き地の上に夏の燃ゆるとき、そこ

第一の男は、眼が馬鹿に光つて居て、若い男女が其人の前で笑つてなど話が出來ない位嚴肅な面持をして居るけれど、そう何となく斯う仙人の顔でも見る様な感じもするけれど、其でつかい足座つ鼻が、此地面から一步も動きやしませんよと云つた風に、聳むしやな顔の中央に頑張つて居るのが頗る愛嬌である。此男ロシア流の所謂百姓姿^{ムジク}をして居るが、其上着の破れ目から、伯爵様が着そうな下衣が見え、一見しては汗臭そうだが、其實下着からは絶えず貴族的な香水の匂を發して居る。

第二の男は、世界中の女を惱殺しそうな強烈なチャームを潜めた眼差を持つた素敵な美男子であるが、其美を尙生かそうとして着たらしい赤い變ちくりんな衣物が、却て邪魔になり、何だか斯る毒々しいのが惜しい。

第三の男は、じつと物を凝視する其眼の色に、堅く緊んだ其唇の線に、神秘と沈黙の不思議な空氣を漂はしては居るが、全く俗塵を離れた仙人の風貌ではなく、大體豐饒な肉のこやしに培はれた奥床しい花を見る様な感じを與へる人である。

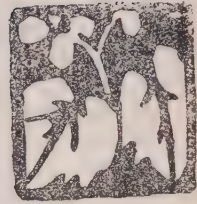
第四の男は、畫室の窓から時々吹いて來る風で第一の男の香水の匂を嗅される度、第二の男のわざとらしい異相、第三の男のいやに夢想的にしやうとする表情に目を向けさせられる度、變な顔をして皮肉な笑を洩す。そして冷く澄んだ其眼にはロマンスの口の字も宿る隙がない様にも見えるが、そうかと云つて全く木石に等しい人間じや無さそうだ。身には英國の勞働者の衣物を着てるが、其衣物が丁度いゝ加減な肉づきの身體に、びつたりとあつてゐる事が其男の取柄である。

今、私は其人達の描きつゝある殆んどデッサンに近い女の繪を少しく見比べて見やうと思ふ。

近代文學に於ける女性

トルストイ―ワイルド―メーテルリンク―ショー

石 田 三 治



(一)

近代の文學者中、創作で成功し乍ら、一方いろんな理窟を並べて、もの／＼しく人生の批評を試み、感覺の鋭い青年達の渴仰の的となつたのは、何と云つてもトルストイ、オスカーワイルド、メーテルリンク、バーナードショーなどと云ふ顔振れであらう。彼等の思想を比較分類した言葉としては妙に聞えるけれど、第一の人道主義、第二の耽美主義、第三の神秘主義、第四の實際主義は、たしかに現代青年の思潮に向つて各一大勢力を成して居ると見て差支へない。

讀者は先づ次の様な場面を想像して見給へ。いろんな物がごちや／＼に置かれてあつて、一寸見たんでは秩序も整頓もない様な畫室の中に、各一癖ありげな男が四人居て、其等の人に圍まれ乍ら何等恥しい面持もなく、部屋の中央、臺の上に素裸なモデルの女が立つて居る。男の服裝は四人四色、其御面相が違つて居ると同じ程度に違つて居る。が皆等しく中央のモデルを畫板に寫し取つて居る。と云ふ様な場面をまあ想像して見給へ。

『ゼルソナタ』は男が女を取扱ふ際に肉として見たがる爲めに、世の所在不安苦痛が起り、求むべき現世の幸は其が爲めに破壊されると云ふ事を書いたのだと云ふのである。

『基督者の結婚』と云ふ様な事は、基督者の禮拜、基督者の教師、教會の長老、基督者の財産、軍隊法廷又は政府と云つた様なものと共にあり得べからざる代物である。此事は初代の基督者に依てよく理解されて居た。基督者の理想は神を愛し人類を愛する所の其である。其は神の務同類の務に向つて己が身を抛棄する事である。だのに異性間の愛とか結婚とか云ふものは之とは反對に自分の爲めであつて、従つては神と人との務めに對して障礙となる。其故基督者の見解から見れば墮落であり、罪惡である』と彼は斷々乎として云ひ乍ら、自ら呆れて斯うつけ足して居る。『私の思想の開展が此結論に私を連れて來やうとは夢にも思はなかつた。私は此結論を見て自分で驚き、其を信じたくはなかつた。けれども信ぜざるを得ないのである』と。

其に云つて居る所謂初代教會の信者は、然らば何んな風な結婚觀を持て居たか、トルストイの想像する其結婚上の理想境は『光のあるうち光の中を歩め』の中に書いてある。彼の考によると、總ての女に對して姉妹を見る様な愛の感じだけあれば澤山であつて、女を選ぶに肉體的美は何うでもいい事になつて居る。(此考が彼の藝術觀の根本的誤謬になつて居るが、こゝで論ずる暇がない)即ち『選擇の條件如何』の質問に對しては、其は其時其場合合理性が指し示す神の啓示に従へばいいと云ふのである。成程『其時指し示される』と云ふ事は、常に宗教的境地を脱せず生活して居る人にはあり得ることであらうけれども、彼の此結論に及んだ思索の過程に病的な點のあるのは争ふとが出来ない。

(二)

種々の人生問題を取扱つて、創作に評論に可成りの成功を収め得た思想家の中、トルストイ位物事を倫理的に考へた人は無い。彼の宗教のうちには對神的『罪惡』に對する惱みは殆んど無く、對人的『犯罪』に對する苦みの多分にあつた事を以て見ても、其傾向が知られる。其變風に宗教も倫理的色彩で染めた彼は、藝術の方面に於て女性を描く場合、虚心平氣で女性の運命を萬象中の一現象として書くと云ふ態度には何うしてもなれなかつた。

有名な『クロイ。ツェルソナタ』を書くにしても、彼は『クロイ。セルソナタ後書』と云ふ教訓書を其あとからくつ付けて見なければ氣の濟まぬ人であつた。我々が彼の藝術的傑作をばつと見る時は、恰も彼濃厚な色彩で線を没する繪卷物の繪を見せられる様に、其藝術的技巧廳ては其藝術的力で以て、彼が目指した倫理的骨組は覆ひ隠されて仕舞つてゐるのを經驗するが、其でも嚴密に調べて行くと、彼は常に女に對して斯くあらなければならぬと云ふ風な倫理的主張を骨子にして小説を書いた事がわかる。

彼は自ら藝術家たる事を欲しなかつたけれども、しかも餘りに藝術家であつたが爲め、其が藝術的色彩のまばゆさに、該作品中の道德的輪廓が讀者に直ぐ解つて來ない恐れがあつた。『クロイセルソナタ』が出た時、トルストイの道德家である事を知つて居る讀者は『先生はあの作に於て何う云ふことをお教へになつたのですか』と云ふ様な事を方々から尋ねて寄越したのは其爲めである。『クロイセルソナタ後書』は其に對する返事見たいなものであるが、該教訓書の說に依ると、飽くまでも『クロイ

其作によつて斯う云ふ女を導くのは男の責任だと痛切に思はせられたからでもあつたらう。

(三)

其麼責任なんか就ては微塵も考へたことの無さそうなのはオスカーワイルドだ。彼は創作にも批評にも總て個人主義的印象主義的であつた。英國の評壇が彼の『ドリアングレー』を批評するに、不道德呼はりをするのを顧みず、藝術家の自由を叫んで萎縮ひぢくまなかつた。或人が『ドリアングレー』を傀儡視した時、彼は創作家の心の創造を貴んで其に辯護した。げに彼が『ドリアングレーの繪』をこさへる動機と云ふものは、實に簡單なものであつた。或る米國の婦人がやつて來て、ワイルドの貴公子然たる其顔を描かして呉れと申込んだので彼は承諾を與へて其を描かした。出來上つた繪をつくつくと見て月並に斯う考へた。『あゝ此繪はいつも變らずに若いのだが、此私は年々老いて行く』と。だが忽ち『此が繪であればこそ、別の方法で以て此を逆にして見せる』とそう思つたので彼は散文の體にして、其小説を書くやうになつた。其處には畫の中の人が變つて行くが、生きた人が變らない不思議な記事が書かれてある。

スチユアート・メーソンと云ふ人の、此書に關した批評集中にも此奇怪な着想が隨分議論の種子になつて居る様であるが、彼等批評家が論ぜずにしかも私に一番興味をひかせたのは、其中にあるワイルドの女性觀である。一體ワイルドと云ふ人は、後年の『獄中記』にも表はれて居るが、根が優しい正直な人であつて、極端にはせると常識を逸するやうな事もし兼ねなかつた人だが、中々いゝ事も云ひ尤もな觀察をもして居る。トルストイの様な偏執のない所、肉感的な生活にあこがれつゝも、時に

彼の考へた解脱境は全く性慾から離れて仕舞ふ事であつたが、其事自身が果して解脱境か何うか怪しい上に、其性慾を離れる事に依て人間が絶滅しやうと否とは彼の關する所ではなかつたらしい。即ち其で愛の對象としての人間が絶滅してもいい譯になつて居るが、神の男女に命じ給うて往かしむる彼の唯一の道の『純潔』は、單に概念上で定めた『世界同胞への愛』に行く努力をのみ意味して居た様だ、其で彼の考へるのによれば、同胞人類を愛すべきことが人間の務めなるに拘らず、夫婦關係を結ぶことに依て、我夫妻とのみ考へる様になる其事が、神に對する反逆だと云ふのである。是だけ語つても普通の頭で納得出來ないが、扱て、實際に於ては何うかと云ふに、彼が七十近くなつても其仙境に入れないで居たことはモードとの會話の記録に永く殘つて居る。

此蠻工合で、宗教的自覺後の彼には靜かな女性の觀察と云ふものはなく、女と云ふと直ぐ兩性間に於け道德的考が彼の頭を支配して居た。若し強いて求めると『我懺悔』の中の次の様な所を指す外はない。此現世の個人的幸福を譬へて見れば獸に追はれて井中に入つた旅人が井の側面に生へた木に據て助かつて居るが、下には大蛇が紅蓮の舌を吐き、我據る木の根を鼠がかじつて居ると云ふ様なものだ。所で此蠻事に氣がつかないで居るものは大多數の女、年若き者、愚鈍者であつて、自分も悟りを聞かん前は其様なものであつたと云つて居る其邊であらう。是に依て見るとトルストイの考では女の大部分は先を見る目の餘り利かぬもので頗る吞氣だけに危ツかしい生活をして居ると云ふことになる。

モーパッサンがそう云ふ果敢ない『女の一生』を小説にしたのをトルストイが名小説と思つたのは、

でなく、見る男の心が美しいのだ。男は常に夢想家だ。藝術家だ。女が時に藝術的の仕事をして要は應用美術の範圍を去らない。彼女は戀に酔ふよりも子供を得たいと希ふ。然るに男は常に靜觀者である。女が翻弄さるゝ其運命を靜かに傍觀し得るものは男である。

(四)

女を其運命に結びつけて考へたものはメーテルリンクである。古來ドラマの要素は戰であつた。強烈な意志が一方にあればある程ドラマチックの色彩が濃厚になるのが、先づ原則であつたがメーテルリンクに及んで、靜劇と云ふものが出來て來た。靜劇と云ふ言葉は動劇と云ふ言葉に對して用ふべきであつて、動劇とは古來傳つて來た様に諸種の爭鬭を題材にした所謂ドラマを指して云ふのである。然らば靜劇は如何、其の一切の人間の意志の爭鬭も何もかも、結局は泣ね入になつて行く様な恐しい靜かな運命を題材にしたのである。而して其處には必ずしも爭鬭を必要としなくなつて來た。否寧ろ或場合は靜かにすればする程、恐ろしくなると云ふのが靜劇の目指した新しい劇の効果であつた。斯くしてメーテルリンクの幾多の劇は上場された。

そう云ふ眼鏡でメーテルリンクは女性を見た。其處には異つた色彩がなければならぬ。果然メーテルリンクの女は神様に近いものになつた。彼は靜かに囁いて云ふには『女は我々が運命に従ふよりもつと運命に服従する。女は其運命を迎ふるにはもつと大なる單純さを以て相對する。女は決して眞面目に運命に對して奮闘しない。女は神により近い。女は神秘の純粹なる働さに遠慮なく身を任せて居る』と。

正直な描寫は、彼に幾多『愛』に關する小話を作らせた。恐らく『ドリアングレー』に表はれた女性觀も不識の間に筆になつたものであらう。

ドリアングレーが或女優に戀して、彼女を稀代の天才だと信じ切つて居る。たしかヘンリーとか云つた常識家が其を知つて、ドリアングレーの稚氣を諫めるのだが、其言葉が面白い。『女に天才と云ふものは無い。女は話す事が可愛いと云ふ丈でさつぱり實がないもんだ』と云つたり『女と云ふものは男が實際的であるより以上に實際的なもんだよ』などと云つて居る。けれども上せかへつた青年は其で中々承知しない。其う云ふヘンリー諸共友人數名で、其女優の總見と出かける。所が其時女優の藝は實にまづいものであつた。一人去り二人去り、彼の友人等は『そら見た事か』と云つて皆去つて仕舞ふ。ドリアングレーは憤慨した。芝居が濟むと彼はいきなり樂屋へ押しかけて行つて女優の不出來を難ぜざるを得なかつた。

女優は落ちついたものである。『私は貴郎と云ふ實の戀人を得た上は、もう舞臺の上の戀の摸倣などはいやです』となまめかしく云ふ。ドリアングレーは生地きぢの女を見て叫んで云ふには『咄、俺はお前の藝術に惚れてたんだ。お前の其醜い女にはもう用が無い！』とそう云つて彼は足音荒々しく樂屋を出て行つた。

意外に思つたのは女である。今まで全生命を托して居た男に捨てられて、彼女は自殺してしまふ。ドリアングレーは餘程のちに其事を聞いて『お、彼女は英雄的に死んだ哩』と。女の死を見る事、まるで芝居的一幕を見て居る様な所に男の靜觀がある。女は美しいと云ふ。けれども女其物が美しいの

的意識が發達増進しつゝある様に（思ふに智者のモ―セがイスラエル民族を率ゐた様な意味）其様に女の靈に依て實在とか大自我とか世界に與へられた（思ふに男よりも女が多くの場合愛の化身と云はれる其處の事）。私が考へるから私が存在すると、あの愚かな哲學者の云ふ通り、もとは私もそう云つたが、今じや逆に云ふ様になつた。私が存在するから考へるのだと。これは私に女性が教へて呉れた」と。シヨ―は女を實在の化身と見た。扱て其結論は如何。

『世界が今日學びつゝある所の偉大なる教訓は生命の目的は男と女との共同作業なしには成功し難いと云ふことである。我々は我々の運命の頂上に達せんが爲めには（其頂上は近代の哲學が思考する事の出來ぬ偉大として示すもの否寧ろしかく暗示する所のもの）男は宜しく生命力が彼の力の中に置いた所の總ての武器を利用しなければならぬ。そして此らのうち最大なる武器は女性である。男は最初此を考へなかつた。彼は斯う考へた。彼の運命は彼自身で成功するものであると、斯くの如くして遂げられた運命は恐らく頗る遍狭なものであるだらう。即ち其缺點は『頭腦の意識』に依て特徴づけられた『實在の意識』を缺いて居る所にあるのだ」と。

此理窟を具體的に示したのは『人及び超人』である。其に示された所によると、結婚と云ふものは男が女に申出る様な形式だが、實は女が發起者で、男にそうする様にし向けるものだ。其處が女の得謂實在の化身たる所以、生命力其物である所以であつて、男は須く其勝れた天賦の頭腦を用ゐて、其生命の化身を左右すべきもの、此兩者の力が適當に結合したものが、即ち彼の『來れ』と呼ぶ『超人』であると云ふことになる。シヨ―ペンハウエルの盲目的大意志の傀儡になつて居る様な男女觀に比べ

メーテルリンクはよく心^{シン}靈と云ふ語を用ふ。其屬性は沈黙であつて、『沈黙を用ゐて心靈をして語らしむ』と云ふのが、其靜劇の原理になつて居る。心靈と云ひ、運命と云ひ、もと是れ我々の思考に便宜の爲めに用ふる言葉であつて、其を偶像の如く信ずる必要はないが、メーテルリンクは我々に新しい人生の見方を教へて呉れた點は謝さなければならぬ。『つれづれ草』の中に次の様なことが書いてある。或所で牛が突然死んだ。人々が寄つてたかつて、『はからざるに牛が死んだ』と云つて驚いて居る。月並な見方はこれであるが、『つれづれ草』の著者は評して云ふのに、『何故皆は牛の突然の死に對して、はからざるに我在りと観じないのだらうか』と、是は新しい見方である。人は此見方によつて人生に新生面を開く事が出来る。メーテルリンクは此意味に於て、我らに新しい人生の見方を指示したもんだと云へる。

彼が如く見れば、ほんとに女は神に近い。

(五)

或人はバーナードショーを評して、たゞ徒らに現代の分析的批評家であつて、何等理想の建設者でないと云ふ。けれども彼が女性觀を見る時、私はバーナードショーの理想を見ない譯には行かない。『人及び超人』に表はれた『超人』こそ、漠然としては居るが、其理想を表はしたものではなからうか。

彼の婦人觀は、最も實際的であると云ふ點に於てワイルドに似、先天的に靈的なものであると云ふ點はメーテルリンク似て居る。彼は云ふ『婦人は實在の鍵を握つて居る。丁度男子の頭腦に於て種族

院長診察月、水、木、金、午前

林、峰間兩副長は目下當院に在勤

麴町區三番町三十番地（市ヶ谷見附内）

電、番六二一番

東洋内科醫院

院長

醫學士

高

田

畊

安

電話ちがさき二番

南

湖

院

相州茅ヶ崎海濱（從停車場半里）

河野、高橋兩副長は目下當院に在勤

院長診察土曜日午後、入院診後應需

て、これは又餘程元氣に充ちた觀察方法である。

以上、四人とも女と云ふものは、一般に運命のなるまゝに目覺めず従ふと云ふ風に觀察し乍ら、夫々人に依て少しく色彩を異にして居るのが面白い。(四—八—十一)

哲學叢書の出版に就て

古本の定價販賣で有名になつた岩波書店から今度十
二冊の哲學叢書が出版される。上野直昭阿部次郎安部
能成の三氏編輯の任に當り、執筆者は何れも新進氣鋭
の學者で其平生の研究を先づ茲に發表せんとするもの
である。昨今出版界は叢書大流行であるが、中には内
容を忘れ唯書物の題名と裝幀とのみに苦心して、只管
淺薄な讀者の購賣心を誘惑せんとし、或は讀書界の輕
薄な流行熱を煽りたて之に乗ぜんとする不誠實なもの
もある。斯して我忠實なる讀書子は常に羊頭狗肉のい
やな經驗を嘗めさせられる。近頃出版界の非況も幾分
自業自得の觀なきに非ず。然るに、岩波書店主茲に見る
い。

所あり、敢て時流に媚びず寧ろ輕薄なる風潮を排し、
我思想界永遠の健全なる發達のため、此餘り華やかで
ない基礎的出版を試みんとするのであつて、其利益の
如き初より眼中におかず、若しあらば之を著者に贈ら
んとするそらだ。健實な良著は誠實な出版者を俟つて
始めて世に現はる、社會は更に又健全熱心な讀書子を以
て之に應じるに違ひないと思ふ。出版界近來の快舉と
して敢て之を大方諸君に推薦する所以である。尙本叢
書第一編文學士紀平正美氏の認識論は九月中に出る由
なれば、希望者は直接同店若は本社を通じ申込まれた

内ヶ崎作三郎編著

人生日訓豫告

紙頁約一千ページ

本書は東西古今の道德、宗教、哲學、藝術、詩歌の精英を蒐集し、日本の年中曆に配したるもの毎日二ページ乃至五ページを讀むべし。複雑にして多方面なる修養に志す人、東西の古典に通ぜんとする人、包容的信念に基いて人生に處せんとする人のために良參考書たるを疑はず。本書一卷は約千冊の圖書室を備ふるに匹敵す。本月中旬大日本圖書會社より發行すべし

創刊號

月刊

藝文と學科

雜誌

■農奴開放を中心として見たる露國文化……………昇曙夢

■セザンヌの畫室……………高村光太郎

□雜感……………武者小路實篤

■近代劇の櫻の園……………

□感想……………木村莊八

■小さな反抗(小説)……………吉田紘二郎

□新しき試み(小説)……………ストリンドベ
ルヒ

■あの女(小説)……………岡田八千代

詩歌

興謝野寬……………興謝野晶子

加藤一夫……………大川與四

田邊若男……………フォーフアノフ

長瀬先司……………高橋綾子

■トルストイの宗教及び宗教觀……………加藤一夫

■リーチ氏の陶器論に就いて……………石井柏亭

學科

■藝術に及ぼした自然の力……………酒井光次

■生物と光との交渉……………藤浪博士

■ジブシイの話……………辻潤

■ありぢくの一生涯……………S・T・K

■未定……………仁木博士

挿繪

□一面の畑及像……………木村莊八

□自畫像……………岸田劉生

□夕日の丘……………石井柏亭

□風景……………岡田三郎助

□靜物及人物……………西村伊作

□愛の晚餐……………ゲエ
ウエレスチャ
ー

□勝利者……………ギン

天弦堂

東京市牛込區五軒

振替五五九
東五
京九

● 自由基督教會講演會

(時 日) 九月廿六日午後六時半(會場實費五錢)

(場 所) 神田錦町三丁目女子音樂學校講堂

自由基督教の主張

内ヶ崎作三郎

辯

社會問題と自由基督教

安部 磯雄

自由基督教と不自由基督教

岸本能武太

士

現代思潮と自由基督教

岡田 哲藏

自由基督教と民族の發展

永井柳太郎

▲ 讀者諸君の御來聽を望む。

此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る旨書添を乞ふ

教育學術研究會編纂

學術雜誌界

一大權威

教育學術界

定価 壹圓貳錢 拾錢 郵税 壹錢 金 拾圓 稅 貳圓 拾錢 年 金 貳圓 拾錢 前 金 貳圓 拾錢

● 九月號要目 ●

教育界の
三大論争
將に酣な
らんとす

教育と藝術との論議始まる
人格的教育の論争再び起る
德育革新の論戦開かる

△教育上の自由主義とは何ぞや

△吉田、中島二氏の人格論を評す

△ギンデルバンドの『哲學概論』

△勤勞學校の建設と其實際的施設

△高島氏の德育革新論を駁す

△教育上の科學主義と人格主義とを論ず

△兒童の統覺内容可經驗範圍發達

△中等學校地理科教授要目の改正論

△教育と藝術との關係を考ふる人々へ

教授 佐々木吉三郎

發行所

東京早稻田大學前
振替東京一五五番

同文館

文學士 河野清丸
東京 稻毛詛風

文學士 宮本和吉

女學校長 白土千秋

文學士 福島亦八

東京 渡部蘇影

文學士 上野陽一

中等學校地理歷史教員協議會

此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る旨御書添を乞ふ

東亞之光

一冊二十圓
二冊三十四圓
錢

九 月 號

每一
月日
一發
同行

- △印度六派哲學を讀む……………文學士 椎 尾 辨 匡
- △香川景樹の歌論の中心思想……………文學博士 佐々木 信 綱
- △人格發展の辯證と言語……………文學士 吉 田 靜 致
- △歐洲戰亂と基督教……………文學博士 加 藤 弘 之
- △父と子(ゴルキ)……………文學士 小 川 弘 宇
- 其の他選歌●選句●最近學界彙報及新刊紹介等數種あり

評論

苦中の樂趣

小林生

國際道德促進手段としての平和同盟

A S 生

海外思潮

最近佛國哲學

哲學問題としての宗教

- △日本民族の自覺……………海軍少將 佐藤 鐵 太 郎
- △日本の滑稽文學……………文學士 山 内 素 行
- △書論上より見たる支那畫の原理……………文學博士 瀧 精 一
- △非ユークリット幾何學小史……………文學士 三 上 義 夫
- △楚囚の艱難錄……………文學士 藤 井 慶 乘
- △時局と海事思想……………男爵 肝 付 兼 行
- △日本人の漢詩……………長 井 衍

振二
替一
口〇
座七
東七
京番

東亞協會

東千
京駄
市木
本町
郷十五
區番
駒番
込地

發行所

南天棒 鄧州老師著

大石正巳居士序
飯田櫨隱居士跋

南天棒禪話

總ふり假名
定價壹圓廿錢
郵稅八錢

機鋒辛辣得て近づくべからざるが如くにしてしかも慈教懇到兒女童孩も亦度せずむば止まざるもの實に
是れ吾が南天棒鄧州老師の面目なり今著はすところの禪話一卷卷中の所談悉くこれ釋尊拈華し迦葉微笑
する底のもの縦横に説き無礙に辯じて眞に四方八面來旋風打の概あり人若し南天の痛棒亂下し來るの間
に立ちて平然としてこれを喫了し得ば則ち人間の大事こゝに成るべし冀くばまづ聊かこれを試みよ

大内青巒
先生著

禪の極致

定價六十錢
稅八錢

菅原洞禪
先生編

林奇行

定價八錢

鈴木大拙
先生著

禪の第一義

定價八錢

釋宗演
老師著

華微笑

定價八錢

大内青巒
先生著

青巒禪話

定價一圓廿錢
稅八錢

秋野孝道
老師著

の骨髓

定價八錢

忽滑谷快天
先生著

達磨と陽明

定價一圓十錢
稅八錢

原僧運
老師著

の捷徑

定價八錢

新井石禪
老師著

修道禪話

定價八錢
稅八錢

荒井淚光
先生著

元禪師

定價八錢

竹田默雷
老師著

の面目

定價八錢
稅八錢

原田禪岳
老師著

參禪の階梯

定價八錢



女子の運命

木村 久一

—

Is は我等に ought を供するものでないが、我等は Is を無視して ought を作ることは出来ない。故に婦人問題を論ずるには、女子先づ女子の如何なるものなるかを見なければならぬ。併し女子の如何なるものなるかを詳しく述べれば際限がないから、此處ではたゞ予の云はんとする事を明かにするだけの事を述べやう。こう云ふ見當で女子は如何なるものかと云へば、女子は、男子の動物的なるに對して、植物的なものである。併しこの言葉は説明を要する。

植物が動物と違ふところは、動物のやうに運動しないことである。尤も下等植物には、可成運動

するものもあるが、概して植物は動物のやうに運動しない。然らば植物がかく動物のやうに運動しないのは何の爲か。それは植物の體を組織して居る原形質は、動物の體を組織して居る原形質のやうに、分解しない爲である。一體生物の體を組織して居る原形質の分子は、云はゞエネルギーを詰めた小囊であつて、この小囊が破壊すると、中に蓄へられてをるエネルギーが出て、運動が可能になるのである。故に植物が動物のやうに運動しないのは、その體を組織して居る原形質が、動物の體を組織して居る原形質のやうに、分解しないからである。

こう説明すれば、女子は男子の動物的なるに對して、植物的なものだと云ふ意味が、大抵分つたで

大 合 叢 書

著者 自我の究研者
野村 限畔著
(第四編)

一 陸軍大學教授
岡田 哲藏著
(第二、三編)

一 第一等學校教授
並 良著
(第一編)

春秋の哲人

新らしき宗教藝術、哲學の立場よりせる著者最近の人生觀、社會觀にして觀察深刻にして行文奇警に富む、銷夏の讀者として切に之を江湖の紳士淑女に薦む

我が断片

傳説によらず、歴史批評の立場より基督を説明し彼れの宗教を現代意識に紹介せんとするものにして我等の基督觀は此書によりて闡明せられたり江湖の清鑑を得ば幸甚

眞人基督

ボケツト入美本
定百二十頁
價十錢
歡迎如湧
本錢二

第二編 定價
第三編 定價
編十錢
邦文英編
百文英編
文稅錢
廿頁
錢二

ボケツト入美本
定百二十頁
價十錢
發售
本錢二
(賣)

る。その一つは尿の検査である。尿は云はゞ身體の下水であるから、これを検査して見ると、消費の度が分る。第一女子の尿は男子の尿よりも量が少ない。男子の尿量は、一日千グラムから二千グラムまで、あるが、女子の尿量は、一日千グラムから千四百グラムまで、ある。又た女子の尿は男子の尿のやうに含有物が多くなくて、稀薄である。

次ぎに女子は男子のやうに多くの酸素を要しない。これは女子の身體に於ける燃燒は、男子の身體に於ける燃燒のやうに盛んでない爲である。従つて女子は、男子のやうに多く炭酸瓦斯を爲さない。女子の呼吸は、男子のそれよりも多いけれども。これは女子の肺が、男子のそれに比べて、遙かに小さい爲である。

力が、腕の力でも腦の力でも、動物の體を組織して居る原形質の分解の結果なことは、すでに云つた。然るに女子の身體を組織して居る原形質は男子の身體を組織して居る原形質のやうに、分解し易くないから、女子は腕力に於いても腦力に於いても、男子のやうに強くない。女子の腕力が男

子の腕力のやうに強くないことは、極めて明かである。腦力に於いても同様であつて、女子には偉人もなければ天才もない。極めて稀に秀でた女子もあるが、それとて大したものではない。のみならず、さういふ女子は、必ず男子の分子の多い、男性的な女子である。

三

消費の後は攝取に由つて補はなければならぬ。男子は消費が盛んであるから、大に食うて補ふ必要がある。故に男子の身體に於いては代謝作用が盛んである。併し女子の身體に於いては、男子の身體に於いてのやうに代謝作用が盛んでない。さて身體に於いて代謝作用が盛んであれば、身體の組織が見る／＼變つて行く。これと反對に身體の代謝作用が緩慢であれば、身體の組織の變化することが余り急速でない。これは見易い道理である。故に代謝作用の盛んな男子は、子供から見ると／＼かけ離れて行くが、代謝作用の緩慢な女子は、永く小供からかけ離れないで居る。故に人

あうら。即ち女子の身體を組織して居る原形質は男子の身體を組織して居る原形質のやうに分解し易くない。故に女子の身體からは、男子の身體からのやうに多くのエネルギーが出ない。女子の運命はこゝに包まれて居る。腕力と云つても腦力と云つても凡てエネルギーの問題である。エネルギーの多く出ない女子には、天才もなければ偉人もない。女子諸君に惡まれるかも知らんが、予の女子に關する意見は、「女子より何の良きもの出でんや、」と云ふのである。併しこれだけでは、議論が余りアツケないやうであるから、もう少し論じやう。

二

より分解し易い原形質で出来て居る男子の身體は、支出の多い財政のやうなものであるが、より分解し易からざる原形質で出来て居る女子の身體は、支出の少ない財政のやうなものである。男子は腕を動かす、頭を使ふ、兎角エネルギーの用途が多い。而してこれは皆な自分の身體を組織して

居る原形質の消費によらなければならないのである。故に男子は、食物の足らない境遇に於いては見る影もなくなる。併し女子はさうでない。平常でも男子のやうに大食ひはしないけれどもよく太る。貧乏してもよく太るのは女子である。これは女子の身體を組織して居る原形質は、男子の身體を組織して居る原形質のやうに、分解し易くない爲である。

然らば女子の身體を組織して居る原形質が、男子の身體を組織して居る原形質のやうに、分解し易くないのは何の爲か。これは分娩の爲である。

女子は分娩すべきものであるから、男子のやうに、身體を組織して居る原形質を消費する譯に行かない。分娩は詰るところ、自分の蓄貯を割愛するところであるから、女子は男子と違つて、消費を謹まなければならぬやうに出来て居る。女子の身體を組織して居る原形質が、男子の身體を組織して居る原形質のやうに、分解し易くないのはこの爲である。

女子が男子よりも消費が少ない證據は澤山あ

近ければ散彈は一所に集中するやうに、男子は小供から遠くかけ離れて居るから、その變化の幅が廣く、女子は小供から遠くかけ離れないから、その變化の幅が廣くない。即ち女子は大抵範型（ブルム）に近いが、男子は範型から遠くかけ離れたものも多い。こゝが男子の面白いところである。

第一男子は女子よりも畸形が多い。猪口とか六本指（くろく）とか偽乳房とか、男子には色々な畸形が多いが、女子には男子のやうに畸形が多くない。又聾啞色盲等も女子よりも男子に多い。

白痴も女子よりも男子に多い。併し科學的に見れば、天才も範型（ブルム）から遠くかけ離れたものであつて、矢張畸形の中である。こゝいふ性質のものであるから、天才が女子にないのは當然なことである。兎に角突飛な者、なみ外れた者は女子よりも男子に多い。發狂者も女子よりも男子に多く、戀物も女子よりも男子に多い。非常な善人があるのも男子であり、非常な惡人があるのも男子である。男には天使のやうな聖人もある代り、極惡非道な惡魔もある。毒婦と云つて随分悪い女

もあるが、如何に悪い女でも眞に悪い男に及ばない。要するに女子は平凡なものである。

同じ道理で女子が達し得る熟練なども知れたものである。小説を書く、科學をいぢる、繪を畫く、色々なことをするが、女子がやつたと云ふので、ハンデキャップの下に一寸呼び物にもなるけれども、畢竟男子の研究や作品に到底及ばない。音樂や裁縫や刺繡ならば、旨くやるだらうと思ふて見ると、それも男子に及ばない。詰り女子には、男子よりも好く出来るものは何もない。然らば予が『女子より何の良さもの出でんや、』と云ふたのは決して無理であるまい。

五

然るに世に、女子と雖も、その教育と境遇さへ宜しきを得れば、身體的活動に於いても、精神的活動に於いても、優に男子に匹敵することが出来る人と論ずる人がある。而も堂々たる識者の中に、かう云ふ議論を述べる人がある。併し予は、これまで述べた理由から、この議論は誤つて居

類學者が女子は小供と男子の中間に位すると云ふのは、有ゆる點に於いて眞である。

二三の例を舉げんに、子供は大人に比べると、割合に頭が大きくて四肢が短かい。然るに女子は大人でも割合に頭が大きくて四肢が短かく、丁度小供と男子の中間にある。又た男子は代謝作用が盛んであるから、直ぐ小兒皮膚ベイベースキンを失つてしまふが、女子は永くこれを保つて居る。肉附や體格も女子は男子よりも小供に近い。

又た女子の頭を見ると、男子のそのやうに圭角がなくて、圓く柔かに出來て居る。肩なども男子のやうに怒つて居ないで小供に近い。

これは他動物に於いても同様であつて、雌は雄のやうに仔からかけ離れない。雄は成熟すると、角が生へたり肉冠が出たり、鬚が生へたり鬣が生へたり、牙や蹶爪や長い尾が生へたり見違へるほど變化する。我等人間の髻もこの例である。これらは皆な、雌の身體を組織して居る原形質が、雄の身體を組織して居る原形質よりも代謝作用が盛んでない證據であつて、詰り前者の原形質が、後

者の原形質のやうに、分解し易くないことを證して居る。

四

男子は身體を組織して居る原形質の代謝作用が盛んな結果、即ち身體を組織して居る原形質が分解し易い結果、女子よりも小供からかけ離れることが多いのみならず、互々からもかけ離れることが多い。その結果男子は女子よりも變化が多い。

即ち男子は、太れるあり、瘦せたるあり。丈高きあり低きあり、その變化が女子のそれよりも遙かに多い。ダーキンダーキンは背の高さ、胸の圍り、頸の圍り、頭の大さ、腰の大さ、手の長さ、足の長さ等に就いて、種々詳しい検査をしたのが、凡ての點に於いて男子は女子よりも變化が多いと結論して居る。顔を見ても、男子の顔の型は千變萬化タイプであるが、女子の顔の型は數種に過ぎない。

詰り男子は女子よりも小供から遠く離れて居るのであるが、小銃に散彈を詰めて壁に向つて放てば、壁が遠ければ散彈の撒がることが廣く、壁が

て調法なものである。こうなると男子は女子に對しては威張るやうになつた。權力上の強者は經濟上の優者なことは昔も今も違はない。權利は何時も與ふる者の手にある。かくて女子がみじめな時代となつた。

今や分解し易い原形質から出來て居る身體を有つて居る男子がなければ、即ち肉體的能力に於いても精神的能力に於いても卓越して居る男子がなければ、女子の生命が支へて行かれない世となつた。かくて男子は凡ての價値の創造者となつて、我等の標價法に大變動が起つた。即ち今日の標價法は男子を標準とした標價法であつた、決して公平な標價法でない。今日の價値は男子の勝手に創造したものであつて、我等の標價法は男子を標準とした標價法であるから、女子には散々な事である。我等はよく、女子は男子ほど仕事ができなとか、女子は男子のやうに發明や發見ができなとか、女子は美術や文學に於いても男子に及ばないとか、色々な事をいふけれども、凡て男子を標準としての標價である。男子は自分の得意な事に

勝手に高價な價値を與へて、これを標準として、女子のする事を標價するのであるから、女子が劣れるもの、價値の少ないもの、詰らないものとなるのは當然な事である。

併し女子は生殖し、男子は活動して食物を集め、共に種族の保存に貢獻するのであるから、公平な目で見れば、兩者の間には決して優劣がない。種族の保存と云ふ大使命に於いて、云はゞ女子は内輪働きであつて、男子は外輪働きである。故に外輪働きの標價法を以て、内輪働きのする事を標價することの不當なことは明かである。

序ながら、予が前に『女子より何の良さもの出でんや、』と云つたのは、云ふまでもなく、男子を標準とした、今日通常に行はれて居る標價法に由つて云つたのである。

七

今云つたやうに、女子は種族の保存と云ふ大使命の内輪働きで、男子はその外輪働きであるのが運命であるから、女子は須らく退いて家庭の人と

ると信ずる。科學的に見れば、身體的活動も精神的活動も共にエネルギーの問題であつて、共に身體を組織して居る原形質の消費の結果である。然るに女子の身體を組織して居る原形質は、これまで述べたやうに男子の身體を組織して居る原形質のやうに分解し易くないから、女子の身體からは、男子の身體からのやうに、エネルギーが多く出ない。故に女子は、身體的能力から云つても精神的能力から云つても、男子に及ばないのが運命である。

故に予は信ずる、男子が活動する方面に出て、女子が男子と競争することは、女子に取つて極めて不利な競争である。故に女子が男子の向ふを張つて、男子に對抗することは極めて愚かな事である。女子には別に女子本來の天職があると。然らば女子本來の天職とは何か。それは生殖である。女子の身體を組織して居る原形質が、男子の身體を組織して居る原形質のやうに、分解し易くないのは、女子には生殖と云ふ大使命があるからである。

六

女子は生殖と云ふ大使命を帯びて居る。これは男子が果すことの能きない使命である。然らば女子の功蹟は決して男子のそれに劣るものでないでないか。さうだ、女子の功蹟は決して男子の功蹟に劣るものでない。故は男女の間には決して優劣を附すべきものでない。男尊女卑は無論誤つて居る。

故に進化の或る階級に於いては、女子は男子に卑しめられるどころか、却て男子の上に立つて居つたものである。然らば進化の或る階級とは何時か。それは人間がまだ澤山なく、生活の程度も低い爲に、食物を得るに困難のなかつた時代である。然るに其後人間が殖え生活の程度も高くなつて、食物を得ることが困難になつた。そうなることこれまで大して調法にも見えなかつた男子が、非常に調法なものとなつた。男子は前に云つたやうに、身體的能力に於いても精神的能力に於いても卓越して居るから、生命を支へる食物を得るには極めて



如何にして生きんか

帆 足 理 一 郎

如何にして生きんか、是れ人生の最大問題である。肉體を有する吾等は其健康と安全を計る、亦生の重要事であらう。されど肉體的物質的の生涯には限りがある。五十年乃至百年の内には白髪の名残を止めて、墳墓の地に朽ち果つべくある。さわれ矛盾なる哉、生命は限りある生命を以て限りなき生命を追求して止まぬ。Life wants more life. 如何にかして此生命を不朽のものにしたい、恒久のものにしたいと云ふことは誰れ一人として望まぬものはないであらう。若し恒久のものにするところが肉體的に不可能であるならば、精神的に然かすることは出来なうであらうか。“Are longa, vita brevis.” 藝術は長く、生命は短しとやら、自然人

としての生命に限りあるとすれば、吾等は生の藝術的努力によりて永久の生命を創造することは出来なうであらうか。古への偉人や靈覺の士が、其の肉體朽ち果て、既に數千年を闊みするも、尙彼等の精神は我等が日々の經驗の中に生き、少からず我等が生命の上に感化影響を與へてゐる。甚しきに至りては、彼等の靈は我等が靈的生命に著しき創作の鑿の跡を残して、吾等の生涯を支配せんとするのである。されば吾等も限られたる肉體を生命の全部とせず、靈的に精神的に日々新らしき生命の糧を得て、靈的に一層偉大なる久遠なる生命を開拓せんとするは何人も否定し難い生の欲求であらう。

外的に限られたる吾等は常に内的生命の充實に

なり、子供を産んでその養育に従事し、男子は宜しく外に出て、頭を勞し腕を振ふて、惡戰苦闘食物を集めて妻子を養へば可いのである。男子は生活の闘士たり。女子は生殖の番人たるのが、人生の調和である。

然るに經濟狀態と云ふ暴力者は、この調和をも攪亂した。今や人間の數が多く、生活の程度が高くなつて、男子が少々無力であつても、女子が生活に困らないと云ふやうな呑氣な世でない。今や

或る女子は、男子と共に生活の爲に奮闘しなければならぬのみならず、或る女子は全く男子の保護がなく、獨力で生活しなければならぬ。而もかういふ女子は、文明が進むにつれてますます増加する。かくて腕に於いても腦に於いても力の弱い女子が、不得意な業と知りつゝ、男子の中に飛び込んで、彼等とバンの奪ひ合ひをしなければならぬ。何たる悲劇であらう。世にこんな悲劇が又とあらうか。

金胎兩部曼茶羅講傳會

姉崎正治、大村西崖、大森禪戒、加藤咄堂、境野實洋、椎尾辨匡、島地大等、新海竹太郎、鈴木大拙、高橋順次郎、高島米峰、瀧精一、辻善之助、常盤大定、中川忠順、平福百穂、富士川游、藤岡勝二、正木直彦、結城素明、渡邊海旭、鷲尾順敬等、教學界藝術界の名士三十餘名發起者となり、豐山大學學長權田雷斧大阿闍梨を請じ、金胎兩部曼茶羅佛像に關する講話及び傳授を請ひ、汎く聽講者を募集せり。(會場手挾につき、定員に充つれば謝絶すといふ)

一、時日 九月廿二日より十月五日まで(二週間)毎日午後三時より五時まで

一、會場 上野公園寛永寺新書院(音樂學校裏)

一、會費 金二圓也

一、申込所 駒込林町二〇九常盤大定方

一、申込期限 九月廿日まで

けられた。何百代と云ふ家系を驕る王朝あれば、其家系の故を以て之を讃美する臣民が多かつた。過去は即ち骨董崇拜の時代であつた。此骨董主義の時代に於ては、一竿の天秤棒を肩にして、小商人から稼ぎ出した今成りの金満家は何等の尊敬を受けなかつた。三井だとか鴻の池だとか祖先の蔭で蓄積された巨萬の富を居ながらにして譲り受くる坊つちや々が却て世の尊敬を身に蒐めたのである。前者は即ち『成り上り者』とけなされ、『成り金』と賤まるゝに反して、後者こそは眞の金満家として時代の鏝に詩化された世の渴仰心を遠慮なく要求したのである。

されど見よ、時代の推移は如何ともすることは出来ぬ。今假りに吾等の親が百萬圓の身代を吾等に譲つて呉れると想像せよ、そは誠に難有い話である。而も我等若し手に唾し、額に汗して働き出した金を幾らか持つて居るとしたならば、そは僅か千や二千の小金であつても親譲りの百萬圓に優ること萬々なるを思ふ譯になつて來たではないか。百萬圓と一千圓、其數學的價值に於ては後者

は前者の千分の一にしか相當しない迄も、其所有主なる當人に取りての價值は寧ろあべこべである。何故に然る乎。見よ、親譲りの財産には價值が少ないから、之を蕩盡する馬鹿息子は『長者三代なし』や『唐様で書く三代目』の諺を製造して居るではないか。されど自から粒々辛苦の余に成りし財産は假令其客觀的價值は尠少であつても、其有益なる行使は却て其價值を増進するのである。カネギイの如き所謂『成り金』が如何に有益に其巨財を活用せんとしつゝあるかを見れば、自から苦心して贏ち得た財寶でなければ、其價值豊富なる能はぬことを吾等は容易に合點し得るであらう。

人生の意義も是れと同様、十字架の贖ひとか、彌陀の誓願とか、三位一體とか、クリストの神性とか、天國の鍵とか、復活とか、永生とか、將又絶對の神とか、眞如の姿とか云ふ親譲りの人生觀宇宙觀神觀に於ける幾多既存の經驗や觀念が、吾等の新らしい精神生活に材料を供給するの外、吾等自身に取りて果して何程の權威ありや、何等の

向つて活動の鋒先を進めてゐるのである。如何にせば此肉體と其存續期間を活用して、最も充實した、最も内容ある意義ある生涯を送ることが出来やう！物質的に限られたる生命は靈的に限りなき最も自由な圓滿な發展を希ふて止まぬのである。斯くて肉體が食物を要求して夫れ自身の保全と増殖を圖る如く。精神も科學や哲學や藝術や道義や將又是等一切のものに冠たる宗教などを要求し、且つ創造し、て其靈的生命を限りなく發展せしめんと試みて居るのである。

されば吾等は過去人類の精神生活が蓄積した經驗や觀念を出發點として、人生の秘義を搜り、若し之を出さば、彼の眞珠を見出せし聖書中の商人の如く、凡ての財寶を舉げて之を購ひ、之を己がものとし、己が生涯に實現して其眞味を味ひたいと願ふのである。併し吾等は今日發達した知識の果實を喰ふた以上、生命の意義、方針が ready-made に存在してゐると思ふことは出来なくなつた。

吾等は樂園から追ひ出されて、自からの運命を自から開拓すべき境遇に持ち來たされたと云ふ自覺

を却て珍重するのである。

若し生命の眞理が外的に何れへか現存して居るとしたならば、人生の價値は果して如何なものであらう。吾等は勿論內的に精神生活の經驗によりて之を見出さんが爲に努力奮闘しなくてはならぬとしても、見出した處のものは結局見出したもので、新らしき創造物ではない。既存物の發見に止まるのである。そは恰も玩具の家屋が一旦取崩されて亦再び小兒の手に取立てらるゝに過ぎない。若し果して然らば生命は一個の玩具である、お芝居である。既存物の流轉變化は、よし如何に千種萬様なるも、所詮同じ事を繰返へすに外ならぬ。*"Vanity of vanities, all is vanity"*と嗟嘆しない迄も、人生の活き／＼したる活氣は『過去の典型を繰返す』てふ意義によりて痛ましくも傷けられ、亦潑刺たる生の躍動を見ることは出来ないであらう。

二

我等が過去の世界は尙古主義の世界であつた。何も斯も古きものが尊ばれて、新らしきものは斥

逢ふた乞食と共にせし一片の黒パン、一杯の水、然り、そは誠に清き愛の杯さかづきであつた、彼れに人生の意義を與へし眞の聖杯ホーイユエルであつた！

吾等は完全の磁石もなく梶もなく大海に船出した。目的地は何處であらう。吾等は此不完全なる磁石や梶を絶間なく改造せねばならぬ。而して吾等は知識の燈明を一層輝かし、情意の熱火を一層強烈に且つ堅固にして船の進行を計らねばならぬ。吾等の運命はどうなるであらうか。若し最初から東或は西を指して往けぬ目的地に達するのだと確定してゐたならば、誠に仕合せである。吾等は直に船の舳先を其方面に向くるであらう、そして何の苦痛も迷ひも試鍊もないであらう。乍併若し斯の如く吾等の行路が一定の目的地に到達すべく宇宙の太初から運命づけられてゐるのであつたならば、人生は畢竟機械である、傀儡である。右に廻るべく作られた時計は所詮左に廻ることは出来ぬ。

古來人生の意義は斯様／＼だと、絶對的眞理の發見を叫んだ者が澤山あつた。されど吾等が懷抱

する激測の英氣は過去に絶對の權威を認め、之に歸着せんとて喘えぎ往く程毫碌してはならぬ。吾等は絶對的に、形而上學的に生命の意義の何者なるかを知るものではない。よしそは既存のものなりとするも、絶對的に之を知るは何時迄も不完全なるべき人智の力に於ては不可能であり、且つ之を知ることを願はぬであらう。そは親譲りの財産に餘り難有味が感ぜられないと同様である。

されば吾等は過去に於ける人類の經驗を土臺として、又過去に於ける吾れ自身の經驗を土臺として、其上に吾等自身に價直ある生命の意義を創造し、其内容を豊富にせねばならぬ。而して此創造されたる人生の意義目的は吾等が經驗、然り、人類全體の經驗の進歩と共に絶間なく修正増殖されねばならぬ。宇宙の大靈は此人間の創造的活動に内住して、自からの生命を充實し給ふのである。此人間の創造的活動を措いて、何處に神靈の妙光を認むることが出来やう？

四

今此の如き創造的進化の見地に立ちて、如何に

價値ありや。甚しきに至りては、是等過去の經驗や觀念が吾等の新らしい經驗と何等の交渉なく共鳴なきものであつても、世の靈的指導者を以て任する牧師や説教者は、外的に是等の觀念を吾等の生涯に挿入^{イザート}せんとするのである。我等自身で働き出さぬ財産は御免だと辭退しても、是より外に世に財寶はないのだと云ひて、舊き經驗の反覆^{レベシヨン}を吾等に強めるのである。

吾等は親譲りの財産は不用だと跳ね付けた。吾等は不孝の子であるかも知れぬ。されど吾等若し親が舊式の鋤を使ふて田を耕へすに何の不足も感じなかつたから、吾等も同様、嶄新な機械鋤を排斥し“*What was good to my grandfather is good to me.*”と叫び、やはり舊式の手鋤に満足してゐなくてはならぬのであつたならば、人生果して何等の創造的進化があり得やう、何等の任意的向上があり得やう！

吾等現代の新らしい生命意識に創造的進化の過程を辿らんとするものは、先づ過去の絶対權を否定せねばならぬ。過去の歴史が作り出した佛陀の

觀念もクリストの觀念も、それは過去の經驗に限られしもので、絶対不變のものではない。吾等は過去を尊重す、但しそれは過去を吾等の主人^{マスト}としてではない、お小間使^{ジョブ・メンド}としてである。吾等は過去が蓄積した經驗と其結果なる觀念の色々を只材料として、更に新らしい經驗と觀念の世界を打ち建て往くのである。斯くて初めて人生の意義は過去より現代に、現代より將來に、層一層切實に、一層深刻になりまさり往くのである。

三

眞理は既存のものではない。吾等が經驗の生涯に創造されて、吾等自身に意義ある眞理が構成されるのである。吾等が日々の生涯と懸け離れた眞理が百萬あつても千萬あつても、それが何の益に立つ？ 此意味に於て凡ての眞理は現實である、*really*である。現實を離れて何處に眞理を求むることが出來やう。聖杯^{ホライユール}を求めて武者修行に出た騎士ランフォル（ロオウエル）の詩を見よ、が、空想の世界に尋ねめぐみて之を得ず、尾羽打ち枯らして歸つて來た數年の後、我が家の門口で再び廻り

透徹に生の意義を創造することが出来るのである。言説理解が與ふる科學的哲學的の人生觀は只ほんの皮相に過ぎぬ。其徹底した意義は愛の行爲に於てしか味ふことは出来ない。されば我が懷抱する愛念を一層醇美にし、一層純潔にし、一層深甚にし、一層擴張すればする程、人生の意義は一層富瞻なるを得るのである。菓子を食べる子供に之を與ふる母の行爲は即ち愛の發現である。されど其齒痛を恐れて適宜に之を與ふ、そは一層大なる愛の表現である。昔は神を愛すと稱して犠牲の獸や人身御供を祭壇に供へた。今や神を愛する者は自己の生涯を奉獻して人類の爲に奉仕し、人道の美を濟す、之れ愛の一層深甚なるものである。廣さに於て之を言はんか、吾等が自然に有する家族の愛を郷黨に押し廣げ、郷黨の愛は國家に廣がり、民族に廣がり、遂に全人類を抱擁し盡して、禽獸草木の愛から宇宙の森羅萬象に及ぶ。そは單に空間的のみでなく、時間的にも瞬間の愛は長年月の愛に擴がり、百年千年の未來に憧るゝ愛は遂に永遠恒久の愛に進化する。

愛に在つて吾等は圓滿に全宇宙を抱擁し、全宇宙の大靈と呼吸相通じ、血脈相結び、宇宙の利害休戚に直に以て己が利害休戚となり、宇宙の發展の爲め吾等是如何にせばよきや、人類の運命を開拓する爲めに如何にせばよきや、我等が愛心常に茲に集りて、吾等は早や薄つべらな、ちつぽけな生涯を送らうとしても、もう送ることは出来ぬ。自意識的に深く宇宙の生命に融合し、宇宙の創造的進化に參して『神と俱に働き、神と俱に楽しむ』の自覺に到達し、時間的にも空間的にも無限の生命を我が生命とするに至りて、吾等人生の意義轉た深甚ならざるを疑ないのである。

五

吾等は此世に處して種々雜多の希望を持つてゐる、理想を抱いてゐる。此希望此理想は吾等が現實に領有する種々雜多な財寶以上に吾等が生存を可能ならしむる必要條件である。吾等は罪に汚れた過去の生涯に飽き果てた。そは過去の記念として只回想するだに苦痛である、悲哀である。吾等は容赦なく現實の自己を改築して、理想の我れに

して生きん乎てふ問題を考ふるに、吾等は過去一切の經驗や觀念や社會制度を吾等の支配者として仰ぐのではなく、是等一切の創造物を吾等が精神生活の材料として活用し、各自獨特の運命を開拓し往かねばならぬことが分るであらう。

個々人間の經驗は千差萬別、到底同様なることは出來ぬ。従つて異つた經驗を土臺として築き上げた人生の意義も眞理も絶對的に萬人共通なることは出來ぬ。されば個人は個人として獨特の意義と價值を持つて居るに相違ない。乍併吾等が生の奥底から湧き立つ本能的衝動は *more life* を欲求して止まぬ。そは一層抱擁的、そして一層相互的に相貫徹し合ふた生命の欲求である。此欲求は自我を熾熱の燒點として、其生命意識を八玄に擴充し、同情と愛慕の念を以て凡ての他の生命を抱擁せずんば止まざらんとするのである。そは單に知的な言說理解の働きではない。もつと内的な、本原的な情意的欲求、否な、生命其者の欲求である愛に於ける生の融合である。

然らば愛とは何ぞや。そは何の不可思議でもない。

い。愛は生命の別語に過ぎぬ。生ある所愛あり、愛ある所生あり。されど同時に愛ほど不思議なものはない。一鉢の朝顔水に渴して枯死せんとしてゐる。持主は之に水を注ぎて其生氣を恢復する。是れ彼れが朝顔に對する愛の發顯である。彼れの生命此一莖の朝顔と呼吸相通するものがあるが故である。夫婦の愛、親子の愛、朋友の愛に於て、一方が他方に對して自己以上の愛を感じるは、他の個我中に *another self* を見出してゐるからである。即ち二者一體の生に融合して、一層抱擁的な、一層深刻な、一層有意義な生命を創造し、且つ之を味ふてゐるからである。愛は夫れ凡ての矛盾撞着を抱擁し盡して、全體統合の生活に最も自由な、最も自律的な、最も任意的な意志の躍動を保障するものであるから、生の表現が深く其意識の根柢を此處に植付けて、萬事清き愛の白光に照し視るでなければ、人生は浮萍の如く、外的の力に押し流されて漂々浪々、徹底した自我の意義内容を贏ち得ることは出來ないであらう。

然り、吾等は愛に在つてのみ最も切實に深刻に

を美化し、善化し、己が愛の中に抱擁しなくてはならぬ。勝つて之を殺すは愛なきが故である。愛ある者は之を生かして非惡を善に進ましめ、汚濁を美に脱化せしむ。古より偉大なる人格は常に斯の如くにして彼に接觸した凡てのものを活かし、凡てのものを愛撫し、凡てのものを善美の域に進ましめた。愛は即ち人格完成の要具であつて、同時に人格其者の光りである、匂ひである。

六

されば吾等は社會生活に於ける、愛の行爲を以てする人格の向上發展を人生屈竟の目的となすのである。但しそは人生の意義を盡したものと云ふ譯ではなう。more lifeを要求する生命は其發展の燈明を常に此方面に向けて、初めて最も價值あり最も意義深き生涯を送り、最も深刻に切實に人生の醍醐味を味ふことが出来るであらうと云ふに過ぎない。勿論人格と云ふ語も、愛と云ふ觀念も、社會と云ふ形體も常に一定不動の内容を有するものではない。されば、社會に於ける愛を以てする人格の向上を人生終局の目的とすと云ふも、人智

の發達、人情の醇化と共に愛や人格の意義内容は絶間なく深甚となり豊富となり、絶えず新らしき人格の意義、愛の理想を創造し往くものである。

吾等の熱求は己が生の充實である、生の發展である、生の向上である。されど漫然單に個性の權威を高調し、個性の經驗に至上の價值を認めて、生を孤獨ならしむるは、却て生の自滅を招く所以で、是れによりて如何に深甚なる個我的意義内容を創造し得たりと誇るも、それは到底主觀的な人生の意義に止まり、恒久性を帶びた客觀的の價值普ぬき人生義たることは出来ぬ。人生の過程は客觀の主觀化であると同時に、主觀の客觀化である。客觀の主觀化は個我的生命の創造であつて、主觀の客觀化は宇宙的生命的創造である。されば愛の行爲によつて限りなく自我を展開し、他我一切を攝取し抱擁した人生の大海は如何なる社會の風波に揉まれても、根柢迄濁りに染むことは決してなく、時に暗雲八玄を閉し、五里霧中に彷徨するところもあるも、愛の妙光に導かれた吾等の生涯は、常に自然の恩恵、人情の恩恵、又自然と人情に即し

生さんことを願ふ。吾等が過去や由來や原因の明瞭な意識は却て吾が靈を悩ます煩悶の種である。

吾等の祖先はアダム、イヴであつても、アミイバであつても、アトムであつても、コオバツスルであつても差支へない。只我等は小さき汚れた蹟いた過去に生さずして、大なる美はしき、無限に發展の餘地ある將來に生きてゐる。是れあるが故に生命は常に *more life* を渴求して止まぬのである。

我等は自我生活の充實を要求する、そは本能的に然るのである。而して此自我生活の要求にも色々な方面がある。そは單に物質的の満足や充實ではない。健康や長生のみが人生屈竟の欲求であることは出來ぬ。吾等は常に精神的の充足、即ち知的、藝術的、道義的充實に向つて、殆んど肉體の存在を忘れて働いてゐる。才智を磨くも是れ、名譽を求むるも是れ、美的生活を欲するも是れ、地位權勢を望むも是れ。而も最も深甚なる、且つ恒久なる生の欲求は内的自我の創作夫れ自身である。個々人格の向上發展其者である。

由來人生は藝術である。創作である、『人格』な

る生きた塑像彫刻の過程である。然らば人格の向上、人格の完成、そは如何にしてなるものがあるか。古の苦行者の如く、僧院に趨り、山に入り、人間的な生活と縁を絶つて之を成し遂ぐるこゝとが出来るのであるか。あらず。人格の創成は社會生活なる材料を必須とする。人格を離れて社會なき如く、社會を離れて人格はあり得ない。社會を離れて個性に立て籠りたる孤獨の人は恰も火消壺に投入された柁火と一般、自我の烟りに窒息して、生の光を滅却するものである。されば人格創造の工場は常に社會的生活の熱火に被はれてゐなくてはならぬ。吾等はあらゆる誘惑に充ち満てる汚濁の泥中から、花蓮の清き美はしき人格の匂ひを登揚せんと努力してゐるのである。時には邪惡の毒血に汚さるゝことあるも、直に之を洗ひ落とす覺悟と勇氣がなくてはならぬ。邪惡の鋒先を恐れて隱遁するは卑怯である、意氣地なしである。まともに邪惡汚濁と戦つて、之に打克たねばならぬ。否な、只打勝つのではない、又克つて彼等を剿滅するのではない。寧ろ彼等を征服して、彼等



北米だより（第二信）

在桑港鈴 木 生

一 布哇に於ける堀牧師

教友及び同人諸兄。

我等の乗船地洋丸は七月五日の拂曉を以て、無事灣内に入り申候。實は船中より消息申上度所存のところ、元來船には弱き小生の事とて、斯る航海は稀なりと申され候程の平穩なる航海なりしに係らず、兎角緻密なる事の手にかかずして、甲板上の運動遊戲に於ては敢て人後に落ちず、食堂の欠席も僅かに二回に過ぎざりしも、携へたる書籍は稗史小説の外、殆んど一頁にも通讀せず、幾多の所要の書信すら殆ど發するなくして止め申候。たゞ二等食堂に於て開催さるゝデビス宣教師（美

以）の毎日午前十時よりの聖書研究、並びに日曜の禮拜には大抵出席仕り候のみならず、一夜船客諸君の請に任せて『社會問題と近代生活』に關し、一時間餘の講演を試み候のみ。ホノル、に上陸しては、同地の堀牧師の御厄介に相成候。牧師は御承知の如く六七年前渡布せられ、同地獨立日本人教會の爲めに聖職に就かれ候が、今や同地に確乎たる地盤を据ゑられ、學生の監督、通俗教育其他各種の社會的事業に御盡力相成居り候。曩に竣工せる會堂は結構頗る莊麗にして、優に千人を容るに足るべし。十二月小生歸朝の途次此大會堂に於て數回の講演を試みるべき筈に候。同夜會堂に隣接の新築牧師館に於て、御夫妻の懇別なる御饗

て吾等に靈覺を與ふる宇宙大靈の恩恵を感じざる
ことなく、此恩寵の感じは新らしき愛の力を呼び
起して、更に新らしき生命の光にあえき憧る。愛
は常に新らしく、常に珍らし。斯くて人生は限り
なき愛の發展、然り、限りなき清き愛の發展を續
けて、吾が生涯の經驗を歩一步に美化し、善化し、
客觀化し、永久化し往くのである。

生命は始めから充全ではない、永久ではない。
生は夫れ自身の努力によつて自身を創造し、自身
の存在に恒久性を與へて、其哲理的價值、其藝術
的價值、其道義的價值を體現し、而して其宗教的
價值を益々發展し往くのである。そは只宗教の根
本義とせる愛の生涯の所産なる『人格』てふ活き
た藝術的象徴シムボルの創造である。

あゝ吾等如何にして生きん乎。そは即ち『如何

にして最も深刻なる、最も豊富なる、最も眞率な
る、最も高尚なる、最も清き美はしき生涯を送り
得んか』てふ問題であつて、其解決は自から問題
の中に含まれてゐるのである。而して清き愛の生
涯の限りなき融合的抱擁的展開ほど、人生に豊富
高尚の意義を添へ、切實深甚の價值を與ふるもの
は他に有り得ないであらう。愛ある所生命は榮え、
愛なき所生命は萎縮す。愛は生命の原動力であつ
て、其美化、善化、醇化、神聖化、宇宙化が、生
の意義を創造する最上の手段方法であり、同時に
人生の目的である。『聖ユキき愛の生涯』そは誠に人生
の意義を抱容し盡して、亦遺憾なきものと云はね
ばならぬ。さらば如何にして生きん乎。我れ答へ
て云はん、只清き愛の限りなき發展に活きよと。

(完)

の爲めに國務卿の大任を一擲したる一事、人心を刺戟したるに依るべき乎。

時恰も米國獨立第三百三十九年の祝典に際したれば、朝來曇天にして小雨屢々到りしに屈せず、人出は實に夥しきものに候ひき。演説に先立ち陸海軍の士卒は軍樂隊を先頭として、寶玉塔前を練り過ぎたり。壇上には當日の主賓ブライヤン氏を始めカーン上院議長、ムーア大博社長、各重役、陸海軍の將帥、各國事務官長等綺羅星の如く居並べり。陸海軍の行列の一亘り通り過ぐれば、大博沖合に集合せし合衆國の大小軍艦は一齊に二十一發の禮砲を發射す、日本花火は海岸に轟き、スミス氏の飛行機は高く天に翔りて宙返りの曲乗りをなす、此間ブ氏はムーア、カーン兩氏の演説の後に悠々巨軀を壇上に運ぶ。聽衆の喝采雷の如し。

論旨は必ずしも奇抜にはあらざりき、約言すれば、文明は人權を重んじ、野蠻は財産を尊ぶ。戰爭は人權を輕んじて財産を重んずるもの、則ち文明の逆轉にして野蠻の再現なり、吾人は此野蠻的勢力に對して對抗する所なかるべからずといふに

あり。論旨は極めて平明なれども、彼れは之を行るに獅子吼の大雄辯を以てせり、見よ、彼れの灼熱せる顔面の筋肉を、隼の如き眼光を、蝶の如き拳を。而して其辯舌は滔々として懸河の如く、其音聲は高らかに且つ強くして雷の轟くが如し。七萬の群衆恍として酔へるが如く、其一舉手一投足に喝采す、宛ら響の者に應ずるが如し。妙所々々に到るや、碌々其意を解する能はざる我等すら、實に肉躍り血湧くの感なくんばあらず、雄辯家たるもの、又男兒一代の快事たるは失はざる也。

三 王府獨立日本人基督教會

桑港の對岸ランチ二十分にして達する所にウーランド市あり、太平洋の浪に洗はれ緑の樹木に圍まれて四時夏を知らぬ仙境市なるが、玆に我等の同志額賀牧師が、此春以來獨立日本人教會の牧者として住居致され居り候。小生は去る九日の金曜日に招かれて客となりしが、更に十一日(日)の夜は請はるゝ儘に喜びて『基督教と社會問題』に就き、一場の講演を試み申候。此地方の習はしにて

應に預かり、ババイア、キャンタローブ、アリゲタ桃其他の熱帶果實の珍妙なる美味に舌鼓を打ち申候。牧師は布哇に於ける本誌擴張の恩人にして、本誌を通じて布哇に於ける邦人識者間に同人諸君の知己を有するは、全く牧師の賜に御座候。たゞ御同情に堪えざるは、本年十九歳にならせらるゝ牧師の御長男が長く重病に苦まれ、客間の隣室に於て御横臥あらせられしが、今や望み少しと語られしもの、小生着米後遂に永へに眠られたるの報に接したる事に候。小生は茲に謹んで哀悼の意を表する者に御座候。

ニ ブライヤン氏の雄辯

着米第一日の印象はブライヤン氏の雄辯に御座候。船の金門灣内に入るや、當地『日米』の千葉豊治兄は眞先に駆け付け來りて、何呉れとなく諸事萬端の御世話をなし下され候。げにも嬉しさものは異郷の友の情けかな。棧橋には領事館、日本人會、並に河上清氏、片山潜氏等の御出迎を受け十八日ぶりにて心地よく目的地に到着、一先づバイ

ン街なる帝國ホテルに落ちつき申候が、着早々千葉君は我等を促して、巴奈馬大博覽會に向ひ申候。建築の壯大が必しも珍らしといふにあらず、當日午前十一時より米國現代の偉人、民主黨の領袖、曩に主義の爲めに國務卿の重職を抛ちたるブライヤン氏の雄辯を聞かしめんが爲めに御座候。

ブ氏の大演説は大博覽會の中心たる高さ淺草十二階の三倍もある、大寶玉塔前の廣場にて野天に於て開かれ候。塔前に方五間許り、五呎もあらん壇は設けられ候。壇の周圍は色鮮かなる星條の米國大國旗にて圍まれ候。壇を圍りて數千脚の椅子は用意せられ候ひしが、これ等は瞬く間に人を以て埋め盡され、更に其等の群衆を圍りて十重二十重の人垣が作られ、此日此偉人の雄辯に接せんとして集り來れる聽衆總勢七萬と註せられ候。以て其盛況の一斑を知るべし。加州は由來共和黨の地盤にして、知事ジョンソン氏の如き共和黨中ローズヴェルト氏と共に進歩黨に屬するは、何人も知悉するところなるが、斯る土地柄にして尙此群衆を見たるは、國民が國歩艱難の際に於て、敢て主義

廣く、例へば米國現代第一流の詩人エドウィン・マアカム氏と好く、一日小生を伴ひ同氏を訪問されしが、小生は實に此詩聖と對談して、偉大なる印象を授けられ候。又は單稅論者、勞働黨領袖等と親交あり、小生の活動の爲め非常の便宜を與へられ候。學殖も廣く深く、政治、倫理、哲學、文學に委しきが、特に心理學に精通して幾多の藏書あり、且つ當地應用心理學會の會長として、毎週火曜の夜數百の聽講者に對して、斯學の講義をなされつゝあり。文學も餘程の好きと見え、古今の詩集書齋に堆積す、小生の爲めに設けられたる室にトルストイ翁の油繪の大肖像掲げあり、牧師はこれ何人の肖像なるかを知れりやとの事に、小生は言下に翁の像なるを答へ、日本には幾多のト翁崇拜者あり、幾多の著書の翻譯され、『復活』は芝居にまで仕組まれ、カチウシヤの歌の流行することまで語りしに、牧師は『オー、レアリー？』と感嘆し、これよりして小生と與に語るに足るとなせるが如く候。宇宙は神の棲家にして、人類は世界を以て家とすべし、合衆國は無限の廣土を有す、何

の必要ありてか日本の移民を妨げんと、宗教的自由移民論者にして、日本は政策上よりしてもかゝる人物を珍重せざるべからずと存じ候。

玆に面白きは同牧師に親炙すればする程、小生は實に我が内ヶ崎兄を想起せざるを得ざることに候。第一身體の頑丈にして長大なる、自由思想家なる、樂天家なる、平和主義者なる、而して趣味の多方面なる、交友の廣き親切なる、而してよく語りよく笑ふ（特に高聲を發して笑ふ）など、實によく似た人もあるものと存じ候。殊に不思議ともいふべきは、其夫人までよく似られたことに候。夫人は割合に細く小柄の人にして容貌もよく似られ、女子大學の卒業生なりといふに、殆んどなりもふりも構はず、米國婦人に似ず内氣にして、何もかも知り抜き居るに係らず、沈默寡言自らいふべきことも夫を通じて語らんとするが如き風あり然も孜孜として家事に勵精せらるゝが如き、如何にしても内ヶ崎夫人に御座候。然も其住所が桑港の巢鴨ともいふべき町外れと來ては、何處から何處までも似たるものと感嘆致し居り候。小生は此

此頃は朝の禮拜は十一時より、夜の集會は八時より、營まれ居り候。日長ければ八時にてもまだまだ明く御座候。

教會は決して大なりといふ能はず、二間半に五間程の本造建にして、會衆は僅かに百人を容るゝに足るべし。牧師館は同一敷地内にあり、壯大ならざれども瀟洒なりといふを妨げず。夕刻より牧師館にて夫人が御手料理のお壽司に舌鼓を打つ。

麥嶺神學校出身の今井君、仙臺片桐牧師令息片桐君、湯淺治郎氏令息湯淺君、其他舊友新友打ち集ひ實に愉快を極めたり。當夜の會衆は六七十して何れも五府麥嶺に在る同胞なるが、教會員以外の人にも多く見えたりとて牧師執事等は痛く打ち喜ばれ候。集會果てゝ後も予は多くの知友と語り興じて殆んど夜の闌くるを忘れたるの感あり、深更に及びて桑港に歸れり。

額賀一家は極めて健勝、夫人の洋服姿も誠に似つかはしく、渾然和樂の色の漲るが裡に、牧師は孜孜として教勢の發展の爲めに劃策奔走し、會員も亦悦服す。將來の盛運期して待つべきものあり

候。懷ふに先年内ヶ崎兄此家に宿り、此演壇に立てり、而して我が海老名牧師も亦恐らくは此地を訪はれたり。最後に我れも亦來りて此地を踏み、此壇に立つ。宿緣眞に淺からず。懷舊の情、油然而して湧き出づるものあるを禁ぜざりしことに御座候。

四 ジャクソン牧師

小生は去る十三日以来、ギユリツク博士並に當地ブレチン紙勞働部長イリー氏の紹介にて、美以教會牧師ジャクソン氏の客と相成候。同氏は年三十八(米國流の計算にて)夫人は三十四五なるべしか、夫婦の間に子なし。極めて平和に、極めて質素に、茲桑港ダウンタウンの熱鬧を離れて、金門公園に程近く住居致され居り候。氏は美以教會中にては稀れに見るべき進歩主義の人にて、宗教的信仰の見地に於ては、小生と殆んど何等の軒輊あるを見ず、氏親らも予個人としてはユニテリアンなりと明言され、基督敎界の衰勢と、其保守的傾向とに對しては嘆息せられ居り候。交友の範圍頗る



瑞西より

廬山生

瑞西の歡樂郷

小巴里といへば今や獨逸の馬蹄に蹂躪せられてゐるブリュセルのことを指すのであるが、瑞西にも小巴里と呼ばれてゐる町がある。夫はジュネーヴのことである。瑞西といふ國が世界の漫遊客の集つて來る所としては不思議に野暮な事は前にも記した通りであるが、こゝばかりは先づ別天地の觀がある。一體ジュネーヴは一時は昔のドイツ帝國の支配にも屬し、一時はまたサボア侯の壓制的治下にも立つてゐたことがあるが、中世以後絶えず佛國の影響を受け、此町に生れたジャン・ジャツクルツソーの晩年に當る頃には、佛國領に屬して居つたのである。夫故今から百年以前に瑞西の聯

邦に加盟することになつてからも壁一重となり。フランスの氣風を其まゝ受けて、一種の世界同胞主義享樂主義といった様な氣風を生じ世界各國の亡命客や虛無黨者流の隠れ家となつて奔放自由な一個の別天地を形づくつてゐるのも無理ならぬことである。

町はジュネーヴ湖の西端湖水の落ちてローンの流れとなる所にある。川の左岸にある方は古い町で右岸の方は稍新しい、此間に架するに六橋を以てし其湖に接して最も長さをモンブラン橋といふ橋の北の端をモンブラン波止場といつて大きなホテルやクルサールの建物が並んでゐる。其間に町の恩人ブルンスウィツク侯の紀念碑がある、侯の寢姿を收めた六角の大理石の塔の前に二頭の獅子

天涯の異域にありて、此牧師夫妻の好意に依り、恰も我が内ヶ崎兄の家に客となるの感を抱きつゝ、使命の遂行に奮勵するは、實に天の寵恩に感謝せざるべからず、これ又基督教徒たるの光榮なりとす。小生の英語もどうやら漸く物になりかけつゝあり、未知の白人に對しても大して窮せず候。基督の愛は、國境を超越し、人種を超越す、愛の一

字を以て貫かば天下何れの處か排日あらんや。小生は唯だ此確信を以て事に當らんとす、幸に只今のところ、萬事好都合、排日の首領連すら漸く其態度を一變せんとす。希くは諸兄の熱禱を祈る。詩聖マアカム翁との記念すべき會見は次回に報道仕るべく候。以上。

■ヴントの心理學

須藤新吉 著
内田老鶴圃發行

この書は予が近頃手にせる著作の中で最も立派なるものである。著者須藤文學士は頗る熱心なるヴントの研究者にして、この書はその不屈不撓なる數年間の研究の結果である。元來ヴントの著作は頗る浩漭にして、且つ極めて難解なるものなるが、著者はこの浩漭にして且つ難解なるヴントの著作の殆ど凡てを讀破してこの書を書いたのである。そのあり餘る材料を巧にコンデンスして要所を逸せず、而も餘りに簡略に過ぎて讀者をして理解に苦しましむるが如き弊に陥らず、手頃なる五百餘頁の一巻にヴントの心理學の精髓を誤りなく收めたる手腕は、實に驚くべきものである。著者はこの書に於いて實に驚くべき理解力と才能を現はして居る。ヴントの著作は難解を以て有名なれば、この書も多分難解なるものならんと想像して、敬遠主義を取る讀書子があるかも知れないが、それは杞憂である。著者の手腕はよくヴントの深遠なる學說を初學者にも理解し得るやうに解説して居る。何人も知る如くヴントは現代心理學の創立者なると共に現代哲學の宿老である。故に彼の學說を理解することは、今日の哲學と今日の心理學の理解に導くキングスハイエーである。然れども彼の著作はその浩漭なると難解なるの故を以て、我國に於いては名は甚だ有名なれども、その學說は廣く知られて居ない。かゝる時にかゝる好著作の現はれたることは我が學界の慶事である。故に予は心からこの書の出版を賀し、併せて著者の努力に感謝する。尙ほ内容の一般を舉ぐれば、緒言には『ヴントの略傳及び著書』を述べ、序論には『ヴントの心理學の一般的基本』を述べ、本論には『ヴントの心理學の大系』を述べて居るが、本論は更に『心的要素』『心的復合體』『精神結合』『精神の發達』『心理學の原理』の五章に分れて居る。通卷三百五十一項、五百二十三頁、外に六號活字で四十七頁の註解がある。予は世の讀書子に心からこの書の閱讀を勧める。(木村) (定價二、〇〇)

こゝに其老を養つて居られる。一度尋ねて見度いと思つてまだ其機會かない。舊市街には入るとさすがに大きな商店が美しく飾り立てゝ居る。中にも目につくのはこゝの名物の時計七寶などを賣る店である。夫も戦争が初まつてから二割引三割引の札を大きな硝子戸に張り出す様になつた、之も戦争の餘影である。

賑やかなローン通りを過ぎて舊市街の中央にはいつて行くと、ブラスド、ムーザの廣場に出る。廣場の中央には記念像噴水をめぐつて美しい花壇をつくつてある。北側の中央には劇場がある、其西には音楽場、其東には古い博物館がある。いづれも中々立派な建物である。博物館の建物は今度の戦争が始まると赤十字社の臨時事務所となつてすべての交戦國に捕はれて居る人々の情報局を設けて四方八方からの問合せ、手紙の往復其他一切の便宜を計つてゐる。アンリージュナンに由つて萬國赤十字同盟の基礎をつくつただけに、今度の戦争に於て例へ其國の位置が然らしめるとはいへ實に賞賛に値する一大事業をやつてゐる。獨佛兩國

に於ける相方の廢兵の交換、婦女幼少の避難も亦最近此國の仲介に依つて行はれたのであつて、赤十字の活動を共に此一小國をして男振りを舉げしめたこと正に萬丈の觀がある。

廣場を南に横切つて大きな鐵門をはいるとバスチヤンの散歩場と呼べる公園にはいる、すばらしい榎や櫟の木の並木がある。並木路の左側には古い町の城壁に彫りつけた宗教改革の記念の浮彫が並んでゐる。右にそると大學本部に出る。木立の陰のそこゝに古い教授などの記念像が立てゝある。餘りけば／＼しくないどこか落ちついた趣向で學者を紀念するにはふさはしい氣がする。醫科大學は更に町の東北の端れにある。とりたてゝいふこともないが、こゝの外科の手術場は最近諸病院の粹を取つて設計したものでいかにも明るく氣持よく出來てゐる。

町に戻つて博物館にはいる。西洋へくるとどここの博物館もローマ、ギリシヤ時代の遺物の模造と騎士時代の武具を飾つてある。こゝで感心したのは、此中世の遺物を其時代の裝飾意匠を施した室

が立てゐる。稍しつこい氣味はあるが立派なものである。其並びのホテルボーリヴァーヂユの前は奥帝フランツヨーゼフの皇后エリサベットの虚無黨員に暗殺せられた所である。ブラタインの並木の陰に續つてある小舟を見ると、花の様な姿の貴人が今し裳裾をかゞけて小舟に乗り移らんとする折から紫電一閃兇徒の鬼の如き腕に牡丹の花の如くくづれた様が浮んでくる。

波止場の並木道を行くと、向ひ側の丘陵の上にくつさりと浮き出したモンブランの連鎖が見える。波止場のはづれから更に東してモンルポ公園の柏杉などの生ひ茂つた岡の上から見ると一層美しい、モンブラン橋に戻つて舊市街の方に渡ると橋の中段に小さい島がある。ルツソー島と名づけられてルツソーの記念碑が立つてゐる。橋の欄干に倚つて碧玉の様に澄んだ水を眺めてゐると、白鷺や鷗などが物ねだりげに寄つてくる。此橋から三番目の橋の下はローン川の落ち口となつてゐて高さは低いが磴輶として落つる水の勢は中々壯觀である。傍に此落差を應用して發電所が出来てゐる。

る。

モンブラン橋の北端に出ると、こゝには大きなカフェが軒を並べて夏は路傍に椅子を列らね大合奏をやつてゐる。戦争の初め瑞西のどこの町もひっそりとしてカフェは十時に閉めた時でもこゝだけに依然として不夜城の觀を呈して居る。波止場に沿うて東北にゆくとイギリス公園に出る。生ひ茂つた樹木の間美しい花壇、噴水の邊を逍遙するといついてもベンチに腰かけて世間も戦争も知らず顔の人が新聞をよんだり煙草をふかしてぼかんとしてゐる。種々の人種を見るが殊に多いのはロシア人で戦争が初まつてからは、其他の交戦國から逃げてきたらしい金持の老人が殊に目につく。冬は寒からず夏もさまで暑からずドイツ人こそ元來嫌はれ其他は埃及、印度の謀叛を企てゐる人間でも一向構はぬと云ふ町だから、ロシアの専制に嫌さならぬ人や戦争の悲惨を見るに堪えぬ人の好箇の隠れ家としてこゝを選ぶのも無理ならぬことなのである。日本の文化を歐米に紹介してくれた點に於て我々の忘るべからざるチャムパレン氏も

思はれる。遺憾ながらダンスも踊れず、歌も歌へぬ我々には隅の方にひつこんでゐる外はない。

戦争が始まつてから元々嫌はれてゐるドイツ人は殆んど陰を収めてしまつたが、こうしたバアイやカフエへ行くと興酣になれば女共は「シユノツク、ア・ラ・ガール」シユノツクとはこの俗語ドイツ人のとなり、ドイツの奴等は停車場へいつてしまつたといふ意なり」と歌ひ出す。マルセイエーゾを歌ふものがある。英露其他聯合軍の國歌を歌ひ出す。果ては音楽隊があやしげな君が代をや

り出す。居合はす人は我々の方を向いて「ビープ、ジャボン」（日本萬歳）と杯を舉げる。カフエなどでは主人が出て來てどうか警察がやかましいからと制しにくるが、バーなどでは一向御かまひなしにやる。時としては街上に我々の姿を見つけて「ビープジャボン」と浴せるものがある。これらは瑞西ではどこへいつても見られぬ現象で、聯合軍に縁のあるものが多く集つてゐるからには違ひないが、又以てジュネボア（ジュネヴァ市民）の氣象を見るべきものである。

前 號 正 誤

二十一頁	四行目	唯物 [○] 理的 [○] 世界觀 [○] は唯物論 [○] 的世界觀
二十二頁	二行目	論理的必要 [○] 性は論理的然 [○] 性
二十七頁	七行目	救極 [○] は救拯 [○] の誤り

に飾つてあることである。博物館の前から天文臺の丘の下に降るとサレーヴの電車がある。之はフランスとの國境にあるテールブル形の丘でモンブランを見るに最もよいと言はれてゐる。又イギリス波止場に戻つてくる、ジエネヴァ湖を通ふ蒸汽の絶えず出入りする間に夏はヨットやボートが蠅の様に群れてゐる。其間をぬけてあつちこちに通ふモートルボートがある。對岸のモンルポ公園に渡つて更に湖畔の草深き道をたどるか、或は更にモートルボートを馳せて郊外に出るとアリアナの遊園といふのがある。いづれも小石川の植物園といつた様なつくりの庭で杉櫟などの老樹の陰のベンチに腰かけてゐると、自ら市中の雜鬧を忘れしめる。

さてジエネヴァの町もこう書いて了へばどこが小巴里といはれる價值があるのかちつとも解らないが、夜の幕が下りて波止場の沖の燈臺の光の碧く光る頃から舞臺はぐるりと廻つて新しくなる。晝間でも新流行の姿の美しい女の姿はどこへいつてもうろ／＼してゐるが、夜になると一層目につく。

町の辻々又はカフェーの隅にとろかす様な目付や婉轉玉の様な聲を以て遊蕩兒の浮き立つ心をそゝり立てる。殊に此町にはバーといはるゝ酒場が二三軒あつて、九時頃からそろ／＼客が集つてくる一隊の音楽師は場の一隅に座をしめて何とはなしに浮き立たせる様な合奏をやる。數人の踊子があつて合奏につれて踊り出す。踊にはイタリヤ、フランス、ロシア種々の國の娘を集めてゐていづれも際立つた装をこらしてゐる。一曲了れば馴染の客の卓を訪れて一杯の酒をねだる。其外こういう場所には普通のカフェよりも一層恠しげな女が集つてきて興酣になれば踊子と一緒になつて踊り出す終には御客も一緒になつて騒ぎ出す。戦争が初まつて一時に閉ぢる様になつたが以前には三時四時まで開いてゐた。先づ日本の料理や藝妓をあげて騒ぐ様なものだが、卓を並べる緣故で初めて逢つた人でもシャムパンの杯を舉げて一見舊の如く談笑する所に公開的な西洋の趣味が溢れてゐる。低唱淺酌の趣味は四疊半の裡にあらうがこうした公開的の遊も一夕の興を遣るには悪くないと

打を怨んだので、決して私の親を欲しいとか、父と云ふものを心から慕ふ心で泣いたのではありません。

私の母は或男と戀した。そして私を産んだが、其男は私の家庭に取つて縁者となるに双方共不利であるといふので、母も男を弗と諦め、男も私の家庭の事情を諒として未練を残さなかつたらしい。そして私は祖父の手に愛せられて成長した。生れてから一語も『父さん』と言つた事の無い私は八つになつても十二になつても『父さん』を慕ふ心の起らないのは普通であらうと思ふ。よく昔語りにある、親を尋ねて遙々と高野に上つたとか、國中を巡禮したとか云ふのは、夫れは幾年間幾萬回『父さん』と呼んで、そして『父さん』としての愛を受けた経験から、其の恩顧愛情を慕ふのであつて、決して其の肉體たる父を慕ふのでは無からう『否さうで無い、未だ見ぬ親を慕ふといふ事實が幾許もある』と云ふ人もあらうが、私は言ふ、夫れは其子が父なき爲に落ぶれて難儀して居るとか、其父に出逢つたなら、今の境遇より、もつと

安心な境遇を獲らるゝと云ふ希望を慕ふのであつて、父たる人其物を慕ふのでは無からう。又或人を言ふ『だつて華族の家で育つた子の親が乞食を、して居ると聞いて其子が親を慕ふて尋ねあるいた例がある』けれども私は言ふ、『夫れは其親の悲惨な境遇を幸福にしてあげたいといふ希望で親を尋ねるのだ、私は今心からの朋友が乞食になつて居ると聞いた時、必死に其友を助け出さうとするのと何の異つた所か無い。どう考へてみてもさうだ』

二

一體親子の關係といふのは、生ました、生んだの關係では無く、愛せられた愛したの關係、育てた育てられたの關係である。私は二十過ぎてから考へついた事があつた。私は父を欲しいとも母を戀しいとも思はないのに、私を育てて呉れた祖父を時々慕はしく思つたをして一言の親切、一日の厄介を受けた阿伽の他人を泌々戀しく思ひ出す事があつた。これは何故たらうと深く考へた時、私は斯う云ふ解決をした。



私生兒の心

——我心の模様——

沖野岩三郎

私は生來唯の一回も『あとツつあん』と云ふ語を吐いた事が無い。けれども決して眞の親が欲しいと云ふ者が一度も心の奥底に起つた事は無い。母親は私の幼少な時、親類の某へ縁付いて行つたが、正直に言ひますれば私は三十年來唯の一度も此の母に逢ひたいなぞと思ひ出した事が無い。私の眞の父と云ふ人があつて其人が死んだと聞いても、私は新聞廣告で顔も名も知らなかつた人の名を黒枠の中に見たと、そして變らない感じて居るだらうと思ふ。又た現に私を産み捨てたと云ふ人が今日死んだと云ふ通知が來ても恐らく私は『電報を打たねばならぬだらうか、葬式に行かねばな

らぬ。旅費を何程用意せねばならぬ』と云ふ様な、全然意味の變つた問題の爲には頭を悩ますだらうが、私の眼は決して哀悼の涙に濡れぬであらう。しかし私が其の他人同様だと云ふ父母の棺の前に立つた時は人前愧ぢず泣くだらう。けれど夫れは父母として泣くのでは無い、誰の棺前に立つても私の心から出なければならぬ悲みなのであらう。乃至は家なき流離で人が行路に死んで夫れを巧に埋めるのを見た時の悲みも同じ状態であると思ふ。

私は小學校に通ふ頃友達から『父無兒』^{ふむゑ}と言はれて毎日二三回は泣かされた。けれども私の泣いたのは意地の悪い友達達の罵詈を腹立たしく思つたのであり、乃至は鬼事の仲間に入れて呉れない仕

は度々其家へ出入りして一緒に酒を飲みました。或晩に五六人の青年と共に大いに飲んで居ますと、主人が突然『オイ親子の盃をしようぢやないか』と言つたので、私は『さア致しませう』と云つて二人は陽氣に交盃しました。夫れが遊戯の時球を投げ合ふより、もつと軽い意味でありました。私の心には其遊戯が永久に何物をも留めなかつたです。其後私は其の父なんめりといふ人には一昔餘りも逢ひませんが、近頃或人から彼れが滅切り禿頭になつて居ると聞いて、私も夫れぢやア禿げるのかなアと思つただけです。其人の甥に當る青年が今東京に居て時々親切な手紙を私に呉れる。私は其手紙を受取る度に一種の嘲るやうな、懽れるやうな、恥しい感じを抱きます。友人の一人が私に對つて『此間東京で△△と云ふ人に逢つた、何とまアあなたに能く似た人でせう』と言つた、私は『所謂従弟だもの似るも道理だ』と思つて、堪えきれない可笑しさが心に溢れるのを感じたばかりでした。

三

私は明治三十四年四月三日に生來始めて新約聖書を日高郡川上村遍照寺の岩橋音吉と云ふ僧侶から見せてもらつた。持つて歸つて馬太傳一章を讀んだ時、私には處女降誕の眞理が何の苦慮なしに『ウン』と點頭いた剎那に解釋出來たのです。そしてイエスが非常に慕はしい友の様な感じがしました。

夫れから舊約聖書を讀んだ時、神が全人類に與へた最初の祝福が『生めよ殖えよ』であつて、其所には婚姻制度も異邦人と選民との區別も無い事を嬉しく思つた。アブラハムの物語中サラよりもハガルに同情した、家族制度の最初の犠牲となつた私生兒イシマエルが、皮袋に一杯の水を貰つて美しい母親と泣きの涙で天幕を出て行く、夫れを昵と見送るアブラハムの眼に涙の浮んで居るのが明かに見えた。イシマエルは最早父を失つた、そしてエホバを彼の父として奔放な生活を送つて一つの國を建てたのを愉快に思つた。

『私は幼少の時、水泳をした川、鰻を釣つた谷、栗を拾つた山、兎を狩つた野原、夫れはどうしても忘れない、何十年経つても、あの水を潜つた時額を打つた底石の大きさから水苔の付いた淺黒い色、鰻を釣つた岩穴の口にあつた白いコンモリした砂、夫れらが明瞭に頭に残つて居て、假令洪水の爲めに其川がどんなに變形しようと、百姓が其石を割つて堤防を築かうと、もう私の頭には昔の川其儘が一定不變にして永遠のものである。そして私は其川其山を二なく戀しきものと思ふ。これは何も私が山を好むのでも石を好むのでもない。全世界に唯一つ其の私を育て、呉れた愛して呉れた山や川が、もう私とは離れられないものになつたのである。けれども私は九州の片田舎で生れ落ちて一年の後に此の紀州の故郷に伴れられて來たのかも知れない。だつて私には其の生れた九州の土地は私と何の關係も無いから、ちつとも戀しく思はれない、其の生れた土地の山も川も私とは何の愛着がないから何の交渉がない。夫れと同様に、私を生んだ親と私とは育てる愛すると云ふ條

件が無い爲めに没交渉なものとなつてしまつた。そして私を愛して育てた第二の故郷たる養父が二なき私の戀慕ふものになつたのである。で、世間の多くの人は此の生む人と育てる人とが幸にして一つであるので戸籍上嫡子だとか何だとか言つて威張られる、私は生んだ人と育てた人と別々であると云ふので私生兒だと云はれるのである。』
 或人は言ふだらう『だつて其の眞の父に逢つてみたら矢張り戀しい慕はしいと思ふに相違ない』
 いゝえ、私には經驗があります。どんなに家庭では秘密にしたつて、人の口には戸は閉たれぬで、十四五歳の頃には、あの人が私の父だと云ふ事は誰に聞くとなし何時しかよく知つて居ましたが、ちつとも慕はしく思はなかつたです。不思議にも私が十七八歳の頃、或事件で私の一家と其の父と云ふ人とは仇敵の様な間柄になつた。其時私は世間の人が私の父だと云ふ男を實に品性の劣等な無頼漢だと心から輕蔑しましたばかりです。私が二十五歳の時、故郷の小學の教師になつて赴任した時、其男は學校の近くで宿屋をして居ました。私

他人の妻として先きの夫の名を書くとは餘程殘忍な筆であると云はねばならない。夫れが殘忍で無いとするならば、猶太人の私生兒に關する考へは、我々日本人と餘程違つた所があると思つて、私はもう聖書を自分の辯護人の様に倚賴して讀んだ。

四

イエスのエルサレムに詣でた時兩親に言つた言葉や、カナの婚禮の時母を啗くはめた言葉や『我母、我兄弟とは誰ぞ』と言つた言葉を、もう恍惚として讀んだのである。そして彼れが祈りの模範として教へた祈りの言葉に、日用の糧を今日も與へ給へと言つて、天の父なる神に願つたやうに、自分の全生全靈を養ひ育てた神を、天よりマナを與へて育てた父だと言へて尊敬せられた眞意が深く味はれたのである。

若い友の一人が神田の古本屋から『白粉を洗ひ落されたる耶蘇』と云ふ本を一冊買つて來て私に見せた。私は夫れを讀んだ時に、エスが何とかいふ羅馬兵の私生兒だと書いてあつた時、私の感情

は一層密接にイエスに癒着したのであつた。それから明治四十年に發行した加藤弘之の『吾國體と基督教』の中にも、『聖母マリアが聖靈に感じた杯を竊んでアンドラとかアンデラとか名乗る希臘民族の墮落生と私通して基督を孕んだのである』と斷言してあつた時、私の心は躍つた。『あー加藤さん、夫れは本當でせうか、私はエス様が聖靈に因つて孕まれたと云ふ事を信じて居るが、今あなたの斷定なさつた通りエス様が本當に其のアンデラと云ふ人の私生兒であつて、そして全世界を斯んなに導いて呉れたのであつたら、私達私生兒の身が、どんなに廣くなるだらう、私の爲めに夫れが、あなたの斷言なさる様な事實であつて下さいと言ひたいです』と叫んだ。

明治四十三年發行の幸徳秋水の基督抹殺論にも『マリヤ其夫に離縁せられて猶太を漂泊せるの間、ロマの一軍人バンテラと私通して一兒を擧げたり』とあつた。これは加藤さんのやうにスコニフリイな筆法では無かつたけれども私は秋水君に

剛健なモアブもベニアミンも私生兒であつた。

ヤコブの妻は二人あつて、レアもルベンも何れが正妻だが判らない。十二人の子供は皆な私生兒だと言へば言はれる。

イスラエルの宗家ユダガタマルに産ませめた二人の子は立派な私生兒である。夫れが馬太傳の卷頭に麗々とイエスの先祖として載つて居る。

モーセもパロ王の劍を避けてミデアンに放浪して居る内、エテロの娘チツボラに一人の私生兒を産ませた。愈々モーセが千古の大事業を企つべく埃及に去る途中、チツボラは愛する情人の悲しい別れに臨んで始めて『汝は眞に我が爲に血の夫なり』と叫んだ。

モーセが砂漠中で神政々治を執つて居る時イスラエルの女で埃及人の種を宿した者の事で、苦しい裁判をしたり、夫ある女が他の男と通じた疑を受けた時の裁判に『此の聖き水を飲め、若し汝の腹の子が私生兒であるなら汝の腹が膨れて腿が痩せる。私生兒で無いならば安産するぞ』と宣告するあたり、私は息も嗣がずに讀んだ。そして『彼

等は其の心に適ふ者に嫁ぐべし』と云ふ結婚の大原理を教へてある事に感服した。

千古の英雄サムソンは此の律法を實行して『汝、ペリシテ人より妻を迎へんとするはイスラエルに女無き故なるか』と叱つた父母の言葉を他所に、テムナテの好む女と結婚した。其女に子が産まれたなら皆な私生兒である。

申命記二十三章に『外腎を傷ひたる者、又は玉莖を切りたる者はエホバの會に入るべからず。私生兒はエホバの會に入るべからず、是は十代までもエホバの會に入るべからず』とあるに拘らず、イエスの系統として掲げた馬太傳一章にある、オベデは有名な路得とボアズの間に産れた兒であるが、どうも麥刈る畑の畦で出来た私生兒らしい。殊にソロモンの母ベテシバは、假令一旦の不義があつたにしろ、もう心を入れ代へて、豫言者ナタンの承認を経て目出度皇后となつた後の出産であるに係らず、何で意地悪くも『ウリヤの妻』と云ふ稱號を付したのであらうか。事實は事實で仕様が無いとするも、もう正當の妻となつた者を公然



海の匂ひ

内ヶ崎作三郎

七月二十九日朝汽車の中にて

紅白の蓮花^{はちす}咲く田の道に荷車續く朝の尾張野。
かけ氷噛みつゝ望む大琵琶の緑り涼しき汽車の夏旅。

六甲山麓を過ぐる時此春永逝したる親友島地雷夢君の寓したるほとりを望みて

六甲の山永しへに縁なり仰ぎし人の魂はいづこに。
淡路島通ふ千鳥の音は絶えじ友のおとづれいつか聞くらむ。

廣島にて仙田重邦氏の好意にて淺野侯の泉邸及び大觀樓に案内せらる

太田川七つに別れ繞^{めど}る市は風なき夜も涼しく覺ゆ。
欄によれば中國山河海島の秀美あつまる大觀の樓。
水枝さす青葉の蔭にやすらへば池のあなたに鶴ぞしばなく。

關門海峡附近にて

もや深き關門の山眼覺めせよ朝日ははやも波をいろどる。
汐さして景整へぬ洞海の波にきらくゆふ月の影。

『あなた方でも其の記事で幾分にも基督信者に痛手を與へ得たと考へなさるですか』と言つて見たかつたのです。

私には私生兒と云ふ言葉の解釋が最も明瞭に出來たので、自分と同じ私生兒が位の高い所にも低い所にも富貴な家にも貧乏人の家にも天下到る所にある事を知つて心強く感じたのです。且つ私の最も喜ぶ所は私の眞の父が戀しくない母が慕はしくないと共に、世界の中で、苟も一樹の陰一河の流れに袖觸れ合うた一切の人を、私の眞の父眞の母と同様に思ふ事の出來る一事であります。これは兩親を習慣に従つて持つ人の容易に得られぬ心理、状態だと思ひます。

私には今馬太傳の一章が最も私の信仰を活かす尊い書となつて居ます。

處女マリヤ！

聖靈によりて孕まれたエス！

もう私は死んでも此の二人を忘れる事はありませ
ん。

安房の海より

羽山 常太郎

にくらしい雨にたまげて瞳をさますあをいろと
かげさふらんの花

月おどる野風呂にひたすなつやせの身にはづか
しきゆふがほの花

あこがれてあまのさち夜を八月のかぜさやさと
ほしさそひふく

たそがれの風のためよりにまかせたるこの思ひこ
のなみだわりなし

わがこゝろたまたま風にさそはれてしづかに夏
の日はくれにけり

はまづたひまつばらづたひ夏の夜の虫をなかせ
にいそいそと行く

夏の月しづかにうみをはなれたりまたもみやこ
のひとおもふかな

伊豫の國八幡濱にて

高き山のいたゞき迄も畠とせしその努力をばたゝえてしがな。
伊豫の海や秋立ちけらし佐田の岬に寄する潮の色ぞ涼しき。
ゆふ榮のあや雲の地に型ふりて波をかすむるひら燕かな。
八幡濱夏のゆふなぎ風絶えてたゝえ歌のみ涼しく流る。
さかしげの姫百合の群道を説く靈のいぶきを如何に受けしか。
春風の氷を溶かす力もて人の心を開く舌かな。
柑橘の野山にみのるみんなみの國の人々オリヅの色。
打瀬船浪を乗り切る三千里健兒つきせぬ宇和の濱々。

宇和島にて

城山の老樹のかげに汗ふきてありし昔を友と語らふ。
海にせまる四千餘尺の鬼ヶ城夏猶寒し蒼翠の色。
信を説く一夕の會幾たりの友をば得たる旅の喜び。
百年を三度重ねし今も猶容貌と音色は昔をもらす。

山頼和靈神社は忠臣山家清兵衛を祀る

祭らるゝ人の心はえ學ばずたゞに詣うづる人をあはれむ。
義に死せし武士の血に人の世を染めてや光る和靈の社。

八幡町ゆふべの通黒き汗によれたる人数知らず行く。
暑し暑し唧つをやめて焼くる日の下に働く人の子をみよ。
鶴嘴と力と汗に榮えあれ豊筑の野の富は何もの。
石炭積みて堀川下る百千舟黒き腕にも生の歡び。
豊筑の地より掘りたる富積みて門司若松の榮え目ざまし。
石炭の山かと積むる岸邊には林のごとく帆柱ぞ立つ。
恵まれし自然の幸に心靈の富を忘るな豊筑の友。
三百の聽手のかげに幾萬の子女ある故に我が責め重し。
南國の夏を樂しき水々し西瓜を切りて友と談ずる。
君が贈るバナナの味に夕風にこよひの旅は涼しからまし。

中津は福澤先生の郷里と聞きて

先覺のあれましゝ地とおのづから中津の町をなつかしむかな。

別府より伊豫に渡る

南のいで湯の町の夏まつり見渡す海面灯をもて包む。
見かへれば光りかゞやく高樓にのどけき夢を結ぶ人誰れ。
絃歌湧く湯の町遠く舟出して千尋の海の上に祈らむ。
佐賀の關佐田の岬と相呼べば潮ぞ急く速吸の門。

ゑはがきを召せと呼ぶ聲かまびすし梢の蟬を我は選ばん。
ふた親の共に詣うでしこの宮の石壇の上を獨り踏むかな。
うす闇き森の梢をふとみればゆふ日にきほふ雲のひとむれ。
象頭の峰より見れば讃岐富士いくたの村をひきゐてぞ立つ。

高松より宇野に渡り岡山に入る

すかし見る島影黒く波くらし船側をうつ音のみを聞く。
千萬の星心あらば何と見ん波にゆらるゝわが小さき船。
燈臺の赤き光をなづかしむゆふ星のごと牙えててらねど。
眞夜中の闇につゝまれ友の里を見ぬふりをする心淋しや。

須磨のほとりは夢なり

あかつきの夢心地よし須磨明石浦の汐風窓に入るらむ。

宮川經輝氏を諏訪の森におとづる

難波江の風吹き通ふ森かげに桃をむきつゝ語る嬉しさ。
矢よりとき電車の中は風を多みさゞめく子等の聲ぞ楽しき。

花園に友を訪ねて妙心寺内をよぎる

老松の森の下かげ禪房の寂として立つ花園の寺。

京都より東上の汽車中にて

宇和島より瀬戸内海までの航行中にて

島山は紫色にくれゆきて清く尊し六日月の影。
山々の長く連る佐田の岬猶その先に沈みゆく日よ。
見送りの人影小さしわが船はなぎたる海を沖へ沖へと。
ゆふ闇の漁村のあかり大空の星ときほひて波を彩る。
弦月の影さら／＼と船の尾の碧玉色の波をあやなす。
山海の大なる書開かれぬしは閉ぢよ人寰の巻。
眞帆片帆浪よ小島よ天つ日の照らす限はすべて同胞。
天地を掃ひ來りてわが胸にふるゝ汐風いさましきかな。
早潮の流るゝ如く萬象の裡に動くかくすしき大生命。
小さき帆のすべるがごとく大生命の導くまゝに進むわが魂。
花間より蜜を集むる蜂のごとく島より島へ走るわが船。
わが國のおほみ親らの渡らしゝ時そのまゝによする高波。
西の海南の島を経めぐりてこの土この國いやなづかしむ。

金比羅神社にて

いかめしき宮の大庭人去りて蜩の聲雨とふりしく。
知らずしてぬかつく人も心せよ此處にも動く大生命を。

應

問

規定

- 一、質問用紙は往復はがきに限ると。
- 二、質問の性質により直接返信するか又は誌上に解答す。
- 三、住所と姓名を明記すると。但誌上に發表する場合は匿名なるも差支なし。

問

友の健康の爲に祈禱する事は實に美くしい。なれど我々の祈禱によつて其友は健康を得るだらうか。友の健康ならん事は私の願である、されど祈により神を動かす、即ち一層大なる恵を得られやうか、もし得るとすれば神には矛盾はなからうか、私は神に感謝すべきであるが願ふべきでないと思ふ。靜かに神に對する時極度の神の恵を知れば願はない唯感謝のみである。神と交る度に我々は力を得其力を以て我々は我々に自身の道を開いて行くべきである。神は我々を極度に愛し玉ふ故に願をすべきでないと思ふ。これは誤なりや御教示を乞ふ。(白花)

答

「願ふ」といふ事が私慾私情の遂行を意味するならば、祈りは斷じて願ひであつてはならぬ。併しながら若し公明眞摯なる願望ならば、其は立派な祈禱たる事を得る。質問者は祈に依つて神を動かし得るとせば、有限なる人間が無限なる神を動かすといふ不合理に陥ると思ふ様であるけれども、それは質問者が形式論理に囚はれて宗教的眞理の深遠なる消息を逸した爲て無からうか。質問者に御尋ねするが、君は所謂感謝の祈禱を以て神を動かし得る者と思ふか、或は動かし得ない者と思ふか。若し後者であれば、所謂感謝なる者は、人間が全然神とは無關係に發する獨語に過ぎぬ。質問者は果して祈禱を以て單なる獨語に過ぎずと思はるゝか。若し左様であれば、質問者の意味する祈禱は一種の自己催眠であつて、何等の宗教的意義を有しない者になつて仕舞ふ。されば苟も

祈禱にして眞正ならん爲には、其内容の感謝たると願望たるとを問はず、其は何等かの意味に於て神を動かす者でなければならぬ。斯くて問題の要點は、如何なる意味に於て有限なる人間が無限なる神を動かす事を得るかといふ宗教上最も尊き眞理の 一に歸着する。成程有限が無限を動かす事は一見如何にも不可能であらう。乍併即ち人間なる者は單なる有限者で無く、又神と雖も單なる無限者では無い。有限なる人間も其眞相に於ては無限なる神性である。而して無限なる神は一面眞正なる人である。されば眞摯なる人心の要求はやがて人に内在する神性の發露で無いか。従つて斯種の祈禱が神に内在する人性を動かすは極めて當然では無いか。但し神を動かす事と友人が健康を得るといふ事とは(質問者の提出せる實例に就いて曰へば)必ずしも一致しないかも知れぬ。乍併祈禱の主旨は神人の感應其者に存するが故に、健康の得不得の如きは第二義的の問題である。(N、I、生)

問

生は四年前地方中學校を出て、爾來三年間小學校教員をして居ましたが、教育は尊き仕事と思へど自分の性格には適せず、其爲でもあるが近來健康を損じました。私の趣味は元來殖産にあります故水産又は農林の試験場又は役所に出でたいと思ひ升。其の準備となる一ヶ年位の學校はないものでせうか。

答

(芝 廿五歳の一讀者)

殖産事業又は其役所に入るには、矢張り其道の専門知識ある經驗が必要と思ひ升。夫には専門の學校に入るのが近道でせふ。一年位ですむのは一寸聞いたとがありません。水産講習所、松戸の園藝專門學校、各地の農林學校等は大概三年のやうです。中學を出た許て是等の方面に入るとすれば、普通の雜務で直接其事業に従事するといふとは少ないと思ひ升。以上の學校でも部門によりては烈しい労働でないのもある故、必ずしも頑健な體格のみを要しないと思ひます。

(A 生)

大自然の中ひた走る汽車の旅驚異を知らぬ人ぞうたてき。
朝露のかゝる茶畑桑畑ぬれて葉をつむ村の乙女等。
青き田を黄にへりとりて枯れそめし豆の葉目立つ駿河野の秋。
夏雲のかゝる峰をば仰ぎつゝ富士の裾野を辿る旅かな。
あつき日をあつき國にて過ごし來て涼風すずかぜの吹く都にぞ入る。
南國の暑さ忘れて働きぬ都は秋も苦しいふらむ。

八月十九日ゆふぐれ集鴨の家に歸る

天地あめつちの大なる家みきはめて小ちささわが屋も小ちさく思はず。
香ばしき風吹き通ひ天つ日の照す家なり靜にやすまむ。
西空に浮べる雲を數へつゝ心のどかに秋を迎えむ。
小ちささ家小ちささ窓より眺めても神秘はおなじ天地の色。
旅しえぬ人なうらみそ天つ日をめぐる地球に乗れる我等よ。
神さびし秋の啓示さとしをよそにして闘たたかひやめぬ人の子あはれ。

に於ては山高く水清き希臘の國に文明の花は咲き亂れた。希臘語 polis が city 及び state なる兩義を兼ねるが如く、其の政治は各主要なる都市の獨立自治の體裁であつた。西曆紀元前百四十六年之を征服した羅馬人は法理學の天才を以て、帝國を組織した。時に今日世に時めくケルト、チュートン、スラヴの諸民族は歐洲の平原山林に遊牧者の生活を送つてゐたのである。西曆四百七十六ワシタル族侵入して西羅馬帝國を亡したが、ペテロの遺鉢^{みはつ}を繼いだ法皇の威勢は益々揚り、中世紀歐洲文明の特色たるクリステンダムを形成した。世に所謂暗黒時代は、最近の研究によれば、決して單なる暗の世ではなかつた。此の時に當つて却つて眞面目なる訓練が行はれてゐたのであつた。其結果は空しくなかつた。ダンテ、ボツカキヨ、ペトラルカの出づるところ文藝復興の花は開き、ルイテル、カルヴァインの叫ぶところ宗教改革の實は結んだ。斯くて新教の勃興となりて羅馬教會の命令また昔日の如く行はれなくなつた。歐洲近世史上の一大特色たる國民運動は國家主義の勃興に續

いた。三十年戰爭、ナポレオン戰爭等其の根柢には法皇の權力より逃れんとする各國の努力が伏在してゐたのである。而して此の運動に於て獨逸人は常に牛耳を取つてゐた。彼等の教育、科學、軍備は驚く計りの發達をとげた。

獨逸の國家主義は今度の大戰爭を惹起した責任者である。けれども元來國家主義其の物は大に貴重なる者である。自己保存^{セルフ・プレゼザイヴエーション}の本能が個人主義となつて現はれ、次第に家庭主義、藩閥主義、國家主義に發達したのである。國家は絶対に必要缺く可からざる物である。しかし諺に曰く、過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし。獨逸國家主義の缺點は、餘りにその僭越にして獨斷的な點である。獨逸の文明が如何に立派な物にもせよ、各國民に各々異なる國民性有ることを無視して、世界を獨逸化せんとすれば、天下何れの國か之れに反抗せざらんやである。獨り獨逸のみではない、英國にもせよ、米國にもせよ、日本にもせよ、斯かる無謀の企だてをなすならば、忽ちちに世界を敵として戦はねばならないやうになるであ

自由
基督教
講壇

國家主義と國際主義の統一

内ヶ崎作三郎

國家主義か、國際主義か、此の聲は今や現代の一大問題である。近代交通機關の發達は國と國との距離を短くし、相互の關係を密接且つ複雑ならしめた。經濟的利害の衝突は直ちに戰爭の主要なる原因となり、神聖なる宗教戰爭と稱する者は全く後を斷つて了つた。見よ、ルーテルを産んだ獨逸は今や回教國たるトルコと同盟してゐるではないか。ウィクリッフを出した英國は疾に所謂異教國と見なされたる日本の爲めに名譽の孤立を拋棄したではないか。これ實に國家主義が國際主義若しくは世界主義を誘致したる一例である。戰爭は一面に於て國と國とのあさましい争闘であるが、

又他の一面に於て各種の宗教を有する各種の人種をして一致協力せしめる。頑固なる獨逸の國家主義も、いざ戰爭となれば國際的にならざるをえない。我々は悲慘極まる現時の大戰亂の裏面に人類同胞の曙光を見落してはならぬ。

さて此の國家主義は如何にして發達し來つたか。上古文明の曉に、各種族は地理的環象に従ふて、各々一部落乃至は社會を形成した。例へば今より四五千年前漢人種は西部高原より黃河の流域に移住し、先住民たる苗族を驅逐して、支那帝國の基礎を造つた、日本に於ても天孫人種は土蜘蛛と稱せられたる穴居の蠻人アイヌ等を征服して萬世一系の國を建てた。朝鮮印度の如きは種族ありて國家なしと云つてもよい有様である。次に西洋

炭坑の坑夫二十萬人は同盟罷工をやらうとしてゐる。我々から見ると如何にも舉國一致が缺けてゐるやうであるが、これには深い意味があるのである。一體英國が戦争に勝つた所が、彼等工夫には何の關係もない。これが唯今のやうな時に彼等の自棄となり不平となつて爆發するのである。獨逸ウエツセンなるクルツプ工場にも同様の暴動が起るであらうと傳へられる。獨逸が世界を征服した所が、鐵工場の工夫に何の幸福をも與へないからである。一將功成萬骨枯。國家が隆盛になつても其の思恵を受ける人は極めて少い。今朝の新聞は臺灣に於ける日本人放逐の隱謀を傳へてゐる。實に寒心すべきである。日本の國家ばかり膨張しても日本國民の生活が改良せられなければ駄目である。我々は己れを益すると同時に他人を益することを忘れてはならぬ。

尤も如何に國家主義とは云へ、絶対に孤立的の國家主義は有りえない。其と同時に絶対に沒我的の國際主義も有りえない。これは我々日本人の生活に最もよく現はれてゐる。偏狹なる國家主義を

擴大して包容的進歩的な國家主義即ち國際主義と調和し得る國家主義にまで高めなければならぬ。或る見地より觀察すればいかなる國にも二つの思潮が流れてゐる。例へば近頃に至つてやうやく戦争に加はつた伊太利に就ては是非の論がやかましい。一體此の國にて二大政治思想が有る。一つは所謂マキアベリズムなる中世紀以來の權謀術數で、他はジョセフ、マツデニーによつて代表せらるゝ人道主義である。彼の理想は國家を通じて人道主義を發揮せしめんとするにあるのであつた。而して伊太利統一を成就したるはマツデニーの大理想に加ふるに絶世の手腕を以てしたるカブール其人であつた。

同様に日本では鎖國攘夷の保守主義と開國進取の進歩主義とが陰に陽に今尚ほ相對立してゐる。新大學令に於ける文部省案對菊地案の如きも其の一例である。我々は今時勢に鑑みて菊地案の實施せられんことを望むのである。吾人の衣食住より陸海軍に至る迄國家的なると共に著しく國際的となつてゐるでないか。

らう。由來政治家の缺點は餘りに自分の國の利益のみを考へる所にある。これでは到底駄目である。最う少し他國のことも考へてやらねばならぬ。獨逸が世界を獨逸化せんとするのは空しき努力に終るであらう。何故に一步を進めて世界を人道化せんとはしないか。カントの哲學ゲーテの詩、ヘーゲルの形而上學を世界に普及せしめんとする、甚だ可。其にしては何も世界を征服するを要しないのである。世界は平和の中に在つて、「純正理性批判」や、「悲劇ファウスト」や、「宗教哲學」等の名著を讀むであらう。何を苦しんでか戦はん。それを野心ある軍人政治家が、みだりに世界を統御する獨逸の使命なる物を説いて、遂に事ここに至らしめたのは憎むべきである、然し乍ら斯かる幼稚な思想は英、露、佛、到る處の國にある。唯獨逸にありてこれが最もよくその表面に現はれただけである。

二

斯様に見來れば戦争には多くの原因あれども國

家的利己心がその一つであることは疑ひをいれない。民族の競争などは美名のみ。世の識者は今度の戦争を以て世界最後の戦争たらしめたいと云つてゐるが、此の國民的利己心が有る中は、戦争は永久に止まないであらう。戦争が悪いと云ふことは今日誰れでも知つてゐる。其の證據には、一度出征した人は最う戦争をやりたいくない日露戦争後に軍人にして宗教的信仰を求めた人々が甚だ多かつたのは、これが爲めである。歐洲でも政治家や新聞記者などを勝手なことを云つてゐるが、當の兵卒は唯もう止むをえずに戦つてゐるのである。近頃或る雑誌に出征中の獨逸の一學生の書簡が公けにせられた。彼は云ふ、戦争はつまらない物だ、戦場では皆な夢中になつてゐるから誰でも勇敢になれるので、實は平時日常の生活に有らゆる誘惑に抵抗する勇氣には及ぶべくもないと。日本では日露戦争に勝つてから、國民は虚榮に流れ、軍人の犯罪者が夥しく増加し、かくて國民道德の頹廢を來したこと少なからざるものがある。英國は今や存亡の秋であるにも拘はらず、ウエールス

者は皆理想家であつた。彼等は其の時代に容れられなかつた。けれども彼等の理想は明治維新となつて實現せられた。基督も佛陀も大なる理想家であつた。而して彼等の人類に對する感化は理想家の最後の勝利を語つてゐる。我々はあく迄も國際的國家主義、人道的世界的帝國主義を望んで止まない者である。

斯くして悲慘なる大戰亂の裏にも一道の光明を認め、狹隘なる國家主義を棄て、此偉大なる國際的國家主義を取り、進んで戰爭の豫防、平和の維持に努めねばならぬ老人は自分で此の運動に加はることが出来ないならば、子孫の中より必ず偉大なる人物を出すやうに祈るべきである。祈禱と熱誠とは信仰生活の勝利となつてあらはれ、子孫より大人物を出すであらう。私は此の前「空前の機會」なる説教を試みた。何故の空前の機會。現代の日本人は實に世界的懸案を解決すべき運命を以て生れて來たからである。これが爲めに我々は宗教生活に入つて己れの人格を高くし、健康を進め、信念を強くし、感情を清くして、此の大任に

耐へるだけの身體と精神とを養はねばならぬ。

(七月十八日統一教會の説教梗概筆記)

科學と文藝

今度加藤一夫君編輯の下に標題の様な雑誌が現はれ
本月創刊號を出した。文壇新進の作者評論家を網羅す
ると共に、日進の科學的知識を普及せんとするのが特
色で、又新進藝術家の作品をも常に誌上で發表する由
なれば、一しほ販やかに誌面を飾るだらふと思ふ、健
全なる發達を祈る。

三

扱てひるがへつて思ふに、國家主義も國際主義も共に其の中心點を失つてはならない。自らを知つて他を知らざるは不可である。我々よく此の事を察しないと、朝鮮又は臺灣との間に或ひは不幸なる結果を見るかも知れぬ。我々の理想を云へば、眞の愛國は眞の人道主義であり、反對に、眞の國際主義が眞の國家主義であることである斯う云へば人は思想主義では駄目だと云ふであらう。けれども理想家と實際家とは共に必要である。唯兩者の調和を見出すことは頗る困難である。獨逸の國家主義の思ふやうに成功しないのも此の點にある。社會主義は何故にもつと發展しないか。勞働者のことばかり考へて資本家の利害をかへり見ないからである。幡隨院長兵衛の義俠は稱するに足るが、一步進んで町人に對する同情と共に旗本武士に對しても多少の親切を以てしたならば更に一段と男があがつたことであつたらう。

基督教は民主主義であるか、或る人はこれ即ち

基督教の一大缺點であると云ふ。基督教徒の下女や學生を雇ふと實に困る。彼等は人は皆平等であると云ふつもりで、頭が高い。こう云ふ批難を度々聞くのであるが、こんなことでは駄目だ。更に修養して差別即平等、平等即差別と云ふ所まで到らなければならぬ。基督教は決して無政府主義ではない。カイゼルの物はカイゼルに納めよと云ふ所に基督の國家主義がある。神の前に立つて萬人皆平等なりと云ふ所に基督の民主主義がある。我は王なりと答へる所に基督の貴族主義がある。エルザレムの殿堂より商賣人等を追ひ出す所に、基督の剛健なる武士的態度があるのである。基督に學ぶ者宜しく斯くの如く屈伸自在にならなければならぬ。何となれば生命は千變萬化して一刻も滯らないからである。國家主義即世界主義、世界主義即國家主義、斯くの如き偉大なる理想を以て日本を指導するのは、吾人の使命である。

再び云ふ人は理想家を笑ふであらう。しかし乍ら日本開國の時に當り、高野長英、林子平、渡邊華山、吉田松蔭、佐久間象山、横井小楠等の先覺

き、議會が成立して、國民的意思を發表するの手段が與へられたその瞬間から、此の統一は夢のやうに消え始めたのである。

黨派の分裂、之に伴ふ混亂といふものが、かの西部歐羅巴に於けると同じ力と、同じ苦痛とを以て現はれた露西亞に於ても亦『國民の統一はこれは何處に求む可きや、一般的に吾人の國民生活の、人間生活の、嚮動的動機は何處にあるであらうか』といふ問題は解き明かし難い問題であつた。

時は來た、吾々は遂に歴史上稀に見る時期に出逢つたのだ。今こそ生活そのものが、かうした問題に解答を與へるやうに見える。現今は國民生活は人間生活の理想的意義が極めて明確に現はれてゐる時で、同時に全歴史の中心動機の統一が、異常に明らかに現はれてゐる時である。國民的危険の時機に於てのみ、國民統一の感情が洞察と元氣の斯くの如き度合に達し得るのであるから、今、吾人は他の時代においてとは窺ひ知られぬ深い感情を以て、吾々の生活の一般的意義に目覺めねばならない。速やかに現在の精神狀態にサブリミティ

の如何なる要素があるかを記憶せねばならぬ。これらの印象も忘れることは、吾人に精神的普遍性を齎らす可き崇高なる原理を否認する意味となるのである。

這回歐洲の大戦によりて、生活の強味は、驚かす程に増進した。此の戦争の重なる結果は一般生活のエナジーなり活動の力なりを倍加した。

生活の斯の如き一般的増進は、善惡何れの方面にも顯はれる。かゝる時に吾人は今迄眠つてゐた道德の力の覺醒と向上とを見るのである。突然、吾人は歐洲の文化といふものが、人間獸性の殘忍な慾望の薄い覆ひであつたことを知る。人間の獸性は遺憾なく曝露せられ、文明の力も尙これを磨き上げてはゐないことを知る、併し又之と同時に長い平時の幸福な生活によつて、眠らされてゐた慈善の力が此の瞬間に復興するのを見るのである。

現今は人間生活の有らゆる矛盾が極端に走る時代である。そこには天國と地獄との血戦が行はれてゐる。一方常規を逸した憎しみの力は反對に愛の異常な力を喚び起すのである。異例の勇敢なる

海外思潮

大戦亂中の精神的統一

ユウゲネ・トロイベツチコイ

本誌が切間際になつて、ヒツバード・チャールナルの最近號が到着した。とりあへず *Unity under the present discord* と題する巻頭論文を紹介して置く。ト氏は曾てモスカウ大學の教授たりし人である。

一

事件が未だ究極に達しない前に、その事件の內面的意義を探索することは、大膽な早計な企である。併し現在の危機の特殊な事情によつて生じた特殊な精神的現象——精神の向上——は此の戦争が一旦終熄するや再び見ることの能きないものである。日毎の生活が舊態に復すると、人々の注意を再び日常些末の出來事の上に吸収せられて、遂には人間生活の、此の大なる歴史的全體を認めないやうになる。生活の意義の特殊の啓示を消え去つて、單なる出來事の紛糾せる渾沌の中に其の姿

を没してしまふのである』此の故に事件の究極に達してゐない現在に於て、此の問題を研究せねばならない。

前世紀の終りに近い一日『それなら現代社會的生活、政治的生活の嚮導的な動機は何處にあるのであらうか』と伊太利の政治家等が悲しげに語り合つてゐたのは、平和の時代に於ける現代全歐洲の代表的な會話といへる。當時伊太利にも其の他の國々にも、此の間に對する答は現はれて居なかつた。啻に政治上のみでなく、精神生活のあらゆる方面に於てもまた、同様な渾沌、同様な根深い割壁に出逢はねばならなかつた。人々を同一の針路に結び付けることの能き歸一的な精神は、世界を通じて缺けてゐることが感じられてゐた。何れの國に於ても、國民は黨派によつて、人道は國民によつて、抹消されてゐた。歴史が向つて流れる目標に關する問題は、何處に於ても等しく解き明されぬものになつてゐた。唯露西亞だけ例外的やうに思はれてゐたのは、露西亞の政治的生活に全く自由が缺けてゐたからであつた。一度新らし

常に至上の犠牲を覺悟してゐるのは此の故である。それは愛人を他に誇らうとする人は、其の愛人の不名譽よりも寧ろ死を願ふであらうから。

これらの二の感情——個人の愛と國の愛と——を結び付くる生きた紐が其處から生ずるのである。殊に、意思の活力がその精力を倍加する戦時にあつては此の二の愛情は相互に相接觸して相互を勢づけて行く。

本國を思ふ感じが強くなつて、單に自分一個ばかりでなく、自分よりも遙かに貴いもの——自分の愛する凡てのもの——をも犠牲にするようになつてゐるときは、その感情の力は非常なものであるに相違ない。義勇兵になるとか、特志で看護婦をするといつたやうな日常目にふれる私生活の動機を、かゝる感情が働いて、それが個人的の失望満足、幸不幸を超越した國民生活の單一な動機に支配されて、一の全體となるのである。

かくして國民的統一の意識は、戦時に於ては著しく發達する。小國にとりては獨立の爲に、大國にありてはその地位の爲に、人々は働いてゐる。

乃で個人に於けると同様に國民に於ても *To be or not to be* が問題になる。そしてこれが問題となるときは、今脅やかされてゐるその値が貴ければ貴いほど、それによつて動かされる情愛また熱を加へるのである。

こゝに又見逃がしてはならぬ一事がある。それは死と破壊の力に對して闘はねばならぬ必要の生じたとき、即刻反動的に起る活力の表明であるこの事實は現今行はれてゐる戦争の當初には殆ど奇蹟の如き高潮に達した。

當時にあつては、人々の精神に偉大な革命が起つた、黨派の争は急に止まつた、最早分裂もなければ不一致もない、各國ともに國民の統一といふことが再興せられ、確立せられた。平時失はれてゐる人生の嚮導的動機が、戦時に現はれたのである。各國民は皆、意思の單一なる觀念、單一なる行動の下にある統一を得んとしてその力を集中する。

カウロガ市に於ける實例を舉げて此の奇蹟を證明しやう。一日豫告なしに二千七百の負傷兵が一時に此の市に着いた。市は給養の材料に窮して二日間といふものは非常な混亂であつた。けれども人類集團の本能のやうに見える運動——奇蹟——

行爲も、今日ではそれが毎日の出来事とかはつてゐる。斯かる時機には抑も何が生れるのであるか。

かゝる時期に於て、人間の情感は擴がつてゆくそれは深玄な革命が化成したものともしへる。人道の新しい典型が現はれる、從來奥深く秘められてゐた自分の情感の、内的豊富を他人の窺知するに任ずるときは、人はより深い尊敬と、より活潑に發動する感情とを以て、その隣人を動かすのである。世界を侵してゐる憎しみの心の反動として、愛の心が働いてゐる。愛が色々な形になつて、他の時代には見られぬ程に輝やかしく、且つよく燃ゆるのは全くかゝる理由に基くのである。

かうした光景の中で、最も人の心を動かすものは、今や戦場に向はんとしてゐる夫や、息子や、兄弟の傍らに立つてゐる婦人のそれである。

列車や汽船が動き出すときに、兵士等が話し合つてゐるのがきこへる、「何故女達は泣くのであらう、俺達の眼には涙も出ないのに？」それは吾々の悲しみが、女達の悲しみより少ないからではない、唯吾々の心が丈夫に出来てゐるからなのである。

獨逸の一小女が戦地なるその愛人に

この殘忍なカイセルは、私たちの僅かな幸の片鱗を、何に使うのでせう、私たちにはほんとに貴いその幸福の僅かな片鱗を。

といひながらも、尙光榮と勝利とを擔つて歸つて呉れるようにと書きこへることを忘れなかつ

た。愛と憐の情とが高調に達すると、自分の愛する者の生命を奪はんとする無慈悲な權力に對して、反抗の聲を擧げるものであるが、然もその熱情の中に、より高いあるものを憶がる心があつて、反抗の精神を沈黙せしめずには置かない。一方愛人の安全を熱望しながらに、他方にその愛人が勝利の桂冠を戴いて凱旋するのを夢みるといふのは、眞實にして切實なる愛には避く可からざる矛盾であつて、これぞ人の屢々經驗する謂ふ所の愛の苦悶である。

併し愛の此の熱情は同時にまた、人生にはその個人的利害を超越した満足のあることを、及其處には、より高尚な意義があつて、人間の存在に一つの目的を與て、その存在を絶對の價値を以て装ふものは其の高尚な意義のみである事を證明する。

單に愛人を目の前に見る丈で愛を満足させられない、彼を尊敬せねばならない、愛の對象は愛の執著の言ひ譯にならねばならない。個人の存在といふものは、最早やそれが大きな全體の爲に役立たなくなると全く空虚な無意味なものになる。愛が

吾々は今や、吾々の文化の眞の目標は何であるかを知らねばならない。人道は再び古の神殿に歸るであらうか、それとも純物質的な文化の高潮の中に、巻き込まれることになつてゐるであらうか。二つの相反する傾向の、何れが究極の勝利を得るであらうか。

此の度の戦争は遂に此問題に的確なる解答を齎らしつゝあるのである。一國民にその中心特色を與ふるものは、單なる富の獲得ではなく、その富を評價し、使用する方法にある而して自今此の點に關する一大變化を認め得ないのであるか。吾々は人間の情感が、單なる安慰、單なる物質的快樂にその情感を結び付けてゐる鐵環を、破りつゝあるのを認めはしないか。單なる肉體的安佚に對する大なる賤しみが日夜勃興しつゝあるを見はしないか。世界に火を放つて居るある宇宙的破壊の此の遊宴——それは吾々をして、今燃かれつゝある富と、富自身の廢滅の具を完成した物質文明とを共に適當に評價し得しむるではないか。

若し此の分離が人の情感の中に實際起りつゝあるならば、こゝに吾々は古代神殿への復歸を始めてゐるのではないか。……もし吾々が、祖先を理解し始め、特に彼等は吾々と共にあるのであることを感じ始めてゐるならば、それは彼等の精神が吾々自身の中に生き甦つて來たからこそ然るのである。熄滅したと見た火は、再び燃された。彼等の聖堂は再び吾々のものとなる

つたのである。

無數の犠牲を得て尙飽くなき死と、對立したのて、吾々が富に置いてゐた値が、全然變つてしまつた。生命を冒して働らく人々には富は無益なものである。そして、その近親や愛人を失つた人々とが、それを失ふことを豫期してゐる人々は何の爲に、誰の爲に、吾々は自分達の富を守り、それを増さうと働くのであるかと自問するのである。

大なる世界的運動が、人間にかゝる思想を課する時は、存在の手段を探索することはその人の唯一の先入見ではなくなる。一度精神の生活が動き始むるや、富は吾人の存在の高き聖なる目的に奉仕す可く運命づけられたる器としての第二流の役割に歸るのである。かゝる状態の下にありて、近代人が精神的に、古代神殿に接近し始めて居ることは驚ろくに足らない。かくて相互から相近いて、各時代の人々は世紀を距てゝ手を連らね、時間の連續した一の國民を形成するのである。人々をしてその世俗的な富を共通の目的の爲に犠牲にせしむるに至らしめた神聖は愛のいぶきに動かされて、國民は再び生れた。今や、その古にありし如く。吾々は國民の上に高く、天使の翼の絶えざるはゞたきを聴くのである。露西亞で左様である、此の大なる運動に加はつてゐる有らゆる國民に於て左様である。雄々しき精神の急速なる勃興の中に、吾々は古き英國、古き佛蘭西、古き露

によつて二日目の終りには、患者は豊かな給養にくつろいでゐた、誰ともなく食物を持つて來た、誰れとなく病者を看護した。同じやうな形と、同じやうな奇蹟とを生みつゝ、露國到るところに、かゝる運動が必要に應じて行はれたのである。併し露國の內的統一の現はれるのは、かゝる時機に於てのみである。

二

人間の共同一致が、かく復興するのは、戰軍の代表的狀態である。また現在の如く歴史上重要な時機にあつては、過去と現在とが甚だしく接近する。乃で其の過去が、吾人の情感には極めて貴いものになる。それは吾人の文化の傳統とか、祖先よりの傳承物が、戰爭によつて脅かされて居るときに、過去は古代の光榮を吾人に現示するからである。過去といふものを伴つてゐる此の鏈環によつて、吾人は一の國民になるのである。それを自覺することは、吾人の祖先が吾々と共にあることを感ずることである。何となれば、吾々の國は、確かに「吾々の祖先の地である」からである。

國民の此の再生によつて、過去と現在との間の鏈環が明らかに意識される。かゝる力によつて現代人はその過去の時代の人々と共に、自分等が一の歴史的全體を形成して居ることを自覺する。斯かる變化は、國民的文化の記念物から新たに呼び覺められた感情の中に見ることが能はる。

吾々は美しい加特力寺院を、過去の貴い記念物として尊敬してゐる。併し今迄は只美的な冷やかな尊敬であつた。それを感賞するに拘らず、祖先の建てた古代寺院は、吾々には見られぬ、十分には理解し難いものゝやうに見えた。彼等は最早や廢たれた文化や思想を、最早や吾々を刺戟しない情操を、物語つたに過ぎない。……併し乍ら今は恰も數百年の間死んでゐたものが、新たに生かへつたやうに見えるではないか。……ウエストミンスター寺院は、今ほど英國國民の情感に貴く思はれてゐることはあるまい。それはこれらの記念物が砲火やツエツペリンに威脅されてゐるからではない、唯これらの建築物に具體化されてゐて、現代人と過去とを結び付けてゐる關係の中に、一の內的變化が生じたからである。

そして現代生活と古い宗教的傳説との間にある孔隙を更に深むるものは、これを一言に云へば吾々の實際的唯物主義であつて、それには淺薄なる合理主義が理論的に附隨してゐるのである。

のである。これぞ人間の精神が高潮に達すれば是非なく到達せねばならぬ目的なのである。

これに關聯して何人も想ひ起すことは、英軍の塹壕の中で行はれたクリスマスの祝會に、その歌聲を聴いた獨軍の兵士達が、出かけて行つてお互に握手したといふ事實である。

憎みと不調和の領域なる戰場に起つた此の統一と普遍的共同一致の天啓を、殆ど人間の理解を越えたものゝやうに見える。然も此の『奇蹟』を到るところに繰返へされてゐる。吾々は其處に人間理智の表面的な論理よりも遙かに深刻な、精神生活の論理の一例を見るのである。

此の精神を地理的、人種的の制限を知らない。これを燃やす刺戟は、人工の關門、城塞によつて防げられるものではない。戦争の眞の中心から、死の破壊的力に對する生活の偉大な抗議が發出するのである。

併し生活がそれ自身を固守するときは常に生きた統一の再興を目的とする。此統一が戦争によつて脅やかさるればさるゝ程、此の精神力は、人類の保全を再現しようとする努力に於て益々力強くこれに應へてゆく、かくて吾々は人類の普遍的共同一致といふ者が、平時には見られぬ程に戰時に

満潮に達するのを知るのである。

茲に吾々は、現時の生活に驚くべき事實あることを知る。戦争は物質界に於ける利益の衝突から來たものである。此の利益を固守する結果、相互に排他的權勢を主張すれば、從つて戦争の肯定となり、相互の理解をして全く不可能に終らしむるのである。

併し人間が急にこれらの情欲の到達し得ぬ點に達するのは、此の排他的愛國主義、及びその特長に附隨する憎惡の念の高調に達した時に於てするのである。戰場に於てこそ戰士は敵も尙友の如き生物のより高き王國を窺ひ知るのである。これは實に精神の勝利であつて、一撃の下に、國民の間に憎惡の呼吸を送つた有限の理想を打破したのである。そして「死」がその生國を建つるを常とする其の地點に於て、二つの敵對する軍隊が、共に、死に打勝つた力に對して讃歌を捧ぐるのを聴くのである。

人類のこの新らしき諸感情の中に戦争の精神的意義の最も明らかな、又恐らく最も深刻な天啓を有するのである。予はこれに附隨して來る可き政治的結果を無視する者ではないが、然も吾人の眼前に横つてゐる、この靈の目醒めの、無限に偉大なるを思ふのである。

西亞が同時に生れたのを見るのである。

かゝる國民的情操の勃發が、如何に各國民を導いて自己の文化の深められた興味を覺えしむるやうにしたかは、容易に解されることである。吾々は今祖國の風物に對して、吾々の國歌に對して、吾々の古い習俗に對して——國民のセルフの面影を宿す凡てのものに對して、從來より強い感情を持つては居ないか。凡てのものが、從來よりも豊なる、吾々を今迄になく、これらの各個の特色の無限の値を深く理解する。かゝる時機にありては、吾々の同胞に對する感情は、親友が戰に臨むに際してわれらに與へる感情と全然同じとなるのである。茲にも亦二つの相反する憧憬の争を見るのである——吾々の愛する人の保全を願ひ、祖國の安全を願ふ心と、祖國が、最も危険な功業によつてのみ得られる光の桂冠に輝やいてゐるを見たといふ願ひと。此の二つの憧れは、實に兩立し難く見えるのであるが、併し、人道の最深の神秘の一は、此の瞬時に明らかになるといふ調和を得てゐるのである。それが人間魂の本性である！吾人が、

個性の此の要素の比類なき價值を意識すればするほど、宇宙的な原則を以て各個性を結合したるその鍵環を掴むことが深くなるのである。若しヘルクレスやジグフリードの生きた個性から、國民的英雄としての普遍的な特長を彼等に與へてゐる凡ての特色を奪つたなら、何があとに残るだらうか。國のない人間は、色のない個性であるだらう。

同様のことが國民の特質に於ても言はれるのである。此の場合も亦その満足と價值とを一の宇宙的な原理から得るのであつて、その原理は凡ての國民の上に立ち、人道の全體の中にこれらの國民を統一するものである。如何なる國民的藝術品を研究しても、やはり同一の結論に達する。

コログ子の加特力寺院を見ても、露西亞教會やホオマアのイリアッド、ゲエテのファウストを見ても、これらの作品の源泉に一の宇宙的な人類の動機を發見する。……そして歸するところ國民性といふものは一本の樹の枝のやうなものになる。此の事實によつて、國民性の意識が深刻になつてくると、排他的な狹義の愛國主義に對する傾向を少くも示さぬものであつて、却つて宇宙的共同一致の考を刺戟する役目を有して居ることを知る

西南旅行

内ヶ崎 生

七月二十八日

夜十時東京驛を發し、二十九日正午三宮驛に着大宮森田二君に迎えらる。此夜八時より神戸教會には米澤牧師司會の下に國家主義と國際主義の統一について約二時間演説す。聴衆約二百名。村松吉太郎、原田二郎の諸君健在。午後十一時大宮彌兵衛、木村禎橘、水野和一、陶山三郎諸氏の見送りを受けて西行す。

三十日

朝七時半廣島驛着、仙田重邦氏に迎へられ、同氏の厚意にて驛前の長澤支店に投ず。十時頃仙田氏に導かれて淺野侯の泉邸を見る、また饒津公園の大觀樓に至り、眞に自然の大觀を展望し、晝食を饗せられゆふ方歸宿七時半仙田氏の長たる住友銀行支店の樓上にて店員數十名の諸君に對して講演す。十一時五十分仙田氏に見送られて出發。當日は明治天皇祭にて休日なりしたため終日仙田氏に案内せられたり。深く先帝を徳とす。

三十一日

朝六時關門海峡を横切る。旅店に入りて休憩、今村氏來訪、自由基督教會について談ず。九州管理局に局長長尾半平氏を訪問。午前十一時折尾驛着、佐藤郡祿學、小野郡書記池田教諭、古野周藏君等に迎えらる。小野氏の案内にて直ちに電車にて屋崎町の櫻屋旅館に至る。古野君と快談。午後當町小學校長大谷木遠吉氏來訪、同氏には同地滞在中色々厚配を得たり。櫻屋旅館は慶應元年五卿大宰府に落ちし時宿せられし處、余は現にその歴史

的の二室を占領す。夜田吹教諭來訪。

八月一日

朝八時電車にて折尾に至り、初めて會場なる東筑中學に至る。これより七日まで毎朝九時より十二時迄倫理を講ず。通じて廿一時間。倫理と稱すれども、人生の根本問題、勞働、娛樂、愛、信念を論じたるもの。講習會は遠賀郡教育會の主催にして出席者は男女教員諸氏約三百名、頗る手答へある講習會なり。余は早稻田大學校外教育部を代表して講師たるなり。

二日

夜八時崎町の古野君の家に客となり父君や弟妹と會す。大に健談。

在宿の時は多くは客來。然らざれば福岡縣の地理歴史を研究す。又講義の準備をも試む。八月四日午後講堂にて引き続き遠賀郡會の總會あり。浮田博士若松市より來られて青年の修養に就いて有益なる講話あり、余は福岡縣の社會問題について語る。同夜黑崎町淨土宗淨蓮寺にて同町青年會講演會あり、一時間程演説す。午後の聴衆は二百名、夜のそれは百五十名。

五日

午後門司管理局の森君に迎えられて電車にて門司に至り、門司俱樂部にて百五十名の鐵道從業員諸氏のために講話す。長尾局長も臨まる。夜古野仙藏君來訪、周藏君の令弟なり。周藏君病んで久留米に入院す。一日も早く快癒せんことを祈る。

六日

午後若松市に開かれたる早稻田大學講演會に臨む。辯士は浮田鹽澤兩博士と余との三人。聴衆二百名。夜早大校友會ありて出席。幹事田中唯一郎氏急に東上す。余も亦小倉まで同行電車にて黑崎に歸る。

七日

正午いよいよ講習會を終る。余はなる丈實生活に接觸

新らしい世界が近づいた。今迄見えなかつた精神力が、吾々の眞中に現はれてゐる。世界は砲火に焼かれ、血にまみれてゐるのに、見よ、盲者は見、聾者は聴き始めてゐる。言はゞ宇宙の暴風雨から、電光の閃きが來たとも云へる。それはその瞬間的な幻影に早く吾々の記憶を結び付けよと注意する。何となれば、光は直ちに消え失せて、白日の光の中に完全に滅絶するからである。

此の暴風雨の後には、また單調な平和の日が來るであらう。其の時吾々は無意味な生活に苦しめられる相違ない。けれども絶望はすまい！寧ろ來る可き人道の此の美しい幻影——かつて見たことのある——を想ひ起したい。分裂と動亂の光景に對しては、世俗的な利害より以上を高翔するところに、國民の統一はあるといふこの記憶を對抗せしめたい。競争と美望とが再び黒雲を起したときには、曾て世界の暴風雨が、その偉大な雷鳴に、有らゆる人類の統一を傳へたことを懷ひたい。

編輯室より

□ 本月は誌友諸氏の寄稿多く、頁の都合で残念ながら次號に廻したのが數篇あります。諸氏に深く感謝すると共に其寛宥を願ひます。

□ 例に依り同人の消息を申上ぐれば、内ヶ崎氏は先月十九日歸京、廿七日郷里に向はれ本月十日までに上京の筈。

□ 三並氏は上諏訪に轉地療養中の所大に健康を恢復され、月末に歸京された。

□ 小川東助氏は目下横濱根岸療養院にて靜養中、餘程快方に向はれた。

□ 歸朝中なりし今岡氏は先月廿五日横濱出帆阿波丸で再び渡米された。

□ 野村氏のかねて仙臺聯隊に入營中の所先月末無事除隊歸郷された。

□ 古田氏は三伏の炎暑と戦ひつゝ、讀書と研究に没頭されて居る

□ 岡田氏は青年會の夏季學校に出席、進歩の先鋒として大に頑迷な連中と論戰された、氏が二日目の總會席上に於ける演説は開校中切つての講演で大なる感動を青年に與へた由。委しい記事は別項古田氏の投書に明かであります。

□ 八月四日岡田氏方にて今岡氏の歡迎會をかね談話會を開いた會者九名岸本内藤石田氏等珍しい顔も見え、夜遅くまで談し合つた。

□ 相原氏も健在、此夏は旅行をしなかつた。

□ 本誌原稿は毎月十五日限東京市外巢鴨一四七〇相原方宛御送附を願ひます。

十五日 朝組合教會にて禮拜説教す。ゆふ方城山に登る。河野。

高野、氏外數氏同行。宇和島藩祖秀宗公は伊達政宗の庶長子にして、いはゞ仙臺の分藩なり。感殊に深し。夜八時教會にて人生の根本問題について語る。最後の講演なれば二時間に亘る。聴衆二百五十。

十六日 朝河野氏に案内せられ、先づ中平氏の醬油醸造所を見る。又都部筑氏も加はりて宇和津神社背部の公園に上りて瞰望す。直ちに山頼和靈神社に至り、その御籠堂にて涼風のうちに都部筑氏の好意にて有志家十數名と會食す。和靈神社に祀られたる忠臣山家清兵衛は仙臺の人、今や四國にありては金比羅山に次いで參詣人多き神社となる。歸途巴寫眞館にて紀念撮影。午後六時第十三宇和島丸にて出帆、中平三好、河野、巴諸氏見送らる。宇和島の組合教會には少壯なる實業家あり、又醫師も多し、河野令吉氏健康意の如くならずといはるゝが牧會のために全力を盡さる進歩期して待つべし。又宇和島の諸友は余を待つに仙臺の親戚を以てせられたる大に謝せざるをえず、阿部君は八幡灣にて下船。

■戲曲郵便局

タゴール來朝中止の報ある時後れ馳せにこの青年作家の譚譯を紹介するは責めてもの慰みである。譯文は甚だ自由である。譯者の大成を祈る。(三〇、)

■暗室の王

タゴール作、磯部泰治譯、新潮社發行
暗室の王の譯も筆も十分にのびてゐる。中々の才筆である。その標本として左の歌をかゝく。

菊地哲春氏及び山口郡長代理に見送らる。

十七日 朝長濱に入る。今治を経て午後四時多度津に入る。瀬戸内海の航行此度を以て始めとす眞に快也。午後六時琴平驛着一氣呵成長く高い石壇を登り社前に詣て、京阪より停車場に出づこの間僅かに一時二十分。金比羅山は善光寺や成田山の如く俗化せず、依然として高橋に出て、宇野への聯絡船に乗り、これより岡山に着、夜深ければ星島二郎君の父君を訪ること能はざるを遺憾とす。

十八日 朝大阪着、高木貞衛氏に電話すれば高野山に行けりとの事、半入町に宮川經輝氏を訪へば諏訪の森に避暑せらるゝとの事難波停車場より電車にて飛ぶ。宮川氏と會談二時間、名物の水蜜桃一籠頂戴して又電車の人となる。四時大阪驛を發五時七條停車場に入り、更に花園驛に至り、親戚野々村氏を訪問、八時車にて室町に至り、原田同志社長を訪問す。午後十一時京都を發して十九日午後一時歸宅す。

この春の夜こそわが悲しみはいとわれに快よし、わが苦しみはわが愛の合奏を叩いて靜かに歌ふ、
幻影わが悲哀の眼より生れて月光の空に飛ぶ、林地の深き底より起る薫りはわが夢のうちにその道を失ふ、
言葉はわが耳に來りて私語けども、その何處より來りしかを知らず、

わが陳環の鈴はわが心の感ぜし時震ひ鳴るなり。附録として「郵便局」の譯あり。(六〇、)

して講義しぬ。又出來得る丈面白く講義しぬ。余は非常なる満足と善き印象をえて折尾を引き上ぐるを喜ぶ。内ヶ崎良平君臺灣に歸任する途すがら、門司より來訪。午後四時黑崎驛を發す。佐藤、小野、大谷木宇都宮の四氏見送らる。福岡縣は東京、名古屋、大阪と相並びて日本に於ける物質文明の四大中心の一なり。余は多くの教訓を齎して歸るを喜ぶ。

午後六時小倉驛出發、今村氏見送らる。薄暮中津を過ぎて福澤先生の郷里に敬意を表す。午後九時別府着、佳吉祭として、全町狂するが如し。辛うじて海岸の一旅館に入る。海上のイルミチーシヨン美なれども俗なり。一浴するや内ヶ崎敬一郎君兄弟の來訪を受く、眞に奇遇也。十二時船に乗る。十四時和島丸なり。別府町の燈光波にゆらいで花の如し。午前六時船佐賀の關に着く。午前八時佐田岬を左に見る。山嶺迄島なり。午前十時伊豫國西宇和郡八幡濱に入る。菅野視學、古谷郡書記、新谷小學校長、土居商業學校長その他諸氏に迎へらる。惠美須堂旅館に入る。午後早大學生菊地哲春氏來訪。夕食後散步すれば偶然組合教會講義所の前に出づ、着流しなれば内に入るを遠慮して街頭にて讚美歌を聞く。

九日 午前七時商業學校の講堂に趣いて西宇和郡教育部會講習會に出席して東西文明史論十五時間の中三講をなす。余の資格は遠賀郡教育會に於けると同じ。男女講習生百数十名、極めて熱心なり。午後阿部利藤治氏來訪、メソヂスト教會にて同婦人會のため、同氏の組合教會講義所にては進歩的基督教の講演會を開くこ

とを約す。又谷ドクトルの訪問を受く。谷氏は三並、向氏等の友なり。

十日 夕教育會の有志余等講師のために慰勞の宴を港外船中に開く。町長理學士菊池清治氏は物理を講し、外に體操の講師なり。

十一日 午後小學校男女部同窓會のために講演、約百五十名十二日午後同女子部同窓會のために講演、約二百名。十二日夜組合教會講義所の講演會に臨む。階上滿員、數十名の聴衆は階下の街上に於て靜聽したり。聴衆約二百。十三日、講習會修了。午後川石町に渡り、公會堂にて通俗講演會開かる。聴衆百五十名。歸路は山口郡長と共に人車による。夜八時メソヂスト教會婦人會に出演、聴衆百五十名。當町の上流社會の婦人を網羅したり、恐くは八幡濱空前の事件なりと。十四日午後二時小學校に於て通俗講演會あり、聴衆百五十名。

八幡濱は明治時代に勃興したる時に於て、町長は甚だ勤勉、宇和海岸に於ける小なる大阪を以て任ず。町長には名望家にして少壯富豪なる理學士菊池清治氏あり、郡長には早大出身の少壯行政官山口尙章氏あり、將來の進歩大に見るべきものあり。余は多少の親しみを覺えて同地を引き上ぐ。同町の進歩と發達とを祈る。同町に禪宗の老僧西山禾山師あれども調する機なかりき。

午後四時山口郡長、菅視學高橋牧師その他諸氏に見送られて第十二宇和島丸に乗る。阿部利藤治氏同行。午後八時半宇和島に着、中平、高野兩氏迎へらる。宇和島町島やに投ず。直ちに組合教會にゆき河野令吉氏に會し、又婦人會のために講演す。

餘りに劃一主義と形式主義とに束縛せられて清新にして潑刺たる生命を見ることが出来ぬ。されば興國の日本、否世界空前の大戦亂に参加したる我國の青年は意氣甚だ振はず、酒色に耽けるもの少きにあらす。されば制度の改革は精神の改革に續かれなければならぬ。劃一主義は學制改革案の斷行によつて破るを得んも、形式主義は新生命と新人生觀によつてのみ破ることを得んのみ。

千八百十年ナポレオンの馬蹄に蹂躪せられたる普露西はその再興を企て、その基礎として柏林大學を創設した。科學者フンボルトは文部大臣に任ぜられ、眞理のために一切を犠牲とするを辭せざる大哲フイヒテ擧げられて柏林大學の總長となつた。近代獨逸の勃興は一百年前の文政の改革に負ふ所が少くない。

今や大正維新に際し、我國の文政大に振はざるべからざる時に當りて、高田文相の就任を見る。文相の椅子は内閣に於て最も重きを爲すべくして久しく件食の觀ありしは實に惜しむべしである。文政を振興して天下人心を一新する時機は迫る。吾人は高田文相の新任を祝すると共に多年早稻田大學經營難のために損ぜられたる健康を回復し、天下の輿望に負かずして勇進敢行せられんことを希望する (S, U)

法の力を要す

身は立法府の高官たり。而して妾をして待合を業とせしむ。粹翰長の名一世に轟いて、本人自ら之を得意とした。かゝる人は才と腕とはあらむされど徳と信とは見出すことが出来ない。その俸給と收入とに限りあり。而して十八年間の豪遊を繼續したりとは

その財源いづれにありや。今や良心の力極めて薄弱たゞ法律の制裁を要す。蓋し世には名譽と體面とを失ふを恐れざるも體罰と監獄とを畏るゝ徒がある。かゝる鐵面皮者流に對しては法律を以て臨むを第一策とする。目下瀆職事件に連座する政治家のみ腐敗したりと吾人は言はず、世人も亦しかく信ぜず、しかも彼等は當然の犠牲として此耻辱を蒙る。たゞ餘生を淨め、新生活に入りてその罪惡を補はなければならぬのである。未だ暴露せざる偽善者も應て來らんとする同一の運命を豫想し驕然として改過遷善すべきである (甲鳥生)

貞操の意義

某文士の醜行端なく新聞の評判となりて常に古くして又常に新しい貞操問題が持ち上がった。今日の如き道德の標準の亂れ勝ちな時代にはかゝる男と女の多きは怪むに足らぬことである。若し一々之を摘發する時は窮極する所を知らぬのであらう。或男女は世間の評判となるを以て自家廣告術と心得るものがあるが故に、寧ろ之を默殺するを得策とする。然れども既に世間の問題となりたる以上は吾人は之を批判せざるをえない。

某文士は先妻を捨てゝ若き未亡人と結婚して、二歳になる女子を産ましめ、此度有夫の一婦人と同居せんがために第二の妻と別居した、而して第一の妻の子をも第二の妻に托してあり、彼女と二子の扶持は某文士より供給するといふ事なさうである。

某文士は半獸主義を唱ひたる人、自ら半分は獸であるが故に人間の道德は守るの要なしと威張つてゐるかも知れない。然らばか



時

評

高田文相に望む

大隈内閣の留任及憲法上非立憲的行爲ならざるを保しない。しかれども從來憲法は殆んど勵行せられざりし我國に於て、殊に後繼内閣の組織者なりし時に至りて、大隈内閣が留任したるはやむを得ざること、言はざるを見えない。總辭職の形式は幾分立憲的であるといはれる。改造せられたる内閣は著しく大隈伯の色彩を鮮明ならしめた。

大隈伯が昨春内閣を組織せし時、その參謀を伴はざりし事は大なる缺點であつた。法學博士高田早苗氏は早稻田大學々長にして教育行政家として夙に令名ある人なるが、彼は經營の才と共に智謀の人である。大隈伯この人を伴はなき事は幾分の弱點ありしかと想像せられた。

大浦子爵の瀆職事件と辭職と隱居と急轉直下して内閣の改造となつた。終に文相の冠は高田博士の頭上に落ちた。この任命は最も適當なるものである。即ち一は大隈首相參謀として、一は理想的教育行政家としてである。

早稻田大學々長の位置は文相の位置に比して遜色ない。高田博士が現職に留るも、また文部の椅子を占むるもその價値を上下する者でない、然れども學制改革案が文部省の大問題となりてゐる時に際して高田博士の文相就任は大なる意義を有するのである。吾人の友人中にも此問題に對する意見は一致しない。現に前號に於て菊川生は反對の意見を述べてゐる。吾人は菊川生の意見を尊敬すると共に吾人の抱負を述べる自由を有するのである。

日本人は早熟早老の國民である。少くとも現在にありては特に然りである。然るに現行大學令の下にありては高等學校入學試験と大學卒業年限の長時目とは有爲なる青年をして意氣阻喪せしめ、卒業する時日多くは三十歳に近くして、活社界の實務に練達すること甚だ困難なるものがある。このために學制改革案が論議せられ、菊池案即ち高田案がその第一條を教育調査會に於て通過するに至つたのである。

高田新文相はこの改革案を斷行する抱負を以て親任せられたことと思ふ。吾人はこの斷行を切望する。然れども制度の改革に次いで起る當面の問題は教育上精神的問題である。今や我國の教育は

ある故と思つて大に吾人も意を強うし速に其實現の日の來らんとを祈つて居たのである。

然るに今や此期待は無殘にも裏切られ、今度此青年會の進歩的態度が何時再び勃興して其意を貫徹するやは計り難いものとなつた青年會の上には又もや灰色の雲が掩ひ被さつて居る。吾人は深く之を悲しむ。

自分は此夏青年會の夏季學校に一人の學生を勸めて、出席させたが、彼は全然失望して歸つて來て、もう二度とあんなグダラヌ所に出ないと言つて居る。そして其動機は何だと尋ねると、總會における青年會名士の態度であるといふのだ。第三者から見ると、あの改正案は委員會側の提出にかゝるものである。そして先年其案を作成する時委員として賛成の意を表して居つた人であり乍ら、總會では反對の態度をとつた人もある、不誠實沒常識も甚しいでないか。且又あの案が委員會提出であつて夫が通過せぬ以上は、しかもそれが憲法改正といふ重大事件に係はつて居る以上は其に對して少くとも責任を明にしなければならない所だ。此徹底した態度に出たのは僅に岡田哲藏氏ある許である。それから又反對者は御家の大事といつた調子で少數黨の横暴的態度をとるに到つたのであるが、勿論反對を反對といふには異論ないが、青年會の信條憲法改正は全會一致を要するといふ點から、或委員などは、原案提出者の理義を盡した説明を聞かんとせないうで、頭から反對の態度である。之では衆議院の現状を笑ふとは出來ない。仍て少數黨の横暴といふのである。その心事は諒としても、此案たる已に三ヶ月以前に原案として各委員に配附されてある筈だから、

此案が否決となつた曉には提出者たる委員許でない、統一教會との口約上青年會自身の顔をつぶす譯になるといふとに氣付くべき筈である。彼等は茲に思至らない程低脳でもあるまい、又氣附いても之を未然に防ぐほどの好意を青年會のため有つて居なかつたのか何れにしても彼等は此責任を逃るゝとは出來ないのだ。

兎に角態度が不徹底亂脈で吾々青年の頭では判斷のつかない程であるとかういふのである。これでは青年會に失望する青年が無理もなさうだ。

然れ共斯る現象は寧ろ一時的である、保守的反動の餘命は幾許もないのだ。改正案に賛成した人が大多数であつたとは、青年會の中に如何に進歩的にして、事物の理に通達した人が少なくないことを證する青年は宜しく一回の失敗に失望せず、全會一致などいふ非立憲きはまる規則を先づ改正して然る後徐に改正の眼目に迫るべしである。

更に青年會の保守論者に向つては、若し信條の點などでそうした態度あるなら、宜しく之を徹底さして、無教會主義や自由進歩主義の講師の講演會を開くなどとも全廢すべしであらふ。夏季學校の講師や講演の内容もせいゝ保守的にやるとである。斯して青年會は最も理想的福音主義を實現されよう。但し「いぶかしや青年會に禿頭」の景を實現しないといふとは保證の限でない。併し最も公平にやるなら夏季學校の講師なども各青年會の希望多きものに從つては如何。そうした自由な態度は青年會の禁物かも知れぬが。是は眞面目な問題として提案しておく。

保守的の方々に對しては、如何に今日の各學校青年會の實際に

ゝる人に對しては法律を適用することが急務である。第一の妻も、第二の妻も、第三の妻の夫も、法律上の手續を行ふべしである。かゝる破倫の行を敢てする文士は理屈も何も悉皆心得てゐるのである。たゞ永年の不品行のために良心の活動力が減少してゐるのである。

或學者は文士の不品行は政治家のそれよりも寛大に處分しなければならぬといふ。これは考物である。我國の青年は文藝に對して強い趣味を有するが故に文士の生活は彼等の生活に多大の影響を與ふるのである。現代青年の柔弱に流るゝもの多きは政治家實業家官吏等の手本の悪いのみならず、實に文士の亂行の感化が少くない。

吾人は本誌十月號に於てこの問題を詳論してみたい。故に多くを言はない。たゞいはんと欲するは吾人は社會的自衛のためにかゝる醜行文士に對して制裁を加ふべしといふことである。即ち一種の非貫同盟を組織することである。かゝる文士の作物の掲載せられたる定期刊行物も彼の筆になる單行本も一切購讀せざることである。かくして其生活を壓迫して道德的反省を促すことであるかゝる。文士に對しては言論の力極めて薄い。たゞこの實行の力のみは彼を動かすことあらんのみ。(甲島生)

青年會のために惜む

青年會同盟の機關雜誌開拓者の報ずる所に依れば、本年の夏季學校開校中開かれた同盟の總會において、會員資格に關する憲法改正案は全會一致に至らず遂に否決の運命を見たやうである。青

年會の憲法改正は我々にとつて格別積極的な興味のある問題でもないが、嘗て此事件で本欄で論じ合つた因縁もあるから、一言するの要があると思ふ。

大正二年五月モット氏が來朝して青年會の大會が東京に開かれて折、統一教會は青年會から其所謂福音的信條なるものを認容するや否やといふ問をうけた。之は青年の正會員たるには福音主義の教會員でなければならぬが、一般に統一教會は非福音主義であると認められて居たからである。然るに統一教會では倣に其信條を包含するの度量があつた。詰り統一教會員内には福音主義と認められる青年會の該信條を承認しうる會員も含むわけである。隨て個人的に斯る人々を青年會の正會員となすとは青年會にとりて何の差支もないとてあり、寧ろ有益な場合が多いのである。そこで青年會の同盟委員會では今度憲法改正をして、斯る信仰を個人的に表白する人をも正會員としてうけ入れたといふとを決議し、青年會の代表者は其決議を齎して統一教會を訪れたのであつた。

當時書記の作つた事件の記録が本誌上に發表されたのであつたが、其中に此青年會側の希望を書き洩したといふとて、青年會の小松主事が手きびしく吾々を攻撃した。當時の吾々が見ても、それは單に先方の希望に上り、未だ確定した態度でも何でも無い丸で夢みtain話なのであつた。併し小松主事の強硬な態度から推すれば、之は餘程確定的なものであらふとも思はれ、且少くとも青年會が其文の進歩的傾向が希望となつて外部に現はるゝに至つたのは、其内部に在る進歩的精神を有する幾多青年の眞實の友が

しなければならぬ事は殆んど自明の事に屬する。のみならず從來同盟本部は憲法改正を公約し、大多數の意向は改正に在るを以て本改正案は青年會内に如何に頑迷固陋の人士あるも、容易に通過すべきものと信じられたに係らず、終に否決さるゝに至つた事は吾等の遺憾とし且つ漸愧に堪へない次第である。

總會議場に於ける議論は各人各様で、幾多の名論卓説が主張されたが、吾人を以てみれば一も肯肯するに足るものは無かつた。

たゞ賛成論の多くが一様に遺憾に感じた事は、反對論者が問題に對する理解を缺いて居る爲めに充分の討論をなす事の能きない事であつた。反對の議論を見るに、但書の附加は福音主義を廢棄するものなるが如く誤解して自分の福音主義の金科玉條を侵害されたかの如き見暮にて抗論する者。或は信仰の告白と云ふも輕々に之れを信ぜず可らず、又其試問の機關其形式を如何にすべきかを論じて、教會盲從、自己侮辱をなして得々たるもの、改正案を無主義者の妥協案なりとなして自ら主義の人を以て任ずる形式主義者、教會本位論者、福音主義過重論者。其議論は區々にして而かも統一なく、論點は常に變更され、矛盾撞着相亞ぎ、他所の見る眼も可愛そな程思ひきつて愚論の陳列をやつた。

吾人は夙に改正の意見を抱き、本問題の根本的に解決さるべく、青年會が少くとも教會に關係なく全く獨立の團體として獨立不羈の憲法の制定を見ん事を囑望せるものであるから、幼稚乍らも、根本問題としても、亦只方法論としても多少の意見を持つて居るのであるが、議場の反對論に接しては沈黙するの外なかつた。彼等が本改正案を正當に理解するか、或は教會盲從の陋見を棄つる

かすれば、只教會本位に箇人本位を採用する丈の此改正は事もなく通過した、今更に青年會の固陋呼はりやをされずに済んだ譯である。然るに事實は第二十九條に本條文の改正は總會出席者總員の賛成を要すと云ふ非立憲的非現代的の規定であるが爲めに、五分の四の賛成者を有し乍ら、終に改正案は三年の後を待たなければならぬ様になつたのである。此次は今回の失敗に鑑みて、到底存在し得べからずして存在する第二十九條の改正をなして然る後に第三條の改正案を提出するならば、該案の通過は期して待つべしである。

今回の改正案は理不盡にも否定されたけれども、それは形式上の事であつて、青年會大多數の人々、殊に學生諸君に於ては殆んど總べてが該案の賛成者なるを觀て、以て青年會一般の傾向を識るに難くない。

併し乍ら觀て考ふるに、先年の六合雜誌同人對青年會同盟一部の論争の論點は、只箇人の信仰本位を採用するや否やと云ふ、今回の改正案と同一の點にあるのでなくて、全く根本的に青年會が福音主義を中心主義として現代青年を率ゆるの當不當、言ひ換ゆれば現代青年と福音主義の問題であつたと吾人は解釋して居る。統一教會の諸員は其進歩主義自由主義の立場から、青年會の保守的福音主義を攻撃し、之れを墨守する事を論難したものであつた。併し事實上今日に於ては青年會は全然福音主義を棄て、了つて、全く自由に總べての基督教を奉ずる者を抱擁すると云ふ様な態度に出づる事は能きない。依て不本意乍らも改正案は更に讓歩して、教會本位に箇人本位を併用せん事に止め、統一教會が其信

就いて、已に此憲法が、實行上不都合であるか、又事實は之を遵奉しないものさへすらあることに注意を促し、福音主義の教會に列してさへ居れば、其人の個人的信仰などどうでもよいと見るとに墮する危険から速に脱せんとを忠告したい。(K、K 生)

本號々切間際に此問題に關する古市氏の文章が著いたから、此の欄に載せる事にした。

青年憲法改正問題に

就いて

古市春彦(寄)

六合雜誌に據れる統一教會の諸氏と、開拓者に據れる青年會同盟委員が所謂福音主義の問題に就いて論争した事は吾等の記憶に新たなる所である。當時問題は可成り紛糾したのであるが、相互の理解と青年會側の憲法改正の黙約とによつて此問題は二年間沈黙の裡に運ばれて今日に及んだのであつた。然るに去る七月二十三、四の兩日に亘つて御殿場に開かれた青年會同盟第五回總會に於て所謂福音主義に關する憲法第三條第二項の改正案が提出され、二日の討議の結果實に改正案は否決され、所謂福音主義の問題は大正二年四月に於ける統一教會と同盟との交渉以前の狀態に逆轉するに至つたのである。吾人は青年會内部に於ける改正案賛成者の一員として、該改正案の否決されたる議場の概要を報じて、統一教會並に本誌の讀者諸君の御參考に供する事の必ずしも徒事な

らざるを思ふ者である。

先年統一教會と同盟とが交渉した際には、同盟憲法はこれ迄全く教會本位で、福音主義の教會に屬せざるものは勿論、箇人としては福音主義の信仰を有する者も教會員たらざる爲に正會員たる事が能きなかつたのを、之を改めて教會本位と俱に箇人本位を採用する事を青年會同盟が委員會に於て決議したのであるが、今回提出されたものは同盟憲法第三條第二項の「福音主義ノ教會ニ屬スル者ヲ以テ正會員トナシ、之ニ議決ノ權ト役員タル權ヲ附與スルコト」と云ふに、

「但シ福音主義ノ教會ニ屬セザルモノト雖モ同主義ノ信仰ヲ告白スルモノハ之ヲ正會員トナスコトヲ得」と云ふ但書を附して、箇人の信仰を以て正會員を定むる標準としたのである。統一教會の諸君。或は其他の進歩主義自由派の者からみれば、かゝる改正案も尚ほ姑息にして極めて保守的なるの嫌があるのであるが青年會の内情は今日に於て此改正案以上に出づる事が、困難なので青年會内の進歩主義者は根本問題としての福音主義問題は暫く措き、只箇人の信仰本位を憲法に採用する事に依つて時代の要求の一部を満たさんとして一大讓歩をなし、該改正を提出もし賛成もしたのであつた。

法王の權力下に於ける羅馬教會ならばいざ知らず、多少の恩義を教會に受け居るにしても、教會は青年會にあらざると等しく青年會亦教會にあらず、恩義の爲めに奴僕となるの謂はれもないから教會本位ばかりでなければ青年會が立ち行かない理はない。何人の眼からみても教會本位のための缺點を補ふには箇人本位を併用

それに一般に保守的傾向を尊ぶのであるから、時勢の要求を顧るの要なしとか信仰に進化なしと公言して恥ぢない連中を生せざるを得なくなるのである。青年會は既に此際餘程鞭撻しなければ、時勢の落伍者となりつゝあるは疑を容れな。

吾人は此點に於て青年會の現狀に不満である。併し吾人は青年會を愛するの第一人者を以て任ぜんとするものである。吾人は徒にかゝる言辭をなしてワイルドの所謂自己誹謗の快感を楽しまんとするものでば斷じてない。之れ一に誠實なる自己罵倒であり、自己鞭撻である。吾人は青年會が青年の團體なる故に之れを愛する。青年を措いて時代の先駆者となり、新時代の創造者となるもの

ゝ他になきを思ふ故に之れを愛し之れを鞭撻せんとするものである。願はくば吾人をして消極的自己誹謗者に終らしむる勿れ、鞭撻亦鞭撻、躍進亦躍進、常に吾人をして進軍歌の吹奏者たらしめ、先頭の勇者たらしめよ。而して俱に中軍の堅城たらしめ、且つ沈着勇敢なる殿將たらしめよ。かくて天下は吾等の掌裡にある。述ぶる所は洵に簡單にして粗笨、要をつくさざるを憾とする。不備は之れを謝しなければならぬ。同勞の友統一教會の諸員が吾等を扶けて青年の指導誘掖に盡されん事を希望してやまぬ。更に詳細の事情を識らんとする諸君が開拓者九月號に登載された同問題の記事を一讀されん事を囑望します。

■ 樂 し き 思 ひ 出

ドクトル、オブ
フイロソヒー

原 口 鶴 子 著
春秋社書店發行

これ迄男のものしたる洋行土産は澤山あるが、婦人の筆になりたるものは少ない。それ故に男子の見たる西洋及び男子青年學生を中心としたる西洋文明は比較的に明かであるが、婦人を中心としたる方面は少くとも吾人男子には封ぜられたる秘密である。著者は日本女子大學出身の才媛にして、コロンビア大學に於て心理學を専攻してドクトル・オブ・フイロソヒーの學位を領したる篤學の婦人である。さればその着眼精微にして男子の氣の付かざる點をも觀察してゐる。寮舎生活や、吹床の寢床など殊に面白い。米國婦人に對する觀察、男女の交際など多くの暗示を與へる。殊に米國婦人が結婚に關して功利的思想を有し、感情にのみ信頼せざる點、これと反對の傾向ある日本婦人にとりては好個の參考である。西洋に生活して來た我々も成程と感服する點が多い。まして日本の婦人にとりては好個の教訓である。著者近年健康を害して十分にその蘊蓄を發表する能はざることを遺憾とす。吾人は一日早く著者の健康の常態に復せんことを祈るのである。(價一・二〇、)

仰は青年會の福音主義をも包含し得るとの事であつたから、統一教會の諸員をも正會員となす事を得、其他福音主義の教會に屬せざる諸君をも其信仰如何によつては亦正會員たらしめ得ると云ふ事にしたのである。これは一面統一教會が青年會の信條を擁護した事ともなり、一面青年會が統一教會員の或種の人々を認容する事になつたものと見るべきものである。併し先に述べた様に、當時論争の中心は決して此點に存せず、飽く迄も根本的に福音主義そのものに對する疑義であつたから、今回の様な改正案がよし通過したにしても統一教會の諸君は決して、根本的に満足されるものでないと思はれる。若しも只青年會の正會員たるの資格を得るのが、目的であればそれでいゝかもしれないが、問題は其處にはない。正會員になつてもならないでもそんな事はどうでもいゝのである。論の中心は只福音主義を青年會の信條とするの當不當になるのであるから、福音主義に關する神學上倫理上概括すれば、思想上の問題としての福音主義問題は實は向後更に論究さるべき問題として遺されて居るのである。これは青年會の問題は別としても一般基督教界に亘る興味あり且つ重要な問題であると思ふ。

かゝる思想上の問題として出發した統一教會の諸君は、青年會が今回の改正案を通過して憲法を改正したところが、別にうれしくも悲しくもない所に、かくの如く理義明白にして多數の賛成ある改正案をすら通過し得なかつたのを見て、今の青年會の固陋を憫笑せずには居れないと思ふ。吾人は單に統一教會の諸君にしてのみならず、一般社會に對して慚愧に堪へないものがあ

る。

かゝる不面目なる結果を觀たるは一に青年會内部に於ける形式過重者、保守思想の然らしむる所であるが、此點に就いて吾人の一層寒心にたへないのは朝鮮青年會と日本同盟との併合である。朝鮮に於ける基督教會の一般に保守的なは評者の一致する見界であるが、青年會も亦其數に免かれぬ。それは今回の改正案に、朝鮮側の代員全部が反對した事を以てみて明である。朝鮮青年會が内面的にどれだけの影響を青年會同盟に與へ得るかは疑問とするも、表面上今回の併合によつて青年會の保守的態度は其濃度を増したと觀て支那へないと思ふ。吾人は青年會の保守的傾向を打破する上に今一層の努力を要する事となつた。

吾人は自身では進歩的立場に居る者と考へて居るが、一般に青年會の保守的傾向の存するは争はれぬ事と思ふ。例へば今回の夏季學校の講演をみても、其實質價値の問題は別問題として一般に非常に保守的調子を帯びて居る事は争はれまい。進歩主義者からみれば今日の青年基督教徒がかゝる思想に満足し得るが不思議な位であるが、併し大體に於て今日の青年會員には、あれで左程不都合がないと見ても大過はない。以て一般の空氣を知る事が能き

る。青年會は青年の指導を標榜し亦自ら任じて起てるものである。然かもかゝる保守的態度を持して果して現代の青年を指導し得るや如何。少くとも優秀なる青年は穎脱せざるを得まい。宗教的團體は自然保守的になり勝ちなものであるから、進歩進歩と目かけて居つて辛じて時流に後れない位のものである。

大なる誤に陥つたもので、科學的教育學の進歩を害するのみならず、哲學的教育學から科學的教育學に進む徑路に反するもの、再び古に復らうとするもので、科學的教育學の敵である。」と云ふのであつた。

これに對しては中島氏の答辯も出て居たが、今記者は其等に對する諸氏の是非は問はないで、他の方面から中島氏の學說を瞥見しよう。氏は人格の解釋の項に於て、人格觀念の發達に關して、人格を數種に解剖してゐる。

(一)生理上より見たる人格、(二)心理上より見たる人格、(三)倫理上より見たる人格、(四)哲學上より見たる人格、(五)宗教上より見たる人格、(六)社會上より見たる人格、(七)法律上より見たる人格等七種に分けてある。而して人格の定義を氏は下の如く掲げてゐる。「人格とは自我を中心とし自覺統一内省自治の力を有して絶えず己れを實現し人造せんとして社會的に活動する身心合一の個的主體なり」と。

吾人は此の定義に觸れて先づ第一に感ずるのは謂ゆる人格的教育學の人格なるものゝ甚だ六敷く、數葉の寫眞を一枚に合作した様に其の概念の捕捉し難く、暗中に物をさぐる様に覺ゆるのである。記者の所見に依れば、人

格は矢張りオイケンなどの如く其の中心を道徳的品性に置かなければならぬと思ふ。哲學上より見たる人格は既に哲學から分立した倫理學の中に合同されて居ると思ふ。その宗教上より見たる人格の如き生理上より見たる人格の如きは勿論倫理上より見たる人格の中に合一さるべきものであり、社會上より見たる人格及び法律上より見たる人格は其の孰れかに合一さるべく、歸するところ人格は之れを心理上社會上倫理上の三方面より見る事が出来るが其の中樞は常に倫理上より見たる人格によつて統一されて居るものと信ずる。教育の可能な所以は、教育者及び被教育者の人格に於て極めて鮮明なる道徳的品性を中心典型にして自覺的に構成されるに理由すると思ふが、中島氏は之れに反して哲學上より甚だ難解にして不可解なる人格を携へ來つて之れを示し之れを規範に供するのであるが、其の人格の概念を探り得ない教育者及び被教育者は只だ迷宮に招かれる様で、更に要領を得ず遂に教育は不可能に終ると思ふ。故に教育上に於ける理想的人格と謂はゞ直ちに高尚なる品性を中心として身體及び精神に關する完全なる發達を意識させ理解させるに足る概念

を與へる性質のものでなければならぬと思ふ。即ち教育學は必ず其の基礎に於て倫理學上より見たる人格に根柢して個人教育社會教育上科學的に統一終結したものでなければならぬと思ふのである。兎に角爾來の教育學が餘りに科學的實驗の一方に偏重した爲めに、教育の根本要求たる人格の研究を怠つて居た時に際し、人格的教育學の聲を耳にするは甚だ愉快であると同時に、中島氏が此の研究に心力を傾倒されるは甚だ多とすべく、同時に此の未成品なる幾多問題中の人格的教育學をして終に大成するの時を希望する。(價、一、二〇)

歐洲動亂史論

帝大教授

吉野作造著
警醒社發行

吾人は今や古今未曾有の大戦亂の前に立つて居る。丁度昨年の六月末セルビヤの一青年が放つた短銃の響は遂に殷々たる反響を全世界に揚げるに至つた。併して短銃が發せられた其背後には幾千條の糸が複雑な關係を歐洲各國の間に結んでをつた。今吾々は此戦亂の間に生きて居けれども、濛々たる砲烟が之を掩ふて兎角其真相を極め難い事がある。本書の著者吉野教授は先年歐洲に留學し特別に各

新刊批評

●人格的教育學と我國の教育

中島半次郎著
同文館發行

自然科學の發達に伴ひて物質的文明の長足なる進歩は、遂に人間を器械化して經濟的生活に於て貧富弱肉の修羅場を呈出して人類の社會に一大害毒を流した。然るに此の時に際し、是の自然主義に反對して理想主義なるものが唱導され、精神生活を以つて物質生活の通弊を打破しようとした思想界の革新運動が、かのオイケン等の哲學であつた。而して當時他の一方に於ては此の哲學を更に教育の方面に輸入して、乃ち人格を中心として新に教育を説明しようとした一派を生じ、茲に「ペルゼーンリビカイツベードゴツク」即ち人格的教育學なる語を生じたのである。獨乙のブツデ氏、リンデ氏の如きは其の代表者である。我國では大瀧、乙竹、入澤の諸氏に依つて夙に紹介されて居たが、中島氏は特に此の方面に力を入れて研究し、諸雜誌で紹介の勞を取ると同時に前に「人格的教育學の思潮」

なる一書を公にしたが、今回其の續篇として氏の新見を加へた本書「人格的教育學と我國の教育」を公にした。

(一)序論では人格的教育學の根本思想を題目とし、其の起原又は其の研究法及び主張の要點を述べて、更に研究不備の點を指摘してある。其の研究法の項目に於ては著者は下の如く説いてゐる。「それで人格的教育學の執る研究法は從來の所謂科學的に教育學を立てんとするとは違ひ、科學的研究に固より反對はせず却つて之を取入れんと努むるが故に、更に廣く哲學や宗教や文學の如き方面にも眼を注いで人格の本質を明かにし斯くして得たる人生觀を本として教育の目的方法及び制度をも規定せんとしてをつて科學的教育學と違ひ寧ろ哲學的教育學を立てんとしてをる。」と。

(二)目的論では人格の解釋を爲し、進んで教育事業の新解釋に及ぼし、此の人格的教育學の思潮と我國從來の教育との關係を述べ、更に人格教育と國民教育の一致を圖り、立憲國民の養成に説き及んでゐる。(三)方法論では、衛生の目的と原理より衛生の方法に至り、教授の目的と原理より教材論に至つて説明を加へ、各教科の教育的價值を論じ、訓練の目的

と原理を論じ、更に訓練の方法を講説してゐる。(四)制度論では、教育制度の根本義に筆を起し、本邦教育制度の批評と爲り、教育行政の不做底を摘し、法を見て人を見ずと爲し、統一十分ならずと爲し、劃一教育の弊を擧げ、設備の不足を鳴らし、教師養成の改善を叫んでゐる。結論では、我國教育の使命と題して、我國今後の教育學と人格的教育學の關係に論を起して、世界に於ける日本の使命から教育立國の大覺悟に互つて數段に分けて論じてゐる。

著者の謂ゆる人格的教育學に對しては、既に吉田熊氏入澤氏等の批評があつた様である。吉田氏の意見に依れば、人格的教育學の體系がまだ充分に出來て居ない以上、其の學術的價值を認むることは困難であつて、又人格の概念が明でない限りは其の主張し研究する事柄の間の論理的關係が不明であつて、隨つて其の哲學上の價值を失ふ次第である。而して其の謂ゆる哲學的教育の概念を明にしなれば其の成立の如何は批評の限でない。」と云ふ論旨であつたやうである。更に入澤氏の意見を徴すれば、「既に其の研究法が科學的研究法に従はないとすれば、是れ研究法に於て

意思を主張し、日常生活が此自由意思と理性に依て營まるべきを教へ、又一面人間には歴史的に惡念の遺傳ありて、世界の苦病害惡は凡て之に起因す、而して神慮は人を此苦境より救ふにあり。斯して救はるゝには人の側において理性と自由を要し、神慮は善惡二者の上に又全體と個々を貫きて行はれざるなし。又人は救はるべきものなりといふとを説く。要するに一種の神學なれど、其根柢は彼の神祕なる天啓に存するが故、現代の宗教生活を追及するものには、其儘うけとれぬ點多し。ソシニア派など瀆神罪として地獄に陥るものとさる。然ば現代の自由派なども同斷ならむ乎。只宗教一般の研究者は本書の翻譯に依て益する所あるべし。(定價・二三〇)

佛蘭西語自修書

杉本伊作著
警醒社發行

フランス語の發音、譯讀、文法、作文、會話を通じて講述して、初學者に便宜を與へようとしたところに此書の目的がある。けれども著者の此の目的は殆んど全く達せられてゐない。忌憚なく云ふことを許されるならば、まづ全體に渡つての説明があまりに不親切であり難雜である。一つの頁に少なくとも

一つ位は説明上の缺陷がある。Oraison をオーシスと發音したり、question をクエスチオシスと發音したりしてある點は、日本の片假名でフランス語の發音をうつすことが困難であるとしても、あまりに明瞭な誤謬である。譯讀用として選ばれてある六篇の文章も、初學者には難解すぎるし、文法の説きかたもひどく曖昧である。作文や會話に至つては全く物になつてゐない。つまりところ此の一書は、いろ／＼な書物から材料をぬきだして、それを何等の選擇なしに並べただけのものである。われ／＼は此の書の内容を認める前に、全體に渡つての大訂正を著者に請求しなければならぬ。殊に標題の *l'Etude 'soi-même de langue française* などは、一日もはやく何とか適當に書き直して頂きたいと思ふ。(價八〇)

人生と宗教

伊波・比嘉兩氏共著
おきな社發行

「生命の宗教」と「生活と宗教」と「求神の道」との三つに章を分けて、あらゆるドグマを離れた基督教の眞精神を説明することに力めたのが此の小冊子である。われ／＼は遠い沖繩の地上に立つて、自由な宗教的雰圍氣を

創らうとして居られる兩氏の心をなつかしく思ふ。(價一五)

基督の徒の思想

富永徳麿著
警醒社發行

基督の徒とは何ぞや、云ふ迄もなく基督の精神を以て己が精神となすものである。著者は此見地に立つて獨立不羈堅忍不拔の精神を以て自給傳道をなすと茲に年あり、傍ら健筆を其經營する雜誌「基督の徒」に振つて居る。本書は同誌上に嘗て現はれたる論文説教を集めたものであるが、著者の思想は能く自由派にも正統派の中にも其友を發見し得べし。敢て一讀を勧む。(定價、八〇)

七公書註解

露國ア・イワノフ著
西海校靜譯
日本正教會發行

正教會神學校の教科書のため譯出したものであるが又同時に一般讀者のためにもこの用意を以て譯者が拂つたものである。新教にもヤヌペテロヨハネユグ等の註譯は甚だ少ないのであるから、此譯の如き露國學者の著でもあるし大に參考になると思ふ。聖書研究者のため好指針を得たるを喜ぶ。菊判假裝一九八頁(定價不明)

國現代の政治關係を研究し、此大戦亂の経路については我國に於ける唯一の權威を有する學者である。本書は氏が蘊蓄する所の一端を披瀝したものであるが、さしにも複雑した歐洲各國の關係も歴々として掌を指すが如く、覺えず一巻を讀せしむ。到底後の際物的の著作とは同視し難い世界的著述と評してよからふ。第一章埃洪國皇儲殿下の暗殺第二章埃洪國と塞國、第三章埃塞の開戦並に露獨佛英の參加、第四章伊太利の態度及宣戰、第五章土耳其の運命等の各章に互り更に各章節に分ちて説明して居る。今や戦後に於ける我國の地位と民族の發展上如何なる態度を執るべきかは、心ある人士の念頭に浮ぶ大問題であつて、其爲には此大戦亂の真相を熟知するを要す。是れ吾人が此價值ある著述を大方諸君に推薦する所以である。菊判五七〇頁別に數葉の地圖と索引が附いて居る。(定價一、八〇)

■印度六派哲學

木村泰賢著
丙午出版社發行

著者は新進好學の士にして先に高楠博士との共著『印度宗教哲學史』あり。本書は之に次ぐものにして、印度思想史全五篇中の第二編を成す。先づ六派發達前の印度思想史の

概觀をなし、次て六派たる前ミーマーサー派、數論派、瑜珈派、勝論派、互理派吠檀多派に就て、一々嚴正に原文を考證し、詳細に説述す。抑六派哲學たる佛教大乘哲學と共に印度哲學中の最完成したるものにして、普通印度哲學と稱すれば此六派を意味する程なり。然に我國には僅に漢譯を通じて此六派中の數論と勝論の二派の研究されたるに過ぎず、今著者は本書の研究に於て一々テキストに據て之を攻究し、更に内外の専門學者の説を批評參酌したるを以て、本書の如きは單に吾國に於て斯學の第一篇たるのみならず、西洋専門家に對しても特色を有する好著なり。且著者は其該博なる研究を縮少したるも尙六百五十頁の大著にして、新問題を選出し新斷定を下せる點において専門學的なると共に、一般讀者に向つても難解に流れざるの用心を以てし、最後に方向流行のタゴール等にも論及しあれば印度哲學宗教に興味ある人の一讀を要する著といふべし。(定價二、三〇)

■北米遊記

小鹽高恒著
中央報德會發行

感化教育の專攻者たる著者が、二年間の北米視察の一端である。感化監獄、警備學校、

市風改善俱樂部、跛兒實業學校、舊開小僧具樂部、女子殖民館、共進會、救濟事業等、感化教育に關する諸種の團體を視察見聞した記事を掲げてゐる。近時不良少年の多い我が邦の社會に於て、政治家を初め諸の教育家が其の矯正事業に對して何等の根本的救濟策を講ずるを試みざる時に際し、小鹽氏の如き特志家を得たるは吾人の大に意を強うする所であつて、本書によつて北米の感化教育の近況を知るを得たるを著者に向つて感謝する。(價〇、五〇)

■我觀人生

故福井彦次郎著
日東堂書店發行

魂陽彦福井彦次郎氏は世に隠れたる教育家であつて、名利に淡く世に現るゝを欲せず、その警句は寸鐵殺人の慨があつて、氏の膝下に集る子弟を熏陶して大に世道人心を裨益する所があつたが、舊臘病の爲めにその盡瘁育英の中に斃れた。本書は氏が晩年の談論を門人阪本登君の筆記したものである。(價一、一〇)

■神慮論

スエデンボルグ原著
鈴木大拙譯
丙午出版社發行

本書は神祕家スエデンボルグの大著にして、菊判六百五十頁の大冊なり。人間の自由

宇治



品質優良
價格低廉

荷造完全
發途敏速

◎合本出來

■六合雜誌 大正四年度 上卷

價金壹圓拾錢 送料八錢

右御入用の御方は至急御申越あれ

大正四年九月 東京三田 六合雜誌社

電話芝五八五五番

聞け——公平なる世評は自畫自賛に優る

販賣

はがきニテ御注文下サレバ代金引換小包ニテ
發送シマス。
御送金ハ振替貯金ガ一番安全デ便宜デ德用デ
ス。
集金郵便ハ料金高クナリシ故謝絶シマス。
御注文書へ必ズ本誌ニ依ル旨明記アレ。

規定

送費無料 一時ニ總代金一圓以上御注
小店ニテ負擔ス。但海外ハ増料申受ク。全部
無代罐入 一斤一圓五十錢以上ノ品ハ
故罐入ノ時ハ實費申受ク。トス以下ハ袋入り

宇治と云へば茶と云へばムラタ園とは世人の聲

名茶	一及	斤	正	價	表
鶴ノ齡	八十	錢	喜仙	六十	錢
村田園	一圓	廿錢	正喜仙	七十	錢
老松	一圓	五十錢	正太福	九十	錢
千代香	一圓	七十錢	國折	物	
宇治魁	三	圓	池尾粉	三十	錢
華掌	五	圓	上青柳	四十	錢
國華	八	圓	折鷹	八十	錢
國華	八	圓	薄茶	各種	

大坂連一 九〇四 壹五七 番電 略 城 二八二 番 (タラム)

夏期來宿者 御來宿者 歡迎

高等下宿 榮林館

館主 文學士 今岡信一良

本郷區追分町三〇 電話下谷 四八四六 (追分電車終點ヨリ五分間)

英和 對照明治昭憲兩陛下御製集

エフ・エ・ロムバード 謹譯
警 醒 社 發 行

明治天皇と昭憲皇后の御製を選び之を英譯

したものである。譯者は同志社の教授にして京都大學に英文學を講ず。原歌の調に倣ひて英譯したる點苦心の跡が見られる。之に依て我先帝兩陛下の慈愛に溢るゝ詩想が歐米人に紹介されたとは吾人の喜悅と感謝に堪へない所である。毎頁英和對照にして、最後にローマ字讀方を附し、數葉の美麗なる日本畫を挿入した。紙質も上等だが尙望ましいとは製本を上等にするのである。(定價、六〇)

成功の大外交家

羽田 浪三 紹著
警 醒 社 發 行

本書は伊太利の大政治家にして大外交家たるカヴールの傳記である。歐洲戰亂後日本の讀書界も交戰國の外交關係及其史的研究に興味を持つやうになつた。獨逸のビスマルクと並び稱せらるるカヴールが評傳せられるのも時期に應じたものであらう。著者は熱心なるカヴール研究者であつて十餘年前にもカヴールの小傳を著はした事があるそうである。本書は一面十九世紀後半に於ける伊太利の政治

史とも又外交史ともみられる。行文極めて平易且つ流暢である。(價、一〇〇)

世界の進歩

ローム 軍治 著
ローマ字ひろめ會發行

本書はローマ字文庫第三の卷である。いろいろ動物の話を書いたものである。有益な而も面白いものばかりである。記者はこの種の讀物が一般の小供達に普及せん事を切望する。またローマ字普及の爲め大人も進んで讀むべしである。(價〇、一五)

肺結核征戰策

湊 謙治 著
警 醒 社 發 行

肺結核は怖るべき人類の敵である。殊に我國に於ては年々此病のため死するものを増し、昨今漸く療養所の國家的施設の聲を聞に至つたが、個人として其自衛法を講じなければならぬ。本書の著者は明石に療養所を設け多年病者に接し學理と實驗に富む。今其溫著する所を種々面白き例をあげ、通俗に説明して居る。病者も健康者も共に讀んで自他の爲益する所尠なくなからう。殊に前途有望なる青年學生などは本書の如きを一讀して常に自衛策を講じるとが大切だ。(定價、四〇)

蕉窓夜話

中村 忠藏 著
二秋會發行

著者は布哇ホノル、にありて久しく日本人の教會を收して令名ある人、傳道の傍同地の邦字新聞や雜誌に筆をとつて居る。本書は此等の文章を同氏の友人が編輯發行したものである。二秋會とは氏の假寓の名よりとれるもの乎。人生の諸方面に涉りて穩健清雅なる觀察をなして居る。通俗の宗教座談として一般の讀者に薦む。(定價一弗)

萬物の世界

土岐 哀果 著
植竹書院發行

最も新しい歌を作るといふ土岐君の歌集である。大體の思想には感服出來ぬが、デリケートな感情には共鳴することが出来る。たそがれの蜜柑をむきし爪さきの黄なるかをりに母を思へり。その膝に枕しつゝ來し海の音七年たてば妹のごとし。寢臺よりころげ落ちたる一大事、わが兒をかき夏夜の夜かな。(六〇)

ふ乞を添書御旨る依に「誌雑合六」は方の込申御て見を告廣此

堅實なる雑誌

業產及働勞

一 郵 冊 金 二 錢 錢 九 月 號 半 一 年 年 分 一 七 圓 十 十 錢 錢

— [四] —

■**労働者の大責任**……………法學博士 **添田 壽一**

職工教育の方針……………法學博士 桑田 熊藏

實利主義を排す……
友愛會 武田芳三郎
評議員

最近の労働問題……記者 坂本 正雄

能率增進法(三) 農學士 伊藤一隆

工業大意(四)……東京府立
職工學校長 秋保 安治

■ 勞働者問題……………早學士大 久留 天豪

英國炭鑛坑夫罷業に就て

酒井龜作

■労働問題の將來と工場法の

實施……………岡田玉圃

■日本海員氣質
.....丹生耶洲

ハナマ運河開通と東亞兩洋

の貿易……………古川仲太郎

■友愛會幹事評判記……………凸凹坊

所行發業產及働勞
部本會愛友

町市日五下府京東

町國四田三區芝市京東

七五一三京東替振 五五八五芝話電

發行所
申込所

週刊宗

教雜誌

基督教世界

毎週木曜發行

一部 金五錢

半ヶ年 金一圓二十錢

一ヶ年 金二圓三十錢

外國行一ヶ年金三圓

◎本誌の創刊は明治十六年にして既往三十餘年の歴史を有する本邦基督教界最古の週刊雜誌なり

◎本誌の特長は進歩的基督教の立場より時事問題を評論し且つ最新の知識に依り基督教永遠の眞理を闡明するにあり

◎本誌には毎號教界先輩の說教、内外名士の論說と新進思想家の研讃と、清新なる宗教文學及内外教勢を滿載す

◎本誌は信仰修養の糧として聖書研究の手引として、信徒家庭の讀物として好適なる雜誌なり

◎本誌の編輯は宮川經輝、原田助、小崎弘道、渡瀬常吉、牧野虎次の五氏協力之に當り、武本喜代藏、山口金作の兩氏每號執筆し、在兩京の記者數名之を助く

本誌の見本は往復はがきにて御申越次第無代進呈すべし

大阪市北區中之島二丁目四七

發行所

基督教世界社

振替貯金大阪參壹七參

七月一日
發行

七月號
定價金貳拾錢

六合雜誌

八月一日
發行

夏季號
定價金貳拾錢

進歩的基督教の主張

自由なる宗教生活

水道の水

自我の問題

思想家の生活

生 死

クリスチャンとは?

紐育より

宮 参り

神祕的知識

生命の家

ストリンデルクの「父」

熟れたる實は

瑞西より

幻響を追ふ心

基督教の禪機

内ヶ崎作三郎譯

安 部 磯 雄

岡 田 哲 藏

野 村 隈 畔

鈴 木 龍 司

三 浦 關 造

岸 本 能 武 太

高 橋 清 吾

木 村 久 一

イ・エス・エームス

増 野 三 良 譯

太 田 眞 一

田 中 華 城

盧 山 生

吉 田 絃 二 郎

内ヶ崎 作三郎

蚊と哲人

白き光

ロマン・ローラン斷片

ゼームスの宗教觀

復活の日

徹底せる宗教心

岡 田 哲 藏

伊 藤 寥 々

内 藤 濯

鈴 木 龍 司

菅 野 笠 夫

安 部 磯 雄

夏の自然と人生

内ヶ崎作三郎 石田三治
安部磯雄 加藤一夫
野村隈畔 古市春彦

型と思想

山毛樺

犬

瑞西より

近代人の宗教と杜翁

運命と恩寵

木 村 久 一

鈴 木 芳 松

伊 藤 恵 子

盧 山 生

石 田 三 治

内ヶ崎作三郎

此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る旨書添を乞ふ

九月一日
發行

割 造

九 月 號

定價
廿五錢

□ 手紙二通……………清浦明人

□ 小石川の方に……………木村莊八

□ 凝視と燃焼……………喜多村進

□ 狂犬の如く……………加藤一夫

■ 生の苦悶……………景山哲雄

■ 甦れる者の手記……………喜多村進

■ 賣春婦(ガルミン)……………内山賢爾

■ 胃瘕攣……………加藤一夫

□ 實感の惱みより……………美川康

□ 左手とペン……………景山哲雄

□ 毒杯の底……………磯ヶ谷紫江

□ 短歌……………百數氏

誌友及短歌募集

發賣所

天弦堂書房

振替東京
二九五五

東京牛込
西五軒町

東京小石川
小日向水道町
八十一

創造社

新秋良夜の好伴侶

近代思潮叢書

第一編より第七編まで各七拾錢
第八編まで各七拾錢
第七編に限り定價金八拾錢
(郵稅各八錢)

編壹

第一高等學校教授
□三並良氏著

ルードオイケンの哲學

編貳

文學士
□今岡信一良氏譯

現代思想と倫理問題

編參

文學士
□內藤濯氏著

生の更改と新藝術

編四

文學士
□三井北川氏著

科學と宗教

編五

文學士
□小松武治氏著

現代と思想家

編六

隈野村善兵衛氏著

自我の研究

編七

陸軍大學教授
□岡田哲藏氏著

靜觀と思想

編八

文學士
□藤田哲男氏著

宗教の哲學的基礎

振替東京五五參

警 醒 社 書 店

東京橋尾張町

本誌讀者諸君の特權

◎圖書取次!

- 一、東京市内發行の書籍ならば定價の全額丈御送り下さるれば別に送料は要しませぬ。
- 但し法律書、醫書は元價非常に高いのですから送料を添へて下さい。
- 一、御送金は可成安全な振替貯金にて御拂込み下さい。
- (振替口座は東京一〇〇〇三、統一基督教弘道會宛)
- 一、本部へ當て返書を要する質問書御發しに際しては必ず返信料を添付下さい。
- 一、一般圖書の取次ぎは今度始めて開始したのですから是非一度御試み下さい。

六合雜誌社營業部

電話芝五八五五番

本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵税一錢
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵税共
十冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵税共

●海外は郵税一冊に付金六錢(清國を除く)
●臨時號出版の際は規定以外に代金申受く

本誌廣告料

特等	表紙二三四面	一頁	金貳拾圓
普通		一頁	金拾貳圓
普通		半頁	金六圓

●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候
●二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候

大正四年八月三十一日印刷納本
大正四年九月一日發行
(每月一回一日發行)

定價 貳拾錢 本號

發行兼編輯人 吉田源次郎
印刷人 海上海輝男
印刷所 株式會社 英合

發行所

東京市芝區
三田四國町

統一基督教弘道會

賣捌所

東京堂◎北隆館◎東海堂◎同文館◎上田屋
◎警醒社◎教文館其他全國有名書店

明
治
廿
五
年
三
月
廿
七
日
第
三
種
郵
便
物
證
可
大
正
四
年
十
月
一
日
發
行
（
每
月
一
回
一
日
發
行
）

六
合
雜
誌
第
三
十
五
年
第
九
號

六 合 雜 誌

十 月 號



四 百 七 十 號

哲學叢書

哲學叢書刊行に就いて

オイケン、ベルグソン、タゴール。我が思想界の發達も亦實に多事を経む。これ等の流行は固より喜ぶべく、視すべしと雖も、唯だこれをして我が思想界に實なる意義あらしめんが爲めには、先づこれを受くる地勢を養はざるべからず。近來叢書類出版の盛行はまさにこの時代的要求に應ずるものなるを疑はざる。比々としてこれ然らざるは、不幸にして概ね一夜漬の片々たる小冊子か。或は羊頭を掲げて狗肉を賣る者、比々としてこれ然らざるは、不幸にして浮薄なる流行に迎合して、却て根本的理解の途を杜絶するの弊なしとせず。不肖微力を以て幸に尊敬する諸先生に庇護と少壯有爲の學者の努力とに須ちて、こゝにこの叢書の刊行を企つる者、實にこの缺陷を充して、時代の眞摯なる要求に應じ、我國文化の進歩に寸尺を貢獻せんとするの微衷に出づ。即ち先づ第一著として略ぼ哲學の諸部門に亘りて最近の知識を最も根本的に最も簡約に、而も亦最も平明に叙説し、廣く江湖思想界のことに興味を有する人の座右に薦め、以て庶幾は堅實にして精確なる知識の基礎を供せんと欲す。而して執筆の著者は皆新進氣鋭の學者にして、最も敏感に心を燃ゆる學者の良心を諒とする士、虛名未だ廣く世上に知られざるも、實力は斷じて所謂大家に劣るものにあらず、而かも不肖が一片の志を諒として、最上の努力を傾倒せられんとす。從來は杜撰なる紹介と根柢なき獨創との紛々たるに倦みて、精嚴透徹の知識を提供するの書に飢うる士、若し本叢書十二冊を杜撰玩味すれば、世界に於ける最新最高の思潮に參するを得るのみならず、更に一步を進めて自己の生活と思想とを形成するに當りて裨益するところ蓋し鮮小にあらざらん。世間の學者と出版書肆と相共に虚偽を恥とせざるが中に立つて、著者と書肆との眞實の努力になれるこの企畫を天下の前に告ぐるは不肖のひそかに光榮とするとところなり。世上の君子、願くは不肖が一片の志を諒としてこの微舉を遂げしめよ。

顧問

編輯者

波多野精一	紀平正美	認
西田幾太郎	速水滉論	識
朝永三十郎	宮本和吉	論
大塚保治	阿部次郎	學
夏目金之助	安倍能成	概
桑木嚴翼	安倍能成	學
三宅雄次郎	高橋里美	史
上野直昭	高橋穰	上
阿部次郎	上野直昭	十
安倍能成	石原謙	以
	阿部次郎	
	美	

要項
一、哲學叢書はハガキにて不用に申込まれたし（申込金全部申込まざる方には希望全部の代を明記せられたし）
二、全部の代を明記せられたし（申込金全部の代を明記せられたし）
三、全部の代を明記せられたし（申込金全部の代を明記せられたし）
四、全部の代を明記せられたし（申込金全部の代を明記せられたし）
五、全部の代を明記せられたし（申込金全部の代を明記せられたし）
六、全部の代を明記せられたし（申込金全部の代を明記せられたし）
七、全部の代を明記せられたし（申込金全部の代を明記せられたし）
八、全部の代を明記せられたし（申込金全部の代を明記せられたし）
九、全部の代を明記せられたし（申込金全部の代を明記せられたし）
十、全部の代を明記せられたし（申込金全部の代を明記せられたし）
十一、全部の代を明記せられたし（申込金全部の代を明記せられたし）
十二、全部の代を明記せられたし（申込金全部の代を明記せられたし）

（明治廿五年三月二十七日第三種郵便物認可）（大正四年八月卅一日印刷納本）
（六台雜誌第三十五年第九號）（大正四年九月一日發行）（毎月一回一日發行）

【本册定價貳拾錢】

發行所 東京 神保町 岩波書店 電話 振替 東京 二四六 局 番 〇四二

THE RIKUGO-ZASSHI

No. 417 October 1915

CONTENTS

Larger Meaning of Unitarianism.....	Dr. J. T. Sunderland.	2
Authority of Art.....	G. Yoshida.	20
Is Religion a Noun or an Adverb?.....	Prof. N. Kishimoto.	29
Art of Creation, (Edward Carpenter).....	trans. by Dr. K. Satō.	40
Two Sides of Religion.....	Dr. N. Imaoka.	49
Dr. Forsyth's View on Religious Art.	Dr. S. Satō.	54
A Criticism of the Political Thought of Present Germany.....		
.....	T. Matsueda.	62
Short Poems.....	K. Itō.	70
From Switzerland.	Dr. T. Arai.	71
Confession of a Revenger.	I. Okino.	75
Poems.....	I. Tanaka.	79
A Conversation.	Dr. R. Suzuki.	81
Short Poems.....	Prof. S. Uchigasaki.	84
A Poem.....	Prof. T. Okada.	86
Current Thought.....		
A New Type of Marriage.	T. Ichijō.	103
My Belief on Chastity.....	Mr. M. Miyazaki.	117

Liberal ChristianP ulpit.....		
Chastity as the Basis of Moral.....	Rev. Prof. S. Uchigasaki.	

Topics of the Day.		
New Books.		

Published Monthly by the

TŌITSU KRISTOKYŪ KŪDŌKWAI,
2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

ライオン齒磨は粉製の外に、

ライオン煉 齒磨（ニッケル罐入）

携帯便利

ライオン水 齒磨（美しい瓶入れ）

使用便利

などがあります。いづれも粉製と同じ効力を持つた上に、更に液狀でなければ取り扱へない特種貴重原料が加へてありますから、趣味と衛生とを喜ばれる方には、必ず御賞美に預かることと存じます。

■ 叢

虫

教授 岡田 哲藏……八六頁

□ 雲の色

早大教授 内ヶ崎 作三郎……八四頁

■ アウグスチンの戦争観 ■ 民族と宗教の統一 ■ 戦争は何時まで続く

■ 歸一協會の決議 ■ 雷鳥氏の告白

■ 教界小觀 ■ 九月思想宗教評論一覽

自由基督教講壇

□ 貞操の意義と價值

早大教授 内ヶ崎 作三郎……二一九頁

□ 結婚道德の新典型

一條 忠衛……一〇三頁

□ 貞操に對する我信念

宮崎 光子……二一七頁

□ 戸山ヶ原にて (短歌)

小宅 銀次郎

時評欄

■ 偽善的慈善の流行 (駒込生) ■ 大學附近の三教會 (赤門生) ■ 藝術家に對する世評

(白百合) ■ 乃木家再興問題 (一條) ■ 新大學令を歓迎す (S、U) ■ 非婚同盟を組織

せよ (甲鳥) ■ 高等教育を受けた婦人 (甲鳥) ■ 原始文明の名残 (甲鳥) ■ 刑法の不

備 (甲鳥)

□ 歸郷記 (内ヶ崎生) □ 新刊紹介——編輯たより

六合雜誌第二十五年第十號目次

本欄

□統一主義の主張

神學博士 サンダーランド……………二頁

□宗教は名詞か副詞か

マスタート・オプアールツ 岸本能武太……………二九頁

□宗教の二面

文學士 今岡信一良……………四九頁

□藝術の權威

吉田絃二郎……………二〇頁

□フオルサイスの宗教藝術觀

文學士 佐藤繁彦……………五四頁

□畑みち(短歌)

伊藤寥々……………七〇頁

□創造の藝術

文學士 佐藤清……………四〇頁

□現代獨逸に於ける政治思潮の批判

松枝徳磨……………六二頁

□バーゼルに砲聲を聞に行く記

醫學士 廬山生……………七一頁

□復讐の心

冲野岩三郎……………七五頁

□山吹の花(長詩)

田中葦城……………七九頁

□炎熱と現身

前田夏村

□椽先にて

文學士 鈴木龍司……………八一頁

六
合
雜
誌



十
月
號

此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る旨書添を乞ふ

日本生命保險株式會社



社長

中野武督

專務取締役

池田龍一

東京丸の内

彩虹會規約

藝術は遊戲にあらず
藝術は眞面目なり
藝術は味ふべきものなり

一、本會は右の趣意により最も眞面目なる製作を最も廉價に同好の士に配付するを目的とす

二、本會の製作は風景、靜物、肖像の三種とし總て友人有田四郎氏（明治四十二年東京美術學校西洋畫科卒業）の眞面目なる努力になるものとす

三、會費は次の價空表により申込みと同時に半金を申受け完成の上殘額を一回、或は數回に申受くべきものとす

四、但し如何なる事情あるも既に出金せる會費は返却せず、地方は運賃御自辨のこと

額面の寸法及價格は左記の如く定む

A	（一尺一寸）	（四號）	別に二幅	九圓
B	（一尺五寸）	（八號）	約三寸幅の金縁附	十八圓
C	（二尺）	（十二號）	約四寸幅の金縁附	三十圓
D	（二尺六寸五分）	（二十五號）	約五寸幅の金縁附	六十圓

五、製作の主題はなるべく本會に御一任ありたし。肖像畫は申込み同とす時に鮮明なる寫眞一葉を要す

七六、製作の完成期は申込みの日より一ヶ月乃至三ヶ月以内とす

發起人

本會の事務所は左の二箇所とす
東京府下巢鴨一四七〇 相原一郎介方
相州鎌倉町扇ヶ谷要山 有田四郎方

大正四年

早稻田大學教授 内ヶ崎作三郎

十月一日

衆議院議員 小山東助

相原一郎介

等の統一をも標榜せぬものだと思像して居る。乍然斯る見解は一部分のみを見て全局を察せず、一面のみを窺つて他の一面を看過した謬見であつて、吾人の主張するユニテリアンの本義に適はぬ誤解である。然らばユニテリアンの標榜する宗教の、大なる中心的且つ永久的統一とはどんなものであるか。

二、神は唯一也

萬物の最初に存在し、萬物の中で最大なるは言ふまでもなく、過去現在未來に亘つて統一主義の標榜する神の本質の統一といふことである。凡ての物の上に、凡ての物の中に、而して又凡ての物を通じて神は唯一也といふ大なる思想である。古代波斯人は二人格の神を信じ居たりしも、決して二ではない。近代基督者中には三位一體論者があるけれども、決して三人格ではない。神は唯一である。又古代希臘人は、神とは大なる十二の神々と小なる他の神々とを指稱するのだと主張したけれども、唯一神の本質上決して斯かる多神的の觀念と相容るゝものでない。唯一の神とは或る異教徒の主張する如き無限に多數なる神々を認むる思想と其の根柢を異にして居る。

如上一神的思想を他の方面より説明すれば、宇宙間到處に表現せらるゝ力は唯一のものである。隨所に見らるゝ智慧は唯一のものである。如何なる場所に於ても正義は常に一である。善は何處に於ても一である。有形の宇宙が一であると同様に、無形の道義的形而上的宇宙も亦唯一である。其間何等永劫の破壊なく、分裂なく又反抗もしないのである。

人々が多種多様の自然と人生をば知るを得たれど、一層深い統一を得やうと努むる如き考を持たざ



統一主義の主張

— ユニテリアン主義のより大なる意義 —

神學博士 サンダーランド

此は皆一にならんと欲す……ヨハネ傳十七章十一節乃至廿一節

一、はしがき

ユニテリアンと云ふ言葉の語根は、*unit* (單一)、*unite* 結合、又は *unity* (統一) と云ふ文字である。而してユニテリアン主義者と言へば統一^{ユニテリアナル}せる人々と言ふことである。更に詳しく言へば、ユニテリアン主義者とは、事物の統一結合を希望する爲めに、他よりも勝れた注意を拂つて居ることを世に主張する所の男女を指すのである。統一主義をして其名に背からざらしめんとせば、凡て宗教の大なる永久的統一結合を成すことに援助を與ふることを要するのである。

然るにユニテリアンに關して世人は屢々其の本義を誤解する。即ちユニテリアンの歴史や思想やを餘りよく知つて居ない人々は、ユニテリアンと言ふ名は單に三位一體の神學の主義に反對して唯一神格論を主張する所の學說にして、其學說の外何

伴ふのである。他の大なる統一を承認することは、神は一也といふ思想から必然生ずるのである。若し是れを認めぬとすれば、ユニテリアンの思想及び運動を全く根本的に誤解して居るのである。尙ほ進んで此等他の統一の比較的重要なものは何であるかを述べやう。

三、人性は一也

統一主義の標榜する第二の大なる統一（即ち夫れは神は一也の思想から最も直接に且つ明白に起るもの）は人種の統一と四海同胞の教義である。此の教義はユニテリアンの思想中で殆んど神は一也の思想と同様に卓越せるものである。此教義は宗教的の根柢を有すると同様に、又科學的の根柢を有つて居る。若し宗教が凡ての人は神の子であり、従つて世界の人類は一族であると教へるならば、科學たる人類學も亦斯く教ゆる。而して凡ての人は皆一家族である。人性は皆一である。どんな場合に於ても人の本然の性質は皆一であると言ふことを力強く教へて居る。如上の所説は之れ明かに科學が基督教々祖の教を確證するものである。何者教祖基督は神はその父也と力説せると同様に、人類は同胞なりと言ふことを力強く教へて居るからである。此の二個の教義は實に基督の思想の中心を成して居たのである。此の二者は相關したもの、神は一也と言ふだけでは充分でない。吾人は更に總ての人は皆兄弟なりと言ふことを附加へなければならぬ。此の教義たるや實に重要にして、どれ程重要視するを以て重んじ過ぐるといふこと殆どないのである。而してこは獨り哲學的思想に於てのみでなく實に人生の實際に於て大切なのである。どんな宗教でも此の教義を中心として創建されたものでなく

りし古代に於て、彼等が多神的の信仰を持つて居たのは必らずしも不思議とするに足らないのである。又古い多神教の勢力が衰へて一神的の觀念が表はれ初めた時代に於ても尙ほ各所に於て未だ不完全な形を取り、唯一の神に復數の人格があると云ふ様な準多神教的觀念から全然擺脫することが出來ず、斯かる考を以て徐々と進んで來たと云ふことも亦必ずしも不思議ではないのである。さりながら吾々は神の統一と言ふことが完全に認めらるゝ時代に生活して居る。又自然の統一と云ふことが完全に認めらるゝ時代に生活して居るのである。又神の統一と言ふことは自然が統一せる體をなして居ると言ふことの眞の精神にして、且是れが説明なるを明示して居る時代に生活して居るのである。即ち神の復數の觀念は、二元説なると三位一體説なると、或は八百萬神説なるとを問はず、凡て人の思想の進歩せる爲めに其存在の根據を失ひて、今日に於ては何人にも顧られぬ様になつた。ユニテリアンとは凡て此れを承認することを言ふのである。統一主義者たる吾々より見れば、神は無限の力である。我々に見ゆる一切の力は單に其表現に過ぎない。科學の研究に依つて凡ての力が不思議にも相互に溶け合つて單一のものとなることが解る。我々が其の統一に達する時、我々は統一主義者として吾々の首を下げ、而して恭しく我々の知れる最高の詞を囁く。宗教上最高の詞として知られたものは、神及び父と云ふ詞である。

是れ實に端緒である。而かも吾人は茲で止まる譯にはいかぬ。統一主義の運動の過程に於て、其先覺者等は、神は一なりとの主張が夫れと共に多くの他の有力なる統一を行つて行くことを認めた。是れを爲すは偶然でもなければ又勝手になすのでもない。寧ろ統一主義の眞の意義と性質とに餘儀なく

其の統一結合を計るに在りといふことを認識し初めて居る。人間は餘りに長い間お互に離れて居た。もはや一致結合すべき秋である。決して以前の様に割據的であつてはならぬ。職業の法則は必然競争を含んで居る。競争は恐らく止む時がないだらう。されど今後の競争は排他的の競争ではなくして、相互援助の高尙な法則に従つて相補はれ、且つ相互間の衡平を保つて行く様に力めるものでなければならぬ。資本と勞力とは相互的必要のものなるを知らねばならぬ。精神的勞働と肉體的勞働とは其利益相反するものではなくして、却つて相互援助的のものであることを了解するを要するのである。生産者と消費者、製造人、商人、職人及び農夫は、お互に友情を持てば徳になるが、敵意を持てば損をするといふことを了解する様にならねばならぬ。各種の社會即ち、都市や國の如き社會組織が向上發達し行くには、相互に相倚り相補うて進むべきものであつて、一方の繁榮が他方の繁榮發達の上に利益を與ふるものだといふことを知るを要するのである。而して各國民は、平和と友情とは繁榮を生むけれども、戦争と敵意とは何處に於ても常に不幸を生むものだといふことを知らねばならぬ。北米合衆國の標語たる *E Pluribus Unum* (諸多の統一)といふことは、多くの國家が從來採用したものの中で一番高尙にして且意味深い標語の一つである。五十に垂んとする北米の諸大州が相並び立ち、相提携し、相協力して、一政府の下に結合し居るも、各州は判然たる區劃の上に其獨立を有つて居るといふ様な國家は實に此の世の偉觀であつて、是れ以上の國家組織は斷じて世に其類例を見ないのである。凡ての英語國民は一致結合して一合衆國を形造るべきである。全歐洲は一致して一合衆國となるべきである。全世界は一致結合して一大合衆國となるべきである。歐洲の何處かで戦争が許容せらる

れば、此の世に正義や平和や或は慈善を更に増進させることは出来ない。吾々がお互を兄弟だと考へぬ限り、吾人が世を分割する限り、例へば吾々猶太人は神の選民として特別の注意を蒙つて居るがこれ以外の人間は神の敵であるから、吾人は彼等を、ヨシユアがカナン人に爲した様に掠奪したり破壊したりしてもよいとか。又は吾々は羅馬人は優等の國民であり、神の特別の恩寵を受けて居るから、勝手に周囲の民族を征服しても、掠奪しても又彼等を奴隸にしてもよいとか。或は吾々基督者は天より選ばれた者故、神は吾等のみに特別の恩寵を垂れ給ふ。故に他の異教徒をば、十五、六世紀の頃の基督者が西班牙に於けるムーア人を虐待した様に取扱つてもよいとか言つて、人々が色々な區別を設け、世界中に線を引張つて縄張りを決める様な事をして、人種間の同胞關係の統一を破つて居る限りは、此世に正義も平和も慈善も博愛もあり得ないのである。印度では社會上の階級非常にやかましく區別されてるが、或る階級が他の階級を劣等のものとして取扱つて居る間は、社會的改革を實行することは殆んど不可能である。一人種が他の人種を劣等視すること、例へば白人が、黒人や銅色人種や或は黄色人種を劣等視するが如きことある限りは、彼等が互に兄弟として援け合ふどころか、正當の關係さへも保つことが出来ぬのである。此を以て吾人は人類の統一とか兄弟關係とかいふ大思想——統一主義が常に標榜し來つた第二の統一の思想——は世界の道德的及び社會的の進歩に最も密接の關係を有つて居ることを知ることが出来る。

上述の事柄は實に亦其の産業上及び政治上の進歩に最も密接な關係を有つて居るのである。各國の最も賢明な人々が、將來に於て爲すべき大目的は、社會上、産業上及び政治上の兄弟關係を認めて、

ので、人間の希望、信仰及び生命等同じ最も深いものを、吾々が屢々言ひ表はさうと思ふよりも一層深刻に言表はして居り、又言ひ表はさんとして居るからである。尤も宗教に依つては、此等の事柄を餘り明瞭に認めて居らぬものもある。併し斯かる宗教に於てさへも、宗教的渴仰は彼等の見得る範圍に於て最高のものに向つて居る。即ち彼等の知れる範圍に於ける至聖を意味するのである。若し彼等が斯の如くにして暗中神の右手に觸れ、かくして高められ且強められるならば、彼等は盲目滅法^{めつぱふ}て向上して行つたわけである。基督の大使徒保羅が言つた様に、神は如何なる國に於ても『自ら證明^{あかし}を爲し給はぬことなし』

世界の各文明國は皆同一の神を信じて居るではないか。それのみならず未開國に於てすらも、人々が神を認め得る限りは此の同一の神を禮拜して居るのである。萬人は各人が想像し得る最高の完全なるものを崇拜せんとして居る。只宗教が色々の宗派に分れて行くのは、豫言者だとか、宗教の教師だとかを仲介者となす時に始まる。人は能く自分は保羅の弟子だとか、アポロの弟子だとか又はキリストの弟子だとか或はモーゼの弟子だとか釋迦の信徒だとか、孔子の弟子だとか或はモハメットの弟子だとか言ふ。併しポーロやアポロやキリスト釋迦モハメット等の背後には神即ち同一の神が在するのである。現代の一層高等な宗教思想は此眞理を認め初めたのである。波斯の詩人は此の眞理を認めて謳うて曰く――

側眼^{わきめ}をふるな、

いと聖きものは

常に一なり、

一切の神なり。

たとへ人

様々の名もて

神を呼び、

祈れど。

べき場合には、其の以前に歐洲の意見が一致しなければならぬ。又世界の何處かで宣戰の布告を爲さうとする場合には、世界中の重要な國々の政府の同意を得ることを必要となすべきである。斯かる状態は他日必ず來るだらう。人種の統一及び四海同胞の大教義は、聽て其の實行の途を開き、早晚之れが實現を見るを得べきを吾人は確信するものである。

四、宗教は一也

第三に、統一主義は單に神の統一、人種の結合を標榜するのみではなくして、更に宗教の統一を標榜する。即ち世界のあらゆる宗教の教義は、其要素に於て、其の最深奥の原理に於て一なりと言ふことを主張するものである。

吾人は、人間には宗教的本能の存することを信ずる。吾々は人間が、考へること、愛することが自然であると同様に、畏敬、渴仰、崇拜の念を有することも亦當然であると考へる。人類學の教ふる如く、人間は一であり、且世界の凡ての宗教は、恰も世界の美術のあらゆる様式、種類、形式等が單に人間の唯一の美的本能の種々なる表現に過ぎないと同様に、萬人共通の普遍的宗教感情の種々なる表現に過ぎないと言ふことを信ずるが故に、吾人は世界の様々な宗教を姉妹なりと稱するのである。或るものは美貌（ぼうぼう）を供へて居る。或るものは顔だてが上品に出來て居る。或るものは其の品性が他よりも勝れて居る。又或るものは凡ての點に於て他のものよりも遙かに優れて居る。斯んな差があつても彼等は矢張り皆本當の姉妹である。何となれば孰れも人間の深い心から、即ち人間の聖い心から生れ出たも

次に統一主義は、宗教と科學との親善なる一致協力を主張する。曰く、若し宗教が人間の心に書かれたる神の默示なりとすれば、科學は、岩石、花卉、星辰等に記されたる神の默示也と。神の默示にして何物か蔑視すべきものありや。神の一つの默示が他の默示と相容れざることのあるべきか。從な宗教と科學とが相互に敵視して來たことは誠に憂ふべきことで、今此の兩者の態度を變へなければ互らぬのである。宗教と科學とは最早仇同志ではない。親善なる友達であると考へねばならぬ。兩者來に手を握つて相信じ、相援けて行かねばならぬのである。

七、法 と 愛

統一主義は、現代に表はれたる最も壯嚴にして、最も貴重なる大思想、即ち神に於ての『法』と『愛』との統一を標榜する。現代の科學は初めて、人は法の支配を受けて居る宇宙に棲息して居ることを告げた。人は之を聞いて戰慄した。こは血も涙もなき死物なる法が、神の代りを務めることとなつて、今後人は淋しき宇宙に、果敢なき孤兒の生活をしなければならぬと言ふことであると、考へたからである。けれども夫れは違ふ。夫れは人間の表面的な判斷に過ぎない。是れを深く考ふる時に、神は法の中に在し、法其ものを意味し、其の精髓となり給ふことを發見するのである。ブラウニングは曰ふ――

一切は法なり、而も一切は愛なり。

此の句と同じ意味をテニソンは歌ふ――

一つの法、一つの源、

一つの遠き聖き御業に、

一切の創造は辿り行くなり。

是れ神は一也の思想より生れしものにして、實に一切の宗教の根本的結合の、最も重要にして且宗教上の革命的眞理なることを世界に宣傳するのは、現代の統一主義の重大なる使命なるを覺るべきである。

五、宗教と理性

統一主義は宗教と理性の一致を標榜し、且其の結果として從來久しきに亘りて互ひに怖ろしき損害を蒙らせつゝありし二者の争鬭の斷絶を主張する。宇宙に罅隙の存在を許さぬ統一主義は、若し神が無限の理であるならば、人間の理性は神の閃めきてなければならぬと主張する。如何なれば宗教が此の神聖なるものを打消さんとはする。宗教と理性とが同一の源より流出すると言ふことは無上の眞理である。若し其の一角が神より出づるならば、他も亦神より出でなければならぬ。若し兩者が共に神より出づるものならば、互に和衷協同し、無知、誤謬及び罪惡より人類を救済せんとする共通の目的の爲めに相互に援け合ふべき筈である。今や世界に宗教的なる理性及び合理的なる宗教を期待する者が漸く現はるゝに至つた。此の期待が實現せらるゝ時に、既往の二者の分裂は、偉大にして恵み豊かなる平和の中に癒されるのである。此の幸福なる終局に至る爲めに、統一主義は、此主義の此の世に生れて以來今日に至るまで絶えず奮闘を繼續して居るのである。

六、宗教と科學

神に逆らふものは、何によらず消滅して丁はねばならぬ。而して愛と義と眞理及び神の聖旨と調和し得る一切の天國のみが永遠に止まることが出来るのである。是れ統一主義の高尙なる福音の、重要にして光榮ある箇條である。

九、宗教と倫理

統一主義は、宗教と倫理の統一を主張する。勿論題目としては両者は全然別個のものとして居る。實際重要な點に於て此二者は別個のものである。併し私共は孰れを孰れより輕しとしない。そして吾人は兩者を通して流るゝ深い共通の生命を認める。吾人は此二者に致命傷を與ふことなくしては、各々を引離すことは出来ない。宗教なき倫理は恰も根なき樹木の如く、只表面的にして活動力を缺き永遠の生命を缺く。倫理なき宗教は、果實を結ばない樹の如く、何等の效果なきものである。否、夫れのみならず、寧ろ有毒の樹であつて、夫れに近寄るもの一切を萎靡せしめ、是れを呪ふのである。宗教が最も發達したる時に、其内容は充分倫理的性質を具備するのである。其宗教の奉ずる神は正義の神となり、其宗教の目的とする所は、常に個人の生活及び社會に正義を建設することゝなるのである。又一方に於ては最高の倫理は事物の精髓にして、宇宙の基礎たる永遠なるもの、神、公正、眞理及び正義に其の基を置くのである。統一主義は之を見て、之を人間に教へ、之を實現すべき宗教と道徳とを此の世に建設することを、最も重要にして且活力ある仕事と見做すのである。宗教的倫理及び倫理的宗教の組織——是れ實に近代ユニテリアン主義の標語にして且つ其の究竟の目的である。

日に進歩しつゝある今日の統一主義は、宇宙——法に支配せらるゝと同時に、智と愛との支配をも受くる此の宇宙間の、運動、意義、及び目的の、根本的にして一切を包含する『統一』をば、之れを承認するのみならず、之れを嘉納し、且之は現代の科學や哲學の世界に示しつゝある、一層大にして一層榮ある神の姿であると絶叫して止まないものである。

八、正義と愛

上述の問題と同様に重要なこととして、統一主義は、神に於ける正義と愛との統一を主張する。吾人は種々なる方面に於て、正義の終結と愛の終局とは一致しないと教へられて居た。正義は往々癒すことの出来ぬ苦痛、悔悟して之れから立て直して行かうと言ふ機會を與へない懲罰、即ち一分の斟酌もない苦痛と刑罰とを與へ、而も之を永遠に取り去ることがないと教へられて居た。統一主義は之を否定するのである。正義を斯く解釋するならば、之は宇宙間の不一致を意味し、涉るべからざる巨溝を鑿つことになる。世に永遠無極の苦痛困難あり。又善き終局を告ぐる苦痛困難ありとせば、神の法は不公平なものであると言はねばならぬ。神の愛は一切衆生を救済すれども、其の正義は之を許さず、或者をば永遠に罰すると言ふは、神の正義は其の愛と戦つて居るといふことになる。神の宇宙の何處かに苦痛困難が永遠に存在すると言ふことは、神の法は現在も又未來永劫に亘つても不完全で、其教が神の創造の一部を永遠に支配すると言ふことになる。若し神が唯一無上であるとすれば、終局に於ては宇宙全體の調和がなければならぬ。此の世に於ても他界に在つても、神の思ひ給ふものゝ、

流れを涸渇せしめんと努むる業程神聖なる仕事は、世に又と無いと宣言するのである。吾が此主義は吾人に、茲に正義公平の爲めに即ち神の爲めに働くべき重要な場所ありと知らば、神聖なる熱情を以つて、奮つて政界にも進み入れと教ふるのである。

十二、基督教國の統一

統一主義は、予が今語らんとするも一つの統一を標榜する。そは上來予の述べ來つたことの中に含まれ居るのであるが、尙ほ特に夫れを取り立て更に明瞭に之を述べし。極めて重要な問題だからである。即ち統一主義は、基督教の凡ての宗派の統一を主張する。斯る統一が實際合理的で且つ期待し得ることであるといふ論據があつて之を主張するのである。之が可能也といふ徴さへある。

基督教界を幾百の宗派に分ち、幾百年來互に相爭はしめ、相迫害せしむるものは抑も何であるか。そは宗教の道德的要素であらうか。宗教の靈的要素であらうか。それとも正義であらうか、慈悲であらうか。愛であらうか。否、決して斯かるものではない。如上のものゝ高潮に達したる時は常に結合の要素となるのである。離散は常に此等より遠ざかることに因つて、且又、此等に代へて、空想獨斷的神學說、信仰箇條、儀式典禮、僧侶牧師の特權等を造りて、各自此等を誤りなき絶對の眞理だとなすことに因つて起るのである。此等は孰れも事物を分裂せしむるのが其性質で、未來永劫、幾度も／＼分裂し又分裂して行くより外はないのである。然らば若し統一調和を作り上げ様とならば、此等の諸項を第二位に押し遣つて、道德的靈的生命を有する諸項を先づ第一位に持ち上げねばならぬといふこ

十、宗教と修養

統一主義は宗教と修養との統一を主張する。曰く、人間は一也。知も情も良心も、又重要なる意味よりして身體も、皆是れ一である。故に吾人が眞に人間を向上せしめたいと思ふならば、此中どの部分をも忽にしてはならぬ。吾人は出来るだけ良き衣食住及び健康を與へねばならぬ。吾人は其頭腦を教育して、知識と訓練と最も廣き知見とを與へねばならぬ。吾人は其意思を最も強くし、其の良心を敬虔に導き上ぐることを要す。吾人は内に在る愛と同情と敬虔との一切の萌芽——一切の聖い高い渴望、希望及び目的を培はねばならぬ。斯くして人間は宗教と修養の協力の下に——即ち其全性質の發達に依つて（全性質とは肉體的、知的、道德的及び精神的の各性質を意味す）而して只是れに依つてのみ神が人間の爲めに企て給うた最高の目的に達するのである。

十一、宗教と社會改革運動

統一主義は、宗教と總ての改革との一致を標榜する。全道德界を貫徹する統一を信ずるものとしてユニテリアンの徒は、若し宗教にして此の世をもつと平和と親善と正義とに滿つる様に改善するでなければ、價值なき宗教であると言ふ。故に若し社會に、下層階級の貧民、病者、犯罪者其他地上のあらゆる不遇の者の境遇を改善せんとする運動が起れば、統一主義は之に對して、吾人は宗教家として更に一層神聖なる務ありなどと言つて是れを無視する様な逃口上は斷じて取らぬ。人生の悲痛困苦の

何故に基督教は今日まで、此の生命と統一の基礎から離れて迷つて居たのであらうか。我が統一主義こそ、今日の廣き思想、深き倫理的識見、高き靈性の叫ぶ聲であつて、『やよ、大なる基督教會よ、歸り來れ!』と呼んで居るのである。神の御名、基督の御名、人類の名に於て叫ぶ、分裂を事とするものを離れ、統一を主眼とするものに歸り來れ!と。基督の教へ給ひしことなき『信仰個條』を捨てよ。基督の精神と生涯とに何の關はりも無き『儀式典禮』と僧侶の特權とをすて、彼が愛と義務との單純なる宗教に歸へれ。斯くしてこそ初めて、幾世か祈り求めし日、平和と同胞の愛の基督教國を統ぶる幸福なる日が明け初むるのである。其時こそは、外面の形式には現はれずとも、少くも精神的に『一つの牧場、一人の牧者』が實現せらるゝのである。

十三、人類の一貫せる生命

最後に統一主義は、現世の生命と、未來の生命との重要な統一を主張する。吾人は、人間の靈性の歴史が死に於て破れて了ふものではないことを信ずる。吾人の考へでは、死とは生命が肉體を脱し去つて、只感覺の世界に於て永眠するも、夫れが靈界で醒めるに外ならないのである。其の靈界と言ふのはどれ程の距離に在るのか、吾人には解らない。夫れは大方――

我等の未だ見ぬ世界は

雲の如くに我等を取り卷く。

と歌はれたる如く、又死と言ふものは――

眼を閉ぢ

耳を閉ぢ

恍惚としてみ恵みに酔ひ

愛の腕かみに抱かれて

靜かに――夢見つゝ

此處をば去りて彼處にぞ行く。

のであらう。換言すれば統一主義は、人生は一の進化であるとして居る。即ち、暗に初まり、幾月か胎内に止まり、母の生命より養を受けて居る。夫れから此の世の光と大氣の中に生れ出て、此の世の

とが、明瞭になつたわけである。若し基督教の諸宗派が互に親和せんとして其の據り處を求めんとせば、夫れは當然各派に共通のものでなくてはならぬ。各派争闘の種となつて居るものに據つて、どうして親善なる交はりが出来やうか。然らば諸宗派に共通のものとは何ぞ。答は極めて簡明である。各派共通のものは宗教の深い根柢にあるので、決して表面的のものではない。精神的のもので、辭句ではない。信仰崇拜の助となるもの、純潔なる心、有益なる生活等が諸派共通のものである。此等こそ實に凡ての宗派の力となつて居るのである。耶蘇は、凡て誠の宗教は其精神を備へ、中心を有し、終に愛——神と人とに對する愛——に到着するものであると教へ給うた。基督教の凡ての宗派は斯かる宗教を信奉して居るのではないか。夫れならば吾人は茲に統一と親和の根據を有するではないか。統一主義は、是れを指摘し、公衆の注意を喚起することを以て、社會に對する重大なる使命と心得て居るのである。特に、基督教界の統一をば、最も不條理な不可能な根據の上に築き上げやうと焦つて居る人々や宗派に之を告げなければならぬ。斯かる統一の根據は他に探し求むるも決して得らるべき筈がない。予の述べたる如上のこと、是れ統一の眞の根據でなければならぬ。是れこそ我等の教祖が教示し給うた眞の根據である。是れこそ神が人間の精神に植ゑ付け給うた根據なのである。然るに世人は更に低いこと、小さなことで争つて居る。前述の如く、争ふこと能はざる程高くして聖い統一の根據あることを忘れて居るのである又世人は深い。内面的の問題を離れて、淺薄な表面の事柄を相争うて居る。若し歩を轉じて一步深く内面的靈的方面に進み行かば、各人の心は期せずして相觸れ、直ちに打つて一丸となし得るに相違ない。焉んぞ相争ふの暇あらんや。

なかつた。併し今此の主義を充分了解する人々には、現時に於ては其の全部を語つて居るのである。夫れでよいのだ。世の中は進歩して行く。人間の思想は益々大きくなつて行く。眞理は擴がつて行く。神の默示(天啓)は益々大となつて行く。統一主義の見解が、予の如上の略説よりも範圍の狭いものであれば、少時も此の素晴らしい廿世紀の要求を満足せしむることが出来ない。

如何に神の默示の成長進歩の目覺しきことぞ！歴史と、宗教の比較研究とは、深い意味に於ける人間の信仰は要するに一であると言つて居る。社會學は、社會の利益は一なりと言ふ。人類學は、人類は一なりと言ふ。解剖學は、一切の生命は奇しくも一なりと告げる。天文學や、是れと關係ある諸學は、一切の世界——天體——は整然と調和を保つて宇宙を成し、其の一切の上に、又一切の内に、一つの力と智慧と愛とが遍在する事を告げて居る。統一主義の使命は、正に此の盛んならんとする統一の眞理、即ち最も深遠にして、最も宗教的に意味深き此の眞理に忠實ならんとする事にある。

予は特に宗教的に意味深いといふのである。何となれば、此の大思想はあらゆる科學界に通じて極めて重要なものみならず、一切の道德、慈善、社會改良、及び宗教を通じても同様に重要だからである。此の思想は人と人、階級と階級、國家と國家、人類の利益と利益、神と人、宗教と宗教とを結び付ける。斯かる働きを爲したる思想は、世界中の何處を探すも求め得べきでない。此の大思想を受け、是れを効果あるやうに運用し、實際に應用して行く時は、一層大にして且高尚なる生命を人類に與ふる事を疑はない。(R H 生譯)

空や、野山や、社會に圍繞せられ、肉體の營養を得て幾歲かを過すのである。夫れに次いで今度は更に高い世界即ち純粹なる靈の世界に生れるのである。如斯移り變つてこそ行くけれども、吾人の生命は此の三階段を通じて同一の生命であつて、只其の現はるゝ舞臺が改まり、擴がつて行くに従つて、生命其物も新たなる場面を展開して行くに過ぎないのである。來世とはどんなものか吾人は少しも知らぬ。又そんな事を臆測し、考究したつて何の役に立つとも思はない。只彼の世に於ては、吾人の思考の力と愛の範圍が益々擴張すると言ふことと、彼世に醒むる吾人の性格は、此の世に於て眠つた時の夫れと同じであつて、只遙かに自由な、遙かに善き境遇に在りて、益々發育し、益々先へ進んで行くのであると言ふ事を信ぜればそれで充分である。此の狀態をボーロは極めて適當な言葉で語つて居る。『神の己れを愛する者の爲めに備へ給ひしものは、目未だ見ず、耳未だ聞かず、心未だ思はざるもの也』と。如斯吾人は現世の生命と來世の生命とを、二つのものとは考へない。唯一の生命、即ち、單純な、壯嚴な、不滅の生命であると考へ、吾人は既に此の生命に入り、永遠に此の生命を繼續することを期して居るのである。夫故に死去したと稱する人をば、吾人は本當に死んで了つたとは考へない。一貫せる生命を先へ／＼と進んで行つて、行方に懸つて居る幕の彼方に隠れて了つただけで、吾人は尚ほ此方に残つて居るのである。

上述の事柄は、簡單な、不完全な略説に過ぎないが、此等がつまり、統一主義の主張する嚴かな、遠大な、非常に意味深い諸種の統一なのである。

十四、天啓の發達成長

從來は統一主義も是等全部を主張して來たわけでは無かつたかも知れない。實際周圍の事情が許さ

否は別問題としても、何等かの形式に於いて我が文壇の思潮が最つと色彩の強い方向のはつきりした新しい何等かを要求してゐることがうなづかれる。九月に入りては早稲田文學やその他の雑誌に問題文藝といふやうなことが多くの人々によりて色々に論ぜられた。「問題」といふことが如何やうに解釋せらるべきものであるか、その意義についてこの問題は頗る複雑なものになるにちがひないが、少くとも「問題」といふ言葉の意義が普通に想へらるゝが如く「新しい疑問の提出」「新しい人生の見方、新しい人生思索の發表」、「新しい生活要求」といふやうなものであるとするならば近代文藝の多く殊にイブセンやビョルンソンやトルストイやドストエフスキイの文藝は皆なそれであつたといふことができる。近代文藝の特色であつたダイヤボリカルな性質は悉くこの新しい問題、新しい人生の見方の上に立てる巨人の叫びであつた。生みの苦痛なる言葉はこれ等の巨人の生涯の歴史を彩つてゐる。一面から見るならば彼れ等の文藝は悉く問題の文藝であつた。彼れ等の生活全體が問題闡明を追求する者の生活であつた。

問題文藝を提唱する者の忘れてならないものは實に彼れの生活である。文藝即ち生活といふ言葉には多くの疑問があるとしても彼れの文藝は少くとも彼れの生活の問題を離れては片時もその意義を發見することはできない。僕等は問題文藝を云々する前に尙つと／＼問題生活のために悩まなければならぬと思ふ。僕等はトルストイが問題としイブセンが問題とした生活を問題とし生活とすることを以て終つてはならない。僕等は彼れを踏み臺として彼れ等以上の新しい世界を見、更に深い人生問題を提供しなければならぬ。來るべき新時代の文藝はトルストイやイブセンの天才を以て更らに彼れ等以



藝術の權威

吉田 絃二郎

近來我が文壇の思潮が一面深さに向つて進まうとするのに對して、他の一面に於いては廣がりに向つて展びて行かうとする傾向が倍々強くなつたやうに思ふ。

感傷的、咏嘆的、觀照的であつたものが赤裸々な自我の問題を提げて真正面に自我の闡明に向つて或ひは自我生活の要求そのものゝ實證に對して可なり多くの努力を費された。そしてこの努力は今日尙ほ最も思想界の興味ある問題として僕等の前に投げ出されてある。

自我問題、眞生活の要求問題と同時に不離の關係を持して多くの實際問題がまた僕等の眼前に數次提供せられた。近い例を引けばこの春の文士間の政治運動問題を始めとして、共同生活問題や近くは離婚問題や、兎も角數年間行き悩むでゐた我が思想界に小ひさいながら一種の實際問題が數次提供せられて、僕等の思想生活上に多少の刺戟や色彩を與へた。更らに近くは八月の早稻田文學に於いては天溪氏の文士と經濟問題のことが論ぜられたのをきっかけに、今月に入りてこの方面に對してまた多くの人々の議論を聴くことができた。同時に一青年の自殺は端なくも文藝と青年教育といふやうな問題をも惹き起した。八月の中央公論はその創作欄の全部を問題文藝のためにさいげた。その作品の良

たかも知れない。けれども彼れは花々しき王者の生活を求めずして野の貧しき牧者たらんことを望むだ。こゝに一個の家財を捨てんとして捨つることのできなかったトルストイ以上の誘惑があり、苦悶があり、勝利があつた。マグダラのマリヤを始め彼れの周圍には常にやさしい多くの女性があつて、彼れのために香油を灑ぐことを忘れなかつた。しかも彼れはその何れの戀にも愛にも美しく打ち克つことができた。そして彼れは醜婦をも美女をも或ひは貧しい媼をも癩病者をも齋しく「我が兄弟よ」と呼ぶことのできる愛の勝利に生きた。僕等はこゝにクリストの近代人的な苦惱と勝利とを見出すことができる。

僕等が今日苦惱することの深ければ深いほどその藝術は尊くその藝術は永遠性を持つてゐる。宗教と言はず藝術と言はず反抗と懷疑の土臺なしに築かれるものはない。僕等の藝術から僕等の宗教から反抗と疑惑とを取り除いたならば、それはコンエンシヨナルな藝術であり、宗教であつて、それは偉大なる古人の死せる紀念物を禮拜するに過ぎない。

新しい藝術の世界に立つてトルストイが思索した以上の人生を思索し、イブセンが問題とした人生以上の人生を味到しやうとする現代人の生活は、トルストイが苦痛としイブセンが惱まされた生活上の深さと苦しみとを持つてゐなければならぬ。

僕等の藝術をして尙つと深いものであり、最つと眞實なものであり、尙つと生命力あるものたらしめんがためには僕等自身の生活そのものが一層深い、眞實な、力ある内察、自己批判の上に築かれ、僕等自身の生活が先づ血と生命の犠牲をさゝぐる器とならなければならぬ。

上の苦痛に耐へ試煉に打ち克つの力を持てる者の上にのみ祝福を下すであらう。

來るべき文藝は十九世紀後半の破壊的な文藝の後を享けて何時までも惡魔的な呪咀、苦悶の底に沈溺してゐてはならぬ。けれども來るべき建設の曙光は決して相當するの犠牲をさしづけることなしには僕等の思想の窓を射し込むでは來ない。

暗黒を捨てよ、破壊を捨てよといふことは更らに新たなる暗黒と破壊とを見出せといふに他ならぬと思ふ。

ナザレの大自然は平和の國の建設を大理想として起つた。しかも彼れの生活の周圍をつゝむものは子をして親に叛かしめ、妻をして其の夫に叛かしむるところの破壊的争闘の努力であつた。彼れは平和の花園に劍を植ゆるものであつた。クリストに近代的な香ひを見出すことのできるのは實に彼れが劍の人であり、反抗の人であつたところにあるあのであるまいか。オスカア・ワイルドが彼れを以て最大の藝術家であるといふやうに想つたのも彼れが近代人的な矛盾を感じ、深酷な近代藝術家的の苦痛を惱むだところにあると想ふ。

モーゼスやソロモン以後久しく國威の振はなかつたイスラエル民族が待ち望むでゐた救世主は確かに豊かなる富力と強大なる兵力とを以てヨルダン川畔の亡國者を奮起せしむるだけの大自然でなからねばならなかつた。クリストの大自然を以てしてこのイスラエル民族の物質的欲求に氣付かなかつたことはない筈である。もし彼れが望むだならば或ひは彼れは昔カナアンの城々を陥れ或ひはゼルサレムの要塞を攻略したる彼のダビテ王の子孫を提げてローマ帝國のために一敵國を建設することができ

僕等は藝術の生活化——藝術即生活ではない——藝術家自身が一層彼れの生活を眞に生かしめんがために藝術を創造し、生活を思索せんことを希望する。尙一層具體的に言へば、僕等の藝術が一層日本人化されんことを要する。國民化されんことを望む。

僕等は今日まで多くの新しい思想の傾向を聞いた。或ひは自我の問題に、或ひは婦人問題解放に、或ひは個性、個人主義の問題に殆んど數年來の我が文壇の努力は費された傾むきがある。しかもそれ等の諸問題は今尙ほ僕等にとりて興味ある問題であり、*x*の問題である。

けれども僕は屢々想へた………

僕等は饒舌であつた、賢明であつた。しかも一人の十字架を擔ぐものがなかつた。主義のための一人の犠牲者がなかつた。あまりに平易な問題の解決法であつた。

けれども餘りに容易な解決の後に僕等は果して何を得たであらうか。僕等は近代的な思索の方法を教へられた。けれども僕等はまだ近代生活を生活しなかつた。僕等は日本人としての生活を眞面目に見ることをしなかつた。

多くの僕等の先輩は僕等の生活を最つと複雑にしなければならぬ、それでなければ眞實の大藝術は生れないといふ。これは一面の眞理であるかも知れない。けれどももしこの複雑といふことが近代の歐洲人の生活、更らに具體的に言へばロシア人のやうな生活、獨逸人のやうな社會組織といふやうなことを意味するのであるならばこれは到底望み得らるべきことでもなく、また無意義なことである。

僕等は僕等日本人としての生活の方法を一層人間的にしなければならぬ。僕等は僕等が日本人とし

クリストは彼れが創造した宗教問題の實際的解決のために彼れの血をさゝげた。希臘文明の偉大なる思索家はソクラテスであつた、彼れも亦自己の提供せる眞理の實證のために彼れの生命をさゝぐることを辭せなかつた。

僕等は近ごろ我が思想界が多くの實際問題を取り扱ふ機會に接したことをよろこぶと同時に、また我が思想界殊に文壇の人々が自己の問題を掲げて常套的な舊習慣舊道德に反抗し、これを破壊せんとする努力をよろこぶものである。けれどもやゝもすればその破壊、その反抗が實彈を伴はぬところの空砲であることを悲しむものである。文藝復興初期の歐洲思想界がたゞ一圖に埋もれたる古希臘文明の華照にあこがれたやうに、僕等の周圍はやゝもすれば歐洲の十九世紀文明が遺して行つた驚異を驚異するだけに止つてゐて、僕等自身の生活の上に樹てられた近代主義の解釋を解くことを懈つてゐるのではあるまいか。

しかし昨今問題文藝などといふことが提唱せらるゝに至つた動機として、必ずそこに生活上の苦痛な、眞剣な刺衝が潜んでゐることを想像することができる時に、僕等はこの傾向を以て眞面目な思想界の好傾向として認めたい。

僕等が思索することが眞剣であり、僕等が生活することが眞剣であればあるほど、過渡期より建設の時代に入らんとする藝術は一層抽象的より具體的なものとなり、一層具體的な問題解決のために努力を惜しまないであらう。

がら僕等は僕等の人生を想へなければならぬ。袂を以て顔を掩ふやうなことをしてはならぬ。藝術の權威はこゝに生れる。

僕等はたゞ彼れ等が舊い道徳に反抗したといふのみを以て彼れ等を誹ることはできない。僕等は彼れ等の行爲がたゞ一の浮氣や移り氣や興味から生れたのだとするならば、彼れ等の行爲は嚴正な批判を持たなければならぬと思ふ。しかし萬一それが誤れる見方にせよ、眞劍な動機から出たものであるとするならば僕等は別様の批判を與へなければならぬ。僕等は往々にして偽善者の慈善よりも、子供のやうな生正直な男の過殺を有意義に思ふ。

思想の實行者と思想を自己行爲の辯解に使用する者との間には天と地ほどの逕延がある。僕等は今日の我が思想界の動搖不安に對しては一言半句の批判をもちろめにしてはならぬ。しかしこれは藝術家に對する世の人々の取らなければならぬ態度であるが、同時に僕等は思想家乃至藝術家彼れ自身に對しても責任を持たせなければならぬと思ふ。即ち思想家或ひは藝術家の權威は彼れが豫言者であり、革命家であり、救世主であるところに存すると思ふ。もし超人なる言葉を借りるならば藝術家即超人でなければならぬ。或ひは最も偉大なる凡人でなければならぬ。古來多くの宗教家は自己の思想の眞實のために自己の生命と幸福とをさへげた。そこに彼れ等の豫言者として宗教家としての權威があつた。近代藝術の權威を築き上げんがためには、僕等は多くの犠牲者を發見した。しかもそれはクリストの十字架の如く悲壯なる生活の犠牲であつた。

豫言者を以て立ち、革命家を以て起つところの藝術家は社會或ひは同胞に對して彼れは無限の責任

ての歴史を受け継ぎ、日本人としての情調を持ち、感受性を持ち、理智を持つてゐることを自覺しなければならぬ。そして日本人としての思索の方法、生活の方法を想へなければならぬ。

僕等が戀してゐる女は日本の女である。トルストイの女性でもなく、ツルゲニエフの女でもない。

また僕等が交渉しなければならぬ人々はドストエフスキイやゴルキイの作品に出て来る男や女でもない。僕等はどこまでも僕等と同じ歴史と習慣とを持つた日本人の間に生き、日本人の間に思索しなければならぬ。しかもそれは自覺せる日本人の心と眼を以てしなければならぬ。

文士の經濟問題が論じられ、共同生活の實行者が出て來たりするのはやがて僕等が日本人として僕等の生活問題を解決し、僕等が日本人として藝術を作らんとする日の近づいて来るがための前提であらめたい。

僕等が久しく感じてゐた不満……イズムを想へる、けれども犠牲の器をさへげない……は、僕等の藝術が眞實に國民的に眼覺める時に充たされなければならぬ悲壯なる運命であると思ふ。

小ひさな青島の要塞を陥れるだけでも幾百千の人命と億を以て數ふるほどの財力を費したではないか。人類を光被する大思想が生れんがために、大藝術が生れんがためには幾多の生みの苦痛と犠牲の血は永久の眞理の前にさへげられなければならぬ。

姑殺しの嫁、文士の離婚、青年の自殺、共同生活の主張、幾多の悲慘なことや眞剣なことやが發生して來るにちがひない。僕等はそれをたゞ新聞の三面記事として見送してはならぬ。またどんなにそれが悲慘なことであらうとも面をそむけてはならぬ。だ、だ、と溢れて來る血汐を眞正面に見つめな



宗教は名詞か副詞か

岸 本能 武 太

宗教は名詞か副詞かと云ふ題は、一見奇異に感ぜられるであらうが、實は私にとつて眞劍の大問題である。現今私は重もに英語の教師をして居るから、文典といひ、作文といひ、譯讀といひ、毎日語學に親んで居るのみ、従つて宗教にまでそれに因んだ言葉が出て來た譯である。宗教は名詞と見るべきであるか、若しくは副詞と見るべきであるか。これ實に大問題であつて、冀くは之に對する私の今日までの研究を述べて見たい。

何れの國語も同じことであるが、その國語にある凡べての言葉を幾つかの種類に分ける。英語では之を名詞、代名詞、形容詞、動詞、副詞の五つと、之に前置詞、接續詞、間投詞の三つを加へて、八品詞と云ふ。此の中でも、名詞の定義は明確であるやうで、實は漠然として居るが、要するに物の名である。目に見える外界の物體の名でも、又は目に見えない心の働きでも、苟も物の名と云ひ得るものは皆名詞である。

を感じなければならぬ。彼れは彼れが選んだ新たなその生活の方式に對しては極めて明かに自己の思想を解明し告白するの義務と好意とを要する。

彼れが幾多の苦痛を忍び、侮辱に耐へ、彼れの生命をさへげて人類の眞生活を發見せんとする努力にのみ、僕等は藝術の權威を認める。

僕等は現在の我が思想界の傾向を悲觀しない。同時に僕等は日本人的に眼醒めた新しい思想家の思想及び藝術に對する宗教的敬虔と宗教的犠牲とを要求する。

僕等は自己行爲を辯護せんがためのイズムを要求しない。僕等は僕等のイズムを立證する生活行爲を要求する、それがどんなに高價な犠牲であらうとも、こゝに藝術の權威が生れる。藝術家であり、思想家であることは、決して彼れの生活をして世俗的に幸福ならしめることではない。彼れは最も自己の生活を苦しみ、最も強く自己の矛盾を感じるものでなければならぬ。彼れの生活は犠牲者の生活でなければならぬ。

「彼れは藝術家なるが故にこれこれの反道徳行爲は恕すべし」といふ批評は藝術家に對して好意を持てるやうであるが、實は藝術家を侮辱したものである。僕はむしろ「彼れは藝術家たるが故にこれこれの行爲を敢てしたり」と言はなければならぬ。藝術家たると否らざるとを問はず反道徳的行爲は飽くまでも反道徳的行爲である。たゞ彼れの行爲をして價值あらしむるものは彼れの行爲が眞實のものであるか、彼れの行爲が舊き殿堂を壞たしめた大宗教家的な謙虛な敬虔な心に充さされたものであるか、犠牲者の眞實味を持つてゐるか否かにある。

僕等が生れて來たのは幸福のためではない。僕等は苦悶、苦闘のために生れ、更らに大なる苦痛を味はんがため死ななければならぬ。少くとも藝術の權威はこゝに潜むてゐるのではあるまいか。

れば、精神的の關係と考へる宗教もある。併し此の様なことは暫く措いて、兎に角拜せられる神と、拜する人との交通即ち關係が宗教であると云ふことだけは、云ひ得られると信ずる。

宗教をば斯く神と人間との交通であるとして、さて此の交通は、名詞と云ふ可きものであるか副詞と呼ぶ可きものであるか、將又兩者の何れでもないで別のものであるべきか。此の點を考へて見たならば、宗教の本質を、比較的明瞭に闡明することが出來はすまいかと思ふ。

今此の目的を達するが爲めには、第一に、宗教と云ふ形容詞の附き得る凡べての物事、即ち宗教心の現はれる凡べての方法や形式を考へて見ねばならない。宗教には名詞と見るべきものが澤山ある。

此等の中の隨一は、本尊である。基督教では獨一眞神を本尊とするが、佛教では釋迦や阿彌陀や大日や不動を本尊とする。神道には八百萬の神々があり、一神あり、多神あり、魂魄あり、偶像ありと云ふ風に、千差萬別だが、併し何れにしても神は神であり本尊は本尊である。又此の本尊に對して即ち人間信者即ち崇拜者がある。更らに又、一宗の開祖なり教祖と云ふものがある。佛教では釋迦、基督教では基督、儒教では孔子といふが如きが夫れである。併し一方では全く開祖のない宗教もあるので、宗教は開祖を有するものと、有せざるものとの二種に分つことが出来る。前者は之を國民的宗教と云ひ、後者は宇宙的宗教と云ふ。日本の神道の如きは即ち前者で、一人の教祖が設立したと云ふよりは、寧ろ何時とはなしに出來上つたもので、全く個人的の教祖はない。猶太教然り、埃及の宗教も亦然りである。

宗教には教義があり、信仰個條がある。基督教で云へは天地は神の創造であつて、彼は愛に輝き正

副詞に至つては、之を高等文典で云へば、品詞中の何れをも形容し得るものであるが、普通には動詞、形容詞、或は他の副詞を形容するものとなつて居る。併しながら副詞の最も大切な職分は、動詞を形容することである。本来英語の *verb* (動詞) といふ文字は、單に「言葉」といふ意義を有するに過ぎないのだが、言葉の中で動詞が一番重要である處から、後には「言葉の中の言葉」と云ふ意味で、動詞を *verb* と云ふやうになつた。彼の「聖書」を *Bible* と云ふが如きも、本來は單に「書物」と云ふ義であつたのが「書物中の書物」と云ふので、「聖書」と云ふ意味に轉訛したのである。副詞の *adverb* の *ad* は *to* の意で、即ち「動詞にまづ附け加へる」と云ふ意義である。八品詞の中でも、重要な動詞に附くのであるから、副詞も亦重要なものの一つである。

二

抑も宗教とは何であるか。之は非常なる大問題たるを失はない。古來多くの哲學者、倫理學者、宗教學者が、之に對して種々な定義を下して居る。而してその定義も、人により處により、種々内容を異にして居る。併し議論は兎も角も、宗教は等しく宗教であるに相違ないから、異なる宗教の中にも又自ら共通な分子があるに相違ない。そこで凡べての宗教に通じた眞髓と云つたやうなものが、手短かに言へやうと思はれる。而して「宗教は神と人との交通なり」と云ふのが、一般に異論のない共通の眞髓であるらしい。固より神と云ふものが、如何なるものであるかは、時により處によりて、相違して居る。又神と人との交通といふことが、丁度何程の意味を有するか。物質的關係と思ふ宗教もあ

て直ちに宗教そのものであらうか。此等是如何にも宗教の存立に必要な方法であり、缺く可からざる道具であるとは云ひ得られ様か、此等が直ちに宗教そのものであるや否や、これは再考を要する問題である。如上の如き名詞の集合が、果して宗教そのものを組織するや否や、我等には慥に之を疑ふ餘地がある。

然らば宗教とは何ものであるか、神と人との交通とは、如何なることを如何にすることであるか宗教の形式は略ぼ明白になつたとして、宗教の眞髓即ち宗教の本質は、再び曖昧模糊となつた心持ちがする。

四

昔時野蠻時代の宗教と今日文明時代の宗教とは、凡べての點に於て大に異つて居る。人は進化の動物であるから、常に變化して居り、又進歩して居る。智識も進み又徳性も進んで居る。そこで人心の推移や社會の變遷に伴れて、神即ち本尊が異つて来る。恰も水のやうに、神は之を容れる可き方圓の器に従つて、様々に變ずるものである。人が變る以上は、その變つた人の心に宿る神も亦變るは當然のことである。成る程神そのものの本體は、萬古不易かも知れないが、それを受ける器が變るから、その人に取つては神が變つて見えるのである。たとへば鏡が違ふから、之に映る姿が異なるは自然の事である。或る哲學者は「初めは神人を造り、後には人神を造る」と言つたが、こは實に意味深長なる言葉である。故に斯く神が異なる以上は、此の異つた神との交通も亦、自然に異なるが當然であるの

義に閃めいて居る。神は罪ある人間を濟はんが爲に地球に基督を下した。人間は各自の信仰により基督の救済によつて天國に入り得るとなつて居る。難易や淺深の差別こそあれ、一つの宗教が存在する以上は、何か教義があるに相違ない。これも宗教を名詞と見得る一方面である。嘗に教義許りではなく、その宗教を運轉する祭司即ち教役者がある。僧侶、神官、牧師等がそれである。従つて禮拜をしたり説教をする會堂、寺院、神殿等がある。更らに會堂なり寺院なりで行ふ祭祀があり儀式がある。又其祭祀儀式を行ふには、音樂があり、舞樂があり、祈禱があり、秘法がある。是等は皆宗教の名詞と稱すべきものである、又之に關聯して祭日、祝日等がある、基督教では日曜を安息日と云つて大切な日として居る。日本では元日、上巳、端午、七夕、重陽の五節句があり、禊があり大祓がある。又その宗教の教義なり起源なりを書いた聖書があり經典がある。又信者各自が宗教を守る上に就いても、各個人の祈禱、讚美、懺悔、斷食、水垢離等がある。數へ來たれば、此の通りで宗教の中には名詞と見るべきものゝ數は極めて多數で、此の方面から見れば、慥に宗教は名詞であると云つて差支はないやうである。

三

斯の如くなれば、宗教は遂に全く名詞であつて、副詞と見ることは出來ないのであらうか。事實は寧ろ反對であらう。考へ様次第では、宗教は又何時の間か副詞になるものである。又斯く宗教を副詞的に考へて居る人々も少なくない様である。試みに考へて見よ、今迄數へて來た名詞的の分子が果し

俯仰して天地に愧づる無くんば、それで宗教の目的は達せられて居ると考へる人々が多くなつた。徒らに自己の利をのみ思ふことなく、社會公共の利益を計り慈悲博愛の精神を以て人々に交はれば、それが事實の宗教である。自己の職分に忠實であれば、それで宜いと云ふ様な考へが段々勢力を得つゝある。博愛と云ひ忠實と云ひ、これ等は皆活動を意味し又此等の活動をよくすると云ふことを意味する。所謂 *Do it well!* であるが、さて此の「よく」(*well*)と云ふのは副詞である。そこで宗教は遂に副詞となりつゝある譯である。名詞から副詞に進みつゝあるのである。今後の宗教は即ち副詞化した宗教であるべきで、名詞としての宗教は、己に業に時勢遅れの宗教で、遂に消滅すべきものであるかのやうに思はれる。

斯く宗教は名詞の時代から副詞の時代に推移しつゝあるが、さて考へて見るに、たとへば神の存在に就いては本當に眞面目に之を疑ふ者はないと云ふてよからうが、その神は如何なるものであるかに就いては、十人十色である。神は果して人格的のものであるか、或は全知全能至愛至仁のものであるか、此れが根本的に人々の疑を挿んで居る問題である。唯併しそこで宗教的、自然に副詞的になつたのである。神に關する觀念が動搖して來た結果、名詞としての宗教は人々の精神を支配することが六ヶ數なつて、その結果、宗教は宗教的^①と云ふ副詞になつて來た。即ち我等はたとへ宗教は信じないでも凡べての事を宗教的にすればそれによいと云ふ様な傾向が強くなつたのである。

で、即ち宗教そのものが異なることになるのである。

たとへば此所にお宮がある。毎年何月何日には祭禮がある。其時、街道の兩側には種々な裝飾が施され、多くの露店が出て大に賑ふ。神殿では儀式が行はれる。市人は馳走を喰べる。而して神に詣でて、口を嗽ぎ手を洗ひ、拍手三拜して、身體を祓つて貰ひ、守り護符を受けて歸れば、それで非常に安心して、自分と神とは接近し、其親みも強くなつたやうに感ずる。かの禊みそぎの式の如きも、半年の罪惡を清めるためで、再び新らしき人間となつて、神と交通するのである。斯く人間は祭祀や祭禮によつて神と親しみを深くすると考へて居た。

併しながら頭腦の進歩した人々には、斯くの如き考へは到底馬鹿らしきことである。古い型の宗教は漸次に排斥せられ超越せられて、終に基督教、佛教の如き大宗教が生ずれるに至つたのである。

かゝる必要に應じて現はれた基督教は、當初に於て極めて純潔なものであつたが、百年と進み、千年を経るに従つて、種々なる外來の分子が混入し、誤謬や迷信に過ぎざること迄が蔓延し、捨てねばならぬものが出來て來た。又學問の進歩と共に聖書の如きもその有り難味が餘程薄らいで來た。たとへば同じ基督教の中でも、ユニテリアンと正統派とは、萬事に於て非常な相違である。若し宗教が單に名詞としてのみ成立すべきものならば、双方を同じく宗教又基督教と稱することは出來ぬ事であらう。

進歩的人々、教育ある人々の間には、形式に囚はれた宗教は段々勢力を失つて殆んど無くなりつゝある。宗教は心の事精神の事であるから、外形の事ではないと云つたやうに、宗教の解釋法が違つて來た。聖書を讀まずとも、會堂に行かずとも、唯自己の爲す可きことを、正直にすればそれで宜い。

の心と調子が合うて居るといふことが大切である。此れが宗教の状態である。祈禱とか禮拜とかは、神から遠ざかり易く、又不調和になり易い我等の心を、神の心に調作する方法であり道具であるのであらう。

自分の心が神の心と調子が合して居ない間と、即ち神から離れて居る間は、實に不愉快であつて、従つて我等は厭世的になる。我等の心が宇宙の心天地の心と合體して居ると思ふときは、我等は極めて快活にはり樂天的になる。我が心が天地の心と調和し之と共に動いて居ると云ふ意識が、所謂宗教意識であつて、此の意識のために、音楽も必要であり、説教も必要であり、儀式も必要である。此の意識がなければ、此等のものは全く無用の長物である。

宗教の眞髓は神の心と人の心とが調和して居るといふ意識であるから、宗教は決して單に知識的のものではない。宗教のことは徒らに之を知るのみでは、何にもならない。宗教家と宗教學者とは區別せねばならぬ。宗教は意識である、經驗である。故に上述の如き境涯に到達しなければ、何處迄も宗教家となることは出来ないのである。宗教に關する知識は、宗教そのものとは何等の關係もないものである。斯く言へばとて、我等は又決して宗教を單に感情的のものであるとするのではない。宗教は神と人との交通であるから、その中には、感情もあるが、知識もあれば、行爲もある。要するに宗教は何處までも智情意の凡べて又思言行の凡べてを含む經驗であり意識である。

六

其處で將來の宗教は如何になるべきかと云ふ問題になる。今日では名詞としての宗教は消滅せんとして、副詞としての宗教が全盛ならんとして居る様であるが、つまり宗教は宗教としては消滅して仕舞ふのであらうか。我等は唯宗教的に暮らせばそれで宜いのであるか。又は宗教は常に名詞として存在すべきもの又せねばならぬものであらうか。此等は皆問題である。私は今此等の問題に關して少しく私一個の考へを開陳しやうと思ふ。

試みに改めて宗教は何ものなりやと問はんに、そは神と人との交通である。されば此交通は丁度如何なる内容のものであるかと云ふに、そは極めて漠然として居る。これを明らかにすることが出来れば、宗教の本質を明らかにすることが出来るであらう。

前にも述べた如く、昔は神殿や寺院に參詣し、或は祓ひを受け、或は香華を立てることを、神と交通することゝ考へて居た。けれ共今日ではこんな意味ではない。別に深い意味があらねばならない。

私の考へでは、神と人との交通は、即ち神の心と、人の心との調和といふ意味である。お祭りでもお祈禱でもその外何でも、兎に角神と親しくなつたと感ずるのが、その功能である。斯くして兩者の間隔即ち距離がなくなつて、兩方が相互に接近して都合よく調和することである。自分の心が神の心となり、神の心が自分の心になることである。此の信仰即ち自覺が無いと人生が心配であり不愉快である。そこで教育のない人々は、お宮へでも參り、お祓ひを受けたり、守護符を貰へば、それで安心が出来るのである。要するに私共の心が神の心と調和して居るといふ意識が、宗教の眞髓即ち根本事實ではあるまいか。樂器の音が巧に調和して居る時は、安心があり愉快がある。我等の苦心も宜く神

名詞的である。

七

私は今迄神と調和すると云ふことを幾度か繰返して來たが、或る人々の心には、抑も神とは何かと云ふ疑問が尙残つて居るであらう。私自らも此の問題には非常に苦しんだもので、之が爲めに日本でも神學を研究し、又外國までも行つて來た程である。

併し我等は誰れでも先づ第一に宇宙が存在することを認めるに相違あるまい。我等は皆その中に生れて來又その中に生きて居る。此の宇宙は決して我等の創造したものではない。否、宇宙は智に於ても又力に於ても遙かに我等以上の大なるものである。此の宇宙の本體はこれ即ち神である。我等は其處から生れて來た。我等の本源は慥に我等よりも大なるものである。我等の心が天地の心と合體して俯仰天地に愧ぢない様な心持ちになれば、それは實に宗教の奧義を掴み得たもので、我等が利己主義にあつたり、罪惡を犯したり、厭世悲觀に苦しむは、皆此の精神の調子が狂つて居るからである。人間の心と天地の心とが調和し、神と人とが合體すれば、其處には平和の大地が現はれ、満足の樂境が來たり、樂天の世界が開けて來る。

宗教は名詞なりや將又副詞なりやといふ問題を今一度繰返して見んに、一體神の心と人の心と調和した意識といふものは、何時出來得るものであらうか。我等は唯自分の職業なり本分なりを、眞面目に又正直に、やればそれで宜いであらうか。誰れでも直ちに氣が付く様にこれ丈けでは、我等は道德の範圍を脱することは出來ない。宗教家は更に一步を進めて、自己の本務を正直にすることによつて、自分の心が天地の心と調節し、従前に比し、自分と云ふものゝ非常なる擴張を感じ、自信自重の精神に富み、衷心に安心と喜樂を感じる様にならねばならぬ。天地の心と調子が合ふといふことの内容が智的に情的に徳的に豊富になり充實したものにならねばならぬ。正直に物事をすると言ふことの外に又その上に、神と共に動くと云ふ意識がなくてはならない。そこで宗教は副詞的である許りでは足りなくなる。宗教は意識である、状態である、即ち名詞である。此の状態に達するために、聖書を讀み祈禱をする必要がある。會堂に行つて説教を聴き禮拜をする必要がある。斯くして我等は自分の生活を神の生活の水準に引上げるのである。聖書を讀んだり祈禱をしたり、讚美を歌ふ間に、自分の心が伸びる廣がる高くなる。副詞的なる宗教の上に、名詞的なる宗教の形式や道具が必要になつて來てる。斯くして更に進んで精神的意味に於て名詞的なる宗教を會得し、之を實現せねばならない。昔の人は、物質的の意味に於て宗教を實現せんが爲めに、會堂を建立し、儀式を行つた。今の人は、精神的に神に近づき神の如くあるが爲めに、禮拜を行ひ瞑想をする。「爾等神の全きが如く全かれ」といふのは基督教の精髓であらう。我等は冀くば此の境涯に進まねばならぬ。「神と我れとは一つなり」と云ひ、又「我れは神の中に居る」と基督の言つたのは、實に味のある言葉で、宗教の極致である。宗教は實に

る。たつた今我々のをる建物、我々が乗つて家に歸る乗り物——こゝういふものゝ中で一つとして——その生れたての時には或人の心の中の單なる幻でなかつたものはなく、其存在が彼事實のお陰でないものはない。所謂文明の中に生活する我々の或ものは外の人々の思想の中に生埋め^{いまい}になつてゐるに過ぎぬ。我々はあの多くの思想を見、聞き、それに觸れる、そして其多くの思想が我々には我々の世界なのである。

しかし我々が此點に到達して、此地位を明かに見るや否や、已むを得ず別問題が我々に起る。即ち若し大建築と橋梁と驚くべき藝術品とを有する此文明世界が人間思想の體現と實現ならば、もう一つの、山嶽、樹木、偉大なる大洋、夕空などの世界——自然界——は何うだ、あれも外の生物、或は外の一人の生物の思想の體現と實現であるのか。我々が是等の事物に觸れる時には又是等の生物の思想と接觸してゐるのであるか。

巖石と樹木と瀧卷とが誰れかの思想の表現であると推想することは、或人々には稍不合理と思はれるかも知れないが、それは不可能であるといふ證明にはならぬ。原始的な野蠻人には（我々には極めて珍らしくない）文字を書くといふことが丁度極めて不可能な事に思はれるといふことを我々は知つてゐる。つい一寸前に、私は一商人の確かな話を聞いたが、その人は遠國の内地で、文明に全く馴れぬ人民の間にをつたのだが、其人民は一週一度づゝ一寸數哩離れた處に住んでゐた、別の歐羅巴人の處へ一籠の食料を送らなくてはならなかつた。其籠を持つて行つた土人は云ふまでもなく、鶏や、パンや、卵、或は何でも其中に入つてゐる外のものに甚しく心をそゝられて、或時、たまらなくなつて、



創造の藝術

— エドアルド・カアペンタア —

佐藤清譯

しかしながら此一通りの説明はよして、今は本論を進めやう。我々は最後の面白い事實（前號とこの論文との間に、テレパシー及びスピリチュアリズムの事を説いてゐる三節がある。この譯では不必要であるから省いた）。に就ては何事を考へやうとも、我々の心裡に甚だ明確なる過程が行はれてゐるのを我々は見る。先づ漠然たる感情或は欲望が第一に出生する。それから其感情の明瞭さと強さが生長する。それから明確な思想或は心象の形を作る。遂に此思想或は心象は我々自身には甚だ現實なものとなる。それから思想と感情が、我々の神経と筋肉、我々の習慣風習、顔の表情、身體の形體そのものの中へ傳はつて行く。結局は行動と外界に於ける我々の行動の結果に翻譯される。此過程に就ては何等の疑ひがない。斯くして我々は人間の中に不斷に行はれてゐる創造的思想の根源があつて、それが人間の身體を形成しつゝあるばかりでなく、人間の棲んでゐる世界をも大いに形成しつゝあるといふことを見るのである。實際我々が棲んでゐる家屋、庭園、街道、我々の着る着物、我々の讀む書籍等は此根源から生じたのである。

人間に知慧があるといふことは、證明することは出来なくとも、我々がそれを認めるのは不思議である。あなた方は私のうちに或知慧があるといふことを知覺してゐてくれるつもりで私はゐるが、私を感じてゐる、考へてゐる、といふことを絶對的に證明することは出来ぬ。あなた方が知つてゐるだけでは私は巧みに作られた自働器械に過ぎぬかも知れぬ。人は自身の行動及び運動と、私のそれとを比較して見て、私を感じてゐる、考へてゐる、といふことを推知するに過ぎぬ。斯くして、同一の理由で、我々は犬や猿の知慧を推知する。何故かといへば、彼等の運動も矢張多少我々のそれに似てゐるからである。

しかしデカルト及び其他の哲學者が動物は單に器械或は感情のない自働器械であつたと主張したことを記憶しなくてはならぬ。確かに人は生物解剖の教授連の或者が此意見を採用してゐるといふことを殆ど考へずにゐられない。

しかし蟲類、牡蠣類、樹木の如く、我々のとは極めて似てをらない運動をやる生き物に會する時には、そういう物が果して感情があるか、意識があるかに就て、甚しく疑ふやうになり、しかあることを認めることをする氣さへしないといふことは明かであるが、それは明らかに程度問題に過ぎぬ。若し我々の同胞男女に、それから、犬、馬などに、智慧を認めるとすれば、何處に、どの特殊な點に區別線が引かれやうか。實際我々が牡蠣に知慧を認めない重なる理由は、我々が犬の運動を理解し解釋すると同じ位によく牡蠣の運動を理解し解釋しないからである。しかし牡蠣自身の種類の一に對しては、一つの牡蠣は萬物中最も愛らしい聰明なものと思はれるかも知れぬといふことは、全く考へ得べか

其食料の僅かをとつて、それからそれを隠蔽して、いつものやうにそれを渡したが、それを受取つた人は籠から小さい紙片（それには勿論品物の目録が書いてあつた）を取上げて、それを見て、それから、お前はバン一塊と澤山の卵を取つたと言つた。土人は仰天して罪を白狀して罰を受けた。其事のあつた後、土人は暫く控へてゐたが、とう／＼又負けてしまつた——勿論其結果は同じであつた。彼れは其一片の紙片が極めて恐しかつた。それがフイーテイシユでありタブーであると思つた。紙上にあるあの小さい線や點などが何かの意味があるんだといふことには少しも思ひつかなかつた。いや、土人はこう思つたのだ。紙は生きてゐるのだ、それで自分のしたことをそれが見て、その人に告げたのだと。そこで彼れは爲すべきことを思ひ定めた。其次ぎに彼れがひもじくなつた時に、彼れは人の通らぬ淋しい場所に來るまで待つた。それから籠を取下ろして、恐怖と戦慄を感じつゝも、紙片を取出して、少し遠くへそれを持ち去つて、その紙片が土人（自身）或は籠を見ることの出来ない岩陰に隠した。それから遠慮なくこしめして、それが濟むと籠の上に立派にナプキンの皺を伸して、紙をもとの所に置いて、いつものやうに籠を渡したが、悲しいかな、駄目であつた、紙が一切を語つた。彼れは又罰を受けた。其時から彼れは此事をば望みないものと思つてやめてしまつた。

しかし此野蠻人が紙上の線と印が意味があるのだといふことを知るに長時間を要すとすれば、海又は夕空の線や、樹木と花卉の形體と色彩等は多くの觀念の表現であつて、大方幾時代かの間、其解釋を待つてゐるものであるといふことを我々が知るにも、長い時間かゝりはすまいか。

三

此議論のごく初に我々が謂はゞ人間の胸中に潜伏してゐるのを見、又後には適當なる事情の下に、生長して家となり或は外界に於ける或外の大なる客觀物となつた、あの小さい、壓縮された欲望或は要求といふものが、彼種子に如何ばかり精確に似たるかを茲で諸君に思出させる必要はない。今は地球をめぐる涯^{はて}しない枝を有する一の莫大なる樹の如き、縦横蜘蛛手の鐵道を見よ。嘗てあの樹は少年炭坑夫ジョルヂ・スチーヴンソンの胸中にある、小さい壓縮されたる思想或は感情の形をとつて眠つてゐて、彼れ自身以外の何人にも知られず見えないうたのであつた。

そして今頃はこの大地にあらゆる種類の植物と樹木の種子は幾千萬億となく横はり埋められ、目醒めを待つてゐる大なる地球の腦中の小さい夢の意象の如くに、長い冬の間眠るであらう。そして春が必要なる事情と共に來る時には、それが外界の表現と實現へ向つて突進するであらう。宛も一切の思想が残らず我々の中に於ける表白へ向つて突進するが如くに。

かくて我々の考へる如くに、此堅い地、及び偉大なる流動體の海、及び夢のやうな星雲から漸次幾時代を経て明確なる所謂生ける有機體に凝固したる不思議なる辰星系統を有する深夜の空でさへ——此偉大なる自然界は、人間界と同じく、表現と表明へ向つて何時も突進してゐる意識ある生命のパノラマであるといふこと、又書き物の上の此點や線、此石も星も暴風雨も、不斷に、我々の愛情を以て理解され解釋されんことを我々に訴へてゐる言葉であるといふことを見るは愈可能となるのである。

らざることはない。

確かに牡蠣や樹木の感情意識が人間或は犬のとは異なつてゐて、廣くないといふことは、全くありそうなことだが、其感情なり意識なりの程度や度合の強さ明確さに至つては全く異なる所はないといふことは殆ど疑はぬ。

我々の同胞の中に聰明なる自我あることを先づ第一に我々に信ぜしむるものは何であるか。どうしても表現へ向つて突き出て行く傾向を有する。意志目的即性格があるといふことである。ジョルヂ・フオックスを牢に入れ、鞭撻迫害するけれども、機會があると直ぐ行つて以前のやうに説教をする。我等すべてが其通りである。運不運のすべての打撃に拘らず、我々の生命は我々の真我と認める所の心の根から幾たびとなく生える。其真我を我々は表現せんとする。又表現しなくてはならぬ。そしてそれを表現することが聽て我々の生命そのものである。しかし木を取つて見ても全然之と同じことを我々は認める。有勢な一觀念が其木の生命になる。執拗已まざれば其觀念が其木を形成する。人は或型に隨つて好きだけ木の葉を切り摘むことは出来るが、葉の方では自己特有の形で生長するばかりである。枝を切り取ることも出来るが、別の枝がそのかはりに生える。小枝を取去ることも出来るが、其枝でさへ、その中に満ち亘る性格或は目的があるといふのは、若しそれを地中に植えれば、同じ形の別の木がそれから生ずるからである。最後に、其木の枝も根も切倒し、それを焚くことも出来るが若し一粒の種子が残つてをれば、其種子の中に、殆ど見えぬ一點に形成的理想が隠れてゐて、それが適當な事情の下に再び生えて生命と表現となるのである。

斯る集合であるとすれば、創造そのものが感覺なきものであり、單なるノンセンスであらう。(しかし確かにそういふことは無い)。しかし創造は思ふに我々が何時も我々の心と身體の中で進行してゐるのを見ることの出来る過程であつて、それに依つて形體が不斷に感情と欲望から生ぜられてゐるのである。そして、漸次に、益々限定を得つゝ、微妙不可見體から具體可觸體へと外進する。感情から思想へ、それから又行動と外界へ向ふ道で、我々は此過程を我々の心裡に認めることが出来る。是は一切人間藝術の基礎である。畫家、彫刻家、音樂家は何時も其美と完全の夢をば心の奥底から持ち出して來て、それに世の地位を與へてゐる。そして常に藝術家音樂家ばかりでなく、物を造る職人といふ職人は悉く之と同じ事をする。人間世界は此過程に依つて創造される。そして自然界が人間界と聯絡してゐるといふこと、又無數の生物が永久に自己表現に努力しつゝ、斯くして互ひに相接觸し交通しつゝあると推想したことは理由がある。

四

私が決論として言ひたいと思ふのは、斯く考へると、創造は莫大にして永久に新たになる藝術品であり、内部の意味が、常に全體に於てばかりでなく、極めて小さい部分に於ても、外形となつて行く永久の進化表現であり、自然は知慧と感情を傳へる偉大なる機關、無數の網のやうな機關であつて、此宇宙全體は意識ある生命の莫大なる相互交換の劇場であるといふにある。生物の無數の群衆及び體制と意識の無數の群衆は、自己の意見を吐露しつゝあり、又自己の心裡にあるものを表白しつゝある。

我々は寂しい尖閣の上に座して我々の愛する人々を自動器械と見るの不合理不可能なるを知るが故に、我々は友人等の知慧を斷定するのである。是と同じく、我々が動物や樹木や自然の顔を愛し且理解するやうになるに随つて、是等のものに對して知慧を否定することが不可能となる。例へば或美しい風景或は夕空を見るに當りて、我々は希臘人の如くに、樹木と植物と河流のうちに別々のプレゼンス或は精靈を知覺するやうに思はるばかりでなく、宇宙の心の庇護を感じするやうに思はれる時が確にある。即宇宙の心の庇護を感じるとはウオルズオルスが言つてゐる如くに、

愈深く混ぜられたる或もの、

其家は落日の光であり、

圓き大洋であり、生ける空氣であり、

蒼空であり、そして人間の心である——

即ち一切の思考するもの、及び一切の思想の目的物を推進め、

一切の事物に貫通する

運動と精靈である

其「或もの」の「宏壯の感」がそれである。それで創造とは無から俄かに事物を形成して、それに硬性を與へる力ある命令ではない。——然りとすれば、それは我々の經驗すべからざる、理解すべからざる過程である。然るに一方に於ては、之を物質分子の偶然なる集合と考へることは出來ぬ。如何となれば我々は斯る分子或は斯る分子の存在を經驗しないからである。そして若し創造が感覺なき事物の



宗教の二面

今岡 信一 良

一

題して宗教の二面といふのであるが、言はんとするところは寧ろ宗教の立體性ともいふ可きことであるから、嚴密には宗教の三面といふ方が、至當であるかも知れない。而して重に私自身の宗教經驗に照して之を述べ度いと思ふ。併し乍ら私は自己の經驗を以て直ちに究極の權威であると爲す者で無いといふことを特に御斷りして置く。

二

内面的に見て自分の信仰生活が何時頃に始まつてゐるかは明らかでないが、基督教の洗禮を受けたのは今より十五年以上も前のことである。當時私の經驗した宗教的生活は、極めて平和なものであつた。子供ながらも日毎夜ごとに信仰の満足に溢れた生活をしてゐた。日曜日は一切の任務を抛つて唯聖書を繙き、傳道を行ひ、祈禱をなす日であると教へられてゐたが、願はくは他の六四も皆安息日で

——人間の小孩といへども悉く生より死に至るまで不斷に其心裡にある所のものを表現し、表白し、意見を吐露せんと努力しつゝある。信ずべからざる速度を以て是等の知慧の音信は空間に閃めくのである。「朝の星は共に歌ふのである。光、音響、電氣、引力等の音信に到る處に浸徹するのである。近代科學の示す所によると、空氣と海と堅い地の骨組そのものが、相互間にある長い距離を隔て、針金或は一定の通路なしに、猶我々の思想を安全に傳へ得る波動機關であるかも知れぬと言つてゐる如くに、確かに我々の信じなくてはならぬことは、我々の知つてゐる一切のものゝ周圍に、いつも進行しつゝある、いつも其等のものから輝き出てゐる、又其等のものを撃つてゐる無數の振動は、又無限の意味と感情の使者であるといふことである。

宇宙を形成する知慧は疑もなく其發達たるや無限の種類と無限の程度がある。或者は空間の一點にあらはれるかも知れない。或者は遊星或は太陽系統を取圍むかも知れない。或者は調和統一してゐるし、或者は——我々のよく知る如く——互に猛烈な反抗或は戦争をしてゐる。しかも彼等は結局は一緒に包括されるのである。この世をば單に別々の戦ひを爲す生物や人物の闘技場と考へることは出来ぬ。如何となれば（一切の科學、哲學及び經驗が信ぜしむる如くに）どうしても一切の下にある大統一が已むなく存するからである。そしてこの一切の生物及び人物は一の研究の生と知慧に根を下ろさなくてはならない。その一切のものは結局深く生の共通目的を持たなくてはならぬからである。——そして其思想に解放があり、其の思想に安息があるのである。（後半）

的態度をとらねばならぬ。即ち宗教は教會を捨て、實生活に進入しなければならぬ。換言すれば實生活そのものが教會にならなければならぬ。従つて祈禱する間に勞働した方が善いといふことになる。否勞働こそ眞正の祈禱だといふことになる。徒らに聖書の研究に没頭するよりも、毎日の新聞に讀み入ることが更に必要である。新聞紙こそ我等に實生活の道を教ふる聖書である。夫婦喧嘩のうちに、神學や哲學の議論にも優さる眞理を發見することが能さる。赤ん坊の泣き聲のうちに祈禱や感話にもまさりて痛切なる教訓を學ぶことが能さる。要するに私の宗教生活の第二期にあつては、宗教は實生活そのものとなつたのである。而して實生活が戰鬪であるごとく、宗教もまた平和の情眠より目醒めて、人生の眞劍勝負を開始しなければならぬことになつた。

三

然るに何時の間にか私を斯くの如き信仰に満足し得ざる自身を見出さないわけにはいかなかつた。私はやはり平和を探めた。慰安を願つた。私は再び教會を求め。儀式に趨いて、其處に意義あることを感じ得るようになった。併し斷つて置かねばならぬのは、私が再び教會を求むるに至つたのは、曾つて宗教を平和のものとのみ考へてゐた當時の宗教に逆戻りしたのではないことである。再び私が求むるに至つた平和は、戦ひを含んだ平和である。唯の安息に非ずして、勞働を含んだ安息である。單なる平和の宗教に満足することを得ざりし私は、單なる戰鬪の宗教にも満足することが能きなくなつたのである。

あつてほしいと思つた位であつた。俗惡なる不信者の生活に對して、如何に宗教生活の神聖なるかに目を瞠らざるを得なかつたのである。私の屬してゐた教會は、聖公會であつたのであるが、當時を追懷して必ずしもそれが自分の爲に惡かつたとは考へられない、寧ろこれによつて確かな宗教一面を掴み得たと信ずるのである。要するに宗教生活の第一段は美しい平和と樂しい安息とであつたのである。

併し乍ら一度足を實生活に入るゝに及んで、私のこの美しい幻影を全く破壊し盡されてしまつた。この實生活といふことも、色々に考へられるゝであらうが、玆には唯常識的に考へて社會的生活に入つた時を云ふのである。而して此の實生活の中心的要素は、經濟問題と姓の問題であると思ふが、私が從來努力し來つた宗教的修養は、かゝる生きた問題に對して力のないものであることを知つた。麵麴を得る爲めに先づ金を得ねばならぬとき、又家庭の人となつて諸般の繁累にぶつかるとき、學生時代に養つた信仰の極めて無力なることも感ぜざるを得なかつた。これは獨り自分一個の經驗のみではないと思ふ。實際毎日の生活に思ひ惱んでゐる人々には、食てるか食へぬかと當面の問題であつて、神の存在といひ、基督の救濟といひ、凡て迂遠する閑葛藤にすぎぬのである、私は學校を出て間もなく、牧會に従事して日夕現實社會の人々に接觸した時、特に此の感を深ふたのである。

かゝることの必然の結果として、私の宗教に對する考へは變はつてきた。實生活は闘である。生存競争である。我等は闘はねばならない。我等は努力せねばならない。謂ふ所の平和も、謂ふ所の安息も、それは現實以外の世界にのみあるものであらう。單に平和と安息とを内容とする宗教生活は、要するに空想生活にすぎないであらう。従つて生存競争の現實社會を救はん爲めには宗教も亦當然戦争

□學哲の心中命生□

警醒社の近代思潮叢書第九編として表題の如き三並氏の論文集が出た。論文集といつても氏のは半以上地味な研究物が多い。中にもシユラエルマツヘルなどは堂々百頁に亘る論文で、これ丈單候としても充分價值あるものである。其他オイケンの歴史哲學等は氏獨特の評論紹介であつて、オイケン研究者の見逃すべからざるものである。本源的生命、等數篇の論文には氏の信念思想を窺ふとが出来る新秋の讀物として優なる價あるものだらう。警醒社發行
價〇・八〇

唯難然として併存するのでは、決して未だ宗教と稱することができない。淺薄なる平和の夢を破りて深刻なる現實の戦に目醒め、然も再び戦闘を超越して一層充實せる平和に向上する所、即ち、單に平和と戦闘との兩面を有するのみならず、更に之を超越するの一面を有する所に、始めて宗教的生命の本領を見る可きである。されば一度得たる回心の實驗を後生大事に保護することが、宗教の能事ではない。又入信の經驗を得たる後、再び罪惡の意識に襲はるゝことがあつても、必ずしもそれは墮落と稱すべきでない。生命の經路は決して一筋なものではない。特に宗教的生命の經路に於て左様である。平和そのものが難有いのではない。戦闘そのものが尊いのではない。要は平和より戦闘へ、戦闘より一層高き平和へ、一層高き平和より更に尊き戦闘へ、而して更に尊き平和へと、謂はゞ螺旋形を爲して限りなく向上發展して行く其の根本的動力を得るに存するのである。(八月十五日統一教會に於て述)

四

宗教は一切の煩悶と戦闘とを根絶し、永遠不變の平和及び安息を與ふるものであると信じもし、説きもする人は、少なくないやうである。併しながら、私はかゝる宗教觀には反對したい。ある時機に於て、絶對の安心立命を得たとか、或は大悟徹底の域に達したと信ずることのあるのは疑を容れないことである。併しそれが宗教の全體ではない、又それが一生を通ずるものでもないのである。思ふに平和安息といひ、大悟徹底といふは、比較的相對的の言葉であつて、それは必然的に奮闘努力若くは煩悶迷執を背景とするものである。奮闘努力若くは煩悶迷執の配量のない平和安息若くは大悟徹底がありとすれば、それを無能無力の抽象的死物にすぎない。私が第一期に於て經驗した宗教生活は即ちこれであつた。そこで私は死せる平和を樂しむよりも、寧ろ戦闘を欲したのである。併しながら戦闘の配影を有せざる平和が死せる平和であるやうに、平和の配影を有せざる戦闘も亦真正なる戦闘ではないのである。そこで私は新たなる意味に於いて、且つ真正なる意味に於て、再び平和と安息とを求め、教會と儀式とを慕ふに至つたのである。

五

宗教が單なる平和に止まれば死んでしまふ。さりとて單なる戦闘に止まれば、宗教たる所以がなくなつてしまふ。宗教は當然平和と戦闘との兩面を備へなければならぬ。但し平和と戦闘との兩要素が

する一般の人々の考方がやはり不注意だからだといふことになる。「神」は單に「超自然的のもの」として見做されてゐる。「彼」は自然的の「神」でない。「彼」は大きな廣がりにまでさへも非自然的である人生に於て同様に非自然的な或物があつてそれによつて多くの人々は「彼」を喜ばさうとしてゐる。

それどころでなく、「彼」と「自然」との間には溝渠があつて、それは「藝術」や思惟感覺の藝術的風習に致命的である。そして同じやうな方法でわれわれの「宗教」とわれわれの「想像」との間に溝渠が置かれてゐて、宗教には横過すべき翹がなく、藝術には響かすべき鍾がない。神學者や詩人には魂は二つの全く違つた性に合はぬ事柄——否を兩立すべからざる事柄を意味するやうに見えるのも屢々だ。われわれの信仰は魅きつけないしわれわれの美は支配しない。信仰と美とは何れも結合せる目的に向つて他方にその力を貸すにはあまり距離があり且つ疑深い。さういふことはすべてアングロ・サクソンの有神論から起る、その論は化身の原理によつて未だ不完全にしか基督教化されてゐな

い。さういふことはわれわれの「天啓」觀が器械的か分部的であることから起る。そしてその傷口は、「天啓」を央ば出來事と見ると等しく永遠の過程として見「神」を世界の外部の界限にその宮殿を有ち給ふ「王」としてよりも寧ろ内在する「靈」として見る習慣をわれわれが獲得するまでは決して癒されぬだらう。遠くに居る「神」、外部的の「神」、終始「自然」の中に若しくは魂の中に干渉する神は、「藝術」と兩立する「神」ではない、そしてまた信仰の爲に非常に善い神でもない。

二

しかしわれわれは「和解」の條件を知りつゝあるのである。われわれは「神」のことを考へるやうになつてゐる、遙か離れた「神」としてかく抽象的方法に於てさうするのではない、近いまた具象的な神として。われわれは「神」を「自然」の不斷の基礎や呼吸として、自然に遍通する現前として、自然を支へ、促す靈として考へることを學んでゐる。われわれは「彼」を生ける眞の「神」——生ける、そ

フオサイスの宗教的藝術觀

佐藤 繁彦

彼の筆は、力があつて、而かも豊かさを湛へて、いのちに充ちて。プロフエチックだけではない。どの著書を見てもさう思ふ透徹味——さうしたものに觸れたいなら、また熱愛味——さうしたものに突き當てたいなら、そしてそれらを宗教に於て見出したのなら、彼に來るがごとく。Religion in Recent Art の中にホルマン・ハントを論じてゐる始の方に、宗教と藝術との關係を述べてゐる所がある。殆どその全體を譯すなるべく原文を因はせて。以前の譯で再び照し合はせる勞も取れぬが。

「藝術」の可能は人々の「神」の觀念に懸るといふことは、或人々にはあまりに言ひ過ぎたことに見えやうが、哲學的人人にはさう見えなひだらう。若し予が言ひ方を變へて、「藝術」は「宗教」に懸ると言ふならば、それは多少一層親しく尤もらしく聞えるだらう。しかしそれは同じことになる、わ

れ／＼の「宗教」はわれ／＼の「神」思想に懸るから。「神」に關する或考方は「藝術」を不可能にする、他の考方は「藝術」を避け難くする。ユダヤ人のそのやうな「神」概念はそれが多神論にさせるやうに「藝術」を不可能にする、眞の基督者のやうな「神」概念は「藝術」を使命として避け難くする。基督教の藝術は實に美の異教主義に對するわれ／＼の信仰の使命である。われ／＼は最高のまた引き離れた主觀に於て此世界から離れて居給ふ「一つの實在」と「神」を考ふるかもしれぬ——それは自然神教信者の「神」概念である——そして、その場合に、われ／＼はユダヤ人やトルコ人や、此前の世紀の不信者と同じくもはや藝術を有することは出来ない。なぜ一般の人々が「藝術」をかほどまで注意しないかといふ一つの大きな理由は「神」に關

方法に於て可能ではない。藝術は野蠻的のことに以上。若しくは奇異のこと以上には上らないだらう。若し高尚な藝術がかゝる環境に生じ得たとしたら、それは基督教であることを主張し得なかつたらうし、また主張され得なかつたらう。「地は禍る哉」の如き本文で始まる宗教に對してはどんな藝術も可能でない。

「藝術」は「自然」でない、「自然」以上である。それは意識的叡知の或度合を以て移し注がれた「自然」である。繪畫は「自然」の補布でなく、受身だけではなく衝き通すがやうな「自然」に對する感情を有つて居る人間の魂によつて反射され、着色され、解釋された「自然」である。それゆゑ、「藝術」に於て主なることは、反對し解釋するやうに置かれてある靈の本質、魂の神髓である。「自然」にまでの鍵は人間の本性である。若し心が「自然」を敵として若しくは見知らぬものとして見做すならばわれ／＼は眞の「藝術」を有つことは出来ない。若しわれ／＼の靈が「自然」を呪はれたものとして神に棄てられたものとして考へるのが習慣になつて

ゐるならば、カルヴィニズムがスコットランドに残らなかつたと同じく、われ／＼はもはや藝術を有することは出来ない。すべてのものは藝術的狀態——靈的活力、人間とその信條の穿入を見込めることに轉ずる。人間の靈は「自然」にまでの鍵である、予はいふ。しかし人間の靈にまでの鍵は「基督の靈」である。自然的人間だけでは人間以下の自然に對して何等終極の理論を供給しない。「自然」はその冠と鍵とを人間の本性に於てのみ、しかし再びその充實と歸趣とを「基督の本性」に於て見出すものとしてのみ受け取る。しかし「基督の本性」は「神の本性」によつてのみ理解し得るのである。われ／＼の「自然」觀を決定し、從つて「藝術」の可能を決定するものはわれ／＼の「神」思想である。

藝術は贅澤品でない、藝術以外何事にも手を出さぬ人々の發明でない、宗教を有つにはあまりに輕浮の人々の追求ではない。藝術は人間本性の必須である、それは眞の、大きな、人情ある、神の如き宗教の必須である。あらゆる人が「藝術」を理解せねばならぬわけではない、しかしそれは人類に必

は「彼」によつてすべての生命は生きてゐるから、眞の、それは「彼」はすべての物の中で眞であり、自然」それ自體の本性そのものであるから——として考へるやうになつてゐる。それは、心ずしも聖書のそれだけでなく、基督教の「神」概念である。「彼」は「自然」が不斷の「化身」で生ける「啓示」である「神」だ。ユダヤ人は確かに「神」が啓示を與へたことを信じたが、「神」が啓示でありしことを實現しなかつた。ユダヤ人は「神」が絶えず語つたことを知つたが、「神」が絶えず語りつゝありしこと、絶えず語るに相違ないこと——世界は「彼」の自己表現であること、「彼」は包み隠しのない「神」であること、自らを示すは「彼」の本性そのものであること、世界や魂の全體の組み立は「彼」の自己顯現と共に響いてゐることを知らなかつた。

靈界は封緘されることなし

世の魂閑ぢ、汝の心氷り居れり

ユダヤ人は、キリストがわれ／＼に實現することを教へられた如く、「神」に關してゐる。開いてゐること (openness) を實現しなかつた。今や「藝

術」を可能にするのみでなく「基督教」に避け難くするものは、「自然」に内住する基督、思想、言葉としてかく基督教者が「神」を觀念することである。「彼の永遠性」に人間の思想や情愛を歸することが「神」を貶することであれば、その時は勿論眞に宗教的な藝術は可能でない。「神」はわれ／＼からまたわれ／＼を最も喜ばず凡てから餘りに遠く離れてゐる。しかし基督教が「神」の貶下でなく、「彼」の啓示であるとすれば、その時は人的本性は神的意思のものである、そしてそれと共に「自然」は全く聖別される。自然は「永遠のもの」を永遠に語る事の偉大な總體である。常に現れてゐる「神」のその聲を解釋することは基督教の必須な一つの事になる。そしてかくしてわれ／＼はかゝる宗教に於て全く相容れぬ二つの事柄を有つてゐる。一方には「科學」があり他方には「藝術」がある。

三

若し「自然」の中に「神の靈」がなく、自然の上に呪詛だけがあるとする、と「藝術」は決して高尚な

眞理である。これらの眞理は「神」、人、自然の一致を組織する「理性」の解釋である。これらの眞理は「科學」、「宗教」及「藝術」の基礎にあるところの眞理である。そして「眞理」は眞なるのみならず美である。魂はかくも愛らしいからかくも尊いのである。そして道德的に缺點なき魂としての基督は全く愛らしい。「基督の魂」は單一な美はしい靈であるだけでなく、人の全體の魂をして偉大にまた光榮あらしめる是れ等の力や原理の基礎と生ける統一とを組織してゐる。若しも人間の魂が「藝術」の最も美しい題目であれば、「基督の魂」は「藝術」に對して獨專的でなければならぬ。心にまで知られた最も偉大な情熱は、基督にまでその關係によつて覺醒されてゐる。これは「藝術」が全然分離さるべき情熱の領域であるか？ 基督と結合せる思想は、われ／＼が知る中で最も深い、美しい、尊いものである。「藝術」は、これらの思想をそれ自身の方法に於て示唆すべく、解釋すべくないか？ 若し「藝術」それ自身が彼女自身の束縛から「自然」を解放することであれば、そして魂に

よつての解放であれば、「藝術」はその魂の解放に於て若しくはその魂の解放者に於て何等の趣味をも有たぬか？ 若し「藝術」が「自然」の偉大な美の元理によつて感奮せしめられるならば、藝術は人間の靈の奥深い美から何等の感激も得ないだらうか、それとも靈の美を示唆すべき何等の力をも有たぬだらうか？ 基督教の靈の眞理が眞ならば、これらの眞理は壯んに、魅力あるやうに、眞である。これは「藝術」の當局者によつて説明されずに終らねばならぬ眞理の光輝の唯一の領域であるか？ …… 基督教の眞理と教理とは、單一の魂や、宗派や教會だけの秘密や光榮でなくして、人類の最も偉大な、最も柔しい、最も聖なる心に於ける人類の秘密や光榮であると知られる時のみ、「藝術」に對して適當せる主題である。眞の世界なることが偉大な基督教藝術の根本的條件である、宗派はその破産である。神學は神の魂の諸原理を取扱ふ。…… 藝術は系統神學と直接には關係しない、しかしそれは宗教的情操よりは遙か以上のものと關係する。偉大な宗教的藝術は科學的神學

要である、人類が神の姿に絶えず近づいて上つてゆくものとすると。どんな宗教もそれが偉大な「藝術」を勵まねならば眞の宗教ではあり得ない。そして「藝術」は「科學」よりも「宗教」の本質に關係が一層深いのである。それは心に一層近く来る、それは心の言葉を語る、そしてそれは靜かに實際的の智慧を宣言する、それも抽象的の眞理に於てはなく、快く具體的であるが爲に常に記憶すべきまた力ある形式に於て。……「藝術」は魂の調和を養ふ。それは罪ある人間を「神」に和解させしめぬ、彼を彼自身と和解させるに役立つ。それは言ひあらはし得ない平和を與へはしない、しかしそれは偉大な靜和をつくる。それは魂を「自然」との調和に置く、それも彼自身との調和にさへも、そしてそれは「自然」の井に生ける靈と情を同じうするやうになる。然り、宗教は「自然」と魂とを説明するやうに力めなければならぬ。偉大な宗教は「永遠の靈」の力に於て彼等を調和する。……偉大な宗教は「神」を非常に近く持ち來す、われ／＼人間の情熱や運命が「彼」に於て見られ「彼」が彼等の中に

見られるほど。……「藝術」は靈的解釋の問題である、予は繰り返へして言はなければならぬ。それは「靈」による「自然」の解釋である。しかしそれがあり得る前に必要なことが一つある、それ自體にまでの「靈」の解釋である。それは或宗教の問題である、しかしそれは基督の作用である。ヨーロッパの魂がヨーロッパの自我に啓示さるゝに至つた時のみ、われ／＼は世界がこれまで見た最も偉大な藝術に達したのである。それは常にさうなければならぬ。過去の最も偉大な藝術は基督教の藝術であつた、そして基督教の藝術は將來の最も偉大な藝術でなければならぬ。最も偉大な靈的の力はそれをして偉大な社會的の力たらしめる同じやうな必須によつて最も偉大な美的力でなければならぬ——それは靈的のものは完成した人の力であるから。

四

偉大な基督教の眞理は教會や著書の眞理でない、人間の本性組織そのものに於ける人間の魂の

では決してないこと、そして「彼」の本性はわれわれがわれ／＼自身の靈的本性を有つてゐることをわれ／＼が語るよきわれ／＼が意味するものであること等を知らねばならぬ。われ／＼がそれを知るとき、人性を神的に擴大する凡ての藝術を造る「神」との紐をわれ／＼は有するのである。そしてわれ／＼が靈によつて運ばれてゐる凡てを知るとき、われ／＼は超自然的希望を有つのみでなく靈的信仰を有つのである、その信仰は理性が非常に推測し強度に嘆美するものよりは一層深い理性を信ずるのである——それは、靈に對しての靈の證明によつてその信仰は知るから。靈的即合理的信仰の宗教によつて活力の充ちてゐる「藝術」は、われわれの靈の最高の歸趣を明かるみに持ち來し、またわれ／＼自身の最も崇敬心ある推量よりも確固な地盤にわれ／＼を置く彼の偉大な歴史及偉大な魂の解釋に對して、藝術自身の方法に於て、常に非常に心を入れて居るだらう。(二四一—二五三)

戸山が原にて 小宅 鑑二郎

故郷の山にか見つる櫟の樹
戸山が原にかぎろひにけり。

秋草の深みに得行きはゞかりつ
虫を追はんもわりなきかなや。

寂しさや花ならましか是やこの
野菊ちひさく咲き連れてける。

山峽の草深き家の上框 母と
見やる宵の明星。(故郷にて)

一夜さを庭木に立てば月さやし
雨戸繰れども繰れどさやけし

峠より顧みすればはしきよし
紺青の海いと遙かなり。

海上の照島山の頂きの姫百合の花
戀ひにけるかも。(海岸にて)

の必須若しくは可能が蔑視される雰圍氣の中に榮えることは出来ぬ。……哲學的神學はそれ自身の表出方法を有つてゐる。その方法は「藝術」のそれよりも純であるかもしれない、或意味合では高等かもしれない。しかし永遠の心の偉大な情熱や、世界的魂の壯嚴な原理は「藝術」の方法若しくは趣味の外に全く出てゐることは出来ぬ、そして「藝術」はこれらの方法や趣味を人生に近くする「自然」との有機的生活的、脈搏的一致に於て表出し得るのである、そして一つの高尚な力に於て神學を宗教と結合させる。「藝術」はわれ／＼が知らぬものゝ姿でわれ／＼を喜ばし得るばかりでなく、われ／＼が知らぬものゝ啓示を以てわれ／＼を驚かすことも出来る。「藝術」はわれ／＼自身の魂の運動を反映し表出する力を自然の中に見出し得るのみでなく、一つの象徴主義をもそこに見出し得るのである、それは「神の魂」の示唆や、「彼」の心の原理や、「彼」の無限の生命の命や、「彼」の死の恐るべき神秘やを以て充されるやうに侵害なくば堪へるだらう。……「藝術」は具體的であらねばならぬ、そし

て靈的信仰の藝術は史的耶蘇によつてまた「彼」を説明しようとする力める靈的思想の史的傳説によつて非常に魅せられるだらう。「神」は單に超自然的であるよりは以上である、彼は事物に現在してゐる、そして「彼」にわれ／＼が頼り恃むことは單に希望よりは以上である、それは實現でもある。「神」は靈的である、否な靈である。「自然」を通り越してからわれ／＼に達し、それが自然以上のものである位のことしか感ぜしめない、われ／＼自身の臆るな直覺からわれ／＼が集める何物に於てよりも人類の靈的歴史に於て「神」はより多く明白に「彼」自身の心を語られる。われ／＼は神があらぬものよりも以上のものを知りたい。われ／＼は「彼」が「自然」以上であることを知るばかりでは満足出来ない。われ／＼は「彼」が本來あるものを知らねばならぬ、即ち「彼」が靈であること、靈は臆ろなことを意味するのでなく、的確な特點や特質を意味すること、人間の靈の最も偉大なもの、魂の最も完全なもの、品性の最も判然たる印象深いもの、これらは「彼」の啓示であつて——啓示を荷ふの

の爭議を解決し經濟上の平等主義を實現する手段として自由競争の絶滅資本組織の公有を主張するの」を意味する。乃ち嚴格に社會主義を徹底せんとすれば、到底現状と妥協し得ざるものなるは明かである。然し乍ら純理社會主義の主張は實際上不適當なるのみならず不可能である。現在に於て公平なる經濟學者は自由競争の可成的制限公有資本組織範圍の擴張を主張するも絶對主義を唱へず、又諸國に於ける社會黨が著しく國家的若しくは調和的となれるは事物必然の結果である。唯夫れ十八世紀以降、産業革命による社會生活の轉化、科學思想勃興に基く思想信仰の變遷あり、その結果として起れる一經濟狀態の逼迫及び之に伴ふ産業爭議の増加や二社會有機的觀念の發展や三民衆勢力の膨脹は國家を民主化すると共に社會化せざんば止まざるの勢を示し、自由放任主義は過去の夢と消え國家的手段により人民相互間の經濟問題を解決せんとするの思想が着々實現せらるゝに至れるの事實は否定す可からず。余は此の大勢を支配する思想を概稱して社會主義と名くるを以て寧

ろ便なりとする。蓋し(一)社會主義の語を純理的にのみ解する時は此の近世に於ける大勢を表象す可き語を缺くに至り甚しき不便を感じると同時に(二)事實近世の無政府主義、サンヂカリズムさては所謂社會改良主義まで凡て社會主義的思潮の產物なるが故である。

此の意味に於て現代獨逸は社會主義の最も發達せる國である。蓋し獨逸程國家の經營せる私經濟的事業の多く私人に立ち入りて國家自ら一切の解決者たらんとせるはなく、獨逸程組合としての労働團結、政黨としての社會民主黨が發達せるはその比を見ない所であるが故である。余は一々統計を擧ぐるの煩は此の種の雜誌なれば此處には遠慮するが統計だけでも此の事實を充分示してゐる。

人或は社會主義と軍國主義との相容る可からざるを説く。果して然るか。人或は社會民主黨と皇帝との相容れざるを説きその實證となす。果して然るか。若し然りとすれば獨逸の舉國一致は何を以て説明す可きか。

惟ふに皇帝對社會民主黨若しくは政府對勞働者

現代獨乙に於ける政治思潮の批判

— 此の短文を浮田和民、安部磯雄の兩先生に呈す —

松 枝 徳 磨

一、社會主義的獨乙

現代獨乙は世界の驚異にしてその將來は偉大なる謎である。此の驚異に因つて起れる所以を探り此の謎を解く Oedipus たらんことは我等の大なる義務の一である。

戰亂勃發以來世の近眼者亞流は今更の如く獨乙の研究を始め捕盜絢繩の愚を演じてゐる。彼等が遅滞ながら彼を知るは我を知る所以なることを悟つたのは稱す可しとするも彼等の眼光の片面的局部的なるは余の大に満足せざる所である。

諺に鹿逐ふ獵師は山を見ずと云ふが兎角に己の専門に偏して全體を忘れるものゝ多きは遺憾にたへない。例へば軍國主義の流弊に驚き之を以て自國を誤り世界に災せるものとなし更に進んでは獨

乙即軍國主義となし獨乙そのもの迄否定せんとするものがある。素より軍國主義の最も徹底せるは獨乙であり該主義が尠からざる危険を伴ふことは余の認むる所であるが若し此の一方面のみよりして獨乙を觀察し是非するならば他の重要な方面を閑却するの惧れがないであらうか。若し一の名辭を廣義に解して時代の傾向を表象する標語となすを得ば獨乙は軍國主義の國たると同時に社會主義の國である。吾人は此の點に深く留意せねばならぬ。先づ問ふ。然らば所謂社會主義とは何であるか。

社會主義と云ふ語に就ては種々の誤解があり誤解に伴ふ困難が少くない。事實此の語それ自體が甚だ曖昧で漠然たるものであるが普通は「經濟上

主々義者としての皇帝は執拗に特權を擁護し以て
 ホーヘンツォルレルン家の奉公の大義に光輝あら
 しめ世々子孫に傳へらる可き陸離たる世襲の地位
 を窺竄するものあるを許さないのである。従つて
 此の二重人格を具備する皇帝は半ば獨裁專制の基
 礎に立つ凡ての特權を保守し乍ら然も國力を一般
 蒼生の發達に傾注するを惜しまぬ。君主制と之に
 伴ふ政府の權力とは國民生活を斟酌した特殊の貴
 族社會主義の時代を實現せしむるに至つた。君主
 々義者は深い社會主義の思潮に會し以て新經濟主
 義の影響を蒙り之を十分に適用せんことを主張す
 るに至つた。精神上政治上の異常の内亂は正に高
 潮に達してゐる。此の渦亂中共和的革命社會主義
 に對抗して實質的發達の霸權を握れるは君主社會
 主義である。然り霸權を握つては居るものゝ彼の
 勞働社會主義の廣汎なる組織的努力は保守主義者
 をして危惧懊惱せしめずんば止まないのである。

(ロ、ビスマルクと社會主義)

獨逸に於ける政治的勢力として民主社會主義の
 勃興するや(一八六〇—七〇)ビスマルクは之を以

て君主制教會家族及び彼等の主張する物質的幸福
 の資源までも破壊するものなりとした。彼は所謂
 社會主義的思想の發表が犯罪なることを奏上し
 社會民主黨の唱導する社會主義を是認するものは
 科料若しくは禁錮に處す可き旨の社會黨鎮壓法案
 を計畫した。此の法律は政府の實力を以て十二
 年間強行せられたが然も該社會主義の思想を壓服し
 若しくは永久に投票數を減殺することが出来な
 かつた。

註、年 數

社會黨に與する投票數

一八七七	四九三、三〇〇
一八七八	四三七、六〇〇
一八八一	三一二、〇〇〇
一八八四	五五〇、〇〇〇
一八八七	七六三、〇〇〇

一八九〇年ビスマルクは議會に對して社會黨鎮
 壓法案の再布を望み之をして永久的法規たらしめ
 やうとしたが此の間新に即位した現皇帝が此の法
 規の實效を危うんで居たことは一般の竊に知れる
 所であつたが爲彼は遂に過半數を得ることが出来
 なかつた。此の年彼は退隱した。

の確執は軍國主義對社會主義の確執に非ずして官僚主義（若しくは貴族主義）對民主主義の確執である。軍國主義は直接武力的手段によつて國民勢力の膨脹については國民生活將來の保證を目的とし社會主義は經濟的手段即ち社會的立法によりて國民生活の安固と向上とをはからんとする。その手段に於て異なるも目的とする所は獨逸民族そのものにある。凡ての分立は民族心理に於て歸一してゐる。若し細精深透に現代獨逸の政治現象を觀察すれば、一切の矛盾は獨逸民族生活の點に於てその特質を失ふ。究竟的に云へば社會主義と軍國主義とは獨逸に於ては一個のリンクによつて結ばれてゐるのではあるまいか。

此處に疑がある、等しく社會主義と云ふも「上よりの主義」と「下よりの主義」との二派に分たねば解さざる疑がある。戰爭中は別として平素に於て何故勞働交換所を設け勞働者保險制をしき鐵道國有政策を取り幾多の國營事業を行ひ事實上社會主義的政策を行へる政府に對して社會民主黨やその他の勞働者に企業家等が猛烈な反對を取つて

ゐるか。惟ふに等しく社會主義的思潮に胚胎する社會政策と云ふもその行ふ人の趣意に於て一ならず。一般人民に對して國家全體より割り出して政府者が強行する政策と一般人民が自己の立場より打算して政府者に要求する政策とがあり階級觀念より出發して行へる政策と平等觀念に即して主張する政策とがある。若し獨逸を以て概括的に社會主義的國家なりと云ふを得ば獨逸には「上よりの社會主義」即ち貴族的（君主）社會主義と「下よりの社會主義」即ち民主社會主義とが相交錯せるものと云ふ可きである。此の二大思潮を認めずして吾人は内政上の紛議を解することが出来ない。

二、獨逸に於ける政治上の二大思潮

(イ) 二重人格者カイゼル、ウイヘルム

カイゼルウイヘルムは民主主義者にして同時に君主主義者である。民主主義者としてのカイゼルは時代の進歩思想を代表し獨逸國民の心智技能福利の増進せんとするに躬々として怠る事なく財貨と智識の普及を期し、身自ら經濟上獨逸を一變せしめつゝある君主社會主義を指導してゐる。君

諸君、何と驚いたか。獨逸では君主々義者が社會主義を以て舊王權を維持す可き「時代勢力」なりとして利用してゐるのである。何處かの國では尙之を破壊的だ危險だとするものゝ少くないのにあの軍國主義の權化と云はれる獨逸では國王が社會主義を行つて毫も怪しまないのである。官營事業が増す毎に雇人は新に官吏となり、一生の生活地位の保證を得て安心して働き、一定の制服を着し一定の服務期限を過ぎれば皇帝からメダルを頂戴して得々としてゐるのである。

(二) 民主社會主義

社會民主黨員は一部の社會から甚しく嫌はれてゐるが之が爲に却つて統一しよく秩序的組織を保つてゐる。貴族社會主義は發案權が王に存する場合には容易に貴族や大實業家や地位財産の稍低い階級（民主社會主義者の所謂白色窮民——White-color proletariat）やを羅織する。彼等保守の徒が國王の社會政策及びその他の政策に反對したのは年間二三回に過ぎぬ。

註、一八七三年の普魯西に於ける課稅法案、

一九〇九年のビュロー公の相續稅案
一九〇八年十一月のデリー、テレグラフ事件に際して反皇帝思想に賛成したること。

多くの場合彼等は政府黨となつて王權を擁護する。貴族社會主義は君主社會主義と提携する。

之に反し勞働社會黨即ち民主社會黨は新舊兩教會、一般學校、大學、大多數の新聞社、並に官僚的工業企業に對して權威尊嚴の滅絶を呼號する。彼等の思想たるや、四・二五〇・三二九人の哲學たり宗教たり政見たり慾望たるに外ならぬ。

註、一九一二年一月の總選舉に於て有權者總數

一二二〇六、八〇八中四、二五〇、三二九人は社會民主黨を扶けて三九七の議員中一一〇名の席議をば彼等の有たらしめた。

社會民主主義者の思想は精細該博、その黨員に適當な智識上の根底を與へ得て餘りがある。彼等の思想は黨員の家庭の隅々までも滲透する。社會主義倫理に關する巨多の物語は青年の間に流布する。社會主義的思想に出でたるドラマはあらゆる主要都市に於て演ぜられ愛黨の情を喚起す可き繪畫金言等は住家五十餘萬の壁上に掲げられてゐる

一方に於て共和的共產黨を壓服せんとしたビスマークは他方に於て獨逸國民の經濟生活に瀾漫せる國家社會主義に關する宏大なる計畫をめぐらした。之に因つて彼は勞働階級と握手しやうとしたのであつて彼はその宗教的勤王的確信より發せる思想及努力を以て社會改革に投げかけたのである
彼曰く――

「基督教國たるものは或る程度迄基督教の理想を徹底せしめんとを要す。特に隣人に對する扶助及び老人窮民に對する同情に關しては國家自らその解決の任に當ることを要す。」

「社會黨員に投ぜらるゝ票數の多少は不平人民の多少を表示す。――自らの境遇に不満を抱くは人情の常なり。自己の地位を改良進歩せしめんとするの願望は神の人に與へたる賜物にして社會黨員に投票する者は自らの境地を益進せしとの望を抱いて然かする者なり。」

後に至りてビスマークは工業保險法案の動機に就て W. H. Dawson に語つて云つた――

「余は國家が勞働階級の爲に存し彼等の幸福に同情を有する社會制度なることを彼等に認識せしめんとて彼等に利を啖はしたるなり。更に穿ちて彼等の心を收攬せんとしたるなり。」と。以て統一の

業未だ堅固ならざるに早くも起りたる反國家的運動に對するビスマークの苦衷を見る可く、以てビスマークが余の所謂「上よりの社會主義者」なるを見る可きである。

(ハ) 君主社會主義

カイゼル、ウイルヘルム二世は進歩的政治思想の雰圍氣中に生育した。彼は純然たる國家社會主義の原則に立てるワグナア及びシュモラーの經濟學を學んだ。ウイルヘルム一世及びビスマークの治下にプロシヤ及び帝國政府は社會主義的變化の第一歩に進んだがウイルヘルム二世及びその重臣は同様の政治思想に涵養せられた爲多くの近代國家に於て私人若しくは私法人に保留せらるゝ諸種の經濟的事業を國家の手におさめんとするの方策を持続した。かくて帝國政府は私經濟上に於ける個人の權利を制限する法案をドシ／＼採用し甚しきに至つては苛性加里鑛業を聯邦議會の管理に歸屬せしめその價格及び内外販路の割合迄も決定するに至つた。是れ一九一〇年の現法案であつて學者の最も興味を持つ所である。

三、種々の思想の分裂利益の對立は民族精神に於て歸一する。民族の性格より發する民族精神は群立に對して統一の力を有する。民族精神によりて結ばれたる民衆は現代國際政治の單位をなす。余世間淺見者流の觀察の片面的なるなきや

秋風白雲

□支那における獨乙人の勢力は驚くべきものがある。山東などて平和になつたら再び獨乙人が來て大に經營するといふので、支那人は矢張り彼等を離れない。

□濟南で獨人經營のホテルに宿つて見た。此宿には日本に捕虜となつて居る軍人の家族が大勢居つた。彼等は自分に對して頗る隔意ない態度で非常に親切であつた。一日室内のべのルガが破れたのでボーイを呼んで居ると、獨乙婦人が出て來て、建物中を尋ねてボーイを連れて來たりした。

□食堂に入ると獨乙の小供等が遊んで居た。試に今晚はいふと、皆嬉然として返辭する。中に一人の小さな兒が黙つて居たので、外の者が催促して返辭をさせたなど、頗る愛らしい點があつた。食時中蓄音器を吹奏するの、初に獨逸の國歌をやり次にやつたのが雲石衛門の浪波節。此蓄音器係は少年で何人もそんな差圖をした風にも見えなかつた。

□北京でも獨逸人は深く支那政治の中に入つて居る。袁世凱の住む所は中海と稱する湖上の宮殿である。其北にある建物を北海、南にあるを南海といひ政治上の中樞である。此建物

を憂ひ敢て此の文を草して日本の識者の批判に訴ふ。

——此の文は主として余の管見なるも

Elmer Roberts; Monarchical Socialism in Germany の暗示を得たる所尠からず。終にのぞんで異域万里にありて余の思想を開發せるロバーツ氏に謝す。——

には容易に入るとが出来ないのだが、自分は特に我外務省の紹介を以て其南海に入るとが出来た。丁度其廻廊を歩いておる時、一獨逸商人がやつて來た。而も彼は出入御免である、自分を支那人と思つてか、叮嚀に挨拶して去つた。

□袁が帝位に即くとは自分の意見を叩いた重要位地に在る官吏は殆ど全然賛成であつた。あれは袁自身の考といふよりも寧ろ其長子克定の野心であるらしい。克定が獨逸に行つて其皇太子の羽振を見て垂涎三尺して歸つた後の考であらう。

□大連に基督教青年會があるが、活動上便宜のためか兎角其旗幟を鮮明にしない。自分に講演を頼に來た時も、成る可く俗向な話といふとであつたから、自分は謝つてトウ／＼宗教上の談をしてやつた。

□朝鮮の開拓振は實に思つたより以上の進境である。之れ上に嚴正格勤な寺内總督のある故であらう。滿鐵にも今や人格高き安藤中將が其總裁となつて居る。中村氏は亦信者の一人である。

□誌友永井柳太郎氏は此夏二ヶ月韓滿の視察張りを試みられた。以上は其御土産話中の一節に過ぎない。を録したものの。

社會民主黨は七十六の日刊新聞、一の新聞協會、若干の繪入定期雜誌、五十七の印刷所を有し主義の宣傳に遺憾なきを期してゐる。社會民主黨は二百の中央巡回圖書館と三百七十七の支部とを有し以て思想の涵養に怠らぬ。廣大なる軍隊的組織は全國に神經系をはり命令一下立ちどころに全國に運動を起すの用意がある。社會民主黨は世界政黨の模範であり世界勞働團結の典型である。

三、如何に見る可きか

互に相對立して争鬭闘争、以て獨逸政局の綾を織つた君主社會主義と民主社會主義とは戰亂の勃發するや提携した。素より原則は例外を伴ふ。飽く迄提携を拒んだものもあつたらう。然し全體に於て舉國は民族闘争の爲に一致した。彼等の心裡には民族意識が動いてゐた。

二十五億萬馬克の戦費は二回共滿場一致して通過した。君主々義者も社會主義者も共に戰場に進んだ。君主の官僚主義は現代獨逸を誤つたが社會的經濟的生活に於ける社會主義の徹底は獨乙のポテンシャルエツルギーの驚く可き容量を示した。

民主社會主義者は君主社會主義者に利用せられ君主社會主義者は幾分の交讓的態度を民主社會主義に取る。獨乙國民の民族生活は一貫してゐた。此が事實である。

余は獨乙の政局を觀察して次の結論を得た。

一、社會主義に「上からの社會主義」と「下からの社會主義」との區別がある。前者は國家萬能的、官僚的乃至は德治的社會主義であつて後者は社會的民主的要求的社會主義である。社會政策を論ずるもの動もすれば此の根本の理を閑却し個人の自發的思想を無視し國家萬能の弊に導くの憂を致す。ホプソンの云へるが如く社會主義は民主々義の完成を前提とする。社會民主黨は何故政府に反對したか。その反社會主義的なるの故に非ずして官僚的貴族的なるの故に非ざるなきか。

二、社會民主々義も君主民主々義も究竟の理想は一である。國民各個の生活の向上是れである。故に國民生活に對する大障碍起る時はその前に一致する。



バーゼルに砲聲を聞きにゆくゝの記

— 瑞西より —

廬 山 生

戦争が初まつてから毎日の新聞に「バーゼルの砲聲」といふ項目の殆んど絶えたことはない。時には飛行機戦の壯快な模様などが出てくる。一度

はいつて遙かに戦場の一角を窺いて見度いとは思つてゐたが、いつも「仕事」「仕事」といふ桎梏にまづはられて、いゝ機會がなかつたが「砲聲も折々は聞える、それよりも味噲が來たから食ひに來ないか」といふ友人の來信、戦争よりも砲聲よりも二年越味を忘れた味噲汁の香に引き寄せられて、丁度外に用事もあつのを幸ひ、友人をそゝのかしてバーゼルへ出かけたのは六月末のことである。ベルンから急行車で約三時間、道はアーレの流に沿ふて青々と牧草の生ひ茂つた平原を貫いて

ゐて、めぐりの山も低く傾斜も緩慢であるから景色は至つて平凡である。

バーゼルに着いて見ると停車場前の廣場にはずらりと馬車や自働車が並んでゐた一向戦争前と變つたこともなく、之が獨佛戦線の最南端アルサスの一角に舌の様なとび出してゐる町とは思はれぬ景色である。

物靜かな裏通りに馬車を走らせて友の宿を尋ねると、日曜といふのに、研究室にいつてるといふ。市立病院(大學のクリニクとなつてゐる)にいつて見ると細い裏通りにあつてどこが入口か解らぬが中は中々廣い。日本流のいかめしい門や玄關を見なれてゐる目には何んとなく物足りないが、實



畑

み

ち

伊藤 寥々

々

烈日はそびらを刺せど天地に晝の蟲こそなきいでにけり
ぼつねんとしてひとりし立てば黄昏のこの畑みちわりなくもゆかし
近江の山伊勢の山々つらぬきて秋の火雲ぞ暮れ残りたる
満身にばら色の夕陽浴びつゝも桐のひと樹と語らひてゐぬ
かくばかりあてにゆたかにかくはしき想ひも湧くか涙あふるゝ
かく迄におどましき身ぞと知らずして過ぎにし事のおろかさを知る
小さなるわれにしあれど天地の想ひの波のその一つども
ゆら／＼とゆら／＼想ひのまゝにしてこの日も遂にゆかむとすらむ
よき人がなべてのものを愛でつゝも損てにし如く損てさせ給へ
何事もたゞなに事も落ちゐたるしづごゝろもてながめてしがな

景色である。町家の彼方に見える丘はドイツ領で折々飛行機が飛んで來たりして大砲を打つといふ。午飯をすませてから電車に投じて郊外に遊びにゆく。ゆるやかな、ラインの流に沿ふて森の中へはいてゆくと、ソルドハウスといふカフェがある。川を隔てゝ對岸はドイツ領で青葉に包まれた村落の家々、お寺の塔など水繪にもかきたい様な靜かな景色、人の子の影も見えねば戦場の程遠からぬ所とも思へぬ。折から來合した某氏の妻君、之はドイツ人でありながら一家族と共に牢屋に投ぜられた人で、W氏もドイツの監獄の飯をくつて來たよしみに、忽ちドイツの監獄談が始まる。ドイツ人でもさすが無法なドイツの官憲にはあされたと見えて盛んにドイツを罵る。川を隔てゝドイツの國土を睨めながら思ふまゝにドイツの惡口をいふのも時にとつての一興である。

宿に歸つて夕刊を見ると、此日の朝佛國の飛行機隊が又もフリードリッヒスハーフェンを攻撃して、其中一隻はバーゼルより稍々上流のラインフエルデンに落ちたといふ、大砲の音も聞えたといふ話。

ふ話。

* * * *

あくる日は用事をすませてバーゼル名物の櫻ん坊を唇の黒くなる程食べて、さて日暮れにも近うなりたれば歸らうかとすればクリシヲナの丘に案内しやうといふに、電車に乗つて町の北はづれの方へゆく。ドイツ領の停車場を通り過ぎて曾て瑞西入國の折を思ひ出しながら見れば堅く門戸を閉ざして徒らに兒女の遊戲場となつてゐる。電車を下りてから麥畑の間をぬけてクリシヲナの森にはいる。深い雜木林の間を縫ふて上つてゆくと丘の頂上に出る。こゝには僧院が立つてゐる。余り行ひすましてゐると思はれぬ坊さんが遊んでゐる。僧院をぬけるとカフェがある。中庭には瑞西の護境兵が屯してゐる。表の庭に座を占めてカフェを啜りながら見下ろせば、崖の下に通ずる大道には柵を設けて歩哨が立つてゐる。百メートルを隔てゝ彼方には木立にかくれて見えぬがドイツの兵が立つてゐるといふ。緩やかなラインの河谷を隔てゝ彼方に起伏する山々はいづれもシユワルツワルドの一

利主義の西洋にきては寧ろ下らない廣場などをつくつておく方が意味がないといえやう。

病理教室に友を尋ねると、S氏も旦氏も充々として標本をつくつてゐられた。この教授はヘデングエルといつて近頃まで英國政府から依頼されて、アフリカに研究旅行をやつた歸つて來た人である。此隣にはジーン・アンの耳鼻咽喉の教室がある。それから内科にはステーション外科にはドケルヴァンがある。何れも本をつくつて日本にも名を知られてゐるが、兎角本は名高くて多々知らない人があるからどの位の人か解らぬ。婦人科には例の日本人並に露國人の入門を拒絶して物議を起した大馬鹿物フォン、ヘッツェンドルフといふドイツ人がゐる。

美しい花壇の間をぬけて町へ出る。「死人の踊り」をかいだホルバインの紀念とやらで「死人通り」といふ妙な名をつけた坂道を下りると廣場に出る。こゝには眞紅に塗つた市廳がある。日本と違つて御役所でも、人民の家でも、壁を接して建てゝゆくので、折角おもしろい建物も近代式の家に

取圍まれて見榮えのしないのは惜しい氣がする。

市廳の裏通りに回ると博物館がある。一階には諸種博物學地文學上の品物が陳列してある。日本の雛人形、能の面などの並べてあるのはいいが、之と並んで怪しげな足駄や草履の陳列してあるには少々閉口した。二階は繪畫の陳列場になつてゐる。折角樂しみにして來るベックリンの室には中立侵害の場合を豫想してか、どこぞへ移してしまつて閉鎖してあるには、少なからず落膽せざるを得なんだ。然し僅か一面の「チアナの獵」に色彩絢爛豊富な作者の片鱗を窺ふことが出來たのはせめてもの心遣りとせずになるまい。ホルバインの畫もいゝものは大部撤去されてあつて見ることが出來ないんだ其外相當に見ばへのするものがないでもないが、今でも残つてゐるものはスチュッケルベルグの子供の畫などである。

美術館を出て伽藍の庭に出る。ラインの流れに臨んでゐて中々いゝ景色である。ラインのこの邊では隅田川ほどに過ぎないが、橋梁といひ對岸の町家といひ、いつれも兩國邊では一寸見られぬ

復讐の心

— 我心の様々 —

沖野岩三郎

さいませ、わたしい所は耶蘇になろて言ひましても、ありや皆んな嘘ですから」と言つた。

明治四十二年の夏であつた。一人の男が私の宅を訪れた、逢つて見ると丸顔な眼の何所かに輝きのある額の少し禿げた温厚な人であつた。段々話してをると以前は鑛山の人夫頭であつたが、酒と博奕と喧嘩とに飽々して足を洗つたのだとの事であつた。

男の假名は佐多富次である。彼れは此町へ來て晝も夜も本町通りのある銀行の門前へ一つの車を引据えて饅頭を焼いたり油揚げをこしらへたりして夫婦で必死に共稼ぎをして居たが、富次さんが毎土曜の晩に私の教會へ説教を聴きに來るので、妻君のお豊さんには大變に夫れが不平であつたらしい。

富次さんが五月六月教會に續けて來て、もう洗禮を受けると言ふ間際に『どうも家の妻が不平を言つて仕樣ないから、御足勞ですが一度私の宅へ來て御話し下さいませ』と頼んで來た。『宜しい』と言つて私は富次さんの宅を訪問したが、入口で『今日は』と言つて入らうとすると、妻君が色を變へて飛んで出て來て、『あなたは耶蘇の御方ですか、誠に濟まへんですが、どうぞもう御歸り下

さいませ、わたしは耶蘇になろて言ひましても、ありや皆んな嘘ですから」と言つた。

私は笑ひ乍らに「あゝさうですか、併し奥さん、まあ靜かにして少しばかり私の話を聞いて御覽なさいませ」と言つて中へ入らうとしますと、お豊さんはイキナリ障子をびしやりとメめ切りしました。富次さんは奥の一室でうろ／＼して呟いて居ました。

私は頭を抱へて歸つた、すると富次さんが駈けつけて來て『どうぞ堪忍してやつて下さい、あんな無理な女ですから』と平あやまりに謝つたのでした。所が富次さんが歸ると引ちがへに、お豊さんが、ちやんとお蠶の衣物に着換へて、大變な勢で私の宅へやつて來ました。そして威嚴ある聲で『宅はこちらへ參りましたです。あたしの所は、どうあつても耶蘇にはなりませんので、もう二度と來んと置いてお呉れやす。もうどんな事あつても成りやしまへん』と息も斷々に言つたのでした。お豊さんが歸つてから、私は富次さんの憤慨を氣支つたので、甥と其の宅の表まで行つて見ますと、入口の外で二人の女が立話をした居た。一人はお豊さんで今一人は四十位な丈の高い丸髭姿の、顔の丸い、金の義齒を

端、一時佛軍に荒されたアルトキルヒ、ミユールハウゼンなどはいづれも向ひの上の陰の程遠からぬ所にあるのである。又してもドイツの悪口を並べてる中に日も暮れたので引上げて來ると、之はしたり森の中に道を失ふてまご／＼する中篠つく様な大雨となる。木立深ければ益々聞くなるばかり、一步を過ればドイツ領に入るといふに氣が氣でなく上りつ下りつ散々迷ふた末、兎も角も今一度頂上に戻るべしといふ衆議一決して上りかくれば夫も容易には正道にぶつからず、二時間程も迷ふて漸くバーゼル街道にいで、泥濘にまみれた靴をひきずりて町に戻り、ホルバインの終始御神輿を据えてゐたといふ魚市場のカフェにたどり着いたは十一時もうに過ぎたる頃であつた。

■戦争是非

小泉 信三
三邊 含藏 共譯
慶應義塾出版局發行

本書は劍橋大學に於て政治學を講ずるドイツキンソン教授の著『戦争と之より脱するの途』を譯したものである。小論文ではあるが、著者の戦争に對する批評は極めて卓抜であつて、吾人の傾聴するに足るものがある。著者は今日の戦争を以て人民の欲求利害には何等の關係なく、常に政府當局者に依て起されるもので此所謂政府的思想の謬論なる事を指摘し、更に戦争廢止方法として歐洲平和同盟の組織を主張してゐる。著者の具體的永久平和論には必ずしもオリヂナリティーを認める事は出来ないが、戦争に對する意見は髓に其間の眞相を穿ち得たものである。尙譯者兩君は五十餘頁を費して英國に於ける其他の非戰論を紹介し自身の批評を加へてゐる。共に一續の價值は充分に在る。吾人は日本の不徹底な主戰論者に本書を勧めて平和思想の普及せん事を希望する。(價〇・三五)

■露風詩話

■露ヴェルレーヌ詩抄

三木 露風著
川路 柳虹著

右は來月號て批評紹介致します

『私が或人に對つて、酒を廢めなさいと勸告しても、其人が聞き入れないで、とう／＼失敗してしまふ。私の忠告を退けてそして失敗したと聞いた時、私は『まあ可哀想に！』と口先では言ひますしかし實は『夫れ見る私の言ふ事を用ひないから、そんな事になつたのだ、態あ見るツ』と云ふ下劣極る心が湧いて來て、一種の凱歌を擧げるのです。

三

夫れから斯う云ふ事もありました。私が明治學院の神學部の入口で數人の學生と立話をして居ました。其時私は、『此中で他人から先生々々と言はれるのは僕一人だよ、夫れはね、僕は小學校の校長をして居たので、其時代に先生々々と言つた生徒が東京に來て居て、今でもあちこちで先生々々と言ふので、僕は矢張り東京でも沖野先生だよ』と笑ひ乍ら言つたのです。すると神學部の豫科に居た某と云ふ色の白い男が癡癡と首に縋帶をして居て、其の廻らぬ首を振り乍ら『先生が除れないと同じ様に悔改もして居ないだらう』と左も得意氣に言つた、私は其一語が胸にこたへた。夫れは彼れが事實を言つたからであらう。然るに其の某が品行上の失敗をして退校せられたと聞いた時、私は心中に拍手喝采して其の行手を嘲つた。夫れから四五年も經て其の人が若い妻君を残して死んだと聞いた時も、何だか私の方が勝利を得たやうな心持になつた。私は其時『何てまア私は蛇のやうに執拗な復讐心を持つて居るのだらう』と悲しんだが、唯自分で自分を輕蔑するより外はありませんでした。

私は酒井將軍さんの『讚美の友』を購讀して居ましたが、或時酒井さんの文章にこんな意味のものがありません。

『奥州の或教會で自分が傳道説教をして、讚美歌を唱つた。會衆が皆起立して歌ふのに一人平然として腕を拱いて起立しない青年があつた。あとで聞けば夫れは東北學院の神學生某だと知れた。然るに二三日して其神學生は游泳に行つて溺死した。私の讚美歌を共に歌はなかつた彼は溺死した！』

私はこれを讀んだ時、其雜誌を疊の上に投げつけました。『何だあの濁聲の獨りよがりの歌を、夫れと一緒に唱はなかつたから罰があつて死んだと言ふ！酒井と云ふ男は、どこまでヅウ／＼しい復讐心の強い男だらう』と散々私は唯一人て酒井さんを罵倒しました。けれども暫くして私の心の中と酒井さんの心の中と、一つの洞穴の様な氣がして『酒井君、僕が悪かつた、だけど、あんな事は善くないねえ、御互ひに慎まうぢやないか』と呟きました、それから讚美の友を續けて讀んで居ましたが、又た或時に『讚美の友の購讀を謝絶するのはよいが、何卒貴社の發達を祈ると書き添へてあるのは何故だらう、一ヶ年僅か何十錢の金を惜しむ人が將來の發達を祈るは實に奇怪だ』と云ふ意味の文があつた。私は酒井さんの心理をよく了解した、しかし酒井さんは餘程復讐心の強い人だ、私はこんな人に教へられるよりも、正反對の人を友として私の心の調和を圖らねばならないと思つて、讚美の友は遂に購讀しない事にした、けれども時々ダリヤの花が賣れるかいなアと云ふ様な事を思ひ出す。

入れた奥様でした。二人の視線は同時に私の顔を射た、お豊さんが顎で『此人だす』と言つた時、丸髻の婦人は『フーン』と頗る輕蔑したやうな顔付で私を見ました。私は『最前は失敬しました』と言つたまゝ歸つて來たが、二三日して富次さんが來て斯んな話をしましたのです。

『どうも、お豊もお豊ですが、水田さんの奥さんにも困ります、あの人は熱心な天理さんの信者ですから、お豊に炊きつけますのでお豊が魔鬼になるのです。夜前もあれは斯んな事を言ふのです。耶蘇の先生は粉薬を持つて居て夫れを効と振りがけるのです、振りがけられたら最後皆な信者になるのだ。だからあの先生は一足も此の屋敷へ入らしてならないつて、まア馬鹿らしい事を誰が教へるんでせう。私ももう可笑しくつて叱る事も出來ない程ですが本人は夫れで本氣なんです。多分、水田の奥さんが言ふのだらうと思ひます。

私は先達て出逢つた金の義商を思ひ出して水田の妻君と云ふのが、あの人だなアと察しました。夫れから私は二月ばかり、いろんな屈辱を忍んで、お豊さんを傳道して見たが、とう／＼富次さんの洗禮を拒まない程度になり、遂にはお富さんも教會の説教を聴きに來るやうになりました。

二

富次さん夫婦は此町を引拂つて大阪へ移轉したが、今に私共との通信は絶えないのです。所が其後三年經て、私は友人の宅へ行つていろ／＼世間話をして居ると、友人は私に一通の手紙を出し

て『沖野さん、これはどうしたものだらう』と言つたのです、私は其の手紙を読みますと、夫れは或る人が、自分の息子を専門學校に入れたいが、學資が無いので補助して呉れないかと云ふのであつた。何だか其の差出人の名前が聞覚えのある様に思はれるので、暫く考へると、噉と考へ出したのは、あの金の義商の水田の奥さんの亭主でした。

私は三年前に、自分の傳道を妨害せられたといふ事と、耶蘇の馬鹿者奴が！と云ふ様な顔付でフーンと言はれた時の氣分が、其儘心に湧きましたので、其の手紙について私は何の返事もしなかつたのです。『さア、此人の妻君を私は或事で一寸知つて居ますが……』と頗る語尾を濁したのです。其後友人は其の學資問題をきつぱり謝絶したと言つた時、私は堪らない程、我と我身を淺間しいる者だと思ひました、私は復讐をしたのです、一寸した母親の輕蔑の態度が私の心に深く怨みを含んで居た爲めに、何の關係なき其の息子の一身に同情する事が出來なかつたのです。若しあの時水田の奥さんが、假令お辯、ちやらにもせよ私に先生々々と言つて上手の一語でも言つてあつたら私は此時友人に向つて是非出資してあげなさいと説いたかも知れぬ。私は實に卑怯未練な心持で江戸の仇を長崎で打つたのだと、つく／＼自分が嫌になりました。そして自分が絶対無抵抗主義を唱ふるのは、こんと復讐心が心に潜んで居るから餘義なくせらるゝ内心の反抗だなあと悟りましたのです。

此の事件から私は靜かに自分の心を考へてみる時、更にこんな事を發見しました。



山吹の花

北 米 葦

城

封切りし手紙のなかより
落ちたる

あゝ汝一輪の山吹の花よ！

やゝ色あせたれど

汝の美しさを見て

故里に麗はしき春あるを

われは知る

あゝ山吹の花よ！

われは汝がいづれへかたむきて

笑ひゐたりしをか知らざれど

わが仰ふぐ天日に汝も又

照らされしを思ふ

而して汝を摘みとりし
汝よりもうるはしき『花の心』を
もたらし來れるあゝ汝
一輪の山吹の花よ！！

四、六、八

いまは夕暮なり

いまは夕暮なり

遠きにゐます人よ！

わが眼に入らざる汝の

靈を前にしてわれは

無言に汝と語る

相逢ふすべは

四

數年前、浪華中會て友人から『此間僕等が五六人集つた席で福音新報の話が出たのだ、所が其席に居る一人の牧師が福音新報を購讀して居なかつたので』『苟も日本基督教會の牧師であり乍ら植村先生の福音新報を讀まんちふ事があるものか』と一友から言はれたので某牧師は大變赤面した』と云ふ事を聞いた。私の某牧師に對する同情は蛇のやうな復讐心となつて這ひ出して鎌首を擡げつゝ、助太刀の方策を按じたが何とも仕様が無かつた。しかし私は夫れ以來福音新報を購讀する勇氣が出なくなつた。

六合雜誌は私が七年前からの購讀する雜誌であつた、ユニテリアンの雜誌はユニテリアン自身の自ら負む如く社會の中流以上の人を對手にして傳邊して居るのであるから、雜誌も亦た大いに讀者を尊敬して居なければならぬ筈である。然るに近來頻りに『オイケン號』とか『日米問題號』とか『タゴール號』とかを出して、中學生の雜誌らしくなつて來た。丸で田舎者はこんな事を知つて置かねば……と云ふ調子に見えて私の神經を安からしめなかつた。こんな態度に對する復讐は購讀しない事だと思つて取次店まで其事を申込んだ。所が丁度其月から雜誌の體裁が皆變つたので、私は弱かに早計だつたと思ひました。

復讐心のある者は非常に他人の復讐を恐れます、こんな事を書いて居るうち、これは自分が誰かに屹度復讐せられるのではないかと恐ろしくなります。こんな心を心の底に潜めて居るのは私だけであらうか、世間の人は夫れを上手に掩うて居るのではないでせ

うか。

私から若し『汝の敵を愛せよ』と云ふキリストの宏大な教を取去つたなら、夫れが生命だと思ふ程固く握りメめて居なかつたなら私といふものはどんなに恐ろしい人間であるだらうかと自分で自分をつくづくと恐ろしく思はれます。

□ 汝に一人の敵あらば、善を以て其惡に報ふるといふことをしてはならぬ。恐くは彼に耻をかゝすことになるから、寧ろ彼が汝に何か善を爲したとを證してやれ。耻をかゝすよりも怒らしてやれ。若し咀れたなら其爲祝してやるといふとは面白くない、寧ろ少許彼と共に咀つてやれ。大なる不義をかけたなら、直に小さいやつを五つ許返してやるとだ。不義を一人で負ふてゐるのは、見るも悲慘なものである。己に分たれた不義は半は正義であるといふとを知つて居るか。負へる力の有るものは、不義をも自分に引うけてやるべきだ。……小さな復讐は全然報復しないよりは人情のあるものである。

—— ニイチエ ——

エム・メット・デンス・モリア著
日本女子
大學々監麻

正藏 ● 大多和たけ子譯

四六版四百頁美本
定價金一圓廿錢
郵送料金八錢

(好評噴々)

((刊新最))

男女對等論

兩性問題
に關する
世界最大
名著譯
出さる

男が尊いとか男女は對等であるとかいふ様な問題は、其根本原理を正確なる科學的前提の上に建て、決定せなければならぬ。本書の主眼とする處は科學的立場から兩性の特質を研究し、其差異の生じた原因を探らんとするにある。而して婦人問題中の重要問題に對しては著者一流の同情ある解決を與ふると共に、何人にも理解し得られる様に興味津津たる夥多の實例を擧げて論述してゐる。婦人問題の喧しい今日、思想の新舊を問はず何人も先づ卓越にして穩健なる本書を繙かねばならぬ。

●發行所

東京市牛込

電話番町六〇三九番 株式
振替東京一九四番 會社

南北社

なけれどわが胸にあふる、

想ひには翼生へて

千萬里も一瞬に翔ける

わが今日仰ふぎたる

天目に汝はやがて

照らされ……

汝が美しき瞳をすへて眺めし

明星を今われは見る

わが仰ふぎみる明星の

またゝき……そは汝が

双眼のまたゝきをわが心に傳へ

汝を照らす太陽はわが

ハートの鼓動を汝に送るなるべし、

あゝ遠き遠き彼方に

ゐます人よ！この夕ぐれ

わがたましひ汝が身許に

あれば右と左に

汝の心をおけよ！

四、六、一

炎熱と現身

前田 夏村

いざわれも郊外そとにいづると佇みて麥稈帽をかぶりけるかも
夏まひる氷切るとて一人の男は汗をふきにけらしも
ひるすぎの空にひとつの黒雲も郊外なればあまりにさびし
水すかし金魚光れりいまはただ死して光れり朝ぼらけかも
一合のミルクをけふもありがたく机に倚りて飲みにけるかも

の排列は主として我が國の年中曆に従ひ、古來の傳習に新生命を鼓吹するに勉めぬ。乃ち一月各日をば徳の根本に、二月の各日をば政治道德に三月三日は處女に、四月八日は釋迦に、四月十一日は淑徳に、五月五日を少年に、六月二十五日を地久節に七月七日は戀愛に七月十三―十五日を崇祖と供養とに、七月三十日を帝徳に八月をば旅行と自然と衛生とに且つ八月三十一日をば天長節に、九月、十月を修養と瞑想と徹悟とに十二月を選夫、選妻、結婚、齊家等に献げたり、五、八兩月には勸農の辭を忘れず、六、十二月には商業道德を、數入の當日には主従道德を力説しぬ。かくて本書は一種の思想辭典なり、修養辭典なり。本書一卷を熟讀玩味するはリベラル・エヂケーション也。又本書は故を溫むると共に新を知らんとし、歐米近代の思想家の明珠金玉の思想を採録せり。かくの如き公平と同情の態度を以て佛耶、神の三道の精美を集めたるは稀なり今や清秋夜長き修養の好時機に於ける參考書として又家庭の日誦録として本書を大方にすゝむ。(六合雜誌社に於ても取り繼ぎ販賣すべし。)

■發行所

東京市京橋區電話京橋二七四番
銀座一丁目 振替東京二一九番

大日本圖書株式會社

(新刊)

●内ヶ崎作三郎編

人生日訓

約一千ページ

定價金壹圓五拾錢

郵税金十二錢

本書は東西古典の精粹を集成したり。紀記、佛典、經書、諸子百家、聖書、希臘羅馬の哲學書等の心髓悉くこの一卷にあり。本書は歷代詔勅中修養と風教とに關する者を、含有す。本書は又俚諺俗謠川柳狂歌等に至る迄苟くも人生を裨益する者を網羅したり。本書は四時二十四候に適切なる名吟を摘録したり。本書は古典の莊重と藝術の優美と教訓の通俗とを兼備す。加ふるに佛典經書よりの拔萃はいづれも假名交り文に飜澤し、聖書よりの引用は大部分編者の手に於て改譯して讀み易からしむるを力めたり。政治、宗教、法律、倫理、家政、藝術、自然、雄辯等の數百の題目に關して長短四千項の集成なり。殊に戀愛、貞操、結婚、胎教等に關しては特別の努力をなし東西古今の宗教家、哲學者、詩人、倫理學者等の金玉の思想を羅列して新道德の理想を示せるは一大盛觀なり。而して材料

新問題に注意する先覺者は労働問題を怠るを閑等視す勿

業產及働勞

☐頁十七號每☐友愛
☐誌維關機會

一
 號十五第

大正
 四年

☐錢二十冊一
☐錢卅圓一分一年一

通鑑

日本勞働者代表渡米者

法學士 鈴木文治

大
と
國民
の
大心得

府立職工
學校長
秋保
安治

勞働心理……伊東三三

重役と勞働者 丹生耶州

能率進法

伊藤 隆

人間にんげんの層そう
坂本正雄

最近時評
山下朽葉

白鳥を捕

して
中口
る
伯爵
板垣退助
の伯社會觀

勞働者保護久留天豪

勞働の者希望
・蒔田亮海

積極と消極 武田芳三郎

サ
ン
ズ
ム
と我等
蓬萊生

北米より…吉松貞彌

勞働者の眞の不幸

とは何か
レオトルストイ

貞操は人生の骨子

内ヶ崎作三郎

トルストイの『読書』……記者

「労働界新人月旦」……XYZ

寄書歡迎

一行十七字、取捨は編輯者に一任。不返戻

〔ジ〕ンラボックの教訓(其他)

「僕のノートよ………坂本正雄」

最近一ヶ月友愛會入會者の

各地勞働界動靜 (報告)

會員募集

分一箇廿錢也、雜誌

友愛俳句 新刊書批評

英國。ホースマス軍港造船所

五五八五 芝話電 | 部本會愛友 區芝市京東 町國四田三 所込申

此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る旨書添を乞ふ

拾月號

内

體容

裁益

整々

頓充

實

定價 廿五錢
郵稅 二錢

藝文と學科

●● 自然科學者としてのゲエテ……… 小川 政修
●● 自分の具體的問題……… 安倍 能成

● シングの短生涯 (紹介) 喜多村進
● ダ・キンチ (紹介) 中山昌樹
● サツコとワシカ (紹介) 井上芳子
● バンガロ (紹介) 西村伊作

● ジプシイの話 辻 潤
● 海外消息………
● 自己靈の叫び 野村 隈畔
● 生物と光 藤浪 博士

教會存立の

意義及 ● 諸大家

價值に就て

繪 挿

岸田 劉生 安井曾太郎
西村 伊作 ロセツテイ
レンブランド 宮城 交子
レビン ズ子 享三
津田 青楓 カ・ヴォル
木村 莊八 椿 貞雄

歌 詩

原 阿佐緒
西村 伊作
吉田 浩朗
霜田 史光
前田 春聲
バリモン

● 畫家と金

● 結核の話

● 生物と光

● Deep Myths……… P. Okada

● 丘の家 ブーニン

● 豫算表 小説

● 九月文壇

● エンマの書室

西川 松子
沖野 若三郎
美川 康
よさの

● 宗教道徳の第一要素「ギユイヨ」
● 種族精神と個體の生活

● 内藤 濯
● 加藤 一夫

● 本然と表現 加藤一夫著 洛陽堂發行 新刊

發行所 東京 府 下 東 大 地 交響社 東京 市 有 名 賣 店

中附四

椽 先 に て

鈴木 龍 司

女「あなたのやうにさうちよこちよこ感想などを發表することはよして、もつと研究した上で大きなものにしてから、出して下さい。」

男「それがどうして悪いといふのだ。」

女「あなたは、少しも含んで居らつしやることが出来ない。思ふことはすぐ發表してしまひになる。少しも重々しいところがありやしない。もつと自重して下さいな。云つたらきつと人を動かすに足るやうな、言語をせらるゝやうにね。」

男「また初まつたのか、そんな言ひ草は聞き飽きた。いくら自重したつて、軽いものは重くはなりやしない。たゞ、重くするやうに努力して居ればいいのだ。」

女「だから、そんなに發表をあせらずに、大きいことが言へるやうになつてからいつて下さいとい

ふのですよ。」

男「だまつて居たつて大きくはなりはしない。色々容體ぶつたりすれば、馬鹿は欺くことは出来るかも知れない。けれども世の中には馬鹿ばかりは居ない。きつと眼のある人が多勢の中には一人や二人は居るにちがひない。さういふ人は、どんな小さなことだつて、眞實の事と虚偽のこの見別け位はつくのだ。眼のある人は、どんな小さなことでも、これから先、生長の見込のあるものは尊重するよ。」

女「そんなら、勝手におしなさい。折角、私があるための爲めを思つていふてあげるのに、そんなことはいひなら、あなたは、もつと勉強なさるがいいのだ。あなたは、ほんとに困つた人、中途半端といふのは、ほんとにあなたのことね、堅い學

力がなくつて高い所に立つのはつらい。有り餘る力を藏して、低いところにあるの不平等もみぢめである。識見も未だ熟しないうちから責任の地位に立ち、その位でもないのに、その位にあるのは苦しからう。」

男「私は又つねづね考へて居る。世の中は何といつたつて力の支配を免れない。力のあるものが勝つ、力のないものは負ける。だから、どんなに悪くいはれて居る人でも、どんなに厭な人でも、現に或る地位にあつて、或る權力を把つて居る人は、たしかに、どの方面からかの力があるのだ。だから、さういふ人を尊敬するのは、いゝけれども、さういふ人を利用しやうとしたつて駄目だ。矢張、先輩の力などは借らずに、一人で努力して、自分の力を強くするのに限るね。」

女「あなたは、生活などいふことは少しも考へて居らつしやらない。」

男「考へて居るとも、私はもうたゞの理想などいふ空漠たるものは卒業したつもりだ。どうしてこの理想を實行に生かさうといふことは私の殆ん

ど不斷の焦慮なんだ。けれども、はづかしいが、私にはまだ、この理想を持つて居さうすれば、死んでも悔いないといふほどの、しつかりした信念がない。どうにかして、安樂に生きたいといふ願望が心の底で、自分を裏切らう、裏切らうとして居る。それで私は苦しい。幸、今の私の理想はこれを押へつけて居るが、どうしても乞食をしていゝやといふまでの安心は出ないには困つて居る。」

女は男の理屈に、あつけにとられて、たゞこつてしまつた。

「知らない。たれが乞食になれつていひました……」

(完)

者肌ではなし、さればつて、純文藝の人ではなし……」

男「俺はたゞその時、その時の要求に忠實に従つて必然の道を歩いて行くだけだ。樂でも苦しくても、とにかく今俺の歩いて居る道は、ほんとうの道だ。百歩を譲つてほんとうの道でないとしたところ、今はこの道を行くのが一番いいのだ。何處へ行くにも俺にはこの道を一生に一度歩いて置く必要があるのだ。何になつたつて結果などはどうでもいいぢやないか。」

女「やつてごらんさい。そんなでどうして大成するのですか。一つ一つ、する事に目的を立て、學者になるとか、事業家になるとか、計畫のとほりにやつて行つてさい、駄目なんぢやありませんか。」

男「必ずしも成果を見んたつていいぢやないか。」

女「あなはた、そんなにしなくつたつてもつと外に行く道があるに違ひないと思ふわ、仕事の事だつてもつと幸福な……」

女少し涙ぐむ、やがて又續ける。

女「先輩の方々の事だつて、もつと尊敬しなさるといふのよ、きつといふやうにして下さるわ。あなたが先生方のお家へ御出でにならないのは、きつとなにか解脱し切れないところがあるのだと思ふわ。ね、あなた、後生だからすねないで下さいね。」

男「私は何もすねては居やせん。思想の孤立は、自ら周囲とも離れさせる。私はこれから、もつともつと寂しくなるだらう。私は人を利用するには、どうしても忍びない。私は必ずしも、頭を下げる事が嫌な男ではない。いくらでも眞實有價値な人の前では頭を下げる。さういふ人に救はれる時の、一時も早く来る事を心の底では待ち望んで居る。けれども、それがどうも近い内には來さうにもないのだ。思想家として、先輩の思想に隨順するのみで何が出来る。實務の方の人が、その方面で親分を取ることに少しも私は異存はない。しかし報償といふことは、何處にだつて行はれて居る。だから世の中は要するに身分相應だ。」

おのづから尊きはひせまり來てゆふ雲の下にわれたと祈る。
大生命^{だいせいめい}はいま天地にみちぬらし五色綾織る雲の早業^{はやわざ}。
わが村の大公望が峰傳ひかへる姿をてらす夕雲。
うつくしと兒等の叫ぶにさそはれて雲に驚く村の人々、
忽ちに奇峰聳えぬやがでまた怒濤狂ひぬ雲の世界は。
あなたにも歩みとどめて夕空の驚異を仰ぐ二人連^{つれ}あり。
あすよりは幾日か續く秋日^{あきひ}和豫報^{わよほう}の文字を夕雲に讀む。
頭鈍き人も今更驚きぬ水の奇蹟と雲の魔力を。
妖術か魔法かあらず大神の無言の御業雲の變幻。
東より暮色せまりてあや雲の光る御國は縮まりてゆく。
しばらくはあとすさりせよ闇の子等光りの君の御稜威^{みりょうい}畏れて。

雲の色

—（九月の初め奥州七つ森の麓にて歌へる）—

内ヶ崎 作三郎

秋姫の奏^{かな}づる十三絃^{げん}琴^{きん}のその一節^{ふし}か雲の五色^{しちご}譜^ふ。
秋姫の空に織^おり成^{なり}す雲の機^{はた}黄金^{こがね}白銀^{しろがね}色の數々。
小雨せし二百十日のあくる日の晴れてうれしき夕焼の空。
火と燃ゆる夕雲のもと寂^{じやく}然^{ねん}と七つの峯は綿雲かつぐ。
はてしなき空の大海くれなゐの音なき浪のよせつかへしつ。
またゝく間^ま千變^{せん}したりまたゝく間^ま萬化^{ばん}したりな雲の不可思議。
雲の富^{とみ}光^{ひかり}の幸^{さち}を感謝^{かんしゃ}せよ山ふところのわが村の人。
眼に見えぬ天女^{てんむ}刷^は毛^けふる雲の繪は此世ともなき色うるはし。
谷あひの小さき村里あや雲の照りそふ時は繪のごと見ゆる。
笠とりて入日をのぞむ旅人の額をてらす夕雲の色。
岡の上に獨りし立てば紅の天空の色我が身を包む。
空あかく山黒うして天地^{あめつち}の神秘あふるゝたそかれの時。

やがて蝕んだ葉は巢となり、
残れるは病葉わづらひと散り、
梢の枝はあらはになつた。

蟲はこれで、

嚴冬を過ぐす準備成れりとして、

巢の中に安眠して居る。

しかし時ならぬ落葉は、

巢を人の目に暴露した。

紅葉の色を待つた人は、

思ひがけぬ妨に驚かされた。

こんな害蟲が殖えては、

つゐには樹も枯れるだらう。

秋の眺めも空しくなる、

捨てゝはおかれぬと人は考へた。



蓑

蟲

岡
田
哲
藏

まだ初秋も過ぎぬに、
庭の楓の葉が紅葉もせずに落ち散つた。
下枝にわづかの緑を残して、
梢はいつか空になつて居る。

見れば藁苞^{つと}の形した枯葉のかたまりが、
いくつと無く枝から垂れ下つて居る。
よく見ればそれは皆蓑蟲の巢。

夏のうちに裸蟲が、
勉強して葉を蝕んで、
巢を營んで居たのであらう、
青葉隠れに人には知られずに。

しかし人は樹を助ける爲に、
蟲の種を絶たねばならぬ。

塵取りの巢はやがて火に投げられた。

寒冷から蟲を保護すべくあつた枯葉の巢は、

焦熱の火を誘ふ薪となつた。

蟲は生きながら火葬せられた。

樹の生命と、

蟲の生命と、

その價はいづれ。

植物と動物と、

自然界の位置の、

その高下は明である。

一切の生物に生命の要求がある。

たゞそれが生物と生物の間に一致せぬ。

競争、衝突、相殺はその運命である。

梯子を樹に架けて、

人は巢を挽ぎ取つた。

木枯らしの風には落ちぬ粘着の保證も、
人の指には抵抗が出來ぬ。

數十の巢はみな落された。

それに包んだ生命も、

それを結んだ努力も、

權威と價値を認められぬ。

落ちた巢は塵と同じに、

箒に掃かれて塵取りに集められた。

梢から離れても巢は破れぬ。

地に落ちても何處かの隅に、

そのまゝであるならば、

生命は冬を凌いで持續するかも知れぬ。

紅葉を賞づる人とても、
いつか無常の風に誘はる。

すべて循環である。

打つものと打たるゝものと、
勝つものと敗らるゝものと、
総ては同じ運である。

かく觀じつゝも、

楓を襲ふ蓑蟲を見れば、

その心なき業を、

打棄てゝあさがたい。

火刑の慘酷も

涙なしに行はれる。

(四、九、二〇)

然し他のものには、

相殺にも一定の範圍がある。

人のみはその限を認めぬ。

他のものは概べて位置の高さが低きを制す。

人は順序を守るもそれを紊すも、

すべて自己の便宜による。

蠶の爲に桑を犠牲にして、

衣の爲に蠶を殺し、

稻の爲に蝗を驅除して、

食の爲に米を煮る。

紅葉の觀賞の爲に、

勤勉の簑蟲を除くも、

あやしむに足らぬ。

かくまでに保護を加へて賞でらるゝ紅葉も、
やがて木枯らしの風に散る。

人なんぢの右の頬を批たば、亦ほかの頬をも轉らして之に向けよ」と言つて居るといふ人があるにしても、併し基督のこの言葉は肉體ではなく却て情感に關するものであることは、知られねばならないのである。』

オウガステインは又北亞弗利加の基督教徒知事ボニフェース伯が、止むなくヴンダル人に對する戰爭に従事せねばならぬやうになり煩悶せるに書を與へて、之を獎勵し基督教徒は軍務に反對ではなかつたことを、デヴドやコルネリウス等の例を擧げて保證した。彼はまた同時に戰爭は平和の爲にのみ行はる可きこと、敗者や俘虜に仁慈を施す可きこと、信實はその友と同じやうに敵にも保たれなければならぬことを主張した。かくても彼は戰爭に於ては謀計を用ふることを許して居る、何となれば彼は『ヘブタツクの諸問題』中にヨシユアは伏兵を設けよといふ神の命令に就て『人が正當なる戰を企圖する時には、戰闘によつて勝つと、詭計によつて勝つと、何れにしてもその戰の正しいといふことには少しの差しさはりの無いものである』と言つてゐるからである。尙彼は同じ手紙の中に、例へばある國家が其の市民の爲したる曲事を見逃

して置くとか、強奪された財産を正すことを怠るといつたやうな危害に復報する心算で企てられた戰とか、神に命ぜられて行ふ戰爭は正しき戰爭であると定義し、此の後者の場合では、軍隊の眞の指揮者は神である、人民は神の代理者であつて、戰の當事者と見做さる可きでないと言つて居る。これに聯關して注意を要することは。アウガステインは必ずしも正義の戰爭を守勢のそれに限らず、復讐の目的で企圖せられた攻撃の戰も亦合法のものと觀て居ることである。彼は後世の神學者等に斯かる風潮を遺したので、基督教を奉ずる王侯達は、その性質極めて如何はしき多くの戰爭の名分をも、宗教當局者に祈るに至つたのである。(American Journal of Theology)

諸種族と諸宗教との調和

これは倫敦の A. & C. Black 社から出た F. K. Cheyne 博士最近の著書であるが、博士は批評家としては學者間に認められてゐる學者で、その舊約全書の詩文の起源なり進化なりに對する最も徹身的な研究者としての博士の地位は恐らく後代に歌はる可きであらう

チエイチ博士が本書中に狙つてゐる主眼點は寔に崇高なもので、人類のありとあらゆる大宗教の組立の中に、諸種族の調和を見出んとするにある。博士はその所謂『信仰の寶玉』に筆を起し、先づバハウラの先馳者より始め佛教、ゾロアスタ教、回教を通して猶太教、基督教に及んでゐる。この寶玉に關して吾々が注意せねばならぬものゝ例として、基督教に就て博士は曰ふ、『第一に人は神人の救世主の驚ろく可き肖像畫を擧げることができ、それは神秘に溢れてゐて、その描かれたる人物に、熱烈なる忠信を捧げしめ、頑く心をすら融和せしむることが能きる。吾々はまた同じイエスキリストの肖像(暗に共觀福音書に示されてゐる)——第十九世紀の評論の產物である——を以てゐる。がそれでも何人か彼が同一のものであつたとか、ある微妙な香氣がその生活から離れ去りはしなかつたとかいふことを確言し得たであらうか? 此の再寫された肖像の中には、最早神格の人はゐなくて、唯單に偉大にして善良なる教師、崇高なる改革者があるのみである。此の肖像はまた、極めて人の心に刻みこまれ、人々をその卑しき自我から引下げることも能きるのであ



海の外

オウガステンの戦争観

エー・シー・マギツフェルト

基督が山上の垂訓中に力説した同胞愛と無抵抗主義の教訓の立場から見ると、基督に従ふ人々は戦争を非難し、之を以て非クリスチヤンと見るであらうとは、今日まで明らかに豫期せられて来たかに見えるのである。が併し事實に於て左様した人は極めて少なく、其の歴史にも戦争を否定しない事例に乏しくは

ないのである。(マギツフェルト氏は茲に多の歴史上の事實を列挙してゐるが、今はオウガステンのものゝみを抜いておく)

オウガステインは、その主張する二邦主義によつて、戦争に参加する基督教徒を責むるであらうとは、人の豫期するところであつたかも知れないが、彼は却て戦争を以て理由あるものとし、爾來基督當局者をしてかゝる考を懐かしむる基をつつたのである。舊約書が戦争のことに就ては、イスラエル人が神の明白なる命令の下にこれを行つたやうに記してあるといふことを批評したフワウスタスに反對して、オウガステンは其の著書中に次のやうに述べて居る――

『戦争にはどんな悪い事があるのか！ 戦争とは、如何しても死ぬやうになつてゐる人々が死に、戦利者は平和に生き得られると云ふことであるのか？ これを責むるは即ち怯者のことであつて、宗教を奉信する人々は干からぬ。危害を加へることを好むこと、復讐の惨酷、激怒、反抗、支配欲等――凡てかうしたものは戦争に於ては正しく非難せらる可きもので、またこれ等のものは暴力を以て反抗する人々に對する戦争

が、神とかその他合法の權威者の命令で行はるゝ場合に、多くは正しく罰せられてゐるのである』

更に戦争の合法なるを證する爲に路加傳第三章第十四節、馬太傳第二十二章第二十一節及び第八章第九節を引照して曰く

『それは人々が由て以て戦争を企てる理由の如何と、依つて以て彼等が戦争を行ふ權力の如何に依存するものである。人間の平和を助長するに適當なる自然の秩序には、君候は戦争を行ふのオウソリテイーを有す可きであり、兵卒は戰の命令に服従することによつて一般の平和、一般の安寧に奉仕す可き必要があるのである。加之、人間の傲慢を脅かし、若しくは壓滅する爲に神の命令によつて企てられた戦争は、正しいものであることを疑つてはならない、何となれば、人間の貪慾から生じた戦争は、一として清廉なる神とかその聖人達とかに危害を加へ得ないで、それ等の人達には寧ろ忍耐の練習、精神の卑下、世襲の教訓の支持に役立つたからである……併し神が戦争を指揮したとは考へられない、基督は後に『然れど我なんぢらに告ん、惡に敵する勿れ、

現時戦争の費用が巨大であるといふことをよく耳にする。平和主義者は戦争中に其國民は困憊して了ふ、而して戦が済んで了へば彼等は最早戦ふべき費用がないから、彼等の何れも亦其連合も怖るゝに足らないと云ふて居る。

アキシム氏の確言する所では、戦争の第一年に戦争國は百五十億弗を費消するのであるが、之は其全財力三千億弗の百分の五に過ぎない。

尙記憶せねばならぬとは、平和の口における經費に關して當欲るとは戦争費に關しても當欲まるといふとである。價值は大抵土地から生ずるものである。平和時の經費は其生産から償還を得るのみならず又實際資産を増加する。勿論戦時には、非生産的の費用であるが、併し一方生産力の刺戟が増し又直接戦争の費用の外は大なる節約が行はれる。且兵器製産の労働軍隊輸送と給養、及兵士や其の他労働者への仕拂は主として國民の上に落ちる現下の戦争國では戦争前よりも良好な労働の報償が行はれて居る。氏の考に依れば現下の

戦争で其國民が實際の損失高は償還的經濟上の利益を計算すれば、第一年の活動のために

は、百分の二・五を超過せまいだらふ。

人口の減少に關してもマキシム氏の計算は愕くべきものがある。開戦國の人口は四億である。兩軍が最初の出來事に出した死傷數は約二百萬と稱せられる。隨て最初の半年間に於ける全死傷數は、開戦民族人口の百分の一の半に達しない。負傷者の大多數は一時的のものである、戦死者數は全負傷者數の一刻を越えない。是故に戦死者と永久的負傷者の損失は百分の一の半にも足りないし、併も第一年目に於て僅に百分の一に達する位のものである。

若し此の計算にして正當に近いものとすれば、此大戦争に従つて居る國民が、富力と兵士に盡きるといふのは餘程先の事である。

獨乙が定限なく戦争をなしうる實力に關して、伯林大學のマツクス・ゼーリング教授がリツチモンドのマツクネル氏に與へた書簡は此問題に興味ある光明を投げる。ゼーリング教授はマツクネル氏から、獨乙は食糧及兵器供給に充分なりやとの問をうけた。彼は答へて云ふ。

從來獨乙は其食料品の五分の一乃至四分の一を輸入する習であつた。海港の閉鎖の結

果之が代用品の發見と、政府が經濟的供給の制約をするといふことになつた。科學者と實際的發明家の努力に依り、遂に供給の問題は凡の方面に於て解決された。今や獨乙は戦争を何時迄も繼續する事が能る。戦争中智利硝石の供給は全然吐絶されたが、今や窒素を直接空氣から採集する發明に依て充分補はれる。之は單に爆發藥のため許りでなく、肥料のためにも智利硝石の代用となる。食料品に關しては、本年の二月一日政府は一切の穀物を沒收し、パンと粉の分量を各人に限定した。始め此分量は僅少のものであつたが、豊富な收穫の結果、パンと粉の價は安くされ、労働者の食料額が増大される望がある。且又一時高價を示した馬鈴薯も非常に安價になつた。失業者は戦争前よりも少數になつた。労働者の賃銀は増し、庶民の生活は豊になつた。肉の供給は次第に減少するかも知れないが、之は從來餘り多量の肉を食ふ習慣であつたのだから、大したことはない。

戦争が進むに營て、開戦國は敵味方共に、獨乙の例に習ひ其物質的源泉の培養と補給に努力するとは當然である。近代科學は愕くべ

るが、併しながら此の偉大なる教師、改革家
を人類の救主と見、贖ひ主と観ることは、能
きないことは明らかである。基督教の今一の
寶玉は『パウロの神秘主義』で、加特力教徒

の間に重要視せられてゐる『神性表明』上に於
ける女性の要素も亦その一である。『これも
また至純の射線の寶石である』と彼はいふ。
上に挙げた大なる諸宗教の中に見出される寶
玉は、讀者自ら其の發見を試みられるがいふ。
バハイズムの中に例示されてゐるやうに、諸
種族と諸宗教との調和が成就せらるゝのは、
これ等の諸宗教の組立の上に於てである。

バハイズムの教訓を概括して博士は次のや
うに言つてゐる。『神の愛と人道の愛と——そ
れをアブダル・パハは大膽にも神の愛といつ
てゐる——は重要な關係ある唯一のもので
ある。』そして『若しもアブダル・パハが吾々の
誘導者であるならば、ありと有らゆる宗教は
全く本質的に同一のもので、凡ての人類社會
は四海同胞といふ聖約によつて縁を結んでゐ
るのである。』然し第一の論説は聖ヨハネの一
反響たるに止まり、第二のものは、ある制限
なしには首肯し難く、それが眞理であるとい
ふ丈では、正に自明の眞理たるのである。そ

して、アブダル・パハを、その凡ての先驅者達
——その中には基督も含む——に代る程の、
新しい『化身』^{アヴァター}として認めさせようとするに
は、確かに不充份である。

第二編と第三編とは、本書の中以上を占め
てゐる。此の中に、博士はバハイの信仰の建
設者達や先驅者等の傳記的、歴史的の注意を
漏れなく與へてゐる、何故なれば、此の信仰
の中にこそ博士は現時の『時代』^{エージ}が聯關してゐ
る限りでは、アブダル・パハとその先驅者ベ
ーブ——これは『門』^{ゲート}（神格への）を意味する稱號
である——の人格の中に神性の最後の天啓を
發見してゐるからである。

第四編は『人道への大使』としてのアブダル
パハを説き、第五編は比較宗教學に關聯せる
説明的の諸研究を述べてゐる。

可成的簡單にいへば、『永遠』の入口に立つ
た時のチエイン博士の信仰の告白は、言はゞ、
傳へられない神格が、相續いて現はれて來て
然もその各時代の適應して來た化身^{アヴァター}——印度
の言葉を用ふれば——の姿になつて吾々の間
に現はれたかに見えるのである。これ等の化
身の間にありて、基督はその先達たるソクラ
テス、ゾロアスター、佛陀などや、その後進

者たるバウル、マホメッド、新しいバハイ
の教師達と一所にゐる、そして此の人達は一
の連續した系統をなしてゐる。エスの地上の
生活はドレヴスの行方方に眞似て純なる神話
の中に包みかくされ、彼に就いて語られてゐ
ることは、事ごとくに信を置き難く、唯眞のア
ヴァターとして現はれた一人の人格があつた
といふことだけが確かである。磔刑は非歴史
的であるから、復活も亦當然非歴史的である
大宗教の原理を或は比較し、或は對照して、
著者は『かゝる異りたる教理の信徒にとりて、
相互に理解するといふことは困難なことには
相違ないが、不可能のことではないと、私は
敢て信ずる。そして私は一人の英國の基督教
徒として同時にまたブラアマ信徒として、西
と東とを一所にしようとするのである』と
結んでゐる。

戦争は何時まで續く？

ジョー・ケー・シヨ

ハドソン・マキシム氏の『無防禦の米國』な
る書物には、定限なく戦争を續ける國民の戦
闘力に就て興味ある數字と比較が出て居る。
彼は云ふ。

私達戀するもの等の二個の異なる人格が結合
融和し、自他の存在を忘却する靈肉の法悦、
絶對の境地に立ちながら、同時にその結果と
して現はれるかも計り難い未來の子供のこと
や、その種族に及ぼす影響などに自分達の隣
間の全き意識を分ち與へて、しかもある用意
をすること』は自分自身を侮蔑し、ふたりの
愛を汚辱する墮胎よりも寧ろ厭ふべき醜い行
爲である。

自分がいよく妊娠したと氣付いた時、第
一に襲はれたのは墮胎の空想であつた。がそ
れは單なる貧困といふことからではなしに、
「性」としての婦人生と「個人」としての婦人

生活との間の矛盾衝突からであつた。併し自
分にも母たらんとする欲望が實は自分の愛の
中にも潜んでゐた。『一たび愛の生活を肯定し
そして自ら選んでこの共同生活にはいつた自
分が、しかも今その愛に生き、その愛を深め
且つ高めることに努めつゝあるその同じ自分
が、その愛の創造であり、解答である子供の
みをどうして否定し得やう。』もし子供を拒
まうとならば、愛の生活全體をまづ拒む可き
である。』

『これで私の生活の中に起つてゐる、あの争
闘が解決された譯では決してない。寧ろ人生
に於ける子供の重大とそれが女子の生活に於

ける意義と價值とを考へれば考へるほど、そ
して母たることの尊さを知れば知るほど、却
てその争闘は慘ましさを増す許りである。
エレン・ケイは愛の生活の中に、就中母たる
ことの中に最も高く美しき統一と調和ある婦
人の眞生活を發見させやうとしてゐる。それ
はともあれ、かうした自身の生活の中に存す
る色々な方面を、いかに撰擇し、統一し、調
和して行くべきか、これが私自身の、否今後
の日本婦人の多くの上にかゝつてゐる困難
な、意義ある問題である。『青箱』

□ 原口鶴子女史の計

誌友原口竹次郎氏夫人なる同女史は兼ねて病氣にて伊豆伊東に轉地療養中の處九月廿六
日同地にて永眠されました。我國の婦人にして始めて米國の博士號を有し、尙春秋に富
み前途我女子學界のため貢獻する所多かるべく期待された女史の早世は誠に悲しむべき
ことであります。殊にいたいけな後に殘された二人の孩兒のために。

く自然の貯蔵庫を開放した、而してエネルギーを増すとや工業は或度まで戦争の惨害を賠償する事が出来る。故に開戦國の疲弊の結果戦争が速に止むべしとは考へられぬ。

(World court Sept.)

海の内

所謂歸一協會の宣言に就て

加藤 弘之

宇宙の本體は物と力とである。これが集散分合にして進化退化が出来、その進化退化が無始から無終に及んでゆく。これをさせるのは唯自然の力であつて、其の自然力には一の意味もない。故に個人の上に偉大なる意志的存在物のある杯といふことを信ずるのは大なる誤りである。

歸一協會の意味は、神でも佛でも、とに角大なる意志があつて宇宙萬物を支配するところに歸一せねばならぬといふ。併し此の歸一主義には何等の證據がない。宇宙には偉大なる物があつて萬物を支配すると見るところに形而上學の大なる迷見がある。只想像丈で以

て一の證據の無いことを主張する。神佛の存在を證するに足る丈の證據が何處にあるか。證據の無いことを信ずることは能きない。『近頃獨逸にオイケン佛蘭西にベルグソンといふ形而上學者が出て、歐洲でも盛んに持囃されてゐるやうであるが、此れは餘程不思議のことと思ふ。此れは恐らく此れ迄哲學が自然科学的になつて來たからその一時的の反動で、長くは續くまいと思ふ。日本にも此の種類の人が多くあつて不可思議論を唱へてゐる。實驗實證を主張する人は甚だ少ない。歸一協會のやうな事を唱へる人が多いので此れは嘆く可きことであると思ふ』(丁酉倫理)

「個人」としての生活と「性」としての生活との間の争闘に就いて

らう てう

此の感想に就ては今更らしく過去の追憶をしてゐることや、今に至つて漸やくかうした問題に考へ至つた迂遠などを非難してゐる人が間々あるやうである。併し現在掴み得た信念を明らかにするには、過去を語ることもある程度までは必要であるし、『何の批判力もなか

つた早い時代に無條件に取り容れた」禁欲的な東洋思想——殊に佛教の思想や、既婚婦人の奴隸的生活に對する火憤、自身の戀愛の成長發達の仕方などによつて強く動かされて來た氏が所謂「性」としての婦人の生活や、性としての男子に對し、偏見に傾むくまでの生活を續けて來たといふことは、同情されることである。

二年間の共同生活で、始めは好奇心となしのみ現はれてゐた戀愛が、實は人生の嚴肅な問題であることを知つた。『そして今また私は避け難い困難な問題として子供を産み且つ育てるといふ現實の問題に眞とも』に突き當つた。從來はいつも子供を怖れ且つ避けて來たそれは第一現在の自分には人間としての内生活築くことが最も大切で、これに對する時間と力とが必要であつた、第二には親になりたいといふ欲望がなくても子供を造ることは無責任であると思ひ、第三に、日常の生活が親としての十分の責任をつくすに充分でないと考へたからであつた。これに關連して起る問題は避妊であるが、これは場合によつては文明人の特權であり義務であると信しながら、主觀的には瞬間的に烈しい醜惡を感じる。

救世軍に屬する勞働寄宿舎が三ヶ所あるが、其中一ヶ所は最近無料宿泊所に充てられた。

無料宿泊所は無宿の者を一夜丈無料にて宿泊せしめたる上、其相談を受けて、更に進むで救済の方法を講ずる所。普通の勞働寄宿舎は、失業者に職業を紹介し、且宿泊の便宜を與へる所であり、無料宿泊所は淺草黒船町、勞働寄宿舎は神田三崎町と、月島二號地とにあるが、月島では特に食事の世話迄もして居る最近式の勞働寄宿舎である。昨年中三ヶ所の寄宿舎にて取扱ひたる事業の概況をいへば左の如し。

- 一、宿泊延人数 五三、五六五
- 一、無料宿泊延數 一、五四四
- 一、食事を賄ひし數 四〇、三七三
- 一、無料給食數 二、五六九
- 一、日雇勞働紹介數 三〇、七三〇
- 一、家儲稼業に出せし數 九、四八一
- 一、集會回数 一一四 同會衆 四、五九六

(四) 救世軍病院

救世軍病院は貧病者の救療を目的とし、其事業を大別して(一)外來診療(二)巡回救護及特別往診(三)結核相談部(四)助産の四つとすると出来る。場所は下谷仲徒士町三丁目にある、

- 昨大正三年度に於ける事業の大體を述べれば
- 一、外來新患者數 三、四一六
- 一、自舊患者數 一七、二二五
- 一、巡回救護の戸數 一一、九三四

一、結核相談部患者延數 七、四六五
一、助産數 二六

入院は普通扱はぬことにしてあるが特別の場合に取扱つた數が二十九名、他病院に紹介したる數二十六名になつて居り。別に食物給與數百件、衣服給與三十五件を算し、集會の回數は四百七十二、出席者數一萬二千五百十六人、改心者數八十五名を數へ、靈肉の病を癒す病院たるの名に負かざるの事實を見せて居る。

(五) 新發展と新計畫

最近御大典紀念事業として、貧民窟屯所愛隣館が東京に二ヶ所設けられ、近々大阪に免囚保護所が新設さるゝ筈。數年來の宿題たる結核療養所の方も、徐々乍ら着々實現に近づいて居る。

■自殺者の激増

毎年四月から八月にかけて自殺者が多いのであるが、本年は又頗る著しく殊に青年學生の自殺者が輩出したるは寒心すべき現象である。現に先頃東京の某新聞に現はれたるものゝみにても、去七月一日から廿日迄の間に於て、既に左の如きものがあつた。

▼一日 一高生の自殺▼七日 帝大生の自殺、同大嶽山中學生の自殺▼十二日 一家四人の投身自殺▼十三日、高師附屬中學二年生の自殺▼十五日 同鐵道學校生徒自殺▼十七日 妻を斬て自殺、同牛込質屋俸の自殺▼十八日 閨秀畫家の自殺▼二十日、又々自殺學生

而して五月には百廿一名、六月には百十名、七月には百三名の多きに達したのであつた。大正元年の統計によれば夏季毎月の自

■救世軍の社會改良事業

日本の救世軍には日下内地に八ヶ所、大連に二ヶ所の社會改良事業部がある。

(一) 免囚保護事業

免囚保護は半込の勞作館で營むて居る。之は監獄から出るは出ても、再び以前の悪い仲間に戻つて行かねば、行き所の無い者等を、希望により引取つて生活の途を與へ乍ら、其品性の改善を圖る事業であり、別に微罪不起訴の青少年を、検事局から引取つて世話して居る。

一、收容して保護を加へたる者の數

内、出獄者(一一三)微罪不起訴(一四六)

一、間接に保護を加へたる者の數

内、出獄者(六七)微罪不起訴(七八)

二五九

一四九



別に一時的の保護を加へたる者もあり。右は何れも大正三年中の統計である。

(二) 育児と婦人救済

東京に婦人ホームがあり、大連の育児及婦人ホームは、可成り手廣き新築の計畫中にて、目下假宅にて經營して居る。

婦人ホームの目的は既に墮落したる婦人の救済と、種々なる事情の下に墮落の危険ある者の保護とであり。育児ホームの目的は今更いふ迄もない。東京婦人ホームにては昨大正三年中、新たに二百八十名を收容し、前年度の越員と合して二百九十四名の中、百五十五名を職業に就かしめ、百〇三名を親戚知人等の手に歸らしめることが出来た。

(三) 二種の宿泊事業

頑迷な宣教師輩が成すことに事を缺いて、教派上何等の關係も無い牧師の異端決議とは笑ふべきことであるが、獨立獨行の日本の牧師に對して容すべからざる無禮である。吾人は活目して今後の成行を見よう。

■讚美歌問題

我基督教會の讚美歌獎勵者として自任する酒井勝軍氏は其の經營する雜誌讚美の友誌上で盛に植村正久別所梅之助二氏に喰つてかゝつて居る。奉期協同傳道用讚美歌中に「國土をかざりて境をたて」云々の非國家的文句があるといふところからある。氏は更に新教各派の聯合使用する讚美歌中に卑猥なる言語ありとて之を摘發して居る。統一教會や自由教會では使用しないが、あの讚美歌も古くなつたから序に改正したらどうか。

■青年會憲法改正問題

本誌前號の時評欄にもあつたが九月の「開拓者」には此問題に關し古市氏及岡田氏の明細なる報告と反對論の駁撃がのつて居る。開拓者近來の活氣ある文字だが、吾人は之に依てあの問題が如何に下らない反對論に依つて成立しなかつたとがわかつた。反對論者もあゝ云はれて黙して居る譯に

は行まい。同誌上に於て活氣ある論戰の起ると信する。

■大正三年度新教各派教勢

教派	教役者	會員數	受洗者	獻金	高
日基	三〇四	二六一六六	二一九五	一二、五四一四	
聖公	三三四	二三四八四	一四一七	四、八一六〇	
組合	一三八	一九五九七	一四四一	一一、三五七九	
メソ	三六〇	一五一五七	一六九九	六、四四七九	

之に依つて見れば各派の献金高は各一名左の如し。

組合	七圓強	日基	五圓弱
メソ	四圓強	聖公	二圓強

■日本メソヂスト總會

同派の第三回總會は十月七日から東京青山學院講堂に開會、監督公選憲法改正等を行ふ由。

■自由基督教會

神田錦町女子音樂學校内に於て毎日曜午前十時から公開禮拜を開いて居る。九時からは岡田哲藏氏の宗教英文學の講義ある。同教會は純然たる共和自治主義であるといふ。

殺者は本國內で千名以上ある。而して其原因を同年の總自殺者一、一七八人に就て調査の結果は

▼精神錯亂 男二〇八一、女一二七七▼病苦 男一二九七、女九二七▼困窮又は薄命 男六〇五、女二三二▼情死 男一一二女一二八▼痴情又は嫉妬 男一〇〇、女一三四▼前非後悔及懺悔 男一二八、女四七▼罪惡發覺の恐怖 男一六八、女三五▼將來を苦慮 男一二〇、女九九▼商業の損失又は負債償却困難 男一七五、女一四▼離縁を悲み 男三〇、女五七▼私通姦姦 女五五▲結婚忌避 男三、女二五

といふことに分類される。學者宗教家乃至社會事業家の一考すべき問題であると思ふ。

■スパー博士來る 米國長老教會傳道會社の重要な役員にして、世界の傳道事情に通じ、「傳道と近代歴史」等の名著あるロバート・イ・スパー博士は東洋視察の途朝鮮を経て來遊の筈である。

■中央バプチスト會館 一昨年神田大火の際類焼の厄に罹つた三崎町なる同會館は其後同所に新築することとなり昨年末より工事を始めて居つたが此程漸く竣工し本月から新會館にて禮拜其他の集會を營むこととなつた。新築會館は所謂インスチテューショナル・チャーチ風のものにして、舊會館より遙に設備も美觀も勝つて居る。禮拜室は二階で道路から直に昇る階段あり、此他女子英語學校教室、幼稚園、毎夜傳道所、圖書室、球突室等あり四階の屋上は全體を運動場とし一隅に小祈禱室を設くるなど一寸新工夫の點がある。我國の教會堂の新式なるものである。之が費用

は約五萬圓の由なるが案外安いものである。

■宮川牧師異端問題 南長老阿宜教師會が此夏輕井澤に開かれた時、組合派の先輩牧師たる宮川氏の著書に對し異端宣告をなしたといふことで目下一紛擾持上つて居る。其決議案なるものは左の如し。

當ミツシヨンは「基督と其使命」なる小冊子の頒布を見て、尤も遺憾なる事とす、書中著者はイエス・キリストを以て、永久に神の子と信ずる基督信徒に反して單に靈に充たされたる人間のみとする人々と、自ら班を同ふせり。吾人は現時日本の基督信徒が、協同一致して神の子の福音を宣傳せる時に際して、此事を見るを特に悲むものなり。

此決議案に對して宮川牧師が、右宣教師會の議長に宛て左の正誤文を送つた。

去八月二十六日發行ジャパン・アドバタイザーによれば貴會議は拙著「基督と其使命」の書中基督論に關する所説に就て遺憾の意を表されたる決議案ありし由。所報若し眞ならば予は議案となりし原文引用の誤謬を匡さんと欲す。そは予がイエス・キリストを以て單に靈に充たされたる人間のみと稱したりと云はるれど、予はいづこにも斯く譯さるべき言句を用ゐず。予は彼を以て「神に充ちたる人」と呼び、且つ「予は使徒ペテロと共にイエス・キリストを以て活る神の子基督なりと告白するを躊躇せず」とも述べ置きたり。願くは貴會議が決議案の土臺となれる、誤れる提案を匡し著者に對する相當の處置を執られんことを望む。



結婚道德の新典型

一條 忠 衛

一 人生に於ける結婚の價值

結婚は人生の中心點である。活動の原動力であつて生命の工場である。人生に唯一の最大事件があるならば其れは結婚である。人生に唯一の成功があるならば其れは結婚に關してのみである。人は結婚によつて自己の運命を處決される。結婚の成敗は我の運命を天壤に隔絶して生存の意義を活動する。人は自己の結婚に關しては最高の眞理を顧問と爲し、最善の批判者となり、慎重審議の下に神聖に行ふべき義務を負ふてゐる。これは光榮ある我の人生を自衛する必要に生じた我の絶對的道德である。我はこの道德を完全に體現すること出来る人格者であれば結婚の成功者とあり、體現することの出来ない非人格者であれば結婚の失

敗者となる。結婚の成功は我の人生には活動の旺勢であつて生命の充實である。結婚の不成功は我の人生には活動の休止であり生命の涸渇である。人は斯の高等自覺の上に我の結婚を創設しなければならぬ。輕々に之を行ふ者は自ら死地に赴く者である。

死は或る場合には勝利であることがある。其れは人事を盡して天命を俟つ場合である。我の結婚の神聖を他人のために又は自然のために破壊された時は我の結婚の失敗は勝利である。けれども我の不徳のため不義のために我自ら之を破壊した時は、我の結婚の失敗は敗殘の死である。人は自己の結婚に關しては其の神聖を自覺して人生唯一の成功を期待しなければならぬ。假令勝利の死に

九月の哲學宗教評論

■解放者ウキリアム・ジエムス(田中玉堂)オイケンの個人主義論
(稻毛詛風)自己の中の戦ひ(平方達雄)凡人淨土(相馬御風)……

■書齋の窓より(内田魯庵)鏡心燈語(泉謝野品子)平凡なる眞實
(相馬御風)道德の權威(森田草平)……『太陽』

■教會を悩ますものは何か(小松民治)活ける力としての基督教
(日野眞澄)青年と信仰問題(齋藤惣一)信徒の第一要務(石川角次
郎)……『開拓者』

■日本民族の自覺(佐藤鐵太郎)印度六派哲學を讀む(推尾辦臣)歐
洲戰亂と基督教(加藤弘之)……『東亞之光』

■農奴開放を中心として見たる露亞亞文化(昇曙夢)雜感(武者小
路實篤)トルストイの宗教及び宗教觀(加藤一夫)……『科學と文藝』

■所謂歸一協會の宣言に就いて(加藤弘之)トライチケの政治哲學
一班(浮田和民)聖教の要義(小柳司氣太)自殺に就いて(耳袋生)……

■ベアトリチエに就て(森戸辰男)此弊何れの時に止まん(田
中達)聖書の「コイナー」に就て(宮崎小八郎)藝術の倫理(千磐武
雄)……『文明評論』

■基督教の一特徴(宮川牧師)宗教と藝術(三輪源造)ダニエル書總
論(牧野虎次)……『大阪講壇』

■基督教の教義の性質(イ・キ・自殺(ダレボフ)……『正教時報』

■祖國精神の聖化(海老名彈正)文明向上の信念(内ヶ崎作三郎)……

『新 人』

■懷疑と信仰(松村介石)佛教は如何にして吾國に榮えしか(大川
周明)……『道』

■基督教の神觀念(セシル)イスラエルの兒童教育(伊藤堅逸)耶蘇
の言と其資料(柏井園)日本に於ける最初の殉教者(スキート)……

■新宗教の要素としての意志(鈴木龍司)……『神學之研究』

■迷信と精神病附余の所謂祈禱性情精神病に就て(森田正馬)……『心理研究』

■禱と文學(加藤咄堂)禪と生活(椎木岳水)……『人 性』

■并ンデルバンドの哲學概論(宮本和吉)……『教育學術界』

■個人としての生活と性としての生活との間に於ける争闘に就い
て(らいてう)墮胎に就いて(山田わか)別居に就いて思ふことども
(岩野清)……『朝 日』

■貞操問題(諸家)……『朝 日』

報酬を得んとする觀念に基いたのでは無くて、子の將來に屬する完全又は幸福を希望する觀念と老衰の後に子の保護に與らんとする觀念に基いて居る。子は之に對して孝行を爲す義務を生じ、服従を旨とすることになり、隨つて子の結婚に對して親は自己の意志によつて全部を處決命令する責任者になる。子に關する結婚の始末は親の義務として道德的觀念の上に行はれる。

これが子の結婚に對する親の絶對權の由來である。其の結果として親は先づ自己の理想によつて子の配偶者を選択することが最大の條件になる。子の配偶者を決するには子自身のため親自身のため又は家のため其他内外の權衡を得て遺憾なきことを理想とする。親は周到なる調査によつて理想の配偶者を決定した時は之を子に報告して承諾することを命令する。且つ夫婦相和して親に仕へ内外へ落度なく立廻ることを要求し、こゝに期日を設けて一定の儀式宴會を過て同居させる。結婚の完成はこの儀式宴會を以て結了したことを内外に向つて證明と爲すのである。子は親の命令として

此等は無條件に承服して、夫婦相和すべく又は親に仕ふべく又は内外へ落度なく立廻るべく努力する義務を生ずる。親の定めた結婚に關しては親のため家のため内外のため不利益な場合にだけ參考として自己の意見を親に具進することが出来るのみで、自己に關する不平不滿からは何等の異議も申立てることが出来ない。親の定めた配偶者を自己の感情から又は利益から厭忌すると云ふことは我儘な甚しい惡行爲であると共に不孝の子となる。經濟に於て結婚無能力者なる子は、結婚費用又は生活費用若くは財産を親に仰ぐためには假令親の奴隸となつても歎顔と服従を旨とせねばならぬ結果になる。子は自己の結婚に關しては總ての點に於て親を信任してその命令に懾服して行動しなければならぬ規約であるから、自己の結婚を自己で發議し又は進行させることは絶對に出来ない制度である。假ひ結婚を希望しても親が之を話題に上せない中は永久に口を噤んで居なければならぬのみならず、配偶者を推薦される迄は殊勝に控へて居て、かりそめにも異性と親密な談話や同席

斃れても敗殘の死に終つてはならない。私は之を神聖結婚主義と名命する。結婚道德の新典型である。

現代の社會に行はれてゐる結婚には幾多の形式があるが、根本に於て二つの大なる潮流に分れて居る。この潮流は根底から其の性質と方向とを異にする反對潮流で永久に合しない並行線の歩み方である。一は親の意志によつて生ずる結婚で一は子の意志によつて生ずる結婚である。それから此の二大潮流を折衷した一分流がある。親の意志と子の意志によつて生ずる結婚である。一の場合は家族主義の結婚であり、二の場合は個人主義の結婚であり、三の場合はその折衷主義の結婚である。私の神聖結婚主義はこれ等の思想を批評し醇化し其の矛盾を去り弊害を除去して、唯一無二の眞理に結晶構成した最終の新典型である。

二 家族主義の結婚

第一の觀念に依れば、結婚なるものは親の意志を根本中心にして子の上に創設する全部の行爲である。結婚當事者である子の配偶者を親の意志に

よつて定めて、或る傳習の儀式を通じて之を結合させる性的行爲である。即ち親と親とが各自の子の上に性的結合を企てた一體の事業が結婚である。結婚意志の主體が親に存するので、子は其の意志の下に服従する客體になつて居る。そこで子の結婚に關する全部の必要條件は親の慾望に發して其の理想に選決される。子の意志は親の意志内にあつて之に反戻しない範圍又は程度に於て僅かに許されてゐる。随つて親は結婚に關する絶對の發議者となり命令者となり、子は絶對の服從者となり遵奉者となる。これは親權を結婚の根本要件にした當然の結果である。子の結婚に對して親が發議權を有して居れば、子は親の意志に隸屬し支配されることは最も顯明なことである。親の發議權は親權に出でたもので子に對する絶對權の行使である。これは人類の太古から子を親の生産物として私有する觀念に胚胎したもので、子に對する監護扶養及び教育の責任を自覺する時代に至つて完成された權利である。親は子を監護し、扶養し教育し、結婚費用を調達し、財産を分與するは孝行の

徳の結果として自己を責めるのである。一度嫁いた以上は二度と實家に戻ると云ふのが親の教であつて、不幸にして破鏡した場合に於て忍びないところであるから親は其儘引き取つて扶養するのが義務になる。子は之に服従しなければならない。斯うして自己の結婚に對する親の理想經營は直ちに取つて自己の理想經營となし、親の命令の服従者は直ちに自己の良心の命令の服従者に轉化しなければならぬ義務がある。親の人格品性を根本にして道德的意識に於て理想の選擇を爲し、動機を決定し、道德的標準を提示したものを子は自己の道德的意識で之を模倣し輸入して同化しなければならぬ。自分の人格品性を根本にして自己の道德的意識に於て行爲の獨立者、創造者、決定者たることを許されて居ない。即ち子は自己の結婚に關しては人格品性行爲の非獨立者である。子は永久に子として親の懷に擁護を受けてゐる乳臭兒である。即ち強大なる家長の保護によつて生存の意義を有して居る弱少の家族員である。人生唯一の最大事件に臨み、人生唯一の成功を求めるときに天上天下に獨立の健闘者たることを許されて居ない。自己の運命の創造者開拓者たることを許されて居ない。自己の理想の決定者たることを許されて居ない。總てを親即ち家長に一任して其の指揮を仰ぎ萬全を依頼して之を神として崇拜しなければならぬ。家族主義の結婚は斯うして親權の發動の上に成立した一元意志説の結婚で、一個の道德的系統を組織して社會を流れる一大潮流である。

三 個人主義の結婚

然るに第二の個人主義の觀念によれば此れとは根底から異つて居る。個人には絶對的個人と相對的個人との差別があるが、元と個人なるものは社會的の個人で具體普汎のものであるから、絶對的個人なるものは單に抽象的のもので實在して居ない空想である。それで個人主義と云へば必ず相對的個人でなければならぬ。この相對個人主義から結婚を觀れば、結婚なるものは父母、親戚、知己、隣人、國人等の社會に生活して居る子が、子自身の意志を根本中樞にして子自身の上に創設する全部の行爲である。結婚當事者である子が自己の配偶者を自己の意志によつて定めて任意に愛に於て結合する性的行爲である。即ち愛と愛とが夫婦の契約に向つて自發共鳴したことが結婚である。結婚意志の主體が子に存するので、親は子の意志の下に子の結婚を既成する客體になつてゐるそこで子の結婚に關する全部の必要條件は子の慾望に發して其の理想は撰定される。親の意志は子の意志内にあつて之を侵害しない範圍と程度に於

をなさない義務を負ふてゐる。結婚當日までは自己の配偶者を云爲されることは羞耻の念を以て席を避け、自己の結婚を他人事又は對岸の火災のやうに我關せぬ態度を粧つて居なければならぬ。自ら出馬して配偶者の運動を試みたり進んで異性に關係交渉したりすることはふとゞき千萬な行爲になる。親が結婚させる前に苟くも異性に關係するなどと云ふことは、不貞操の甚しいもので人格の劣等な墮落者として取扱はれる。随つて自由結婚などは夢にだも思つて居ないので、若し子の自由意志で親を除外して結婚した者があつたならば社會に隠れなき我儘者にされて、親祖先に對しては不孝の子となり家名を穢し、親は内外へ對して面目ない鈍兒として凡ての道德的責任を負ふて自己の不徳に歸するのである。子の自由意志に本づく戀愛は品性の墮落として最大なる罪惡で蛇蝎の如く嫌はれる。子に戀愛をさせて置くは親のだらしない品性の結果として監督の懈怠を以て責められ家庭教育の紊亂として罵られる。そこで親は子を嚴重に監督して異性にいさゝかも接近させない

やうに努め、飽く迄も箱入にして置くことは最も肝要な事由から來て居る。子を疵物にしたと稱するのはこの自由戀愛に對する親の道德上の責任を指したのである。親は子を疵物にさせないために絹に包んで置くやうに大事に注意することは、子の結婚を子自身のため親のため家のため内外のため完全な平衡を得て理想的の將來を實現したいための素願である。親は子の結婚に對して意志の主體で全部を總攬する責任の當事者であるから最も眞面目に熱心に之に當つて努力してゐる。

子は之に對して親の命令として遵奉する責任のみを有して居る自己の結婚に對しては責任を負ふて居ないのが原則である。何となれば子は自己の結婚に對しては意志の客體であつて被行爲者である。道德上の責任は自己の意志決定に對する價值上に生ずる。即ち自己の理想經營に發した自我の實現の上に責任が存するのである。然るに子の結婚に對して親が理想經營の主體であつて實現者であるから、子は單に命令の服従者としての責任のみを有して居る。然るに家族主義の結婚では子は命令の服従者としての責任のみならず、結婚の責任者として親に對して補弼の責に任じてゐる。親の罪は凡て子として之を感ずるのである。自己の結婚の成敗は自己の努力の如何に由ると見てゐる。結婚の失敗に際しては其れが明かに親に原因して居ても、子は自己の努力の足らない不

さないように壊さないように保護して努めて啓發して遣る。子の結婚は子が親の保護生活から脱して獨立の個人となつて運命の開拓に従事する目出度き門出であつて、人生の本舞臺に立つ行爲である。随つて子の結婚に關しては自己の意志によつて全部を處決する責任者になる。子に關する結婚の仕末は子自身の義務として道德的觀念の上に行はれる。

これが子の結婚に對する子の絕對權の由來である。その結果として子は先づ自己の理想によつて自己の配遇者を選択することが最大の要件になる。自己の配遇者を決するには自己の人生に發した中心欲求を満足させることを理想とする。親自身のため又は家のため其他内外への御附合又は御奉公を目的とするものではない。一男一女の共生する内心の同體を目的とするものである。一夫一婦の圓滿な家庭を創設する願望である。この相對的個人の完全な共生の實現によつて初めて親自身のため又は家のため其他内外への社會的平衡を得るのである。それで子は周到な批判によつて理想の配偶者を決定した時は之を親に報告して茲に獨立の個人たる旨を承認させるのである。これは親の許諾を要求する意味ではない。たゞ獨立の個人たることを宣告する意味である。この宣告に對しては親が承認する与否とは彼の自由であるが、子は社會一般人に對する場合と同じに人道上から其の承認を催告する權利を持

つて居る。親は人道上からこの宣言に對して無條件に承認する義務を負ふて居る。其の關係は國際間に於ける一國の獨立と同一である。親は子の結婚に對して自己に奉仕することや又は内外への義理合を結婚の要件に加へて主張することは出来ない。且つ親は子に夫婦相和すべきことを命令する必要もなく又子は命令されて之を努力する義務もない。子の定めた結婚に關しては子自身の不利益な場合にだけ之に忠告することが出来るのみで、自己に關する不平不満を云爲することは出来ない。子の理想に決定した配偶者を親の感情から又は利益から厭忌すると云ふことは甚だしい我儘の惡行爲であつて子不孝の親となる。經濟的能力者である親は子の結婚費用又は生活費若くは財産を子に與へることは假令親の權利に出でた任意であつても、之れを惡用して子を拘束し奴隸視する手段に投ずることを爲さない。親は金錢を以て子の獨立を買収することは出来ない。それで親は子の結婚に關しては凡てに於て子の意志を尊重し承認しなければならぬ規約であるから、子の結婚を親が發議し又は強要することは絶対に出来ない制度である。假令子の結婚を希望しても子が之を要求しない中は口を永久に噤んで居なければならぬのみならず、子が配偶者選擇のために異性と談話することや同席することや外出することを許容して且つ之を補佐する義務を負ふて居る。自己の結婚を他人に喋々され云爲されることは人生最大の恥辱であるのみならず、自己の結婚を他人事又は對岸の火災に見て居る不眞面目な謹慎な懶惰な態度は自己の人格を沒落することになる。自ら出馬して配偶者の運動を試みず、異性に交渉關係することも努めず、ぼんやりして青春の高

て補助機關になつてゐる。従つて子は結婚に關する絶對の發議者であり、獨立者であり、權利者である。これは子に屬する個人の人權を結婚の根本要件にした當然の結果である。子の結婚に對して子が發議權を有して居れば親は子の意志内に隸屬し支配されることは最も顯明なことである。子の發議權は個人の人權に出でたもので親又は社會に對して絶對權の行使である。これは子は親の生産物であつて監護扶養及び教育の拘束内にあるけれども、既に分立した成人で人權の獨宰者であると云ふ個人の自覺に完成されたものである。子が親に監護され扶養され、教育（親の力の範圍内に於て）されるは子が獨立の個人として自立するに到らない幼稚の時期にだけ子に屬する權利であつて又親の義務であることになる。随つて親は子の幼稚な時期にだけ子を監護し扶養し教育する權利者であつて義務の責任者であるが、子が既に獨立の個人として自立するに到れば此の權利を失ひ義務を免れることになる。而して親が子を監護し扶養し教育するに子又は自己の將來に屬する完全と幸

福を希望する觀念に基いて居るが、老いて後に子の保護に與らんとする觀念を介在して居ない。親は子に孝行を望まない。子は親に朝三暮四を欲しない。親子は各自獨立の個人であつて社會の一員である。疾病又は天災地變によつて獨立の生存の出来ない場合にだけ子は親を助けることが孝で、親は子を救ふことが慈であると云ふ義務を保留して居る。子が個人として完全な獨立者となることが最大の孝であつて百行の本である。子は一刻も早く親の羈絆を脱し厄介を免れて個人の完全な獨立者たることを念願する。親は一刻も早く子を個人の完全な獨立者に作り上げることを冀望する。子は結婚費用や財産又は生活費を親に仰がうとはしない。自ら之を作らんと試みる。親は子の活動を自由にし發展を易からしめるために出来る範圍内に於て結婚費用も財産をも作つて與へようと圖る。子は必ずしも之を期待しない。子はこれが爲めに自己の經濟的生活に向つて自己の意志に依つて獨行しなければならぬことに着眼する。親は子に服従を強ひない。子の自由行動を喜び之を侵

ものを親は眞理として可能するのである。それでは自己の結婚に關しては人格品性行爲の獨立者である。子は結婚を期として親の懷から飛び出して自ら濶歩する成人である。即ち親の保護から脱して自營によつて生存の意義を有して居る獨立の個人である。人生唯一の最大事件に臨み、人生唯一の成功を求める場合に天上天下に獨立の健闘者たることを許されて居る。自己の運命の創造者たることを許されて居る。自己の理想の決定者たることを許されて居る。總てを自己の良心に一任して其の自我の指導を仰ぎ、萬全を我自ら作つて行く。之を内史の心に崇拜して其の光を渴仰する。個人主義の結婚は斯うして社會的なる個人の人格の發動の上に成立した一元意志説の結婚で、一個の道德的系統を組織して社會を流れる一大潮流である。

四 民法に於ける折衷主義の結婚

第三の場合は子の結婚に親の同意權を規定した近世民法の思想が好例である。殊に我國の現行民法は其の代表的事例である。我が民法の親族篇な

るものは爾來の家族主義と新文明の生んだ個人主義とを無理に折衷したものである。決して調和して居ない矛盾の思想である。頓と空文である。殊に婚姻の章に於て最も明かである。婚姻の成立に關する要件には子の意志を根本要件にして居ながら親の同意をも要件に加へて居る。意志の發生する前後から言へば子の意志が前で親の意志が後になつて居る。先づ子が自己の結婚に關して結婚意志を發して其れに對して親が同意又は不同意の意志を發する順序になつてゐる。形式上では子の意志が主體で親の意志が客體になつて居る。これは結婚は一男一女の意志に發する畢生間の契であると云ふ法理的 정신に基いて居る。それで親が子に結婚を命令しても子は結婚の意志がない場合には之を峻拒することが出来る。これは個人主義の思想に資縁したのである。そこで子の意志と親の意志が衝突した時は、親は子の意志に服従するのが終結でなければならぬ。然るに民法で與へた親の同意權は滿三十歳未滿の男子又は二十五歳未滿の女子を知識に於て保護する意味に出でたもので、

價なる日を安逸に送ることは生に極めて不忠實なもので人格の實現に不熱心な行爲になる。自己の肉體を自己完成のために人生の要求から自己の信篤する最愛の異性に捧げることなしに、親の命令のまゝに止むを得ず見知らぬ又心知れぬ他人にさらけ出すは淫賣行爲であつて不貞操の甚だしいものとなる。

随つて他人の意志に本づく結婚などを夢にも豫想して居ないので、若し親の意志で子を除外して結婚させられた者があつたならば、社會に隠れなき墮落者にされて自己の人格を毀け人生の意義を没却した一個の奴隸として總ての道德的責任を負ふて自己の不徳に歸するのである。子の自由意志に本づく戀愛は品性の向上で最大の善行者で我の生命として憧憬するものである。子に戀愛をさせることは親の高尙なる品性の結果で家庭教育の美舉となる。親は子を解放し異性に接近させ自由理想の配偶者を撰擇させることは最も肝要な事由から來て居る。子を解放し異性に接近させるは子を疵物にさせない爲めであつて、子自身の理想的將來をいのるためである。子が異性に接近し配偶者を撰擇し戀愛を試みるは自己の完全な幸福な人生を作らんがためである。子は斯うして結婚の全

部を總覽する責任の當事者であるから最も眞面目に自覺的に之に當つて努力して居る。

親は之に對し子の意志として敬愛する責任を負ふて居る。唯だ子の結婚行爲に對しては責任を負ふて居ないのが原則である。子の結婚の成敗は共に親の喜憂であるが子の罪は直接に親の罪ではない。唯だ教育の不完全としての親の罪である。親は子をして結婚の獨立者として成功を期することが親の子に對する教育である。子は結婚の成功者となることが自身の義務である。結婚の失敗は悉く自己の不徳なる結果である。一度嫁した以上は再び戻るなど云ふ教はない。既に獨立して生家を出た者であるから不幸にして破鏡になつた場合でも子は決して親許に歸らうとはしない。自己の經濟的勤勉によつて獨立自營して行く。これが子の覺悟であつて義務である。斯うして自己の理想的經營の下に良心の命令による服従であれば、其れが同時に親の心に存する理想經營になつて居る。子の人格品性を根本にして道德的意識に於て理想の撰擇をなし動機を決定し道德的標準を提示した

主義は意志の二元説であるから子の自由意志による愛をも認め又は親の命令と儀式をも包容した上に樹てられた主義である。一男一女の愛と親の命令と社會の傳習的儀式とを調和しようと企てた努力であるが、僥倖以外には事實上不可能の行爲である。子と親とは別々の個人で人格に於て意志の獨立者である。一致する場合と衝突する場合とある。一致する場合は僥倖である。折衷主義はこの一致せる場合を僥倖と願ふ結果に終るに過ぎない。元と意志の二元を樹てたのは親子の意志に個人的權利のあることを豫想し、且つ其の衝突の場合には妥協交譲の方法で解決しようと企てたからである。それで結婚は親子の意志が同時に發して同一の理想に於て妥協交譲した時又は前後に發して妥協交譲した時の僥倖の場合でなければ成立しない現象である。子が自由意志によつて手を握り口を接して共鳴しても、親が之に向つて妥協交譲せず同意の旨を與へなければ永久に結婚は出来ないことになる。親が之を知り寛大に同意したならば其れは眞に僥倖の結婚である。又親が自己の

意志によつて子に夫婦を命令しても子が夫婦たることを拒否した場合は永久に結婚は出来ないのである。子がこの命令を歓迎したならば其れは眞に僥倖の結婚である。それで意志の衝突によつて妥協交譲が破れて子の自由戀愛が破壊され又は子が夫婦たることを拒否した場合、又は嫌々ながら不滿の結婚を爲した場合又は自ら子を墮落させ失望落膽させ延いて自殺も促がすことになるのは茲に原因して居る。

それで子の意志を先に認めれば個人主義になり親の意志を先に認めれば家族主義になるのは自然の理數である。子の意志を先に認めて同時に親の意志を後に認めれば結婚は事實上不可能であるのみならず、失戀者と偽夫婦を濫造する結果になる。男女の愛を目的とする意志と親の命令を目的とする意志とは性質に於て作用に於て根本的に生起を異にしてゐる。一男一女の愛の契の場に於て親を現場に立たせて置いて同意を求めるは實際に於てないのである。手を握り口を接する夫婦の契約に於てその瞬間の共鳴に於て、四人の親の一致した

子の結婚意志に容喙し其の成立を拒否することが出来るのみならず、意志の衝突から子が任意に斷行した婚姻を親が何時でも取消することが出来る權能を持つて居る。それで子の結婚は形式に於ては子の意志が主體で親の意志が客體であつても實體に於ては親の意志が最大の要件である。これは家族主義の思想に由來したものである。それで子の結婚は子の意志と親の意志との一致した時に初めて合成される現象になつてゐる。これが法律に於ける折衷主義の立脚地で二元意志説の態度である。然るにこれは一個の抽象的理論で具體的理論でない。考へることは出來ても事實に現はし得ないものである。若し之を事實に現はさうとすれば結果は子女を墮落させ結婚に失敗落膽させ延いて自殺をも決行させることになる。それで結果は子の結婚を親の意見で全決すると云ふ家族主義の立脚地又は子の意志で全決すると云ふ個人主義の立脚地に舞ひ戻るのである。何となれば個人主義でも家族主義でも子の結婚に對して親子に意志の争は理論上ない制度であるから、親子の意志の一致を

要する場合は無いのである。子が親の意志に従ふか、親が子の意志に従ふか二途の一に歸するのである。個人主義で結婚と稱するは一男一女の自由意志を以て愛の誓約により手を握り口を接する行為に大成する。即ち結婚の確立は瞬間的である。こゝに結婚の根本的意義を有するのである。婚禮の儀式又は身分の登記などは結婚の末枝になつてゐる。愛の契が即ち結婚である。この成立があつて後に親が之を知るのである。子の意志が先で親の意志が後である。そして親は之に向つて拒否する權利のない制度である。直ちに同意する義務を負ふて居る。然るに家族主義の結婚は親の意志によつて親と親とが交渉を企て其の子である一男一女に或る特定の儀式に従ひ夫婦を命令することである。即ち結婚の確立は長年月的である。こゝに結婚の根本意義を有して居る。交渉あつて命令あつて儀式あつて後に一男一女は夫婦に結合する。親の意志が先で子の意志が後である。そして子は之に向つて拒否する權利がない制度である。直ちに命令を奉遵する義務を負ふて居る。然るに折衷

平等の觀念、獨立自營、一夫一婦、個人經濟の發達である。短所は利己心、非團結、弱肉強食である。

それで家族主義にも個人主義にも各の長短あつて今早計に其の優劣を論ずることは出来ないのであるが、此等の主義は畢竟するに人間の道德的本務であつて歸するところ一個の徳に過ぎない。互に衝突する道德的觀念に就いて説明上の論争を惹起するが、これは爾來の家族主義個人主義に關して道德體系の組織上に於ける不完全と誤謬に基因して居る。我が國は家族主義であるから家族主義の上に個人主義の長所を採つて我の短を補ふべしと説いても個人主義の短所を補ふに我が家族主義の長所を以てせよと説いても歸するところ同一の結果を生ずるので、こゝに新しい徹底した道德を組織すれば必ずこの二個の主義は一に歸するのである。結婚に於て最も明かに之を證明することが出来る。結婚はこの二個の主義を調利する力を内含してゐる。家族主義と個人主義とは必ずこの結婚道德に於て思想の渾一する運命を持つてゐる。爾來の家族主義の長所は祖先崇拜、孝行、團結、利他心などであつたから結婚道德に於ても此等の思想と調和しなければならぬ必要がある。又個人主義の長所は人格の尊重、權利の主張、自由平等の觀念、獨立自營、一夫一婦、個人經濟の發達などであるから此等をも調和して行かねばならぬ必要がある。そして家族は親子を基礎とした團結であつて一夫一婦を基礎とした家庭と根本に於て同一である。孰れも社會的なる個人を基礎とした小社會の現象である。そして夫婦がなければ親子もなく親子がなければ夫婦もない筈である。夫婦は子から見れば父母であり親から見れば我と配偶者の

關係である。それで夫婦と親子は離るべからざる關係のものであるが、親子が先であるか夫婦が先であるかと云ふ時には勿論夫婦が先であると云はなければならぬ。夫婦あつて其の間に子を生じて始めて親子の關係が成立する。夫婦は男女と云ふ性的個人の合で社會發生の原動力である。性的個人あつて夫婦あり夫婦あつて家族あり家族あつて親戚あり、親戚あつて郷黨あり社會あり國家ありと云ふ順序になる。個人と國家との間の最小の社會的單位は夫婦である。男子又は女子は性的社會の單位であるが社會的生活の單位ではない。社會的生活は一男一女の結合に始まる。それで夫婦の完全な結合が國家の完全な結合である。夫婦の誓ひ圓滿は家庭が國民の誓ひ圓滿な國家である。道德はこの兩面に跨つて居る。端を夫婦に發して忠君愛國又は世界國際の平和に接觸してゐる。それで夫婦の男女道德が總ての道德の根底である。結婚即ち愛はこの世界的道德の中心的の行爲である。然らばこの道德の中心的行爲を爲すのは何人であるかと云ふに、性的男女の個人である。我々は男子として又は女子として自己の人生に於ける道德の中心的行爲を完成しなければならぬ。これを完成するは自我の人格を實現すること、自己の義務で社會に對する責任である。自己の批判により理想により良心の命令する處に卒出して決行しなければならぬ。自己は獨立者であつて創造者であつて決定者である。人生活動の本體はこゝにあり生命の流露はこゝより發するのである。ところで自己の一次的意志は結婚行爲の中心になるのである。愛は其の中核である。自己の結婚を自己の愛によつて處決するは自己の人格の尊重であつて人權の發動である。この自

同意を挿入することは抽象的の空想に過ぎない。愛の契約と親の同意とは同時に兩立しない行爲である。必ず前後がある。愛の契約を先にすれば親の同意は後になり、親の同意を先にすれば愛の契約は後になる。結果は個人主義か孰れにか歸一する。然るに折衷主義は之れを同時に調和させようと圖る自家撞着の主義である。その結果は何うである。折衷主義の結婚には整然とした結婚の主義が無いのである。即ち愛を結婚の根本要件にする個人主義と親の命令と社會傳習の儀式を根本要件にする家族主義とを調和させようと企てた結婚は結婚の意義に於て徹底しない無意義の結婚に陥つて居る。それで現在我國の民法親族篇の婚姻法なるものは實際に行ひ得ない亦た存在し得ない婚姻に關する法規である。單に一個の空文として國家が定めた手續法たるに過ぎない。世上の實際に於て結婚者は親の命令に本づく家族主義によるか自己の意志に處決する個人主義によるか此の孰れにか憑據して居るので、子の調印又は親の調印は折衷主義の民法に當て嵌める手續上の儀式をして取

扱はれて居るに過ぎない。

五 神聖結婚主義

要するに我が國の現在の結婚制度は家族主義兼個人主義に基いた二元意志主義であるが、結婚者は事實に於て其の孰れかに左袒して一元意志主義に歸着してゐる。これは結婚なるものが必ず一元意志的の性質のものである事の證左である。その數は將來の習慣からして勿論家族主義の結婚者が大多數で個人主義の結婚者は極く少數である。そして何れも二元意志主義の形式を踏んで家族主義でもなく個人主義でもない折衷主義の結婚になつて居る。法律がこの二元主義を親族篇に採用したのは從來の我國の家族主義に存する弊風を除去して個人主義の長所を以て之を補充しようと圖つた結果であるが事實は悉く失敗に終つてゐる。從來の家族主義の長所は祖先崇拜、孝行、團結、利他心であつた。短所は戸主權の濫用、男尊女卑、一夫多妻、閥族の觀念、片務的道德、個人經濟の無能、隱居、依頼心、奴隸的屈從であつた。從來の個人主義の長所は人格の尊重、權利の主張、自由

貞操に對する我が信念

宮崎 光子

男女は先天的根本から肉體生理の組織が違つて居ります。従つて性情の上にも、男性と女性とは違つて居ります。勿論人間としては同一の價値でありまして、精神的には平等一如でありますけれども、此の肉體生理の組織が違つた男性と女性とが、一體となりまして始めて人間一箇の完成をなすものを夫婦と稱へます。

此の夫婦なるものこそ、實に宇宙生々發現の目的を寓するもので、即ち人類の生々存続であります。而も宇宙の大目的は、進化的向上を根本生命として居ります。單に生々存続するばかりならば動物的存続でありますが、人間が猿猴から進化し來つた所以のものは、全く此の進化的向上を、根本生命とする宇宙の大目的を遂げつゝあるからであります。

此の進化的向上こそ、實に人間生活の一切であります。有ゆる文明も是が爲に興つた。科學も、哲學も、藝術も、道德も、宗教も皆この根本生命の發理に外ならぬのであります。貞操は、即ち此の根本生命を成就するものでありまして、不貞操は、此の根本生命を破壊するものであります。墮落と云ひ、腐敗と云ふのは、此の根本生命に離れた状態を云ふのであります。不貞操での單なる生々存続は遂げられませうが、こは劣等なる動物的機能に止まり

まして、宇宙の根本生命、最高人類の生活ではありませぬ。故に之を罪惡と名けます。最高人類の生活は、下等動物の如く單純なる本能的衝動ではありませぬ。最も高尚なる自由意志に基く擧擯希求の生活でありますから、善惡優劣、美醜、高底、大小、上下等の批判鑑別が興つて参ります。

貞操は、即ち善、優、美、高、大、上などの根本生命を現はすもので、不貞操は即ち惡、劣、醜、低、小、下などの根本生命に反するものであります。

約して之を申しますならば、貞操は、自覺したる自己、徹底したる自我の行動でありまして、不貞操は、無自覺、不徹底の行動であります。

眞の自覺徹底とは、此の宇宙的根本生命に覺醒しまして、自己の生活を此の根本生命に依て統一する事でありまして、此の根本生命に依て自己の生活を統一する形式が、即ち道德となり、倫理となり、宗教となるのであります。貞操とは、取も直さず此の根本生命に依て夫婦の關係を統一する生活に名けられたいものであります。

二

貞操の意味は、決して夫婦間のみの事ではありませぬ。苟も自己を確立しやうと思ひますならば、操守貞烈の行動に出てなければ駄目であります。一家に於ても、國家に於ても、有ゆる社會に於ても、所謂人間らしい人間とは、この操守貞烈の人格を云ふのでありませう。斯る人格こそ何時の世、如何なる時代に於ても、有ゆる場合の柱石基礎となつて居ります。又この操守の人に於て

由を何者も毀傷することは出来ない。獨立自營以て完全なる人間として一男一女の共生せんとする全我的慾望である。結婚費用を必ずしも親に仰がない。遺産を必ずしも親に頼はない。自己の生命は自己の勞働によつて維持せんとする經濟的奮闘である。

隨つてそれが國家の進運であつて、親愛なる祖先に對する祭であり、親に對する至孝であり、子孫に對する教訓である。團結を堅くして社會國家のために公共の事業を進め、人類の幸福なる共生を實現するのが自己の義務になる。方向を根底から異にして居た家族主義と個人主義とは斯うして始めて方向を一にする調和的思想に合同するこゝとが出来る。第一に爾來の家族主義に胚胎する親の命令又は同意權たるものを絶対に廢棄しなければならぬ。同時に爾來の個人主義に附隨する絶対的個人の觀念又は利己主義の思想はこれを根本から一掃しなければならぬ。而して其れは決して家族主義の崩壊ではない。家族主義の長所と個人主義の長所の能く調和した渾一した新家族主義若くは新個人主義である。相對的個人主義即ち社會的個人主義である。同時に個人的家族主義即ち個人的社會主義である。換言せば神聖結婚主義である。最徹底せる理想的結婚制度はこの一元的意志主義に於て完成される。結婚の新典型はこゝにあ

る。萬人の則るべき最完隨一の結婚道德である。この新典型に従つて結婚しようとする者は先づ結婚道德の自覺者でなければならぬ。人格の獨立者であつて經濟の獨立者であることが最大の要件である。精神に於て親の奴隸であり物質に於て親の居候である無能力者は神聖結婚主義の謳歌者たる資格のない者である。丁年に達しても精神に於て親の指圖を受けなければならぬ程知識の貧弱な者又は物質に於て親の保護を受けなければならぬ程生活力の空虚な者は、當然家族主義の結婚に依頼して親の命令のまゝに生涯を送るべき運命者である。かゝる徒輩が戀愛を談じ自由意志を唱へ墮落を爲し別居を主張するは方角違ひであつて不可能事を願ふ愚者である。一男一女が自由意志により戀愛に結び一家を創立するには、之を透視する自覺と之を貫徹する力量となければならぬ。私はこの自覺を決して大學教育であるとは云はない。たゞ結婚道德の研究によつて生ずる識見であると云ふ。私はこの力量を決して金錢であるとは云はない。たゞ夫婦が糟糠の苦樂を共にする不斷の經濟的勤勉であると云ふ。この識見とこの勤勉とを具有する青年男女は何人であつても我が神聖結婚主義の同盟者である。

自由
基督教
講壇

貞操の意義と價值

内ヶ崎作三郎

一

およそ一國の風教は其の土木築建等によつて之を察する事が出来る。この點より云へば我が日本の如きは實に憐れな者である。毎年夏の洪水に到る處の道路橋梁等の破損するのは土木道德の發達してゐない爲めではないか。今日眼を上げて社會を見渡す時に、不良少年何を多き、病的青年何を多き。而して是等文明の進運を妨ぐる者は如何にして、又何處より出で來つたのであるか。諸君、蒔かざる種子は生えない。然らば「種子蒔く人」は誰であるか。世には一身の快樂、一時の快樂を以て人間最大の幸福であると考へてゐる人が多い。彼等は倫理道德を破り、瞬時の肉慾を満足せしめて、勝利の叫びを揚げる。然し道德的眞理は人類

幾萬年の經驗によつて生み成されたのである。甲の個人、乙の個人の力によつて、もろくも其の存在を失ふやうなものではない。今より百十數年の昔、八十の高齡を以て、ケーニヒベルグに逝いた大哲カント墓碑銘に曰く、「星の赫ける大空は我が上に、道德的原則は我が内に」と。大空が我等の頭上に落ちて來ない限り道德は決して亂れる者ではない。然るに此の道德、ことに諸德の根源なる男女の道德を破る者が如何に多いであらうか。彼等は實に罪惡の種子を蒔く者である。

此の頃某文士が二度目の妻を別居して新なる婦人と同生活するやうになつたことは、痛く世の攻撃を受けた。是れ即ち我が國の社會的良心がまだ全く滅びない證據であつて、吾人の喜ぶ所である。

始めて物事も成就しますので、不貞操の人間は何時でも事を破り、禍を醸し罪惡を産むのであります。

之を要するに、親と子、父母と小供との間には、先天的に肉體分裂の關係がありますから、切つても切れぬ親子の縁と云ふやうな離すべからざる先天的の基礎がありますから、貞操といふ自覺的意識の必要もありませぬが、男女の間に於ては、この肉體分裂を起す根元要素でありますから、その關係が極めて自由でありまして、極めて自由なるだけ男女相引く戀愛といふ強烈なる本能性があります、此の本能性が強烈なるだけ、此の本能性を利導完成するに、更に大なる精神的本能があります。或は良能と申してもよろしいが、此の精神的本能を稱して、貞操と名けます。

貞操を無視すると、眞の夫婦は成立しませぬ、従つてその子孫は罪惡の肉塊となつて了ひます、新聞紙上に報導せらるゝ所謂不良少年不良少女は悉くこの有名無實の家庭から産出された罪惡の肉塊であります。

貞操は愛の根原であります、道德倫理の基礎であります、子を思ふ親の心を以て、愛の至れるものと致しますが、此の至れる愛は夫婦の貞操あつて始めて味はれるものでありませう、夫婦あ

つて始めて親子あり、親子あつて始めて兄弟姉妹あり、子孫あり、家庭あり、國家あり、社會あり、而してこの社會的愛、即ち道德倫理は、悉くこの夫婦の貞操から産出し、成立し、發展するものであります。單に個人として見ましても、社會の進運に貢獻し、文明の發達に欠くべからざる人々は、皆この操守貞烈の人格であります。若し夫婦にして貞操を守ることなく、個人にして貞烈の操守がなかつたならば、此の人間社會は遠の昔に絶滅して了つたであらうと思ひます。

不貞操不義の人間は、單に目前の淺薄な肉の性情に支配せられて、様々な罪惡を演出します、中には多少精神的本能が働かぬでもありますまいが、薄志弱行の爲にみす／＼罪惡に陥つて參ります。無自覺、不徹底の徒に至つては、先天性罪人の如く何等道德意識が働きませぬ。先天性罪人とは道德的低能者を申します。大酒家の子孫に低能兒が産まれるやうに、不貞操、不義の社會は、この先天性罪人を産出します。嗚呼、何故に貞操を守らねばならぬか、貞操の意義如何などゝは屢々耳にする聲でありまするが、是實にこの道德的低能兒の叫聲であります。

る。吾人は互ひに理解し、互ひに精神的にも道德的にも協同し得る男女の結合を眞の夫婦と云ふ。斯くの如き夫婦は實に社會の根源である。斯くの如き夫婦にして初めて生理的一時的なる肉體關係の上に、神秘的、知識的、道德的、宗教的、社會的なる精神の結合を成就し得るのである。而して斯かる道德を説くのが眞の宗教の使命である。

世間には知らざるが爲めに罪惡を行ふ人が多い。是等の人には我々は眞心を以て教へてやらねばならぬ。一切の諸徳の源なる男女間の愛を高むれば、其の他の事は自ら立派になる。而して愛を高尙なるものとするには、常に之を訓練する必要がある。かくして、性の力を善用せねばならぬ。

先づ我々は何故に健康を力説するか。性の力を支配せんがためである。身體虛弱なる者は性の力に勝つことが難い。又體壯なる者も必ずしも之に勝つことが出来ない。けれども大體に於て健康は性に誤られざるが爲めに必要である。

人間は非常に微妙なる組織を持つてゐるから、

往々にして狂ひ易い。器械にしても微妙であればある程狂ひ易いのである。早い話が電燈にてもオスラムやタングステンは光度が強いかはり、普通のよりも早く破損する。又彼の飛行機の發動機などは非常に微妙なものであるから、破損し易いのである。之に反して荷馬車などは甚だ簡單であるから、仲々こはれない。人間は人間の工風した如何なる機械よりも複雑微妙であるから、其の狂ひ易いことも亦甚しい。ことに神經系統は文明の進歩につれて、益々微妙に又益々狂ひ易くなる。昔は今日のやうに精神病者が多くなかつたのも此の理である。現代の人間は狂はないやうに常に用心しなければならぬ。

然るに自ら精神の狂ひを誘導する人が甚だ多い。男女間の道德を守らない人が其である。神聖なるべき性を濫用する人は、間もなく記憶力は減じ、道心は弱くなり悶々の中に不幸なる生活をなすに至るのである。文豪モーパッサンも其の晩年は一丁字無き馬丁にもあたる狂人であつたではないか。よしんば不品行をする當人は僥倖にして事

ダンテの神曲には、地獄、煉獄、天獄有り、亡者は生前の罪によつて三獄の中の何れかに入るのであるが、淫亂の罪は比較的輕視されて居る。獨りダントのみではない。世人の多くは斯く考へたのである。否斯く考へてゐるのである。然し乍ら是等の人々の考へか誤りであることは近代の科學によつて證明せられた。近代の醫學は偶然にも、或ひはカーライル流に云へば必然的に、吾人の信仰に科學的證明を與へた。男女間の貞操は諸徳の根源であつて、各人の嚴守すべき者である。殊に青春の男女に取つては最も重大なる事柄である。

一體此の世の中に愛程大切な物はない。驚くべき精神の働きが此の愛より發するのである。ことに男女間の愛は其の力最も強い。されば中庸にも「君子之道造^ス端^ヲ乎夫婦^ニ。及其至^ニ也。察^カ乎天地^ニ。」（朱熹章句第十二章）とある。動物の雌雄關係を見るに、其の種によつて發達が有る。蟲の如きは雌雄相會すれば、何等の撰擇なく直ちに關係が成立する、然るに高等の動物になれば多少の撰擇が行はれる。就中、彼の鴛鴦^{オンドリ}の如きは雄雌常に

相離れることがなく、完全なる一夫一婦の關係を守つてゐる。尙之に類する實例は他にも澤山有ると思ふ。

人間は所有動物の特色を具備して然も一步之に先んじたものである。然るに皮相なる自然主義は人間を動物と同視した。けれども人間は決して他の下等なる動物と同一であつてはならぬ、又あり得ないのである。人間にあつては男女の性は生命の根原である。一切の善惡は唯之が適用の如何によつて生ずる。吾人の品行が方正であれば子孫の身心は健康である。性は人類の最も神聖なるものであつて、之を濫用する者は、取りも直さず天則を犯す者である。實に由々しき事件ではないか。

二

野蠻人の男女關係は時に下等動物の其に等しい場合が有る。けれども文明人にあつては決してさうでない。我等は互に撰擇する。動物の雌雄關係が一時的、生理的であるに反して、人間の夫婦關係は生理的、心理的、審美的、道德的、社會的であ

結婚せんとする時、世間には何ぞ婦人の多きや、又何ぞ男子の多きや。しかも其の中の一人と一人とが一緒になると云ふのは何たる不可思議であらう。昔の人は結婚は出雲の神の司る所と考へたが、實際人間以上の運命の力、神の導きに外ならない。

日本のやうな國では仲人は必要であるが、最後の諾否とを發言する人は當事者たる男女でなければならぬ。諸君は此の點に於ては蛇の如く賢くなつて、決して他人にあざむかれないやうにしなればならぬ。イエスは鳩の如く優しく蛇の如く賢くなれと教へられた。今日は女を詐かんとする男と、男を偽らんとする女と實に多いのである。今度の某文士にしても、其の第一の妻、第二の妻、共に輕舉を敢てしたやうに思はれるある。

四

箴言第七章に遊女を遠ざからしめる云々の教へがあるが、イスラエルの賢者は知識を重じ、理性を以て判斷したのであつて、單に信仰のみでは駄目だ。今日宗教を信ずる人は時勢後れと云つて笑はれる。決して笑ふ者のみが悪いのではない。宗

教を信ずる者が徒らに信仰信仰と云つて理知をおろそかにするからである。宗教を信ずる人が賢明な人とならない中は、宗教は何時までも馬鹿にされる。

扱て我々は此の智慧を以て撰擇した人と結婚するのであるから。其れに就て全ての責任を負はねばならぬ。尤もいくら自分の擇んだ夫や妻でも時には厭になることも有るであらう。しかし此の時が大切である。毎日机の上に載せて置く植木も見慣れるにつれて倦きて来る。しかし一晩外の夜露にあてれば、翌日からは青々として又別種の趣きが出来る。辯護士が職業の無味乾燥なのを以つて止めやうと思つてゐると、突然無實の罪に陥つた者を救つて新らに自分の天職を自覺する。醫者が夜中に起こされて金にもならないから他の職業に變らうかと思つてゐると、九死一生の病人を助けて瘠せ果てた手を合せて御禮を云はれるば又醫者として誇りを感じる。小學校の教師が友の出世を外に聞いて何時までも田舎に引込んでゐるのは、實につまらないと思つてゐる中に年も取り弟子も

なきを得るも其の子孫に至つて恐る可き遺傳の呪ひは現はれる。此の事は遺傳を研究し、犯罪等を專攻する學者のひとしく證明する所である。

又人間は常に社會に生きてゐる。我々は自身のためのみならず我々の兩親のために、先祖のために、家族のために、子孫のために更に國家社會のために生活してゐるのである。故に吾人は道德を守らねばならぬ。道德は他人の爲めにも守らねければならない。

先日東京の一新聞紙上に某ドクトルが次のやうな談話を載せてゐた。一度男子に接したる婦人は其の男子より生理的に精神的に非常なる影響を受ける。結婚後妻の性質や趣味が夫の其に似て來るのは其の一例である。故に婦人は貞潔を操守せねばならず、男子は婦人に對して重なる責任を有すと。最近醫學の發見は古しへよりの貞操觀に甚だ有利なる證言をなしてゐる。

然るに青年は一時の客氣に任せ、自分の本能のまゝに行動して其の身の滅亡を顧みない。これ一種の社會的病人ではないか。デンマークのコツプ

ンハゲンでは或る恥づ可き病氣を有する患者を一廊に隔離して有る。我々は我が日本にも斯かく嚴重なる法令の行はるゝ時期の來らんことを望むのである。

三

現代の人々は、獨り文士のみならず、實業家も、官吏も、教育家も皆貞操に就いては甚だ不徹底なる者を持つてゐる。今日新聞紙上に現はれ背徳行爲の如きは實際の百分の一にも過ぎないであらう。大部分の人は何等の攻撃をも受けないで罪惡を行つてゐる。けれども彼等は自らの良心に苦しめられる。

一夫一婦は何故に守らねばならないか。今例を以て之を云はう、私に羽織が二三枚あつても出かける時は一枚しか要らない。下駄も一足しか要らない。又私が職業を求めるとする。職業には官吏も有り、實業家も有り、航海業者も有り。けれども私の従事する職業は必らず其の中の一つでなければならぬ。即ち事物には結局性があつて之に落ちつかねばやまない者がある。それと同じ事で吾人が

ればならぬ。

私は青年諸君に告げる。結婚するまで貞潔を守つて勉強し修養すれば必ず好い配偶をえられると。これは殆んど一つの信仰である。人間は人を詐欺自らを詐くとも到底天地間の一大真理を詐くことは出来ない。今日最も大切なことは人格あり、知識あり、道念ある男女が協力して家庭を修めて行くことである、カントは人は他人を手段としてはならないと云つた。キリスト教徒はキリストを學ばなければならぬ。「汝等の身はキリストの肢なるを知らざるか」これ保羅の警告である。

青年は段々寂寞を感じるものである。此の時に宗教的信念を養ふことは最も必要である。傳道書第三章には全て事をなすに時期のあることを教へてゐる。結婚にも亦時期がある。青年諸君は常に人格を修養して時の到るを待つ可きである。「渺渺兮予懷。望美人兮天一方」と。赤壁の明月に吟じた詩人の歌何ぞ調高きや。

川柳子曰く「女房に惚れて御家繁昌」「錢金圍ふも姫圍ふな」是等は皆よく味ふべきである。我々

は野の百合を記號としたい。野の百合の花何ぞ氣高きや。何ぞ純潔なるや。ジョージ・メレデス曰く「愛は狂氣なり、然れども天の智恵の加はる時に、神々しき光となる」と。斯かる神々しき力が孔子、キリスト、ソークラテースを生んだのである。之なくして單純なる本能は殺人者其の他有らゆる背徳者を生む。故に貞操問題は實に輕視すべからざる大問題である。

我が國の地方は驚く可き墮落に沈んでゐる。壯丁の體格は年一年と惡くなつて行く。しかも宗教家も學者も之に著眼する人は甚だ少い。性の問題は人生の根本問題であるのに、之を教へずして人の子を教育せんとする教育家は、本末を知らない者である。今や綠燃ゆる夏は去つて銀河蒼空に横はる秋となつた。當に我等の心を引絞めて勉強すべき時は來つた。此の時に當り此の涼しさ夕べ、諸君と共に一堂に會して、人生の一大問題に就いて考へを述ぶるをえたことを喜ぶのである。

(九月十二日夜統一教會に於ける説教大意)

多くなり、謝恩會などを聞いてもいひば、自ら慰めるに足りる。年功加俸や奏任待遇もあるのである。

職業に對する眞の報酬は老年に至つて初めて與へられるのである。大隈伯は七十五になつて榮職に昇り、高田博士は三十數年間早稲田大學の經營に努力し神經衰弱にまでなつてゐた所へ文部大臣の辭令が下つたのである。弱り目にたゝり目と云ふことがあるが、これなどは弱り目に祝ひ目とでも云ふべきであらう。一夫一婦の報酬は晩年に至り、子孫繁榮一家和樂の中に來るのである。

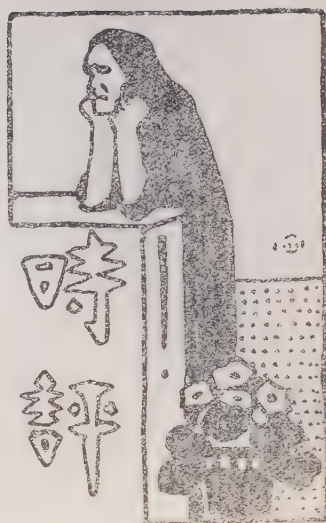
半獸主義唱ひたければ唱へよ。刹那主義説きたれば説け。彼白髮の老人となる時、彼の子は果して彼を如何に遇するであらう。或る人は老年のことなどを考へるのは馬鹿だと云ふかも知れない。彼等は現代人は煩悶しなければならぬなど云ふ。煩悶をするのみで何の役に立つものか。太陽が毎日出るのは面白くないから一日おきに日蝕になれば好いと云ひ、唯の雨ではつまらないから火の雨が降れば好いと云つたらどうであらう。大學に曰く「好^ミ人之所^チ惡^ム。惡^ム人之所^チ好^ム。是謂^レ拂^ト」

人之性^ニ禍^ヲ必^ズ逮^ス夫^ノ身^ニ。」と。(朱熹章句第十章) ひねくれた人間は地獄に入れるより外に仕方がない。

眞理を知らずして罪を犯す者は恕すべし、之を知つて之に従ふの至誠が無い者は實にダンテの地獄に送らねばならぬ。ダンテの地獄は實にひねくれたる意志を有する者のゆくべき途であつた。人誰か罪なからんや。イエス曰く「汝の罪を再び犯す勿れ。」翻然立歸り來れば神は凡ての罪人を赦すのである。然るに今の近代人と稱するもの、煩悶するのみで、新なる觀喜の生活に導かんとする神の手を退けるではないか。

五

理想としては男女ともに身體も精神も健全でなければならぬ。然し我々が結婚せんとするに當りて、そんな理想の男女が何處にあるか。けれども理想の人が無いからと云つて獨身生活を送る人は、先づ自ら反省するを要する。自分が不完全であつて相手ばかりに完全を求めるのは餘り蟲の好い考へではないか。そこは互ひに多少讓歩しなけ



虚偽的慈善行爲の流行

近く御大典を記念せんがために色々な計畫があるやうだが、その中で東京を中心として専ら今日から運動を開始せられてゐるものに「花の日會」と藝妓排斥運動のやうな企てがある。何れも結構な企てには相違ないが、僕は嘗て催されたフラワ―デーを見ても寧ろ不快な感じこそ起したれ、あまり美しい企てだとは思はなかつた。

あの一片の紅い造花がどれほど虚榮虚飾に感染した多くの若い女性たちによりて造られたもので

あるかを想へると、それだけでもうんざりする。第二にフラワ―デー當日の盛裝をこらした婦人の賣り手が氣に喰はぬ。虚偽虚飾に充ちた歐米ではこんなことも流行するか知らないが、純樸なこの國ではあんな贅澤な慈善はやつて貰ひたくない。

成るほど慈善は結構である、けれども歐米から輸入して來た慈善は遊戲的な贅澤な慈善である。

先づ自分が食ふだけを食つたその餘裕を人に施すといふやり方である。一枚の衣を半裁して施すといふやり方ではない。今の世では、自分は裸になつても他人に着せてやるといふかの江戸子的な意氣を見ようとしても見られなくなつた。

彼れ自身の慈善心を満足させやうとする遊戲に過ぎない。こんな慈善は甚だにが／＼しいとである。もし諸嬢や諸夫人達に燃へるやうなやさしい心があるならば、その持てる一枚の絹衣を脱ぎ捨てその自働車を賣り拂ひ給はんことを希望する。

クリストは右の手で施したことを左の手に知らしてはならぬと教へられた。フラワ―デーのやり

新刊紹介

米國より日本へ

正岡 猶一 譯
警醒社發行

紐育の日本協會々頭リンゼンゼエ・ラツセル氏の編著たる『アメリカ・ツウ・ヂヤパン』を譯したのである。米國各方面の名士五十餘名の日本に關する論文を集めたもので、特別に目新しいと思はれるものは少ないけれども、中には此處こともあつたかと驚ろかれるやうな叙述もある。本書は譯者正岡氏の著書『亞米利加に對する日本の使命』に動かされて著はされたものであるといふが、かうして彼我的知識階級が意見を交換するといふことは、相互の理解の上に少なからぬ利益があることは疑がない。一々筆者の寫眞がいてあるのは此種の著書として行届いた用意である。が慾を言へば今少し論文の取捨に注意が加へられたならばと思はれぬでもない。(價一・〇〇)

家庭百話

安藝 愛山 著
大日本雄辯會發行

名の如く家庭——とりわけ主婦に關する注意が百項に分けて懇切に説いてある。極めて通

俗的な讀みものである。例へば『行き先は明にすべし』といふ題下に『家内の者家を出るや其の行き先を明らかにすべしだ。凡そ家内同士には秘密のない筈だから先の謂はれぬ譯はないが、我國の人々には之を語らぬが多い、……別して我國家庭の主人には往々善からぬ行を爲し不潔の酒樓に寢泊りする者も尠なくないが、斯かる不行跡を働らく者は毎時家内へは秘密として行き先きを隠して居る不都合極まる話ならば横着千萬なる此の主人の放埒は禁止せしめねばならぬ、其の方法の好手段ともなるは家を出る時には必ず行き先きを家人に告ぐるものと定めて置く時は否でも之を打ち明さればならぬ……云々』と説いてゐる如き、忘れられがちな、然かも悪い結果を來し易いやうなことを、容易に注意してある。(價〇・五〇)

船長プラスバオンドの改宗

シ 松村 三 著
ヨ 子 譯

基督のいふ無抵抗主義が、遂には永年の復讐心を改めしむるといふのが此の脚本の眼目であるが、例によつて自由に大膽に此の無抵抗主義をふりまはす女性や、輕快な男性など

を取り合せた、讀んで面白いものである。大きな、困難な問題を巧みに扱ひながら、どこか上滑りのした重味のない、彼につきものの癖が、やはり鼻につく。

併しこれを翻譯の創作として見るときは、寔に立派な作品である。かうした自信のある立派なものを、眞面目な會員の間に配つて、眞面目な研究をするといふのは、如何にも奥ゆかしい話である。譯文が流暢な日本語になつてゐる點では、これに比肩し得る翻譯は多くはあるまいと思はれる。(竹柏會發行)

獨逸落ち

小田部 莊三郎 著
警醒社發行

著者は獨逸に遊學し偶々此處の大戦亂に會ひ、行本を整ふるに閑なく遂に捕へられ、具さに捕虜生活の苦痛を嘗めた。後米大使の斡旋に依り自由の身となり今は佛國に居る。本書は戦亂前後よりの實驗談を録したものであるが、頗る珍談多く、牢獄生活や露營生活に於ける艱難、獨人一般の對日本人感情等、戦争開始當時の獨乙國內の氣分や光景が手に取る様に書かれてある。著者は青年ドクトルなるが、禪的修養があるので觀察も平凡でないし、文章も一家をなして居る。一讀の價は充分ある。(價〇・九五美裝)

大學近所の三教會の前を通りて

赤門長人

帝國大學の正門前を少し北に行くくと電車道にそうて本郷基督教會と云ふのがある。あの教會の前を通る度に私は何時もこう思ふ。折角の位置にありながら何人の大學生を教化してゐるだらう。それは何時でも寺西牧師の聖書講義とか説教とか黑板の廣告の絶えた事はない様である。然し果して何人の大學生が聞きに行つて居るだらうか。

何時頃であつたか、毎朝午前五時聖書講義と云ふ札が出て居たが、あれを見ると寺西牧師は中々熱心に努力して居るに相違ない然し何んだか人の氣少なく、一向日曜日でも出入する人を見受けない。只毎日教會の前に天幕張の繪葉店が出て居て、相等商賣をやつて居るらしい。教會の番人か何かと見えて他の店よりも宗教的な繪葉書が多く出て居る様である。私は何もあの教會の惡口を云ふ積りはない。どうかして折角の場所にあるなれば大學や一高の學生にも少し何んとかして貰いたい。それは寺西牧師、聖書講義と云ふ札を大勢の學生に覚えしめるのみでも何かの機會によい事をしてゐるに違ひない。然しそのみにしては、あまり高價な建物である。何も大學のみを目的としてゐるのではあるまいが、あまり縁遠く感ぜられて、ついこんな事を書きたくなる。教會のやり

方に缺點があるのか、近時の學生に宗教心ないのか、いや決して學生に宗教心が薄らいだわけではない。

一高の寮舎に隣りて練瓦造りの立派な教會堂がたつて居る。聖公會の所屬で確かに大學生を重なる目的に獻立せられたものに相違ない。然し今何人の學生を吸收して居るだらう。何時も冷ややかに閉ざされた人々と向合つて、巡査の白い交番所があり、大勢の學生の道しるべの評準となつてゐる外大した感化を與へ居るとも見られない。何も量を云ふ必要はない、質さへよければとの理屈もあるかも知れない。然し五六十の學生を近所に控えながらそれはあまりに不親切であるまいか。それはあまりに創立の意志とたがつて居はしまいか。勿論あの教會から立派な學生を出して居るに相違ない、熱心なよい信者も出入してゐるに相違ない、然しどうも近頃の學生にあまりに餘所／＼しく感じられ、少しは宗教をと思ふ學生にも決して引付ける様な感じが與へさせない。行かぬ學生が悪るのであらうか、教會の熱心が足りないのではあらうか、折角の立派な建築を道しるべのみに用ゐられては、創立者に對しても相すまぬではないか。何も餘計な心配の様ではあるが、何んとか方法あはるまいかと思はれる。

醫科大學の南の門をぬけて春木町に出ると堂々たる建築があるメソヂスト派の中央會堂である。これは前の二教會よりは稍々親しみが深い様である。然しこれとて、幻燈をやつたり、西洋人の英語を種に少々な人を集める外、大して大學近所にある故に特に大學生を多く引付けて居るとも見られない。大學近所の三教會、皆相等の立派な會堂を有しながら何故こんなに振はないのであら

方は四辻に立つて喇叭を吹くものである。

藝妓をして宮城の前に舞踊をさしてはいけな
或ひは大典後の宴會等に藝妓を侍らしてはいけな
いといふやうな説が熱心に説かれてゐるやうであ
るが、これも結構なことである。大賛成である。

しかしこれも甚だ不徹底なやり方である。片手落
なやり方である。彼等は藝妓の存在を呪ふことを
知つて、藝妓の存在を促し、また存在を可能なら
しめつゝある原動力が潜んでゐることを知らな
い。そしてやゝもすれば却つてその原動力の前に
頭を下げるやうなことをやつてゐる。僕はこれ等
の運動にたづさはる人々がマグダラのマリヤがど
んな種類の女であつたか、またクリストがどんな
態度で彼の女に接せられたかを考へられんことを
望む。果して天國に歸ることのできる者は何んな
人間であるか淺臺な人間には判斷が着かない。主
よ主よと呼ぶものゝみが天國に入るのではない。
運動にたづさはる人々は飽くまでもクリストの精
神をお忘れならぬであやう下さることを祈る。

(駒込 生)

原始的文明の名殘

秋は收穫祭の行日事とは東西軌を一にする。殊に本年は豊年萬
作なれば所在の神社にて盛大なる祭典が行はれた。これ日本民族
が數千年間行ひ來りたる感謝祭である。然れどもその形式の幼稚
なるに至りては抱腹絶倒の外がない。舞臺にて演ずる所は松籬と
「ひよつとこ」ではないか。たとへ原始的風味は有するにしても大
正の新時代に猶此形式を用ゐてゐるとは情けないではないか。か
ゝる餘興を演じ、且つ之を樂しむ國民を指導するは如何に難いか
なである。豊作を喜ぶ民に罪なきも、この餘りに原始的なる文明
を見て吾人は多少の悲觀なきにならず、否吾人の教化事業、啓蒙
事業の日暮れて道遠きを思ふのである。

かくて我國には最も進歩せる部分と最も保守的な部分と共存
する。文明は未だ上下の階級に普及しないのである。この隙きに
乗じて極めて幼稚なる信仰の形式が成功してゐるのである。鎮守
の森の祭にも、一夕の縁日にも文明史的考察の材料を逸してはな
らぬ。(甲鳥生)

よりから離れて、古い事ばかりに執着せず、思切つて獨立し思切つて新らしく、思切つて日本的に、社會の進歩にひけをとらず奮勵一番せねば三教會と同じ様に、日本と云ふ大學と何等交渉なき事になる。そして少數の弱き後れた人々が其維持のみに汲々とせねばならぬ様な始末となる。棄てるものは思切つて棄て、行詰つたら切開きドン／＼進みたいものである。

近頃大學の近所に大學青年會の會館が建築せられて居る、中々大きなものらしい、然し位置と云ひ、出來生と云ひ、どうも少し氣にかゝる。教會とは少し趣が違ふものゝ、藤田主事其他の人々が餘程揮をしまてかゝらぬと又しても實の持腐りとなるかも知れぬ。

三教會の前を通りてつい下らぬおしやべりをやらされた。何着的にして云つてゐるのか、中心をはづれてしまつた様である。然し結局する處現狀打破、少しは政界とも共鳴して少々の破亂は犠牲にして、變化はやがての進歩である。一つ何んとかしたいものである。門を開けよ、獨立せよ、古きを棄てよなんて云ふ字句が次々と湧いて出る。

藝術家に對する世評

日本に適當な文明批評家が居ないのかしら。居たらばもう少し力のある實のある批評を所謂藝術家の不品行に對して下すことが出來るやうなものだに、何と云ふ悲哀だらう。某々博士等は、某文士の惡徳を批評するに一步譲つて居るじやないか。彼等は藝術家だ

から普通人を律する様にはいかんと云はんばかりに論じて居る。何故？ 藝術家は情で動くから。其麼解答で此種の問題が片つくものなら、沈黙して居た方がいゝかも知れない。

ラグナーの音樂を多勢の人が聞きに行く。聞きに云つた人は、皆一廉の聴き手であるかの様な顔をして意氣揚々と音樂堂を出て来る。と是はトルストイが一部の知つたかぶりの藝術觀照家を惡く云つた言葉だが、日本の批評家の中には此種のことが多い、俺だつて藝術てふものを一通り心得て居る、藝術家の生活と云ふものは同情すべきものだ、是等は眞に藝術を味つて得た言葉では無くて、知らなげや恥だと云ふ心を裏に藏して云ふベダツタツクな言葉であることが多い。

此種の批評には勢がない。勢のない其批評の中に、彼等は藝術其物に對する不理解の檻樓を遺憾なく出して居る。そして一方宗教家と云ふ側の人はお目出度い。平氣で私には藝術と云ふものが解りませんなど云つて居るものが多いだけに、此種の人々には藝術家に對する批評の權能は殆んどないと云つていゝ。そう云ふ譯で臆面もなく批評を試みて居るものは、藝術を眞に理解せざる教育家とか、哲學者ばかりだから情けない話じやないか。

教育の根本的精神とは何ぞ。此問題を解釋する際にも、餘程感情的方面に缺陷を有つた人でない限り、一種の神秘的權威の感じに基礎を置かなくては、とても説明し得るものでない。社會制裁に關する考へだつて其と同様な方面から来る。が其方の事は姑く惜いても、藝術其物に關する理解が、もつと／＼あつてほしい。藝術、々々、奥床しい其名によつて如何多くの人は煩はされた

ふ何も大學生のみを目的としてゐるのではあるまいが大學の近所にあつて、大學の學生を引付けたい比ならば決して一般の人にも大した感化を與へて居ぬとも見る事が出来る。

私は教會の前を通る度に何時もこう思ふ。一體創立者が既に氣がきかない、あまり人の心理を解せなかつたと。毎日／＼全じ道を六日間通學してやれ日曜日と云ふ楽しい日に決して全じ道を通りたく思ふものではない。大學のすぐ側に教會をたてれば大學の學生を引付けると思つたのが、そも／＼の間違ひ、此小さい心理を察し得なかつた罪である。又大學の學生とて大した深い考も持つては居まいが、それにしても現在最高學府で兎も角日本では相等エライ學者達の講義を耳にしてゐる、だからいくら畑が違ふからと云つても、やはり同格ぐらいの牧師を持つてこねば、決して學生を引付け得られるものでないと思ふ。何も牧師の説教や學徳によりて教會が出来ゐるものでない、牧師中心の教會は其れ自身既に大きな考へ違であると云はるゝかも知らない。確かにそうである然しやはりさうでない。

私は今大學近所の三教會を種にして失禮な言をはいたが、何も私のこうありたいと思ふのは、三教會に限つた感想ではない。これはつい手近の例を引いたのみで、實は全國到處の現在日本のクリスト教會の通性として考へて居るのである。一體今の教會はあまり社會と没交渉である。建築からして親みがない。今東京市中の諸教會の前を通つて見たまへ、決して普通の人に温かい感じを與へはしないから、門は何時もキチンと閉めてある、日曜日さへ半分しか開かれて居ない教會は澤山見受ける。社會の先驅者であ

るべき筈のクリスチャンは今却つて社會から引張られて居る。

これは基督教其物の力弱いためであらふか、否々決してそうでない期待せられた協同傳道もそう大した結果を與へなかつた。どんな事を云つて居た日にはいくら云つても盡きはしない。中を抜きにして私は直ちに結論を云つて見よう、それは三教會の不振も日本基督教會の不振も其基因する處は結局徒らに外國の資本によりて支へられ不自然に出来上り、無理によいかげんな日本人の生活故について行く人々によりて維持されて居るからである。先きに道具立が出来てそれから人をこしらへて居る外國資本の日本の宗教事業、教會であつても、學校であつても決して活々とした精神は持たれて居ない。一體ミツシヨンスクールの神學生程いやなものはない、見たまへ彼等の外觀が現に其れを證明してゐる。パイブルウーマンだつてそうだ、どうも人々に快よい感じを決して與へては居ないから。又學校にしても早稻田よりも立派な建築を有する學校は東京にだつてミツシヨンの學校で二つも三つもある。早い話が丸善に行つた歸り教文館によつて見たまへ、資本の事など別問題にして、其間の心持がよくわかるから。青年會だつて同じ事さ。どうも外國資本の宗教事業や教會には生氣がない、働いて居る人がどうも徹底して居ない様である。ある偉い人の評に『それは皆雇兵だからさ』と云つた事を聞いた事があるか、確かにそうだ。救世軍だつて、若し外國資本からブツリ離れたらどの比ひ生きてくるか知れない、私は山室さんが若し今居ない様になつたら如何なる事かと思ふ事が屢々ある。

考へて見ると心細い、此際此折日本の基督教者が一切の行きが

から遺言に反して乃木家を再興することは出来ないのみならず、又父母の知れない私生児でも無く、元毛利家の確なる一分家の戸主であるから、新に乃木姓を名乗つて一家を創立することは民法上出来ないものである。それで乃木と改姓したことは戸籍吏の過失であつて法律上無効の行爲である。加之、國家に對する功績に於て未だ何等の武勳のない毛利元智氏に對して、今俄に伯爵の榮典を下賜されたからと云つて、之を隨喜して頂戴すると云ふことは武人として最も下賤なる行爲でないか。縱令聖旨であつても、身に相當しない榮典の授與は大に恐懼して辭退すべきである。若し君上に於て御過りがある時は死を以て諫言すべきことが武士道の本義ではないか。それを大御心であるから恐れ多いと云ふ一天張で以て、まふまふと伯爵を拜受するは之れを唯諾の臣と云つて、和漢共に奸臣の中に列してゐる。元智氏は固より斯かる奸臣ではない。元智氏をして伯爵を贏ち得させて元利家又は長閑に勢力扶植の踏臺に供した二三元兇の罪で、圖らずも天下物議の禍中に投ぜられて身動きの出来ない羽目に陥つたのは同情すべき災難であつた。それで此の際、元智氏は須らく謹慎齋戒して伯爵を辭退し、もとの毛利元智に復歸し、毛利家は元就公以來の誠忠無比なる心を奉守して苟且にも累を皇室に及ぼすことなく、全く毛利家の野心に非ざる旨を天下に告白し、藩臣の元兇二三を拉し來つて罪を社會に問ひ、以て聖慮を安んじ奉るべきである。次に斯かる不吉の問題を惹起して大正維新の世教を過つた總理大臣及び宮内大臣は大に其の責を闕下に問ふべきである。(一條生)

新大學令を歓迎す

文部省は九月廿一日附を以て左の新大學令案を教育調査會員に頒布した。

- 一、大學は高等の學識及品格を備へ社會の指導者たるべき須要の人材を養成し及學術の蘊奥を攻究するを以て目的とすること
- 一、北海道地方費、府縣又は市は大學を設立することを得ると
- 一、私人は大學を設立することを得ること
- 一、公立及私立の大學の設立廢止は文部大臣の認可を受くると
- 一、私人にして大學を設立せんとする時は其學校を維持するに至るべき收入を生ずる資産及設備又は之に要する資金を備へ民法に據り財團法人を設立すべきこと
- 一、公立及私立の大學は文部大臣之を監督すること
- 一、大學の修業年限は四箇年以上とすること
- 一、大學に入學することを得るものは中學校若しくは修業年限、五箇年の高等女學校を卒業したる者又は文部大臣に於て之と同等以上の學力を有するものと指定したるものたること
- 一、大學に於ては其卒業者の爲に研究科を置き其他學術研究に必要な設備を爲すべきこと
- 一、大學に於ては別科及附屬專門部を置くを得ること
- 一、附屬專門部に關しては專門學校に關する規定を準用すること
- 一、官立大學の修業年限、學科、學科目及其程度並に研究科及別科に關する規定は特別の規定ある場合の外文部大臣之を定む

であらう。だが我々は既成藝術の爲めの藝術家でないこと、恰も既成宗教の爲めの宗教家でないと同様だと云ふことを考へなければならぬ。我々の爲めの宗教であり、我々の爲めの藝術である。

然り我々の生命の爲めの藝術であり宗教である。批評せんとするものは先づ、藝術其物を衷心の欲求より味へ。而して同時に理智の日を開け、藝術的觀照の心は、道德的良心のしづけさの中に生息して居ることが解り、彼等はいろんな小賢しい事を云ひつゝも其實、己が行くべき道に迷ひ、とまどひ、もがきぬいて居る事が解るじやないか。

彼等が勿體をつけて云ふ何々主義が、彼等の今現に經驗しつゝある其悶への生活の止むを得ざるジャステファイケーションの哲理に過ぎざるに、不見識にも世の批評家は其點を深刻に指摘しない其んな工合で文學者のあとからをめぐつて行つて何うして有効な指導が出来やう。彼等所謂藝術家を批評せんとせば、批評家の方で文學者の先に立つて行かなければならない。

彼等の心理を洞察し、彼等の行くべき道を示す所に批評家の矜持を持てよ。(野百合)

乃木家再興問題

儒教では殉死を惡行爲として、備を作ることすら禁じて居り、我が國では垂仁天皇二十八年に有名な禁殉死の勅を賜つて居るし、徳川時代に至つては靈元天皇寛文三年に同じく禁殉死の勅を賜つて居るから、苟も日本臣民であつて皇祖皇宗の遺訓を奉體す

る者であるならば、殉死は出来ないのみならず、斜ならぬ不忠者であると謂はなければならない。私はこの皇國の道德史の上からして、乃木將軍の殉死を不徳として論ずる一人であるが、然し乃木將軍は此の歴史的遺訓を知らずに只だ誠忠の餘りに殉死を決したのであつたから、動機を酌量して取て罪は問はないのである。

且つ二子を失ひ萬骨を枯らして一身の武勳榮達を極めても、心甚だ穩ならず、當時貴顯の華奢淫逸を目撃すれば、慷慨の心禁じ難く、常に勤儉獎勵を以て貴族の木鐸と成り、身を殺して千載不磨の名教と爲つて聖明に報い奉らうとした將軍の心事は、私の最も敬する所である。故に現今の腐敗せる軍人社會に於て、將軍はそき人格者は最も得難く、誠に武人の典型である。それで將軍はその生前に於ては頗る無慾恬澹であつて財産の無いことは老西郷と好一對で、爵位一代論を可とし、家族主義に供ふ養子の弊害を持論と爲し、華族は自己一人たるべしと遺言し、若し後世に至り同族の者に有爲の者が出来たならば、一平民としての乃木家を再興するは隨意であると云ふ意見であつた。然るに故將軍の墓の土の未だ乾かざる中に早くも乃木家再興を策する馬鹿の世話が出来て、乃木家親族間には何等の相談だになく、専斷を以て舊藩主の令弟で分家してゐた毛利元智氏を推して乃木家の再興者に擬し内閣總理大臣及び宮内大臣を慫慂して元智氏に伯爵を奏請し、民法上不法の戸籍を登記して乃木と改姓し、剩へ乃木家の神器遺産の引渡を強要したことに就いては日今世論囂々してゐる有様である。

思ふに毛利元智氏即ち乃木元智氏は乃木希典氏の親族ではない

きかと考へらる。新大學令はこの排他的弊風を打破したので、將來の學界は一層清新の氣風を發揮するかと豫想せらるゝ。夫れ大學は學術の淵藪である。而も獨立に學位を授與する權能なしとは自己撞着も甚しいのである。新大學令が此點に於ても行くべき所まで進んだのである。この大學令に準ずる大學の増設せらるゝに従つて、博士號を有する者が激増すべきも、之れ憂ふるに足らない。今日の如く一部分の學者のみ獨占するに比して遙かに祝すべきことである。又世人も博士號に驚かずして學者の實力を鑑識するに至るべければ、眞個の學者のために却つて喜ぶべき結果を生ずることと思ふ。

吾人はこの三理由によりて新大學令を歡迎するものである。民間教育家の理想漸く實現せられんとするは意を強うするに足る。吾人は教育調査會も、樞密院も此案を通せんことを希望する。又天下の公明なる輿論はこの新大學會を聲援してこれが法令となりて發布せらるゝを期せねばならぬ。(S、U生)

非婚同盟を組織せよ

何故に不品行の男子多きや。原因一にして足らざれども女子が餘りに寛大なるためなることは言ふを俟たない。例へば茲に一人の男子ありて、故なくして第一の妻を離別したとせよ。然るに直ちに進んで彼の第二の妻たらんとする奇特な婦人が現はれる。彼もし第二の妻を離別したとせよ、第三の妻を志願する變挺な女が天降るのである。かくて男子は平然として醜行を繼續するのであ

る。之に反して斯る不埒なる男子に對しては如何なる婦人も妻たらんとせざるのみか、一種の同盟を造りて、如何なる婦人をも彼に接近せしめざるやうにせば、流石の男子も閉口するに違ひない故に非婚同盟は非賣同盟と共に貞操蹂躪者に對する最も有効なる制裁である。賢明なる婦人諸君、敢て之を斷行するの勇氣あれ。傳へ聞く、米國の一圖書館にて日本の吉原に關する圖書を備付けんとした。然るに擔當者の婦人役員はその不可なるを論じ、職を賭して之を爭うた。館長も我を折りてこの書を自宅に持ち歸つたといふことである。米國の婦人偉なるかなである。日本の婦人も不正不義に對する抵抗力を養はなければならぬ。(甲鳥生)

高等教育を受けたる婦人の問題

高等教育を受けたる婦人が増加すると共に結婚難の聲が聞えて來た。かゝる婦人の理想が高まると共に男子の不徳義に對して懷疑的精神を有するやうになりて、むしろ獨身生活を選ばんとする傾向を生ずるに至つたのである、然らば理想の男子は無きかといふに必ずしも然らずである。たゞ教育ある男女相識りて純潔なる交際によりて結婚に導かるゝ機關が存在しないのである。理想ある男子は高等教育を受けたる婦人を求めてゐるのである。これは教育家宗教家及び父兄や當事者の大問題である。大に研究する價值がある問題である。尤も理想も現實社會に於ては多少譲歩せざるをえない。自己を顧みずして他にのみ理想を求むる如きは一種

ること

一、公立及私立の大學の修業年限、學科、學科目及其程度並に研究科目及其程度並に研究科及別科に關する規定は公立大學に在りては管理者私立大學に在りては設立者文部大臣の認可を経て之を定むること

一、公立及私立の大學の教員の採用は公立大學に在りては管理者、私立大學に在りては設立者に於て文部大臣の認可を受くべきこと

但し勅任せらるゝもの及奏薦に依り任命せらるゝものに就きては此限りに非ざること

一、大學に於ては其卒業者に對し學士の稱號を授くるを得ると一、大學に於ては其研究科に三學年以上在學し研究の成績を提出して請求を爲す者又は論文を提出して請求を爲す者に對し教授會の審査を経て博士の稱號を授くるを得ること

前項の外學術上功績ある者に對しては大學に於て教授會の決議を経て博士の稱號を授くるを得ること

一、稱號に關する規定は文部大臣之を定むること

一、本令に據る學校に非ざれば新に大學又は大學校と稱するを得ざること

一、學位令及び博士會規則は之を廢止すること

但し本令施行前授與したる學位並に本令施行の際現に論文を提出して學位を請求する者に對し本令施行後授與する學位に關しては博士會に關する事項を除く外尙從前の規定に因ること

新大學令を檢査するにその重なる特色は次の諸點に存するを見

る。

第一、新大學令は品格の陶冶に重きを置く。從來の大學は高等の學識を備へしむる機關を以て任じたれども品性に就いては多く言はなかつたのである、然るに新大學令は高等の學識及び品格を備へ、社會の指導者たるべき須要の人材を養成し、及び學術の蘊奥を攻究するを以て目的とするにある。これは一大進歩といはざるをえない。從來の大學令は餘りに多く獨逸の大學を模倣し過ぎた傾向がある。獨逸の専門的研究的態度は尊敬せざるべからざるも、品性陶冶の方面は寧ろ英米の大學を參考とすべきである。此點に於て吾人は新大學令の精神に同するものである。

第二、新大學令は女子大學の設立を認可すると共にいづれの大學にも女子の入學を許可することは大なる進歩と目せねばならぬ。嘗て東北大學が女子を收容したるが、今後は幾多の女子の大學生が男子と共學するやうになるであらう。現に米國に於てはシカゴ、ウイスコンシン等の大學に於て之を實行してゐるのである。蘇格蘭、威斯、愛蘭及び英蘭の近代の大學に於て既に此制度が行はれてゐる。オックスフォード及びケンブリッヂに於ては女子には學位をこそ與へざれども、自由に聽講を許し、且つ試験の上に免狀^{デプロマ}を附與する。然るに新大學令によれば女子は學位をも領し得ることとなる。これは我國に於て女子の位置を高め、その權威を加ふことに於て多大の功績あるに違ひない。

第三、新大學令は大學教授會に博士の授與權を與ふ。これも一大英斷である。從來の博士號は博士會若くは大學總長の推薦によりて文部大臣之を授與したのであるが、斯る事は世界に類例のな

小學校の講演會に臨んだ。四五百の聴衆が大きな講堂に溢れてゐた。一時間半程心ゆくばかり演説した。青年のみならず老年の多かったこと大に僕を満足せしめた。此村の遠藤村長は模範村長の名がある。この村は誌友嶺岸法學

士の郷里である。嚴君も令兄も聴衆の中に見えた。仙臺に着いたのは午後七時頃であつた。

直ちに土樋なる土井晚翠君の假寓に押しかけた。地は廣瀬川に臨み、愛宕山に對す、庭園大にして樹木多く、二階作りの家も立派である。晚翠君は臨時に夏期休息所として某富豪より貸りてゐられるのである。當日は同君の亡き母上の百ヶ日の法會にて本宅にゐられたが、八時半頃來車せられ、暫く懇談した。夜は僕一人階上を占領してゆつたりと睡つた。

十日朝は四時半頃に眼覺めた。

欄に倚れば何たる風景ぞや。五時半獨り愛宕橋を渡りて向山に登る十八九年振りにての登山である。仙臺はます／＼森の都となつた。ゆるく廣瀬川をめぐらすこの都は自然に恵まれたる地である。新しい靈居橋を渡りて歸る仙臺の景色大に氣に入りて二高時代の生活

編輯たより

□秋が來た、評論界思想界は又強い活氣を呈して來た。

□貞操問題に於いて乃木家再興問題が喧しい議論となつて居る。藩閥の專横といふのか、思慮が足りないといふのか、是は又随分亂暴な事件であつた。偉人に對する之れ程の無禮侮辱が又とあらうか。故人の意志を尊重しない許でない、彼の死を一人が利用した形である。

□來月は本誌も御大典に關する者を二三集めたいと思ひます

□前號から告白を寄稿されて居る沖野岩三郎氏は紀州新宮日本基督教會の牧職に在らるゝ方です。氏から其續稿「宗教心の經路」誤解に對する心」等深刻な告白が來て居ります。

□野村善兵衛氏は今度福島縣伊達郡桑折町本町に假寓し願想到に耽つて居らるゝ由

□三並氏は其後大に健康を回復し、ポツ／＼仕事を始めて居

□内ヶ崎氏は早稻田で約廿時間働かれる外、此秋から曹洞宗大學で基督教々理史を講義されて居る。

□吉田氏も先月から早稻田大學英文學科で講義を始められた。

□岡田、相原氏等皆健在。

□本誌原稿メ切毎月十五日市外巢鴨一四七〇相原方編輯部宛

が思ひ出されて、この儘居残りたくなつた。貞山公に對する景慕の念を新にした。朝食をやつてゐると晚翠君が照ちゃんや英君を連れて來て大に賑うた打ち連れて新寺小路に同君母堂の墓參をした。

歸ると仙臺の大隈伯の稱ある早川智寛翁が來訪せられ、談論風發、興盡きなかつた。

午後も來訪者が多くて仙臺に對する執着心がますます／＼強くなつた。夕食は晚翠君の元荒町の本宅で饗せられた。多忙中いろ／＼厚志を盡されたる晚翠夫人の勞を謝せねばならぬ。午後七時から東三番丁の組合教會の講演會に臨んだ。

小雨が降りはじめたから心配したが、新しい會堂にて聴衆一杯にて四百名はありしなるべく、追々雨が晴れると堂外にも數十名の人々が佇立してゐた。この會堂はデフォレスト博士の紀念で昨秋落成したのである。しかし片桐牧師の熱心が之を能くしたのである。僕の

講演はデフォレスト博士に對する感謝の意味であつた。題は人生の根本問題で正味二時間半やつた。汗びつしよとなつた。牧師館にてサイダーを抜き、汗をふき、更に旅裝を備へて停車場にかけつけ、十數名の親戚友人に送られて午後十一時仙臺に名残を告げた。

の誇大狂に過ぎないのである。男女共に此點を警戒すべきである。(甲鳥生)

刑法の不備なり

近頃婦人の職業に就いて男子に混ざるに従つて不徳なる男子は位置を利用して婦人の貞操を破らんとする者が多いといふことである。如何にしてかゝる婦人を保護すべきか。先づ刑法を改正してかゝる男子を嚴重に處分することが一つの方法である。從來の刑法は女子に嚴にして男子に寛である。この不平等は平等とならなければならぬ。最近の大審院の審判例は夫婦間のみならず、内縁の妻に對しても男子は扶養の義務を有することを證したが、これは多く經濟的解決の方法であるが、若しこれが體刑によりて處分せらるゝに至らば男子は勢ひ自重するに至るであらふ。故にこの點に於て刑法の不備を改正するは急務である。新しき女よ、何故に諸氏はこの問題を叫ばざる。自ら放逸を求めて男子の玩弄物となるが如きは新しい女どころか、これ中^{ちゅう}古^この女に非ずして何ぞや。(甲鳥生)

歸郷記

内ヶ崎生

西南の旅終るや一週間程は暑さと戦ひながら「人生日訓」の校正をやつた。僕は六七八の三月の邊を校正したに過ぎぬ。他の部分は手傳をしてくれた一條君に任して、八月二十七日の夜行汽車に

て、僕は飄然として郷里に向うた。二三日前的大雨にて道路破損したので仙臺よりは例の鞍馬に乗つた。二十八日夜より九月九日正午迄僕は家務をみた。しかし黒川郡各村の青年團の總會があるので郡長石崎寅吉氏より懇請せられて富谷村と宮床村の青年團にて出演した。富谷村のには三百名の聴衆に對して二時間も講演をやつたが、幹部が三四十人居残つて歐洲戰爭の批評をして呉れと頼まれ、午後の會が終ると夕食をせずに午後七時より九時迄やつた。三里も遠い田舎に提灯をさげて歸つて行く青年達を見てはその意氣に感ぜざるをえなかつた。宮床村は我が村より一里離れ大森山の麓の、古へは八千石の伊達家支藩のあつた處である。栗や柿の名所である。僕はまた馬で出かけた。平原の景に慣れた僕はこの山里の訪問は殊に興があつた。僕が十二歳の時に八十四歳で亡くなつた曾祖母の妹は猶此村の親戚の家に達者である、八十九歳である。講演がすんでから訪問すると、眼はみえず、左耳は聞えず、右耳が少し聞えるのみである。朝よりも待ちかねてゐた由にて我が手をさすりながら、嬉し涙をこぼされた。老人は難有いものだと感じた。僕は親戚中の最高齢者の上に祝福を祈りつゝ別れた、我が黒川郡では石崎郡長、中村農學校長、石川郡視學、森警察署長等皆熱心家で、郡青年の鼓吹に努力せられてゐる。全國にも稀有のことと思ふ。

九月三日の夕は驚くべき夕榮の空があらはれた。本號に公にした歌はその夜わが村の畫工北目春月君と共に爐邊にて雜談中思ひ浮びしものである。僕の歌は粗製濫造である。

九月九日正午雨を冒して騎馬で郷里を辭した。午後三時七北田

此廣告を見を御申込の方は六合雑誌に依る旨御書添ふ

●將來爲すものと諸兄弟は須る本誌を備ふ可し●

價金六十五錢
郵稅 五錢

英雄崇拜號

九月廿二日發行
歡迎如湧

逝ける井上老侯

海軍新補充計畫に反對す
獨逸の間諜組織 大川政八

岩野泡鳴を彈劾す

薄命なりし能澤蕃山

織田信長 文學士 笹川臨風
豐太閣 文學士 吉野鐵
將軍家光 文學士 大原武
晩成の英雄 陸軍大尉 本山

戰國時代の英雄

新聞記者としてのビ公

ナポレオン論

グラットストンを憶ふ

デモクラシーの開拓者

那翁とウエリントン

力行不惑の武雷安

信長と秀吉と家康

鐵血宰相と語るの記

予の見たる那翁

ベイトマンホルウエヒ

英雄心なき國民は亡ぶ

古田松陰と徳富蘇峰

不平兒長嶋隆二君を聴く

當今の政黨に英雄ありや

獨逸精神の權化トライチケ

時亂にしてガンベタを憶ふ

伊藤、痴遊

太田三次郎

青塵樓

清水柳三郎

高木武定

文士 福本三郎

文士 島田秀三郎

文士 尺小角五郎

文士 井上兼健

文士 花山

中央大學講師 貴族院議員 矢野龍溪

文士 柳下

文士 栗原

文士 箕浦

文士 山路

文士 長瀬

文士 林原

文士 宮澤

文士 赤堀

文士 冬湖

文士 松枝

文士 覆面

發行所

東京 本町

本町 三九

本町 三九

本町 三九

本町 三九

本町 三九

本町 三九

本町 三九

本町 三九

新刊批評

基督教神髓

富永徳磨著
警醒社發行

基督教の根本思想を其實驗に照して平易に説かれたものである。第一章神の存在、第二章神は父也第三章人の理想と實際、第四章基督の救、第五章新生命の實現等の諸篇に分ち基督教生活の要點を示して居る。思想と實行を兼ねたる著者が其進歩的態度に依て説て居るから、教育ある求道者のため、又一般信者のためにも好著として推薦しうるものである（價〇・八〇）

圖修養實訓

友田宜剛著
雄辯會發行

本書巻頭には畏くも天覽の印證がある、自序には、心に進修の氣概なきものは本書を読むべからずと高嘯して居る。恐懼して、讀むて行けば修養の道は禪に在りといひ、教育勅語と戊申詔書を禪で註解せんと試みたもので頗る通俗平易に出来て居る。欄外には熟語や漢字の註解がある。地方青年團などに恰好の書と思ふ。禪といへば專用語が難解で平人に

は何とも手が著けられぬ。著者は之を極めて通俗化せんと努めたものらしい。然らば寧ろ著者が異端視する岡田式靜座は禪を最現代生活に當はまる様通俗化したものではないか。

著者は又岡田式を以て身體健康法のみ之如く解すれど是亦謬見である。併し著者が現代の風俗に慨して青年に警告せんとするの精神は巻を通じて窺ふとが能る。（價〇・五〇）

アルフレッド大王 長谷川康共著
マイ・ライブラリ第一編 鈴木芳松發行
建文館發行

平易な英文アルフレッド大王物語に親切な譯註を加へたものである。其特色とする點は（第一）英文の構造を明に會得させる爲構文

解説といふとを試み、諸種の活字を巧に適用して語句の輕重聯絡を一目瞭然たらしめると（第二）譯文を能る丈英文の措辭に倣つて日本語を配し併も邦文の意味を失はないから、讀者は英文の區切をよく解するとが能る（第三）註譯は頗る叮嚀にして中學三年以上の學力あらば何人も辭書なくして讀み乍ら、英語の特有の性質に通ずるを得ると、其例としては發音の六かしい字には特に注意を加へ、文法上の説明も適切な例を擧げて邦文との差違を示

す（第四）體裁優美にして内に二葉の挿畫を加へ活字はポイント式であるから讀て心地よい紙數百七十頁是で定價の廿錢は廉である。英語研究者必讀の冊子である。

新撰基督傳

安部清藏著
警醒社發行

聖書の本文から基督の言行を拔萃して基督の人格を想見する便としたものである。上欄一寸した註がそへてある。聖書講義又は傳道用として便利であらふ。但小冊子のためか出處の索引等がないのは残念である。（價〇・一五）

院長診察月、水、木、金、午前

林、峰間兩副長は目下當院に在勤

麴町區三番町三十番地(市ヶ谷見附内)

電、番六二一番

東洋内科醫院

院長

醫學士

高

田

畊

安

電話ちがさき二番

南

湖

院

相州茅ヶ崎海濱(從停車場半里)

河野、高橋兩副長は目下當院に在勤

院長診察土曜日午後、入院診後應需

六 合 叢 書

著者 野村胡堂
研究 自我限畔
著 著
(編四第)

授教 陸軍大學
著 岡田哲藏
(編三、二第)

授教 第一高等學校
著 三並良
(編一第)

春秋の哲人

新らしき宗教藝術、哲學の立場よりせる著者最近の人生觀、社會觀にして觀察深刻にして行文奇警に富む、銷夏の讀者として切に之を江湖の紳士淑女に薦む

我が断片

第 定價 第三價
編 十 編 十
邦 英 錢 五十
文 稅 錢
百 錢
廿 錢
頁 二 錢
頁 二 錢

傳説によらず、歴史批評の立場より基督を説明し彼れの宗教を現代意識に紹介せんとするものにして我等の基督觀は此書によりて闡明せられたり江湖の清鑑を得ば幸甚

眞人基督

第 定價 再版
ケ 十 價
ツ 十 錢
ト 五 稅
人 頁 二
美 錢
本 錢 (賣)

ボ 定價
ケ 百 價
ツ 十 錢
ト 十 稅
入 錢
美 頁 二
本 錢 (湧)

七月一日
發行
七月號
定價金貳拾錢

大谷雜誌

九月一日
發行
九月號
定價金貳拾錢

- 進歩的基督教の主張
- 自由なる宗教生活
- 水道の水
- 自我の問題
- 思想家の生活
- 生死
- クリスチャンとは?
- 紐育より
- 宮参り
- 神祕的知識
- 生命の家
- ストリンデルベルクの「父」
- 熟れたる實は
- 瑞西より
- 幻響を追ふ心
- 基督教の禪機

内ヶ崎作三郎譯
安部 磯雄
岡田 哲藏
野村 隈畔
鈴木 龍司
三浦 關造
岸本能武太
高橋 清吾
木村 久一
イ・エス・エームス
増野 三良譯
太田 眞一
田中 葦城
盧 山生
吉田 絃二郎
内ヶ崎 作三郎

- 創造の藝術 エドワルド・カアペンター
- 思惟の生産的流動性
- 永世の後―エドワルド・カアペンター
- 近代文學に於ける女性
- 女子の運命
- 如何にして生らんか
- 北米だより
- 瑞西より
- 私生兒の心
- 大戦亂の精神的統一(海外思潮)
- 國家主義と國際主義の統一
- 西南旅行
- 時評

佐藤 清
野村 隈畔
富田 碎花
石田 三治
木村 久一
帆足理一郎
鈴木 文治
盧 山生
沖野 岩三郎
記 者
内ヶ崎 作三郎
内ヶ崎 生
諸 家

東亞之光

第十月號

一冊二十錢
二冊三十四錢
三冊四十四錢
四冊五十四錢
五冊六十四錢
六冊七十四錢
七冊八十四錢
八冊九十四錢
九冊一圓
十冊一圓二角

每一月發行一回

◎國民道德上より觀たる御大典……………文學博士 井上哲次郎

◎演劇と藝術……………文學士 太宰施門

◎ブラウニングの理想詩……………文學士 齋藤 勇

◎人格發展の辨證法と言語……………文學士 吉田 靜致

◎推移期の英文學……………文學士 金子健次

◎非ユークリッドの幾何學小史……………三上義夫

評論

△正當なる社會觀 △戰爭の真相
△乃木家再興問題 △個人對社會
△國民道德研究の革新

海外思潮

△相對原理と絕對哲學

◎歐洲に於ける基督教の將來……………松村介石

◎畫論上より見たる支那畫の原理……………文學博士 瀧 精一

◎露人の戰爭觀……………文學士 八杉貞利

◎大國的國民性を造る道……………文學博士 井上圓了

◎選歌 選句 學會彙報

東京文科大學講義題目等

發行所

東亞協會

東京市本郷區駒込
千駄木五番地

振替口座
東京七〇七番

此廣告を見申込の方は「六合雜誌」に依る旨書添を乞ふ

神學之研究

定別 價に 一郵 冊稅 廿四 錢錢 十 月 號 一金 年壹 前圓 金三 郵十 稅五 共錢

▼ タゴーアと惡の問題

▼ 老子及び其道の意義

▼ バンカリズムとは何

▼ 最深實在としての人格

▼ 教會歴史の與ふる教訓(特別寄書)

▼ ヨハネ傳のロゴス神學

▼ 歐羅巴戰爭の眞意義

▼ 社會主義と性格

▼ 新著紹介短評二十種

池園哲太郎

宮本信吉

記 者

小村彦五郎

レーク教授

須貝止

ベルグソン

若月麻須美

研究會員

發賣所 警

東京區橋本張町 醒社

大賣捌所 東

神田區神保町 京堂

週刊宗
教雜誌

基督教世界

毎週木曜發行
一部 金五錢
半ヶ年 金一圓二十錢
一ヶ年 金二圓三十錢
外國行一ヶ年金三圓

◎本誌の創刊は明治十六年にして既往三十餘年の歴史を有する本邦基督教界最古の週刊雜誌なり

◎本誌の特長は進歩的基督教の立場より時事問題を評論し且つ最新の知識に依り基督教永遠の眞理を闡明するにあり

◎本誌には毎號教界先輩の說教、内外名士の論說と新進思想家の研讃と、清新なる宗教文學及内外教勢を滿載す

◎本誌は信仰修養の糧として聖書研究の手引として、信徒家庭の讀物として好適なる雜誌なり

◎本誌の編輯は宮川經輝、原田助、小崎弘道、渡瀬常吉、牧野虎次の五氏協力之に當り、武本喜代藏、山口金作の兩氏每號執筆し、在兩京の記者數名之を助く

— 本誌の見本は往復はがきにて御申越次第無代進呈すべし —

發行所

基督教世界社

大阪市北區中之島二丁目四七

振替貯金大阪參壹七參

此廣告を見申込の方は「六合雜誌」に依る旨書添ふ

毎月

道

一回

一日

道話

發行

松村介石主幹

第九拾號要目 定價金拾五錢、半年金八拾錢、一ケ年壹圓五拾錢(稅共)

△彩鷄違辰 齋藤指洲畫

△時感一束

△宗教界の大發見 松村 介石

△宗教家の本領

△心戒五則 足 堂

△井上馨侯 城北 隱士

大正四年拾月號

『道』は宗教歸一を主張し併せて精神修養に資するもの也
『道話』は通俗的と人生の心得を説きたるもの也

第五拾四號要目、定價金五錢、十部金四拾五錢(稅共)

△卷頭語『月』 松村 介石

△恩義論

△金持と貧乏人

△子孫訓育の道 森村市左衛門

△今覺悟せねば

△間に合はぬ 大倉孫兵衛
△埃たゝき 武田芳三郎

△歐洲大戰と其 時田浪之紹

△決定的主力 大川 周明

△平安朝より鎌 倉時代へ 麻生 正藏

△家庭の族相 野口 復堂

△宗教上のから見 村井 物來

△閑古鳥 周布の辨(後端)

△秋元但馬守(前席)野口復堂

△成功の眞意義 大倉 文二

△修養一束 記 者

大賣捌所

東京堂、東海堂、北隆館、良明堂、大倉書店、警醒社、至誠堂、其他

發行所 天心社

道會事務所

電話 一三六一番 内ニテ

東京 振替 口座 番七六三九一

東京 振替 口座 番六二九五二

此廣告を見申込の方には「六合雜誌」に依る旨書添ふ

近 代 思 潮 叢 書

第一高等學校
教授

三並良先生著 新刊

第九編

生命中心の哲學

四六判洋布製
定價八十錢
郵税金八錢

近代の思想を辿り行く時は、必ず一層高等なる精神的生命の活躍を尋求憧憬する大努力に逢著すべし。本書收むるところ、或は純粹の理論、或は比較宗教學上の研究、或は偉大なる人格に關する評論等、其種類多しと雖も、皆此大精神の運動を看破せんとするものにあらざるはなし。これ生命中心の哲學と題する所以。且つ著者は獨逸の思想界と最も多く交渉す。獨逸今日の強大をなす根柢たる思想を窺はんとする人、本書を繙けば自ら釋然たるものあらむ。

(1) (2) (3) (4)

オイケンの哲學 三並良氏著

現代思想と倫理 今岡信一良氏譯

問題

生の更改と新藝術 内藤濯氏著

科學と宗教 三井北川氏著

(5) 現代の思想家 小松武治氏著

(6) 自我の研究 野村隈畔氏著

(7) 靜感と思想 岡田哲藏氏著

(8) 宗教の哲學的基礎 藤田逸男氏著

定價各七十錢(但七・九編ニ限八拾錢)郵稅各八錢

發兌 東京 橋本 警 醒 社 書 店 振替 五三番 東京 電話 八五七 (橋本) 東京 橋本

本誌讀者諸君の特權

◎圖書取次!

一、東京市内發行の書籍ならば定價の全額丈御送り下さるれば別に送料は要しませぬ。

但し法律書、醫書は元價非常に高いのですから送料を添へて下さい。

一、御送金は可成安全な振替貯金にて御拂込み下さい。

(振替口座は東京 一〇〇〇三、統一基督教弘道會宛)

一、本部へ當て返書を要する質問書御發しに際しては必ず返信料を添付下さい。

一、一般圖書の取次ぎは今度始めて開始したのですからは非一度御試み下さい。

六合雜誌社營業部

電話芝五八五五番

本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵税一錢
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵税共
十冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵税共

● 海外は郵税一冊に付金六錢(清國を除く)
● 臨時號出版の際は規定以外に代金申受く

本誌廣告料

特等	表紙二三四面	一頁	金貳拾圓
普通		頁	金拾貳圓
普通		半頁	金六圓

● 表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候
● 二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候

大正四年九月三十日印刷納本
大正四年十月一日發行

(毎月一回一日發行)

定價 貳拾錢 本號

發行兼編輯人 海上輝男
印刷人 日比野幸一
印刷所 株式會社 秀英 舍

發行所

東京市芝區
三田四國町

統一基督教弘道會

賣捌所

東京堂◎北隆館◎東海堂◎同文館◎上田屋
◎警醒社◎敎文館其他全國有名書店

振替東京一〇〇〇三番
電話芝五八五五番

Library of the
PACIFIC UNITARIAN SCHOOL
FOR THE MINISTRY
Berkeley, California

六 合 雜 誌

十 一 月 號

明治三十五年三月廿七日第三種郵便物認可
大正四年十一月一日發行(每月一回一日發行)

六合雜誌第三十五年第十一號



四 百 十 八 號

此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依りて書添を乞ふ

哲學叢書

第一篇

認識論

出來

東京帝國大學
文科大學講師

文學士

純平正美著

四六版四百三十頁

定價一圓二十錢

郵稅八錢

波多野精一

速水 混論

◎續刊書目◎

西田幾多郎

宮本和吉

學理

顧問

朝永三十郎

阿部次郎

倫理學

學概

學理

大塚保治

安倍能成

古代理學

學概

學理

夏目金之助

安倍能成

近世西洋哲學史

學理

學理

桑木嚴翼

高橋里美

現代哲學

學理

學理

三宅雄次郎

高橋 稔心

神學

學理

學理

編輯

上野直昭

田邊 元

最近の自然科學

學理

學理

阿部次郎

石原 謙

宗教哲學の根本問題

學理

學理

阿倍能成

阿部次郎

美

學理

學理

要項

一、哲學叢書希望者はハガキ又は電話にて速に申込まれたし（申込金不用）。
 二、全部申込まざる方は希望の書目全部申込せられたし。
 三、全部申込の方には各一冊一圓五錢宛十回申受け終りの二冊分の方は各一冊十圓十錢宛五回申受け終りの一冊分の代を申受けず。但し直接本店に申込む者に限る。郵税は別に申受け。
 四、製本出来毎に其旨を御通知すべくにより速に振替東京二六二四〇正に拂込まれたし。但し振替に差期に配本す。
 五、本叢書は申込まざる方にも全國各書店に於て分賣す。
 六、本叢書は本年十月より毎月一冊宛の割にて向ふ一年間に完成

振替東京二六二四〇
電話本局五二四〇

岩波書店

東京神田
南神保町

發行所

（明治廿五年三月二十七日第三種郵便物認可）（大正四年九月卅日印刷納本）
（六合雜誌第三十五年第十號）（大正四年十月一日發行）（毎月一回一日發行）

【本冊定價貳拾錢】

THE RIKUGO-ZASSHI

No. 418 November 1915

CONTENTS

The Coronation and National Ideals.....	Prof. S. Uchigasaki.	2
Beyond Faith and Doubt (Guyō).....		10
.....	Trans. by Prof. A. Naito.	10
Expansion of Life.....	Prof. C. Nakamura.	17
Poetry and Religious Life.....	Prof. K. Sato.	28
Some Thoughts on the Present Time.....	W. Nomura.	37
Our Ideal Womanhood.	K. Eguchi.	43
A Russian Exile.....	G. Yoshida.	57
The Path of My Religious Life.	Rev. I. Okino.	65
Poems.....	C. Hyodo.	83
A Dialogue.	K. Hirai.	85
A Poem.....	I. Tanaka.	95
Lonely Dolls.....	Prof. T. Okada.	97

Current Thoughts.

Thought and Character	S. Nishibuchi.	109
-----------------------------	----------------	-----

Liberal Christian Pulpit.

A Pioneer of Female Scholarship.	Prof. S. Uchigasaki.	112
Recollections of My deceased Wife.....	T. Haraguchi.	116

Topics of the Day.

New Books.

Published Monthly by the

TÔITSU KRISTOKYŌ KŪDŌKWAI,
2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

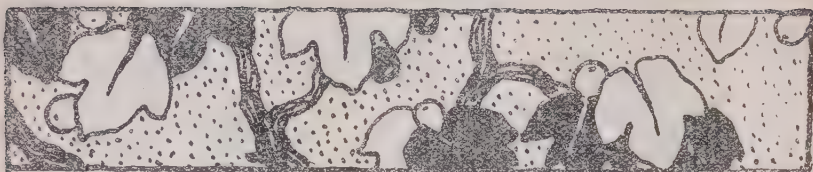
これに限る。

齒磨も

ライオン！

石鹼も

これに限る。



彼と彼女と彼の女達 (對話) 平井好一 八五頁

誕生日に (長詩) 田中葦城 九五頁

Lonely Dolls 教授 岡田哲藏 九七頁

現代思潮

印度哲學の戰爭觀 ■ 佛國の婦人達 ■ 婦人の觀たる現代獨逸の内面

敎界彙報 ■ 最近敎學評論一覽

雜俎

思想と性格との關係 (反響) 西淵 峻 一〇九頁

健全なる新婦人の先驅者 (説教) 内ヶ崎 作三郎 一二頁

失はれたる愛の追懷 原口竹次郎 一六頁

時評欄

大正維新の御大典 (一條生) 國民的煩悶時代 (嶺岸生) 不徹底なる學制改革

案 (柏葉) 醫學博士榎田龜一郎君 (三並良)

新刊批評 — 編輯便り



六合雜誌第三十五年第十一號目次

本欄

御大典と國民的理想の體現

早大教授

内ヶ崎 作三郎……二頁

信仰と疑惑とを越えて

文學士

内 藤 濯……一〇頁

生活の進展

マスター・オブ・アーツ

中村長之助……一七頁

詩と宗教の中心

文學士

佐 藤 清……二八頁

時代感想

野村 隈 畔……三七頁

我等の求むる女性

井 口 孝 親……四八頁

シベリヤの女囚

吉田 絃二郎……五七頁

宗教心の徑路

冲野岩三郎……六五頁

近時の婦人問題

一條 忠 衛……七三頁

文藝欄

おもかげ(短歌)

兵 働 竹 醉……八三頁

六 合 集



十 一 月 號

此廣告を見を御申込の方は合六雑誌に依る御書添を乞ふ

◎ パウル・サバティエ原著 中山昌樹譯

最新刊

アジジの聖フランチスコ

菊判四百五十頁
挿畫八枚
總價金一圓八十錢
送料金十六錢

彼の如く強烈なる榮譽心に驅られ飽くなき逸樂に耽溺した者は稀であつた而も又彼の如く熾烈なる熱情と敬虔なる信仰を以て新生命を追求し忍従と愛と喜悅の生涯に依て人類永遠の感激となり靈感となつた者も稀である此崇高なる聖者の傳はサバティエの該博なる智識と優麗なる法悦と眞摯なる信仰の欣求者は彼に於て始めて無限の慰藉と共鳴とを感じるであらう

◎ 加藤一夫著

(四六判三百四十頁 定價金一圓 送料八錢)

最新刊

本然生活

これ新人の宗教である。これ彼が信仰の破壊と懷疑の暗黒の中より掘り出したる眞理の黒光である。血と涙とを以つて創り出したる新信仰新生活新宗教の第一聲である。眞の光と眞の力と眞の生命は茲に輝き且つと眞の生命は茲に輝き且つ

湧いて居る。今や著者は新しい生活の第二の階級に入らんとして居る、そして第三の生活を想望してそゞろに胸の血の湧くを覺えて居る。この書はその爲めの第一階段である。現代の苦悶に悩める者、新しき世界と光と力とを渴望する者は、著者と共にこの第一階段を踏まねばならぬ。

發行所 東京市麹町區平六 洛陽堂 振替東京二〇九一四番 電話東京二四八番

怪しむに足らない。しかし皇統連綿として數千年に傳はりたるには他により深き根蒂を有する理由がなければならぬ。吾人はこの理由を研究するを以て先づ奉祝の微意を表するのである。

第一の理由は天孫降臨と祭天の風習である。我が 皇祖皇宗は天より降臨しましたといふ思想は我が國に於ては特別の發達をなしたのである。いづれの國民に於ても古代にありてはその君主を天帝もしくは神と結びつけて、其處に帝王神權説が成立するに至つたのである。然るに天と皇祖皇宗の關係は遠く永くあるのみならず、皇祖皇宗親しく天を敬し、神を尊び、儀式と行爲とによりて天の子たるの道に負かざるのみならず、進んで民人の疾苦を顧み給ふを以て、皇統を繼承する者の大任たりと自覺遊ばされたのである。よりて皇室の天孫たる御宣言と、それに歸依し信奉したる臣民との間道徳を超えて宗教的ともいふべき關係が生ずるに至つたのである。これ實に我が國體の精華たること疑ひを容れないのである。

『豐葦原の千五百秋ちいその瑞穂みづほの國は是れ我が子孫の王たるべきの地なり。宜しく爾皇孫就いて治むべし。行け寶祚たからの隆たかまさんこと天壤と與に窮りなかるべし』と。これ天照大神の御言葉として日本紀の載する所である。『就いて治むべし。』茲に重大なる君主道徳が潜んでゐる。何を以て治むるか、實踐窮行によつて治むるのである、道を以て化するのである。上古矇昧暗黒の時代に於て、邦土を開拓し、農耕を勧め、兇惡を征服し、善政を布くは至難中の難事であつた、而して 皇祖皇宗は奮つてこの重任を果たし給ふたのである。かくの如くにして寶祚は天壤と共に無窮に繼續すべしといふ豫言が仰せら



御大典と國民的理想の體現

内ヶ崎 作三郎

今上天皇陛下の御即位式は本月十日京都に於て舉げられんとしてゐる。御儀式の莊嚴なる、民間奉祝の盛大なるは言ふ迄もない。吾人は草莽布衣の一民として聖代の大典に際會したるを喜び、聖壽萬々歳を祝し、大正の御代に天佑ます／＼加らんことを祈り奉らざるをえない。

御即位式は國民的大事件にして吾人は此處に深遠なる意義を見出さなければならぬ。またこの偉大なる機會に於て國民的理想を確立しなければならぬ。

吾人臣民は 今上天皇陛下に於て萬世一系の皇統を繼承し給へたる第二百二十二代の人皇を仰ぎ奉るのである、世界列強のうち君主多しと雖も、我が 皇室の如く永く續き榮えさせらるゝはない。同盟國英國の王位は西曆九〇一年にアルフレッド大王戴冠したるよりその血統連綿として絶えざる例あれども、我が 皇統に及ぶべくもない。日本と英國は共に島國にして、且つ氣候時節中和宜しきを得たることに一致する。即ち等しく島國文明を發達せしめれば共通の事實、類似の現象を見るは

てのみならず國家的團體としての存在が天地の大靈の永遠の經綸に關するものなることを省察し、それに耻ぢざる國民的功業を成就するを以て理想とせしむるのである。

我が國體の第二の精華は君臣相愛の美點である。邦語のキミは恐くは漢語の君グンより來れるのではない。而して蒙古の干カンも音に於て君グンと接近してゐる、又英語の王 King (キング) も不思議なる類似を有する。英語の King は the son of the kin or tribe, i. e., the kinsman of all the rest. を意味する。即ち血族親戚の子、即ち凡て自餘の人々の血族、換言すれば血族統一の中心にして、決してその壓制者でない。日本のキミ、支那の君も其起源に於ては頗る之に類するのである。また邦語公キミヤは大家の義で、臣は小家コヤである。即ち皇室は總本家にして臣はその分家末家である。古代臣をヤツコと稱したは家之子の義で、總本家の子供といふ意なりとの事である。されば皇室より觀をなせば大御寶オホミミカラである。かゝる君臣相變の美風は我國以外に於ては殆んど稀にのみ見ることが出來たのである。

君臣の大義に就いては支那の古聖の教ふる所甚だ深いものがある。『君臣を使ふに禮を以てす。臣君に事ふるに忠を以てす。』は論語の説く所、『人君となりては仁に止まり、人臣となりては敬に止まる。』は大學の説く所、『君は儀なり、儀正しければ影正し。君は槃ハシなり、槃圓なれば水圓なり。君は孟モウなり、孟方なれば水方なり』は荀子の説く所、『君は元首たり、臣は股肱たり、體を同じうし、相待つて共に美德を成す。』は後漢書の説く所である。而してこの理想は我國の君臣の關係に於て能く實現せられたのである。倭論語第三卷には『君主臣下を愛し給ふは御子の如く、臣亦君に仕へ侍るも父母を慕ふが如く侍れば、君は天にして、臣は地にして、天地と久しかるべし』とある。我國の君臣道は父子有親の

れたのである。されば百姓流離し、もしくは背叛すれば崇神天皇は憂惕し、罪を神祇を請ひ、其時迄殿内に奉祀したる天照大神を笠縫の邑に遷し給うた。推古天皇の詔敕には『朕之を聞く。曩者我が皇祖天皇等、世を宰り給ふや、天に跼し地に踏して敦く神祇を禮し、周く山川を祠り、幽に乾坤に通じたまふ。是を以て陰陽開け和し、造化共に調ふ。今朕が世に當り神祇を祭祀すること、豈怠ること有らんや』とある。即ち 天子親ら天神地祇を崇敬せられ、その恩寵に感謝せられたるを知るのである。

明治天皇の御製を拜誦するに同一なる精神の其中に充ち溢るゝを見るのである。

千早振る神ぞ知るらむ民のため世を安かれと思ふ心は。

罪あらば朕を罪せよ天つ神民は我身の生みし子なれば。

神代より受けし寶を守りにて治め來にけり日の本の國。

目に見えぬ神に向ひて耻ぢざるは人の心の誠なりけり。

今上天皇陛下御即位式を行はせ給ふは實にこの雄大なる御精神を發揮せしめらるゝ事である。皇祖
 皇宗の偉靈を通じて天地の大靈を拜禮ありて、御即位を奉告せられ、その尊嚴なる御確信を以て吾人臣
 民に臨ませ給ふのである。

一身一家の存在にすら千萬無量の意義がある。況んや一國の存在——然り數千年の存在——名譽と
 光榮の存在——而して永遠にその存續せらるべき信念のうちには實に廣大なる意義があるのである。
 我が 皇室と國家と民族との繁榮共存は天地の大精神の嘉納し給ふ所にして、此處に永遠の大靈に對
 して國家存在の意義が明白となるのである。されば 御即位式の大典は吾人臣民をして獨り個人とし

『朕四海に君臨して百姓を撫育するに家々貯積し、人々安樂せんことを思欲せり。何ぞ期せん、頃日、早勞して調はず、農桑損あり、遂に衣食乏短して飢寒あるを致せり。言に茲を念へば良に惻隱を増す。今課役を減じ、用ゐて産業を助けん。云々』

と敕せられた。明治天皇の御製には民人の疾苦を思はせ給ふ御心情が流露してゐる。

照るにつけ曇るにつけて思ふかな我民草の上はいかにと。

古の文みる度に思ふかなおのが治むる國はいかにと。

桐火鉢かきながら思ふかなすき間多かる賤が伏屋を。

夏の夜もねざめ勝にぞ明しける世のため思ふと多くして。

冬深みねやのふすまを重ねても思ふは民が夜寒なりけり。

照憲皇后の御製に

民草の上をいかにと思ふ夜の袖にも露のこぼれけるかな

今上天皇后陛下の御製に

たなすゑのみつぎのためしひく絲の永き世かけて勵めとぞ思ふ。

とありて 皇室がいかに臣民の生活に就いて注意を怠られざるか、理解せらるゝのである。今や

今上天皇陛下 光榮と仁慈と天寵との皇統を繼承し給ひて、吾人臣民に君臨し給はんとするのである。

大正の御代は必ずや過去何れの御代にも劣らざる治績を奏すべきは吾人の固く祈り且冀ふ所である。

されば 御即位式は 今上天皇陛下が皇祖祖宗より大權を承け、國家の丕基を鞏固にして蒼生の慶

情愛に入つたのである。御即位式は更にこの感情を更新復生せしめ建國以來の美風を助成せなければならぬ。君臣の間忠と敬とを保つことは肝要なれども決して天真を没することなく殊に形式に於てのみ尊崇して内心に於ける情念の缺陷あつてはならない。殊に謹むべきは君臣の關係をして偽善とならしめざることである。又單に貴族のみならず、一般國民をして悉く皇室の藩屏たるを自覺せしむることが大切である。

御即位式に續いで大嘗祭を行はせられるが、これは天皇陛下親しく天神地祇及び皇祖皇宗の御靈を御招待になりて共に此年の新穀を食し給ふのである。この御儀式は靈魂不滅の徵象であつて同時に悠紀主基の齋田はいづれも清淨を意味して道德的清淨の徵象である。又この儀式に齋田より奉りたる米を御供へになるが、これは農本主義の國民生活を重んぜらるゝ御心である。即ち大嘗祭の御精神は養民である。國民の衣食住について軫念を勞せられ給ふ御趣旨である。

皇祖皇宗は常に養民を政治の根本となし給うた。繼體天皇の敕語には

『朕聞く、士當年にして耕さざれば天下或は其の飢を受け、女當年にして績つむがざれば天下或は其の寒を受けむと。故に帝王躬ら耕して農業を勧め、后妃親ら蠶して桑序を勉め給ふ。況んや厥の百寮より萬族に暨いたるまで、農績を廢棄して殷富に至る者あらんや。有司普く天下に告げて、朕が懷おもひを識しらしめよ。』

とあり、元正天皇は

する決心が必要である。近代歐洲の國際政治は著しく覇道に陥り、單に勝たんがために、單に己れを利せんがためにのみこの度の悲慘なる戰亂を惹起するに至つた。吾人は決してこの覆轍を踏んではならない。覇道の歸結は滅亡である。よしや一時の勝利と得意とあるべきも、決して永續はせない。アレキサンダー、ナポレオン、成吉思汗等の生涯はそも何を教ゆるか。獨逸帝國があゝの驚嘆に値する文化と思想と科學とを以て覇者の道を踏むに至つたことは惜しむべきとである。日本帝國は 皇祖皇宗の御遺訓に徴するも代々 王道を天下に敷くを以て神祐によれる使命なりと確信し來つたのである。

今上天皇陛下世界大維新に於て神祐と臣民の協力奉仕と世界の輿望とを荷ひ給うて君臨し給ふ。これ即ち日本國民が 陛下の御事蹟を補翼し奉りて世界に對して王道を鼓吹する責任を自覺せねばならぬのである。夫れ文明の發達は古來加速度を以て進み來たのである。近代史五百年は古代史五千年に比して更に大なる變動を生じた。大戰亂後の五十年は恐くは過去五百年に比して更に驚くべき變化を及ぼすことであらふ。日本帝國は王霸兩道の機會を有するであらふ。然れども日本は王道を選んで世界の國際道徳を指導して之を完全ならしむることを理想としなければならぬ。歐米の文明に心酔するあり、東洋過去の光榮ある文明のみを追懷するものがある。兩者共に非なりである。詮する所人は何處何時に於ても人である。その感情動機に於て異なるものでない。東西文明の根本に人情の統一がある。日本帝國の使命は東西兩文明の調和統一にある。大正日本の使命は此處に存せねばならない。吾人は謹んで 寶祚萬歲を祈ると共に臣民たる義務責任を痛切に自覺して猷芹の微を致さねばならぬ。

福を増進し給はんとすることを中外に宣明し給ふ御儀である。

明治天皇は 戊辰改革の後、百事混沌の時に即位あらせられた。五箇條の御誓文はこの空前の變革に處して民人を指導せられんとしたる御抱負であつた。

『廣く會議を興し、萬機公論に決すべし。』

上下心を一にして盛に經綸を行ふべし。

官民一途庶民に至る迄各其志を遂げ。人心をして倦まざらしめんことを要す。

舊來の陋習を破り、天地の公論に基くべし。

我國未曾有の變革を爲さんとし、朕躬を以て衆に先じ、天地神明に誓ひ、大に斯の國是を定め、萬民保全の道を立てんとす。衆亦此旨趣に基き。協心努力せよ』

實に雄大なる御宣言である。明治の聖代は之れが實現であつた。今や世界空前の大亂に際會し、文明の潮流に驚くべき變動來らんとしてゐる。明治維新は國內の動亂に過ぎなかつたが、現時の動亂は世界的にして、その影響測り知るべからざるものがある。大戦争の結果として我が國の國際的位置は自ら陞進することに疑ひを容れない。よしや一二年の後に歐洲の戰塵收まるとしてもその傷痕より回復するには十數年を要するであらふ、此時に當りて日本國民の責任は重く且つ大なるものがある。物質文明に於ても精神文明に於ても、吾人は歐洲の單なる模倣より覺醒せねばならぬ。日本は日本として特色ある文明を進歩せしめねばならぬ。又國是としても何處まで王道即ち人道に基いて世界を指導

望を托するに足る一個の巢を必要とするならば、其の人は自由な空氣に包まれながら、みづから囊を一片づゝよせ集めて其の巢を作りあげなければならない。そして春の來る度ごとに、思想の新しさが加はる度ごとに、其の巢を改造するだけの氣がなくてはならない。もし改造するだけの力がないならば、むしろ其の巢を捨て、外へ立ち去らなくてはならない。

宗教の消滅を思ひ、宗教的制約の否定を求めることは、果して懷疑思想であらうか。ビイロンやエネジデームの流派が其の跡を絶つて以來、懷疑説はもはや紛糾錯綜したいろ／＼な教理學説を包括する言葉に過ぎなくなつてきた。希臘の懷疑思想家たちは、それが凡べての哲學者に似つかはしい名稱であり、信仰を懷く者に反對する哲學者を定義する名稱である點からして、自ら好んで「探求者」と呼んだ。しかし現今においては、近代的乃至否定的の意味において、この懷疑思想家の名を濫用する者が尠なくない。若しこゝに或る數の人々があつて、明白に定められた如何なる主義系統にも屬してゐないとするれば、其の人たちは直ぐに懷疑思想家の列に加へられてしまふ。しかしながら、可なりに廣い眼界を見渡してゐるといふ理由からして、方百尺の林中の空地や山と山との間の小さな谷のうちに、狹隘な見解をもつて孤立することを潔しとしない綜合的精神ほど、皮相淺薄な懷疑思想から遠ざかつたものはないのである。世には動もすれば哲學者に對つて『君のいふところは可なりにドグマチックでない。抑も君は如何なる説を標榜するか。君を目していかなる部類の思想家とすればよいか。自分の蒐めてゐる思想家の標本の何れに君を加ふべきであるか』などと尋ねる人がめづらしくない。また世間には常に或る一人の思想家に對つて、『君は斯くかくの問題について何と考へるか。君は唯心論者で



信仰と疑惑とを越えて

——ギユイヨオ『未來の無宗教』第三篇第一章から——

内 藤 濯

われ／＼は一切の宗教の理想が、宗教的制約の否定へ、個人の解放へ、生命の贖よりはさらに尊い思想の贖へ、あらゆるドグマチックな信仰——たとひそれが如何なる形式の下に蔽ひ隠されてゐるにしても——の湮滅へ行きつくところにあることを益々強く信ずる。われ／＼は既成のいろ／＼な教義をうけ容れる代りに、われ／＼自ら吾々の信念の労働者とならなければならぬ。かのモンテーニユが何と云つたにしても、信仰は怠けものにとつて疑惑より頭を休めるのに都合のよい枕であるに違ひない。それはまことに多くの人々をして、其の思想を或る一角に封じこめてしまふ巢のやうなものである。親鳥の翼の下の方す暖い暗がりのうちに其の頭を蔽ひかくす巢のやうなものである。しかもその巢は、あらかじめ都合よく準備された巢に過ぎないのである。人の手によりて作られ既に或一つの籠の中に入れられた飼鳥のために賣られる巢と選ぶところはないのである。われ／＼は將來の間が、斯くして豫じめ作りあげられた隠れ場所や、かうした餘りに狭苦しい鳥籠に對して、ますます厭はしさを感じるやうになることを信じないわけに行かない。若し吾々のうち何人かが、自分の希

とがそれである。佛蘭西で吾々が「懷疑^{セブチツグ}の人」とか「鈍感者^{ブラゼ}」とか呼んでゐる人々の殆んど凡べてはたゞ單に強ひて深刻な風を装はうとする淺薄な徒輩に過ぎない。そしてさういふ徒輩は、快樂主義の實行者である事が屢々である。思ふに此の世には、バルザックの作に現はれる或る數の主人公と同じやうに、『常に暖い火を索めること、美食を漁ること、何一つとして此の世に求めるものがないこと、そこに人生がある』と云ふだけの準備をする人々がいつまでも其の跡を絶たないであらう。生きんとする待望こそ、家を求めんとする待望こそ、實に一日にとつては唯一の未來である。しかし吾々はまたさうした待望に曳きずられる人々の外に、飽かず屈せず覓めゆくところに人生を見出ださんとする人々の存在を認めなければならない。

『懷疑論者』の數は必しも宗教の消滅によつて増加しはしない。輕薄と無智とを意味するに過ぎない懷疑論は、たしかに宗教上の臆説と同じやうな原因からして生み出されるものである。確實な哲學的教育と心的訓練の不足からして生み出されるものである。眞に嚴正な知性には實證的なそれと思辨的なそれとの二つがある。あまりに實證的な餘りに世間的な精神は、人間社會で極端に俗化してしまふ場合、遂には墮落の毒手に脅かされる事になる。けれども宗教は到底斯うした病根の蔓延を防ぐに足らない。美的感情と藝術を愛する精神を養ふことこそ、やがて實證的精神を緩和するまざれない手段である。それなら思辨的精神の方はどうかと云ふと、そこには人類の將來が光つてゐる。しかし謂ふところの哲學的思辨は、教義信條を要求するものではなしに、むしろ教義信條の衰微からして生みだされる。われ／＼は最も高尚な問題を思索し研究するために、豫じめ教義信條のうちに既成の解答

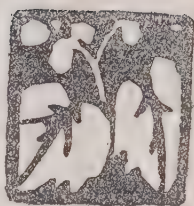
はないといふ。それなら君は唯物論者であるか。君は樂天主義者ではないといふ。それなら君は厭世主義者であるか。君は國民議場^{プレシイト}に臨んだやうな心持でたゞ簡單に諾否を答へなければならぬ』といふやうな或る數の人爲的な様式を用ひて問ひ訊さずにはゐられない讀者もあるであらう。しかし自分にとつては、さうした質問はまるで問題にならない。自分の考へることその事は、自分にとつてすら餘り重要なものではない。自分の見地その者は、必しも智的都市の中央を占めてはゐないのである。自分が人々の内界に立ち入るのと同時にまた自分の内界に立ち入つて、認知し推測しようとすることは、人間の思想の最も複雑を極めてゐる一點であり、而も最も潔よく開放せられてゐる一點である。自分は自分みづからを檢査するにしても、それは自分をたゞ一個の存在として見るのではなくて、一切の人間と共通な或物を自分のうちに認めんがための努力である。また自分は石鹼玉を吹いてそれを眺めるにしても、それは石鹼玉の表面に映つてゐる太陽のひかりを見いださんが爲めであり、石鹼玉以外へ視線を移す爲めであつて、たゞ石鹼玉そのもののみに自分の眼界を限るためではない。上に擧げたやうな質問を發する人々の思想は、つまるところ飽くまで固定的であり獨斷的であつて、何等獨自の思想を有たない自分勝手な思想の限界に甘んじてゐるだけのものに過ぎないのである。

天啓とか、直覺とか、信仰とかいふ、範疇的にして而かも排他的な思想の肯定は、常に進歩と擴大とによつて生きてゐる近代思想とは全く相容れないものである。世間には二種類の人がある。常に事象の表面に踏み留つてゐる人と、事象の奥底を探る人とがそれである。皮相的な人物と眞面目な人物

小さな星が一ふりに頂天をはなれて、まるで光りとなつた雪のつぶてのやうに降りそゞのである。吾々はさうした光景に接するとき、大空が破裂するのではないかと思つたり、もはや何ひとつとして地球上に崩れかゝる世界を支へるものがないやうに思つたり、星が悉く一度に落ちつくして、一面の夜ばかりが眞暗になつた大空に残ることになりはしまいかと思つたりする。けれどもやがて、星の旋風が吹きやんで、一瞬時の閃光が消えうせると、青く澄みきつた大空には、恒星のうららかな光がいつも同じ位置を保つて再びかゝりやき始める。たとひ下の方では隕星が雨のやうに降り亂れてゐても、恒星はその靜かな光を亂さずに、それを絶えず下界へ投げかけてゐるのである。そこで人間は常に斯うした星の召命に答へようとする。廣く限らない空に面し、偉大な星のひかりによつて夜の世界に與へられた疑問に對しつゝ、卑怯にも其の眼を閉すときでなければ、疲勞を覺えたり弱小を感じたりすることはないのである。人類を取り巻いてゐる地平線がたとひ宗教的信仰の消滅によつて擴大しようとも、また假令星のひかりが無窮の空に殖えようとも、人類は一つとして其の知力を失ふところがないであらう。眞の天才は思辨的である。たとひ如何なる環象の中に置かれようとも、彼れは何處までも其の思辨を續けるであらう。これまで彼れは其の信ずる所の如何に拘はらず思辨をつゞけてきた。これから彼れは其の疑ふところの如何に拘はらず更によく其の思辨を續けるであらう。なぜなら斯くすることこそやがて天才の本性であるからである。

われ／＼は吾々の精神の思辨力が増大して遂には其の實行力を麻痺せしむる事になりはしまいかと

を求めてはならない。思ふに實證的宗教の消滅は、形而上學的乃至科學的な自由討究に對して、刻一刻の飛躍を與へて息まないものである。そして思辨的精神は、信仰の精神に背反するのと同時に、また絶對否定の精神とも互に相背馳する。それゆゑ眞理の探求者は、時に自己の力を疑ひ、自己の無力を嘆くことがある。しかし彼れは何時までも何處までも遙かなる眞理を追求してやまない。眞の強者は如何なる場合においても、ブロスベル・メリメエのやうな失意の人となることもなければ、アンリ・ベエルのやうな厭はしい人間になることもない。天才の心には群集の愚劣なる賞讃と謂はゆる識者の輕蔑的な批判とを超越する或物が含まれてゐる。それと同じやうに、精神の活々した生産力のうちには、絶えず動いてやまない思辨力のうちには、信仰をも純粹な疑惑をも共に超越する或物が含まれてゐる。あまりに批評的な人と餘りにたやすく神を信ずる人とは、いづれも何等の力もない徒輩に過ぎない。自己の弱小を感じることはよい事である。しかしそれは折々さう感ずることがよいと云ふだけの意味でなければならぬ。人智の極限に眼を放つことは吾々にとつて大切なことである。而し吾々はどんな事があつても其の極限に視線を留めてしまふやうな振舞をしてはならない。なぜならわれわれには自己を麻痺せしめようと思へば麻痺せしめることのできる力が具はつてゐるからである。ゲーテは云ふ、『人は解すべからざるものが解しうるものになると云ふ事を固く信じなければならぬ。さうでない限り其の人は探究の營みを捨て去るであらう』と。多くの思想はやたらにわれ／＼人間の頭を出入するわれ／＼の眼界に出沒し明滅する。それにも拘はらず、いかやうな人の心のうちにも永遠の影は映つてゐるのである。秋の夜の空にはをり／＼まるで雨のやうな隕石がふり亂れる。幾百かの



生活の進展

中村長之助

現實主義とは別言すれば刹那の印象に活かふことで、刹那の印象に活かふといふは享樂の至醇なるものである。刹那的享樂を我等の眼前に躍如たらしむるは、生まれてから幼稚園時代までの小兒である。殊に三四歳に至つては、實に刹那的享樂以外の何物でもない。彼等には何等の澁滯もなく、たゞ進行曲其物があるばかりだ。そして進行曲其物であることにも氣附かないで居る。之れに氣附くときは即ち進行の停止するときである。後とを顧みるときは、最早や生命其物に活さず思索に拘泥し、生命の流がれの横途ちに避けたときである。行脚旅行をやつて、行く／＼沿道の山水を樂む限り、其旅行は絶えず進行して居るが、一度び峠の茶屋に休息すると、足が重くなる、今まで感じなかつた痛みを感じる。澁茶を啜りながら遠景を樂しむことのうちには、まだ遠き行先きや、既に經來つた旅程やを、彼れ是れ想ひめぐらす丈けの緩るみが混じつて居る。其處には最早や純粹な享樂もなければ、また生一杯に打ち込んだ生命の躍動もない。生命の真相は休息を知らず、疲勞を覺えざる進行に存する。そして進行といふ概念をも有せざる處に存する。僕の知れる一老婦は、僕の兒の七八ヶ月ばかりなりしとき、其滿面に笑みを湛ふる顔附さを見て、「まあ！一つばいにお笑ひな

恐れる必要はない。可なりに幅廣い知能は、ます／＼高い一點から世界を見下ろして、世界を其のあらがまゝに觀じ續ける。斯くあるべき人生の理解を絶えず推しすすめる。われ／＼は飽くまで一個の人間であり一個の愛國者であることを知らなければならぬ。かのフレデリック・アミエルが稍輕蔑を含ませて云つたやうに、一個の「地上の實在^{テリユリアン}」であることを知らなければならぬ。斯うした営みに従ふことは、それ自らのものとして考へるとき、事象の全體に對しては淺薄な事であるかの如く思はれるかも知れない。しかし公正な人はよい加減な道念をもつて此の営みを果たすやうな事はない。なぜなら公正な人には、此の営みの限界が明らかになつてゐるからである。それが如何なる程度まで重要な事であるかどうか分かつてゐるからである。

世上の事は一つとして無益ではない。況してそれが一個である場合には、なほさら無價値な者の存在する理由がない。小さな営みは大きな営みと同じやうに必要なものである。こゝにひとりの學者があつて、其の人の職業が人足か往來の掃除夫かであるとする。この場合、その學者はせつせと働いてゐる他の人足たちと同じやうに、そのあまり引き立たない職業のために心を専らにしないで済むであらうか。忠實に掃除の務めを負はなくて済むであらうか。いかに卑賤な務めであるにしても、しなければならぬ事を忠實に果たすことこそ第一の献身的行爲である。天才の蟻はたとひ其の棲んでゐる塚のあなたに宇宙を見るにしても、たとひ過ぎゆく一瞬時のあなたに永遠を望むにしても、一匹足らずの小蟲を塚の中へ運び入れるだけの務めを放擲するわけに行かない。

ある。

此生命の無内省無批判の究進は、獨り小兒ばかりではない。宵越しの金ねを有たぬのを誇りとする江戸っ子の生活も亦是れである。零細な金錢を蓄積して一廉の資本となすに長じた贅六とは、全く生活の仕方が異つて居る。江戸っ子は刹那に生きて往く、現在に生きて往く、衝動に生きて往く。游牧や狩獵の生活、更に溯ぼりては、殆んど孤獨の自然生活を營む人間は、矢張り是れである。漂泊又漂泊、只外界の刺激に反動するのが彼等生活の内容である。或る學者等の説くが如く、彼等には其使用すべき道具もなければ、又何等かの方便を用ゐんとするやうな廻わりくどさもない。たゞ獲るに隨て活き、活きるに隨て獲るのみで、其間に些の停止サステンスも狐疑もない。雲の浮くが如く水の流るゝが如き氣分を呼吸して居る。勿論、彼等にしても、全然自身に氣附かぬことはない。たゞ其の自身なるものは、木屑石片に對立する自身、自然物の一としての自身であつて、内省を経た自覺ではない。全く作爲を缺ける彼等に内省や自覺の在り得やうはない。彼等には生命の進行の外何物もない。是れは獨り原始人や蠻人ばかりのことではない。文明人と雖も、其日常生活の大部分は是れである。其實際に於ては特に預定とか先見とかいふほどのものはない。常例に依て常務を處理し、先づは一日を終はつたといふに過ぎぬ。贅六とても、明けても暮れても打算的といふ譯けではない。矢張り其生活の大部分は、たゞ生きて往く、たゞ遣つて往くといふに過ぎない。噂さや評判によつて、彼れを遣り是れを遣る。世間並みといふ語のうちには、色々の意味もあらうが、詰まり、自分を世間の一人と見做すことでは

さる」といふたが、此一つばいといふことが、生命の進行、生命の真相だと僕は思ふた。笑ふ刹那の内容は一つばいの笑ひの外何物もない。小兒の可愛らしさは、其一つばいに笑ひ、一つばいに歌たい一つばいに泣くところにある、眞面目といふことは、要するに此一つばいといふことである。まじめと樂しみとは斯くて一致することを發見する。隙き間のない生活には享樂がある。まじめとは隙き間のないことである。現實主義の燒點は刹那の享樂である。勿論享樂々々といふも、悲哀の經驗がない譯ではない。小兒にしても泣くこともある。苦痛を訴ふることもある。少しく成長しては、怒ることもある。悔やしがることもある。即ち快感と苦感とが錯綜して居る。而かし、小兒は甚だ淡泊で、滯滯する處がない。泣くも怒るも瞬間にして、驟雨一過の趣きがある。彼れが生命の基調は光風霽月である。彼れの泣くや、テニソンの歌へる如く、光りを求めて泣くのである、更に延び更に進まんとして泣くのである。彼れは泣きつゝ進み、進みつゝ享樂して居る。泣くも笑ふも、其事自體が生命の躍進であつて、暫らく其躍進の埒外に身を避けるといふやうな緩漫（ゆるぎ）ることは見へぬ。考へに沈みて泣き、思ひ迫まつて哀なしむといふセンチメンタルな處は見當らぬ。若し斯の如きことありとすれば、それは既に生命の滯滯である。鮮やかな瞳みが潤るんだ瞳みに變つたときである。晴れ／＼しい音聲に濁りの染み込んだときである。生命の基調に曇りの入つたときである。渾然、融然、彼れなく我れなき一如の生命から、比較内省の經驗に遷つたときである。遷つたといふても、別に判然と一線を劃して居る譯けではない。内省を中心として考へても、無内省を中心として見ても、其前後には、長い／＼ボカシが隨伴して居る。ゼームスの所謂縁暈（フリンヂ）が搖曳して居る。此ボカシは亦生命の一特質と見るべきで

である。けれども、前者に於ては、共同的空氣、相互的交渉は頗る濃厚で又緊張して居るのに、後者に於ては、是れが淡泊で緩慢で、時としては斷絶せんとする。

僕は先きに、小兒や未開人の自然並みに對し、我等文明人の世間並みといふことを指摘したが、此世間並みといふ言葉のうちには、生命の基礎となつて居る本能ネス若くは慾望の含まるゝことは無論である。小兒等の場合に於ては、是れが寧ろ個人的であつて社會的ではない。然るに、文明人の場合に於ては、是れが著るしく社會的である。即ち、村落、都市、國家といふやうな社會的勢力が浸潤して居る。歴史、傳説、因襲といふものが、彼等文明人の慾望に濃厚な色彩を賦與して居る。小兒等をして其生活を營ましめる動力は個人慾であるが、文明人の生活の動力は社會慾である。蟻の如き、蜜蜂の如き、一種の團體的生活を營むものは、其形式に於ては社會的とも言へやうが、其内容には、歴史もなく傳習もなく因襲もなく。是等の動物には團體はあつても、世の中にはない。未開人等には朦ろげながら世の中はあつても、幽微複雑を極めた文化的交渉は存しない。文化的交渉は作爲から起こつた人爲のものではあるが、一度び歴史となり傳習となるに至つては、茲に所謂世間並みの零圍氣を漾はしめる。世間並みといふ流がれを生ぜしむる。此うちに呼吸し、之れに隨つて流るゝ状態は、恰も本能といふ自然並みの流がれに隨つて流がれ行く状態である。小兒等の生活の無内省なるが如く、文明人の生活も亦殆んど無内省で、因襲盲從である。即ち一方は自然のまゝに流がれ、他方は因襲のまゝに流がれて行くのである。未開人等の好む神話や、小兒等の喜ぶお伽噺が、其れ／＼彼等の無内省生活

ないか。小兒や未開人が、自分を自然物の一つと見做すのと、相似たものではないか。即ち小兒等の自然並みに對する世間並みである。小兒等が自然と融合し、自然と呼吸を同ふするやうに、文明人も亦、社會と融合し、社會と呼吸を合わせて往く。社會の批判者を以て任じ、人生の指導者を以て任ずる、藝術家も思想家も、其日常を見ると、社會の流がれと共に流がれて居る。彼等の批判も内省も、彼等生活の全體から見れば、寧ろ小部分であらう。靈感を興へた説教家や、暗示に富んだ著作家やの日常生活を聞いたり、見たりするに及んで、大に失望せしめらるゝ例は、世間に隨分にある。而かし其失望は其説教なり著作なりを、説教者なり著作家なりの、日常生活と同一視せんとするより起るので、其説教も著作も、日常生活から見れば、ホンの一小部分に過ぎない。所謂専門家の専門も之を其日常生活と比べては、寧ろ其一部に過ぎない。彼等とても、世間並みに飢渴し、談笑し、享樂する。彼等生活の燒點は矢張り現實であり刹那である。多くは衝動や刺激や暗示やによつて生きて居る。成るがまゝに成つて往く。終始同一の主張を有するやに見へもし、又自身も斯く信ずる人も、詳しく詮議して見ると、其内容は徐々として不識の間に移動して往くのである。昨は生活の一方面を高調し、今は更に他の方面に熱中する。内外から受くる暗示や刺激やは、不識の間に、彼等を誘導し或は禁制して居る。而して其誘導も禁制も洵とに幽微ではあるが、又同時に有力である。我等の内省も批判も専門も斯る間に、其傾向を決定されつゝある。詰まり、我等の共同生活の雰圍氣のうちに生活するは、恰も小兒等の其本能によつて生活するが如きものである。勿論、我等と雖、多くは本能によつて生活し、又小兒、未開人等と雖、孤獨の生活を營むことは殆んど除外例とも見るべく、共同生活を營むのは普通

甚だ滑稽に見へるが、滑稽に見へたとて、必ずしも非眞理とは言へぬだらう。大體に於て、我等の生活が無内省なればこそ、我等は兎にも角にも遣つて往くので、ノベツニ内省ばかりして居つたなら、我等は事毎に哀傷し、事毎に憤慨し、事毎に禍ひなるかな／＼を絶叫せねばなるまい。而かも其絶叫の背後には隙き間が多くある。

斯く考へて來ると、我等は全然無内省生活の謳歌者であるやうに見られるかも知れぬが、決してさうではない。全體、我等は社會的雰圍氣のうちに生活して居る。言語、歴史、思想、傳習等、人爲的要素から成り立つた、化學的複合物を呼吸して居る。而して是等諸要素は、少くとも其起源に於ては、外界の刺激を其儘に受け、内界の衝動其儘に動くやうな、言ひ換へれば、表現のまに／＼反動するやうな、原始的生活によつては得られない。必ず一度びは、刺激なり、衝動なりを對して、直ちに起らんとする反動を抑止せねばならぬ。乃ち其處に一種の行き惱やみが生ずる。刻々に流がれ往く生命の流がれに澱どみが生ずる。我等は暫らく生命の本流から避ける必要がある。比喻を換へて言へば、我等は暫ばし峠の茶屋に休息せねばならぬ。休息して、じつと四方の景色を打ち眺めねばならぬ。つく／＼と其景色を味はねばならぬ。即ち我等はたゞづん／＼と進むばかりでなく、時には、息すんで見ると、又其進程に力を得、其進程に興味を添ふるのである。是れ表現生活に加へて更に再現生活の必要なる所以である。社會的要素は此再現生活から生じたものだ。此處にいふ再現生活とは、工夫若くは案出のことである。而して工夫には、内省も要る、批判も要る。たゞ此處に注意したきは、一度び

に内省的氣分を閃めかすことのある如く、文明人の間に起る天才は、文明人の因襲的生活に亦一種の内省的氣分を一時的に漾はしむる。兩者いづれの生活に於ても、内省は一種の電光の如く、瞬間的であり一時的である。更に又間歇的である。いづれの社會にも好人物、好々爺など言わるゝ人がある。それらの人の生活は即ち無内省生活といふて可い場合が多いのである、それらの人は、自身が如何なる状態になり、又他から如何に見らるゝやなどいふ考へは少しもないやうである。従つて、自身以外に對しても殆んど無批判で、たゞもう何かなしに、其日其時を送迎して往くのである。而かし、此無批判といふことは、比較的の言葉であつて、自身で批判的、内省的と思つても、他から見ても、無批判のことも随分多い。自身で自身の生活を内省し批判するときは、其生活の或る一點に自身の注意を集中するが、他から見ると、所謂十指十目であつて、他から見らるゝ側面が甚だ多い。而して其批判せらるゝ自己生活の多方面なることに對しては、自身は盲目である。氣附かないで居る。けれども、是れに氣附かぬことは、却て自身の幸福かも知れぬ。若し一々氣附いたなら、左顧右徇、一步も進み得ず其れこそ神經衰弱に陥り、自身の生活は破壊されて了はるかも知れぬ。廣く覺醒して居るやうで、其實際に於ては、其眼界の意外に局限せらるゝ處、却つて生活に進行ある所以であらう。大觀したなら、我等は厖少なる除外例（其除外例には神經質が多い）を外にしては、好人物である、好々爺である。他から見れば、互ひに抜け作であるが、其抜け作な處が、生活の流れに沿ふて進んで居る所以ではなからうか。小兒の場合を見ても左うである。我等から見ると、彼れは洵に隙き間だらけの生活をして居るが、彼れ自身に於ては、隙き間も何もない、引き緊まつた生活である。斯く考へると、人の生活は

互ひに相似て居る。のみならず、思辨考想の極點を経過すると、たゞ衰れ／＼と打ち眺むる、一種無罪にして天真な状態に遷つて往くやうである。斯の如きは、随分、宗教家や藝術家の経験によつて例證せられて居る。是れ内省の極、再び無内省の生活に復歸したものと云へやう。たゞ初めから無内省の小兒と、此内省を経た無内省の思想家とは、其レベルが異つて居る。同じく充實し緊張した生活でも、其質が違つて居る。其相異は即ち生活の進展を意味するのではないか。

内省を生活の燒點と考へ、其緣暈を無内省と稱するも、たゞ無内省と稱するばかりでは、甚だ物足りない。一と口に無内省とはいふものゝ、此燒點を圍むものとしては個人の經驗もあり、社會の經驗もあり、遺傳もあり、文化の歴史もあつて、是れらが悉く此燒點を輝かしむる燃料となつて居る。そして此燒點の光りは、是等燃料を照り返へして往くのである。我等は今まで小兒と大人、無内省と内省、表現と再現などの對照から、我等の生活を考へて見たのであるが、而して各對照の前者を以て緣暈とし後者を以て燒點としたのであるが、此對照を更に擴張して、無意識と有意識との對照として觀察したら、何うであらう。此擴張せられた對照を、燒點と緣暈との關係から考へたら、何うであらう。燒點は益々輝きて白熱となり、緣暈は愈々擴ろがりて、其際涯を想像することだも困難である際涯も知らぬ緣暈は、燒點に集注し來たり、白熱の燒點はまた其光りを無朽無限に流がして往くではないか。此の如き燒點と緣暈との交錯融合、是れが即ち生命の流がれである。斯く考へて見れば、前に、内省を横途といひ、無内省を本通りといふたのは、聊か變に聞えるかも知れぬ。即ち何ちらも生命

工夫生活に這入つたら、之れに全力を打ち込まねばならぬ。さなくば、其工夫生活は、極めて微温るい、まだるこしい生活となつて仕舞ふ。否、其の工風には斯る弛緩あるを許さない。即ち工風生活は工風生活として、ドシ／＼進行するものであらねばならぬ。前にいふた休息とは、何もせぬこと、生活を止めることではない。たゞレベルを換えることだ、視線を轉ずることだ。是れは獨り工風に必要なばかりではない。既に工風され、案出されて在るものを、了解するにも必要である。而して、我等の多數には、たとひ、工風案出の餘裕も力もなしとするも、之を了解し之を利用する丈の餘裕と力とは缺いてはならぬ。詰まり、我等は之を了解し之を利用せんとする内省生活に這入つては、復た常務的因襲的生活に出るのである。之を繰り返すに隨て、我等日常の無内省生活は、不識不知の間に、其レベルを高めて往くのである。内省は無内省生活の燒點と言ふても可いが、其内省は之を無内省生活の集中點と見るか、或は無内省は之を内省生活の放散と見るべきか、其は見方次第と思ふ。要は、内省は無内省によつて、無内省は内省によつて、支持せられ、又豊富にせられて往くといふ相互的交渉を逸せざるにある。之を局部的に觀察すれば、兩者いづれかに傾く個人もあらう。また同一の個人にしても、時によりて、一方を揚げて他方を抑へることもあらう。其は氣質と氣分によつて變わる。更に、光りの燒點と緣量との間に又判然とした一線の畫されないやうに、内省と無内省との間にも之を區分する境界線はない、互ひに融け込んで居る。尚ほ進んで考察を重ね、無内省の場合に於ける心の狀と、内省の場合に於ける心の狀とを比較するに、元氣横溢して一刻も澁滞しない小兒と、微を穿ち細に入りて一刻の緩るみをも見せない思想家とは、其緊張し切つた心持ちに於いて、

ふ點に至ては、遙かに彼等を凌駕して居る。工夫や創作はなくとも生活し得るが、之れなくして生活の向上は得られない。之れあるが故に、我等の無内省生活は、識らずく、或は半意識的に、更に時としては意識的に、其レベルを高めて往くのである。之れあるが故に、我等は其日其時、切言すれば刹那／＼の印象や刺激に反射作用をなしつゝ、歩一步と其進展をなし往くのである。無意識或は無内省の生活を其出發點とし、兼ねて其恒常の基礎とせる内省生活は、斯くして我等に文化を與へ、光澤を與へ、滋味を與へ、趣味を與へて居る。而して、是等兩生活相互の關係交渉の密接にして微妙なる、之を兩生活といふは適切でない、寧ろ之を同一生活の要素若くは側面といふを可とする。斯くして、我等が生一杯の緩るみなき生活は、小兒の其れではなく、大人の其れとなつて往く。レベルの一段高まつた緊張となつて往く。一局部にのみ嚙ぢり附くは、立樹を見て林を逸する類である。

其物の成立要素であるから、其處に何等の差等のないやうに思はれるかも知れぬ。而かし、是等兩要素によつて、此生命が我等の日常生活に現はれ來たる處を見ると、無意識生活は、言はゞ青空のやうなもので、否な、青空どころではない、エーテルのやうなもので、有意識の燒點たる内省生活は、言はゞ、其中に浮んで居る。星晨或は原子や元素のやうなものである。即ち、生命が我等の日常生活に現はるゝ量の上から見れば、無内省、殊に其更に擴がれる無意識の方が、他の一方より遙かに多いのである。換言すれば、生命自體としては、兩者いづれを重しとし、いづれを輕ろしとすることを得ないが、人類生活の實際から此生命を考へて見ると、社的としては、因襲や慣例やに對する無内省、個人としては、習慣や遺傳やに對する無内省、或は又斯く判然と區別し得ざる無内省の方が、是等から成立する社會的空氣を内省し批判する、有意識にして且つ内省的な生活よりは、遙かに其分量に於て優さつて居る。のみならず、人類生活の基礎としても、此方が必須である。必要止むを得ない。生活の出發點にして又一刻も之を缺くことを得ない。我等の撰擇の及ばぬものである。之れに反し、内省生活は、我等の撰擇を要す、意力と理性の集中を要する。斯の如き集中は人類生活の日常より見れば、たゞ小部分に過ぎない。以上の理由で、一を人生の大道といひ、他を其横途といふのだ。更に思ふに、横途は則ち横途に相違ないが、人間は之れあればこそ、文化を有するのである。其生活の向上をなすことを得るのである。生活のレベルを高め往くのである。されば、内省生活は必須でないにしても、重要なものと言はねばならぬ。學問にせよ藝術にせよ、人間生活に必須ではないが、極めて重要なものである。哲學者や藝術家は、此必須といふ點に於ては、商人や百姓に及ばぬが、重要とい

近代歌人の第一人なる香川景樹が、其弟子達にさとした言葉を押詰めて言へば、「歌はことなるものにあらざ、調ぶるものなり」との一句に盡さる。彼れはこの調べの意味を更にこう説いてゐる。「調といふは、せわしき物には世話しきが、調のととのへるなり。ゆるきものにはゆるきが調のととのへるなり。よりて物につき善き調に定まれる格なし。殊に眞心をさへ詠み出れば、ひとりかなひ行く事に侍るなり。調のあはぬは、ことわり叶ひても歌には侍らぬなり。」と言ひ、「詞は、その延約によりて語勢かはるものなり。語勢は即ち調なり。調は義理を待たずして、誠實の聲あらはるゝものなり。よりて調のまに／＼、同じ詞の異義を生ずる多し。調は義理を含みて、義理の上に位するものなり。歌は調にあることを知りて、さて後義理を伺ふべし。義理の聞えて後、調あるものと、あやまつこと多し、」といひ、更に彼れは此調を以て、天地を貫ぬく悠久なる生命の脈膊であり、鼓動であると主張する。詞は一時的にして變遷極まりなく、文句は古今に隨ひ、都鄙に依り、國情に依りて、千差萬別であるが、「此調のみは古今を貫徹するの具にて、いさゝかも違はざるなり。只大和こと葉のみならず、からも、え、ども、變らぬものなり。されば此調といふものを捨て、歌はなき事に侍り。」と言ひ、「調ととのへば千歳をわたり、調なければ其世に知る人無之候」と言つて、調を擱むことを以て歌人最上の理想としてゐる。そんなら此調を擱むにはどうするか。

斯くて彼れは此調を擱む道はたゞ誠にあることを提言する。彼れの説く所の誠或は眞心と稱するも



詩と宗教の中心

佐藤 清

希臘の宗教はホーマーの叙事詩に表はされ、古代印度の萬有神教はヴェーダの讃詩に、希伯來の主觀的宗教は舊約の多くの豫言者及び詩篇の中に表はされてゐる。古代の人々の醇朴なる心情には、詩と宗教とは、有機的な精神生活そのものゝ記號であつたやうに思はれる。斯く一有機體の如く思はれた詩と宗教の融合は、漸次啓蒙思想の勃興と共に破られ、遂に、詩と宗教は再び古代のなつかしい搖籃に歸ることが出来なくなつた。私は古き宗教に盛られてゐる詩的要素に對する幻滅のために、宗教そのものゝ生命さへ失はれるに至つた現代に生れたことを悲みはしない。寧ろ此幻滅の灰燼と墳墓の中から、更に新しい生命と記號の有機體を創造せんとする憧憬に生き得ることを喜びとしないわけにはいかぬ。我等の思想の轉向は常に此近代人心の底に流れてゐる底力のある新しい精神の誕生に對する、豫言的な渴欲の心に刺戟されてゐることを自覺せずにはゐられない。

の價值がある」(It has a value which is polemical rather than poetical.)と云ふ言葉を借りて結論とした小論文であつた。ニーボルト氏の批評が果して正鵠を得てゐるか否やは茲で論ずる範圍を越えてゐる。茲に私がニーボルト氏を考へて見たいと思ふのは、彼れの詩そのものに對する考である。彼れは詩の本質を斯く説いてゐる。

人間の精神は二種の活動がある。一は審美的或は直覺的活動で、人は是に依つて知覺を得る。一は知的或は科學的活動で、人は是に依つて概念或は判斷を得る。詩は我々の直覺を人間の言葉で言ひ表はした者である。散文は我々の判斷の表現である。故に詩は起源に於ては極めて簡單な事である。我々は皆不斷に知覺を擱みつゝある。即ち、意識を創造しつゝある。そして我々が此活動を言葉で表はす時には、何時でも、我々は文字通りの意味で詩を作りつゝあるのである。しかし我々は是を詩といふ名で誇稱しない。我々はもつと顯著な創造のためにあの稱號を取つておく。善い詩、眞實の意味の詩とは、意識の、珍らしい、むづかしい、複雑せる状態、その中に最高の思想が單純な知覺と渾融して、兩つながら合して一の新しい情緒となる、其直覺のいみじき表現である。そして此世界に就ての詩人の意識が、更に完全な世界に對する人の一般の憧憬の色合を帯びる時には、一切の情緒の中で、最高の感情が起る。といふのは、詩人の創造せる生が、我々の生きなくてはならぬ生に最も近い時に、永遠の對比が最も目に立ち最も峻烈を極めるからである。……詩は形式なしに存することは出来ぬ。人は形なきものを創造することが不可能であるばかりでなく、同様に自然の法則に依て、いかなる藝術に於ても、其直覺に全く適合せる形式を用ゐずに、其直覺を表はすことは出来ぬ。粗野な、或は微

のは何であるか。彼れはこう説いてゐる。「己れ孝子なりと思へる人は、極めて不孝子なり。己れ不忠なりと思へる人に、多く忠臣あり。さて眞心といふは、たとへば心慎める時は、慎める調によまるるが眞心。戯れたる時は戯れたるが眞心。隠せる時は隠すが眞心。あらはなる時は顯れたるが眞心にと、千條萬端さらに一定するものにあらず。此眞心だにたがはずば、調は是に従ひて、いさゝかも差ふべからず」と言つて、更に狹義の歌といふ道から一步踏み出して、此「誠は萬道の基本なり。こゝにはづれては、歌のといのはぬばかりにあらず、恐るべし。」と、深く人生の秘義に觸れんとする所まで押進めてゐる。

景樹が調と言つてゐるものは、英語のリズム Rhythm といふ語と殆ど同一内容を指してゐるものであることは疑ふを要しない。彼れがリズムを以て歌の根本生命と主張し、やがては生そのものの基調であるとまで考へるやうな傾向に至つたこと、更にこのリズムを以て一切の國語の種々相グワァイデの中に存する統一と考へ、此リズムを掴む道はたゞ我々の誠にあると説いた點は、確かに彼れの達見を示すものと言はなくてはならぬ。

—
—
—

最近以太利に起つた未來派の詩に對する批評の中に、私の興味をひいたのは、ヘンリ・ニコール氏が、リズムを有するを以て生命とすべき筈の詩に於て、未來派の詩が全く其リズムを缺いてゐる點を指摘し、更にマリネイ氏の「我々の見解は全然藝術的なのではない、それは詩的よりも論争的

以上述べた如く、詩の内容形式を包括すべき一切のものは、實に生の本質的要素なる生の律動そのものであることが示された。慣習と傳説の塵芥の中に埋もれてゐる神學を根據として、生命の律動的活動には全く風馬牛相關せざる、現代の宗教的アートモスフィアを打破して、眞に自由に活躍せる精神的共鳴にのみ生さんことを渴欲して已まざる我等にとりては、この宇宙の内外、及び我々の肉體精神の兩面に奔流して極まりなき生命の律動を掴み、其旋律に隨つて歌ひ、思ひ、語り、行なふことの外に、所謂宗教なるものゝ存在を認める餘裕を持たぬ。狹義の詩にあらはれる生命の旋律が情緒的であるならば、わが宗教にあらはれる生命の旋律は、我々の知情意、即ち、全人的のものと云うてよい。

我々の血液の循環は旋律的である。我々に生命があるからである。大洋の波浪の回轉は旋律的である。大方大洋の生命があるからであらう。樹木や動物の生滅は旋律的である。彼等に生命があるからである。斯く宇宙の一切の活動が旋律的であるが如くに、我々の精神活動も亦旋律的である。我々の精神生活の日月である所の意識と無意識は旋律的活動である。興奮と沈靜の感も旋律的活動である。肉欲の誘惑的な刺戟感と、聖愛の恍惚的な超越感も旋律的活動である。外から來る一切の刺戟も、内から湧く一切の衝動も旋律的活動である。我々はたゞ此一切の旋律的活動に共鳴し得る時が我々の宗教を経験する時である。此旋律的活動を掴みそこなつた時、我々は罪を犯したと言はれ、墮落したと感ずるのである。しかも我等は聰明と眞心を缺くこと屢であるが故に、常にこの千態萬狀を極める旋律を掴みそこなふのである。

宇宙に活躍する物質精神兩面にあらはれる生命の旋律を掴みそこなふのは、聰明と眞心を缺くため

弱な知覺は、文體の努力に依つて美くすることは出來ぬ。立派な鮮かな知覺は、形式はどんなに單純であり或は解りにくくても、それが又立派であり鮮かなもので表現を爲すであらう。詩の言葉は律語^{レイゴ}體でもよいし、それでもなくともよいが、常に旋律的^{リズムカル}でなくてはならぬ。といふのは、生の本質的運動が旋律的であり、情緒は最も生き生きしてゐる時には、最も旋律的であるからである。

ニューボルト氏が「生の本質的運動は旋律的である」と言つてゐるのを、景樹が「此調のみは古今を貫徹するの具」であると言つてゐるのは、東西符節を合せるが如き共鳴の快さではないか。ニューボルト氏は流石に現代人の敏感を以て、詩的直觀の内容を鮮かに示して、詩人の意識が「更に完全な世界に對する 人の一般の憧憬の色合を帯びる」境涯にまで説き及ぼしてゐるが、是は景樹が、眞心を説いて、「只誠をたつる書を見るがよく候。儒神佛いづれなりとも、誠實だに立候へば、ちのづから筋通りて、姿もうるはしく、歌知らず／＼出來くるなり。」と言ひ、「誠はうるはしく上品なるものなり。誠を述べんと思はゞ、上品によむ事なり。」と言つてゐる所と、極めて近いものと言はなくてはならぬ。且つ景樹が「秋風にたゞよふ雲のたえまより」の歌を激稱して、「秋風の歌も最上の調なるが故に最上の感あり。其本は最上の感より出づるが故に、最上の調あるなり。最上の感とは唯端的の感なり。」と言つてゐるのはニューボルト氏が「最高の思想が單純な知覺と渾融して、兩つながら合して一の新しい情緒となる、其直覺のいみじき表現」と言つてゐる心持と相去る遠しいといふことは出來ぬ。

れてゐるからである。一つのテンペラメントに囚はれることは、やがて一切の生命の旋律との共鳴を妨げる所以である。耶蘇の偉大なる個性は、實に此囚はれの網を脱却して、自在なる旋律的活動をそのれに経験したにある。さればパウロは彼れを讚美して、「是故に神は甚しく彼れを崇めて、もろくの名にまさる名を與へたまへり」と言うたのである。

五

斯く詩と宗教の中心は、生の本質なるリズムを掴まんとする努力にあることが明かになつたと思ふ最も敏感なる情緒と直覺は最も鋭敏に生命の律動を感じる。是を感じること愈強く、愈鋭きもの、是を詩人といふのである。この情緒及び直覺に觸れたる生命の律動が、更に強健なる活動を加へて、意志を動かし、全人的に生命の律動を感じるものがあれば、我々は是れを宗教家といふのである。けれども眞實なる詩人は遂に其情緒的直覺的活動から進んで、全人的とならずにはゐられないし、又眞の宗教家は全人的活動を爲すものであるから、情緒的にも直覺的にも生命の律動を感じずにはゐられぬ。しかも彼れの意志を動かすものはその情緒と直覺であるから、結局、我々は詩と宗教の中心内容となるべきものは、直覺的情緒的に掴まれる生命の旋律的活動であると斷言して差支ないと思ふ。斯くて詩的情樣及び詩的直觀は、人間全體としての旋律的活動の基調であると思ふ。是を基調として、限りなき變化のオクターヴを呼び起す旋律的活動こそは、我々の渴欲して已まぬ「生命と記號の新き有機體」の實現であるのだ。

ではあるが、此聰明と眞心を缺くといふ事は、多くは我々のテンペラメントといふ、極めて我々には見そこね易いものとなつてあらはれる。別の言葉で言へば、テンペラメントは我々の野性であり、持つて生れた生地きぢのまゝの自我である。自我の要求といふことがこの意味での自我の要求であるならば、そういう自我の要求によつては、前述の如き精神物質二面にあらはれる生命の旋律を自由に攔むことは出来ぬ。随つてそういう自我の要求は極めて無意義のものと墮する。この生命の旋律を確實に攔むためには、どうしても此テンペラメントを打破しなくてはならぬ。生地きぢのまゝの自我を打破しなくてはならぬ。そして自我といふ黄金からがねの中に隠れてゐる所の、純金に比ぶべき眞心、即ち個性をあかるみに出さなくてはならぬ。地に蒔ける麥の粗穀に比ぶべき自我を腐らして、麥それ自身に比ぶべき個性を伸ばさなくてはならぬ。我々は我々の個性の基調に依つて宇宙にひそめる他の一切の旋律のオクターヴを呼び起さなくてはならぬ。個性に依らなくては一切の生命の旋律的活動を攔むことは出来ぬ。パウロは、耶穌を批評して「彼れは神の體からだにて居りしかども、自から其神と匹ひとしく在る所のことを棄難しよべきことと思はず、反て己れを虚むなうし、僕の貌かたちを取りて人の如くなれり。」と言つてゐるが、是は耶穌のテンペラメント、或は彼れの自我が全く打破されてたゞ彼れの個性のみが働らいてゐたがために、彼れの精神には一切の生命の旋律が涼々切々の音となつて共鳴したことを説明する言葉であると言はなければならぬ。兎角喜びに充てるものは悲めるものと同感することは出来ぬ。彼れは其樂天性に囚はれてゐるからである。悲めるものは喜ぶものと同情することは出来ぬ。彼れは其悲哀性に囚はれてゐるからである。高きは低きに、低きは高きに共鳴することが出来ぬ。彼等は皆その高低に囚は



時代感想

野村 隈 畔

時は流れる、從つて人も流れる。流れは生命本來の過程には相違ないが、流れそのものゝ氣分を味ふことは必ずしも人間の目的でもなければ、亦人間生活の全體でもない。成る程流れは凡てのものを新化し美化し創化する。けれども吾々の人間生活においては、唯それのみで決して眞の意味を構成しない。吾々の生活には單に流れの氣分の外に重大な意味がある。

吾々が物象を研究して二つの相を発見する。一つは物の變化する方面で、古人はこれを現象界と名けて眞の實在性を認めなかつた。今一つは物の變化しない方面で物の眞實性即ち本體はこゝにあると普通考へられて居る。この物象の二相の認識は、吾々の認識生活の大部分を勞作せしめたものであるが、物象のみならず吾々の意識界においても亦この二相が具備されて居ると思ふ。而も物象にありては二相の孰れに物の實在性を置くかといふことは、吾々の認識能力の如何に依るけれども、吾々の内面生活即ち意識界においてはそうは行かない。近來の心理學者やベルグソンなどは『意識は多様性に

終りに一言したい。かく我々は詩は生の本質なる旋律を掴むべきものと考へた。此意味に於て我々は詩の模倣すべからざるものであることを提唱する。旋律は生そのものである。生は獨創であつて、模倣され得べきものではない。詩の生命は又詞の旋律にある。詞の旋律は詞其者を作り出した複雑極まりなき特殊なる民族的生命を背景として、しかも其上にそれを用ゐる獨創的な個性を前景とする、詞は模倣し得るかも知れぬ。詞の間にひそむ神秘不可思議の旋律に至つては獨創に依るより外に道はない。

宗教に於ても同様である。教祖に對する模倣は多く既成宗教の固定墮落となつたことは事新しく言ふまでもない。教祖に對する單なる模倣は無意義である。教祖の精神に流動せる旋律、或はそれを通じて生命そのものゝ旋律を掴む獨創的な個性の確立伸長を以て宗教はあり得ない。

自我を打破して確立された個性の伸長こそ、詩と宗教の中心なる生命の旋律を掴み得る唯一の道である。(十月四日)

前號正誤「創造の藝術」四十八頁三行目、引力等の言信は到る處に。同十四行目、一切の生物及び人物は一の究竟の生と智慧に、根を下ろさなくてはならぬ

ことの可能なのは、實にこの統覺によるのである。

このやうに統覺は吾々の人格を維持する上において最も大切なものである。だから流れの氣分を變化に従つて刹那々々に味ひ行くことは、知識や利害の永い習慣によつて生氣なく色褪めて無味乾燥になつた皮相な生活を脱却する方便として有効ではあるが、人格の向上生活價値の深化といふ上から見ると大した意味はない。そはむしろ吾々の生活に於ける統制力を稀薄にし、深い意味をなしてゐる實在性をだん／＼と表層の方に輕浮せしめ、永恒の現在性はますます分割されて瞬間毎に變つて行く刹那的現在性にまで落ちて行くものである。そこには獨立自存の自己は形を匿くし、人格は透き通るやうな中秋の空に微かに流れてゐる浮雲のやうに虚空の中に溶けて消えて了ふものである。けれども吾々の生活吾々の眞に望み努力して居る生活は、かくも輕跳な無意味なものではない。吾々は刻々の氣分といふよりもむしろ自己の擴大と充實と深化とを欲する。統覺はこの要求を實現するに缺くべからざるものである。若し統覺を失つたならば吾々の生活は認識においても活動においても共にその根柢を破壊されるであらう。



吾々は吾々の呼吸してゐる思想界及び實生活を見るときに、いつもこの統覺を缺いて居る所から生じて來る弊害を認めないわけには行かない。即ち現在の思想界に於る研究や思索の極めて上滑りな唯徒らに時流を追ふて漂泊する輕跳浮薄な態度と、實生活に於ける何等の定見なく固執なく刻々變化す

於ける統一性である』と言ふにしても、それは唯學者としての主觀的研究の態度であつて、吾々の生活の實際的理解ではない。吾々の實際生活にあつては、この二相は同一程度でもなければ、同一價值でもない、そして實際意識の統一性といふは變化或は多樣の統一言ひ換へれば變化を通じての統一ではなくて、變化或は多樣を超越した統一、更に言ひ易へれば變化や多樣を支配する自由統一即ち意識的統一である。これが從來『統一覺』^{アッバーセション}と言はれ人格の根柢と呼ばれたところのものである。

この人格の基調を形造る統一覺は普通人の考へるやうに實在性^{リアリティ}を缺いた陰影的形象ではない。尤も心理學的に言つたならば、それは他の變化流轉する様相と同じく意識の一現象に過ぎないであらう。けれども統一覺は意識の均質的な平面に彩られた虹影でもなく、又は『一般觀念』のやうなものと類を同ふする抽象意識でもない。それはむしろ意識の立體性を形成するもので、色彩において強烈の度において他の意識様相と異なるのみならず、それ自身に價值權威を有する點において全く獨立な存在である。それは時々刻々の氣分を超越し、意識の流れの方向を決定せんとする根本動力である。だから統一覺は無内容で無實在性であるやうな抽象的觀念ではなく、あらゆる意識流の動力たる點において最も根原的な實在である。意識變化のあらゆる様相と密接に關聯して而もそれを指導し決定する統制力である。一方に流れにおける變化を無限に受け入れると同時に、他方にはそれを統一してそこに内容の擴大と意味の深化とを將成する創造力である。この意味において統一覺は吾々の最も原本的なものとして現實的な意識であると共に、眞の變化と永遠的現在と普遍的價值とを有する衝動力である。吾々が限りなき變化と限りなき色彩を有する物象との間に在つて、而も儼然として自己を認識肯定し自己の權威を高調する

朝晩變る流行説を高唱して居るものが多いのは眞面目なべき思想界のために遺憾だと思ふ。

要求の不徹底は思想界のあらゆる方面に研究の不徹底を持ち來すものである。凡て流行を追ふものは研究心も内面要求もなくて、たゞ一時、時代の變化に順應するに過ぎない。そこから何等新しい活力も血肉も生じて來ないのは明かな事實である。かくしてわが思想界は金泊をつけたジエームスやオイケンやトルストイやベルグソンなどの華やかな行列のうねりあるく忙はしい巷となつたのである。吾々はこの行列を汗を握つて見送つたが、行列の冷たい時間と共に過ぎ去つた後は、何事も吾々の印象に残るものはなくたゞ汗の冷えて來る厭やな氣分がするばかりである。そのみならず吾々は思ふ存分かの金泊づきな行列の威光に蹂躪されたやうな侮辱の感じさへするのである。この様子を見てとつた吾々の同志の内には、彼等について新奇まきなほしの研究をやらうと眞面目な提議をするものさへあつた。けれども彼等は寂寞と空虚とを残して我が思想界を過ぎ去つて了つた。タゴアも全く姿をかき消して了つた。そして思想界の廣辻には今は秋風が吹き荒さんで枯れ尾花の上を渡つてゐる。

このやうな有様でわが思想界は何等偉大なる眞理と新生命を残すことなく、たゞ刻々に變つて行く極めて上つ面の氣分を而も人爲的に微細精緻な表現をなすに全力を傾倒したのである。そこに眞面目な徹底的研究と渾身の血を沸きたゞすやうな全生命力の醗酵とが起らなかつたのは何も不思議はないと思ふ。事實わが思想界は泰西のいろ／＼な哲學説、藝術觀或は科學などを取入れたが、其の内の一つを充分アップレシエトしたか何うかは疑問である。要するにわが思想界の變遷は内面力の充溢した

る氣分を求めて分割また分割、流轉また流轉と支離滅裂に陷没して行く傾向との、孰れも深刻な統覺を放散して了つた結果に外ならないことを信ぜずには居られない。

『吾々が眞實な生活に活きむとせば飽くまで眞の自己に徹底し、眞の自己要求を絶対に主張しなければならぬ』といふ叫び聲は僅かに二三年前に聞いたまた耳新しい一般要求であつた。この一般要求は非常な勢をもつてわが思想界を一時振盪せしめた。けれども今となつてはその要求と眞摯な態度とは、何處へか吹き飛ばされて了つた。眞の自己はそう容易に徹底し得らるゝものであらうか、そう容易に實現し顯在化せらるゝものであらうか。一般要求は兎に角是なりとしても、その根柢に果して眞自己の何ものなるかを眞面目に研究し捕捉せむとする不拔の勇氣があつたであらうか。若し微つたとすればかの要求は一時の氣分的興奮に過ぎなかつた。狭い谷間で反響する山びこのやうな倏忽的雷同的叫喚に過ぎなかつた。吾々の内面的實在の深孔から喇叭のやうに高く吹かれた永遠の聲ではなかつたのである。

これはたゞ一例に過ぎないが、實際眞面目に自己を研究し自己を主張したものを聞かなかつた。この外種々の新しい要求が聲高く叫ばれたけれども、皆忽ちにして忘却されて了ふのである。徒らに變化を追ひ新奇を求むるに急であつて、それを深く靜かに懷抱し暖めて新生命を孵化しやうとする落ちついた所はなかつた。たゞ人々に先んじて叫ぶことのみを考へて、人に後れて堅實な實現的歩行をなすものは頗る罕であつた。これは急流のやうに多忙な生活の影響にもよるが、中には生活の代を得るために毎夜變つた流行唄を謠ひ歩つて青年男女の感興を惹く歌賣りのやうに、思想界の廣い四つ辻に

むしろ内面的必然的精神力の自由發現と見るべきであらう。これに反してわが思想界にあつては反動でもなければ、または内面的要求でもなかつた。それはたゞ泰西思想の模倣的波瀾に過ぎなかつた。自製のものでなく舶來品であるから、一寸吾々の好奇心的感興を惹き起すが、それは一時的で決して永續はしない。客觀的なものとして吾々の認識に努力と思索とを要求するが、それは深く吾々の靈生活即ち主觀的内面性と直接に眞劍の交渉を有するものでなかつた。だからその思索といひ研究といひ、極めて不眞面目な輕跳なものであつたのは何も不思議はないし、形而上學が初めに熱狂的歡迎を受けて而も忽ちに倦まれ見捨てらるゝに至つた理由も見易いことと思ふ。

なぜわが思想界に形而上學が盛んに歡迎されたのが反動でないかといふに、もと／＼反動の起るべき動力言ひ換へれば、吾々の靈生活を淺化し俗化し壓迫する科學がなかつたからである。科學必ずしも吾々の靈生活と相容れないものではないが、功利的實生活と永く交渉を保つた結果だん／＼靈生活の要求を顧みなくなつて來る。それが爲めに靈的要求が科學の要求を突破して形而上學を呼び起す。この間の烈しい軋轢葛藤は殆んどわが思想界に見られない。随つて内面的要求もないといふことになる。即ち内面的要求の眞劍な自覺がない。内面的靈的要求は偉大なる煩悶と爭鬭と悲痛と悲哀との中から醗酵して來るものである。而してかゝる中から迫出された眞の要求は決して中ぶらりんな生なま温ぬるい態度を許さない。飽くまで徹底的に慕進しなければ止まない。その要求の由つて以て現實となり生活となるべき血と肉とを創造しなければ止まない、然るにわが思想界にこの間の過程が全く缺けてゐるのは、内的要求の自覺がなく唯一時の氣分に任せて上滑べりな研究遊戲をやつて居るがためであ

能動的自發的變化ではなくて、浅い岸邊に絶え間なく動いてゐる漣のやうな、滔然たる泰西思潮の遠く一波動に過ぎなく。



わが思想界に科學のないのは今更言ふまでもないが、形而上學だつて決してあうはしない。だから科學なく形而上學なく、結局杜撰雜薄な常識の羅列蒐集に過ぎない。形而上學なくして眞に科學を理解し得ないと同じく、科學なくしては亦眞に形而上學を理解し同化すると出来ない。わが思想界が偉大な形而上學を創造し或は同化し得ないのは、つまりその根柢となるべき科學がないからだと思ふ。

形而上學は新しい意味において、言ひ換へれば現代の行き詰つた生活に意義ある必然的轉換を内部より迫出するものとして、支離滅裂な斷片的生活から吾々を救ひ出して永恒持續の生命の世界に至らしむるものとして熱狂的歡迎を浴びせかけられた。けれどもこの歡迎は極めて短かつた。それは内面的必然的要求ではなかつた。今においては形而上學と云へば甚だしい厭氣と輕蔑との目標となつてゐる有様である。このやうに其生活に對する信念をかき研究における眞摯即ち眞摯敬虔な態度がなくして、果して意義生命のある新生活の創建が出来るであらうか。

これは何も形而上學がわるいのではない、わが思想界に根柢がないからである。泰西においてはオイケンやベルグソン哲學は時代に對する反動として尊敬されて居るが、それは一種の見方であつて反動であるから大した根柢がないとはいひない。その反動は單に自然的物理法則の顯現といふよりも、

になる。思想が絶えず動搖して居つて生活のみ根柢が堅固であることはない。殊に現在のやうにまだ思想の根柢を掴み得ない時には實生活は動搖し勝ちであるが、氣分を本位とする傾向が盛んである内は生活の動搖を免れない。

氣分を本位とし生活の動搖することを主義として標榜するものは別であるが、そうでない限り吾々は堅實な根柢ある生活、唯一の意義ある力によつて統制された全體獨立な生活を欲する。自己が何者にも誘惑されず分割されない價值、持續の生活を欲する。一言にしていへば統覺的生活は吾々の最も意義ある生活である。然るに性的狀態や生理關係によつて絶えず變化する氣分は、吾々の統覺を *men brechen* する。永恒的持續的な自己意識を、心理狀態や生理狀態のその如く瞬間的斷續に分割する。そこに全く價值生活の根柢が瓦解される。吾々が生活の動搖といふのは、單なる思想の變化よりもむしろ統覺の分裂に起因する。

思想の變化は必ずしも生活の動搖を意味しない。思想の變化する如く生活も亦變化する。そこに進歩があり創造があり擴大があり深化がある。けれども統覺の分割は直ちに自己の分割であり、自己の分割は亦直ちに生活の瓦解である。統覺には絶えず創造シエツツングと深化フエルティフングとがあつて、變化と現在との意味はそこにあるのであるが、分裂されて了ふときは最早や眞の變化はなくなる。従つて擴大も充實も無意味となる。而して權威ある道徳はこの統覺から生じて来る。吾々の生活に道徳がないといふのは、つまりこの統覺が分裂されてゐるからである。

だから生活を批判するには先づこの統覺の那邊にあるかを見なければならぬ。例へば貞操問題にし

る。

しかし吾々はわが思想界が先きに有頂天になつて渴望した形而上學にあき／＼して、今や翻然として悔悟したものゝやうに穩健著實な態度で科學に向ひつゝあること、或は向はむとしつゝあることに對しては何も反對はない。それは退歩でもなければ脱線でもない。むしろ自己を自覺してその行くべき正當な道に返つたのである。わが思想界がオイケンやベルグソンを丸呑みにして昂ぎ廻つたのは少し早過ぎたと思ふ。吾々は猶科學を要する。吾々の生活に根柢がない。恰も浮き草のやうに水面に浮んで左右に動搖してゐる。これを固むるに科學をもつてしなければならぬ。而して後形而上學によつて生命を吹き込まなければならぬ。形而上學に飽きたからといつて直ちに放擲することは眞摯なやり方でないと思ふ。科學には科學の職分があり、形而上學には形而上學の職分がある。吾々の生活は決して科學のみで完成するものでなく、形而上學によつてのみ支持されるものでない。

之れを要するに吾々には科學的素養が足りない。形而上學に賛成するにしても或は反對するにしても、凡て根柢が薄弱であるのはこゝに原因すると思ふ。吾々には形而上學が必要であると同一程度に科學も必要である。

○

思想界に於ける要求や研究の不徹底な態度は實生活においても見ることが出来る。由來思想と生活とは密接不可離の關係にあるものであるから、思想の不徹底は必然的に生活の不徹底を來たすこと

觀的形象にまで關係して居るからである。このやうな廣い關係によつて道德を規定することは全く不可能に屬するであらう。

要するに人間の統覺廣くいへば人生哲學を無視して、全く科學や傳説のみによつて生活の意義や道德を規定することは危険でもあり、また馬鹿げてもゐる。戀愛なども單に氣分本位のものならばそこに道德上の意義も神聖な權威も存しない。それが吾々の統覺を根柢として初めて絶對的道德性や宗教的莊嚴性が發生して來るのである。(十月八日稿)

ても一人の文士が妻を離婚すれば、直ちに騒ぎ立てゝ是非の論を繁くするが如きは時代一般にこの道德的統覺の薄弱であることを證明するものである。この場合吾々の慎重に吟味すべきは離婚そのものゝ是非如何の問題よりも、當事者その人の統覺の健全なりや否やの問題であると思ふ。徒らに生理狀態や社會關係や或は傳說道徳などからその是非を云々するが如きは、誠に根柢が薄弱だと信じられる。離婚の是非については生理研究の證明が最も有効であるかの如く世間で論じてゐるが、かゝる議論はあまりに科學に眩惑した愚論だと思ふ。肉體と肉體との離散といふよりも人格と人格との乖離といふが如き嚴格な問題を取扱ふに、何も異性間の生理的影響を引き出す必要がない。例へその間にいかなる關係があるにしてもそれは生物一般の生理法則であつて、人間道德の唯一の根據とするに足らない。

若しギンナのワルド・スタインが發見したやうな雌雄間の交尾的生理關係を基ひとして吾々の道德を規定するならば、恐らく道德の成立は困難といふよりも寧ろ不可能となるであらう。生物の交尾中においては雌雄相互の生理關係が成立するのみならず、もつと神秘的關係、それは感覺と精神と肉體との融合關係ともいふべき複雑なものが現出する。シエクスピヤーが『ヴェニス商人』の中に述べたやうな生理關係、即ち緬羊の交尾中雌の眼の前に木皮を剥ぎとつた白味の棒を差し出すときはその印象によつて白斑しろふちの兒羊が産まれるといふ關係が科學的に證明が出来るならば、そしてこの關係が貞操問題や親子の問題を解決する唯一の鑰鍵であるとするならば、それは即ち道德の破壊を意味することになるであらう。なぜならば道德は吾々の内面的意識的創造といふよりも、それは吾々の現在における生埋及び意識狀態に依繫して居るのみならず、非人格的な感覺、更に感覺の質料となつた限りなき客

育家たるの譏を免れ得ない。「醜業とは何ぞや」此實に我等の解説せざるべからざる根本問題である。
「醜業」といふことについて「婦人運動の將來」の著者スワンウィック女史は面白い定義を下してを
る。「即ち醜業とは他の目的に對して與へらるべき或物を單に物質上の利益のために譲渡することを意味
するのである。其故虚偽を書いて文を賣る人があれば其人は自己のペンを汚辱したものといへる。
自分が信實なりと確信する所を書いて金を得てもそれはペンの汚辱即ち醜業ではない。其と同じく或
婦人が自分の愛してゐない男に金を受けた報酬として身を任せるならばそれは疑もなく醜業である。
併し彼女が自分の愛する男から金を受けたことそれは醜業といはれない」。女史の此定義に由つても明
らかなる如く醜業は一面に於て自己の本心に裏切りつゝ貞操を破らしめるといふ倫理道德上の問題
を含み他面に於て自己の肉を賣る代償として金錢其他の物質上の利益を求むるといふ經濟上の問題を
包含して居る。自分がかの單に宗教道德の見地よりのみして或は廢娼運動を絶叫し又は醜業婦撲滅を
標榜せる世の所謂宗教教育家なる人達に對して慊焉たる所以は實に茲に存するのである。かつてチ
ヤールス、サロリア氏が世の空想的な平和主義者を難じて『彼等は先づ武裝解除。それから變革とい
ふが常識と健全な理想は此に答えて曰ふ。『そんな政策は結局自殺的だ。信念は事業に先行しなければ
ならない。世界をして先づ變革せしめよ。然らば武裝解除が必ず此れ伴ふに相違ない』と言つた。自分
は文學者哲學者が自己の思想上の一主張として此醜業問題を純精神的に取扱ふ態度を難じ度くはな
い。併し苟も人間の救済を以つて自己の天職とせる宗教教育家にして尙且つ先づ廢娼。それから變
革とかの空想的な平和主義者の口吻を真似るならば自分は彼等に對してそんな政策は結局自殺的だ。

我等の求むる女性

— 此一篇を亡友眞崎兄の靈前に捧ぐ —

井 口 孝 親

凡そ男が女に對する三つの態度を想像することが出来る。其一は物として其二は動物として其三は人間としてである。自分は今此三者に對してそれ／＼簡單な批評を加へて見やうと思ふ。

一

男が女を一個の無生命な物として取扱ふ場合は此を下等な職人、勞働者等が其娼妓醜業婦に對する態度に於て見出すことができる。飽くことを知らざる彼等の獸慾の對象として購はれたる女は彼等に取つて正に無生命な一個の器具である。人間としての自覺絶無なる彼等は素より憐むべき人格としての娼妓醜業婦を見やうとはしない。一個の人格としては娼妓醜業婦を觀察するとき我等は愕然として尤も重大なる一つの社會問題に逢着する。而して此は或一派の宗教家教育家の考へてゐるほどさう簡單な問題ではない。高き信仰の力を以て強き道德の權威を以て彼等の墮落を自省せしめその精神的覺醒を促すのは素より一つの解結方法に相違ない。併し單に此等の純精神的手段を以てのみ此重大なる社會問題が根本的に解結せられると考へてゐるならば彼等は依然として御芽出度い世の所謂宗教家教

に此を求むる事が出来る。動物といふ語は以上の如き意味で用ゐられる時心から身慄ひする位厭な文字である。併し我等が我等の周圍に存在せる多くの夫婦關係なる者を見るに及んで此嫌惡すべき文學の却つて甚だ妥當なるを覺えるのである。女を動物として取扱ふ。上品な語法を用ふれば女を一個の人間として遇しない。即ち女性に其人格を認めないことである。我等を圍繞する夫婦關係の何處に我等は果して其然らざる例證を見出し得やう。彼等の夫婦關係はもと人格と人格との正しき理解の上に立てられたものではなかつた。彼等の多くは其結婚以前に於て何等精神上の交通思想上の交際なるものを有してゐない。彼等の結婚は彼等自身の結婚ではなくして彼等の父母親族の結婚であり而も其父母親族の結婚は殆ど凡て地位財産の結婚である。尙ほ甚だしきに至つては祝言の夜初めて自分の將來一身を託すべき相手の男を知つたといふ極端な場合さえある。而も此が過去に於ける尤も美しい女徳の一つであつた。現在に於ては流石にそれ程の舊思想は跳梁を擅にしてゐない。

併し昔と異なる意味に於て今日現に父母親族の結婚殊に地位財産の結婚が盛んに行はれてゐる。自分は此等の結婚を凡て非なりと極論するものではない。

唯其當前の結果多くの場合に於て夫が妻の人格を認めざるに至る目前の事實を悲むものである。現在の多くの夫婦關係には偽らざるの精神上の理解が缺けてゐる。結婚に關して尤も怖るべき思想は、而も此思想が今日尙ほ尤も廣く一般に行はれてゐる——女が男の養ひを受くる代償として男の爲に其子供を生むといふ考である。素より人間には意識的にも又無意識的にも種族保存の動物的本能がある。

併し此は要するに動物的本能である。我々人類が動物より漸次進化して來たことを思へば此原始的

信念は事業に先行しなければならない。世人をして先づ變革せしめよ。然らば廢娼醜滅が必ず此に伴ふに相違ないと注告したい。然らば「世人をして變革せしむる」とは抑々何を意味するか。此れ即ち彼等をして一方醜業の倫理道德上悲むべき人格の拋棄なる事を信ぜしむると共に他方醜業其物の存在を不可能ならしむるの策を講じなければならない。即ち我等は今後從來世人の多くに等閑視せられてゐた醜業の最大起因たる經濟問題研究並に其解結に全力を注ぐべきである。醜業は人間の（男女共に）淫蕩な放恣な墮落せる性的慾望に根ざせること勿論であるけれどもより以上近代物質文明の進歩に隨伴せる各個人殊に女子の生活問題に關連してゐる場合が多い、其經濟的方面の解結方法として一般國民の經濟狀態を改善し以て危險なる獨身者の數を減じ女子の經濟的獨立を安固ならしめ更に其根本問題として女子に男子と同様一定の公、私、權を附與すること等多々考へられるけれども此等は直說本論に關係が薄いから此れは此以上論及しない。

單に下等な職人。勞働者淫蕩兒のみに限らず我等の娼妓醜業婦に對する態度は多く物としての範圍外に出てゐない。而して此場合我々男性として尤も恐るべきことは我等の多くが物としての女性より抽象した觀念を他の一般の女性に押擠めつゝ平然としてゐることである。我等の求むるもの物としての女性にあらざること茲に呶々する迄もない。

二

男が女を一個の動物として遇する例證は過去乃至現在における我國夫婦關係の大多數について容易

よひあるく」ものである。^(五)凡そ我等が自己の人格的缺陷を我が生涯の配偶者の性格中に發見し得た時ほど眞に愉快なそれだけ又幸福なことは他に多くなからうと思ふ。我が配偶者は決して一つの動物ではない。尙更一個の無生命な器具でもない。彼女は實に我の一部である。我命の共有者である。其故我女性を動物扱ひにし又道具視することは其女性の無智を示し屈辱を意味するのみならず同時に又男性自身の無智と屈辱とを表示せるものである。我等は道具に依つては便宜を得動物に依つては或種の慾望を充すことが出来る。

併しながら我等は最後に我等の心のどん底に根ざせる此深い人格的欲求を果して何によりて満足せしむべきであるか。我等は尤も手近な而して尤も心強い關係として終に此を我生涯の配偶者たるべき女性の人格其物の中に索むるの外はない。又其を是に求め得ざるの寂しさに堪え得ない。自分がさきに人間的本能と言つたのは即ち此切ない欲求を指すのである。人間以外の動物にありては單に生殖すること即ち種族の保存といふ一事が何よりの本能であり義務であり又目的である。故に彼等にありては子供を産むと同時に自己の生命を失ふものさである。然るにひとり我々人類にありては生殖以外更に自らの生を愈々主張し其内容を益々豊富ならしめんとする強烈な生活意志がある。我等が一人の赤兒のために其母親の命を奪去られることは人間として堪え難き苦痛である。我等は先づ自己の生を主張しやがて其子孫の將來に及ぶ。性的關係に於ける人間の動物的本能は人類全體から大觀して素より最重要のことに相違ない。併し此を我々各個人の立場に返つて考へる時此根本的本能は我等に取つて單に人間的本能の副産物たるかの如き觀がある。我等は必ずしも最初から種族保存の大責任を覺悟し

本能を保有すること素より當前でありそれだけ又他の動物に對して特に誇示し得る性質のものである。かく言へばとて自分は何も此免るべからざる動物的本能を是非する者ではない。唯人間には他の動物と異つて其結婚に關し單なる原始的本能以外更に他の人間的本能の存在せることを認識し且力説したのである。曾てトルストイは彼の有名な「クローイツェル、ソナタ」に於て人間の性的關係の醜惡な墮落を暴露して少からず讀者の心を寒からしめたが此は彼の禁欲主義的哲學の當前の歸結であつてあの議論を提げ直に結婚に關する我等の動物的本能尙更其人間的本能を拒否するわけにはゆかない。我等はむしろ彼と反對に我々人類が他の凡ての動物の營んでゐる種族保存の原始的、本能のみに執着し固定する時即ち我等の性的關係の大墮落であらうと考へる。我等の性的關係には其以外更に彼等に誇示し得べき人間的本能の存する事實を忘れてはならない。然らば其人間的本能とは何か此は必然「人間としての女」を論ずる場合自ら明らかにせらるゝ問題である。

三

我等は如何なる女性を求めつゝあるか。更に具體的に且つ端的に言へば我等は我等の生涯の配偶者として如何なる女性を欲求しつゝあるか。我等はスワンウィック女史の語を籍りて言へば彼女自身の性格と意思とを有つた自由な婦人」を求めつゝあるのである。我等は單に一人の男としては到底完全なる人間性の具有者ではない。實に「人間の靈は更に大いなる全體の一斷片に過ぎぬ。而して其中に己れの眞の完成を見出す他の靈を索めて歩く。我等は自ら愛の秘密を體得するまで未知の世界をさま

が明らかに彼自身の好みの爲めに撰擇せられたので其が女自身に取つて又世界に取つて何かの役に立つが故にではないことを發見する」。(七) スワンウィック女史の言ふが如く『自分の信念からではなく單なる屈從に由つて自分の信仰を男に任せる女は自らの仕事を回避しつゝあるもので彼女自ら其守護者たるべき未來に對する反逆者である。彼女こそ實に女らしからざる女である。何となれば彼女は女としての彼女の本能。智識經驗の成果を放棄し其代りに男の本能。智識經驗の上に築かれた男の意見（よび）を採納（と）れたからである。彼女は「男眞似をしてゐる」。而してそれこそ本統の（保守派の人々が誤つて進歩的な婦人と呼んでゐる）貧弱な模倣だ』。(八)

斯く著へ來るとき新日本の前途には未だ々多くの重大問題が未解決のまゝ隨所に横つてをる。就中其尤も重大なるものは素より國民各自が人間性の完成、其物に外ならぬ、換言すれば古代の奴隸制に幾倍せる現代婦人奴隸制の悲劇を我等の新らしい歴史の頁より抹殺し去ることである。即ち我々新時代の青年男女たるもの先づ各自が人間としての眞自覺の上に立ち自らを重んじ他を敬し現代の謬れる我性的關係を徐々に而も根本的に打破し創設して行かなければならない。

最後に自分はスワンウィック女史の味ふべき一言を左に引用して此拙なき一篇を我亡友の靈前に捧げたいと思ふ。

「男女の最も深刻なる要求が同一である限り男も女と同じく女の無智乃至は墮落に因つて惱まされる。流れは其水源よりも高きに上ることを得ない。而して男は凡て女の子供である」。(九)

て性的關係を結ぶものではない。我等は先づ自己の人間性の完成を期し、其結果自ら種族保存の根本的
 大本能を遂げつゝあるのである。而して我等が此人間的本能を充分に満足せしむればせしむる程。即
 ち我等が自己の生涯の配偶者として立派な性格の女性を得れば得る程。更に換言すれば我等が自己の
 配偶者を立派な人格者として遇すれば遇する程。其裡面に於て愈々益々種族保存の動物的大本能を完
 全に遂行しつゝあるのである。我等は此神秘にして微妙なる動物師の巧みに對しをゝろ心からなる感
 嘆と讚美の聲を發せざるを得ない。

四

自分は前に我等の求めつゝある女性として「彼女自らの性格と意思とを有せる自由な婦人」を擧げ
 た。然らば如斯き「自由な婦人」とは更に如何なる女性であるか。我等はスウワンウィック女史と共にか
 の有名な當代の政治家オースティン、チュンバレーン氏の所謂「女らしき女の性質」に首肯し難い者で
 ある。彼は言つてをる。「我々が尤も推賞する女の美德は理想に對する彼等の高貴な歸依、他人即ち夫、
 兄弟、それに自分の想像の英雄に對する彼等の信賴。悦んで自分の意見を拋出す彼等の心掛け。彼等の
 偉いなる献身に殆ど何等の値もしない些々たる目的の爲にする彼等の狂熱的な自己犠牲の欲望であ
 る」と。更に彼は女子參政權運動に關する議會の討論に於て「此等は政治上の徳義ではない。神は我々の
 誇りであり同時に彼等の誇りなる彼等の美質を棄てゝはならないと禁じられてゐる」。ことを切言し
 た。^(六)併し我等が若しチュンバレーン氏の所謂美質なるものを仔細に檢覈するならば我等は正に其性質



シベリヤの女囚

— Russian Exile から —

吉田 絃 二 郎

私は極斷片的にシベリヤの話をつづけて見たい。

ロシヤの片田舎ボロヴオイ・ムリン——そこには僅か三十戸ばかりの軒の低い木造、草葺きの百姓家が街の形をして並んでゐた。中央を廣い泥濘の路が一本通り貫けてゐた。遙か下の方には共有牧場の細長い丘地帯が連つてゐた。牧場の丘に沿ふて高い岸を築いたオケナ河がゆるやかに流れてゐた。背戸には低い柴籬にかこまれた野菜畑があつた、更らにその後ろにはライ麥の野が目路のかぎりひろびろと横はつてゐた。

その村端れに古ぼけた頼れかゝつた小屋があつた。二つの窓は低く、地にくつ付きさうであつた。冬の最中になれば雪はこの窓を埋めるばかりに積つて、二重窓を透して少かに微光が射し込むで來た。缺け損した硝子窓は何時も厚紙を張られて、吹き込むで來る埃の雪を防いでゐた。家根は朽ちてひどい雨が降るごとに土間はすつかりびちや／＼になつた。

家は他のロシヤの百姓家と同じやうに薄暗い土間^ヌで二つの部分に分たれてゐた。一方は人の住^ヌひで、他の一方は厩になつてゐた。そこに牛や馬や耕具や穀物などが置かれてあつた住^ヌひの方には紅い長い

註 (1) The Future of the Women's Movement

by Mrs. H.M. Swanwick.

(11) 前掲書 101—103頁。

(12) Charles Sarnien's The Anglo-German Problem, P.

368.

(四) 前掲ス女史著書 1三八頁

(五) Mr. Hugh Black's Friendship, P. 1.

(六) 前掲ス女史著書 1二八—1二九頁。

(八) 同上 1三〇頁。

(九) 同上 1五頁。

□ 今岡信一良氏の近信

ハーバート大學在學中の同氏からの近信中に左の一節があった。

——新英洲の自由宗教運動は興味ある問題に御座候間是非其内に執筆仕るべく候。ハーバード大學内の宗教運動だけでも優に一個の通信材料たるを失はずと存じ候。其内には屹度御送り致すべく候。

當地教會は未だ夏休みの狀態に有之候。來月よりいよく

牧師も信者も避暑地より歸來する様に御座候。服部博士元氣に候。毎日新聞記者に押かけられ少々うるさき様に御座候。歐羅巴よりはデ・ウルフといふカソリヤクの教授がスコラ哲學を講ずるため參り申候。コンフィウシアストとカソリックとの二新教授を得たるとが當地人士の好奇心を惹起致居る様に候。——

□ 鈴木文治君兩三日前始めて當地へ來著奇遇に驚き申候昨日は相共に(服部博士及び安井女史等と)コンコード・レキシントンの古戰場を弔ひ申候。(九月廿日)

でもできないで歸つて來たといふことが察せられた。母は寂しい顔をして給仕をした。一と切れの肉もテーパーの上には見られなかつた。

村の子供たちは八歳になれば附近の村の工場に出るものもあつた。村は年一年とさびれて行つた。村の周圍には暗く茂つた官林があつた。貧しい農民たちは凍死か監獄かその何れかを選ばなければならなかつた。彼れ等は官林に入つて木を盗むだ、その結果近くの町の獄舎はこの可憐な無智な囚人たちを以つて一つばいになされた。

彼の女が六歳のころであつた。母は家根裏から落ちて頭を打つた。それが原因で約一年間病床の人となつた始めの四ヶ月間は半意識の状態で、子供たちが近寄つてもこれを追ひ拂ふといふやうな有様であつた。姉のレザエッカはその時十一歳であつた。姉は父と病んだ母と二人の妹の面倒を纖弱い手一つでやつてのけた。藥料と醫師の支拂ひのために牛も馬も賣つて了つた。遂には畑までも擔保として提供しなければならなかつた。

牧草を乾すころであつた。父は野に行つて、家には病みほうけた母が床に横はつてゐた。姉のレザエッカと彼の女は戸口に坐つてゐた。そこに二頭の馬に轆かれた大きな荷車が見えた。收税吏の荷車だつた。收税吏は時々この村に現はれた。彼れは「一本脚の惡魔」と呼ばれてゐた。彼れが訪ふころに必ず人々の家に悲劇が発生つた。彼れは木製の義足を持つて長い黒い鬚を生やしてゐた、そして凡べての子供たちに怖れられた。」その男が彼の女の家に入つて來た。そして管で窓を叩くとまた外か

カアテンと大きなテーブルと、大きな眞鍮のサモヴァと對^つの銀の蠟燭立が眼についた、そこにはまた莫迦に大きな煉瓦のストロブがあつた。寒い冬の夜などには、それは子供たちの唯一つの快い寢床となつたマリイ・サクロフが生れたのはこの室であつた。時は一八八五年の九月であつた。

そのころ彼の女の父の家には四十三エーカー餘りの田地があつた。地は瘦せてゐた。しかも之れが祖父なる人の五人の男の子と二人の娘に遺された祖父なる人の唯一の財産であつた。彼の女の父は分け前としてその半分だけを貰つた。家には牛や馬や可なり多くの鶏なども飼はれてあつた。作の良い年には穀物や馬鈴薯は一年の生活を支へるに充分であつた、しかし父の耕しやうが悪かつたのか、それとも早魃の爲か、都合良く行くやうな年は滅多になかつた。

『神さま、小さい子供たちのために雨を降らして下さい。』

何時も朝飯を喰ふ前に子供達は手を組むで神に祈りをさへげた。けれども神は殘忍であつた。雨はつひに降らなかつた。

父は到頭近い町に行つて二疋の牛を賣つて了つた。子供たちはそれつきり乳を搾ることはできなくなつた。

父は畑を捨て、町に出て働かなければならなかつた。父は一週間を町に過して金曜毎に家に歸つて來た。金曜だけは子供たちにとつてまるで祭りのやうに想はれた。テーブルには雪白の布がかけられた。蠟燭が點され、サモヴァは新しく磨き上げられて隅の方に輝いてゐた。けれ共父は一言も話さなかつた。彼れの顔には何時もの愉快氣な微笑は見られなかつた。子供たちにも父が何の錢儲け

彼の女は十一になつた。彼の女は町の雜貨店の雇女となつた。このごろから彼の女の周圍には當時ロシア全體を動かしてゐた労働者の賃銀問題や労働時間問題が新しい芽を出して來た。ロシアの到るところに労働者のストライキが起つた。同時にまた思想上の自由主義が盛になつて來た。自由思想家として最初に彼の女を動かしたものはハンナアと呼ぶ富豪の令嬢であつた。ハンナアは附近の子供たちを集めて金曜毎に新思想を彼れ等の群に授けた。それは將に來らんとする平和の日を待つ思想であつた。四民平等の日を來さんとする努力であつた。そればゾアの筈から這れんとする小反抗者の聲であつた。

彼れ等はロシアを愛した。けれどもロシアの收税吏を憎むだ。惡用されたる權力を憎むだ。當年のロシアの政府の壓制が如何に酷しかつたかといことはこれ等の少女の上にまでも激しい反抗の聲を擧げさしたのを見たゞけでも推しはかられる。

可憐なる小反抗者が働くべき世界としてはボロヴォイ・ムリンの村は餘りに小ひさかつた。それにそのころからして罪もない彼の女の周圍にはロシア官權の迫害が加へられた。彼の女は村を捨てて都會に出なければならなかつた。オデッサの伯父を頼つて彼の女が村を出たのは十四歳の時であつた。

しかしオデッサの伯父は彼の女の希望を容れなかつた。『それではお前はシベリアに追放されるぞ』と言つて叱つた。彼の女は伯父の家を逃げた。そして自分の生活費を得んがためにオデッサの氷糖會社に入つた。皮膚を通して指の血が滲み出るやうな辛い目を第一日から經驗しなければならなかつた。

彼の女が感じてゐた使命はこの頃から一層強くその内心に動き出した。愚な農民と貧しい労働者の

ら一人の若い男が大きな袋を擔いではいつて來た。彼れはこの家の唯一つの矜りであつたサモヴァをその汚ない袋に入れた、同時に蠟燭立をも持つて行つた。姉妹は泣くことも出来ないほどびつくりしてゐた。父は夕暮になつて歸つて來た。

姉は十三歳になつた。町の仕立職人の家に行つて働くことになつた。サツクロフは姉にかはつて一家の切り盛りをしなければならなかつた。

この年であつた彼の女が始めて彼れ等の社會的地位、境遇といふやうなことに對して想へさせられたのは。

彼の女の伯母で若い結婚した女があつた。年は三十四歳であつた。收穫時であつた。伯母は手傳人を雇ひ入れる爲に直ぐ近くの村に出かけて行つた。日没前であつた。時間は經つた、可なり夜は更けたが伯母は歸つて來なかつた。眞夜中になつて馬は空車を輓いて歸つて來た。彼れ等は夜を徹して伯母を搜索した。伯母は道の窪みに埋められてゐた。まだ呼吸は少かに通つてゐたが、その顔は殆んど見分けもつかないほど傷られてあつた、そこにはあらゆる暴行の痕跡が発見せられた。被害者の最後の言葉は「若い紳士」といふ一と聲であつた。大地主の息子に一人のならず者があつた。夏になれば彼れはこの田舎に來た。村の人たちは彼れを恐れて、彼れが來るごとに娘たちを隠した。「若い紳士」と呼ばれるのはこの男より他にはなかつた。彼れは直ぐと警察に上げられた。それでも三ヶ月の後には免されてかへつた。大地主の金力が正義を曲げたといふ噂が百姓たちの間に傳へられた。

走つて行つた。

彼の女の心には一種の恐ろしひ豫覺が動いた。

何事が發生おこつたのです？

彼の女は走つて行く一人の警吏を捉へて訊ねた。その男はたゞ手を動かした許りで飛んで行つた。何うしたんだか知らして下さい、でなけりや妾は氣が觸れさうです。

彼の女はその後ろから走つて來た男にきいた。

『ユダヤ人を殺せつて命令なんだ、それだけだ。』

男はこれだけのことを言つて去つた。

獄舎の庭といふ庭は鳥の毛で一つばいになつてゐた。それは風が町から運んで來たのだつた。ユダヤ人の枕や鳥毛の夜具が破られたのであつた。

キシネフの町に住むてゐたユダヤ人は暴徒の虐殺を遁れんがために監獄の門の前に立つて救ひをもとめたのだつた。しかしその希望はゆるされなかつた。二日二夜の間キシネフの町にはユダヤ人虐殺が續いた。虐殺されるユダヤ人の叫喚の聲は夜とくなく晝となく獄舎のなかに傳はつて來た。

三日目になつて當局者は初めて暴徒の捕縛に着手した。彼等は酔ひつぶれて歩くこともできなかつた。巡查はこれ等の酔漢を獄舎に引き摺つて來た。

その後四五日經つて彼の女は法廷に引き出された。

彼の女は終に重大な政治犯として取り扱はれた。それは彼の女のポケットのなかへら出た手紙に使

解放である。彼の女は彼れの企てを周囲の若い工女たちに語つた。彼の女はこゝでも恐るべき革命家としての迫害を受けなければならなかつた。

彼の女はキシネフに逃れた。そこで彼の女等の目的を果さんがために印刷物を拵へやうとした。ズアーイズムの迫害から農民と労働者とを救はんがために。ロシヤを自由の光に浴さんがために。

彼の女はロシヤを愛した、ロシヤの同胞を愛した。しかもロシヤは彼の女を以て危険なるナイヒリストであると認めた。

キシネフの冷たい暗い地底の獄舎は變化多い彼の女の生涯の第一ペーヂの血を彩るものとなつた。彼の女はたゞ一日に二十分だけの散歩を允されたのみで、その他は全く暗の底に押し込められた。獄舎の外にはまばゆいほどの太陽が輝いてゐた、しかもこゝは一條の光線も一つの自由も與へられなかつた。

復活祭が來た。復活祭は彼の女の村の生活にとつてこよなき楽しみであつた。今はその追憶すらが悲しみを増すものとなつた。寺の鐘は復活祭を告げて鳴り響いた。自由な人にとつてはどんなにそれが嚴肅にも、よろこばしくも響いたであらうけれどもそこではそれは葬ひの鐘の音のやうに、聞えた。たゞ彼の女に彼の女が自由の身でないことを痛切に味はしめるのみであつた。忘れるともなく忘れてゐた故郷の懐しい思ひ出を誘ふのみであつた。

復活祭の第二日であつた。常ならぬ物の音が獄舎の周囲に聞えた。彼の女の窓の前を幾度も警吏が

◎陸軍大學教授 岡田哲藏著 「我が斷片」上製成る！

忽三版

我が斷片

和文 價廿錢郵稅二錢
英文 價廿錢郵稅二錢
和合本 價四拾錢稅四錢

此の世の評をよ見よ！

明星新聞 月刊計と散文詩の「耳」を絶て表現せる作者 哲學と宗教也
國民新聞 著者の博識と鋭敏な感じに觸れた對象の斷片的表現である。哲學とも見るべく、散文詩とも見るべきものである。
萬葉報 著者の博識と鋭敏な感じに觸れた對象の斷片的表現である。哲學とも見るべく、散文詩とも見るべきものである。
帝國文學 著者の博識と鋭敏な感じに觸れた對象の斷片的表現である。哲學とも見るべく、散文詩とも見るべきものである。
事ある 宇宙觀あり、人生觀あり、社會觀あり、宗教觀あり、散文詩あり、警告あり、暗示あり、教訓あり、諷諭あり、寓言あり、小冊子であるが、どの頁、どの題目に於ても、いさゝかの事を考へさせる書物である。
東の亞光 本書者が内而生活に富める人たることは吾人の驚嘆に堪へぬ處であらう。一冊子として侮るべからざるもので、汗牛充棟と誰ならぬ近來著書中に容易に得難き好著と云はなければならぬ。
友の肖像 著者は、決然として舊套を排して直徑猛進し、ある新人である。……要するにこれ思想家として、詩人としての著者の肖像であつて、近頃敬意と興味とをもつて讀んだものである。
早稻田講演 所謂詩人の詩でない、題目の示すごとく哲人としての斷片的感想を詩形を以て表はしたもの、……既成宗教、盲信的信仰を脱して宇宙人生を自由なる見解より見てゐる所、肉迫的の強さがある。
丁西倫講演集 宗教、文學、歴史、教育、道德、科學、と形而上より形而上に亘つて著者の新しい深い鋭い觀察と感想とは讀者に甚大の感興を與へる。少な言葉數で多く語ると此の如きを云ふのであらう。
開拓者 奇警にして鋭利なる觀察法と筆力は感服に堪えないものである。シヨウヤニイチエなどのと並んで世界に珍重せらるゝの目があるところと思はれる。
神學の研究 犀利なる冷たき劍の權な痛快な筆である。
人、著者の人となりや如何と、圖書館に一九一五年代の古い典籍を捜るかも知れぬ。……搜られる價值があるのですから（以下長文）
青年 此斷片語の如き奇警を銜ふにもあらず、爲めにする所あるにもあらず、自然の言語の流露するが儘に、唯思想を其儘の姿に發表せるもの立派な一個の散文詩なり、哲人の思想に觸るゝを欲する人は讀め。

發行所

東京市芝區三田四國町

振替東京一〇〇〇三番
電話芝五八五五番

六合雜誌社

用された活字のタイプと或る國事犯罪者が使用した活字のそれとが同一あるとの理由からしてゝであつた。

小ひさな村の農民と小ひさな町の若い工女達のために想へられた小娘の健氣な企ては彼の女自身にも驚かれるほどの誤解をもつて迎へられたのであつた。ロシアを愛した娘、祖國を愛し、祖國の同胞を愛した小娘はやがてウラルを越へて三千哩を隔つた寂しいシベリヤに行かなければならなくなつた。

千九百四年の六月であつた。ロシア政府の彼れ等に對する壓迫はますます激烈を極めた。血腥い光景は到處に現はれた。彼の女がキシネフからキエフルやがてシベリヤに追放せられたのはこの年であつた。

『妾は父と母とを遺した、姉妹と兄弟とを遺した、妾は故郷を捨てた、そして、より良き生活の鍵を發見せんがためにこの大都會に來た、そして私が發見したものはこれ(シベリヤ追放)であつた——、祖國を追はるゝ刹那に彼の女が發した言葉はこれであつた。』

たゞ一片のバンを索めようとした可憐な小娘は恐ろしい罪の名の下にシベリヤに追放された。彼の女はシベリヤの墓場へと歩いた。

以上はMarie Sukloff “The Life-Story of a Russian Exile” の讀後の印象の一部分を掲げたものなることを一言して置きます。()

十一月特別號

科學と文藝

本號に限り

五錢

本然生活

(新刊發賣)
定價壹圓

加藤一夫著
洛陽堂發行

學科

- 解剖學上に於ける
ゲエテの業績……小川博士
- 人生と痲菌
羽大ドクトル
- 宇宙の構造(附錄)
兒玉呂
- 鳥の哺育時代と其
……ジョン、クイ
- 教育
- 食慾と醫學
小西井學士

詩歌

- 冬の口
よさの、ひろー
- 雪の國
與謝野品子
- 彼等
西村伊作
- 露景色
長瀬先司
- 麗日
小林弘
- 油虫
……山野虎市

- 無明(長篇小説) 加藤一夫
- 笑 アルワイバーセフ) 高野孤龍
- 浮浪 デクインシイ) 辻潤
- 金彌 小説) 岡田八千代

挿畫

- 各展覽會出品畫
- 石井 柏亭 小杉 未醒 中川 一政
- 安井 曾太 正宗 得三郎 佐藤 春人
- 岸田 文二 鍋井 克之 木下 莊一
- 白龍 茂之 田邊 武二 南 薫 藤 業
- 池田 葛園 吉崎 康
- 三色版 木村莊八、西村伊作

評論

- 物質的と精神的と 田中王堂
- 個人主義者の苦痛 長與善郎
- 盲目の世界 野村隈畔
- 獨逸の頭と日本の頭 宅博士
- 科學の立場よ見たり 二博士
- 東西兩洋の差異
- 各展覽會批評
- 海外思潮
- シンクの戯曲 喜多村進
- ジブシイの話 辻潤
- 新月文壇……美川康

東洋大學教授

境野黃洋先生著

活ける宗教

四六版美本

定價一圓

郵稅八錢

著者が限りなき渴仰と量りなき崇敬とを拂つて居る日本佛教の代表的偉人中特に

聖德太子 傳教大師 弘法大師 法然上人 日蓮上人

道元禪師 親鸞上人 蓮如上人 白隱禪師

の人格と教義と信仰とを精叙したもので正にこれ一部の『列傳體日本佛教史』であるしかし世間に有りふれた冷かな抽象的な人間の血の氣の通つて居ない學究的なものではなくて此等の偉人が親しく體驗したる内的生活の上に活躍して居る眞の宗教を語つたものであるこれによつて佛教の大意もわかるし健全なる佛教の信仰も理會せられる

文學士 羽溪了諦先生著

文學博士 松本文三郎先生著

釋尊の研究

定價一圓
郵稅八錢

彌勒淨土論

定價一圓
郵稅八錢

高島米峰先生著

荒井淚光先生著

一休和尚傳

定價九十錢
郵稅八錢

道元禪師

定價一圓
郵稅八錢

此廣告に見て御申の方は「六合雜誌」に依る旨書添を乞ふ

東亞之光

冊一
冊二十
錢廿
錢二
錢四
錢十
半錢

號月一十

每一
月日
一發
同行

- | | | | | | | | | | | | |
|--------------------------|----------------------------|-------------------------------|----------------------------------|------------------------------|-----------------------------|----------------------------|-----------------------------|-------------------------|--------------------------|------------------------------|------------------|
| ◎御大典と其影響 井上哲次郎 | ◎ブラウニングの理想詩 齋藤 勇 | ◎乃木伯爵問題と國民道德 吉田 熊 次 | ◎町人思想文化と歌麿の藝術(上) 中井宗太郎 | ◎歸一協會の宣言を讀みて 法貴慶次郎 | ◎南紀の自然と人生 内ヶ崎 作三郎 | ◎常盤潭北の教育論 入澤 宗 壽 | ◎神道興振と國民教育 大澤 治 作 | ◎山東見聞所感 堀 謙 德 | ◎祭祀の起源 山 本 信 哉 | ◎國體美の理想的顯現 深 作 守 文 | ◎海外思潮○選歌選句○學界彙報等 |
|--------------------------|----------------------------|-------------------------------|----------------------------------|------------------------------|-----------------------------|----------------------------|-----------------------------|-------------------------|--------------------------|------------------------------|------------------|

發行所

東京市本郷區駒込
五番地

東亞協會

振替一〇七七
東京座七番

此廣告を見ても御中の方には六合雑誌に依りて御書添ふ

毎月

道

一回

日

道

話

発行

松村介和主幹

第九拾壹號要目 定價金拾五錢、半年金八拾錢、一ヶ年金壹圓五拾錢 郵税共)

○口繪……………

○『道』同人合作……………

○謹みて即位の大典を賀し

○畏るべき日本國民 松村 介石

○至人と俗物 足 堂

○君子と小人

○氣質と偉物 村井 知至

○時は來れり

○現今我國の最大缺點は何

大正四年拾壹月號

『道』は宗教歸一を主張し併せて精神修養に資するもの也
『話』は通俗的に人生の心得を説きたるもの也

第五拾五號要目 定價金五錢 十部金四拾五錢(郵税共)

○御大典に就て所感を述ぶ 松村 介石

○手段と目的

○大戰後の覺悟が出來て居るか 森村市左衛門

○青年が始めて從事する仕事 大倉孫兵衛

○を天職と思へ

○石の上にも三年 釜山 長藏

○歐洲戰爭に對する我國民の覺悟 島田 三郎

○至人に病ある乎 長瀬 鳳輔

○廣賴淡窓の哲學 藤田 靈齋

○道元禪師(上) 山本 節

○朝鮮の李王 大川 周明

○大禮を畏みて女子の爲に 石川 半山

○節婦操館林(上) 下田 歌子

○節婦操館林(上) 野口 復堂

○中庸…………… 武田芳三郎

○なさけと法律…………… 宮崎 次郎

○モルトケ將軍の用意……………

○小僧の經驗…………… 大川 周明

○立身出世…………… 服部 儀一

○談秋元但馬守(中)…………… 西原 福松

○野口 復堂

○野口 復堂

○野口 復堂

○野口 復堂

○野口 復堂

○野口 復堂

發行所 天心社

道會事務所 道會

電話 一三六一番 東京 振替 口座 二五九番 東京 振替 口座 二五九番

(中附四)



宗教心の徑路

—我が心の様々—

沖野岩三郎

私の部屋に漆の様に黒く塗られた小さい鈴りんがある。これは私が物心付いた時初めて私の心に宗教と音楽と深い追憶とを與へた尊い品物である。此の鈴は少くとも二百年以上の昔私の先祖によつて買はれたもので、私の家の佛壇に釣つされてあつたのだ。

朝な／＼老人が此の鈴を鳴らしながら南無大慈大悲の……と拜む聲を聞きつゝ育つた私には今に到るも其の鈴の音が耳底を去らないのである。そして私の手が漸く其の鈴に達する頃から。私は三度々々の御飯を供へたり御茶を供へたりした度に伸び上つて其鈴を鳴らすのが非常な楽しみであり成功の事業であつて、私が其鈴を鳴らして臺所へ歸つて行く時、家庭の人々から賞讃の顔色を表現せられるのを知つて非常に嬉しかつたものである。

或時私は小さい臺を持つて來て佛壇を掃除して居たがどうした拍子か十三善佛の畫像を落して夫れをビタリと踏んだのです。其時私は頭の尖から足の裏まで針で刺されたやうに感じ、其の畫像を押戴い

此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る御書添を乞ふ

◎合本出来

■六合雜誌

大正四年度 上卷

價金壹圓拾錢 送料八錢

右御入用の御方は至急御申越あれ

大正四年十一月 東京三田 六合雜誌社

電話芝五八五五番

學 生 諸 君 の 御 來 宿 者 歡 迎

高等 下宿 榮林館

館主 文學士 今岡信一良

本郷區追分町三〇
電話下谷 四八四六

(追分電車終點ヨリ五分間)

字 治



〔荷造完全
發途敏速〕

〔品質優良
價格低廉〕

規 定

● **送費無料** 一時ニ總代金一圓以上御注
小店ニテ負擔ス、但海外ハ増料申受ク、全
● **無代罐入** 無代罐入トス以下ハ袋入り
故鐵入ノ時ハ實費申受ク。

六 合 雜 誌 讀 者 ニ 限 リ 正 價 一 割 引

● **販 賣** 御送金ハ振替貯金ガ一番安全デ便宜デ得用デ
ス。御注文書ヘ必ズ本誌ニ依ル旨明記アレ。

宇治と云へば茶○茶と云へばムラタ園とは世人の聲

名 茶	正 價	一 斤	及 一 斤	名 茶	正 價	一 斤	及 一 斤
龜ノ齡八十	錢喜仙	六十錢	宇治山村	鶴ノ聲一	同正喜仙	七十錢	茶田
村田園一圓廿錢	花橋	八十錢	信國	老松一圓五十錢	正太福	九十錢	園田
千代香一圓七十錢	鹽折	物	販製	早月榮二	同池尾粉	三十錢	座
仙治魁三	同上青柳	四十錢	の邊	仙掌五	同折鷹	八十錢	口
國華八	同薄茶各種	錢	場				替

販賣部 振替 電話 芝五八五五番

だのであつた。

二

私は自分の智識が發達して來るに隨つて、種々と佛教僧侶の内幕が知れて來て大變佛教が厭になつた。其所へ露伴紅葉柳浪の小説が侵入して來て、とう／＼私の頭は全々文學的になつてしまつた。私は原始的な宗教心を離れて、美しい／＼ロマンズの夢を見る生活に移つた。そして私は二十一二歳を極めて散漫に自由な生活に過したが、遂に二十三歳の時結婚した。程經て生れた男の兒が大變可愛い子であつた。私は自分が私生兒であるから。此の兩親を公然と持つ生兒の身の上を此上なく幸福なものだと思つた。しかし其子がニコ／＼と人の顔を見て笑ふ様になつた頃哀れにも急性腦膜炎で死んでしまつた。私は遂に涙の人となつてしまつた。

私は自己を慰むる爲、先づ酒に走つた。酒の結果は慷慨淋漓として痛罵を逞うした。私は此の酒癖の爲めに取返し付かない失敗をした事が幾回かあつた。そして私は此の心を禦する方法として宗教を求めて天理教を調べてみた。隅から隅まで其の教理を討究して決して彼が害惡を流す宗教で無い事を知つた。

所が私は友人の岩橋音吉君から基督教の話聞いて夫れに心が傾いた。そして和歌山市へ行つて青木仲英といふ牧師に種々な話を聞いた。其時始めて天理教の神觀や天地創造説や終末説は基督教から變化したものだを知つて、遂に天理教を捨て、基督教に進んだ。

て頻りに南無阿彌陀佛を繰返して不敬の罪を赦されん事を祈つたのである。さう云ふ風に私の頭には佛と云ふものを此上なく尊み拜んだ。私が十歳ばかりの時従弟の生れ兒が死んだ。私は夜中頃竊と起き出で、佛壇の上に柿の實を供へて一時間ばかりもシクシクと泣いた事がある。

夫れから私は十二三歳の頃から主に寺院で住んだ其間に荻野獨園の弟子であつた義理ある伯父から種々な話を聞いた。『奈何ぞ是れ祖師西來の意、答へて曰く庭前の柏樹子』と云ふ様な事を何だか譯判らず乍ら面白く聞いた。句雙紙の中の放膽な詩句を暗記して夫れを記事文の中へ挿入して小學の先生を驚かした事もある。法燈國師の開基だと云ふ由良の興國寺に幾月も居て、世離れた幽邃な生活を嬉しく思つた。十五六歳の時に村の住職に徳光宗丹と云ふのが居て、いつも其寺で寢起をしたが彼に私に妙心寺の普通敎校へ行けと勧めた。そして言つた『何も此の學校へ行つたからとて田舎の寺で貧乏をせねばならぬ事は無い。現に布哇の領事になつて居る外山義文と云ふ人は妙心寺から洋行させて貰つた人なんだ。執事の前田誠節さん何かは聽て管長になるだらうが、美しい奥さんを持つて居る。決して是れからの坊主は今までの様に不自由なものでは無い』などと云つて呉れた。けれども洋行するとか美しい奥様を迎へて管長になるとか云ふ事は私にはあまり架け離れた希望であつて、私は遂に小學教師を志望した。

十九歳の時隣村の小學教師になつた。しかし此時私は自己の心中に多大の缺陷のある事を悟つてこれを矯正しようと思つたが何にも方法が見付からないので、下宿の近い小山の上に金毘羅様が祭られてあるのを毎朝疾くから拜みに行つた。そして夫れは子供の時分に佛壇を拜んだ時と同じ心持で拜ん

富永徳磨君と松永文雄君との喧嘩の如きは實に觀ものであつた。私は日本基督教ばかりぢやない全體の教會制度に伴ふ缺陷と云ふものを熟々と考へざるを得なかつた。

で、私は福音傳道館に行つて始終其の傳道を助けた、中田重治君や笹尾鐵三郎君から彼の單純な信仰の獅子吼を聞いて私の信仰は其の叛逆心を辛うじて鎮壓し得た。私は明治四十年の上野博覽會場で天幕傳道を随分猛烈にやつたものだ。

しかし私が明治學院を出て此の紀州へ來て以來、私には一つの新しい刺激が襲うて來た。夫れは何であるかと云ふに、私が神學校で習つた堆高いノートブックが自分の直接傳道にどれだけ必要があるかと云ふ疑問を餘議なくせしめた所のものであつた。

求道者として私の所へ押寄せて來る連中の主なる質問は如何なるものかと云ふに。

一、國家主義と基督教との調和如何

一、基督教と社會主義との異同如何

一、一神論と汎神論との關係如何

一、虛無主義と基督教との關係如何

と云ふやうなものが主であつて、贖罪論も豫定論も奇蹟論も彼等求道者には何の交渉が無かつた。で私は再び國家主義、社會主義、虛無主義、汎神論、と云ふやうな學問をしなければならなくなつた。加之自然主義の文學が湧興して來て、私の頭は種々な新しい問題の爲に忙殺されてしまつた。まだ私には夫れらの充分の解決も出來ないうちに、彼の大事件が起つて、私は危險思想を抱いた注意人物といふも

夫れと同時に私の文學思想は露伴紅葉を離れてトルストイやゴルキに進んだ。遂に私が洗禮を受けると同時にトルストイの非戰論が激烈に私の心を支配するやうになつた。そして日露戰爭の眞最中に私は熱烈な非戰論を抱いて上京した。私は明治學院の神學部へ入學する事にして願書を出した。其時明治學院には神學生が僅かに四五人しか無かつた。私は彼の井深總理の教室で入學試験を受ける事になつたが、其の試験問題に時節柄クリミヤ戰爭とは如何と云ふ様な戰爭に關する問題があつたので、私は非常に憤慨した。そして『予は非戰論者なるが故に斯る問題に答へず』と書いて歸つた。門を出る時彼の枳殻の垣までが國家主義に見えて厭で溜らなかつたが、翌日寛容な井深總理は私に假入學を許すと云ふ手紙を呉れた時、私は今更の様に先の輕舉を悔いた。私は此點に於て彼の冷靜な井深さんを今に心から尊敬して居る。

三

私は明治學院で熱心に勉強した。そしてオルトマンズ博士の舊約の講義と有馬純清氏の汎神論の講義は私の頭を一變せしめた。

けれども此頃の明治學院は植村正久氏が明治學院の教職を辭した當時で、學生間には井深派植村派即ちミシヨン派と獨立派の別があつて互に疾視反目して居た。或時は祈禱會の後で擲り合が始まるといふ騒ぎ。そこへ持つて來て非戰論と主戰論とが相反目する。神學校とは全く神聖な神慮の研究場だと思つて居た私は全然失望した。中會や大會へ行くと其所も全く黨爭場の様な觀があつた。彼の溫順な

矛盾を發見して苦しんだ、けれども此の矛盾が即ち私の信仰である事を知つて、此の現實と理想との兩世界に跨がつて居ると云ふ運命を擔つた私を自ら憐れにも尊くも覺えた。私はキリスト信者が宿命説を信ずるのを罪惡の様に感じて居た迷蒙から覺めた。

聖書は私の聖書であり、キリストは私のキリストであり、神は私の神であるといふ事に疑ひが無くなつた時始めて眞のクリスチャンと云ふ事が出来るので、其他の諸種の神學哲學、處女降誕、奇蹟、復活、再臨、天國、地獄そんな事はキリストを信ずるに最初から必要な條件で無い事を悟つた。釋迦が母の脇の下から出たと否とは佛教に何等の關係がなく、キリストが水から酒を出したとか否とが基督教に何等の關係が無いのである。現實のイエスとイエスの中にある理想のキリストと彼の時代に生れ合して彼の理想を抱いてそして、あゝした悲惨な結果を齎んだ運命のイエスとは私の眼前に三種に展開して来る。夫れでこそ私共はイエスと共に泣き共に怒り共に苦しむ事が出来るのである。理想の我とキリストとは相去る僅に一步である。

斯く考へて基督を信じて居るうちに、私は何時しか子供の時代に何の譯なく佛壇に手を合せて、シミ／＼有難さを感じた如く、キリストを譯なく有難くなつて來た、讚美歌に合せて弾くオルガンの音が私の涙を誘ひ、日曜學校の生徒が歌ふ歌の一節が私の哀愁をそゝる様になつた。

私は運命論者になつてしまつた。宿命説を疑ふ事が出来なくなつた。私は斯うして迷つたり覺めたり考へたり悶へたり、疑はれたりして、一生キリスト教の爲めに悶ふべく生れて來たと云ふ運命に甘んじて此の宿命を感謝して死ぬまで生きて行くといふ事が私の使命であると思ふのである。

のにせられた。しかし此事件は私の信仰上に實に無量の裨益を付與せられた事を喜ばねばならない。

四

自然主義文學、トルストイズム、社會問題、汎神論、虛無主義、と種々な問題に襲はれた私は、基督教の爲めに必死の防禦線を張つた。明治四十三年の夏から私は自分の書齋より一切の聖書註解を驅逐した。そして決して註釋書を見ないで舊約の初めから更にコッコツと讀み初めた。私は始めて私の心を以て聖書を讀む事が出來た。讀み去り讀み來つて私は聖書中に三種の人物を發見した。夫れは現實の人と理想の人と運命の人とであつた。聽て夫れが私自身であつて、現實の私の考と理想の私の考とが全然飛離れたものである事を發見した。そして其の反對の性質を持ちつゝ生活して行かねばならぬ運命の私である事を知つた時、私は始めて宗教生活の眞味を知つて來たやうに感じた。

我々人間は個性がある、遺傳がある、境遇の感化がある、國民性がある、何と云つて力んでみても此の現實の我から免れる事は出來ない。どうしたつて釋迦はキリストでなくキリストは孔子でなく皆な各々獨特の現實我がある。しかし我々の修養や信仰や思考の結果理想我が出て來る、其の理想我的性質が釋迦に似て居る人を佛教徒と云ひキリストに似て居る人を基督信者と云ふのであると知つた。私は自分の中にある理想我がキリストに似、且つ似ん事を欲するが故に始めてキリスト信者であり、今までの様に神學や傳説を信ずる事が基督信者で無いと思つた時、私は眞に新しい天地を發見した心地がした。けれども現實我と理想我とは一致しないで、益々其間隔を推擴めて行く。其所に個性の大

近時の男女問題

一條 忠 衛

□男女問題に於ける靈肉論

最近の男女問題に於て、靈肉論が屢ば行はれたが、其の中で有力な説が二つある。一は女子は靈に始まつて靈の結果として肉に入ると見る説である。二は男子は肉に始まつて肉の結果として靈に入ると見る説である。私は此の二説に對して短評を加へて見たい。先づ私は此の二説を人類に存する現在の事實として肯定する（但し肉の結果として靈に入るの語は否定する）。然る時は此の二説を合一したならば何う云ふ事になるか。女子は靈から入つて肉に進み、男子は肉から入つて靈に進むと云ふ第三説を複産する。然らば此の説は男女の合理的結合の上に於て果して眞理であるか何う

か。私はこゝに至つて事實上の大なる矛盾を豫見するのである。即ち女子が靈から入る場合に男子が肉から入らば、二人の結合（戀愛）は木と石の相違であつて決して成立しないと思ふ。靈肉は固より精神と物質とであつて一元の二相の上に立脚するが、其の内容は頗る異つて居る。此の相違せる二箇の性質を二人の對人的關係の上に合一させようと試みるは蓋し大なる誤解である。こゝで云ふ靈とは固より性欲に關する理性又は感情の總稱であつて、肉とは性欲に關する神經、感覺、又は生理的本能の總稱であるから、互に交錯して居て決して獨立のものではない。けれども之れを男女の性的交渉の上に實現するに際しては、旗幟が極めて鮮明になつて、靈は精神に關する交渉の形式

「人生日訓」を讀む

著者内ヶ崎氏は我が思想界の新人である。宗教界に於いて、倫理界に於いて、一般思想界に於いて最も多くの共鳴者を有する新人である。

「人生日訓」はこの新人によりて編まれたる倫理史であり、修養訓であり、文學全集である。著者の學は單に新しきをのみ追ふものにあらずして故を温むることを忘るるものである。

「人生日訓」を蒐むる所は、日本、支那、印度、希臘、羅馬、猶太、東西古典の精髄と更に最近代に至るまでのあらゆる東西思想家の粹を網羅してある。更に列聖の詔勅の主なるものを加へ、殊に古來我が邦の儒教俗論に見る赤裸々な人生至理の發露を所在に加へて、本書をして在來の教訓類書の如く硬狹無味に附れしめなかつたのは編者の注意を多とすべきである。

本書はこれ等の材料を五百餘種の参考書より涉獵して一年三百六十五日として、その各日ごとに一つの倫理的題材を選び、それにして古今偉人の思想教訓詩歌文章を配列してある。

その題材選擇の方法の如きも著者の苦心せしところであらう。例へば五月十一日に「靈法」を論じ、三月三日に「處女」、五月五日に「少年」、七月八日に「戀愛」、八月三十一日に「聖壽無量」を選び更に歳暮に入りて日本の結婚期に際しては「愛」「結婚」「還天還地」「胎教」等の掲げ更に冬老けに人生の深所を追想するの歳暮に際しては「救世」「理想境」「清淨」等の如き著者の周到なる用意を窺ふことが出来る。附録として年中行事の備考を具へたる亦その勞を多としなければならぬ。

從來の貧しい倫理材料や窮屈な範圍に限ら

れた倫理書によりて自己を修養し、他を導いたる人々には本書によりて新時代の新人にふさはしき人生觀を築くことができ、また新人の見たる古今の大思想を窺ふことができる。例へば戀愛或ひは結婚といふが如きことに對してはやゝもすれば多くの倫理學者が事勿れかして看過した傾向がある、著者は最も眞實に最も大膽に是等の問題を提して其の深所を指し第一歩として見なければならぬ近代人の生活環境内にありし戀愛、結婚といふが如き生活上の實際問題から出發した倫理觀念をなせば本書は砂上建築たる嚴密な教育の使命を果すと同時に生ける倫理者として教訓書として文學書として廣く愛讀せられんことを希望する。

最後に著者が多大の勞を惜しまずして漢文體の文章をも德々和文體に改められたる結果却つて原文の妙味を稀薄にしたる如き個所を發見することはないだらうか。これは一利一害に評者が一寸感ぜられたまを付け加へて置く。吾人は著者一年の勞を多とし、敢て本書を我が教育家、宗教家、演說家、讀書家に薦む。(價一、五〇) 大日本圖書會社發行(秋野生)

新刊批評

露風詩話

三木露風著
白日社發行

露風氏は最も詩人らしい詩人である。幼少のやうな純な、纖な心から生れ出づる詩のバムを味ふことのできる詩人である。色黄な小鳥は草むらに死なんとするを喜ぶ、とうたつては涙を零す程のやさしい詩人である。斷本書は氏の詩話斷篇を集めたものである。斷

片的なところ却つてかざらぬありのまゝな詩人の心、表現の精神、ゆくべき道、西行の歌、約三十篇、快い詩のリズムに誘はれるやうな心持で讀破せられる。裝幀また佳。(價一、〇〇)

文藝批評論

植松安行
大成堂發行

キンチエスタの文藝批評論を譯したるものなり。同書は現にウエスレアン大學英文學の教授たる原著者が大學のレクチャーのたに草したるもので要は文學の要素と文藝批評の基調を闡明せんことを努めたものである。

「文學」とは何ぞや、「文學」の感情的要素、「思想」「文學」の知的要素、「文學」の形式的要素、「詩歌」「散文」の諸常に亘りて一般文學の研究者が心得べき文藝の批評解を細かに試みである。本書は嘗て我が國でも某大學の文藝教科書として使用せられたことあつたものであらう。譯筆も率直で快い。最後に人名索引を附け加へたるも宜し。(價一、三〇) 岡田哲藏著 六合雜誌社發行

我が斷片

これは藝に本社から日本本文のもの、英文のもの、別々に出されたのであつたが、何れも殆んど賣り切れになつてゐたのを、更に今度は英、和兩文を一つに纏めたものである。單に思想上一つに纏めたもののみ興味はかりなく、英文に趣味を有し、また英文研究の志ある人にとりては好個の著であらう。内容については既に本欄に於いて紹介せられたこと、岡田氏の名前に接せられたことであるから、これは贅言を費さない。書齋と限らず秋の郊外、電車の中、讀むに絶好のものである。裝幀は氣が利と思ふ。(價一、四〇)

の要求に對しては反つて之れを歓迎しなければならぬ事情に陥つた。是に於て藝妓の一群を生じた。蓄妾の制度はますます盛大になつた。而して男子は金力を以つて左右し難い女子に對しては、虚偽の愛を以つて欺瞞することに於て成功する傾向を生じた。即ち彼は女子に對して靈より入るが如く粧うて、愛の切なるが如くに詐るのである。男子は此の詐欺手段を發見して以來、之れを慣用して終に諸の女子を左右し得る状態になつた。そこで結婚は遂に靈の事件ではなくて單に肉の事件に變つた。肉と肉の交渉が結婚の本體になつた。然るに男子は肉から肉に轉々移動する性質からして、靈の定住する所がなく、宿無犬の流浪するが如く、全く一定地に戀愛を爲し得ない状態に陥つた。女子は結婚しても男子の靈を受けることが不可能であり、且つ肉の不規則なる交渉又は斷絶からして常に煩悶懊惱の人となつた。

これが現今に於ける性から見た社會の狀態である。で、私は思ふに、男子が肉から入ると云ふ説は、男子の件の遺傳に基く蠻性に過ぎない。半獸

的利那的の現象であつて、男子本然の性ではない。全く習慣の情性である。故に教育によつて之れを改良することが出来る。男子が舊教育によつて合理的自覺に到達すれば、祖先傳來の惡習を蟬脱して、こゝに最も賢明なる新男子に復活するところが出来る。而して彼は女子のやうに靈から入つて肉に進むのであるから、靈肉は一致して男女の結合は合理的に行はれ、理想的戀愛に到達することが出来る。何等の虚偽なく、何等の野望なく、眞正の靈的理解によつて營まれた結合は遂に永久不變である。

□再婚問題

再婚に關しては昨今色々の議論があつて、浮田博士の如きは三婚でも四婚でも苦しからずの説を奉ぜられて居る。之れに就いては私は倫理學上から批判を加へて見たい。

最近の性の倫理學的研究によれば、眞個の結婚なるものは戀愛的生活を目的とする一男一女の自由意志に發する全的理解の戀愛に基く結合である

を取り、肉は身體に關する交渉の形式を取る。即ち前者は心の交りとなつて現れ、後者は肉交となつて現はれる。故に女子が靈を以て男子に對する場合に男子が肉を以て之に應ずれば、直ちに女子の峻拒を招ぎ戀愛の破壊となるは世人の熟知する所であらう。此の女子の峻拒は人類の進化に對する種の選擇及び母權の使命に基く彼の女の尊貴なる自由である。然るに男子は肉を以つて此の自由を左右するには未だ何等の權能を附與されてゐない。彼は單に靈からして肉に入るべき門戸を開放されて居るに過ぎない。彼は將に此の門から入るべき寵兒であつた。此の門から入れば女子の自由を束縛せずに彼の女と完全なる合意の結合を遂ぐる事が出來たのであつた。然るに彼は此の正道を踏まずに、直ちに肉なる邪道から進んだ。こゝで人類に男女の葛藤を生じた。女子は靈から理解して然る後に肉に進まんとするに對して、男子は肉から進んで然る後に靈に於て理解せんとした。偶々太古の男子は腕力と武器の所有者であつたから、彼は之れを利用して女子の自由を強迫しながら

肉の満足を遂げて居た。そこで男子は絶對の自由權を以つて女子を支配することになつた爲めに、我が意の儘に諸の女子に向つて肉の要求を遂げて之れを蹂躪し得ることになつた。又男子は家長であつて系統を重んじ且つ戰爭に備へんが爲めに、多數の妾を蓄へて子孫を濫造する制度になつた。それで男子は女子を見ること恰も一片の肉塊のやうに一枚の鳥のやうに感じ、牛馬のやうに取扱ひ、生殺與奪の權を握り、妻妾に對する愛は單に思召であつて、且つ家長として之れを公平に分配する習慣から、男子は女子に對して愛の稀薄となり疎音となり冷淡となり、殘忍となり、單に肉を感じ之れを弄するに過ぎない動物に化した。而して強姦は終に男子の遺傳性になつた。然るに文化の進むに伴ひ、道德法律の發達からして、腕力又は武器を以つて女子の自由を束縛することは出來ない時代になつた。ところが男子は偶々金權者で在つたことからして、直ちに方針を替へて今度は黄金を以つて女子の經濟的生活を買収することになつた。女子は經濟的生活のために、男子の肉

在の配偶者に對して姦通の行爲である。第一の配偶者の寫眞や手紙などを愛玩してゐながら、第二の配偶者を欲したり或は之れを求めて此等の寫眞や手紙などを示すは不見識も甚だしく、實に不貞操の極と謂はなければならぬ。夫婦の關係を單に同一の屋根の下に住む動物位に解したり、肉の交渉又は着物料理の世話役位に解して、三婚四婚を漁る底級なる夫婦關係は性の倫理學上に於ては野蠻であつて不徳漢の爲す所である。故に男女道徳論では第一の配偶者との關係に於て始めから戀愛の無かつた物又は戀愛の斷絶した者に限つて復活の意味に於て再婚を許すのである。世の離婚者又は鰥夫寡婦の處分法に關しては其の前配偶者に對する戀愛の有無によつて解決を與へる。若し戀愛が無く斷絶して居るならば宜しく再婚すべきである。若し戀愛があり斷絶して居ないならば獨身で居なければならぬ。子供のあると無いとは問題でない。子供があつても前配偶者に對して戀愛が無いならば子を處分した上に再婚して善いのである。若し戀愛が有るならば其の子供を養育しな

がら前配偶者を追慕しなければならない。こゝで或る論者は問うて、肉の要求を道學者は如何に處分するかと言ふかも知れない。然しそれは誤解である。戀愛は靈に始まつて肉に進むのが原則である。若し肉より入れば靈は捕へ難く肉を轉々移動する刹那的半獸的傾向に走り、終に戀愛の不成功に終るのである。戀愛に肉を主とする論は全く性の研究に於ける誤解である。それで前配偶者に對して靈に於て戀愛の炎が連續して居る以上は縦し肉に於て交渉がなくとも戀愛的生活は持久されるので、肉の満足のために第二の異性に關係して靈の苦痛を招くよりも幸福なのである。これは肉の満足よりも靈の満足の方が道徳的價值に於て大であるからである。「貞婦兩夫に見えず」と云ふ規範は福澤氏の如く、「同時に見えず」と云ふ意義ではない。同時に見えるは姦通であるから見えざるは勿論のこと、物珍しく規範として古人が掲げるにも及ばぬ次第である。又或る傳習道德家の如く、虚偽結婚の失敗者が前夫に對して戀愛のな

から、夫婦的關係は永久不變であつて離婚と云ふが如き不明なる過失は到來しないのである。けれども當今の世人には此の性の倫理的修養が缺漏して居る爲めに、結婚の失敗者は續々として絶えないのである。それで此等の落伍者に對しては救済の方法が必要になる。そこで戀愛的生活の新たな復活が企圖される。是れが即ち再婚である。故に再婚の場合に於ては、第二の結婚に於て第二の戀愛的生活を目的とする復活であるから、第一の結婚に於ては戀愛的生活の失敗者であつて、且つ現在に於て戀愛の斷絶して居ることを條件とするのである。何となれば第一の戀愛的生活と第二の戀愛的生活とは其の配偶者との對人的關係及び道德的義務に於て全々沒交渉であるからである。然るに若し此の兩者の配偶者に跨つて性的關係があるならば、戀愛の原則たる一夫一婦の制は破壊されるからである。それで其の配偶者が生別であつても死別であつても、苟も第二の戀愛的生活に入つた以上は第一の配偶者に對する戀愛は根本から斷絶して居なければならぬ。然るに現に未練が

あり、忘れ難い情の帆綱があり、種々その面影が残つて居るならば、第二の配偶者に對して戀愛が稀薄となり、冷淡となり、完全なる戀愛的生活は出來ないのみならず、第二の配偶者をして戀愛的生活の失敗者たらしめ、自己も再度の失敗者に陥る傾向がある。而して第一の配偶者に對して戀愛があり第二の配偶者に對して戀愛があるならば、是れは戀愛の賊であつて即ち姦通の行爲である。縱令、第一の配偶者とは肉の交渉がなくとも精神に於て現に交通して居るから、第二の配偶者と肉及び精神に於て交通して居るならば、是れは姦通でなくて何であるか。法律上の姦通は其の姦夫姦婦が共に現存する自然人であることを條件とするが、道德上では其の生死を問はずに成立するのである。例へば死んだ親に對しては道德上何時でも孝不孝の行爲が子に成立するが如く、死んだ配偶者と現在の配偶者との關係に於ては何時でも自己に姦通の行爲が成立するのである。現在の配偶者に對する性的關係は死んだ配偶者に對して姦通の行爲であり、死んだ配偶者に對する性的關係は現

らである。今に至つて俄に之れを發見し、驚いて覺醒し、懺悔告白を行つた形であるから、改めて復活して他に新生活をを經營するために此の虚偽の夫婦を解除することであるから、道徳上頗る嘉賞すべき行爲である。私は如上の意見に於て二個の自由意志に發した協議上の離婚を肯定するのである。

之に反して、男女の一方が戀愛斷絶の宣言を爲したからと云つて、一方に於てまだ戀愛を續行して居る間は、夫婦の戀愛的生活の全系統に於ては未だ斷絶した譯のものではない。一方が自由意志より戀愛の斷絶を宣言しても、一方が自由意志より戀愛を續行して居る有様では、到底離婚の協議が事實上成立しないのである。けれども合理的に斷絶した戀愛は之れを復活させることは不可能であるのみならず、戀愛の斷絶した者に對して我より執拗に未練がましき戀愛を繼續せんと圖るは不見識の事であると共に、戸籍上の夫婦は既に有名無實になつてゐる。之れを道徳上から又は法律上から飽くまでも引き付けて置かうと努力するは反

つて種の進化に向つて害毒を流すのみで、思慮なき妄舉であると謂はなければならない。斯かる場合に於ては離婚は當然免れ難い運命に歸してゐる。遂に我が意を折つて承認しなければならぬ必然の成行である。けれども被宣言者は此の場合に於て、驚駭、絶望、嫉妬、苦悶等を感じなければならない。此の精神的被害は實に死と同一である。相手は我と同一に靈から肉に進む完全なる戀愛の結合であることを揚言して結婚したにも拘はらず、事實は全く相違して、彼は肉より結婚したので靈に於て我を欺いたのである。今に至つて其の斷絶を宣告するとは、抑も肉に於て我を翻弄した歴々の證據であると感じた時には、憤怒の情は制し難く、血涙雨の如く流れて、復讐の念勃然として起るは蓋し人情の自然であらう。其れで此の場合に於ては一方は當然の事實として加害者の地位に立たなければならぬ。而して刑法は人に微傷を負はせてさへも加害者を刑罰に處する法規になつてゐる。故に人の唯一生命である戀愛を破壊し貞操を蹂躪して、人生に致命傷を負はせた詐欺

の切なるが如く偽り、偽善の行爲を繼續するを以つて「貞婦兩夫に見えず」の意義に解してゐる。けれども倫理學上の批判によれば「貞婦兩夫に見えず」とは前夫に對する戀愛の繼續して居る心即ち靈を尊重して、再婚は爲すべきでないと女子の道德的意識に閃く良心の聲であつて、且つ社會の普遍的法則となつたのである。

□自由戀愛者の離婚に

關する法律問題

結婚は意志の自由に發した戀愛の結果であるべきことは既に自明の原理であるから論ずる迄でもない。ところが最近歐米の論者或は我が國の論者の中で、結婚は自由戀愛の結果であるから、結婚の解除即ち離婚は其の一方の自由意志に發した戀愛斷絶の宣言によつて効力を生ずると説き、結婚者は豫め其の結婚前に於て此の條件を承認する必要があると云ふのである。此の説は頗る有力であつて殆んど論壇を睥睨して居る有様であるが、私の倫理學的研究によれば其處に法律上二三の條項

を附加した上でなければ肯定が出来ないのである。蓋し男女の自由意志に發した戀愛の結合は二個の意志が全的理解に於て同時に合成したものであるから、其の解除に關しても同じく二個の自由意志が全的分離に於て同時に發した合意でなければならぬ。自己の自由意志を生かさんが爲めに相手の自由意志を犠牲に供する利己主義は不合理である。自由意志と自由意志とが戀愛の斷絶を各自に宣言した場合でなければならぬ。此の如き場合に於てのみ離婚が正當である。幸に我が國の民法には協議上の離婚と云ふ條項の存するのは特に斯の如き場合に適用すべき爲めである。故に協議上の離婚に於て自由意志と自由意志とが任意に戀愛の斷絶を宣言して戸籍登記の除籍を爲したならば其れは正當なる離婚である。舊道德の論者は私の此の意見に反對するかも知れない。然し私は言ふ。完全なる戀愛上の結合は永久不變であるから離婚と云ふ現象はないのである。然るに二人の自由意志に於て各自に戀愛の斷絶を宣言する所以のものは、其れは互に虚偽の戀愛を奉じて居たか

業女學校は職業教育にのみ没頭して人格教育を冷視し、殊に男女兩性の倫理に於ては殆ど訓育を施して居ないことに原因する。二は今日の資本家制度の罪である。當代の實業家は金と色との外は殆ど眼中にない。金を溜めるは色に用ゐる爲めである。試に彼等の眞直な談話を聞け。金を溜める話でなければ藝者の話、妾の話、又は女たらしの研究談で持ち切つて居るではないか。細君で足らず、藝者で足らず、妾で足らず、女中を侵し、家庭女教師を侵し、看護婦を侵し、人妻を狙ふ希代の色魔であるから、朝夕手近に居る秘書役の女事務員などを侵すは彼に於ては蓋し朝飯前であらう。權力を以て威壓し、溫言を以て接し、愛語を以て近き、金力を以て思を着せ、折を見て料理屋待合に連れ込まんと欲する。女事務員は固より貧窮に人と爲り細腕を振つて勞働に従事する可憐の經濟的獨立者である。解職は彼の女に取つては殆ど斬罪に等しい。自分一人の饑渴ばかりでなく、親兄弟の生活に影響する。彼の女は生きながら爲めに心ならずも此の獸行翁の毒齒に仆れるので

ある。今日の諸會社は殆ど斯うした女色の伏魔殿である。且つ、會計士の制度のない我が國では假令會社法に罰則があつても、此等の重役等が帳簿を誤魔化し私腹を肥すは勿論のこと、自ら大株式に列して勞銀の引き下げを主唱して勞働者を虐使し、他人の勞働の結果を收穫し不義の財産を貯へ、藝者を招いて長夜の宴を張り、妾宅を各所勝景の地に構へて別邸と號し、その奢侈淫逸は實に言説の外である。彼等には素よりして道德も宗教もない。人格の修養などは頭から問題にして居ない。唯だ女色を以つて人生の修養と爲し、金錢を以つて道德宗教の本尊と奉じて居る。彼等の見る政治は唯だ自己の爲めの政治である。自己の會社の發展のみを望む政治である。彼等の望む法律は金權政治によつて作られた自己保存の法律である。醫道では馬鹿に投ずる藥が無いと云ふ。道德宗教では今日の實業家を濟度する手段がない。彼等は學問を嫌ふが故に道德書類は買はうとも讀まうともしない。彼等は説教を嫌ふが故に法話を彼の耳の穴に入れる方法がない。是れは何のためである

結婚の加害者に對しては、一層嚴格なる刑罰が落
下しなければならぬ。而して此の刑は被害者の
告訴を以つて論じ、姦通の場合であるならば告訴
を問はずして第三者又は檢事の告發によつて本刑
が成立しなければならぬ。同時に裁判上の離婚
が成立すると共に、勞務名譽自由の慰藉に關する

損害賠償が成立しなければならぬ。或る中學校
長が十數年に一女教員と自由戀愛による約婚を爲
して置いて屢々同棲を遂げた後に、件の校長は他
に正式の結婚を爲して夫婦が成立したので、件の
女教員は民法上から五千圓の損害賠償を請求した
が、去月大審院に於てこれが勝訴したのは、即ち
戀愛の詐欺的行爲に對して被害者を保護し之れを
慰藉せんとする民法の精神である。然るに刑法に
於ては未だ何等の法規が出てゐない。詐欺的戀愛
又は結婚に對して加害者を體罰に附する手續が缺
けて居る。妻の姦通のみを問うて夫の姦通を問は
ない日本の現行刑法は歸するところ、男子に詐欺
的戀愛又は結婚を公許して女子を被害者の地位に
泣かせ、之れに何等の保護を與へない天下の惡法

であると謂はなければならぬ。故に猥りに世上
の論者の如く、戀愛は自由意志の上に成立するも
のであるから、離婚は其の一方の戀愛斷絶を最後
通牒として効力を生ずると説き、被害者に對する
刑法又は民法上の保護に附いては何も言つて居な
いのは妄論も甚だしいと謂はなければならぬ。

□女色の伏魔殿たる諸會社

私は昨年の本誌第七號第八號に亘つて「道德政
策上より見たる男女風俗の壞亂」と題して道德と
法律との關係に及んで論じたことがあつたが、最
近に至り此の男女風俗の壞亂は益々甚だしくなつ
て來たやうに思はれる。其の最も著しい現象は、
諸會社に於ける重役と女事務員との私通である。

女子職業の發達に伴れて女事務員の數が増加した
ので、諸會社に於ては理事事務取締役其の他の課
長と女事務員とが一室に机を列べ肱を接して事務
を執ることが益々多くなり、隨つて私通は頻々と
して行はれ、殆ど尋常の行爲として默認せられて
居る。其の原因には二つある。一は今日の諸種職



おもかげ

ちくすゐ

松島の觀瀾亭のあばしまに波見てわれは日一日遊ぶ
海よ母よ大なる濤打ちよせて死の島かくれわれを訪ひ來よ
中尊寺のりあひ馬車のまらうどに寫生する子とあやまられてき
さみだれのふりのこしける光堂陰鬱のかげ些にだにもなし
たばしねにいづる月影出ずもあれな鎌倉殿の胸和ませて
北上の流れ衣の川裾のながめあかるしたかたての山
石巻よ氣仙が沼よわが胸のとことなりぬ君故にかも
埃及の三角塔とも見ゆるなべにこがねはなさく山あをがまし
白河の關吹き越ゆる秋の風に木の葉と散りて千々に語らむ
碯川水みとりなる底にいわく鹽原山の溫泉にとめるかも
いのちこそふたつほしけれ世をしのぶ源三窟のたとしへやよき

か。私の倫理學の研究によれば、今日の政治及び法律が道德及び宗教と分離して居るからである。惡を爲す忽れと言うても爲す者があれば何うする事も出来ない。唯だ之れを惡人として道德的制裁を以つて排斥する丈のことである。然るに惡人たる彼は到る處に於て惡行爲を働いて歩くならば公衆の被害は實に甚大なものである。ところで此の道德宗教の力の及ばぬ點を補佐する爲めに政治及び法律が必要なのである。不道德的行爲に對して道德的制裁の及ばない點は國家の權力により刑法が受取つて之れを體罰に處さなければならぬ。然るに今日の我が國の刑事政策は道德宗教を容れることを嫌つて居るので、其の結果たる新刑法は人も知る如く天下の惡法である。此の惡法の存在して居る爲めに差し當り利益を得て居るは、獨り

富貴淫逸なる彼れ資本家の一群に過ぎない。その一例を示せば財界の王たる彼等は天下を解して女色の世界と心得て居る。彼等は憲政治下に於て姦通御免である。その結果は藝妓の日に激増し、妾の志願者は門前市を爲し、諸會社の重役等は女事務員等と私通しながら事務を執る奇現象を生じた。重役等にして斯の如しであれば、其の子弟は勿論、諸の會社員は類を以て想像しても過言で無からう。而して其の細君等が件の獸行翁を所天に奉じて玄關に送迎して生きて居なければならぬ大恥辱を覺醒し、其の女事務員等が此の獸行翁の淫慾の具となつて生きて行かなければならない奴隷の境遇を自覺する迄は、吾人は筆を擱いて暫し此の論を預つて置くであらう。

彼とかの女とかの女達

— 四ツの對話 —

平 井 好 一

彼とかの女

彼……かの女 生みの母でない母さまのお側で、あなたへの戀をつゝむ身は一層苦しいでございます。

彼 それはさうだらう。

かの女 もしほんとの母さまが生きておいででしたなら、私は母さまにこの苦しい心を打ちあけます。そうさへすればあなたに時が許されるまで、どのやうにもお待ちすることが出来ませうのに……生みの母はもう死んだのですもの……

彼 親のない子は、親のある子がしなくてもすすむさまさまの悲しみをせねばならぬ。その悲しみをわしもせねばならなかつた。

かの女 ……………

彼 お前は今の母さまに親しめないのか。

かの女 はい。

彼 それはいけない。お前はその垣を破らねばなるまい。かりにも母と呼ぶ人ではないか。

かの女 そう言はれるのが私は辛いのでございます。

彼 何故だ？

かの女 私にはそれだけの力がありませぬ、腑甲斐ない自分が耻かしうございます。

彼 わしはさうは思はない。お前にはそれだけの力が恵まれてゐる……けれども、お前はその力を自覺してゐない。その力はお前の胸のうちにねむつてゐるのだ。

かの女 私にはさう思はれませぬ。

秋來ぬと裏山風をあをぎ見ぬ湯女が會釋の楓川樓に
秋風は樹々の裏葉をかへしけり吐月が峰をよぢゆくらしも
清水湧く三島の町の友許はめぐる小川の水さわくくに
山羊飼ふと君をきけどもめづるあまりおもかはりせし君を見むとは。

○

さい
い
ち

歌袋うたなくかへる初夏の三十日あまりの旅あちきなし
うば玉の闇はなつかし夜と共にわれらがいのちきえも逝かばや
詩情そゝろうごけど詩はなくなつたといつたらに京の月見る
君と行く都大路に人はなく十六夜の月あかくと照る
歌の國美し繪の國夢の國愛のみなざる國に遊ばや
はかなかる乙女心ににたらずや秋寒き日にかへりさく花
あわたゞしくゆく秋見れば若人の心落ちぬずなりけるかな
入相の鐘の音遠み京の街遊ぶそゝろに秋の悲しき
かにかくに望みのうちに生くべかり名を惜まざば死を怖れずば
新しき望懷きて新しき生活に入る君に幸おほかれよ
君をよび君を迎へむ新しき假居の京の秋は寂しも
同じ日に靈に生れし兄弟姉妹の三人つとひて川千鳥さく。

といふことだ、他の男への愛が強かつたならば、わしを棄てゝもいゝ。しかし、わしへの愛が強かつたならば、お前はわしに歸らねばならぬ、すべてが愛の流るゝまゝであれ、そしてすべてが自由意志からであれ、

かの女

.....

彼 そして、わしはわしの存在がお前の白い胸に残した紅の傷には、わしはあくまでも責めをあたねばならぬ。お前の歸るのはいつか、わしは知らない。或は再び歸らないのかも知れない。

かの女 そう思へばかなしいございます。

彼 わしもかなしい.....しかし、わしも人間だ、その間にわしの愛がどう流れるか、わしはあらかじめ言ふことは出来ない。考へれば寂しくもある。

かの女

.....

彼 けれども、どんなにいたましく虐げられた姿でいつお前が歸らうとも、わしはその時の自分に、許されるだけのことは必とするつもりである。もしせぬならば、それは最早やお前の求めや

うとするわしではなくなつたのだ。けして泣かないでくれ、はるばる歸つて來たことを悔いないでくれ。でも、わしを哀れだとは思つてくれ。

かの女 はい。

彼 わしの言ふことが解つたか。

かの女 解つたつもりでございます。

彼 それだけのことがわかれれば行つてもいゝ。氣をつけておくれ。

かの女 はい、では行つて参ります。

彼 それでは、さよなら

かの女 さよなら。

彼と彼女等のうちの第一の女

彼 わしはあなたによく似た女を知つてゐる。

第一の女 そうを?

彼 わしはその女に別れてから二年になる。

第一の女 何かたよりでもございますか。

彼 何もたよりはなかつたのだ。

第一の女

彼

第一の女 なぜあなたはそんなにじつと私の顔を

彼 それはお前の謙讓けんじやうな性格がさう思はせるのだお前には未だはつきりとお前自身が解つてはゐない。

かの女 ……………

彼 努力によつてはそれ以上の力までもが許されるお前だ。わしにはお前がよく解つてゐる。わしはお前を信じてゐる。だからわしはお前を愛するのだ。

かの女 ……………

彼 わしが神に召されて、行く可き路は、怖ろしいと言へば怖ろしすぎる路だ。その路にわしと共に生きられる女は、女と言ふ女の中でも、唯一人お前ばかりだ。お前の力こそわしの苦しい心をはげましてくれる。お前の愛こそわしの寂しい心をあたゝめてくれる。

かの女 ……………

彼 ……………

かの女 ……………

彼 それでもお前はあの遠い遠い一人の叔母を慕つてゆくのか。

かの女 はい。

彼 何のためにだ。

かの女 心の自由がほしいのでございます。

彼 彼地あちではお前にそれが得られると思ふのか。

かの女 はい。生みの母でない母あさまのお側でよりはいくらか身も心も自由でございませう。あなたに時の許されるまで、彼地あちへ行つてゐたならば、お待する事も出来やうかと思ひます。

彼 叔母がお前に來いと呼びでもしたのか。

かの女 はい。

彼 わしは不安だ、叔母は氣どゝろも解らぬ男にお前を強ひることはないかと思はれる。わしは不安だ。

かの女 ……………

彼 けれども、わしはその時のために一言言つておかねばならぬ。

かの女 何でございまするか。

彼 人間の愛は流るゝまゝに流さねばならぬ流れだと言ふことだ。お前に他の愛がはたらくかも知れない、その時はたゞお前の自由意志に任せる

移したがいいであらう。——しかしそれは神の路ではない。眞理の道ではない。永遠の路ではない。あなたのすきな路を歩め。行きどまる所は滅亡だ。

第一の女 ……………

彼 しかし、わしの路がわかつて、それに入り得るならば、救はれないこともないであらう。

第一の女 ……

彼 わしは行かねばならぬ。ではさようなら。

第一の女 ……………

彼の靈と彼女等の第二の女の靈

彼の靈 …… やつと御門まで來た。

第二の女の靈 よくいらつしやいました。

彼の靈 はい。

第二の女の靈 神様がお待ちしてゐるのでございます。神様の仰せに従ひましてお迎ひに參つたのでございます。

彼の靈 まことに恐れ入ります。わたくし共の如き權威ちからのないものは、時々こうして神様にお目見えを許され、そして神様のお力を頂かねばならぬのでござりまする。

第二の女の靈 ……

彼の靈 ……

第二の女の靈 あなたは一年ばかり前に、ある一人の女に『わしの路が解つてそれに入り得るならば、救はれないこともないであらう』と言はれたことはございませんでせうか。

彼の靈 はい、そのやうなこともございました。

第二の女の靈 その女の方も今は救はれました、そしてあの國で神様の路のために働いております。

彼の靈 あの女がでございまするか。

第二の女の靈 そうです。そして神様があなたのよいお働きをおほめになつております。

彼の靈 まことに恐れ入ります。神様のお召めしがなければ何事も出來ないわたくし共でござります。

第二の女の靈 ……

彼の靈 ……

第二の女の靈 あなたは長い長い間わづらうて居りました、哀れな、たよりない一人の女を、しげし

見つめてゐるのですか。

彼 わしは昵つと見つめずには居られない。

第一の女 どうしてですか。

彼 あまりと言へば言へる程、あなたはよくあの女に似てゐる。わしはあなたが懐かしいのだ。

第一の女 まあ、いやあな人ひと。

彼 いやと言はれるのがわしはかなしい。

第一の女 仕方がありませんわ。

彼 ……………

第一の女 その女をあなたはまだ思つてゐるのでせう。

彼 わしは忘れやうとしても忘れることが出来ない。

第一の女 お別れしてから二年もの間、あなたは待つてばかりゐたのですね。

彼 わしは待つてゐた。

第一の女 あなたは何のおたよりもしなかつたのですか。

彼 しなかつた。

第一の女 そしてあなたは、たゞ待つてばかりゐ

たのですね。

彼 そうだ。わしはあの女を信じてゐたのだ。

第一の女 二年もの長い間、何のたよりをしないで、待つてばかりゐたあなたも、あなたですわ、愛するものゝ愛に生きてゆくのが、女である私だちのいのちですわ、女の美は朝露の間の朝顔の花よ、そして戀は宵々よひよにばつちりと開いて、眞晝まひるには萎えはてる月見草のやうなものですわ。

彼 わしは女の美をそんなものと思はぬ、わしは戀をそんなものであらせ度くない。

第一の女 私にはあなたがわかりません。

彼 解らぬであらう、しかし、わしにはあなたが解つてゐる。そしてわしはあなたを輕蔑する。

第一の女 ……………

彼 わしがすこしでもあなたに求めるやうな態度を示したのは、わしの心の寂しさの迷いだ、あなたはわしが求める女ではなかつた。

第一の女 ……………

彼 あなたは果敢はかない美をもつて、一夜の戀を享樂するがいゝであらう。愛より愛にと、その唇を

彼の靈

……………

第二の女の靈 神様がお待ちでございますうそろそろ參らうではございませんか。

彼の靈 はい

彼とかの女

かの女

……………

彼 …… わしに來てくれと言つてよこしたの
はお前だつたのか。

かの女 はい、私でございます。朝からこゝにこ

うしてお待ちして居つたのです。この夜更けにま
でなつても、お見えになりませんので私をお怒り
なされて、もうもうお會ひして下さらないのか、
又はお見棄てなされたのかと思ふてこの木の下で
泣いてゐたのでございます。

彼の靈

……………

第二の女の靈

母さまにさへ秘めたこのことも、今

はあなたに懺悔いたします、神様のお側では、何
にも、誰れにも、秘密はありません。神様のみ名
の下にはすべての者が、兄弟であり、姉妹でござ
います。

彼の靈

それまでにお慕ひ下されたことを感謝致

します。

第二の女の靈

……………

彼の靈

……………

彼 わしはこの頃一層力なく、寂しくなつて來
た、今日わしの靈は久々で、神様のみ前に、お力
を頂きに行つた、そして今歸つて來たばかりだ。
わしにお前と同じ姓の知り人がある。わしを呼び
に寄こしたと言ふのは其れではないかと思つた。
わしは來るのがいやだつた。大變に今日は疲れた
からだ……。しかしわしにはしきりに胸さわぎ

げお見舞なされ。そしてお慰めして下された方ではございませんでせうか。

彼の靈 はい、そのやうなこともございました。

第二の女の靈 その女のその後のことを、あなたはご存じないのでございませうね。

彼の靈 その女は死にました。わたくしは悲しうございました。そしてあまりの寂しさに、せめてもの心やりにとて、葬式とむらひの夕には、弔詞をさゝげました涙がとめ度もなくあふれて、讀む聲も出なかつたのでござります。

第二の女の靈 その女はよみがへされ、神様のお側で天てんの使女つかひめの一人となつて居ります。

彼の靈 さもあることでござりまする。彼女おれはしとやかな、けがれない處女ととめでござりました。一眼お會ひ出來ますでござりませうか。

第二の女の靈 はい、あなたの前に立つて居ります。

彼の靈 どこにでござりますか。

第二の女の靈 この私がその女でござりまする。

彼の靈 あまりと言へば、神々しいお姿でございませぬか。

第二の女の靈 はい……でも、あの國に居りましたときには、いろいろとお世話になりました。お禮の申しやうもございません。私の傳染うつりやすい病ひをもいとはれずに、しげしげとお見舞ひして下されるあなたのお寂しさもまた、私にお求めなされやうとするお心も、私にはよく解つてゐたのでござります。

彼の靈 ……

第二の女の靈 ほのかにも愛の心をあさゝげして、私はお慕ひ致して居りました搖籃ゆりかごの時代から、親の翼の下にばかり育てられ、青春の半ばはあの修道院で祈禱と讚美との中に、やさしい尼様方のお教へに従つて過し、そしてすぐ病ひの手に渡された私には、そして親の愛にもまぎらされぬ寂しさを、しり初めた私には、あなたが懐しうございました。

彼の靈 ……

第二の女の靈 私の心をおさとりなされたと知り交した時には、これがこの世の戀ではないかと思つて、面耻づかしく思ひました。

あつて實子として養つて來た人でした。私は叔母には男の子もないのだと思つて參つたのでございます。私は拒みました、叔母は義理と財産とを以つて、私を誘ひました。私の求めた自由は身にも心にも許されませんでした。私は自由は人から與へられるものではなくて、自分から作らねばならぬものであることを身に泌みて感じました、あなたと私とが、生活を共にするには、まだ時があなたに許されてゐないことを知つてゐる私は、どんなに苦しんでも、誰れからも束縛されない獨立の生活を決心いたしました、あなたの言葉に従つて、私は三年前お別れた時の *Virgin* のまゝで歸つて參りました。もしあなたが私をお愛し下さるならば、私のこの身も、この心もお受け下さい。もし最早お愛し下されないならば、私は私だけの路を求めねばならないのでございます。

彼 よくわしの胸に歸つて來て下れた、わしは以前に感謝する。わし達は、自分自身と言ふものさへも解らない幼い頃から、お互いの姿を、互に胸に刻みつけて過して來た。愛する者の中に、自己

を見出すと言ふよりも、むしろわし達はお互の胸に自己を創造して來たのだ。わし達はもう別れられない。別れてはならないのだ。わしが神に召されて行くべき怖ろしすぎる程怖ろしい路を、わしと共に進み、わしと共に生きてくれる女は、やはりお前だつたのだ、わしの心寂しさの迷ひも許しておくれ、お前の愛こそわしの寂しい心をはげましてくれる。お前の愛こそわしの寂しい心をあためてくれる。わし達は神が歩めと言へば歩まう、死ぬと言へば死なねばならぬ。すべてが神の導きだ。わし達の生涯は教へに殉ずる者の生涯だ。わし達の肉體は滅びるのであらう。しかし、教への路はどこまでも續くであらう。わし達の屍は朽ち果てる。けれども其處に眞理の種は芽ばえてゆく、そしてわし達の流した血潮がそれを培つてゆく。花が咲く實が結ぶ。後の人々がその實に養はれる。その人々の中から必つと教へに殉ずる者が撰ばれる。そして路が更に開かれてゆく、眞理は決して滅びない、眞理に生きる者のうちのちこそ、永遠につらなるいのちだ。神の意志に嘉せら

がしてならなかつた。もしやお前ではないかと言ふ考がはつと胸に浮ぶと、互ひに何のたよりもなくて、過ぎた三年の後にもかゝわらず、わしにはどうしても其の豫感が打ち消せなくなつた。わしはどうすればいいのかを、わしは途々考へながら來た、そして定めた。大變におくれたのはそのためだ許してくれ。

かの女 お出でされたのが嬉しうございます。

彼 今お前はどうなつてゐるのだ。

かの女 その事についてあきゝして頂きたいのでございます。

彼 わしも話してもらい度いのだ。それに依つてわしのお前になす可き事は決められるのだ。

彼の女 三年の間、私が何ひとつあたよりを致しませんでしたのは、多少なりとも私にお心をむけるために、あなたの貴いお仕事の妨げをしてはすまないと思つたからでございます。私はあなたの愛を信じて居りました。そしてあなたも私の愛を信じて下さると思つて何の不安もなかつたからでございます。

彼 そう言はれると、少しは耻かしことをして來た。わしはお前からのたよりがすこしもないので、お前の愛に不安になつて來た。そして寂しくなつて來た。わしは愛なくしては生きられぬ人間だ。わしと共に生きて、わしの怖ろしすぎる程怖ろしい路を共に進んでくれる女は、お前ではないのかも知れぬと、時々は思うやうになつた。わしは求めるやうな態度を二人の女に示さへした事を告白する。しかし、その時に、わしはお前が忘れられないでゐながら、他の女に求めやうとする心を、どんなに苦しく思つたかも知つておくれ。

かの女 あなたのお寂しさを、それ程とは思ひませなかつた私の不束をこそ、反つてお責め下さい。

彼 それはわしの心寂しさの迷ひからだ。

かの女 自分の味方と思つてはるばる頼つて行つた、たゞ一人の叔母も、私には敵となつたのです、丁度三年前お別れする時、あなたは叔母が氣心も知らぬ男に、私を強ひはしまいかと言はれましたが、叔母はそうだつたのです、それは叔母には故



誕生の日

北米田中 葦城

幾千萬の歲月は
わがいのちの過去に磨滅され、
幾千萬個の犠牲は
わが肉體の後に消費されたり、

而してわが現身亦一個の

犠牲者にして

幾億萬の歲月

わが前にあり

あゝ事々物々

萬衆みな完全を

追求して精化し

進展す

わがこの肉體のことごとくは
やがて土と化すべき物なれど
さわれ予はあもふ！
わが靈魂は朽ち果つるべく
創られしものにあらじと

一個の精靈肉體なる衣を

つけて地球の上に呱呱の聲を

揚げし時、死は墓門を

開きて彼方に待ち……

宇宙に實在する大靈は

全きわがいのちを彼處に待てり。

四、八、二一、

れるいのちだ。

かの女 ……………

彼 解つたか。

かの女 はい、解りました。そのやうなあなたにお従ひすることが私には勿體ない程でございます。

彼 お前の謙讓な性格が、お前にそう思はせるのだ。

かの女 お別れした時に較べれば、全く別なほどの大きな權威でございます。

彼 そうであらう。だが權威は神から許されるのだ。努力ばかりがわしの所有だ。努力する者にはかり、神は報いて下される。そして要する者には何をでも與へて下される。努力する者ばかりが救はれる。わしはまだ努力する、いつまでも努力する。そしてお前もだ。

かの女 はい、私も努力いたします。

彼 わし達は、わし達の過去について神様に感謝しやう。そしてわし達の現在について神様を讚美しやう。そしてわし達の未來について神様に祈禱しやう。

—— 一九一五、七、二一 ——

初秋の朝に

葦城

晴れやらぬ大空を

彼方へ何者か

しきりに急ぐ……

そは形なく

聲なく

而して色もなし

歡喜と偕に明け來し晝は

斯くて夜の暗黒に

包みかくさる——

あゝ彼方より彼方へ

永久寸時も足を息めず

馳けゆくものよ!!

四、八、二九、

LONELY DOLLS

He was once a doll-maker.

Some dolls he made were quite commonplace and not at all to his taste.

Some dolls were rather rare works and much to his ideal.

Now he makes no more dolls.

But he is watching with care the fate of his dolls.

Contrary to his presupposition, most of the ordinary dolls soon found their buyers.

But the better works seldom attracted the eyes of customers.

And even when they did, their price was too dear.

Those dolls in the hands of the buyers are usually happy.

But some of them have been unfortunate.

Some have been broken, others forsaken.

And such fate terrifies the superior dolls.

It makes them more afraid of customers.

When the dolls are sold, whatever the state of their consequent life may be, the maker has almost no chance of seeing them.

But he can see the unsold ones when he wishes.

For they are yet in various stores.

These latter do not lament that they are disregarded by the masses.

On the contrary they are proud of their superior quality and pity the fate of their lesser comrades.

Likewise, they are glad not to lose the opportunity of frequently meeting their maker.

The maker also has pride in them.

He pities the people who cannot appreciate his finer works.

But he is glad that they are thus preserved for his sight by the ignorance of the people.

So, often he meets the works of the past.

He looks at them with much delight.

The days of his workmanship are remembered with satisfaction.

Nevertheless,—his heart is strangely touched by the inexpressible loneliness of these dolls.

Tetsuzō Okada.

優待俘虜と、中立の寺院の監督下にある當局者の管理に委ねられた普通俘虜の二種に俘虜を分けてゐた。ピスマに依れば、再び軍務に服し得ざる迄に負傷したる俘虜は故國に送還せられ、その他は勝者の陣營に伴われ、負傷は其處で治療せらるべきである。俘虜の人道的な取扱ひに關する此の種の取締りは、千九百六年に開かれたゼネバ會議の第一章第一條の規定に比肩し得るものである。又方今西歐に行はるゝ國際法に於て、大使は犯す可からざるものと判定してあると同じやうに、古代印度に於て使節を殺害監禁することは、非常な罪惡と考へられてゐた。

今日問題になつてゐる『戦争兒』の如きも、印度に於ては十五世紀以前に、注目されてゐる。幼兒の生活の破壊を防ぎ小兒達が、私生兒として辱かしめられるのを保護する爲めに、この『戦争兒』に責任ある縁組を、正當な結婚の状態に引上げた、承認せられたる此の種の縁組には三様の種類がある。即ち(1)男女がお互に欲求して結合した場合のもの(2)男が強い飲料で勢づいたり、理知の働の亂れてゐる女を秘密に抱擁した場合のもの及び(3)女の縁類とか友人が戦場で負傷や戦死したのち

に、號泣したり助を求めてゐる女を、男が暴力でその家から奪つた場合のものである。又古代印度にては、正義の戦は徳であつた、死力を盡して戦つて獲た勳功とか、光榮とかは同僚の羨望するところであつた。火器及び火藥の發明は、西歐に於ては第十三世紀のロオガア・ペエコン及び十四世紀のベルトオルド・シユルワルツの二人に歸せられてゐるが、併しマハバラタ中にこれらの兵器に關する記事があるといふことは、歐洲批評家の一致するところである。

理論に於ては、古代印度は、人道及び政策の上から戦争を認めなかつた。けれども、マハバラタに現はれてゐるやうに、時が熟すると、平和の爲めの熱心な論議を無視して、戦争を選んだのである。(Hibbert Journal)

佛蘭西の婦人

佛蘭西では、町なり村なりに防備を施さねばならぬやうになると、其の地方の役人等は居住者の撤退を命じて、助なき婦女子をして砲火の慘害から免れしめようとする。併し之等の婦女子は、保護を依頼する男子もなく、何處に行く可きかも知らない。彼等は唯道に

沿ふて、夜となく晝となく歩み続け、適當な避難所を見出さうと努むる。まことに慘憺たる有様である。

佛蘭西の政府では、これ等の婦女子に對して、能きだけの保護は加へてゐる。政府は多くの小兒を國の南方に送て、都合のよい所に、その母と共に留まらしめた政府は婦人達の中で、今迄彼等を養つて呉れた父、兄弟、夫などが戦場に行つてゐる者には、一日二十錢を與へ、その保護者を戦場に送つてゐる小兒には一日十錢を給與する。併し孤獨の婦女子で、戦場なる男性の縁類を有しない者は、全く此の保護を受けることができないのである。

政府は戦費の支出に苦しんでゐるので、これ等の不幸な婦女子は慈善家とか、慈善團體とかの保護によらねばならなかつた、例へば佛蘭西の現商務大臣の娘のトムソン嬢の如きは、一身をこれ等の不幸なる人々の救済に捧げてゐる。現に佛蘭西の南方で數千の婦女子を保護してゐるが、尙數萬にも及ぼしたいと希望してゐる。彼の女は今ボルドウにあつて、此の事業を指揮してゐる。



印度哲學の戰爭觀

エス・エム・ミトラ

西曆紀元前千五年に書かれた大史詩マハバラタによれば、戰爭の道德性とか便宜主義とかいふことが分かる。よい戰爭は悪い平和よりも望ましいものであるか如何かといふ問題も、詩中の一人物ヴィデユラの論ずるところ、同じ詩中の人物ビスマの説に従へば、『有力な軍隊を集めた後にも尙平和の手段を探る可きである。戰鬪によつて得た勝利は遙かに劣つて

ゐる。』古代印度人は又戰爭を避ける爲めに條約とか同盟とかを用ひた。彼等は條約を(1)恐怖から行ふもの(2)居中周旋により行ふもの(3)保護金により行ふものの三に分類し、同盟は平和の至貴なる幫助者であり戰爭の援助者であると見た。ビスマによれば一統治者の週圍の種々の知友は(1)同一の目的を追求する人(2)統治者に極めて歸服せる人(3)統治者の縁類者(4)贈物、深切等にて勸心を得たる人(5)一方に自己を置きて兩方にすることをせざる實直の人等で、近代にありて各國が派遣する外交官を適切に概説したものである。彼れの時代に已に戰爭と政略との密接な關係が實現されてゐる。

力に訴ふる前に古代印度の紛争せる各邦國は各外交官を派遣して、平和な説得によつて効果を収めやうとした。

希臘、羅馬の發生前數世紀の頃、中立といふことが深く研究せられ、これを四大別した。第一は積極的にも消極的にも戰爭の進展、結果などから必ず影響を受ける中立國、第二は實際に何等の影響を受けないから、戰爭の進展に無心な中立國、第三は戰爭の進展や結果によつて影響をうけ、やりさへすれば交戰國

とはならず、經濟の力を繰つて戰爭の針路を變じ得る中立國、第四は戰爭の影響は受けながらも、その針路を變ずるに足る力をもたない中立國である。又交戰の正當なる行爲に對する古代印度の法則は、人道と政略との二の基礎の上に定められてゐる、極端に慘虐なる行爲は、戰場を數々巡視するリシ(聖人)によつて豫防せられた。リシは絶対に中立であつた。彼等は平和の使節ではなく、戰爭は空氣を一掃する雷雨だと見た。

差別なき殺戮は、印度では非人間的でもあり、不便でもあると見られてゐた『よしその勝利を確實になし得るとも、王は決して敵の軍隊の大部を刺してはならない、敵の心情に永く屈辱の感じを與へるやうな害を加へてはならない』とビスマはいつた。彼等は不正な方法で勝つよりも、寧ろ降伏を選んだのである。また所謂公平なる戰爭に關する印度の考へは、現時の戰亂に流行せるものに比して遙かに優れてゐる。工兵に對する工兵、騎士に對する騎士といふのが、ビスマの戰鬪の法則である。

古代印度は又、俘虜の虐待を防止する爲めに、敵側の不公平な戰鬪に對して人質とした

『それでは先生方は?』

『私たちの両親や先生方は』インゲボルグが肩をゆすぶりながら言つた『近代的ではないのです』

始めて聞いたこの言葉は、知識階級には新獨逸の合ひ言葉であつたのである。ルウテルを尊集するのは近代的でなかつたときいた。

餘計な文字を、綴の中から振り落すのが近代的なのであつた。舊獨逸風の居心持のいゝ居間を飾り直すことや、醜い改良服を着けて頭布を取り棄てることや、恐ろしい色彩の粗野な繪を貴ぶことや、唯一人で外出することや、話しに外國の言葉を用ひないのやが、『近代的』なのであつた。

併し私の蒙を啓いて呉れたのは校長であつた。

『近代的ですつて』彼の女は叫んだ。『私の前では其の恐ろしい言葉を使つてはなりません!』『どういふ意味なのでせうか?』

『それはね』彼の女はいつた『眞の獨逸が縮み上るやうな物が皆それです。祖國を偉大にしたものや、眞の愛國心の死滅することを言つてゐるのです。私はその言葉を聴くだけでも腹が立ちます』普通『故人の日曜』といつてゐ

る獨逸の祭日の前夜であつた、インゲボルグが私の室に來て、物故した私の家族の寫眞に常緑樹を具へたくはないか、『聖晚餐に列するために教會に行かぬか、若し行けば黒服が必要であるがと尋ねた。私は聖晚餐はルウテル教會にはどんな教があるのかときゝ返した。

『私は知りません』彼の女は言つた『私は其麼こと信じはしませんもの、それは近代的ではないのです』

けれどもこのインゲボルグが校長から貧兒の名親になれと命ぜられた時、彼の女は從順に教會に行つた、解放せられた彼の女の智識や主張よりも、服従の習慣とか權威を恐れることの方が、力が強かつたのである。その夜私達が集まつたとき、彼の女は突然兩手を擴げた。

『私は自由になりたい』彼の女は叫んだ『私は美しい!』——彼の女は非常な美人であつた——『料理などはしたくない。私は新らしい女です、大きな情感の中に生きてゐたい』『どんな情感なのです、インゲボルグさん』と私はきいた。

『ある時』一寸躊躇らつて、彼の女は言つた、

『二人の友達と、ある官覺の中に全く自身を忘れようと思いました。私達は三鞭酒を買つて飲みました、酒が飲みたかつたのではありません、唯ある經驗に熱中したかつたのです』かうしたことは、女生徒達には有り勝なことであつた、併しインゲボルグは、父の命に従つて結婚もすれば子供も産み、料理もした。

『あなたは』今年十八のヘルタが私に言つた『ある天才の必要にあなた御自身をお委かせるになるのは、高尚なことゝは御考へになりませんか? それは自分自身をある天才——才能ある人です——に與へれば、その人の力が極度に伸びるといふやうな場合を云ふのです』

彼の女は又よしその天才が既に妻をもつてゐるので、新たに結婚はできないにしても、彼の女が身を委せれば、その天才を刺戟して大なる收穫が得られゝばいいではないか、力と收穫とは人生の大事で、若し私の小さい力を天才の目的の爲に捧げたなら、私もまたその收穫を得てゐるのだとは思はないかと言つた。私は天才に對するさうした貢を信じないこと及び宗教の反對要求を説明した。

婦人の見たる現代獨逸

の内面

エヴァ・マツデン

私が或る目的をもつてダウター・ベンジョナタの學校の寄宿舎に宿したのは、千九百三年のことであつた。其處は普通旅人の國外では二年の間全く獨逸の人々の間で生活した。私は學校に住むといふ特權のために英語で女生徒達と話すことになつてゐる寄宿者であつたので、教師などには見られぬ親しきで、彼らと交際した。生徒は高貴の令嬢もあれば、成金で所謂カイザアお氣に入りの階級の令嬢もゐた。社會に出る前に家政の術に熟達もし、山間の清い空氣でその容色をみがかうためであつた。大まかに言へば、彼等は全く自己意識を缺いてゐて、個人として高ぶることをしなかつたけれどもチュートン族といふ方から見れば、彼等はまことに高慢で、また非常に嫉妬深いのを知つた。

私の室は間もなく思想のしつかりした生徒達の集會所になつた。そして永い冬の夜なな、彼等は私の暖爐のまはりに座つて、お

互の心が熱心に争つてゐる凡ての問題を論議した、はじめ老牧師が私は英國人でないことを證明して呉れるまでは、私の村の少年達から投げつけられる石を避けてゐたが、私は至つて和やかに、凡ての人と同じやうに幸福に暮した。併し當時のことを現下の大戦亂の光で見ると、私に示された二三の深切は、それを私は自然な國民的な虚榮心から、全く私の人種のすぐれてゐるのに對する貢であると思像してゐたのであるが、實は他の人に辛らく當る面であつたやうに見ないでは居られない。他の人といふのは名前も個性も私とは異い、毎つも『英國婦人』と呼ばれてゐた人のことである。

私には夕食に白麴麵包が自由に貰へたけれど、その『英國婦人』にはきつと殊更惜しさうにして與へるのであつた。そして彼の女がそれを喰べる間、私達は故らにフレデリック女皇の失敗の逸話を御馳走され、また食物に對する英國の奇妙な嗜好の暗示的な奇癡な逸話を聴かされた。

英國に對するチュートンの強い感情を、初めて私が見たのは、ある夜罵り合ふ聲に驚ろいて教師控室に馳せつけた時であつた、私は

その時中央に、可なりな歳で生れも宗教も修養も生粹の普魯西亞の婦人が、一枚の倫敦の繪入新聞を高く振てゐるのを見た。その婦人の周圍には彼の女に劣らず激した一團の人々が集まつてゐた、眼といふ眼は『英國婦人』に對する憎しきで燃えてゐた。『ご覽！ご覽！金切聲が傳つた。』この英國の人達が、どんなことを思ひ切つて私達のカイザアにしてるかをご覧なさい！』

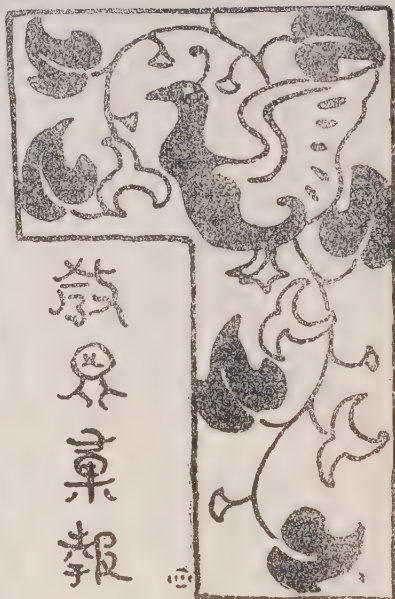
それは英國の元帥とて、ある建物の上り段に立てゐるカイザアの姿が寫してあつて。その伯父で英陸軍の司令長官たるエドワアドよりも二段下に立つてゐた。騒ぎは靜まつたのは、私が骨を折つてウキリアム自身は陸軍の禮儀に服従するのが當り前と看做してゐたかも知れないし、何も殊更な惡意でされたことではなかつたことを説明してからであつた。しかし私は英國婦人に注意して、一體獨逸人は怒り易いから、將來その新聞を自分だけに保管しておくようにさせた。

『あなた方の御両親は、あなた方が其麼考をもつてゐらつしやることを、ご存じですか？』と私驚ろいてたづねた。生徒達は頭をふつた。

門司合同教會

先般來行はれたる協同傳道の結果門司の

各派教會間に強盛なる超宗派的意識を生じ、遂に各教會の合同談起り其計畫進行中なりしが、愈々相談熟し新合同教會の設立を見るに至れりといふ。然れ共所報に依れば各教會凡て之に赴きしに非ず、聖公會救世軍は全部動かず、美以は數名、浸禮は十三名日基は二十七名居残り、一教會を擧げて之に加入したるは僅に組合教會のみなり。而して浸禮美以共に傳道を繼續し、日基の殘信徒も假教會を組織したるを以て、結局組合教會の代に一合同教會を生じたるの觀を呈せり、此試に依て教會は毫も合同されず、只何れの派にも屬せざる新教會を出現せるに過ぎず、是に依て觀れば、我國の各派合同の如き眞に前途遼遠にして當分空中樓閣の感なくんば非ず。



協同傳道の評價如何

今春來各地に於て舉行されたる

各派協同傳道は、今秋再び東北其他各地に於て舉行されんとす。此際第三者としての吾人が之に對する感想を述べて參考に供するも欠勝無益の業にてあらずと信ず。さて今春來行はれたる所に依て觀れば、此度の傳道派は、其陣容の堂々として戰線の廣大なる未曾有と云ふも可なり、曰く東西の傳道委員長、曰く新聞廣告傳道、曰く自動車傳道隊、連夜入幕傳道等擧げ來れば随分新機軸にして人の意表に出てたる運動法なり。要するに這般の協傳はあらゆる文明の機關を利用して尙足らざるものゝ如く所謂教會的能率増進法に據つて計畫されたる運動なりと評するを得べく、又物質的勢力の威嚴を以て動き且動かさんとしたる運動なり。沖に出て大なる網を投じたとすれば、隨て其獲物も比較的多かりしに相

『宗教は』正統派の牧師の娘のアンナが口を
 いった『弱者のための人工的な心張棒に過ぎ
 ません。人間は宗教がなくつても、善くも、
 強くも正しくもなれます、宗教のいるのは、弱
 い女達に限ります』

『それをお父さんにお話しになりました？』
 と私はたづねた。

彼の女は肩をすくめた。

『いえ、父は近代的存在ではありません。父が考
 へるやうには私は考へられないのです。父が
 私に信じさせようとすることを信ずること
 は、とてもできないことです』

ある中尉夫人が私の本を借りていつた。そ
 れは私の著作であつたから、獨逸を去るとき
 に、暇乞その本を受取りに行つた。

『いえそれは上げられません』主人の士官
 が笑ひながら言つた『私は貰つて置きたい』。

始めは戯言だと思つたが是非共紀念として
 欲しいといふ。人間の權利が無視された時に
 は、その相手をよくするのは力のみである。

併し私は自分の傘で、士官の頭を擲つことが
 できなかったから、私は本を失つてしまつ
 た。私が家を去らうとするとき、士官はその
 子供の寫眞を私の手に握ぎらせていつた『公

平な交換です、お旅行先から繪葉書を頂きた
 い』

日曜の夜は學校で舞踏會を開くのが例であ
 つた。今年十五の英國の少女が、平素の快
 活にも似ず、壁側に立てるのを見て、私はたづ
 ねた。

『舞踏りたくはないの？』

『舞踏りたいの、ほんとうに』

『では何故舞踏りなさらないの？』

『だつて英國の日曜ではないのですもの、私
 が此處に来る時、英國の教會は、さるものを
 私に期待してゐるといふことを、決して忘れ
 ませんと、母さんに約束しました。舞踏りた
 いけど、約束は約束です、さうぢやなくつ
 て？』

『これもまた近代的存在ではなかつたのである』

(Hibbert Journal)

認識論

紀平正美著
 岩波書店發行

認識論は哲學の中に種々な分科が生
 じた今日、純粹の哲學であるとして言
 はるゝ學問である。凡そ哲學的思索に
 收り思想問題を取扱はんとするものは、
 全體第一に之に依て頭を作つて居るべ
 きである。然らざればボイト・センカ

ーなどといつて小なる獨善を以て満足
 するといふ不徹底なことになる。認識論
 は考へるものゝ杖であり、燈明である。
 然るに學問が學問丈に之に關する邦語
 の著述は誠に少く、二三翻譯がある許
 である。今岩波書店の哲學叢書が之を
 以て第一編としたのは誠に用意を得た
 ものである。著者は斯學に於て造詣深
 き人、内容を窺へば、第一編にて認識
 の歴史的考察をなし、第二編にて認識
 の成立を説き第三編にて認識の批判を
 試む。其説き方は外書の直譯流に非ず
 して時に東洋思想に例をとり、或は
 禪或は印度哲學に解れ、然も難解不透
 明ならず、普通の好學者に對して充分
 の用意ある書き振なり。殊に、信仰
 と知識の問題、宗教と哲學の關係、信
 仰論等は吾人にとりて興味を感じさせ
 る章節である。思想問題に志あるもの
 は是非一讀すべき良書であるといつて
 差支ない。(定價一、二〇豫約割引あり)

●●● ■基督教徒の御大典奉祝

今度の御大典に際し全國の基督教徒は各地方に於て夫々奉賀式を舉ぐる筈なるが、御大典舉行地なる京都にては各派聯合左の次第にて奉賀及紀念運動を行ふといふ。

●●●
奉賀式 十一月十一日(木曜) 午前十時同志社校庭にて舉行、總理大臣英國大使全國基督教徒、及宣教師代表者の祝詞を乞ふこと。

●●●
信徒大會 十一月十一日午後七時京都青年會館に開會。

●●●
記念傳道 十一月三日より廿六日迄御大典紀念博覽會正門前新設會場にて開催各派教師諸先輩數十名出演、特に山室軍平、木村清松二氏盡力せらるゝ由。尙同所には婦人矯風會の無料休憩所、接待所及賣店の設備ある由。

●●●
トラクト傳道 記念傳道開期中特に印刷したる小冊子約卅萬部を配布すること。

●●●
事務所 右開期中 烏丸通三條下る東側に事務所を設けること。開期前は三條通柳馬場青年會館を事務所とす。

●●●
經費 三千三百圓は全國協同傳道本部及京都市内各教會を始め廣く全國教會及内外有志の寄附を待つこと。

●●●
尙右運動の委員長には原田助氏副委員長にはタツカー氏を擧げたり。

■御大典と矯風運動

曠古の御大典に際し吾人は最も嚴肅なる態度を以て奉祝の意を表せざるべからず。國民歡喜の熱情に動さるゝに當り、藝娼妓の輩をして白晝公然社會の公席に列し、此盛儀を穢せんとするが如きは、御大典の精神上又國民教育上

甚大なる關係あり。矯風會が卒先早くも此點に著眼運動したる結果、斯種の弊害が主要の都市に於て見るべからざるに至らんとするは大に喜ぶべき事にして、尙全國一般に此善良なる公德が維持されんとを祈る。

■御大典と基督教代表者

此度の御大典には基督教より代表者を參列し得ざるは吾人の深く遺憾とする所なり。然其各地に於て行はるゝ賜饌者の中には、新舊三教會の有力者は優遇者として其中に加へらるゝやに傳へらる。然ば少くとも教會同盟の會長たる小崎弘道氏、天主教會司祭本城昌平氏、正教會主祭長三井道朗氏等は其榮に浴すべきかと推測せらる。尙此外基督教諸學校の校長等にして同じく此光榮を荷ふもの各地において數名あらむといふ。

■基督教徒の聖書奉獻

全國基督教會は此盛儀に際し、兩陛下に聖書の一部宛獻上する筈。此聖書は横濱聖書會社に於て特別に謹製したるものなりといふ。

■ストリジ博士の來朝

多年桑港にありて我日本人のため盡力し日本人の父と稱せらるゝ同博士は今度、在米同胞基督教會より我 聖土陛下に獻上する英文聖書を携へて來朝されり 十一月下旬まで滞在さるゝ筈。

■海老名彈正氏の歸朝

加州同胞啓發運動のため招聘されて婦人同伴渡米中なりし同牧師は去月十九日歸朝されたり。同氏の運動は在加州邦人の沮喪せる精神を鼓舞作興すると頗る大なるものありしといふ。

■友愛會長鈴木文治氏

同氏は我國の勞働者を代表し十一

達なし、彼等は之に満足し隨喜せるが如し。然れ共第三者より見れば、這般の運動は單に一陣の大風が一過したる如き感なしとせず。只大仕掛の御祭騒の運動なりしといふ感を與へしにすぎず。其聲の高く大なりしに非ず、其社會人心に與へたる精神的印象に至つては頗る薄弱にして殆ど何物をも残さざりきと云ふも不可なからん。其高く掲げたる大旗は果して如何なるものなりしか、其高調せる福音は如何なる新しき響を傳へたる。是れ彼等の聲の徒に騒がしくして、其去るや却て人心に落漠の感を催さしむる所以に非ずや。

加之協同傳道は今や却て其内部より紛糾を生ぜんとしつゝあるが如し。由來吳越同舟は有終の美果を收め難し、殊に宗教に於て然りとす。過般來教界の問題となり識者の聲を買ひつゝある南長老宣教師が宮川牧師に對する態度の如きは、即ち此内訌を最も赤裸々に發表したるものなり、宮川氏は西部協同傳道の總大將なり。而して此大將の掲げたる旗幟に對し、其部下は心大に平かならざるものあり、而して不平は遂に暴發したり。東部の協總大將たる植村正久氏の主幹する福音新報は、此西軍の内訌に對して大將の肩を持つといふよりも寧ろストライキ連に油を注ぐが如き口調を以て煽動的言辭を弄したり。是に於て日頃其信仰の傾向を異にせる組合派の少壯血氣の士は默する能はず、猛然として無禮粗野なる宣教師を難すると共に、福音新報の記者に向つても論難の鋒先を向けぬ。賽は地に投ぜられたり、若し今日の宗教家にして言責を重んずるものならば、彼等は此論難に答へざるべからず。斯して聯合軍は其内部の統一に先づ意を注がざるべからざるに至りぬ。

過般の協同傳道にも一の旗幟無かりしに非ず、然も其旗幟なる何派にも向くといふ頗る好都合のものならざるべからず、於之各宗派は其個性を没却し、其特色を棄て、群衆の喜ぶものに從はざるを得ず。高遠なる宗教意識も低級淺薄狹隘固陋なる狂信者と伍して走らざるべからざる運命となか。之れ其運動の陣容堂々たり、其聲の騷然たるにも係らず、遂に精神的印象の頗る薄弱なるを免れざる所以なり。

要するに從來の經過より大觀すれば、協同傳道は整頓されたる物質的威力を以て人心を動かさんとしたるのみ。内より迸發し來る統一的生命の運動に非ずして、外より陣容を整へ足並を揃へ兵器を多くし以て動もすれば亂れんとする味方の聲氣を統一せんとせるのみ。然れ共物質は靈を欺くべからず、外性如何に旺なるも内的生命の源因となる能はざる也。是れ戰未だ央ならざるに早くも内訌相次で起り虚勢は破れおぞくも醜態を暴露するに至れる所以に非ずや。抑傳道の事たる自己の主張なり、個性の發揮なり、之に始めて傳道の力あり靈性の緊張を見るべし。自己の主張と個性を没却するは、宛も鹽其味を棄つるが如し。斯くては一斗の鹽も砂礫と何の撰ぶ所かあらん。各派の協同の如きは親睦會や事務的會合に於て其好果を擧げ得るべきのみ。靈的征服を意味する傳道を以て親睦會の如き閑事業と同一視するとの危險を避けよ。より大なる紛糾と擾亂を生じ、内的空虚と不統一の醜態を暴露するに先つて、寧ろ教會各自が徹底せる個性の發揮に努力せよ。是れ吾人が協同傳道の高等批評より得たる感想として、敢て提言する所のもの也。

最近教學評論界一覽

(主として基督教に關せるもの、)
*印は單行本なり

研究 解説 註釋

愛弟子ヨハネの深さ(開拓者)	佐藤繁彦
基督の人格研究(同上)	栗原基
人としてのタゴール(早稻田文學)	花園綠人
教會歴史の與ふる教訓(神學研究)	レ ー ク
最深實在としての人格(同上)	小林彦五郎
ヨハネ傳のロゴス神學(同上)	須貝止
パンカリズム(同上)	記 者
タゴールと惡の問題(同上)	池園哲太郎
哥林多前書講義(基督教世界)	武本喜代藏
現代文明と理想の進化(同上)	浮田和民
ドストエフスキーの宗教(同上)	石田貞藏
約翰書第一書總論(福音新報)	佐 藤
宗教道德の第一要素(科學と文藝)	内 藤 濯
種族の精神と個體の生活(同上)	加 藤 一 夫
主基督贖罪の意義(正教新報)	三 井 道 郎
歐洲に於ける基督教の將來(東亞の光)	松 村 介 石
使徒パウロの改革と世界的理想(大阪講壇)	渡 瀬 常 吉
ブルノーの倫理思想(同上)	津 荷 環 山

宗教と人生(新人)	帆 足 理 一 郎
近代人と宗教(同上)	額 賀 鹿 之 助
ベルグソン以後の進化論と目的論(同上)	賀 川 豊 彦
統一主義の主張(六合雜誌)	サンダーランド
宗教は名詞か副詞か(同上)	岸 本 能 武 太
藝術の權威(同上)	吉 田 絃 二 郎
結婚道德の新典型(同上)	一 條 忠 衛
人文科學としての宗教(哲學雜誌)	鈴 木 宗 央
平和主義か軍國主義か(丁酉倫理)	深 作 安 文
平等の諸意義に就て(同上)	藤 井 健 治 郎
* 生命中心の哲學(警醒社、〇、八〇)	三 並 良
* 認識論 (岩波書店、一、二〇〇)	紀 平 正 美
* 藝術と哲學との間(高踏書房一、〇〇〇)	石 坂 養 平
基督標準の生活(開拓者)	小 松 武 治
祈禱の力(同上)	山 室 軍 平
凡人淨土(早稻田文學)	相 馬 御 風
力か死か(同上)	稻 毛 詠 風
修養の根底は信念の涵養にあり(同上)	成 瀬 仁 藏
人格の力(新女界)	安 井 哲 子
良心の叫び(同上)	海 老 名 彈 正
天才の與ふる教訓(新眞婦人)	西 川 文 子
耳ありて聞ゆるものは聴くべし(基督教世界)	小 崎 弘 道

月加州に開かるべき全米労働者大會に出席のため渡米中にして、ギユリツク氏の紹介にて加州労働同盟幹事と會見し、爾來各地を巡回視察講演したるが、氏の態度講演は彼等に好感を與へ、從來排日の原動力なりし加州労働者の領袖も近來大に其態度を和げ來れりといふ。吾人は同氏が充分其重大なる使命を果して無事歸朝されんことを祈る。尙今岡氏の來信に依れば、九月中旬同氏はボストンを訪れたる由なり。

■宮川收師異端問題の其後

同問題に關しては其後組合教會内の少壯牧師中、南長老宣教師會の態度に關し憤慨する者あり、近く大阪に於て開かるべき同派の大會において何等かの處置をとるべしといふ。尙福音新報にては頗る信仰的衝氣に充てる文章を以て此問題を批評したるが更に火の手を旺ならしめたる感あり。基督教世界に於て津荷輔氏大に之を難詰し、次で渡瀬常吉氏は「福音新報を讀む」福音主義とは何ぞや」と題し同紙上において堂々と陣を張りて福音新報の主張を駁撃して其牙唇に迫るの觀あり。更に「新人」誌上においては富永德磨氏宣教師會の態度を批評し、轉じて福音新報の批評の不當にして其態度の常に基督教的不ならざるを痛撃し同誌は常に曖昧なる福音主義を掲げて他を批難排撃すれど、自己の立脚地を明白に積極的に主張すると極めて稀にして、他を批評するの資格なき卑怯なる危險なりと痛論せり。然共爾後福音新報側は富永氏の言の如く答ふる力なきものゝ如く鳴を沈めて全く沈黙の状態にあり。由來正統派は正々堂々の態度に出でず陰險なる報復手段を取るを以て此問題も未だ全く落着せりと見るべからず。但此問題に關しては小教會の機關新聞も夫れと

なく之を論じ、所謂福音主義なるものゝ復習をなせるが如し。但此問題の論調より見れば往年の三位一體論や贖罪論よりも激烈なる言辭を以て論難さるゝに係らず、教會内外一般の精神を動かす點においては既に往年の如くならざるより見れば、此問題が如何に現代の心靈に觸れざるものなるかを推測し得べく又隨て宣教師等が老婆心の時代と全然没交渉なるを反證するものといふべし。

■帝大の宗教研究會

東京京都兩大學の印度宗教學出身者相計り、宗教研究會を興し年四回の研究雜誌發刊の計畫目下進行中の由。成立の曉は我國において最有力なる宗教研究團體なるべく吾人は其健全なる發達を祈る。

■自由基督教會

同教會に於ては九月廿六日夜神田女子音樂學校に於て講演會を開き岡田内ヶ崎相原氏等の講演あり百餘名の來會者ありしといふ。尙同教會にては會則に依り、内ヶ崎、安部、岸本、岡田、小山、永井、相原等の諸氏を擧げて教壇擔當者となし、内ヶ崎氏其主任たる由。同教會毎日曜の集會は午前九時より實行すといふ。

■統一教會

同教會には毎月二回内ヶ崎牧師禮拜説教をなし、三並良氏教務主任として當會務に當たる由、去月九日より三日間連夜特別講演會を開き、十日の朝は印度名士ライ氏の説教ありき。

反

響

性格と思想との關係

に就て (書翰節錄)

西 淵 峻

— 木村氏の「型と思想」をよむ —

六合誌と共に送つて呉た兄の書翰正しく拜誦。左に右く、私にとつては、そのエーペヤマンなるものは大して意味をなさない事には變りはないので、というても、ニイチエの「人」が多少の缺陷をもつてゐるにした所で、彼れの哲學を一概に黜くとは能きん。例のジエームズも言つてゐるやうに、天才程に病的な所が大きい、即ち片寄つた所が大きいから。然し其れは以て、その思想乃至哲學の提供する眞理の最後の判決決定を拒むわけにはいくまいと思ふ。で、私はその缺陷を以て君が言はれる様に、在來普通の準據からして許りの缺陷だといふ事を背じない。

でも、此の關係を論じ盡すといふ事は認識論や何かをもち出さねばならぬから、學者ならぬ私には能きないし、又欲しない。大問題になるから、兄のニイチエ新論とそれに附隨した非價值論とを吟味するに方つて、私がその根本主張とニイチエ新論とを別々に論じたのは、今にして思へば、その前にきめておかねばならぬ問題があるのだ。それは兄の性格とニイチエの思想との密接な關係といふ事である。で、此の點だけ少しく深入して例證しておく。

(今その處を省く)。

かう見てきて、又ジエームズが言つた哲學の如何はその人の氣質の如何に依るといふ事が眞に近いやうに思はれる。さういへば兄がよんで送つてくれる六合誌にも木村氏が心理學の講話的論文「型と思想」の中で、例の氣拔な口調で、ジエームズの此の言を乗りこして、それよりも型^{タイプ}と思想とがより密接して關係をもつてゐるやうに斷じてゐるが、果してそんなものかどうか。君も素人として可成り感心したやうだから、さう思つてゐられても更に誤つた論法を起されても困るから、一つ此の點に就いて木村氏の論を吟味して此の間道を通つて自分達の論程を選びたい。で、思想とその心像の型との關係を説く事は普通の事で今更ら吟味するも思ふかな事だが、唯私の所謂性格氣質といふものが、いはゞその人の心の特種の傾向を指すと云つていゝ以上、氏のいはれる型と思想との關係の眞なるは、私の所謂性格と思想との關係の眞なると程度が同じであるべきである然し何れにしても眞理認識の全體にわたるものとやらに論斷せられるに至つては斷じて不可である氏も初めは明かにそれを、混同せぬ様に斷つて、或る型の人は重にその型の心像で思考推理などをするといつてをられるが、次第に今述べたやうな考へ方に移つて來たかの如く見ゆる。

一帯、所謂タイプといふものは、さう明瞭に區別せられて意識せられるものでないと思ふ。のみならず、そのビジュアルだとかオイゼトリイだとかいふタイプに屬する人は甚だ少いもので、多くは不偏性であると思ふ。もし世の人が皆(まづ、此の場合哲學者と限つてやらう)とにかくに或る型^{タイプ}に截然屬する人がさう多く

人生の成敗(同上)	西尾幸太郎
世上の英雄と天國の小兒(福音新報)	戸塚村人
戰鬥的精神(同上)	ストーヂ博士
「知よりも愛」の質問者へ(同上)	佐藤繁彦
自己を領有すべし(護教)	植村正久
基督の能活力(同上)	平岩恒保
現代の惱み(新生活)	綱島佳吉
自分の具體的問題の一つ(科學と文藝)	安部能成
自己靈の叫び(同上)	野村隼
復讐の心(六合雜誌)	沖野岩三郎
宗教の二面(同上)	今岡信一良
確さと本當の事(自樺)	武者小路實篤
國民道德より觀たる御大典(東亞の光)	井上哲次郎
大國民的國民性を作るの道(同上)	井上圓了
青年と宗教(大阪講壇)	諸家
婦人と宗教(同上)	諸家
靈的共鳴(同上)	宮川經輝
復活の生活(新人)	海老名彈正
より高き愛國心(同上)	小崎道雄
* 人生日訓(大日本圖書會社、一、五〇)	内ヶ崎作三郎

□ 評論 時事問題

學者の職分(開拓者)	木村久一
岡田氏の『警告と批判』を読む(同上)	高杉榮次郎

歐洲の戦局と基督教の將來(同上)	田川大吉郎
我黨の貞操論(新女界)	諸家
福音新報を読む(基督教世界)	渡瀬常吉
福音主義の信仰とは何ぞや(同上)	同
教會存立の意義及價值(科學と文藝)	諸家
藝妓問題(廓清)	諸家
文壇の亡國思想(日本及日本人)	三井甲之
現下緊急の教育問題と社會問題(丁酉倫理)	姉崎正治
乃木伯爵家再興問題に就て(同上)	友枝高彦
貞操問題の解決(大阪講壇)	廣岡淺子
宮川牧師異端問題を評して基督教論に及ぶ(新人)	富永徳磨
貞操の意義と價值(六合)	内ヶ崎作三郎
貞操に對する我信念(同上)	宮崎光子

□ 雜

豫先にて(六合)	鈴木龍司
創造の藝術(同上)	佐藤清
襲虫(同上)	岡田哲藏
米國に於ける日本人基督教(福音新報)	宮崎小八郎
教會音楽を奨励せよ(護教)	山田寅之助
* 吾が斷片(六合雜誌社〇、二〇)	岡田哲藏

は氣質と思想との關係に於ける眞實性は程度をひとしくするといふた。而して今只その型と思想との關係が眞理の最後まで係らない事を論述した。つまり、哲學を完く結ぶ爲には、型及びそれについていたものは大いに與かるが、それ以上に何かある事を提^{サグゼスト}醒した。今之れを一一論述究明するはその煩に堪へない。左に右く、そのもの全體を名づけて全人格（木村氏には矢張り、このまゝでは何の事やら譯らぬかもしれん）としやう。而してその全人體の勢能乃至要求が哲學といふものを形成するのだと思ふ此處からして究局の唯心論と唯物端とが全人格の趣味が然らしむる終りなき水掛論をつゞけるといふならば背かれる。何故なれば、哲學の對

●南天棒禪話

中原鄧州著

（丙午出版社發行）

禪界の傑僧南天棒中原鄧州師の禪話を筆録したものである。凡て百六十一篇言々風霜を帯び舌端火を發するの感あらしめる。大石正己居上が之に序して就中菩提心と宗匠檢定法を擧げて居るが、後者は師が會て禪林の惰氣弊風を一掃し革新の實を擧げんがため、實行したものであるが、眞に機鋒峻銳當る可からざるものがある。當年の禪界之がために震駭したのであつた。併し禪師の如きも現代僧侶の腐敗には絶望して居る、寧ろ師が望を勵して大に教訓を傳へたのは居士連である斯くして禪は僧侶の手より社會に放たれ、俗人の間に生きんとする、師の言に依れば其門下生にして四方に在て禪を傳ふるもの三千人からあ

象が思の外不確實なからである。でなければ、人智が初つてから此の方哲學の論争が歇んだ事がないといふ奇怪な事實がない筈なのだ。ホントに目と耳との議論のやうに思はれる節もある。海と山との相談のやうにも見える。然かも尙人心のある所其處には必ず統一慾がある。其處にまた變らない哲學の力争が続いてゆく。^{ミスト}惡魔とフアウストとのいたましい幕がとぢない。自然科学者の或者は之れを哄笑し、思想者は之れを浩歎する。これでやつと、本問題に入つて論斷すべき處であるが、それは第二信に譲ることにして、今は性格と思想との關係のホンの一端を述べておきます。

るといふ。若し夫れが野狐禪にあらず獨禪に陥らずして、眞に社會人道のために盡す人格として活るものならば眞に喜ぶべしである。宗教は師を撰ぶに在る、師の如きは眞に鐵中の錚々禪風を慕ふものゝ必讀すべき書であると思ふ。（價一、二〇）

●ウバニシヤド

赤沼智學譯

（無我山房發行）

赤沼氏が原文で讀んだ時、會心の句や共鳴する箇所を譯出しておいたものを今度友人が編纂出版したものである。昨今タゴールが持はやされて居るが、印度思想を測れば必ず本書の原書や吠陀まで行かなくては物足らない。深遠な印度思想が久しく奥深い藪の中に捨てゝあつたのは惜むべきことである。本書は其斷片にすぎないが兎も角本文から之を邦譯された勞は認めざるを得ない。（袖珍美製價不明）

あつたら大變な事だ。もし木村氏のいふ様に「凡ての唯心論的思想家は聽覺型の人だ」「又凡ての唯物論的思想家は視覺型の人だ」といふ事が眞だとすれば、色々の思想はともかくにも併出するとしても、哲學といふものが本性の意味に於いて成立たない事になるまいか。でもし兄がもし木村氏を助けたいなら、天才はそのタイプ(勿論心象の)の如何に依る、とてもいひ直したいなと思ふ。(茲では餘計なことかもしれないが、氏はよく天才教育云々といふ事を早くから説いてをられたね)。それから一寸注意までに述べておくが、此の型といふのは、タイプはタイプでも普通にいふタイプの譯字に型といふ概念とは少し違ふ事を記憶してゐたい。心理學上では何故型といふ調法な字が普通に出来てゐるのに、色々と各譯すのだらうと私は思つた。それが、然し、素人の誤といふもので、心理學者達が、或人は類範と譯し、或は標型と譯し、或人はまた類型と言つてゐるのは、(自分はそれについて彼れ此れ言ふ資格もないが)何か其の間にある事を私をして思はしめる。が、然し、私自身としては、平常、型の字を當てゝ、不都合だとは更に感じてゐないが、此の場合だけは殊更に異を建てゝ四角な術語をおいた方がよかつたやうに思はれる。何故かならば、多くの讀者は思想の形式或は眞理の決定の様に思ひ違へるのである。現に氏の文の中頃ではさう混同してあるから。これは「餘りタイプといふものを従來用ゐたよりも甚だしく重く廣く見た事から生じたのであらうと思ふ。木村氏の言はれる通りだと、殆んど病的と云はざるをえない。然し、それ程片寄つたものでは實際ないのである。あまりさう詳細に涉つては餘り批評めいていけないが、も少し論

じさせて貰いたい。矢張り初めの部分で、「此の心像の残りやらは人に由つて色々に違ふ」とあるが、残りやうといふのは無論残り方の程度が……といふ事であらう。さてこの各個人の心的特徴ともいふべきものが、眞理總體の認識といふ段になつてどれだけ違ふであらうか。つまり、哲學といふ、普遍妥當性を求めて、思想事實の眞理を檢覈する者に對して、どれ程の影響があるか。論じ去るには未だ未だ足りないが、かう反問する事によつて、先きに私が氏の所論に對して、あまり片寄り過ぎたといつた事の正當に近しい事を思はしめるには足るまいか。乃ち、氏の問題の意味を次の如く言ひ換へるといふ譯けである、「各個人の心象の残り方の程度が、思想家に對して、どれ程の間違を與へるか」と。何故なれば、哲學上、唯心論や唯物論の論争が、目や耳や足の論争であつたら大變なからである(氏は唯心論的思想家と唯物論的思想家の論争を譬へて「丁度二人の女が互に顔の悪口を云ひ合ふやうなものだ」と云はれた。この例を吟味するのにまさか美學の問題に立ち返つて美の認識を云云するでもあるまいから、それは主觀的の差異だといふ事に了解して誤解でなからうと思ふ。これで以て見ても愈々氏が型といふ機能を極端まで押して行つてゐる事がわかる。)

くり返して言ふ、人間思想のあらゆる機能を型の相違に對する絶對的權威によつて決すると、殊に哲學上の決着を之れに歸する事は斷じて反對だ。茲で、初めに戻つて考へて見やう。先きに私はニイチイの「人」に缺陷あるの故を以て哲學迄も一概に黜けなと言つたが、又「型」と思想との關係に於いて、それと性格或

ふことであります。又夫人の實家なる新井家には四女一男有つたけれども、父君は其の家より徴兵に行く者のないのを残念に思ひ、益々夫人の教育に力を用ゐ、女ながらも國家の役に立つ者にしたひと努力せられた。夫人は小學校も高等女學校も女子大學も皆優等で卒業した。殊に高等女學校では四年の所を一年飛んで三年で業を終へた程であつた。父君の御満足は如何であつたでせう。されば遂に夫人に大なる望みを屬し、莫大なる資本を投じて米國に留學せしめられたのであります。

夫人が小學校に學んで居られた時、先生が生徒達の希望を尋ねたことがあつた。其時夫人は一言にして醫學博士と答へられた。しかも其は決して單なる名譽心からではなかつた。夫人は幼な心にも日本に狂人の多いのを悲しみ、之を救はんが爲めに醫學に志されたのであります。何と云ふ雄々しい、神々しい少女の心であつたでせう。高等女學校を卒業された時、夫人は先生に醫學博士になるには、どんな學校に入ればよいかと尋ねたと云ふ。其結果として女子大學の英文科に入ることゝなつ

たのであるが、心は何時も心理學や哲學に向つてゐた。これも心理學的研究がかつて一の宮小學校で立てられた目的に關係が有つたからであります。殊に文學博士松本亦太郎氏の指導により啓發する所が多かつたのであります。

コロンビヤ大學に於ける夫人は、初めは女子大學の先輩の意見に従つて教育心理學を學んでゐたが、次第に純正心理學に興味を持つやうになつて、終に科學的研究に没頭するやうになつたのであります。斯くの如きは日本の婦人としては實に稀なることであります。

思ふに夫人の高等女學校時代は、日本に於ける女子教育勃興の時であつた。此潮流に乗じ、大いに爲す所あらんとした夫人の堅い決心は、其短い三十年の生涯の中に、我が國女學の發達の爲めに、如何なる記録を作つたであらうが。夫人の一生は誠に短かつた。しかも其は意味ある豊かなる一生ではなかつたか。此點に於て夫人の父君も少しく自ら慰めらるゝことゝ思ふのであります。

人間の價値は必ずしも年齢に關係しない。古人

健全なる新婦人の先驅者

——故原口鶴子葬式説教——

内ヶ崎 作三郎

「心的作業及疲勞の研究」で名高い原口竹次郎夫人鶴子女史の葬式が、九月二十八日、本郷教會で執行された。原口氏の關係する早稻田大學や、夫人の母校なる女子大學の、教授學生が會衆の大部分を占めた。左は其式上に於ける内ヶ崎氏の説教の大意である。(KO生)

當教會の海老名牧師が目下米國にお出でになつてゐるし、其留守を預る野口牧師は原口家に就ては餘り知つて居られないので、かねて同家と交際してはゐる私が代つて此役を務めることゝなつたのであります。原口夫人が短命にして逝かれたことは我々の遺憾とする所であります。ことに一男一女を残された原口君の御心中は思ひやるだに涙の種であります。三十年間多大の勞力を費し、夫人の前途に希望を持つて居られた父君の胸の中は

如何でありませう。夫人に期待して居られた、上州一の宮小學校、高崎高等女學校、日本女子大學、ロンビヤ大學等の舊師の方々の失望はどうありませう。又女子大學に於ける同窓の方々や我々友人は、道德上宗教上の益友を失つたのであります。天は何故に夫人に恵むこと少なかつたか。我々は原口君を慰める言葉を持たない。夫人の弟妹方は泣いて泣いてせめてもの慰めとするより外ないのであります。

原口夫人の短い一生は誠に興味のあるものであつた。夫人が五歳の時父君の漢學の先生が夫人を^み相て、其の將來を豫言した。父君は其時から夫人を何處までも教育しやうと云ふ決心を持たれたと云

す。其頃夫人はすでに雄々しい決心を以て、一生を學問に捧げやうとしてゐた。斯くて夫人は困難なる心理學の研究に従事せられたのであります。

夫人の名著「心的作業と疲勞の研究」に就ては卷頭の松本博士の序文に盡きてゐる。我々の言を要しないのであります。又夫人の近業「樂しき思ひ出」は日本婦人の洋行土産中最も特色有るものであります。長い間米國婦人の内部生活を觀察して時た其批評は非常に鋭い所が有ります。

夫人は殆んど三年間と云ふものは病床に親しまれた。そして其間毎日三十八度以上の熱に冒されても、大膽に仕事を續けられた。日本の女子教育のために何物をか貢獻せんとの夫人の決心と熱情が、これをなしたのであります。

斯く考へ來れば今日の葬式に於て、我々は徒らに嘆き悲しむのみで止むべきではない。實に我が原口夫人の雄々しい心意氣に感激して、振ひ起たなければならぬ。殊に夫人と同窓に學ばれた方々はいはずもがな、天下の女學生諸子は、夫人を繼いで日本に於ける女子教育の發達の爲めに、又我

が國婦人の精神の啓發の爲めに、猛然として蹶起せらるべきであらうと思ふのであります。此意味に於て此會合は實に大なる意義を持つてゐるのであります。

夫人の最期の言葉は何であつたか。「萬事承知して居ります」これであつた。夫は絶えず生きやう／＼と努力せられた。一日でも一週間でも長く生きて、日本の學界のため、又日本の女子の爲めに盡したひと思はれたからであります。されば死の際まで、其の意識は明かであつた。

夫人の肉體は滅びた。けれども其の男々しい魂、其の心靈の生命は、永遠に進歩發展して止まぬであらう。テニソンの云つたやうに死の天の使の顔は生命の太陽に向けられてあるがその影はこの世を暗からしむ、されど其の途は前進である、向上である。原口、新井兩家の方々を初め、夫人を知れる人々は、夫人の雄々しい心靈の前進を信じて、いさゝかの慰めとせらるゝであらう。又夫人は生前既知の友人や未知の後進によつて、其の遺業が繼續せられ完成せられるのを見て、天の彼方にほゝるまゐることであらう。

も云つてゐる、^{いふ}壽ければ恥多しと。人類の進歩發達のため何らの爲す所無く、徒らに生をむさぼる者、如何に此世に多いこととせう。然れども古へより大事をなしたる人の、中途に斃れた例も亦少くない。赤手空拳を以て救世の偉業をなしたイエス・クリストは如何であつたでせう。三十三歳を一期として十字架上の露と消えたではありませんか。ゲッセマネの小夜更けて、彼が血を吐く祈りを神に捧げし其時は如何。彼を以て神の獨子となす、誠に所以有りと云ふべきではないか。吉田松蔭、木村重成、平敦盛等の花も薔に散り行いた短い生涯は、如何に我が日本民族の歴史を彩り、如何に我が國民性を培ひ育てたであらう。實にや花の如くに咲き、人々の眺めあかぬ其中に、父の御國に召されたる我が原口夫人の一生は、大なる意義を有し、不可思議なる天の默示を藏してゐるのであるまいか。

原口君と夫人との家庭生活は餘りに短かつた。

しかも其は理想的なる愛の家庭であつた。眞心と純潔とに充ちた生活であつた。病床にあつても、

夫人は之に満足して居られた。原口君も亦夫人の事業のために、人に知られざる苦心をなし、多くの助力を與へられたのであります。

私は此處に於て彼の有名なるラジウムの發見者キユウリユウ夫妻を思はざるをえない。初め原口君は神學を學んで居られたが、後夫人の感化を受けて宗教心理學に轉じた。斯くて夫婦が其目的を一にし、相協力して學界の爲めに盡さんとしたるが如きは、日本の社會には實に例の少いことである。此點に於て短かりし此愛の家庭は如何に鮮かに原口君の追憶の中に浮び出で、如何ばかり其悲しみ悼める心を慰めるでせうか。

原口夫人は誠にさつぱりした、男らしい氣象を持つて居られた。嘗て母君を失はれた時、まだ少女であつた夫人は甲斐々々しく姉上を助けて、「さあこれからは私達でやつて行きませう」と云はれたさうであります。この男まさりの性質は夫人の生涯を通じて現はれました。

私は四年前ニューヨークで初めてお目にかゝつた時夫人の天真爛漫なる氣象に感じたのであります。

原口鶴子は明治十九年六月群馬縣の一の宮町に生れた。彼が恩師文學博士松本亦太郎氏も亦群馬縣の出身である。郷里を同くし、専門を同じくするに至つたのは奇縁であると在世中言つて居つた。私
 が知つた時の彼には、他の婦人と比較して特に目立つ様なものはなかつた。只前額部が幾分か秀で、居
 つて、動作がライフに満ちて居つた。小供の時に彼の姉妹と朋友とは『おでこ轉んでも鼻打たず、雨
 が降つても傘入らず』と言つて、からかつたといふ話である。額だけは皆見る人の氣に付いたと見へて、
 死ぬ數日以前主治醫は彼が額を撫で／＼體は瘦せ衰へてゐるけれども、額だけは圓く光つてゐると言
 つた。まだ村に居る時に、一郷先生は熟々彼が容貌を見て、彼は彼が爲すが儘に放任して置いたなら
 ば必ず名をなすに相違ないと言つたさうである。斯んな言は、只冷靜に考へる人には、何等の印象を
 殘すものではないのであるが、可愛がつてゐる父には一種異様の刺激を與へたと見へ、此郷先生の言
 葉が、圖らずも鶴子が一生の教育方針となつた。田舎の小學校を了へて、女學校に行くと言へば女學
 校に遣るし、女子大學に這入ると言へば女子大學に送るし、米國に留學したいと言へば親類等が反對
 するのも、妙齡の處女である事をも顧みずして、巨額の資を投じて遠く海外に留學させるといふ様に
 なつたのである。學校の事ばかりでなく、家庭などに於ても父は彼に對して、何等の忠告何等の拘束
 を與へなかつたのである。斯く氣儘に育つた爲めか、非常に自主獨立の精神に富んで居つて、人の話な
 ど容易に聞いたりなどしなかつた。そして常に『私は人に干涉せられない時の方が一等能く仕事が出
 来る』と言つて居つた。私も元來意地張りで人に指圖せらるゝのが大嫌ひであるから、妻の精神を尊
 重して、一緒になつてから以來も、成る可く氣隨氣儘にさせて置く方針を取つたのである。彼が自主



失はれたる愛の追懷

原 口 竹 次 郎

妻の葬儀に來られた或大學教授を訪問すると、いきなり『奥様の死は日本婦人の躰つていとなりますな』
 と言はれたのに驚いて、其譯を尋ねると、私の妻が妻となり、母となり、傍ら學究的生活を送り、早く死んでしまつたといふ事は、日本の婦人には學究的生活は向かない、少なくとも一家の主婦となつてゐる我國の婦人には學問の研究は出來ない、學問の研究と、良妻賢母の理想とは兩立しないものであるといふ事を事實に依て證明してゐるのであるといふのであつた。斯様な事を言つたのは右の教授のみに止まらない。『世人に注意せられてゐない人が百人死ぬよりも、人の目を惹いてゐる者が一人亡くなる方が矢張り躰つていとなり易い。實例として引出され易い云々』と言つた人もあつた。段々聞いて見ると、斯んな思想を抱いてゐる人は大分ある様である。其で私は少しく妻が病を得るに至りし徑路を述べ、右の如き考へが間違つてゐる事、並びに妻の死に關聯して起つて來る色々の問題に對し解釋を與へたいと思ふ。

結び喫驚する程派手な身形をする。學校時代に窮窶な生活をした貧乏者が急に月給を取る様になるから堪らないと言つて居つた。勿論妻は一體回顧的な性質の人間ではなかつたから、昔の事は多く語らなかつた。其で女學校時代に受けた善いイムプレシヨンもあつたかも知れないが兎角餘り之等を口に出さなかつた。

女子大學に來てから人物に對する印象は大に改良せられた様である。妻は死に至るまで校長を始め諸先生方をば非常に慕つて居つた。客などが來て、女子大學や教師を非難すると、いつも躍起になつて辯護して居つた。彼が最も愛して居つたものに三つある。一は自分の父、二は大橋さんと云ふ友人、他の一は其母校である。彼がコロムビアに於てドクトルの試験を受けんとする前後からして、前に女子大學校に關係のあつた、嫉忌心に燃えてゐる所謂實業家の妻君連や、劣敗してクツクなどしてゐる婦人などは、鶴子は最負でドクトルの試験にパスするやうになつてゐるとか何とか蚊とか學校に言つてやつた。そして其が鶴子に分つた時も、彼はそんな事を學校で信ずる筈がないと言つて、歸朝してからも何も臆する所もなく學校の人に會つたのであつた。大學校に於て學者として最も深い印象を與へたのは松本博士であつた。彼は松本博士の講義を聞く迄は精神病學を研究しようと思つてゐたのであつたが、博士の講義に出席するに及んで理學を専攻しようとしたのである。コロムビアに行く事になるに就ては、學監麻生氏の助力に負ふ所多かつた。

コロムビアへ行つたのが明治四十年で、女子大學からの希望もあつたのでソーンダイクの教授に就

的精神に富んで居つた一例は、彼が『心的作業及び疲勞の研究』を書いてゐる時に於て見る事が出来た。彼は之迄學者が右の問題に就てなした研究を一々紹介する必要はない。自分の研究を發表すれば足ると言つた。私は日本には右の様な問題に對してなした學者の研究が、薩張ないし、其に材料も手元にある事であるから、巻首に附け加へて置いたら善からうと言つた。妻は其必要はないと云ひて頑張り、且つ『そんなら貴方が書いて、貴方が附け加へる分には差支へない』と言つた。其で止むを得ず私は數十の英獨參考書論文を読み、右の著作の第一篇を完成した。第一篇中佛語の參考書を紹介した部分だけは妻の手になつたものである。

小學校時代には別に取り立てゝ云ふ程の事もなかつた。鶴子には競争心とか、女性に有り勝ちの嫉忌心とかいふものが全然缺如してゐた。其爲めに、仲間の間に評判は善かつたのである。學校の成績も良かったといふ事は事實である。併し田舎の村などに於ける所謂有志家有力家の子弟はいつも上席にゐるから、小學校の成績は當てにならないと言つて笑つて居つた。女學校は高崎市で済した。此處では學科の成績が拔群であつたゝめに一級飛び越えた。其爲め女子大學校に這入つても、コロムビアに居つても級中の最年少者となつたのである。高崎にゐる中に受けた人物の印象は餘り香ばしいものではなかつたらしい。女先生方が『貴女方は派手な身形をしてはいけませんね』とか買ひ食ひは嚴禁します』とか言つて置き乍ら授業が濟むと、教員室に這入つては、偉い人の名前をば、知己でゝもあるが如くに並べ立てゝ『おほゝ』と言ひ乍ら。餅菓子を食べ茶を啜り、外に出る時には髪を丸髷などに

くて彼は明治四十五年（滿二十六歲）の春にドクトルの試験を受け、無事に通過する事を得た。此時分の體格は上の上。女子大學に於て教師は金時のやうだと言つてゐたそうであるが、此時も丁度其様であつた。彼が最も激烈に勉強したのは此以前四五年間の事であつて見れば、健康を損つたのは研究的生活に因れるものでないといふ事が明かである。今獨創云々と言つたが、其に就ては今に忘れる事出来ない一つの話がある。去年の丁度今頃、帝大の雇教師のドクトル・ペルリナーの妻君（之もドクトル）が尋ねて來た。そして訪ねた譯を話して『自分がまだライブチヒで研究をしてゐる時に、プランといふ實驗教育學の教授が、貴女の英文の書を示して、之は日本婦人が書いたものであるが、中に獨創の研究があると云はれた。其で日本に行つたならば専門も似て居る事だから是非お目に蒐りたいと思つてゐた』と言つたそして屢々訪問してくれられた。併し郎君が青島の戰で捕虜となつて日本に來た爲めに他處へ行つてしまつた。プラン教授の言にある様に英文の書中には、未だ何人も爲さなかつた、獨創の研究が或一章中に這入つてゐる。妻が亡くなつたに就ては、九州から北海道に至る迄各地方にある中學校師範校の未見の教師方から悔狀を戴き、故人が割合に弘く世に認められた事を感じたのであつた。併し學術的研究を發表して歐米の學者に幾分かでも認められたのは、彼が始めてであるから、此點から言ふと彼は満足して可なりであると思ふ。

歸朝すると間もなく妻は病床の人となつた。病氣が病氣であるから、彼も死期が遠くないといふ事を内々は覺悟して居つたものと見へる。即ち彼は三十七度から九度位迄常に昇降してゐる體溫と戰

て始めは教育心理學を研究した。傍ら社會學の講義にも出席した其方の講義を受持つてゐるギッディングス教授が、專攻を社會學に變へたらどうかと荐りに勧めたのは此時の事である。同じく社會學を講じて居て、今ではギッディングス以上に聽講生を持つてゐるS教授も、是非專攻科目を更へる様にとすゝめたさうである。併し妻はあの教授は氣味の悪い人であると常に言つて居つた。そして嫌つてゐるといふよりも寧ろ輕蔑して居つた。用もないのに教授室に呼び出し雜談をなし、稍々もすればミス何々と呼ばないで強いてイニシアルで呼ばうとするし、態度が一般に肉感的であつた。生理的心理學を講じてゐるW教授にも幾分かそんな氣味があつたさうである。此先生が高帽子を被つて歩いてゐる所を、後から見ると、頭の『ハゲ』が三ヶ月形になつて見へる。其癖にあんなだからと言つて居つた。女性是一般に男子の女性に對する心持を感得する事が早い。其で女子教育などに従事する人は、能く此邊の所に留意してゐないと、世界第一流の學者などで意外の邊から『ぼろ』を出す事あるかも知れない。コロムビアに於て學事の方面に於て最も熱心に指導を與へて呉れたのは、ソーンダイク教授、社交の方面に於て盡して呉れたのは寄宿舎監のミス、ダニエル、友達として最も親密に交際して呉れたのは今コロムビアで有機化學の講座を持てゐるメリー、マコーミックといふ婦人である。之等の人々に鶴子の死を知らしたならば如何に驚くであらうかと思ふと報知するだけの元氣が出ない。妻は始めの二年を専ら教育心理學に費し、後の三年を純粹の實驗心理學に費したのであつた。實驗心理學の方面に於ては心的作業疲勞の研究の外に、注意力に關する研究が今だに草稿として残つてゐる。注意作用に關する研究を發表しなかつた譯は、獨創の見を現はす餘地がないからといふのにある。斯

い。妻は此味ひを味はんが爲めに病苦と戦つた。死其物と戦つた。一日でも壽命を延さんと力めた。藻搔げば藻搔く程壽命を縮めるといふ事を知つて居つた彼は殆んどスーパヒューマンの力を以て、苦痛を抑壓した。而して何事も理性的に行はうとした。息を引取る數分前に於て營養が劣へるからと言つて生卵を要求した時には、看護してゐる者皆運命の神の無慈悲なるを見て泣いたのであつた。宇宙に若し人間の運命を掌る靈なるもの存すとせば、彼は何故に生きんとする、生きて而して働かんとする、働いて而して其味ひを知らんとする無垢の生命を奪ふのであるか。私には看護の疲れも、子供の始末も、親族の悲みも、跡片付けも更に問題とならぬ。妻が此世に於て目的を達し得ずして、幽冥裡に獨り寂しく徨ふてゐるのを想像するのが最も苦痛である。

妻の死が果して女子の高等教育研究的生活の蹟きとなるや否やといふ事は、論ずる迄もない程價值のない問題である。若し假りに一步を譲つて彼が學問をして家庭を持つた爲めに、病死したとしても、其は彼のみに就て言へる事であつて、他の婦人は彼と同一徑路を取つても、同一結果に終らないかも知れない。女子高等教育の蹟きなど大袈裟に云ふ人は、一匹の白い馬を見て、凡ての馬は白いと斷定せんとするものである。況んや妻の病氣は學問をした爲めに出たのではないのである。在米中何處かで結核菌に取り付かれて居たのに氣が付かなかつたのが、發病の原因となつたのである。であるから、妻の死は學究的生活を送らないでも當然來るべき運命であつたのである。前にも言つた様に彼は最も激烈に勉強して居つた時最も強壯であつた。或教授は一人の有名なる學究的女性が早く病に斃れ

ひ、渾身の勇氣を以て著述と研究に従事した。著述の方面に於ては、前に言つた『作業と疲勞の研究』があるし、『樂しき思出』といふ隨筆がある。最近に於て出版せられんとする『天才と遺傳』も其一として加へる事が出来る。實驗心理學に用ゆる數學の公式に關しても著述をする覺悟で、既に取掛つて居たのであるが始めては、ばたと倒れ、始めては、ばたと倒れて遂に所思を達せなかつた。研究の方面に於ては、女子大學校に於て昨年以來實行してゐた可成り大仕掛な實驗がある。之は死と共に葬り去られてしまつた。此外に或筋の勧めに依て昨年末以來博士論文を作製しようとして居つたが、之も健康の爲め物にならなかつた。

妻の死に就て問題となる事が幾つもある。先輩や友人などの中には、後に残した子供の始末に困るだらうと云つて同情して呉れる人が大分ある。同情して呉れるのは甚だ有難い。併し私に取つては子供の始末とか、後片附けとか、生き残つてゐる人の不自由悲みといふが如きは問題とはならぬ。子供の事を聞かれる毎に、私は一方に於ては世間の同情に感謝すると共に、他の一方に於ては、世人は何故に死といふものに就て左様に淺墓に考へるのであらうといふ疑ひを起すのである。私の場合に於てのみならず、妻たるものは人生に於ける ミッドラムフアー 戰友である。妻は共に大に戰ひ、戰ひの終りを一通り見届けて死にたかつたに相違ない。漸く一人前になつて、之から大に戰へやうと妻も喜び私も欣んでゐる矢先きに命を取られてしまつた。之が私に取つて最も遺憾な點である。妻は研究に家事に社交に非常なる希望を持つて居つた。而して自分自ら働いて其希望を達したく思つてゐた。働いて其味ひを知りたがつて居つた。研究は私が之を續行する事も出来やう。而も研究の味を味はせる事は永へに出来な

實であつて、苟くも國家の前途を憂ふるものは、極力之等の美德を發揚するが如き方法を講じて遣らねばならぬのである。

或友は『妻君が亡くなられたので、君の荷が軽くなつたし、妻君も亦君の荷が軽くなつた事を見る事が出来るならば喜ばれるに相違ない』といふ様な意味の悔状を送つた。之は病氣の爲め手も足も出なくなり爲めに財政其他に於て頗る窮境に陥つてゐる私を見て言つた同情ある語であつて、之を見て怒る譯には行かないのである。併し私は始めから妻の死といふ事を此友人の様には解釋しなかつたのである。長い間病氣に悩める者を内に持てゐる者にのみ限られた經驗であるが、病人の苦みを見てゐる苦み、私のみに就て言へば經濟上の困難、友人への無沙汰、仕事に對して忠實である事出来ないといふ事などに就ての苦みは又甚だしいものである。病人が生きてゐる間は、吾々は其苦みを續けねばならぬ。故に不治だと定つてゐる以上は病人が早く片付くといふ事は、慥かに看護人の苦痛を輕減する所以であるに相違ない。併し右の如き考へには看護の衝に當つてゐる者の主觀的感情愛情の満足しないのみならず、客觀的利害の念から言つても結局危険の思想たるを免るゝ事出来ない。物を押し詰る迄、遣れるだけ遣らないであれも半分、之も半分遣る様では普通以上の事は何も出来ないのである。私も歸朝以來したい事は山々あつたのであるが、先づ目前の急を救はんが爲め徹頭徹尾其方へ打ち込んでしまつたのである、此外まだ問題になつてゐる事數多あるのであるが餘りの多く紙面を塞ぐ様でも困るから、先づ以上二三點に止めて置くこととする。

たといふ事は、名なき者の女性が同じ境遇にゐて死するよりも、社會の問題となり易いと言つたけれども、熟々考へて見れば、今言つた様に明かに問題とするに足らない問題をば、問題とする様な透徹しない頭を持つてゐる者、元氣のない者は始めから高等教育を受ける資格がない者である。或博士は妻の在世中彼は研究的生活と家庭生活とが兩立すべきものであるか否かを試す試金石になつてゐると人に語つたそうである。成程彼は博士が言つた様に、兩立すべきものであるか否かの問題を決する上に於て一つの材料とはなる。併し其は只一つの材料たるに止るのであつて、之を以て他を推す事は勿論出来ない。私は妻の病死が日本婦人の蹟きとなることなく、却て彼等に學究的生活を獎勵する仲立ちとならん事を希望する。否私は彼が死をしか解釋してゐるのである。學問の中にも生理的若しくは心理的に婦人に適しないものがある。之等の點をさへ注意すれば討究心の強い頭腦の明晰な婦人のなすべき仕事は決して學界に於て乏しくはないと思ふ。

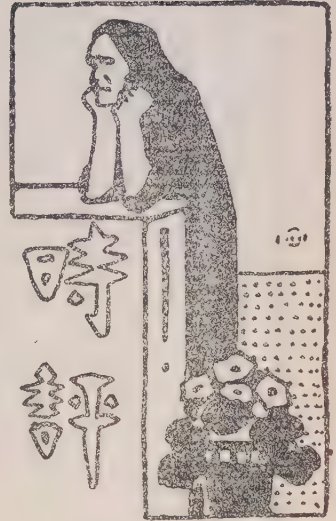
エレン、カイが極論してゐる様に、主婦としての務めと學者的生活とを兩立さして行く事は甚だ困難な事業であるには相違ない。併し其は一は學究的生活を送らんとする人の能力と、彼を保護する人の保護の程度奈何に依て決するであらうと思はれる。研究的生活を送らせやうと思ふならば、臺所の瑣事に至る迄、悉く女性に世話させる様ではないけない、之等の事は人を雇ふとか何とか甘い方法を考へて始末しなければならぬ。女を煩はしてならぬと私は思ふ。或一部の人——女子教育家をも含む——の間には、兎角女子の精神的能力を下げ見て、無理に彼等をして舊慣を墨守せしめようとする傾向がある。併し女子の間には、到底男子の間に於ては見る事出来ない様な知識美德が存在する事は事

議に議り給ふた神代の祭政は、歴代の聖勅となつて現れ、或は十七憲法となつて現れ、今や帝國憲法となつて完成された。吾々國民は此の明德善政の與へた個人の權利を尊重擁護し、私人としては身を修め家を齊ひ公人を選擧し、公人としては帝國議會の協賛を行ひ、地方自治體の發展に努め、以て法治國民の義務を大全しなければならぬ。而して或は農桑を以てし或は商工を以て殷富を計り、天祐による五穀を嘗め水を飲み文明の利器を日用しては神徳の忝なきを謝し、歷世の聖旨を奉じては質素勤儉を主とし、仁政を推しては國民の平等的慶福を企圖しなければならぬ。外には皇道の仁政にして博愛正義を旨とし、霸道卑んで王道を欲し、國際の和平を炊求する天道の流行であることを宣言しなければならない。而して我が日本帝國國民は進畧の國民では無く正當防衛の國民でも無く、唯だ世界列國の均等なる權利と誠意の親交との上に、人類相援助して平和的生存を共にし、其の福利を同慶する所の正義博愛の國民でなければならぬ。

吾々は此の御大典に會して無量の感激に打たると共に、此の盛典が内に在りては國民教育の上に道德宗教の振興となり、外に在りては實に世界的大意義を有し、國際の和平と全人類の福利洽善の上に天の使命を帶んで居ることを信ずるのである。故に吾々は常に一箇の日本國民としてに非ず、洵に世界の民として滿腔の熱誠を披瀝して此の御大典を奉祝し、天壤無窮の皇運を禱り、聖壽の萬歳を唱ひ、世界の救世の事業を滿天下に宣揚し、大正維新の國民的精神を大に中外に發揮しなければならぬ。(二條生)

不徹底なる學制改革案

何度出ても何時も不徹底なのは學制改革案である。第一年限の問題であるが、成る程平均廿七八歳で大學を卒業するとなると、それは餘り歳を取り過ぎると考へるのにも道理があるかも知れない。けれども年限短縮論者は何故に二十七八歳でなければ、大學の卒業が出来ないかと云ふことを研究して居ないやうである。それで居て二十七八歳ま



大正維新の御大典

今上天皇陛下には大正元年に御踐祚遊ばされたが、本月十日よりは御即位の禮並に大嘗祭の御大典を行はせ給ふのである。天皇御一代に一度び行はせ給ふ國家最高至重の大禮であるから、帝國臣民たる吾々は此の機に際して無限の熱誠を以て祝し奉り、舉國一致を以て忠愛の至情を發露し、此の盛典に會したる六千萬同胞の歡喜を表出し奉らねばならない、殊に道德宗教に携はる吾々同人は此の御大典の國民教育に及ばず影響を拜察し、國

體の尊嚴及び立憲政體の趣旨を究めて教育の本源を明徹にし、個人の人格を養成して國運の隆昌を圖り、日本帝國の世界的使命を鮮明にしなければならぬ。抑も此の御大典に皇位繼承に關する政治上の事件であるが、同時に大和民族の國體に關する宗教及び道德上の典禮であつて、實に祭政一致政教一致の發現である。されば其の源を祖先崇拜に發し、自己の民族の祖先を神と爲し、共同祖先を宇宙の大靈なる天照太神に置き、以て儒佛及び基督教と妙合し、君臣の分明かにして君を父と爲し、民を子となし、皇室を宗家となし臣家を支家と爲し、君は祭主となつて祭政を司り教主となつて政教を執り、宇宙、神、祖先、皇室、人民の間に有機的關係を作爲して二千五百有餘年の間國家を經營して來たのである。故に君臣の利害は相一致し國民の幸福は共通であるかして、世々の天皇の仁慈にして衣食を叡慮し給ひ、或は祈年祭となつて現れ、或は新嘗祭となつて現れ、今回は大嘗祭となつて、現れ給ふのである。

而して天照太神の高天原に在して神集に集へ神

い。否な今でも随分劣つて居るのである。それを今よりも劣らしめやうとするならば、それこそ我國家將來の爲めに安心せざるを得ないのである。

世の論者は大學を餘りに買いかぶつて居る。「大學は學術の蘊奥を研究する所」であるなどと考へるからが間違つて居る。學術の蘊奥が大學の三年間や四年間で學べるものではない。大學の教授は學術のほんの初歩文けに止まつて居る。専門の普通の智識を與ふるに過ぎないものである。よしや大學院で、研究した所でその五年やそこらが何にならう。否な「學術の蘊奥を研究」するのは大學そのものの目的であつて、これは學生を教授するのとは別問題であらう。それにしても出来ることもあらうし、出来ないこともあらう。必ず出来るに限つたものではない。

であるから今の制度を改めて一層深く學術を研究せしむるならば兎に角年限を短縮したり、學科を減少したりするならば、さなきだに淺薄な我が智識界は益々淺薄になつて、何時歐米と競争し得る時が来るか、前途は益々遠くなる計りである。

故に學制に就ては更に一層の研究を要し、充分徹底した案が出ない限りは甚だ憂うべきことがあると思ふ。(柏葉)

國民的煩悶時代

一度海軍收賄事件の暴露せらるゝや武士道の權化たる、國民崇拜の中心たる海軍將官連は獄屋の人となり、山本内閣は首相自身が盜賊呼ばりをなされて瓦解するの已むを得ざるに至りたりき。國民はこの豫想外の腐敗を聞きて驚きぬ。而してこれが廓清を標榜して立てる大隈内閣も大浦事件のために九死一生に陥り内閣を改造して漸く餘命を保つのみ。國民は廓清せんとする者にも尙この腐敗あるを聞きて一層驚きぬ、否茫然として爲す所を知らざりき。あゝ廓清せんとするものは、廓清せらるゝもの非か。廓清せんとするもの今や廓清せらるゝに至れり。難ずるもの善か難せらるゝもの惡か。若し難ずるものをして難ぜらるゝものゝ位置にあらしめば、また難ぜらるゝものゝ位置にあらしめば、また難ぜらるゝものゝ位置にあらざるか。また若し難ぜらるゝものをして難ずるもの

でかゝつては長すぎるから、二三年短縮しやう、それでは大學を何年短縮しやう、いや高等學校を全廢しろのと云ふ議論が出るやうである。然し滿十二歳で中學に入り、十七歳で之を卒業して高等學校に入り二十歳で之を卒業して、大學に進んだならば、大學の卒業は二十三又は二十四歳で出来る譯ではないか。

然るに實際二十七八歳でなければ、大學卒業が出来ないと云ふのは何故であるか。學制改革を論ずるものは宜しく此の點を研究すべきである。然るに此の事が等閑に附せられるのは甚だ遺憾である。即ち私の考では、その理由は學生の不勉強や、病氣などにもあらう、けれども最大理由は高等學校や大學の數が少なくて、中學卒業生の多くがまづすぐに高等學校へ、又高校卒業生が大學へ進めないからである。若し此の大缺陷を補ひ得て、高等學校や大學が澤山に出来たらば、何も大學卒業の年齢が多う過ぎると云ふやうな非難は生じないであらうと思ふ。此の點から云ふならば年齢に關しては今の學制が悪いのではない。學校が不足

して居るのが悪いのである。

第二に私が常に不思議に思つて居るのは、今の改革論者から、學科^{△△}の事に就ては何も聽かないことである。若し今の中學、高校、大學なりで無用の學問を授けて居るのであつて、それが爲め年限が長くかゝるか、或は學科の配合をよくしたらば、年限の短縮が出来ると云ふのならば、それは實際論で傾聴に價するけれども、唯だ單に年限が長いから、短かくしろと云ふのならば、それは暴論である。年限短縮^{△△△△}でなくて、學問短縮である。

第三に歐米との比較論である。彼地では二十一歳で大學を卒業するから、我邦でもさうしやうと云ふ議論である。これも一寸妙に感ずる。我邦と彼邦とでは事情が違ふ。我れ等は澤山の漢字を習ふ必要がある。これでも二年やそこの相違が生じて来る。此の點に就てはローマ論者に傾聴すべき點がある。語學にしても歐米人よりは學力がある、歴史でもさうである然るに尙ほ彼等と同年限で學校を卒業するやうにしやうとするならば、學力が彼等に劣ること數等ならざるを得な

と雖、動もすれば二十萬の基督信者に限らず易く到底國民一般に共鳴する所なかりしなり。我國民の大多數を占むる商工殊に農民に於いても傳來の宗教已に其勢力を失ひて殆無權威無信仰の時代なりしと雖尙官尊民卑の風を有したりき。この風たるや排斥すべきものなりと雖深く我國民に侵潤して其精神上社會上に大なる勢力ありき。精神上に於いては大臣大將に非凡の人多きを以て英雄崇拜を懷かしめたりき。英雄崇拜心の強き我國民は英雄を求めざれば已まず、社會上に於いては官吏は其維持と改善との原動力なりき。我國には封建の思想尙存して民衆の運動といふべきものなく、社會の維持と改善とは悉く官權の手によりて成されたりき。故に大臣大將の腐敗の暴露は一面に於いては崇拜すべきものを失ひ、他面に於いては社會の維持と改善とに對する絶望的懷疑となり其歸着する所を失ひ終にかの一農夫の慨嘆となる。これ一階級の事にあらず、國民的煩悶時代にあらずして何ぞ。實を云へばこの國民的煩悶時代は先帝の崩御と共に其幕を開きたりき。街頭三尺の童兒尙

大正維新を口にし自覺を叫びたりき。自覺を求む、これ煩悶にあらずや、而して現時に至りて其最高潮に達したり。智識階級に於いてもまた青年の自殺、人生の信念、貞操につきて論ぜらるゝを見るに至る。

文明史家ギゾーは歐洲の近世的文明は靈的改革時代政治的改革時代、經濟的改革時代の順序を追ふて開展し來れりといへり。即ち靈的改革たる宗教改革によりて人格的自由を得、人格的自由が外に現れて佛國革命等の政治的改革を惹起して政治的自由を得、政治的自由は當然經濟的自由となりて産業革命を演じたり。我國の維新後の文明史は歐のこの時代の文明史に相當するが故に上述の如き史眼を以て我文明史を觀察する時は歐洲とは全く其行き方を異にせり。殆ど逆行せるの觀あり。これ一には國民性に依ると雖、また一には外來文明の刺激を受けて發達したる我國文明なればなるべし。即ち政治的改革時代經濟的改革時代の順序を以て進歩し來り今や靈的改革時代に入らんとするものゝ如し。妻子を路頭に縊はしめて天下國家

ゝ位置にあらしめば、難ずるものにあらざるか。政友會は強盜の如く働けり同志會は詐僞師の如く働らけりと喝破せし三宅雪嶺氏の言の寧ろ當れるを思はずんばあらず。またこの腐敗たる單に政界の事として見るべきか。山本大浦を笑ふもの果して笑ふの資格ありや否やを疑ふ。燈臺下暗きを痛感せずんばあらず、あゝ國民舉つて腐敗せり、而して天下に一人の起ちて極力これを排せんとする義人なさを遺憾とす。予の宿論に曰はく歐米人は徹底的に善にして徹底的に惡なり。我日本人は不徹底的に善にして不徹底的に惡なり。故に彼にありては善人と惡人とは黑白全く相分る、我にありては善人ならざるなくまた惡人ならざるなしと。若し數學的に善と惡とを加へて二で割れば彼我相同じ、されど清廉高潔の士立ちて國民を頌韃するにあらずんば何ぞ能く國民道德の向上を期すべけんや。彼は進歩的なり、我は停滯的なり。我が國民に遺憾とする所は天下悉く墮落せることにあらずして義人の起ちて惡を排すものなさにあり。予はこの夏歸省して一田夫野人と語る、談偶、政界

の事に及ぶ、彼れは此所にも大浦事件と同様の事ありとして德望見識手腕一縣に降々たる前市長の在職中數萬圓の公金費消せることを話せり。予は驚かざるを得ざりき。彼は更に語を繼いで曰はくこんな上になればなる程皆腐敗してどうなるものかなあと。あゝこの言何ぞ沈痛にして切實なるや。一葉落ちて天下の秋を知る、この一田夫野人の胸中尙この慨嘆ある煩悶あり、これ豈に國民的煩悶時代にあらずや。

島村抱月氏が嘗つて二高の演壇に立ち、高山樗牛を以て煩悶時代の急先鋒となし、藤村操を以て其最高潮に達したるものとなし、綱島梁川を以て其解決を與へたるものなしたりき。然れどもこれ智識階級の事のみ、國民一般は風馬牛相關せざる也。樗牛雄健なる文章を以て天下に絶叫せりと雖これ單に學生界を風靡したるのみ。藤村操また沈痛なる巖頭の感を殘して華嚴の水泡と消えたりと雖田吾作や熊公には狂人の業なりとの外思はれざりしなり、更に梁川に至りては熱烈にして眞摯なる基督信者其見神の實驗は一時世論を惹起したり

の心に大なる缺點を有せずや。地方自治體の中央政治の爲めに亂さるゝは罪制度にあらずして寧ろ公民にあり。榮を行く國家は立派なる公民の上に築かる。昔政治の基礎は諸侯にありたるも今は公民にあり。吾人は今日の自治制度を思ふて慨嘆せずんばあらず。

更に經濟界を見よ、我國に最も多きは政商なり、御用商人なり、政治家の腰巾着たる實業家なり。彼等は精良なる貨物を低廉に賣らんと苦心するよりは政治家を買収せんとする也。故に實業家としての進歩發達をなさずして幫閑たる手腕あるのみ實業は名のみにして實は虛業家なり。獨立は實業家の最大の名譽なり、福澤先生は獨立自尊といへり。然るに腰巾着たる彼等は其盛衰興亡に政治家の一顰一笑によりて獨立なし。また實業に於いては信用は資本なりといひ、正直は最良の政策なり、正直の額に汗して慚くと言はる。然るに我實業界に於いては正直は損なり愚なりとして排斥せられ正直者却つて失敗を重ねて零落するに至る。青年は正直以て富を爲さんことを望まずして惡辣

なる手腕を磨かんとす。正直者の通れざる社會は不健全なる社會なり、極めて頼もしからぬ社會なり。宿命論者の多きは自力の頼むべからざるを知るがためのみ。澁澤男は嘗つて東京高等商業學校に演説して曰はく日本には諸君の模範とすべき實業家なしと云へり。

この行詰まれる政治經濟に一條の活路を與ふるものは實に靈的改革なり、靈的改革は政治經濟の根柢たるものなり、靈的改革なければ政治經濟は砂上の樓閣たるのみ。順序より言へば根柢たる靈的改革は最初に來らざるべからず、最後に來るは逆なり。されど來るは來らざるよりよし、遅れ馳せながら靈的改革をなして政治經濟に根柢を與ふべし。かくして政治經濟は生命を得て振興するに至るべし。靈的改革とは靈的人格的自由を得ること也。人格的自由を尊重する政治家ならば物質的榮華に叩頭して其主義を二三にすることなからん。主義と生死を共にするを以て幸福とせん。國民は人格的自由を擁護せんが爲めに猛然として自發的に政治に活動するに至らん。人格的自由を重

を憂へ封建の制を廢して立憲君主の制を採り外國と比肩せしめんと苦心したる明治維新の志士の活動はこれ政治的改革なり。經濟的改革時代は政治的改革時代の曙光の輝き初めたる頃より其端緒を發せり。福澤先生は上野の森に轟く砲聲を聞きながら獨立自尊を説き經濟を論じたりき。士族は祿を取り上げられ町人百姓は頭を上ぐるに至りて經濟の發展を來し小仕掛ながら産業革命も行はれたる近時は殆ど黄金崇拜となり誰れも彼も實業界に入り實業家却つて政治家を左右するに至れり。然るに今や政治も經濟も行き詰れり、この儘にてはこれ以上發達する見込なきに至れり。

政治界を見よ。政黨政治は主義政見の政治なり、人物本位の政治にあらず、英雄崇拜と政黨政治とは相容れざるもの也。然れども主義を立て政見を述ぶるも毫もこれに忠ならず責任を感じざるを如何せん。我國の政治家の頭を支配するものは支那思想の治國平天下也。孔子は言はく、其國を治めんとするものは其家を齊ふ、其家を齊へんとするものは其身修む、其身を修めんとすれば其心を正

らす、其心を正うせんとすれば其意を誠にすと。現世主義の儒教は治國を主として至誠を説ける故に治國のために至誠を犠牲にするに至れり。加藤男は大浦氏は國家のために今回の事を爲せりと言へり。治國のために至誠を顧みず其結果治國平天下は望む能はざる也。醒めては握る天下の大權寢ねては枕す美人の膝とは今日までの政治家の希望也、實行也。而して今日の腐敗せる政治家は皆この亞流を汲めるもの也。妾を蓄へ藝妓に迷ふて尙國事に忠なりといふも誰か信ぜんや。自己に忠ならざるものまた他に忠なる能はざるなり。今日の政治家の如く主義に忠ならずして政治の發達を望む能はざるなり。また代議政體に於いては有權者は自發的に出でざるべからず、運動費を提供しても尙自己の代表者を出さるべからず。然るに選舉權を賣りて漸く投票するが如き咄々怪事を演じつゝあるなり。自發的に出でよと叫ばるゝも其の何の故たるを知らざるなり。故に其根柢を與へざれば自發的にせよといふも無効たるなり。今日の自治制度の如き制度にも缺點あるも更に其の公民

嗚呼醫學博士樫田龜一

郎君

三 並 良

嗚呼君は逝いたのである。僕には夢のやうにしか思へない。否、君の逝いたことさへ信ずることが出来ない。十日間計り前に僕は君ノ治療室で治療をしてもらつて居たのである。然るに君より半ヶ年間も治療を受けて居た僕は、君のお蔭で助かつて居り、健康なりし君は他界の人とならんとは。人世には實に意外なことの多いものである。

僕が君と相知つたのは、固より昨今のことでない。明治廿二年頃である。當時一高や大學の秀才が多敷僕の師事して居たスピンデル、シュミール兩氏の許に集つて來た例へば今福岡大の宮入、櫻井、樺博士の如き、或は京都大學ノ藤浪博士、岡山醫專の校長筒井博士、又は南湖院長高田耕安君、臺灣に居て同地方の醫學に就ては第一人者と云はるゝ小川尙義君の如きはさうである。

彼等の多くは當時我れ等の機關雜誌たる「眞理」の編輯を助け、或はその他色々有益な助力をなし、これが爲め世の所謂「駿河派」なるものは小數ながらも一時大勢力となつて居たのである。樫田君も亦その中の一人であつて、廿二年の秋十月、臺岐放教會の第二回紀念會が舉行せられ、午後には教會に於て、禮拜式晩には舊萬世橋畔にあつた萬代軒に於て親睦晚餐會が開かれ、前著は會衆三

百餘、後者は百五十餘名であつた。此の時樫田君はもう大學生であつたらうが、紀念會の委長となり、君の機智に富める性格は此の會をして充分成功せしめ得たのであつた。その以後も獨逸文からの翻譯や或はオリギナルのものを「眞理」に寄せて我れ等の運動を助けたことは一通りでなかつた。

大學卒業後君は越後高田にある瀨尾病院に行つた。院長の瀨尾學士は矢張り我黨の一人で先輩の方である。此の以後の消息は不幸にして聞くことを得なかつたし、君の信仰も動搖したらうが卅四年の春僕の長男が、大學の三浦内科へ入院した時丁度君がその助手長を勤めて居たので再び大に世話となつた。其の後君は博士になり。又待醫に任ぜられたことは新聞紙などで、よく知つて居たが、専門がちがひお互ひに多忙な身であるから、逢ふことは、少しも無かつた。然るに今年初夏僕が病氣になつたので、多分君の領分内の、ものであらうと思つて行つて診察を願つたところが、君は舊友を遇すること極めて厚く、僕は、爾來半歳の間安んじて君ノ治療を受け大いに輕快したのを喜んで居たのである。

其の間君が病氣で、引籠つて居たことは知つて居た。けれども、君は患者が、あると、時々診察もして居たし、又病人が、マッサージや電氣治療を受けて居る所へ出て來ては、これを眺めて居た。其の様子が僕には如何にも楽しさうに見えた。僕は之を見て君は治療を受ける患者が君によつてよくなつて行くのを心中に愉快に思つて居られるのであらうと考へて居た。然るに僕は近頃君の病氣があまりよくないことを治療室で聞いたがそれでも、こう云ふことにならうとは少しも考へなかつた。十日ばかり無沙汰をし

せば人々其個性を發揮し科學的に發達し眞の實業は始めて勃興せん。獨立にして正直なる者却つて榮えん。靈的改革は明治維新以來成立せる政治經濟に魂を入れる也畫龍點睛也、而して國民的煩悶は將に靈的改革を求めんとするなり。

靈的改革とは換言すれば眞の個人主義の勃興也説を爲すものあり、今回の歐洲戰爭に於いて個人主義の英軍は弱くして團體主義の獨逸は向ふ所敵なし、故に個人主義は國を亡すものなりと。誤れり、個人主義の本家は獨逸にあり、獨人は英人よりも個人主義なり。個人主義に於いては兩國略同じ、唯獨の強さはこの猛烈なる個人主義を率ゆるに英に無き團體主義あればなり。されば團體主義をのみ見るは誤れり、更に其基礎となる個人主義を認めざるべからず。殊に我日本に於いて團體主義の優勢を見てこれをのみ倣はんとするあらば淺薄の見たるを免れず。獨逸國民は個人主義強くして散亂し易き故にこれを結合せしむるために專制的國家起れるなり。我國民は從順なる故に專制的政治に甘じたりしなり。故に其結果同じきも其

原因は異なる。我國民は團體主義に強くして個人主義に弱し。學ぶべきは團體主義よりも個人主義ならずや、徒らに翻譯的思想に陷るべからず。

更にこの靈的改革は如何にして行はるゝやが問題也。歐洲の宗教改革は最も戲曲的なるウォルムズ會議によりて成されたり。一貧僧ルーテルは唯一卷の聖書を味方として雲の如く林の如く群れる王侯貴族高僧を説破せり、何等の痛快事ぞや。然れども今日の靈的改革はこれと其趣を異にすべしと信ず。即ち綺羅を飾る王侯貴族に説かずして簑を着笠を冠れる農夫に説き十呂體を手にせる商人に説くなり、上からなすにあらずして下からするなり。政治的改革たる明治維新の志士の心を以て筆により口により凡ゆる方面より國民を刺戟し獎勵して靈的改革をなさざるべからず。これ國家に對する最大貢獻にしてこの靈的改革の志士たるは最大の名譽たるなくんばあらず。(嶺岸生)

院長診察月、水、木、金、午前

林、峰間兩副長は目下當院に在勤

麴町區三番町三十番地（市ヶ谷見附内）

電、番六二二番

東洋内科醫院

院長

醫學士

高

田

畊

安

電話ちがさき二番

南

湖

院

相州茅ヶ崎海濱（從停車場半里）

河野、高橋兩副長は目下當院に在勤

院長診察土曜日午後、入院診後應需

で、昨日の午前に例の如く行つた。そして、玄關を上りながら、藥局生に君の様子を聞くと、意外にも今朝から激變して、危險であると言ふことである。僕は非常に驚いて殆ど云ふことさへ知らなかつた。丁度電話室で、令弟の十次郎君が電話をかけるのを待つて、病狀を聞くと、病氣は糖尿病であるが、日本人に殆んど無い狀態を呈して居る。朝よりは少しはよくて、脈も出て意識も現れたから、今晚まではもつてあらう、と云ふ答へであつた。僕は、恢復を祈つて辭し去つたが、門を出ても、人の運命の實に不思議なるを思ふて感慨無量である。數日前までは、人を醫した君が、今や自ら生死の間を出入して居るのである。否想ひ起せば六月の事 あつた僕は君の治療室に、レーマン氏を圍んで十餘名の日本人が居る寫眞を見た。其の時僕は君に此の寫眞のことを尋ねると云ふのは、此の寫眞に居る人々は殆んど僕が知人であるのに、僕が居ないのが不思議に思はれましたからである。これは一昨年カレーマン氏の知人が其の七十の賀を祝する爲に氏の薫陶を受けた人々が、氏を招待した時の寫眞である。氏の弟子には博士あり、教授あり、實業家あり、新聞記者あり、然れ共此の内にも既にレーマン氏逝き、本堂博士逝き、我等の仲間も段々數を減ず、と語り終つて君は悵然たるものがあつた。是れ或は君も亦其の群に入ることを豫感して居たのでは無かつたらうか。君は家庭に幸福を多く得なかつたらしい。遠く既 夫人と別れ、今は只だ一人の愛嬢と居るのみであつた。多くの醫員などは居つて、如何にも賑やかな様だけれども、君の顔には何處にか淋びしみがあつた様である。之れも或はまだ春秋に當める君をして、長逝せしめた原因の一であるまいかと思ふと傷しさの極である。

僕は此の不幸なる家庭殊に其の遺愛の令嬢に天恩の豊かならん事を祈る者である。又僕は君の友愛に酬ゆる爲に花弟をして君の肖像を寫かしむる約をして居つたのであるが、元より今日のことあるを豫期しなかつたのであるから、未だ半成のまゝであるのを遺憾とする。しかし遠からず、完成せしめて、君の靈を弔ふつもりである。(十月廿二日記)

編輯の後

■本號には「反響欄」を設けました。西淵氏の小論文が大れです。本誌に載つた評論に對する讀者諸氏の高評や感想は同人の喜んで聞かんと欲する所で、此欄に設けた次第であります。九月號の「女子の運命」に就ても若い婦人方から個人的抗議をうけましたけれど、纏つたものが無いので茲に發表は致しかねます。

■岡田哲藏氏の英詩が久振りで本號に出ました。氏が永平女子高等教育に關係された所からの御感想であると思ひます。同氏の我斷片の第三版が美裝して出ました。

■三並氏は名古屋の名醫の治療をうけられた結果昨今は殆ど全快されました。追々本誌にも筆をとられることとせう。

■内ヶ崎氏も人生日訓といふ大きな新著を出されました。演説家などには頗る重寶なもので、或は氏が雄辯の玉手函じやないかなどいふ評もあつた位です。氏は先月十八日には信州大町の青年會に出張講演されました。■吉田氏相原氏共に健在。■本誌原稿の切毎月十一日、東京市外巢鴨一四七〇相原方編輯部宛御送りを願ひます。

週刊宗
教雜誌

基督教世界

毎週木曜發行
一部 金五錢
半ケ年 金一圓二十錢
一ケ年 金二圓三十錢
外國行一ケ年 金三圓

◎本誌の創刊は明治十六年にして既往三十餘年の歴史を有する本邦基督教界最古の週刊雜誌なり

◎本誌の特長は進歩的基督教の立場より時事問題を評論し且つ最新の知識に依り基督教永遠の眞理を闡明するにあり

◎本誌には毎號教界先輩の說教、内外名士の論說と新進思想家の研讃と、清新なる宗教文學及内外教勢を滿載す

◎本誌は信仰修養の糧として聖書研究の手引として、信徒家庭の讀物として好適なる雜誌なり

◎本誌の編輯は宮川經輝、原田助、小崎弘道、渡瀬常吉、牧野虎次の五氏協力之に當り、武本喜代藏、山口金作の兩氏毎號執筆し、在兩京の記者數名之を助く

本誌の見本は往復はがきにて御申越次第無代進呈すべし

發行所

基督教世界社

振替貯金大阪參壹七參

大阪市北區中之島二丁目四七

十月一日
發行
十月號
定價金貳拾錢

大谷雜誌

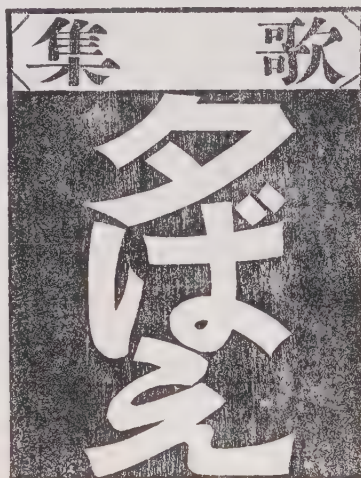
九月一日
發行
九月號
定價金貳拾錢

- 統一主義の主張……………サンダーランド
□宗教は名詞か副詞か……………岸本能武太
□宗教の二面……………今岡信一良
□藝術の權威……………吉田絃二郎
□フオルサイスの宗教藝術觀……………佐藤繁彦
□畑みち……………伊藤 寥々
□創造の藝術……………佐藤 清
□現代獨逸に於ける政治思潮の批判……………松枝 德麿
□パーゼルに砲聲を聞に行く記……………蘆 山 生
□復讐の心……………沖野岩三郎
□山吹の花……………田中 葦城
□椽先にて……………鈴木 龍司
□養 蟲……………岡田 哲藏
□雲の色……………内ヶ崎 作三郎
□貞操の意義……………内ヶ崎 作三郎
□結婚道德の新典型……………一條 忠衛
□貞操に對する我信念……………宮崎 光子
□戸山ヶ原にて……………小宅銀次郎

- 創造の藝術エドワルド・カアペンター……………佐藤 清
□思惟の生産的流動性……………野村 隈畔
□永世の後―エドワルド・カアペンター……………富田 碎花
□近代文學に於ける女性……………石田 三治
□女子の運命……………木村 久一
□如何にして生らんか……………帆足理一郎
□北米だより……………鈴木 文治
□瑞西より……………蘆 山 生
□私生兒の心……………沖野岩三郎
□大戰亂の精神的統一(海外思潮)……………記 者
□國家主義と國際主義の統一……………内ヶ崎作三郎
□西南旅行……………内ヶ崎 生
□時評……………諸 家

此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る旨書添を乞ふ

((既に發賣))



歌集「夕ばえ」は敎界唯一の女詩人、野口氏の處女出版にして、實に千有餘首の作中より會心の作を自撰せられたるもの、其數すべて六百首。
敢て詩歌風流を娛しむ我敎界諸兄弟の坐右にすゝむ。

野口精子著

□ □ 表紙木版奉書八度刷 □ □
□ □ 挿畫四葉天金箱入 □ □
□ □ 定價金七拾錢 □ □
□ □ 郵税金八錢 □ □

大空をたたけば銀の音冴して心のはじく高原の秋
山の火は横になびきて紫す天女髪引く夕ばえの空
春の水あふるる音の心にも渦をこそまけ躍る生命に

装幀 有田四郎氏



振替五五
東京番

警醒社書店

東京橋
張町

發兌



本誌讀者諸君の特權

◎圖書取次!

- 一、東京市内發行の書籍ならば定價の全額丈御送り下さるれば別に送料は要しませぬ。
- 但し法律書、醫書は元價非常に高いのですから送料を添へて下さい。
- 一、御送金は可成安全な振替貯金にて御拂込み下さい。
- (振替口座は東京 一〇〇〇三、六合雜誌社宛)
- 一、本部へ當て返書を要する質問書御發しに際しては必ず返信料を添付下さい。
- 一、一般圖書の取次ぎは今度始めて開始したのですから是非一度御試み下さい。

六合雜誌社營業部

電話芝五八五番

本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵税一錢
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵税共
十冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵税共
●海外は郵税一冊に付金六錢(清國を除く) ●臨時號出版の際は規定以外に代金申受く			

本誌廣告料

特等	表紙二三四面	一頁	金貳拾圓
普通		頁	金拾貳圓
普通		半頁	金六圓
●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候 ●二冊以上連續掲出の際は特別割引可仕候			

大正四年十月三十日印刷
大正四年十一月一日發行

(毎月一回一日發行)

發行所

東京市芝區
三田四國町

統一基督教弘道會

定價 貳拾錢
本號

發行兼編輯人 海上輝男
印刷人 日比野幸一
印刷所 株式會社 秀英舍
東京市芝區橋本町二七七番地

賣捌所

東京堂◎北隆館◎東海堂◎同文館◎上田屋◎
◎醒社◎教文館其他全國有名書店

電話芝五八五番
電話芝五八五番

1915 417
IN SCHOOL
1915
誌 雜 合 六

號 月 二 十



號 九 十 百 四

明 治 廿 五 年 三 月 廿 七 日 第 三 種 郵 便 物 認 可
大 正 四 年 十 二 月 一 日 發 行 (每 月 一 回 一 日 發 行)

六 合 雜 誌 第 三 十 五 年 第 十 二 號

此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る旨御書添を乞ふ

●東京第一高等學校教授三並良先生新譯●（最新刊書）

賣行激甚

オイン人生の意義と價值

菊上製美本全
正價金
壹圓五拾錢
郵稅金八錢

好評 三版

獨逸が四面敵の攻撃を受けながら、彼等をして一步だも國內に進入するを得しめずして奮闘するは驚嘆に價せずや。而も是れ單に國家主義や軍國主義の賜にあらず、人類が依て以て立つべき高遠甚深なる宇宙人生の目的と價值とを悟了せるが故なり。是れオイケンが本書に於て道破する主眼の點にして又本書が彼等猛將勇卒を鼓舞する大なる所以なり。而も是れ單に獨逸の問題にあらずして世界の問題なり。若し世界の人のにして之を悟らば戦争は自ら絶滅せん茲に大なる謎あり。オイケンハ之を説明して餘蘊なし。愛國の士も宇宙人生の謎を解かんとする人も本書を繙けば十年の疑問自ら釋然たらん。

米國紐育大學教授ホー博士原著
早稻田大學教授中桐確太郎譯
米國紐育大學學士荒川哲二郎譯

ドクトル 羽太銳治 著 ■性慾教育の研究 全
上司小劍著 ■感想 小品小ひさき窓より 全
正價金壹圓廿五錢 郵稅金八錢
正價金七拾五錢 郵稅金八錢

最新刊

新理想主義の教育

四六判上製美本全壹冊
紙數舶來洋紙約四百頁

正價金八拾錢 郵稅金八錢

著者ホー博士は新進有爲已に關を教育界に唱へつゝある學者にして本書は其最得意の著述なり内容は人間養成に於ける教育問題遺傳及教育、環境及教育意志及教育人間作成の哲學等の五章十項に分ち從來闕却せられたる教育の根本原理を闡明せり敢て識者の一讀を希ふ。

大田館發行

東京市神田區
表神保町七番地

振替東京
貯金七
貯金七
金口番

（明治廿五年三月二十七日第三種郵便物認可）
（大正四年十月卅日印刷納本）
（六合雜誌第三十五年第十一號）（大正四年十一月一日發行）（每月一回一日發行）

【本一冊定價貳拾錢】

THE RIKUGO-ZASSHI

No. 419 December 1915

CONTENTS

Self-Sacrificing Spirit.	Prof. I. Abe.	2
Recollections of a Dead Friend.....	T. Oyama. M. P.	11
My problems and Thoughts.	Y. Nomura.	33
Fragmental Thoughts.	G. Yoshida.	43
On St. Francis.....	M. Nakayama.	54
True Meaning of Democracy, President Batler.		
.....	Transl. by S. Takahashi.	60
To My Critics.	T. Okada.	80
Japane Art without Philosophy.	N. Kudo.	86
A Poem.....	H. Akiba.	96
Tanka.	C. Hyodo.	93
Tanka.	K. Teshima.	94
A Poem.	I. Tanaka.	95
The Enkindler of My Faith.....	Prof. S. Uchigasaki.	114
Tanka.	Late Mr. R. Shimaji.	123

Liberal Christian Pulpit.

The Great War and Religious Thought....Prof. S. Uchigasaki.

Topics of the Day.

New Books.

Published Monthly by the

TÔITSU KRISTOKYÔ KÔDÔKWAI,

2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

●故小林富次郎翁遺文『聖書日日實行訓』本日發賣(本誌目次の四參照)

年 末 年 始

ク リ ス マ ス

贈 品 ！

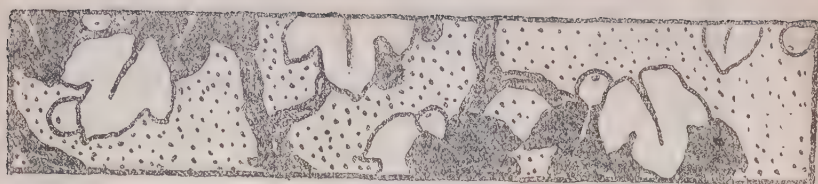
ライオン齒磨の各種

■子供齒磨ダス入美麗函■家庭用美術大罐■煉齒磨・水齒磨の高尙函

ライオン石鹼の各種

■化粧石鹼美裝函入■用石鹼浮石鹼洗石鹼の進物包

ライオン石鹼磨 本舗 小林富次郎



文藝欄

出雲路……………兵働竹醉……………九二頁

美作國……………手塚麒一……………九四頁

時と處を異にすれども……………田中葦城……………九五頁

若い井戸堀……………秋葉肇……………九六頁

夕彩雲……………故島地雷夢……………一二二頁

雜俎

結婚と戀愛問題（反響）……………原田寛一……………九八頁

大戦争と宗教思想（教壇）……………内ヶ崎作三郎……………一〇七頁

教界彙報…………………………一二四頁

最近教學評論界一覽…………………………一二六頁

時評欄

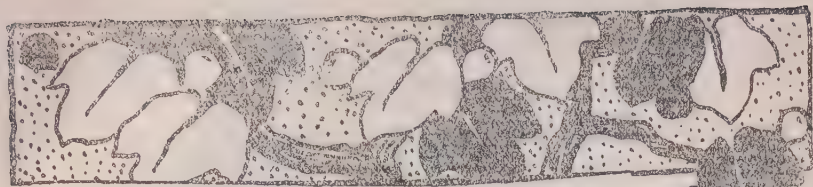
妻の無能力の問題（一條生）……………隨感一東（三郎生）……………一三〇頁

新刊批評―編輯たより

六合雜誌第三十五年第十二號目次

本 欄

沒我的精神……………	安部 磯雄……………二頁
薄倖の秀才島地雷夢……………	小山 鼎浦……………一一頁
自分の問題と感想……………	野村 隈畔……………三三頁
わが愛するは……………	渡部 甲子……………四二頁
色々な感想……………	吉田 絃二郎……………四三頁
聖フランチェスコを憶ふ……………	中山 昌樹……………五四頁
デモクラシーの眞意義……………	パトラー博士……………六〇頁
批評の負債……………	高橋清吾譯……………六〇頁
哲學を有せざる日本畫……………	岡 田 哲藏……………八〇頁
二高時代の島地雷夢君の追懷……………	工藤直太郎……………八六頁
	内ヶ崎 作三郎……………一一四頁



六 合 雜 誌



十 二 月 號

此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る旨書添を乞ふ



初代齒磨王 小林富次郎翁 遺文

△中尾清太郎君 著 編

新約聖書の精髄

聖書百寶行

泰西名畫五葉及故人胸像眞蹟入

中版布裝天金上製
ポイント活字印刷
紙數四百頁紙函入
定價壹圓郵稅八錢

新試み

本書は故小林富次郎翁が生前須臾も離さず世界を持つて廻つた小さい聖書の書入から、翁の感想・批評・提醒等を撫ひ蒐めて一年三百六十六日に割當てた「壓縮聖書」であるので、通觀すれば一種の「壓縮聖書」である。

クリスマス絶好の贈答品！

— 寔に聖書の心の髄ともいふべきもので、道に入る人には唯一の手引草！

一般の人々には絶好の修養書！
である。殊に美しき臺紙貼として挿入せる泰西名畫は、斯書を趣味の書として光らしてゐる

父母にも

兄弟にも

弟妹にも

師長にも

子弟にも

友人にも

薦 □ 大迫大將題辭 □ 福井教授閑
□ 阪谷男爵序文 □ 渡邊白水著

乃木學士大將學生訓

附錄 乃木將軍詩歌全集

△小型布裝函入 △價六十錢 △郵稅六錢

探偵ロマンス

安樂前總監序 □ 岩井三郎氏實地談
江木博士序 □ 松崎天民著
高木辯護士序

好評三版 中版布裝函入美本
■價九十錢 郵稅八錢

東京市橋區 銀座座書房 振替口座 〇三六九 東京 六番 賣 全國各地書店 發兌

る。この利己的な精神は今でも彼等野蠻人の心に残つてゐる。然も人間の斯る利己的な精神は、基督教が無かつたならまだ、根強く残つてゐたことであらうと思はれる。今日ほどまでも利己的精神の薄らいでゐるといふことは、これ基督教が與つて力ありしことと言はねばならぬ。

然るに近來、世人の動もせば利己的に流れむとする傾向のあるのは、人類の精神的退歩であつて、これは一部の人々が宗教を輕視した結果に外ならない。今日の青年の教育に缺けるも亦この點である。彼等には團體的精神を缺いてゐる。誠に歎じべきことである。先日、陛下が京都へ向け御發輦の朝であつた、御見送りとして私は早稻田大學の學生と共に二重橋前へ行つたのである。その途中のことであるが、何しろ二千人からの學生が夜の二時頃に進行するのであるから無聊を感じて來た。時間が時間であるから世人には些か迷惑であらうと思つたが、然し陛下の御見送りのため大概の家は起きてゐるやうであるから學生に校歌を歌はしたのである。それを聞くに、初めの裡は兎も角、少し時間が経つて各自聲が疲れて來ると自分ばかり大い聲を張り上げて他を壓せむとする、即ち全體としての調和を少しも考へない。而して竟には残らず靜かになつてしまつた。何等音學的訓練を受けぬ我國の學生のことであるから致方がないやうなもの、見様によつては好く我國民性を發揮したものと云はねばならぬ。今日の我國政治界、新聞界、實業界を見るに比々皆然らざるは莫しといふ有様である。自分ばかり他人に目立つように、他人はどうなつてもよいといふ利己的思想から來るのである。

沒我的精神

安部 磯 雄

一

過去に於ける基督教が、吾人々類の歴史に及ぼせる感化力の如何に偉大なるものがあつたかといふことは茲に私の贅言を須ゆるまでもなく明かなことである。又、其の感化力の強弱は暫く措き、現在に於ても將た將來に於ても尙ほ何等かの感化を吾人に與ふるものであると深く私は信じて疑はないものである。

然らば吾人は如何なる方面に於て最も大なる感化を基督教より受くるであらうか、私は羅馬書第十二章の精神を最も尊しとなすものである。即ち人間は愛の心を以て交はらねばならぬ、自分のことばかり思はず^ひに他人のことを計らねばならぬと言ふ、要するに沒我的精神、これが吾人に與ふる最も大なる感化であると思ふのである。

元來人間は其の本來の性質に於て已に利己的のものである。これは子供を見ればすぐ解ること、彼等は何事に關しても先づ自分のことのみを考ふのである。他人の爲めにする心は全然無いといふ譯ではないが、極く尠ない。野蠻人も亦然りであ

ら勿論下女も何も雇つてない。随つて散歩に出ることも中々意に任せないのである。そこで牧師は、お子さんは私が托してお留守居をしてゐますから公園へでも散歩に行つて來たら好いでせうと言つて其の婦人を散歩にやり、自分は子供を、あやしながらお留守居をしてやつたといふことである。こういうことも歐米人には少しも珍らしくないことであるが、日本には其の例が乏しいことと思ふ。又、グラットストーンは如何なる場合と雖も自分に宛てゝ來た書信には残らず返事を出したといふことである。あんな有名な政治家であるから日に何十本となく來たことであらう。或は彼を忻慕する勞働者からの手紙もあつたらう、或は彼の人格を敬愛する未知の青年學生からの葉書もあつたらう、而も是等に對して残らず返事を出すといふことは容易なことではない、實に尊敬すべき人格である。而して是等の行爲も煎じ詰むれば皆基督教の感化から來てゐるのである。

二

私は近頃リンカーンの傳記を書いた百頁ばかりの小さい本を讀んだが其の中に書いてある一つの話で非常に感動された。而してこれも基督教の精神の現はれたものであると思ふと、何とも言はれぬ味があつたのである。それはこういう話である。彼の南北戦争の際、ゲッツブルグといふ所で非常な激戦があつて、北軍即ちリンカーンの方の軍隊も大部戦死した。そこで此の地に紀念碑を建てることになり、愈々出來上つて除幕式を行ふこととなつた。其の時大統領のリンカーンにも是非一場の演説をして呉れとのことである。人の知る如く彼は小學校以上の教育は一切之を享けたことがないので學問

鑿つて歐米人を觀るに流石に、永く基督教の感化を被つて來たゞけに彼等は好く足並が整ふ。尤も彼等はどうしても好い所、ツマラヌ所には随分個人主義である。例へば四五人の人が寄つて飯を食ひに料理屋に行つたとする、此の場合日本人ならば誰か一人アレを喰はうと言ひ出せば大概、じゃ私もそれにしやうと言ふ、すぐ纏る。彼等にあつては即ち然らずで、僕はこれ僕はあれといふやうに四人が四人、五人が五人で各違つた料理を注文するといふ有様である。然れども一度一致を要する場合、協力せねばならぬ場合となれば非常に沒我的となる。誠に美しい次第である。勿論日本人と雖も場合によつては好く一致する。然し未だ彼等歐米人の如く、殆ど本能的に沒我的態度をとるとまでには至つて居らない。この點が基督教の歐米人に教えたる大なる力と言はねばならない。思ふに個人と個人とを比較したる歐米人と日本人との間には未だ其處には餘程の距りがあるやうである。

彼のベースボールでもさうである。場合によつては自分が死して身方のチーム全體の利を計ることがある。犠牲サクリファイスボール球がそれである。この場合自分は充分立派な腕前を持ちながら好むで無慘な最後を遂げその代りに友人を助けてやるのであるのである。何といふ立派な犠牲であらう。斯る點が團體的遊戲の教育的價值を有する所であるが、日本人の選手には未だそれが好く出來ないやうである。徒らに觀客の喝采を博することのみを考へるやうではさだしく駄目である。

ボストンにフリップス・ブルックスといふ有名な牧師が居た。この人は常に信者の家を訪問して歩くが、或時矢張り信者の人で食しき寡婦を訪問した時のことであつた。行つて見ると其の婦人は非常に顔色が悪い。一體この婦人には二三歳になる子供が一人あるが、前述の如く食しい身の上であるか

る。そこでこの兄なる人であるが、彼は元來元老院の書記を勤めてゐた青年で、今次南軍に屬して奮戦し矢張ゲッツブルグの戰で不幸にも重傷を負ふて北軍の捕虜となつたのである。

今、リンカーンが子供に伴れられて其の病室へ入つて行くと彼は己に昏睡状態にあつた。弟から辯護士が來ましたと聞くと漸く眼を開いて苦しい中にもリンカーンに一揖し、さて紙とペンを取り寄せて一々遺言を書いて貰つたのである。最後に署名する段になつて初めてリンカーンに貴方は何と仰せらるゝかと問ふた、リンカーンも大に當惑したが、まさか偽を言ふ譯にもゆかぬから、私はリンカーンと云ふ者ですと答へた。すると其の青年はちつと彼の顔を見て、それじや貴方は大統領のリンカーンさんの御親戚にでも當るのですかと言ふから、親戚といふ程もないが遠い縁續きになつて居りますと答へた。さうですかと言つた青年は暫く瞑目して、時に貴方は今日の新聞を御覽になりましたかと問ふのである。リンカーンは其の時まだ新聞を見てゐなかつたから、いや未だ見ませんが、何か變つたことでもありませんかと問ひ反した。すると青年は弟をして隣室から今日の新聞を取り寄せて、昨日ゲッツブルグの除幕式で大統領のやつた演説は非常な大演説であつたさうですネ。聽集は感動のあまり聲も出し得なかつたといふことです。私もこの演説を讀むで太く感動しました。そして大統領といふ人はこんな同情のある、人格者であつたかといふことを初めて知つたのです。私は死ぬ前に一日でよいから大統領を見たいと思ひます、と語り終つた彼の青年は人目もはゞからず潜然として哭くのである。リンカーンも其の新聞を見て初めて昨日自分のやつた演説の反響を知つた譯である。

リンカーンはその青年を非常に氣の毒に思ひ、遂に自分の大統領のリンカーンであるといふことを

は餘りなかつた人である。搗て加へて此の日は首府のウオシントンから幾多有名なる雄辯家が行つて演説することゝ彼も汽車の中で非常に考へて行つたのである。

廳で式場に着いた。彼の前に演壇に上つた者は有名なる學者エバレットで、一時間半に渉る大演説を試みて大喝采の裡に壇を下つた。其の後に上つたリンカーンは僅か十五分ばかりホンの自分が常に思つてゐたことのみを述べ、極めて簡單な演説を爲して壇を下りた。聽集は水を撒つた如くに靜かである、一人として喝采するものもない。唯だ二三の人が彼に、今日の御演説は非常に感動を與へましたと言つたさうであつた。彼は心の中で、此の人々はお世辭に言つて呉れるのである、現に聽集は拍手も喝采もして呉れぬではないかと非常に悲觀したのである。で匆々にしてウオシントンに引き上げて來た。演説をして出來の悪いと思つた時は誰でも經驗することであるが、彼の如き大人物でも此の日は餘程不愉快であつたと見え、翌日役所へ行つても一向氣分がさえない。で、午後の三時頃公園へ散歩に行かうと思つて供をもつれず一人で街頭に出て行つた。すると向ふから一人の少年が何事かが起つたらしく一目散に馳て來たが、あまり焦いでゐるので、リンカーンのやつて來るのが解らなかつたと見え勢ひ強く突當つた。氣がつくとその子供はリンカーンを尻目にかけて再び驅け出した。そこでリンカーンは子供を呼び留めて、お前はなぜそんなに急ぐのかと訊ねた。兄さんが今、目を落すところだから辯護士を呼んで來て遺言を書いて貰ふんだと、口早に答へた子供は振り向きもせず驅けてゆく。彼は再び子供を呼び留めて實は私は辯護士であるが、私で好ければ行つて上げやうと思ふが何うだと言つた。それじやと言ふので子供と一緒に來て見ると衛戍病院の中の一室へ案内されたのであ

圓である。實に莫大な錢である。この大金を特に東洋の慈善事業にのみ提供したといふことに就いては又非常に味ふべき理由がある。ロ氏は言ふまでもなく米國の石油王と稱する、人ぞ彼のスタンダード石油を以て今日の富を致したのである。然るにこのスタンダード石油は東洋に於て夥しく消費されたもので、我國は勿論、支那朝鮮至る處この石油を遣つた。即ち日本人や支那人朝鮮人がロ氏に儲けさせた金といものは又莫大なものである。ロ氏は此所に氣が付いた。自分の今日の富は決して自己一個の力によつて贏ち得たものではない、東洋諸國人に儲けさせて貰つた金は實に大なるものである。

この見地よりして特に東洋人にのみ四億圓といふ大金を提供したのである。誠に慕はしい心掛けと言はねばなるまい。尤もロ氏は最初赤裸一貫でこの事業に取り付いた當時は随分酷いことをやつたのである。然し過去は過去、今日已に前述の如き立派なる精神を有するからには過去の惡事は之を帳消しにせねばなるまい。そこへ行くと同じ富豪でもカーネギーなどはまだ心が小さいと言はねばならぬ。今日彼はロ氏に優るとも劣らぬ莫大な金を慈善事業其の他に消費するけれども、それは悉く白色人種のみを相手にしてゐるやうである。然し是だとして我國の富豪などはまだ／＼比較にもならぬ精神である。

一體富豪にしる學者にしる、社會の力を藉りずに如何で自己一人の力のみで富豪たり、學者たり得るであらうか。露國のトルストイ伯は自分の著作物には一切版權を取らずに出版せしめたといふことである。自分は決して自分の一人の力で著述するのではない、古今東西の先哲碩學の頭腦を直接間接に借り來つて初めて出來上つたこの著述である。何處に版權を取る資格があらう、といふのが彼の主張であつた。勿論彼には尠なからぬ資産があつて、強ち著述によらずとも生活し得た故でもあるけれど

告げた。之を聞いた青年は俄かにベッドの上に起き上らうとしたが彼は辛じてそれを止め、昨日からの顛末を話し、尙ほ自分は唯だ常に思つてゐることを述べたゞけに過ぎない、それを君が徳としてくゝるゝことは私にとつて誠に有難いことであると付け加へた。そしてこの名もなき一青年は大統領の腕に抱かれて感激の裡に息を引き取つたといふことである。

私はこの逸話を讀むで非常に動かされたのである。一國の元首の身にあつて、尙ほ且つ無名の青年、而も敵軍の捕虜に對する斯くの如き尊き態度といふものは誠に尊敬に値するものと思ふのである。而してかゝる立派な精神といふものは、勿論リンカーンその人の偉大なる人格の閃きであることは申すまでもないが、其の根元を尋ねれば其處に矢張り基督教の感化を認めぬ譯にはゆかないと思ふ。さにあらざれば何うしても解釋がつかない。基督教を措いて斯る美しき精神を培ひ得る動力は殆んど見當らないのである。而して此處に見落してはならぬことは、米國にはリンカーン以外幾多隠れたるリンカーンの存在することである。永く基督教に接すれば彼と同じき精神同じき人格を養ふことは決して難きことでないといふ私は信ずるのである。

四

人間にとつて何が一番六ヶしく又一番望まじきことであるかと言ふに、それは相手を究めずに善をなすことである。慈善を受ける相手は何んであるかを知らずに慈善をなすことである。一昨年の秋、米國のロックフェラーといふ富豪が東洋全體の慈善事業に二億弗を提供した。二億弗と言へば我が四億



薄倖の秀才島地雷夢

小山 鼎 浦

二高學生間に異彩を放つ默雷上人の子

島地雷夢といふ名を僕が始めて聞いた頃、僕はまだ廿歳の青年であつた。佛教界の高僧に島地默雷あり、その子に乃父の名を辱かしめざる秀才雷夢ありとの評判は、僕をして異常の尊敬と憧憬とをその名に拂はしめた。

今から十八年前、僕が仙臺なる第二高等學校の一部に入學した時、間もなく此名を聞いたのである。此名によつて僕はその人となりを空想した。默雷上人の清容は寫眞で既に見た事があつた。夫れから若い雷夢なる學生を心に描いて見た。眉目秀麗な、氣品の高い、背のすらりとした、貴公子風な青年であらふと何の理由もなしに僕は豫期して居つた。

當年の二高一部には多くの輝ける青年が居つた。當年のブライト・ボーイスは即ち今の名士と化つて居る。文科の三年には、早稻田大學教授の内ヶ崎作三郎君。京都大學の小西重直博士、三高教授の栗原基君、一高教授の箭内互君など、一團の若々しい星座を形つて居つた。島地雷夢といふ名は、その星座の中に於て特に異彩を放つて居つた。假令星座の中心で無くとも、最も光輝ある一つであつ

も、基督教的感化を受けざる者にあつては是又容易に爲し得ることではないと思ふのである。

五

今日個人間の道徳は餘程進歩して居るけれども國家道徳に至つてはまだ幼稚である。勞働問題にした所で、資本家に對しては全世界の勞働者一國となつて當るけれども、一度彼等同志の軋轢を見れば如何であらう。米國人は日本人を排け、濠洲人は又日本人と相容れぬといふ状態である。是皆利己的排斥的精神に基く結果に外ならない。故に吾人基督教徒は一方に資本家を訓練すると同時に又他方に於ては勞働の訓練を忘れてはならない。否、勞働者、資本家のみならず、社會各方面の人々にバプテスマを授ける決心がなければならない。

今後の基督教の前途は誠に困難であらう。然し過去に於ける困難を回想する時は吾人は決して悲觀するものではない。何時かは我基督教によりて開拓し得ることを私は深く信じて止まないものである。憶ふて此所に至れば吾人基督教徒の使命は誠に大なるものである。繰返して言ふ、吾人は此の基督教なる鍵鑰を提げて社會各方面に向つて飽迄開拓して行かねばならない。

背丈の高い、丸顔な、眼光の鋭い、言葉使ひの荒々しい青年であつた。彼は殆んど王者の如く振る舞ひ、傍若無人に冷嘲熱罵を浴びせるので、小膽の僕などは恐れを懷いて居つた——其人と僕は何の交際も無いのだが、今の理學博士遠藤吉三郎君であつた。

ある日の午飯時に、僕は遠藤君と並んで立ちながら辨當を食ひつゝ頻りにシャベつて居る青年を認めた。顔色にぼやけた學生服の、而かも處々破れて膝が抜けそうなのを着て、軽くダンスでもするかのやう、足を爪立てながら食つては談じ、談じては食ふ、遠藤君に負けず劣らず、笑つたり論じたりして居つた。その赤味を帶んで細長い顔、若いのか年長つたのか一寸判斷し兼ねるやうな物の言ひぶり、顔の言ひ現はしが、何といふ事無しに僕の注意を惹いた。僕は何となく態度の落ちつかない人だと思つた、而して同時に能くもまあ一見傲岸に構へて居る遠藤君などを相手に、あんな氣樂な議論をする事よと心の中に妙な尊敬を拂つた。此好奇心がら、僕は「あれは誰れだらう」と同窓の友達に問うた、友の曰く、「あれは君、有名な默雷上人の子息だよ。」

此の最初の印象感覺、その總てが今も猶ほ十八年前のやうに僕の頭腦に生きて居る。評判をきいて想像した島地雷夢の幻影は、半ば破壊されたが、半ば實感と混融して、自分は島地雷夢も人間に相違ない、近づき得べしと考へるやうになつた。

心靈の一大飛躍より頓挫へ

雷夢君は内ヶ崎君深田君などと一緒に、尙志會雜誌の編輯委員であつた。二高の學生仲間には文名隠れも無かつたのである。高山樗牛、佐々醒雪の二君が前後して二高の教授となつた頃、雷夢君等は

た。新入生たる僕の好奇心は早く此雷夢君なるものを見たい、知りたい、出來得可くんば交りを泰うしたいと、そう生真面目に考へて居た。

その時の文科二年には今の京大文學教授深田康算博士が居つた。語學の才と品性の美とを以て、全校の尊敬を得たものである。而して法文の一年、即ち僕などのクラスメートには、今の帝大法科教授吉野作造博士や、逝ける野の人齋藤信策君などが居つた。是等の若い人々の間に、一脈の道が通じて居つた。宗教的向上心が縁となつて、栗原、内ヶ崎、深田、吉野の面々は、自ら交際を結んで居つた、互に尊敬もし趣味も合ふ所から、雷夢君も自らは等の人々と一團を爲して、談論し、交際し、遊戲したのであらふ。當時の僕などは物の數ならずで、同級とはいふものゝ吉野君は中學時代の先輩でもあり拔群の秀才でもあり、共に嬉戲交際すべく餘りに人間が高尙であつたから、僕は容易に親しむの機會を得なかつたのである。況して二年三年の上級に於ける秀才諸君に對して、僕などは容易に言葉を交はす勇氣さへ出なかつたのである。約一年間僕は是等秀才の星座を眺めて只崇め、尊とみ、憧がれて居つた。

彼の第一印象

當時の二高にうす穢い陰氣な學生控所があつた。正午の鐘が鳴つて放課時間になると、學生はドヤ／＼とこゝに遣つて來る、そして妙な匂ひのする白湯を呑みながら、辨當箱を開くのであつた。新入生の僕なども恐る／＼室の片隅で、辨當を食べて居る、すると殆んど毎日のやうに控所のテーブルの眞中に席を占めて頻りに氣焰を吐きながら周圍を睥睨するかのやうにして辨當を食ふ學生があつた。

君は此時までも僕等のクラスメートの中で、寧ろ阿兄に似ない鈍物の稱があつたのだ。而して之と同時に一等賞の選に入つたのは兼ねて乃父を辱かしめずと言はれて居つた島地雷夢君である。雷夢君の入選は寧ろ豫期せられたる者の如くであつた。齋藤と島地と而して僕等、三角形の一團の關係はこんな處から段々芽を吹いた。

僕はその頃から雷夢君と少しは互に相知るやうになつて來たが、それも學校で挨拶する位のもので親しい交際は無かつた。斯くて殆んど十個月間、僕は只雷夢君の評判を聞いて居るばかりであつたが、而かも島地雷夢なるものゝ一生涯に於て、最も輝き最も意義ある時代は、まさしく此頃であつたらしい。即ち彼が二高の文科三年生なりし前後（明治三十年から三十一年の初夏にかけて）、その時こそは雷夢君の靈性が不思議に光耀した時代であつたらしい。此間の消息を最も能く知るものは、栗原基君と内ヶ崎作三郎君とであらふ、僕は殆んど與り知らぬ。

當時僕の親しさ同級生に祥雲確悟君が居つた。曹洞宗の熱心な信者である。同じ佛道的關係から雷夢君と多少の交際を有して居つたらしい。或晩祥雲君は眼を異常に輝かしながら、僕の下宿には入つて來た。そうしてイキなり『君は島地の事を聞いたか』と云ふ、僕は何にも聽いては居ない、『君、島地は耶蘇になつたそうだ、何でもバプテスト教會の宣教師から洗禮を受けたといふ話だ、島地の非常識にも實に呆れて仕舞ふぬ』祥雲君は憤るが如く悲しむが如く、眞赤になつて話し込んだ。

僕は其頃未信者であつた、けれども内村鑑三氏の獨立雜誌を高山樗牛の文章以上に愛讀して居る一人であり、氏の著者と言へば、新刊毎に之を耽讀する程であつた。僕は内村氏の筆を通じて幾多の疑

文科二年に居つて當時日の出の著名な文豪から不知不識の間に、多少の感化を受けたと見える。けれども雷夢君等の一團は、其頃早くも思想がそろ／＼成熟しかけて居つたので、心靈上の問題に就ては、樗牛の議論に壓服せられず寧ろ大に不満を唱へて、随分やり込めるやうな事もあつたやうな。僕は學級も異にして居つたし、僕の入學した時は最早樗牛も居なかつたので、其間の消息は審かに知らない。併し文學上に於て雷夢君などの向上心に樗牛の間接な感化力は必ず働いた事と察して居る。樗牛は歸京の後ち人に語つて、『默雷の子息は後世恐るべし』と言つたやうな——僕の記憶にして誤謬なくば、僕は此事を竹柏園主佐々木信綱博士から伺つたやうに思ふ。

雷夢君は年少にして才氣煥發といふ方であつたと見える。樗牛をして後世畏るべしと感ぜしめたのも要するにその才氣であつたらう。雷夢君の才氣は多角形的に煥發して居つた、文章も巧みだし、辯舌もよし、語學も出来るし、遊戲も好き、僕でも相手になれさうな極めて甘いものではあつたが能く擊劍なども二高の道場でやつた。その中に雷夢君の最も得意なものは何であつたらふか、當時の事を僕は能く知らぬから、内ヶ崎君の懷舊談に總てを譲らねばならぬが、評判では文章がその随一らしかつた。最も或人は雷夢君を評して、天成の説教家と言つた。默雷上人よりも説教に熱があり詩があつてエライものだと言つて居つた。けれども僕は評判に聞いた丈で、只の一度も雷夢君の説教ぶりを聞いた事がない、十八年來聞いた事が無いのである、僕は今でも之を残し惜しく思ふ。

明治三十一年の春であつた。尙志會雜誌（二高學生の機關）が春夜月に對すといふ題目で懸賞文を募集した。その時二等賞を受けて、一躍文名を博したのは樗牛博士の令弟齋藤信策君であつた。齋藤

少氣鋭、前後の考慮もない熱情の發露か、何れにしても問題は小さくない。或人は日本の佛教界にル・テルが再來したやうにも言ひ囃し、或人は宗教病理學の一新事例を得たやうにも囁する。紛々たる毀譽の聲は、忽ち青年島地雷夢の身邊に雲集した。正に二高を卒業して東京大學に入らんとする其初夏の頃、彼は問題の人として宗教界に喧傳されたのであつた。

祥雲君の話によれば、雷夢君が受洗當時の様子は全く異常であつたらしい。雷夢君は大橋といふ家に寄留して居つた。此家に祥雲君は雷夢君と幾月か時を同じうして下宿して居つた。大橋家の主婦は眉を顰めつゝ案じて曰ふ、「島地さんは夜も能くお寐みなさん様で、度々夢に襲はれなさる様子です、机に向つて勉強していらつしやるかと思つて居ると、それでも無くて何か頻りに獨語して居られる、涙を流しながら長いこと打ち伏せりがちに物を言つて居られる、あれが御祈りかも知れませんが、時々立つて室の柱に抱きつきなされたりする事もあります、能くはわかりませんが何でも昔の何とかにありしが如く今の私に奇蹟を現はし給へとか言つて居られたそうで、宅の娘がビツクリして私に申しました。』祥雲君は主婦の言葉その儘を僕に傳へたのである。雷夢君が柱を抱いて祈つたといふ一事は、當時深く僕の頭腦を刺戟した。僕などは何うしてもそんな氣分になれない、雷夢君は多分精神に何等かの異狀を來したのでは無いかと疑はざるを得なかつた。併し又他の一面に於て、その外には何等發狂を認むべき點もない、客が行くと泣いて受洗の決心を話すが、條理は整然たるものであると云ふ。僕は且つ疑ひ且つ迷つた。若しも雷夢君に精神上の異狀ありとせば、内ヶ崎君や吉野君も同様であらふ筈、少しもそんな様子が見えない。吉野君と僕は同級であるから毎日學校で顔を合せるが

惑を抱きながらも基督教の光明に觸れて居つた。且つ二高の學生仲間、僕の尊敬して居る殆んど總ての先輩が基督教に近づいて居つた。彼等は學問の上で優秀なる而已ならず、品性に於て卓越して居つた。僕は何か知ら基督教の中に人を純潔高尚ならしむる力がある事を信じそめて居つた。

而かも驚くべし此夜祥雲君の話によれば、洗禮を受けたのは雷夢君一人に止らず、内ヶ崎君も吉野君も同時であつたと云ふ。僕は雷夢君一人の受洗を夫程案外とも思はなかつたが、三人同時に受洗したといふ事實其者に痛く驚かされたのであつた。栗原君と深田君とは夙に早くからクリスチャンであつた、今又内ヶ崎君も吉野君も、僕の尊敬する先輩は、皆クリスチャンになつて仕舞つた。迷ふのは鈍物僕の如きものゝみか知らと僕は心竊かに且つ驚き且つ怪んだのである。けれども祥雲君は内ヶ崎君や吉野君の受洗を餘り重大視せなかつた。あの人々は別に僧侶の子息では無し、何の宗教を信じやうが言はゞ天稟の自由を與へられて居る、島地に至つては大に事情が異なる。彼の受洗は決して島地一人の受洗として止りはせぬ、彼は默雷上人の長男では無いか、生れながらの眞宗僧侶では無いか、彼が耶蘇になつたといふ一新事件は、單なる島地家の問題では無い、佛教に對する一個の爆裂彈である、明治宗教史上の一大噴火である、決して容易な事で無い！

祥雲君は佛教の中に育つた人だけに周圍の事情を詳悉して居つた。佛教と沒交渉の僕などには其邊の關係も能くわからないけれど説明をきけば合點もゆく。明治佛教界の元勳、西本願寺の耆宿、島地默雷上人と言へば、隠れもない佛教の代表的人物である、その人の嗣子たる秀才雷夢、二十にして猛然一念を發起し、耶蘇の洗禮を受けたといふのだから、氣が狂うたのか狐に魅されたのか、但しは年

たからである。而して此二年間は、雷夢君に取つて眞に艱苦の二個年であつた。彼は一大迫害に逢つた、試鍊に逢つた、誘惑に逢つた、病苦にさへ逢つた。彼は大に戰つたが、戰つて遂に勝利を占め得た。然り。而して否。

彼は戰つた、而して負けた。負けたる後の彼は、戰ふ勇氣さへも確信さへも失ひはてゝ居つた。

大學時代の彼

二年後れて僕は上京した。そうして端なくも文科大学の講義室に於て、黒眼鏡を掛けた、赤ら顔の少し背骨の前に屈がまつた舊知の人を見出した。それが雷夢君であつた。彼は一見十年の友の如く僕にも挨拶した。そして二年來の不幸を寧ろ愉快そうに物語つた——信仰上に苦悶した事、腸チフスに犯された事、病後眼を煩つて未だ癒えぬ事、大學も二年後れて仕舞つた事、いろ／＼話して之からは君等と一緒にゐる、後の雁が段々先になりそうだねと言つて高らかに笑つた。その調子の快活らしさ、少しも二年間大いなる沈痛の煩悶をした人のやうで無かつた。沈鬱といふ氣分は、雷夢君の顔にも言葉にも現はれてゐなかつた。雷夢君はいろ／＼な話はしたが、彼が上京後直ちに家庭に波瀾が捲き上つた事に就ては一語をも放たなかつた。當時評判の座敷牢に入れられたなど、いふ所謂迫害の一事には、毛程も言ひ及ばなかつた。僕は問いもしなかつたが雷夢君は自分と家庭との關係に就ては、少しも暗い事を話さない、實際何事も無かつたやうに、中六番丁の家庭には春風が絶えず吹いてるやうに僕をして感ぜしめた。僕は評判と此の感じとの何れか眞實なるに迷うた。

此頃から僕は雷夢君の友達となつた、隔てのない友達となつた。三澤糾君と雷夢君と僕と三人一緒

少しも様子が變つてゐない。試験には何時も首席である、僕は雷夢君の行動を祥雲君の如くに非常識とのみ斷定は爲し得なかつた。けれども柱を抱いて祈るなどいふ事を健全な青年の行爲とも信じなかつた。

僕は雷夢君並に其同信の人々と對等の話をする程親しくは無かつたので、直接には何等知る所も無かつた。只彼等の受洗といふ事が僕の精神にも一大活動を起して、僕は其頃から一層眞面目に宗教問題を考ふるやうになつた。考へれば考へる程宗教は疑惑の種となる。基督教には美所が多い、佛教にも美所は少くない、其の一つを棄て、他の一つを取る、その理由が僕に徹底しない。分けのぼる籠の道の歌を僕は合理的と思つた。従つて僕は比較研究を充分やつた後で無ければ一宗一派を選択し得る者でないと考へた。

そこで雷夢君等が受洗せられて間もなく、仙臺五城館樓上の同學會(宮城縣出身の二高同窓會)で、二三十分ばかり僕の宗教觀、即ち比較研究論をやつて暗に島地、内ヶ崎、吉野諸先輩の「感情的盲動」を諷刺した。同學會の連中は多分無信仰であつたから僕の此論に拍手喝采した。座の一隅に内ヶ崎作三郎君が扣えて居た、いかでか僕の此論を默聽すべき、僕が著座するや否や猛然として起つた。そうして比較研究などは老人の仕事だ、青年は宜しく善事に向つて直往邁進す可しと怒鳴つた。その場の光景は一種ドラマチックで今も僕の胸中に去來して居る。内ヶ崎君は此頃から傍若無人の雄辯家となつた、扑訥豪快なる彼は信仰によつて強くなつたのである。

爾來二年間、僕は直接に雷夢君の一團に逢ふ機會が無かつた。彼等は皆文科大學に入るべく上京し

入した。そして雷夢君の御兩親も弟妹も皆知合になつた。雷夢君は中六番町の家庭に在りて、少しも不幸とは見えなかつた。如何なる家庭もこれ以上に親密であり得ないと僕は思つた。單に親子同胞の親密といふ自己でない、僕等から見ればチト吾が儘な雷夢君が、家庭に於て最も愛せられて居るといふ事を深く感じた。雷夢君の家庭に於て、僕の最も床しく思つた一つは、雷夢君とその義弟たる大等君との友情である。大等君は學者として遙かに雷夢君の上に卓越して居る、けれど此の放浪的な雷夢君を兄として敬ひ尊むと尋常で無かつた。雷夢君も大等君に傾倒して居つた。

かゝる家庭に生れて、何故の受洗騒ぎぞ、雷夢君の心理を適當に理解する事は、決して簡單の業で無い。僕は藤井夫人から嘗つて雷夢君の生ひ立ちの一節を聞いた。やゝ光明を得た心地がするが、今猶ほ問題はXとして残つて居る。

精神界の放浪兒

兎も角も大學時代の雷夢君は、最早信仰問題に没頭する煩悶兒では無かつた。彼は殆んど信仰問題を忘れ去つたかの觀があつた。彼は新たな惱みを感じそめた。宗教よりもつと實際的な人生問題である。藤井夫人が月明の夜彼を西片町に尋ねた頃から、その問題が起つて居つた。爾來こゝに十二年、雷夢君は絶えず此種の問題に悩んだ、殆んど悩み通してあつた。あらゆる粉飾を取り去つた眞實の島地雷夢は、信仰問題に於ける煩悶よりも寧ろ此問題に於ける苦惱に於て發見し得られるので無いか。彼は半生の心血をあたらし果てぬ夢に献げて仕舞つた。

文科大學に居る間、雷夢君は何といつて別に専門的研究もしなかつた。籍を哲學科に置いたが、僕

に西片町に下宿した事もある。雷夢君の投げつ放しに大に弱つたのは其時であつた。齋藤信策君は獨逸文科で、僕等は哲學科、科は異り宿も別だが、絶えず往來して居つた。即ち三澤、齋藤、島地、僕、四人は各四角形の一角を領して、時々種々な組立の三角形行動も取つた。僕が亡妻の實家松井の家庭には四人とも出入した。雷夢君の家庭には、齋藤と僕とのみ出入した。内ヶ崎、栗原、三澤の面々は、基督教的光彩の餘りに鮮明なる故に、憚つて出入をしなかつた。

僕が島地家の人々と相知るに至つたのは、雷夢君の所謂姉さんに逢つてからである。西片町の下宿と思ふ、月明の或る晩、二階の下から女の聲がする。『雷ちゃん、居るの?』。雷夢君は突拍子も無い大きな聲を出して、夫れには返事もせず、僕に向つて『姉さんが來た、姉さんが來た』と云ふ。その姉さんといふのは黒の紋付を著た三十五六のいかにも利發らしい縹緖の方であつた。此人が兼ねて雷夢君から、幾遍となく評判を聽いて居る「姉さん」である。其頃印度探検中なる藤井宣正師の夫人、自ら非淑女人と號して居られたから、才德兼備とは言ひ難からふが、先づ／＼才貌兼備の奥様である。雷夢君は嫌がる僕を「姉さん」に紹介した。「姉さん」は雷夢君の最も聰明なる同情者である。その受洗事件に對してすら深い同情者であるらしい、此時も何か雷夢君の一身上の問題で尋ねて來られたのであつた。「姉さん」は晴れ／＼した聲で笑ひながら雷夢君を面前に置いて、訓戒やら忠告やら批評やらを散々やつた揚句、僕を振り返つて曰ふ、『こんなんですから何うぞ宜しく願ひます』。僕は元來小心である、此の放膽なる「姉さん」の前に只々恐縮せざるを得なかつた。而して當年の秀才島地雷夢も、此の姉さんの前には小供の如く柔順なるを見て、微笑を禁じ得なかつた。斯くて僕もいつしか島地家に出

分でも信じないが、併し自分は愉快にやつて居る、普通の倫理教師には出来ぬ事をやつて居るといふ自覺を屢々明言した。僕は雷夢君を以て自信の乏しい人、自覺の足りない人とのみ思つて居つた。故に此一事に於ける彼の自覺自信は聊か意外であつた。彼は言ふ、僕は少年が好きである、少年は學課に迫はれて修養の書物なども碌々讀む時が無い、僕は出来得るだけ讀んで、彼等に偉人傑士の言行を傳へる、『夫れは君、意外に子供は喜んで聽くよ』と。何事にも謙遜で、法螺を吹く勇氣の微塵も無い雷夢君が、此事にばかりは無邪氣な得意を示すのであつた。雷夢君は神戸一中に七八年も居たらふか、同僚も生徒も悦服して居つたやうである。僕も最近二年足らず神戸附近に居つて、一中の人々とも時折逢つたが、倫理教師としての雷夢君は、中學教員の水平線上に卓越して居つたかのやうな評判を度々聞いて、不思議にも感じ愉快にも思つた。

僕から見ると何うしても、倫理道德が雷夢君の生命でも無ければ趣味でも無い。それに如何なれば生徒も喜び、同僚も敬ひ、校長も信任を與へて居つたか。要するに是れは雷夢君の少年に對する愛と、自らにして誠實なる性格から來て居るに相違無い。雷夢君は如何なる場合にも聲色を使ひ得ない人である、勿體ぶる事の出来無い人である。故に善かれ惡かれ腹心を人の胸中に置く。倫理先生の雷夢君は、野球對校試合などがあると、生徒と一緒になつて聲を囁らして應援に熱狂する。だからベニスボール・マッチ翬くる日で、雷夢君が喉に白布を纏つて居ない事が無いといつても善い。僕は神戸で一緒に居つた頃、冷かし半分に注意すると、彼は何時でも眞面目である、『だつて君、一中が負けては居られんぢや無いか、負けたら僕は寐られない。』

から見れば哲學の研究は決して雷夢君の心から好む所では無かつた、彼の趣味は哲學三分、宗教三分、文藝四分といふ位の者かも知れぬ。文藝に對する興味は、もつと度合が多いかも知れぬ。宗教三分といつても、それは決して表面には現はれなかつた。曩にも書いた如く、大學時代の雷夢君は、一見信仰問題を忘れ去つたかの觀があつた。僕等親友の間でも努めて宗教談を避けた、偶々話しても、それは信仰談で無く、懷疑談であつた。僕は雷夢君を評して、精神界の放浪兒と言つた。彼は怒つたが直ぐ氣嫌を直して全くその通りと嗟嘆した。又或時僕は雷夢君に對して『老いたるゲザ』といふ綽名をつけた。此綽名は餘程彼の心に響いたらしかつた。彼は眞赤になつて怒つた。けれども遂に此綽名をも承認した。そうして同時に僕に對してメフキストフェレスといふ綽名をつけた。ゲザといふのは森鷗外の舊著水沫集の中にある小説『埋木』の主人公、天才の青年音樂家である。戀に破れたゲザはその天才をも失つて世を埋木の哀れな最後を送つたのである。僕は時として正直に『老いたるゲザ』を雷夢君の容貌の中に見出した。雷夢君は之に酬ゐて僕を『ファウスト』の中のメフキストに擬したのである。

中學修身教師としての彼

大學を卒業して暫らくして雷夢君は關西に行つた。栗飯原將軍家に寓して、教鞭を神戸一中に執る傍、花園の手傳をしたり、新派の歌を咏んだりして居た。神戸一中に於ける彼の職務は、倫理講義であつた。年少の子弟を相手に道學先生をやつて居るのである。僕等は之を以て一つの珍事に數へて居つた。雷夢君の道學振り！之は多少滑稽の感じ無しに想像し得られぬものであつた。僕なども餘りに雷夢君の天分に不似合の事と思つた。けれど本人は決してそうも思つて居なかつた。適材適處とは自

心が散らないからね』と言ふ。そうかも知れぬ電車の中で讀んだ本の内容に就いて、後ち屢々話をしかけられる。中々能く覺えて居るので驚いた事もあつた。最近では好んでドストウエスキヤを讀んで傾倒して居つた、イブセン、オスカーワイルドも多く讀んだやうである、最後の床に就く少し前まで、チエスタアートの袖珍本位な『リテラチュア、イン、ヴキクトリアン・エーヂ』をポケットに入れて、ちよいと讀んで居つた、多分讀み切らん中に病褥の人となつたのである。

彼の發病と最後

去年の十月、僕は病妻危篤の報に接して、急遽東上した。僕は神戸市外の御影に住んで居つたが、二階の二室で、僕の用には足りたから、雷夢君は下座敷の八疊を貸せと言ふ。神戸市内の下宿に倦んだのも、も一つは居所を變へて氣分を轉じたいといふ希望もあつたからである。僕は容易に承知しなかつた。十年前一緒に暮した學生時代を憶ひ起して、雷夢君の餘りに話し好きなのと、室の亂雜を物ともせぬ流儀に懲りて居つたからである。其事を雷夢君に話すと、彼は轉ばんばかりに腹を抱へて笑つた。『よし、よし、今度は君と話せん、君の室にも行かん、飯を食ふ時丈け逢ふ事にしやう。夫れなら佳からう！』僕も拒み得なくなつた。そこへ急に東上する事となつたから一封の書を雷夢君に送つて、『來ても善い、けれど僕は沈黙が好きだ、話し相手は眞平だ、僕の書齋は僕の神殿だ、無斷闖入は御免を蒙むる』と言つてやつた。僕が茅ヶ崎へ來てから三四日立つて、雷夢君から消息があつた。『移つた、く、とうく移つた、併し君なんかと話しはせん、君の書齋などに用は無、安心して看護し給へ』僕も獨りて苦笑せざるを得なかつた。

彼の講義ぶり

二年前、僕は神戸の關西學院に行つて、雷夢君と逢ふ機會が多くなつた。日曜日に彼の下宿を尋ねると、屹度一中の生徒連と鉢合になる。僕は彼の應接ぶりを屢々實見した。そうして倫理教師としての彼をも、略ぼ想察する事が出来た。彼は生徒の前に普通に見る教師らしい態度を執つては居ない。只年長けた先輩といふ位の態度だ。教師として不成功ならざりし唯一の秘訣は、恐らくこゝにあつたらふと思ふ、僕は一度彼の講義ぶりを見たいと願つて遂に果さなかつたが、今三高に居る栗原基君は、廣島の高師教授であつた時、神戸一中を參觀して、宿望を達したと言つて笑つて居つた。栗原君曰く『島地は恰度リンコルンの逸話を話して居つた、生徒も熱心に謹聽して居る、參觀人があるからといふのでは無い、實際聽いて居て面白い講義ぶりであつた、青年を鼓舞作興するといふ高い調子は無いが、併し極めてインテレストングであつた、面白いから倦む事は無い』。——栗原君の言葉通りでは無いかも知れんが、觀察の意味は大體斯うであつた。僕はきつと此の觀察通りと思ふ。或時こんな事を雷夢君に話したら、『實際そうだね、僕はインテレストを與へ得ると信ずる、けれどインスパイアする事が出来ない』と告白して居つた。

僕は雷夢君が文藝の趣味に於て勝つて居ると言つた。僕は神戸に居る間も、彼が倫理や宗教の書などを讀んだのを見た事が無い。手にして居るのは何時でも文學美術に關するものであつた。一寸電車に乗つても、必らず何かポケットから出して讀んで居る。之は雷夢君の癖の一つと言つてよからう。『君は能くあんな人込の中で本が讀めるね』と言ふと、『僕はデットとして家に居る時よりも能く解る、

一月十八九日頃より熱が段々高かつた、醫者はデフテリアらしいと言つた、一週間程立つた、醫者は首を傾けた、今度はインフルエンザかと言つた。僕は看護婦を頼めと勧めた、中々善さそうなのが來ない。鎌倉の母上に言つて遣れと勧めた。雷夢君は頭を掉つて、そんな病氣ぢや無い、直ぐ癒ると言ふ。——その前後僕の胸中に大波瀾が起つた、一月廿二日の夜、遂に宿志を果すべく選舉場裡に起つ事を決心した、僕は關西に於ける新知の何人にも謀らない、愈々決心した後、雷夢君唯一人に輕く決心を洩した。雷夢君は頷いた、『遣るが善いサ、併し君、嚴正中立てやり給へ、大隈内閣の謳歌などは感心しないね』。僕は言下に答へた『僕は君、かねて大政黨論者ぢや、僕は非政友の立場でやる、政友會以外の新政黨を大成する覺悟でやる』。雷夢君は衷心承服せざる者の如くであつた。僕は深くも話さず、廿二日の晩から六七日、東京に行く準備に没頭して居つた。毎晩遅くまで手紙など書いて居る。すると下座敷の雷夢君は必ず呻り出す、自分の呻り聲で時々自ら目を醒ましては、看護婦を呼ぶ看護婦は平氣で寐て居る、僕も溜り兼ねて二階から下りて行き、知らぬ顔の看護婦を揺り起した事も二三度あつた。僕は此事だけでも雷夢君を氣の毒に思ひ、女てふものゝ案外に不親切不心得な事を痛切に感じた。

併し僕はまさかに雷夢君の身上に一大事のあらふとも思はない、一月二十八日の夜、急遽東上した。而して本郷赤門前の旅館に陣取つて、策戦計劃に熱中した。二月十一日の紀元節には、東京を出で、愈々逐鹿場裡に立つべく豫定して居つた。恰かも二月九日の夕、僕の爲めに參謀の勞を執つて呉れられる友人達が四五名三階に集つて居つた。そこへ一封の電報が來た、僕は郷里からと豫期して封を切つた。思ひもかけぬ御影局から、『雷夢死す！』僕は只茫然たるばかりであつた。大津旅館の三階

僕は十一月中旬、孤影孑然、再び御影の宿に歸つた。夫れから一箇月、雷夢君は約束を守つて、二階にも善う來なかつた、僕も雷夢君の室に行かない、朝起きて食堂で逢ふ、新聞を読む、學校に行く道も別である、歸りも互に違つて居る、二人は一家の内に居つて路傍の人の如く暮して居つた。忙しかりし僕には結句之が嬉しかつた。併し雷夢君は苦痛であつたらう、今から之を思つて僕は慘たる感じがするのである。雷夢君は夜學も教へに行つたが、毎晩では無い。けれど歸宅は殆んど毎晩のやうに遅かつた、そして床には入つてから能く呻される、二階に能く聞えるので、時々僕も澁々ながら下座敷に行つて搖り起してやつた。その時はいつも口癖のやうに、『失敬々々、苦しい夢を見た、實に厭やな奴だ』と言ふ、誰が厭やな奴かと僕は翌朝反問すると、『まあ君、誰でも善いぢや無いか』と笑ひに紛はす、併しその夢中の惡魔は、無論僕にも解つて居る、僕は氣の毒の情に堪へなかつた。本年一月の中旬、僕は郷里から御影に歸つて來た。主婦の話によると島地さんの御歸りが正月になつてから一層遅くなられたと云ふ、夫れは友達を廻つて長話に夜を更かすに過ぎないのである。僕は自らの孤獨を憐れまざるを得なかつた。『老いたるゲザの君、いくら正月でもお酒は毒だよ』と或時僕は冷かした。『馬鹿を言へ、僕は昨夜始めて御馳走になつた丈けだよ、併しお蔭で夜道を間違つて、風邪を引いたやうだ』雷夢君は其頃から頻に咳をして居つた、熱もある様子、それでも強いて學校に行き、夜分に生徒を教へたりする。學校を休むやうになつてからも、夜分尋ねて來た生徒に獨逸書の講釋を咳しながらやつて居つた。僕は『斷れ』と勧めた、けれども雷夢君は『折角來るのに氣の毒だから』と言つて二度もやつたやうに覺えてゐる。彼は生徒を熱愛して居るのだ。

が、後ちには花やかな洋樂よりも、寂しい日本樂が善い、鼓、笛、笙、箏、篳篥が懐かしいと言つた。彼は最初油繪を好んで居つたのが、後ちには全く日本趣味になつて墨繪を愛するやうになつた。此思想趣味の變遷、之を心理的に説明し得ないでも無いが、事實は此の通りであつた。父君歿後の彼は、信仰に於ても趣味に於ても益々純日本的になつた。矢張彼は眞宗の子であつた、一時は迷子であつたが、最後の數年は嫡子の昔に歸つて居つた。

去年の十二月であつたか今年の一月始めてあつたか、御影の僕の宿に、宮川經輝師が見えられた。恰度雷夢君が居つたので、三人卓を圍んで牛鍋をつゝきながら夕飯を食べた。宮川先生と雷夢君とは個人的には相知らなかつたが無論囃には互に聞いて居る。宮川先生は斯ういふ意味の事を言はれた、『私は阿方の信仰狀態を察する事が出来る、著て居る衣服はいかに異つても實體は結局同じものでせうな』思ふに宮川先生の意中では、雷夢君は周圍の事情などに絆されて、明白な態度も取り得ないか知らんが、心は矢張クリスチャンに相違あるまい、一度吹いた信仰の芽は、そう容易に枯れ果てはしまいと、斯ういふ考であつたらしい。僕は雷夢君の返事をば興味を以て待つた。併し雷夢君は果して眞實の告白を避けた。先輩の言葉に悖らぬ程度の挨拶をして、自分の胸底を僅かに片言隻語の間に閃かす而已であつた。僕はその片言隻語を面白く思つた。例へば雷夢君の言ふ、何うも私には基督教の婦人方が品位に乏しい心地してなりません、ゆとりが無く、落ちつきがなく、何となく荒つぽく見えたりません、何ういふものでせうか。之は雷夢君が素論の一端。宮川先生はアッサリ受け流された。『夫れはそうかも知れませんが、何せ教界の婦人達は多く逆境と戰つて來てる方が多い、中流以下

は、僕に取つて永遠の思出である、こゝで初陣の計劃を立てた、こゝに親友の訃音を聞いた。

僕は斯くして雷夢君の末期に逢はない、僕どころかその母君も妹君夫妻も遂に逢はれなかつたそうだ。従つて永眠斷末魔に就て、僕は眞實を知らないのである。けれども最期の彼は、決して無信仰者の如くなかつた。立派な臨終であつたと云ふ、僕は確かに之を信ずる者である。僕は二つの報告を聞き嬉しくも思ひ悲しくも思つた。併し臨終の光耀は彼にふさはしい眞實と思ふ。

最後の信仰心

雷夢君の信仰は、能く疑問の種になる。けれども僕は屢々彼の心理の機微に觸れて、一點の疑を挟まないのである。彼は數年前、父君默雷上人が逝去せられてから、心中に一大變化を來したらしい、僕は先づ之を信ずる。此の事件は彼をして信仰の故郷に歸らしめたのである。彼は眞宗の教義などは能くも心得て居なかつたやうだが、兎も角も眞宗信者らしい氣分は持つて居た。併し之を口外する事を非常に厭ふかのやうに見えた。彼は僧衣を纏うて阿彌陀の前に歸依渴仰の珠數爪繰る信心のゆかしさを決して拒みはしなかつた。けれども舊友の爲めに見らるゝ事を非常に嫌うてゐた。最も神戸に於ける彼は一度も僧衣を纏はない、只夏の休みなどに盛岡北山の願教寺に歸ると、斯ういふ勤行もつとめたらしい。彼は之を以て亡父君に對する孝行と思つたのか、僕にはそうばかりも思へない。彼は眞實アーメンと呼ぶよりも南無阿彌陀佛と唱へる事を好いて居つた。彼はフロック姿の牧師よりも金襴の老僧を尊んで居つた。彼は人の心を聳えしめるやうな説教よりも、物靜かな有難味のある法話を喜んで居つた。彼は大學生時代にはピアノを大好きで、主なるコンサートには缺かした事も無かつた。

本來は文學の人たり藝術の人たる可き島地雷夢、彼は一たび信仰問題に躓き、又幾たびか戀愛問題に躓き、天稟の才能を發揮するに至らずして遂に永遠の故郷に歸つた。不思議にも倫理教師として彼は失敗の人と認められなかつたが、それは彼に取つて果して何物であつたらうか。彼は多くの少年と家族と朋友とに愛せられ、又愛して逝いた。さりながら彼は當然受くべかりし尊敬を受くるに至らずして永眠したのである。彼の靈魂は餘りに早く花咲いた、夫故にそぼふる小雨にさへも堪へ得なかつた。彼は才あり、學あり、愛あり、父君の資を享けて聖者の面影をも示して居つたが、唯一つ罅くる者があつた。夫れは意志の力である。彼は唯一つの罅けたるものゝ爲めに、三十八年の生涯を薄倖の中に送つた。僕は人として彼を惜しみ、友として彼を悲しむ。今にして島地雷夢の名を呼べば、爲めに熱涙無きを得ない。

大正四年十一月三日 鎌倉由井ヶ濱にて——

の出が多い、品位の光りが出るのが之からのクリスチャンホームに生れる女性たちでせう。雷夢君は夫れもさうです。ねと言つて話頭を轉じた。雷夢君の趣味からいふと、十二一重でも著て、小机の前に端座して、源氏物語でも讀むといふやうな品の佳い優し味を日本の女性に要求してゐるのである。夫れが決して一時の思ひつきでは無く、雷夢君の心底からの要求なので、畢竟雷夢君に於ては、宗教も全く藝術的であらねばならぬのである。藝術と結び付かざる宗教、藝術的氣品なき宗教信者、雷夢君は之を卑しとして擧げ置いた。彼自身の宗教は、その眞髓に於て東洋的藝術味の勝つたものであると僕は推定して居る。

雷夢君は彼をして此世に不朽ならしむ可き何物をも跡に残して居ない。文章は中々巧妙であつたが、大學時代『帝國文學』の編輯員であつた時書いた斷片を別にして、其後は殆んど筆を執らなかつた。短歌は可なり多く咏み出たと思ふが、最近兩三年は之をも止めて仕舞つた。彼は鑑賞の眼があつて、自己批評に鋭敏であつたから、自分の歌を自分で破壊して、而かも新しき建設に進む程熱心で無かつた。十年前は齋藤信策君も、雷夢君も、また僕も歌を能く咏んだ。或時雷夢君喟然として歎じて曰ふ、『齋藤の歌は自然の花のやうだ、活き／＼して居る、君の歌は温室の花のやうだ、美しいけれども力が無い、僕の歌はまるで造花のやうだ、色も香も無い』。僕はその時笑つて答へた、『温室の花は寧ろ君の歌だ、僕のは疑もなく造花だよ、そう遠慮しなくも善いよ』。僕は造花をやめた、雷夢君も段々温室を壊して仕舞つた。併し彼の歌は確かに品があつて優しかつた。今一歩進めば、彼は歌人たり得たらふと思はれる。

いふことに歸着する。

けれども最も意味ある最も美しい充實した理想を思惟し創造し得る個性としての自覺ある自分は、現在の境遇に對して亦個性的反省力を持たねばならぬと思ふ。眞の個性主義といふものは自分の創り出した現在に對して冷淡であり無頓着であることではなくて、自分の内面力又は自分の爲したことに對して深い意識と鋭い反省的自覺とを有つことであり、亦當然有たねばならぬことだと思ふ。これは決して自分が自分を束縛し掣肘することではない。却つてこゝに自分の道德的自由、『純粹自己意慾』としての本來の價值行爲があるのである。自分の現在而も自分の生命の全體の流れと自分の全體の努力との凝集してゐる現在は、決して外部的に強ひられたものでなく又偶發的に現はれたものでない限り、自分はそれに對して充分の否全身を以て強い責任を感じなければならぬと思ふ。なぜなれば創造的自由を自分の生活の道德的衝動として有する『純粹自己意慾』は、その内面的必然の結果として亦價值の轉換力として全個性的責任を意識するものであるから。

若し自分が自分の爲したことや自分の創り出した現在に對して責任を感じ得ないものであるならば、それは價值意識を有する道德的存在としての個性とは言ひないし、かゝる個性が個性主義と生活規範として立することは全く無意味であると思ふ。若し亦強ひてその責任感を抑壓するとせば、それは自分の内面的必然なる要求を無視することであり、乃至は道德的自由としての個性の最も重大な特權を放棄することになり、隨つて自分自身を破壊するものである。このやうなことは自分には出来るだけ避けたいと思ふ。



自分の問題と感想

野村 隈 畔

○

自分は自分の現在の境遇に對しては勿論安んじて満足してもゐない。それは自分の境遇が物質的に甚だしく不如意であるのみならず、精神的にも亦極めて貧弱であり滅裂であるから。けれども自分のかゝる現在の境遇に對してその内に何等かの意味或は何等かの將成的潛勢力を毫も認め得ない程、自分はそれを呪ひ惡み又は破壊せんとするものではない。現在の境遇に於けるいかなる小さい事象も自分の全生活系統の一部は一段階を形造るものとして相當の意味を有つて居ることは言ふまでもないが、たとへ何等の意味も認め得ないとしても直ちにそれを破壊してそこに一種の虛無的現象を起すことは、思慮分別のある行爲とはいひないと思ふ、勿論いかなる事象も吾々の想像し得た理想即ち吾々の現に考へ得る最も望ましい完全な状態から見たならば、或は凡て無意義であり無價值であるかも知れぬ。しかしこれは一種の考へ方であり比較であつて事實ではない。事實はたとへ要するに現在には自分に満足と與え得ない、隨つて自分の生活の内面的衝動力を刺戟して新價値を創造せしむるに足らないと

も自分の財産を増殖し安樂な生活を爲し得るか、いかにして自分の社會的地位と社會的名譽とを高め得るか、いかにして物質力と物的知識と虛榮とに於いて他人を凌駕し他人を征服し得るか、といふやうな問題に没頭しながらその目を送つてゐる。そして彼等は全く他の尊い一面即ち靈的生活の宏大な而も一層幸福な一面の存するを知つてゐないやうである。彼等は本能のまゝに人間の目的の幸福であるを知つてゐる。けれどもその幸福といふのは一口に言へば物質生活の擴大といふことより外に何者をも意味してゐないのである。彼等は凡てを物質化する。道徳をも社會をも經典をも哲人をも乃至あらゆるものを物質化する。そしてその特有な物質化の中から彼等の生命たる幸福を引き出そうと努力してゐる。これが彼等の生活の全體であり、人生の全意義である。自分は今このやうな人々の間に生活して居る。

自分は自分の思想において目的において生活態度において彼等のそれ等とは全く懸け離れて居ることを知つてゐる。彼等とは到底調和することの出来ないのを知つてゐる。言ひ換へれば自分の思想や目的や生活態度において全く孤獨であること、この彼等の凡てに屬する廣い世界は自分には殆んど見知らぬ、否想像だにしなかつた外國であるやうな氣がする。自分が戸外に一步踏み出した時、そして彼等の世界のある人々に接した時、いつもこの淋しい、表面は親愛に充ちて居るやうでも深い内面において非常な隔りと知り得ない所があるやうな感じを強ふする。これが自分には堪え得ない苦痛を與えるのである。

自分はいかなる過去の因縁によつてそうであるか解らないが幸ひにして彼等と言語や習慣や土地や

責任を體感するといふことは與へられた權利に對して行使の完全を期するやうな相對的意味のものではなく、自分が自分を反省的に意慾する強い獨立的要求であると思ふ。だから責任感とは反省的であると同時に創造的である。即ち外部的でなくて内容的である。更に言ひ換へれば、責任感とは自分が自分を客觀的に批判する意識ではなくて、自分が或る自覺から跳躍して眞に自分の本性を新たに意識した自覺である。だから反省は直ちに一轉して強烈な自己意慾となつたのである。そこには必然に價值の轉換と創造とが衝動的軋轢として存在しなければならぬ。そしてこのやうな價值の轉換と創造との活葛藤としての責任感こそ、單に過去や現在を改善するばかりでなく、新たに一層豊富な將來を切り拓く所の生命力として道德的意味を有つて居ると思ふ。

それ故自分が自分の現在の境遇に對して強い責任を感じて居るといふのは、たゞ徒らに嫌惡の情や悔恨の念を持つことではなく。それは却つて自分の創造的衝動を麻痺する恐れがある。自分はそれよりもむしろ未來のことを考へてゐる。いかにして現在を脱して或は現在の内に、現在以上の生命力に富んだ生々した生活、そしてつと内面的個性的に内容の充實した意味のある生活を爲し得るかといふことに努力してゐる。



自分は今物質的欲望の外に何等の希望をも持つてゐない人々の間に生活してゐる。骨肉の間は言ふに及ばず日常交際してゐる社會の人々或は多少の關係のある官吏などに至るまで、凡てがいかにして

ゐることは却つて自分の生命力を消磨し自分の世界を忘却せしむる恐れがある。そればかりでなく物質界に唯一の祝福と光明とを認めてゐる彼等に、ます／＼所謂世の成功に對する野心と虛榮とを刺衝するに過ぎないから。

彼等は物質上の成功者勝利者たらんが爲めに大に活動し、又活動の神聖を高調してゐる。そしてそれが爲めにあらゆる奸智と權謀とを遺憾なく用ゐてゐる。時としては從來の傳說的習慣や道德を蹂躪して迄も彼等の成功を達せむと苦心する。この點は頗る近代적であるけれども彼等の努力する活動も成功も所詮は物質的意味以上に寸分も出でないものである。彼等の生活には全く靈の世界がない。靈の光明がない。随つて彼等自身の間には眞の理解と統一的融合が缺けてゐる。表面上互に活動し提携して生活の情味を享樂して居るやうでも、内面性になつては互に乖離と嫉妬と反目と軋轢とを弄して個々分裂の形をなしてゐる。彼等の生活は皮相的平面的で奥行きがない。彼等の生活は極端な物質的個人主義で、而もそれが爲めに時としては極端に他に屈從することすら敢て辭せないのである。要するに彼等にとつて、物質は彼等の個性よりも貴いのである。これが甚だしい厭惡と憐愍の情を自分に起させる。

物質的生活の獨立言ひ換へれば經濟上の獨立を得ることは、勿論個性の自由と權威とを保つ上において必要ではあるが、必ずしも絶對に必要だとは云ひないと思ふ。何故なれば個性の獨立は決してその物質上に依繫するものでないから。近代科學の進歩と文明生活の壓迫とは現代人の自覺をして甚だしく經濟上の獨立といふ問題に苦悶せしめて來たが、これはむしろ時代の影響と看做すべきもので

社會上の生活様式を同ふしてゐる。けれども不幸にして或る一面而も最も重大な自分にとつて殆んど生命である一面において全く彼等と別種族であらねばならぬ。いかに一般的な言語が通じてても又表面上の社會的表情がいかに圓滑であつても、内面性の不通無理解があるときは、永遠に調和し得ないものである。永遠に調和のない處そこに到底生活を繼續し得るものではない。自分は彼等の爲めに自分の世界が全く蹂躪され破壊されて了つて居ることを強く感じた。そしてこの世界に不幸にも孤獨な自分は彼等から全く見知らぬ他人のやうに、或る場合には忌はしい繼子のやうな取扱をされてゐる。自分には自分の世界において當然受けねばならぬ悲哀と苦痛とから、一方には彼等に對する強硬な反抗とつての熱烈な憧憬とを起さざるを得ないのである。

この反抗と憧憬？、これが今自分の生活を織りなしてゐる生命の二流である。そして亦これが自分の現在に對する避くべからざる道德的責任であるのだ。

自分の眞實は世界に對する熱烈な憧憬！　これが自分に反抗と争闘と思索と煩悶と創造と飛躍とあらゆる道德——眞實な世界を切りひらきそれに向上する唯一の過程としての道德を要求する。そしてこの新道德は自分の生命——眞實世界の憧憬としての生命を培養し發展せしむるに缺くべからざるものとして、絶對の價值と權威とをもつてゐる。そして亦これが自分がこの世界に於いて彼等と争闘すべき唯一の武器をなしてゐる。

けれども自分は物質的に彼等と競争しやうとしない。又物質的に彼等を征服しやうとはしない。か

もない。たゞ自分の生命となるべき一層價值ある生活の消極的な附隨條件としてある程度の物的保證を要求する。そしてその保證が習慣上或は法律上の關係から、當然自分に與えらるゝものであるときは、強ひて自分はそれを拒絶しないと思ふ。又それを拒絶するにしても或は甘受するにしても、自分には大した問題ではないのである。何故なれば自分は物的保證にはあまり重きを置いてゐないから。たゞいかにして自分の世界即ち一層意義ある廣大な靈的世界を、その與えられた小さな物的保障の上に建設し得るか、いかにして物的生活の羈絆を脱して即ち自分の虛榮心と生活の安全とのために更に物的保障を擴大せむとする要求を脱して、いかに自由に大膽に率直に自分の内面世界に猛進し得るか、自分の現在における問題である。



それから修養といふことも自分の現在における問題の一つである、勿論修養は吾々が生活しつゝある間は不斷に努力せねばならぬものであり、亦不斷に發達して行くものであつて、今こゝに特別な問題として取扱ふべき性質のものではない。即ちそは一時的な問題でなくて不斷の持續的な問題である。けれども自分の生活意義にある種の自覺が出來、そしてその自覺から自分の現實が甚だしく修養に缺けて居ることを見え出した時、こゝに修養は自分の新しい問題として言ひ換へれば自分の自覺的努力を要求するものとして現れて來る。そしてこの問題の努力は當然自分の生活に新しい價值と内容とを齎らすものだと思ふ。

ある。今日のやうに物的な生活苦の烈しい時代にあつては、人格の獨立を保つ上のみならず、あらゆる靈的社會的活動をなす上において、物的生活の獨立は言ふまでもなく重要な意義をもつて居るが、それが爲めに餘りに過重するの弊はありはしまいかと思ふ。現に自分の周圍の人々は經濟上の獨立を得るために大に活動してゐる。そしてそれは彼等の人格の獨立に缺くべからざる必要條件だと信じてゐる。けれども彼等は人格の獨立とか個性の自由とかいふことをあまりに容易に無難作に出来るものと思考へて居る。平たく言へば、物的生活の獨立がそのまゝ直ちに靈的生活の獨立即ち人格の自由だと思惟してゐる。そして彼等にとつて物的生活の擴充と安固とは取りも直さず人間生活の完成を意味するのである。だから所詮彼等は物的生活を離れてそれ以上に何者も考ひ得ないのである。

物質以上に何者も考ひ得ないといふ所から、遂にその必要な程度を忘れてたゞそれ自身のために無制限にそれを求めやうとする。そして彼等の鑒くなき享樂心と虛榮心とはこの要求をして極端にまで押しやる。そこに彼等は全く所謂人格の獨立を失つて了つて、完全な物慾の奴隷となつて居ることを發見し得る。この發見は自分の内心をして痛ましく思はしめるのである。

自分は物的生活の獨立とそれを獲得する爲めの眞剣な勞働を尊敬する。しかし物的のみの獨立と他から與えられる生活の保障を拒絶してまでも強いて獨立を得やうとする勞働とは、何等の意味をも認むることは出来ない。勿論經濟學上から言つたならば有意義であるかも知れないが、現在の自分のはそうすることは殆んど無意義である。自分は食ふ爲めには必ず自ら勞働しなければならぬものであつて、その外に一層意義ある生活をなし得ないとすれば到底現在の生活を永く繼續さして行く勇氣は毫

ならぬと思ふ。

勿論自分が外界と密接な關係を保つて生活して居る限り、外界から強ひられる價值標準を全然無視して生活することは或は不可能であるかも知れない。亦必ずしもそのやうに極端な處置を取る必要もないと思はれる。けれども自分の形而上的内面性の要求を顧みないで、全然外部の價值標準にのみ依憑して生活することは、自分の人格を滅却するものであり、そしてその弊害は以上に述べたやうなものであるから到底これからの自分には爲し得ないとである。自分は故意に今迄の價值標準を破壊しやうとか或は無視しやうとかいふ考へはない。たゞ出来る限り自分の偽らざる内面性の要求の光りによつてそれ等の互に排擠し合つて來た價值標準を照したいと思ふ。そして内實的融合のある全一的生活をなしたいと思ふ。自分の問題とする修養の目的はつまりこゝにあるのである。

かゝる意味の修養は決して生慾や感覺を強ひて壓迫するとか、或は強ひて靈の要求と内の要求とを結合させるとかいふ努力ではない。言ふまでもなく自分は靈が肉を裏切ることなく肉が靈を裏切ることのない一如の境地を望んでゐるが、これは到底外部的努力によつて獲られるものでないと思ふ。それはたゞ内面性の全要求と圓滿に發展せしむることによつて自然に達し得るもので、隨つてそは靈肉一致の努力とは少しく違つたものであると思ふ。自分は自分の修養を『眞如意識』の修養だと考へる。この意識は外部の價值標準によつて分割されて感覺と精神、靈欲と肉欲といふ具合になつて來たが、もと／＼斯ういふ區別のあつたものではない。自分がこの眞如意識の要求に眞に忠實であるとき、全く靈肉を超越し且つ種々の外部的價值標準を忘却してゐる。そは全體的で最も内實的でそして原始的な

だから自分にとつて修養といふことは、是れまで考へられたやうに單に一つの道德的意味を有つたものではなくて、自分の生活全體に亘つてその影響を及ぼすものである。更に言ひ易へて見ると、修養は自分が『いかに生くべきか』といふ問題に具體的内容を與えるものであり、亦『いかに生くべきか』といふ全我の問題は『いかに努力すべきか』といふ問題と相俟ちてその具體的解決を得るものでなければならぬ。この意味において修養は自分の全生活問題であり、そして徐々と該問題に深い根柢を据ゑ付けるものであると思ふ。

このやうな意味で修養の必要を感じてゐる自分の生活が、これまで根柢が薄弱で始終動搖して居つたことを思はずにゐられない。そしてその動搖を來した第一原因は、自分の生活の價值標準を自分の形而上的の内面性に覓めないで、たゞ傳説や習慣の力によつて外部に求めて來たといふことにあることを泌々と感じる。そして外界は種々の價值標準を自分に強めるが爲めに、自分の人格——生活の統覺力たる人格が分割され隨つて自分の生活が個々に斷續的なものとならねばならなかつた。そしてこゝに亦生活上の種々の缺陷と悲劇とが起因したのであつた。だからこれまで自分の考へてゐた修養は、外部から提供された種々の價值標準の内孰れか優秀なものを長く固執するか、或は一の標準をもつて他のすべてをそれに吸収するか又は抑壓するかといふことにあつた。そしてかくすることによつて自分の生活全體が向上するものと考へてゐた。けれどもかゝる修養の努力は所詮局部的であり、隨つて生活全體に向上的動力と統一的内容とを附與することなく、却つてそれを片輪なものにして丁ふやうなものであつた。だから是れ迄の價值標準を全く轉覆して別個の立脚地から新修養を爲さねば

色々な感想

吉田 絃二郎

*

合理的といふ言葉ほど誤つた觀念に支配されてゐるものはない。人々は合理的といふことに絶對の權威を置き易い。合理的であることは即ち善であり、眞であることは誤りでないとしても、それは絶對の合理的であるといふことを前提としてゐなければしかいふことはできない。

しかしながら人間の智識が限られてゐるかぎり合理的といふことは到底比較的事であることを免れない。比較的合理を多く加味してゐるが故にそれを以て絶對の善であり眞であるかの如く想ふのは理智的生活を主とする人々の陥り易き恐るべき罪惡である。

私は合理的であることを卑しむものではない。私たちの生活の基調は能ふかぎり合理的でなければならぬ。私たちが持てる科學的智識の照明するかぎり合理的でなければならぬ。私たちは不合理的生活の上に生活する不安に耐へない。けれども亦合理的生活にのみ私たちの生活の眞實さが潜んでゐるとは想はれない。合理的であれば私たちの生活が眞であり、私たちの生活が全くされたのであるとは想はれない。合理的であるといふことは私たちの生活の第一點の方個を定めるものではあるが、それが第二步であり第三步ではない。

意識であると思ふ。そしてこの意識の要求は最も眞實であり、それは壯嚴で偉大で、又優雅であると思ふ。自分の感覺や肉慾を美しいものとし偉大なものとし神聖なものとなすのは、つまりこの眞如意識の要求そのものである。自分が生活上の功利標準によつて苦んで居る問題に光明と解決とを與えるものは、この意識の要求である。そして亦この内面要求は生活對象や外的物象に對して眞の認識と同情とを與へ得ると思ふ。だから自分の眞如意識の修養は、生活全體の向上のための修養である。

わが愛するは Van Dyke

渡 部 甲 子 (投)

汝の顔の美しきを以つてわれ汝を愛せじ

また汝の褐色のなまけある眼なごしの

あたかも日あたりよきところを流れ行く

森の小川の如き喜びと驚きのきらめきの

ためにも、われは愛せじ

また汚れなき生をうけたる汝の容姿の

ためにもあらず、また、飾らざるにかがやく

樂園のエヴの星の如く純なる愛らしさの

ためにもあらず、すべてこれ等外部のもの

ために、われ汝を愛せず。

されど汝の容姿と汝の行爲とにひそめる

最初の調和のために、

いつはらざる、快きチャーム、生命ある美の

永遠に女性らしき呼吸する

かくてわれが、かの女の腕にあるとき

自然の胸の温かさを感じしむる——

われ彼女を愛す。

一つの科學的論理に支配されてはゐない。科學的論理、科學的智識はたゞ刹那的な理智の判斷に過ぎない。それはあらゆる時間を通じての永遠性を所有してはゐない。

永遠性を所有した刹那的生活はたゞ愛のうちにのみ動いてゐる。愛は生ける力である。愛は永遠の未知を直感する唯一つの力である。科學は人をして一つの信仰に導くことはできるかも知れない。けれどもそれは力として動くことはできない。それは信仰といふよりは一種の歸納されたる概念である。多くの人々は自己の不安な生活を概念の上に強ひて平靜ならしめてゐる。

凡べての智識は愛によりて淨められなければならぬ。愛によりて淨めらるゝ時に私たちの知識は始めて未知の究竟に對する永遠のあこがれと生命とに眼醒めることができる。

*

愛のない信仰が空しきものである所以は、それが力となつて動かないからである。それが愛によりて生ずる疑惑となり不信となり、撞着となり、矛盾となつて眞生活の無限な複雑さを經驗しないからである。信仰はイスカリオテのユダも持つことができた。クリストも持つことができた。しかも二つの信仰の區別は愛の有無から生れる。

*

秋の寂莫は私にとつてこの上もなく懐しいものであつた。しかしこの秋になつて私はしみじみ今まで味つてゐた秋の寂莫を靜かに觀照することができなくなつた。耐へずいら立つてゐるやうな私の心は落ち着いて秋が賦へる凡べての暗示を嚙み分けることができなくなつた。そのあはたゞしい私の生

H₂Oが水であることを知るのは私たちの理智である。けれども私たちの生活はこの科學的智識によりてのみ成り立つてゐるのではない。詩人の眼に映る點滴は決してH₂Oそのものとしてゐるのではない。それは科學の力が達し得ない世界の實在をしてである。H₂Oのなかに生命が潜んでゐると想へるのは多くの合理主義者の謬見である。

科學的智識にのみ頼つてゐる人々は水を分析して、それでもつて私たちの要求が満足されたやうに想つてゐる。しかしそれは私たちが眞實の境、究意の境に詣らんとする第一歩の努力であるに過ぎない。

世の中には一種の固定した人生觀を抱いてゐることを以て満足してゐる人々が多い。殊にその思想が一種の科學的智識の證明を得てゐるといふ自信の上に立つてゐる時に然うである。そして是等の人々は往々にして科學的智識が根本的に覆さるるものであることを知らない。しかしもし彼れ等の科學的智識が更に新しき智識によつて根柢から覆されたとしても彼れ等は多く驚かないであらう。彼れ等は更にその新しい學理に彼れ等の人生觀を結び付けて自ら安心するの妥協性を持つてゐるから。

この種類の人々は自分を最も賢い、最も強い人間であると思つてゐるかも知れない。けれどもこの種類の人々こそ最も愚かな、最も卑怯な生活者であるといはなければならぬ。

私たちは今日に生きよといふ。けれども今日に生きるといふことは、よりよき明日を見出さんがためである。この刹那を最も完全に生きるといふことはこの刹那の底に流れてゐる永遠の未知界を過ぎるだけ完全に把握し味出しつゝ生活するといふことに他ならぬ。しかも前の刹那と後の刹那とは既に

私は人間生活の記録者とはなりたくない、人間生活の實驗として生きたい。

*

私はイスカリオテのユダとなることは必ずできると思ふ。けれどもクリストになることはできないといふことを眞面目に考へさせられることが多い。

*

「彼れは人生に對してスケブチックな思想を抱いてゐる、彼れは不幸な男だ」と言ふ人がある。けれども不幸といふことは存外つまらないことではないかと思ふ。私たちは不幸といふやうなことを考へるよりも、どこまで彼れがほんとうに人生を味つてゐるか、どれほど眞劍になつて人生を擱むてゐるか、それを考へることが大事であると思ふ。大名になることゝ乞食になることゝがどれほど不幸があるものだかほんとは分らない。またそれは考へる必要もない。精神界に於いては殊にさうである。樂天的であるとか厭世的であるとかいふことは問題ではない。どこまで人間としての生活を突き込むで思索し、味到して行くことができるか、それが私たちにとりて最も大事なことである。

*

何故お前はそんなに人生を悲しむのだ、もつと愉快に人生を見たら宜いだらう！ と私に言つてくれる人々がある。

人生はあまりに懐しいところであるから私は悲しくなつて來る！ と私は答へる。
それならよろこむだら宜いぢやないか？

活を呪ひたくなつた。

「門を出れば我も行ん秋の暮」といふやうな故人の句と自分の心持ちとがびつたり抱き合つてゐるやうな気分になれなくなつた私の生活を呪ひたい。一片の麴麴を索めんがために私たちの心霊の烟が年々に荒んで行くことを私は悲しまずには居れない。

*

少年のころにはさまでとも想はなかつた五月六月の新緑のころがこの頃では痛切に懐しくおもはれて來た。あらゆるものが肉の疲憊になやみ、倦怠に呻くやうなそして永久の懊惱と未知の期待とに充たされてゐるやうな初夏の世界が懐かしい。

葎の白い花が咲いた森の下蔭や、幾里と涯しもなく續いた麥や蠶豆の野を想ふと私の胸は躍り立つばかりである。私は秋の寂寥を捨て、尙一度あの新緑の光りのなかに浸されたい。

しかし俺は來年の新緑を見ることができるだらうか？

秋の靜かな朝私はこんなことを想へた。そして私の心は耐らなく淋しくなつた。

*

私はこのごろ筆を執る者の悲しい運命を想はずには居られないことがある。他人の生活の足跡を拾つて行くやうな作者の生活ほどいたましいものはない。

私は近松を偉大なる藝術家であると思ふ。しかし彼れの作中の主人公と女主人は更らに彼れよりより偉大なる人間であると思ふ。

「訪問」といことが雑誌記者の主なる仕事の一つであることは私も信じてゐる。けれどもそれがどんなに辛いものであるかといふことは少し自意識の強い記者であるならば誰しも感ずることであらう。それは多くの場合記者といふものが所謂一種の機械視せられてゐるからである。

それでは書いていたときませう。

斯う言はれてノートと鉛筆とを懷から出して、さて追ひまぐられるやうにして人の言葉の端から端を追つかけて行く刹那にも「俺も人間だのに！」といふやうな感じが絶え間なしに迫つて來ることがある。まつたく泣き出したことがある。

それではあしまひにいたしませう。

おいとまをいたします。

かう言つて玄關に出て自分の兩足が敷居を跨ぐか跨がない間に玄關の障子がびちんと締め切られる。

厄介拂ひをした。

主人公は屹度かう考へてゐるにちがひない！

ひねくれ根性の私は克くこんなことを想へさせられた。

俺だつて人間だ！

私は戸外に出て深い呼吸をした。そして初めて一人前の人間になつたやうな氣がした。

私は今日もまだ私たちの周圍の人々がこんな苦痛な經驗を繰り返してゐられることを想へると氣の

斯う訊ねる人々がある。

現在のこの懐しい人生が餘りに短かいから！

私はかう應へる。

未來を信ずることのできない現實肯定者にとりては現實のよろこびほど悲しいものはない。しかし私はその悲しみを追れやうとは思はない。悲哀は現實肯定者に與へられたる唯一の實感である。

*

非常に接近するか、非常に離るれば人間と人間との接觸は美しいものとなり、懐しいものとなる。人間はみな愛すべきものであることがしみみ味はれる。宜い加減の距離で接觸を保たうとしてゐる際には愛が憎惡に代つたり、憎惡が愛に代つたりする。

*

何々博士といふやうな人々に逢つて非常に不快な感じを起させられたことが一再ならずあつた。その多くの原因は私が雑誌記者であるといふところから、先方の私に對する心持ちが既に荒んでゐたからであらうと考へられる。

俺だつて人間だ！

私は冷たい應接室で克くこんなことを考へたことがあつた。少かのバンを索めんがために生きたる寫字機となつて初見の多くの先輩を訪問しなければならぬことに私はどれほど自分といふものゝ價值を低くし、人間といふものゝあはれな生活法をさげすまなければならなかつたかわからない。

訪問記者も氣の毒だが、訪はれる主人公は一層氣の毒な場合がないとも限らない。両者がこれだけのことを了解してかゝつたら「訪問」といふことも私たちが今感じてゐるやうにくだらないことでも、辛いことでもないかと思ふ。

*

個人主義の根柢は愛でなければならぬ。理解でなければならぬ。それは自己の愛、自己の理解であると同時に他人の愛であり理解でなければならぬ。自己の悲哀を感じない人に他人の悲哀を感じる力はない。夜を徹して泣いたことのない人に他人の涙を掬む情はない。同時に他人のために自分を殺すだけの愛他心を感じない人に眞個に自分を愛し、自分を育んで行かうとする力はない。

個人主義はまた愛の矛盾を感じなければならぬ。愛の矛盾から起るいろ／＼な悲哀を痛感する人でなければまだ眞實に人をも自分をも愛したことのある人だとは言はれぬ。

礫が深く深く海底に落ちれば落ちるほど、同時に礫を押し上げやうとする力を強く感ずるやうに、自分を愛することの深ければ深いほど同時に自分を無にして他を愛せなければならぬ意識が私たちの心に強く根ざして来るにちがひない。

*

自分に對する愛も感ぜず、他人に對する愛も感ぜず、たゞ自分の周圍所有物に對して物的慾望を抱いて、それを以て自己を愛する心だと思つてゐる利己主義者が多い。

強盜をやるやうな恐ろしい人間が赤ん坊の笑顔を見てぶつとり惡心を斷つたといふ物語りもある。

毒でならない。

これは私が雑誌記者としての不平であるが、他の一面から見て、多くの先輩や、訪問して行つた先方^{かた}の方に對してお氣の毒でならないことも多かつた。

私が玄關に立つた時、家のなかで何となしにごと／＼と物語の聲が聞えることがあつた。私は平氣で主人公の室に通つて行つた。そして三十分一時間と待たされて心中多少待ち飽ぐんでゐることもあつた。

俺も人間だ！

我がまゝな愚痴がともすれば頭をもたげて来る。

二三日立つて聞いたら、その夜博士の家では不幸があつたのであつた。そんな時訪問記者に對して平靜を装つてゐた博士の態度は記者生活を營むてゐる者にとつては涙の出るほど嬉しいものであり、忝いものである。

こんなことからして私は訪問記者と訪問される主人公との位置を、引つくらかへして想へて見た。自分の方では侮辱だと感じてゐる際に、先方ではどんなに迷惑を感じてゐることであらう。自分の方ではバンのために屈辱を忍んでゐるのだと思つてゐるが、先方では通り一つぺんの義理のために時間と勞力とを空費させられるのである。

それに兩者とも氣持ちの宜い時ばかりはない。兩者の何れにか不幸なことがあつたり、面倒なことが起つてゐたりすれば屹度兩者の間の感情はびつたり合はないに極つてゐる。

直接な原因そのものゝためにのみ泣くのであつて、直接な原因を貫いて更らに深所に悠久の悲哀があることを泣いてゐるのではないと思ふ。

私たちは知人の死を悼む、しかしそれは葬られんとする屍に對してではない、人間凡べてが死ななければならぬといふ根本的な悲哀に對して泣くといふやうな心持が必ず潜んでゐると思ふ。

落花を見て傷む心のうちには、花と木の葉とあらゆる動物の生命との奥を徹して流るゝ死の驚異を傷む人間性の悲哀が動いてゐる。

人の死、花の凋落は悲哀の導火線となることはできる。けれども人間の悲哀そのものは更らに更らに深いものであり、悠久のものであり、普遍的なものであるのではあるまいか。

人間が大きく笑つた時ほど彼れの顔に深い悲しみの影が彫り付けられてあることはない。

大きな繁榮の背景には大きな衰滅がある。

大きな歡樂の蔭には大きな悲哀がある。

大きな建設の後には大きな破壊がある。

高く輝かに咲いた木の花の根には深い暗黒と悲哀と運命とが相抱いて沈んでゐる。

何一つ悪いことをしたことのない正しい賢人で肉親の死を悼むことのできない冷たい人もある。

*

化學的に分析され、合化させられた香水の室は理智に生きた賢い人々の世である。雜草や木の花に夢のやうな野の匂ひをたゞよはしてゐる荒原は群衆の世界である。人間は香水の匂ひを去つて一莖の野草にあこがれる時がある。

*

近松の作に出て來る性格には一人として賢い人はない。みんな市井の番頭、若旦那、意志の弱い武士、平凡な老人、泣き易い女である。

このごろ本郷座で誰れかの新作物であつた「鳥邊山」を見ても私はさう感じた。哲學やその他の多くの科學が説き明すことのできない人生の深所を我儘な一武士と無智な一女性とは無韻の詩にうたつてゐる。

*

私は人生を楽しみに生れたのだとはおもはぬ。苦しまむがために生れて來たのだとばかりも想へぬ。けれども私たちのあらゆる生活の表現の底には絶えず一連の悲哀や暗黒が堪へられてゐるといふことを直感しないことはない。

人間は笑ふことのできる唯一つの動物だといふことができるならば、また人間は泣くことのできる唯一つの動物であるといふこともできるのではあるまいか。動物も泣く、しかし彼れ等の泣くのは、

さてこれら偉大なる哲人と詩人達とはその現役的職責を果たして、各々その榮光の玉坐に退き、永遠の輝きたらんとしてゐる。次ぎに來たる「新郎」^{はなはと}は果たして何人であらうか。果たして何處より來たるであらうか。自分はその有力なる候補者の一人として、わがアッシジの聖フランチェスコを擧げたいと思ふ。

去る十月六日にサバティエの原著の拙ない自分の譯が「アッッシジの聖フランチェスコ」と題して出版になつた。それから二十四日を経て同じ書の譯が又刊行された。他にも二三同書を翻譯しやうとしてゐた人々のあつたことを聞いた。そして雜誌などに段々彼の名が見え始めてゐる。如何にも時代の徴候を暗示するやうな氣がしてならぬ。そしてこの感じには有力な根據があるやうに思はれるのである。

先づこれを宗教界に見るに、單に基督教界に限つて見るも、近年頻りに傳道の叫びが擧げられてゐる。曰く大舉傳道、曰く協同傳道、曰く天幕傳道、曰く自働車傳道、曰く何、曰く何と。かくて種々な計畫が企てられ様々な運動が行はれた。我々は無論双手を擧げて賛同しもし、今後ともしたく思つてゐるものである。しかし斯く遣つて見た結果は如何であつたか。我々は益々力の缺乏を感じて來たのではないか。爲さんとする意志徒らに強くして爲さしむる感激の内より溢るゝなさに嘆息してゐるのではないか。果然聯合傳道の前に、聯合禮拜をなさざる可からずとの提議が我等のうちから出づるに至つたのである。我等に内よりの力を與へよ。努力の前に感激を與へよとの切なる要求が、われ人

聖フランチェスコを憶ふ

中山昌樹

昔パウロはアゼンスに赴き、その市民が「ただ新しきことを告げ或は聴くことにのみ日を送つてゐた」のを見て吃驚した。現今の日本の思想界を一瞥するもの、誰か同一の感に打たれざるものがあらう。暫らくこゝ數年間に限つて見るも、幾多の新しい哲學的宗教的乃至藝術的偶像が貪婪に歡迎せられ、またすぐなく遺棄せられたのである。精神的生活の勇敢な奮闘を我等に激勵した、壯快な劍舞のごときオイケンの哲學。生の躍進を説く輕快な舞踏のやうなベルグソンの哲理。そして次ぎに息氣つく暇もあらせず、更に新しい「はな郎」來たりとの聲に我等の耳は急き立てられた。見よ、「自然」と「愛」との秘言をさゝやくベンガルの詩人の、靜かにも慕はしく我等の側に立てるを。人々は劍舞を止め舞踏を去つて、その美は罌粟の花よりも脆いが、その愛は母の心よりも強い「哲學の歌」に馳せ參じた。そして靈魂の濡らされ、心の浸さるゝのを感じた。或人は斯かる状態を傍觀して、わが國民の浮薄なる移氣の表れだと難じた。成る程さういふ點もあるに相違ない。しかしこれは生命と力とを求めて止まぬ挺身の願望の切なるを示すものといふべきでなからうか。パウロはさすがに偉大であつた。「新しきことを告げ或は聴くことにのみ日を送つてゐた」アゼンスに於て、堂々たる大説教を敢てした。そして成果を得たのであつた。

遂にわが心臓を破れり

愛われを燃やしつくして燄となせり

これ彼の灼熱的靈覺であつた。説教を語るに倦めるもの、來たつて彼よりこの「愛の燄」を受けねばならぬ。また説教を聴くに苦しめるもの、來たつて彼に燃やされねばならぬ。彼は充分汝等の飢渴を充たすに足るであらう。

次ぎにそれを文藝界乃至一般思想界に見るに夢のごとき他愛なきロマンティックの時代は暫く措いて問はずとして、わが國の思想界——進んでは實社會にまでも——に於ける一大覺醒であつた自然主義の勃興（わが國民の精神的維新はこの時であつたと云はるゝは過言ではあるまい）以來、我々の物の見方は根本的に轉換せしめられて了つたのである。そは洪水のごとく思想界の全分野を風靡して了つた。そして今日に於ても（また今後とても長く）この主義の根柢に横はる眞理は動くものでない。しかし人生は根柢だけのものでない。その上に或るもの（能さるなれば黄金の宮殿を）を建設するための根柢でなくてはならぬ。現實の生々しい底の底を突き止めることは勇敢な事業である。しかしたゞそれだけでは何のこともない。イリュージョンの破壊の後にヴィジョンの建設がなくてはならぬ。かくて我々は自然主義の根本眞理よりは到底足を離つ事は能きないながらに、益々理想と目的と價值とを追求する念の心に込み上げて來るのを覺えたのである。曰くネオ・ロマンティズム、曰く新理想主義。（新古

の心情に油然として溢れつゝあるのである。而して斯かる要求を満たすにわが聖フランチェスコに優つてこれを良くする何人がそこにあるか。われらはルーテルを多く語つた。われらはウエスレエを屢々口にした。われらはブリス大將を大いに稱賛した。彼等の偉大は如何に説くとも竭きることはない。しかし世界を動かせし人必ずしも人の内部の最も秘れたる室を開くものでない。數十萬の人々を改悔せしめし人必ずしも一人の心を法悦の涙に感激せしむるものでない。この點に於ては二千年の基督教の歴史に於て、恐らくフランチェスコの右に出づるものはなからう。彼と神との微妙なる結合は決して空漠たるものでなかつた。それは聖ダミアノの「十字架に釘けられし者」との現實な一致であつた（彼はこれを婚約と云つてゐる）。

愛われを燃やしつくして焰となせり

愛われを燃やしつくして焰となせり

わが甘美なる「新郎」により

われ愛の焰のうちに投ぜられたり

.....

この慕はしき「羔」われを捉へて

固く牢獄に鎖ぎたまひぬ

彼われを全く刺し貫きて

論ジエームスのいふやうな「休日的宗教」は用はないのである。しかし我等を内より勵まし慰め勇気づけ促進する力、即ち眞の意味に於ける宗教は愈々彼等の求めてゐるものと云はねばならぬ。而して斯かる愛と同情との宗教家は、聖フランチェスコを他^{よそ}にして何處にこれを發見することが能きやう。

斯く考へ來たつて聖フランチェスコは目下日本の「俟ち望まるゝもの」の、少くともその有力なる一人たることを疑ふことが能くない。我々は彼を捉へ來たつて彼の信仰と愛と生命と喜悅と力とをわが所有とせねばならぬ。しかし我々は彼を迎ふるに當り、彼の警告に傾聽せねばならぬ。曰はく「戰場に於て戦ひ、努力し、艱苦し、死をさへ賭して赫々たる勝利を贏た皇帝……勇士、勇敢なる英雄、雄々しい武士達を見よ。聖と殉教者達、彼等も亦擇ばれて基督の信仰のために死んだ。しかし今や單に彼等の偉業を叙述して、名譽と光榮とに預からんと憬れる多くの人々が其處にある。然り我々のうちにも亦、聖徒の事業を述べ傳へて、恰も彼等自身がそれらの事業を爲したかのやうに、光榮と名譽とを豫期してゐる多くのものがゐる」と。

故小林富次郎翁の書入聖書は、今は遺族の家寶として大切に保存さるる所なるが、之を此儘置かむも何となく惜しまるる心地すとして、先頃來中尾清太郎氏が此書入を整頓して、一冊のカレンダー・ブックを編纂し『聖書日行實訓』と題して、銀座書房より出版したる由、信仰家なる翁の實行訓ともいふべきものなれば讀んで何人も實益あるべし。

典主義といふ名稱さへ耳にした。斯くのごとくにして今日文藝界の少なくとも一隅には鑑賞的より豫言的な一種敬虔な宗教的傾向に挺身的に邁進せんとする鬱勃たる精神を見るのである。而して斯かる傾向の案内者となり慰安者となり促進者となるものが、わが聖フランチェスコを措て何人があるであらう無論彼は今日我々のいふごとき藝術家ではなかつた。所謂藝術的作品なるものを彼は一つも貽して居らない。しかし彼のうちには脈々たる藝術的氣分が充溢してゐたのである。感興なき信仰、感激なき宗教は、彼には考へられぬものであつたのである。有名なる彼の「太陽の頌歌」はこの點を遺憾なく示してゐるものである。太陽と風と火とは彼には兄弟であつた。月と水と地と花と而して實に死そのものさへ彼には姉妹であつたのである。藝術的憧憬を導いて信仰的歡喜に至て高揚せしめるものは、わが聖フランチェスコを措いて他に優さる人物はないであらう。

終りにこれを一般の實際社會に就て見やう。無論彼等は全體に於て魯鈍な惰性的狀態を繼續してゐるものである。哲人や藝術家の聲に發動的に傾聴しやうとは勿論しない。宗教家の叫びに對しては尙更である。しかしこれをもつて彼等の心情に於ける貴と光が全く消滅し去つたものと斷ずるのは、一の大なる冒瀆である。我々は彼等の物質的欲望に眩惑されて、心靈の囁きに心を閉ぢてゐるのを甚く難ずる。しかし實際は罪彼等にあらざして我々の方にあるのではあまいか。サバティエが云つてゐるやうに適切な指導者さへ與へられんか、偉大なる事業を爲し得る靈魂が世界に多く散在してゐるのである。聖フランチェスコは即ち人民の物質的精神的苦惱を知悉し、切なる愛の情熱に溢れて傳道したが故に、斯くのごとき大成功をなしたのであつた。日一日烈しくなりゆく今日の社會に於ては、勿

て只不注意に持て囃さるゝ崇拜語が澤山ある」と云はれた事があるが、我等には動ともすれば、其等流行語の眞意義を確かむる事なしに、偉人の功業や永い永い歴史が生んだ不動の事實を取るにも足らぬ空想家の幻想と一緒にして、同一流行語の内に包んで仕舞ふ傾向がある。而してデモクラシイなる言葉の如き正に其の適例であらふ。實にや、デモクラシイなる題目は衆人を幻惑するの魔力を有する、かるが故にこれが眞義を究め、其の贋哲學より明確なる區別を立つる事は甚だ必要と云はねばならない。

現時の諸問題は經濟的、社會的なり

近來文明諸國に通つて居る問題の多くは狹義の所謂政治問題でなくて、經濟問題であり、社會問題である。而して政府存立の目的は人類社會の一般的幸福を増進するにあらずとす説が今日に於ける諸國民の確信であるが故に、一視同仁、機會平等主義に基づく智能人格の教養訓練、正義、博愛の精神に導かるゝ慈善事業の發達或は他の攻撃より個人を保護する警察權が飢饉惡疫より各人を救

助するの任をも含むに到りしなど、往昔、個人の手に依つて營まれたる各種の事業が、今や共同機關に依つて經營せらるゝに至つたのである。我が米國と同じく英、佛、獨、日、伊の各議會は、日々に新たなるこの種の問題に忙殺されて居るのであるが、これらの問題は其の解決を個人個人に求むるに非ずして、寧ろ社會公共機關の活動に俟つべき特質を有するものなる事を留意して置かねばならぬ。

この社會的傾向に不満を抱く人々又はこの中に個人自由の大理想と相容れざる運動ありと恐怖する人々は、この傾向を以て社會主義と呼び、飽く迄鎮壓せざるべからずと主張するのであるが、乍併、先年英國のサリスベリー卿が其の議會に於いて演べられた如くに『彼等が社會主義倒さざるべからずと叫んで、これが抑壓手段を講ぜんとした時に既に『The time has gone』であつたのである。

今や我等は否應なしに、これらの新問題を研究しなければならぬのである。たとひ、新問題の形容詞が社會主義と呼ばれて居様とも、若し其の



デモクラシイの眞意義

バトラー博士の觀たる

在紐育 高橋清 吾 譯

此の頃我が國の論壇でデモクラテックとか、民主思想とか云ふ言葉が旺んに用ゐられて居る様であるが、中には甚だしき誤解に陥つて居る向きの多いのは注意を要すべき事であらうと思ふ。

デモクラシイの聲は今日の大勢である。かるが故にこれが眞觀念を了解して以て堅實なる國民的生活の活力素となす事は我等の當さに努むべき所である。

私は日本に居つた頃よりこの問題に注意を怠らなかつた一人であるがこの地に來つて聊か其の研究を進め、更に其の實際を觀るに及んでこれが眞意義は決して我國多數の人々に依つて了解されて居る様なものでない事が判りかけたのである。

廣い米國の事である。デモクラシイの試験は日日夜々に行はれて居ると云ふ譯である。参考書も澤山ある。アゼン、ローマのエンセント、デモクラシイよりカルビニズムに初まるモダーン、デモクラシイ其れから二十世紀の所謂ニュー、デモクラシイの研究

は枚舉に遑あらずと云ふ程である。就中我がコロンビヤ大學總長バトラー博士のものされたのが、最も簡便でトルー、デモクラシイの精隨を知るに都合の好いものと思はれるから私は拙譯して紹介する事とした。

バトラー博士は人格の高い世界的リーダーであり政治家であると同時に歴史と哲學とに深い造詣を有せらるゝ學者である事は普く世に知られて居る所である。

サウンド、ヂャジメント、ウエルテストッド、プリンスブルの上に立つ博士の意見が我が國民の參考となり、わけて斯學研究者に正しきヒントを與へる事が出来るならば譯者の望み足れりとするのである。

緒論

嘗てベーコン卿が『世間には何等の研究なくし

平等の二大理想を含む佛大革命の綱領が、かの革命を以て個人解放の紀念祭と信ずる佛蘭西人に取っては何よりも其重なるものであつたがために、他國の第三者が、佛大革命の綱領を研究して、自由と平等との間には永久の衝突があり、之が活路は一に、革命の第三信條たるフラタニテ（友愛）の融和にあるのみと唱ふる説には用はないと思つて居るためかも知れない。

アクトン卿、世界の見識家であり、歐洲自由思想の研究者であつた氏は、先年『佛大革命が自由の思想に對して慘憺たる打撃を與へた所以のものは全く第二信條たる平等の主張であつた』と書かれた。實に、自由の思想は佛國中等社會の主張であつたが、平等なる觀念は下層社會の猛烈なる要求であつたのである。

戰ひは第三階級に依つて戰はれた。バスチールの占領は佛蘭西を立憲國家となした。チュイレリの陷落は佛蘭西共和國を建設するに至つた。第三階級は勝利の報償を要求した。けれども中等階級は其の要求に應じなかつたのみか、納稅資格を

設けて、第三階級の參政權を奪つたのである。

かくて革命の實行者たる下層社會は、何物をも酬えられなかつたのであつた。當時、佛國の社會には、社會を以て個人個人の任意契約なりとし、各人は一定の契約條件以外絶對に自由なりと主張する社會契約説が一般に行はれてあつたのであるが、この學説は終に煽動家マラーの破壞的結論を承認するに到つた。

マラーは言ふ『下層社會の契約は他の階級に依つて破られて居る。就中富者階級の過怠に依つて窮民に陥らしむるは殺人以上の大惡事である。社會契約の鐵鎖は既に富者に依つて切り放たれた。我等は今や自由な自然狀態に歸つたのである。窮民は、奮ひ起て、機會は來た。今こそ秋である。貧富のバランスをかへす時は今である』と。

この經濟的平等の説は窮民の雷同する所となつた。

かくて自由の光り輝かく中等階級の旗は、平等なる下層社會の鮮血を以て彩られたのである。一陣の醒風は佛國民の凡べてのものを破壊するかの様に見えた。自己の生命財産を救ふがためには佛蘭西人は他の凡べてを犠牲としなければならなかつたのである。

平等と自由と

經濟的平等なる感情が個人自由の精神を壓伏し

中に神の眞理があるならば、我等は何處迄も眞理に忠實でなければならぬ。

我が米國人はこの問題をばデモクラシイの立場より考へ様として居るのであるが、乍併、我等は果して民主主義の何ものたるか、其の如何なる意味を有するかを充分に、了解せりと主張する確信を有するや否や？我等はこの流行語を思ふ時に常に、一時の思想感情に動かされざる堅き主張の上に立つて居ると云ひ得ようか？遮莫、デモクラシイには眞正のものと贋のものがある。而して今日の經濟問題社會問題が怒濤の急を以て其の解決を逼る時に、この明かなるラインは曖昧になるのが常である。

されば、これが眞偽を闡明せんとせば我等は須らく、公平穩健の甲冑を裝ひ、正義の楯をかざして、今日並びに明日の問題に當たるべきである。

民主主義とは何ぞや？

バイロンが『デモクラシイとは何ぞや、破落戸共の専制政治ではないか』と叫んだ時に、彼れは果して正當なる定義者たるを得たであらふか、果た將た、マデニ―が『デモクラシイとは善良なる智者賢人の指導に依る全社會の進歩なり』と定義した時に、彼れは果して不正當なる定義者であつたであらふか？

凡べてのものは其れが回答に依つて定まるもの

である。若しも我等は最近政治史を繙ぐならば、我等は最も安固なる回答を見出し得るかも知れない。

政治的反動、朦朧派苦闘の象徴として青史に輝やく、かのバラリス、ボルボンの壁城に於いて、先年一大雄辯家と一大政治家とが二つの相容れざる政治的、社會的思想を其の議會に發表した事がある。これぞ、千九百六年六月に於けるデヨール對クレメンソーの大討論であつた。

社會主義的綱領と民主主義との干係如何、其の根柢に横はる兩者の交渉如何は當年の大激論にして、世界の識者はこの討論を豫言的のものとして永く傾聴したのである。

デヨールは熱心にエクオリテ―(平等)の暗號とも見らるべき社會主義的デモクラシイを提唱した。クレメンソーはリバテ―(自由)の合言葉たる個人主義的デモクラシイの觀念を力説した。

兩者とも其の經濟的平等と個人自由との間に嚴存する永久の矛盾に就いては何等の見解をも下さなかつた様であるが、これは、個人自由と經濟的

イエスと答へなければならぬ様な情態に陥へる事があるとするならば、其れは確かに政治、社會制度の大變化であり、寧ろ、奈落に近づく文明の破壊と云はねばならぬ。

けれども今日、相當の思慮を有するものは何人と雖、個人自由は其の光りを失ひ、而して凡べての自然法に背り、人類進歩の道程に障礙物を置かんとする經濟的平等の思想が自由の公道を歩む世界の識者の思想を永く幻惑するの妖力を有するものなる事を信ずるものはあるまい。

この世には自由の濫用が随分甚しく無數の經濟的不公平また、識者を惱まして居るのであるが、乍併これが矯正策は現存政治、社會組織の崩壊にあるに非ずして寧ろ現在の組織を廓清し以て、徐ろにベストにしてワイゼストな組織に造り上げて行く處ろに、見出さるるのであらふと信ずる。

社會主義者の傳道

今日に於ける社會主義者の活動は實に目ざましいものがある。彼等の努力はこの世の煩ひ多くして不幸のみ續く制度を變更せんとする、眞面目な

る改革者の聲である。かるが故に、假し、歴史の經濟的解釋に關する彼等の見解が不完全であり、かの階級意識に關する主張の如き世を謬るの甚しきものありと雖、而も彼等がこれを力説する所以の動機は一に社會進歩の大精神にあるを思はば、我等は常に彼等の主張に動かさるゝのである。

何人と雖も正義の人であるならば、社會主義の目的と相爭ふ事は出來ないのである。

然れども我等は古今の歴史的事實を研究して居る限り、かの社會主義者が採らんとする如き手段に同ずる事は出來ない。

抑も社會主義が經濟的平等説を主張して以て、他人の自由を制限せんとする所以のものは何のためであるか？社會主義者は云ふ『其れは、より公平なる政治的、經濟的狀態なりと思考せらるゝ社會制度を成就するにあり』と。誠に社會主義なるものは今日個人に屬するあらゆる財産及び生産に關する一切の經營を公共團體の手に移し、以て個人自由競争より起る百弊を矯正せんと主張するものである。けれども我等は常に個人的經營より團

た時には、何時も無政府状態を現出するものであるとアクトン卿が説いて居るが、眞理である。何故ならば元來、國家なるものは正義公道の大盤石を其の礎として居るものであり、正義公道の觀念は自由の理想を含み、而して自由の理想は經濟的平等の思想を絶對に排斥するが故である。

實にや、技能の平等、勞働功程の平等、或は力量の平等の如き、何人と雖之を計らんとして計る能はざるものである。若し我等は自由の附帶物としての政治的平等以外に他の經濟的平等を獲んとするならば、我等は必ずや優秀者の進路に足枷せを設けて以て、劣等者の進度と同一歩調を保たしむる愚策を學ばねばなるまい。

人間は客觀的には皆平等なものであり、殊に、國家が設くるコンデションに對する時には、我等は常に平等でなければならぬ。然れども、この種の平等は平等其れ自身が目的でなしに、全く個人自由の必隨物として認めらる迄の事である。

以上の如くにして、我等は所有物の平等、技倆の平等、並びに學藝の平等なる觀念と自由理想と

の間に存在する根本的相違を善く了解し得るならば、其の根本的相違こそ眞正なる民主主義と獨主義との分るゝ要點である事が自然に明かになるだらふと思ふ。

自由は果して其のチャームを失ひたるか？

二十世紀の問題は社會的である。これは世界の大勢である。我等はこの新らしい社會的問題を研究する毎に常に、社會的傾向と自由思想との交渉如何と云ふ問題に逢着するのである。

試みに問はむ

百五十年の過去を有する自由のチャームは今日の社會的潮流の中に葬り去らるべき、はかなきものであるであらふか？

今日のデモクラシーはオールド、デモクラシーの失態を再演せんとしつゝありや否や？ 將た、デモクラシーの精髓は、かの群集にバンと演技場とを供給するを以て任とする阿世主義の類なるや否や？

若し何等かの機會で我等は如上の質問に對して

とすれば其れは眞のデモクラシーの活用を妨ぐるものであり、健全なる社會的、政治的形態としての民主主義を永久に葬り去る賈政策と云はなければならぬ。

眞の賢者政治は刻下の急務

我が國の今日は大いに賢者政治の必要を急とする。賢者政治のアイデアが我が國民意識に透徹せざりしために、我等は今日に於いても、動もすれば、金權の前に拜跪する傾きがある。黄金崇拜者は黄金の光りさへ見れば有難涙を流したのであるから況してや、專制國に於ける金色燦然たる金星の行列を観るならば、彼等は永久に其の魅力に酔はさるゝ事となるであらふ。

之に反して、デモクラシーはデモクラシー其のものが光りである、理想である。而して我が民主的生活の四方より補充せらるゝ精銳の士は皆、神國建設の大理想の下に賢者政治を行ふのであるから、其の光りは益々世に洽きわたるであらふ。

我等は、『平等は正義の要求なり』と主張する賈民主主義の主張を飽く迄も排斥せなければなら

ぬ。眞理は寧ろ其の反對なる『正義は自由の條件として、各人勤勞の報償として不平等を要求す』と叫ぶ眞の民主主義にあるのである。

社會主義者のメンガーが先年述べて曰はく『各人の直接欲望を充たさんがために生産せられたる富は社會主義的國家に於いても、各人の勞働功程に應じて不平等に分配さるゝ事を得』と。

彼れの言はトルーデモクラシーの勝利を意味するに非ずして、果して何であらうか？

眞の民主主義と實民主主義

個人が公道を歩むで以て正當に行使する權力を妬み、又は人の學識技能を羨み、或は各人の所有物に對して猜忌の眼を放つはモップの常である。

これは賈民主主義である。この賈主義は叫ぶ『各人は平均に降れ』と。

眞の民主主義は言ふ『凡べての人皆、其の天稟を全ふせよ』と。

この相反せる二つの思想は永久に世界の將來が一に後者の勝利にかゝる事を留意して置かなくてはならない。

體的經營に移轉し得る事業は皆、同一の個人が或るグループとして遂行する事の出来た經驗ある事業のみである事を知らねばならない。

社會主義は社會内にある各人の長所、短所を一括してこれを平均し長短相殺して以て、社會制度の公平を期せむと主張するのであるが、これは甚だ謬れる數理であり、有害なる心理學と云はねばならぬ。更に、

社會主義は其の綱領を實行する時に常に、歴史的事實を忘るゝ傾向がある、これは我等の絶對に賛する能はざる所である。

元來モツブなるものは常にモツブを以て國民的生活に危険なりと戒心する國家には生れないものであつて、多くはこの歴史的事實を等閑に附する國民の間より蜂起するのである。

羅馬を見よ。四隣の強敵を一陣の旗風に蹂躪した、かの共和國の榮譽は何が故に今日の昔語りとなつたのであるか？

彼れは凡べての外敵に打ち勝つた。けれども彼自身の暴民には遂に勝つ事が出来なかつたのではないか？

この過去の事實、この羅馬は我等に如何なる教訓を示して居るであらふか？

今や我等はかのマヂニーが下したデモクラシーの觀念に立ち還らねばならぬ、——善良なる智者賢人の指導に依る全世界の進歩——。

トルーデルモクラシーは絶えず社會よりベスト、ワイゼストの人物を探し出してはこれを指導者と仰ぎ、國民は之に信服する事となるであらふ。また、

リパターの法則は家格、地位、富其の他一切の制限を超越して作用するものなるが故に、各人は假しや賤が伏屋の子なりとも、皆其の正しく高き理想に隨つて自由の天地に阜翔する事が出来るのである。

かくの如き眞正なる民主主義は、かの『各人の力量に従ふよりは各人の要用に應じてと主張する共產主義的綱領を眞逆に顛倒し以て、『各人の要用に應ずるよりは寧ろ各人の力量に従ふ』と説く自由主義の大理想と合致するものとなるのであらふ。

世の中で最も貴重なるものは社會奉仕、神國建設の大精神に向つて絶えず發達して行く、個人の思想である。靈魂である。かるが故に、若し、かゝる心靈の發展を一定の形式に幽閉して、普通凡庸の利己的行動と同一線を保たしむる様の事あり

れ一人の光榮なるのみならず、實に諸君の榮譽である。諸君の希望、諸君の意志は、かゝる眞面目なる代議士に依つて一層の重味を加へ、遍く世に高調さるゝ事となるであらふ。乍併、茲に注意を要するは、彼れの公平なる識見、深慮の上になる判斷、彼れの有する高遠の理想等は決して諸君に依つて左右さるべき性質のものでないといふ事である。

代議士が有するの力は、諸君より得たものでもなければ、憲法、法規から來たものでもない。一に天上から來たのである。これ、天父の信任を辱ふしたためである。かるが故に、若し代議士がこの力を濫用して以て、群集に追従する事ありとすれば、彼れは神に對して大いなる責任を負ふ事になるのである。

諸君が選舉せる代議士は諸君の意志を充分に了解して居なければならぬが、之と同時に、彼れは諸君のために勤勉であり、公平なる判斷を下すものであらねばならぬ。若し高尙なる主義を有するに拘らず、諸君の一時的反感を畏れて彼れの主張を枉ぐるに於ては、彼れは諸君に對する信任の義務を忠實に果さぬ事となる。

議會は決して、相異なる利害を代表する大公使の會議ではない。國家國民全體の共通利益を審議する會議である。

諸君は實際に於いて議員を選ぶ。これは事實である。然れども、一度び選ばれた彼れはブリストル選舉區のメンバーにあらずして、實に、英國議會のメンバーとなるのである。

パークのこの言は、獨り英國政治社會に於いて眞なるのみならず、文明諸國の必ず傾聽すべき所

のものでなければならぬ。

實にや議員の最大任務は國家國民全般の利害を深慮審議する事に存する。而して眞の民主主義を體得する代議士ならば、かの豫選會、群集等に媚ぶる附庸の徒にあらずして、反つて、高遠なる主義、理想をかざして以て、國民を善導し、社會國家を高度の文明に引き上げんと努むる人々であらねばならぬ。

我等は、優秀なる國民的指導者が常に民主的國家に於いて多く輩出し、而して賢者政治はトル・デモクラシーの社會に於いて、其の眞價を發揚するものなる事を充分に了解しなければならぬ。況んや、これが不朽の龜鑑が、我がアブラハム、リッコンの生涯に光り輝いて居るに於いておやである。

民主主義衰運にありや？

然れども、我が米國にも、今猶ほ、困難な問題が澤山残つて居るのである。一百有餘年の間、我が國民は終始一貫、民主政體を維持して來たのであるが、而も猶ほ、永遠の幸福、繁榮が一般に行

眞正なる民主主義は、かの『平凡は自由の安全辨なり』と主張する説を排斥すると共に、眞の自由に對する脅迫は獨占、特權、多數黨等を跋扈より來るものなる事を指摘するのである。其れは宇宙人生に於いて、何が正善であるか、何が邪惡であるかを定むる標準の肝要なる事を叫び、正義は常に多數黨や習慣と俱にのみあるに非ずと主張する久遠の理想主義である。其れはまた、事物の正邪が正當なる標準に依つて決せらるゝまで、如何なる權力も威武も或は多數黨の脅赫も已れを屈する能はずと確信する卓犖不羈の大精神である。かくて眞のデモクラシーは我がロウエルト俱に歌ふて居る。

“Then to side with Truth is noble when we
share here wretched crust,
Ere her cause bring fame and profit, and 't
is prosperous to be just,

Then it is the braveman chooses, while the
coward stands aside, Danting in his abject
spirit, till his Lord is crucified,
And the multitude make virtue of the faith

they had denied.”

眞正なる民主主義は國民の信任敬服するリーダーシップを產出し、廣民主主義は煽動的政治家を養成する。

眞の代議士とは？

何等の主義なく政見なくして、只、徒らに變動常なき群集心理上に迎合し、以て國民の甘心を買はんとする所謂政治屋の群れは、決して眞正なる意味に於ける國民的代表者ではない。

眞の代議士ならば、寧ろ國民の淺薄なる思慮、判斷に代ふるに、自己の深慮見識を以てし、政治的エキスパートたる天職を自覺して、常に社會奉仕の確信を固める人でなければならぬ。

先年かのエドモンド、バークが英國プリストルの選舉民に向つて、代議士と選舉民との關係に就いて述べた事があるが、彼れの言葉は其の眞を穿てるものとして、今日に到る迄識者の稱讃する所となつて居る。彼れは曰ふ。

『諸君の選出せる代議士が常に諸君と親しみ、互ひに胸襟を開いて、凡そこの問題を協議する事が出来るならば、これ、唯に、彼

況んや、個人自由に終焉を置かんとする全社會に依る個人の私用よりは、其の弊害少きに於いておやである。我等は、より弊害の多き社會主義的制度を以て弊害の比較的少き現存制度に代ふる譯には行かぬ。

民主主義の問題とする所は、この一私人に依る經濟的弱者の私用と、全社會に依る一個人の私用とを、この世界より取り除かんとする所に存する。これらの私用を防ぎ、以て、其の害を自然的範圍にまで狭め、更に獨占權、特許權等に依つて加へらるゝ人爲的諸原因をこの私用制度より除去せんとするは我が二十世紀に於ける眞民主主義の義務であり、主張である。民主主義は如何にしてこの重任を果さんとするのであらふか？

若しも我等は個人私用制度として、寧ろ大袈裟に吹聴されて居る現存制度を周到に研究するならば、我等は必ず、其の弊害は個人間の關係や私有財産制度等より來るにあらずして、反つて、社會國家が認許する特權、獨占權等より發生するものなる事を認むるであらふ。弊害は個人と社會との關係より來るのであるとすれば、社會主義では除去されぬ事が明かに分るのである。

公有財産とは何ぞや？

個人私用の弊を全く防止するの策は種々あるとしても、私の考へでは、明確なる社會的、合理的

承認と堅實なる倫理的根柢とを有する公有財産に關する眞觀念を、博く發展せしむる事に仍つてのみ、眞の目的が達せらると思ふのである。

遮莫、私有財産の倫理的根據、合理的承認は完全にして、普く人の知る處であるが、公有財産に到りては、猶ほ末だ、世人の多く疑問とする處なるが故に、これが概念を究むるは緊要なる事と云はなければならぬ。若し研究の結果、凡てが是認さるゝ事とならば、我等は自ら進んで一切の公有財産を擧げて政府の經營に移し、以て個人をこの範圍より除外するに吝ならざるものである。

私有財産と公有財産との境界線を定むる事は何時も困難な事業となつて居るのであるが、これは從來の經驗と、其の當時の便宜とに基いて定むるの外はないのである。財産の公私を分類する時には、また、必ず半公半私の中層階級は官公衙の監督の下に、私人經營に委ねる方が最も宜しきを得たる方法として今日廣く行はれ居る様である。

眞民主主義は、これらの境界線をば論理的、合理的並びに社會的の見地より決定して以て、かの賈

き互らぬのみか、個人と個人、個人と社會との間に於ける正義人道の觀念が未だ確立して居らないと云ふ譯である。

これには少くとも二つの理由がある。其の第一は人間其のものの性質にあるのであるが、元來、人間と云ふものは、矛盾の多いものである。欲望が無限であつても、國體には限りがあるから幾ら魂が天上に憧れても、體は地上を離る事が出来ない。こゝに矛盾あり、不完全生ずるのである。理想の絶對境に到るまでには幾多の撞着困難が横はつて居る。これを除去して以て、文明進歩の美果を得るには人工的政策ではいかぬ、矢張り教育と道德革新との根本的動力に仍つて、除るに、之を完全へ、文明へと導くより外に方法がないのである。

第二の理由は社會組織、政治組織の不完全から來るのである。即ち私人の經濟的活動に對する政府の監督が其の當を得ざる所にあると思ふのである。

國家機關と個人事業との間に適切なる調和策なき結果は、常に、私立會社の横暴、若くは政府の

個人自由侵害となる。而して、これが適例は南北戦争後に於ける、我國民經濟發展の跡に著しく露はれて居ると云ふ次第である。

日に月に移り行く社會生活、經濟的生活の流れは、流れ流れて止む事がない。この變化に應じ、而も個人自由を侵害する事なしに、正義人道の社會を建つる事は眞民主主義の目的であり、理想である。

政治經濟社會に於ける個人の私用

今日の社會制度に於いて、最も不正義な要素とせらるゝは、自由、自主なる美名の下に經濟的奴隸制度を實現しつゝある、かの個人私用の制度である。今日の經濟狀態は、實に、不正義の源泉となつて居る有様であるが、若し一個人が經濟的弱者たる他の個人を奴隸の如く使役する個人私用の弊害が現存社會制度の免るべからざる結果なりとせば、かの社會主義者等は、この弊害を除去すると稱して、旺んに反抗の聲を擧げるかも知れぬ。

然れども、我等はこの個人私用制度が現存制度の必然的產物にあらずして、寧ろ偶發的のものに過ぎない事を知らねばならぬ。

相違ないけれども肉體的勞力のみにては、生活の最低限度以外、殆んど何物も生産し得ないのである。近世社會發達の原動力は主に經營能力、組織能力、應用利用力等にあるのであつて、肉體的勞力は極めて微力なる力を有するに過ぎないのである。これら各方面の力が勞力と資本との兩者を通じて作用せるが故に、今日の如き富の増加を觀るに到つたのである。

かるが故に、國民に代ふる暴民を以てし、凡べての形式にある（精神的、肉體的）勞働者に代ふるに、肉體勞働者のみを以てし、個人自由に代ふるに、經濟的平等を以てし、以て、社會主義的國家を建設する時ありとせば、これ實に三千歳に亘る人類進化の根礎を破壊するものであり、文明の光榮ある歴史を泥土に埋むるものと云はねばならぬ。

富の問題

サンテ、ビーブが會て、世界の批評家を煽動的批評家、文明批評家の二つに分けた事があるが、之と同じく、我等は政治家、經世家を二つの種類

即ち社會を攪亂するものと、文明進歩に努力するものとに分類する事が出来る。

試金石は富に對する二者の態度である。夫れ、休息、閑雅の時を齎らすものは生活限度以上に蓄積されたる富にして、文明の源泉實に茲に、存するのである。されば、この富を破壊し、個人活動の自由を縮少せんとする煽動家の群れは、全世界のものみな……富めるも貧しきも……を擧げて穢土に投ぜんとする文明の敵である。富の増殖を圖り以て、其の公平なる分配、其の正當なる行使を期するは、社會進歩の缺くべからざる要件なる事は固よりであるが、茲に貨幣に就いてある。貨幣は決して社會に存する諸罪惡の原因ではない原因は寧ろ金を愛する精神、即ち、黃金主義に存するのである。

富を獲得せんがために、他のあらゆる正義の念慮を犠牲とする貪慾の徒は、誠に、卑劣極まる輩である。彼等は其の個人的品性に病患を持つのであるから、之を癒療するの道は一に教育宗教に俟つの外はない。

主義が主張する經濟的平等説を排しつゝ、何等の困難なしに、個人私用の弊を免除する事をなすであらふ。これ即ち社會主義傳道者の空論に反して、實踐力行を旨とする眞民主主義の綱領である。

暴民と國民

眞民主主義の綱領を遂行する時、我等は常に暴民より我等を警戒する事が必要である、何故ならば、社會的、政治的改革の聲は動ともすれば暴民の貪慾を刺激し、其の感情を唆かすが故である。

かの佛大革命前後の狀態を最も正確に書いたと言はれて居るティーンは民主主義なる假装の下に盲目なる感情に燃やされて整列したモツブの特色に就いて述べて曰はく『彼等は眞正なる指導者、富者、官公吏を目して蒙昧度し難きものとなし、絶えず猜疑の眼を以てこれを看視せり。而して、自由奔放の感情は彼等を指揮する唯一の軍令にて、この感情の發する所、彼等は猛然として進軍するを常とせり』と。今日にありても、ティーンが述ぶるが如き社會狀態を實現せんがために、巧みに、群集心理を操縱する多くの煽動政治家が國に

あるのは誠に憂ふべき事である。

彼等は社會の破壊者である。放縱無責任の言動を弄して群集を煽動し、眞民主主義の眞理を攻撃して以て、曆哲學をして之に代らしめんと力むる非國民の徒である。

彼等は『勞働』なる言葉を題目として暴民を教唆するのが常である。

彼等は平素、『全世界の勞働者は不具者を除くの外、凡べてなり』と云ふ事實を承認しながら、陰に肉體的勞働者を以て、他の勞働者に反對するものとなし、旺んに暴民を迎合して、勞働其ものの眞意義を惑亂するを事とするのである。世界を通じて、彼等の徒は學説を述ぶる時には眞面目らしく、『勞働なる言葉を以て、『生産的活動の全部を含むもの』なりと主張し、營業者も技師も監視係も皆、勞働者なりと稱しながら、群集を煽動する時には、急轉直下、勞働は單に肉體勞働に限ると叫ぶのである。

この二つの混雜を惹起せる所以の罪は確かに從來の經濟學者にもある。何故なら經濟學者等が勞働の概念を充分に説明しなかつたがために、彼等煽動家の乗ずる所となつたのである。

思ふに、肉體勞働なるものは、今日の經濟活動にありては、かの社會主義者や煽動政治家が主張するが如き重要な地位にあるのである。即ち勞力は富の生産に於ける唯一の要素でなしに、反つて、生産に關する補助要素に過ぎない有様である。

固より肉體勞働は富の生産に必要なものには

のものとなし、より一層の國民的代表者なりと主張すれども、これ實に、憲法國の眞髓を解せぬものと云はねばならぬ。

米國の政治史を讀むものは何人も認むる事であらふが、我が國では議會の方が、寧ろ他の二部より國民的代表者たる使命を果さないのが常であつた。

加之、南北戰後、議會は大統領の權内に侵入を初め、陰に陽に、彼れの活動を牽制するのみか、今日にありては司法議會監視の下に置かんと努むる有様である。

米國憲法の條文は鮮明である。

『米國合衆國の司法權は一個の大審院と、今後議會に依つて設けらるゝ地方裁判所との内にあり』と。憲法に隨へば、憲法制定以前に存在せる大審院は議會干涉の範圍外にあるは勿論、議會に依つて設けらるゝ地方法院たりとも、一度び設けらるゝや、既に議會の羈絆を脱して、獨立の司法機關となるのである。かゝるが故に議會の侵入は憲法の明文を否定する非立憲の行動と云はざるを得ない。

立法部の篡奪

立法部が行政、司法部に侵掠を敢てする結果は、國民一般をして、明かに、行政部はデモクラシイに相反するものなり、行政部は絶えず立法權を侵しつゝありとの謬れる觀念を持たしむるに到つたのである。行政權が立法權を蠶食すると云ふ立法部の卑劣なる叫びは、立法權が行政權を侵害しつゝある非立憲の事實を、國民の面前より蔽はんとする時に、大に叫ばれるのであり、また、或る私の利益が行政の施行より免れんと企つる際に、常に聲を大にせらるゝのである。

ゼームス、マヂソンはこの弊を充分に了解して居つた。彼は『フェデラリスト』の中にこの事を記して曰はく、

『議會が憲法より與へられたる權力は莫大なるものが故に、彼等は複雑、不明瞭なるなる口實の下に、行政、司法部に侵入せる事實を蔽ふ事を得』と。

また曰はく、『君主國にありては多大の特權、世襲君主の手にあるが故に行政部は常に、危險の源として注目せられ、自由の渴仰者に依つて敵視せらるゝを例とせり。また、民主國にありては、

然れども、今日の社會に、かゝる貪婪不倫の徒、存在するの故を以て、現存制度の凡べてを罵り、文明進歩の源泉たる富を破壊せんとするが如きは我等の斷じて同ずる能はざる所である。

かゝる人々は、かのクリッフォード教授が嘗て、基督教を罵倒した時に、マシー、アーノルドが如何なる批評をなしたかを觀て欲しいものである。

アーノルド曰はく、

『クリッフォード教授の言は、恰かも、パチパチと音する線香花火の様なものである。其れは若い元氣から来る矛盾に過ぎない。世の人は彼れの言を恰も經驗なき青年の大膽なる演説を聴くが如く冷笑と氣の毒との感を以て聴き流した事であらふ。』

青年は兎角血氣に逸るものであるが、人生に於いて自惚心の強い青年期のみが、一切の經驗、を否認し得る勇氣を有するものである。時の海は莊嚴の調べを奏して居る。永遠より永遠へと寄せてはかへる浪の音は過ぎ行く人の心に『時』の印象を與へるのである。然るに青年のみは永遠の濱の秘密を否定し、大聲叱呼して以て、濤聲を打消し元氣に満たされて居る』と。

アーノルドの言葉は言々句々、其の眞を語つて居る。實に、モツプなるものは進化の神が奏する妙へなる音樂に耳を傾くる代りに、自己の蠻聲を發して、大氣を殺氣立たしむるのである。

かるが故に我等は絶えず、暴民を警戒せなければならぬ。たとひ、其れが、流行の美服を纏ひ、又は勞働服を着て居様とも、或は猛惡なる烈情に驅られて横暴を逞ふせんとするとも、我等は均しく彼等の本城を衝く準備を怠つてはならないのである。

暴民を正道に導く道は種々と雖、私は、世の指導者等が審議熟考の後、秩序正しく、合理的方法を以て、民意を遂行し、常に、國民の聲に細心の注意を拂ふに於いては、モツプを善導する事必ずしも難事にあらずと信ずるのである。

我が三政治機關

米國政治は三種分立主義である。この主義は絶對の分立を意味するにあらずして、寧ろ立法、司法、行政、互ひに相協力して以て、國民を代表し、民意を行はざるべからずとする協同主義である。

固より、各部とも其の權限内にありては獨立の國家機關であり、直接の國民的代表者なる事は云ふ迄もない。

或る國の人々は立法部を以て他の二部より優勝

行政部であるか？　ノ、司法部であらうか？　ノ、利益は何時も議院委員室若くは議席に來るのである。

何處の國の議會でも同じであるが、議會に於ける責任は常に細かに分たれ、責任の所在明かならぬが故に、秘密交渉行はれ易く、議員等は自己のためには國民の要求をも犠牲とするを辭せないのである。結果は、行政部が國家福利のために熱心を以て主張する、種々の議案を一言の下に葬り去ると云ふ事になるのである。

今日の米國議會を觀るに、各州と實業家等は元老院議員を有し、各選舉區と特殊利益者とは下院議員を左右する次第であるが、行政部にありては、之に反して、全國民信頼の上に立ちて、全國家の利害を以て自己の心とする忠實なる大統領を有するのみである。

かるが故に、眞民主主義は立法部の性質を改良する、一切の手段を講じ、以て、これをして眞實なる國民的代表者たらしむると俱に、行政權の獨立を確立して、以て、議會の侵入を防ぎ、純然たる行政事業は之を行政部に專屬せしむる方策を採るに到るであらふ。かくて眞民主主義は憲法の明文に隨ひ、法規の制限を通じて、行政部を嚴重なる責任の下に置き、以て國政の運用を完からしむるであらふ。

政治と行政との混同

眞民主主義者は曰はく『一個の長官を戴く果斷行政は非民主的なり』と彼等は、デモクラシーの社會にありては、如何なる個人と雖、犯罪の證據なしには決して拘引さるゝものに非ず、と信じて居るのかも知れない。また、如何なる行政命令、行政官の行動も國民全體の承認を経る迄は非民主的なりと主張するのもかも知れぬ。

然れども、この觀念の大なる矛盾、誤謬に陥つて居る事を知らねばならぬ。即ちこの説は唯に、審議から必要に應ずる果斷決定を引き離すのみならず政治と行政との根本的相違を混同する謬論と云はざるを得ないのである。

夫れ、如何なる政治と雖、民意より來れるに非ざれば、民主的にあらず、國民が決定せる形式と方法とに準據して活動するに非ざれば、民主政治と稱する事は出來ないのであるが、行政は之に反して、一種の國家的ビジネスである。事業經營である。而して如何なる國家と雖其の事業の有効に遂行さるゝを期するものなるが故に、若し民主主義にして眞正なるに於いては、國民等は必ず、世

人民の多數自ら、立法の衝に當たるを以て、概ね、事の審議熟考を缺き、和衷協同する能はざるが故に、動もすれば、利己的野心に燃ゆる行政官の奸策に誤るゝを常とし、其の結果虐政に變ずる事必ずしも類なきに非ず。之に反して共和代議政治にありては、行政權は綿密なる注意を以て、其の範圍を制限せらるゝと俱に、立法權は國民の直接後援を有すと揚言する議會に依つて行はるゝものなり、而してこの議會たるや、自らは民意の代表者たるを以て任ずれども、常に群集心理の煽動者となり、正義人道の理想に反して、公論の墮落を誘起する所のものなり」と。

實にや、米國政治の發展に於いて特筆すべき何物かがありとせば、其れは必ず、米國の行政部が國民的意志の代表者であり、眞正なる意味に於ける、忠實なる公僕であつたと云ふ事實であらねばならぬ。かの南北戦争當時のリンコルン、幣制改正に於けるクリーブランド、トラスト征代のルーズベルト等皆、其の眞を語るものではあるまいか。我等米國民は、其の政治的代表者として、大統領以上に忠實なる公僕を持たないのである。

國民的代表者としての大統領

米國大統領は國民全體に依つて選ばれる。

彼れ的人格、彼れの性行、彼れの信仰、彼れの

主義政見等は投票場に於ける國民を左右する唯一の力である。國民は皆彼れの爲人、彼れの理想を知悉するを常とするが故に一度び選ばれたる大統領は、假し、議會には其の責を負ふものに非ずと雖、全國民と天父とに對しては何處迄も忠信の責に任せなければならぬ。彼は、其の職を國民が選舉せる後任者に引繼ぐべき義務を有すると共に、在職中は國民の名に於いて政務を司る權力を有するのである。

立法部は之に反して、小選舉區制實施の結果、各選舉區にては自己の利益を代表する地方人士を選出する事となり、ために代議士の性質は一般的、國民的の代りに、地方的若しくは特殊利益代表の色彩を帶ぶるに到つたのである。

大選舉區制は獨立自尊の國民的代議士を選出し、小選舉區制は不肖追従の徒を議場に送る。これは大砲と小銃と其の何れが砲としての効多きかを觀れば判る事である。

かくの如くにして選出されたる代議士の集會、米國議會に於いて若し國民意志の發言を沮止して以て、特殊利益に關する議案の通過を圖る時、ありとせば其の利益は果して如何なる處に行くのであらふか？

分了解するに到るまで、決してトルーデモクラシーの祝福を享樂する事は出来ないであらう。

眞民主主義の理想

眞民主主義の理想は其の右手に自由を標榜し其の左手に正義の旗を翻して以て、自由労働、自由活動の上に建てられたる自由國家をこの世に來さんとするにある。

かのローウェルが歌ふた如く、自由の國は各人をして、其の天稟に應じて自由に發展せしむる天地である。されば、凡庸不器の徒を以て社會指導者たらしめんとする賈主義に對しては常に、健全なる社會生活、永遠の國利民福を理想とする合理的進歩主義を以て應戰するのである。

この合理的進歩主義は古きを矯し、新らしさを採りつゝ、而も完全なる個人主義、大我主義の理想と歩調を合せて進み行く文明的理想主義である。

遮莫、眞民主主義は決してかゝる自然に反して技巧を弄せんとする閑人の夢想に非ず、實に、社會奉仕の生涯を高調し、つゝ、自由有終の美を得ん

とする實際主義であり、この二十世紀の世界にマコーレー卿が歌へし往年の理想國を來さんとする努力奮闘主義である。

“The none was for a party;

Then all were for the state;

Then the great man helped the poor,

And the poor man helped the great:

The lands were fairly portioned;

Then spoils were fairly sold:

The Romans were like brothers

In the brave days of old.”

~~~~~

の會社、銀行等が採るが如き經營を採つて以て、國家事業の代理者を設くる事となるべく之に反して贗主義なる時には彼等は自ら事業に参加せんとするが故に絶えず、困難衝突を惹起して、終に和衷協同主義の上に立つ行政事業の完成を誤り、延いて國政の遲滯を馴致する事となるであらふ。

『國民が決定し、行政官吏が之を實行する』これは政治と行政との根本的關係を表示する定義である。

若し、この根本的區別を明かに了解するならば、我等はデモクラシーの美名の下に提唱さるゝ多くの贗政策に依つて煩はされぬ事となるであらふと思ふ。

### 贗民主主義の害惡

今日に於ける贗主義の弊害は實に甚しいものがあるが就中其の最も憂ふべき現象は、多年の經驗や偉人の功業を無視し、公銜を蔑視し、法規を遵守せざるの風が滔々として世に流れて居る事である。

固より民主主義は決して他に服従せよと主張す

るものに非ず、寧ろ各人相互の協同を説くのである。乍併、この協同の目的たるや國民が代議機關を通じて國家の利害を審議決定せし後はこれが遂行を期するがために必ず、政府に隨ひ、和衷協同して、以て、國民的政策の成就を完からしむる處に存する。

かるが故に、眞のデモクラシーの社會ならば、法規や公銜等は必ず尊重さるべきものでなければならぬ。之に反して贗主義の國家ならば暴民が横行して國家社會の存在を危くする事になるのである。

法規や國家機關に對する蔑視の念は種々の原因より強められたのであつた。即ち、宗教的信仰の頹廢、親子干係の疎隔、教育制度の缺陷等は與かりて力あつたのである。

我等は、社會國家の法規が正當なる尊敬を受け、親子との關係が昔日の愛情に復し、而して學校教育が人格教育を旺んにして以て、法規を尊重する事が教育訓練に何等の困難を惹起せざるのみならず、反つて教育の進歩を補くるものなる事を充



# ＝明日と言はず直ぐ御實驗あれ＝

## ●神經衰弱症はドーシテ治す？

世の進化と人口の増加は益生存競争の激甚を餘儀なくせしめ、人皆心身を過勞する結果近年に至り神經衰弱症患者の累増は轉た寒心に堪へざるものあるを覺ゆ。  
 乃ちマルクは從來世間に一般有り觸れたる此種賣藥と選を異にし狩野病院長狩野謙吾先生が多年苦心研究の結果動物の臟器中より「スペルミン」含有の有効なる藥劑を製出し幾多實驗により其効顯適確眞に理想的新藥なることを認め、今回初めて賣藥となし廣く同病患者に頒ち以て世を益せむとするものにして、神經衰弱症の人は勿論常にマルクを服用すれば精力を盛ならしめ殊に身體の衰弱等より來る性欲の減退に頗る卓効あり。

◎狩野病院長 狩野謙吾先生創製

弱＝衰＝經＝神  
 進＝增＝力＝精  
 藥＝妙＝の＝



(藥價)

二百粒入金壹圓  
 五百粒入金

二千粒入金  
 金二圓卅錢

一千粒入金  
 金四圓五拾錢

能効治主

神經衰弱 ● 婦人ヒステリー  
 病後衰弱 ● 男女生殖器障害  
 精力銷衰 ● 貧血 ● 老衰其他

一般心身の衰弱等に用ひて  
 偉効あり

發賣元

マルク商會

代理店

大木合名會社

東京市小石川區原町十四番地  
 電話(番六七二)振替(東京三〇八二九)  
 東京市神田區鍋町大通  
 電話(神田一一七)振替(東京四八〇)



## 批評の負債

岡田哲藏

今年の春、自分は小冊子と論集とを世に出した  
それで自分は著者といふものになつてしまつた。

獨身の生活の終がかつて旦夕に迫つたとき、一  
方の望の光を仰ぎながら、顧みて永久に過ぎ行く  
わが獨りの境を惜しく思つた。そして獨りならぬ  
境に入つた後は、當然さまざまの繫縛を生じてき  
た。

著述は著者の評價を定むるものゝ、それが一度  
定まれば容易に動かしがたくなる。評價がなほ不  
定なる境は含蓄多き境である。爲し得る限り永く  
その境に居たいとの願は寧ろ自然である。

然るに事情に促がされては、かの繫縛を辭しが  
たき如く、この評價をも甘受せねばならぬことゝ  
なる。

はたして己が兩書は様々の評をうけた。その多  
くは今の忙がしき世の常なる、内容を精査せぬ紹  
介であつたらしかつたが、他の幾つかは丁寧に閱  
された上の批評であつた。その二三に對しては既  
に答辯をしておいた。護教の別所主筆、新人の藤  
田文學士、中外日報の鈴木文學士などのがそれで  
ある。

知人に書を贈れる爲めの反響もまた少なくな  
つた。未見の人からの評も手に入つた。僅ながら  
も海外からの消息もあつた。既に知れる友との交  
感を深くし、舊き友の薄れゆく知識を新にし、更  
に未知の世界を拓いたとすれば、著者となるもま  
た幸なことである。

然しそれらの反響が多くはそのまゝになつて居  
る。もとよりそれらは盡く公にすべき性質のもの

◎陸軍大學教授

岡田哲藏著

「我が斷片」上製成る！

忽三版

# 我が斷片

和文 價廿錢郵稅二錢  
英文 價廿錢郵稅二錢  
和合本 價四拾錢稅四錢

時事新報 斷片語と散文詩の形式を繕りて表現せる著者の哲學と宗教也。  
國民新聞 著者の纖細銳敏な感じに觸れた事象の斷片的表現である。哲學とも見るべく、散文詩とも見るべきものである。  
萬朝報 著者の博識と炯眼とは何れのラインにも活躍して居る。  
帝國文學 斷片たるの故を以て輕視してはならぬ。無内容なる千萬語よりも、一言半句が尊い事もあり、沈黙それ自らが最も尊い事もある。宇宙觀あり、人生觀あり、社會觀あり、宗教觀あり、散文詩あり、警告あり、暗示あり、教訓あり、諷諭あり、寓言あり、小冊子ではあるが、どの頁、どの題目に於ても吾人の驚嘆に堪へぬ處である、眇たる小冊子に過ぎぬが、言々句々、吾人の肺肝を刺すものがある、彼のマーカス・オーレリアス冥想錄の内容にも角逐すべきものがある、一小冊子とて侮るべからざるもので、東亞の光 本著者が内面生活に富める人たることは吾人の驚嘆に堪へぬ處である、眇たる小冊子に過ぎぬが、言々句々、吾人の肺肝を刺すものがある、彼のマーカス・オーレリアス冥想錄の内容にも角逐すべきものがある、一小冊子とて侮るべからざるもので、反響 著者は：決然として舊套を排して直徑猛進しつゝある新人である、…要するにこれ思想家として、詩人としての著者の肖像であつて、近頃敬意と興味をもつて讀んだものである。  
早稲田講演 所謂詩人の詩でなく、題目の示すごとく哲人としての斷片的感想を詩形を以て表はしたものの、…既成宗教、盲信的信仰を脱して宇宙人生を自由なる見解より見てゐる所に肉迫的の強さがある。  
丁西倫講演集 宗教、文學、歴史、教育、道德、科學など形而上より形而上に亘つて著者の新しい深い鋭い觀察と感想とは讀者に甚大の感動を與へる。少ない言葉數で多く語るとは此くの如きを云ふのであらう。  
開拓者 奇警にして鋭利なる觀察法と筆力は感服に堪えないものである。シヨウやニーチエなどのと並んで世界に珍重せらるゝの日はあるだらうと思はれる。  
神學の研究 犀利なる冷たき劍の權な痛快な筆である。  
護教 著者がたから言つても、想から言つても、珍らしい古い典籍を搜るかも知れぬ。――搜られる價值があるのですから（以下長文）  
青年 此斷片語の如き奇警を銜ふにもあらず、爲めにする所あるにもあらず、自然の言語の流露するが儘に、唯思想を其儘の姿に發表せるもの立派なる一個の散文詩なり、哲人の思想に觸るゝを欲する人は讀め。

此の世の評を見よ！

●發行所

東京市芝區三田四國町

振替東京一〇〇〇三番  
電話芝五八五五番

六合雜誌社



曹洞大學教授 忽滑谷快天先生評釋

# 和漢名士參禪集

四六判 假名附

定價 壹圓

郵税 八錢

和漢の聖帝賢臣名僧碩學が參禪の佳話悟徹の美談を蒐めて一々これに辛辣の批評を加へ以て學道の正路を示し在家參禪の資糧に供す讀者これに依つて先徳の鉗槌に接し古聖と禪を商量することを得む

加藤咄堂先生  
高島米峰先生 推讃

笛岡清泉先生著

# 美人禪

四六判 假名附

定價 壹圓

郵税 八錢

加藤咄堂先生曰はく「戀に泣く美人が嬌態を寫して佛々祖々の玄機を語る文に艶冶の趣ありて想に超脱の旨を存す孰れか禪孰れか戀『美人禪』の一書讀み了りて轉々恍惚たり」と



此廣告を見申込の方は「六合雜誌」に依る旨書添を乞ふ

# 本誌は

文學士栗原基氏を中心とせる青年學生の自營發行に係り、青年學徒の勞作と力強き主張に充滿せり。

■靈的生活の高調……………栗原基

■讀書世界の變局……………谷岡勝美  
□情い則ち父子……………栗原基

■大典奉祝の一日……………山本龜市  
□大典奉祝と國民性……………古市春彦  
□大典所感……………同人

■船岡山の血姻……………椿眞六  
□槌のひびき……………本間俊平

■社會時論數篇……………同人  
□文明と女。香川はな子□和歌。黒木花明

■超人か人乎……………中村正路

# 發行

十二月號

# 黎明

月刊雜誌

京都市新一條通  
萬里小路角

# 黎明社

□定價一部五錢一年分六十錢郵税不要  
□見本往復端書にて請求あり  
□振替、東京九二三 栗原基

## 學 生 諸 君 の 御 來 宿 者 歡 迎

高等下宿 榮林館

館主 文學士 今岡信一良

本郷區追分町三〇  
電話下谷 四八四六

(追分電車終點ヨリ五分間)

## ◎合本出來

■六合雜誌 大正四年度 上卷

價金壹圓拾錢 送料八錢

右御入用の御方は至急御申越あれ

大正四年十二月 東京三田 六合雜誌社

電話芝五八五番

## 神學部の開始

三並氏病氣の爲め休講となり居たる神學部の講義も、同氏輕快に付き、來春二月十五日以後左の通り開始せらるゝ豫定なれば有志者は申込ありたし。

一、毎週火金兩日午後四時——六時迄本部に於て

一、(講讀書)は當分の間 Wobermin : Systematische Theologie nach religionspsychologischer Methode

一、(講演)近代哲學と宗學及び基督教(カント、フイヒテ、ヘーゲル、シエルリング、シュライエルマッヘル、フリース、ニーチェ、フアイヒンゲル、リッケルト、ヴギンデルバント、オイケン、トレルチ等に就て)一、兩者の中一を撰擇さるゝも差支なし。 會費一ヶ月金參拾錢也

芝區三田  
四國町二

統一基督教弘道會教育部

でない。特に賞讃の辭に對しては、多くは當らざるを恥づものである。それらの多くには今たゞ概ね好意を謝するに止めておくが、反對側に立たれた批評、特にその公にせられたものに對しては、一言もせずにおくことは禮でない。今迄も屢々試みやうと思つたのであつたが、よし當然の辯解としても、自己のものに就て論ずるには、一種の困難が伴ふ。しかも今やこの年も逝かんとして居る年の暮に負債を拂ふ慣はしを自分も學ばうかと思ふ。

「我が斷片」に對する最も、念の入りたる、しかし頗る手嚴しき批評は去る五月九日のジャバン、クロニクル紙上に長い二欄を埋めた社説である。恐らく主筆ヤング氏の筆であらう。A Foreign Style Imitation と題し、著者を以てメーテルリンクの眞似をしたものとした。或はヨチ野口氏や牧野義雄氏の作と比較したり、またカーライルやリットンやシエレーや、キーツやブラウニングや、ボードレーなどを出し合ひして縦横に論評を試みた。其筆は驚くべく輕妙で、引照せる文

學は多くは著者などの知らぬことで、評者の該博な知識を思はせる。案外なことには著者の英文を賞めてくれたことである。然し外國語を用ゐた動機は、「英人くみし易しと見てか、自國に於ける名聲を待たずに、一足飛びに國境を超越せんとするにある」としたのは随分皮肉である。「危ない齡」と「自己の紹介」とを巧みに結びつけて、著者は殆ど狂ひじみたものとし、狂ひでも一つの仕事はある、即ち自己の紹介であるとは中々の酷評である。動物の屍から成る「衣服」のを出した文辭を引ひてブラウニングの「Clothed with Slaughter」に比すれば薄弱だと評されたのは恐縮の至である。其他「暗と光」のやうな轉倒した見方を深遠な見方と思ふのが可笑とか、無暗に神に反抗するのをよしとすることか評したる末にボードレー派の薄氣味グロウサム惡いことが最も得意だとし、葬送、墓中、内臓などを描くのは非道いといひ、尙ほせめてマクス、ノルドウでも讀んでは如何と忠告を與へ、終に著者が序文に「談らずして談る術がある」といつて居るがかゝる統一なき斷片を公にす



此廣告を見を御申込の方は「六合雜誌」に依る御書添を乞ふ

◎洛陽堂編纂

最新刊



菊判アート繪畫百二枚  
天金布製箱入美本  
價一圓卅錢送料十六錢

文字を以ててなく挿畫自身をして泰西の繪畫と彫刻の大體に於ける概念を與へ又大略にし其發達の跡をも併せ語らしめんとて編纂せる見る事を主としたる見る爲の美術史とも云ふべき者なり勿論是等の完成を期するは至難の事なり。今や弊堂は自ら集る處のものを用ひて其第一回の出版を企てたり。是等は繪畫第三卷彫刻編一卷より成り毎卷附するに簡略なる紹介を以てす。なほ四卷完行の後更に補遺二卷を刊行して以て全を期すべし。今や第一卷はジョット、ダヴィンチ、ミケランジェロ、ティントレット、グレコ、ルーベンス、レムブランド第九大藝術家の作品を合せて版にのせ、至廉の定價を以て愛好の士に頒つこととせり。

◎ロオマン・ロオラン 原著・長與善郎、木村莊八共譯

最新刊



四六判四百頁布  
製箱入繪畫卅二枚  
價金壹圓八拾錢  
送料金十六錢

ミケル・アンジェロは人類の驚異である。彼を説くもの多し。而かも其の本體を傳ふる者は少い。ロオランの此書は其點に於て理想的評傳である。此書を讀む者はアンジェロを知ると共に又ロオランを知るを得。挿畫三十餘枚最も鮮麗を極む裝釘の高雅は此の種の出版界に最高のレコードを作るを信ず。江湖の清鑑を俟つこと切なり。

《中附十》

發行所 東京市麴町五丁目六番 洛陽堂

振替東京二〇九番 電話東京二〇八番



情者としてであるが——同誌の第二十六號に於て云はるゝには、『日本にも何とかしてホイットマンかキュビスト流の英文詩人があつてもよさうなものと思ふ。著者に詩人たれと望むは無理な註文だが、若し「斷片」の珠玉丈けを拾ひ集め、十分これを情感と想像と韻律とによりて育て上げたならば相當に永續的な印象を残すであらう。兎も角も「我が斷片」だけではこれまで世話になつた讀書界に對する著者の負債が未だ償還されないやうに思ふ』

これで見れば斷片は玉石混淆、しかもその珠もまだ彫琢を経ぬ璞であるとの評であらう。その璞は若しあるとしても極めて少いものであらうが彫琢を缺けるはこの評の通りであらう。然し自分は韻律を興へることはまだ疑問にして居る。尙ほ自分は今こゝに批評の負債に對して筆をとつて居るのであるが、讀書界に對する更に大なる負債を督促されては、痛く自らの貧賤を恥ぢねばならなくなる。當日外に栗原氏は私信で「暗と光」の中にもと光の子なるルシファアの名を用ゐたのは穩當で

なからうとの注意を與へてくれた。然しさうなるとサタンといつても穩當でない。さすれば止むを得ず現下のユーセージに據つても致し方はあるまい。

其外に未知のある詩人から可成こまかい反對を表してくれたのもあつたが、一々舉げがたい。賛成の側ならば知人やもとわが學生たりし方々にて同感の意をよせたものが多くあるがそれも省略して、たゞ二三海外または外人から來た反響のみを掲げておかう。これは支那の側のみで無い。

論集の中にガルスウオーシーやベルランド、ラッセルヤ、タゴールなどのものを紹介したものがあつたが、日本文では致し方が無いので英文「斷片」の方を彼等に呈して見た。タゴールからは傾向が餘程違ふので氣に入らなかつたか何の返事もなかつたが、ガルスウオーシーは、簡単に、I thank you very cordially for so kindly sending me your fragments. They are original, shrewd and fine. I greatly enjoyed them.

るに先だつて寧ろその術を修めては如何といふて居る。

新聞の讀者に感興を與ふる爲に翻弄自在の快筆を揮ふのが記者の本領であるならば、この社説は頗る成功せるものであらう。特にいくら悪口を云はれても著者を怒らせずして笑を禁ぜしめざる技倆は天晴なるものである。然し著者が心にしみじみと感じた寂しさなどは、燥忙喧囂のうちに筆を採る記者の感じ得ぬところであらう。我々は棲息する天地を異にして居る。共鳴は起り得ぬのは尤である。尙記者は沈黙を著者にすゝめて呉れた然し記者の如き在留多年にしても直接に我々の内面生活に接するのは寧ろ稀であつたらう。然らばたま／＼かゝる機會を得るは損失ではないであらう。少なくともそれが記者の文學的知識を駆使して、その翻弄の筆を揮ふの機會を與えし以上は。

去る七月發行の神學評論には青山學院神學科長ベリー氏が「斷片」を評して居る。氏も亦著者の英文を賞揚し、その中の散文詩を美はしいといふて呉れた。然し最終の「宗教の領域」だけは最短期

で、多くは淺薄、或るものは毒惡的であるといひ、著者の歴世觀は必ずしも不可ならずとするも、譏罵や嘲笑は極めて良くないと戒しめ、『此著を読み終りて胸懷に浮ぶ感想は悲哀と憐憫である。何となれば可憎斯る文學的技倆と知的渾蓄とが無益の標的に向けられて居るの感が深いからである』と結ばれて居る。

この評は頗る概括的であるから、何處がまた何故にそんなに評者に氣に入らなかつたか十分には明でないが、大概推察するに難くない。

内藤文學士は私信のうちに、『六合雜誌でその都度拜見してゐたときもさう思ひましたが、かうして全體をよまして頂きますと、私などよりも遙かに脊教者——言葉どほりの——でおいでになることを第一に感じます』といはれた。それかあらぬかさきのヤング氏も脊教者ジュリアンのことを引合に出して居た。また藤田文學士は新入にわが論集を評して、『在來の一般の基督教に對する嚴密なる批評、否寧ろ反抗的態度が全卷を壓した著しい基調ではあるまいかと見ました』といはれた。護教の別所主筆もまた『在來のおしなべてのキリスト教のおもひと稱せられてをるものに爆彈を投げつけた』と評された。かゝる印象を與へる程ならばベリー氏などがあゝいはるのは無理でない。なる程嘲笑などはよくないかも知らぬが、此の如き宗教家も、これ迄の宗教家の所説が我々には如何なる印象を與へるやうになつたかを見て、一概に之を排斥せず少しく、その變遷の内面の意義に就て反省せられては如何といひたくなる。

黎明の栗原文學士——は反對者としてでなく同

思想界の權威とし知者強者を歸依せしめんとするには、或る點まで賛成を吝まぬが、歴史上の證明によれば知を尊ぶ宗教は案外知識界の實勢力となり得ぬとて、フランシス、ドミニック兩教團と、エラスマスとルーテルの比較とを側に引かれた。而して宗教は知識でないといふ言のうちに消極倦怠の調を帯ぶるのは厭ふべきであるが、之と別の心持で宗教は知識でないといふことを主張したいといはれた。又更に自力主義に比し、依然恩寵に感ずる方が優れるを主張された。

基督敎史の著者たる氏と史上の事を論ふことは自分には不可能であるが、ルーテルの如きさへも、思想組織の必要に迫られてはメランヒトンをしてアリストテレスの哲學を型として神學を組成せしめたといふ事實は、尙ほ我等の立場を助くるものではないかと思ふは如何。且つ實勢力といふことになる中々多くの疑問が生じ來つて、何が實勢力か、またその量と質如何などと尋ねて來らねばならぬやうに感ずる。

尙ほ柏井氏が「思想の色彩よりも思想そのものにより多くの注意を拂へ」、「さまざまの境遇にある人の切なる宗教的要求に深切なれ」との忠告を與へられたると、文字の上に至るまで敎示を與へられしには恭謝する次第である。

護敎に示された倉長氏の批評には殆ど異論はない。概ね同感である。よく著者の志を看せられしを謝せねばならぬ。

神學評論の小畑氏は最も多くの點に涉つて詳評

せられた、その好意は謝すべきである。そのイラシヨナリズムの論や、天啓敎と自然敎とに關する説や、著者の倫理觀の弱點指摘や、相對と相反の説や、全知全能の觀念や、議論は多くの方面に涉つて居る。然も評者と著者とは同窓なるにも係はらず、頗る立脚地を異にするので、議論となれば餘程根本の點より出發して頗る微細に涉つて論ぜねばならなくなる。それにはまた何時か機會があると思ふので遺憾ながらこゝには辯解を試みぬこれのみは負債の償還期の延長を望まねばならぬ。

### 前田 夏村

ひと鉢の菊を見れば一鉢の菊にうつるは人間の心

○

わが傍にけふもきたりてねむりける白き小猫よさてもゆかしき





文展の日本畫は美しい。日本畫室は所謂美しい陳列所であらう。丁度カーライルの「衣服哲學」一卷はユーモアのライブラリーで、シヨアの戯曲はアイロニーのライブラリーであるやうなものだ。世界のありとあらゆる美を觀んと欲する人は、文展の日本畫室に行きなさいと勸告する。世界のあらゆるアイロニーを聽かうといふ人は、シヨアの戯曲に向ふが宜しい。外的裝飾を悉にせんと欲する人は三越に行くが宜しい。

私は日本畫室に行つて只美しいと感嘆して來たのみだ。私は頭がないのだから、これ以上のことを云へといふのが無理だ。山を描かせると所謂峻嶺奇峭といふやつを上を描いて、山腹には粗末な庵のやうなものを松の木かげに陰顯させて窓からは仙人染みた、甚だクラシカルな人間をのぞかせる。下には必ず溪流の滌々をお目にかける。美人畫となると楊貴妃と小町とを一緒にしたやうな美人を綾羅錦繡といふものに包んで、ズラリと並べる。櫻の下には必然的に平安朝の奥女官が居る。よくもかう同じやうなものを並べたものだ。そんなも

のならば、公衆の時間の經濟上、又は會場の節約上、山水畫や美人畫から代表畫を二三點參列させたらよかりさうなものだ。第一室を見れば、頭が不透明で、想像術の極めて拙いものでも、第十六室までの大體の見當はつく。かように日本畫は類型的に墮したのは、結論丈を追つて過程を忘れたからだ。山水觀も美人觀も結論に於てはどれも大した相違はないわけだ。孔子様の説義もお釋迦様の説法も基督の教義も結論丈見れば、大した價值がありさうに思へぬ。仁を説き、慈を法し、愛を教へてもその結論丈を研覈すれば、どれも驚くべきオリヂナリティーがなさうだ。凡て親類同志だ。早く云へば、類型的である。而しその教説の過程には、それ／＼多趣多様の面白味がある。教説の奥妙高幽なる精髓がある。教説そのものが生きてゐる。我々は日本畫を見て、どの繪にも、その繪自身に張られたる特殊な世界があるやうに思はれてならぬ。例へば「晴れ行く村雨」を見ても（獵）を見ても、畫面にあれ丈の一個獨立してゐる世界を見せるのみで、他の世界と全然關係のない、又

# 哲學を有せざる日本畫

(文展の批評)

工藤直太郎

—

今日も朝起きて飯を食つた。友人と雑話した。

ノートの白いところを機械的に書き埋めた。窓際で日向ボツこをしてゐた汚ない猫は苦沙彌をした日かげは白々となつて、風が鳴つて通つた、蟲の音が死んで、柿の木は瘠せた。秋ももう暮れは近い。床に就く。けふ一日の経験はこれ丈だ。明けても暮れても何も大した経験はない。

今日もまた事のなき日が暮れにけり

すぎるがまゝに事のなき日が

といふ歌をば、一概に怠惰漢の線言とのみ評されぬ。これが私の平凡生活から見れば、眞理がある。文展に行つたり、花電車でも見たりするのが、私の特筆すべき経験である。これ丈では自我の内容

もあまり複雑になりさうに思へぬ。が私はそれで満足してゐる。奇想天外の経験の連續では、たまたものではない。平板單調な経験がうまず、撓ゆまず連續する徑路が面白い。よしそれが貧弱、微小であらうとも新経験の連鎖の裡に生きて行く刻々に未知の世界に住みつゝあるのだ。して見ると自我の内容は持續であるといふことは本當かも知れぬ。平凡な命の流れの中に平凡に思索し、平凡に、しかも忠實に行動して居れば宜しい。何も末の末まで心配する苦勞性はいらぬ。藝術に於ても同じことだ。結論などはどうでもよい。生の過程を味索し、これを忠實に表白すれば、我々は感服する。

二

をとらへて作者の人生觀を間接に表白したのだ。

永遠なる生命の流れの一部を表現したのであるから、怒濤逆卷く渚に立つて煙波浩蕩の大洋に向つて、口笛を吹いてゐる彼は、そこに彼一個の特殊な、他の世界と何等の連絡もない世界を描出されたのではない。有限と無限との融合した生の象徴を見せたのだ。彼の口笛の音は永劫の濤の音と合奏して、無限悠久の姿を顯はしてゐる。「怒濤」は彼の今日と共に、昨日も明日をも想はせる。我々の想像の翼を現實からアザーワールドにまで翱翔せしむる魅力を有する。

作者の主觀の濃厚に表現されたものとしては「春よ永劫なれ」はその最たるものであらう。こは青春の歡びを歌つた人生無韻の詩である、春野の如き生命の永劫を欽慕せる乙女の美はしき情調の發露である。肉の美しさを誇る心と、永劫の靈力を歡ぶ心とが渾融せる瞬間の表現である。誰れしもこの彫刻を觀た者は己れのライフの一部分を見せられたやうに思つて思慕の情に堪へなかつたであらう。常春の生命の力と美とを感じたであらう。

う。

プロセス

凡て過程には哲學が伴ふ。それ丈深みがある。結論には哲學がない。あつても概念的のものである。結論的、方式的の人生を表現せる文展の日本畫に哲學のないのは當然のことだ。日本畫は作者の主觀の貧弱な割合に表白形式を強いて複雑にせんとしたので、技巧にのみ墮して、無理が出来た。内容の伴はぬ表白には權威がない。人を首肯せしむるところがない。日本畫家は作意上の苦心よりも描寫上により多く苦心するやうだ。故に思索力の伴はぬものもたま／＼試めしに描いて見たら、一寸描寫に氣が利いてゐるから、それを仕上げて出品したと思はれる作品も随分多い。技巧にのみ走る結果として、遊戲趣味を加味するに至つた。ことに俗調を帯びた趣味的描寫は極端になつて、この頃は唯美的になつた。大阪から出品せる美人畫は著しく類店的になつた。(暖か)などは、ピアズレーのサロメ畫を日本畫に應用せるものだ。日本畫のサロメ式は餘り進歩しすぎる。日本畫のデカタンは一面、甚だ氣が利いたやうであるが、其

は他の生活から切り離した動作がそこに美しく描き出されたに過ぎぬ。その外に何等の感じも起らぬ。もしもこれ以外の感興インスピレーションをあゝの畫より得ると主張するものがあるならば、その人は餘程想像力の豊富な人であらう。少くとも文展の日本畫鑑賞上の天才である。左様な天才は自分で勝手に別天地を創造して、聯想するのだからどうでも宜しいが、とも角、構想、表白にそれ以上の世界を想はせる丈の餘裕を示せぬのだから、描出された事象其物以外に他の世界を聯想することは出来ぬ。これは取材、構想、表出、悉く舊窩を脱せず、傳統的、形式的約束に自己の觀察と觀念とを當筈で行つたからである。それ故、美人に對する作品の思想と情緒とはどの作品にも類似的に表はれてゐる。美人畫は美人を主成せる要件丈を描いたに過ぎぬ。即ち山水なり、美人なりに對する法則を描いたのだ。換言すれば、山水及美人の結論丈を表白したのだ。個性美よりも普遍美を重ねる結果として、その美には自我が現はれない。蕉園や清方などの相違は、たゞ技巧上の相違にすぎぬ。事象に對す

る考へなどは同様であると云つてもよい。勝川春章などの美の様式と觀念とが動いてゐて、自我よりも却つて先祖の考が表はれてゐる。丁度十八世紀の擬古主義ミイラニシムが文展の日本畫となつて現はれたのだ。文展の美人畫は結論の美人即ち完成的、絶對的美人を描いたのだから觀者に思想の自由を與へぬ。描出された美人を自由に他の世界と結合して聯想する餘地を與へて呉れぬ。これが最高の美人だぞと觀者を壓迫し、敬服させるやうに思はれる。形式美の最高限度を描いたものは文展の美人畫だ。

### 三

彫刻の「怒濤」は生理學者に云はせたならば、その荒削アウグロの體構に無理があると云ふかも知れぬ。「怒濤」は日本畫の美人繪の様に決して精練されて居ない。又、日本畫式の調和も形式もない。而して生活の一部分を何等の修飾も加へず直接に示されたのだ。人間と云ふ一個のボーイングをなす主要素を彫り集めたのではない。人間の結論丈を表出したものではない。生活過程の one moment



い。又々神樂坂の横丁のやうな溟濛混沌たるものでもない。生きる力、生命フセツネンの過程、これが、神秘であり象徴である。そこに眞があり美があり善がある。

今度は日本畫家の自然觀となるが、自然の生命は決して類型的や月並的には現はれぬ。たゞこれを感じする知覺と情緒とが一定の法則に支配されてゐるから、自然に對する主觀も形式論理フシロギのやうになり、自然より受くる感興も月並となり、空疎なものとなつた。故に自然の對象も亦狹隘になつてくる。自然の心核に徹底せず、にその外的形式のみを見る。廣い世間を狭くするやうなものだ。自然の力は萬人の精神と肉體とにそれ／＼特殊な感應を與ふるに相違ない。而るにこの感じを自覺する丈の奔逸不羈の情緒も知性もない。文展の山水畫は思索も觀察も文晁や應舉あたりのそれと變つたところがない。只技巧が少し細緻になつて、氣が利いて來たと云ふまでだ。花鳥のものも大分あつたやうだが、皮相的自然觀を古典的筆致で遺憾なく描出したものだ。籠の中に悲しとのみ啼く鶯

の音を樂しと聞き、戯あそびて歌ふ秋の虫を悲しと聽くやうなもので、春は如何にも陽氣に、秋は如何にも寂しく描けば、それでよいと思つてゐる。陽氣と云ふ、又は寂しいといふ普遍的趣向を出さうと勤とむること以外に何等の能もない。その趣向には自己が現はれぬ。自然をば只茶人的に眺めたり鑑賞したりしては駄目だ。一體東洋趣味と云つて、淡泊とか、自然的とか、野趣縱横とか極めて語呂のよいやつを口にして、いやに、自然の殿堂の奥までも入つたやうに、半ば悟つたやうな俳味をやるが、そこは甚だ怪しい。日本人の所謂自然觀は西行の昔から今日まで大抵相場が定つてゐる。利いた風なことを云つても外的自然を云々するに過ぎぬ。甚だ微溫的のものだ丁度樂隱居の盆栽いぢりと見ればよい。かゝる自然觀を傳承して、唯一至高の信條としてゐる日本畫家の自然描寫も大抵わかるではないか。日本にトムソンの「四季の歌」もオーズウオースの「幼年の歌」もミレーの「落穂拾ひ」も出なかつたのは所謂東洋趣味のお蔭だ。自然の本體を深く洞察して其處より、自己の力と

實思索力の貧弱な爲め遊戲趣味に墮したものに過ぎぬ。藝術の遊戲主義と云つてもシルレルのは深刻なる哲學的的人生觀をその背景とした。構想上の墮落よりも、自己の低級趣味から彩色した繪ほど厭や氣がさすものはない。要するに日本畫は人生と切離した別個の天地を描いて自己の低級な趣味性を享樂せるに外ならぬ。隣りの嫁さんは醜婦であらうが、そんなことには頓着ない。美しい幻影の世界に繪筆を遊ばせて、小町のやうな女をいくつも並べ、挑發的な色彩を忠實に塗<sup>なめ</sup>りつけ、やがて *the right* ぐて繪筆を描き自分で感服するが彼等日本美人畫家だ。暇の折りには古版の浮世繪でも、ひつくり返へすのが落ちだらう。こんなものをズラリと並べた文展は賑かでない。なる程文部省も考へたものだ。

#### 四

我々は日本畫は何故我々の世界とかけ離れた世界のみを寫さなければならぬかを怪しまざるを得ざるものだ。何故電車を走らしたり、勞働者を稼がせたりしては日本畫にならぬか、何故美人畫の

線をもつと大膽に出來ぬか。何故女となると、直に美人となり、自然を描かせると奇峭峻峰のみとなるか。われ／＼は日本畫を見て感心出來ぬのは、描かれた事象が少しも生活と交渉がないからである。距離の悲哀とはこの事であらう。勿論リモートネスの世界を描いても事象の内容即ち過程<sup>プロセス</sup>を表白しさえすれば、充分我々の感興を索くのだが、描く方でもいゝ加減な形式的遊戲的にやるのであるから、觀る方でもいゝ加減になつて行く。遊戲的描寫に遊戲的鑑賞と來たら公平でよいかも知れぬ。

われらの美の觀念と日本畫家のそれとは全然意義が異なる。彼等の美は踏襲的、古典的形式に存して、調和や均衡にあるのだが、われ／＼のは結論美に非ずして過程美である。結論美は類型的、典據的、靜的であるが、過程美は個性的、創造的、動的である。生命の活動飛躍がある。故に無内容美と内容美があるわけだ。神秘も象徴も強烈なる生命力の顯現である。神秘といふことは何も日本畫の遠景描寫<sup>ペインティング</sup>のやうな曖昧模糊たるものではない。



## 出雲路

ちくすゐ

宍道湖の油月夜に舟すべれ湖心に我はわれを解かむに  
安來節の舟唄さくが悲しかりさすらひの身に波を思へば  
八雲山八重に錦にしきの雲はえて風悲涼なりかみかきのうち  
外つ國の流れよる船いつきては出雲の朝あすの國やひらけし  
須賀の宮は清々すがすがしけれ名に負ひて妹背の神の宮居よろしも  
背子が佩きし十拳釵手にとりてそのかけ刃みる奇稻田姬命か  
櫛名田比賣何の思ひかつぐらむ縁結みじしの神となづさいぬわれ  
ゆかしきはようなきことをあまた並べ山がつがする靈のわじわり

思想の泉を覓ひる眞摯なる努力的態度を缺いてゐる。日本畫は人生と自然とを内省せしむる切實味に乏しいのは、遊戲的、享樂的觀念のみを偏重して、深刻なる哲學的思索を缺いてゐるからだ。即かず、離れず、冷せず、熱せずと云ふ消極的、枯木無趣の自然觀は東洋趣味の眞髓か。

“And in our life alone doth Nature live.”

— Coleridge.

“Great things are done when men and mountains meet;”

This is not done by jostling in the street.”

と云ふやうな徹底的自然觀を味つて、日本畫家は少しく度胸を大きくするがよい。ウオーズオーズは人間は木に脚がついて歩いて居るものだ位に思つて居たといふ。この邊は骨董的、娛樂的自然觀と一寸勝手が違ふ。文展の日本畫家の繪は頭と心臓の繪でなく、たゞ手の繪である。故に私は日本畫は見るべきもので、考ふべきものでないと結論する。

(十一月十六日夜)

## 夕 ば え

野口 精子著  
警 醒 社 發 行

最近の基督教文壇の一驚異は野口精子夫人の短歌に於ける長足の、否むしろ飛躍的進歩であつた。夕榮一卷は快心の作數百首を集めたるものである。六合雜誌の讀者はこの女詩人の美はしき想と術とに魔せられたと思ふのである。著者はこの集に序して「詩歌は私の所謂「悲しき玩弄物」ではなくして、微ながら私の全生命、全生活の投げた蔭影でありたいと思つてゐます」といふてゐるが、本集は著者の生活の反射である。著者の前橋の生活は上毛の自然を醇化した觀がある。評者は本集を左右に備へて折々靈感を頌ち與へられたと思ふ。一語の際わが心を動かしたるもの十數首をあげる。

青空に黄金の柱わが歌の宮居美し公孫樹のみみぢ。

更衣月ややゝこめぐみたる糸柳の一條毎にこもる生命よ。

火をおさめ山は眠れり紫の細き寐息す春のゆふぐれ。

あかき花紫の花我さつき心やうやく躍る朝かな。

戸をくれば素足の肌を蔓なめぬ葡萄の棚につゞく欄干。

草の上の長椅子に寐て大空に身をば吸はせぬ星降る夜なり。

魚となり玻璃の器に靈魂の泳ぐ心地す大空の春。

春の雨しく／＼人の泣くに似て音なく濡る／＼庭の敷石。

帝王の驕りならねど我歌に不老の奇藥欲しき春かな。

銀の雨木立をとほし我髪をぬらして降りぬ初夏の月。

思ふこと多く明るし一莖の草の花なほ躍る六月。

唄ひつゝ今日も糸繰る娘あり生くるを知らず死するを知らず。

かゝる秀味は數ふるに暇がない。絢美なるあり、豪放なるあり、

幽婉なるあり、いづれも作者の非凡の歌才を示してゐる。吾人は大

正四年度の第一の女詩人として野口夫人の文勳を讃美せざるをえ

ない。有田四郎喬伯の装幀も見事である。又發行書肆も大に凝つ

たようである。(價〇・七〇、)



## 時と處を異にすれども

北 米 田 中 葦 城

時と處を異にすれども

おゝ爾大地よ！

われを慈しみたるわが祖父も

われを愛にしわが父も

汝のうへにいまわが立ちて

ある如く且つてはありし

而して彼等は歩み去れり

彼等は永遠に歩み去れり

死とふ不可抗の偉力に

さらはれて――

あゝ忽々として過ぎゆきし

者等の靈よ！

忽々として後より續き來るもの等の魂  
よ！

而して大地よいま

汝の上に立てるあゝわが

このいのち！

おゝ汝大地よ！

わが諸脚に力をこめて

青草茂れるなかを踏めば

靈感もごもわが

胸にあつまり來る……………。

大正四年五、一四

# 美 作 國

き

わ

ち

千代語る老松の根にたゝずみて往古むかししのばゆ旅の若人  
 雲よ雨よ悲しみいだく旅の子の秋の門出に餓はなしけをせよ  
 猿啼さるく作州の山をわけいりて神庭かみばの瀧の秋をめでにき  
 水清く山美しき峽かたに居て歌うたふ子に惠溢るゝ  
 月夜よし橋橋の欄干に君と語りし思ひ出ぞよき  
 山里は時雨ゆくらし戀になく旅の子にこそ涙多かれ  
 幾度かいぬべかりしを去りがてに京の秋をばなつかしみてき  
 大君の御即位祝ふ歡びの聲は漲る作州の秋

星……星……

日は暮れた。

闇は来た。

空には星がかぎりなくまばたいてゐる。

若い井戸堀はなほ一心に、

井戸の奥を見つめて、

井戸の奥へ掘つてゆく、

ちつとも休まうとしないで。

夜は更けた。冷たい風が、

若い井戸堀を震へさせる。

冷たく凍つた地面はかたく黙してゐる。

音もない宇宙に……しづかに眠つた宇宙に、

タンタンと、この井戸堀の努力はなり渡る。

すべて黙して眠つてゐるその中に、

めざめたひびきが、

地の底から大空に鳴りわたる。

一人黙しながら無言の中に、

彼の努力はなり渡る。

闇の中にかがやく努力を、

一人で心地よく見つめて、

熱心に掘つてゐる。

彼の顔は生々と光が充ちて、

彼の腕はことさらに力があふれて来た。

タンタンと無限の井戸からひびく音は、

妙へなひびきを空につたへる。

やがて……

岩はくだかれた。

宇宙はあけぼの光に震ひ、

ものみは驚のひとみをあげ、

その井戸に清水はみなぎり、

湧きあふれ、湧きあふれて、

かぎりなく草木をうるほした。

井戸堀はうれしさに泣いて、

大手を上げて神を讃美した……

……感謝の祈をさへげた。

『神様は私に慰めと力をあたへて下さった。』

乾き枯れた花園を救ふ力をあたへて下さった。』

あけぼのの清い光は花園に充ち、

新しい生命のあふれた草木は、

うるはしく、あけぼのの光の内に、

よろこびと感謝に踊り出した。

若い井戸堀が掘つた井戸は、

いつも、いつも、

清水が湧きあふれて、

永劫に花園をうるほした。

# 若い井戸堀り

秋 葉 肇

一人の若い井戸堀りが、

今日も朝から乾き枯れた花園のわきを深く堀つてゐる……、

口笛を吹きながら、楽しさうに……。

力強く地はひびき、少しづつ穴は堀れてゆく、うがたれた赤土の

層は眞赤に、その滴は血の様に。

若者の努力の跡は鋭どく光つてゐる。

第一の岩は碎かれた。

恐ろしいダイナマイトの爆破……。

若い井戸堀はよろこんだ。彼は叫んだ。喜びに……、

『もう堀れた。』

けれど、その穴からは赤い泥水が湧いて來た。花園もまづかによ  
これ、

見わたすかぎり戦後の血の海の様……。

花園にしよんぼりと若者は悲しさうに立つて、

湧いてくる血の泉源の様な井戸を見つめてゐる。

すべての努力を無にされた哀れな人の様に、

目にいつばい涙をためて見つめてゐる。

やがて若者は涙に光つた目を開き、  
空を仰いてはつきりと叫んだ。

『まだ努力が足りないんだ。』

まだ底にたつしないんだ。』

彼は又汗を流して堀り出した。

腕をブンブンうならせて、

赤く爛れた井戸を堀り出した。

夕暮のこまやかな霧が、

若者のあたりに流れる頃、

美しい明星がまばたき初める頃、

まだ彼はやめやうともしない。

一心に、一心に、井戸を見つめて堀つてゐる。

彼の眸はかどやき、彼の腕は疲れを知らない。

若者の口笛は、

静な夜に包まれてゆく、

花園に響き、木霊して心地よく耳に流れて。

彼の沈黙してかなでる讚美は空にひろがり、

ことさらに空は美しい寶玉の装をつけた。



とか、しかし僕はそんな數學の方定式見たいものでなく、肉から入る戀愛もあれば、靈から入るものもあるし、又一方は肉より他方は靈より結合し得るものだと思います。それが眞實だとか無いとかいふのも見る人の心で、自己さへ眞實だと信じてゐればそれでいい。宗教でも僕の基督教が眞實で君の佛教は迷信だとか何とか云つても、其人が眞理だと満足してゐるならば、そこに貴い生命の發達が有りはしないであらうか。そう方程式的のものなら戀愛は盲目的進行はしないと思ひます。肉的色彩の勝つた戀愛は低級であり、靈的色彩に優れたものは高潔であるかも知れませんが、肉より入る男子が純肉的であり女子が純靈であるならばそんな戀愛は破壊と決定せられませうけれども、如何に肉の香の強い者でも人間であるならば靈の交渉も有る筈ではないであらうか。兎に角く戀愛は成立して愈々結婚となつたとして、一條氏は、「結婚は戀愛的生活を目的とする一男一女の自由意志に發する全的理解の戀愛に基く結合であるから夫婦關係は永久不變で離婚と云ふが如き不明なる過失は到來しないのである」と申された。全的理解とは如何なる程度で何の標準によつて論ぜられてゐられるか知ることとは出来ないが、一度成立した戀愛關係が永久不變だとは餘りにドクマチツクではないであらうか。戀愛計量器でもあれば全的理解あるものだとか、でないとか申せませうが、それは到底出来ないうであらう。又我等の知識が不進歩であり情操が無變化で有るならば、初めの全的理解に依りて成立したものは永久に存讀もしませう。或は又結婚したなら兩者が同程度に進歩するといふ先天的能力の支配でも受けるならば不變で有るかも知れませんが、そうで

ない時に最初全的理解であつても一方が他方より一層大なる進歩を來した時他は之を解し得ず従つて戀愛の不成立即ち破壊となりはしますまいか。これをしも欺瞞せる虚偽の戀愛だつたと云はるゝならば論はありませんが、吾等が絶對者でない限り將來をも知悉するは困難であらう。永久に理解し合ふと信じたのが誤解であつたと見ねばならぬと思ひます。佛教徒が——全的生命を捧げてゐた——基督教徒となる事も有りますから、戀愛もそんなものではありますまいか。尙ほ最後に御尋ね申したいのは、戀愛は結婚と離して考へ得ないものであらうか、失戀とは多く結婚の不成立を意味してゐるやうですが。

## 答

(一) 人は一個人として生きて居る目的がある。これを人生の目的と云ふ。この人生の目的は自己の能力を發揮して社會に活動することである。倫理學上から云へば、人は自我の可能性を有して居る。これを實現することが人生究意の目的である。それが爲めに我々は慾望を統御して嗜欲から理想を選択して行爲に實現して行く。これを道德と名づける。この道德に従つて生活して行くことに於て自己の能力は發揮せられ、人生の目的が實現され行く。そこに生の本體が現はれる。先づ個人が

# 反響

## 結婚と戀愛に就て (問)

日向原田寛一

(一) 人類に兩性あり、この兩性は合體して完全なる生活をなす。

即ち結婚と云ふ事に依りて人類としての満足を得るといふ。此の結婚は我等の當然成さねばならぬ、換言すれば當然營むべき事柄であるだらうか。これが僕の疑問とする點でございます。現在人類は結婚して居るが、結婚は完全なる生を得ん爲めと云ふは附説で、より根本の動機は性慾の壓迫とか、人類子孫の繁榮とか、家の系續、因習的習慣とかいふべきものに依りての動作では有りますまいか。若しそうで有りとなれば結婚は左程重大な問題でなくなくと思ひます。斯く申したのみでは餘りに不徹底ですから少し僕の意のある所を述べませう。結婚は兩性の結合によりて完全なる生活——道德的社會的——をなすといふ一般の論は男性と女性との差異を肯定しての論でせう。實際男性と女性とは各々獨特の美點を有して居るのは事實であるが、吾等は結婚といふ形式を踏まずとも異性の美點特徴を知り得ると信じます。井口氏は「我等が自己の人格的缺陷を我生涯の配偶者の性格中に發見し得た時ほど眞に愉快なそれだけ幸福なことは他に多くなからうと思ふ云々」と論ぜられてゐるが、配偶者の中にのみ我が人格の缺陷を見出し

得るのでなくて、自己以外の人の性格中に發見し得る事是否定せられまい。然らば他人に於て自己の人格の缺陷を見出したる時も、眞に愉快であり幸福を感じるであらう。唯だ井口氏として「眞に幸福に愉快な事は他になからう」といはしめたには夫婦の關係は單に我が人格の共有者といふ以外に何か肉肉的な原因でも潜んで居さうです。我等は自己の人格の缺陷は偉大なる人格者——基督釋迦其他多くの男性女性中——に見出し、そこに生に成立し、生の内容は豊富になると信じます。豈自己の配偶者を待つのがありませんうぞ。だが結婚は唯にこの精神的一面のみならず、他の一面即ち最も安全に性的満足を得従つて子孫の繁殖といふ人類として動物的本能の満足を果たすが故に夫婦の關係を結ぶのではないでせうか。若しそうであるとすると、此の二面を是非一人に依りて果たさねばならぬといふことも云へまいから、之を二途に分ちても悪くはないだらうと思はれます。性慾の満足は現時の娼妓等によつていゝだらう。廢娼運動も盛んである今日、且つ又其の正當なることも知らぬでは有りませんが、之を一つの機械と見做し、或は一の機械を製造して満足させて良くはないでせうか。そして靈的満足は多くの偉人中に求めたらより一層の生の成長が有りはせぬでせうか。こう考へると結婚といふものが甚だ不安になります。何か外に深い根據があるでせうか。御教示の程御願ひ申します。

(二) 次に申したいのは戀愛に關してでございます。僕は戀愛とはどんなものかを知らないです。戀愛とは「異性者間に於ける相互の愛の理解を名づけた」位に解してゐるのでございます。一條氏は云つてゐられる。戀愛は靈から肉へとか、肉から靈へではない

つて化育する。性慾は天地人三才を貫通する大自然の偉力である。これを神であると云つても過言ではあるまい。それでこの性慾を人生の目的上より理想(道德律)に従つて完全に實現することが人生の道德的義務になる。結婚はこの人生の大目的から生じた一男一女の性的結合である。故に道德上合理的のものであつて人格的生活のために生じた必要條件である。一男一女が性慾の結合によつて人生の目的を實現せんがために創設した道德的生活である。即ち一男一女の人格に發した戀愛の結合的生活である。こゝに家庭がある。この家庭的生活で男女の分業が行はれ、各の個性的職分に向つて天職を實現する。この間に本能の満足もあれば個性美の交換もあれば、家系の繼續もあれば種の進化もあれば、治國平天下の業もある。結婚は斯の如く人生の中心たる性慾を根本原基とした人格的生活であるから、人格陶冶の中樞機關であり、生命的發展の大工場である。家庭に於ける夫婦の愛の中に神もあり基督もあり釋迦もあり孔子もある。夫婦の愛の交渉中に於て、身を修め家を

齋ひ國を治め天下を平にして始めて人生の事業は極美に達するのである。夫婦の愛の中に於て始めて發問者の言はれた性慾の満足と靈慾の満足とが實現される此の二つの満足を一夫婦の愛の中に具體して進むところに理想の統御があり人格の發展がある。性慾の満足だけを娼妓の制度によつて求め、靈慾の満足だけを基督釋迦の教化制度によつて求めたら何うであるかと云ふ意見は、靈肉の分裂であり、人格の矛盾であり、結果は罪惡に終るに過ぎない。何となれば、性慾は食事と同一であつてバンである。靈とバンとは一致して始めて人生に意義を生ずる。その分離は無意義であるばかりでなく互に無用の長物である。我等はバンを食するには神聖にして清淨なる食堂でする。新穀であれば天子齋戒沐浴して天神地祇に獻げてから箸を着ける。乞食であつても食物を便所で食ふものはない。性慾も亦た然りである。一夫一婦の間に於て神聖にして清淨なる愛情の結果として行ふべきものである。共同便所と謂はるゝ娼妓に通つて行へば乞食にも劣つた行爲になる。剩へ娼妓を機



生に従つて生きて行くには社會的生活を爲さなければならぬ。然るに個人と社會との關係は相對的の實在である。獨立の出来ないものである。共に理想を有して自我の可能性を發揮して行く。社會の發達は個人の發達を要し、個人の發達は社會の發達を要し、互に助け合つて進んで行く。而して個人には男女の兩性がある。これは實在である。故に肯定するのが眞理である。人生の現實であるから否定するとは出来ない故に個人が社會に存續するには男性個人と女性個人の結合に待たなければならぬ。男女の性的結合によつて個人あり社會ありと云ふことになる。即ち夫婦あつて然る後に親子あり兄弟あり親戚あり郷黨あり國家あり國際ありと云ふことになる。そこで男女の性的結合と云ふことは個人及び社會を支配する人類の中心の動力である。それ故、個人が向上するには父母の健全なる遺傳を要し、社會が向上するには男女の性的結合より生ずる賢明なる個人の產出を要する。そして一個人には必ず性慾がある。不具者に非ざる限り男女は悉く性慾を有して居る。これは人生

の大なる現實である。この性慾は男女を結合する本能に基いて居り、人類の長い年月と道德的觀念の進化によつて、今は高等意識の良心によつて左右されるやうになつた。これは性慾は一個人として生ずることの一行爲であることに由來する。即ち人生の目的を達する手段中の一手段であるからである。即ち性慾は個人の自我に存する可能性を社會に發揮するに就いて立寄らねばならない關門だからである。此の性慾は實に個人の身心に於ける諸能力中で最も我々を支配し左右する偉力を有し、人生の社會的慾望中では主要の地位に居る。これは性慾は一個人の生さんとする人生の中心の慾望であるからである。人生の目的はこの性慾を中心として實現される。自我の可能性を發揮して社會に活動するにはこの性慾と云ふ慾望を中心として實現される。宗教も藝術も政治も經濟も皆な男女の性慾を中心として作られた文明である。釋迦も基督も男女の性慾の結果である。文明の進歩は性慾の進歩に伴ひ人類の進化は性慾の進化に依る。禽獸草木一切の萬物は陰陽の性慾的關係によ



想化に依らなければならぬ。この意味に於て戀愛は規範となり義務となり（ベキ）を伴ふ。即ち戀愛は倫理上の事實となり、良心作用に従つて生起し、道德律の下に支配されることになる。夫婦は互に相愛すべきものであると云ふ智的判斷を伴ひ、情的發動を伴ひ、意的行爲を生ずる。倫理學で善と稱するには心理的且つ倫理的のものであることを要する。例へば自分一人が心理的に娼妓を機械視することが善であると思はれても、一般社會の道德的民心が倫理的に惡と認める場合には決して善にはならない。今戀愛が倫理の中に編入されその對象となるためには心理的のものであり且つ倫理的のものであることを要する。過去の道德では夫婦の愛（和合）を認めるだけで、戀愛は心理的のものに限り倫理性を認めて居なかつた。けれども近代の道德はこの戀愛を夫婦の愛に編入して肯定することになり、隨つて規範性を生じ義務性を帶ぶることになつた。貞操はこの規範に立脚する義務である。高價なる人生の處女性を擁護して最愛の一人に獻げる行爲である。戀愛の成立（結

婚）後に於てはこの戀愛を擁護して道德的に之れを維持經營する義務的行爲を要する。貞操はこの行爲の中に自ら實現されて居る。ジュール・サンドの如く「感覺を以て靈魂を裏切ること無く、靈魂を以て感覺を裏切ること無きもの」と稱することもある。それ故、此等の規範的行爲を伴はないものは道德上の戀愛ではない。次に戀愛は道德であるがために其の根柢に於て信念がなければならぬ。即ち戀愛に對する敬虔なる信仰がなければならぬ。即ち戀愛は一男一女の相愛に對する誠心正意の渴仰でなければならぬ。戀愛者は戀愛の信徒であり行者でなければならぬ。それでは戀愛は心理と道德と宗教の一致した意識（良心）の三昧を修する人格者の行爲に於てその完全性を認める。これが戀愛に於ける完全性の第一要件である。次に戀愛は自由意志に發した一男一女の結合である。この合結は對人關係に於て相互の選擇上の理解に基く。この理解は戀人の人格に對する相對的の肯定である。即ち互に具有する容貌、體格、血統、健康、門地、地位、財産收入、榮典稱號、

械として取扱ひ人身の賣買を公許するとは人格を無視した人権蹂躪の行爲であるばかりでなく、貞操の賣買は道徳上又は法理上不合理である。基督釋迦の教化制度は救世の事業である。博愛慈悲の靈を以つて憐れな者を濟度する趣旨である。娼妓を機械と見做す思想とは正反對であり、且つ娼妓を機械と見做して女色を漁る放蕩兒を懲罰し懺悔させる制度である。それで人は人生の目的を追求するに當り、靈肉の行爲を統一して人格的生活に矛盾なからしめん爲めに、一男一女に行はれる神聖にして清淨なる愛情に基づく夫婦の結合即ち結婚の必要が生じて來たのである。一夫一婦の制度は道徳宗教法律政治經濟上の最後の發見である。不具者又は小兒老衰者病人等の特例を除くの外は、人は凡て自己の人生のために結婚すべき義務がある。自我の可能性を實現するために結婚する大義務がある。男子は夫となり父となる義務があり、女子は妻となり母となる義務がある。社會は個人の此の義務を果すに最も適當なる設備を提供する義務がある。但し現在の不完全なる社會に於

て、生活難結婚難のために結婚の出来ない場合は結婚しないのは自然であり、義務の不履行ではない。又た或る技術若くは思想上の天才がこの不完全なる社會を救濟する目的から、結婚と事業とが兩立しない場合に結婚を犠牲にすることがあるが、件の天才は社會の性的生活を間接に發達させるために個人の性を犠牲に供して社會の大性慾中には生きる人である。結婚義務の不履行人でもなく、否定者でもない。

(二) これは戀愛の永續性に關する發問であつて、男女道徳の中心問題である。就いては戀愛の完全性と云ふものから説明しなければならない。戀愛は第一に性慾に基く心理上の事實である。意識作用に發する感情の一種であつて且つ知覺と意志とを附隨して居る心理的現象である。故に心理上の事實でないものは戀愛ではない。戀愛は必ず心理上の現象でなければならぬ。次に戀愛は道徳的意識の一現象であるから、之れを個人の行爲に現はす場合には必ず人格に於ける慾望の統御に卒由しなければならぬ。即ち嗜欲より選擇された理

である。秋毫の裏切を爲し得ない道德人であるからである。それで永久不變の戀愛を爲さんと欲する者は先づ道德的修養を積み、殊に男女道德に於ける眞個の人格者と成らなければならぬ。男女道德に違反する行爲を爲した者又は爲して居る者が戀愛をすれば、その戀愛が永久不變であるとは私の想像又は保證の限りでない。唯だ男女道德の人格者であればその人の戀愛は完全性を有して居るから、倫理學的研究の結果からして其の永續性を肯定して萬古不磨なることを鞏固大の印を押して保證することが出来る。それを破壊中斷するは本人の罪である。當事者の非倫理學の結果である。化學的方定式を與へても實驗の満足に出来ないのは實驗者の罪である。化學的方定式がドクマである爲めではない。それで「最近の性の倫理學的研究によれば、眞個の結婚なるものは戀愛的生活を目的とする一男一女の自由意志に發する全的理解の戀愛に基く結合であるから、夫婦的關係は永久不變であつて離婚と云ふが如き不明なる過失は到來しないのである。けれども當今の世人には此の性

の倫理學的修養が缺漏して居る爲めに、結婚の失敗者は續々として絶えないのである。」と言つた私の斷案は正しいであらう。ところが戀愛を單に心理上の事實として見れば、永久不變の場合もあるが消滅する場合もある。消滅するのは其の人の心理作用に原因するのであるから自然の結果であると云はねばならない。若し戀愛が數人の上を移動して歩いた場合には、其の人の意識に於ける自然的現象であるから心理的に正しいことになる。道德上これを批難する理由がない。然るに世人がこれを囂々として道德上から批難するは、戀愛（夫婦の愛）が人生の社會的生活に於いて道德性を有して居るからである。即ち戀愛の永續性を理想とする社會的良心の聲である。故に戀愛が數人の異性の上を移動した場合にはこれを戀愛と認めず單に肉を漁る劣等行爲として道德上の罪惡と認めるのである。何となれば完全性に於ける戀愛は道德的行爲であるから良（心靈）に胚胎して行動（肉體の動作）に現はれ、靈肉の順位を追ふて進み、その後は靈肉合一の状態を以つて進み、同一の人格者



趣味、性格、教育、才能、愛情、人格等の廣き範圍に於ける肯定の總稱を指すのである。これを名づけて全的理解と云ふ。頗る打算的な具眼的なものであり、各人各様に行はれ、年齢と男女によつて異なるものであるが、之れを統一評價する標準的計量器とも云ふべきものは唯一の道德律である。道德律によつて戀の對象を圍繞する一切諸の事項を評價して、其の中樞たる人格に對する道德的價值を決定すれば、選擇されたる全的に理解されたる戀人を見出すのである。そして靈に於て全的に理解され、愛情の白熱的最高調に至つて肉の交りがあれば、其れが全的理解の批准交換である。それで全的理解とは他人の私事に立入つて毛の穴までも精査し、學んだ文學の數までも追究すると云ふが如き不可能事に屬する理解ではない。自己の意識(靈)によつて出來得るだけ廣く其の戀の對象を圍繞する一切の事件を評價して、その中樞たる人格に對する周到なる道德的批判を加へて之れを一決するところに全的理解を生ずるのである。それで道德的修養の深い者ほどその理解が正確で

ある。そして個人の能力は進歩的のものであるから、夫妻の知識には元より優劣があり、感情には強弱があり長短がある。けれども心理上の知識及び感情の理解の標準ではないから、知識感情の進歩が全的理解を傷けることはない。夫妻が學術上に於て意見の衝突をしても、感情に於て小競合しても、相互の全的理解を覆すことはない。又夫が事業に失敗して無一物の浪人になつても、財産や収入が理解の標準でないから、妻の全的理解を害することはない。是れは人格の統覺に於て戀人に對する道德的意識の統一が既に全的に成立して居るからである。それで夫婦が大喧嘩して風呂敷包を妻の首に結び付けて實家へ追ひ出して遣つても、後から草鞋を履いて追ひ駈けるは、人格の統覺に於て全的理解が嚴然として存して居る結果である。それで統覺が分裂しない限りは其の全的理解は永久に安全である。これが戀愛の完全性に於ける第二の要件である。この二つの要件を具備した戀愛であれば永續性を有する。これは全く戀愛が人格者と人格者との誠意に依る結合であるから



自由  
基督教  
論壇

## 大戦争と宗教思想

内ヶ崎作三郎

### 一

現時の大戦争が宗教家の思想に如何なる變化を與へてゐるか、之を考へることは強ち無用ではあるまいと思ふ。新聞電報は日々の戦況を報じてゐるが、之に興味を持つ人が非常に少い。又戦争に關する著作の賣れないのは何の爲めであるか。これは世人が今度の戦争を對岸の火事のやうに心得て之を研究する必要が無いと思つてゐるからである。しかも此の考へは終に誤謬たるを免れない。

實に今度の戦争は日露戦争以上の影響を東洋に及ぼすものである。しかるに電車や汽車の中で讀まれる本は、殆んど講談小説のみである。何と云ふ精神的近眼であらう、淺はかな見識であらう。

此の點よりして日本民族の將來を思へば轉心細き感を禁じえないのである。

今度の戦争は基督教思想に幾多の動搖を來した。今其の中の顯著なる者を擧げて見やう。

第一、戦争は人類に取つて必然的なものである、さればイエスも馬可傳の十三章に於て、戦争の止むべからざるを説いてゐるではないか。今度の戦争の後と雖も、永遠に「民は起りて民を攻め、國は國を攻む」るであらう。

第二、獨逸の宗教家は今度の戦争を助けて世界の紛亂を引き起した。彼等の自由神學は破産した。

第三、生きて歸れない戦場に於ては、理論の力は皆無である。此處には唯十字架上の死みが救ひである。

の上に同一の統覺によつて行爲が永續して居るのである。肉（肉體の動作）より靈（良心——意識作用）に入ると云ふことは道德上には全く無い事實である。本能的衝動的動作又は動物的動作に過ぎない。故にこの動作から戀愛に進まうとすれば道德性を失つて居るから、單に心理的に刹那々々の肉の香を追ふ感應の上を小走りして通る結果になる。これを肯定して刹那哲學半獸主義と云ふものを主張する者もある。最後に一言するが、戀愛と結婚とは道德上の本質に於ては同一である。靈肉に於て男女が結合して戀愛が既成したならばそれが結婚の本體であるより外に結婚の本體が他にないのである。父母の同意及び證人の證明本人の捺印等を附する戸籍役場の登録は、民法によつて裁判所に結婚の成立した旨を傳達する手續である。許可に對する申請ではない。出産届若くは死亡届と同一である。生れたから届け、死んだから届けるのである。社會の一員として國民の一人として戀愛即ち結婚を爲したから、社會即ち國家へ届けるのである。結婚儀式は結婚の成立した旨を若干の知人

に披露廣告する儀式である。これは私事に屬するものであつて、儀式によつて結婚が成立するのではない。結婚の不成立に基く失戀は一には現行民法及び舊道德の罪であり、二には當事者間の男女道德の無修養の結果である。戀愛と結婚とが本質に於て異なる結果ではない。之れを別々に離して考へるのは講學上の便宜からである。此等に對する卑見は前々號の「結婚道德の新典型」と云ふ私の小論文で述べてあるから、御參考の程を願ふ。

（一條生）

□生活のいぶき

森本 巖夫

日本の日の丸益々輝けばいよゝ、瘦せ行く雪達磨われ  
貧乏は金を生まれど智恵を生み二錢の飯をうまく食ふかな  
夜となれば失ひたりし座をば得し王者の如く嚴然と踞す  
蠟燭を點せば壁にわが影の聖者めけるもなつかしまるゝ  
今朝行きし飯屋の臺の小綺麗に拭かれてゐしがひと日うれしき

ことと思ふ。

## 二

神が人間の社會に働く時は常に人間の協力を要する。例へが病人が有る時に唯神に祈るのみで醫療を加へないならば、其の病人は死ぬより外は無<sub>い</sub>。然るに醫者や看護婦や家族の者が神の協力者となつて働く時に、其の病人は救はれるのである。故に今度の戦争の如きは、人間の協力の足らない爲めにあつて、少しも神の與り知る所ではない。其の責任は少くとも歐洲人全體に負はされねばならぬ。或る人は歴史的に遡つてナポレオンにまで其の罪を嫁してゐる。もし斯かる廣い見地に立つならば、日本人も亦此の大戦争に責任が有る。否、人類全體がさうであるといふことも出来るのである。秋夜天を仰げば銀河永しへに横はつて何ぞ遙かなる。あゝ無限の中なる此の地球は宇宙の大に比すれば蒼海の一粟にも足らないのである。更に地球の一部なる歐洲の野に日夜幾千萬の屍は曝さるゝとも、久遠の榮えに生くる神の眼より見れば

眞にこれ蝸牛角上の争ひではないか。蔭く者は刈らざるべからず。自らの私慾と怠惰との爲めに戦争を引き起したる人間が、かへつて神を疑ふとは、何たる醜態であらう。

戦争には如何なる口實でも付けられるが、結局無智なる國民的野心である。之が戦争の原因となるのである。然も此の國民的野心が如何にして起るかと云ふとを考へて見ると、我々は一層痛切なる問題に逢着するのである。近代に至つて世界の富は著しく進歩した。しかも道德の進歩は之と伴はない。其の結果として世には聖人君子の數が減じて、不徳義な道樂者が多く輩出して金を湯水のやうに浪費する。而して一方には幾多のジャンプアルジャンが人生の光から遠ざかり行く。斯くて人類は富の利用法に就て益々無智になるのである。

英獨兩國は今度の戦争の中心に立つてゐる者で、従つて彼等の責任は最も重い。彼等は其の商工業を盛んにして富を作り、又此の商工業の争ひから戦争を起して、前に得たる富の力を之に用ゐ

第四。人類の淺ましひ争鬭を傍觀する所の神は果して愛の神であらうか。我々は疑はざるを得ない。

以下順を追つて之が批評を試みよう。

第一に、成程、馬太傳馬可傳に於ては、世界終末に先立つて大戦争の有ることを説いてゐる。個人も國家もなすべきことをなさず、有らゆる方面に汚れが充滿する時、之が掃除として戦争が起るのである。人間が個人としても、社會としても、國家としても常に勤勉にして明かなる良心を持つてゐるならば、戦争は決して起らない。文明や國家の進歩は必ずしも戦争を要しないのである。

第二に、今度の戦争は宗教戦争ではない。獨逸をして起たしめたものは自由神學にあらずして其の軍國主義である。否、英獨の慾の戦争である。もし此處で宗教家の非を鳴らすならば、吾人はむしろ英獨佛露いづれの宗教家をも責めねばならぬ。獨逸の主戦派の大多數は正統的信仰を有してゐる。

第三に、知識も哲學も要らない、十字架のみが

我々の救ひであると云ふのは、宗教の退歩と云ふの外はない。キリストの十字架の眞の目的は此の世より苦痛を減ずるにある。もし苦痛が人生の目的ならば、病苦を救ふ醫者は何故に必要であるか。外科の手術に用ゐられるコロ、ホルムは何のためであるか。人生其の物は決して苦しみのみではない、實に歡喜に満ちたる進歩發達である。苦しみに以外に人生無くんば、文明は何處に發達の餘地を見出すことが出來やう。十字架を負うて苦しむのは其自身に終極の目的ではなくて、歡喜の生活に入る準備として價值が有るのである。阿由毘陀に曰く、「無智なる者には神は遠けれども、賢き者には神は近し」と。人間の理性と智識を冷笑する信仰は已に時勢に後れたるものである。今日は宗教がガリレオやブルーノを罰するの時ではない。

第四の疑問は最も深刻にして我々の共に同感する所である。然り、神は果して愛の神なりや。もし然りとすれば神は何故に人類の争鬭を止めないであらう。私は之に就て少しく愚見を述べて見た



人間は皆平等に働かねばならぬ。賢くならねばならぬ。國家としても亦さうである。英獨佛露の列強のみが發達しても、印度や支那が進歩せねば駄目だ。故に我々は益々教育運動を盛んにして見識ある人士を造り、一旦事の起つた時に、其等の識者が相議つて平和の落着を見るやうにしなければならぬ。

### 三

近頃ある人は、日本は土地が狭いから、勢ひオーストラリやカリフォルニアを占領せねばならぬ、従つて英米兩國は日本の敵であるから、日本は彼等に對して軍備を擴張せねばならぬ、と云ふやうな考へを持つてゐる。何と云ふ不見識であらう。

英米のやうな文明國は何程の武力を以つてしても向ふにも其がある以上、容易に侵入の出来るものではない。假に侵入し得たとしても、到底完全に征服し得はしない。これについて面白いのは八月の「大西洋月報」に出てゐる哲學者ベルトランド・ラッセルの「國民的無抵抗論」である。

今獨逸が英國に侵入したと假定せよ。先づ國王や政府は避難して了ふ。官吏と人民は決して抵抗しない、が又之と同時に服従もしない。そのため三四十名の者は銃殺されるかも知れぬ、しかし幾人でも平氣に殺される時に、獨逸は無限に此方法を續くることは出来まい。例へば獨逸では英國の小學校生徒に獨逸語を課せんとすると、教員がどうしても命を用ゐない。すると獨逸では怒つて教員を殺す。何十人かは殺されても彼等は どうしても服従しない。獨逸でも仕方がないから好い加減にして止して了ふ。斯くの如くにして獨逸は到底英國を征服し統治することは出来ない。故に英國はそんなに獨逸を怖れるに及ばない、と云ふのがラッセルの論旨である。

夢のやうな話であるが英國のやうな個人々々の訓練のよく行はれてゐる文明國なら、或ひは此の位のことはやり通すかも知れない。兎に角に、一國が他國を完全に征服することは今日では容易に出来るものではない。日本がニューゼーランドや加洲を取らうと思つて、英國や米國に戰爭を吹つ

てゐる。例を東洋に取つて見やう。近年日本の工業は非常に發達して市場を支那に擴めた。もし今後米國の實業家と日本の實業家とが共に市場を支那に爭つたならどうであらう。日米の國交は破れ、兩國の實業家は莫大の金を出して戰爭を可能ならしめるのであらう。今日戰爭の根本は、實に此の實業に在るのである。國家の富を作る商工業が國際的爭鬭を誘致して世界の富を滅することは必然的に避くべからざることであるかどうか。もし避けるとすれば、戰爭を豫防する唯一の望みが此處に懸つてゐるのであるが、其の方法は如何。世界の識者は皆之が研究をしなければならぬと思ふ。

試みに今後三十年の戰爭を思へ。科學の進歩につれて破壊力は益々發達し、各交戰國の都市は一週間に立たぬ中に一炬の烟と化し果てるであらう。雲に聳ゆるケルンの禮拜堂も、英國王家の豪華をしのぶウインゾアの宮殿も、夏の木立の間に仰がる、ウエルサイユの離宮も、さては美術の寶庫なるヴァテカンの法王宮や、名さへゆかしきプラーグの大學、モスコウの金色の大寺院も、また、

く中に一片の焼土となるであらう。斯くて何百萬、何千萬の罪なき人の子は砲烟彈雨の中に斷末魔の苦しみを受けねばならぬであらう。之を考ふると戰爭は避けねばならぬ。

然らば戰爭を避けるには如何にせばよいか。此處に於て我々は古い孔子の教へを引かねばならぬ。「古への明德を天下に明かにせんと欲する者は、先づ其の國を治む。其の國を治めんと欲する者は、先づ其の家を齊ふ。其の家を齊へんと欲する者は、先づ其の身を修む。其の身を修めんと欲する者は、先づ其の心を正しくす。其の心を正しくせんと欲する者は、先づ其の意を誠にす。其の意を誠にせんと欲する者は、先づ其の知ることを致す。知ることは致すは物に格るにあり。物格りて後知ること至り、知ることに至りて後意誠に、意誠にして後心正しく、心正しくして後身修まり、身修まりて後家齊ひ、家齊ひて後國治まり、國治りて後天下平かなり。天子より以て庶人に至るまで、壹に是れ皆身を修むるを以て本と爲す」是れやがて戰爭の豫防策と云ふべきである。

或ひは疫病の爲めに斃れるのである。人間の力ではどうして國際問題を圓滿に解決することが出来ないかと云ふことが分れば、道徳も宗教も止めて了ふ方がよい。戦争の起る毎に何百萬、何千萬の青年が死ななければならぬとすれば、教育家は不安を感じざるを得ない。

或は平和が續けば人間が懦弱になると云ふ説をなす者もあらう。けれども今日のやうに生存競争の激しい世の中で、どうして人間が怠けてゐられやう。人間をして勤勉ならしめる刺戟としては生活難が有つて、然も之だけで充分である。されば我々は全力を擧げて國際關係の圓滑。戦争の豫防に盡さねばならぬ。

此の時に當つて一部の保守的宗教家のやうに、十字架の上のキリスト以外如何なる宗教如何なる聖人にも眞理がないと云ふならば、前に述べた經濟的戦争にかへて三十年戦争のやうな悲惨なる宗教戦争を引き起し、かへつてキリストの十字架をして無意味ならしめるであらう。我々進歩的基督教徒はキリストの人格を手本となし、其の

教訓を守ると共に、我々の理想の中に宿る所有哲人賢者の教訓に従はんとする者である。斯くの如き包容的宗教にして初めて、今後の人類を平和の中に教へ導くことが出来るのである。

要するに、今度の大戦争は決して基督教をして退歩せしめるものではなくて、寧ろ其の思想を自由にし進歩せしめるのである。故に自由神學の破産をとらふる西洋の保守派の人々は、いさゝか我田引水のやうに思はれるのである。諸君、願はくは此の錯雜せる國際問題を平和の中に解決し、此の怖るべき戦争を豫防せんが爲めに、來りて我々の同志とならんことを。何となれば政治家は無識に宗教家は頑迷なる現代に於て、眞に全人類の幸福の爲めに起つて戦ふことは、我々自由基督教徒の上に下されたる大使命にして又神の限りなきの恩寵であるからである。(十月三日於統一教會K、O生筆記)



かけた所が、到底望みが達せられはしない。しか  
らば如何なる方法を取るべきであるか。即ち大戦  
争後の國際議會に於て、日本移民に對する門戸開  
放を提議するのである。尤も今後海外に移住せん  
とする者は如何なる國にも歓迎せられるやうな善  
良な素質を持ち、自ら益すると共に彼れを益する  
やうな博大な精神を有する人でなければならな  
い。

#### 四

斯く考へ來れば今後の日本人を指導せんとする  
者は、先輩に勝れる體格を有し、彼等以上の修養  
をせねばならぬ。今や國際關係の複雑なる前日の  
比ではない。此の時に當つて我が民族を指導する  
人は、非常なる知識、非常なる頭腦、非常なる健  
康、非常なる理想、非常なる手腕とを要するのだ  
である。最も各人が皆斯くの如くなることは不可  
能であるから身分相當のことをするより外はない  
が、實力有る人は勇進發憤すべきである。さうで  
なければ、戦争を豫防することは出来ない。

又日本の學者は西洋の學者以上にならねばなら  
ぬ。何となれば彼等は此のやうな慘憺たる戦争を  
止めるだけの判斷力もなく、又それ程の努力もし  
ないからである。我々は實に戦争なしに國民的膨  
脹をなすの工夫をせねばならぬ。喧嘩をしないで  
他人の物を取るのはむづかしい。然しながら事毎  
に戦争を起さなければならぬやうなことから  
ば、何を苦しんで人傑を求めやう、英才を要しや  
う。日本は今、世界の將來の問題を解決するため  
に貢獻するやうな大學者、大宗教家を出さねばな  
らぬ氣運に向つてゐるのである。

若し或る人の云ふが如く戦争を止めることが絶  
對に不可能であるならば、宗教や道德の必要が何  
處にあらう。今や戦雲漲る佛白方面の市には、全  
市を擧げて遊里と化してゐる所も有ると云ふ。戦  
争に於ては人々が目前に死を豫期してゐるから、  
道德上の責任は甚しく弱くなる。従つて戦場に於  
ては道德の根本は悉く破れて了ふ。一人の人が死  
ぬ時に、其の家族は如何に悲しむであらう。然る  
に戦争では幾千幾萬の人が或ひは彈丸の爲めに、



よりインスピレーションがなくなりかけた。僕は學問に興味を失つた。代數と化學が嫌ひでたまらなかつた。不愉快なる青春期の二年が續いて豫科第三年―その時には大學豫科一年と改稱せられてゐた―に進んだ。それは明治二十八年の九月であつた。これ迄の同級生は、補充科時代よりの友人か上級より残つた人々かゝ重なる者であつた。然るに大學豫科一年に各府縣の中學卒業生が或は無試験で、或は有試験で入學した。多くの新顔がきまり惡そうに前の方の机に並んだ。栗原基君は東北學院より、小西重直、箭内互、故渡邊幸次郎君等は安積中學より來た。庄内も米澤も盛岡も幾多の選手を送つて來た。東京からも數名の新入學生がやつて來た。僕等の甲組へ來た一人は故大島六三君で、幕末の名將大島圭介の三男だといふので、全級の注目を惹いた。乙組には西本願寺の島地默雷師の令息雷夢君といふが居るといふので、僕は好奇心から物色しはじめた。

あれがそれだといふ青年を見ると細長い顔で額が大きくて薩摩紺かすりの羽織かを引つかけた何處

となく非凡の面相をしてゐる。十分時の校庭の芝草の群に於ても、正午の食堂の立食の團欒の中でもこの男が盛に談論に花を咲かせた。實に無遠慮で、上級生も何もあつたものでない。僕は東京下りの學生連はえらいものだと思つた。

\* \* \* \* \*

そのうち僕は尙志會雜誌部の委員に擧げられた。多くの學生投書家の中に鋼の舎と名のる歌人がありて雄渾にして清新なる調を示した。後に調ぶると、これが島地君の雅號であると解つて、僕はます／＼この才人を尊敬した。當時島地君は東一番丁の本願寺別院にゐた。友人の噂さによりて島地君は東京は番丁の母君より送らるゝ衣類も一度目茶苦茶に揉んで、おまけにナイフで所々へ穴でもあけぬうちは着ぬといふこと、あれで毎朝法衣を引掛けて佛壇の前に御勤めするといふことなどを知つた。その後運動場に於て盛にテニスをやる島地君を見た、ベースボールやボートの熱心なる彌次として島地君を見た。

大學豫科二年となりて文科丈が一組となつた。



## 二高時代の島地雷夢君の追懷

内ヶ崎作三郎

僕の學校生活は随分長いものである。六歳より

二十五歳までは小學、高等中學、大學と鰻上りに過ぎた。明治四十一年より滿三ヶ年は海外の學園の花間に蜂のごとく蜜を吸うた。この間鈍い僕を刺戟し鞭撻したる教師、先輩、友人は少くない。僕は兩親を通して祖先より善さも惡さも遺傳を得てゐる。このうちには僕のごときものにとりても非常に利益のあるものが有してゐるかも知れない。

しかし之を開發し指導してくるゝ人々が無かつたらば僕の運命は奥州の七つ森の麓に決定せられたことであらふ。僕自身の乏しさを顧みず、現在の位置にありて民族のため、人類のため、塵程の貢獻を爲し得るは、冥加の極みである。この一事を思ふ時僕の魯鈍を教育して今日あるを得しめたる

多くの恩人に感謝せざるをえない。

僕は今僕の書齋にありて恩人の行列を想像する。さてもく長い行列である事ぞ。古聖あり、英雄あり、佳人あり、文豪あり、この國の人あり、外國の人も少からずある。

僕の過去の生涯にとりて記憶せねばならぬ事件があるとするれば十二歳の時仙臺の小學校に移つたこと、十五歳にして、第二高等中學校に入つたことである。僕は仙臺の東二番丁小學校時代の終期に於てアブラハム・リンコルンの傳記を讀んで非常に感動した。彼の皎潔玉の如き心情、正義人道を踏んで恐れざる勇猛心は無邪氣なる僕に深刻なる印象を與へた。僕は高等中學の補充二年生位迄は殆んどこの情力で進んだ。しかるに豫科一年頃

村寅太郎先生に對しても平氣で愉快そうに話をしてゐるのが僕には不思議に思はれたのであつた。

島地君はこの點に於ては僕の短所を刺戟してくれた恩人である。

かゝる程に島地君も雜誌部員に選ばれた。僕との交際はいよゝ密接となつた。僕等は隔月に雜誌の編輯のために相談した。連名で英詩を譯した、又匿名で批評を試みた。接すれば接する程島地君は秀才であると僕は感服した。僕のは努力でゆくの、島地君のは獨りでに進んでゆくやうに思はれた。それでも一月に二三度位しか湯に這入らないので僕は同君に溝鼠生の別名をつけた。島地君は笑つてこの雅號か醜號かを採用した。此時代の尙志會雜誌には溝鼠生の歌と批評とがある筈である。

三十年の夏僕はたゞ一人の弟を失うた。僕十九歳にして弟は十四歳であつた。以來僕は漸く散漫なる思想を統一して人生に就いて考へ初めた。基督教名士の説教も進んで聞いた。島地君の巖君默雷師の説教を聞いたのも此時であつた。一方には

文科三年に於て栗野健次郎先生に教へられたるエマルソン偉人論とカーライルの衣裳哲學とが知らず識らず大なる感化を與へた。ことに栗野先生自身の懷疑論は却つて僕等をして肯定の方面に走らしめた程痛切なるものであつた。

\* \* \* \* \*

三十一年即ち僕等が二高に於ける最後の年、こゝに後の半年は島地君と僕とに大なる變動が生じた。前にも述べた通り、僕は一二年前から毎週土曜の夜ブゼル師の聖書研究會に出てゐた。しかし一向解らなかつた。たゞブゼル師及び栗原君の至誠と熱心とに動かされて自分もあのやうな熱心な眞面目の人となりたい一心で通うてゐたのであつた。一體仙臺は基督教の色彩が割合に強い都である。東北學院、宮城女學校、仙臺女學校、尙綱女學校等がある、新教各派も、舊教も、希臘教も傳道してゐる。宣教師も多い。又二高には忠愛三友俱樂部といふ基督教青年會が活動して有爲な會員も少くはなかつた。その中心人物の一人たりし法學士平澤均治君の如きは全校の尊敬を博してゐ



島地君とは何時のか間に親しくなつた。僕は以前から四年半も廣瀬川畔の知人の宅に預けられてゐた。僕の室は玄關の三疊であつたが大きな二本の楓のある庭は廣瀬川を見下してゐた。向側には廣い川原を隔て、瑞鳳山の杉林がみえ、その赤い絶壁の下を白く川が流れて南の方へ廻りてゆく邊まで椽側からみえた。島地君は大分此景色が氣に入つたと見えて夕食後ぶらりと出かけて僕の宿に來ることが度々であつた。來ると直ぐに新刊雜誌や小説などの物語りをして二三時間も長談義をした事があつた。

その年の七月文科大學を卒業した高山樗牛佐々醒雪二氏が二高の教授となりて赴任した。僕が補充二年を終りたる時に母校を卒へし秀才はもう早や新進學者として錦を郷里に飾つたのである。僕等の教場は趣味に溢れた。友情が厚いのみならず、教師との間も極めて親密であつた。授業時間にも笑ふ聲が窓の外に洩れた。島地君と二人で高山氏の寓に押しかけ、甘酒の御馳走と主人の氣焰とに感服したのもこの頃であつた。栗原君は熱心なる

耶蘇信者と目せられてゐた、眞面目な人、時間を利用して勉強する人と考へられてゐた。同君が福音新報や内村鑑三氏の著者などを持ち來りて僕等に貸してくれた。その前から僕は中島町の尙網女學校長のズエル師の聖書研究會に毎週一度づゝ出席してゐたのであつた、無論栗原君に勧誘せられて。

かゝるうちに島地君と僕との友情はますます深くなつた。奥州の田舎者と東京育ちの長州兒がどうして氣心が合つたかは一の神秘である。僕の島地君の無遠慮や天真爛漫の處が馬鹿に氣に入つた。僕はリンコルンの感化を殆んど忘れて了つて、人生に對する興味が少くなつて、たゞ落第したくない計りに勉強してゐたのであつた。僕は一體遠慮深い、或點に於ては憶病虫であつた。殊に先生とか先輩とかに對してはどうしても遠慮し勝てないと思ふことを十分所か五分も二分も述ぶる勇氣がなかつたのである、況んや演説などは藥にもやらふと考へたことはなかつた。然るに島地君の先輩や教師に對する態度は極めて自然で、當時の校長吉



のうちに立ちつくして瞑想したこともあつた。

二三日學校に姿を見せなかつた島地君が歡喜に溢るゝ笑顏をして出て來た。その午後はわが寓居に來りて信仰の發生に關する告白をした。彼はヨハネたり、パウロたらざるをえないと斷言した。

さらでだに詩的の心靈が輝きいづる程であつた、僕の心にやゝ發芽したる信仰に點火したやうに感じた。僕は何となく歡喜の情を分ち與へられるやうな氣がした。僕の鈍い重い心靈を動かすには島地君の熱烈なる感情が必要であつた。僕は何となく重荷がとれたやうな感じがした。これは信仰といふものであるまいかとも思つた。島地君と一緒に信者になつて仕舞ふかといふ決心が漸く固くなつた。

\* \* \* \*

時は六月初旬で同窓は卒業試験の準備に忙殺されてゐた。僕も準備をしかけた時にこの大事件が突發した。僕は卒業試験と信仰の入學試験を同時に準備しなければならなかつた。僕は基督教々理が解つたのではないが、とにかく一種の人生觀を

確立するために教會に入りて信者たるを公表することが必要であると信じた。さて島地君はプゼル師や栗原君の關係してゐる浸禮教會に入會を申し込んだといふことであるから、理も否もなく僕も矢張この教會に加はらなければならなかつた。この信仰の決心は誰にも相談しなかつた。郷里にも、久しき以前より兄事した士井晚翠君へも事後報告をした位であつた。

無我無中で卒業試験が終つた、その翌日即ち七月三日の午前、島地君と僕は北一番丁の浸禮教會に行きて信仰の試験をされた。今から考へれば隨分解らない問題を出された。しかし僕等は入れてさへ貰へば宜いといふ考から別に異論を狭なかつた。此時大急ぎに吉野作造君がやつて來た。同君は縣立一中出での俊才で、一部一年にゐたので、矢張り聖書の組の仲間であつた。同君は僕等の決心に動かされて、同一の態度を採らんがために追ひかけて來られたのである。かくして一人の仲間が思ひ掛けなく殖えたのである。

教壇の後の戸を開くと大きな湯壺が据えて水が

た。文學博士深田康算君の如きも既にその會員であつた。されば基督教は仙臺に於ては餘り毛嫌ひされてゐない。しかし信者になるといふことは別な問題である。

僕も基督教は宜い宗教だと感服した。しかし教會に屬して信者にあらふとは考へなかつた。しかるに東京―誘惑の多い首都―に上らねばならぬとは人生觀を確立せざる青年にとりては冒險であるかの如く感じた、武裝せずして戰場へ臨む感があつた。プゼル師もこの事を心配されたのであらう、何でも五月頃であつたが島地君と僕へ連名の手紙が來た。君等が何等信仰上の決心なくして東京に行き、大學に學ぶは危険のことである。そのため毎週水曜日の午後三時から三十分程特別の會合をしてやるから出席せよといふのであつた。僕等は一種の挑戦狀を受取つた氣持がした。しかし斷るのも失禮だと思つて出席してみた。島地君は多分二月頃から土曜の夜の會に出てゐたのである。動機は何んであつたか解らない、多分僕等の友情の引力を感じた丈であつたらう。最も此頃島地君は

本願寺別院にはゐなかつたのである。

水曜の會が三四回も續いた。僕はたゞプゼル師と栗原君の好意を謝するばかりであつた。こんなに親切にされても別に信仰の確立せぬは申譯がないことだと考へた。程なく栗原君から島地君が信仰上の煩悶を重ねて一夜釋迦堂の櫻の老木の下に立ちつくしたるに曙近く雲の中に十字架を見て、その時から大安心を得た、非常に熱烈なる信仰が燃えて、直ちにプゼル師を訪問して教會に入る決心を表白したといふことを聞かせられた。僕には晴天の霹靂のごとくこの新聞が響いた。佛教の家庭に育ちたる島地君――西本願寺の名門の子――が僅かに半年足らざる修養の結果として斷然基督教信者たらんと決心したとは何たる大膽なることぞと驚いた。僕も島地君に負けてはならんと心掛けた。學校でも寓居でも、雲の色、月の光、風の音、川瀬の響きに心目心耳を傾倒して何物かの靈力に觸れたいとあせつた。眞夜中に床の上に端座して精神の統一を計つたこともある、強いて祈つてみたこともある、朝早く起き新緑に輝く日光

時、突然君の訃報に接した。僕等は今更我を疑つたことであつた。僕は詩のごとき謎の如き君の一生を追懷した。色々な感想が浮んだ。されども政戦に出で立たんとする刹那であれば、僕は同君の葬式にも連らずして東北に走りて小山君を助けた。これは寛大なる我が島地君の諒せらるゝことと思つたからである。この夏のはじめ小閑をえて君の義弟大等氏を原町に訪問し、君の令妹なる大等氏夫人にも面語することが出来た。そのうちに小山君

溯る記憶の流れ二十年瘦秀才の靈のひらめき。

廣瀬川流れ牙えゆく眞夜中に信を談せし昔なづかし。

朝霧に睡れる市を見下して共に祈りし古杉の蔭。

釋迦堂の夏の夜ふけて雲の中に君みし物は何の啓示ぞ。

蜂章白筋帽のあみだ振り光るまなざし今もちらつく。

新しき生に入りしをことほぎしその初夏の燃ゆる日の影。

秀才の匂ひをとめて薫れかし母校芝生の梅の一株。

亡き君の歌の香のみぞ身に逼る菊うら枯れし晩秋の宵。

この夕不思議に君を思ひ出づとはの國にて我呼ぶらんか。

この世去りて君民となる彌陀の國神の國また大靈の國。

が再び病んだ。かくして君の追悼會は愚か追懷録も今日といふ今日迄愈つたのである、否貧乏暇なして、永い不義理を積んだのである。小山君も過日横濱根岸の病院を退いて、病後の身を以て君の長文の追懷録を草した。僕もこれに勵まされて遅れ馳せに君の思い出を書いた。君の靈は相變らず不手の長談義に笑ふであらふ。されども君は僕の心靈の點火者である。僕の心靈生活の繼續する限り、君は僕の精神の何處かに宿つてゐて、依然として僕を勵ますやうにも思はれるのである。

(十一月廿一日夜)

波々と溢れてゐた。牧師中島力三郎氏が黒い法衣をつけて真中に立つてゐる。受浸者が單物を着け、留針にて前を閉ぢて、牧師は左手にてその前帶を、右手にてその襟頸を押へて、倒さに水中に入れるので、顔が水中に五寸もいつたと思ふ頃に、又引き上げられるのである。その間會衆は美しく讚美歌を歌うてゐる。滴禮の洗禮に比すれば面倒ではあるが、此處に一種の表號的意義がある。即ち過去を葬りて新生に入るといふのである。島地君はこの儀式を受くる前に柱に頭を押しつけて天國の榮えを示し給へと祈つてゐた。

その日僕等は新生の希望に輝きてヅェル師の午餐會に列した。青葉山の蒼翠欄を壓し、廣瀬川の河風涼しく窓に入り、感謝に滿ちて長き日の傾く頃迄語りつくした。

僕等三人が基督教に入つたことは母校の一問題となつた。數日後の卒業式には僕等は殊に注目せられたやうな氣がした。卒業證書を手にした島地君は三年住み馴れし五城樓下を辭して兩親の膝下に歸つた。その以後のことに就いては僕は記すこ

とを欲せない。

高山樗牛をして驚嘆せしめし鬼才雷夢君は大に伸ぶべくして伸ぶることをえなかつた。是れ誰の罪であるか。家庭にもその責任があつたであらうが、偏狹なる基督教の信仰にも幾分の責任があらふ。佛耶兩教を超越して宇宙の大生命が動く。彌陀の慈光のうちにも、神の愛のうちにも同一なる生命が輝くではないか。迫害と衝突となくして兩者に同情してしかも兩者を包容する信仰が不可能では無い。入信の後十四年、僕が此信念を齎して歸朝せし時は島地君の健康も信仰も之に共鳴するには餘りに薄弱であつた。世には島地君と同一の境遇にある多くの青年があるに違ひない。僕等の進歩的基督教は大なる慰藉と光明とを此等の人々に與へ得るを疑はない。

僕は最近數年間に於て數回島地君と會談した。思想も健康も順潮に向ひつゝありと觀察してゐた。この春小山東助君が代議士立候補を宣じたる



水やればまたよみかへる花草の小さき命うらやまれつゝ  
若葉しげり紅花はえて初夏は若きわれ等の歌によき時  
實になりし庭の藤棚朝よりて海見る人に秋の風吹ふく  
網ほせる磯の小舟によりそひてひるの海見る秋晴の日や  
月草の朝さゝやさし歌ひとつまひるてる日にうつら忘れぬ  
秋の日や紫苑白さく冠り草蝶の御國の園美しき  
花草によき名さまく負せてしいにしへ人は歌の世の人  
清見渴夢の月さす松原に千鳥の聲を一夜きかまし  
よるこびは一本立てる白百合の花にそよける風なりしかな  
大空の星のことく歌ありて海うつくしや春の夜の月  
若うして春に笑む子の幸しらば波の小琴よたゞ高う鳴れ  
信濃路や淺間高原露さむみ八月さけり秋はぎの花  
天津姫玉壺もて來よきさらぎや春あたゝかき湘南の風  
葉櫻に雨の音よき前裁や蛙の歌のほしきこの宵  
葉櫻に白藤清きこの頃をなほたれこめて歌もなき我  
白玉の冠巍々たる妙高やますらを君の友によき山  
雪ふかき北の御國もあたゝかき光に笑めば住みよからまし  
しとくと静けき雨の音さゝて百合の葉洗ふ花そのゝひる  
竹そへて立たせやりつる水仙の黄金の群に春の雨ふる  
さく花にせめてゑまひは學びてんまされはつべき我世ならねど



# 夕彩雲

故島地雷夢

吹くとなき風の行衛もかつ見えて夕山櫻ゆるくちるなり  
 愛も説かず身をも憂も深くいはずたゞなつかしき君にやはあらぬ  
 天にうけし榮<sup>はえ</sup>よ生命<sup>いのち</sup>よ一日だに笑まて過ぎなば花にはづべき  
 月の宮のこの姫宮のやさしきが天<sup>あめ</sup>降りて化<sup>ま</sup>りし白萩の花  
 とふ人のありもあらずも我ねぶる暮には植えよ香りよき花  
 紅葉にはまだ早けれど京といへば高尾とがの尾秋うつくしき  
 病める身もそゞろ興ある初秋や桔梗白萩露多き朝  
 ロセツチの繪をし見居れば此世はもさゆりそうびのみちみてる國  
 光さす夕彩雲<sup>ゆふいろぐも</sup>のかなたにぞ星を冠の君もあるべし  
 天そゝる杉の太木にたくへては吾と吾身をほこりてし夢  
 浪の音に詩の魂ゆらゝゆらめきて樂<sup>が</sup>あるかなやあけぼのゝ海  
 ほとゝみや波の興じや月の夜やかくてもあれな千とせ百とせ  
 歌戀ひて人の世戀ひて藻の花の流れよるらん我にいそべに  
 浪さよき州濱つらゝ松たちて播磨はまこと繪にも似し國

なる市民子弟間に淫風のバチルスを散亂したり。某市に於ては、十一月一日より基督教の協同傳道ありしに係らず、何等此種の計劃に對して警告する所あらざりし如きは更に遺憾なりとす。協同傳道も可なれど、目前の活問題を等閑に附して徒らに道を説くも市民と何等の交渉なきを如何。官私共に此大典を祭禮視して其嚴肅なる意義を發揮するに努めざるの觀あるとき之に對する吾人の責任の重大なるを感じざるべからず。

### ■駒込基督會の新會堂

富水德磨氏が東京本郷駒込に於て其獨立自給傳道を開始されたるは今より七年前のとなりしが、氏の熱心と其敬虔に充てる生活は著々として事業上に現はれ、遂に今回地を相して會堂を新築するに至り、十月卅一日其獻堂式を舉行せり。氏が獨立傳道に着手せるや、基督永存の信仰を特に鼓吹せんと努め、且教會と稱するものゝ弊害多きを以て單に基督會と稱するものなりといふ。此教會觀は吾人も同感する所なり。而して基督會は目下約五十人の會員を有するのみなるに、能く二千圓餘の建築費を負擔したりといふ、同會の健全なる發達は吾人が衷心より祈願に堪へざる所なり。

### ■キャンベル國教會に入る

嘗て新神學を唱ひて英國宗教界に問題を起し、自由基督教界の錚々たる雄辯家たる同氏は、今度英國教會に復歸し、過般シテテンブルにおける最終の説教を試みたりといふ。氏が轉會の理由は未だ詳細知るべからざるも、近年氏は痛く其健康を害したりといへば、老年比較的容易なる國教會の教職に就きしものならんかと察せらる。尙氏はパーミングハム大寺院に屬する一教職に就任すべしといふ。米國に於けるミ

ルス氏の轉會と共に近來の珍しき一現象なりといふべし。

■カアペンター博士 ハーバート大學在學中の今岡文學士の近信に依れば、英國オクスフォード、マンチエスター、カレッツデ總長なる同博士は、先般來ローレンス、インスチチュートに招聘され、渡米、劍橋にて講演中なりといふ。

■マコレー氏 歸米中なりし宣教師マコレー氏は來年正月五日頃再び來朝さるゝ筈、渡米中の鈴木文治氏も同伴して歸朝さるべしといふ。

### ■統一基督教會

毎日曜午前十時より内ヶ崎牧師三並良氏交代説教され、午前九時よりは三並氏の聖書研究ある筈。去る十五日の通俗講演會には島國文明の特色と題して内ヶ崎氏、太陽の運動について理學博士一戸直藏氏の有益にして興味に富める講演あり、來會者約百數十名ありき。尙同教會にては本月廿五日午後五時よりクリスマス祝會を行ふ由。

### ■自由基督教會

神田錦町女子音樂學校内なる同教會においては、午前十時よりの禮拜説教の外九時より内ヶ崎氏(舊約)相原氏(新約)の聖書講義を開き、又同時刻より中學生程度の日曜學校も開催し、日曜夜は會員宅を廻りて修養研究會を開き居れり。



# 基督教々育家の叙勲

御大典に際し民間の功勞者に對

し位記勲章を賜はりしが、麻布中學校長江原素六氏は勲三等に、同志社々長原田助立教大學長元田作之進明治學院總理井深梶之助の三氏は勲五等に元女子學院長矢島梶子女史は勲六等に叙せられたり。教界の教育家が多年遊壇にありて幾多の壓迫をうけつゝも、一方國家のため功獻したること小ならざるは蓋掩ふべからざる事實あり。今や諸氏の勞は公認さる吾人は諸氏のため又教界のため祝せざるを得ず。

## 留岡山室二氏の賞表

家庭學校長留岡幸助救世軍大佐

山室軍平兩氏は今回多年社會事業に盡力せる功績顯著なりとして藍綬褒章を下賜されたり。兩氏が多年獻身的に計營されたる事業は漸く天下の公認する所となり、今此榮譽に接す、吾人は兩氏の

ため之を祝し其事業の發達を祈る。

## 藝娼妓の行列

此曠古の大典は極めて嚴肅なる意義を有

するものなるが故國民は之が奉祝の間にも謹慎の意を失ふべからざるは識者の夙に唱導したる所に於て、學者宗教家名士等に依りて成れる大正會は屢々演說會を開きて各都における藝妓行列の如きは極力之を排斥すべきとを鼓吹せる結果、無教育なる市井の熊公八公すらも能く其意を理解して之に賛成するものありし程なりしに、斯種の清廉なる大聲は未だ俗吏の耳に達せざるか、帝都の中央に於て藝妓の行列は白日晴天の下に行はれ、其爲負傷者死者等を出すに至れるは、吾人が慨嘆に堪へざる所なり。之が豫戒運動を見たる帝都已に然り、何等宗教家の活動を見ざる地方の少都會において彼等醜業婦は白晝公々然として市街を橫行し、盛に清淨



|                           |         |
|---------------------------|---------|
| 實行的基督教(文明評論).....         | スタージ    |
| 靈肉一如の生活(新人).....          | 海老名 正   |
| 終始一貫(大阪講壇).....           | 宮川 輝    |
| 向上の失敗より来る慰安(同上).....      | 同       |
| 静養中に得たる愛の賜(同上).....       | 廣阿 浅子   |
| 尙乳を求むる我國信徒(同上).....       | 三谷 民子   |
| 説教の準備(同上).....            | 宮川 輝    |
| 我が信仰の親族(聖書之研究).....       | 内村 鑑三   |
| 必ず聽かるゝ祈禱(同上).....         | 同       |
| 根本問題(同上).....             | 同       |
| * 本然生活(洛陽堂一、〇〇).....      | 加藤 一夫   |
| * 和漢名士參禪集(丙午出版社一、〇〇)..... | 忽滑谷 快天  |
| <b>評論 時事問題</b>            |         |
| 御大典と國民的理想の實現(六合雜誌).....   | 内ヶ崎 作三郎 |
| 近時の婦人問題(同上).....          | 一條 忠衛   |
| 國民的煩悶時代(同上).....          | 嶺岸 忠之助  |
| 協同傳道の評價如何(同上).....        | 壺 報     |
| 御大典と國民の精神的自覺(新人).....     | 吉野 作造   |
| 基督と其使命を讀む(同上).....        | 津荷 環山   |
| 建設的基督論(同上).....           | 久布白直勝   |
| 耶穌は神か人か(同上).....          | 諸 家     |
| 神子の自覺と人類の希望(同上).....      | 渡瀬 常吉   |
| 新大學令案に對する批評の批評(太陽).....   | 浮田 和民   |

|                             |        |
|-----------------------------|--------|
| 新大學令案を論ず(中央公論).....         | 吉野 作造  |
| 學制改革と教育上の根本問題(開拓者).....     | 向 軍 治  |
| 福音か福音か(同上).....             | 岡田 哲藏  |
| 現代教育の新精神(新日本).....          | 高田 早苗  |
| 貞潔の道德的原理(丁酉倫理).....         | 宮田 修   |
| 松崎博士の著作的不道德(同上).....        | 布川 靜淵  |
| 歸一協會の宣言を讀みて(東亞之光).....      | 法貴 慶次郎 |
| 大學令案を評す(早稻田講演).....         | 中島 半次郎 |
| * 婦人週報(同社週刊〇、〇四).....       | 小橋三四子  |
| * 女王(月刊〇、一〇).....           | 石田みつじ  |
| <b>雜</b>                    |        |
| 我等の求むる女性(六合雜誌).....         | 井口 孝親  |
| シベリヤの女囚(同上).....            | 吉田 絃二郎 |
| Lonely Dolls(同上).....       | 岡田 哲藏  |
| 彼と彼女と彼の女達(同上).....          | 平井 好一  |
| バプテスマのヨハネ(新人).....          | 森脇 白夜  |
| 救はるゝ少數者(聖書の研究).....         | 畔上 賢造  |
| 子たる者の自由(同上).....            | 藤井 武   |
| 都會生活と不良少年少女(人性).....        | 小鹽 高恒  |
| * 夕ばえ(警醒社〇、七〇).....         | 野口 精子  |
| * 眞夏の夜の夢(早稻田大學出版部一、三五)..... | 坪内 逍遙  |

# 最近教學評論界一覽

(基督教を中心として見たる)  
\*印は單行本なり

## 研究 解説 註釋

|                             |             |
|-----------------------------|-------------|
| 日本と西洋との根本的差違(科學と文藝).....    | 二 木 謙 三     |
| 物質的と精神的と(同 上).....          | 田 中 王 堂     |
| 新約聖書研究の現狀(文明評論).....        | 杉 浦 貞 二 郎   |
| 耶穌の神觀(同 上).....             | 柏 井 園       |
| 傳道の書に就て(聖書之研究).....         | 内 村 鑑 三     |
| 默示錄解説(同 上).....             | ミ リ ガ ン     |
| 哥林多前書講義(基督教世界).....         | 武 本 喜 代 藏   |
| 思想界に對する我黨の使命(同 上).....      | 宮 川 經 輝     |
| 史的イエスに就て(同 上).....          | 山 口 金 作     |
| 祭祀の起源(東亞の光).....            | 山 本 信 哉     |
| 日本民族信仰の研究(無盡燈).....         | 佐 々 木 月 樵   |
| 基督教か耶穌教か(大阪講壇).....         | 青 木 律 彦     |
| 米國に於ける少年青年の信仰養成(同 上).....   | 島 中 博       |
| パウロ、アウグステン及びルーテル(福音新報)..... | 柏 井 園       |
| 宗教に於ける權威の中心(同 上).....       | 社 説         |
| 性の倫理(早稻田講演).....            | 内 ヶ 崎 作 三 郎 |
| 生活の進展(六合雜誌).....            | 中 村 長 之 助   |
| 詩と宗教の中心(同 上).....           | 佐 藤 清       |

|                                     |           |
|-------------------------------------|-----------|
| 信仰と疑惑とを越えて(同 上).....                | 内 藤 濯     |
| 迷信と精神病(人性).....                     | 森 田 正 馬   |
| 近代個人主義の諸相(早稻田文學).....               | 大 杉 榮     |
| 女子獨立論(女王).....                      | 新 渡 戸 稻 造 |
| 婦人の威力(同 上).....                     | 桑 木 嚴 翼   |
| 男女交際と戀愛道德(同 上).....                 | 浮 田 和 民   |
| * 活ける宗教(丙午出版社一、〇〇).....             | 境 野 黄 洋   |
| * 基督教十講(響醒社〇、八〇).....               | 海 老 名 彈 正 |
| * 最近の自然科學(岩波書店一、二〇).....            | 田 邊 元     |
| * ゼエレン、キエルケゴオル(内田老鶴圃二、五〇).....      | 和 辻 哲 郎   |
| * アッシジの聖フランチェスコ(サバチエ原著洛陽堂一、八〇)..... | 中 山 昌 樹   |
| * 基督教十講(北文館一、〇〇).....               | 宮 川 經 輝   |
| <b>感想 修養</b>                        |           |
| 時代感想(六合雜誌).....                     | 野 村 隼 眸   |
| 宗教心の徑路(同 上).....                    | 冲 野 岩 三 郎 |
| 失はれたる愛の追憶(同 上).....                 | 原 口 竹 次 郎 |
| 自我意識と宗教(基督教世界).....                 | 三 浦 關 造   |
| 鏡心燈語(太陽).....                       | 與 謝 野 晶 子 |
| 日常生活と禪(禪).....                      | 境 野 黄 洋   |
| 生の宗教(開拓者).....                      | 高 木 壬 太 郎 |
| 新時代の教育と精神(世界の日本).....               | 成 瀬 仁 藏   |
| 盲目の世界(科學と文藝).....                   | 野 村 隼 眸   |

|                 |       |       |
|-----------------|-------|-------|
| □ 誤解に對する心       | ..... | 沖野岩三郎 |
| □ 夕ぐれに          | ..... | 田中葦城  |
| □ 太陽主義の提唱       | ..... | 永井柳太郎 |
| □ 和歌十首          | ..... | 伊藤寥々  |
| □ 蜘蛛の巢の家(ギッシング) | ..... | 鈴木芳松  |
| □ 愛を抱いて         | ..... | 平井好一  |
| □ 感想            | ..... | 小山鼎浦  |
| □ 國力發展と基督教      | ..... | 吉野作造  |
| □ 社會問題と基督教      | ..... | 木村惇   |
| □ 獨逸近代哲學と神祕主義   | ..... | 三並良   |
| □ 神祕古典獨逸神學      | ..... | 相原一郎介 |

## 本誌新年號豫告

- |                     |                         |                 |                |                   |              |                  |                   |                     |                |
|---------------------|-------------------------|-----------------|----------------|-------------------|--------------|------------------|-------------------|---------------------|----------------|
| □新宗教の曙光……………サンダーランド | □文明統一力としての宗教……………内ヶ崎作三郎 | □新體詩一篇……………土井晚翠 | □論文一篇……………野村隈畔 | □米國の農村生活……………高橋清吾 | □和歌……………野口精子 | □信仰よりも疑惑……………内藤濯 | □生活の二表現……………吉田絃二郎 | □倫理と宗教との合致……………一條忠衛 | □英詩一篇……………岡田哲藏 |
|---------------------|-------------------------|-----------------|----------------|-------------------|--------------|------------------|-------------------|---------------------|----------------|



を統一する爲めに、妻が法律行爲を爲すに就いて夫の許可が必要であるならば、道徳に就いても然うでなければならぬ。妻が道徳行爲を爲すに就いて一々夫の許可を受けねば家庭の道徳行爲を統一することが出来ないと言ふことになる。妻が單獨に爲した道徳行爲は夫が何時でも之れを取消すと云ふことになる。然らば夫は凡て妻よりも勝れた道徳家であり、妻の師表たる大人格者でなければならぬ。然るに夫は往々にして醜漢であり、妻は反つて賢女である場合がある。此の賢女が一々醜漢の命令を受けねば道徳的行爲でないと云ふならば至極滑稽ではないか。夫と偕に泥棒して迄も妻は尙ほその和合と平和を保つ爲めに無能力者になつて居なければならぬと言ふならば、既に道徳的觀念を失つたもので批評の限りでない。それで法律上の妻の無能力と云ふことは此の道徳上の場合と同じく、全く男尊女卑の遺習であつて、何の根據も無い制度である。それで獨逸の新民法、瑞西の新民法では正しく妻の無能力と云ふ制度を抹殺した。

これは男女新道徳の理想に一致して居るので、吾々の大に歡迎する所である。高等教育まで受けて螢雪の苦業を積んでやつと完全な能力者になれた令嬢が、人妻になつた因果からして急に無能力者に成り下つたとは豆大の涙が零れるではないか。若し左うであるならば、人妻になることは人格と魂とを抜き取られることであつて、夫に隸屬し夫に盲従し夫に征服され夫に蹂躪されることではあるまいか。然らば人妻は根つから有難くないものになる。結婚は馬鹿／＼しいものになる。併し結婚は人生の大事である。何うしても實現しなければならぬ。自由なる相對的の愛に生き

て行かなければならぬ。して見れば人妻になつても夫と平等に有能者に遇して頂かねばならぬ必要がある。無能力者の一群に棄てゝ置かれてはもう我慢は出来まい。今日の女子はもう男子に保護されて居る必要はない。完全な人格者たる彼の女は何の必要あつて男子に保護されて居るか。自覺した女子は男子の保護を離脱して彼と對等の地位に立つて、戀愛もし結婚もし子供も生んで同穴もしろ。夫に經濟的に養はれることを尙ほ保護と心得る舊い奴隸的思想を去つて、夫の經濟的行爲は男子の營養攝取であつて女子の哺乳と家事に配する生殖分業であることを知らねばならぬ。既に女子は男子の腕力による物理的虐待から解放された。今度は知識による精神的保護から解放されなければならない。

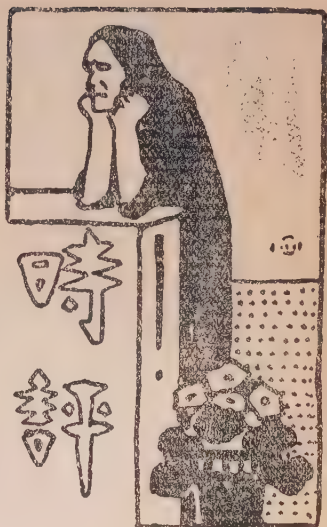
(一條生)

## 隨感一束

### 政治季節來る

曠古の御大典は無事に終を告げた。國民は何時までもお祭り騒ぎに酔ふて居るべきではない。世界を掩ふ戰爭の妖雲は仲々急に晴れそうもない。眞に舉國一致健實な思想を開拓して、世界における吾人の使命を果さなければならぬ。

毎年々末から春へかけて、所謂政治季節に入れば吾等は何時も政治家？といふ人々の不快なる言動を見せられる。新聞に演説に各々反對黨を敵視して、宛も不倶戴天の敵に出合つた様である。國民は今やかうしたデマゴグの煽動には飽いて來た。國民の目から見れば、今日の處甲黨乙黨皆非である皆是である。政黨に招牌



## 妻の無能力の問題

法律上妻は無能力者である。民法總則の第二節に於て、此の妻の無能力に關して數條の法文が掲げられて居る。男女の一大不平等は實に此の妻の無能力と云ふ制度である。成年の女子で獨身者は男子と同じく平等であるが、人妻になると急轉直下して無能力者に成る。法律の心では妻は夫の許可を得なければ、規定の法律行爲を爲し得ないと云ふ意味を無能力者と云つたのである。金錢の貸借とか不動産又は重要動産の讓與とか贈與又は遺贈を受けるとか云ふ場合には、妻は夫の許可を得なければならぬ。其れを獨斷する能力を法律は妻に與へて居ない。商業を營む時は夫の許可の外に登記をしなければ第三者に對抗することが出来ない。之れを妻の無能力と謂ふのである。其の沿革は男子の絶對地位と女子

の低級地位から由來して居る。腕力と武器を持つて居る男子は絶大の權力を握つてゐて、女子は非人格者として牛馬及び物品と一緒に取扱はれて居たことに原因する。妻の財産は一切夫の物として後見人たる夫は之れを監視して居るから、持參金と雖も自由に處分は出来なかつた。夫は之れを自分の爲めに用ゐて居た。然るに人智の次第に進むに従つて、女子は弱者で知識の足りない者であるから之れを保護して遣らなければならぬと云ふ思想に變つた。曩きの後見人は是に於て保護者に變つた。妻の利益の爲めに妻を保護することに成つた。然るに女子の知識が次第に高まるに従つて妻以外の成年女子は知識に於ては獨立者として優遇することになった。こゝで女子は始めて無能力制度から脱して完全な能力者に成れた。ところが妻と云ふ女子だけは依然として舊慣の下に無能力者として置かれた、けれども知識に於て一度能力者の地位に列した女子が、人妻になつた故を以つて直ちに無能力者であるとか云ふことは如何なる理論に本づくか、法理學者は一人として之れを説明し得ない事情に陥つた。そこで妻を無能力者とするのは弱者を保護すると云ふ趣旨では無くて、一家庭の法律行爲の統一を計り夫婦の和合を保つ爲めであると云ふ苦しい説明を牽強附會した。けれども夫の許可を得ないで爲した行爲を、妻は自己の利益の爲めに取消すことの出来るのは何うしたものか。法律の趣旨に飽く迄も無能力者の保護ではないか。若し夫婦の和合を保つためならば、夫婦の和合を傷ける獨斷の行爲を夫妻の兩者に禁じたなら能いでは無いか。何も妻のみを未成年者禁治産と同列させて無能力者扱いに一束して置く必要もあるまい、又家庭の法律行爲

# 新刊紹介

## ■最近の自然科学

田邊 元 著  
岩波書店發行

哲學叢書の第二編である。著者は帝大哲學科出身にして目下東北理科大学で科學概論を講じて居る。數ある我哲學研究者中、自然科学の哲學的研究に従事して居るのは恐らく氏を以て随一とせん。抑十九世紀來自然科学の勃興につれ、一は又獨逸のシェリングヘーゲル流の汎理哲學の反動として、科學は哲學を以て單なる臆斷信仰の説となし之を閑却するの觀があつた。然れども科學者自身も其結果として、自然研究の基礎たる各自の經驗の可能、及び其集成歸納して得たる知識の價值等に關しては、全く無反省とならざるを得なかつた。斯の如きは人の知的要求の永く堪ふ所でない、近年科學者中より自己專攻の科學的目的、根據、及其成果の價值に對し批判的研究を試みるものが輩出するに至つたのは寧ろ當然の結果で、カントが批判哲學の意義も一は茲に存するのである。本書は此意味において書かれたもので「最近の自然科学」と題す

れども單に自然科学最近の結果を列記提供するといふのでなく、科學研究が用ふる方法論を立脚地として、此見地から最近科學が舊時の研究に對する特色を考察し、新學說の基礎たる概念及原理の意味を理解せんと努めて居る。現代科學の進歩は其應用の方面において何人も驚嘆して居るのであるが、其自然認識の根本問題に觸れて從來の自然觀を根柢より一變せんとする、所謂科學の革命的思想については、餘り廣く知つて居らない。本書は此意味において最も適切な要求に應ずる唯一の好著述である。其内容を示せば、緒論において本書の目的を概説し、第一章自然科学の特色、第二章近世の機械的自然觀、第三章電氣物質觀、第四章新力學、第五章不連續的自然觀、第六章現代自然觀の哲學的批判、第七章自然科学的認識の意義等である。第三章から第五章までは最近自然科学の理論的研究の綱領にして、一般門外漢には深遠難解な理論を窺ふに頗る便利なものである。第一章及最後の二章は著者獨特の研究にして、科學研究者に對し、大なる示唆を與へる。思想家宗教家のみならず確實健全な世界觀人生觀を築かんとする人には喜んで一讀を薦め得る良著である。

る。(四六判三三四頁價一・二〇)

## ■野心論

文學博士澤柳政太郎著  
實業之日本社發行

澤柳政太郎氏は決してたゞはぬ人である。官海に入れば波瀾の中心となり、民間に下れば著述を試みて社會人心を指導するを怠らない。官吏にして吏臬を帶びざる人として目せられたる同氏が大に民臬を發揮すること喜ぶべきことである。野心論は國家と個人とに善良なる意味に於ける野心の必要なるを痛論したるものである。第一篇には國家と野心を論じ、獨逸、露西亞、英國、北米合衆國の野心を詳論し、第二篇には日本の大志を述べた。著者は新日本には四大標的を有した、即ち條約改正、朝鮮問題の解決、立憲政治の實施、西洋文明の移植である。然るに現在日本には野心がない。故に青年の元氣消耗して不健全なる思想が流行する、されば將來の日本は野心を有せざるをえない。支那問題の解決、大亞細亞主義の實行、特殊文明の建設が三大標的でなければならぬといふ主張である。如何にも尤な議論である。しかし著者は三大標的を提示したる迄である。しかし大なる價值を有する提供である。吾人は著者が他日卷を

的の綱領はありても政治上の主義主張といふものが眞の意味において果してあるだらうか、殊に世界における國家の進運といふことを立脚地とする様な遠大な志のある政治家は何處に居るだらう。一片の腐肉を争ふ様な政權の争奪ほど、國家の進運を害するものはない。勿論我々は我等の前に幾多の政治問題が横はるを知る。大浦問題や乃木問題、對外交問題等種々な問題があらう。併し如何なる問題と雖も、彼等が政權争奪の道具とされるには、餘りに聖である。内閣乗取の謀策も平和の日にはよからうか、今日の如く國民が眞に舉國一致して奮勵すべき秋には、全然無用有害の舉である。

### 軍國主義の勃興を警めよ

此度の大戦争が永びくにつれて、世界各國民の上に及ぼす精神上の影響も大である。殊に獨逸が今尙其威武を擅にして居る際、彼の取り來つた所謂軍國主義は、其感化力を平和好きの米國にすら及して居るといふのだ。殊に我國は從來とても、其學問や陸軍の師として獨逸を見て來た上から、皮相的獨逸主義が可なりあつたのである。殊に最近に至つては、軍國主義から征服主義にまで發展せんとして居る傾向が、大分見えて來た。之は軍人の頭に源を發し、教育家、青年學生の上にまで及んで居る。彼等の意氣は旺であが、一體何を以て征服せんとするのであるか。又如何なる權利が其根柢に存するか。如何に軍國主義の獨逸でも、中世紀の野蠻主義はとらないのである。彼等は彼等の文明の價值を誇つて居る。彼等には實質的なクルツルがあるから、彼等の軍國主義にはまだ割引して見るべき點がある。然るに過去の特殊な境遇か

ら生まれた歴史上の種々な産物を外にして、内容のない空つぽな民族が、吾人は世界を征服せんとといふ。何たる戯言であるか。之れ實に誇大妄想でなくて何である。國家を損ひ危地に導く輩は之れである。

斯ういふと東洋思想印度哲學の深遠を知らぬなどいふ人があるが、如何に深遠でも骨董的に之を見て居るのでは駄目だ。其東洋思想印度哲學の研究や、はた實行すらも何處に見らるべきであらう。未だ世界征服などいふ人それた考を起す時ではない。征服主義などいふ旗を揚げては、此膨脹して國內に有餘る國民は、遂に世界の何處からも體よく排斥されるであらう。(三郎生)



歌人又は和歌に興味ある人のために編まれた美しい日記帳である。巻頭には現代歌人の手蹟があり、巻末には明治大正の歌集年表が附けてある。毎日の欄に古今の秀歌が入れてあるは云ふ迄もない。(天金・菊半切・價〇・四〇)

## ■基督教十講

海老名 正著  
警醒社發行

嘗て新人誌上に連載して好評を博したる基督教十講の新装して出たものである。別に宮川牧師の同名の一書も出たが之れは基督教發達史であつて、預言者から筆を記し、各時代に於ける基督教の特色と、其中に一貫する眞理を述べたる點は同氏の舊著基督教の根本義に似て居るが、本書においては、更に現代における基督教の問題を述べて居る、即近代哲學、近代文藝、近代政治との關係はそれであつて、之等は芦田慶治小山東助吉野作造氏等が分擔して書いて居る。最後に日本固有思想と基督教の關係をのべ、附録としてコサンド氏の近代進化説と基督教がのつて居る。基督教の歴史的發展と現代的意義を窺ふには好個の著述である。(四六版三二三頁定價〇・八〇)

## ■生命中心の哲學

三並良 著  
警醒社發行

「戦後に於て勃興すべきものは懸命眞劍の精神的生活である、……宇宙の根本より來る精神生活を根據としある思想の大潮流日更に更に大運動を始むるに相違ない」と信ずる、それは近代思潮叢書第九篇として發行せられたる本書に於ける著者の序文の一節である。都合二十三篇の哲學的、神學的、史傳的、論文を含む。三並氏は數年前より神學者のみならず哲學者の立脚地をとられるに至りたるが本書は最もよく此傾向を示してゐる。

最初の三篇「生命中心の哲學」「信仰の動搖と固定」「物力と意力」は最も暗示に富んでゐる。單に生くるのではない、景高善を目的として生くるのである、絶對的精神に基ける精神生活の獨立生存、を自覺するにありといふのは第一篇の主張、信仰の動搖の中にも人格は固定してゆくといふのは第二篇の主張物力に對して意力を高調したるは第三篇の主張である。いづれも現代の思想界に一道の光明を投ずる説である。本源的生命は意識によりて神を知るといふ思想である。「宗教は新しき創造也」も思想上の好刺戟である。「大我の生き

んと欲する意志と小我の生きんと欲する意志とが相觸るれば小我の力は益々偉大となる。」「人間は神によりて常に新しく創造せらるゝのである」。宗教的生活の根本を捉へたる言である。その他神學に關する進歩的研究いづれも有益である。又シェライエルマツヘルは八十ページの長論文である。慥かに本書は思想家としての著者を代表する好著である。吾人は之を讀者諸君に推薦する。三並氏四月以來久しく病みしが今や殆んど本復せられたり。吾人は更に思想界に對する同氏の貢獻を期待するものである。(價〇・八〇)

改めて三大標的を詳論せられんことを希望する。第三篇の個人と野心は中々痛快である。著者は權勢、名譽、黄金を標的とする野心を一々批評したる所頗る壯快を感じしむ。最後に眞正の標的として決意奮闘向上努力、力行不惑を力説する所覺えず案を叩かしむるものがある。殊に永久的事業を標的として人世の濟度を以て第一の事業と推す處、流石に著者の卓抜の見解を窺ふことが出来る。著者は「現代の宗教界が腐敗し、人材が缺乏してゐる丈それ丈有爲の青年が身を投じて働く餘地が廣いのである」といふは評者も全然同感である。要するに青年激勵の具として近來の快著である。既に四版に達したる怪しむに足らないのである。(一、二〇)

## ●生ける宗教

境野 黄洋 著  
丙午出版社發行

本書は著者が頃日限りなき渴仰、無量の崇敬を拂ふ我國古來の佛教界の偉人の内的生活に即して其人格に活きた宗教を語らんとしたものである。偉人とは聖德太子以下、傳教、弘法、法然、日蓮、道元、親鸞、蓮如、白隱等各宗の名僧知識に亘つて居る。著書親しく古書記傳に參通し、妄誕を去り虚喝の分子を

除き赤裸々露堂々たる人格に親炙せんとす。而して著者は彼等の宗風神學を超越して、其人格の根柢を一貫せる共通的價值を信ずるものにして、説いて偏狹ならざるは、一般讀者の喜ぶ所也。(四六版三三六頁價一・〇〇)

## ●和漢名士參禪集

忽滑谷 快天 著  
丙午出版社發行

和漢名士の參禪上の實驗談二百則を選び之に著者の評釋を加へたり。實驗的禪風を研究せんとする人にとり好個の參考書なり。

(四六版二八八頁價一・〇〇)

## ●新時代之問題

新時代學會發行

「新時代學會は不斷に進轉して已まざる現代の諸現象諸問題を東西の別なく深く研究批判し、以て新時代の建設に資せんことを目的とする」會である。毎月一回重要な問題に對する専門家の意見をのする。第一卷には煙山專太郎氏の日露同盟論中々面白く過去現在未來の日本と露西亞との關係が詳述されてある。煙山君は日英同盟も繼續すると共に日露同盟を斷行せよといふのである。中島半次郎氏の學制改革論も學制改革を歴史的に取り扱へ、文部省案及び菊地案を論じ、又歐米の學

制を參照し、最後に論者の意見を述べてある。外にエ・グレー氏の「獨逸の抱負遂に實現するか」といふ譯文がある。四六版一百九十ページ。(會費一ヶ月八十錢、牛込區西五軒町三十五、その會)

## ●大正五年 吾が家の歴史

警醒社發行

吾が家の歴史は自分も少年時代から久しく喜んで用ゐた日記であつたが、從來のは社會の出來事とか、往來とか、得たる思想など、小さい欄に一口分が區別されてあつて、後では小ウルサク感じられたので、近年は廢めて使はない事になつた。所が來年度の「吾家の日記」は此等の點が改正されて全然面目を一新した觀がある。一頁書通して出來て、信書往來の小欄が上にあり、欄外の註や日訓も其日にふさわしく出來て居る。一月初の引用文に三太郎日記や、オイケンの宗教哲學などは新しい。毎月の初に有田四郎畫伯の手になれる美麗な挿畫がある。兎に角趣味と教養とを兼ねた日記になつた觀がなる。(四六版定價五〇)

## ●短歌日記

大正五年 東雲堂發行

大正四年

六合雜誌總目錄下

(自第四百十四號  
至第四百十九號)

■基督の人格

栗原 基 譯

■日本詩歌論

野口 米次郎著

■本然生活

加藤 一 夫

■新理想主義の教育

中桐荒川兩氏譯

■ミケランゼロ

木村 莊 八 譯

■ゼエレン、キエルケゴオル

和辻哲郎 著

■基督教十講

宮川 經 輝 著

■現代の日本畫

松本 亦 太 郎 著

■眞夏の夜の夢

坪内 逍 遙 著

■ヴェルレーヌ詩鈔

右は新年號にて批評紹介致します。

編輯の 後

□御大典も了つて本年も末であります。編者も多忙の中に本號を編しました。

□新年號はクリスマスまでには是非出したいつもりで、同人一同骨折つて居ります。内容は廣告の通であります。内容豊富なため頁數も餘程増加しますから、特別號として來るとと思ひます。

□例に依て同人の消息を申し上げます。

□内ヶ崎氏は今月初め家用のため一寸歸省される筈です、

□三並氏は昨今殆ど健康に歸られ、統一教會で時々講演もされます。新年號には豫告のある通り久振りで執筆される筈です。

□吉田氏は過般一寸風邪で引籠られたが、昨今はまた早大英文科の講義其他に多忙を極めて居られます。

□岡田氏は十一月の初め令夫人御同伴で甲州御嶽の勝景を探られ、一泊して歸られました。序に甲府の青年會で講演をされたそうです。

□小山氏は先日の御大典に代議士として列席の光榮を荷はれたのでありますが、京都で又少しく健康を損じ目下大學病院で療養中の由。全快の速ならむとを祈る。

□本誌一切毎月十日東京市外巢鴨一四七〇相原方編輯事務所宛御送を乞ふ。



# 評論

|                          |                 |    |      |   |
|--------------------------|-----------------|----|------|---|
| 進歩的基督教の主張                | 内ヶ崎作三郎          | 七  | 説    | 頁 |
| 自由なる宗教生活                 | 安部 磯雄           | 七  | 八三五  |   |
| 自我の問題に就いて                | 野村 限畔           | 七  | 八五九  |   |
| 如何なる意義にて余はクリスチャンなりや岸本能武太 |                 | 七  | 八六八  |   |
| 神祕的知識                    | シカゴ大學イー・エス・エームス | 七  | 八八四  |   |
| 基督教の神機                   | 内ヶ崎作三郎          | 七  | 九〇七  |   |
| 徹底せる宗教心                  | 安部 磯雄           | 八  | 九三八  |   |
| ロマン・ロラン斷片                | 内 藤 濯           | 八  | 九七六  |   |
| 近代人の宗教とトルストイ             | 石田 三治           | 八  | 九八二  |   |
| 型と思想                     | 木村 久一           | 八  | 九八五  |   |
| ジエームスの宗教觀                | 鈴木 龍司           | 八  | 九八四  |   |
| 運命と恩寵                    | 内ヶ崎作三郎          | 八  | 一〇一六 |   |
| 米國研究を旺んにせよ               | 高橋 清吾           | 八  | 一〇三七 |   |
| 教會と音楽                    | M K 生           | 八  | 一〇四七 |   |
| 創造の藝術エドアルド・カペンター         | 佐藤 清譯           | 九  | 一〇六一 |   |
| 思惟の生産的流動性                | 野村 限畔           | 九  | 一一一〇 |   |
| 近代文學に於ける女性               | 石田 三治           | 九  | 一一二一 |   |
| 女子の運命                    | 木村 久一           | 九  | 一一六二 |   |
| 如何にして生きんか                | 帆足理一郎           | 九  | 一二七三 |   |
| 國家主義と國際主義の統一             | 内ヶ崎作三郎          | 九  | 一一八一 |   |
| 統一主義の主張                  | サンダーランド博士       | 一〇 | 一二四八 |   |
| 藝術の權威                    | 吉田 絃二郎          | 一〇 | 一二六六 |   |

|                   |        |    |      |  |
|-------------------|--------|----|------|--|
| 宗教は名詞か副詞か         | 岸本能武太  | 一〇 | 一二七五 |  |
| 創造の藝術：エドアルド・カペンター | 佐藤清譯   | 一〇 | 一二八六 |  |
| 宗教の二面             | 今岡信一良  | 一〇 | 一二九五 |  |
| フオサイスの宗教的藝術觀      | 佐藤 繁彦  | 一〇 | 一三〇〇 |  |
| 現代獨逸に於ける政治思潮の批判   | 松枝 德麿  | 一〇 | 一三〇八 |  |
| 結婚道德の新興型          | 一條 忠衛  | 一〇 | 一三四九 |  |
| 貞操に對する我が信念        | 宮崎 光子  | 一〇 | 一三六三 |  |
| 貞操の意義と價值          | 内ヶ崎作三郎 | 一〇 | 一三六五 |  |
| 御大典と國民的理想の體現      | 内ヶ崎作三郎 | 一一 | 一三八六 |  |
| 信仰と疑惑とを越えて        | 内 藤 濯  | 一一 | 一三九四 |  |
| 生活の進展             | 中村長之助  | 一一 | 一四〇一 |  |
| 詩と宗教の中心           | 佐 藤 清  | 一一 | 一四一二 |  |
| 我等の求むる女性          | 井口 孝親  | 一一 | 一四三二 |  |
| シベリヤの女囚           | 吉田 絃二郎 | 一一 | 一四四一 |  |
| 近時の男女問題           | 一條 忠衛  | 一一 | 一四五七 |  |
| 没我的精神             | 安部 磯雄  | 一二 | 一五二二 |  |
| デモクラシーの眞意義(バトラ博士) | 高橋 清吾  | 一二 | 一五八一 |  |
| 大戦争と宗教思想          | 内ヶ崎作三郎 | 一二 | 一六二七 |  |
| 哲學を有せざる日本畫        | 工藤直太郎  | 一二 | 一六〇六 |  |

## 感想

|        |       |   |     |  |
|--------|-------|---|-----|--|
| 水道の水   | 岡田 哲藏 | 七 | 八六四 |  |
| 思想家の生活 | 鈴木 龍司 | 七 | 八七六 |  |
| 生死     | 三浦 關造 | 七 | 八八〇 |  |



就て(加藤弘之)等、

教界彙報

九月の哲學宗教評論

現代思潮

△印度哲學の戰爭觀(エス・エム・ミトラ)△婦人の見たる現代獨逸の内面(エヴァ・マツデン)

教界彙報

最近教學評論界一覽

反響欄(性格と思想との關係に就て)

嗚呼醫學博士樫田龜一郎君

批評の負債

反響(結婚と戀愛原田寛一)

教界彙報

最近教學評論界一覽

熱れたる實は

雜詠

白き光

夏の空

優しき雨の後姿を

人の子のわれ

旅の思出

永世の後エドワード・カア・ペンタア

富田碎花

九・一二七

九・一二七

## 短歌、詩

一〇・一三四八

一〇・一三四八

一一・一四八二

一一・一四八二

一一・一四八七

一一・一四八七

一一・一四九一

一一・一四九六

一一・一五一九

一一・一六〇〇

一一・一六〇八

一一・一六四四

一一・一六四六

九・一二七

九・一二七

九・一二七

九・一二七

九・一二七

九・一二七

九・一二七

九・一二七

九・一二七

九・一二七

海の匂ひ

戸山が原にて

畑みち

山吹の花

炎熱と現身

雲の色

おもかげ

誕生の日に

出雲路

美作國

時と處を異にすれど

若き井戸堀

おもかげ

我愛するは

渡部 甲子

九・一二七

九・一二七

九・一二七

九・一二七

九・一二七

九・一二七

九・一二七

九・一二七

内ヶ崎作三郎

小宅 銀二郎

伊藤 蓼々

田中 葦城

前田 夏村

内ヶ崎作三郎

ちくすゐ

田中 葦城

兵 働 竹 醉

手塚 麒一

田中 葦城

秋 葉 肇

故島 地雷夢

渡部 甲子

九・一二七

九・一二七

九・一二七

九・一二七

九・一二七

九・一二七

九・一二七

九・一二七

九・一二七

## 時 評

自由基督教會の設立に就いて(内ヶ崎生)

△政界近來の快事(甲島生)△多數黨の德義(甲島生)△時事雜觀十種(追分生)△近事五題(星島二郎)△教會合同問題側面觀(菊川生)

△神聖なる單純(巢丘子)△御大典と基督教徒の代表者(一記者)

△送らるゝ人々と迎らるゝ人(内ヶ崎生)△岡山孤兒院幻燈際(星島生)

△學年短縮縮案を評す(菊川生)△時感一束(巢丘子)△高田文相に望む(S・U)

九・一二七

九・一二七

九・一二七

生命の家ダンテ・ガブリエル・ロセツテイ

幻影を追ふ心

蚊と哲人

井戸の水

犬

夏の自然と人生

△布哇の夏(安部磯雄)△マーブルグの夏(うちがさき生)△島の

夏(稻村生)△鹿野山(石田三治)△那智の瀧にて(加藤一夫)△郷

里に歸(りて(野村限畔)△木崎湖より(工藤直太郎)△卒業の(後

(松尾光武)△茶臼原の夏(院兒に代つて)

私生兒の心：我心の様々

復讐の心：我心の様々

椽先にて

蜚蟲

時代感想

宗教心の徑路

Lonely Dolls

健全なる新婦人の先驅者

失はれたる愛の追懷

薄倖の秀才島地雷夢

自分の問題と感想

色々な感想

聖フランチェスコを憶ふ

増野三良……………七・九一五

吉田絃二郎……………七・九二七

岡田哲藏……………八・九六五

ぼしゝま生……………八・一〇〇二

伊藤恵子……………八・一〇〇三

諸家……………八・一〇七三

沖野岩三郎……………九・一〇〇二

沖野岩三郎……………九・一〇〇二

沖野岩三郎……………九・一〇〇二

鈴木龍司……………一〇・一三二七

岡田哲藏……………一〇・一三三二

野村限畔……………一〇・一四二〇

沖野岩三郎……………一〇・一四二〇

岡田哲藏……………一〇・一四二〇

内ヶ崎作三郎……………一〇・一四九六

原口竹次郎……………一〇・一五〇〇

小山鼎浦……………一〇・一五三三

野村限畔……………一〇・一五五二

吉田絃次郎……………一〇・一五六四

中山昌樹……………一〇・一五七五

## 小説、戯曲

二高時代の島地雷夢君の追懷……………

内ヶ崎作三郎……………一〇・一六三三

宮参り……………

木村久一……………七・八九一

復活の日……………

菅野笠夫……………八・一〇二二

山毛櫟……………

鈴木芳松……………八・一〇五五

彼とかの女と彼の女達……………

平井好一……………一〇・一四六九

## 雜 錄

紐育より……………

高橋清吾……………七・八九〇

ストリンドベルクの悲劇『父』……………

太田眞一……………七・九一六

瑞西より……………

盧山生……………七・九二二

瑞西より(ウーシー)……………

盧山生……………八・一〇三一

ヨハネス・フツス五百年記念講演を聴く……………

八・一〇六六

古本の價……………

ぼしゝま生……………九・一二六

北米だより……………

鈴木生……………九・一九一

瑞西より(瑞西の歡樂郷)……………

盧山生……………九・一九七

應問欄……………

九・一二五

大戦亂中の精神的統一……………

海外思潮……………九・一二二

西南旅行記……………

内ヶ崎生……………九・一二三

パゼールに砲聲を聞きにゆく記……………

盧山生……………一〇・一三七

現代思潮……………

一〇・一三八

△オーガスタンの戦争觀(エー・シー・マギツフエルト)△戦争は

何時まで續くか?(ジー・ケー・シヨウ)△所謂歸一協會の宣言に



此廣告を見をて申込の方は「六合雜誌」に依る旨御書添を乞ふ

# 近代學藝叢書

(第九編)

文學士 和辻哲郎氏 著

菊版上製本全一冊箱入  
高雅なる新様式裝幀製本

定價金貳圓五拾錢  
送料金拾貳錢

近代個人主義の先驅者  
ケン・グロウ

東京市日本橋區大傳馬町二

内田老鶴圃

振替東京支店 貳四六番  
電話 浪花 參 參 五番

圖書目錄 送呈

新刊

イブセン、ストリンドベル  
グの先蹤をなせる北方の天

オキエルケゴオルは、今や漸く歐羅  
巴の注意を引き起しつゝあり、ニイ  
チエ、ジエエムス、ベルグソンの先驅  
者として、彼の思想は將に來るべき  
新價値の時代に重きを占むべし。著  
者はこの天才の切實なる内生に共鳴  
を感じ、この天才によつて自己省察  
と自己築造との誠實なる努力をなし  
たり。憂愁なる天才の熱火の如き心  
が、若き著者の心情を如何に振ひ動  
かしたるかを見よ。

| 編一第                  | 編二第                        | 編三第                   | 編四第                | 編五第                     | 編六第                            | 編七第                   | 編八第             |
|----------------------|----------------------------|-----------------------|--------------------|-------------------------|--------------------------------|-----------------------|-----------------|
| オイ<br>ケン<br>新理想主義の哲學 | 訂正<br>再版<br>ニイ<br>チエ<br>研究 | シユ<br>ライ<br>エルマツヘル宗教論 | ゲエ<br>テ『我が生活より』第一卷 | ウイ<br>バインド<br>近世哲學史(第一) | ギユ<br>ヨ一<br>社會學上<br>り見たる<br>藝術 | プ<br>ラン<br>十九世紀文學の主潮上 | ヴ<br>ント<br>の心理學 |
| 波多野博士 共譯<br>宮本文學士    | 和辻文學士 著                    | 石原文學士 譯               | 生田文學士 譯            | 村岡典嗣氏 譯                 | 大西文學士 譯                        | 吹田文學士 譯               | 須藤文學士 著         |
| 價二圓五十錢<br>送料十二錢      | 價二圓五十錢<br>送料十二錢            | 價二圓<br>送料十二錢          | 價二圓<br>送料十二錢       | 價二圓五十錢<br>送料十二錢         | 價參<br>送料十六錢                    | 價參<br>送料十六錢           | 價貳<br>送料十二錢     |

|                                                                                                                                                            |             |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| △法の力を要す(甲鳥生)△貞操の意義(甲鳥生)△青年會のために惜む(K・K生)△青年憲法改正問題に就いて(古市春彦)△虚偽的慈善行爲の流行(駒込生).....                                                                            | 10・1273     |
| △原始的文明の名残(甲鳥生)△大學近所の三教會の前を通りて(赤門長人)△藝術家に對する世評(野百合)△乃木家再興問題(一條生)△新大學令を歓迎す(S・U生)△非婚同盟を組織せよ(甲鳥生)△高等教育を受けたる婦人の問題(甲鳥生)△刑法の不備なり(甲鳥生)△歸郷記(内ヶ崎生)大正維新の御大典(一條生)..... | 11.....1510 |
| △不徹底なる學制改革案△(柏葉)國民的煩悶時代(嶺岸生)                                                                                                                               |             |
| △妻の無能力の問題.....(一條生)                                                                                                                                        |             |
| △隨感一束.....(三郎生)                                                                                                                                            | 12.....1651 |

週刊宗

教雜誌

# 基督教世界

毎週木曜發行

一部 金五錢

半ヶ年 金一圓二十錢

一ヶ年 金二圓三十錢

外國行一ヶ年金三圓

◎本誌の創刊は明治十六年にして既往三十餘年の歴史を有する本邦基督教界最古の週刊雜誌なり

◎本誌の特長は進歩的基督教の立場より時事問題を評論し且つ最新の知識に依り斯教永遠の眞理を闡明するにあり

◎本誌には毎號教界先輩の説教、内外名士の論説と新進思想家の研讃と、清新なる宗教文學及内外教勢を滿載す

◎本誌は信仰修養の糧として聖書研究の手引として、信徒家庭の讀物として好適なる雜誌なり

◎本誌の編輯は宮川經輝、原田助、小崎弘道、渡瀬常吉、牧野虎次の五氏協力之に當り、武本喜代藏、山口金作の兩氏毎號執筆し、在兩京の記者數名之を助く

本誌の見本は往復はがきにて御申越次第無代進呈すべし

發行所

基督教世界社

大阪市北區中之島二丁目四七

振替貯金大阪參壹七參

此廣告を見御申込の方は「六合雜誌」に依る旨御書添を乞ふ

# 神學之研究

定別 價に 一郵 冊稅 廿四 錢錢 號月二十 一金 年壹 前圓 金三 郵十 稅五 共錢

本邦唯一の權威ある不偏不黨の神學専門雜誌

古今の神觀に就て……………加藤玄智

老子及其道の意義……………宮本信吉

神學と神話……………小島茂雄

スメリヤの古石牌(寫眞版入)

智慧の木の実を食ひたるは  
アタムにあらずしてノアヤ

イスラエル民の興起……………コルニル教授

近世發見と新約聖書……………ラムゼー博士

新著紹介短評二十種……………研究會々員

見本を要せらる方は郵券二十四錢送らるべし

〔後付四〕

大賣捌所 東京 堂

發賣所 東京 橋區 尾張町 醒社



毎月

道

一回

一日

道

話

發行

松村介石主幹

第九拾二號要目 定價金拾五錢、半年金八拾錢、一ケ年金壹圓五拾錢（郵稅共）

○鳩子爭技（口繪）……齊藤 松洲 ○日本強盛の由來……白鳥 庫吉

○一年の回顧……松村 介石 ○道元禪師（下）……大川 周明

○我皇室の宗教と道會……大川 周明 ○婦人の職業……村田峰次郎

○今の小説中の人物……長瀬 鳳輔 ○墨子論……大川 周明

○信仰の經驗……城北 隱士 ○節婦操の館林（地）……野口 復堂

○時事の裏面……大川 周明 ○亞細亞の文明……城北 隱士

○大正四年拾貳月號

『道』は宗教歸一を主張し併せて精神修養に資するもの也  
『道話』は通俗的に人生の心得を説きたるもの也

第五拾六號要目 定價金五錢、十部金四拾五錢（郵稅共）

○信神……松村 介石 ○秋元但島守……野口 復堂

○夫婦論……森村市左衛門 ○世界の大勢を見よ……石川 半山

○運……大倉孫兵衛 ○怖るべき遺傳……麻生 正藏

○天恩に感謝す……長瀬 鳳輔 ○三毒を滅し、三界を出てよ……坂本 樂天

○恐るべきは奢侈に在り……武田芳三郎 ○立身出世……西原 頑松

○特性を發揮せよ……長藏 ○修養一束……記 者

○他人の批評を聴く人……登山 長藏

○聴かぬ人……

○修養一束……

發行所 天心社

東京區富町二丁目六番地 振替口座 東京 九三六七

道會事務所 道の會

電話番（町内） 一三六一 振替口座 東京 二五九六

十月一日  
發行

十月號  
定價金貳拾錢

# 六合雜誌

十一月  
一日發行

十一月號  
定價金貳拾錢

〔後付六〕

- |                 |         |               |        |
|-----------------|---------|---------------|--------|
| 統一主義の主張         | サンダーランド | 御大典と國民的理想の體現  | 内ヶ崎作三郎 |
| 宗教は名詞か副詞か       | 岸本能武太   | 信仰と疑惑とを越えて    | 内ヶ崎    |
| 宗教の二面           | 今岡信一良   | 生活の進展         | 中村長之助  |
| 藝術の權威           | 吉田紘二郎   | 詩と宗教の中心       | 佐藤     |
| フォルサイスの宗教藝術觀    | 佐藤繁彦    | 時代感想          | 野村隈畔   |
| 畑みち             | 伊藤寥々    | 我等の求むる女性      | 井口孝親   |
| 創造の藝術           | 佐藤清     | シベリヤの女囚       | 吉田紘二郎  |
| 現代獨逸に於ける政治思潮の批判 | 松枝徳麿    | 宗教心の徑路        | 冲野岩三郎  |
| パーゼルに砲聲を聞に行く記   | 盧山生     | 近時の婦人問題       | 一條忠衛   |
| 復讐の心            | 冲野岩三郎   | 健全なる新婦人の先驅者   | 内ヶ崎作三郎 |
| 山吹の花            | 田中葦城    | 失はれたる愛の追懷     | 原口竹次郎  |
| 椽先にて            | 鈴木龍司    | おもかげ          | 兵働竹醉   |
| 簑蟲              | 岡田哲藏    | 彼と彼女と彼の女達     | 平井好一   |
| 雲の色             | 内ヶ崎作三郎  | 誕生日に          | 田中葦城   |
| 貞操の意義           | 内ヶ崎作三郎  | Lonely Dolls  | 岡田哲藏   |
| 結婚道德の新典型        | 一條忠衛    | 醫學博士樫田龜一郎君を想ふ | 三並良    |
| 貞操に對する我信念       | 宮崎光子    | 國民的煩悶時代       | 嶺岸忠之助  |
| 戸山ヶ原にて          | 小宅銀次郎   |               |        |



海老名先生著

(新刊)

# 基督教十講

四六判美本  
定價八拾錢  
郵税金八錢

大正五年度日記

## 吾家の歴史

特製並製

(四六判總革製金縁)  
(四六判總クロス製)

定價壹圓卅五錢  
定價五十錢

▲郵税金各八錢

全國到處の大書林にて發賣仕候

實用ばかりでなく、趣味で日記をつけようとする人々は、是非共「吾家」を御使用ください。吾家は最も貴族的で、最も感じの佳い日記帳です。論より證據、まづ最寄の本屋で、お手に取って充分御覽ください。



# 本誌讀者諸君の特權

## ◎圖書取次!

- 一、東京市内發行の書籍ならば定價の全額丈御送り下さるれば別に送料は要しませぬ。  
但し法律書、醫書は元價非常に高いのですから送料を添へて下さい。
- 一、御送金は可成安全な振替貯金にて御拂込み下さい。  
(振替口座は東京 一〇〇〇三、六合雜誌社宛)
- 一、本部へ當て返書を要する質問書御發しに際しては必ず返信料を添付下さい。
- 一、一般圖書の取次ぎは今度始めて開始したのですからは非一度御試み下さい。

六合雜誌社營業部

電話芝五八五五番

### 本誌定價

| 壹冊 | 一ヶ月分 | 金貳拾錢    | 郵税一錢 |
|----|------|---------|------|
| 六冊 | 半ヶ年分 | 前金壹圓拾五錢 | 郵税共  |
| 十冊 | 一ヶ年分 | 前金貳圓貳拾錢 | 郵税共  |

● 海外は郵税一冊に付金六錢(清國を除く)  
● 臨時號出版の際は規定以外に代金申受く

### 本誌廣告料

| 特等 | 表紙二三四面 | 一頁 | 金貳拾圓 |
|----|--------|----|------|
| 普通 |        | 頁  | 金拾貳圓 |
| 普通 |        | 半頁 | 金六圓  |

● 表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候  
● 二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候

大正四年十二月三十日印刷納本  
大正四年十二月一日發行  
行 (毎月一回一日發行)

### 定價拾貳錢

發行兼編輯人 海上輝男  
印刷人 日比野幸一  
印刷所 株式會社 英舍  
東京市芝區三田四國町  
東京市京橋區所通町二十七番地

### 發行所

東京市芝區三田四國町

### 統一基督教弘道會

振替東京一〇〇〇三番  
電話芝五八五五番

### 賣捌所

東京堂◎北隆館◎東海堂◎同文館◎上田屋◎警醒社◎教文館其他全國有名書店



番番